

勇者部男子部員の日記

ブラウンドック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

讃州中学二年、勇者部所属で唯一の男子部員。

そんな彼は、日常から非日常へと一転する物語を過ごす中、日記を書き始める。

目標は勇者部から退部！ヤベー奴らから距離を取ること!! 12時間睡眠の休日を手に入れること!!!

目次

1日目 / 友奈は気付けない	1
3日目 / 風の喜び	7
4日目(前編) / 美森は困惑で得る	14
4日目(後編) / 『覚悟』	23
5日目 / 銀の願い	34
6日目 / 暇人は暇	43
34日目 / 風の辛労	49
ifルートく復讐の勇者く	56
35日目 / 夏凜の出会いと憤怒	62
37日目 / 憤怒と困惑	70
鍛錬とは	77
嗜む槌ノ子探し	87
樹の憂鬱	97
僅かな光明	106
染まりつつある	114
敵襲、故の開戦	121
憤怒は咲き誇る	131
咲き揃い臨む	137
結城友奈は勇者である	149
勝利を求めて	161
東郷美森の『答え』	175
閑話 : クリスマスパティー	183
シスコン見参	195
ifルートく贖罪の勇者く	203

『勇者』と『大人』	210
似た者同士	222
事故	232
ご褒美の合宿は突然に	240
本音のぶつけ合い	255
説明と使命	266
夢現からの二度寝	281
ifルートく妄執の勇者く	294
集結	304
不安の種は植えられた	313
然れども、芽吹くは別の花	320
後悔する者と後悔しない者	329
走れトゴス	340
弱い意志に強い決意	348
悩み相談	355
裂け目	363
カワラナイモノ	371
不相応の所業	381
似合わない『いつも通り』	391
殴る	400
弱さの証明	409
問われ、叫ぶ	418
あの日の言葉	428
終戦と喪失	437
帰還	445

『繋ぐ』	662
消失	654
改宗	644
その『役目』	635
世界一不毛な言い合い	628
小学生勇者く鍛錬と成長く	619
次の任務	611
嘗てと今の再会	603
優しい言葉	594
蛮族猛々しい	585
変わらない言葉	576
鳥類の誰かさん	566
再会と忘却	557
防人	549
唯斗の一日 後編	537
郡唯斗の一日 前編	529
報酬	522
恋文	514
瞬殺のニボバルト	508
ifルートく傀儡の勇者く	498
先代勇者組襲来	489
小学生勇者3く信頼と弱みく	480
小学生勇者 2 く辛勝く	469
小学生勇者	461
飢餓の発狂	452

伏える覚悟	673
助けるために	682
不滅の炎	691
復讐者（リベンジャー）	698
しゆき♡	707
馬鹿と馬鹿と馬鹿	715
記憶の欠片	723
離したくないから	731
推理	739
閑話：過去（未来）の日常	747
叡智か叡地、もしくは営地	759
あの日の続きを	768
精霊『雪白』	775
白い影	781
鍛錬開始	788
乙女心と秋の空	796
ifルートく怨恨の勇者く	803
束ねる者	810
整理しましょう	818
新たな戦法	826
次こそ	837
とある少女	845
夢の夢の夢	852
刻印	859
100話記念（99話目）『別次元（前世界）く前編く	865

100話記念『別次元(前世界)』～中編～	874
100話記念(101話目)『別次元(前世界)』～後編～	888
居候2号ちゃん	896
由々しき事態です	904
小学生勇者～怒りと雌豚～	913
神婚	921
アドバイス	927
にぼにぼ	935
VS 復讐の勇者	941
戦う条件	949
エイプリルフール企画《唯子ちゃんの日常》	957
覇者ちゃん覇者ってるう!	968
相棒	974
醜い本音と勝手な我儘	981
★花結いの章一話《始動》	989
蒼鴉	999
石紡ぎし花の煌めき	1005
覇者さん元気元気い	1016
怒らない?	1023
女子会(笑)	1031
遠い背中	1038
★花結いの章二話《召喚》	1046
VS 堕ちた勇者	1056
怨恨は嘲る道化	1063
一つ目の決着	1069

贖罪は独白の彼方へ	1078
二つ目の決着	1085
踊る傀儡は意思もなく	1096
レオ・デイザスト	1103
捨て駒	1121
犯人	1201
神と精霊の『約束』	1271
逢引的なアレ	1351
懐古の既視感	1431
ifルート〜正義の勇者〜	1501
冬休み明け	1591
イカの姿フライ禁	1661
卵	1731
正義邂逅	1811
殺意のない殺し合い	1891
『死』	1981
信じて、待って	2061
覚醒の予兆	2161

1日目 / 友奈は気付けない

○月?日

今日から日記を書くことにした。
理由?そんなのは単純で簡単だ。世の中には継続は力なり、という言葉はあるが俺は継続が苦手だ。

俺の所属している——いや、所属させられている部活の部長にも言われた。結構小馬鹿にされながら。だから、取り敢えず今日から中学を卒業するまでは日記を書き続けることにした。卒業後に、憎き風先輩の前でドヤ顔しながら見せつけるんだ。

さて、日記と言っても何を書けばいいんだろう。

今日もいい天気だった。

明日も晴れるといいな。

程度のことしか思い付かないのは、俺のボキャブラリーが貧困だからだろうか。

俺は珍しく日記の根本的な部分を考えて。日記とは何故存在するのか、それは日々の記録を残すためだ。ならば、今日の出来事をそのまま書いたらいいのではないか?

もしかしたら俺は天才だったのかもしれない。……うん、読み返したら、至極当然なことを書いてた。俺はどうやら、少々天然らしい。そんなことを呟いたら、同部活メンバーの東郷がめっちゃ深く頷いていた。解せない。

そろそろ、真面目に書こう。

今日は近くの保育園で人形劇をした。勇者と魔王が出てくる系の異世界バトル?みたいなよく分からない内容だった。

これは一種のボランティアみたいな物だが、一応は俺の所属してる部活にきた依頼だ。あ、書き忘れていたが、別にボランティア部ではない。いや、本質は同じだけど。部名は『勇者部』だ。……まさか、勇者部だから人形劇でも勇者を出したとか言わないよね?無理やりすぎでお兄さんビツクリだよ。

その人形劇だけど、同部活メンバーである友奈が勇者の人形を振り

回して大惨事になった。最終的には勇者が魔王をボコして解決したけど。暴力は世界を救うんだね。今日の学びだった。

ちなみに、俺は魔王の下僕役だった。途中で魔王を裏切って力を奪うラスボス風に仕立てようとしたが、樹に止められた。樹は部長こと風先輩の妹だけど、驚くことに常識を持っていた。もう一度書くぞ？樹は常識を持っていたんだ。凄い、とても同じ遺伝子だと思えない。どうやら、勇者部の常識人は俺と樹だけらしい。

風先輩は女子力という名の暴力を振りかざすヤベー奴だし、東郷は友奈愛が爆発してるヤベー奴だ。

一番異質なのは、俺の中では結城友奈だ。表面上は元気いっぱい、人を助けずにはられない超お人好しな奴。でも、友奈の本質はもつと単純だ。狂信者、とでも言えば良いのだろうか。そもそも、この国自体が神樹様という神みたいなのを信仰してる宗教大国だ。

宗教大国と言っても、全員が神樹様を心から信仰してるわけではない。その例として、まずは俺だ。宗教大国で育ちながらも、神なんて空想の存在だと思ってるし。これは俺が異質なのでは無く、むしろ有り触れている思考だ。

確かに一部には神樹様絶対主義もいるが、所詮一部は一部でしかない。俺のような神に大して興味の無い人だって沢山いるし、形式上は信仰を装っても、飽くまでも形式上でしかないと割り切ってるひとが殆どだ。

食事前にいただきますと言うのと同じだ。形式上はマナーとして言うし、その挨拶に込められてる意味だっけ理解してる。でも、一回ごとの食事で心の底から食材に『命を頂きます』と感謝してる人なんてごく一部だけ。

だが、結城友奈は別格だ。

どんな教育を受けたらあなる？

先程の例えを再度使うなら、結城友奈は食事の度に両手を合わせ、心の底から食材への感謝と謝罪、それをデフォルトで行うのだ。一口食べる度に涙を流し、皿の汚れ一つ残さずに全て胃に収める。まるで、一欠片でも残せば人殺しと同等だと考える程まで。飽くまでも例

えだが、これを狂信者と言わずして何と呼ぶのか。

多分、神樹様のお告げとかで『〇〇を殺せ』とか言われたら確実に殺すぞ。自分は殺したくなかったけど、神樹様が言うなら仕方がない。自分には理解できない何か重要な事だったのだろう。そんな思考回路をしてる。

兎に角、友奈の狂った信仰心を軽く考えてはいけない。俺の考えすぎかもしれないが、用心に越したことはない。

きつと、俺が結城友奈に抱いてる気持ちちは『恐怖』だ。自分が理解できない、異質な彼女を恐れているんだ。

だから俺は友奈には近づかないようにしてる。

友奈を大好きな東郷の目が怖いから、とか言っとけば周りだって納得した。基本的には善人な友奈はよく話しかけてくるけど、適当な返事で躲す。

風先輩には友奈と喧嘩でもしたのかと聞かれたが、そんなことは無い。俺が勝手に距離と取ってるだけだし、仲良くなりたいたいも思っていない。

罪悪感なんて、恐怖心に埋められる程度のモノだ。

日記初日として、ここに今後の目標を書いておこう。

「勇者部から退部する」

それが俺の目標だ！

だってさ、所属していても俺に全くメリットないもん。一文の得にもならないボランティアに休日まで奪われてるのだ。善行で心休まる程、俺は善人じゃない。さつさと部活をやめて、12時間睡眠から始まる休日を手に入れるんだ。

だが、この部には顧問が居ない。

理由は残念ながら知らない。他の部活は顧問付きなのに、勇者部には顧問が居ないのだ。一応部活動申請は担当の職員に出してるし、正式な部活である。…で、顧問は？

この前、さくらつと『もし勇者部をやめるなら、どうしたらいい？』と風先輩に聞いてみた。だけど、眉にシワを寄せながら『幽霊部員でもいいから所属して欲しい』と言われた。いや、幽霊部員とか無理なん

です。俺は別にいいけど、部活前に友奈が俺を部室に連行するから、サボるなんて選択肢はない。

結果、退部出来ませんでした。

ぴえん超えないでパオンもしない。

つまり、まだ諦めないってこと。…誤用かもしれないけどね。男子にぴえん系の知識を求めてはいけない。

……日記の最後には何を書いたらいいのだろうか？

まあ、明日も良い日になるといいなと思いました。

最近、私は彼に避けられてる気がする。

私、結城友奈は讚州中学二年生だ。大好きな友達や先輩後輩と、人の役に立つ為に活動する勇者部でボランティアをする日々。きつと、こんなことが中学校を卒業してから高校生になって、それから大人になっても続くと思っていた。

でも、私は友達のひとつりに避けられている。

彼の名は唯斗くん。私と東郷さんが勇者部に入部してから僅か二日後に、風先輩に引きずられてきた少年だ。クラスも同じなので、私と東郷さん、唯斗くんの三人で過ごす時間は決して少なく無かった。

でも、最近はそのような時間が極端に減った。

そんなことになったのは、多分数ヶ月前からだ。あの出来事があったから、私を彼は避け始めた。今では私が話しかけなければ一言も発してくれない。

——数ヶ月前の出来事。

それは、交通事故に遭ったときのことだ。

正確には、遭いかけた。そう言った方が正しいと思う。

私と唯斗くんが勇者部の活動で迷子の猫探しをしてる時の事。二人で猫の名前を呼びながら歩いていた。

「タローちゃんー？どっこー？」

「…何で猫にタローって名前付けてるんだよ？しかもメスだって話だ

し」

「あはは、きつとタローっていう感じだったんじゃないかな？ほ、ほら！この写真のネコちゃん、背中の模様とかタローっぽくない？」

「タローっぽいってなんだよ…」

唯斗くんは呆れながらも、周りをキョロキョロと見渡しながら歩く。話しながらも猫探しはやめない。彼は毎回面倒臭がりながらも、仕事はこなしているのだ。

最近はやぼうとうとしないし、良い事だと思う。最初のうちは私が引き摺って部屋に行っていたもの。

「あー！唯斗くん、あれじゃない？貰った写真と同じ猫ちゃんだよ!!」
「え、どこ？」

私は、道路を挟んで向こうの公園にいる猫を見つけた。これで依頼主のお姉さんが笑顔になると思って、何も考えずに駆け出した。それがどんなに馬鹿なことかも知らずに、唯斗くんに問いかけながらも私は既に走り始めていた。

唯斗くんの焦った表情にも気付かずに。

「タローちゃんー!!」

「…っ！ゆ、友奈！危ない!!」

「えっ？」

振り返ったときには既に遅かった。私のすぐ近くには、止まる気配のないトラックが迫っていた。

全てがスロー再生されたように、ゆっくりと見えた。頭に浮かぶのは、育ててくれた両親の顔。ああ、死ぬんだ。無意識にも、そう思ってしまった。

「友奈あつ!!」

「きやつ…!!」

肩が外れるかも思うくらい、強く腕を引かれた。

唯斗くんが、私を助けてくれたんだ。二人で纏れるように歩道を転がり、唯斗くんが扉にぶつかって止まった。

トラックは激しくクラクションを鳴らしながら、運転手は窓を開けて怒鳴る。一步間違えば大事故だった。そう考えると、急に震えが止

まらなくなつた。もしも、唯斗くんに助けてもらえなかつたら、私は確実に死んでいた。

「ゆ、友奈…大丈夫か？」

「う、うん…」

思考がうまく回らない。ありがとうと礼をを言うべきか、ごめんなさいと謝るべきか。私は、混乱していたんだと思う。ただ一つだけ分かるのは、奇跡的に助かったことだけ。

そうだ、これは一種の奇跡なんだ。

そう思つた私が口走つたのは、お礼でも謝罪でも無かつた。

「大丈夫、神樹様が守ってくれたから…」

そのときの、彼の表情が頭から離れない。

「……………は？」

それを何と呼ぶのか、私には分からない。怒りでもないし、喜びでもない。ましてや悲しみや驚きでもない。理解出来ない生物に絶句するようない…何かが決定的にズレてしまった感覚に寒気がした。

分からない。彼の表情の意味が分からない。

ただ、確実に言えるのは——

この日から、彼は私を避け始めた。

ああ、きつと怒ってるんだ。私の軽率な行動とか、お礼や謝罪を忘れてたことを。

でも、次の日に沢山謝つた。お礼も言った——でも、彼はあれから一度も、自分から私に話しかけてくれない。時間が解決すると思つたりもしたが、あれから数ヶ月。状況は変わらずだった。むしろ悪化したといつても過言ではない。

——でも、大丈夫だ。きつと神樹様がまた助けてくれる。毎日お祈りしてるし…今の私ができるのは、きつと諦めずに話しかけ続けることだ。

3日目 / 風の喜び

○月○日

さて、今日も日記を書こうと思う。ちなみに、今日は日記を書き始めてから三日目で、二日目は書き忘れていた。三日坊主を超えた俺は、宛ら最速のサボり魔だ。……悲しくなるからこれ以上はやめよう。ノートに涙の跡なんてつけたくなかった。

昨日書かなかったのには、ちゃんとした理由があるんだ。ホントだ、ウソじゃない。

まず最初の理由は、記憶が飛んでることだ。

昨日は平日だった。普通に学校に行って、部活に行って……その後の記憶が無い。

いや、少しだけ覚えてる。

微かな記憶を辿り、書きながら整理しよう。

確か：アレだ、樹が持ってきたお菓子を食べたんだ。家で作ってみたけど、愚かな風先輩は妹の手料理を食べなかつたらしい。だから俺が食べて：あれ？クッキーって紫だった？シュークリームって真っ黒だった？そんな疑問が浮かんだ俺だったが、きつと食紅を使ったんだろうと自分に言い聞かせた。俺がハロウィンのお菓子を作ったときにも、食紅にはお世話になったし。真っピンクのイカの姿フライ、結構人気だった。

真っ黒なシュークリームを手に取り、そのとき俺は違和感を覚えた。シュークリームってこんなに重かったか？鉛を詰めるどころか、表面を鉛でコーティングしたような感触。

まあ、表面にカラメルを何重にも塗って固めたら：大丈夫、まだ説明できる。シュークリームをカラメルコーティングするなんて、素人ではなかなか思い付かない発想だ。やはり樹は料理が得意なのだろう。ほら、あんな自信満々に勧めてたし。そう、それが記憶にある最後の自問自答だった。

シュークリームを齧った。

表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味

わいがとつても——ンゴパツ。

そんなセリフを最後に、俺の記憶は無くなっていた。気が付けば自分の部屋で寝ていた。両親は今日も昨日も仕事で家に居ないので、状況が理解できないまま日記を書いている。

きっと、また風先輩が悪ふざけでもしたのでだろう。だって常識人こと樹があんな毒物を尊敬できる先輩こと俺に進めるはずがないし。おのれ風先輩め！

——そんなことは置いといて。

ここからが今日の出来事だ。

日常からの一転。非日常への入口。：カツコイ言い回しが見つからなかったのはご愛嬌つてことで。取り敢えず、ヤバい一日だったと初めに書いておこう。

今日は化け物と戦った。

夢だったと言われれば納得出来るけど、もしも次に寝て目が覚めて、この日記が残っていたら夢じゃないということになる。何故なら、化け物と戦ってからまだ一度も寝てないし。

事の始まりというか、最初の異変といえは俺のザ・ワールド……じゃなくて、樹海化という現象が始まる直前、学校中の時が止まったことだ。携帯電話から変なアラーム音になって、それから直ぐに俺、結城友奈、東郷美森の三人以外が動かなくなった。ドツキリだと思っただが、隣の席の山田くんの口にイカの姿フライを突っ込んでみてもツツコミが無かった。シャイな山田くんだから無視を決め込んでるのかと思っただが、周りも反応しないのでその可能性も消えた。

何やかんやで外に出ると、なんとということでしょう。

まるで異世界転生だ。この場合は転移の方がいいのか？まあ、どちらでも良い。この異様な光景が伝わるのならば。

視界全域が太い木に埋め尽くされて、全部の樹木がカラフルな水彩色というメルヘンチックな風景なのに、まるでメルヘンとは真逆に思えた。子供が絵の具をぶちまけたあと。そんなイメージを俺は抱い

ていた。

その後、風先輩が大赦やら勇者やらと説明していたが、ここに書いていたらキリがないのでやめた。

取り敢えず言えることは、勇者になってバーテックスなる敵を倒そう！ということだ。この説明の方がシンプルでいいと思うのに。

なんかスマートフォン画面にボタンっぽい演出が表示されてたから、ポチリと押してみた。好奇心のなせる技だった。そしたら、なんとということでしょう。受験に合格して宝くじも当たって彼女もできて——なんてことはなく、変な服装になった。風先輩がなんか騒いでたけど、この格好になるとなんだか不思議な気分だ。

ふははははあ！力が：力が溢れるぞ!!と悪役ムーブをかましたりしたかったが、いつの間にかシリアス展開に移行したので自重した。うん、ほらね。やっぱり俺は常識人だ。俺は自分の立場を再確認していた。結局、友奈と東郷が風先輩に促されて下がった後に悪役ムーブはやったけど。

その後は風先輩と樹も変身して、変な化け物をバシバシと武器で殴ったりした。

恐怖心とかもあったけど、同時に戦える力も貰えたからか、ワクワクが勝った。どんなに常識人で賢い俺でも、中身はただの中学二年生だ。それも男子だし、必然的にテンションは上がった。ちなみに、日記を書いている今もちよとだけテンション上がってる。夢オチじゃないことを願おう。

さて、勇者として戦い始めた俺達だけど、初めのところは負ける要素がない。バーテックスは卵っぽい爆弾を飛ばしてくるけど、俺はあの方法で対処はできた。万が一当たったとしても、精霊バリア？ってのが護ってくれるらしい。風先輩曰くだけど。

一つ問題があるとしたら、俺の武器だ。

いや、確かにめっちゃ強い武器だった。なんか、バーテックスが飛ばしてきた爆弾を打ち返せたし、バーテックスを叩くと吹っ飛ぶを超えて殴った部分が抉れたし。うん、最高の武器だよ。使いやすさも剣とか銃よりも良い意味で段違いだし。何よりも軽いし。

——ピコピコハンマー。

そう、ピコピコハンマーなんだよ…俺の武器。150センチくらいのデカイピコピコハンマーさ。持ち手は黄色で、叩く部分は赤色の有り触れたアレだ。叩く度に「ピコッ！」と場違いな音が響くピコピコハンマーなんです。

問、勇者とは？

解、勇気にあふれる人のこと。

じゃあ勇者であれば武器は何でもいいと？バカヤロウ！何でピコピコハンマーなんだよ!!風先輩の大剣と交換しろよ!この際だから樹のワイヤーでもいい。ビッグピコピコハンマーよりは何十倍もマシだ。

そんな感じで項垂れていると、爆弾に当たりました。咄嗟にピコハン盾にしたからダメージとかは大してないけど、煙で何も見えな。い。風先輩と樹がこちらを心配してる所を更に爆弾で撃ち落とされ、一瞬で劣勢つぽくなった。飽くまでも『つぽく』だけど。変なバリアがあるからダメージは受けてない。

またバーテックスをピコピコと叩こうと思って脚に力を込めると、狂信者が叫びながらバーテックスに突っ込んでいった。

最初は武器なしに見えたが、よく見ると腕に籠手のような物を装備していた。そして、なんか勇者パンチ!つて叫びながら殴ってた。そしてバーテックスさんが抉れた。わあ、勇者パンチって凄、なんて小物感丸出しな感想を抱いてしまった。

俺も友奈に加わってバーテックスをピコピコと叩いていると、風先輩が封印の儀式をすると言い出した。勇者が弱ってるバーテックスを困んで祝詞を読めば、御魂とかいうバーテックスの心臓みたいなのが出てくるらしい。

友奈と樹が祝詞をたどどしく読み上げる途中、風先輩は『大人しくしろこんにやろお!』と言いなながらバーテックスに斬りかかった。風先輩曰く、別に読まなくても気持ちが悪くもっていれば問題は無いらしい。……じゃあ、祝詞の意味は？

その後は至極単純だった。

バーテックスから出てきた逆四角錐型の大きな御魂をピコピコと殴り続けたら砕けて、バーテックスも砂になって消えた。

俺の初陣、ぱつとしないなあ…

アタシ、犬吠埼風が感じているのは…きつと罪悪感だ。

前方に見えるのは、巨大な化け物——バーテックス。アタシ達は『勇者』として、あの化け物を退治しなければいけない。

そのため、大赦の命令に従って勇者部を作った。友奈に東郷、樹と唯斗。この四人を集めたもの大赦の命令だ。勇者適性が高く、勇者としてバーテックスと戦えると判断されたからだ。

アタシ達以外にも勇者候補は複数いて、アタシ達が選ばれる可能性なんて決して高くはないと説明されていた。だから、勝手に思っていた。この先も、アタシ達は勇者部という名のボランティアを活動内容にした変な部活で、平和に過ごすのだと。無意識に、選ばれる可能性を忘れようとしていた。

——だけど、選ばれた。

何も説明できないまま、後輩や妹を戦場に連れてきてしまった。この気持ちは、間違いなく『罪悪感』だ。

だから…だからこそ！アタシは——

「あんた達は下がちなさい。これはアタシの責任でもあるし、バーテックスは私が相手に——」

「うわっ、なにこれ？」

強い光が後方から溢れ、思わず振り返る。そこには光り輝く花弁に包まれた唯斗の姿があった。まだ変身方法も説明してないのに、彼は一人で戦う術を見つけたのだ。

「ちよっ！何やってんのよ唯斗!!」

「いや知らないですよ！なんかアプリ開きっぱだったら、変な画面になって…！タッチしたらこうなりました!!」

「あんた、詐欺広告とかに引つかかるタイプでしょ!？」

「ドヤア…」

「ドヤるな!!」

化け物を目の前にしても、唯斗だけはいつも通りだった。それが嬉しくて、でもどこか申し訳なさを感じる。

「ふ、風先輩！私も…!」

「ダメよ、友奈。下がちなさい。さつきも言ったけど、これはアタシの問題よ。あんた達には関係の無いこと。だから、お願いだから…下がってなさい!」

「っ…!…!…!はい」

友奈は何かを言いたそうにしていたけど、口を噤んだ。東郷の車椅子を押し、急ぎ足で後方に下がった。

「樹、唯斗。あんた達もよ」

「ふははははあ!力が…力が溢れるぞ!!」

「あんたは何処の悪役よ!？」

「冗談ですって。取り敢えず、力貸しますよ。後でラーメン奢って貰いますけどね」

「…:…う、うどんなら」

うどんなら妥協できる。だって、うどんを食べると女子力が上がるから。それを言い換えれば、アタシは唯斗に女子力を奢ることになる。つまり、アタシの女子力が二倍になるのだ。

「わ、私も…!お姉ちゃんに付いて行行って、ずっと前から決めてたもん!!」

「…:樹」

いつもアタシの後ろに隠れてばかりだった樹が、いつの間にか成長していた。それが、こんな状況なのに嬉しく感じてしまった。

「樹、唯斗。後悔しても知らないわよ?」

「私は後悔しない!自分の心に従うだけだから!!」

「俺は——以下同文!」

「やっぱり唯斗は下がらせようかしら」

やはり唯斗は変人だ。自分を常識人だと勘違いしてるところが尚

のこと悪質だった。自分では勇者部で珍しい常識人だと自称してるが、アタシからみれば二番目に変人だ。一番は東郷だ。アレは手遅れだと思おう。

変人に呆れながらも、樹に変身方法を教えながら勇者になった。

「ふ、風先輩！」

「ど、どうしたのよ？そんな泣きそうな声で」

「俺の…俺の武器が…！」

唯斗の手には、巨大なピコピコハンマーがあった。唯斗は暗い表情で続ける。

「武器、取り替えませんか？ピコピコハンマーよりは風先輩の大剣の方が勇者っぽいじゃないですか!!」

「い、嫌よ！あ、あれよ！勇者は自分の武器しか使えないのよ!!」

咄嗟に適当なことを言った。実際に試してないし、何とも言えない。でも、ピコピコハンマーで戦うよりは嘘をつく方がマシだった。

「樹、行くわよ!!」

「う、うん!!」

まだ文句を言い続ける後輩を置いて、樹と共に駆け出した。

「主人公の勇者服」

黒いインナーに、黄色と白で装飾された半袖パーカーを羽織ってる。前のファスナーは空いており、中には銀の胸当てが装備されている。下半身は黒いスポーツレギンスの上に膝下までの半ズボンを履いている。武器はピコピコハンマー。

・モチーフの花

オンシジューム

・花言葉

遊び心、美しい瞳

遊び心があるなら、ピコピコハンマーだって許させるよね。と言う考えの元、思い付きで決められた武器。ハリセンと迷ったけど、叩いた時に『ピコッ!』と鳴るピコハンが勝利した。

4日目（前編） / 美森は困惑で得る

○月△日

今日は化け物と戦った。

うん、昨日も同じこと書いたね。別に飽きたから同じ内容でもいいや、とか思ったわけじゃない。本当に連日バーテックスさんと戦ったのだ。

取り敢えず、バーテックス戦の前の出来事から書こうと思う。ほら、バトル漫画だってバトル展開だけが延々と続いたら飽きるでしょ？だから俺の日記にも日常を挟むんだ。人に見せる予定なんてないけどね。

今日（日常編）について。

……普通に学校に行った。そしたら何故か隣の席の山田くんが反省文を書いていた。内容は：授業中にイカの姿フライを食べた？ふっ、山田くんもバカだなあ。授業中にお菓子を食べるなんて食いしん坊キャラを狙ってるもしか思えない。本人曰く、気が付いたら口に突っ込まれていたとか。もちろん教師は、そんなわけあるかと言いつを無視したらしい。まあ、勝手にイカの姿フライが口に入るなんて有り得ないしね。

そんな山田くんを置いて授業が始まった。

俺の反対隣の席には、結城友奈狂の東郷さんが座っている。そんな完全変人枠の東郷だが、普段は授業は真面目に受けてる。：普段は、だが。

この日の東郷は少しだけ様子が違った。

理由なんて分かりきってる。昨日のことだろう。勇者になって、バーテックスと戦った非日常の始まり。勇者部の中で俺から始まり、犬吠埼姉妹がバーテックスと戦った。俺はピコピコハンマーでピコピコと爆弾を跳ね返したり、バーテックスをピコピコゴリゴリと抉ったりしてた。ピコピコハンマーってすごいよね。皆も百均で大人買いした方がいいよ。

それから何やかんやあって、友奈も変身してバーテックス祭り委員会の仲間入りを果たした。何やかんやについては、昨日の日記を読めば分かる。あ、やっぱり分からないかも。

ここまでバーテックス戦の大まかな内容を書いたが、一人だけ名前が無いのだ。そう、東郷だ。彼女は変身して戦うことが出来なかった。

つまり、落ち込んでるんだ。

俺は驚いていた。

まさか…この親友を盗撮する趣味を持ち合わせている変人にも、恐怖心はあったのだ。世紀の大発見だろう。学会に提出したい衝動に駆られたが、止めた。俺はこれでも、友達想いの優しい常識人だ。珍生物の生態で儲けても少ししか嬉しくない。スキップしながらエビファイルオバーガーを買いに行く程度の嬉しさだ。そんな小さい喜びに比べたら、狂信者を遠ざける言い訳に使える友人を売ったりは出来なかった。

さて、じゃあ慰めよう。

人として当然の行為をしようとした俺は、東郷を校庭裏に呼び出した。本当は屋上とかにしたかったけど、足が不自由な東郷では負担になる。

あ、屋上と言えば。

昨日の戦いが終わったあと、俺達勇者部は何故か屋上に転移？瞬間移動？してた。なんか、風先輩は神樹様の力とか言ってたけど…科学の力じゃないの？だって、変身するのにスマホ使ってるんだぜ？科学やん。神の力なら、魔法のステッキとかキモイことは言わないからさ、せめて心で念じたりで変身しようよ。まさか、携帯電話で『変身』と『返信』をかけたか…なんて、そんなわけないか。………ないよね？

友奈が神樹様の力と聞いて目を輝かせてたけど…うん、そうだね。きっと人が生きているのも、科学は発展したのも、お空が青いのも、全部が全部神樹様のおかげなんだね。少なくとも、あの狂信者にとってはそうらしい。友奈自身は言ってなくても、当たってる気しかな

い。狂信者恐ろしや。
話を戻そう。

東郷を校舎裏に呼び出すために、東郷にスマホでメッセージを送った。内容は「話がある、校舎裏に一人で来て」だ。無駄なことは一切書いてないので、告白の呼び出しとかと勘違いされることは無いだろう。ここで、最初に『大事な話が——』とか書いたら勘違いしてくださいと言ってるようなものだ。変に長々しい文章もNGさ。それだけ想いが乗ってるなら告白に違いないとか思われる。それを考慮した上で、俺の送った言葉には一切の勘違い要素がない。俺は天才かもしれない。

——なんて、思ってた時代もありました。

何故か付き合うことになりました。買い物に付き合うとかじゃなくて、交際する的な意味で付き合いました。

……うん、もう一度書いてもいい？

何故か付き合うことになりました(三度目)

そしてフりました。付き合いましたしようと宣言されてからわずか二秒でフりました。世界最速を目指すにはまだまだだ。：フツたんだし、そもそも付き合っていない。前言撤回、してもない告白に応じられたので拒否った。

いや、確かに東郷は可愛いよ？

真面目で頭も良く、外見だって人並み以上だ。中学二年生にしてはデカすぎるアレも付いてるし、付き合いたいと思ってる男子生徒は数知れずかもしれない。

でもさ？…でもね、東郷はやべー奴の筆頭だ。

東郷の部屋つてさ、準和室っぽいけど違うんだぜ？最新のパソコンとプリンター、プロが使うようなゴツツイカメラとか：なんかよくわからん物が至る所に隠されてる。恐るべきは、その全てを結城友奈の盗撮や監視という名の見守りに使ってる。怖くね？

よって、お断りさせてもらいました。

予鈴が鳴ったから戻ろうとしたら、なんか微笑みながら『待っててね』と囁かれた。……もうわけわかんない。

おれ、いま何書いてんだろう？

「……」

淡々と進む授業を、流し目で見ながら思考に没頭する。思い浮かべるのは、昨日の戦い。自分は震えて何も出来なかった昨日が、瞬きの度に頭に浮かぶ。

責任感を感じて、最初から最後まで一人で戦い抜こうとする風先輩。

姉を助けたいと思い、普段の気弱さを抑えて戦う樹ちゃん。

ふざけた武器なのに、自分達の何十倍もある未知の敵を圧倒する唯斗君。

そして——同じく恐怖に震えながらも、友達を守るために一線を越えた友奈ちゃん。

(私、何やってるんだろう……)

今、こうして何事もなく授業を受けて入れるのは勇者部のみんなのお陰だ。そう、自分を——東郷美森を除いた勇者部のみんなのお陰。

そんなお荷物でしかない自分が最初に考えたのは、風先輩への怒りだった。どうして、もつと早く言ってくれなかったのか。勇者のことも、バーテックスのことも。予め話してくれてたら私だって——
そこで、考えは止まった。

話してくれたら、私は？私には何ができた？

心の準備？——昨日の出来事でまだ震えてる私に、勇者やバーテックスの存在を受け入れて戦う覚悟なんて出来たのだろうか。

きつと、東郷美森は弱いままだ。

たとえ予め知っていても、それを戯言だと割り切って現実を見ようとしな。そんな自分が、ハッキリと頭に浮かんだ。

——ブー、ブー

「っ！」

チヨークが黒板にぶつかると音以外には何も聞こえなかった教室に、バイブ音が響く。携帯電話だ。それも、私のカバンに入ってる端末からだった。

今日は朝からボーっとしていたため、スマホをミュートにするのを忘れてた。

汗が頬を通る。教師は目を尖らせながら教室内を見渡した。——そして、暫くして誰も反応しないことを悟ったのか、静かに授業へと戻る。

安堵からか、喉まで溜まっていた二酸化炭素がそつと出てきた。

(通知音…?)

アプリからの通知か、誰かからのメッセージが届いたかの二択だ。勿論、通知音だけでどちらかを聞き分けることは不可能だ。

悶々としたまま、チャイムと共に授業は終了した。

鞆からスマホを取り出し、ロックを解除すると一つのメッセージがアプリに届いていた。

(…:…唯斗君から? 珍しい…)

私と彼は、普段はメッセージのやり取りはしない。別に仲が悪いとかじゃなくて、ただ単純に必要性を感じないからだ。毎日学校で話してるし、実は家も割と近い。だから、文字だけで話すメッセージよりも、実際に会ってお互いの表情や仕草を見ながら言葉を交わした方がどちらにとっても楽だった。

珍しくとどいたメッセージには——

『話がある、校舎裏に一人で来て』

と簡易的な文章だけだった。普段から風先輩と騒いでいる彼とは思えないほど、素っ気ない文章。言い換えれば、真面目とも言えるのだろうか?

普段は変人と称されても可笑しくない程までに、奇行が目立つ彼。

バレンタインに同級生のロッカーにイカの姿フライをばら撒いたり、ホワイトデーに同級生の靴箱にイカの姿フライを投げ込んだり、ハロウィンに全員の机の中にイカの姿フライを忍び込ませたり……やはり奇行が目立つ。そんな彼が、全く巫山戯ずに真面目なメッセージを送ってきたのだ。意味深に感じてしまうのは、私だけではない筈だ。何をされるのだろうか。

(ま、まさか…告白!?!…まあ、普通に考えて有り得ないかな。唯斗君だし)

控えめに言って、彼は馬鹿だ。いや、変に勉強だけはできるからアホだ。そんなアホが告白なんて、真夏に雪が降るほど有り得ない。

——と、思ってた時期がわたしにもありました。

(…えっ?…えっと…ちよっ!?!はわわわわ!?!)

車椅子に背を預けてる状態で、体の前半身を包むのは慣れない異性の抱擁。服の上からでもわかるほど、熱く感じてしまう。

私は唯斗君に抱擁されていた。

何が起こったのか分からない。ただ一つだけ言えるのは、待ち合わせ場所である校舎裏に着いた瞬間、唯斗君が私を抱き締めた…ということだけだ。

(ま、まさか本当に告白なの!?!)

強く抱きしめたまま、彼は耳元で呟いた。

「大丈夫だ、東郷」

「な、何が…!?!」

この状態のどこが大丈夫なのか、小一時間ほど問い詰めた。だが、初めての異性からの抱擁で思考が回らなくなった。

「俺は、ちゃんと分かっているから。東郷は困惑してるんだよな。未知に怯えて、あるかも分からない一歩目を踏み出すか否かで躊躇してるんだよ」

確かに困惑してる。いきなりこんな状況なのだ、困惑しない人なんて存在しないだろう。後半は何言ってるのか微妙に分からなかった

けど、つまりは恋かも分からない感情に私が怯えてるって言いたいのだろうか？

当たってる。何も違わない。

私は唯斗君のことを、友達としか思っていなかった。初めての異性の友人ということもあり、慣れないうちは吃つたりしてまともに会話できなかった。

(…あれ、私がまともに話したことがある男子生徒って、唯斗君だけ？他の男の子は…)

残念なことに、記憶には残っていない。きっと委員会の話や挨拶程度なら他の男子生徒ともした事もあるが、残念なことにピンポイントで記憶に残ってることは無い。

「——だから、東郷は俺が守るよ」

「ふえっ!」

「ただ、まだ日常がそこにあると思わせてくれるだけでいいんだ。世界の危機とか、勇者とか、面倒臭いこととは無縁の場所で帰りを待って欲しい。ぼた餅とお茶を用意して、疲れてるところを出迎えてもらえる。人間はそれだけで次に臨めるんだ」

つまり、これから社会人になっても毎日家でぼた餅とお茶で出迎えて欲しいってこと？実質、毎日味噌汁を作って欲しいという告白のアレンジみたいなものだ。

私の体を覆っていた彼が離れた。少しだけ寂しく思いながらも、これが本来の距離感であることを再確認した。

「答えを出すのは東郷だ」

告白の返事を真面目に考えて欲しいということ!?

(そ、そんな…! 私達はまだ中学生だし、お互いに精神が熟してるとも言い難いのに!で、でも!!唯斗君は本気っぽいし…)

実を言えば、混乱していた。想定外の出来事が波のように押し寄せ、私の脳容量を瞬時に超えてしまった。

——私は、唯斗のことが好き?

分からない。少なくとも、嫌いじゃない。好きか嫌いかの二択を迫られたら、間違いなく前者だ。

そうだ、確かに私は彼のことが好きだ。でも、恋心ではない。これは友愛だ。

でも、この時の私は混乱していた。何かを考えているようで、何も考えていない。冷静さを装いながらも、やけっぱちな面が騒ぎ立てる。その結果――

「よ、宜しく願います…！」

「へっ？」

何故か告白を受けていた。

「私達、付き合いますよ…!!」

「はい…？」

言ってしまった。数分前の自分では絶対に想像し得ないことだろう。多分、一番驚いてるのは私自身だ。口から出てきた言葉は、想像も想定もしてない言葉だったからだ。

答えを聞いた彼は――

「えっ、ごめんなさい無理です」

「……えっ？」

彼は早口で捲し立てるように断った。あれ？何で告白された私が振られたことになってるんだらう？

疑問を浮かべるも、唯斗君の真面目な眼を見た。これは巫山戯ていない。真剣に告白してきた彼は本物だし、断ってる彼も本心だ。

（――もしかして…まだ迷ってること、見抜かれてた…？）

告白は受けたが、その意味までは理解出来ていなかった。それが彼の目には映っていたのだらう。彼は最初からずっと本気だったんだ。本心から、相思相愛でいたいと思っていたのだらう。

見透かされていたんだ、私がまだ自分の気持ちすら理解出来ていないことを。

だから、断ったのだらう。

己の欲を抑えて、私の気持ちを優先してくれた。それがどうしようもなく嬉しくて、不器用な優しさに感じられた。

予鈴を聞き、急ぎ足で戻る彼を見ながら呟いた。

「待っててね」

いつか、答えを出す。それがどんな答えでも、彼に伝えよう。それが一先ずの目標だ。自分を知り、相手に伝える。これではまるで、恋する少女だ。自分の気持ちすら分かっていないのに。

東郷美森は小さく、それでも美しく微笑んだ。

バーテックス「あれ？僕達については…？」

4日目（後編） / 『覚悟』

さて、そろそろ○月△日の続きを書こう。

東郷をフツてから五年もの月日が…流れてません。数時間程度だった。放課後になり、何事も無かったかのように我が家へ go homeしようとした所を友奈に引きずられて、勇者部へと拉致られた。早く勇者部辞めたいよ。

ちよつ、東郷と顔合わせるの気まずいんですけど。

フツたのに、何故かその次の授業中からは変に微笑みを浮かべて左隣に座ってる俺を見つめてくるし。怖い怖い。まさか俺も盗撮されてないよね？…帰ってから、鞆の中に盗聴器とかないか探したが、無かった。これからは毎日探すようにしよう。あつたら警察に向かう。だって怖いもの。

東郷は変な扉を開き掛けてるし、友奈は今日も今日とて狂信ってるし。どうせ部活に行けば女子力（物理）を振りかざす風先輩も居る。俺の癒しは樹だけだった。

部室に行くと、風先輩が黒板に奇妙な絵を書いていた。愉快的なオブジェクトかな？

またいつもの奇行かと納得した俺は、それを横目に眺めながら自分のスマホをいじった。アプリゲームのログインや、某動画サイトで新しい動画が投稿されてないかのチェック。中学生にとって、スマホ一つあれば何時間だって潰せるのだ。

他の部員、変人と変人と常識人は精霊について話していた。精霊とは、勇者になったときになんか出てきた謎生物のことだ。見た目が可愛い、何々が好物だ、等々。実に中学女子っぽい会話だ。変人二人がいなければ、俺もほのぼのと会話に混ざっていたところだ。

ここでみんなの精霊について書いておこう。

まずは俺のから。名前は大蛇だった。『だいじゃ』じゃなくて『オロチ』と読むらしい。大層な名前とは裏腹に、外見はただの白い蛇をぬ

いぐるみっぽくデフォルメにした感じだ。なんか目が赤かった。

風先輩のスタンド：じゃなくて、精霊は犬神だ。精霊なのに神って青いだけの犬と狸を足したような生き物には荷が重いと思う。

樹の精霊は木霊だ。木霊は樹木に宿る精霊の名であり、神樹様とかいう謎の存在と繋がってそうだ。少なくとも、犬神よりはね。

——友奈の精霊だが：これから書くことはかなりヤバい。グロテスクというか、サディスティックというか。これは結城友奈の人格が歪みきつていることを密かに表していると俺は確信してる。

結城友奈の精霊は、『牛鬼』だ。

読んで字のごとく、牛の鬼。つまりは牛だ。

そんな牛鬼の好物はなんだと思う？いや、敢えて書き方を変えようと思う。好物が何だったら、一番恐ろしいと思うか。

——『ビーフジャーキー』だ。

牛鬼の好物はビーフジャーキーなのだ。

友奈は笑顔で語っていた。

牛鬼がビーフジャーキーを食べる、それはつまり人間が人肉を食すのと同等等だ。大好物というのだから、尚のことタチが悪い。

俺は背が凍りつきそうな程、恐怖を感じていた。

結城友奈は何故、牛鬼にビーフジャーキーを与えた？勝手に食べたなんて言い訳は通用しない。そんなことを言っても、牛の前で牛を食べたという残酷すぎる彼女の歪みは尚のこと恐怖心を駆り立てる。

いや、待てよ。

意図せず食べた、という考えは改めた方が良くかもしれない。その可能性に気がついた俺は、もう結城友奈を同じ人間だとは思えなくなった。

そもそも、女子中学生がおやつでビーフジャーキーなんて食べるのか？ビールや酒のツマミとして人気なビーフジャーキーは、値段もそこそこだ。とてもじゃないが、毎日のようにうどんを食べて帰る中学生が簡単に買えるものでは無い。特に友奈の家がお金持ちとか、そう

いう話もない。

つまり、話をまとめるとこうなる。

友奈は自分から牛鬼に牛肉を食べさせた。

先にも言ったが、ビーフジャーキーは中学生にとっては高級品だ。買えないこともないが、チョコやクッキーなどの菓子を置いてでも優先して買うべきものでは無い。だが、友奈は買った。自分の歪んだ癖を満たすために。生き物の実質的な共食いを見たいがために……

なんだ、アレは？

何を考えている？

どんな思考回路をしている？

理解不能だ。非道すぎる。異常だ。気持ち悪い。近寄りたくない。話したくない。見られたくない。巻き込まれたくない。怖い。怖すぎた。

今も、笑顔で共食いを見てる。

あの笑顔の裏にはナニが隠れているのか、想像しただけで吐き気がした。

だが、それを悟られなくなかった。

友奈の本性を知ったからこそ、その歪んだナニカを自分に向けられたらと想像しただけで震えが止まらなくなる。生きるとか、死ぬとかの話ではない。人として失ってはならないものを欠損させられそうな、根拠の無い、けれども確かに胸を叩く恐怖だけがとめどなく溢れてきた。

本当なら、この日記にも書くべきではないのかもしれない。もしも友奈に見られたら、俺はどうなってしまうのか。

——でも、敢えて残そうと思う。

この後、俺が行方不明にでもなったら。その時の捜索に少しでも役立つようにと思って残そう。俺、まだ死にたくないし人肉も食べたくない。

その後、風先輩から勇者の説明があった。

でもまあ、殆どアプリの説明で見れることだった。なので俺にとって必要なことを、忘れないように日記に書いておこう。

一、俺はイレギュラーらしい。

勇者つてのは、純粋な女の子だけかなれると風先輩は語っていた。俺は懐疑的だった。俺の目には、勇者部に純粋な女の子なんて一人しか見えない。樹だけじゃね？とおもったけど口を噤んだ。俺、空気読める系男子だから。

別にイレギュラーだから劣化版だとか、そういうことではないらしい。ちよつと武器が特殊なだけの至って普通の純粋勇者、唯斗くんです。

二、勇者は精霊のバリアに守られてる。

前の日記にも書いたが、勇者は基本的には怪我をしない。飽くまでも基本的にはだけど。精霊の力を超える攻撃は防げないし、衝撃まで消せる訳でもない。バーテックスの攻撃をモロに受けたら、死にはしなくても骨の一本や二本は覚悟した方が良さそうだ。：骨折したくないね。

三、バーテックスは全部で十二体。

いや、なんで分かるの？また神樹様のお力か？そんなん分かるなら同時に倒せと思うのは俺だけ？能力が探知と勇者に変身させることって：魔法少女のマスコットキャラでも目指してるのか？プリティ神樹ちゃんなのか？

さて、今日の日記はこれくらいに——あ、書き忘れてたことがあった。

今日もバーテックスさんと戦いました。

十二体もいるのか言っておきながら、本日は三名様のご来店になりました。でも、俺にとってはちよつど良かったのかもしれない。

つまるところ、バーテックスを全部倒せば俺が勇者部にいる理由もなくなるのだ。そう考えたら、一気に来てくれた方が都合がいい。つ

いでに言うと、今日の俺は降り積もるストレスにより気がたつていたから、バーテックスは八つ当たりには最適だった。

あと、東郷が覚醒した。

覚醒っていつても、変身しただけなんだけどね。なんか語ってたけど、友奈に怯えてる俺は何も聞いていなかった。むしろ、途中でバーテックスにご挨拶しに行った。

そして今回もピコピコと倒した。

なんか蠍っぽいやつが飛ばしてきた太い針もピコピコハンマーで跳ね返せたんだけど、これって素材なんなの？触り心地も軽さも、本来のピコピコハンマーだ。少し大きいだけのね。でも、これでピコると全部跳ね返すし、敵は挟れる。

なにこれ？バトルゲームのクリア後に行ける隠しダンジョンにあるネタ武器かな？明らかに勇者の剣とかよりも強いやつ。それとも課金前提のソシヤゲにある課金武器か？…でも、見た目がなあ。

今度こそ日記を締めよう。

明日こそはいい日になるといいなと思いました。

今回のバーテックス戦、結果だけを言えば全員がほぼ無傷で敵を完封した。その要因となったのは、イレギュラー勇者とも言える唯斗の活躍が大きかった。

——時は開戦前。

樹海化警報のアラームが勇者部の教室内に鳴り響く。

それはバーテックス襲来の合図であり、少年少女が勇者になる時間の開始だ。全員の視界が光で埋め尽くされ、次に映ったのは二度目となる異様な空間だった。

「うそ…でしょ…!?!」

誰の口から漏れたのか、掠れた声だけがその場に響いた。その光景を見て、ほぼ全員が絶句したのだ。

——三体のバーテックス。

勇者アプリの画面には射手座、蟹座、蠍座の表示がされてた。一体だけでも脅威だったバーテックスが、三体同時に襲来したのだ。それが示すのは、敗北の可能性だ。

幸い、まだバーテックスとの距離はあった。

どうすべきか。自分達は、得体の知れない恐怖にどう立ち向かうべきなのか。

「みんなに、聞いて欲しいことがあります」

東郷の凜とした声が、不気味な空間とは不釣り合いに響き渡る。消して大きくはないが、それでも声以上の思いが込められた一言は、勇者部員の鼓膜を揺らし立てた。

「東郷さん？」

疑問符を浮かべる友奈。

目の前に居るのは、紛れもない親友の東郷美森だ。でも、少し違って見えた。いや、正確には変化が見られたのだろう。昨日の、自分共に震えながらバーテックスを見ていた彼女とは違う。

「私、ちよつと前まで考えていました。どうしてみんなはバーテックスと戦えるのか、どうして化け物を目の前に戦う意思を示せるのか」

それは弱さ故の疑問。強き者への羨望ではなく、それを越えた理解不能だ。

「きつと、それが悪い方向に拗れたんだと思う。次に浮かんだのは：

風先輩、貴女への怒りだった」

「東郷…」

理不尽だなんて、口が裂けても言えない。風の責任感が、風自身を押し潰す。自分は命令されただけで、大赦相手に逆らえなかったので仕方がない——だなんて、言うだけなら簡単だ。己の正当化ではなく、一つの真実でもあるからだ。でも、風は決して言い訳なんてしない。これは風自身が背負うと決めた罪の形だ。最悪、自分一人でも戦い抜くと決めて、その覚悟を言い訳で殺すなど、風のプライドが許さない。

「本当に、ごめ——」

「——でも」

届かないと分かっているでも、謝りたい。だから紡いだ謝罪を東郷は遮る。まるで、謝るなど言わんばかりに言葉を被せた。

「それも言い訳です。私が弱くて、戦えなかったことへの言い訳。もしも、風先輩が前もって教えてくれたとしても、私は：私だけは、受け入れないと思います。作り話だと言って呆れるか、どうせ自分達は選ばれないと楽観視するか。きっと、どんな道を辿っても私は最初のバーテックス戦では戦えなかった」

「そ、そんなことっ！」

「友奈ちゃん、ありがとう。でもね、自分のことは自分が一番わかるの」

己を強く見せるのは簡単だ。何故なら、弱い自分を隠すだけでいいからだ。弱さを隠せば、必然的に残るのは強さだけになる。

でも、東郷はもう隠さない。

「——今だから、認めます。私は弱かった。ここにいる誰よりも、心が弱かった」

認めた次に残るのは——

「これは私の『覚悟』です。守られるだけの私を捨てて、大好きなみんなと共に歩むための！」

東郷は三人の目を見て、肺に空気を溜める。今世紀一番の覚悟なら、声量だつて一番でなければいけない。次へ進むために、東郷は言い放つ——

「私は、勇者になります!!」

歓喜を上げる勇者部、その各表情には様々な考えがあった。一人は結局巻き込んでしまったことへの申し訳なき、一人は心強い仲間ができたことへの喜び、一人は奇妙な武器を持ってバーテックスに向かつて行った先輩を呆然と眺める。

「……あれ、唯斗は？」

「お姉ちゃん、唯斗先輩は……」

ピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコ
ピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコ
ピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコ
ピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコ
ピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコ
ピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコピコ
ピコピコピコピコピコピコ!!

「うっさいわぁ!!!」

風は思わず叫んだ。ピコピコ音にも負けない怒声は果たして元凶に届いているか否か。少なくとも、彼の手が休まることは無かったとだけ記しておこう。

東郷が覚悟を語る中、唯斗だけが途中で抜け出してバーテックスと戦っていた。

「きつと、唯斗君は私が話す時間を稼いでくれたんです。だって：私が変わることが出来たのは彼のお陰ですから」

——だから、許してあげて欲しい。

東郷の言葉には、そんな気持ちが出来た。曇りなき眼で語る東郷を目の前に、流石の風も怒りを鎮めた。

「は、早く助けないと!!」

「友奈ちゃん、私も：！」

覚悟を示したものに、力は応える。全員を光り輝く花卉か包み込み、勇者の服へと変化を遂げた。一人は箆手を、一人は銃を、一人は大剣を、一人はワイヤーを。それぞれの武器を握りしめた。

勇者達が駆け出す中、唯斗は蟹を模したバーテックスをピコピコハンマーで叩いていた。ピコピコハンマーの攻撃力は見た目とは裏腹に、本物のハンマーよりも圧倒的に強い。

蟹を模してるからか、そのバーテックスは兎に角硬い。

射手座のバーテックスが放つ矢を反射する板を複数枚操り、盾にする。尚且つ本体はそれ以上に硬いので、生半可な攻撃は通らないのだ。

だが――

ピコオツ！

反射板が複数枚同時に碎ける。

ピコオツ！

残る反射板が全て地面に叩きつけられる。

ピコオツ！！

本体を叩き、数十メートル程吹き飛ばす。

「硬くね…？まあ、硬いなら数で押すけどー」

唯斗の持つピコピコハンマーの、最大の強みは『軽さ』だ。見た目も触り心地も、そして重さも本来のピコピコハンマーと同じだ。元のピコピコハンマーを150センチ程に大きくしたのが唯斗の武器だが、それは勇者に変身して得た身体能力からしたら軽すぎた。

ピコオオオ！！

あつという間に、バーテックスの内の一体は見るも耐えないほどロボロになった。一人では御魂を出すことも出来ないので、唯斗は少しずつ再生していくバーテックスを眺めながらため息をついた。

決してバーテックスが弱いのでは無く、今回のバーテックスは唯斗にとってもつとも戦いやすい部類だったのだ。あまり動かず、尚且つ攻撃手段にも乏しい。だから唯斗も防御をせずに、存分に武器で攻撃できたのだ。

「あいつ、なんか一人で一体倒してない？」

「あ、あはは…」

射手座のバーテックスとの戦闘中の風は、小さく吹いた。加勢しようと思っていた相手がいつの間にか敵を倒している。それを喜ぶべきか、呆れるべきか。

蠍座は友奈と東郷にまかせ、風と樹は射手座と戦っていた。だが、完全に遠距離特化のバーテックスは予想の何倍も厄介だった。

巨大な一本の矢による長距離狙撃と、無数の針を雨のように降らせる広範囲射撃を使い分けるバーテックスだが、特に厄介なのは針の雨だった。範囲攻撃のために、避けるタイミングを間違えたら一気に針の山だ。精霊バリアがあるので数回は耐えられるが、バリアも万能ではない。いつかは碎けるし、そうなったら死も目の前だ。

「樹！来たわよ!!」

「うん！」

今はまだ、避けることに専念する。

少しずつ距離を詰めて、針を放つ前に叩ける場所を目指す。どっちにしろ、この距離だと攻撃手段がないのだから。

「次！太い矢が来るわよ!!」

あの矢に当たったらどうなるのか、想像だけは容易にできた。確実に言えるのは、無事では済まないということだ。当たりどころが悪ければ死すら有り得てしまう。

二人は脚に力を込め、放つ瞬間に地を蹴って避けようとするが――

「お、お姉ちゃん？あのバーテックス、こっち向いてない気がする！」

「そう言われれば…？ま、まさか!？」

矢の向く方向を目で追うと、そこにいるのは――

「なっ!?ゆ、唯斗先輩！危な――」

唯斗だった。バーテックスは、風や樹よりも先に唯斗を狙うことにしたらしい。樹の声を掻き消すように、矢は轟音を立てて放たれた。

樹の声は間に合わず、刻々と迫る弾丸速の矢が遂に唯斗へと到達する。仲間の目に浮かぶのは、矢で貫かれた無惨な唯斗の姿――

ではなかった。

「邪魔!!」

ピコオツツ!!

「えっ、ええええっ!？」

唯斗は矢を跳ね返した。迫り来る矢の先端をピコピコハンマーのフルスイングで返す唯斗。矢は逆再生のように飛んできた軌道を沿って戻り、射手座を貫いた。

「は？えっ…？は、はああああ!?なにそれ!?跳ね返せるの!？」

「お姉ちゃん！耳元で叫ばないでえ!!」

その後のバーテックス退治は、驚くほど普通に終わった。蠍のバーテックスを倒した友奈と東郷が加わり、既にボロボロだった蟹座の御魂を破壊した後全員で射手座を倒した。射手座の放つ矢は、唯斗に跳ね返されたり、東郷の狙撃で破壊されたり。針の雨も風の大剣を巨大化させて盾にするという方法で攻略された。

勇者部二度目の戦いも、勇者側の勝利で終わった。

5日目 / 銀の願い

○月○日

すぐに飽きると思っていた日記も、いつの間にか五日目だ。二日目に関しては記憶と意識の問題で書けなかったけど、次の日にまとめて書いたからノーカンだ。

これが一週間後には『今日はいいい日だった。』の一文で終わらないように願おう。飽きつてのは、努力ではどうにもならない壁だからね。

今日はバーテックスさんが来なかった。

残念と思う反面、休めることへの喜びもあった。早くバーテックスを全滅させたら、俺は何の憂いもなく勇者部を辞められる。それでも休日という名の癒しは欲しかった。

変人と狂人で形成された部活動も、今日はお休み。風先輩曰く、バーテックスとの戦いでみんな疲れてるだろうから休みにしたらしい。ひよつとして、風先輩は常識人だった？ 思えば、生粋の常識人である樹の姉なのだ。遺伝子上は常識人になる筈だ。それで言ったら、樹がヤベー奴な可能性もあるけど…うん、無いな。俺は樹を信じてるからね。風先輩は常識人（仮）にランクアップした。

取り敢えず、希望はまだあると信じてみよう。

さて、今日起きたことと言えば。

書くべきこととは一つだけだ。ストーリーっぽい奴に出会った。一応先に書いておくが、東郷ではない。俺の平和は何処へ…？

そのストーリーカーは銀髪でボーイッシュな感じの少女だった。名前は聞いていない。知った瞬間から、知り合い認定とかされそうで怖かったからだ。ストーリーカーって、怖いよね。自分の存在を認識して欲しいタイプのストーリーカーは特に怖い。百害あって一利なしだし。…家のポストに、髪の毛とか爪が入った封筒届いてないよね？ それなら、影からそつと見られた方がまだ無害だと思う。

何故、俺が銀髪さんをストーリーカーだと認識したか。

それは、出会い頭に名前を呼ばれたからだ。買い物中の俺は肩を物凄いい勢いで掴まれて、名前を叫ぶように呼ばれた。正直、驚きすぎて心臓が止まるかと思った。

思わず、『えっ、いや：山田太郎ですけど？』と答えた俺を誰が責められようか。

歳は同じ位に見えるが、見覚えのない少女だった。骨折でもしているのか、首からアームホルダーを下げており、片目にも眼帯を付けている。交通事故にでも遭ったのだろうか。目と腕だけにダメージを受ける事故とは一体。厨二病の可能性も少しだけ出てきた。

それは置いといて。

名前を呼ばれたから、俺は同級生か同じ学校の先輩後輩のどちらかと思った。憶えていないだけで、小学校の同級生かもしれない。でも違った。彼女は訳あって学校には通っていないと言うし、今日は友人に頼まれて本を買いに来ただけと語った。

——おかしくないか？

彼女は『学校には通っていない』と言った。確かに、彼女自身の口から聞き間違いなく言ったのだ。

でも、何故か俺の名前は知ってる。

そこから導き出させる答えは——『ストーカー』

自意識過剰野郎だと自分でも思った。残念ながら、俺は美少年と言えるだけの容姿は持ち合わせていない。だからストーカーの被害に遭うことは無いと思っていた：だが、それなら彼女が俺の名前をなぜ知っていたのだろうか。生憎と芸能人や俳優とは違い、ごく普通の常識人兼一般人の唯斗くん。こんなモブを、わざわざ知っている奴なんて同級生か部活メンバーくらいだ。

——しかも、怖いのはここからだ。

俺がいつも通り、業務用イカの姿フライをダース単位で買おうとしていた時のことだ。

何故か銀髪は付いてきていた。まあ、ここまでは良い。別に無許可で同行されるくらい、寛大すぎると評判の俺は許容できた。問題はその後、それを見た彼女はなんと呟いたと思う？

——唯斗は昔から変わらないなあ——

寒気がした。俺の行動を見て、彼女は過去の俺を語ったのだ。いつからだ？あの銀髪は、いつから俺を知っている？確かに、俺は昔からイカの姿フライを週一で爆買いしている。だが、俺も馬鹿じゃない。毎回イカの姿フライを爆買いしていたら、確実にヤベー奴だと思われる。だから当時の俺は、変装して買いに行ってた。時にはカツラを被り、時には女装をして、時にはサングラスにマスク姿で買いに行ってた。まあ、それも昔の話だけど。今はもう、ありのままの自分でイカの姿フライに臨んでいる。

絶句した俺は、銀髪に理由を聞けなかった。

屈託のない笑みを浮かべながら、サラツとトンデモ発言をする銀髪さん。そこには悪意や悪巧みは一切なく、まるでストーリーカー行為自体を挨拶のようにやってるかのような自然さが見れた。

ここで逃げ出さなかった俺を褒めて欲しい。

鈍感系主人公の如く、銀髪さんの囁きは聞こえてないことにした。くっ……！証拠さえあればポリスメンにGOできるのに。生憎と俺は録音機なんて持ち歩いていないので、トンデモ発言を証拠にすることも出来ない。

その後、気がついたら銀髪は去っていて。

かなり失礼だけど、アレを思い出したよ。見たくないし触れたくないけど、いぎ姿が見えないと逆に恐怖心を掻き立ててくる黒いヤツ——Gを。ストーリーカーも、いると分かっている尚且つ姿は見えなければ、めちやくちや怖いじゃん。

ストーリーカーはGと同等だと、唯斗くんは思った。

さて、今日の日記はこれくらいにしよう。

明日こそは平和な日々を謳歌したい。

三ノ輪銀にとって、それは再会の日だった。

出会ったのは、少ない記憶の中でも色濃く残る人物の一人だ。過去

に得た力の代償で、片目と片腕、それと臓器がいくつか機能停止している。それでも生きているのは、神樹様と呼ばれる神様の力だ。それ相応の力を得たとしても、未だに鏡を見るのは辛かった。

様々な機能を失った銀だが、その代償の中には記憶も含まれていた。より正確に言うなら、勇者に関わる記憶以外が無くなっていったのだ。家族のことも、学校のこと。唯一残っていたのは、同じ勇者であった三人の親友との日々。

もつとも、その三人の内二人は過去の記憶が無いらしいが。銀とは逆に、勇者に関する記憶は全て失ってるのだ。神様もとんだ皮肉屋だと呆れて笑えてきた。

その日、銀は親友の一人である乃木園子に頼まれて本を買いに来ていた。

別にパシられているとかではなく、彼女が動けないから代わりに、という話だ。銀は力の代償で身体の機能をいくつか失ってるが、園子は銀以上に失っていた。とてもじゃないが、人前に出れる状態ではない。だから代わりに銀が買いに来たのだ。

今の銀と園子ならば、大抵の事は大赦の人に頼めば解決する。それが小説程度ならば、十も百も揃えるだろう。だが、銀はできるだけ頼りたくなかった。理由は簡単、胡散臭いから。歳で言えば、中学生くらいの自分達。その二人に跪く大人達だ。考えるまでもなく、ヤバイ組織だ。

一応外出の許可は貰ってるが、恐らく何処かで大赦の人から見張られているだろう。神樹様の力を得てる自分や園子を、大赦が放任するわけがない。銀もそれを承知の上で、外出したのだ。

久しく外に出る感覚、今にも駆け出したい衝動が溢れ出そうになる。だが残念なことに、片目が見えなくて、片腕も使えない状態では直ぐに平衡感覚が狂って転ぶだろう。銀は早々に諦めた。

気を取り直して、今回の目指す先はショッピングモールだ。本屋でも問題はないが、どうせなら他の店も周りたい。だからショッピング

モール内にある本屋で用事を済ませることにした。

第一の目的は親友がお好みの小説を買うことだが、銀には第二第三の目的だつてある。外を歩き回つて散歩したいし、動物園とは言わずともペットショップとかで小動物を触りたい。その後には園子にお土産を買つて——やりたいことだけなら、無限に浮かんでくる。

(あ、この道……昔は四人で歩いたな)

瞼の裏には、笑いながら横並びで歩く幼き自分達の姿。少年が黒髪の少女をからかい、園子は更に悪化させる。頬を膨らませて怒る少女を幼い自分が呆れながら宥めてる。そんな映像がハッキリと浮かんで、次の瞬間には蜃気楼のように消える。

——戻りたい、あの頃に。

何百回と考え続けたことだ。傷だらけになりながら守つた日常を、誰よりも謳歌していたあの頃。きつと、同じことを園子だつて考えている。彼女は、誰よりも頭が回る。だからこそ表面には出さないが、会いたいと思つてるだろう。もう二人の親友と——

もう戻れないと理解しつつ、それでも少ない思い出に縋り付き浸る。隣に誰も居ない寂しさを覚え、微かに歩が緩まった。

普通は二十分も歩けば到着する筈の片道を、二倍近くの時間を掛けてゆつくりと歩いた。

「……………こも、変わらないな」

昔は通うように来ていたショッピングモール。

約二年程度しか経っていないが、まだ精神の未熟な銀にとって二年は長い時間だ。もしくは、取り巻く環境が劇的に変わったこととのギャップもあるのかもしれない。勇者として身を犠牲にして戦つた日々とは一転、その後は生き神として崇められ保護されていた。それが僅か数年の出来事なので、銀にとつての数年は普通の人を感じるものとは違うのだ。

入口から入り、エスカレーターを探す。場所さえ変わってなければ、本屋は上の階層にある筈だ。

「……………」

すれ違う人が好奇の視線を向けてくるのを感じた。原因は眼帯とアームホルダーだろう。覚悟していたとはいえ、やはり羞恥もあった。名誉の負傷とも言えればカッコ良いのだろうが、負傷は負傷でしかない。血が出たら痛いし、腕や足が動かなければ不便だ。

視線については仕方なしと割り切ることにした。

すれ違う人々を気にしてないフリを続け、真っ直ぐと本屋だけを目指す。今日は休日ということもあり、中々に人が多い。親子連れにデート中のカップル、チャラめの女子高生達やお年寄り等。中には自分と同年代の少年も――

「…えっ」

咄嗟に漏れ出た声は、掠れて声になるのがやっとなった。

視界の端に映ったのは、見覚えのある彼だ。二年前よりもかなり身長が伸びてるし、格好も全然違う彼の姿。でも、親友だった銀には解る――解ってしまう。

「まっ、待って…!」

人混みに紛れていく少年を追い、銀は思わず駆け出した。平衡感覚がおかしくなり、足が纏れる。それでも立ち止まらずに走れたのは、一種の火事場の馬鹿力というものなのだろう。

――見間違うものか。

拙く擦り切れてしまった記憶の中でも、その彼は脳裏に焼き付いている。色褪せることなく、寧ろ色濃く残っているのだ。

――ずっと願ってた。

再会を。また笑い合える日々を。無邪気にもずっと続くと思っていて、それはいとも容易く崩れてしまった。だから、また会いたい。またあの頃のように。

(見つけた!・もう少し…もう少しで!!)

人と人の間を避けながら通り、少しずつ近くなる背中に手を伸ばす。唯一動かせる右手を伸ばし、肩を力強く掴む。

「――唯斗!!」

「びゃっ!?!」

唯斗の口から変な声が出た。人は驚くと変な声が出るらしい。そ

んな事を嬉しく思いながら、でも喜ぶ口は全然止まらない。

「唯斗！唯斗だよな!!」

「えっ、いや…山田太郎ですけど?」

「いや誰だよ」

目の前にいる少年は、間違いなく山田太郎ではなく唯斗だ。こんなところは二年前から変わってない。それが懐かしくて、単純な喜びだけが湧いてくる。

「こんなところで何してるの? って買い物に決まってるかー! ははは
〜!!」

「えっ、怖。何この人…なんか一人で騒いでるし」

「暗いねえ、唯斗さんや。もっと弾けようぜーなーんて、柄じゃないか
〜! はははっ!!」

「何言ってるんだコイツ…」

困惑気味の唯斗を気にかける程の余裕は、今の銀には無かった。お留守様をしていた大型犬が久方振りに御主人に会うような、只管にテンションだけが高かった。

「それで、唯斗は何処に向かっているんだ?」

「家です」

「出口とは反対側に向かってたけど?」

「わー、また方向音痴を發揮してしまったー」

「恐ろしく棒読みだ…」

銀の記憶が正しければ、唯斗に方向音痴なんて属性はない。寧ろ帰省本能が過剰労働してるのではと疑いたくなるほど、方向感覚に優れている。

結局、数分かけて問いただした。

その結果が業務スーパード行くとのことだった。別にゲームセンター等の娯楽施設を求めていたわけではないが、中学生が進んで来る場所ではない。

「まっ、いいや。早く行こうか」

「……」

何か言いたそうな目で見てくるが、生憎と銀には読心術の心得は無

い。首を傾げた結果、少年の口からは長く大きいため息が漏れ出てきた。

業務スーパーに着くまでは銀が一方的に話しかけ、唯斗が「あー」や「うー」などで返すだけの無駄な時間が流れていた。片や屈託なき笑み、片や能面の如く無表情。

その後、銀は業務用イカの姿フライをダース単位で買う変人の傍らで微笑んでいた。身長は伸びても、変人の中身は不変だった。それだけで、一瞬でも過去に戻れたような気がした。

「唯斗は昔から変わらないなあ」

思わず、そんなことを口に出してしまった。

自分と彼の関係は、確かに友人だ。今でも、これからも。二人が変わってしまったても、その事実が変わらない。でも、同時に過去の勇者仲間でもあるのだ。

世界を守る勇者、それは人前で堂々と話してもよいことでは無い。勇者が世界を守っていると同時に、失敗すれば日常へのフィードバックも有り得る。これまではただの事故として扱われていたことが、実は勇者の失敗によって起こされてる。

それを知った一般市民は、バーテックスよりも先に、身近にいる勇者に怒りをぶつけるだろう。だから、銀は人前で過去勇者について唯斗と話す訳にはいかなかった。

「——って、あれ？唯斗は…？」

はぐれてしまったらしい。軽く周りを見渡すが、唯斗の姿は無かった。

(ありやいや。しゃーない、最初の目的でも果たすか)

銀は一人で本屋に向かった。

最初と同じく一人だが、銀の表情だけは変化していた。昔を懐かしむ少女の笑みから、今を楽しむ少女の笑みへと——

○○○○○○○○

しゅじんこーしよーかい。

《郡 唯斗》

・勇者部唯一の男子部員。基本的には風や東郷から『変人』と称されるが、本人には一切の自覚はない。

寧ろ、勇者部の中では自分以外のほぼ全員が変人だと思ってる。イカの姿フライが大好きで、バレンタインやクリスマス等のイベントがある度にイカの姿フライに関する奇行が目立つ。容姿は、暗めの茶髪を少し長めで保っている。頭上にはアホ毛が生えている。

勇者に変身したら髪が真っ黒になる。精霊は大蛇一体だけ。

余談だが、過去に唯斗と同じ『郡』の姓を持つ勇者がいたとか――

6日目 / 暇人は暇

○月?日

超平和だった。

何も無い日、それは何よりも幸せな事だ——と少年は語った。果たすべき使命もないし、溜まつてる宿題もない。まして苦の付くような労働なんてものもない。あるのは暇と時間だけ。

少年はそれを『幸せ』と称した。

つまるところ、唯斗は超暇人なのだ。

超暇人、略して超人だ。なんて馬鹿らしいことを思い付く程度には暇人なのだ。意味もなく逆立ちしたり、意味もなく前転を試してみたり。とにかくやる事が無い。

勇者部の活動? バーテックスと連日戦ってから、まだ二日目だ。当然ながら休みに決まつてるだろう。

家事? ダース単位でイカの姿フライを買った唯斗は、それだけで一週間は生きていける。尚、唯斗は洗濯物は溜まつてから洗うタイプだ。

遊ばないのか? いや、休みに遊んだら休養の意味が無いだろう。休みを求めているのは精神ではなく、体だ。その体を働くことで酷使するなんて、唯斗には出来なかった。

学校? 勿論休みだ。さすが土日だ、尊敬すべきは土日だった。サザエさんシヨックという欠点さえ無ければ、日曜日は最強だったと唯斗は語る。

「あ—————」

意味もなく、寝転びながら天井に声を向けた。それには本当に意味

がなくて、生の喜びも、死の恐怖も、未来への憂いすらも込められてはいない。虚無ではないが、意味もない。形容しがたい時間が無意味に流れるのに、それは決して無価値ではなかった。

「いーーーーー」

次はうつ伏せになって床に声を響かせる。ひんやりとしていたカーペットが自分の体温でゆっくりと暖かくなるのを感じながら、肺が限界を迎えて声が途切れた。いや、実のところ唯斗は限界を迎える前に飽きて声を止めたのだ。前者後者どちらでも良いと感じるのは、正常な思考だ。

「うーーーーー」

壁までゴロゴロと転がりながら、声を出し続けた。少しだけ目が回ったが、構わない。寛大な唯斗は、己のゴロゴロを許した。許すも許さないも、全ては己の行いによる結果なのだが。

「えーーーーー」

ベッドの上でブリッチをしながら、声を震わせた。ブリッチは意外と腰にくるし、腹の皮が張る。だから数秒で止めた。勇者として、体を大事にしようと心に決める。だが、なんということだろう。更に数秒後には決意が記憶の彼方にサヨナラしていた。

「びゃーーーーー」

唯斗は、次に『おーーーーー』が来ると思っていた世界中の人を欺いた。まるでトリックスターのようにニヒルな笑みを浮かべるが、虚しくなった。でも次の瞬間には己を孤高の存在と称してカツコつけようとした。何故なら、勇者は諦めないからだ。他意は無いが、考えも無いのだ――

「暇だ」

やっと出たまともな言葉が、それだった。

「マジで暇。本当に暇。暇すぎて暇」

訂正、まともな言葉なんて一言もなかった。ただ暇を連呼するだけの暇人で変人が、そこには居た。暇だと言う割には、行動を起こす気

力も意思もない。

「はあー、なんか良いこととかないかなあ〜」

宝くじとかが当選すればいいのに。そんなことを呟く唯斗だが、宝くじなんてそもそも買っていない。当たればいいのにと口にはするが、どうせ当たらないと分かっているので買わない。唯斗は宝くじが当たったらやりたいことリストを作るけれども、宝くじは買わない夕イプだった。

——プルルル、プルルル

「ん？」

聞き慣れたバイブレーションの音。誰かから電話がきたらしい。きつと山田くんだ。隣の席の、前にイカの姿フライが口に入っていたとかで反省文を書いていたあの人だ。実は数回しか話したことないけど、きつとあの人に違いない。

唯斗は画面に映る『東郷美森』の文字を見ながら、それでも現実逃避をした。

「……よし」

それは決意を固めた男の声。

無視する覚悟を決めた少年は、携帯をベッドから誤わざとって落として、口笛でアンパンマンマーチを吹きながら着信音をかき消した。

——プルルル、プルルル……

「ふう、やっと止まったか」

爽やかな運動部員の如く、額の汗を拭う唯斗。謎の達成感が込み上げてきて、今すぐにも走り出したくなった。

——ブー、ブー

「ん、今度はなんだ？」

落ちている携帯電話を持ち上げ、画面を見る。

『東郷 : 着信に気が付いたら、連絡ください。』

「うん、なるほどね」

つまり、逆説的に捉えると気が付かなければ連絡しなくても良いということだ。唯斗は小さく微笑みながら、電源ボタンを長押しして携

帯本体の電源を切った。それはまるで、文明の利器に頼らずとも体一貫で生き抜くと決めた漢だ。表面の表情だけは、そんな感じだった。内面については察することを推奨する。鈍感系主人公の如く知らんぷりも可。

やがて画面が真っ黒になったスマホを、机の上に置いた。今日一日は、もうスマホ先輩のお世話にはならない。ドラえもんが未来に帰る時の感動話のように、唯斗もスマホとの別れ（一日）を惜しみながらも実行した。

——ピンポーン！

玄関チャイムが家中に鳴り響いた。

配達でも届いたのだろうか。思えば、最近ネットで新しいゲームを購入したばかりだ。一般市民がプレイしただけで青藍島民になる、極めて危険なゲームだ。ギャグ系と言うべきか、感動系と言うべきか。100%変態なのに、その要素がおまけ程度に感じてくる不思議なゲームだ。Q r o p p oさんは何を目指しているのだろうか。

そのゲームの続編を注文したのだ。

唯斗は嬉々として玄関に向かう。これで今日の暇は潰れるだろう、ゲームはなんて偉大なんだ。そんなことだけを考えながら、玄関ドアに手を掛けそうになる瞬間——

「唯斗くーん！あつそびーましょー!!」

「ひえっ……」

ドアの裏から聞こえてくる聞きなれた声。唯斗の表情は鉄仮面のように固まった。唯斗の腕は、玄関ドアから残り1センチの所で停止する。違う、配達でも郵便でもない。どちらかというと、宗教勧誘に近い。寧ろそれより悪質だとも思える。

（ゆ、友奈だ……）

唯斗は抜き足差し足で、部屋まで戻った。

今こそ使おう、伝家の宝刀『居留守』を。禁じ手とも言われるこの手段を、今この状況だから解禁しよう。ラスボス戦でMPを残すバカなんていない。それと同時に、唯斗は友奈に関しては出惜しみなんてしないのだ。

——ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン

「くっ……手強いな」

だが、居留守は罠る者が必ず勝つのだ。漫画のようにドアを突き破ってくるのは、普通に犯罪だ。仮にも狂信者である友奈は、不必要に犯罪を犯そうとはしないだろう。

数分後には、元の静かな我が家に戻ってきた。玄関からはチャイム音も友奈の声も聞こえなくなった。恐らく帰ったのだろう。そうではなくても、そうであると信じたい。刹那に願うは、居留守男也。

「——平和だ」

平和すぎる時間をもっと幸せにするために、イカの姿フライとエナジードリンク魔剤を持つてくる。正直、コーラかサイダーも候補にはあった。でも、折角の平和だ。それなら、ほんの少しだけでも豪華にしたい。よって、値段約200円のモンスターさんにご活躍を願った。目指せエナジー、暴れるカフェイン。

カシユツ、と小気味良く缶を開ける。

一口飲んで、炭酸で喉を刺激しながら潤す。そこでイカの姿フライを一口齧り、ボリボリと音を立てて食べる。かじると少しだけ濃い塩気が口内に広がり、それを炭酸で喉に流す。それがどうしようもなく快感で、食の喜びを感じる。

さて、ここで一つ簡単なアレンジだ。

マヨネーズに七味を混ぜて、それをイカの姿フライに少しだけつける。それで完成するのは、しょっぱいと辛い²が合わさったツマミだ。古来より、しょっぱいものは不思議と炭酸系の飲み物と異常なほど合うのだ。

朝から晩までダラケて、面倒なことは全て未来の自分に丸投げする。毎日とは言わずとも、たまにはそんな幸せを味あわないとやっていけない。

「明日は明日の風が吹く、なんてなく」

唯斗は天気予報士なんかでは無いので、明日の風なんて調べないし

想像もしない。明日の自分なら、今日の自分以上に上手くやってくれ
るだろう。そんなことを信じて、唯斗はイカの姿フライを頬張った。

○○○○○○○○○○

お客の心情――

東郷

・暇だったから、お話したかった。別に先日のことで意識し始めた
からとかではない。ただ会ってお茶でも飲みながら話したかっただ
けだ。他意は無い。――そう、決して他意なんか…

友奈

・流石に避けられてることに気が付いたので、お話したかった。い
つも通り接すれば、彼もきつといつも通りに戻ると思ったから。手始
めに、遊びにでも誘うつもりだった。

34日目 / 風の辛労

×月○日

久しぶりに日記を書こうと思った。

ここ最近は、特に日記に書くような内容は無かった。精々、勇者部の無賃労働をサボろうとしたら拉致られたことくらいだ。相手は友奈、場所は勇者部の部室。捕まった俺は、苦労を強いられた。地域のゴミ拾いから始まり、幼稚園や保育園に子供の相手をしに行ったり、迷子の犬猫探しに落し物の搜索。

そんな日々が続いて、遂に――

待ちに待ったバーテックスさんがやってきたのだ！

お一人様のボツチバーテックスさんだ。

前回のバーテックストリオから約一ヶ月が経っていた。それまでは音沙汰もなく、俺は遠くに引越した恋人の連絡を待つ健気な少女のように、一種の不安を抱いていた。俺の目的は、勇者部を辞めることだ。でも、そうするにはバーテックスさんを全滅させないといけない。だから、中々襲来してこなかったら困るのだ。数年とか掛かったら、泣く。泣き喚く。

だからか、散々焦らされた俺はテンションMAXな唯斗くんだった。

スマホから樹海化警報のアラームが鳴り響いた。

視界が光に包まれ、次の瞬間には1ヶ月ぶりの樹海化した世界。胸が踊り、体は自然に走り出していた。いつの間にか声も出ていた。なんて言ったのかは覚えていないが、きつと雄々しくも優雅なことを呟いていたんだろう。

テンションMAXな俺は、バーテックスから少し離れた距離からピコさん（ピコピコハンマー）を両手に横回転を始めた。ぐるぐるぐるぐる、カービィのジャイアントスイングの如く回る。

そして手を離した、あーら不思議。

ピコン超えてビゴオンツ!!ピコさんがバーテックスを体につか
い穴を開けて飛んでいきました。これが俺の新技、ハンマー投げだ。
……技名ダサイかな?でも、おもうんだよ。変に凝った名前をつけた
ら、痛々しいつて。ただ回転してハンマーを投げただけなのに、ミヨ
ルニルハンマーとかつけたら名前負けじゃん。見た目もピコピコハ
ンマーだし。つまり、シンプル・イズ・ベストだ。

欠点としては、ピコさんが手元に無くなることだ。

勇者の身体能力があればバーテックスの攻撃を避けたりするのは
簡単だけど、攻撃手段が無くなるのはツライ。友奈とか風先輩は殴る
蹴る等の攻撃もしてるけど、何故か俺のピコさんなしの攻撃は貧弱な
のだ。ピコさんに攻撃力を全振りされてるか、ピコさんに力を吸われ
てるのか:後者だとしたら、ピコさんの正体は魔鎚ピコピコハンマー
だ。おかしい、ただのピコピコハンマーなのにかっこよく感じる。

己の技に惚れ惚れしていると、バーテックスが再生を始めた。な
んかグロかった、とだけ書いておこう。

困ったことに、バーテックスをどれだけボロボロにしても、御魂を
出さないとそもそも倒せない。その御魂も、勇者が複数人で囲まないと
出てこない仕様だ。仕方なく、誰かが追いついてくるのを待ってい
た。

——ところがどっこい。

なんとという偶然なのだろう。バーテックスの近くには野生の勇者
が居ました!::野生の勇者?

赤い服を着た野生の勇者は、俺とバーテックスさんを見ながら
ギヤーギヤーと騒いでいた。手柄がなんだかくとか、完成型勇者が
なんちやらくとか。うん、元気いっぱいなのは伝わったよ。それ以外
は何も伝わってないよ。

驚くことに、野生の勇者は一人で御魂を出せるらしい。

騒ぎながら御魂を出して、小太刀みたいなので破壊してた。余談だ
けど、御魂ってバーテックスによって色々なギミック?特性?があ

る。一番最初の卵爆弾製造機の御魂は、めっちゃくちゃ硬かった。本体を挟むピコさんと友奈の攻撃でも暫く耐えてたし。この前のバーテックストリオの御魂は増えたり超高速回転したり、紙一重で攻撃を避けたりもしてた。取り敢えず言いたいことは、最初のバーテックスさんの御魂よ、本体にも強度を分けてやれよ…

話を戻そう。

御魂には各バーテックスによって特徴があるけど、今回の御魂からはドス黒いガスが出てた。いや、出る意味があるのかってほど一瞬で破壊されてたけど。

ボッチバーテックスを倒した後、前回と同じように学校の屋上へ転移させられた。転移できるなら、俺だけ家に帰してくれないかな？ 神樹様もケチというか、融通がきかない。

さて、今日の日記はこれくらいにしよう。

久しぶりに書いたから、手が疲れた。継続は力だけど、飽きという最大の敵を倒さなければいけなかった。無惨にも負けた俺は、不定期に日記を書くことになったのです。…なんか、愚痴ノートっぽくなってる？

明日も晴れば良いなと思いました。

最近、アタシの後輩が不機嫌だ。

アタシ、犬吠崎風は件の後輩を横目で見る。

「ボリボリ、ボリボリ…」

後輩こと郡唯斗は無言でイカの姿フライを頬張っている。これだけならいつも通りなのだが、この光景が一週間前くらいからずっと続いているのだ。部活動中は始まってから終わるまで、自分からは一言も発さずずっとボリボリと咀嚼音だけ響かせてる。その癖、仕事だけはこなすのだ。

流石にこれは、頼れるキュートでセクシーな先輩として注意しなけ

ればいけない。

「唯斗、アンタ最近食べすぎよ?」

「…大丈夫ですよ。俺、食べても太らない体質なので。一週間二郎系ラーメン生活やったけど、体重も変わりませんでしたし」

いつの間にそんなことをしていたのか。後ろで樹が「なっ!?!」と言っていたが、気にしないであげよう。樹も体重を気にするお年頃なのだ。それよりも、アタシが許せないのは――

「唯斗…香川に住みながら、アンタはラーメンに魂を売ったって言うの!?!アンタに誇りはないの!?!」

「んなこといわれましても。あ、うどんも好きですよ。ラーメンとそうめんの次くらいに」

確か、出身地は高知…とかだったと思うけど。そんなのは関係ない。郷に入っては郷に従え、香川に住むなら身体の中にうどん因子を生み出さなければいけないと、古来から決まっているのだから。

「ムキーツー…なんということなの!!これは香川の血を甦らせるために、うどん巡りに行くしかないわね!さあ、立ちなさい!今日の部活動は、唯斗の目を覚ますことよ!!」

「おいコラ、部長が部活内容変えるなよ」

これは由々しき事態だ。唯斗はいつの間にもラーメン派の洗脳を受けたのか。後ろで樹が「た、体重が…」と呟いているが、構ってる暇はない。今は後輩の洗脳を解くのが先だ。おのれラーメン派め。ちよつと香ばしい匂いで食欲を唆ったり、多種多様なトッピングで視覚味覚嗅覚を刺激するからって、うどんに一途なアタシは惹かれないんだからね!

椅子にしがみついて離れない唯斗を、圧倒的女子力のもと引き剥がそうとしてたら――

「結城友奈、ただいま戻りましたー!!」

「同じく東郷、落とし物の搜索から帰還しました」

一仕事終えた友奈と東郷が戻ってきた。ちようど良い、二人にも唯斗をかめやまで連れて行くのを手伝って貰おう。

そう思った矢先――

部室内に三度目となる、不安を駆り立てるようなアラーム音が鳴り響いた。

「樹海化警報……」

東郷は緊張と不安がこもった声で呟いた。次の瞬間、視界は光に包まれた。光が引く頃には、三度目となる樹海化した世界。

前と同じ光景だ。

――でも、前と違うこともある。それはアタシ達だ。前は不安と緊張だけだった心、それが今はすこしだけ余裕があった。それは二度の勝利で自信がついたからだろう。慢心してる訳では無いけど、事実としてアタシ達は複数のバーテックス相手にも完勝している。誰一人として欠けずに、大きな怪我もない。

視界に映るのは、一体のバーテックスだ。

いける、今回も勝てる。それはきつと、強がりとか鼓舞じゃなくて、揺るぎない確信だった。でも、油断はできない。相手は未知の敵だ。これまでのバーテックスを考えると、このバーテックスにも何かしらの能力はあると考えて良い筈だ。

「――よし、みんな！やるわよ!!」

部長として、勇者のリーダーとして。一人も怪我なく戻させる義務がある。たとえ一体だけでも、慢心せずに対処しよう。

(まずは東郷に狙撃してもらって様子見ね。その後は――)

「ヒヤッハアアアアッ!!その命置いてくれやア!!」

「せ、世紀末!?!」

犬吠埼姉妹の声が揃った。某モヒカンのオニーサン達の如く、唯斗は駆け出す。いつの間にか勇者にも変身した。さつきまでは不機嫌というか…珍しく大人しかったのに、それがどうしたら世紀末のモヒカン風に仕上がるのだろうか。

「ちよっ、唯斗君!?!作戦とか考えて――」

「東郷さん！唯斗くん、もう遠くに行っちゃったよ!?!は、早く追いかけないと…!!」

誰だ、あんな馬鹿を勇者にしたのは。

神樹様は何を考えているのか、あんな奇人というか、変人を勇者にするなんて…しかも、変に強いから止めようにも止められない。

「あ、お姉ちゃん。バーテックスに穴あいた!!」

「そう、穴ね。バーテックスに穴があいたのね…穴が空いたの!」

樹の指さす方向には、ど真ん中にでかい穴を空けられたバーテックスがゆっくりと倒れる光景が広がっていた。…前々からピコピコハンマーの威力は知っていたけど、まさかここまでとは。

「わあ、わたしの勇者パンチでもできるかな? 助走を付ければ、多分いける!!」

「友奈ちゃん、別に競うことじゃないから」

友奈を宥める東郷。友奈なら本当にやってしまいそうだから怖い。まあ、多分アタシも武器を巨大化させて真つ二つにすることは出来ると思うけど。これが女子力だ。女子力のなせる技なのだ。

何度も説明してる通り、バーテックス退治は御魂の破壊しないと終わらない。だが、唯斗一人では御魂を出すことすら出来ない。仕方なく、アタシ達は唯斗の元に向かおうとしたら――

「……あれ? 唯斗先輩、ピコピコハンマー持ってない…?」

「えっ、どゆこと?」

樹の呟きが耳に入った。

確かに、唯斗の武器が手元には見当たらない。ん…? 冷静に考えたら、アイツあの場所からどうやってバーテックスに攻撃した? アタシ達よりはバーテックスに近いけど、どれだけ腕を伸ばしても唯斗はピコピコハンマーが届く位置には居ない。

まさか、あの馬鹿…ピコピコハンマーを投げたの!?!ピコピコハンマーなしだと樹よりも力弱いのに、あの馬鹿は本当に馬鹿だ。

「あーもう! 東郷、あの馬鹿を援護してちょうだい!」
「了解しました」

東郷は狙撃銃のスコップを覗き、標準を合わせる。あとはアタシ達が唯斗と共にバーテックスの近くに行つて、御魂を出してから壊すだ

け。そこでアタシの作戦は完結していた。

だから――

「ふ、風先輩……勇者と思われる女の子を発見しました！見知らぬ少女です！何かを唯斗君に向かって叫んでる模様!!あ、ただいま再生中のバーテックスを攻撃して……あ、御魂が出てきました！」

「情報量が多すぎるわ!!」

東郷からの報告は一瞬で理解出来る量ではなかった。

えっと、勇者っぽい奴がいて？でも見知らぬ……つまり、勇者部の部員じゃないの？んで、その少女が唯斗に向かって怒鳴りながらバーテックスに攻撃してると。そして御魂が出てきて……

「勇者と思しき少女が御魂を攻撃、破壊しました」

「……いつの間にか戦いが終わってる？」

友奈は、物足りなさそうな顔で呟いた。最近思っただけけど、友奈って意外と血の気が多い？徒手空拳……だかを習ってたって言うし、武闘家としても本能かもしれない。

その日、アタシ達は無意味に変身しただけだった。

ifルートく復讐の勇者く

轟音を掻き立て、射手座の矢が少年の胸を貫いた。

無常にも音を立てて割れるバリア。

心臓を貫かれて倒れる少年。数秒が経ち、残酷な状況を叩き付けられた皆の悲鳴と怒声が響く。勇者だった少年は倒れ、花弁を散らしながら変身が解けた。

残ったのは微動だにしない、讃州中学の制服に身を包んだ一般人――勇者は死んだ。命を手放し、勇者は一般人に戻った。彼が散々願ったことは、死を持って叶ったのだ。

全てのバーテックスを倒し、平和が訪れる。

――少女はそんな未来を想像していた。

だから、こんなのは知らない。もう動かない彼も、地面を濡らす黒い液体も、自分達を無視して前進を続ける敵も、残酷なまでに綺麗な散りゆく花卉も。

「ち、違う…嘘だっ！そんなわけない…だって、だって…だってだって、だって……ツツ!!」

否定したくても、言葉が浮かばない。

何が違うのか。誰が嘘なんてつくか。目の前の現状を受け入れられないだけだ。解っているのに、頭は認識を拒む。

苦しい。息ができない。

彼の胸から、紅黒いナニカが溢れる。現状を受け入れようとしなくても、それが全て無くなったら死ぬ、ということだけは理解出来た。必死に手で押えて、それでも止まらなくて。

指の間から、彼の命が零れる。熱い液体は徐々に冷えて、少女の涙と混ざり地面に滴る。

――その日、結城友奈は彼を失った。

もつと話そうと思ってた存在は、もう戻らない。また仲良かったあ

の時みたいに揶揄われることは無いし、部活をサボろうとする彼の手を引くことも叶わない。

「……………なんで？」

問いが生じた。

「……………ねえ、神樹様。どうして、唯斗くんは死んだの…？」

自分の信じてた神に問いかける。

「バーテックス…？バーテックスが……………ううん、違う…違う…違くないけど、全然違う…」

生まれて初めて、神への懐疑的な態度。本当に神樹様は正しいのか。信仰があれば、全てが上手くいくと考えていた。でも、死んだ。死んでしまった。

原因は？——彼を勇者にしたからだ。

勇者にしたのは？——神樹様だ。

なんで死んだ？——勇者になったからだ。

じゃあ、唯斗くんを殺したのは？

——神樹様だ——ッ！

「あつ……………」

友奈の中で、ナニカが砕けた。

——じゃあ、殺そう——

声が聞こえた。

染まる。純白の心は黒く染る。憎しみと“敵愾心”を上書きされてるのを感じる。花卉は枯れ、養分となる。そして育つのは『憎悪』の種。『復讐』の根。『憤怒』の葉。そして、『死』の花。

桜の花は一年に一度しか咲かない、すぐに散ってしまう。その儚さ故に『桜は短命』とも言ふ。では、その短き命を更に燃やしたら——一度、数分あれば事足りる。友奈はその数分のために、命を燃やす。ハツキリと解る。力を与えられてるんだ。

復讐の武器を、心の解放を、復讐の味を、与えられているんだ。彼を殺した神樹を殺すための武器を、動機を、感情を、力を、意志すらも――

友奈の髪は、ピンクから黒に染る。それはまるで、亡くした彼の髪色を受け継いだように。白と薄紅の衣装は黒と紅に染まり、拳には禍々しい籠手。それはもう、勇者ではない。勇者と称するには、邪悪すぎる。

「ゆ、友奈ちゃん…?」

場に駆けつけた東郷が声を洩らした。其れは親友ではなく、異様な化け物に恐れる眼だ。

「東郷さん、どうしてかな?」

問いかけた。

「どうして、唯斗くんは死んじやったのかな?」

憎き神への問いかけを、親友にもぶつけた。もしかしたら、罪を負う自分を助けてくれるかもしれない。手を伸ばして、止めてくれるかもしれない。

そんな希望も容易く打ち砕かれると知らずに。

「…分からない。私だって、分からないよ…!」

涙を流しながら、少女は語った。

その様子に、友奈は酷く呆れた。嘗ての親友は、こんなに人間臭い者だっただろうか。自分の道を照らしてくれた親友は、こんなにも弱々しく懦弱なニンゲンだっただろうか。

「私をもっと強ければ、唯斗君を守れた…! 私に勇気をくれた彼を、バーテックスに殺されずに済んだ!! 分からない…分からないけど、きつとこれは私の罪なんだ…!!」

「ううん、違うよ?」

「…友奈ちゃん?」

友奈は無表情で否定した。それは普段の彼女とは雰囲気の違いで、親友の東郷ですら本当に友奈かと疑った。でも、見た目も、喋るとききの癖も、その全てで構成されるのが友奈だった。

「全部、神樹様のせいだよ」

「っ!？」

違う。これは自分の知る親友では無い。変化——否、ベツモノと
なってしまったのだ。

「もしも唯斗くんが勇者じゃなかったら、死んでなかった。戦う力が
なければ、こんな危険な場所に送り込まれることもなかった。守ると
か守られるとか、そんなことじゃ足りないよ。神樹様はこんな樹海ミヅノに
唯斗くんを閉じ込めて、戦わせた!——ほら…そうだ、やっぱり元凶
は神樹様なんだね」

友奈は東郷に背を向けた。こんなところで、時間を潰してる暇はな
い。そう背で告げる友奈が向かう先は、バーテックスと同じだ。

「ま、まさか…神樹様を…っ!？」
「うん」

小さく、それでも確かな肯定。

バーテックスに視線を向けると、泣きながら怒り狂い、バーテック
スを攻撃する風の姿。彼女もまた、唯斗の死を否定したくて、それ
もできなかつたのだろう。現実を見たくないから、バーテックスに怒
りをぶつける。それが…否、それしか彼女には出来ないから。

離れた位置には、座り込む樹の姿。その格好は見慣れた制服だっ
た。きつと、戦う意思を無くした彼女に、神樹は力を与えなくなつた
のだろう。虚ろな目からは涙が止めどなく溢れ、言葉は一つもない。
それは絶望の現れだった。

「私が、終わらせないとね」

友奈は一言呟くと、地を蹴って飛び出した。

東郷の声はもう、届くことは無い。そして迷いを抱える東郷に、友
奈を撃つてまで止めることは出来なかつた。

勇者を辞めた少女は駆ける。

重い。体が鉛のように重いのに、力もスピードも勇者のとき以上
だ。誰が与えた力なのか、それは分からない。でも、もう友奈は止ま
れない。与えられた武器を感情に任せて振るうしか、残された選択肢

はない。

戦う風の横を猛スピードで通り抜け、向かう先には復讐の対象。拳を後ろに引き、力を溜める。昨日までは『勇者パンチ』と名付けていた拳を、友奈は別の言葉で振り抜いた。

「しね、死んじやえ」

黒い閃光が、神樹にぶつかる度に瞬く。一回殴るごとに、樹海化した世界が揺れる。揺れて、崩れて、暗くなる。

「死ね」

人生で、何度この言葉を口にしたか。記憶には無いが、幼い頃に喧嘩とかして言ったことはあると思う。だが、きっとそこには籠ってなかっただろう、無常で純粹な『殺意』は。

「死ね、死ね、死ね、死ね——しんじやえ」

殺意を込める度に両の拳を振り抜く。少しずつ神樹が崩れていく。拳を血で染めながらも、それだけは理解出来た。

微かに零れた涙が、結城友奈の最後の涙になった——

——復讐の勇者——

友奈が神樹様に抱いた懷疑を、天の神に利用された結果。髪は亡き彼を連想させるように黒く染まり、薄紅と白の勇者衣装は紅と黒で染まった。これは天の神による洗脳ではなく、単純な感情の増長だ。少なからず、唯斗の死を通して友奈にも神樹様を恨む気持ちがあったということだ。それを増長させ、友奈が神樹様の力を拒んだ隙をみて天の神が力を与えた。もう友奈は、壊れた人形のように拳を振り抜くことしか出来ない。

○○○○○○○○

誰よりも神樹様を信じていた。身を犠牲にしても守り、その対価としてみんなの笑顔があると信じていた。でも裏切られた。戦場では死が有り得る、そんなことを理解して受け入れるほど、結城友奈は熟れてない。大事な人の死は、いとも容易く信仰を裏返した。死ぬのが自分なら良かった、でも死んだのは他でもない彼。仲間を思う故の

信仰は、もう崩れ去った。

35日目 / 夏凜の出会いと憤怒

×月×日

今日は、勇者が一人増えた。

昨日のバーテックス戦にいた赤い服を着てた勇者だ。名前は三好夏凜、ツインテールが特徴の女子だった。俺の個人的な考えになるが、ツインテールにはあざとい奴かツンデレしかいないと思う。

そして三好は後者だった。

ツンデレ、個人的には結構嫌いじゃない。ツンデレは常識人が前提であるイメージがあるんだ。デレがあっても、常識があるから人前ではデレないし、常識がある故に羞恥を理解しており、それがツンに繋がる。素晴らしいサイクルだ。人類皆、ツンデレになれば世界平和目前なのに。

朝のホームルームで転校生として紹介されたとき、何故か睨まれた。それは良しとして、その後何故か俺の前の席に来て、屋上に来いと呼び出された。全くもって一切合切ナノ単位微塵も告白だなんて思っていない。ホントだ、唯斗くんは嘘つかない。ただ、呼び出しを無視するのは紳士として許されざる行為だ。だから素直に応じた。その結果、屋上で『勘違いしないでちょうだい!』というツンデレ故の名言を頂きました。

三好曰く、昨日のバーテックスは一人でも余裕だったらしい。聞いてもないのに三好が勝手に語り出したんだ。決して俺から煽ったりしたわけじゃない。だから謙虚で有名な唯斗くんは正直且つ謙虚なコメントをした。そしたらキレた。うん、訳が分からない。

まあ、そんなことは置いとこう。何故なら寛大なことで有名な唯斗くんだからだ。

あのツンデレさん、実は優等生だった。

優等生とか模範生って言うよりかは、猫かぶりの方がしっくりきたけど。だって俺にだけあからさまに態度悪かった。すれ違うだけで威嚇してくるのだ、怖い通り越して呆れた。ツンデレさんは何処かに

デレを忘れてきたらしい。

放課後になつたら、ツンデレは部室に来てた。そして俺は今日も友奈に拉致られて部室の奥で縮こまって座っていた。イカの姿フライと樹だけが癒しだ。だって、そもそも勇者部は無駄にメンツが濃いのだ。神樹様大好きガールの結城友奈、自国と友奈大好きガールの東郷美森、最近は常識人疑惑が出てきた犬吠崎風先輩。この3人が兎に角濃いのだ。だが、それに対抗するのは俺と樹、三好の常識人トリオだった。

それでも俺達常識人トリオが劣勢だ。理由は一つ、三好夏凜がまだ未知数だからだ。

常識人の皮を被った変人なんて溢れるほどいる。例えば友奈、彼女は其の良い例だ。性格には難なし、寧ろ好ましい。運動神経抜群で、人を思いやることも出来る凄腕だ。だがたった一つ、強すぎる信仰心故に常識を逸した。

つまり、三好がツンデレの皮を被ったヤンデレの可能性もあるという話だ。もしかしたらメンヘラかもしれないし、サイコパスかもしれない。だがクーデレ、お前はダメだ。三好ってクールだけど、それも猫かぶりの結果だし。クールな奴はすれ違う度に威嚇しない。

そんな二人目の常識人(仮)な三好だが、実は大赦から派遣された勇者らしい。派遣勇者って…無駄に長々しいライトノベルのタイトルに入っているような単語だ。

その派遣勇者さん、意外と大事な情報をポロポロと落としてくれた。中にはどうでも良い情報もあったけど。

淡々と聞いていた中で、俺が最も大事だと思った情報をここに書いておこう。

——大赦開発の勇者システム『満開』

なんか、使えば使うほど強くなるらしい。なにその、インフレが進みすぎたソシヤゲの最強キャラが持つてそんな技…これ以上ピコさ

んを強化して、世界でも滅ぼすつもりだろうか。

そんなに強いシステムなら、なんで先代の勇者は――

「……あれ？」

日記を書く手が止まった。

なんで俺は、先代の勇者がいるなんて思った？あまりにも自然に、勇者に先代がいると思ひ込んで日記に書こうとしていた。

「…勇者に先代がいるなんて、聞いたことない…よな？なら、なんで？」

そもそも、俺は勇者についてそこまで興味は持ってなかった筈だ。それこそ、俺よりもよっぽど勇者に詳しい風先輩や三好に『勇者』について聞いた事なんてない。でも、疑問だけが残った。俺の――郡唯斗の中で何かが矛盾している。興味はないのに、『知っている』。妄想の類か、現像と夢がごっちゃになったか。それとも漫画や映画に影響されたのだろうか。

分からない。

でも、何も考えずに日記に書いた『先代の勇者』という言葉だけが、異様に頭へこびり付く。

先代？俺達の前にも勇者がいたのか？

でも、それこそ有り得ない。

もしも先代がいたとして、それなら何故今はいない？三好が言うには、勇者は満開を繰り返すことで強くなり続ける。それを鵜呑みにするなら――つまり、最後には最強の勇者が出来上がるはずだ。だって、バーテックスがどれだけ強くても、こっちは満開をし続けるだけで良いのだ。ゲームでバフを重ねてから敵を殴るのに似てる。満開ができるであろう勇者が最初に考えつくのは、自分がバーテックスと安全に戦えるほど『満開』を重ねることと、それまで戦場で生き延びる術だ。

もしかしたら、『満開』は俺が思ってるバフとは違うのかもしれない。最初に考えつくのは、満開による強化にも限界があること。確かに強くなるが、最終的に辿り着くのは最強とは言い難い程度の強化。

次に思い付くのはデメリットがあること。ゲームのようにMPやそれに似た何かを消費する、一度使うと暫く動けなくなる、使う度に代償がある、攻撃力を強化する代わりに防御力を下げる——デメリットなんて幾らでも思いつく。

「……はあ、考えても分かんない」

公式の知らない問題を解こうとしても、時間の無駄だ。答えはあっても、辿り着くまでの道を知らない。それがどうしようもなく、もどかしい。

結局、『先代の勇者』とは俺の妄想の産物だったのだろう。

さつき日記に書いた文章を消して、また書き直す。

そんなに強いシステムなら、なんで先代の勇者は

大事なことは書いたので、その後について軽く書いておこう。

次の日曜日——つまりは明後日だが、知らぬ間に子供会のレクリエーションに参加することになった。いや、三好が初耳なのは当たり前だ。だって友奈によって今日から部活に強制参加させられたんだし。でも、俺は？俺、本当に初耳だったんだけど。

だけど、今日の俺は頭が冴えてたんだと思う。

俺は敢えて押し黙った。ここで初耳だとか言ったら、風先輩から怒られそう。『は……？アンタ、話聞いてなかったの？』とか言われるのが目に浮かぶ。

哀れな三好は、友奈の押しに負けて参加することになった。ようこそ同類、共に悲しみを分かち合おう。友好の証として、三好の鞆には

イカの姿フライを大量に詰めといた。あと、おまけでわさびのり太郎も3ダースほど詰めといた。

こうして、また俺の休日は潰れるらしい。

早く勇者部を辞めたいよ。

明日も晴ればいいなと思いました。

私、三好夏凜にとって郡唯斗は：理解し難い存在だ。

初対面は昨日のバーテックスと戦つてるとき。いや、あれは戦つて
るだなんて言えない。郡唯斗がバーテックスに、攻撃できなくなるま
でのダメージを与えた。そして私は、反撃もできないバーテックスの
御魂を一方的に出して破壊しただけ。つまり、私は郡唯斗のおこぼれ
に与つただけだ。

——それを私のプライドは許さなかった。

おこぼれ？助けられた？

完成型勇者として、こんなザマを許せるはずがない。凡人の何十倍
も鍛錬を積んで、他の勇者のデータを元に調節もして。今の勇者の中
では、一番強い自信があった。

でも、不覚にも郡唯斗の攻撃を見て絶句してしまった。一撃でバー
テックスに大穴をあけ、戦闘不能にしたイレギュラーの男勇者。一瞬
でも敵わないと感じてしまった自分自身に嫌気がさした。

大赦内でも有名な彼の『家系』を知る身としては、決して弱いとは
考えていなかった。郡唯斗は異例な存在だが、その血筋と適性に関し
てだけは自身よりも優れていると判っていた。

——だが、それでも努力をして勝ち上がったのは私だ。

仲間を：いや、ライバル達を蹴落としてでも手に入れた『力』。血を
吐く思いで剣を振るって、やっと認められた『資格』。それが才能なん
かに劣るだなんて、有り得て良いはずがない。

だからこそ、私は思わずその男に叫んだ。手柄をとるな、完成型勇
者の私なら余裕だった。きつとそんなことを叫んでいたと思う。

澄まし顔で聞き流されて、怒りさえ湧いてきていた。八つ当たりのようにバーテックスの御魂を破壊したが、初戦闘での勝利は味気がない。この譲られたと言っても過言ではない勝利に、私は苦々しい思いしか湧かなかった。

そして今日、私は讃州中学に転校してきた。

今の勇者達が通ってる中学校だ。大赦は他の勇者と協力してバーテックスを打ち倒せと命令を下してきた。必要性を感じない、と言ったら嘘になる。自信はあるが、バーテックスは未知だ。未知に対してはどれだけ備えても憂いが晴れないものだ。微力でも、無いよりはマシだ。

「今日から皆さんのクラスメイトになる、三好夏凜さんです」

ホームルームで、担任から簡単な紹介をされる。私もそれと大差ない自己紹介をして、パチパチとまばらな拍手を送られる。

ホームルームが終わると同時にクラスメイトに囲まれるが、無難な受け答えでなんとか抜け出した。そして、目的の人物の机の前に立つ。——郡唯斗だ。

「昼休み、屋上に来なさい」

簡易的に目的だけを告げた。私のプライドを傷つけた彼に、何か一言を言ってやらないと気が済まなかったのだ。でも人前で言える筈がない。言わずもだが、勇者について一般人に情報を漏らすようなことは許されない。

郡唯斗はキョトンとした後に、

「ほほう、うんうん…なるほどね。了解」

と返した。妙な物知り顔が印象に残った。それは私の考えを見透かしているような、それでいて的外れなことを考えられてるような、何とも形容し難い表情だった。

淡々と時間が流れ、約束をした昼休みになった。まだ名前を覚えたての女子達からご飯に誘われたが、断った。用事があるのも理由の一

つだが、一番の理由は私自身、この学校で誰かと馴れ合う気はさらさらでないからだった。

チラリと郡唯斗の席を見ると、彼は既にいなかった。きっと先に屋上へ向かったのだろう。待たせるのも癪だし、私も早く向かおう。

午前のうちに校舎内の構造は大体覚えたので、屋上までは難なくたどり着いた。ドアを開けて見渡すと、郡唯斗は手すりに背を預けながら、片手ではスマートフォンを操作していた。そして此方に気が付いたのか、スマホをしまい私の方へゆつくりと歩いてきた。

「待たせたかしら？」

「いや、今来たところ」

「そう。ならいいわ」

郡唯斗の澄まし顔を見ると、また昨日の鬱憤が昂じてきた。実力は認めてなくもないが、やはり私の方が上だ。ちよつと前まで一般人だった彼よりも、ずっと鍛錬を積んできた私が劣るなんて、あつてはならないのだから。

「最初に言っておくわ」

「…うん？」

「勘違いしないでちょうだい!!」

「…うん？」

「郡唯斗、あんたが居なくなつて昨日のバーテックスは倒せた！私一人だね!! 確かに郡唯斗、あんたの実力は認める。あんなことが出来るなんて予想外だったわよ。でも、だからって勘違いしないで！あんたより私の方が上よ!!」

「…うん？」

…こいつは、舐めているのだろうか。いや、煽つてるのだろうか。私の言うこと全部に『…うん？』で返すなんて、巫山戯てると思えない。

「あーうん、そうだね。うんうん、三好はすごく強いねー。いや、まだ凄いところは見れてないけど、俺は確信したね。三好はやればできる子だってね。なんて言うか…雰囲気って言うのか？俺みたいな一般

人とは違うってのが伝わる気がしなくも無いかな？」

こ、コイツツ!!

棒読みの褒め言葉に、我儘な子供を宥めるような根拠の無い言い回し。間違いない、馬鹿にされてる!! 完成型勇者の私が、ちよつと前まで一般人だった奴にナメられてるんだ!

「じ、上等じゃない! 次の戦いを楽しみにしてなさい!! 格の違いってやつを見せつけてやるわ!!」

「あつ、はい。期待してるよ」

「ぐぬぬ〜!」

何が『期待してる』だ! なんで上から目線なんだ!! からかったり、巫山戯たりしてる様子はない分、尚のことタチが悪い。

——その日から、夏凜の鍛錬は質と量が増した。

これまでは、ひたすらに強くなることを目指した。でも今は、あの男を圧倒できるほどの力を求めた。目指す方向は同じでも、明確な目標が出来た彼女を、誰が侮れようか。

「……………はあ?」

あと何故か、家に帰って鞆を開けたら大量のイカの姿フライとわさびのり太郎が詰まっていた。

37日目 / 憤怒と困惑

×月×日

我、偉業を達成した也。

ついに、俺は今世紀最大の偉業を成し遂げたのだ。冷静沈着な唯斗くんじゃなければ、この日記を書きながら発狂して喜びを表していたところだ。

☒ 部活をサボった ☒
これが俺の偉業だ。

入部してから最近に至るまで、俺は毎日部室への拉致からの強制無賃労働を強いられていた。俺は宛ら灰被り姫のように働いていたのだ。逃げれば友奈に追われて拉致られ、隠れれば東郷の謎感知能力で見つかり、最後には風先輩の自称ありがたいお話という名の説教でオチを作られる。

そんな俺が何故部活動をサボれたのか。

それは三好夏凜のおかげだ。そう、一昨日転校してきたツンデレツインテール、略してT・Tの三好だ。これからは親しみと信頼を込めてT・T三好と呼称することにした。

今日の強制労働は、幼き鬼共のサンドバック役だった。またの名を子供会のレクリエーションだ。子供たちは遠慮なく殴ったり蹴ったりしてくるので、地味に痛いのだ。それでやり返したら問題になるというのだから、世知辛い世の中だ。

俺は憂鬱な気分で部室へと向かっていた。

誰もいない校舎に俺の靴音だけが響き、虚しい気持ちになった。いつになったら勇者部を辞められるのだろうか。まだ来ないバーテックスに思いを馳せながら部室のドアを開いた。

なんとそこには、T・T三好が居た。誰も居ない薄暗い部室で、ブツブツと独り言を呟くT・T三好が居たのだ。レクリエーションには

参加しないと声を大にしていたT・Tは誰よりも早く部室に到着していたのだ。なんだか、健気なT・T三好を見ていると心が温まった。何気ない挨拶をしたら、T・T三好がいきなり怒鳴ってきた。原因は一昨日、T・T三好の鞆に大量のイカの姿フライとわさびのり太郎を詰めたとらしい。

——賢い俺はすぐに察した。

T・T三好め、実は焼肉さん太郎の方が好みだったのだろう。怒鳴るくらいだから、きっと相当の焼肉さん太郎ファンだ。このガチ勢っぷりは、製作工場に見学に行つて出来たての焼肉さん太郎を食べるレベルだ。

俺は慄きながら、ちようど鞆に詰めてた焼肉さん太郎5ダース、合計数60を渡そうとした。

だがしかし、なんとタイミングの悪いことか。俺とT・T三好の携帯には同時に電話が来た。三好には狂人友奈から、俺には変人東郷からだった。瞬時に着信拒否したら、秒で掛け直された。俺は仕方なく、手元が滑つたという言い訳を盾に電話に出た。

そして、俺とT・Tは衝撃の真実を聞かされた。

——集合場所の変更。

事前に知らされていたそれを、俺は完全に忘れていた。ていうか、T・T三好には俺が伝える予定だったので、三好は単なる巻き添えでしかなかった。これはもう、時代遅れのもてへぺろで乗り切るしかなかった。

混乱した俺は、思わず電話を切った。そして手が勝手にスマホの電源を落とした。手が勝手にやったのなら仕方がない、敢えて再度電源を入れる必要も無いだろう。そう決め込んだ俺は、本来の集合場所に向かおうとした。

——そこでT・T三好は、神にも等しい一言を放った。

『帰る』

驚いた。青天の霹靂とはこのことだろう。さすがT・Tの異名を持つ女だ、俺にない発想を軽々と出してくる。俺の中に衝撃が走り、三好の言葉が太陽よりも輝いて感じられた。

感謝のあまり、俺はT・T三好に抱きついた。邪な考えなんて全く無く、純粋な親愛と感謝だけを込めた欧米風ハグだった。顔を真っ赤にして暴れるT・T三好が、愛いやつを越えて神々しさすら感じられた。

その後、何故かT・T三好と鍛錬することになった。

うん、何でだろう？日記に書いてるだけだから自問にしかならないが、本当に謎だった。ただ来た道に戻って家に帰るだけなのに、何でいつの間にか浜辺で木刀を持つことになったのだろうか。

結局、頭に疑問符を浮かべながらも小鬼達のサンドバックよりはマシだという妥協的な考えに落ち着いた。

木刀を持つと、何だか不思議な気分になった。

懐かしいような、切ないような。既視感とでも言えば良いのだろうか。木刀は初めて持つのだが、不思議と振り方は頭のどこかで理解していた。左手を軸にして、右手は軽く添える。両手に力を入れて振ったら、刃先がブレてしまうからだ。

何となく振り方や受け方は分かるが、友人がやっていた剣道とは動きが違う気がした。剣道は剣先を先に相手に届かせる為に腕を伸ばすのだが、俺の振り方は身体ごと木刀を振り、相手の防御ごと斬る感じだ。

俺は気がついてしまった。

そう、自分の才能に！

初めて木刀を持つ俺が毎日鍛錬してる三好とまともに打ち合えていたのだ。自分の鬼才が恐ろしい。いや、まあ。疲れてきたら三好にボコられたけど。俺と三好では体力が違いすぎた。

夕方になり、鍛錬は終わった。痛む体で帰路に着くと、奴らに見つかってしまった。そうだ、勇者部御一行だ。他人のフリをしたり、記

憶を失った演技をしたが、やはり無理があつた。めちやくちや怒られた、とだけ記しておこう。

その後、拉致されて三好の家に行った。

今日は三好の誕生日だったらしい。ちょうど良いので、誕プレとして鞆に詰めてた5ダースの焼肉さん太郎を贈呈した。焼肉さん太郎ガチ勢のT・T三好は、眉を吊り上げて、またか！と怒鳴りながら喜んでいた。

明日も良い日になればいいなと思いました。

私、三好夏凜は完成型勇者だ。

バーテックスを殲滅するために派遣され、腑抜けた勇者部に代わって敵を討つ。それが私の目的で、ここに居る理由だ。

——なのに…

「…遅い！」

全然来ない。今日は子供会のレクリエーションをやるから来い、と言うので部室に来たのだが…本当に腑抜けてる奴らだ。時間前行動は、勇者とか以前の常識だ。集合時間まで、あと5分を切ったのに部室には誰も居ない。

「あーもう、時間にルーズすぎるわ！人を待たせて、一体何を考えてるのよ…！」

独り言が漏れてしまったが、愚痴くらいは言つてやる。これじゃあ、早めに来た私が馬鹿みたいだ。

一人でブツブツと文句を言つてると、部室のドアが開いた。文句を言つてやろうと振り返ると、そこには郡唯斗が居た。独り言を言つてるところを見られたからか、少しだけ気まずい時間が流れた。

「おはよ、三好。来るの早いな」

「あー、うん。おはよ…じゃなくて！」

コイツの顔を見て思い出した。それは一昨日の出来事、家に帰って鞆を開いたら、駄菓子的大量に詰まっていた珍事件だ。部室でイカの姿フライをボリボリと食べてるところを見たし、犯人は郡唯斗しかいな

い。

「郡唯斗！あんた、何で人の鞆に駄菓子詰め込んだのよ!!」

「友好の証的な？あれ、三好は知らないのか？最近の若者は常日頃からイカの姿フライとわさびのり太郎、焼肉さん太郎を人の鞆に忍ばせてるんだよ」

「そんなわけあるか!!」

「……やっぱり、三好は焼肉さん太郎派だったか」

何か不穏なことが聞こえたが、きつと気の所為だ。そうでもない
と、ストレスで郡唯斗に殴り掛かりそうになる。

「…郡唯斗、あんた以外は？」

「知らんよ。そのうち来るでしょ。案外、全員でパン啜えながら走ってきたりしてな。まあ、東郷が寝坊とか有り得ないけど」

確かに、東郷美森は勇者部の中でも比較的マシな部類だと思う。そんなことを呟いたら、郡唯斗に哀れみに近い感情が込められた視線を向けられた。解せないというか、少し腹が立った。

暫く雑談してから、急に郡唯斗が自分の鞆を漁り始めた。鞆の端から溢れ落ちてる大量の焼肉さん太郎は、きつと見間違いだ。

——マイフアアアアアア!!マイフアアアアア!!

「っ!?!な、なんの音!?!」

「あ、東郷からの着信だ。東郷のはシューベルトの魔王にしてるんだよ。わかりやすいだろ?」

「心臓に悪いわ!?!ってか、何で自然に着信拒否してるのよ!?!」

「あーうん、指が滑った。うんうん、指が滑ったのなら仕方がない。たとえ電話に出れなくても、仕方なしと言うやつだ」

絶対に嘘だ。あからさまだし、棒読みだ。

「——って、私にも電話来てるし……」

シューベルトの魔王に気を取られて気が付かなかった。相手は結城友奈…私を勇者部に巻き込んだやつだ。まだ詳しくは知らないが、あまり得意なタイプではない。

「もしもし…」

『あつ、夏凜ちゃん！私だよ！友奈だよ!!』

「ちよつ、声デカイっ！耳壊れるわよ!!」

『あはは、ごめんね。夏凜ちゃん、今どこに居るの?』

「何処つて、部屋に決まってるじゃない。あんた達、遅すぎるわよ!」

『えつとね…今日の集合場所、変更になったんだよね。唯斗くんから聞いてないかな?』

「は?郡唯斗から…?」

郡唯斗の方を向くと、目が合った。そして、すぐに目を逸らされた。

『夏凜ちゃんには唯斗くんから伝えるって話だったんだけど——』

様子を見る限り、その伝える本人が忘れていたようだ。今更気まずそうに目を逸らされても手遅れだ。電話を切って、荷物をまとめた。

なんだか、急に馬鹿らしくなった。私は、何でここに居るんだろう?ボランティア?子供会のレクリエーション?——違うだろ、私はそんなことのために派遣されたのではない。さっきまで浮かれてた自分の愚かさに、反吐が出る。

慌てて飛び出そうとする郡唯斗に一言だけ告げてから帰ろう。

「帰る」

「えっ…」

郡唯斗は足を止めた。

そんなに意外だっただろうか。私はここ数日、勇者部には冷たい態度しかとってない。そうだ、今日だったただの気まぐれで来ただけだ。

——だから、別にガツカリだなんて…

「三好…!」

「みやあつ!」

急に抱きつかれた。咄嗟のことで変な声が出たが、そんなことはどうでもいい。

「なっ!ななななんのつもりよっ!」

「オレ、オマエ、ソンケイ!!」

「意味わかんないわよ!」

離そうとしても離れない。ロマンチックさの欠けらも無いハグは、私を更なる混乱へと導いた。

顔が熱い、心臓が煩い、息が苦しい。

——でも、久しぶりだった。

人の温もりなんて、久しく触れてない。ただ訓練をして、栄養を補給してから寝る。軽く思い出せる程度ではこんな記憶しかない。だから、たとえ理解不能でも——郡唯斗は温かった。

「つて、はーなーれーろー!!」

「ん？ああ、ごめん。感動のあまり。まあ、欧米では挨拶みたいなものだし、問題ないな」

勝手に自己完結した。謝るところか、こつちが口を挟む隙もなく自己完結した。イラつきを通り越して呆れてくる。よくこんな変人が、勇者になれたものだ。

「——あー、もうーやっぱり腹立ってきた!!郡唯斗!あんたのせいで暇になったんだし、少し付き合いなさい!!」

——せめて、ストレス発散くらいはしてやる。

鍛錬とは――

潮風に吹かれながら、一組の男女は向かい合う。

舞台が海や砂浜だと言うのに、片や木刀を突きつけて威圧する少女。片や頭に疑問符を浮かべて首を傾げる少年。ロマンチックの欠片もなく、だからと言って殺伐ともしてない。

「勝負よ！」

「……なんで？」

訂正、片方は殺伐としていた。それも少年の呆けた表情のせいでもミカル風味を持つてしまう。

だが、それも仕方が無いと言えよう。何故ならこの少年、本当に何も説明されてないのだ。砂浜に連れてこられて、冒頭のように『勝負よ！』と挑まれただけの一般市民で、自称平和主義な常識人。後半については諸説ある、とだけ言っておこう。俗説も漁れば真実、だが真実が正解だとは限らない。深いようで浅すぎるお話だ。

相変わらず首を傾げる郡少年、そろそろ鼻にでも転職するつもりなのだろうか。そして此方も相変わらず木刀を突きつけ続ける少女三好、少しだけ腕がプルプルと震え始めてるのはご愛嬌だ。

「アンタに拒否権があると思う？」

「拒否権って、万人に与えられた権利だと思う。だから拒否する。っ
て言うか、素人相手にマウント取って三好は楽しめるの？ いや、楽し
いから素人をボコるのか…」

「ちよっ、変なこと言わないで！何が素人よ！あんた、勇者なんだし鍛
錬くらいしてるでしょ!？」

「ふっ、鍛錬…か」

不敵に笑った。無かし有意義な鍛錬をしてきたのだろうと、少女の期待は膨らんだ。鍛錬は、相手がいいた方が効率的だ。より実践的な鍛錬を積むには、必ず相手を要するのだ。一人では素振りやイメージトレーニングが限界だった。こんな変人でも、鍛錬の相手になるのなら大歓迎だ。

「三好。鍛錬って、何処からなんだろうな」

「は？」

「ランニングは間違いなく鍛錬だろ？走って脚を鍛えてるし。ならウォーキングは？もしもウォーキングが鍛錬に含まれるなら、毎朝学校まで歩いて、夕方になると学校から家まで歩く俺は宛ら鍛錬お化けだ。セイレーンならぬ鍛レーンだ。それどころか、呼吸して肺を鍛え続けているし、ご飯を食べるのは腕と顎、胃酸の強化をもしてるんじゃないか？——はっ……！よもや俺は、全身凶器なんじゃないだろうか!？」

簡単に言えば、鍛錬なんて何一つしてないということだ。してるのは一般人と同じく歩いて食べることだけ。意味もなく長々しく語るものだから、少女も少年の意図が掴めない現状。

「——まあ、いいわ。早速やるわよ!!」

「……話聞いてた？」

聞いてはいた。間違いなく、一言も聞き漏らしなく聞いていた。問題があるとしたら、それを理解できなかった点だけだろう。並大抵な人よりも頭は良いとされる少女ですら、文字を重ねるだけの意味の無い会話は無益に終わった。考えても見れば、少年との会話には何一つ必要な言葉はなかったのだから、混乱もする。

「ほら、あんたの木刀よ」

「問答無用っすか？…せめて、素振りくらいささせてよ。もしかしたら、俺の天才的な才能が目覚めて三好を圧倒するかもしれないだろう？」

もし才能が目覚めたとしても、彼が勇者になったときの武器はピコピコハンマーだ。剣など振っても大して意味は無い。ピコピコハンマーが軽いぶん、筋力だつて求められてないのだから。

それでも剣豪に憧れを抱くのは、年頃男子としては仕方無い話だ。男子は必ず一度は通る道なのだから。家の中でも棒状のものを振り回して、親に叱られるまでが中学生男子のテンプレート。そこで現実に帰るか厨二病へと昇華させるかは、人それぞれだ。

少年は木刀を受け取り、適当に振ってみる。

「っ…………？」

「なによ、変な表情浮かべて。問題でもあった？」

「…さあ？よく分かんないな」

彼の表情は、複数の感情が混ざりあつて複雑なものへとなつていた。身に覚えのない既視感に、安堵のようなもの。どこか切なさも覚える表情だった。何よりも大きいのは、それら全てに身に覚えがないが為の困惑だ。

「…………ふむ」

数回だけ素振りして、少年は小さく息をついた。

「結構様になつてるじゃない。何が素人よ」

「ふっ、己の才能が恐ろしいぜ…」

それはそれは、ウザすぎる少年だった。彼の中で様々な感情が渦巻いた結果、何故か才能という答えに到達したらしい。才能の有無はこの際置いといて、一つだけ言えるのはウザすぎるということだけだった。ドヤ顔を晒して、恰も思慮深い俺、と言わんばかりに腕を組んで黄昏れる彼は少女にとつて滑稽にしか映らなかつた。

「じゃあ、始めるわよ!!」

両手に木刀を一本ずつ持ち、少女は地を蹴った。それは猛スピードと称しても違和感のないレベルの速さだが、足元が砂浜でなければ、更に爆発的なスピードを出せる。それが三好夏凜の、これまでの鍛錬が実つた結果だ。

「——待って!!」

「なっ!!?…次は何よ!!」

折角テンションも上がってきたというのに、唯斗は手を前に出して夏凜を停止させた。あまりにもシリアスな雰囲気を纏った声に、夏凜は思わず足を止める。

夏凜は非難するような視線を向けるが、唯斗の反応はない。彼は真剣な面持ちで——

「ズルいと思う」

「……………はあ？」

「三好の二刀流、ズルいと思うんだ。ほら、二刀流ってメリットが多そうじゃん。手数が増えるとか、片方の武器が無くなっても大丈夫だとか。——そしてなにより、カッコイイし。二刀流は男子の憧れなんだよー!」

「……つまり、アンタも二刀流やりたいうってこと?」

「然り然り!!」

「いいけど、二刀流できるの?言っとくけど、見様見真似で出来ることじゃないわよ」

夏凜は忠告するように告げた。だが考えても見れば、彼は自信満々に二刀流をすると言い放ったのだ。あの自信が嘘でなければ、少なかれ経験はある筈だ。

——すると、少年は無邪気に笑いながら口を開いた。

「為せば成るんじゃないやね?いや、二刀流の経験がないどころか、木刀を持つのも初めてな俺だよ?片手だけで持ってたなら、振っただけで木刀が手からサヨナラするつての。——でも!きつと為せば成る!!」

「なるわけないでしょ!?!」

為すだけで成るのならば、この世の中に努力なんていう言葉無い。為し続けるから、結果的に成るのだ。それは努力を続けた夏凜だからこそ、言えることだ。

「ぐだぐだ言ってるんで始めるわよ!!」

「ぐぬぬ…」

駄々でも捏ねそうな少年に、少女は問答無用で斬りかかった。それに対して唯斗は、素っ頓狂な声を出しながらも避ける。それはまるで、ギャグシーンのようだったと後に夏凜は語った。

「はあ!!」

夏凜は右手を後方へ引き、穿つように突きを放つ。大振りな動作なだけに、その威力も大きい。だが大振り故に、攻撃が来るのもわかりやすい。唯斗は突きを避けてから、両手で持った木刀で袈裟斬りを繰り出した。

だがそれを、夏凜はもう片手の木刀で逸らす。

敢えて初手で大振りな攻撃を出したのも、相手はその隙をついてくることを想定してのものだった。二刀流の利点は、攻撃手段の多様さだ。夏凜のやったように、フェイントではなく攻撃自体を囿にして、もう片手で攻撃することも可能なのだ。

「わっ!?!」

夏凜は唯斗の木刀を逸らしつつ横に一回転する。そのまま遠心力を利用して、唯斗の木刀を弾いた。手からは離れなかったものの、唯斗の腕は伸びきっており、夏凜の繰り出す横薙ぎを防ぐ手段はない。

無いのだが――

「あっつぶな!?!」

「あーもう! 避けるんじゃないわよ!!」

「黙って打たれると!?!」

何が素人だ、と夏凜は心の中で毒づいた。唯斗が達人並に強いわけでもないし、太刀筋だって素人よりはマシ程度。一撃の威力はありそうなのだが、当たらなければなんの意味もない。

夏凜の相手ではない――

筈なのだが、当たらない。夏凜の攻撃は悉く避けられる。唯斗の繰り出す攻撃とは違い、夏凜のは鍛え抜いたものだ。対バーテックスだけではなく、実際に対人戦で身に付けた技術なのだ。木刀で受けられたり、まぐれで躲される程度なら問題は無い。だが、唯斗は一切防いでいない。すべての攻撃を、掠りもせずに避けているのだ。

「ふっ!?!はあ!!」

左手で刺突しながら、避けられたところに右手の木刀で下段から上段へ、唯斗の木刀を叩き上げる。これで出来た隙を、袈裟斬りでつくだのだが――

「なっ!?!」

唯斗は後方に、倒れるように下がった。夏凜の木刀が通過したところで、唯斗は左脚を後ろへ引き仆れ込む身体を支える。あまりにも自然な動作に、夏凜は追撃を忘れ啞然とする。

驚くべきは、反射神経だ。

夏凜の技は、一つ一つの技を繋げて出している。一つの技で終わる

のではなく、そこからまた次の技を出す。言わば劍舞にも近いだろう。それ故に、繰り出すまではどのタイミングで、どのように攻撃してくるのが判りにくい。それに加えて二刀流の利点、攻撃の多様さだ。並大抵の相手では防ぐことすら不可能だ。

それを躲しているのは、唯斗の反射神経故にだ。余談だが、一か月前のバーテックス戦で後方から迫る射手座の矢を弾いたのも、彼の反射神経によるものだ。

「み、みよっしーさん？そろそろ疲れてきたんですけど…」

「誰がみよっしーさんだ！」

「じゃあにぼっしーさん？俺、見てしまったんだよ。三好の鞆に駄菓子を詰め込むとき……鞆の奥に眠る大量の煮干しを」

「…煮干しは完全食なのよ。煮干しにはカルシウムやDHA、EPA。不飽和脂肪酸も豊富に含まれてるの。身体の成長と維持に欠かせないミネラル、つまりは必須ミネラルが大量に含まれてるのよ！よって、煮干しは完全食と言っても過言じゃないわ!!」

「過言だろ…」

文句でもあるのか、と言いたげに睨みつける夏凜。それに対してたじろくどころか、呆れた視線を向ける唯斗。クールなイメージだった彼女が煮干しについて熱弁してるのだ、多少呆れたって文句は言えない。

「にぼっしーさん、休憩を求む」

「何言ってるのよ、まだ始まったばかりじゃない」

「お前と俺の体力が同じだと思ふな。俺は運動不足とは言わずとも、自主的な運動はしない派なんだ！つまり、体力がないんだよ！」

「なんで偉そうに言ってるのよ!?!」

「ドヤア…」

ブチンツ、と何が切れる音が響いた。それは恐らく、夏凜の堪忍袋の緒だった。手に持った木刀をゆっくりと持ち上げ、一歩ずつ唯斗へと近づく。

「み、三好…?」

「——じゃあ、こうしましょう。アンタが私に攻撃を当てられたら休

憩、それまではぶっ続けで鍛錬よ。時間制限はなし、どちらかが倒れるまでよ」

「えっと、それはなんて無理ゲーでして？」

「問答無用!!」

「ちよつ、待つ——」

木刀が風を斬る音で、唯斗の悲痛の叫びは掻き消されるのだった。

その後、唯斗が休憩できることはなかった。避け続けるのにも限界があり、後半はサンドバッグ状態。唯一の救いは、夏凜が本気で打つてなかったことだろう。もしも手加減なしだったら、最後には身体中に青痣だらけなのが目に見えていた。

「痛つてて…あのにぼっしーめ。人をサンドバッグ扱いしやがって…！」

夕日で紅く染められた道をとぼとぼと歩く唯斗。久しぶりの激しい運動は、想像以上に体に響いた。最早、気力と強すぎる帰巢本能だけで歩けている。

見慣れた道をゆっくりと歩き、家を目指す。

「——はて、何かを忘れてる気が…」

「あら、唯斗じゃない」

その声を聞いた瞬間、背筋が凍る気がした。振り返ってはいけな
い。だけど、振り返らなければ殺される。そんな逃げ道の無い考えだ
けが頭を支配する。

「っ?!ふ、風先輩…?」

「ふふふ、どうしたのよ。そんなに震えて」

振り返ると、満面の笑みの風が居た。後方には苦笑いの友奈に東
郷、樹が居る。

嫌な予感を超えて、死の恐怖すら感じた。先程までは夏凜と共に
忘れていたが、今日は子供会のレクリエーションの日だった。それ
をサボって、夏凜と鍛錬していたのだった。

「っ！逃げ……くっ！膝に力が入らない!!」

「へえー、何だか疲れてるみたいね。部活をサボって、何処で遊んでいたのかしら？ほら、お姉さんに言っでご覧なさい」

「ひえっ……えっと、決してサボった訳ではなく……三好に無理やり鍛錬させられたというかと……と、東郷！ヘルプミー!!」

唯斗は東郷に助けを求めた。部で一番の変人な東郷だが、きつと疲れ果てた哀れな少年を助ける心は残ってるだろう——と思っていたのだが。

「唯斗くん、罪には？」

「ば、罰を……？ま、待つてくれ！罪だからと言って、問答無用で折檻は横暴だ!!事情を聞くとか、そんな措置があってもいいと思っ——」

「だって、唯斗くん。まだ一言も謝ってないじゃない？理由がどうであれ、集合場所に来なかったのは事実。それを謝らず、更には言い訳ばかり。そんな人には、罰が必要だと思わない？」

「……と、東郷さん？怒っていらっしやる？」

「ふふっ……」

「……やっぱり激怒してるよな!」

東郷は微笑んだ。一つだけ言えるのは、彼女が何一つ否定してないという事実だけ。

「部活をサボって他の女の子と遊びに行くような人なんて、もう知りません!」

「遊びになんて行ってないのに……」

東郷はにこやかに一笑、その後は何も発しない。これが逆に、唯斗の恐怖心を駆り立てた。風ですら、ドナドナされる子羊を見るような、哀れみを込めた目で見ていた。

樹や友奈にも助けを求める視線を送ったが、目を逸らされた。せめて、惨い姿だけは見まいと二人は揃って後ろを向いた。唯斗は見捨てられたと解釈し、伸ばした腕は力なく落ちた。

「さて、お説教よ!——と言いたいところだけど、それは後にしてあげるわ」

「……?」

「唯斗くん、忘れたの?」

友奈に問われるが、思い出せない。6月12日、何か特別な日だっただろうか。散々考えた結果――

「あつ、思い出した!」

友奈はぱあつと目を輝かせる。アレを思い出してくれたことが嬉しかったのだろう。そうだ、今日は――

「恋人の日だっけ?」

「……そうなの?」

予想とは違う答えに、友奈は逆に聞き返してしまった。

「……まあ、間違いではないけど。全国額縁組合連合会が制定された日で、ブラジルのサンパウロ地方では女性の守護神で縁結びの神でもある聖人アントニウスの命日の前日とされてるわ」

「わあ、東郷さん詳しいね!」

「ゆ、友奈さん。話の趣旨が変わってますよ……!」

「あ、そうだった!ありがとう、樹ちゃん!!」

樹に促され、やつと話は本筋に戻る。

「今日は夏凜ちゃんの誕生日だよ!ほら、この前入部届けに書いてたよね?6月12日って」

「……あーうん、確かにそうだった気がしなくもない。うんうん、なるほど。今日は夏凜の誕生日だったな。おめでどうの一言でも言えばよかったなあ」

この男、完全に忘れていたようだ。人の記憶力とはなんとも儂いもので、一から十まで全てを覚えてる人間なんて極一握りだ。残念ながら、唯斗はその一握りにはカウントされない。

後で電話でも掛けようかと考えていると――

「――今から言いに行くんですよ?」

「……why?」

樹の言葉に、唯斗は疑問符を浮かべた。

「だから、今から夏凜ん家に行くって言うてんのよ。バースデーパーティーよ。飲み物とお菓子代、割り勘だから後で払いなさいよね!」
「……はあ、了解っす」

これ以上は決定事項なのだろう。寧ろ、唯斗も夏凜の誕生日を祝うことには賛成だ。割と話の合うタイプだし、多少素直ではないが、それも許容範囲。

決して先程ボコられた仕返しをしたいとかではなく、単純に祝いたいだけだ。唯斗は心の中で呟きながら、携帯で夏凜の照れた顔を写真に収めようと決めた。

その後、唯斗は風に引きずられながら夏凜の家へと向かった。

結局、誕生日プレゼントは唯斗の鞆に詰まってる焼肉さん太郎になつたらしい。5ダースの焼肉さん太郎には、夏凜だけでなく他の勇者部員も引いていたとか――

嗜む槌ノ子探し

その日、友奈は外出していた。

学校は休みで、勇者部の活動も休み。神敵のバーテックスも攻めてこないのだから、友奈は所謂暇人だった。東郷を遊びに誘おうとも考えたのだが、彼女は足が不自由だ。決して同情や哀れみを向けてるのではないが、無遠慮にあっちこっちへと連れ回すのは気が引けた。

樹や風は昨日、二人で買い物に行くと話していたので遊びには誘えない。最近転校してきた夏凜は既に誘ったのだが、鍛錬するからと拒否。

(暇だなく)

家に居てもやる事が無いため、暇つぶしに散歩を始めた。アウトドア派の友奈にとって、散歩は決してつまらないものではない。だがそれで暇が潰れるわけでもなく、淡々と見慣れた道をゆっくりと歩くだけだ。

歩き慣れた道でも、季節ごとに違う顔を見せる。春は満開の桜が咲き乱れ、梅雨になれば紫陽花が塀の隙間から見える。日が進めば葉々が紅く染まり、秋季の訪れを知らせてくれる。冬には雪が木の枝に積もり、幻想的な雰囲気醸し出す。

そんな少しずつの変化でも、友奈は楽しめる少女だ。

「……ん？あれって——」

目を凝らすと、遠くに見えるのは彼の後ろ姿。完全に姿を捉えた訳では無いが、友奈は確信した。あれは自分の知る少年であると直感したのだ。

彼を見つけてからの友奈は、とにかく行動が早かった。気が付いたら地を蹴り、彼へと駆け寄っていく。それは飼い主を見つけた犬の如く、俊敏だった。

「おーい！唯斗くん!!」

「っ!?!」

少し離れた場所からだったが、友奈の声は確実に届いていた。その

証拠として、少年は肩をビクリと震わせる。

そして、一切振り向かず走り出した。

「えっ、ええ!? 何で逃げるの!?!」

「っ——!」

「ま、待ってよ〜!!」

脇目も振らず走る少年、それはまるで、恐怖の対象から逃げる子供のようなだった。時々足を纏れさせながらも、一心不乱に走り回る彼を全力で追いかける友奈。

数分後、肩で息をする少年とまったく呼吸を乱してない少女がそこには居た。

結果だけ言えば、少年は友奈に捕まった。

多少距離が離れていても、元の体力に差があり過ぎたのだ。武道で鍛えられた友奈と、普段から大して運動もしてない少年。その差は歴然だった。

「…は、はは。奇遇だな友奈」

この男、全速力で逃げておきながら『今気付きました』と言わんばかりの態度を取る。

「逃げるなんて酷いよ〜!」

「…いや、違うんだよ。逃げたんじゃなくて、足が勝手に動いたんだよ。コマンドバトルゲームのチュートリアルみたいに、勝手に『逃げる』を選択されたんだよ…!」

「えつと…?」

一体彼は何を言っているのか。一見わかりやすいようで、再考したら地味に理解し難い。『逃げ』を否定したと思えば、最後には肯定してる。その割には故意じゃない、足が勝手に——と見苦しい言い訳を溢す始末。

残念ながら、友奈の頭では彼の考えは理解できなかつた。尚、彼自身は何も考えずに口からでまかせを吐いてるに過ぎない。

「唯斗くん、お出掛け?」

「あー、まあ。うん、そんな感じだな。ちよつとツチノコ探しを嗜んでるところだよ」

「へえ、ツチノコかあ。……ツチノコ!？」

「そう、ツチノコ。あの蛇をデブらせたやつ。ただ胴が太いだけの蛇が、立派に未確認生物UMA扱いされてるんだ。これは捕まえるしかないって思ったんだよ」

この少年、実は賞金目当てだ。ただ胴が太いだけの蛇だと解釈してる唯斗は、Oが六桁の誘惑に負けたのだ。口では浪漫だ青春だと言っておきながら、実は欲望に塗れてる少年だ。

東郷なら呆れるだろう。風なら悪ノリするだろう。樹なら苦笑いするだろう。夏凜なら辟易するだろう。だが友奈は――

「――楽しそう!」

唯斗に勝らずとも劣らないアホだった。若干ジャンルは違うが、双方共にアホであることには違いなかった。

「私も手伝っていい?ううん、手伝わせて!!」

「ありがと、気持ちだけ受け取っておく」

「うん!よし、早速探しに……あれ?遠回しに断られた!?今回は縁がなかったってことにされてない!？」

一瞬で断られた。

未だに友奈への恐怖心を抱く唯斗。表面上は冷静に努めてるが、内心ではすぐにでも走り去りたいと思ってる。

これが風や夏凜だったら、唯斗はむしろ巻き込むつもりだった。

だが唯斗は友奈が怖い。彼女が善人なのは理解してるし、害がないことも知ってる。それでも、頭にあの光景が浮かぶのだ。彼女の狂信者としての面、精霊《牛鬼》にビーフジャーキーを与える狂気。それが相まって、目の前の彼女が本当に本心から笑ってる彼女なのかと不安になる。形容し難い歪みを見せられるようで恐くなる。

唯斗とて、理由もなく友奈を怖がってる訳では無いのだ。理由があり、証拠があり、前科があるからこそ目の前の少女が底知れない十二カに感じてしまう。

「遠慮しなくてもいいんだよ?私、今日はずっと暇だからね!」

「あー、うん……じゃあお願いするよ……」

唯斗は押しに弱かった。

押し弱さに関しては、あの夏凜をも上回る。一度断つても通じない相手には、二言目で負けを認めるレベルの弱さだ。あのT・T三好ですら、もう一言二言は物申しているところだ。

「どこを探せばいいのかな？ やっぱり草むらとか？」

「どこでもいいんじゃない？ 有り触れた場所に生息したら、既に見つかってるハズだし。賞金をかけられても尚見つからないってことは、もっと別のところにいるんじゃないかね？」

「えつと、つまり？」

「つまるところ、山でも海でも、好きなどころを適当に探せばいいんだよ。どうせ、普通に探したって見つからないんだし。普通は探さない場所：例えば浜辺とか木の上とか。シヨピングモールとか友奈の部屋でも。絶対に居ないって断言が出来る場所以外は、全部探す価値があるってことだよ」

シヨピングモールや友奈の部屋に関しては過言だが、ツチノコが誰にも見つかってない以上は可能性を捨てきれない現状だ。

「なるほどーじゃあ、さっそくシヨピングモールに行こう!!」

「……さては理解出来てないな、お前」

委細承知と言わんばかりの返事も、現状では心強さを全く含まなかった――

「唯斗くん！次はあそこを探そうよ!!」

「友奈さんや、何故小銭入れを片手にゲームセンターを指さしてるんだい？」

「……情報収集？」

「何で疑問形なんだよ。遊ぶ気満々じゃねえか」

結局、唯斗はシヨピングモールに引きずられて来た。例えとしてシヨピングモールを用いたのは、完全に間違いだったらしい。…ツチ

ノコ探しとは名ばかりの、買い物や遊びに付き合わされてる気がするの、きつと気の所為だろう。

「友奈、今回の目的は？」

「ツチノコ探し！」

「…今してるのは？」

「ツチノコ探し？」

やはり疑問形になってるじゃないか。

アホと称せば良いのか、天然だと割り切れば良いのか。その実態が理解できないナニカだと言うのだから、笑えない。その様子に異変を感じているのが自分だけだと思うと、孤軍奮闘な気分になった。

「…まあ、いいか」

唯斗は考えるのを諦めた。

友奈に手を引かれながらゲームセンター、略称ゲーセンに入った。

入口前でも鼓膜を叩いてた騒音が、中に入ると更に響く。耳を塞ぐ程ではないが、同時に塞ぎたくなるのも事実。ゲーセンに入る人々全員が、驚かずとも感じてる事だ。

「唯斗くん！《太古の殺人》やろうよ!!」

「ええ…初っ端からアレやるのかよ」

最初に友奈が指さしたのは、堂々と正面に二つの太鼓が設置されたゲーム。内容は簡単で、音楽に合わせてバチで太鼓を叩き、迫り来る原始人を撲殺する猟奇的なゲームだ。全年齢推奨ということでもコミカルな絵にはなってるが、闇の深さが鑿みえる。

玄人にもなると、マイバチなるものを持つてるらしい。どんなゲームにもガチ勢というのはいるものだ。

全ての原始人を倒すと、『フルボッコだドン!!』と表記させる。

因みに、このゲームの難易度選択の際に《難しい》までカーソルを持っていき、そのまま太鼓の右フチを十回叩けば、最大難易度の《鬼》が出てくる。

「もちろん難易度《鬼》だよな？」

「いやいやいや!? クリア出来ないよ!!」

「為せば大抵なんとか成る。いや、為して大体なんとか成らせる」

「おーぼーだよ!？」

横暴、とでも言いたかったのだろう。一年前の自分達は、きつとこんな風に勇者部五箇条の一つを使われるだなんて想像だにできなかった。唯斗に至っては、寧ろこんな場面でしか活用しないのだ。これには自称慈愛心に溢れたセクシーなお姉さんこと犬吠埼風も、女子力(物理)をぶつけることだろう。

騒ぎ立てる友奈を無視して、唯斗は《ひゅー玄ノ乱》という曲を選択した。難易度はもちろん鬼。

「——さすがに無理だった〜！」

「いや、一応クリアはできただろ…！」

友奈は項垂れるようにして叫んだ。騒音で埋め尽くされたこの場でなければ、大層注目されていたことだ。

たかが中学生二人には、《ひゅー玄ノ乱》の鬼は早すぎたらしい。練度的にも、速度的にも。辛うじて、本当にギリギリでもクリア出来たのは、友奈の身体能力の高さと唯斗の桁外れた反射神経故にだ。

「次は何する?」

「ツチノコ探し」

「じゃあツチノコ探しながら《馬りおカート娘》やろう!」

「ハンドル握って画面見ながらツチノコを探すと?たとえ真横に居ても見逃すだろ」

《馬りおカート娘》。最近流行りのゲームで、馬が擬人化して女の子になり、カートを運転する属性盛り沢山なゲームだ。過去に実在してた馬をモチーフにしたもので、馬なのに走らない。寧ろカートに乗ってるといふギャップで流行りだした業の深すぎるゲームなのだ。

当然ながら押しに負けた唯斗は、《馬りおカート娘》——略称《馬娘》^{ウマ}をプレイすることになった。

「唯斗くんはどの娘にするの?」

「……よく分からないけど、これだな」

唯斗が選んだのは、銀の長髪を靡かせ、臙脂色の服を着てる少女だ。

頭には馬耳が付いている。高身長でクールな見た目だから、きつと賢く他を律する立場のキャラなのだろう。

「あー、うん。ゆ、唯斗くんにピッタリだね！」
「だろ？」

余談だが、唯斗が選んだキャラは『黙れば美人、喋ると奇人、走る姿は不沈艦』と言われる程の変人——否、変馬キャラだ。友奈の口から出たコメントも、他の人が聞けば悪口一歩手前なものだろう。

「えつと…私はこの娘にしようかな」

友奈が選んだのは、《馬りおカート娘》の主人公的な立場のキャラだ。ブルネットのボブカットに、白い前髪と、同色の三つ編みハーフアップが特徴のキャラ。右の馬耳には青いリボンが付いている。相手を追い越すときに何故か『あげません！』と言うらしい。

「ねえ、唯斗くん！勝負しない？」

「勝負？」

「うん！勝ったら、相手に一つだけ命令できるってのはどうかな!!」

「……死刑宣告？」

「？」

「いや、何でもない。じゃあ始めようか……」

ステージを選択して、レースを開始する。二人を除いて他はNPCなので、実質タイマンだ。

「友奈、宣言しておく」

「ふえ？」

「これから妨害系のアイテムが出たら、全部お前に当てるからな」

「え？ええつ!？」

レースが開始してから、スタートダッシュを決めた友奈は一位に繰り出す。続く二位は唯斗だ。順位は変わらないまま進み、最初のハテナブロックにぶつかると。

「あ、バナナ出た！」

《馬りおカート娘》で高順位にいて、一番出やすいアイテムは恐らく《バナナ》だろう。コースに設置して相手をスピクさせたり、カートの後方に付けたままにして後ろから投げられた妨害アイテムを防いだ

り。出やすいアイテムにしては使い道が多いのが特徴だ。

「俺は……人参か」

二位の唯斗が手に入れたアイテムは《人参》だ。効果は単純で、使用する時一定時間カートのスPEEDが上がる。単純なスピードアップだけでなく、ショートカットにも必須なアイテムだ。

「うーん、まあ。付けたままでいいかな？」

友奈は後ろにバナナを付けたまま走る。現段階では使い道はないが、無意味に捨てることは無い。もしかしたらNPCが投げた妨害アイテムに当たるかもしれないし、次のハテナブロックの直前で手放せば良いだろう。

そのまま順位は変わることなく、次のハテナブロックに到着する。友奈は直前でバナナを後ろに投げ、次のアイテムを取ろうとしたら――

「えいつ」

「あ、ああああ!!アイテム取れなかった!!」

斜め後ろから《人参》でスピードアップした唯斗が体当たりしてきた。友奈はちょうどハテナブロックとハテナブロックの間を素通りすることになった。

体当たりしてきた唯斗は、ちゃっかりとアイテムを取得してた。

「あ、緑甲羅出た」

《緑甲羅》――妨害系のアイテムだ。投げると直進し、カートに当たったら転倒させる。《赤甲羅》とは違いホーミング機能はないが、上手く使えば中々に汎用性に優れている。

もちろん直ぐには使わない。

依然として唯斗の前を走り続ける友奈。後ろを走る唯斗が甲羅を持っているせい、少しだけ焦りが見える。

「――今だ!」

「えっ……あー!?落ちた!!」

友奈がダッシュボードを踏み、空中に浮いた瞬間を狙って緑甲羅が放たれた。

狙いは外れることなく、吸い込まれるように甲羅は友奈の操作する

カートに直撃した。流れるように落下して、友奈は後方に戻される。

——その後は単純だった。

友奈が追い越そうとしたら、その瞬間にバナナを設置されてスピン。友奈が赤甲羅を使えばバナナで防がれ、緑甲羅を初めとする妨害系アイテムは尽く避けられる。ずっと二位だったので、超加速する《キラー》や人参の上位互換、《パワフル人参》も出ない。

同じ展開が何度か続き、勝負は唯斗が勝利した。

「ううう、負けた〜!!」

「ふっ…一方的な勝利というのもまた、虚しいものだな」

変にポーズを取って格好を付ける唯斗。この場に某女子力先輩が居たら、頭をペシりと叩いていただろう。

「確か、勝ったら一つだけ命令出来るんだよな？」

「お、お手柔らかに…!」

「さて、それじゃあ」

唯斗は自分の鞆を漁り、小銭入れを出す。そこから百円玉を四枚出して、友奈に手渡すと——

「アイス買ってきて。ついでにイカの姿フライも。ダツシユで、15分以内ね」

唯斗は友奈をパシることにした。

「えっと、私がお金出さなくていいの？私、勝負に負けたんだしお金出すよ？」

「?…だって、命令は一つなんだろう？金まで出させたら、パシることと奢らせることの二つになるじゃん。友奈はアホだな」

「あつ、確かに!」

納得した友奈は、百円玉4枚を握り締めてコンビニへと走り出した。それを見送った唯斗は、近くの椅子に腰をかけて一息つく。

(友奈に奢らせたら、東郷が怖いんだよなあ…いや、責めたりはしない

だろうけど、無言の圧力で潰させる)

それは優しさが込められた屁理屈ではなかった。

某盗撮ストーカーにバレたら、その後が怖かっただけだ。流石に無いとは思うが、友奈を監視してたり、盗聴器を仕込んでいてもおかしくないのが彼女だ。冗談ではなく、マジで。

——ピコン

「ん?…東郷からのメッセージ?」

噂をすればなんとやら。言葉にはしてないが、心の中でちようど思い浮かべた相手からの連絡だ。偶然か必然か。何となく、嫌な予感だけはした。

某トークアプリを開くと——

「ひえっ…」

そこには『良い判断ナリ』と書かれた武士のスタンプが送られてきていた。

「っ!」

悪寒を感じて、後ろを振り向くが誰も居ない。——いや、遠くの角から見覚えのある黒髪が飛び出た。

「……………うん、気の所為だな。きつと気の所為なんだ…!他人の空似なんだ…!」

その真実は、某盗撮ストーカー少女だけが知っている——

「あれ、ツチノコは…?」

アイスを選んでは途中の友奈が、思い出して呟いた。

樹の憂鬱

×月×日

今日はカラオケに行った。

放課後に勇者部のメンバー、俺含めて六人でカラオケに行った。

今回は、珍しく拉致られてない。むしろ俺は嬉々としてカラオケに賛成し、参加した。自分から積極的に参加したのは本当に久しい。最後に自分から参加したのは友奈と東郷の本性を知る前だから、多分半年ぐらいぶりだ。

じゃあどうして今回は参加したのか？

それはなんとたって、後輩のためだ。

我が部の誇るべき後輩にして、唯一の常識人である樹のためなのだ。因みに、T・T三好は半常識人に類することが判明した。普段は超常識人だし、常人の証でもある羞恥心も樹と同様に持ち合わせている。謙虚とツンデレに変人はいない。

だが、三好は鍛錬お化けだった。友奈や風先輩が遊びに誘ってくるのと同じくらい、あのツンデレツインテールからは鍛錬へのお誘いメッセージがスマホに届く。そのせいで軽い筋肉痛が続いている。超鍛錬系ヒロインなんて、どの世代にも流行らなそうだ。数年後、三好がマツチヨになってないことを祈ろう。

脱線してしまった。

今回、俺達がカラオケに行ったのにはちゃんと理由がある。決して、遊びで行ったのではない。

近々、樹のクラスで歌のテストがあるらしい。一人一人が壇上に立たされ、歌わされるといふ地獄の授業だ。あの地獄を経験した身としては、誰得なんだと小一時間ほど問いたくなる。音楽教師とマンツーマンなら、妥協に妥協を重ねて納得する。どうせ評価するのは教師だけなのだし。たとえ同級生が狂喜乱舞で泣きながら褒め称えたとしても、評価が限界突破することなんてない。

なのに、何故全員の前で歌わせる？

悪しき文化に物申したいところだが、一人の中学生が騒ぎ立てたところで、世の中には何の影響ない。寧ろ、あの地獄には俺達が理解できないような崇高な目的があるのだろう。無ければ泣く。唯斗くんは理解力ある系の男子なのだ。

そんな地獄をこれから体験する樹だが、驚くことに彼女は人前では歌えなかった。そうだ、常識人の証である『羞恥心』を持ち合わせていたのだ。友奈、東郷、風先輩。彼女を見習ってくれ。樹然り、三好然り、常識人は羞恥心を持ち合わせている。つまり、それが無いヤツや薄いヤツはヤベー奴なのだ。Q・E・D、証明終了。

さて、そんな授業を目前にした樹。

悲報だが、彼女は人見知りなのだ。素晴らしき美点だが、この時に限っては枷になる。人見知りすぎて人前では歌えない。歌おうとしたら、変なカナギリ声や音程脱線な、お世辞にも上手いとは言えないモノになる。

そこで最初に書いたことに繋がる。

歌えないなら、練習あるのみ。カラオケでひたすら歌えば万事解決、テストでも満点で恋人もできて、宝くじも当たって——なんてことは勿論無く、せめて普段通りは歌えるようになるだろう。

シンプルだけど、割と効果的だと思う。

——うん、思ってた。

結果だけを書けば、上手くいかなかった。

後から考えれば、妥当な結果だったと思う。今回の計画は、良く言えばシンプル。逆に悪くいえば、脳筋的な作戦だった。歌えないなら、人前で歌わせる？それが出来ないと言う話なのだ。

しかも、あの変人共め。

後半は自分達だけで熱唱して楽しんでた。あれか？勇者部の連中は忘却癖でもあるのか？先日の、ツチノコ探しも同様だった。某狂信者が本来の目的を忘れて遊び呆けていた。

それを微笑みながら見ていた樹は、きつと天使なのだろう。

そんな天使を救うべく、俺は思考に没頭した。

今のところは何も思いつかないが、明日には明日の風が吹く。明日の俺は今日の俺よりも賢い筈だ。つまり、眠いからまた明日考えようということだ。思考放棄とかではない。想いを託すのだ。

明日から本気出します。

——歌は好きだ。

私、犬吠埼樹は歌が好きだ。

別に特別な想い入れとか、歌に関して天賦の才とかがある訳では無い。お姉ちゃんは上手いと褒めてくれたけど、多分身内鬚屑に似たようなものだ。世界中を探せば、きっと私以上に歌が上手で、歌を愛してる人は沢山いる。

だから、私には『自信』がないんだ。

——話は、私が歌のテストについて唯斗先輩に相談したところから始まった。

「へえ、歌のテストか…」

「唯斗先輩？何でそんな遠い目を…？」

「二年前、俺達もその地獄を体験したんだよ。あれは、本当に辛かった。本当に、あれは地獄だったよ…！隣の席の山田くんなんて、声を失ったんだ…！それに、あれ以来…山田くんは笑わなくなったよ…ッ！」

唯斗先輩は拳を握り締めながら、悲しそうに呟いた。それについてどう反応するべきなのか…唯斗先輩の言うことは本気か冗談なのか分かりにくい。

そもそも、時々、唯斗先輩の口から出てくる『隣の席の山田くん』とは何者なのだろうか。先輩は親しい友人のように話してるけど、実際は数回しか話したことがないとも言っていた。仲が良いのか、ただの他人なのか…

東郷先輩が、唯斗先輩の肩に手を置く。宥めるように、東郷先輩もまた悲しみを込めた表情で首を横に振る。

「唯斗くん。今は、あの人の話は…」

「東郷…でも、でもさー!」

「…あれは、仕方がなかったのよ…! 誰にも止められなかったし、あの人自身が選んだ道なの。たとえば、あんな結果だったとしても…ッ」

「や、山田さんに何があつたんですか!?!」

ここまで聞いたら、逆に気になってくる。音楽のテストなのに、何故彼が喋れなくなってしまったのか。私の好奇心が刺激された。顔もフルネームも知らない『隣の席の山田くん』が気になって仕方がなくなつた。

一体、先輩達の口からはどんなドラマが語られるのか。柄でもなく、野次馬根性みたいなのが私の中から溢れていた。

先輩達は顔を見合わせ、互いに頷いた。何かを決心したようだ。唯斗先輩が私の目を見て、口を開いた。

「——まあ、そんなことは置いとこう」

「そうね、そんなことは置いときましょう」

「えっ、ええっ?! 置いとかないで下さいよー! 気になるじゃないですか!!」

さつきまでの哀しむ表情は何処へやら、一瞬でいつも通りの唯斗先輩と東郷先輩に戻つた。

変わり身の速さに驚くべきか、笑顔を失つた山田さんに同情するべきなのか。取り敢えず、後で山田さんについては友奈さんに聞いてみようとの心の中で決めた。

「えっと、何の話だったっけ?」

「歌のテストの話でしょ、アホ唯斗」

「風先輩。アホにアホと言われたら、流石の俺も傷つきますよ。あれです、好き嫌いの多い親に『好き嫌いしたら立派な大人になれません!』って叱られる子供と同じ心境ですよ」

「誰がアホよ!」

「あんたまで脱線してどうするのよ」

夏凜さんが冷静にツツコミを入れた。お姉ちゃんと唯斗先輩は、仲は良いけどすぐ話を脱線させる。原因は明白で、唯斗先輩がお姉ちゃんを煽るからだ。本人は煽ってる自覚はないから、控えめに言っただけ。わかってる人だと思う。

「それで、歌のテストの話ね。樹ってば、極端に人見知りなのよね。偉大な姉であるアタシの前でも歌えないのよ?」

「偉大…?」

「樹、唯斗。どうして首を傾げるのかしら? 小一時間ほど聞いただけだしいわね。そもそも、最近の樹は変なところばかりアホ唯斗に似てきているのよ! 姉の扱いが雑だったり、唯斗と同じリアクションを取ってみたり…: 本当に由々しき事態だわ!!」

「わー! 風先輩! また脱線してますよ!」

今度は友奈さんが止めてくれた。

私のどこが唯斗先輩に似てるのだろうか? さっきは偶然同じ反応をしてしまったけど、それだけで似てると断言するのは早いと思う。むしろ、ノリとかテンションに関してはお姉ちゃんの方が唯斗先輩と似てる気がする。きつと、そんなことを言ったら両方から否定されると思うけど。

「つまり、樹ちゃんが人前でも歌えるようになればいいのよね?」

「そーいうこと。三好、なんか超度肝を抜くような画期的で効率的な次世代風のアイデアとかない?」

「ちよつ、変にハードル上げるな! あつても言い出しづらいでしょ!」

「完成型勇者様の先進的な頭脳を信頼してるんだよ」

「あんだ、完成型勇者って付けたら何でも言っただけだと思ってるでしょ!」

最近の勇者部には、唯斗先輩が夏凜さんを揶揄う光景が新しく増えた。真面目でプライド高い夏凜さんと、変な行動ばかりで思考の読めない唯斗先輩。あまり合わなそうな二人だったが、いつの間にか仲良くなっていた。やっぱり、唯斗先輩は不思議な人だ。

「あつ! 私いいこと思い付いた!!」

「流石友奈ちゃんね、その案でいきましよう」

「東郷さん!?!私まだ何も言っていないよ!?!」

東郷先輩も相変わらずだった。でも、最近の東郷先輩には少しだけ変化があった。少し前まで、東郷先輩はずっと友奈さんばかりを見ていた。なんて言えばいいんだろう…常に東郷先輩の視界の端には友奈さんが居た——っていうか、そうなるように東郷先輩が立ち回っていた。でも、最近はその対象に唯斗先輩も追加されてる気がする。飽くまでも『気がする』程度の考えだけど。

変わったといえ、友奈さんと唯斗先輩の関係も大きく変化した。唯斗先輩が友奈さんを避けてる。声を大にして毛嫌いしてる訳では無いけど、唯斗先輩から友奈さんに話し掛けることが殆ど無くなった。唯斗先輩は思考が読めないから、何を考えて避けてるのかは分からない。でも、以前とは違った関係なのは確かだ。

「——ということ、カラオケに行こう!!」

「え?」

意識を思考に向けていると、いつの間にか話はまとまったらしい。自分のことなのに、みんなに任せっきりだったので少しだけ罪悪感が生まれた。

友奈さんの考えは単純で、人前で歌うことに慣れれば良いという案だった。あまり自信はないけど、友奈さんの考えも無下にはしたくない。

拒む理由もないし、出来ることなら人前でも歌えるようになりたい。だから、私はカラオケに行くことにした。

「〜♪よし、どうよー」

「お姉ちゃん上手ー」

お姉ちゃんはマイクを持ったまま決めポーズをした。

目の前の画面には、デカデカと92点の表示がされてる。カラオケ

の採点機能だ。100点を完璧とするなら、その九割以上。お姉ちゃんの歌は本当に上手なのだと自信をもって言えた。

「ねえねえ、夏凜ちゃん。この歌知ってる?」

「ん……まあ、一応知ってるけど……」

「じゃあ一緒に歌おう!」

「え、ちよつ!なんで私が!私は馴れ合いのために来たんじや無いわよ!!」

「そうよ!にぼっしーと歌うのはあちしよ!!」

「唯斗は変に乗ってくるな!!」

友奈さんと夏凜さんのやり取りに、唯斗先輩が変な口調で乗っていった。そこに夏凜さんのツツコミが入り、場は更に落ち着きを無くす。

心做しか、普段よりも唯斗先輩のテンションが高い。唯斗先輩、実はカラオケ好きだった……?

それから数分後――

「くく♪」

「フラれたわ……」

また唯斗先輩が、変な口調で変なことを呟いていたけど、気持ちよく歌ってる夏凜さんは反応しなかった。

結局、お姉ちゃんに『アタシに負けるのが怖い?』と遠回しに言われたのが、夏凜さんのプライドに触ったらしい。唯斗先輩に関しては、後半からは完全にスルーされた。あれでめげないのだから、精神が強い。

画面に映るのは、先程と同様『92点』の文字。

「風先輩と同点だね、夏凜ちゃん!」

「……まあ、こんなもんよ」

何処と無く、安堵を含んだ表情の夏凜さん。大見得を切ったからこそ、せめて引き分けだったことに安心してるのだろう。これで負けたら、お姉ちゃんは絶対にマウント取ってくる。自分の姉ながら、そ

んな姿が脳内に鮮明に浮かぶのが少しだけ残念だ。

「樹、そろそろ歌うか？」

「えっと…唯斗先輩、先に歌いませんか？ほら、東郷先輩もまだ歌ってませんし！」

「ほう、大取は任せろと？テメーらとはレベチだってことを見せてやる、負け犬共は先に遠吠えでもしてろってか？さ、さすが樹だ…！」
「そんなこと言ってますよ!?!」

なんでこの人は、無駄にハードルだけを上げていくのだろうか？地味に、私を悪者みたいに扱ってるし…

「そーいうアンタはどうなのよ？まあ、アホな唯斗のことだし？たとえ聴くに絶えない歌だとしても、アタシは生暖かい視線で見守ってあげるわよ。これが女子力ね！」

「…：上等了すよ、風先輩。俺が最強のへハ〇太郎 とつとこうたゝを見せてやりますよ！俺が風先輩の点数を越えたら、ハーゲンダッツ買ってもらいますからね!!」

「ぶつ、そんな幼児じみた曲でアタシを超えるって？アタシも随分とまあ、舐められたものね!!いいわ、その勝負。受けてやろうじゃない!!」

「あつ、コノヤロウ！ハムタロサアンを馬鹿にしたな!!ハムタロサアンを馬鹿にしたら奴はハムタロサアンに泣くんだからな!!」

「野郎じゃないわよ！セクシーでプリチーなお姉さんよ!!」

「はっ！」

「あつ、コノヤロウ！鼻で笑ったな！いま、鼻で笑ったわね?」

何となく、フラグ臭がした。唯斗先輩から勝負をしかけてお姉ちゃんが受けた場合、大体はお姉ちゃんの負けで終わる。恒例行事か伝統芸か違ってくらい、お姉ちゃんの負け犬の遠吠えがオチになるのだ。妹としても、姉があそこまで負け続けてれば一周まわって気持ちが良い。

因みに、今回も一点差でお姉ちゃんの負けでした。

その後、私も歌うことになった。

でも、やっぱり上手くいかなかった。マイクを持つと、急に頭が真っ白になる。それでも歌おうとしたら、音程のバラバラな、自分でも下手くそだと思える歌が喉から出てくる。上手くいかない理由は分かっているのに、解決策は全くわからない。

「うう…やっぱり、見られながらだと歌えない…」

「…極度の人見知りとあがり症、かしら…？樹ちゃんには悪いけど、これはもう慣れるしかないと思うわ」

「ですよね…」

分かっただけで、改めて言われると落ち込んでしまう。どうしてみんなは、あんなにも楽しそうに歌えるのだろうか。一度失敗したら、次が憂鬱になる。二度失敗したら、自信なんて全部なくなってる。三度目以降は、やるよりも先に『諦め』が浮かんでしまう。

「はあ…」

小さくため息をついた。お姉ちゃんや先輩達が慰めてくれたけど、逆に憂鬱になった。誰もが当たり前のように経験してきたことを、何故自分は出来ないのだろうか。そんなことを考えると、他よりも劣ってる私自身が嫌になった。

「……はあ……」

もう一度出てきたため息は、唯斗先輩の歌うへおしり〇じり虫にかき消された。

……唯斗先輩の曲のチョイスが変だと思うのは、私だけ？

僅かな光明

樹の歌のテスト対策でカラオケに行った翌日――

「マグネシウムやリンゴ酢は肺にいいから声が出やすくなる。ビタミンは血行を良くして喉の荒れを防ぐ。コエンザイムは喉の筋肉の活動を助け、オリーブオイルと蜂蜜も喉にいい！」

「……」

机の上にはずらりと並べられた瓶や薬袋、プラスチックの容器に食材。それらについて、これまでになくハイテンションな説明するのは自称完成型勇者の三好夏凜。

ツツコミ待ちなのか、素でやっているのか。

その場にいる勇者部員は絶句、もしくは苦笑いだ。それでも得意げに栄養素や、その作用について語り続けるのはもはや夏凜節なのだろう。同部活メンバーの男子部員には鍛錬と煮干しだけが生き甲斐の可哀想な奴、という評価を受けていた少女に発覚した新しい一面だった。

「にぼつしー、一応聞いておく。何のつもりだ？」

「…あんだ、説明聞いてなかったの？」

「聞いた上で理解出来てないんですけど…いや、うん…サプリメントの名称とか、作用に詳しくない俺が全面的に悪いね。俺がもつと詳しくければ、馬鹿で愚かな風先輩にも分かりやすく説明できたのに…そう、全ては無知な俺が…：…：…本当にそうか？俺が？…本当に俺…悪いのか…？」

「唯斗先輩、自分を騙しきれてませんよ…」

「おいコラ、サラツとアタシを馬鹿で愚かって言ったわね？後で覚えなさいよ」

ギリギリまで常識人を庇うつもりだったのだが、やはり彼女は半常識人だった。つまりはポンコツだ。

自分に言い聞かせるつもりで言っても、脳が罪（仮）を受け付けな

い。勿論、夏凜の語る内容については唯斗だけでなく友奈や風、樹も理解出来てないが。東郷は所々理解出来ているのだから、これでも賢い方だろう。少なくとも、中学二年生が学ぶような内容でない。

「夏凜ちゃん、凄く詳しいのね」

「夏凜ちゃんは健康食品女王だね!」

東郷と友奈が煽てるので、夏凜は得意げな顔をする。何故こんなに賢いのに、煮干しを完全食だと勘違いしてるのだろうか?そんな疑問を抱く唯斗だったが、彼女の根本はポンコツだということに納得した。

そんなポンコツ、地頭だけは良かった。

この場に並べられてるサプリメントや食品等、その共通点は喉に良いことだ。つまり、彼女は樹の歌のテストのために態々家から持ってきたのだ。やる事成す事は変だが、理由だけはしっかりとしている。

「さあ、樹。これを全種類飲んでみて。グイツと!」

「えっ、ええっ?!?これ全部ですか!」

さも当然のように言い放つ夏凜に驚愕する樹。これを全部飲めばテストで満点、金運も爆上がりでお高めのツボも無料で手に入って、全ての悩みが解決して運命の出会いを果たして——なんてことは勿論なく、単純に喉のコンディションが良くなるだけだ。机上を埋める程の量だから、化学変化に似た相乗効果でも無い限りは体調に不良が出そうだが。

「いや、いくら何でも多過ぎでしょ……これ、さすがに夏凜でも無理なんじゃない?」

風の口から出た言葉は、単純な心配だった。煽りや嫌味では無く、自分の妹が薬漬け(合法)にされる前にサプリ厨の暴走を止めようという、極めて平和的な思考の元での言葉だ。

だが、短気な夏凜には違う意味で聞こえた。

「無理なわけじゃない!」

事実とは違えど、『お前には無理だろ?』と馬鹿にされたと感じた夏凜。それが彼女のプライドに引っかかる。

「いいわよ!お手本を見せてあげるわ!!」

そう言うと、夏凜は手元にあるサプリメントの瓶を口の上で逆さにして、重力に従って落ちてくる錠剤を複数粒口内に含む。それを数種類で繰り返し返した後に、瓶に入ったリング酢とオリーブオイル、蜂蜜を所謂ラツパ飲みをして頬いっぱい詰めた錠剤と共に喉へ流した。

「——ど、どうよ!!」

「うえっ…よくやるなあ。リング酢って原液で飲むのもだっけ？そもそもオリーブオイルもラツパ飲みするもんじゃないし、サプリメントの錠剤だって適量があるだろ…」

「…美味しい不味いを抜きにしても、体に悪そうね。あまり飲みすぎたら、薬だって毒になるのに…」

勇姿だと言わんばかりの、達成感溢れる表情の夏凜を見て唯斗と東郷は引いた。良薬は口に苦し、とは言うがその良薬の投与しすぎは口に苦しだけでは済まない。一度や二度で体調不良に陥るわけでもないが、何度も続けたら何かしらの問題は起こる。

「うっ!?ん”ん”くっ!!」

「ほら、やっぱりこうなる」

一瞬で顔を青白く染めて、口元を抑える夏凜。言わずもだが、嘔吐の一步手前だ。この調子だと十秒後には刺激臭のする液体が乙女の口から放たれることだろう。夏凜は即座に走り去った。行き場所はトイレか洗面台か。そして、果たして間に合ったのか。その後は走り去った彼女しか知り得ない——

「…すみません、やっぱりダメでした…」

夏凜の用意した物を適量で摂取した樹だが、やはり歌えなかった。全くの無意味という訳でもないが、歌えない理由が喉にある訳でもない。サプリの効果は、多少マシになった程度だった。

「やっぱり喉よりも緊張が問題ね。リラックスして歌えれば良いんだけどねえ」

「それもそうね。次は緊張を和らげるサプリメントを持つてくるわ」

「危ない薬じゃないよな? にぼっしーって偶にネジ外れるし、何かやらかしそうなんだよなあ…」

「…か、夏凜さん? そういうのはちよつと…」

「そんなわけないじゃない!! って言うか、にぼっしーって呼ぶのやめなさいよ!」

「えっ、断固拒否」

何が彼をここまで突き動かすのか、独特なセンスで付けた渾名を断固として変えない唯斗。もはや目の前に居るのは三好夏凜ではなく、ヒト科のにぼっしーなのだと言い切る始末。ファンタジー風と言うと、ヒューマン、デミヒューマン、ハイヒューマンに続くヒューマン・にぼっしーなのだ。

人種まで変えられた少女に、周りから苦笑いと憐れみを向けられた。

「さて、他に案とかある人はー?」

「テストを休むのは?」

「アホ唯斗、アホはアホらしく黙ってなさい」

「風先輩、アホは黙れないからアホなんですよ。そんなことも分からず、軽々しく ”らしく” だなんて…:はあ、アホはどっちなんですかねえ?」

「オーケー、喧嘩ね? サンドバックになりたいのね? 上等じゃコンニャロー!」

「へえ、犬吠埼だから負け ”犬” みたいに ”吠” えると? ナイスジョークですな♪」

「あはは、殺す☆」

ギャーギャーと騒ぎ立てる二人。それを咎める者が居ないのは、既に諦められてるからだ。何百回と繰り返してきて、これからも数え切れない程やるであろう、このやり取り。一々止めたり咎めたりするのは流石に無理だ、ということだ。

「他に案がある人は?」

後方で暴れる部長の代わりに東郷が仕切る。

「「……」」

誰からも案が出ない。そもそも、ざっと思い付く程度のことは既にやってる。人前で歌うのに慣れるための練習は何度かやってるし、夏凜のサプリで解決するのも無理があつた。過度な緊張と焦りの克服が目的だが、樹の性格もあり、難問へと化した。

樹の人柄的に、唯斗の言ったズル休みはさすがに実行しないだろう。それだけが現時点での良い点だった。逆に言えば、それ以外は心許無い。

——結局、この後も進展はなかった。

夏凜節が炸裂した日の夜、唯斗は自分の部屋でダラけていた。口にはイカの姿フライ、右手にはスマートフォン、左手にはエナジードリンク。彼曰く、これが最強の装備らしい。

——マイフアアアアアア!!マイフアアアア!!

「うえっ!?!…あ、東郷から電話か…」

シューベルトの『魔王』が静かだった空間に鳴り響き、唯斗は肩をビクリと震わせた。相変わらず、東郷からの着信音は『魔王』のまま。余談だが、最近追加した夏凜の着信音は『ス〇夫のおぼっちゃマンボ』にしてるらしい。夏凜に一番似合わない曲をコンセプトとした結果だと唯斗は語る。

「もしもし、山田太郎です」

『あ、唯斗君? 樹ちゃんについて話があるんだけど——』

山田太郎については完全に無視された。初期の頃の『えっ、誰?!』という反応はもう見れないらしい。悲しいような、成長を感じられて嬉しいような。唯斗の脳内では、小〇和正の『たしかなこと』が流れていた。

「これが親心ってやつか…」

『…話、進めるよ? さつき友奈ちゃんとも相談して、樹ちゃんに言付け

を送るのはどうかなってことになったの。まだ具体的には決まってるけど、応援とかの言付けを伝えるのってどうかな？」

「あー、うん。いいと思う。メッセージって言葉で伝えるのか？それとも紙とかに書いて渡すの？」

『それを相談するために電話したの。言付けについては、一枚の紙にみんなで書き寄せとかすればいいと思う。でも、大事なものは見計らいよ。言付け文を渡す見計らい』

なるほど、と唯斗は納得した。

例えば、前日とかに渡したとしよう。

樹の性格からして、確実に喜ぶだろう。そして同時に、プレッシャーにもなるだろう。樹は良くも悪くも、コンディションがメンタルに大きく左右される。悩みごとがあれば注意散漫で転んだり、ケアレスミスを繰り返したり。逆に何かしらの良いことがあれば、心に余裕が出来て勉強や部活動での効率が格段に上がる。

前日からメッセージを渡せば、喜びと重圧が混ざりあった複雑な感情を抱くだろう。期待されて嬉しい。だからこそ絶対に、何かなんでも成功させなければいけない。樹はそう考える。そして寝れなくなり、次の日には睡眠不足の状態に登校することになるだろう。樹の友人や身内ならば、誰でもそうなることを容易に想像出来る。

結果、テストに向けての不安は取り除けても別の問題が起こりかねない。

「——まあ、数日前とか前日は止めた方がいいだろうな」

『…なら、やっぱり当日しかないわね。朝のホームルームの前とかに集まるか、授業前に誰かが渡しに行くか…』

「いっそのこと、サプライズっぽくしたら？」

『えっと、つまり…？』

「例えばだけど、樹の筆入れとか教科書に挟んでおくのは？直前に応援メッセージを見つけて、そのままの勢いで歌いきれそうじゃん」

唯斗の言う『サプライズ』とは、決して大掛かりなものでは無い。前日の日でも、姉の風に頼んでメッセージ入の紙をどこかしらに仕込んでもらえば良いだけだ。

『……なんだか、珍しいね。唯斗君が真面目に考えてるだなんて』
「むっ、失敬な。俺はいつだって真面目・まとも・マメな人の通称3Mをモットーにしてるんだぞ」
『一つもしっくりこない…!?!』

傍から見た唯斗は真面目では無いし、まともでも無い。勿論マメでも無い。寧ろ真逆に類する側の人間だ。彼の友人全員に聞いても、確実に否定するだろう。

ともあれ、東郷が言ったように唯斗が真面目な案を出すのは本当に稀だ。

『普段から真面目だったら良いのに。取り敢えず、学校にお菓子沢山持ってくるの止めない?』

「なっ! にぼっしーに煮干し食うなって言うくらい残酷なこと言うなよ!?!」

『己の発言を省みても、残酷さの欠片も感じない…』

夏凜が煮干しを動力源として生きてるように、唯斗にとってはお菓子が命なのだ。特にイカの姿フライ、あれは空気と同等の価値があると唯斗は語る。

『それじゃあ、そろそろ切るね』

「はいよ、おすやみさいな」

『お、おすや…?…おやすみなさい』

通話を終了させ、ベッドで仰向けになる。暫くボーっとしてから目を瞑った。

(何となく、光明は見えてきたな…)

まだ殆ど決まってるが、形だけは整ってきた。安堵からか、口から生暖かい息が漏れ出した。

唯斗は勇者部が苦手だ。何度も日記に書いてるとおり、退部したいと思ってる。だが、苦手であれど嫌いではない。普段は無賃労働と言って毛嫌いしてるボランティアも、別に無意味だとは思ってない。

有意義な時間と思う程、人として熟れてもいないが。

——なんだか、珍しいね。唯斗君が真面目に考えてるだなんて——

頭に、先程言われた言葉が浮かぶ。

「……後輩が悩んでるんだし、真面目にもなるだろ」

唯斗とて、無情ではない。親しい相手が落ち込めば慰めるし、解決に向けて助力くらいは惜しまない。

でも、らしくは無いな——と心中で呟いた。

染まりつつある

——「どうして、お前はそんなことも出来ないの？」
問い掛けられた。

樹にとつてそれは、聞き覚えのある声だった。聞き覚えのありすぎる、本来なら不意に聞こえることなる有り得ない声。そう、私の声だった。

ああ、これは夢なんだ。

すぐに察しがついた。揺蕩う意識は、何を考えても完結まで持つていけない。目を開けようとしても、目の開けた方が分からず、それすらも疑問を覚えない。その場所は真つ暗なわけでもなく、色があるとも言えない。だが無色透明かと聞かれても分からないとしか言えない。

やはり夢なのだろう。

——「他の人は当たり前前に出来てるよね？『隣の席の山田くん』さ
なんだって、命を賭して、声を失つてでも最後まで歌えたよね？」

……えっ、ちよつとまつて？歌のテストについての話だよね？
なんで山田さんが出てくるの：！？それに私、山田さんについて、全く知らないんだけど！

これってあれじゃないの？悩み事とかが夢にまで出てきて、不安を煽られる的なやつじゃないの？何で、山田さんについて『私の声』が語ってるの！？

そんな私の叫びを無視して、『私の声』はシリアスな雰囲気纏って言葉を続ける。

——「緊張する？不安だから？そんなの、誰だつて同じだよ。あのお姉ちゃんだつて緊張してたし、東郷先輩や友奈さんだつてテスト前には不安があった。厚顔無恥、唯我独尊、焼肉定食、寡廉鮮恥な唯斗先輩だつて緊張感くらいはあつたよ、多分」

……夢の中の『私の声』は、唯斗先輩に恨みでもあるのだろうか？
散々、恥知らずとか心が清らかではない、節操がないとか、そんな意味の四字熟語を使って表現してるし。…焼肉定食については触れたくない。ツツコミを入れたら負けだ。そういうのは、お姉ちゃんとか夏凜さんのお仕事だから。

何だか、『私の声』の言ってることが唯斗先輩に似てる気がする。良くも悪くも、真面目な雰囲気を持っていけない所とかがそっくりだ。

——「お前^{わたし}自身、何か努力した？ずつと、お姉ちゃんとか先輩達におんぶに抱っこ。……おんぶに抱っこつて、何かちよつとだけエツチくない？ほら、手取り足取り教えてもらいながらやる、みたいな！お前^{わたし}もそう思わない？」

……よし、そろそろ起きよう。そしてこの下らない夢について忘れるよう。

——「えっ、ちよつ!?待って！もう少し話そうよ!!」

お断りします。これ以上、私の声で変なこと言わないで欲しいから。私、そんなに…へ、変態っぽいこと言わないから！

——「なっ、まるで自分がまともみたいに!!こんな夢を見る時点で、自分を淫乱だつて認めてるようなものだからね！犬吠崎樹じゃなくて、淫乱崎樹にすることをオススメするよ!!」

し、知らないよ！私が言ったんじゃないもん！『私の声』が勝手に言っただもん!!

——「夢つてのは、潜在意識の現れなんだよ！つまり、私が言ったことはお前^{わたし}が言ったも同義！だから…」

わー！わー！！何も聞こえませーん！！

——「卑怯だ！」

私と『私の声』が言い合ってるうちに、いつの間にか意識が浮上する感覚を覚えた。なんとなく、起きるんだなって察した。

「……私、淫乱じゃないもん」

起きてから、ふと呟いた。

残念ながら、意識は覚醒しても夢については鮮明に覚えてた。『私の声』が唯斗先輩みたいなことを言ってる夢だった。……この前、お姉ちゃんが『樹が唯斗に似てきた！』って言ったのを思い出した。

……うん、偶然だ。きつと偶然、寝付きが悪かったから変な夢を見ただけなんだ。夢が潜在意識の現れだって言うのもデマに違いない。そうじゃないと、私が唯斗先輩と同等の変人になってしまう。

「樹く、そろそろ起きなさい……って、起きてるじゃない。珍しいわね」

お姉ちゃんが部屋に入ってきた。多分、いつものように起こしに来てくれたのだろう。何故か私の目覚まし時計は私だけに聞こえない仕様だから、お姉ちゃんが起こしてくれないと起きれないことが多々。

起こしに来てくれたのは嬉しいけど、今の私はそれどころではなかった。

「……お姉ちゃん、私って変人なのかな……？」

「急にどしたの？変な夢でも見た？」

「……私って、唯斗先輩なのかなあ……」

「それだけは違うから安心なさい」

即言葉を返された。いつもならそれで安心出来たけど、潜在意識がアレだったからか、むしろ不安になった。もしかして私、傍から見たら超がつくほどの変人？ヤバい人？

「はあ…」

「ほーら、ため息ついてないで着替えなさい。もう朝ごはんだって出てくるわよ」

「うん、ありがとう…」

お姉ちゃんみたいな、殆ど悩まずに本能だけで生きていそうな人が羨ましい。そんなことを言ったら、流石に怒られそうだから言わないけど。……あれ？もしかして、思った時点でアウト？唯斗先輩と同類？

朝からテンションがだだ下がりだった。

ノロノロと着替えて、居間に向かう。生憎と時間だけは余裕があったので、急かされることも怒られることもなかった。

お姉ちゃんが言った通り、既に朝ごはんは用意されてた。トーストに目玉焼き、ハムとスープ。朝だから、シンプルな食事があったかった。

「いただきます」

スープを一口飲む。もうすぐ夏になるけど、まだ朝は肌寒い。だからと言って厚着で学校に行けば、昼に近づくにつれて段々と暑くなっていく。要は、季節の変わり目なのだ。

「今日、歌のテストでしょ？」

「うん、そうだね」

「調子はどう？喉とか痛かったら、夏凜から押し付けられたサプリメントとかリソゴ酢があるけど」

「大丈夫：私って厚顔無恥で唯我独尊、焼肉定食、寡廉鮮恥な唯斗先輩と同類らしいから。緊張感はいつの間にか近所の用水路に捨てちゃったらしいから……！」

「だいぶ重症みたいね…あと、焼肉定食は四字熟語じゃないわよ。本当にあのアホが言いそうなことね」

不思議と、悲しくはない。大事なものを失った代わりに、要らないものを十二分に押し付けられた気分ではない。…うん、悲しくはないけど泣きたくなった。

悲報、私は唯斗先輩に染まりつつあるらしい。

学校に着いたら、急に我に返った。

そうだ、今日は歌のテストなんだ。もう少ししたら、またみんなの前で歌わないといけないんだ。そんな当たり前なことを二回三回、ずっと同じことばかりを考えていた。憂鬱な気分だ。

——でも、時間は無情だ。

休み時間が短く感じて、授業が長く感じるのと同じだ。音楽の授業はあつという間に来た。

授業が始まり、一人二人と歌い終えていく。

(……やっぱり、歌えないよ……)

まだテストは始まってないのに、嫌な考えが頭を過る。また歌えずに、皆の前で見苦しいものを見せることになる。そんな想像が、未来視の様な気がして手が震えた。

「犬吠埼さん」

「は、はいっ！」

音楽の先生に名前を呼ばれた。即ち、私が歌う番なのだろう。全身が震えて、頭が真っ白になる。落ち着け、緊張しすぎだ。そんなことを自分に言い聞かせても、何一つ安心できない。

せめて少しでも時間を伸ばそうとして、ゆっくりと壇上に向かう。所詮悪足掻きでしかないのは、言うまでもない。結局着いてしまった。時計を見ても、授業時間はたつぷりと残ってる。

私は観念して、音楽の教科書を開いた。

(……っ！教科書に何か挟まってる?)

教科書には見覚えの無い紙が挟まっていた。開くと真ん中には”樹ちゃんへ”と書かれていて、その周りには五つのメッセージが添えられてる。

(もしかして……)

それは勇者部のみんなからの応援メッセージだった。不出来な私に向けられた、信頼と応援が込められたメッセージが五つ。心の底が

温まるのを微かに感じた。

『終わったら打ち上げでケーキ食べに行こう!』

友奈さんからのメッセージだ。成功を疑わず、前向きな言葉を向けてくれる友奈さん。嬉しくて、頬が緩んだ。

『周りの人は皆カボチャ』

東郷先輩からだ。真面目に書いてるハズなのに、ちよつとだけ可笑しくて、緊張が和らいだ。

『気合いよ』

名前は無いけど、夏凜さんからだと思う。シンプルなメッセージで、気持ちがダイレクトに伝わってきた。

『周りの目なんて気にしない!お姉ちゃんは樹の歌が上手いって知ってるから』

お姉ちゃんからのメッセージだ。本当にもう、嬉しすぎて言葉が出てこない。終わったら、絶対にお礼を言おう。

『汝の深淵を解放するがよい。さあ、己が鎮魂歌で幾多の魂共を掌握しろ!!』

……多分、恐らくきつと唯斗先輩だ。何となく内容を理解出来てしまう自分が、少しだけ嫌になった。まあ、嬉しいけど。応援してくれることは、嬉しいけど!!

——音楽室にピアノが響く。

不思議と、成功する気がした。この時の私には、失敗なんて全く想像出来ていなかったと思う。胸に抱いた気持ちを声に乗せ、笑顔で歌っていた。

そして、もちろん大成功だった。

◆オマケ◆

東郷「唯斗君、メッセージ決まった?」

唯斗「ふつ、俺の頭脳があれば軽く四つは思い付くね。『終わったら

打ち上げで——』」

東郷「唯斗君、それはもう友奈ちゃんが書いたわ。悪いけど、別のメッセージでお願い」

唯斗「えっ…じゃあ、『周りの人は皆ジャガイモ』ってのは？」

東郷「それは私が書いたわ。私はジャガイモじゃなくてカボチャだったけど…」

唯斗「じゃあシンプルに！『気合だ！』ってのは…!!」

東郷「残念、夏凜ちゃんが…」

唯斗「全部被りじゃん!?!どうせ、最後に考えてた『周りの目なんて気にしない!』から始まる励ましメッセージも風先輩とかが既に書いてるんだろ!!」

東郷「せ、正解」

このあと、必死に考えました。

敵襲、故の開戦

アラーム音が鳴り響いた。聴くだけで不安に駆られる、樹海化警報のアラーム。これを聞くのは四回目だった。

——平和な時間は、唐突に終わりを告げる。

いつの間にか、淡々と続く日常を過信していた。無二の平和が続くのだと盲信していた。いつだって、『奴ら』が攻めてくる可能性はあったのに。既に三回も経験しても尚、少年少女は気を緩ませていた。「うそ…そんなっ…!」

東郷の、悲痛に染まった声が嫌に響いた。誰もが驚愕、もしくは恐怖を覚えてる現状。遙か遠くに見えるのは、七体のバーテックスだ。全てを合わせたら十二体のバーテックスで、これまで討伐したのは乙女座、射手座、蟹座、蠍座、山羊座の五体。つまり——

「文字通り、全総力戦ってことかよ」

残りのバーテックスが一気に攻めてきたことになる。

敵側からしたら、実に合理的手段だ。バーテックスは、質では勇者に勝っていても数と連携で負けていた。蟹座を一人でボコボコにしたアホはいるが、あれは相性が良すぎただけなので例外だ。

今回のバーテックスは、質も量も勇者より勝っている。それが表すのは、即ち敗北の可能性だ。

——誰もが感じていた。

狩る側だった自分達が、容易く狩られる可能性を。どれだけ上手く連携しても、どれだけ個々の力を十二分に発揮しても、『今の自分達』が質と量で共に勝る相手に通じるのかは、もはや未知数。一番奥で鎮座するように控えてるバーテックス、獅子座を見る。そして、本能で感じた。自分達は、あの獅子座のみにすら敗北するかもしれない。他のバーテックスとは一線を画した、恐らく現状での最強バーテックスなのだ。そして自分達は、今から獅子座以外にも六体のバーテックスを倒さなければいけない。気が遠くなる話だ。

風は感じていた。

これは良くない雰囲気だと。皆が、恐怖に身を浸している。これでは十二分に戦えない。勇者部の誰かが欠けてしまう。それが風にとって、一番の恐怖だった。だが同時に、自分が今なにをすべきかも理解してる。

部長として声を大にして励まそうとした。勝つて帰るために、生きて明日を迎えるために。そして、自分自身にも発破をかけるように。勇者部の面々を見渡して——それを見てしまった。

「ゆ、唯斗…?」

「…なんですか、風先輩」

風には、理解出来なかった。この状況下で、完成型勇者を名乗る夏凜ですら戦ってる現状で、獰猛な笑みを浮かべる後輩が理解できなかった。

(ああ、やっとか…)

手足が震えていた。

(やっと、やっとだ…!)

高鳴る鼓動で、胸が苦しくなった。

(これで、やっと俺は——)

それは、武者震いだった。それは、興奮だった。叶うかもしれない。夢が、ついに叶うかもしれない。既に目前だ。

(勇者部を退部できる…!)

笑みを抑えずにはいられなかった。やっと目的が果たせる、その喜びだけが唯斗の胸を占めていた。目の前のバーテックスを全て倒せば、唯斗は晴れて帰宅部の仲間入りを果たさせるのだ。あまり話したことのない隣の席の山田くんと共に下校できるかもしれない。

浮かべる笑みは、いつの間にか欲望に溢れた獰猛なものへと変化していた。

「お姉ちゃん？どうしたの？」

「っ！う、ううん。何でもないわ！」

樹に呼ばれて、風は我に返った。いつの間にか後輩が見せていた笑み消えていた。

(見間違い……?)

今の唯斗は、ただ不思議そうに風を見つめていた。他の部員もそう。友奈と東郷は心配するように、夏凜は何ポーズとしてるんだ、と言いたそうに視線を寄せる。

風は自分の頬をパシリと叩き、気合を入れる。今はバーテックスを倒さないといけない。それ以外は全て後だ。

「よし、円陣組むわよ!!」

「……俺も?」

「当たり前でしょ!!」

逃げようとする唯斗と、それとなく離れていく夏凜を捕まえて円陣を組む。誰も欠けずに、最後まで生き残ろう。全員がそんな気持ちを込めて、腕に力を込めた。

「これが終わったら好きなもの奢ってあげるから——絶対に勝つわよ!!」

多少財布は軽くなるかもしれないが、それで全員が生きてるなら風にとっては痛くない。…今の風にとっては、だが。

「焼肉か寿司か…はっ！いつその事どちらも…!」

「あっ、それいいですね」

「アンタ達は遠慮を覚えなさい!!」

遠慮のえの字も知らない後輩と妹。

もしかしたら、サイフが軽くなるのではなく中身が消えるのかもしれない。せめて生活費だけでも残せるように、風は別の意味で気合いを入れ直した。

迫り来るバーテックスを目の前に、六人はスマホを片手に横並びになる。

胸を突き破りそうなほど暴れる心臓。表情の不安と戦きが隠せない。中学生の決して熟れてない精神では、結局のところ『明確な死』なんて理解出来てない。痛いのは嫌だ、自分という『個』の消失が恐ろしい、まだやりたいことが沢山ある。そんな年相応の想いだけを胸に、少女達は守り抜くと誓う。

——変身!!

誰が叫んだのか。リーダーの風か、誰よりも希望を抱いてる友奈か。将また全員なのかもしれない。それをきっかけに、全員が一斉に勇者アプリのアイコンを押して『中学生』から『勇者』へ成る。

「勇者部、いくわよ!!」

開戦は、勇ましいリーダーの声が合図だった——

『出陣〜!』

夏凜の精霊、義輝が法螺貝を吹きながら言葉を発した。普段なら多少のリアクションをする勇者部の面々も、この状況下では気にする余裕もない。

「殲滅する!!」

「よし、アタシ達も!!」

真つ先に夏凜が飛び出し、その後を東郷を残した全員が追う。足が不自由な東郷は、勇者衣装の一部である四本のリボンを触腕のように使って後方に移動した。いくら移動が可能になったとは言え、他の勇者みみたいな高速移動は不可能。よって、後方に構えて狙撃での援護に徹するしかない。

現在、七体いるバーテックスの内、一番手前に突出してるのは牡羊座だ。ナメクジやカブトガニを連想させるその姿は、見ても決して癒されるものではない。宙を泳ぐように、巨体に似合わぬ猛スピードで勇者に——否、神樹に迫るバーテックス。

「二番槍い!!」

上斜から二振りの刀を、押し潰すように振り下ろす夏凜。勇者として飛躍的に上がった筋力。繰り出された技を受けた牡羊座は、大きく減速するだけに留まらず巨大な凶体を地へ叩きつけられる。

それに続き、唯斗が場違いな見た目のピコピコハンマーを上段に構え、力の限りで振り下ろす。

——ビゴオン!!

場違いな音とは逆に、その威力は勇者の中でも随一。文字通りバーテックスが抉れた。

「うわあ、相変わらずだね。あの見た目と変な音がなるギミックさえ無ければ羨みの一つでもできるのに」

「風先輩！今のうちに封印しましょう!!」

夏凜に落とされ、唯斗に抉られたバーテックス。二人が妙に脆いと感じていたら、バーテックスが再生を始めた。再生のスピードは他のバーテックスより遥かに早い。牡羊座の特性の一つだろう。

友奈の声掛けに応じた風と樹がバーテックスを囲むと、尾のような部分から逆四角錐型のコア、御魂が出てくる。所謂バーテックスの心臓の様なものだ。バーテックスの心臓にして、唯一の弱点。

御魂は出現と同時に超高速回転を始める。

夏凜が小太刀を投擲するが、容易く弾かれる。元の強度に加えて、真正面からの衝撃を回転に逸らされてるのだ。並大抵の攻撃は通らないらしい。

「よし！私、いってきます!!」

友奈が拳打を入れると、御魂に大きな亀裂ができた。刺突や斬撃よりも、打突の方が弱点らしい。

回転が緩まった隙に、東郷が遠くから狙撃する。撃ち抜かれた御魂はこれまでのバーテックスと同様に、砂となって地に落ちた。

「ナイス連携！友奈も東郷も、よくやったわ!!」

たかが一体、然れど一体。連携によって得た滑り出しは、最高の一言に尽きた。風の上げた歓喜の声に、思わず頬が緩む。——一人を除いて、だが。

これまでに無く、神妙な面持ちの唯斗。

「唯斗先輩？どうしたんですか、珍しく静かですけど」

「……おかしくないか？」

最初に違和感を覚えたのは唯斗だった。

開戦直前から、誰も消耗することなくバーテックスの一体を倒せたのは大きい。それが上手くいったのは、牡羊座だけが突出していたからだろう。——そこに、唯斗は違和感を覚える。

二回目のバーテックス戦で、射手座と蟹座は連携を見せた。射手座の放つ矢を蟹座の反射板で反射し、行われたオールレンジ攻撃。唯斗が早々に蟹座を潰したから苦戦しなかったものの、バーテックス同士が連携を可能とするという事実が発覚していた。

そして、今回は七体のバーテックスが同時に襲来してるのだ。なのに、牡羊座は一体で攻めてきた。まるで叩いてくれと言わんばかりに、策のない愚直な前進を見せる牡羊座。

「——あんなの…連携どころか、まるで囲みたいだ」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！バーテックスが連携？アイツらには、知性があるって言うの!!」

「…そっか、あの時はまだ夏凜ちゃんいなかったんだよね」

夏凜が加わったのは三回目の戦闘からだ。前々回の、三体同時に襲来してきたときはまだ知り合ってすらいなかった。

夏凜にとつて、バーテックスは物言わぬ獣でしかなかった。本能に従って神樹を狙い、それを邪魔する勇者を機械的に攻撃するだけの猛獣。夏凜と唯斗が瞬殺した山羊座然り、先程皆で制圧した牡牛座然り——これまで夏凜が対峙したバーテックスには、知性なんて見えなかった。

「お、囲って——ツ！まさか!」

気が付いても、それは手遅れだった。何故なら、その為の——その為だけの『罠』なのだ。勇者の目を逸らすには大き過ぎる餌を使い、確実に仕留めるための策を用いる。それはバーテックスの知性を知っても尚、誰も考え付かなかった。

——次の瞬間。

「な、何よ……この気持ち悪い音は……っ!」

耐え難いほどの怪音波が、勇者部に襲いかかる。脳を直接殴られ、

五臓六腑を掻き回されたような不快感。吐き気を催すそれは、放っておけば鼓膜を破壊して脳を溶かす勢いだ。

その正体は、牡牛座の体に付いてるベルだ。

耳を塞いでも、形容し難い気持ち悪さは一向に引かない。寧ろ、時間と共に増えるようにも感じられた。

「これくらい…勇者なら…：…うっ…あ…：…っ」

気合いや根性、という面では誰よりも秀てる友奈ですら、満足に立つことすら出来ない。それ程までに、この怪音波は勇者を苦しめていた。

「マジかよ…！高級耳栓が貫通されるなんて…!？」

「何であんたは耳栓持つてるのよ…ツツ!？」

怪音波の中でも、完成型勇者のツツコミは響く。

耳に着脱しやすいシリコン素材の、フランジタイプ耳栓。遮音性や機能性、フィット感のいずれも高基準を誇るその値段は、何と3998円。人生で最も無駄な買い物をしたと、唯斗は満面の笑みで語った。無駄、故に浪漫なのだ。一見して深そうに見えても、実は夕立後の水溜まりより浅く狭いお話だ。

「と、東郷さんは…!？」

東郷の助けを求め、友奈は後方を向く。

だが、友奈達の目に最初に映ったのは——東郷ではなかった。

地中から出て、東郷の姿を隠す程の巨大な生き物——魚座のバーテックスだ。魚というよりは、イカやタコ、クラゲに近い姿のバーテックス。文字通り地を泳ぎ、鯨のように東郷を目掛けて攻撃を仕掛けていた。

東郷は四本のリボンを足替わりとして操り、魚座と一定の距離を保ちながら応戦していた。そして良くも悪くも、拮抗状態が続いている。遠距離や中距離では正確無比な銃の腕前を誇る東郷。だが、彼女は決定打に欠けていた。友奈や唯斗と違い、東郷には一撃で相手を打ち砕くような攻撃手段はない。バーテックスには牽制も効かないし、御魂の破壊も今のままでは不可能。

唯一怪音波の影響を受けていない東郷の助けも、現状では期待でき

ない。

怪音波のせいで満足に動けなく、思考もまとまらない。そしてバーテックスが連携するとわかった今、勇者が行動不能という好機を逃す手は、バーテックスには無いだろう。

——であれば、この場を切り抜ける『切り札』は一つしかない。まとまらない思考の中、風の頭だけにはそれが浮かんでいた。夏凜曰く、使えば使うほど強くなるという勇者の切り札、『満開』。今使わずして、いつ使うのか。

風が『満開』を発動する瞬間——

「…音は…ツ！」

それは、小さな声だった。

「…おん…がくツ…は……ツ!!」

小さく、今にも消えそうな声。でも、怪音波の中でも通った。鈴のような声は、全員の耳に届く。

「みんなが！幸せになれるツ!!素敵なモノなのに…ツ!!違う！こんな……ツ!!こんな音はああああ!!」

「樹っ！」

樹のワイヤーが牡牛座のベル部分に幾重にも絡みつき、動きを止めた。そして、同時に不快な音も止む。

——殻を破った。

犬吠埼樹は、成長を遂げた。

皆の後を辿る後輩ではなく、皆の隣で戦う仲間になった。

急激に強くなった訳では無い。ただ、樹の覚悟が固まっただけだ。きつとそれは、エゴなのだろう。人を不幸にする怪音波音なんて認めない。大好きな姉や仲間を傷付ける音なんて要らない、必要ない。そんな自分勝手に、自己中なエゴだ。だが、そのエゴが皆を救った。

樹には、友奈のような勇氣はないし、東郷みたいな技術もない。風のような身体能力もないし、夏凜のような戦闘力もない。ましてや、

唯斗のような度胸は樹には一番足りてない。

——だから、エゴイストで良い。

「みんなは、わたしが護る!!」

自分よりも強い人達を、樹は傲慢にも護ると言い切った。その我儘は、そのエゴは、その度胸は——樹の根本となるだろう。決して諦めず、自分を突き通す先輩達と同じように。

そして、樹のエゴに感化された勇者が二人——

「後輩妹にあそこまで言われて、黙ってられるかあああ!!」

風と唯斗が、同時に飛び出す。

「ぶっ飛ばやあアア!!」

唯斗は水瓶座をピコピコハンマーで殴り飛ばす。——そう、挟らずに殴り飛ばしたのだ。武器が水瓶座に接触する瞬間、唯斗は力を抜いた。全力で振り、当たれば挟れるほどの威力だ。つまり、その数段下の威力でもバーテックスを殴り飛ばすには十分過ぎる力があるのだ。殴り飛ばされた水瓶座は、天秤座に当たった。吹き飛ばされた威力の強さに、天秤座は水瓶座を受けきれず二体はまとめて地に落ちる。そこに待ち構えているのは——

「まとめてーぶった斬る!!」

武器である大剣を更に巨大化させた風だ。風は己を軸に、万力の握力で握り締めた大剣を横薙ぎに振るう。そして、二体のバーテックスは両断された。

バーテックスは両断されても、御魂を破壊しない限りは倒せない。だがそれでも、足止めには十分だ。

「相変わらず、ゴリってますね。風先輩」

「はっ、アレをぶっ飛ばした唯斗だけには言われたくないわよ」

連携と言うにはお粗末な、脳筋と脳筋の協力技だ。でも、それでも。

二人は結果で示した。二人は力で証明した。

「樹、これが先輩の威厳^姉ってやつだ^よ」

唯斗と風もまた、樹に負けない程のエゴイストだ。

唯斗くんの弱点。

実のところ、対人戦が弱点だったりする。大振りなピコピコハンマーは、バーテックスのような巨体には有効だが、対人戦では容易く避けられる。勿論、相手が友奈や夏凜のように、ある程度の訓練や武道を修めてる前提ではあるが。尚、ピコさんを地面に叩きつけ、その石礫で攻撃する手段もある。中距離だと勝機がある。だが超近距離で攻められたら為す術なく負ける。

憤怒は咲き誇る

戦況は、勇者が有利になっていた。

牡羊座は樹のワイヤーで拘束されており、水瓶座と天秤座は風につけられた傷を再生中。実質三体が行動不能。先に牡牛座は倒しており、魚座は東郷が拮抗状態に持ち込んでいる。

過半数は既に押さえ込んでいる。それを有利と言わずして、なんと言うのか。

——そう、誰もが思っていた。

気を抜いていたわけではない。仕方が無かった、と言い訳がましく言っても誰も責めないだろう。勇者達は一重に、未知に対してどうしようもなく無知だったのだ。

RPGのラスボス戦に似てる。今となっては、ラスボスの第二形態や第三形態があっても驚きなんてしない。だが、初見ならば驚きを隠せないだろう。所詮ゲームだから、絶望とまでは言わない。それでも、多少の戦慄はする筈だ。一度倒した相手が、更に強力になって再び立ち塞がるのだから。

そうだ。まさか、最強のボスが更に強くなるだなんて、誰も思わない。考えたくもない。

「よしー三体まとめて封印するわよ!!」

勝機が見えた。

奥で控えてる獅子座は未だに押し潰すようなプレッシャーを放つ。獅子の名を冠するに相応しい存在感が、遠く離れていても肌で近々しく感じられた。

だが、目の前の三体を問題なく封印できれば、勇者側は数で勝ることができる。全員で挑めば、いくら他のバーテックスよりも強力な獅子座だろうと、倒せる。少なくとも、風にはその自信があった。自分や友奈、唯斗が真正面から攻撃して、樹と夏凜は動きを封じたり防い

だりのサポート、東郷は後方からの狙撃と攻撃の予兆を随時報告。未知ではあるが、ある程度のビジョンは浮かんでいた。

——それが油断だった。

風の考えは、目の前の三体を無事に封印できた場合の話だ。いつの間にか、その前提条件を有にした考えしか浮かべてなかった。目の前の勝利に対して、風は盲目的になっていたのだ。

「——あつーば、バーテックスの様子が……」

異変に気が付いたのは友奈だった。

バーテックスが後退してる。

それが作戦なのか、将また生存本能があっただけなのかは分からない。ただ一つだけ言えるのは、4度目の戦いで初めて見る動きだったということだけだ。これまでは神樹に向かって一直線に進むか、勇者を排除しに掛かるかの二択だった。まさか、『後退』なんて選択肢があるとは誰も思わない。

「ひ、引っ張られる…ッ!!」

「樹！ワイヤーを離しなさい!!」

縛られていた牡羊座も他と例外なく後退を始める。移動を始めたバーテックスを抑えられるほどの力は、樹には無い。勇者として飛躍的に上がった筋力でも、巨大なバーテックスをその場にとどめるだけの腕力にはなり得ないのだ。

樹は姉の指示に従ってワイヤーの手元を切った。

牡羊座のベルにはワイヤーが絡みついたままなので、怪音波で攻撃させることがなかったのは幸いとも言える。

水瓶座、天秤座、牡羊座のバーテックスはある場所——否、一体のバーテックスの元へと吸い込まれるように集まる。そのバーテックスは獅子座だった。圧倒的な存在感放ち、動かずとも場を掌握してる最敵だ。

次の瞬間——

「……なによ、アレ…ッ！」

「…………マジ？」

合体した。四体のバーテックスは、一つの『個』となり文字通り合体

したのだ。

それが強化であることは、火を見るより明らかだった。そして、それに危機感を覚えないほど勇者は鈍感ではない。単純すぎる計算でも、あのバーテックスはこれまでのバーテックス達よりも四倍は強い。元より計り知れてない力が、更に強大に、凶悪になっているのは肌で感じられる。

「が、合体した…？こ、こんなの聞いてないわよ!!」
「で、でも！これで四体まとめて封印できるよ!!」

動揺する夏凜に対して、友奈は明るく努める。これを機に、寧ろ集中すべき敵が一体になったのは事実。集中力の散漫からの奇襲の心配だけは、確実に減っていた。だが、それだけだ。それ以外の面では、寧ろ悪質になっていても何らおかしくない。

合体したバーテックスは、円を描くように数十もの豪火球を生み出す。それが示すのは考えるまでもなく、攻撃だ。

「——来るッ!!」

火球は稲妻の如く、一人一人を狙って放たれた。

一斉に地を蹴り場を離れるが、火球は各々を追尾する。追尾性は極めて高いようで、四方八方に散る唯斗達を正確に追ってきた。厄介さは、乙女座の爆弾より何倍も上だ。

唯斗も他と同様にその場を離れるが、火球は想像以上に追ってくる。逃げてでも隠れても、消えることなく追尾し続ける火球。それはこれまでで一番の厄介所だ。時間が経つにつれて数が増えるのだから、溜まったものでない。

「執拗いッ!!」

——ピコンッ!

唯斗がピコピコハンマーで火球を打つと、火球は跳ね返り他の火球にぶつかる。ピコピコハンマーの機能の一つだ。火球同士で爆発の連鎖が起こるが、爆風や煙を突き破り次の火球が刺すように飛んでくる。

——ピコッ！ピコッ！ピコッ！ピコッ！

「グッ…ッ！俺だけッ！多すぎッ！！だろおオオオオ！！」

弾き、打ち、返す。

それでも絶え間なく続く攻撃。

打ち返したのは、どうやら悪手だったらしい。だが避けても無駄なのは目に見えている。結局のところ、打ち返そうと逃げようと、被弾するリスクは大差なかった。

今の唯斗は格好の的だ。気を抜けば火球に当たり、手を休めれば迫り来る何十もの業火に焼かれる。

爆煙で視界を遮られ、次第に返すのが困難となっていく。そして遂に——

「グウっ、ああアアア！！」

——振ったピコピコハンマーが空振り、火球が唯斗へと当たる。

「ゆ、唯斗せんぱ——きゃあああつ！！」

「樹いい！！このおおお！！」

唯斗に気を取られ、樹が被弾する。その光景に冷静さを欠いた風は大剣で火球を両断するが、足を止めたせいで次に迫り来る火球に対応できない。

勇者は、次々と倒れゆく——

数分と経たず、唯斗達は地に伏していた。

「……痛っ……！」

唯斗の口から、苦が洩れた。

あんなに攻撃を受けても死んでいないのは、最後の砦とも言える精霊のバリアが展開されていたからだろう。それでも、何十と受けた火球は唯斗に確かなダメージを与えていた。

熱い。痛い。辛い。

泣き言だけが止めどなく溢れてくる。相手の理不尽さに腹が立ち、体を蝕む痛みや熱さに手が震える。未だに悠々と宙で此方を見下ろすバーテックスが憎くて、四方八方で倒れ呻く仲間を見ると心の臓が

締め付けられるような痛みを覚える。

(あと…少しッ、なのに…！)

胸の中で、ナニカが騒ぎ立てる。それは己を鼓舞して、こんな絶望的な状況でも立ち上がれと強要してくる。

(もう少しで…叶うのにつ!!)

それは ” 欲望 ” だった。虚ろな意識の中、それは大部分を占めていた。

(なんで…、何で邪魔するんだ…ッ！)

—— そうだ、元はと言えば全て『お前達』のせいじゃないか。苦行を強いられることも、こんなに腹が立つのも、勇者部に所属させられてるの——

「ぜんぶ、お前達のせいだ…ッ」

唯斗を突き動かすのは、憤怒だった。震える足で地を踏み付け、極彩色の地面に拳をぶつける。そして、唯斗は立った。幼子に押されただけでも倒れそうなほど不安定だが、唯斗は今一度バーテックスの前に立ち塞がる。

潰す。ぶっ潰してやる。

—— 手段は知ってる。

手の甲にある花形のゲージを見る。オンシジュームを象ったゲージの花弁は、総じて仄かに光を放っていた。

—— 準備は出来ている。

それは『切り札』だ。勇者に許された、逆転の一手だ。大した情報なんて与えられてないが、頼れるのはこの『力』だけだ。

「—— 満開」

勇者の憂^{八つ}さ晴^{当たり}らしが始まる。

—— 極彩色の空に、巨大なオンシジュームが咲き乱れる。儂くも神々しい光が、地に伏す勇者達を照らした。

「ゆ、唯斗…ッ」

風の呼び掛けは、誰にも聞こえることなく空中で霧散した。目に映るのは、純白と黄色で着色された神官服を身にまとった唯斗。切り札満開を切ったらしい。

神の力を身一つに受けたその姿は、どこか神聖さを感じさせる。普段は巫山戯てばかりの唯斗ですら、今は神の使者と称しても違和感はない。

——だが…

「……………なにあれ？」

すぐさま、風の目は奇怪なものを見る目が変わった。

唯斗の右手に紙飛行機、左手にはテディベア。背中には日輪を描くように無数のピコピコハンマーが浮いている。そのピコピコハンマーは、満開前とは違い金一色で着色されていた。まるで金メッキだ。先程の神々しさとは一転、安っぽい遊び人にしか見えなくなった。

「なんでやねん…」

悲しそうな唯斗の声が樹海化した世界に小さく響いた。その表情は、初陣で己の武器を手にした時の表情と同じだった。

咲き揃い臨む

勇者の『満開』とは、言わば二段階目の変身だ。更なる神樹様の力を身一つに受け、各勇者の特徴や長所を激的に強化した姿。

ならば、唯斗の満開では何が強化されたのか。

それは『遊び』だろう。勇者にはそれぞれ、モチーフとなってる花がある。結城友奈は桜、東郷美森はアサガオ、犬吠埼風はオキザリス、犬吠埼樹は鳴子百合、三好夏凜はサツキ。そして、唯斗のモチーフ花はオンシジウムだ。その花言葉の一つには『遊び心』とある。

それが色濃く反映されたのが、郡唯斗の満開だ。

もしそれを聞かされたら、本人は巫山戯るなど憤怒するだろう。どれだけ強くても、格好や武器が『遊び』で構成されていたら、やる気だって無くなる。

——だが、遊び心とて侮れはしない。相性の問題はあれど、通常の勇者状態でも唯斗はバーテックスを一方的に叩きのめせる力を秘めていた。それが更に強大なものへと進化を遂げたのだ。

無垢な子供が玩具を壊すように、無邪気な子供が虫を殺すように、神樹の遊び心は神敵へと無情にも牙を剥く。無垢無邪気な戯れは、時に殺意よりも残酷だ。

「……………」

唯斗が無言で右手を前に出すと、虚空から無数の紙飛行機が出現する。

「はぁ……………」

ため息と共に、紙飛行機は一斉出射された。狙う先は、合体したバーテックス。目の前に迫る無数の火球と共に爆発しながら、百メートルを超える巨体に数十もの紙飛行機が次々とぶつかる。そして――

——Booom!!

紙飛行機は爆発した。

満開で得た能力の一つ、紙飛行機は遠距離用の武器だ。その実態は、紙飛行機型の爆弾。威力は合体したバーテックス——レオ・スタークラスターと呼ばれる個体の火球を相殺する程だ。そして、総数は『無限』だ。唯斗が満開状態である内限定ではあるが。

「……紙飛行機……えっ、紙飛行機なの……なんかこう……もつとあるじゃん。剣とか槍とか、何なら盾でも構わないのに……ピコピコハンマーに続いて紙飛行機とティエイベア？ええ……だって、えっ？ええ……？」

虚空から次々と紙飛行機が出現する。そして担い手の唯斗は、困惑し項垂れていた。

勇者とバーテックスによる、紙飛行機と豪火球の撃ち合いだ。弾数で圧倒的に有利な唯斗が押してるが、レオ・スタークラスターの耐久能力の前では多少の被弾など無駄に等しい。紙飛行機では、レオ・スタークラスターを仕留めるには火力不足なのだ。

結局のところ、唯斗は攻め倦ねていた。

接近しようにも、今は紙飛行機で火球を迎え撃つのにやっとだ。下手にもらしたら元の世界へのフィードバックがあるので、出来るだけ撃ち漏らしは無くしたい。

「——っ！」

唐突に、後方から眩い光が放たれた。

振り返ると、空には光り輝くアサガオが狂い咲いている。美しさと儚さが幻想のように現れる光景——『満開』のエフェクトだ。

「東郷……？」

次に満開システムを起動したのは東郷だった。

本草の焦げる臭いが鼻を突く。

依然として、魚座が地中を泳ぎ自分の命を狙ってるのが肌で感じられる。良くも悪くも続く拮抗状態は、東郷を焦られる。

——そんな中、東郷の目に映ったのは、見たくもない光景だった。

「あ、あつ……い……ああああア!!」

何が起こったのか、理解したくない。でも、一番後ろで戦況を見渡せる東郷だからこそ、残酷な現実を受け入れざるを得ない。

自分以外、全員が地に伏してる。

全ては合体したバーテックス、レオ・スタークラスターの猛攻による結果だ。東郷以外は全員倒れ、レオ・スタークラスターもまだ余力を残してる現状。もはや敗北は目前だ。どう足掻いても覆しようがない状況が、東郷を盲目的にさせる。

バーテックス達の異変には気付いていた。後退して、獅子座へと吸い込まれるように集まるという異変。明らかな異常事態であり、警戒を強めたのは言うまでもない。

でも、何処かで楽観視もしていた。

これまでのバーテックス戦で、東郷達は一切の苦戦を強いられてない。最初のバーテックス戦では、与えられた力を振るうだけで乙女座のバーテックスを撃退することができた。

二度目の襲来では、本来ならば勇者部は初の苦戦をしていた。複数のバーテックスによる連携と、勇者としての経験不足が原因だ。——だが、勇者部は危なげなく三体のバーテックスを打倒した。打倒してしまっただけだ。

勇者達は、二度目で苦戦を味わうべきだった。

それが経験として積み重なり、強敵との戦いを想定できるようになる。本来の、射手座と蟹座の連携攻撃は死者が出かねない程の猛威を振るっていた。

だが、唯斗は連携攻撃のキーパーソンとなる蟹座を序盤に潰した。

——だから、東郷の頭には圧倒的な相手への苦戦や、その対処の想像が欠けていた。

現実是非情だ。

最初に倒れたのは、唯斗だった。

常に戦場で皆を先導し、弱虫な自分を、最初に励まして勇気をくれた彼。最近、少しだけ意識するようになった彼。

彼の苦痛の声が、微かに届いた。

「――」
頭が真っ白になった。手は機械的に魚座への攻撃を続けるが、焦りと恐怖で動かない筈の脚が震えてる気がした。

精霊のバリアがあるので、死んだりはしない。――そんなのは、分かっている。十分、理解してる。でも、それでも、万が一が頭をよぎる。もしも、バリアが展開されなかったら。もしも、バリアが砕けたら。もしも、回数や強度に限界があったら――

嫌な考えだけが浮かぶ。

バリアが万能だとは、どうしても思えない。勇者はシステムなのだ。どこかに不具合があったとしても、何一つおかしくは無い。

『勇者』は魔法なんかではない。時代と共に改良を続けられた大赦の技術なのだ。

「あつ……」

樹が被弾した。爆発音と共に、地面に叩きつけられる姿が見えた。

「ああっ……！」

樹を庇った風が、十数の身の丈ほどある火球を受けた。爆煙で姿が隠れ、安全の確認すらできない。

「やめて……やめてよ……っ！」

風や樹、唯斗に気を取られた友奈と夏凜の背に火球がぶつかり、爆ぜる。遠く離れていても、悲鳴は鼓膜を嫌に揺さぶった。

「ダメ……いやっ、嫌だ……！何で、こんな……ッ！」

慟哭することはない。狼狽することもない。ただ、現状に打ちひしがれた。たかが一体のバーテックスに足を止められ、仲間の危機に駆けつけることすらできない自分を嘆く。嘆き、勝手に傷付き、無力を憎む。

覚悟を決めた筈なのに、何の役にも立ててない。言葉だけで何も成し得てない。

魚座を攻撃する手も、次第に鈍くなっていく。

——その黒い感情は、『絶望』だった。

「——満開」

声が響いた。

暗くなる視界に光が刺した。心強い声、暖かい光。失いかけていた『希望』が、息を吹き返す。

「っ!? ゆい…と、くん?」

視線を上げると、視界いっぱい咲き誇る巨大なオンシジュームの花。そして、その中心には『彼』の姿があった。傷付いても、叩きめされても立ち上がった少年がいた。

(…そうだ、まだ…終わってない!)

現状に目が曇って、忘れていた『切り札』があった。夏凜曰く、使うほど強くなるという勇者だけの『手段』が残っていた。

「唯斗君は、まだ戦ってる…!!」

倒れても、希望を捨てずに何度でも立ち上がり、バーテックスの前に立ち塞がる少年がいた。誰よりも前で戦って、強さを証明し続けた少年がいた。

ならば、自分はどうするのか。

——決まってる。

(また、勇気を貰っちゃった。また、唯斗君に助けられた……！申し訳ないのに、こんな私自身が情けないのに……それがどうしようもなく嬉しい！唯斗君が居るだけで、こんなにも暖かいっ！この気持ちに、ずっと浸っていたい!!)

また、彼と明日を迎えたい。凡々とした日常を送りたい。そして、この気持ちを伝えたい——！

——心臓が高鳴る。

——心が叫べと言ってる。

——全身に回る熱を、声にしたい。

あの時と同じだ。東郷美森が『勇者』になった日と何ら違いない。この気持ちも、あの熱も、全てを乗せて叫ぶだけだ。

「——満開!!」

まずは、彼の隣に立とう。

そして、いつかは支える。支えられるだけの東郷美森ではなく、隣で支え合える東郷美森になる——！

東郷美森の『満開』

それを一言で表すなら、移動砲台だ。

花形の可動砲台を展開した移動台座が出現し、ライフル等の手元武器が無くなった代わりに中距離遠距離特化になる。近距離が弱点になるが、台座には自分以外も乗れる為、場合によってはその弱点も補える。

——東郷の『満開』、その最大の強みは殲滅力だろう。複数の可動砲台から放たれる高威力のレーザーに、東郷本人の狙撃技術。それを複数同時に行えるマルチタスク。それが相まって、無類の殲滅力を誇る。東郷の強みは、満開だけでなく本人の技術力によるものが大きい。

「はあ!!」

台座を押し潰そうと体当たりをしてくる魚座のバーテックスに、東郷は花形の砲台を集中させて放つ。光の束はバーテックスの大部分を削り取る。そのまま顕現した御魂を撃ち抜き、魚座は砂となり地に落ちた。

「まず、一体……!」

満開時は、祝詞や封印の義を必要としない。一定以上のダメージを与えたら、バーテックスの心臓でもある御魂を顕現させることができるのだ。

(これが…満開っ!)

あんなに苦戦してた魚座が、簡単に倒せるだけの力。浮かれる心を自制心で鎮める。相手は未知のバーテックス、油断は大敵だ。

「唯斗君!」

「と、東郷……?なんか……その、ゴツツイな。移動砲台か?……紙飛行機とかテディベアじゃなくて……?」

「思ったより気にしてる……!」

唯斗の武器は、紙飛行機にテディベア。極めつけは複数個に増えた金色のピコピコハンマーだ。これでは、勇者ではなく遊び人だ。レベルを上げても賢者には成れないタイプの遊び人だった。

武器とは反対に、格好だけは神の使いという感じなので、余計にタチが悪い。

「アレ、倒せると思う?」

「……火力が、少しだけ不安かも。近距離から唯斗君の攻撃を一方的に打てたら、可能性はあるけど……」

「ぶっちゃけ、近寄れないよな」

火球は、唯斗の紙飛行機と東郷の狙撃で対処出来る。だが、それは相殺できると言うだけの話だ。もしも超近距離で攻撃したとして、その場で放たれた火球は躲せないし、レーザーや紙飛行機で迎え撃つても唯斗が爆発に巻き込まれる。

有利には立ち回れても、やはり決定打に欠ける。

「あと一人、いれば——」

「——満開!!」

二つの声が重なる。

樹海化した世界に、オキザリスの鳴子百合が咲いた。第三、四回目の『満開』だ。光が晴れた先には、白を基調色とした衣装に身を包んだ犬吠埼姉妹。

「唯斗！小さいバーテックスが神樹様に向かってるわ!!」

「風先輩?!ま、まじですか?」

遙か遠く、ギリギリ視界に映るのは——紛うことなき変態だった。

カボチャパンツ一丁で首枷をはめたまま全力疾走する、唯一人型の個体。双子座のバーテックスだ。その速度は並の車も超える程。数値にして、250km/h超えだ。

「東郷!」

「ぐっ……当たらない!」

東郷の正確無比な狙撃も、距離が離れすぎて躲される。遠距離武器を得た唯斗でも東郷以上の精度はない。だからこそ——

「——私がやります!」

樹が名乗り出た。

傲慢にも、樹は皆を守ると宣言した。そんな彼女が、激を極める戦況で傍観なんてできる筈がない。覚悟を固めた彼女は姉以上に頑固なのだから。

——樹の『満開』は、武器であるワイヤーの超強化だ。

背後に巨大なアーチと花が現出し、そこからワイヤーを射出できる。

元より、勇者の中でも攻撃の『範囲』と『速度』に関しては樹が随一だ。流星に『長さ』では東郷に劣るが、『広さ』は誰よりもある。満開時は、ワイヤーの射程距離・動作が強化されるのだ。

「はあ!!」

糸の雨が、双子座のバーテックスを飲み込む。全身を縛り、結び、纏れる。機動力の高い双子座も、広範囲への攻撃に対しては避ける術を

持たない。

ワイヤーは双子座の身体に食い込み——切断する。

双子座の役割が戦闘ではなかった、ということもある。それでも、満開をした勇者はバーテックスを軽々と打ち倒す。封印の義をしなくても御魂を顕現できるのは、戦闘での有利さを格段に上げていた。

「ナイス樹！流石アタシの妹だわ!!」

「あとは、あのバーテックスだけ……っ!?お姉ちゃん！アレって——！」

「な、何よあれ！なんかゲンキっぽい玉が来てるわよ!!」

レオ・スタークラストーから放たれたのは、小さな星を思わせる程の巨大な豪火球。満開した状態でも、安易に受けたら死を連想させる。

「あの攻撃……！多分、洩らしたらダメ……!!」

——樹海化した世界へのダメージは、元の世界へとフィードバックする。

巨大すぎる火球は、下手に打ち漏らしたらフィードバックで街が消えてもおかしくは無い。それで死ぬ人の数は計り知れない。勇者には、避けるという選択肢は残ってないのだ。

「……ヤバない?」

全員で総撃しても、打ち消せるかは怪しい。

「——アタシが受ける」

名乗り出たのは、風だった。

「お、お姉ちゃん!」

「アタシがアレを抑えるから、そのうちに倒しなさい!」

「そんな……！無茶です!!」

「無茶でも無謀でも、やるしか無いわ!」

風の中では、様々な感情が渦巻いている。部長としての責任感や、巻き込んでしまった罪悪感。そのふたつは、きつといつまでも風の心に残り続けるだろう。——でも、それだけではない。

風は感化されたのだ。

誰よりも早く立ち上がった唯斗に感化され、一人でバーテックスを完封した東郷に感化され、勇ましく成長を遂げた樹に感化された。

——故に、決断した。

「大丈夫よ、アタシの女子力があんな攻撃程度に負けるわけないじゃない。偉大な先輩を信じなさい！」

策なんてない。無謀にも、『満開』で得た力をフルに活用して受け止めるだけだ。それは策と呼ぶには無骨すぎる。だが、決して蛮勇ではない。

——風の『満開』は至極単純だ。

身体能力の超強化。追加武装もなく、ただそれだけだ。——それに、敵側からしたら厄介極まりない。

唯斗や東郷、樹は満開していても弱点がある。それは本人だ。満開で武装が強化されても、身体は満開前と大差ない。故に弱点になってしまうのだ。だが、風は生身の防御力すらも超強化されてる。それが指すのは、重戦車のような攻撃力と防御力、戦闘機のような飛行能力と俊敏性。その全てを兼ね備えてるということだ。

他の勇者が武器に割いてる分のリソースを、全て身体能力に割り振ってるイメージだ。

だからこそ、レオ・スタークラスターの攻撃を受けるには最も向いている。

「…じゃあ風先輩、コレも持っていつてください」

「これ…？」

唯斗は左手持っていたテディベアを空中に投げる。すると——

「わっ、大きくなった…!?!」

テディベアは膨らむように大きくなり、成人男性並みの大ききさで変化は止まった。そして、動き出した。

「うえ!?!、このクマ動くの!?!」

「はい、くまマン。金ピコ二刀流で頑張ってね」

「くまマン…?」

唯斗は背に浮いてた金色のピコピコハンマーを二つ手に取り、テディベア——唯斗命名《くまマン》に渡した。ネーミングセンスについてはおご愛嬌。

「〜♪」

金色のピコピコハンマーを受け取り、嬉しそうに振り回すテディベアは、誰の目にも奇怪に映ったの。

「……唯斗先輩、このクマちゃん…くまマン? って生きてるんですか?」

「ヤあ?」

「さあって…アンタのでしょうが」

「生きてるかは分かりませんが、意思疎通は出来ますよ。AIってやつ? なんですかね。このくまマン、めっちゃ触り心地良いのにめっちゃ衝撃を吸収するんですよ」

唯斗の二つ目の武器、或いは防具はテディベアだ。

簡単に言えば、動いて攻撃もする盾だ。攻撃力は唯斗と同等。両手にピコピコハンマーを装備させることによって、通常勇者時の唯斗をも上回ることも可能だ。

だが、最も注目するべき点は『衝撃吸収』だ。

並の攻撃では一切傷つかず、バーテックスの中でも最大級の威力を誇る射手座の太い矢も受け止められる耐久性。まさに、小さな移動要塞だ。

「——それじゃあ、そっちは任せるわよ!」

「…うん、お姉ちゃんも頑張って!」

「(武運を…)」

「風先輩、終わったなら寿司と焼肉を奢ってもらうんですからね。だから——頑張ってください!」

「……………なんか、唯斗から素直に応援させると怖気と寒気が…」

「おれ、ふうせんばい、きらい!」

「アンタの日頃の行いのせいだよ」

決して、今生の別れではない。必ず生きて帰る、そんな願いや意思を込めて——勇者達は『いつも通り』を演じる。日常はまだ近くにあると感じて、安心したいからこそ『いつも通りの勇者部』で在れる。

勇者達は、最後の決戦へと臨む——

結城友奈は勇者である

「……な……ゆう……！」

誰かが、私を呼んでいる。

蒸すような暑さと、身体の節々の痛み。朦朧とする意識の中で、それだけは理解できた。

(…?…私、何してたんだっけ…?)

身体が誰かに揺さぶられてる。とても乱暴で、急いでるような感じだ。分からない。分からないけど、背にあたる地面がヒンヤリとしていて気持ちがいい。でも、半身に対して、熱さと痛さが嫌というほど刺す。

誰かの呼び掛けだけでなく、聞き覚えのない轟音も鼓膜を叩くように揺らす。爆発音や、叫び声。ドンツと何かがぶつかるとような音と、聞き覚えのある猛々しい声。時々、ピコンツと何処か場外れな音も鳴ってる。

「う、うう……」

力が入らないと思っていた身体は、想像に反して簡単に動いた。それでもガンガンと痛む頭には、自分のことながら忌々しさを覚えた。

「友奈！起きなさい!!」

やっぱり、知ってる声だ。凜としていて、聞くと落ち着く仲間の声。それは――

「か、りん……ちゃん?」

「っ！いつまで気絶してるのよ、友奈!!」

「ど、どういう――っ!?!」

そうだ、思い出した。今は戦いの最中だったんだ。覚えてるのは、バーテックスが合体して、その攻撃で唯斗くんと樹ちゃん、風先輩が倒れたところまで。その後は、背に火球を受けて気絶していたんだ。

思い出した途端、顔から血の気が引くのを感じた。

「夏凜ちゃん！み、みんなは!?!」

やってしまった……！緊急事態なのに、マヌケにも気絶してたなんて

笑い話にもならない。勇者として、みんなを——神樹様を守らないといけないのに。

嫌な想像をしてしまった。私が気絶してる間に、取り返しのつかない状況になってしまった想像を。それを笑い話のように否定して欲しくて、私は夏凜ちゃんに詰め寄った。

「全員、戦ってるわよ……！私と、アンタ以外はね!!くっ……！完成型勇者の私が足を引つ張るだなんて……!!」

自嘲気味に悪態をつく夏凜ちゃん。

みんなの無事が嬉しい反面、泣きたくなるほどの後悔に近い自責の念が湧いた。

——きつと、本当に足を引つ張っていたのは私だ。夏凜ちゃんがここに居るのは、気絶してた私を守るためだろう。それが無ければ、夏凜ちゃんは今頃前線で双刃を振るっていたに違いない。なのに、夏凜ちゃんは私を一切責めない。

嬉しいけど、それ以上に申し訳がなくて不甲斐ない。

「ごめん、夏凜ちゃん……私のせいで——」

「……自惚れないでちょうだい、結城友奈」

口から溢れ出た謝罪の言葉を、夏凜ちゃんは受け入れてはくれなかった。むしろ、謝罪そのものを場違いだと言わんばかりに言葉を紡ぐ。

「私は私だけの意思で今、この場に居るのよ。あんたを守るため？はっ、バカにしないで。私は『勇者』よ。仲間を見捨てて戦果を求める『愚者』じゃなくて、取りこぼしなく全てを救う『完成型勇者』なのよ！」

堂々と言い放つその姿は、きつと尊敬に値するのだろう。可能不可能を考えるよりも、絶対に出来ると確信してる。その自信こそが夏凜ちゃんの誇りであり、夏凜ちゃんの求める、『勇者』以上の『完成型勇者』なんだと思った。

上を見ると、気絶前とは次元すら違うと思えるほどの戦いが繰り広げられていた。物凄く巨大な火球を全身で受け止める風先輩と、両手

に金色のピコピコハンマーを持つてる成人男性サイズのクマ。少し離れた所では、レーザーの雨と虚空から飛び出す無数の紙飛行機、稲妻のように宙を駆ける火球を全て貫き、轟音を響かせるワイヤーの波。

「…えっと、クマさん？それと紙飛行機も…？」

「あんなの、あのアホしかいないでしょ」

武器や形はどうであれ、みんなは私が思い描く『勇者』だった。圧倒的な力へ、勇気を持って挑む者。我が身を顧みず、全てを救ってみせる人。

——憧れてた。

みんなの姿は、私が——結城友奈の求める根源が詰まっていた。私のはあの勇ましい『勇者』に憧れていたんだ。理由は分からないし、いつからかも分からない。でも、物心ついた時には呆然にも『勇む者』への憧れがあった。

「——夏凜ちゃん、間に合うかな？」

「何がよ？」

「私も、みんなと肩を並べて戦ってもいいのかな？足手まといだった私が、また『勇者』に成ってもいいのかな？」

きつと私は、不安なんだ。

私自身、戦うことが好きな訳では無い。武道を学んでいたのも、人を傷付けるためではなく守るため。でもその反面、戦うことで守れるなら嬉々として戦おうとも思ってる。——それしか、私には出来ないから。

でも、その唯一で失敗した。

その失敗は、気丈に振舞っていた『結城友奈』としての自信を容易く打ち碎いた。戦うことを善としていた『勇者』の私は、失敗を経験してしまったのだ。

「——馬鹿ね」

「……………」

「アンタと共闘した回数が一番少ない私に聞かないでちょうだい」

「…そう、だよね…っ」

言われてみれば、私と夏凜ちゃんが肩を並べて戦場に立ったのは今日が初めてだ。思えば夏凜ちゃんの初陣では、唯斗くんと夏凜ちゃんの二人だけでバーテックスを倒していた。勇者としては、私と夏凜ちゃんはまだまだ疎遠だった。

「——でも、アンタが足手まといじゃないことだけは断言出来るわ」

「……そんなの——」

「友奈、アンタは『選ばれた側』なのよ。『勝ち取った側』の私と違って、最初から神樹様に選ばれた勇者よ。そんなアンタが、足手まといなわけないじゃない。……いえ、私が認めないわ！選ばれたなら、気丈でも強がりでも！結城友奈は勇者に成りなさい!!」

「…っ！」

傍から見れば、自分の誇りの強要だ。押し付けがましいとも言えるだろう。でも、それでも、全身に響いた。夏凜ちゃんは、私に勇者で在れと言ってくれた。そうで在るための理由をくれた。

たとえ与えられただけの役割でも、それが私の根源なら——

「ありがとう、夏凜ちゃん」

「…べ、別にお礼を言っただけから言ったわけじゃないわよ」

「それでも、ありがとう。諦めかけた私の手を引いて、まだ勇者のまま得意させてくれて！」

「ちよっ！だ、抱きつくくな!!」

嬉しくて、つい夏凜ちゃんに抱きついてしまった。

今なら、胸を張って言える。

私は——【結城友奈は勇者である】、と!!

「はあああああ!!」

「——!!」

巨大な火球を受け止めるのは、風とテディベア。それぞれの武器を

太陽の如き火球にぶつけて、空へと押し返す。

炎の塊の筈なのに、レオ・スターククラスターの火球には確かな質量を感じさせる。実際の炎は、剣を振るっても幻想のようにすり抜け、揺れるだけだ。だが目の前の炎球は、すり抜けるどころか鉄球以上の強度を感じる。

きつと、風が一人だけならば既に炎球は落ちていた。よくても、風と共に空中で大爆発を起こしていただろう。

そうなっていないのは、一重に風の横にいるテディベア——『くまマン』やピコピコハンマーの能力のおかげだ。

くまマンの衝撃吸収能力や、ロケットのジェット噴射のような浮遊能力。その二つに足して、『満開』前から同様のピコピコハンマーに付属していた反射能力。それらが合わさって、風の何十倍もある火球を受け止め拮抗することが出来ているのだ。

「——いつまで持ちそうかしら、部長さん？」

「っ!?だ、誰!？」

唐突に、『声』が響いた。幼くもないし、熟れてもない女性——否、少女の『声』だ。声の質は東郷に近いものを感じるが、それ以上に大人びてる冷静さも感じた。驚きで手元が緩みかけたが、風は根性で持ち堪えた。

「誰って、隣にいるでしょう?」

「…もしかして、くまマン?」

「…その名前、物凄く不愉快ね。ある意味では彼らしいけど。まあ、いいわ。私はくまマンよ」

テディベアは、何かを取り憑いたように流暢な口調で話し始める。それは唯斗の言っていたAIではなく、『命』を感じさせる喋り方だった。

「…えっと、あんたって生きてたの?」

「それが『くまマン』のことなら、元から生死なんて無いわ。飽くまでも武器であり、防具なんだから。『私』のことなら、既に——いえ、この話はやめましょう。今は関係ないわ。それに、貴女には話を聞いて

る余裕なんて無いでしょ」

くまマンの言葉に、風は小さく頷いた。言葉で肯定するまでもなく、余裕が無いのは確かだ。だがそれでも、くまマンの言葉に違和感——というまではいかないが、僅かに引つかかる部分はあった。まるで『くまマン』と『私』が別の存在のように語るくまマン。

「ぐっ…ぬぬぬう!!クマえもん!何かいい手とかないの!?!」

「く、クマえも…:あるには、あるわ…:。あまりオススメはしないけどね」

某狸型ロボットに似た名前前で呼ばれ、困惑するくまマン。だがツツコミは本職ではないらしく、ギリギリ受け流した。

「——要は、爆発させれば良いのよ」

「えっと、アタシに死ねと申します?」

「そんなわけではないでしょう?他人はどうでもいいけど、彼の知人は死なせたたくない。だから力を貸してるのよ」

「本当に、熊の手も借りたい状況なのよね!!猫じゃ物足りないわよ!!」

「…:説明、するわよ?」

脱線で埒が明かない風を置いて、くまマンは説明を続ける。

「さっきも言ったけど、空中で爆発させれば良いのよ。そしたら他の勇者には被害が出ないし、現実へのフィードバックもない」

「…:…:続けて」

「もし、貴女が爆発に巻き込まれても…:まあ、死にはしないでしょね。『満開』してるのだし。——でも、万が一があるかもしれない。万全を期さないと、誰だつて不安よ。だから、私がいるの」

「…:っ、つまり?」

「貴女がアレを爆発させて、私が庇う。私の…:…:って言うか、『くまマン』の耐久性があれば無事なのは確実よ。軽い打撲くらいは覚悟して欲しいけど」

レオ・スタークラスターの火球は、総じて水風船に近い。炎に纏う球状の何かがあり、それを少しでも傷付けたら、限界まで濃縮された濃密な炎が溢れ出して爆発を起こす。それが人体の何十倍もの大きさならば、その威力は満開時の勇者を殺しかねない程。

——それを、くまマンは耐えられると言った。

感情論ではなく、極めて冷静に事実を告げているのだ。

「…信じて、良いのよね?」

「彼の——唯斗の尊厳にかけて、信頼に足る結果を出すわ。それが、私達の『約束』だから」

「約束?…よく分からないけど、貸してもらえらるなら何だって使うわ! くまの手だとしてもね!!」

風は一旦下がると、地面に着地する。

そして、膝を曲げて火球を眼光で射抜き——

「これが! アタシの!! 女子力だああああ!!」

巨大化した大剣を、万力の握力で固定。そのまま遠心力と超強化されたパワーに任せて横薙ぎを放つ。少し前に二体のバーテックスを両断した時と同じ手段だが、その威力は天と地程の差があった。

——僅かな抵抗の後、火球は真つ二つに斬れた。

「ナイスよ、部長さん。あとは任せなさい——」

テディベア——くまマンは両断された火球に背を向け、風の全身を余すことなく抱き締めて丸くなる。直後、火球だったものは眩い光を放ち、爆発した。

——BOOOOOOOOOOM!!

爆風が直撃したくまマンは、ハンマーで殴られたスーパーボールのように弾かれ地面にぶつかる。二転、三転と繰り返した後に、極彩色の巨大な幹にぶつかって止まる。

表面を薄茶色に焦がしたくまマンは、数秒間静止してから、動き出した。

「…無事かしら、部長さん?」

「ゲホつ…いな、何とかかね。でも、体力的に限界かも…」

「無理もないわ。アレを長時間抑えてるだけでも体力を消費してたのに、まさか真つ二つにするなんて…予想外よ」

「やるなら、派手に…ね……」

その言葉を最後に、風は意識を手放した。

「お姉ちゃん!!」

大轟音が響き、一番の厄介所だった巨大な火球は爆発することによって消えた。だが、脅威が去ったと共に風の生存も確認できない現状。樹の呼び掛けには、誰も答えることはない。

——否、一つだけ答える声があった。

「大丈夫よ、部長さんは生きてるわ」

「「っ?!!」」

それは、こんがりと焼けた熊だった。

唯斗命名、テディベアのくまマンだった。背中から後頭部にあたる部分を薄茶色に焦がしたテディベアがそこにはいた。

「ゆ、唯斗君?これって喋っ——」

「しゃ、喋ったああああ!?えっ、怖っ!何コイツ生きてたの!?ヒエツ…!ま、まさか幽霊とかじゃないよな!?無理無理無理無理!俺ユーレイとか無理なんだ!!トーゴーヘルプミー!!」

「持ち主が一番動揺してるっ!」

唯斗は幽霊やホラー全般が苦手系男子だった。

少なくとも、テディベアこと『くまマン』は最初に唯斗が出した時には、一言も発してなかった。それが、急に現れて喋り始めるのだ。唯斗にとっては恐怖でしかない。

「えっと、くまマンさん…?」

「ええ、くまマンよ。残念ながら、くまマンと名付けられてしまったわ…」

「お姉ちゃんは、本当に無事なんですか…?」

「それは保証するわ」

樹にとつて、その熊は信用に足る存在かは分からない。だが、悪意は感じなかった。彼女?彼?が無事と言うのであれば、きつと無事なのだろう。

「じゃあ後は——」

本体を叩くだけ。

東郷が言葉にするまでもなく、全員が理解してる事だ。それ故に、難しさも身をもって知っている。レオ・スタークラスターは木偶の坊やデカいだけの的ではなく、知を得て策を弄する最敵だ。

無闇に突っ込むのは、無謀だ。

「唯斗君、樹ちゃん。何か案はある？」

「くまマン……？いや、幽霊……？そもそも本当にAIなのか……？喋る？クマが？テディベアが……？クマ、コワイ……！クマのユーレイ、チョーコワイツ!!」

未だにくまマンショックで狼狽え続けてる唯斗。その正体はAIか幽霊か、将また聴覚がバグってしまったのか。唯斗の頭はショートしていた。

「ていつー！」

斜め45°からのチョップ。壊れた機械を直す要領で、東郷は唯斗の頭を叩いた。馬鹿と機械はこれに限ると言わんばかりに。

「いてっ!?と、東郷に殴られた！隣の席の山田くんにも殴られたことないのに!!」

「……また山田さんですか？」

樹が呆れたように呟く。定期的に勇者部二年生組の口から出てくる人名『山田くん』。それは、音楽のテストで声を失ってしまった山田くんだ。

「……腕を失った山田くんが、人を殴れるわけないでしょ!!」

「山田さん!?山田さんに何があつたんですか!？」

「何って……刺激的な恋の結果、かな？」

「ふふっ、山田くんは一途すぎたのね……」

「……山田さんって、何者……？」

歌のテストで声を失い、刺激的に一途な恋で腕を失った山田くん。その正体は、隣の席の山田くんなのだ。前席にも後席にも居なく、それ故に右隣にも左隣にもいる存在。それが『隣の席の山田くん』なのだ。

「——雑談は、もう済んだかしら？」

「「ひえっ……」」

クマは怒っていた。心做しか、無機質な筈の目部分が絶対零度まで冷えきっている。くまマンは怒らせてはいけないタイプのクマだった。

「ええ、良いのよ？べつに。心ゆくまで、無駄な時間浪費を楽しめば良いと思うわ。世界の危機なんて、山田くんとかいう人に比べたらご馳走と生ゴミくらい違うのよね？自分達が何をすべきか、それを考えて今の結果なら、私から言うことは何も無いわ。ほら、どうしたの？遠慮なく話さない？ぬいぐるみの戯言なんて知らぬ存ぜぬで、世界滅亡まで熱く語らつてるといいわ」

「ぜ、全軍突撃いー!!あのでっかい奴ブッコロせえ!!」

「照準、一点集中！貫く!!」

「お、お姉ちゃんの仇い!!」

「……」

バーテックスの放つ火球は唯斗が紙飛行機で相殺し、その間を縫うように抜け出た火球は樹がワイヤーで貫く。

「オツラアアア!!」

唯斗は背後に浮く金色のピコピコハンマーを手に取ると、レオ・スタークラスターに向かって投げた。それは山羊座の名を冠したバーテックスのと戦場で披露した、諸刃の技だ。一撃で敵を打ち砕くが、手元に武器が無くなるというデメリットを背負った、技とも呼べぬ力押し。本来ならば戦場で使うなど、正気の沙汰ではない。——だが、『満開』と同時に出現した十数個のピコピコハンマー。

つまり単純な話だ。一撃必殺の技が、デメリット無しで何度も撃てるのだ。

「ピヤッハアアアー！粉碎☆玉砕☆大喝采!!」

『満開』によって色が変化したピコピコハンマー。その武器は、至極単純にパワーアップしていた。威力の向上、それだけだ。それ故に、強い。

潰し、砕き、抉る。それは正に『破壊の権化』。唯斗の真骨頂は、ピ

コピコハンマーによる猛攻撃だ。阻むこと出来ぬ程の『破壊』。全てを撃ち落とし、圧倒を誇る『暴力』。

本来ならば、唯斗に次いで高威力である友奈の『勇者パンチ』を受けても傷一つ付かないレオ・スタークラスターの凶体。それも今となつては、金の『暴力』が振るわれる度に罅割れ、風格を失っていく。最早、樹のワイヤーに縛られても抜け出すことは叶わない。

「今です！東郷先輩!!」

「やっちゃえ！東郷!!」

「——っ!!」

複数の可動式砲台が、青く眩い光りを放つ。それは『合図』だった。敵を殲滅するためのチャージを終え、今にも弾けんとはばかりのエネルギーを溜め込んだ砲台からの、限界ギリギリの『合図』。

狙うは真ん中一点。

「はああああああ!!」

太く鋭い光線が、鋼鉄の如きレオ・スタークラスターの凶体を串刺しにする——!!

力を失い、墮ちるバーテックス。その周りを囲うように、数本の小太刀が放たれる。

「封印の儀、開始!!」

「「っ!!」」

—— 紅い勇者と、桜色の勇者。

「みんな！遅れちゃってごめん!!」

「友奈ちゃん!？」

「み、みよっしー!？」

「にぼっしーよ!!……いや、違うわよ!?!三好夏凜よ!!」

「あ、あはは……夏凜さん、認めちゃってる……」

残る仲間、三好夏凜と結城友奈の合流だ。

誰も、遅いとは言わない。むしろバーテックス戦はここからなのだ。バーテックスは御魂の破壊をもって終了とする。つまり、まだ大仕事は残っているのだ。

——最後の決戦が、始まる。

勝利を求めて――

それは『御魂』だった。

紛うことなき、バーテックスの心臓とも言える唯一の弱点部。何度も見た逆四角錐型のコアだ。

――だが、多種多様な御魂を見てきた勇者部でも疑ってしまった。

アレは本当に、自分達の知るバーテックスの御魂なのかと。

「……これは、流石に予想外……だな」

「あれが……御魂……ッ!？」

それは単純に、大きかった。常識という概念を超えて、山や城を軽く超えて、それは星を想像させる程の巨大過ぎる御魂だった。

そして、問題はそれだけでは無い。大きき以上に、其れが在る場所が問題なのだ。

――宇宙。

遙か上空、人類の知が未だに届かぬ未知の領域だ。空を見上げれば視界を埋め尽くすほどの逆四角錐型。硬さ乙女座よりも、分裂双子座よりも、毒霧山羊座よりも、高速回転牡羊座よりも――

圧倒的な凶悪だ。

レオ・スタークラストが最凶である所以、それは万能性だ。火球による怒濤のホーミング攻撃、太陽を思わせる程の強力且つ広範囲の豪炎球、傷付く度に再生する生存力、鉄壁と称しても偽り無き強度――そして、バーテックスの唯一の弱点、『御魂』の未知性。

レオ・スタークラストの本体を墮としても、『絶望』は、未だに潰えてはいなかった。

それでも――

「……東郷さん！」

勇者であると決めた少女は、胸に咲いた『希望』に縋る。弱々しくても、不格好でも、勇者は——結城友奈は決して諦めない。

「わたしを、あそこまで連れて行って!!」

「友奈ちゃん……うんっ！行こう、一緒に!!」

東郷の満開で出現した移動台座ならば、数人を同時に宇宙まで運べる。これから封印の維持と御魂の破壊、二つの班に分かれて行動することになるが、東郷だけは後者で確定だった。

「私達は封印の維持とバーテックスの見張り番をしてるわ。友奈、東郷……託すわ。しくじるんじゃないわよ！」

三好夏凜は、己のプライドを二人に託した。誰よりも勇者としての戦果を求めていた夏凜だが、きつと感化されたのだ。自分の目指す『完成型勇者』とは違う道の果てににいる、結城友奈という『勇者』に。「が、頑張ってください！友奈さんと東郷先輩なら、絶対に勝てるって信じてます!!」

樹から言われる、『信じてる』という言葉。それは時に重りとなり、身を縛ることもある。だが今の勇者ならば——『希望』を抱いた勇者ならば、応援を力に変えられる。

東郷と友奈は手を繋ぎ、台座に乗り込む。

「みんな、いってきま——」

「——待ちなさい」

友奈の言葉は、一体の熊に遮られた。

全員の視線を集めるのは、背中と後頭部をこんがりと焼いた成人男性サイズのテディベアだった。無機質な目に、触り心地の良さそうな身体。不相応だが、両腕に装備してる金色のピコピコハンマー。不審者ならぬ、不審熊だった。

「えっ……このクマさん、喋った……?」

「そ、そそそんなわけないでしょっ！クマが……って言うか！テディベアが喋るわけ——」

「落ち着きがないわね。静かに出来ないのかしら?」

「……………っ!？」

熊は場の空気を制する。

友奈と夏凜はテディベアこと唯斗命名『くまマン』が話すのを見るのは初めてだった。遠巻きに、戦ってる姿は確かに見た。それでもテディベアが意志を持って、命を感じさせる様な会話をして見せるとは考えもしなかった。

戦慄する二人を放って、くまマンは言葉を続ける。

「行くなら、^{唯斗}コレも連れていきなさい」

「ふえ…う」

傍観を決め込んでいた唯斗は、突然の指名にアホみたいな声で答えた。

唯斗自身、既に皆から忘れ去られてるとすら思ってた。事実、くまマンが指名さえしなければ、恐らくは誰も気にかけてりはしなかっただろう。

「た、確かに唯斗君が居た方が确实ね…」

「えっ、どゆこと？」

「今の唯斗君なら、どんなギミックにも対応が可能よね？」

——ギミック。

それは全ての御魂にあった特殊能力だ。異常なまでの強度や、攻撃を避ける御魂。増えたり、毒霧で目隠しをしてくる御霊も存在した。

東郷の考察では、レオ・スタークラスの御魂、その能力は宇宙規模の大きさ以外にもある。元より、複数のバーテックスによる複合体がレオ・スタークラスターだ。ならば、融合した御霊に複数の能力があったとしても、何ら不思議はないと東郷は考えているのだ。

唯斗ならば、遠距離から近距離まで全てをこなし、尚且つ爆発的な攻撃力である程度の困難ならば粉碎できる力を秘めている。

「確実に勝つなら、私は唯斗君が居た方が良いと思う。あつ、友奈ちゃん力が不足ってことを言いたいんじゃないか？」

「あはは、大丈夫だよ東郷さん。分かっているから！唯斗くん、私からもお願い！力を貸して!!」

「……………まあ、いいか。渋ることでもないし」

満開の解除までは、まだ少しだけ時間がある。ブーツとしてるには勿体なさすぎる神の力は、まだ身に残ってるのだ。

「じゃあ、行こう！東郷さん！唯斗くん!!」

「ええ！」

「うっす」

蒼と白の台座は、三人の勇者^{希望}を乗せて空を目指す。

友奈は全てを救うために、東郷は仲間と明日を迎えるために、唯斗は平穏な生活を求めて――

レオ・スターククラスターのと最終決戦が始まる。

「……………」

御魂の元へ向かう最中三人は一言も発しない。

恐怖や不安、使命感が友奈や東郷の心を渦巻いていた。自分達の失敗は仲間の死を意味する。それどころか、人類の命運すらも握っている現状だ。たとえ手足が震えていようと、誰が責められようか。

普段の友奈ならば、それでも場を盛り上げようとするだろう。それをしないのは、余裕がないからだ。どれだけ身に超人的な力を秘めていたとしても、所詮は中学生。東郷や唯斗も同様だが、少しづつ近づく最終決戦を想像して、竦んでいた。

「……………ボリボリボリ」

「……………ゆ、唯斗くん？」

――訂正、一人だけイカの姿フライを貪ってるアホがいた。

移動台座が風を斬る音と咀嚼音だけが、その場に響いていた。友奈に呼び掛けられた唯斗は、ジト目で両の腕に抱え込んだ大量のイカの姿フライを隠すように、半身になる。

「……あげないぞ?」

「えつと…欲しがってるわけじゃないよ?ただね、なんでお菓子持つてるの?」

友奈の疑問はもつともだ。どういう仕組みか、勇者に変身した時点で身に付けていた私物は消えてしまう。それは服だけでなく、鞆や食材も同様だ。勇者システム——大赦の謎技術によるものだろう。仕組みは一切不明だが、事実として、戦いに関係の無いものは自動的に仕舞われる。

だからこそ、その場にイカの姿フライがあるわけが無いのだが——
「イカの姿フライはね、みんなの心の中にあるんだよ。小さい子がアパン男を呼ぶように、イカラーの紳士淑女が望めば、たとえ命の危機だろうとイカの姿フライは駆けつけるんだよ」

「……えつと?」

「俺の居るところにイカの姿フライ在り…つまり、そういうことさ。あのシェイクスピアも言ってたぞ?」

「そ、そうなの…?」

「友奈ちゃん、シェイクスピアはそんなこと言ってないよ…?唯斗君の嘘…っていうか、妄想?…少なくとも、歴史上の人物でイカの姿フライについて語った人はいない筈」

実際は『満開』の最後の能力だったりする。

ただ無限にイカの姿フライを創造するだけの、唯斗以外には批評酷評させるような無駄能力だ。紙飛行機みたいに爆発したりはしないし、テディベアみたいに動き出したりもしない。ただの、何の変哲もない極有り触れたイカの姿フライを出し、唯斗のイカの姿フライ欲を満たすだけの能力なのだ。

尚、神の力で創ったイカの姿フライだが味はそこそこだ。市販品と大差なく、万人が『普通に美味しい』と答えるような味。

少しだけ、友奈と東郷の緊張がほぐれた。

「——そろそろ、気を引き締めて」

東郷の言葉で、二人は前方を向いた。目の前に迫るのは小惑星のよ

うに視界を埋める巨大な御魂。近づくとつれて、御魂ではなく壁のようにも感じられた。自ずと、先程までは欠けていた緊張感が場を駆け巡る。

後は全員で御魂を破壊するだけなのだが、東郷は警戒を解かない。虫の知らせや、胸騒ぎとでも言えば良いのだろうか。頭の端で、アレはただの御魂ではないと騒ぎ立てる自分自身が居た。そして、嫌な予感的中する。

——視界の奥に小さな何かが映った。

「……ん？東郷さん、あれって……」

「……御魂が……崩れてる……？」

御魂は自ら崩れ、その欠片を射出する。それは誰の目にも明らかで、間違えようのない『攻撃』だった。東郷の移動台座だけでなく、後方に見える極彩色の地球をも範囲中にした無差別攻撃。

最強のバーテックス、その御魂に残された最後の能力は『攻撃』だった。

これまでの御魂は、多種多様な能力があれば全てに共通してる点があった。それは『守り』の姿勢だ。硬化や目眩し、回転に分裂。全て、一秒でも長く時間を稼ぎ本体の復活を待っていた。

だが、今回の御魂はその逆だ。

身を削り、その欠片での攻撃。宇宙規模故に何時間と続けられる攻撃ではあるが、再生不可能な御魂の自壊は勇者達の想像を遥かに上回った。

「あれ、下に落としたりヤバイよな……」

「……うん、あんなのが落ちたら……現実へのフィードバックは計り知れないわ。全部、撃ち落とすしかない……!!」

東郷は複数の砲台を操作し、眼前に迫り来る欠片をレーザーで迎え撃つ。数百を軽く超え、千をも超える数の攻撃を東郷は撃ち漏らし無く消滅させる。宇宙から地球に落ちたら、それは隕石と同等。東郷は全神経を総動員させて撃つ。

「欠片は私に任せて！友奈ちゃんと唯斗君は、御魂をお願い!!」

御魂はもう眼前だ。ここまで来たら、後は『満開』の飛行能力だけ

でも事足りる。二人は東郷の言葉に対して無言で頷く。

「――満開!!」

友奈は勇者の切り札、満開を発動する。

煌めく桜の花弁が光と共に友奈を包み込み、光り輝く山桜が宇宙に狂い咲く――

光が晴れた先には、他の勇者同様に羽衣を纏った友奈が居た。背部に日輪を連想させるリングが追加される。その中で最も異質なのは、左右に出現した巨大なアームだ。

――結城友奈の『満開』は、攻撃力と範囲の強化だ。

特に、攻撃力のみで見れば友奈が随一であり、唯斗や風をも超える。接近戦ならば、頭ひとつ飛び抜けているのだ。本来、『満開』で超強化された友奈の拳は一撃ごとが必殺。だがそれを、友奈ならば何十、何百とラッシュすることが可能だ。その強さは、短期決戦ならば最強と称しても偽りはない。

だが、最強故に弱点もある。

桜は短命、故に友奈の『満開』も発動時間が他の勇者よりも短い。水道で例えるなら、他の勇者と同様の水量があつたとしても、友奈だけは蛇口から放出する水量が多いのだ。強い、だからこそエネルギーの消費量も相応に多い。攻めでは無類の強さを誇るが、耐久戦や消耗戦においては不向きだった。

「――行こう、唯斗くん!!」

「……これで、終わらせる!」

二人は足場を蹴り、御魂に向かって飛び出す。

唯斗は左右にピコピコハンマーを持ち、御魂に振るう。唯斗にとって、二刀流は初めての試みだ。だがピコピコハンマーの特性上、求められるのは手数。唯斗の攻撃力は唯斗自身の力ではなく、武器の威力に依存している。だからこそ、多少不格好だとしても強みを生かすに

は両腕で別々に攻撃しなければいけないのだ。

「はあああああああッ!!」

武器を振るい、虚空から紙飛行機を出して爆発させ、イカの姿フライを噛み砕く。正真正銘、これが郡唯斗の全力だ。

バーテックスを殴った時と違い、抉れたりしはしなかった。甲高く『ピコンッ!!』と鳴り、僅かに罅割れる程度。唯斗一人で、この巨大な御魂を破壊し尽くすには時間が足りない。

「勇者。パァアアンチイッ!!」

唯斗からワンテンポ遅れて、友奈の勇者パンチが御魂に突き刺さる。巨大なアームと御魂がぶつかり、軋むような金属音が響く。

友奈の攻撃により御魂の面が崩れるが、自らを崩して攻撃する御魂にとつては微々たるダメージだ。

右のアームを振り抜き、左のアームを叩きつける。その動作を友奈は機械的に、然れど一撃一撃に全力を込めて打ち続ける。

(……足りない……ッ!)

唯斗は感じていた。

確かに、この御魂に最適なのは唯斗と友奈による殴打だ。響く金属音からして、刺突や斬撃が通りづらいのは容易に想像がつく。

だからこそ、二人の全力ならばいつかは御魂も砕けるだろう。——そう、いつかは……だ。

封印の儀には、制限時間がある。封印の途中でも樹海化した世界は徐々に侵食されていき、御魂の破壊が間に合わなければ勇者の——神樹の敗北が決まってしまう。

故に『いつかは』と曖昧な言葉では駄目なのだ。

(なにか、決定打が必要だな……)

唯斗のピコピコハンマーや紙飛行機も、友奈の全力勇者パンチも決定打にはなり得なかった。恐らく、東郷のギリギリまでチャージした光線でも御魂の消滅までは持っていけない。

——個々の力では、一発逆転の攻撃は不可能だ。

「——唯斗くん!!」

「友奈？」

唯斗の思考に割り込んできたのは、離れた場所で両アームを交互に振り抜く友奈だった。攻撃の手は止めずに、友奈は叫ぶ。

「わたしー！良い作戦考えたー!!」

「……マジでやんの？」

「うん!!」

友奈は満面の笑みで頷く。褒めて！と言わんばかりのドヤ顔は少しだけ唯斗をイラつかせた。

友奈の考えた作戦は、アホな唯斗ですら呆れるような単純且つ脳筋万歳な力押しだった。

『唯斗くんのピコピコハンマーで、御魂に向かってわたしを撃ち出せばいいんだよ!!』

そう告げた友奈は、本当に名案だと言わんばかりだった。

唯斗のピコピコハンマーは、バーテックスを挟む程の威力だ。それを一身に受けると、友奈は言っているのだ。精霊のバリアがなければ、壁のシミならぬ御魂のシミになって死んでる。——逆に言えば、精霊のバリアがあるからこそ可能な手段の一つだ。

唯斗は三本のピコピコハンマー、その最端部分を左手でまとめて掴み、右腕で柄の真中部分を支える。

三つのピコピコハンマーのヘッド部分に友奈が乗り、飛行能力の応用で自らの身体を後方に引く。150センチのピコピコハンマーの柄は、不自然なほど撓んだ。

「怪我しても知らないからな！」

三本のピコピコハンマーの柄が撓り、ビキビキと嫌な音が鳴る。

「——勇者」

次の瞬間、ピコピコハンマーは元の形状に戻り、同時にヘッド部分にいた友奈は弾丸速で撃ち出される。

「パアアアアンチイイーツツ!!」

友奈の右腕が御魂に突き刺さり、轟音と衝撃波が放たれる。御魂の面にクレーターができ、そのまま御魂の内部は縦に罅が入る。だが、

友奈の右腕からベキリと嫌な音が鳴った。——唯斗のピコピコハンマーに骨が耐えれなかったのだ。

「ぐうううッ!! あゝあゝアアア!!」

その痛みは、友奈の想像を遙かに超えるものだった。痛み悶絶し、頭が真っ白になる。

——Booom!!

友奈の後方から、爆発音が響く。

「トドメだあああ!!」

唯斗が、先程の友奈にも劣らぬスピードで御魂に突撃する。

爆発音の正体は、唯斗が出現させた何百とある紙飛行機だ。唯斗はそれを自分の下で爆発させ、友奈と同じように弾丸速での攻撃を再現した。これも精霊のバリアがなければ、自らの攻撃で死すら有り得てしまう自爆攻撃になる。

唯斗が片腕で振るピコピコハンマーと御魂がぶつかり、僅かな拮抗の後に御魂は割れた。

——破壊された御魂は砂となり崩れ、消滅した。

「……かった…の?」

「………多分」

その場には腫れ上がる右腕を抑える友奈と、同じく痛々しく腫れ上がり、不自然に曲がった右腕を左手で抑える唯斗しかいない。

「唯斗くん、その右腕…」

「…折れた。友奈撃ち出した時…右腕でピコピコハンマーの柄、支えてからな。友奈が飛び出した反動でベキつてなった」

「ご、ごめん! わたしのせいで…」

「いや、別に…やんなきゃ勝てなかったし」

話してらうちに、二人の体が淡い光に包まれる。

『満開』の制限時間がきたのだ。満開は元より、時間制限だけでなくダメージの超過でも解ける仕組みだ。骨折はその内に含まれるらしい。

満開が終わったことで、二人は飛行能力を失った。地球の引力に吸われるように、唯斗と友奈は極彩色の地球に向かって落ちる——

「友奈ちゃん! 唯斗君!!」

「東郷（さん）？」

二人の下には、二、三人は乗れそうな一輪のアサガオの花があった。中には東郷が居る。東郷も満開が解けたらしく、いつもの見慣れた勇者服に戻っていた。蒼いアサガオは、東郷が満開時に最後の力を振り絞って残したのだろう。

「……東郷……さん……かったよ？……わたしたち、かったよ……！」

「うん！うん！！友奈ちゃんと唯斗君のおかげで、勝ったね！！」

「……とう、ごう……そろそろ、限界……かも……」

友奈と唯斗は、既に全ての力を出し切っていた。満開を終えたことにより、体力も限界を向けえた。

「うん、帰ろう……みんなまで……！」

蒼のアサガオは、三人を包み込むと花弁を閉じて蕾になる。そのまま自由落下に身を任せた。唯斗と友奈だけでなく、東郷も疲労で徐々に意識が朦朧としていく。

「ありがとう……唯斗くん、東郷さん……後はきつと、神樹様が——うん」

友奈は言葉を切った。何となく、この場で神樹様に願うのは違うと感じていた。

「わたし達なら、無事に帰れるよね……？」

「……死ぬ気……なんか、毛頭ない……だろ……？」

（……もし万が一……ダメだとしても……友奈ちゃんと唯斗君が、一緒に……怖くなんかない）

そう思った東郷だが、決して言葉にはしなかった。一番は、全員で生きて帰ること。ならば、この言葉は不相応だった。

「東郷さん、唯斗くん……帰ったら、もつともつと……お話ししようね……？」

「うん、勿論だよ……！私、唯斗君に大事な話があるもの……」

「……お手柔らかに、な……」

意識が朦朧とする。

落ちていくアサガオの中で、三人は無意識に手を繋いだ——

樹と夏凜の目の前で、レオ・スターククラスターは砂となって崩れ

去った。

「……やった……！やりましたね！夏凜さん!!」

「ふ、ふんっ！私が託したんだもの、当然の結果よ!!」

勝利を喜ぶ樹と、当然だと口では言いながらも喜びに打ち震える夏凜。

理不尽だと嘆いた戦いは、勝利で終わった。その喜びは、本当の理不尽に抗い打ち勝った彼女達にとっては無二のものだった。

「……あれ？くまマンさん……？か、夏凜さん！くまマンさんが居ません……！」

「………えっ、それって……！」

いつの間にか、くまマンは姿を消していた。くまマンだけでなく、唯斗がくまマンに持たせたままだった金色のピコピコハンマーも消失している。その理由を、聡い夏凜は悟ってしまった。

「アイツの……唯斗の、満開が解けたってことじゃ……!?!」

「えっ!?!それって、まさか——」

三人がいるであろう空を見上げると、樹の目にはそれが映った。

尋常ではないスピードで落下してくる、蒼いアサガオの蕾。その色は、勇者時の東郷を連想させるものだった。そして三人が御魂へ向かうときに乗っていた移動台座は見えない。恐らく、満開が終わって消失したのだろうと樹にも容易に想像できた。

「樹！あれ、受け止めないとヤバイわよ!?!」

「任せてください！絶対に、絶対に受け止めてみせます!!」

樹は背部のアーチから波のようにワイヤーを出し、未だに自由落下を続ける蕾に絡ませる。

幾度と絡み、ワイヤーを切られ、それでも意地と気合いだけでワイヤーを出し続ける。樹は不相応にも『護る』と言ったのだ。尊敬する姉や先輩なら、一度口にした言葉を覆しはしない。必ず、有言実行するだろう。その背を見て成長した樹は、絶対に諦めない。

「止まれええええ!!」

ワイヤーを千切り落下を続ける蕾は、樹の願いが通じたように、徐々にスピードが落ちていく。——そして、地面にぶつかる直前で完全に停止した。

「……えへへ、やりました…」

「ちよつ、樹!？」

樹の満開も解け、通常の勇者姿の樹は倒れた。

意識は無い様だが、生きてることを夏凜は確認した。これで風と樹の無事は確認できた。残るは、御魂を破壊した三人だ。

「友奈! 東郷! 唯斗!!」

夏凜が蕾に近づくと、花卉は開いていき、役目は果たしたと言わんばかりに花卉は消えた。

「しつかりしなさい! 死ぬなんて、認めないから!!」

呼び掛けに応じず、微動だにしない三人を見て夏凜は涙を滲ませた。違う、そんなわけは無いと否定しても最悪の想像が、頭を支配する。脈を確かめたいが、万が一でも『死』が——と思うだけで足も動かなくなった。

「お願いだから…死なないで…!」

最早、懇願に近かった。

「勝手に…:…ころ、すな…」

「唯斗!？」

夏凜の呼び掛けに応じたのは、一瞬だが意識を取り戻した唯斗だった。

怪我人多数、内二人は重症。そして、死亡者はゼロ。世界の危機に瀕した戦いは、大勝利で終えた。

——そして、樹海化が終わる。



『満開唯斗』

・能力

〈紙飛行機〉——紙飛行機型の爆弾。虚空から出てくる謎仕様であり、その数に制限はない。威力だけならばレオ・スタークラスターの火球と同等。

〈テディベア〉——喋るし、動く。理由は不明。唯斗の独特なネーミングセンスで『くまマン』と名付けられた。並々ならぬ強度と衝撃吸収があるため、武器であり盾にもなる。触り心地は限界突破してる。

〈金のピコピコハンマー〉——パワーアップ&増殖したピコピコハンマー。くまマンに持たせたり、敵に向かって投げたりと、数が増えたことよって出来るが増えた。

〈イカの姿フライ〉——イカの姿フライが出てくる。それだけの能力。小腹を満たす程度の、唯斗以外は有用性を見い出せない能力だった。

・他の勇者同様、格好だけならば神聖な神官服。ただし右手に紙飛行機、左手テディベアを持っており、背後には日輪を描くように十数個の金色に染め上げられたピコピコハンマーが浮いてる。他の勇者曰く、賢者に成れないタイプの遊び人。

近距離、中距離、遠距離の全てをこなせるオールラウンダー型だが、一対多はやや不利。

見た目を犠牲にして、汎用性に長けた二段変身。レオ・スタークラスターの御魂戦で見せた通り、紙飛行機の爆発で加速した一撃必殺の攻撃法を編み出したが、その負荷で自らもダメージを受けてしまう。所詮はアホと脳筋少女が即座に思い付いた程度の技だった。

東郷美森の『答え』

◆月×日

起きたら入院してた。

母親が病院に持ってきた私物の中に日記帳があつたので暇潰しに書くことにした。ちゃんと鍵付きの日記帳なので、中は見られてないはず。見られてたら泣く。見られて気まずいことがある訳では無いが、息子のプライバシーを守れない母親の残念さに泣く。

何だか、日記を書くのは久しぶりな気がする。実際は数時間で終わったバーテックスとの戦いだけど、濃密過ぎて、数週間ぶりに帰ってきたような気分だった。

現状で分かることは、右腕が骨折だ。御魂を壊す時にバキリと折れてしまったのは記憶に新しい。でも、何故か全然痛くない。

俺が右利きだったら、きつと日記を書くことは出来なかつた。ぎつちよ万歳。ぎつちよで良かった。ぎつちよを崇めよ。

右腕は、折れた直前はめちやくちや痛かつたのは覚えてる。けれども、アドレナリンがドバドバだったから痛み無視で御魂にアタックできた。でも満開が解けた直前から、右肩から手先までの感覚が無くなった。神経がイカれたかと思つてめちやくちや怖かつたです。

ぶつちやけた話、右腕の感覚は無いけれども、動かせないかと聞かれたらそうでもない。右肩から右手先まで、まるで無くなつたかのように感覚がないけど、手を挙げたり指を折ったり等の簡単な動作ならできた。逆に言うと、感覚が無いせいで力加減が分からない。そして動かしたら看護師のオバチャンに怒られた。人の腕って、折れてても動かせるんだね。

症状の原因は医者さんに説明された。

疲労やらストレスやらで一時的に起きてる現象らしい。勇者部で無賃労働し続けて、バーテックスとの連戦があればストレスが天元突破しても不思議はないけど。特に前者の変人共、半分はお前達のせい

かもしれないんだぞ。

戦いの途中でも決めてたことだが、勇者部を辞めることにした。精神的には我慢できても、身体に害が出てるなら風先輩も退部を許可してくれると思うから。

：うん、そう思ってた時代もありました。

身体に不調が出てるのは俺だけでなく、T・T三好以外の全員だった。

なんでここまで自主的に追い込んでるんだろう？この部活、勇者部じゃなくて筋トレ部だった？己の筋肉をイジメ抜いて更なる筋肉の肥大化を目指す脳筋万歳部だったのか？？ボディービルダー体型の樹なんか見たくない。野太い声で筋トレするマッスル☆樹ちゃんなんて見たくありません。

普通、退部するなら顧問に報告するべきだろう。

だが不思議なことに、うちの部活には顧問がいない。その理由も今なら大体は予想がつく。大方、勇者部の本来の目的は無償ボランティア活動ではなく、大赦の命令でバーテックスを討伐するための、言わば部活動ではなく対神敵組織だからだろう。それを一般教師が管理するなど、有り得ない。ここまで情報を出されたらアホでも理解出来る。

ならば、俺は大赦に退部すると言うべきなのだろうか？

多分それも違うと思った。

勇者部が『部活動』であるのは、個々の関わりがあつた方が勇者としての活動に支障をきたさないからだ。入っていれば吉、入部していなくても大きな問題は無い。

そもその話、勇者アプリスさえスマホに入っていれば、例え俺が勇者部に入っていないなくても樹海化に巻き込まれて否応なしに勇者にならざるを得ないだろう。だから、大赦にとっては俺が勇者部所属であるか否かは大した問題ではない。バーテックスを倒した今となっては、尚のことだ。

バーテックスを全滅させたから、関係の無い話だと割り切るかもしれない。でも、普通に考えたら大赦はまだ勇者には勇者部でいて欲しいのだろう。保険的な意味で。

勇者部は、バーテックス対策組織なんだ。

バーテックスが消えたらさあ解散だ、とはならない。常に警戒してるとは言われないだろうけど、イレギュラーに備えて管理しやすい勇者部という枠組みに属していて欲しいのだろう。

でも、知ったことではない。

俺は勇者部を辞めると心に誓ったんだ。

有言実行、俺は一度言ったことは数回しか覆さない。だから、辞めると決めたら本当に辞める。

それを東郷に言ったら、泣かれた。

分からない。分からないけど、何故か東郷の泣いてる姿を見たら、心臓が苦しくなった。罪悪感もあるだろうけど、よく分からない感情だった。

幸い、まだ東郷にしか伝えてない。

東郷からは、お願い……というか懇願に近かったと思うけど、辞めないで欲しいと言われた。自分に止める権利なんて無いけど、もう一度考え直して欲しいと言われた。

だから、少しだけ考えてみようと思う。

俺にとって、勇者部とはなんなのか。本当に居心地の悪い、忌むべき場所だったのか。俺と部員との時間は、何だったのか。

柄にもなく、東郷の泣く姿に動揺してたと思う。東郷とは、一旦この話は保留にすることということで落ち着いた。もっと考えて、考え抜いて、勇者部に意味を見出して欲しいと東郷は言った。

ちよつと疲れた。

次に書くときまでに、頭を整理する。

明日は、晴れるといいなと思いました。

私、東郷美森が目を覚ましたのは病院だった。

目が覚めて、知らない天井だったこといつかの既視感を覚えた。2年前、私が事故で記憶と足の自由を失った時と同じだ。不安に駆られて、取り乱しそうになった。

少しづつ、バーテックスとの最後の戦いが終わったことを思い出した。宇宙からの帰還は無事に成功したらしい。樹ちゃんが受け止めてくれたと聞いた時には、命の恩人である彼女に感謝の念しか浮かばなかった。

他のみんなも病院に運ばれたらしい。

風先輩と樹ちゃん、夏凜ちゃんは軽傷で済んだ。友奈ちゃんと唯斗君は2人とも右腕を骨折したらしく、足が不自由な私と同様に検査入院の期間が伸びた。友奈ちゃんは、唯斗君の骨折の原因でもあるように終始申し訳無さそうにした。友奈ちゃんのせいじゃないと励ましたけど、きっと私が言っても無駄なのだろう。

検査をして、左耳の聴力が落ちてることに気が付いた。いや、落ちてると言うよりは『失ってる』と言った方がしっくりとくる。

本当は起きたときにも気付く筈なのだけれども、なにぶん動揺していたから、自身の変化に気付けなかった。医師からは、一時的なものだと説明された。大赦の息がかかってる病院だから、勇者についても当然理解してるらしい。

一通りの検査が終わってから、唯斗君が病室に来た。

「東郷、今いい?」

「あつ、唯斗君。うん、丁度暇してたの」

薄緑の患者衣に、右手を乗せた三角巾。彼もまた、あの戦いで重傷を負った一人なのだ和理解した。そもそも、私や風先輩等と、殆ど無傷に近い軽傷な方が異常なんだ。それだけ精霊のバリアはチートであり、その上で骨折までした唯斗君と友奈ちゃんは無茶をしたんだ。「ちよつと大事な話があるんだけど」

「大事な話……っ!?ま、まさか……!」

思い当たる節はあった。

私の頭をよぎったのは、あの日の熱い告白だった。私を抱き締め、ずっと守ると耳元で囁き、結婚まで仄めかした情熱的な告白。

混乱した私が告白を受けたら、彼は自らを抑えて断った。私が私自身を理解出来てないと見透かして、私の為に断ってくれたんだ。

(えっ……ええっ!?……今?今なの!?いや、確かに『答え』は見つかったけど……!唯斗君への好意は自覚したけど……!!)

あの戦いで、私は彼への好意を自覚した。友奈ちゃんへ向ける最上級のLIKEとは違い、小さくも確かに存在するLOVEを。あの時から、唯斗君は私の気持ちを見透かしてた。だからこそ、今、このタイミングなのだろう。

「……うん、覚悟はした……!大丈夫……大丈夫だから……よしっ!唯斗君、続けて?」

覚悟も答えも決まった。

沢山待たせてしまったかもしれないけど、私自身、この答えには決して後悔しない。

「ずっと、前から決めてたことなんだ……」

「ず、ずっと前から……!」

驚いた。唯斗君は、ずっとと言うほど前から私に好意を持っていたのだ。その言葉が私の顔を紅く染め上げた。心臓が高鳴るのを感じる。

「言うなら、このタイミングしかないと思った。戦いも終わって、なんの憂いもない今しか……」

「た、確かに……!」

タイミングに関しては、納得ができた。

私達は、国防に励む勇者だった。恋愛にしても、喧嘩にしても、国を護る戦いにおいては邪魔だと断言されても不思議はない。だからこそ、全てを終えた今なのだろう。特別な存在である『勇者』から、有り触れた『一般市民』に戻るこのタイミングだからこそ、私達は無意識に止めていた青春を進められる。

(……本当に、唯斗君は私の事……！)

自分の知る彼とは違う熱烈な面。それに惹かれてる私がいる。いや、惹かれてるなんてものでは無い。言葉に困るくらい、私は彼に惚れ込んでしまってるんだ。

胸が高鳴る。心臓は今にも飛び出しそうなくらい暴れて、叫んで、熱を発してる。

(——嗚呼、やっぱり……好き)

初めての感情に戸惑いながら、私は唯斗君の言葉を待った。

「勇者部、辞めようと思ってる」

「……………えっ……？」

ゆうしゃぶをやめようとおもってる……唯斗君は何を言っているのだろうか？ ドツキリか、将また私の勘違いなのか。……でも、とても冗談だと思えるような雰囲気ではない。

「ゆ、唯斗君……何を言ってるの……!?!」

「なんて言うかさ……疲れたんだよ。無償の人助けに、無償で国も救う。俺は、友奈とか風先輩ほど善人じゃない。だから、かな……単純に、疲れただよ……」

私はきつと、『冗談だよ、信じた?』といつも通りの無邪気な笑顔でからかってくる彼を待っていた。それに対して私は呆れたように笑って、後になって笑い話にして——

でも、現実はいっただって非情だ。

唯斗君は、本当に疲れ果てたんだ。彼が勇者部の活動に意欲的ではないのも、初めから知っていた。それでも、サボることなく部室にきてお喋りして、夏凜ちゃんと漫才のようなやり取りをして皆を笑わせたり。彼自身もなんだかんだで勇者部を癒しの場だと思っっていると、私は感じていた。

だがそれも、今となっては判らなくなった。

「……唯斗君は、勇者部が嫌いなの…?」

「……………」

否定も肯定もされない。

「唯斗君にとって…ッ、私達との時間は苦痛に満ちてたの…?」

「……………」

返事はない。

「唯斗君にとって、私は…私達は…!」

「……………東郷、お前…っ!」

目から、一滴の雫が落ちた。

気が付いた時には、私は泣いた。このまま問い詰めれば、私達と唯斗君の関係が崩れそうで怖かった。このまま彼の本音を聞いたら、私達との時間を否定されそうで悲しかった。このまま彼を手放せば、一生後悔すると感じて必死だった。

唯斗君の表情は、驚きに染まっていた。

「……………お願いだから…私達を、勇者部拒絶しないで…」

ちぎれそうなくらい彼の袖を掴んで、みつともなく懇願する。いつの間にか、私の日常には彼が欠かせなくなっていた。——いつからだろう、こんなに彼を想っていたのは。あの告白よりも、ずっと前にもっと根深く、彼を想っていた気がした。

「……唯斗君、もう一度考えてみて」

「もう一度…?」

「唯斗君にとって、私達は…勇者部はどんな居場所だったのか。本当に辛くて、苦しくなくて、もう耐えられない所だったら…悲しいけど、もう止めない。私は…うん、私だけでも、唯斗君の意見を尊重する」

本当に辞めるとしたら、たとえば友奈ちゃんが引き留めようとしても、私だけは唯斗君の味方である。それが、彼に『答え』を求めた私の償いだから。

「だから、『答え』が出るまでは……まだ勇者部でいて欲しい。私の我儘だっことは理解してるけど、今はまだ『勇者部所属の郡唯斗』でいて欲しいの……！」

「……分かった」

唯斗君は一言だけ呟くと、病室から出ていった。

私は、唯斗君に好意を向けている。だからこそ一緒に部活で過ごしたいし、彼の近くに在りたい。今となっては難しいことかもしれないけど、一度決めたことだ。もしも唯斗君が勇者部から離れていっても、絶対に止めない。

私は——東郷美森は己のプライドにかけて、唯斗君の拒絶を受け入れる。

（……でも、その時は……私も一緒に辞めようかな。誰か一人でも欠けたら、きつともう……私の大好きだった勇者部じゃなくなる。それなら——）

「……………」

このときの私は——私と唯斗君は気が付けなかった。唯斗君が病室を出るほんの前、病室のドアから遠ざかっていく足音に。

閑話 : クリスマスパークティー

神世紀、それは平成から約三百年後の時代だ。

『日本』という大枠は未だに変わってないが、その内部事情は時代の流れと共に変化を遂げてる。その一例として、日本が宗教大国になったことだろう。

信仰対象は『神樹様』と呼ばれている。死のウイルスから四国を守る結界を作り出し、人々が生きるための恵みを与えることから『神樹様』と敬われ、人々の信仰の対象となっているのだ。

そんな宗教大国にも、以前から変わらない点だってある。

それが『クリスマス』だ。

子供にとつては、不法侵入の常習犯ことサンタクロースからプレゼントが貰えたり、家でケーキを食べれる日だ。だが本来は、イエス・キリストの降誕を記念する祭りだ。余談だが、生誕祭ではないらしい。これはキリスト——つまりは他教の神の祝い事なのだ。

それが宗教大国の日本に存在するのは、何百年も前から日本はあらゆる宗教に対して寛容だからだろう。それが神世紀の、唯斗や友奈達が生きてる時代まで受け継がれてきているのだ。

無粋なことを言えば、クリスマスやバレンタインデーは経済を潤滑に回すには必要不可欠なのだ。お菓子メーカーの陰謀とまで噂されてるくらいだ。子供から大人まで、クリスマスにはケーキ等のお菓子を買う。それが一人や二人なら大差ないが、日本人の大半はその日に祝い事として買うだろう。それで日本が豊かになるなら、形骸化もしていないイベントを廃止する必要は無い。

つまるところ、この時代にも『クリスマス』は存在するということだ。宗教大国でも、国民全員が信仰心を捧げてる訳では無い。だからこそ、他の神について祝うことが許されてるのだ。

「——さて、クリスマスパーティーを始めるわ!!」

「……って、なんで私の家なのよ!?!」

パーティー会場は、本人の許可無く使われてるにぼっしー家だ。殺風景なりビングは、事前に侵入——もとい、潜伏してた東郷と唯斗によってクリスマス色に染め上げられている。本人達曰く、部長の指示で仕方なくとのこと。尚、風はそんな指示は出していないと供述。真実はいつも一つだが、必ず判明するとは限らない。今日の教訓だ。家の防犯システムが心底心配になった夏凜を置いて、場は勝手に進む。

「メリークリスマス！ひゃっはあああ!!」

「ヒヤッハアア!!酒とイカの姿フライを持ってこおおい!!」

「喰らえクリスマス風うどん!!赤白緑の三色うどんよ!!ヒヤッハアア!!」

友奈から始まり、唯斗と風が気の違ったヤバい奴の如く騒ぎ立てる。何故ならクリスマスだから。風がツツコミを捨ててボケに回ったのも、唯斗が未成年にも関わらず酒をご所望なのも、全部クリスマスのおかげなのだ。クリスマスの日であれば全てが赦されるのだ。

聖なる夜は贖罪すら無償のプレゼントだ。某野菜人の王子様の言葉借りるなら、贖いのバーゲンセールなのだ。

「三馬鹿やかましい!!」

尚、ツンデレツインテール、某アホ命名『TT三好』は煩い三馬鹿こと友奈、唯斗、風を許さなかった。聖なる夜でもツツコミ魂は不滅なのだ。因みに、口元には煮干しカスが付いている。なぜならにぼっしーの名を冠する少女だから。煮干しを愛し、煮干しに愛された空前絶後に超絶怒涛、奇妙奇天烈摩訶不思議なヒューマン・にぼっしーなのだから。

「さん、ばか…?風先輩と友奈と…:あつ、東郷か。にぼっしー、東郷は盗撮に夢中なんだから放っておいてやれよ」

「…っ！ツツ!!」

飽くまでも自分は常識人側だと信じて疑ってない唯斗。

そして、無言で鼻息を荒くし、目を血走らせながらシャッターを連打する東郷。もはや、サンタ服の友奈を無断撮影する東郷はデフォルトだ。東郷の『とう』は盗撮や盗聴の『とう』なのだ。異論は認める

が、聞き入れはしない。正論なんて無視すれば無いも同然なのだから。

「クーリースーマアアスツツ!!」

「あんたはそれしか言えないの!?!」

クリスマスを連呼する友奈。語彙力と精神年齢は家に忘れてきたらしい。もしくは、このパーティーについてこれないから置いてきたのだ。危険の方が大きいらしい。戦力外通告を受けた狼牙風風拳とどどん波の人達は関係ない。他意もない。

「い、樹ちゃん…?そのうどんは?」

「作ってみました!」

東郷の目の前には、常人では理解できない類いのナニカがあった。一応、食べ物で構成された其れは、魑魅魍魎の類いと言われても違和感はない。

「…シテ…コロ…シテ…」

「…このうどん、なんか喋ってない?」

「…?えつと…東郷先輩、うどんは喋りませんよ?」

「うん、そうだよ。そうなんだよね…、私もさっきまではそう思ってたの…!」

子供に常識を説くような表情で返す樹。東郷は初めて、後輩にイラツとした。

それはオレンジと緑で構成された謎うどんだった。シミュラクラ現象なのか、うどんに浮かぶ謎物体が溶けた人の顔に見えた。耳を澄ませば、ナニカ喋っている気がしなくもない。真の料理とは、味覚だけでなく聴覚と視覚にも語りかけてくるものだ。樹は豪語した。東郷は軽くキレかけた。

オレンジ色のジェル状物体は、緑色の粉状物体をかけられて不気味さを増している。海外映画のゾンビでも、もう少しグラデーションに凝るだろう。

東郷はそつとラップをかけて、冷蔵庫にしまった。——尚、忘れてはいけないが、ここは夏凜の家だ。つまり、東郷は夏凜の冷蔵庫に化け物うどんを勝手にしまったのだ。今日が聖なる夜でなければ赦さ

れなかっただろう。次の日に夏凜が泣き叫んだのは言うまでもない。

「クウウウリイイイスウウウまあああスウウウツツ!!」

友奈は吠える。聖なる夜に相応しき言葉を、勇者の誇りをかけて猛々しく吠えた。後日近所から苦情が届くが、クリスマスだから仕方が無い。夏凜がご近所のおば様方に謝って回ることになるが、構わない。何故ならクリスマスだから。贖罪のクリスマスなのだから。

「なんかもう…何言ってるのかすら理解できないわ」

「クリスマス？」

「誰のせいだとツ…!?えつ、今なんて言った？」

「クリスマス？」

「……っ!?!」

きつと、この世界の共通言語は英語じゃなくてクリスマスなんだ。新事実だが、クリスマスは名称ではなく言語だったのだ。ソースは友奈。煮干しのみで生きていけるヒューマン・にぼっしーにも通じる言語なのだから、外国でも有用なのだろう。

「風先輩。俺、ケーキ作ってきました」

「えっ…唯斗ってケーキ作れる系男子なの？」

「クリスマス♪」

「唯斗君って、意外と家事万能なんですよ。掃除や洗濯等の基本的な所から、編み物や料理、家計簿の記帳もこなせるんです。…：本当に意外ですけど」

「ドヤア…!」

東郷からの説明で、唯斗はこれまでに無くウザいと称される顔を晒した。堪忍袋の緒が脆い人は、彼をサンドバッグにしたいと刹那に願うことだろう。風もその一人だったりする。

「…ぐっ、腹立つ顔するわね…!アタンだって家事万能系女子よ!世界が戦く女子力の塊よ!!女子力大將軍なのよ!!」

「いいですか?風パイセン。本当に女子力のある人は、己の凄さを誇

示しないんですよ？大和撫子の如く、お淑やかで謙虚な姿勢こそが日出ずる国では最上級の美德とされてるんです」

「なるほど、つまりアタシね!!」

「頭ちえるってるんすか？」

風は、控えめに言つてアホだった。己に対して盲目的なのか、うどんの食い過ぎで脳がショートしたのか。自分を真逆の人柄だと勘違いしてるだけあって、唯斗同様にアホなのだろう。

「さて、そろそろプレゼント交換しませんか？」

東郷からの提案。クリスマスパーティーとは名ばかりの、特に何をするかも決められてない集まりでしかない現状。取り敢えずクリスマスっぽいからケーキ作ろう。取り敢えずクリスマスっぽいからプレゼント用意しよう。取り敢えずクリスマスっぽいから夏凜の部屋を勝手にデコレーションしよう。取り敢えずクリスマスっぽいからイカの姿フライを食ろう。そんな思い付き企画だった。

「どーする？どうせならクジ引きとかにする？」

「あつくつ、良いですクリスマスね！」

「んじゃ、予め用意しておいたクジ引きBOXです。全員のnameをwriteしておいたpaperをput inしたのがこちらになりマース」

「まるで三分クッキンですね…」

風の意見に対し、唯斗は何故かクジ引き箱を用意していたと言う。風が提案しなくとも、最初からプレゼント交換はクジ引きでやるつもりだったらしい。少なくとも唯斗だけは。

後は各々が箱から紙を取りだし、そこに付いてる名前の方が用意したプレゼントを受け取るだけ。

最初に引いたのは風だ。

「アタシは…東郷からのプレゼントね！」

最初に引いた風が持つ紙には、『東郷美森』と書かれている。つまり、風が貰えるのは東郷が用意したプレゼントだということだ。

受け取ったのは、ラッピングされた箱状の物。ある程度の重量感

と、程々の大きさ。風の期待は膨らんだ。箱の下から丁寧にラッピング紙を解いていき、現れたのは――

「……………プラモデル？」

「ハセガワ 1/450 日本海軍 戦艦大和です。三百年前――まだ年号が平成の時代から根強く受け継がれてきた伝統的且つ芸術的な、私のオススメの品です！」

「お、重い……質量的にも、精神的にも……!!」

珍しく、東郷が風相手に興奮してる。でも聖なる夜だから仕方がない。例え東郷のヤベー奴数値がぐんぐん上昇していても、聖なる夜の前では全てが赦させるのだ。次の日から風に、完成への催促が週刊誌の編集者並みに飛んでくるが、構わない。何故なら聖なる夜だから。東郷の庄に、流石の自称女子力お化けも慄いた。

次に引いたのは友奈。

わあ 夏凜ちゃんのプレゼントだ
「クリイ、クリスマス♪」

「OK、どうせ煮干しでしょ。次に行きましょう」

「ちよ!?!違うわよ!!」

「「っ!?!」」

全員が、腰を抜かす勢いで驚く。あの空前絶後に超絶怒涛、奇妙奇天烈摩訶不思議なヒューマン・にぼっしーが煮干し以外を選択した？それは天変地異の前触れだろうか。三好夏凜と言えば煮干し、煮干しと言えば三好夏凜。それは世界の理だ。それを覆した夏凜は、宛ら世界への反逆者、レブルだ。

普段から純反骨精神の擬人化でもある夏凜だが、まさかこの世の理にまで反骨精神丸出しで立ち向かうとは。全世界が震撼したに違いない。今日がクリスマスだから良かったが、クリスマス・イブだったら世界が耐えられなかったことだろう。

「ゆ、友奈ちゃん……爆弾かもしれないわ! そーっと、刺激を与えないように扱って!! まずは置きましょう!!」

「いや待て……にぼっしーのことだし、手を離れた瞬間に爆発する仕組みかもしれない……! それを持ったまま海に向かおう!! 海なら爆発さ

「それでも害はない……!」

「ぷっ、プレゼントに爆弾なんか仕込むわけないでしょ!!」

「爆弾じゃない……?つまり、毒物ですか!?お、お姉ちゃん!今すぐ窓開けて!!毒ガスが出てくるかも!!」

「もう開けてるわ!くっ、夏凜め……なんて卑劣な手を……!!」

「……私が何したっていうのよ……」

普通にプレゼントを用意しただけで、全員が狼狽する。いつその事笑えてきた。勿論呆れたという意味でだが。

「く、クリス……これはククリスマス……ぬいぐるみだ!!」

夏凜の用意したクリスマスプレゼントは、全長150cmの煮干しを模したぬいぐるみだった。抱き枕にピッタリなサイズであり、低反発素材なので抱き心地も抜群。

「やっぱり煮干しじゃん。煮干しのぬいぐるみなんて何処に売ってるんだよ……」

やはりヒューマン・にぼっしーは不滅だ。煮干し型勇者は何故かドヤ顔を晒していた。煮干しは完全食を超えて、万能道具になっていた。少なくとも夏凜の中では。

——風、友奈の次にクジを引いたのは東郷だ。

「私のは樹ちゃんのですね」

「はい、東郷先輩!頑張って選びました!!」

樹から手渡される小包。薄緑の袋に赤いリボンを巻いており、東郷や夏凜のプレゼントのような重量感はない。その分、年相応の女の子らしさが強調されており、いつそ小聡明さすら感じる。

「これは……エプロンね。ありがとう、樹ちゃん!」

赤と茶、白の三色で構成されたチエツク柄のエプロンだった。樹のイメージとは一転、どこか大人らしい印象を受ける。これは樹が自分の趣味嗜好ではなく、飽くまでも他の人が着るものだど理解した上での選択だ。最初にデフォルメされた犬や猫が付いたエプロンを選ぼうとして断念したのは、樹だけの秘密。

チエツク柄なので、例え唯斗が選んでしまっても大して問題は無

い。そういう意味では、珍しく樹のセンスが光ったのだろう。

「見たまえ、変人共よ。あれが…あれこそが！常人なのだよ！！流石俺の後輩だ…！」

「何であんたが偉そうなのよ。樹が健全な常識人に育ったのは、アタシの背を見て育ったからよ。つまりアタシのおかげ！アタシを崇めなさい！！」

「なるほど、反面教師ね。風ほどの反面教師が近くにいれば、そりやあマトモに育つでしょうね。う…最近、何処ぞのアホに似てきたけど」

惜しむべきは、そのアホと染まりつつある常識人に自覚がないことだろう。飽くまでも自分は常識人で、同じ部活の変人達とは一線を画している。そんなスタンスを崩さないのが、彼らだった。

「私は…げっ、風からだ…」

「げって何よ！寧ろ一番の当たりにじゃない！！」

「どんまい、にぼっしー。来年があるさ…」

風は激怒した。プレゼントを見る前から憂鬱と言いたげな態度を取る後輩ふたりに、ドロップキックからのパロスペシャルを決めたくなった。

目の前の寸胴鍋のような形をしたそれ。

もう既に嫌な予感しかなかった。相手が風だということもあり、樹のような純粹且つ乙女ポイント高めなプレゼントの可能性は限りなく低い。寧ろ寸胴鍋がプレゼントだと言われても納得出来てしま

う。
「くりっ、まずは開けてみようよクリスマスマツムラ…！」

「友奈ちゃん、クリスマス語の中に人名が混ざってるよ？」

「……………仕方ない。開けるわ！」

「みんな伏せろ！！風先輩のプレゼントがマトモな筈がない！手榴弾の詰め合わせでも、俺は驚かないからな！！」

「JCが手榴弾なんて持つてるわけないでしょ」

「…お姉ちゃんのことだし、そこら辺で拾ってきそう…」

「マイシスターよ、姉を何でも啜える野良犬と同じ扱いにしないでくれる？流石に傷つくよっ。」

話が脱線気味だった為、夏凜は思い切ってラッピング紙を破り開けた。

「……この物体何？」

「ふっふっふっ！アタシ直伝のバケツプリンよ！驚き慄き恐れなさい！！」

縦40cm幅25cmの寸胴鍋の中には黄色い謎物体——プリンが敷き詰められていた。見るどころか、匂いだけでも胸焼けがしそうな一品だ。隠し味は愛情♡らしい。尚、過剰摂取した暁には口から女子力がリバーズしてくる。

「あつ、次は私の番ですね。って言っても、残ってるのは友奈さんと唯斗先輩のプレゼントだけですけど」

樹は残り二枚しかない箱の中の紙を手でかき回し、適当に引く。そして出てきたのは——

「おめでどう、俺のプレゼントだな」

——郡唯斗と書かれた紙だった。

期待半分、未知への不安が半分。勇者部で二番目にヤベー奴と言われるだけあって、唯斗のプレゼントは予測がつかない。因みに一番のヤベー奴は東郷だ。息をするように盗撮や不法侵入を繰り返す彼女は、天地がひっくり返っても常識人にはカウントされない。

「どうせ駄菓子でしょ？」

「唯斗君なら駄菓子で決まりですね」

あはは「クリリ、クリリンスマス…」
唯斗君なら有り得そう

「友奈ちゃん、クリスマス語の中に最強の地球人の名前が混ざってるよっ。」

「…だから、クリスマス語ってなんなのよ…」

誰もが駄菓子だと言う。それを見て唯斗は、ニヒルに笑った。それはまるで、冒険の最初に出てくる噛ませ犬のように、小者感丸出しな

笑みだった。

「……よしっ、開けてみます…!」

包の紐をとき、そこには――

「わぁ、調理道具ですか…!」

フライパンやフライ返し、包丁にまな板。その他諸々の調理道具のセットだった。

「誰が当たっても良いように選んだけど、樹にピッタリでしょ？料理得意そうだし!」

「「「えっ…」」」

唯斗と樹を除いた全員が戦慄する。

このアホは何を言っているのだろうか。樹が料理得意？あの日の出来事を覚えていないのだろうか。唯斗が樹の持ってきた黒色のシュークリームを食べて気を失ったことを――

残念ながら、唯斗はシュークリーム事件を風のイタズラだと思い込んでいた。樹ほどの常識人がポイズンクッキングなんてする筈がない。そんな勝手すぎる思い込みの結果だった。

「唯斗先輩！ありがとうございます!!」

余談だが、このあと風がポイズンクッキングの犠牲になるが、構わない。今日は聖なる夜なのだ。毒物を生産し続けても、聖なる夜なら赦されるだろう。姉という名の犠牲を添えて。

最後に残ったのは唯斗と、友奈の用意したプレゼント。

「はい、プレゼント 気に入るか分からないけど 精一杯用意したよ クリ、ススマス！クリスマスクリスマス：クーリッスマッス!!」

唯斗は友奈から小包を手渡される。紙袋に入れられたそれは、手触りで軽く柔らかいことだけは察することができた。

「はっ、爆弾だったりしないでしょうね?」

「何言ってるんだよにぼっしー。プレゼントに爆弾なんて用意する奴、いるわけないだろ」

「そうよ、夏凜ちゃん。そんな危険物…中学生が簡単に手に入るわけないじゃない」

「…夏凜さん、爆弾なんてあるわけないじゃないですか」

「なっ！アンタらが先に私のプレゼントの時に言ったんでしょ!?何その団結力!?!」

何を血迷ったのか、夏凜はプレゼントが爆弾だと言いだめた。珍しく揶揄うつもりだったらしいが、生憎と乗ってくる人は居なかった。

「ほらほら、夏凜弄るのもその辺にしときなさい。完成型勇者が泣いちやうわ」

「泣かないわよ!」

小包を開けると、赤い布状の物が出てきた。

「おお、マフラーだ」

「うんクリスリスリス、店で見かけてクリスー! これだー ってなつたんだよね」

防寒器具を揃えていなかった唯斗には有難い品だった。そして、もう夏凜がクリスマス語にツッコミを入れることは無かった。

パーティは進み、室内が徐々に暑苦しくなっていく。

暑さにも寒さにも弱い唯斗は、涼むために一旦外に出た。

(外は外で寒い…)

早速だが、友奈から貰った赤いマフラーを首に掛ける。首に巻くだけの布だと思っていたマフラーは、実際に巻いてみると中々に侮れない。

「唯斗くん」

声をかけられて振り向くと、友奈が居た。

「あつ、マフラー付けてくれてるんだ!」

「ん?もうクリスマス語はやめたの?」

「うん、MP消費が激しいからね」

「えむびい?」

堀に背を預けて落ちてくる雪を眺める。街灯や周りの家の光に照らされて、幻想的だとは言い難くとも綺麗な風景にはなってる。普段の雪化粧をする前の景色を知ってるだけに、心の底から素晴らしいと

思えた。

「来年もみんなでクリスマスパーティー出来るといいね」

「んー、そだな。もしかしたら、部員が増えてるかもしれないぞ?」

「そしたら、もっと楽しくなるね!!」

「人数が増えたら、にぼっしーん家をもっと豪華に飾り付けできるかもな。にぼっしーにバレないように」

「あはは、次はわたしも手伝おうかな?」

「新入部員の器量次第だな」

友奈はまだ見ぬ新入部員を想像し、嬉しそうに笑った。

シスコン見参

病院のベッドの上でブーツとする。

——…唯斗君は、勇者部が嫌いな…？——

東郷から聞かれたことに、唯斗は否定も肯定も出来なかった。嫌いなら彼女達を拒めばいい。好きなら言葉を否定すればいい。それをしなかったのは、郡唯斗が『勇者部』を一つの居場所だと捉えていたからだ。好き嫌いを別にして、放課後に居座れる、唯斗の居場所だった。

辞めることを目標として戦ってきたからか、唯斗はその後について考えていなかった。

まさか引き止められるとは考えてもいなかったのだ。勇者部を辞めたとしても、唯斗と彼女達が関わらなくなるかと聞かれれば、否と答えられよう。東郷や友奈、夏凜は同じクラスだし、風や樹も部を辞めたからと言って関係を断つほど非情ではない。結局のところ、変わる事なんて微々たるものだ。

ずっと、そうだと思っていた。

——唯斗君にとって…ッ、私達との時間は苦痛に満ちてたの…？——

——…お願いだから…私達を、^{勇者部}拒絶しないで…——

——もう一度、考えてみて。唯斗君にとって、私達は…勇者部はどんな居場所だったのか——

掛けられた言葉や問いが、唯斗の心中を乱す。苦手だったけど、決して嫌いではなかったあの場所。辞めたいけど、拒みたくは無かったあの部活。変人だけど、悪人でない部員達。

絡まった糸のように複雑な脳内。楽しかった思い出も、部員の苦手な一面も、素直でいれたあの時間も——全てが煩わしい。

「……分からない……」

小さく、一言だけ呟いた。

日記を書こうと手にしたペンを、また机に置いた。最近はこの繰り返した。あの日——意図せず東郷を泣かせてしまった日以来、唯斗は日記を書けていない。文字にして気持ちを表せたら多少なりとも頭が整理出来ると思ったが、気分がのらない。

自分に対して吐き気がする。

未だに頭を支配するのは、東郷の泣き顔。何故か印象的で、霞がかった過去と重なるような気がした。

——今更だが、郡唯斗は記憶喪失だ。

二年前、唯斗は病院で目が覚めた。

身体中に巻かれた包帯。割れたように痛い頭。口内に残る血の味。今でも体に刻まれた火傷の痕。

両親が言うに、事故に遭ったらしい。自動車だかに轢かれて、そのまま重症を負った。その際に頭を特に強く打って、記憶が無くなった。苦虫を噛み潰したような表情で父親は語った。その表情がいつもの両親の表情と重ならなくて、まるで他人を相手にしてるような感覚に陥って、ショックだった。

だからこそ、唯斗はまるで記憶喪失なんて気にしてないと言うように振る舞い、『記憶喪失』という単語自体を口にしなくなった。幸い、奇しくも唯斗はそれを苦とは思わなかった。知らない記憶に固執するような性格でもなかった、というのもある。

唯斗自身、怖かったのだ。失った記憶の中にいる自分は果たして、今の自分と同じなのだろうか。今の自分が築き上げてきた『郡唯斗』、それを過去の『自分』が乗っ取ってしまった。そんな気がして、怖くなった。

だからこそ、目を逸らして忘れた気にいるのは楽だった。

未だに記憶は戻らない。

でも、東郷の泣き顔を見た瞬間——何かと重なる感覚を覚えた。霧がかかって、殆ど見えない過去の記憶の中に同じ光景があるように感じて、それを思い出せないことに初めてもどかしさを感じた。

「はあ……」

本日何度目になるかも分からない溜息をつき、倒れるようにベッドを背にして天井を見上げた。

——コンコン

病室のドアがノックされた。

今は誰にも会いたくはなかったが、病室で訪問者を追い返したりしない程度には唯斗にだって常識はある。これが家だったら居留守を行使するが。

「どーぞ、空いてますよー」

「失礼するよ」

ドアから入ってきたのは、見慣れない男の人だった。暗めの茶髪に物柔らかかそうな顔立ち。眼鏡とスーツによって、エリートという言葉が合いそうな青年だ。

「……どなたさま？」

「こんにちは、僕は三好春信という者だよ。あつ、三好って名乗れば分かると思うけど、三好夏凜の兄です」

「にぼっしーのお兄さん？」

「にぼっしー、か…良いね。イカしたネーミングセンスだね！それじゃあ僕にも渾名を付けてくれたりするのかな？あ、敬語は要らないよ？君、堅苦しいの苦手なタイプでしょう？」

その青年は、妹の夏凜とは逆でコミュニケーションに優れていた。いかにも好青年、という言葉が似合う。年下相手にも見下したような態度を取らず、寧ろ友好的な態度だ。

「……『あにっしー』とか？にぼっしーの兄だし」

「おつ、いいね。それじゃあ僕は今日から、君にとって『あにつしー』だね。渾名をつけたなら友達も同義、ますます敬語の必要性が減ったね」

「…そんなに俺と友達…っていうか、友好的な関係になりたいんですか？高い壺でも買わされるか、ホモか…もしかしたら罰ゲーム？」

「暗いしネガティブだなあ。何か悩み事でもあるのかい？後、敬語は要らないよ？」

「っ…」

「ビンゴ、だね。どれどれ、お兄さんに話してごらん。これでも結構偉い立場だったりするし、人の相談事に乗るのは大得意さ」

「いえ、結構です。これは俺が解決しないといけない問題なので…春信さんには関係ないですよ」

唯斗は敢えて青年を突き放した。友人の兄とは言っても、結局は他人だ。彼の馴れ馴れしいとも言える態度は唯斗にとって好印象ではあったが、それでいきなり相談をするほどの仲ではない。

唯斗の拒絶にも春信は薄く浮かべた笑みを崩さない。それは胡散臭い笑みではなく、何かを見守るようなものだった。俗に言うイケメンというやつだ。イケメンならば、ゲスい表情以外は大体絵になる。「それで、何の用ですか？暇だから妹の友人を訪ねてきたって訳じゃないんでしよう？」

「なかなか鋭いね。まるで園子様を相手にしてるみたいだ。飽くまでも友達の兄が、普段妹が世話になってる人のお見舞いに来たって思わない？」

「お見舞いって…一言も『怪我は大丈夫？』なんて言っていないクセに」

「ああ、確かに！怪我は大丈夫かい？後、敬語は要らないよ？」

「…そろそろ治るらしいですよ。最近の医療は凄いですね。普通なら三〜四ヶ月は掛かるらしいんですけどね」

「あ、それは『勇者システム』の一つだね」

「っ…」

春信の口から出た『勇者』という単語に驚く。

勇者について一般人は知らない筈だ。勇者どころか、バーテックス

襲来による四国の危機だつて一般人は知る機会が無い。妹である夏凜が言った可能性もあるが、彼女の性格からして可能性は低い。ならば――

「――大赦の人、ですか…?」

「…やっぱり、鋭いね。この際だから言つてしまふけど、僕は所謂お偉いさんつてやつさ。ああ、だからつて敬語は要らないよ?…:…これ言うの何回目だっけ?」

どれだけ敬語を使つて欲しくないのだろうか。この短時間で四回も『敬語は要らないよ?』と言つている。

「…:…それで?」

「それで…:…ああ、『勇者システム』のことかい?単に治癒機能があるつてだけの話だよ。バーテックス程じゃないけど、骨折程度なら一週間で治つちやうんだよね。精霊のバリアがあるから、治癒の速さは以前よりも格段に落ちたけど…:」

道理で回復が早いはずだ。

「まあ、それは置いとこうか。僕が唯斗君を訪ねて来たのには、二つ…:…いや、三つの目的があるんだよね」

「何で増えたんですか…:」

「そのひとつに、お悩み相談が入つたからだよ。二つの目的が終わつたらでいいけど、悩み相談はやるから」

これほどまでに執拗い相手というのも、中々に珍しい。余程のお人好しか、嫌がらせが大好きな腹黒なのか。――目の前の青年は前者だった。お人好しという面では、夏凜と似てるかもしれない。

「さて、まずは目的のひとつ――『交渉』だ」

「交渉?」

「僕はね、所謂シスコンなんだ」

「…:…は?」

唯斗は耳を疑った。

この男は何を言つてるのだろうか。しすこん?シスターコンプレックスの略称であり、女姉妹に大して強い愛着・執着を持つ状態のことを言つてるのだろうか?それにしても、真面目な表情で言うこと

じゃない。

「僕は夏凜が大好きなんだ。彼女の兄であることが僕の全人生において最重要項目であり、夏凜に嫌いだと言われたら大赦の上層部を巻き込んで死ぬまでである。だから夏凜の誇れる兄で居続けたんだけど……最近、メールしても返事が帰ってないんだ！返ってきたとしても事務的な堅苦しい文章で、兄と言うよりも会社の上司に送るような例文だよ！僕はね、そんな堅苦しい文章でも狂喜乱舞してしまうほどシスコンなんだよ!!」

「えっ、きもっ…」

「夏凜が嫌がるから過剰干渉はしないようにしてるけど、そろそろ僕が枯れてしまう！泣きながら神樹様に祈願してるけど、もう限界なんだ！夏凜に頬擦りしながら海に向かって愛を叫びたいよ!!」

「ここ病室ですけど。叫ばないでもらえますか？」

「……ごめん、取り乱したね」

唯斗は引いた。目の前の男を友人の兄ではなく、変質者だと認識する程度には冷たい目になっている現状。唯斗はいつでも警察に通報できるようにスマートフォンを握り締めた。

「——そこで『交渉』だ。君には、定期的に夏凜の様子と写真をメールで送って欲しい。そこで勘違いしないで欲しいけど、これは『交渉』なんだ。御恩には報いを、リスクには相応のリターンを。ちゃんと報酬もある。だから手に持った携帯電話を置いて！警察に連絡するのやめてください!!」

「ちっ、バレたか…」

「……『交渉』に戻るよ。唯斗君がこの話に乗ってくれるなら、僕は君に一枚で万札が飛んでいくと有名な『幻のイカの姿フライ』を定期的に送ろうと思っ——」

「おいおい、あにつしー。俺らの間に堅苦しい『交渉』なんて不要さ！にぼっしーの写真？送るに決まってる！何なら動画までつけて、にぼっしー成長記を送り続ける!!」

「……僕が言うのもアレだけど、君の将来が心配だよ」

イカの姿フライだけで簡単に態度を変えて、頑なに使い続けてた敬

語まで無くすのだから、シスコン狂いも心配する。

唯斗にとつて、『幻のイカの姿フライ』は文字通り幻なのだ。中学生程度の財力では手を伸ばせないし、辛うじて買えたとしても一枚で万札が飛んでいくイカの姿フライを二枚三枚とは買えない。

だからこそ、唯斗はこの話に乗った。罪悪感？そんなのは近所に埋めてしまった。部外者に贈るのであれば躊躇もするが、相手は本人の兄だ。よって無害だ。

「あにつしー、もう一つの用事は？」

「もう一つは『報告』だね。唯斗自身の、未来に関わる重要なことさ」
「…？」

「君に——郡唯斗に縁談がきてる」

「——はっ？えんだん？」

「君の結婚相手候補が何人かいるんだよね。男であり、唯一の勇者だっことは、こういうことになっちゃうんだね…いや、多分そうじゃなくても君の家なら縁談の一つや二つは来るだろうけど」

「…えっと、俺の家って超一般家庭なんだけど…」

「あー、うん。君の家はそうだけど、唯斗君の父方の祖父祖母の家——つまりは『郡家』が大赦の中でも『乃木家』に次いで発言力があるのさ。実際、唯斗君のご両親は大赦でも上の立場だよ？」

「…母さんも父さんも、一般公務員だっけってただんだけど…」

余談だが、唯斗のピコピコハンマーをデザインしたのも両親だったりする。それを聞いた唯斗が父親と殴り合いの喧嘩になるのは、また別のお話。

「それで、その結婚相手って…？」

「君の両親が勝手に選んだ結果、なんと二人が残ったよ。今後も増えるかもだけど、現段階では二人。勿論選ぶも選ばないも君の自由だけどね。最終的な判断は任せる、と御父上も仰ってたよ」

「つまり、別にその相手と結婚しなくてもいいってこと？」

「そういうことだね。君が他に結婚したい相手がいるって言うなら、その娘を選ぶべきだ。現役の『勇者』であり、そのおかげ？そのせい

？で後の郡家当主が義務付けられた君は選択権のある立場だからね」
「えっ、ちよまチーヌ。俺って郡家当主になるの？」

「そうだね。数年前までは君の父方の叔父、その息子が継ぐことになってたけど…勇者になれるって言うなら話は別だ。暫くは君の叔父が当主を続けるけど、いずれは君が当主だよ。あ、余談だけどね、当主予定だった彼——君の従兄弟は大喜びだったよ。自由だー！って言ってた」

「もしかして、押し付けられたんじゃないかね…？」

「あはは、そうかもね」

取り敢えずその従兄弟を殴りたくなかった。彼は何も悪くないけど、憂さ晴らしにサンドバッグにしたくなかった。

当主が何をやるものかは知らないが、面倒臭いのだけは分かる。権力には同時にリスクも存在する。礼儀作法を学び、仕事を学び、最終的には大赦に就職するまで決められた瞬間だった。

「んで、その結婚相手は？俺、名前も顔も知らない相手と結婚は嫌だからね」

嫌ならば拒否し、他の人を選べる立場だ。でも取り敢えず相手を知ることが決して無駄ではない。

「さつきも言った通り、現時点では二人。一人目は乃木家次期当主、乃木園子様。あつ、彼女を選んだら郡家当主の道は無くなるよ。だって乃木家の方が立場上だし、結婚したら君は乃木唯斗になって、郡当主は従兄弟君になる。……何で上の立場の彼女が選ばれる立場に甘んじてるんだらうね？罪作りの男め」

「罪作りって…俺、その人のこと知らないんですけど」

「はいはい、そしてもう一人は——三好夏凜。僕の妹さ。あつ、本人は知らないから、良ければ君の口から伝えてくれる？」

「…はっ？えっ…？に、にぼっしーが!？」

それは今日一の驚きだった——

ifルートく贖罪の勇者く

——何が…何が『護る』だ…ッ！

少女は——犬吠埼樹は自身に悪態をついた。

滅びゆく世界を前に、樹は何処までも無力だ。尊敬する人達に感化されて叫んだ『護る』という言葉も、残酷な現実の前では蛮勇にも満たない。

いつから勘違いしていたのだろうか。自分には護る力があり、正義である自分達は悪である化物に負けることなど有り得ない。悪が栄えたためしないように、正義が負けるなど有り得て良い筈がない。だが——

大好きな姉は妹^{わたし}を庇って地に伏した。

勇者で在り続けた少女は身動きを取らない。

後になって加わった紅い勇者は炎に飲まれた。

何度もきっかけを作り、全てを粉碎する少年は——

「……………ごめん、なさい」

最後まで抵抗を続けて、武器を振るい続けた少年。そんな彼はもういない。パリンと小さく、硝子が割れるような音が響いた。それは勇者の命綱でもあった『精霊バリア』が砕けた音だ。何百回とレオ・スタークラスターの攻撃に耐えた最硬の盾は、非情にも限界を迎える。

その身に火球を直接受けた彼の末路は、無惨の一言に尽きた。

肉が焼ける異臭が樹の鼻を刺激し、それが現実であることを証明する。それで猛攻は止まず、塵すら残さないと言わんばかりに一点へと火球は集中する。そして、最後には太陽を思わせる程の巨大な獄炎球が彼に落とされた。

——もう、死体すら残ってなんていない。

「ごめん、なさい…ごめんなさい…ごめんなさい…！」

頬に一筋の水が流れ、樹はそれを最後に『理性』を捨てた。少女は獣のように獰猛に、復讐とも仇とも違う——『贖罪』のために全てを捧げた。守ると宣言しておきながら、失ってしまった。小さくとも確かな力がありながら、疎んで助けられなかった。だから、少女は——

「——満開」

熱の籠らない小さな眩きは口内に消えた。

少女は刹那に願う。『力』が欲しい。あの怪物を斃し、もう何を失わないための圧倒的な『力』が。その答えが『満開』だった。勇者の切り札。樹が唯一縋れる『可能性』。樹は何を犠牲にしても、贖罪を果たす。

薄緑の光が樹海を照らし、空に煌めく鳴子百合を咲かせる。幻想的で、眩く、何処か儂さを孕む緑光は神々しく全てを包む。やがて光が晴れた先には、勇者の二段階目の変身を遂げた樹の姿があった。

樹は背の日輪を思わせるアーチ状の部分からワイヤーを放出し、生存している勇者達を包む。それは『繭』と表現できる。何重にも包まれた『繭』は一切の攻撃を通さず、同時に仲間を閉じ込める『檻』となり、樹を孤立させる。

「…もう、誰も…傷つけさせない…」

東郷も『繭』で包んだことにより、足止めしていた魚座が自由になる。魚座は地を泳ぎ、次の標的である樹に向かって体当たりを繰り返すが——

「——」

最早、満開を遂げた勇者はバーテックス単体で倒せるものではない。攻撃の瞬間、空中に飛び出した魚座を樹は無言で縛り、他の勇者と同様にワイヤーで包む。前に差し出した掌を握り締めると同時に、ワイヤーは収縮し魚座を圧迫——否、圧殺する。

放出される御魂ごと潰し、ワイヤーを解くとバーテックスの死骸でもある砂が零れ落ちた。

それを半目で冷たく見下す少女はもう、以前の彼女では無い。

「―次」

初めての単体撃破を喜ぶことも無く、虚しさだけが胸に残る。こんなの、彼なら満開をすることも無くこなせた。満開しても尚、あの背中には届く気がしない。

徐にレオ・スタークラスターを見ると、視界を埋め尽くすほどの火球――否、炎の壁が迫っていた。

樹はワイヤーで何十、何百もの『槍』を作り、放つ。

――樹の勇者としての能力は、ワイヤーの放出だけでない。放出し、それを操ることである。

放った何十もの『槍』が火球を貫き、他の火球を巻き込み共爆発を起こす。――そのまま『槍』はドリルのように回転を始め、レオ・スタークラスターの本体へと突き刺さした。一つ一つは大したダメージにはなり得ない。

――だが、塵も積もれば山となる。

槍と火球の撃ち合いは続くが、少しづつレオ・スタークラスターの体は傷付いていく。削られ、ヒビ割れ、獅子の名を冠するバーテックスはその風格を失ってゆく。

だがこの方法は時間が掛かり過ぎる。

レオ・スタークラスターを倒しきるには、満開の制限時間が圧倒的に足りない。樹の勇者としての力は、元よりサポート向きだった。それは満開システムを起動しても変わることの無い事実だ。樹はレオ・スタークラスターを倒せると断言出来る。――時間さえあれば、だが。

「…そんなんっ!」

撃ち合う最中、唐突に身を緑光が包む。花弁が散るエフェクトと共に、樹の満開は終わりを告げた。無情にも、樹には爆発的な攻撃力も全てを薙ぎ払う必殺もない。唯一出来るのは、敵を翻弄し徐々に削ること。

――だから。

「満開っ!!」

二度目の満開を遂げる。

緑光に包まれ、樹の姿は神々しく変化する。

(っ!?声が…出ないっ!……ううん、関係ない。戦える力さえあれば…!!)

仲間の死に比べたら、自身の身など比べるにも足りない。それが歪にも形づいてしまった信念だ。

樹は再度ワイヤーで『槍』を形成し、先程と同様に放つ。防御を捨てて、敵を討つことだけを優先する樹。

「死んで!斃れて!!堕ちてええええ!!」

声にならない叫びを吐き出した。

レオ・スタークラスターが地に堕ちた。

「っ…、ッ…!」

声は未だに出ず、片目は眼前の景色を映さない。片足は力なく身体に付くだけの肉塊となり、両耳には一切の音が入らず、体の中にも吐き気を催すような喪失感がある。

——だが、樹は止まらない。

もう止まれないのだ。隠されてた事実、満開のデメリットに気付きながらも、樹は満開を繰り返した。後戻りは出来ぬと知りながら、樹はそれを望んでいたのかもしれない。

「……………」

堕ちたレオ・スタークラスターの御魂を見上げる。空高く、宇宙まで届くほどの距離を経ても御魂は惑星の如く巨大さを誇る。

だがそれでも、樹の目的は変わらない。

樹はワイヤーを紡ぎ、『翼』を形成した。満開の状態ならば、ワイヤーは万能だ。縛り、護り、撃ち、形取る。最早、樹は助けすら求めてはいない。

「……………」

下方の仲間を包む『繭』を一瞥し、樹は覚悟を決めた。己の全てを賭して、アレを討つ。贖罪だけでなく、仲間の未来を守る為に——次こそ、守りきれるように。樹は独りだ。嘗て掲げた、姉の隣に立つという目標。その末路が孤軍奮闘だ。樹は小さく、心中で姉に詫びた。

そして、空に向かって羽ばたいた。

(これが…御魂?)

眼下に迫る其れに対して、樹は答えなど分かりきった疑問を心中で呟いた。

本体の大きさすら超え、惑星をも思わせる其れは最早『壁』だ。子供にコンクリートの壁を砕けと言うように、一人でアレを破壊し尽くすのは無謀とさえ思える。

とは言え、巨大なだけの木偶ならば方法など幾らでもある。勿論、破壊するだけの話なら、だが。

(えっ!?み、御魂が攻撃…?)

御魂は自壊を始め、その欠片は樹に向かって放出される。それも一つや二つだけではなく、無限にも思えるほど眼前を埋め尽くす。その攻撃は樹だけでなく、後方に在る極彩色の世界をも範囲にした無差別の範囲攻撃だ。

樹は即座にワイヤーを編み、『網』を形成する。

——一つも漏らさない。

背に背負うアーチ状の部分から波のように放出されるワイヤーは、撓み伸ばされながらも全ての欠片を受け止める。そして——
「お返し!!」

『網』で包んだ欠片の集まりを纏めて御魂にぶつける。元は一つの物体、その強度も同程度だ。互いに轟音を立てながら、御魂は少しずつ砕ける。

その隙に、樹は次の手を打つ。

——全ての糸を収縮、圧縮、紡ぎ、編み——薄緑に発光する最硬で最鋭、最強の一本を織る。

その『一本』は輪状になり、宇宙規模の御魂を囲う。そして縛るように圧縮し、回転を始めた。樹が選んだ手段は、摩擦熱による切断だ。

普通のワイヤーならば成し得れない手段だが、樹が紡いだのは何千本ものワイヤーを『一』に込めて圧縮した、最強で最硬、最鋭のワイヤーだ。それは全てに突き刺さり、全てを縛り、全てを切断する。

「はああああああ!!」

火花を放ちながら輪は収縮する。

それを見ながら樹はワイヤーを手元を集める。イメージするのは、いつだって勇気をくれた彼の武器。パツと見は拍子抜けするほどの、然れど樹の知るどの武器よりも強く猛々しい最強の武器。

「——っ！」

手元に形成したのは、薄緑に発光するハンマー。150cm程の丈。ワイヤー故に無骨にしか再現できないが、其れは紛うことなき彼の武器の再現だった。

一本のワイヤーは御魂の深くまで削り、あと一步のところまでブチンと轟音を立てて千切れた。惜しくはあるが、結果は十二分に残った。

樹は無言で無骨なハンマーを振りかぶり——

「これで、終わりいいいい!!」

全力を込めて撃った一撃は、ワイヤーで削った部分を境に御魂を二つへと割る。それを最後に御魂は砂となり、空中へと霧散した——

「……………」

勝利に対して、樹は無表情だった。

喜びはなく、樹の頭には虚しさと後悔で溢れていた。

(最初から、こうしてたら…)

——彼は死ななかつたのだろうか。

その思考に頭を支配されながら、淡い緑光が樹を包む。短期間に何度も体験した、満開の解ける合図だ。突然目の前が真っ黒になり、樹の目は光を失った。

だが樹の心は波風を立てなかつた。寧ろ、淡い安堵すら宿っている。これでもう、失わない。彼は守れなかつたけど、大好きな姉と尊敬する先輩達は、もう大丈夫だ。

重力に従い、樹の身体は地球に吸い込まれる。

「ごめんなさい、唯斗先輩……っ！」

声が出ない。目が見えない。何も聞こえない。例え万全だとしても、きつと樹は重力に抵抗せずに落ちるだろう。それが樹の最後の望み——己の死だから。

落下の感覚だけを感じながら、少女は小さく呟いた。誰にも届かない声で、少女は確かに言葉を紡ぐ。

それは孤独になった少女の、最後の謝罪だった——

——贖罪の勇者——

目の前で仲間が死に、理性の枷が外れた結果。猛々しく『守る』と宣言しておきながら、取り零してしまった少女。彼女が唯一恐れるのは仲間の死のみ。それ以外なら、例え我が身が砕け散っても構わない。それが、それこそが『贖罪』だから。だが、彼女が求めるのは贖いではない。自身の破滅こそ、彼女なりのケジメだ。仲間すら『繭』に閉じ込めた彼女は、もう誰にも止められない。破滅するまで、少女の贖いは意味を成さない。

○○○○○○○○

彼の存在が、樹にとっては当たり前だった。姉と共に前に立って、道を示してくれる大事な人だった。だから、だからこそ——その背中に追い付きたくて、成長した姿を見守って欲しくて、もう存在しない『彼との明日』を想った。本当は生きたい。彼と——唯斗先輩と一緒に明日を迎えたかった。でも、流れた涙は全てを物語った。もう：失うくらいなら、死にたい。消えて、憂いも悲しみも、全てを無に帰したい。何故なら、樹の願いは永遠に叶わぬ幻想なのだから。

『勇者』と『大人』

「えっ…俺、にぼっしーと結婚するの…?」

唐突に告げられた言葉。その意味を再確認するように、或いは咀嚼して飲み込むために唯斗は呟いた。

未だ中学二年生の身であり、その上記憶まで喪失してる少年。精神的にも肉体的にも年相応としか言い様のない彼にとって、縁談乃至結婚とは未だ理解の届かぬ未知だ。既に理解のキャパシティを超えている。

「君にとって、夏凜との結婚は選択肢の一つではあるね。唯斗君次第で夏凜を選ぶことも出来るし、園子様を選ぶことも出来る。そして、どちらも選ばずに自分の好きな相手を見つけて結婚することだって可能さ。まあ、僕からしたら一概に羨ましいとも言えないけど…」

春信の含みのある言い方に、唯斗は軽く首を傾げる。だがそれ以上に今は、己の知らぬ間に進んでいる自分自身の未来について懐疑的な思考を働かせた。

先に春信が言った通り、唯斗は選ぶ側の人間だ。勇者であり、その中でも唯一の男勇者。そして初代勇者、『郡』の血を継いでおり、郡家次期当主としても大赦では名高い。その他にも理由はあるが、極めつけはあの乃木家の娘であり、現大赦では崇められる程の存在である乃木園子も彼を評価してるからだ。

だが、その実態は一般家庭で育った中学二年生だ。

突然の話に、脳が追いつかない。

知らぬ間に積み上がった立場や肩書きと、唯斗の精神がズレている現状。彼は勇者でさえ無ければ、極有り触れた中学二年生でしかなく、何者にも縛られない自由な未来が待っている筈だった。

いきなり縁談やら当主やらと言われても、理解なんて及ぶはずもない。

そもそもの話、唯斗は恋愛感情というものがよく分かっていない。唯斗が知ってるのはLIKEだけで、LOVEは未知だ。親愛と友

愛、恋愛とはどう違うのか。同じ『愛』なのに、何で区別をつけるのだろうか。

唯斗は混乱していた。

それを春信は微笑ましそうに見つめて、軽く笑みを浮かべる。それはまるで、己の青春を思い出し、人生の後輩を優しく見守る先輩のようだった。

「まあ、それは一旦置いてどうか」

「いやいや、置いとこうにも置いとけないんだけど？縁談？次期当主？……いきなり情報量多すぎるんだよ……」

「あはは、大丈夫でしょ。だって、君が決めなきゃいけないのは十八歳——結婚が可能になる歳までだよ。それまでは婚約とか抜きにして、十八歳になったら答えを出す。ほら、まだ数年はある。頭を整理して、長々しく恋について悩むには十分過ぎるほど時間があるでしょ？」

青年は戯けるように言った。聞けば良い条件で、尚且つ余裕のある選択にも聞こえるが——

「……それ、不誠実だとか言われたい？結婚相手候補を放置して、散々保留して、ギリギリになって答えを出すなんてさ」

「ん〜。むしろ逆だと僕は思うなあ。年単位で悩み悩んで、悩み抜いて、やっと出した答えが自分だったって考えてみなよ。嗚呼、私はこんなに想われてたんだ……ってならない？」

正直、あまり思わなかった。寧ろ変に成り上がったくせに優柔不断で、そのクセ結婚相手すら碌に決められないチキン野郎だと思われるも何ら不思議じゃない。人の心は純粹さと理想だけでは成立しないのだ。

基本的に面倒臭いことが苦手な唯斗からしたら、当主やら結婚やらは全てが煩わしい。未来に勝手にルールを敷かれて、後ろから押されてる気分だ。とてもじゃないが、受け入れ難い。

「……因みに、結婚……と言うか当主自体を辞退するのは？」

「……おすすめはしないかな。君は良くも悪くも、大赦から評価されるんだよ。過大評価と言っても過言じゃない程までにね。ああ、不思

議に思うよね？君は他の勇者と同様にバーテックスを倒しただけなのに、どうして自分だけ持ち上げられてるのかって」

「そりゃあ、まあ…」

当主については一旦置いてくとして、それを差し引いても唯斗の評価は異常だ。勇者の適性があるという話なら、唯斗以外にも代わりは沢山いる。風の話が正しければ、勇者部以外にも勇者の適性がある人物達を集めた、所謂『勇者』候補は他にもいるのだ。

「理由としては、大きく分けて三つくらいあるかな。一つ目は唯一の男勇者であること。この事実は過去現在に渡って大き過ぎる出来事だったんだよ」

「…確か、イレギュラーなんだっけ？」

「そうそう。イレギュラーどころか、僕も最初は男装女子の可能性すら考えたからね。君って中性的な顔立ちだし」

「何が悲しくて性別を偽るんだよ…漫画の世界でもあるまいし」

「兎に角、それだけ男であり、尚且つ勇者でもあるという事実は衝撃的だったんだ。三百年近い『勇者』の歴史の中で君が唯一なんだよ？勇者としての適性が低ければ、大赦で実験でもされてたんじゃないかな？適性があること自体が異常過ぎたからね」

「ざらつと怖いこと言わないでくれる!？」

一歩間違えば実験動物の仲間入りだったらしい。唯斗は肩を震わせた。大赦とて善意だけで成り立ってる訳では無い。多少なり腹黒いことをしてでも、神樹を信仰し国を護ってるのだ。

「因みにだけど、君の勇者適性はめっちゃくちゃ高いらしいよ？過去最高の結城友奈さんと殆ど同じレベルだね」

「…友奈って結構凄い奴だったりする？」

「うん、僕も詳しくは分からないけど…肩書きだけは膨れ上がってる君と同等に、彼女は極上層部から熱い支持を受けてるね。…僕の勘だけど、適正以外にも何かあるよ、彼女。極上層部の、それこそ初代勇者の時代から現代に至るまでを何かしらの手段で把握してる人達しか知り得ない何か…がね」

「マジかよ…」

唯斗は慄いた。

友奈が凄いつて事実よりも、国を支える大組織の上層部が女子中学生推しな事実で慄いた。この国はロリコンが多いらしい。なんて嘆かわしい真実だろう。それと同時に自分も友奈と同様の層から評価されてるのだから、初めてこの国の未来が心配になった。

「それで、二つ目は？」

「二つ目の理由は——君の『功績』だね」

「功績？」

「過去最多のバーテックス撃破数。乙女座、蟹座、バーテックス四体の融合体の撃破。その他のバーテックス撃破に関しても並々ならぬ貢献。工程がどうであれ、結果だけを見れば異常って言ってもいいほどの戦果だ。……よくもまあ、あんなピーキー性能な勇者衣装で戦ってるものだ。僕は少しだけ引いてるよ」

「いや、ピーキーって……」

「だって君の勇者コンセプト、『武器は最強、その他貧弱』ってやつだよ。武器……えっと、ピコピコハンマーだっけ？アレにリソースを割いた分、君本体の身体能力は結構低い筈だよ？文字どおり貧弱ってやつさ。まあ、高過ぎる勇者適性のお陰で他よりも二歩劣る程度で済んでるけど。それでも武器無しの攻撃だとバーテックスに傷一つ付かないし、鈍足なぶん避けるのも一苦労だろうに。それであの戦果……そりゃあ上層部受けも良い筈だよ。ゲームで言う、操作性最悪だけど攻撃力だけは作中随一な不人気キャラだね。ウケる」

「……ウケねえよ。後で、そのコンセプト考えた奴に会わせて。力の限りを込めてぶん殴るから」

鈍足なせいでレオ・スタークラスターの火球を浴びたのだから、笑えない。精霊のバリアが無ければ確実に死んでいただろう。

無論、そのコンセプトを考えたのも両親だったりする。勇者と大赦幹部の醜い殴り合いは既に決定事項だった。

何はともあれ、唯斗の勇者としての性能は良くも悪くもジャイアントキリング特化となっていた。唯一人型の個体、双子座とは相性最悪

だっただろう。攻撃は当たらず、徐々に追い詰められる。対人戦も然り、唯斗には不向きだった。

「三つ目の理由は…まあ、『名前』と『見た目』かな」

「……………はっ。」

唯斗は懐疑的な声を上げた。唯斗は決して絶世の美男ではないし、有難い名前でもない。他二つの理由と並べられる程、名も外見も特殊なものでは無い。そんな唯斗を見て、春信は頬を軽く上げた。

「過去…西暦の時代の初代勇者達の前に降臨して、共に戦い導いた『精霊』と同じ見た目と名前なんだよね、唯斗君って。文献に残されてる容姿とも共通点が多い。生き写しか、本人かっくらいにね。大赦の一部には信仰してる人だっているよ。精霊『ユイト』の再臨だーってね。所謂輪廻転生ってやつ？精霊さんが死ぬかどうかは知らないけど」

事実、大赦に保管されてる文献には精霊『ユイト』について載ってる。幾度となく勇者のピンチに駆けつけ、精霊でありながら『守護神』とも言われた謎の人形精霊。その精霊が救った命は決して少なくはない。

「君、過去に行ったりしてる？」

「んなわけないじゃん。他人の空似、またはその精霊を名乗る不審者が俺の先祖だったんじゃない？そもそも、その精霊？ってピコピコハンマー振り回してたの？」

その精霊とやらが唯斗ならば、ピコピコハンマーを振り回してる筈だ。改めて言葉にすると、勇者や精霊以前に、ただの狂人だ。怪人ピコピコハンマーと言われても反論できないのが辛いところだ。

「さあ？僕は精霊『ユイト』のファンでもマニアでも無いからね。ただでさえ残されてる文献が違和感を覚えるほど少ないのに、興味すらない僕が知ってるわけないだろう？」

「使えないなあ。妹と結婚するかもしれない男なんだし、色々調べたりしてないの？」

「したさ。君のまだ短い人生において、勇者であることとイカの姿フ

ライ以外で異常な部分なんて見つからなかったよ。……唯斗君、イカの姿フライ食べ過ぎじゃない？三度の飯より五十枚のイカの姿フライ、花よりイカの姿フライ、ボールは友達の如くイカの姿フライは相棒、四次元イカの姿フライポケット……とち狂ってるの？」

「失礼な。郡の血を引く者はイカの姿フライに惹かれる運命なんだよ。父さんとか爺ちゃんもイカの姿フライ食いまくってるし」

郡家はイカの姿フライが主食の一族、と影で言われてたりもする。大赦のお偉いさんでもある父親は愛妻弁当の横にイカの姿フライを添えており、老後を楽しむ祖父も縁側でイカの姿フライを食う日々。何故か郡の血が流れる者は異常なまでにイカの姿フライを愛してるのだ。

「つて言うか、あんたの妹も煮干し狂いだぞ。煮干しが完全食とかほざいてるけど、教育行き届いてる？基本的にサプリと煮干し、コンビニ弁当とうどんだけで生きてるからな、あんたの妹」

勇者部の面々と外出した際には普通の食事を取ったりしてるが、基本的には先に挙げた四つの無限ループで生きてる。

「……えっと、何か問題でもあったかな？必要な栄養素は煮干し及びサプリメントで摂取してるし、うどんで食事の楽しみまで知ってる。更にはコンビニ弁当で腹も満たしてるんだ。問題があるどころか、文句なしの超効率で先進的な食事法じゃないか」

「……オーケー、大体わかった。三好がにぼっしーに成ったのはあんたのせいだな。この効率厨め」

心底意味がわからないと言いたげに首を傾げる春信。唯斗は大体を察した。

エリートや優等生は、みんなとち狂ってるのだろうか。せめて三好家だけだと信じたいところだが、そういう意味では成績や生活態度の良い東郷も同類だった。変人と変人は引かれ合う運命なのだ。

煮干し狂いも、イカの姿フライ狂いも。双方共に変人で狂人だった。

「まあ、僕が調べた感じでは君と精霊『ユイト』は無関係だったかな。現実にはタイムマシンなんてないし、今後君が時代を超えて過去に行

く手段もない。どれだけ似てて、共通点があったとしても時代が違
うって言われたらもう無関係だよ。精々、御先祖様だろうね。あると
したらだけど」

「へえ。まあ、タイムマシンなんてあっても過去には行かないけどな。
そもそも行く理由もないし、何よりもまず面倒臭い」

「夢がないね。過去に行つてヒーローになろうとか思わないの？折角
勇者になれるんだし、初代勇者の時代にでも行けばヒーローどころか
神の化身としても扱われると思うよ。今と昔では、勇者の力に天と地
程の差があるからね」

「その力、今は使えないんだけど。スマホ自体大赦に回収されたし」
あの戦いが終わってから、勇者アプリの入ったスマートフォンは回
収された。勇者は勇者アプリを通して神樹と繋がり、力を身に受けて
変身する。それが勇者システムなのだ。

つまり、回収された今となつては『勇者』ではなくただの『中学生』
でしかない。バーテックスと戦えないどころか、樹海化した極彩色の
世界にすら入り込めない。

最初は何故回収されたのかと疑問もあった。

だが、理由は子供でも分かるほど単純明快だった。戦う対象がいな
いののに、勇者の力を中学生に持たせるのは危険だからだ。ただでさえ
中学生とは精神的に不安定な時期なのだ。魔が差して人でも殺され
たら溜まったものじゃない。勇者部は基本的に全員が善人だが、そん
なのは大赦にとっては関係ない。

勇者とはそれを容易く行える力を秘めていて、同時に勇者以外には
止めることの出来ない暴力の塊なのだ。

「まあ、精霊『ユイト』については無関係だつてことで良い？もう勇者
になれないし、なることも無い俺が、例え過去に行つたとしても戦う
手段なんてないし」

「……うん、そうだね」

春信は間を空けて返した。その間が何を表し、青年が目目の前の『勇
者』に対して何を考えていたのか。果たしてその感情にはどのような
名が付くのか。少なくとも、今の唯斗には理解の届かない話だ。そし

て今は理解出来ずとも、近い将来に身をもって知ることになることだ。

「んで、話は以上？」

随分と脱線気味ではあったが、一区切りはついた。初対面にしては、お互いに話の合う相手だと感じている。決して似てないふたりだが、案外腹の中は同色なのかもしれない。

「ううん、まだあるよ？最初に言ったじゃないか、僕の目的は『交渉』と『報告』、後は『悩み相談』ってね。ほらほら、未来の義兄さんに話してごらん？」

「何が義兄さんだよ。まだ決まった訳じゃないし、にぼっしー…三好が嫌がるかもしれないだろ。だから、あんたは義兄さんじゃなくてあいつしーだよ、今のところは」

「…君、夏凜と仲でも悪いのかい？」

「？…少なくとも、鍛錬に誘われる程度には仲良しこよしだよ。三好が俺を虐めたいだけだったら、話は別だけど」

「……？益々訳が分からない」

春信は怪訝そうに顔を顰めた。

「仲は良いのに、何で苗字呼びなの？普段は渾名だし、真面目な話しのときは苗字だし…思春期なの？女子を名前で呼べないって言い放つ中二病一歩手前君なの？」

唯斗は普段から三好夏凜を『にぼっしー』と呼んでいる。それは勇者部だけでなく、中学校のクラスでも周知の事実だ。だが同じく、三好と呼ぶのも事実。唯斗は呼称など大して気にしないタイプだから気にも止めなかったが、指摘されれば少しだけ違和感が湧いた。

同じく東郷も苗字で呼んでるが、それは東郷本人からそう頼まれてるからだ。東郷を美森と呼ぶのは彼女の両親くらいだろう。理由は単純で、苗字を友奈に褒められたかららしい。東郷美森とは何処までも単純な人間なのだ。

「名前で呼びたいとか思わない？僕の妹、控えめに言って世界一可愛いでしょう？世界一可愛い夏凜と同じクラスで、しかも同じ部活動！更には共に戦い守り守り合う、言わば親友みたいな関係じゃないか！！

くつ、僕にも勇者適性があれば夏凜と暮らせるのに……！神樹様の馬鹿野郎!!」

「大赦のお偉いさんが信仰対象に馬鹿野郎は無いだろ……天罰が下るんじゃない?」

何が宗教団体だ。目の前の男然り、唯斗の両親然り、立場の割には信仰心を感じさせない。大組織も一枚岩では無いらしい。

「それで、君は夏凜が嫌いなのかい?」

「ふつー。恋愛対象として見たことは一切合切ないけど、三好の性格は好ましく思ってるから嫌ってはない。世紀の大親友とは言い難いけど、普通の友達以上の好感はある。……俺、何言ってるんだらう?」

「なるほど、恋だねー!」

「故事付けんな。恋愛対象として見たことないって聞こえてる?もしかして相当都合の良い難聴?金ピコさんで殴れば直るかな」

本当に殴れば爆散するのは言うまでもない。だが時には、殺すことも優しさだったりする。唯斗は春信を消し去ることを一瞬、本気で検討した。

「えー、そこは年相応の羞恥心で本心を隠してたりとかしないの?まあ……確かに、あんな楊貴妃とかクレオパトラも泣くくらい美人で可愛い夏凜を前にしたら、誰だって羞恥に顔を赤らめて逃げ出すと思うんだけど」

「あんたは妹を過大評価しすぎだろ」

取り敢えず世界三大美女のうち二人には謝るべきだろう。楊貴妃やクレオパトラと比べられた夏凜は、宛ら小野小町なのだろうか。春信は世界三大美女の中に妹が入っていると勘違いしていた。

「変人の兄は変人か……嘆かわしいな」

「むっ、変人とは失礼な。誤解してるようだけど、僕は屈指の常識人さ。もしも僕の知らないところで夏凜が変な男と逢い引きをしていたとしても、その男の藁人形を五寸釘で神樹様に打ち付けるだけで許す程度には常識人さ」

「常識人に謝れ、コノヤロウ」

常識人を自称及び詐称してる唯斗ですら、目の前の男に慄いた。も

しも夏凜と結婚したら呪い殺されるのではないかとすら思える。

「——よしっ、こうしよう！」

「えっ、なに？」

「唯斗君、君の悩み事……夏凜に相談しなよ。初対面の僕よりも、夏凜の方が相談しやすいでしょ？そしてついでに、縁談の件と呼び方についても言ってきたよ。なーに、君の神経の凶太さは僕が保証するよ！」

「いや、初対面の人に保証されてもなあ……」

出会って初日の相手が何を保証出来るのか。笑顔で諭されても、何も嬉しくなかった。寧ろビンタしたい衝動に駆られた。

「はいはい、これは決定事項です。破ったら、僕の全権力を使って君のブラック・ヒストリーをばら撒く。たとえ無いとしても、捏造する所存」

「普通に黒歴史って言えないの？っていうか職権乱用だろ、それ」

「モーマントイ、乱用も含めて職権なんだよ。いやー、大赦って腹黒いね！」

「腹黒いのはあんただけだよ」

「そんな君が？」

「好きだ——って言うわけ無いだろ」

「言ってるんだよなあ」

結局、唯斗は脅しという名の説得法で納得させられた。だが、ちょうど良いのかもしれない。三好夏凜が部活に来てないという情報は唯斗の耳にも入っており、彼女もまた勇者の役目を終えたことよって勇者部に所属して良いのかを悩んでいる。ならば、たとえ傷の舐め合いだとしてもは話せば進展が望めるかもしれない。

漠然とはしてるが、今後の方針は決まった。

「——それじゃあ最後に、僕は君の友人として忠告するよ」

春信はこれまでの良い意味で軽薄とも言える態度を初めて崩し、唯斗に目線を合わせる。そこには有無を言わせぬ雰囲気醸し出されており、春信が見せた彼自身の本質だった。

「何があったとしても、君は仲間から離れるべきではない。君は君自

身が思ってるほど強くはないし、同時に君の仲間も取り繕ってる表面ほど強くなってる。一つ皮を取れば、みんなただの学生なんだ。だから、例え大人が——僕達『大赦』が何かしたとしても、君は…唯斗君だけは『勇み成す者』、勇者であるべきだ。借りただけの力なんて無くてね」

「……つまり？」

「簡単な話だよ。君は勇者で在れ——勇氣ある者、ただそれだけで君達は『勇者』なんだからね」

「えつと…？」

端的な答えを要求したハズなのに、返ってきたのは哲学じみた言葉。とてもじゃないが、理解はし難い。

「そのうち分かるさ。嫌でもね」

それだけ言うと、春信は病室から出て行った。

「……結局、なんだったんだ？」

喋るだけ喋り、その後は意味深な言葉を残して帰った不審者。一瞬だけ通報しようかと考えたが、そうしたら幻のイカの姿フライが貰えなくなるので止めた。

(……何が、勇者で在れ…だよ。本当に汚い大人だな、僕は…)

世のため国のためと言い、勇者システムの隠された仕様を知りながらも大赦の所属であり続けている。それが平和だと信じて、それだけが現状維持に最適だと信じきって——なのに、最愛の妹が関わった途端、手のひらを返したように手助けをして、残酷な答えを仄めかす。汚い大人なのに、そんな自分を隠すような行為をしてしまった。まるで獣にも鳥にもなれない卑怯な蝙蝠だ。

これから起こることを知り、尚且つ彼に『勇者で在れ』とみっともなく縋ってしまったのだ。

「——願わくば、君が『真実』に辿りけますように…なんてね。はあ

…僕らしくないなあ…まったく」

一人の大人は、ため息混じりに小さく呟いた。

似た者同士

——紅く染まる浜辺。

夕日が小波に反射されて幻想的な光景を生み出し、夏の煩わしい暑さも何処と無く爽やかさを醸し出す。そんな浜辺で両手に木刀を持ち、剣舞の如く振るう少女の姿もまた、風景の一つだ。

「っ！……はあ!!」

空想の敵に木刀を振り下ろし、避けられたと仮定しもう片手で連撃を放つ。更に隙を逃さないと言わんばかりに逆手に持ち直した木刀で薙ぎ、続けざまに全身を回転させて双の木刀で全範囲の風を斬る。

浜辺ということもあり、踏み込みの悪い足場だ。足腰に無駄な負担がかかり、疲労が溜まっていく。故に少女は浜辺を鍛錬の場として選んでいた。

少しずつ乱れる息を頬にためて、両腕を動かすスピードを一段階上昇させる。無呼吸運動により一時的に隙がなくなり、所謂ゾーンに近い状態へと突入する。そのまま肺が限界を迎えるまで脚を前に進め、勢いづけて空を穿つ。

——充実した鍛錬の筈なのに、少女の胸を占めるのは虚無感だけだ。

もう必要のない鍛錬。本気で振るえば容易く人の命を奪える剣術を、目的もなく、敢えて言うならば無心になる為だけに磨く——否、雑念の溢れてる現状では鍛錬と呼ぶのも烏滸がましいのかもしれない。

目的のない剣は鈍り、鋭さを見せない。それがお前の打ち止めだと言われてる様で、少女は虚しくなった。

「やっほー、にぼっしー」

「っ!?!……何であんたが、ここに居るのよ……?」

少女——夏凜が振り返ると、そこにはここ最近で隣人の様に見慣れた少年が居た。

彼は入院中であり、勝手な外出は許可されないはずだ。現に薄緑の患者衣を着ている。腕にはまだギプスが装着されており、痛々しさは残ったままだ。本来はそんな彼がこの場において良いはずがないのだ

が――

「我、脱走に成功せり!!」

「何やってるのよ!?!……腕、大丈夫なの?」

「そろそろ治りそう。っていうか多分治ってる」

多分と付けたのは、右腕の感覚が無いので唯斗自身も己の容態について把握出来ていないからだ。一時的な症状だとは言われたが、特に変化はない。それは他の勇者達も同じらしく、統一性のない症状は友奈や樹に関しては日常生活に大きすぎる異状として残ってる。

樹や友奈に比べたら、唯斗の症状はまだマシだったのかもしれない。

「普通、骨折だけで入院なんてさせる?」

「あんた達の場合、ただの骨折じゃないでしょ。精霊のバリアがあるにも関わらず、二人まとめて右腕骨折とか……ホント、何やらかしたのよ」

「友奈はピコハンロケットの衝撃で折れて、俺は紙飛行機爆発の衝撃でボキッた。……おい、アホを見るような目で見るな。泣き喚くぞ」
「どんな脅し文句よ……」

結局何をしでかしたのかは理解できなかったが、バカとアホが無茶なことをしたということだけは判った。

夏凜は呆れる一方で、罪悪感に似た感情もあった。

勇者部の中で比較的軽傷――否、無傷なのは夏凜だけだ。風は片目の視力が激的に落ち、樹は声が出ない。東郷も片耳の聴力が著しく落ち、友奈は味覚がない。そして唯斗は右腕の感覚がなくなった。その上、友奈と唯斗の二人は骨折までした。未知の神敵を相手にして勝利したのだから、払う代価としては安いものなのだろう。

だが夏凜だけがその代価を払ってない。

己の実力を誇示し、お前達と自分は違うのだと言葉にして彼女達にぶつけた。なのに、その結果がこれだ。その罪悪感は次第に勇者部から距離を取り、付き合いを避けるようになるには十分過ぎた。

「……三好、今暇か?」

「見て分からない? 鍛錬の途中なんだけど」

「部活をサボって？」

「……勇者の役目を終えたなら、私が勇者部にいる必要性は皆無よ。元々、戦力的に不安だったあんた達への増援のために派遣されただけの、所詮は他人なのよ。……まあ、その増援対象が手助けなんて必要なくらい強くて、私は何の成果も上げれてないんだけどね……唯斗、あんたの目には、私がさぞ滑稽に映ってるでしょうね」

夏凜は自嘲気味に言葉を放った。まるで突き放すように。そうすることで弱い自分に触れて欲しくないと伝えてるように――

事実、先日の戦いで夏凜は何の成果も上げてはいない。気絶した友奈を守っていたからでもあるが、それを言い訳にするほど腐ってはいない。

「じゃあ、三好は勇者部辞めるの？」

「……っ！」

無意識に霧散させていたことを、無遠慮に問われる。以前の自分なら肯定してたのに、何故か言葉が詰まった。手放そうと思えば簡単に手放せるのに、それを言葉に出来ない。あの場所を遠ざけているのに、関係を断ちたくないと心が叫んでいる。

数秒の沈黙の後、唯斗が喋り始める。

「……俺はさ、迷ってるんだよね」

「……何をよ？」

「勇者部を辞めようかになって」

「っ!？」

それは予想も出来ない言葉だった。夏凜は思わず目を見開き、唯斗の言葉を脳内で何度も繰り返し返した。

「三好には、勇者部の中での郡唯斗っていう人物はどう見えてた？勇者とかお役目とか、そういうのは抜きにして」

「……………」

聡い少女は、目の前の少年の心情を察した。きっと、自分と同じなのだ。意図的に集められただけの自分達の関係が、果たして『本物』と呼べるのか。

夏凜はそれをニセモノだとは否定しないが、その場に自分が含まれ

てることに違和感と疎外感を覚えてる。ただの戦力として追加されただけの自分には、あの部室は眩しい。そう感じてしまってるのだ。でも、だからこそ不可解なこともある。

『勇者』としてあの場にいた夏凜は『勇者』としてしか彼女達と触れられないが、唯斗は別だ。勇者やバーテックスについて知る前から彼は勇者部だったのだ。お役目が伝わる前から形成されていた関係は、確かに『本物』の筈だ。なのに、彼は何を悩んでいるのだろうか。

「逆に聞くけど、あんたは勇者部が嫌いなのか？」

「……………苦手だけど、嫌いじゃない」

「何よ、それ…」

「三好は気付いてる？俺が友奈を避けてること。東郷とか風先輩、樹とは普通に話すけど友奈とだけは話す時間が極端に少ないこと…」

「……………思い当たる節はあるわ」

夏凜が勇者部に入部させられてから、最初にしたのは人間関係の把握だ。唯斗というイレギュラーな勇者が存在することによって、大赦も慎重になってる。故に、大赦所属である三好夏凜に命じられたのは単なる戦力としての増援だけでなく、勇者部の内部事情の把握と報告だ。その一端に含まれていたのが人間関係だ。

部員同士の不仲は見られなかったが、コミュニケーション能力に長けてる結城友奈と郡唯斗の関係は理解に苦しんだ。友奈からは他の部員同様に好意的に接してるが、唯斗からは一切の関わりを持たない。それが思春期特有の態度かとも思ったが、他の部員との関係を見る限りではその線は薄い。

だが嫌ってるかと聞かれれば、決してそうとも言えなかった。言葉を掛けられれば普通に応じるし、彼自身が友奈について悪く思っていないというのも理解出来た。

「別に、友奈のこと嫌いではないんですよ？」

「——嫌いじゃないけど、怖い」

「…怖い？」

「勝手な話だけど、俺は友奈の信仰心が怖いんだよ。得体の知れないものを妄信的に信仰してる友奈が…俺達とは違うナニカに思えて、仕

方が無いんだよ」

唯斗の言葉には嘘がない。結城友奈という得体の知れない人物を恐れて、一方的に距離を置いてる現状。部員の誰もが何となく察し、然れど二人の問題だからと敢えて見て見ぬふりをしてる。

夏凜はそう語る唯斗に酷く違和感を覚えた。

普通は、恐怖の対象と対等に話すなんて不可能だ。無意識に媚び、下手に出て、自分という存在を如何にも矮小で惨めな、敵対すら馬鹿らしいと思える程の存在だと思わせる。それが弱者の手段であり、恐怖への対処法という名の定石なのだ。

だが、唯斗と友奈は『対等』だ。どんなに避けても、何処まで遠ざけても——結局は対等な存在にしかねない。唯斗も友奈も、ベクトルは違えど同じクラスで同じ部活、同じ使命を背負った『友人』だ。其れは『恐怖』と『弱者』の関係には決して成り得ない。

だからこそ——

「……………違うでしょ」

「は……？」

「あんたが……唯斗が怖がつてるのは、友奈じゃない。それを受け入れられない自分自身でしょ？少し変わった友達を”変”だと決めつけて、たったそれだけで疎外感を覚えて、独りよがりなんかして……バカみたい」

「……………」

——三好夏凜と郡唯斗は似ていた。

負けず嫌いで、独りよがり。だけど孤独を恐れて独りになりきれない。無意識に仲間に縋って、頼って、それが当たり前だといつの間にか盲信している。なのに酷く不器用で、自分自身の本音すら理解出来ずに、間違った方向へと進んでしまう。意識的に頼ることが苦手で、手を引かれることを恥と思いつつも同時に嬉しく感じてる。

だからこそ、夏凜は唯斗に腹が立った。

同族嫌悪と言われればそこまでだ。煮え切らない態度で悩み、言い訳に他人を利用する。まるで鏡を見せられてるようだ。

今の自分と今の唯斗。似ても似つかない外見とは裏腹に内面は似

ていて、自分すら理解出来ず騙してしまう程の愚者。誰にも本音をぶつけられず、爆発するまで溜めて恥をかく馬鹿者。——夏凜は、そんな唯斗が嫌いだ。

「——唯斗、戦いなさい」

「……は？なんで……」

「いいから！勝った方が、負けた方に命令できる。勝ち負けは……そうね、相手が負けを認めるまでよ」

唯斗と夏凜は似ていても、所詮は他人だ。——そんな自分にそっくりな他人だからこそ、夏凜には唯斗の心情が理解出来る。自分自身の本音すら判らなくとも、親しい人物の気持ちくらいは理解出来るのだ。今、この男には何が必要なのか。三好夏凜はその答えを知っている。

それに必要な手段がこれだ。

「……っ！」

「……はあ、分かった。それで三好が満足するなら、やってやるよ。負けでも泣くなよ？」

「はっ、冗談キツイわね。あんたが私との模擬戦で、一度でも勝ったことがあある？」

「さあ？記憶にはないな」

夏凜は両手に持った木刀の片方を唯斗に投げ渡し、一本になった木刀を中段で構える。剣道において基本的な構えであり、どの部位への打ち込みにも即座に対応できるバランスの取れた構え。普段の二刀流とは勝手が違いむず痒さを感じるが、それだけで負けるほど夏凜の積んだ経験は浅くない。

対して唯斗は、左手だけで構える。

「……ギプス、取れないんだけど……」

「じゃあ我慢なさい。別に良いでしょ、負けた時の言い訳に出来るんだし。片手が使えないから、負けたとしても仕方がなかったんです——ってね」

「はっ？上等だよコノヤロウ」

「レディに向かって野郎はないでしょ、失礼ね」

お互いに挑発しながら、目を合わせる。一瞬の沈黙を置いて、二人の模擬戦は始まりを告げる――

「はあ!!」

「っ……危ないだろ……当たったら泣くぞ、大声で！ツインテールの猛獣が浜辺で夜な夜な暴れ回ってるってネットに拡散するぞ！最終的にUMAに仕立て上げるぞ!!」

振り下ろされた木刀を危なげなく躲しながら、唯斗は文句を飛ばす。尚、別称煽りとも言う。

「口を動かす暇があるなら！手を動かさない!!」

「はっ、動かせて見せろよ！下手くそが!!」

唯斗は普段、夏凜の二刀流を相手にしてるだけあつて躲すのが上手い。その一点だけならば夏凜をも上回り、木刀一本での攻めに関しては躲すなど造作もない。

だが、躲せるからと言つて勝てるとは言えない。

唯斗の拙い攻撃は、下手をしたらカウンターによる反撃の餌食となる。幾ら慣れない戦い方でも、対人戦の経験が圧倒的に多い夏凜ならば僅か一手で形勢を逆転させることも容易い。唯斗自身、これまでの夏凜との模擬戦で何度もそれを食らっており、今回もカウンターを警戒して攻めあぐねている。

夕日が沈み、薄暗い浜辺には砂を蹴り風を斬る音が響いていた――

――数十分後

「はあ……っ、はあ……っ！ま、まだまだだよ!!」

「……………なんで、そこまで必死なんだよ」

息が上がる夏凜。夏凜と唯斗には元から体力に大きな差があったが、今回は先に一人で鍛錬をし、体力を消費していた夏凜の方が先に尽きようとしていた。

「あんたもっ…打って、きなさい…ッ！」

息を乱しながらも構えを崩さない夏凜。肺は酸素を過剰に求め、心臓は脳の奥まで伝わるほど高く鳴る。服は滝のような汗で肌張り付き、軽度の酸欠で頭痛がする。力なく振るう木刀からは風を斬る音すら響かず、その速度は素人でも躲せる程度——だが、夏凜は構えを決して崩さない。夏凜の目は未だに鋭く唯斗を射抜いてる。

「……はあ、いいよ。俺の負け」

唯斗は手に持った木刀を地面に置き、両手を上げる。つまり降参ということだ。

「っ！……馬鹿に…してるの…っ!？」

「当たり前だろ。怪我人に容赦なく襲いかかって来て、その上罵倒まで飛ばしてくる奴を馬鹿と言わずしてなんと言うんだよ。……でも、そんな馬鹿よりも俺の方が馬鹿だから、俺の負けだよ」

目の前の少女が必死に木刀を振るう意味すら理解出来ず、疲れ果てて隙だらけの相手を叩くことを躊躇ってしまう。そんな馬鹿が、どう勝てというのか。勝ち負け以前に、唯斗は夏凜に対して剣を振れなかった。

だからこそ、これ以上は無駄な時間浪費だった。

勝利を得た夏凜の膝からは力が抜け、思わず浜辺に座り込む。乾ききった喉を潤すためにスポーツドリンクを一気に飲み干し、荒れた呼吸を整えた。

「…じゃあ、あんたには私の命令を聞く義務があるのよね？」

「義務って…もつと軽い言い回しとかないの？」

「どんな言い方でも良いけど、あんたは命令に対して拒否権は無いから。絶対服従、忍従、奴隷化——どの言い方でも私は構わないわ」

「最後のは違うだろ。……無理なことは言うなよ？」

「じゃあ唯斗、友奈と本音で話さない。嘘も建前も無しにして、素の郡唯斗として友奈と話さない。それが私からあんたにする、『命令』よ」

唯斗が勇者部について考える上で、必ず行き止まるのは結城友奈の存在だ。半年近く前から唯斗の恐怖の対象となり、長らく避け続けて

きた相手。そんな彼女と話すのが、三好夏凜の出した命令だ。

「……………了解」

「後、命令を達成するまで勇者部を辞めるのは駄目よ。私が認めないわ」

「……………畏まり、お嬢様」

「ちよっ、変な呼び方するな！なんかこう…むず痒いのよ!!」

不服そうな唯斗とは裏腹に、夏凜の表情は心做しか晴れていた。模擬戦がストレス発散になったからか、それとも三好夏凜が勇者部にいれる理由が出来たからか——勿論、そんなのは本人すら知らない。夏凜は己に対しては鈍感なのだ。

——マイフアアアアアア!!マイフアアアア!!

「っ!!」

唯斗のスマホからシューベルトの『魔王』が鳴る。唯斗と夏凜は二人でビクリと肩を震わせて驚いた。それは何時かの既視感のような、身に覚えのある光景だった。

「げっ…東郷からの着信だ。逃げたのバレたな…」

「……………あんた、本当に脱走してきたのね…」

「って言うことで、戻ります。ありがと、夏凜！」

「っ……………今、名前で呼ばれた…?」

遠ざかる薄緑の患者衣。その後ろ姿を見ながら、夏凜は明日は部室へ顔を出そうと密かに決めた。

「……………ん?何か伝え忘れてるような…まあ、大事なことならそのうち思い出すか!」

唯斗は縁談について完全に忘れていた。

・じこしよーかい

「あー、ども。勇者部唯二の常識人、郡唯斗です。趣味は無課金でも楽しめるソシャゲ、運営がイミフな理由で石をばら撒くゲームが人生に

おいて二番目に好きです。えっ、イチバン？そんなの聞くまでもないだろ。イカの姿フライだよ。イカの姿フライのためなら風先輩とにぼっしーの犠牲も尊く思えるくらい、イカの姿フライが大好き。ちよっ、風先輩！チヨーク投げるな!!そんなだから女子力(暴力)とか言われてるんだぞ!!

………えっ、好きな人?……や、山田くん……かな?敢えて言うならだけど。……あーいや!違う違う!!LIKEだよ、ラーイーク!!……言わせんなよっ／／………トーゴー?目が怖いよ?」

事故

人生とは儚く、切っ掛け一つで簡単に崩れ去るものだ。

リセットやコンテニュー、ポーズも出来ないのに、人はその事実は何の現実感も持たず、ましてや危機感なんて在って無いものと扱い、日々を自堕落に過ごし使い潰す。それがどんなに傲慢で烏滸がましく、愚かなことかも知らず——知ること出来ずに。

大層な言葉を並べても尚、『死』に対してあやふやな幻想視をするのが人間だ。

転生、再生、来世、輪廻、再現——数々の言葉を並べても疑問は尽きない。何故に経験をしてない『死』に対して樂觀的に、抽象的に、墮落的に、幻想的に解釈ができるのか。

結局のところ、全て『そうだったら良いな』という現実逃避なのだ。

『死』は未知だ。

人間は未知を恐れる。

だからある者は神に縋り、ある者は創作物で目を逸らし、ある者は過ぎ去る日々に名を付け、ある者は危険を本能的に避け——

常に盲目的で在り続ける。

そして、明確な『死』を目の前にしたら言葉を無くす。生涯掛けても辿り着けない『答え』を目の前にして、思考は意味を成さなくなる。そこに現実感も見いだせず、過ぎ去った日々を後悔し走馬灯という名の最後の現実逃避をしたまま、『生』を終えて『死』を迎える。

人間が己の愚かさに気が付き真に後悔するとしたら、それはきつと『死』と『生』の境を揺蕩う時だけだ。

眼前に『答え』を用意されないと思考が働かない。それが人間の業だ。

——でも、それを仕方無しと答える人もいる。

それが『人間』という社会的動物の習性なのだから、と。

それもひとつの『答え』なのか、或いは人間の『惰性』による妥協

なのか。その答え合わせをするのは、『死』の直前なのだろう――

――走っていた。

夏凜と話した後、俺は脇目も振らず病院まで走ってる。決闘じみた真似をしたから疲れは多少あるが、夏凜みたいにブンブンと木刀を振ってたわけじゃないし、体力には余裕があった。

(やっべ……絶対に怒られる)

勝手に病院を抜け出したということもあり、もうどんなに足掻いても説教だけは確定していた。

看護師のオバチャンの怒り顔は般若、或いは閻魔様を連想させるくらい無茶苦茶迫力があるし、さつき電話を掛けてきた東郷は心底心配そうにしていたので迷惑を掛けたくない。そんな想いがあったからか、俺は普段よりも注意が散漫していた。

――だから、気が付けなかった。

「えっ」

激しく鼓膜を揺さぶるクラクション、甲高く鳴り響いたブレーキ音、眩く視界が霞むほど強いヘッドライト、眼前に迫る大型トラック――
つまるところ、交通事故だ。病院を抜け出した馬鹿な男子中学生が急に飛び出し、トラックにぶつかるといふ何の事件性や不思議の無い交通事故。

偶然が必然か、それは半年近く前に友奈も体験しかけた事だった。余所見による飛び出し交通事故、それは俺が友奈を避け始める切っ掛けとなった出来事と相違なく、俺の頭には既視感があった。

俺とトラック、何方に原因があるかと聞かれれば答えは明白だ。余所見していて、尚且つ急に飛び出した俺が十中八九、十二分に悪い。

文字通り眼前に迫る大型トラック。どれだけ超人的な身体能力を有していても、どれだけ優秀な反射神経があつたとしても――もう避

けるのは無理だ。それが表すのは即ち、走馬灯後梅の余地すらない即死だ。

「っ——!!」

眩む目を強く瞑り、明確な死を覚悟した。

未だ鳴り響くクラクションを聴きながら、強過ぎる衝撃は俺の全身を空気の層へぶつける。それが負荷として体にのしかかり、俺は宙へと投げ出された。不思議と痛みはなく、トランポリンで押されたような感覚に陥る。

バットで打ったボールが弧を描いて地に落ちるように、俺の体も例外なく落ちる——

「——ゲボッ——」

数秒にも満たない空中浮遊の後、アスファルトの地面に叩きつけられ肺の空気が全て吐き出す。

胃液混じりの咳きに不快感を覚え、本格的に吐き気を催す。然れど身体は地面にくっついたように離れず、不快感もすぐに無情な恐怖に染まる。

薄目で、俺を轢いたトラックが猛スピードで走り去るのを、まるで他人事の様子に傍観していた。考えるまでもなく轢き逃げだが、現実感の湧かない現状で何処か其れを良しとしてる自分がいた。哀れな運転手に同情していたのか、或いは死を目の前にして全てを諦めていたのかもしれない。

身の丈の何十倍もある鉄の塊にぶつかられた。その事実はより明確な死を連想させ、心臓に針を刺さされるような感覚に陥る。自分の体は一体どんな状態なのか？こんな現状でも本当に自分は生きているのだろうか？——微かな好奇心も、秒となく肥大すぎる恐怖心に飲み込まれた。見るのが怖い。死ぬのが恐ろしい。自分の行動が恨めしい。

神経がイカれたのか、痛みは一切ない。

数回咳き込み、肺から出された空気を取り込む。もう少しで死ぬから無意味かも知らないけど、誰だって苦しみの果てに死にたいとは思わないだろう。多少なりとも楽に——

「……………ん？マジで痛くないんだけど…？」

違和感を覚えた。確かに轢かれたが、思えば辺り周辺に血潮が飛び散ってない。ならば全身複雑骨折かと思えば、手も足も、胴体も普段と大差なく動く。勿論右腕は例外だが。

上半身を起こして自分の体を見るが、傷一つ無かった。

あれだけの事故に遭って、奇跡的に怪我無し——なんて有り得る筈が無い。知らぬ間にサイボーグにでも改造されたのだろうか。将また、夢という可能性もあるが——

「……………『大蛇』？」

傍らに、見慣れた純白の蛇が浮いていた。

唯斗の精霊である『大蛇』だ。勇者システム起動時に現れ、勇者をサポートする存在。勇者を護り、各々の武器に宿る存在。——そして今、この場に居るはずのない存在でもある。

大蛇を中心に薄い半透明の膜が空中に貼られていた。——幾度となく命を救われた『精霊バリア』だ。

「…なんで、精霊が…」

勇者システムはもう使えないハズだ。勇者アプリをインストールされたデバイスは回収されてるし、そもそも今は勇者に変身すらしてない。——いや、大前提として俺はもう勇者じゃない。もう変身できない『元勇者』であり、既に何の変哲もない『一般人』。それが今の俺だ。

なら、何で『大蛇』が出現した…？

今手元にあるのは、大赦から支給されたスマホだ。前に使ってたやつと機種は同じで、中身のデータもそのまま受け継いでる。唯一の相違点と言えば勇者システムが搭載か否かだ。

(……………勇者システムの一部も移行されてる…？)

だが、それは有り得ない。

勇者システムとは、即ち神敵に対抗すべく適合者に授けられる異能だ。言わば化学と神力を組み合わせ、其れを凡々たる少女達に行きさせる『武器』であり、『最終防衛ライン』でもある。

それを、何故俺に——俺達にまだ持たせてる？

神敵は全滅した。

勇者としての御役目も果たした。

ならば、もう勇者システムは御役御免な筈だ。これは元より内なる敵では無く外敵に対しての『手段』だ。その勇者の力を政治や布教活動、職権乱用として使用するのには信仰対象である神樹様への裏切りだ。そんなこと、信者じゃない俺よりも大赦の方が理解してる筈だ。

なら、それなら――

「……………なんで、まだ残ってるんだよ…?」

破棄せずとも、悪用の可能性を秘めてる俺達に持たせるよりは大赦側で保管した方が余程安全で合理的だ。

だが現状として、変身出来ずとも勇者としての力は残されてる。態々アプリを回収して、もう力は残されてない筈なのに、現に俺の傍らには『大蛇』がいる。

(……………まだ終わってない?)

——考えたくない『可能性』だ。

一度希望を抱かせてから、絶望へと叩き落とす屑の所業。其れを大赦が行ってるだなんて、考えたくもない。

もしも、まだバーテックスが残っていると。そしたらきつと、俺達はその討伐を断ることは出来ない。善意や国防精神などではなく、やらなければ世界が亡び死ぬと言われているのだから、傍観する選択肢なんてあつてないようなものだ。

「……………後で、あにつしーに聞いてみるか」

結局のところ、どれだけ面倒臭い思考を巡らせても予想は予想の域を出ない。

ならば、単純に聞けば良いだけのこと。変に拗れて纏れた難しい考えなんて必要ない。判らないから聞く、それだけだ。まだ子供であるが故に、何でも聞き問える。

「……………あつ、あにつしーの連絡先聞いてない」

取り敢えずはエンカウントするまで待つことにした。例の取引き

の件もあるので、近々必ず会える。まずは夏凜を盗撮——もとい、取引の材料でも集めて待とう。

この後、病院でめちやくちや怒られた。

——数日後

「や、ヤメロオオー!! 離せ! HA☆NA☆SE!! この人殺し! 無慈悲クソ女! 脳筋女子力(笑) 野郎!! 生まれてきたことを罪と思え!!」
「喧しいわー!」

自室にて、唯斗は叫んでいた。

時は十数分程遡る。

病院脱走事件から僅か数日で、唯斗や東郷、友奈は退院できていた。ちやうど学校も夏休みに突入しており、たんまりと積み上げられた宿題に辟易としながら自室の机の中に押し込み、見て見ぬふりをしたのは記憶に新しい。

ともあれ、骨折は治りイカの姿フライも食べ放題な現状。唯斗は朝からイカの姿フライを頬張りながらエナジードリンクで使用しないエナジーを摂取した。

そんな所に、風から電話が掛かってきた。

——ヨツ、ゴレッツ、チマアアアター! カーナーシーミーニー!!
「ん…? 風先輩からか…」

余談だが、唯斗は風からの着信曲に『魁!! 男塾』のOPを採用している。理由は簡単で、彼女程漢気溢れる人物は知らないから、このこと。

「もしもし…」

『唯斗、今暇ね?』

「めちやくちや忙しいです。それもう…:はい、言葉では言い表せない程度には忙しいんですよ!」

もちろん嘘である。前記の通り、全力で自堕落に過ごし七大罪の一つである怠惰を体一貫で表現してる。これには勤勉な怠惰担当もブ

チギレ案件だ。

『嘘おつしやい。どうせ駄菓子でも食べながら漫画読んでるんでしょ？おネーサンには全部お見通しよ！』

「ひえ…風先輩もストーカー化した!？」

『盗撮郷と同じ扱いするな。単にあんたの行動がワンパターンなだけでしょ！』

「ワンパターンとは失礼な。食って寝て、また食って寝る。それこそが平和の象徴じゃないですか」

「…暇なら海に行くわよ！今から全員で迎えに行くから準備し——」

唯斗は通話を切った。

「海は無理。いや、マジで海は無理だ…！何で陸上で生きてる人間がわざわざ海に近づいて死に急ぐんだよ!？」

唯斗は泳げない系男子だった。体育では程々の成績の唯斗だが、水泳だけは大の苦手だ。もはや人類が海に近づくことにすら疑問視をする程度には海が苦手なのだ。

学校のプールの授業には常に不参加だ。実際は泳げないからだけではなく、他の理由もあるのだが——

——ピンポン。

玄関チャイムがなる。

「なっ…！来るの早すぎだろ!？」

電話を掛けてきた時点で、既に近くまで来ていたのだろう。何と性格の悪い部長なのだろうか。逃げる隙すら与えてくれないとは。

（いや、まだ大丈夫。伝家の宝刀『居留守』を使えば——）

——ガチャ

玄関の鍵があいた。両親が不在で鍵も掛けている現状、態々開けられる人などいない筈だ。それに相手は風、ピッキングよりもドアを突き破る側の人間だ。

だが、唯斗は勘違いをした。

風は確かに『今から全員で迎えに行く』と言った。その『みんな』にはある人物も含まれていた。

「……まさか、樹も来てるのか…!？」

実はこの男、諸事情により樹に家の鍵を渡している。尚、決して疚しいことは無い。

この後、必死に抵抗する唯斗の苦労も虚しく、勇者部御一行に拉致された。

○○○おまけ○○○

勇者部各部員の着信曲（唯斗のスマホ）

- ・ 東郷美森 : 魔王（シューベルト）
- ・ 三好夏凜 : おしりの山はエベレスト（おしりかじり虫）
- ・ 犬吠埼風 : 汚れっちまった悲しみ…（魁!!男塾）
- ・ 犬吠埼樹 : さんぽ（となりのトトロ）
- ・ 結城友奈 : 4分33秒（無音）

づ)褒美の合宿は突然に

思えば、ココ最近は今もって不運だ。

バーテックスを全滅させたのに、何の因果か人間関係で悩むことが増えて、夏凜からは決闘的な振る舞いをされ、挙句の果てには若干憂鬱になる『命令』をされた。

その上、追い討ちをかけるように交通事故に遭い、何故か精霊のバリアが出現。

自称「お偉い立場」の眼鏡優男に話を聞こうと思っても、全然エンカウントしない。連絡先は知らず、夏凜に聞こうにも例の交渉の件があるので極力避けたい話題となっている現状。

失礼ながら、ゴキブリを連想してしまった。居ないで欲しい時には出てくるのに、いざ殺虫剤を買ってきたら途端に姿を消す。きっと、彼の前世はゴキブリだったのだろう。

そんな胃袋ブレイクな日々にとドメを刺したのは――

「や、ヤメロオオー!!離せ!HA☆NA☆SE!!この人殺し!無慈悲クソ女!脳筋女子力(笑)野郎!!生まれてきたことを罪と思え!!」
「喧しいわ!!」

夏休みエンジョイ勢か妖怪の如く、人を海に連れ去ろうとする輩共。不法侵入に人攫い、この後には溺死という名の殺人まで行われるのだ。

自己的平和主義者の唯斗にとって、それは許されざる行為であり、同時に海やプール等の水泳関係が壊滅的なまでに苦手な彼にとって、は地獄に等しい。

「夏凜、樹!この馬鹿を拘束しなさい!!」

「嫌よ」

「いやだよ...?」

犯罪に巻き込まれる事を恐れたのか、夏凜は顔を顰めて部長命令を断った。なお、自分達の不法侵入に関しては特筆に値する感情は存在しないらしい。

夏凜に続いて、樹は声が出ない代わりにスケッチブックに文字を書いて、威厳を失いかけてる姉の命令を即刻拒否した。

余談だが、片目に眼帯をして他人の家に乗り込む風の姿は、誰が見ても海賊そのものだったらしい。

——唯斗にとって新たな敵が現れないのは吉報だが、だからと言って目の前の内面的ゴリラガールがニフラムを唱えた様に消える訳でもない。

(ク…ッ…なにか…何か良い手を!!)

唯斗は周りを見渡し、打開策を練る。

この場に居るのはイツメンこと勇者部の全員。諸悪の根源の風に、姉の逆を生きる樹。とある一点がメガロポリスな感じの東郷と、行動思考共に予測不能な友奈^{アンタッチャブル}。その後ろで我関せずと傍観者を気取り口元に煮干カスを付けてる夏凜。

風のゴリラフォールドを受け圧迫された脳で導き出した答えは――

「トーゴーヘルプミいい!!この歩く騒音な自称モテる女(笑)の極悪非道サイクロプス系謎特性ヤロウを止めて!!年下男子からはモテるのに交際どころか絶対に結婚が出来なくて定期的に一方的に愚痴るだけの飲み会を開く将来が待ってそうな風先輩をどうにかして!!」

「後半が具体的過ぎない?」

考え付いたのは、何の捻りも無い至極単純で一番有用とも取れる方法。眼前の人物へのSOSだった。

ついでに此処ぞとばかりに溢れ出る風への不平不満、総称悪口。最終的には実際に有り得てしまいそうな架空話まで用いて貶す始末。

これには風も――

「――ふんっ!」

「っ!ふ、風先輩…?なんかゴリラフォールドの締め付けがキツく…ちよっ、風先輩!腕と肋からミシミシって聞こえるんだけど!?あ、まっ…折れる…!マジで折れるから!!」

「わわっ!ふ、風先輩落ち着いてー!!」

普通にキレた。罵倒が刺さったと言うよりは、後半の具体例が自分

でも想像出来てしまったことへの嫌悪が風を突き動かした。

能面で後輩を絞め殺そうとする風を友奈が後ろから羽交い締めるが、物理的女子力は止まらない。寧ろ友奈の腕も巻き込んで、通常の人体からは鳴り得ない音を響かせた。

「ぎゃあああ!!」

郡家に唯斗と友奈の悲鳴が無情にも響き渡った。

「全く…！最近女子力が限界突破したアタシの悪口を言うだなんて。万死に値するわ！海に沈めようかしら？」

「や、やっぱり沈めようとしてるじゃん!?クソっ！犯罪者予備軍と海になんて行けるか！俺は部屋に引き籠もらせてもらおう!!」

〈半分は唯斗せんぱいのせいですよ〉

一応と言前に付けるが、無事にゴリラフールドから抜け出せた唯斗と友奈。友奈に関しては止めようとして完全に文字通り巻き込まれただけだった。

部屋の隅で震える唯斗は、探偵を名乗る死神が大好きそうな言葉を吐きながら風を睨みつけた。

「セリフがフラグ臭いのよ。後、風も落ち着きなさい。説明を忘れてたのはアンタの落ち度でしょ。それでキレるのはお門違いってやつよ」

「……………」

夏凜の言葉に、風と唯斗は醜い罵り合いを止めた。己の痴態を恥じてるのか、将また夏凜の言葉に胸を打たれたのか――

「…………アンタ、変な物でも食べた?そんな常識人みたいなこと言ってる…」

「にぼっしー…疲れてるのか?そんな常人みたいなこと言ってる…」
「アンタらは私のこと何だと思ってるのよ!?!」

「煮干し狂人」

「オーケー上等よ!二人まとめて腐った根性を叩き直してあげるわ!!」

「わ、わあー！みんな落ち着いてえー!!」
「……………」

東郷は三人の乱闘を冷めた目で見ていた。この状況下では東郷が大人しく、所謂常識人に見えるが、その実態は不動の一番を冠する盗撮盗聴上等系のヤベー奴なのだから救いようがない。

極論、勇者部メンバーの中に常識人なんて存在しないのだった。

「って言うかさ、何で樹が唯斗ん家の鍵持ってるのよ」

「それには宇宙より広くマリアナ海溝より深い事情がありました…」

「唯斗せんぱいが入院中に、イカの姿フライを届けてたの。唯斗せんぱいのベッドの下、業務用イカの姿フライでパンパンだったよ…」

「アタシの妹をパシってんじゃないわよ！」

「ぐべっ!？」

風は唯斗の腹に拳をめり込ませた。

「うーみだー!!」

「ふふっ、友奈ちゃんったら無邪気にはしゃいじゃって…天使の生まれ変わりなのかしら?…いえ、きっと友奈ちゃんこそが天使の起源なんだわ…!」

「アンタの目には友奈がどう映ってるのよ…」

夏凜の冷ややかな視線を受けてもなお、東郷の手元からはシャツター音が止まらず鳴り響いていた。

——勇者部は海に来ていた。

より正確に説明するなら、大赦からのバーテックス討伐ご褒美で宿泊付きりゾート地に来ていた。

照りつける太陽に、煌めく青い海。白く輝く砂浜はサンダルの下からでも過剰に熱を感じれる程だ。

加えて、一名を除き全員が水着を着用している。海だから当然なの

だが——異様なのは、その水着を着ていない一名の服装だ。

「……唯斗。別に水着になれとまでは言わないけどさ……泳がないなら、その浮き輪くらい外したら？」

「風先輩は俺に死ねと申すのか!？」

「アタシの言葉がどう変換されたらそうなるのよ」

服装こそ、特段と違和感を感じさせるものは無い。然れども、故に尚のこと異様なのは普段着の上から胴体部に装着された二つの浮き輪。

風達が目を離れた隙に装備しており、本人曰く呪いの装備の如く外れないから仕方無しとのこと。勿論、小学生でも判る単純な嘘だ。

「ウキワ、ハナサナイ！コレ、カラダ、イチブ!!」

〈なんでカタコト……〉

「……そもそもの話だ。何で水中で生きる術を持たない人間が態々、死ぬ可能性のある海に近づくんか？人の子として生まれながらも、魚類に憧憬でも抱いてんのか？地に足をつけて、海に比べて広大とは言い難くてもそれなりに自由のある陸地で生きるのがそんなにも窮屈なのか?!理解できない!死に急ぐお前達が、俺には理解しかねる!!」

「恐ろしく側面的な考えね……」

結局、無理やり連れてこられた唯斗。
口からは不平と不満、疑問が垂れ流した。まるで海の水が全て硫酸に等しいと言わんばかりの言い様。だが然し、散々な言葉を吐きながらも声を震わせ少しずつ後退するチキンっぷり。

最早、この男には周りの目を気にする余裕すら残されてはいないのだ。

「まー、いいわ!唯斗のことなんて放っておいて遊びましょう!その煮干しバカ!アタシに挑む気はあるかしら?」

「誰が煮干しバカよ!……いいわ、今回は挑発に乗ってあげようじゃない。競泳よ、競泳!!」

分かりやすい挑発に、煮干しバカこと三好夏凜は敢えて乗った。日々の鍛錬で鍛え抜かれた身体は、うどんを食べまくるだけの彼女に

負ける程ヤワではない。少なくとも、夏凜にはその自信があった。

「ふふっ、瀬戸の人魚と言われたアタシが格の違いってヤツを見せてあげるわ!!」

「どーせ自称だろ」

へもちろん自称です」

「唯斗と樹、うるさいわよ!! 本当に水泳は得意なのよ! 幼稚園のとき、五年くらいやってたもの!」

「幼稚園に五年もいないでしょ」

「いや、風先輩が規格外の馬鹿すぎて幼稚園で留年したという前代未聞の事件があった可能性も…オーケー、オーケー、言葉が過ぎました。だからその振り上げた拳をゆっくりと下げてください」

数刻前のゴリラフールドに軽いトラウマでも植え付けられたのか、今回は素直に謝った。

三人は唯斗を残し、海へと飛び出して行った。残された唯斗は二つの浮き輪を着用したままブルーシートの上に寝転び、ボーツと海を眺める。

「……………」

唯斗の心を占めるのは、数日前に夏凜と交わした『約束』。友奈と本音で話すこと、それが夏凜との約束であり、東郷に問われた『答え』に繋がる手段だ。

気が付けばそればかり考えていて、自問自答が脳内で何度も繰り返されて、少しずつ『答え』が形成されていくのをボンヤリと感じていた。

正直な話、唯斗の中に存在する友奈への感情は、既に折り合いがついていた。考える時間を与えられ、その機会も設けられ。答えは得ずとも、話し合いに臨めるだけの整理はついている。

(…問題は、いつ話すかなんだよなあ)

ここ最近の悩みの一つがこれだ。

単に話すだけ、と言葉にするだけならば簡単だ。だが、いざ実行に

移そうとなると、これが不思議なことに億劫になってしまうのだ。

元より樂觀的な性格で、立て続けのシリアス的な雰囲気には辟易としているのだ。そんな今、更に胃を痛めつける手段を何故平然と選ぶか。

端的に言って面倒臭かった。

一人百面相をしていると、砂を踏みつける音が耳に届く。

「——唯斗君」

「…ん、東郷と友奈か…どした？」

悩みの根源と原因が同時に現れた。だが不思議と、心は平穏を保っている。唯斗が心の底から勇者部を嫌悪していない証拠だった。以前程の荒波は無く、彼自身もこの関係を受け入れつつあるのだ。

「唯斗君が暇じゃないかなって思ってた。海で遊べないのは残念だけど、それなら砂浜で遊ばない？ サンドアートでお城を造ろうと思ってたの」

「東郷さんのお城、すっごいんだよ！ 精密って言えばいいのかな？ なんかこう…匠の技を感じれるよ!!」

「ふふっ、友奈ちゃんってば褒めすぎだよ」

多少話は逸れてるが、二人が唯斗を気遣っているのは十分伝わった。

「…気にせず遊んで来いよ。俺、陽の当たるところに出ると溶ける体質だからさ。若しくは灰になる」

「吸血鬼なの…？」

本当に溶けたりはしないが、暑さにも寒さにも弱い唯斗にとってはビーチパラソルの下が唯一の安全地帯だ。そこから出る気は毛頭ないし、態々気を遣われるのも何処か申し訳なさを覚える。

「で、でも…嫌がる唯斗くんを無理やり連れてきちゃってるんだし、やっぱり退屈させたくないかな…あつ、わたしジュース買ってくるよー」

「にぼっしーが大量に持ってきたスポドリあるからモーマントイ」

「それ、勝手に飲んでもいいの？」

「東郷…とある混沌の神様はこう言った。『バレなきや犯罪じやないんですよ』——と。つまり、そーゆーことさ」

「結局ダメってことだよね!? やっぱり買ってくるよ!!」

そう告げると、友奈は鞆から財布を取り出して所謂海の家へと走って行った。

「スポドリ的一本や二本で、にぼっしーが怒るわけなのに。むしろ満面の笑みで許してくれる姿すら想像できるね」

「いや、普通に怒ると思うよ…?」

決して夏凜の心が狭いという訳ではなく、単に唯斗の普段の行動が夏凜にストレスを貯めているからだ。塵も積もれば山となる、と言うやつだ。

本気で嫌がってはいないものの、元より短気でプライド高い夏凜のことだ。激怒はしなくとも普通に怒ったりはするだろう。特に無遠慮無配慮なイメージしかない唯斗になら尚のことだ。

「……唯斗君」

「ん?」

友奈の向かった方向を眺めながら、東郷は徐に唯斗の名前を呼んだ。先程までとは明らかに違う、低く暗い声質。この雰囲気は如何なる状況であつても、面白い話題だった試しがない。

「…最近、友奈ちゃんの様子がおかしい気がするの…空元氣つて言うのかな。普段通りを装ってるけど、何処か演技染みてるような…」

「そうか?」

「私の気の所為なら、それに越したことはないんだけどね…」

良くも悪くも、東郷美森という少女は他に観察深く、特に気に入ってる人物に対しては度を超えた愛を發揮する。そんな彼女が異変を微かにでも感じたのであれば、ほぼ確実に何かはあるのだろう。

「……俺にはよく分からないけど、友奈ソムリエのお前が言うならそうなんだろうな。つっても、心当たりなんかないぞ?」

「うん、私にも思い当たる節が無いの。でも確実に言えるのは、今月の友奈ちゃんの唯斗君を横目で見る回数が、毎月の統計よりも既に二割増で多いの…!これが下旬なら誤差の範囲内だけど、今はまだ中旬一

歩手前。つまり、まだ増えるってことよ!?!これは異常よ!大問題よ!!
それに加えて、ボーっとする時間も比例的に増えているの:~!」

「トーゴー、落ち着け。言ってることが自覚ないストーカー並に怖い
から。夏場なのに背中が冷えるから辞めて、ホント切実に」

言葉が進むにつれて徐々に早口となり、何やらストーカーすらも越
える闇を吐き出す東郷。語り始めは自分でも曖昧な考えだと言っ
ておきながら、露見するのは本人も知り得ない具体的な数字。改めて東
郷美森という人物の異常性が鑒えた。

話していて多少は落ち着いたのか、やつと言葉の速射砲は鳴りを潜
めた。だが、自分で言葉にして事態を再確認したのか、落ち着いてる
と言うよりは落ち込んでいると表現した方が適切かもしれない。

一番の親友を、理解出来ない。それが東郷にとっては一番の苦痛
だ。元より全てを把握出来るとは思っていないが、悩み事があるのな
らば傍で手を握り導きたいと思うのが東郷美森だ。故に、現状でのむ
ず痒さを覚えているのだ。

「:~少しだけで良いから、友奈ちゃんを気にかけてくれると嬉しいな。
多分、これに関しては:~私がどうにかできることじゃないと思うから
:~」

「:~りよーかい」

不可解な頼まれ事だったが、普段通りに茶化したりは、今の唯斗に
は出来なかった――

「つーかーれーたー!」

夕日で紅く染まる砂浜。

遊び疲れた唯斗達が遠い果ての地平線を眺めながら郷愁的な気分
に浸っていると、早くも飽きたのか、風はだらしなく砂浜に寝転びな
がら手足を伸ばした。

気分を害したとまでは言わずとも、景色に魅入っていた勇者部一同
を現実へと戻したのは確実だ。

「風パイセン、嫌い」

〈お姉ちゃん、静かにしようね〉

「友奈あゝ、唯斗と樹が冷たいわ…」

「あはは、でも…確かに疲れましたねー。泳いだりビーチバレーをしたり、砂遊びにスイカ割りまで。もしかしたら、海でこんなに遊んだのは初めてかも！」

「ああー、暖かい反応だわあゝ。アタシの特大大女子力が無ければ惚れていたわね。ふっ、この娘の将来が未恐ろしいわ！」

後輩と実妹からの冷めた反応が割と身に響いたのか、風は友奈の言葉に深く頷いた。横目でチラチラと冷めてる二人を見ながら、友奈を見習えと無言で告げている。これには妹の樹も呆れを含んだため息をこぼした。

「さて、そろそろ宿に向かうわよ。夏凜、完成型勇者の力を存分に発揮して荷物を全部まとめてちょうだい」

「ナチュラルにパシろうとするな！」

「そーだ、そーだ。名ばかりでも部長なら、むしろ自分をパシって下さって叫ぶくらいに甲斐性は見せろー」

「…唯斗君、少しは懲りようね？それで何回も風先輩を怒らせてるのと、分かってるよね」

「…東郷さん、唯斗くんのお母さんみたいだね！」

「唯斗せんぱいのって言うよりは、勇者部のお母さん役みたいです！」

「そ、そうかな…？」

友奈と樹に茶化され、東郷は満更でもない表情を浮かべる。母と言われた事よりも、家族の様だと比喩されたことで皆との距離の近さが窺えたからだ。

記憶の一部を失って、友人や親しい人物もいなかった一年以上前の自分を思い浮かべて、東郷は頬を緩ませた。

——ぐうう

黙々と後片付けをする中、何処からか腹の虫の鳴く声が響いた。

「風先輩に一票」

「同じく風に一票」

「お姉ちゃんにいつぴよう！」

「あ、アタシじゃないわよ!? こーゆーのは言い出しつpegが一番怪しいのよ! どうせ唯斗の腹の音でしょ!!」

自然に始まった犯人探し。誰だろうと構わないのだが、どうせなら弄りたい。あわよくば弄り倒したい。そんな考えの元で始まった犯人探しだ。

唯斗、夏凜、樹は普段から大食らいとして周知の風を疑った。勇者部の中で食事に執着するのは風くらいであり、最初に疑われるのも仕方無い話だ。

「ふふっ…♪」

東郷は一人、微笑ましそうに笑みを浮かべながら見守る。勝ち取った平和に浸りながら、真の犯人を視界に入れてカメラのシャッターを連打した。

「…あ、あの…私のお腹です…」

羞恥に頬を染めた友奈がそっと手を挙げ、消え入りそうな声で自ら名乗り出た。

それが面白くて、一人二人と徐々に笑い声が増えていき、最後には部員全員で声を上げて笑っていく。きつと勇者部の面々は、この世の誰よりも平和を謳歌していて、その有難味も理解している。

一人の少女は笑顔の裏に憂いを残したまま、然れど仮面を被り笑顔を浮かべていた。

目の前には、海鮮食材を惜しみなくに使ったご馳走が並んでいた。

刺身や蟹、茶碗蒸しから始まり里芋の含め煮やすまし汁。その他にも中学生には不似合いな高級料理がテーブルの上に並べられていた。

「こ、これ…本当に食べてもいいのよね?」

あまりの高待遇に風は慄いた。勿論宿の女将から確認も取り、部屋も間違っていないと告げられたばかりだ。それでも懐疑的なのは、目の前の光景に頭が追い付かないからだろう。

「出されたんなら食べるしかないでしょ。…おかしい、イカの姿フ

ライが並んでないぞ。宿にクレーム入れようか…？」

「やめなさい、みつともない…！…でも、確かにおかしいわね。箸休めの煮干しが用意されてないわ」

「唯斗せんぱいも夏凜さんも、ここを何だと思ってるんですか…？」

どんな高級宿でも、食事の中にイカの姿フライと煮干しは出さないだろう。イカの姿フライや煮干しをキメ続けてる二人には、その常識が欠けていた。

「それじゃあさつそく、いっただきま…」

「お姉ちゃん、友奈さんが…」

樹は心配そうに友奈を見つめた。

友奈は現在、味覚を失っている。医者からは一時的だと言われているものの、治る気配は一向にない。

そんな彼女を目の前にして、高級料理に舌鼓を打つのは気が引けた。食事の楽しみは人生の楽しみであり、それを失ったという事は日々の暮らしにおける食事が辛くなるということだ。

皆の視線を一身に集める友奈は――

「うんっ！このお刺身のコリコリとした歯ごたえ、堪りませんね〜♪んん〜！このツルツルとした喉越しもイイネ!!」

「…もうっ、友奈ちゃん？いただきますが先でしょ？」

「あー、そうだった！ごめんごめん」

友奈が皆に気を使ってるのは、語るまでもなく周知だ。折角の楽しい食事の場を盛り下げたくなくて、無理にでも感想を述べながら美味しく刺身を口に含み、噛んで飲み込む。

各々に感じることもあるが、彼女の優しさに東郷は苦笑みを浮かべた。

「時々思うんだけどさ、いつかこういうのを日常的に食べられる身分になりたいわね。自分で稼ぐなり、いい男を見つけたるなりねー」

「後者は女子力が足りませぬ」

飲みような勢いで料理を食べていく風は、ポツリと言葉を落とし

た。

「楽観的で羨まつすね…俺は強制的にそんな身分にさせられそうなの…」

「えっ、どゆこと?」

「ナイショですよ、今のところは」

唯斗は『郡家』の当主にさせられる、的なことをあにつしー——
—三好春信に告げられた。郡家は代々続く名門的なお家柄との事であり、結果を示せば金も地位も容易く手に入る立場なのだ。

ただその分、縁談やらで婚約者を決めたり、当主としてのノウハウを覚えたりと苦労は絶えないが。

「ん?こんやく…えんだん…?…あつ、言うの忘れてた!」

「何よ突然…?」

今の今まで、唯斗は婚約について完全に忘れていた。刺身を食べながら半目で見えてくるツイントールさんも関係してる以上はどうでも良いと割り切ることも出来ない。

(…:…しやーない、取り敢えずメッセージだけでも送つとくか)

「失礼、ちよいと雉を撃つてきます」

「はえ?きじ…?」

「友奈ちゃん、御手洗の事よ」

「へえー、東郷さんって物知りだね!」

東郷と友奈の会話を聞きながら、スマートフォンを持って廊下に出た。適当な休憩スペースに着くと、某トークアプリを起動して個人トークの画面に移動する。

「んー、何て伝えれば良いんだ?別に結婚するのが決まってるわけじゃないし、乗り気風に送るのは違うんだよなあ…:…よし、最後に『詳しくは兄に聞け』って付けければいいや!」

結局、説明等は春信に丸投げした。そもそも、婚約やら縁談やらの説明義務は彼女の家族にある筈だ。だが春信から伝えろと言われ、軽く脅しまでされてる現状では伝えないという選択肢自体が危険なのだ。

だからこそ、伝えた上で兄に説明を求めるように促せば良い。唯斗

は満足感に浸りながら部屋へと戻った。

「わああー!?!いい、樹!タオル持ってきて!!」

「夏凜ちゃん大丈夫!?!どうしたの、具合悪いの!?!」

部屋に戻ると、全員が大騒ぎだった。この短期間で何があったら、ここまで盛り上げられるのか。

「なにやってんの?」

「あつ、唯斗君!実はね…夏凜ちゃんがお茶を飲みながらスマホを弄ってたら、急にお茶を吹き出したの…!顔を赤くして、凄く動揺してるみたい…!!」

「……………なるほど」

完全に、唯斗の送ったメッセージのせいだった。本人的には、後で手が空いた時にでも見れば良いかな程度の考えで送ったのだが、誰がこの場ですぐ既読すると思うのか。

「ゆっ、ゆゆゆ唯斗お!?!どーいうことよ!!」

「ぐえっ!?!」

「夏凜ちゃん!?!」

動揺した夏凜は唯斗の胸ぐらを掴み、全力で前後に振る。もはや手加減なんてする余裕もなかった。

「まつ、待って…!リバーズする!わ、我が禁じられし…食を司る臍物より贄が、再度この場に顕現するから…!!」

〈唯斗せんぱいが吐きそうっていつてます!〜〉

「通訳ありがとう、樹。取り敢えず唯斗が吐く前に、ニボ馬鹿を止めるわよ!!」

全員で協力して、なんとか唯斗が吐く前に暴走夏凜を止めることが出来た。その後、夏凜は断固として暴れた理由を話さなかったらしい。

○○○オマケ○○○

唯斗へやっほー、にぼっしー！よく分からんけど俺の所ににぼっしーから縁談が来てるんだって。俺はよく分かんないから、詳しくは春信さんに聞いてくれ！

夏凜「ぶふおおおッ!?えっ…は?ふあっ!?!」

本音のぶつけ合い

——合宿の夜。

私は何故か、目が覚めてしまった。

数刻前までの大騒ぎが嘘のように、みんなはぐっすりも寝ていた。唯斗くんは男子ということもあり、戸を挟んだ向こう側で寝ているけれども、声をかけたら直ぐに返事が返ってくる程度の距離だ。

ふと視線を向けたのは窓際の障子。その隙間から月光が漏れて、私は——結城友奈は引き寄せられるように障子の戸を開ける。

夜の海に月が反射して、薄くて優しい光が綺麗な景色が窓の外にはあった。

寝ているみんなにも見せてあげたいと衝動的に携帯電話を探すが、何処か、それを写真や映像に収めるのはお門違いな気がした。結局、戸に片手を添えながら無言で立ち尽くす。写真や映像ではなく、儂くも煌めかしい記憶の棚に記録して仕舞おうと心が囁いている様だった。

ボーツと外を眺めていると、人影が目映った。

「…唯斗くん…?」

窓の外の、月と星に照らされた浜辺には彼がいた。歩く訳でも、然れど座る訳でもなく、私と同様に夜の海に魅入ってるのだろう。

何故かは判らない。ただ、私は遠巻きに見てるその背を、放って置いてはいけなさと感じていた。気が付いたら上着を着て、外に出る準備をしている。

私は——いつも通りの結城友奈を演じるしかない。私は何も知らないし、何も聞いていない。

それを他でもない自分自身に言い聞かせ、宿から出て唯斗くんの居る浜辺へとゆつくりと、散歩をするよりも緩やかな歩調で近づいた。

「唯斗くん」

「っ……友奈か。何でこんな時間に起きてるんだよ」

「それは唯斗くんもだよ？夜は寝ないと、身長が伸びないってお母さんが言ってたよ」

「……牛乳飲むからモーマントイ」

突然声を掛けたことで唯斗くんは驚いた様子だったけど、私は彼に拒絶されなかったことに安心感を得ていた。

唯斗くんは決して身長が低いと言う訳では無いけど、中学生の時点でもう伸びないと言われたら、それは嫌なのだろう。

私はあまり男の子の身長を気にするタイプでは無いけど、風先輩が『身長が低い男はダメよ！』と熱弁していたのを思い出した。私も成長すれば、確固とした異性の好みが生まれるのだろうか。

「——友奈、少しだけ時間貰ってもいい？」

「……うん」

普段の唯斗くんとは声色の違う、真面目で落ち着いた口調だった。彼らしくないと言えば身も蓋もないが、真面目な唯斗くんは稀にしか見れない。ちよつとだけ変わり者の唯斗くんだから、真面目を装っても実は巫山戯てる場合が多いのだ。

——でも、今回は普段のそれとは全く異なる声質だ。本当に突然な話題変更だったけど、内容は何となく想像が付いた。

だから——

「でも、先に聞いて欲しいことがあるの」

私は、彼が口にするであろう言葉よりも先に告げなければいけない事があった。

あの日——唯斗くんと東郷さんが病室で話している内容を、私は意図せずとはいえ聞いてしまった。唯斗くんが勇者部を辞めようとしてること、東郷さんが泣きながら、それを止めていたこと。同じく入院していた私は、本当に偶然ではあるがあの場合に立ち会っていた。

本当なら、私はあの場合で病室に入って話に加わるべきだったのだろ

う。

だって、唯斗くんが勇者部を辞めようとしてる原因は私なのだから。

私は馬鹿だから、それにギリギリまで——いや、答えを知るまで気が付かなかつた。ヒントは余るほど散りばめられていた。唯斗くんが私を避けていたこと、それなのに私は唯斗くんから離れようとしなかつたこと、最後のバーテックスとの戦いで唯斗くんに重症を負わせたこと——

(ああ、私つて…唯斗くんに迷惑しか掛けてなかつたんだ…)

傲慢で無知で、己の愚行すら気付けない。

その上、私は逃げたんだ。二人の居る病室に入ることを極端に恐れて、傍観者で在ることすら拒んで、恐れて。知らないフリをして逃げてしまったんだ。

もう遅いのに。もう手遅れなのに。今更気が付いて反省した体を自分自身に見せて、一体私は何をしたいのだろう。死に物狂いで戦つたのも、物心ついた時からの勇者への憧憬も、ボランティアでの人助けも——全てが的外れだった気がしてくる。

自己満足の後ろでは、唯斗くんが傷付いていた。なのに、恨み言も漏らさないで、完全に拒絶もしないで、彼は無知な私があの場合に居ることを肯定してくれていたのだ。目に見えるものばかりを信じて、内面を知ろうとしなかつたのが私の罪なのだ。

そして、彼はもう限界だった。

(——だから)

その責任を取るには、どうするべきか。

「唯斗くん。私——」

方法は思い付いていた。その「罰」は、私がもつとも恐れていて、絶対に嫌だと泣き叫びたいくらいの事だ。もつとも手放したくなく

て、一生大事にしたいと何度も思った。みんなが大人になっても、いつまでも残り続けると妄信していた。——だから

「私は——結城友奈は勇者部を辞める」

その宣言は、私の中のナニカを大きく抉り、取り返しのつかない一歩を踏み出したような気がした。

『勇者』の私が死んで、『愚者』の私を自覚した瞬間でもあった。

その言葉の明確な意味を、瞬時には理解出来なかった。

「……なに、言ってるんだ…？」

「何度でも言うよ。私は勇者部を辞める。私はもう、『勇者』じゃないから…」

「もう勇者じゃないって…バーテックスがいなくなったから、目標が無くなったって話か？」

「ううん、違うよ。バーテックスとか、神樹様とか…戦う力が無くたって、誰でも『勇者』になれる。勇んで人だすけに取り組む者、それが私の思い浮かべていて、最高にカッコよくて憧れていた『勇者』。だから、私はもう『勇者』の資格を失ったんだよ…」

彼女の『勇者』に対する憧憬は、並々ならぬモノだった。唯斗と友奈が出会った時点で、彼女は創作物に感化されたのではなく、己の根源を比喻するように『勇者』を目指していた。

そんな友奈が嘘や聞き間違いではなく、確かな言葉で『勇者部を辞める』——つまり『勇者』を諦めると断言した。

自ら、その資格を無くしたと震える声で返したのだ。

それは唯斗が初めて見た友奈の弱音であり、弱々しく語る彼女が別人の様に感じられた。

「何でだよ…」

「……………」

「資格とか、勇者じゃないとか。そんな理由にならないだろ…！」
「……………」

「無償で人助けをして、身を削って世界まで救って。それなのに勇者の資格がない？じやあボランテアを面倒臭いって思ってた、今回の合宿もバーテックス討伐と比べたら割に合わないって感じる俺は何なんだよ。ゴミか？クズか？……あまり、人を馬鹿にするなよ……！」

唯斗は友奈が苦手だ。善人としては非の打ち所のない性格で、命を賭した戦いも仕方ないと割り切れる器。校内での評判も良く、完璧人間とは言い難くとも物語の主人公のような正義の味方としては誰よりも秀ている。

それが結城友奈という少女であり、唯斗の思う一番の勇者だった。だからこそ彼女が否定されるのは、それ以下である唯斗が更に乏しめられている気分になり、苛立ちを抑えられなくなる。

「友奈、お前は間違いなく『勇者』だよ。お前が否定しても、勇者部の全員が肯定する。自己評価ほど宛にならないものなんて無いからな」
「……だ……て……っ」

「……ん？」

友奈は俯き、小さく言葉を零す。だが小声故に、唯斗の耳には届かず空中で霧散した。思わず聞き返した直後――

「――だって、だって!!じやあ、私はどうすればいいの!?!唯斗くんに沢山迷惑をかけて、それにも気が付かないで!唯斗くんが勇者部を辞めようって思うまで、私は唯斗くんを追い込んでいたんだよ!」

怒声とも悲鳴とも違う、彼女自身も理解出来ない複雑すぎる感情が喉から溢れて止まらない。

「っ……！それ、何処で聞いた……？東郷か夏凜か？勇者部を辞めるだなんて二人にしか話してないし……いや、彼奴らは勝手に話さないだろ……」

「……ごめん、病院で聞いちゃった。盗み聞きするつもりは無かったけど、ドアの前まで声が漏れてたから……」

「……聞いてたのかよ」

「ごめんね……」

申し訳なきように繰り返させる謝罪。故意では無かったのだろうが、しかし聞かれたという事実は不変だ。

だがそうになると、不可解な部分もある。何故、友奈はそれを自分の責任だと感じているのか。東郷と唯斗の会話を聞いただけならば、唯斗が勇者部に所属していること自体に嫌気をさして、辞めるに至ったと受け取れる。

その過程に誰の責任か、という話は全く持つて交わしてはいない。

「唯斗くんを傷付け続けていること…本当は、もっと早く気が付くべきだった…！唯斗くんに避けられてることも、本当は知ってたよ。知った上で、無意識に鈍感なフリをしてたんだよ…」

「……………」

露骨に避けていたのは事実だ。故に友奈の懺悔を否定出来ないし、然れども東郷から友奈を気に掛けてとお願いされた以上は突き放すなど以ての外だ。友奈の行動や言動が怖かったのも——現状でも怖いと感じているのも事実だ。例え心に折り合いを付け、受け入れようと決めたとしても唯斗の心が一から十まで全て入れ替わる訳でもない。

今も尚、唯斗は結城友奈について理解出来ていない。

元来より、勇者の奉仕的な面は多面性の内に垣間見える一つに過ぎない。今世に有り触れている創作物においては、勇者こそ諸悪と位置し展開する物語も少なくない。

勇者は優しく強い、勇者は平等で寛容、勇者は人々を魅せる正義の申し子である。——そんな思考自体が、前時代的とも言えるのだ。誤ってはいないものの、その他の側面も広まりつつ在るのが神世紀だ。

そんな時代でもなお、結城友奈は『勇者』を正義と崇め己の到達点へと掲げる。それを純粋だと称することも出来ようが、本来ならば異常、異様、異物と言われる狂信的な思考だ。

「…友奈、ハッキリと言っておく。俺はやっぱり…お前のことが苦手だ」

「っ…！そ、そうだよね…」

「何考えてんのか全然判んないし、どうして他人にそこまで気を使えるのかも理解できない。俺が勇者部を辞めようとしてる理由も碌に聞かないで、独り善がりて全部勝手に決めつける」
「……………」

「変に神樹様を信仰してるのが意味不明だし、牛鬼にビーフジャーキーを喰わせてることも怖い。異常な勇者に対する執着も、自分を押し殺して内面を隠す所も——全部、苦手だよ」

「…本当に、ごめ——」

「でもさ…」

友奈の謝罪を遮り、唯斗は言葉を続ける。

「嫌いではない。個性とかアイデンティティとか、そんな言葉で表現出来るのは知らないけど、俺はそんな面を併せ持つてる結城友奈が嫌いじゃないんだよ。俺はもう…友達として、戦友として、部活のメンバーとして、結城友奈を受け入れてるんだよ…！」

「……………して…っ!?!」

懐疑的な目を向け、友奈は乾き切った喉から疑問を絞り出す。

「私は…私は！沢山、唯斗くんを傷付けてきた！なのに…！どうして…どうして嫌ってくれないの!?!嫌いだって、絶交されたっておかしくないのに！全部私のせいだって、軽蔑されてもおかしくないのに!!」
「いつその事、大嫌いだと言われた方が楽だった。罵られて、見限られて、結城友奈という存在を否定された方が迷わずに済んだ。」

それなのに——

「やめて…！止めてよ!!そんな、希望を持たせるような言い方なんてしないでよ!?!私が勇者部を辞めれば全部解決する!これ以上、唯斗くんを傷付けなくなる!それで、それだけで…!!」

「——次は誰が傷付くんだよ」

「っ!」

「お前だけじゃないんだよ。東郷が、夏凜が、風先輩が、樹が——それに対して無関心だと思ってるのか?…二度目になるけどさ、あまり人を馬鹿にするなよ!」

結城友奈は勇者部の中心だ。彼女の正義感は無意識にでも皆を先

導して、日常における『勇者』の在り方を物語ってる。彼女の明るい性格は、部内の雰囲気緩和して温かくしている。

「——友奈、お前は勇者部には必要不可欠なんだよ。イレギュラーな俺と違って、友奈は要るべくしてあの場に居るんだ」

「で、でも！それじゃあ唯斗くんが辞めちゃう!!確かに勇者部は辞めたくないけど、唯斗くんが居なくなるなら、代わりに私が辞める！原因が私なら、その責任も私に——」

「辞めねえよ」

「……えっ」

「今はまだ、辞めねえよ。全く……ちよつと冗談言っただけで東郷も夏凜も、拳句に友奈まで本気にしやがって……」

冗談などでは無かった。辞めようとは思っていたし、事実として最後のバーテックス戦の最中でも勇者部を辞めることを目標にしていた。

だがそれは、皆の外面のみを見て判断していたからだ。結城友奈も、東郷美森も、三好夏凜も、犬吠埼姉妹も、変わり者ではあるが総じて悪人ではない。優しく、人を想いやれる少女達だ。

改めて東郷や夏凜、友奈と話し内面を覗き、唯斗は感じていた。そこに在るのは非道な異常性ではなく、多種多様で十人十色と言える程度の、変わらずヤベー奴ではあるが決して理解出来ないと断言する程のモノではない。

歩み寄り、言葉を交わせれば互いに受け入れる事も可能なのだ。

——だから、今はまだ唯斗は勇者部だ。

「今はまだ……」

「何だよ、俺が勇者部にいたら不満か？」

「う、ううん！そうじゃなくて……」

こんなに喚いて、迷惑を掛けても尚、彼は勇者部を辞めるなど言っている。結城友奈を肯定して、自分の思いもそつと伏せた。それを察せず、再度騒ぎ立てるほど友奈も子供では無い。

嬉しさを感じている反面、彼の言葉に含まれていた『今はまだ』という言葉に不満を感じていた。辞めないと断言するのではなく、まる

で保険でも掛けるかのように言前に付けられた言葉。それが嫌に響いて、友奈の心を掻き乱す。

「……私ね、勇者部は不滅だと思ってる。先輩が卒業しても、私達の進路がバラバラになったとしても、みんなが集まる。それが、そこそが私の想い描く『勇者部』なんだと思う。だから……いつか、『今はまだ』じゃなくて『これからもずっと』って唯斗くんと言わせたいな。……ううん、これからの目標にする！」

友奈は拳を握りしめる。然しその意味は先程とは違い、決意の漲りだ。一度は諦め、独り善がりですりゃ辞めようと思つた勇者部。

だが誰にでも分かる嘘をつきながらも引き留め、自分を必要だと言つてくれた。

——だから、友奈は今一度宣言する。

「唯斗くん、私はもう一度『勇者』に成る！一度は間違えちゃつたけど、勇者部五箇条の一つ！『なるべく諦めない』!!」

月が薄れて、空が黒から淡い藍色へと変化する。また新しい日が始まり、同時に友奈が確固とした『勇者』を目指し始めた日の始まりだ。これまでの呆然とした『勇者像』ではなく、護り戦い人々を助けて、仲間との絆も育む——夏凜の完成型勇者とは違う形の、不器用で歪でも確かな『答え』を得た『勇者』。それこそが結城友奈の『目標』となった。

「私は——結城友奈は『勇者』として、唯斗くんがずっと居なくなる様な場所を作る！絶対に!!」

「あー、うん。お手柔らかにな」

「これからも——ううん、これから改めてよろしくね！唯斗くん!!」
「何を改めるのかは知らんけど……まあ、よろしく」

朝焼けを背に微笑みを浮かべる友奈は、無邪気と艶やかさを両立させたような美があつた。きつとこれこそか本来の結城友奈という無垢で純粋な少女であり、唯斗が久しく見ていなかった彼女の曇りなき笑みだつた。

リゾート地での合宿から翌日。

唯斗はいつも通りイカの姿フライを齧っていた。先日食べたご馳走も震えるほど美味しかったが、やはり不動の一番はイカの姿フライだ。

あのご馳走にも引けを取らず勝ち越せるイカの姿フライは、神の最高傑作なのではないだろうか。そう考え始めたら、イカの姿フライへのリスペクトが止めどなく溢れてきた。イカの姿フライ万歳、イカの姿フライ最高、イカの姿フライを崇めよ。

本日三袋目の業務用イカの姿フライが空になったことを確認すると、唯斗はベッドの下に手を伸ばしてもう一袋にイカの姿フライを取り出す。

「……あと五袋しか無いのか。また買いに行かないとなあ」

ネット通販で頼むことも可能なのだが、届くまでに時間が掛かってしまう。それならば自分で2ダースほど買いに行った方が全然マシだ。もしも手が足りないのであれば、出張サイクロプスこと風を呼び出せば良い。うどんを奢る程度でこき使えるなら安い物だ。

仕方無しと立ち上がり、外出の準備を進めると――

――ヨツ、ゴレッツ、チマアアターアター！カーナーシーミーニー！！

「ん……風先輩からか……」

スマホに風からの着信が入った。ちょうど連絡しようと考えていたので、その手間が省けた。

いや、逆に考えよう。真なるパシリとは場所や距離を関係無しに必要なとされたら動いているのではないだろうか。もしそうならば、風にはパシリとして天賦の才がある。

無論、そんなわけがないのだが。

「もしもしー？」

『唯斗、悪いけど今すぐ部屋に来てちょうだい。他のみんなも呼んでるから、出来るだけ急いでくれると助かるわ』

「……りよーかい」

『悪いわね……』

酷く焦り、動揺した感情を理性で抑えた声だった。それを茶化すほ

ど唯斗は馬鹿ではないし、不可解な念も抱いていた。頭に浮かぶのは、トラックとの衝突事故で発動した精霊のバリア。それと風の反応が相まって、自然に導き出せるのは『勇者』に関する情報だ。

「…はあ」

——嫌な予感が、胸を支配していた。

○○○○オマケ○○○○

・合宿の夜（恋バナ編）

風「やっぱり恋バナよ、恋バナ！うら若き乙女たるもの、浮いた話の一つや二つくらいあるでしょ？」

東郷「そ、そんなことより怪談とかどうですか？とっておきのを用意してますよ!!」

夏凜「い、良いわね！私、煮干しの次くらいに怪談好きなのよ!!」

唯斗「えっ…怖い話は止め——」

東郷、夏凜「唯斗（君）は黙ってて!!」

唯斗「ひえ…」

的なことがありました。怪談が苦手な唯斗と犬吠埼姉妹は布団の中で震えていたとか…

説明と使命

→月♪日

悲報、バーテックスがまだ生き残ってるらしい。

なんか、久し振りに日記を書いている気がする。なんか、日記を書く度に『久し振りにく』的なことを書いてる気がする。初めの頃の勤勉さは何処へやら、もう毎日日記を書くだなんて無理だと思う。グッバイ、勤勉唯斗くん。ハロー、怠惰唯斗くん。

宿泊明けの穏やかな日々を謳歌する俺の元に、風先輩から電話が来た。内容は部室への召集命令だった。なんて表現したらいいのか判らないけど、切羽詰まってるような、冷静な言葉の割には余裕が無さそうな雰囲気だった。

空気が読めると定評の俺は、理由も聞かずに承諾した。何このイケメンムーブ、似合わないな。

電話を切ってからすぐに部室に向かうと、既に全員揃っていた。そして変なアタツシケースを囲んでいた。

うん、入る部室間違えたかと思ったよ。どの世界線に、アタツシケースを囲んで立ち尽くす女子中学生達が居るんだよ。この世界線ですよ、バカヤロウ。

そこからの話は実に単純で、まだバーテックスが生き残っていたから、大赦から勇者アプリがインストールされた携帯電話を返されたとのことだった。

風先輩が申し訳なさそうにしていたけど、別に仕方の無いことだと思つた。風先輩がバーテックスを出してる訳では無いし、そも風先輩が説明を受けたこと自体がつい先程らしい。

それで先輩を責めるのは何か違うし、世界の破滅とか言われている時点で誰にも拒否権なんてないんだ。そもそも最初から選択肢なんてあつてないようなものだっただの。

取り敢えず各々でスマホを受け取って帰ろうとしたら、スマホから

精霊が飛び出してきた。

なんか割と最近、トラックとの衝突事故の際に勝手に出現したばかりの純白の蛇『大蛇』^{オロチ}と、初めて見るタイプの精霊——『蒼鴉』^{アオガラス}だ。後者に関しては読んで字のごとく、蒼い鴉だった。胸には桔梗の柄が付いていて、何処と無く不思議な雰囲気を醸し出す精霊だ。他はデフォルメされてるのに、この鳥だけ妙にリアルな外見だった。

つまるところ、全員に新しい精霊が増えたのだ。夏凜を除いてだが。

全員の精霊が部室内に出てきたのだが、控えめに言って百鬼夜行みたいだ。妖怪じゃなくて精霊だらって思ったけど、よくよく考えれば俺の蒼鴉とか樹の木霊、夏凜の義輝以外は全部妖怪だった。てか義輝：お前、人名だろ。どの時代の足利さんだよ。

木霊については、調べればちゃんと精霊だと判った。でも蒼鴉、コイツについては全くもって意味不明だ。八咫鳥とか鴉天狗ならまだしも、蒼鴉ってなんやねん。漢字はカツコイイけど、つまりは青い鳥公だ。こう書くと、青藍島のマスコットキャラクターみたいだ。大蛇を見習って欲しい。

余談だけど、大蛇と蒼鴉の仲はそんなに良くはない。蒼鴉が歩み寄ってるけど、大蛇が頑なに拒絶してる感じだ。でもこの大蛇さん、心做しか友奈の牛鬼には懐いてるんだよなあ。精霊とは不思議なものだ。

そんなことはさて置き。

風先輩の特大発表が終わった後は必然的に解散となった。各々が考えるべきこともあるし、そもそも頭の整理がついてない現状だ。

正直に言うと、俺も含めてみんな微かな恐怖を抱いているのだろう。あの戦い以降、各々の身体に残ってる障害は一向に変化がない。治るわけでも、然れども悪化する訳でもない。まるで機能そのものが欠損したみたいだ。

俺の右腕も同様で、やはり動かすことは出来るが痛み、熱さや冷た

さを含めて何も感じない。意識しなければ肩からぶら下がってるだけの肉塊にも等しい現状だ。これでもマシな方なのだから、他のみんなの苦勞も絶えないことだろう。

帰り際に夏凜に拉致られたり、その後にあいつしーが出現してめちゃくちゃ重要な情報を落として行っただけ、疲れたから省略する。

今日もわりといい天気でした。

それは夕暮れ時。

勇者部部长からの召集命令の後、各々の部員達は帰路へと就いていた。それぞれの胸に残るのは、まだ戦いが続くという真実。

掴み取ったと思っていた平和にはまだ届かず、引き続き未知が『嫌な予感』と共に形付くのを仄かに感じていた。

バーテックスの生き残り。其れを倒せば全てが解決するのだが、たかが一体と捉えるには神敵の存在が大き過ぎる。一体とはいえ、それがレオ・スタークラスターに匹敵する個体ならば——と思考を重ねるだけで『たかが』が容易く『然れど』に変化するのだ。

一騎当千な強敵かもしれないし、単体では脅威になり得ない個体かもしれない。まさしく未知であり、唯斗達の表情を暗くさせるには十分な情報だった。

だが、それは置いて——

「唯斗、少し付き合ってもらおうよ」

「ぐえっ!? え、襟腰掴むな……!」

「いいから! 話があるのよ!!」

「…帰って寝たいのに」

学校からの帰り道、その途中で唯斗は某煮干し愛好家に捕まった。休日登校で疲れてるので帰りたい所存なのだが、それを許す夏凜ではない。

夏凜は唯斗の服の襟首を掴みながら、いつも夏凜が訓練に使用して

いる浜辺まで連れていかれた。

「——それで、説明してもらおうじゃない」

「にぼにぼ、寧ろ俺が説明を求めたいんだけど」

「誰かにぼにぼよ……アレよ、アレ！あーもう！！察しなさいよ……」
頬を桜色に染めながら、もどかしそうに声を荒らげる夏凜。外ということもあり声はそこまで大きくないものの、彼女の焦りようは誰にでも伝わりそうだ。

「……け、結婚のことよ……！」

「それこそ、俺が説明して欲しいんだよなあ」

三好春信からは、縁談相手については唯斗の両親が独断と偏見で勝手に選んだと言われている。その相手が三好夏凜と、顔も名前も初耳な乃木園子。後者については唯斗及び父方の先祖が類する『郡家』よりも上の立場にある名家らしく、縁談を受け入れれば晴れて郡唯斗から乃木唯斗へと変更になるとの事。

夏凜や他の既に断られた縁談相手に関しては、判りやすく言えば御家騒動に似たようなものだ。

郡家の地位や財産、その他諸々にあやかろうと娘を嫁に出しているのだ。『大赦』という国内最大の組織の中で行われる、代理戦争とも言えよう。自分の血族が名家の一員となれば、便宜上、組織内におけるメリツトが大きい。

巨大組織であるが故に、決して一枚岩とは言い難い現状。全員が同じ考えで、同じものを目指すなど到底不可能なのだ。だからこそ目を付けられるのは、郡家次期当主であり勇者の中でも唯一男である、イレギュラー的存在の唯斗だ。

将来的な地位や名誉は殆ど約束されており、彼自身の功績も異例を極める。端的に言えば、大赦での評価が異常に高いのだ。故に縁談がくるのは必然的であり、それを大人である唯斗の両親が捌くのも至極当然なのだ。

因みに、唯斗の両親が選んだ基準は単純だ。

いざとなったら、地位や権力を捨ててでも傍に居続けてくれる相

手。それなりの地位に在る郡夫妻にとって、数ある婚姻希望者の性格や人柄を調べるなど造作もない。

その点においては他にも候補はいたが、やはり独断と偏見による選抜だ。顔見知りならいいんじゃないか、という半分は『遊び心』で決められていたりもする。

「あー、うん。取り敢えず…夏凜って俺ん家について知ってる？」

「…大赦の中でも乃木家や上里家に次いで発言力があって、初代勇者にも選ばれた名家の一つ。西暦の時代でも特に活躍した勇者——乃木家、土居家、伊予島家に連なる郡家。…大赦に所属していたら、嫌でも分かることよ」

「ふあっ?!俺の先祖って勇者だったの?!」

「何でアンタが驚いてんのよ?!」

何となく、自分の両親が所謂『お偉いさん』なのは知っていた。だがそれだけであり、その地位に至るまでの過程や理由なんて大して興味も無かった。

そもそもこの男、自分達の前にも『勇者』がいたこと自体が初耳だ。

「へえ…マジモンのお偉いさんじゃん。…てかさ、それなのに夏凜って、全然俺のこと敬ったりしないよな。いや、別に敬えって言ってるわけじゃないけど」

「馬鹿らしいわ。唯斗の御両親や御先祖が立てた功績が、あんた自身の名誉って訳じゃないでしょ。なら敬う理由もないじゃない。…それに、私は唯斗と会うまでは郡家の子息はボンボンな野郎だと思っただし」

「ボンボンどころか、今に至るまで家の事情も知らないんですけど。超一般市民で育った一般男子中学生なのです。…つーか、俺に勇者の適性がなかったら、顔も名前も知らない従兄弟が郡家の当主になってたらしいし」

「…ってことは、やっぱり唯斗が当主になるのね。だから私の両親が勝手に縁談を申し込んで、何の因果かアンタの御両親がそれをまた勝手に受けた。…当人の気持ちは全く考慮されてないってわけね」

「嫌なら断つてもいいぞ。俺にとつては、名前しか知らない乃木なんとかさんよりも、顔見知りの夏凜の方が千倍は良いけど…それはそれで、消去法で選んでるみたいで嫌だしな」

春信の話を信じるなら、別に夏凜と乃木園子の両名から選ばなくとも問題は無い。血筋や現勇者としての功績がある唯斗であれば、それなりに時間も選ぶ権利も存在する。それならば嫌がる相手よりも、好きに選んだ方が考えるまでもなく良策と言えよう。

「…べ、別に嫌とは言ってないわよ。政略結婚なんて柄じゃないけど、どの道勝手に縁談を申し込む両親よ。それなら、私は唯斗を選ぶ」

「えっ、トウシク♡告白された…!」

「ち、違うわよ!アンタの方がマシってだけで…!!」

赤面をして『告白』という単語を否定する夏凜。捉えようによつては告白とも取れるのだが、そこに恋愛感情が考慮されているかと問われれば言葉に詰まる。

嫌いではないし、好意的でもある。然れども、それを軽々しく愛やら恋やらで語るにはお互いに幼すぎる。だからこそ唯斗は揶揄い、夏凜も頭では理解しつつも焦って言葉を返してしまう。まだ、お互いへの感情の色もしらないのだ。

「冗談だって。…まあ、その…ありがとな。もしも俺が売れ残ったら、そんな時は貰ってくれよ?」

「…その時は仕方がないから、結婚してあげるわよ。唯斗、放っておいたら永遠に独身貴族を貫きそうだし。てか、あんたって恋愛感情とかあるの?」

「お前は俺を何だと思ってるんだよ…」

「アホで間抜け。いざとなったら頼れるけど、普段はただの変人でしょ?」

「むっ、失礼だな。世界規模で見ても屈指の常識人な俺に向かって変人とは…やっぱり変人の言うことは違うな」

「いい加減認めなさいよ…」

釈然とはしないが、お互いに軽口を言い合う関係が気に入っていた。揶揄い、本音をぶつけて、喧嘩をしても元に戻る関係。それが

例え恋人未満だとしても、友人以上ではあつた。

縁談も婚約も、今はどうでもいい。大事なのは二度と戻らない青春の日々であり、それを謳歌するのは学生の義務であり権利だ。

あやふやな定義を言葉にし難い感情で包んで、少年と少女は『今』を過ごしたいと刹那に願つた。

——だから、今だけは。

そんな言い訳を自分自身に呟きながら、唯斗と夏凜は笑い合つた。

(…帰る。今度こそ帰るからな…！)

夏凜と数回言葉を交わした後、お互いに気まづくなって解散した。まだ中学生とはいえ、目の前の人物が将来的に結婚する相手だと言われたら緊張もする。それが例え決定事項ではないとしても、多少は意識してしまうのが男というものだ。

もう既に暗くなりかけてる空を徐に見上げながら、疲れたと心中で呟いて溜息を吐く。

家を目指して歩く唯斗の前に、一つの人影が現れた。

「——やあ、久し振り…でもないかな？」

「…春信さん？」

「あにつしーって呼んでおくれよ。実は渾名を付けてもらったのは初めてだったものでね、こう見えて存外喜んでるんだよ？」

——物優しそうな表情に、夏凜と同色の髪。前と同様の眼鏡とスーツは、彼のエリート感を全面的に押し出している。更に手にはアタツシユケースを持っており、若手の営業サラリーマンと言われても違和感はない。

「なに？待ち伏せですか…？」

「んー、端的に言えばそうだね。そろそろ、唯斗君も僕を探し始める頃合かなって思つててね」

要領を得ない話し方は相変わらずだが、今回に限つては以前よりも雰囲気重い。まるで全てを理解してるような佇まいは、不快感は覚えずとも心地よいモノではない。

「外で話すのも嫌でしょ。車に入らない？」

春信の傍らには一台の車が停まっていた。黒塗りの、外見から容易に高級車だと解る程度には目立つ車だ。夜だから暗闇に多少は紛れているが、昼間ならば絶対に目立つこと間違いなしだ。

促されるままに助手席に座り、話を続ける。

「……………」

「…………どうやら、聞きたいことが沢山あるって顔だね。うんうん、言いたいことは分かるよ。でもその前に——ううん、そのために唯斗君に渡さないといけない物がある」

春信は手に持ったアタッシュケースを唯斗に差し出す。怪しいが、彼は徒に人を傷付ける人物ではない。その点においては多少信用しても問題は無いだろう。

偶然が必然か、唯斗はそのアタッシュケースに見覚えがあった。多少サイズは異なるが、それは勇者部の部室でスマホを受け取った際にスマホが収納されていたモノとほぼ同種だ。

「…なにこれ」

「開いてもいいよ。そのために渡したんだし」

渡されたアタッシュケースを開くと——スマートフォンが入っていた。

「それは勇者システムが搭載された携帯電話だよ。見覚えはあるだろう？君がバーテックスとの戦いで使用したものであり、本物の勇者システムだよ」

「本物…？」

「だって、今君が持つてるそのスマホ…実は偽物なんだよね」

「は？に、偽物…!?…………でも、精霊は出て来たぞ。偽物なら、そもそも勇者システム自体が起動しないだろ」

淡々と告げられた『偽物』という言葉に動揺を隠せない。偽物であれば、当然使えない筈だ。だが実際、唯斗の持つスマートフォンからは大蛇と蒼鴉が出現した。

つまり、手元にあるスマホでもシステムは起動したのだ。それがどうして偽物だと言えようか。

「うーん、なるほどね。確かにこの言い方には語弊があるかな。正確

には、勇者システムの精霊だけを搭載した、保持者を死なせないためのだけの端末」

「勿論勇者の適性がある前提だけどね、と春信は飾った笑みで告げた。

「…つまり、俺が今持つてるスマホだと、勇者には変身出来ないってこと？」

「話が早くて助かるよ。敢えて付け足すなら、神樹様の結界内…所謂『樹海化』した世界にも干渉できない。真正銘、君を守る為だけの端末ってわけだ」

疑問は当然ながら湧いたが、同時に理由に関しても漠然と思い浮かぶ。恐らくその本質は、春信の言葉通り郡唯斗という『個』を守るためなのだろう。

それが悪意が善意か、またその何方でもない効率や戦略が絡んできたとしても、現状で唯斗がそれを知るには情報が少なすぎる。

——春信は困惑する唯斗に構わず話を進める。

「大赦は君を——郡家次期当主であり、貴重で唯一無二の男勇者である郡唯斗君を意地でも安全圏内で監視するつもりなんだよ。それ程までに君の存在は稀有であり、言い方は最悪だけど…『代替え』が存在しないんだよ。勿論、これは大赦側の悪意じゃなくて、現代から未来への布石のためって話だよ？」

それはまるで、他の勇者ならば『代替え』が利くと言ってる様だった。だがそれが彼個人の考えとは相違するという事は、彼の苦虫を噛み潰したような表情で判る。

故に、下手に責めることも出来ない。春信は現状を簡易的に説明しただけに過ぎず、そこに彼の考えは殆ど含まれてはいないのだ。

だが不可解な点が新たに出現した。

「じゃあそもそも、何で最初から俺を勇者として戦わせたんだよ…？監視したいだけなら、最初から樹海化に巻き込むこと自体がおかしいだろ」

安全圏で監視をしたいのであれば、一度でも戦場に出すこと自体が矛盾を生む。後になって価値が高まったという可能性もあるが、それ

以前に唯一の勇者としての適性がある男だ。戦場に出さずとも、その有用性は他で代用出来るものではない。

大赦ほどの大組織がその矛盾を無視して、話を無理通しするとは考えずらい。

「…まず第一に、『理由』が欲しいからさ。大赦としては、君に勇者としての適性がある時点で郡家次期当主を継がせる事は殆ど決定事項だった。だけど、何事にもアンチテーゼを抱く者はいるんだよね。ただ適性があるだけの男の子よりも、最初から当主として知識を蓄えてきた者の方が適任だって言い張る人もいた」

大赦は一枚岩でない。それは大組織ならば当然のことであり、いくら宗教団体とはいえ一個人の考えが全体の考えと相違なく同じとはなり得ない。

それぞれが神樹様を信仰した上で、目指すものは同じでも通る道は違う。その最終的な目的は人類の生存と繁栄であり、過程に答えなど無い。

「だから、君は勇者として戦う必要があつた。…本当は言つたらダメだけど、ここまでは二年前から既に解決していたんだよね。器は最初からあつて、その理由についても詳しくは語れないけど、既に解決していた。じゃあ何で、君は讃州中学勇者部に属して、勇者になつたと思う？」

「…戦力的に、俺を度外視できない理由があつた…？」

「そう…その通りだよ!!…本当に、唯斗君は頭が回るね。これは前にも言つたけど、君の勇者としての適性は歴代でも最高レベルだ。それを無視して使えるハズの戦力を放置してるほど、大赦にも余裕はない。世界の滅亡を目の前にしたら、戦力の出し惜しみだなんて愚の骨頂。未知に対しては、どれだけ構えても足りないんだよ。…さて、ここで次の問題だ。——何で、大赦は君を今になつて戦力から外そうとしている？」

偽物のスマートフォンを渡し、樹海化に干渉できない様に仕向けた。それは即ち、無理矢理にでも戦力から外そうとすることに他ならない。

「それは…残ってるバーテックスは、他の勇者だけでも事足りるって判断されたから？」

「うーん、半分正解。間違つては無いけど、満点と言うには言葉が足りないよ。正確には、君は果たすべき役割を終えて、今の勇者達も十分に実戦を積んだからさ。まず君の果たすべき役割についてだけど、それは…まあ、他の勇者が戦えるようになるまでのサポートだよ。最初から、将来的には君を前線から引かせることは決定事項だった。故に、君は変身機能のない勇者システムを渡されたんだ」

「っ…！」

「そして、ここからは僕の我儘による勝手な行動だ。僕としては、君には勇者として在って欲しい。だって——」

「夏凜を護るため？」

「…悪いとは思ってる。僕の勝手な行動で君を危険に巻き込んでるのは重々承知だし、これは大赦の方針とも全く持つて違う。大赦は君を戦わせず、今の勇者達が敗れた際の最終兵器として当主に身を置かせるつもりさ。君と、一時は前線から退いた彼女達がいればどんな異常事態にも対処が可能。それが大赦の方針だ」

俯き、感情の籠らない声で話す春信。申し訳なさを抑えて、現状の説明を優先させているのだ。感情のコントロールこそ、エリートたる彼が得意とするものだ。だがそれでも抑えきれない震えは、怒りか、それとも申し訳なさなのか。

隠された感情は容易には読み取れず、然れども眼鏡の後ろで激動を物語る彼の目は、次の瞬間には開放された。

「でも僕はね、そもそも勇者達が敗れた前提なんて無くしたいんだよ。夏凜だけじゃない、他の勇者達だってまだ若すぎる。敗北を考慮した上で働くのは、本来なら僕達大人の役割なんだよ。それを押し付けて、しかも予備の戦力まで用意する。…戦法としてはセオリー通りで、何も間違つてない。でも、でもさ！それは大人が一番取ってはいけない手段だろ!?君達はまだ幼い。国のために命を賭けるだなんて、あつてはならないんだ…！」

「っ…！春信さん…！」

「ここまで願っても僕は勇者にはなれないし、君達に戦いを強制させていることには変わりない。だからね、僕は思うんだよ。戦力を割いても保身を求めるよりも、全ての戦いで最善を尽くす。勝つためじゃなくて、死なないためにね」

「…だから俺に、コレを渡しに来たんだな。…全部を理解した訳じゃ無いけど、春信さんが言いたいことは解った。要するに、俺は夏凜達を護ればいいんだよな？」

大赦の思惑や、作戦については正直なところ理解が及んではない。春信は、大赦側には悪意が無いと言っているが、それも何処まで信じれるかは判らない。

だがしかし、やるべき事は十二分に理解した。

何があっても仲間を護り、自分が後悔しない為の手段を春信は再度繋げてくれた。期待されて、頼られて、信頼されて、頼まれた。ならば、もう答えは決まっている。

「僕は君に無理強いをする。郡唯斗君。君は勇者になって、他の勇者達を守れ！責任は全て僕が請け負うから、全力で仲間を救い続けろ！！」

「…承知。言われなくても、そうするから。…でも、この本物のスマホ…持ってきてバレない？」

「大丈夫、ダミーを置いてきたから。僕は『お偉いさん』だし、もつと『お偉いさん』の協力者もいる。勇者システムを全部解析して、間違い探しでもしない限りは問題ないよ」

「んー、ならいいんだけど」

彼が『問題なし』と断言するならば、それを信用するしかない。それが唯斗と春信の関係として構築されていた。お互いに理由も打算もあって、それ故に絶対に裏切らない関係。不思議と、唯斗は春信を信用出来ると内心で感じていた。

「ふう。さーて、じゃあ今日のごとはぜーんぶ忘れてね？君はまだダミーのスマホに気が付いてないし、大赦の方針についても知らない。でも何の因果か、手違いで君の元には本物の勇者システムがあった！…たったそれだけの話だし、もう一度システムを手にした君を再度止

めるほど、大赦も落ちぶれてはいさ。まあ、バレたら僕が全責任を負うだけだね、ウケる」

「確かに、ウケるかも」

「自分で言っつといてアレだけど、全くウケないよ？相棒君」共犯者

「うわっ、その呼び方止めろよ…」

不安は新たに生まれだし、物事の解決にはまだ少しばかり時間が掛かる。それでもやるべき事が決まった今は、少しだけ心が軽い。

——『護る』

不思議とその言葉は、唯斗の足りないピースを一つ埋めてくれる様な気がした。

「ん？じゃあ何であの時、精霊が出てきたんだ…？」

「どうかしたのかい？」

「いや…俺、この前なんだけど——」

唯斗は交通事故に遭った際に精霊が出現したことを簡潔に説明した。

勇者部の部室で渡されたスマホには、唯斗を守る為だけに勇者システムの一部である『精霊』の機能が付与されている。だが、唯斗が事故に遭ったのはスマホが戻ってくる前だ。

あの時、唯斗の手元には勇者システムが入ってない筈の端末しかなかった。

「……そのスマホ、もう大赦に返したんだよね？」

「今の偽勇者システムのスマホと交換で、既に大赦側に送られてると思うけど…」

「…随分と、回りくどい手を使うな。最初から、ずっと監視してたって事か…」

険しい表情で告げる春信。

「盗聴盗撮の心配は無いけど、位置情報だけは確実に監視されてると考えてもいいか。本当に面倒臭いな…となると、他の勇者のスマホにも…？バリアを展開したログは最優先で消す必要が…いや、既にバレてる可能性もあるし、消すのは不自然だ」

「…春信さん。別に、変にこつちから手を出さなくても良いんじゃない？盗聴とか盗撮がされてないなら、実質無害だし。春信さんも言ってたけど、大赦に悪意はないんだろ？だったら、位置情報程度なら問題は無いでしょ」

要するに、入院中に渡されたスマホと、今日部室で渡されたスマホには全く同じシステムが入っていたという事だ。そう考えると、既到手元にはない他の勇者の端末にも、精霊機能だけは付与されていた可能性がある。

それが勇者を逃亡させない為か、本当に護る為だけのシステムだったのか。そこは敢えて考えないようにした。

「…僕の方でも、色々調べておくね。あーあ、またサービス残業かあ…」

「ふあいとー」

作った笑みで、春信は強がる様に言ってから去った。

——唯斗は春信から渡されたスマホを握りしめ、小さく溜息を吐いた。

○○○オマケ○○○

・唯斗の精霊

『大蛇』

“だいじや”ではなく、“オロチ”と読む。赤眼に純白の身体の、ぬいぐるみのようにデフォルメがされている蛇。心做しか蒼鴉に苦手意識を持っており、然れども牛鬼には懐いている。唯斗は気が付いて

いないが、尾の下半分に紅い彼岸花の模様が付いている。

『蒼鴉』

読んで字の如く、蒼い鴉。胸には桔梗の柄が付いており、精霊の中でも特に落ち着きを払っている。何処と無く不思議な雰囲気を出しているが、飛んでる時に天井や柱にぶつかったりと意外と天然でもある。

やはり夢だ。何処までも残酷で、記憶の底で眠り続ける映像に軽く触れた程度の意味を成さない夢なのだ。耐え難くも、受け入れざるを得ない。

悲しみの意味すら理解出来ず、徐に頬が濡れるのを夢現に感じた。

「んっ……朝か……」

——目が覚めた。

寝覚めの悪さに軽く苛立ちを覚えながら、胸を占める謎の感情に寝起きながらも首を傾げた。

喪失感に近い。何か大切な事を忘れていて、ふと思い出した瞬間にはまた忘れている様な、形容し難く、既視感とも言える何か。象られた煙のように、掴もうと思えば全て掌から逃げていき、最後には形すら残さず分散してしまう。

悲しいような、楽しいような、懐かしいような、怖いような、嬉しいような——この複雑な感情を知る術を、少年はまだ持たない。

「…俺、泣いてたのか……」

いつの間にか濡れていた頬を、服の袖で乱暴に拭いながら時計を横目で見る。

時刻は九時半過ぎ。平日ならば大遅刻確定な時間でも、夏休み中ならばのんびりと過ごせる。新たに始まる一日に小さく溜息をつき、自分の頬を軽く叩いて気分を転換させる。

「よしっ、二度寝しよう!!」

気分は紛らわせたものの、やはり惰性での怠惰性には勝てない。眠ければ寝て、腹が減れば食べる。それが最高の夏休みの過ごし方かたであり、唯斗も絶対にやめないと心に誓っているのだ。

悩みあれど、一寸先には忘却のみ。どうせ思い出せないのであれば、頭を働かせて悩むのも無意味に等しい。ならば寝よう、ならばだらけよう。

もう既に、唯斗の頭の中には『夢』の内容など欠片程度しか残ってはいなかった。

「唯斗くーん! あつそびーましよー!!」
外から、嫌に聞き慣れた少女の声が出た。

二度寝に洒落込んでから実に三時間、全睡眠時間を合計したら驚き桃の木の十二時間だ。過眠症かと自分でも疑いたくなる程、まだ寝たいという衝動に包まれている。

きつと、ここ最近は何かに暗い出来事や悩み事が淡々と増え重なっていたので疲れていたのだろう。

外から騒音が聞こえた気がするが、きつと気の所為なのだ。今は正午の十二時——もとい、夜中の三十六時だ。良い子は皆寝るべき時間であり、そこに休日効果も加わって睡魔の超活性化も起こる。

起きる? 遊ぶ? 馬鹿らしいと嘲笑を送ってやる。そんなもの、野良犬にでも喰わせておけ。夫婦ケンカは犬も食わないと言うが、好き嫌いなんでさせるな。雑食ならば何でも食え。

つまり、外からは何も聞こえなかったことにしたいという話だ。

「唯斗くーん! あつそびーましよー!!」

そもそも、別に馬鹿正直に返事をする必要なんて皆無なのだ。伝家の宝刀『居留守』を使えば万事解決。恋人ができて宝くじも当たる。更には苦手科目でも満点で石油も掘り当てて——なんて事は無論有り得ないが、せめて其の場しのぎにはなる。

徐に手を伸ばし、枕元からある物を手に取った。

それは牡羊座のバーテックスの怪音波を全く防げなかったのに、値段は脅威の3998円を誇る高級耳栓だ。

耳に着脱しやすいシリコン素材の、フランジタイプ。遮音性や機能性、フィット感のいずれも高基準を叩き出すが、あのバーテックス戦ではクソほど役に立たなかった耳栓だ。

だがそれで良い、それが良い。値段の割に役に立たないのは、却って浪漫を語れるのだ。

そもそもバーテックスだなんてイレギュラー的存在を想定して作られてはいないのだから、役に立たなくとも責めるのはお門違いなのだ。

だが今回は話が違う。相手は某勇者馬鹿の叫び声であり、それに対する効果は値段に恥じないであろうことも容易に想像がつく。たかが中学二年生の声も防げなくて、何が耳栓だ。何が脅威の3998円だ。

実質4000円の高級耳栓を耳に詰めて、目を閉じると――

「唯斗くーん！あつそびーましょー!!」

「うっせえわボケナスがアアア!!」

高級耳栓をゴミ箱にダンクシュートした。

「んで、何しに来た？」

目の前には騒音女と、それを放っておいた粘着ストーカーが居た。友奈と東郷だ。近所迷惑ということも知らず、散々騒ぎ散らかした挙

句に、高級耳栓をも貫通する声量で人の名前を叫ぶというキチガイ的な行動に出たバカコンビだ。

「遊びに来ました!」

「友奈ちゃんに誘われて付いてきました」

「へえ、そうか。玄関はあっちだぞ」

「まだ帰らないよ!」

この赤髪、つい先日までは迷惑を掛けたと言って猛省していたのに、数日経てばこの有様だ。優しく寛大な常識人を自称する唯斗ですら、頭にスポンジでも詰まつてるんじゃないかと疑いたくなつた。

理解不能な狂信者ではあつても、勇者部の中では比較的常識を理解してる方だと解釈していたが…認識を改める必要があるようだ。狂信者だけでなく、根本的な常識に欠陥があるらしい。救いようの無さに涙がこぼれそうだ。

「つーか、家の前で騒ぐなよ。もし俺が外出とかしてたらどーすんだよ…」

「大丈夫!東郷さんが、今日は唯斗くんは家に居るって言ってたもん。じゃなければ家の前で呼んだりなんかしないよ〜!」

「へえ、そうか。……それで盗聴郷、何で俺が家にいるって分かった?」

「……ふふっ♪」

「と、トーゴー?俺の言葉通じてるか?」

「ふふふっ♪」

「もうやだあ…」

現役勇者は既に涙目だった。なお、本当に盗聴や盗撮をしてる訳では無い。本人曰く、何となく超人的な勤が働いたとの事。恋する乙女に常識は通じないのだ。

「……暇なら夏凜ン家行けよ。あの寂しがり屋、ツンデレだから碌に人を遊びに誘うことも出来ないんだぞ。俺は怠惰を満喫してるから、構わずにぼっしーと遊んでやれよ!」

「あつ、夏凜ちゃんも呼んだからそろそろ来ると思う!」

「ガツテム!!」

この赤髪、実はめちやくちや天才なのではないのだろうか。人が打とうとする手を先に潰してくるし、さもそれが当たり前だとも言いたげな、無害な笑みも強者の余裕に感じられる。

東郷の計算された策ではなく、平然と行われるえげつない行為が一番怖いのだ。

——ちやららららーん、ちやらららーん♪

「唯斗君、ファミ◯ーマートの入店音が聞こえたのだけれども…」

「…我が家の玄関チャイムだよ、クソツタレ!」

「前来た時と違くない…?」

「いつの間にか変わってた。…多分父さんが変えたんだと思うけど」

夏凜が到着したらしい。それ自体は何の問題も無いのだが、つい先日縁談騒動が嫌に響いている。恋愛感情等は一旦置いていても、これで意識するなという方が無理だ。

だがしかし、それは夏凜も同様な筈だ。ツンデレの名に恥じぬ過大な羞恥心を持ち合わせている彼女が、何も思わず唯斗の家に来る訳が無いのだが——

「友奈、一つ確認んだけど…ここが俺ん家だって伝えてる?」

「ん?んー、あつ!伝えてないかも」

「ですよね、知ってたわ。そのポニーテールぶっこ抜くぞバカヤロウ」
「ひえっ…」

東郷から睨まれるが、これぐらいの暴言は許させるべきだ。今この状況で玄関のドアの向こうに居るであろう煮干し狂人は、完全にここを結城友奈の家だと思い込んで訪ねてきているのだ。

最低限の説明義務すら放棄している友奈。保護者こと東郷が居なければ頬を力の限りを込めて引っ張っているところだ。

「はあ…仕方ない。にぼっしー持ってくるから、大人しくしてろよ。部屋荒らしたりしたら…マジでぶっ転がすからな」

「…最近の唯斗君、何だか口が悪いわね」

「あ?単に、馬鹿共に対する遠慮がお亡くなりになっただけだろ」

唯斗は打切棒に言い放ち、玄関へと向かった。

(――それってつまり、それが唯斗君の素だつて事だよ。…どうしよう、凄く嬉しい…！)

「…東郷さん？どうしたの、ニヤニヤして…」

「ううん、何でもないわ。何でもないのよ」

そうだ。本当に何でもないやり取りで、完全には言えなくとも心を開いてくれているのだ。それが彼に信用されている証拠であり、何処か他人行儀だったほんの少しだけ前の彼よりも余つ程親しみやすい。

唯斗に好意を寄せる者としては、たったそれだけなのに喜びを感じてしまう。

(…あれ？じゃあ、唯斗君が風先輩に対して普段から口が悪いのも、前から心を許していたから…？あれ？あれ？)

例えば、彼は元より小綺麗な言葉使いでは無かったものの、風に対しては特に辛辣というか、最近の自分達に対する反応と似たような言葉使いをしていた。

それはつまり、唯斗は勇者部の中で風だけに心を開いていたということになる。

「と、東郷さん…？しかめっ面になつてるよ!？」

「…何でもないわ。…何でもなく、あつて欲しいわ…!？」
「??？」

東郷はライバル(?)を思い浮かべて、溜息を吐くと共に憂いを感じた。

一方、玄関へと訪問者を出迎えに行った唯斗。

「お帰りなさいませ、お嬢様！ご飯にしますか？お米にしますか？それとも…RA・I・SU♡」

「なっ、ななな…！何でアンタが居るのよ!？」

「いや、ここ俺ん家だし。友奈だと思った？残念、唯斗ちゃんでした

!!

「喧しいわー!」

本職の方と比べても違和感がないツツコミだ。困惑した状況下でも芸人魂を忘れない夏凜は、宛ら伝統的リアクション芸人だ。心做しか、出会ったばかりの時よりもツツコミの腕が上がっている。これが彼女の成長の軌跡だと言ったら、更なるツツコミ魂の輝きが見れることだろう。

結論、完成型勇者はツツコミも高基準でこなせる。

「つて言うかさ、お前…この前うちに来たじゃん。合宿のときに俺を攫いに」

「……あの時は大赦が用意した車だったし、前日にちよつと夜更かししてて眠かったから、車の中で寝ていて道とか場所はあんまり覚えてなかったのよ」

遠足を楽しみにして寝れたい小学生かよ。まあ、一回来ただけで覚えろというのも酷な話だ。寝坊助が相手なら特にだ。

「…まあ、いいか。——さて、完成型勇者様。致命的馬鹿勇者様と犯罪者現役前線勇者様がお待ちです。今日という日を祝福しながら、力の限りを込めてぶん殴ってやって下さい」

「間に祝福を挟む意味…」

「理由なんて毎回求めるなよ。禿げるぞ? 風先輩が」

「何で風が禿げるのよ。禿げるなら私かアンタでしょ。……いや、禿げないけど。未来永劫禿げたりなんかしないけど…!」

「……夏凜、他人の家の玄関で長々と駄べらないでくれる? 迷惑なんだよなあ」

「あなたの情緒はどうなってるのよ!」

流星は夏凜だ、と唯斗は心の中で絶賛した。将来は本格的に芸人にもなるつもりなのだろうか。

その内、ツツコミも完成型勇者の嗜みだと豪語する日が来るのだろうか。来たら喜ばしいのだが、何処か寂しさも感じることだろう。人はいつまでも純粹無垢でいられないように、いつの日か夏凜も己の

ツツコミ才に気が付いて増長する時が来るのだ。

唯斗はツツコミ型勇者に哀れみの目を向けた。

「にぼっしー、トーゴーと友奈が待ってるぞ」

「…私、疲れたから帰りたいんだけど」

「帰ってもいいけど、お前ん家に友奈を送り込むからな。家の前で自分の名前を連呼され続ける気持ち、お前も判ればいいんだ…」

「あー、うん。なんか…お疲れ様？」

「びえん…」

「いつの時代の言葉よ」

三百年くらい前の言葉だ。意味は『ちよつと悲しい』らしいが、それで何故びえんなのか。オノマトペでも無ければ、何かの略称でも無い。昔の人達は、大層暇で仕方が無かったのだろうと神世紀に生きる人達は語った。

精神的に疲れていた二人はお互いを励まし合って、友奈と東郷の待つ部屋へと向かった。尚、夏凜が疲れてる理由は某アホのせいなのだが、敢えて言う理由も無い。

互いの溜息を吐く姿を横目で見ながら、びえんと鳴いた。

「さて、突然だけど問題です。正解したらユイト・ポイントを三点贈呈します」

勇者部の二年組が集まれど、やる事など特に無いのが現状だ。本来ならば外に遊びに行ったりするのが年相応とも言えるのだが、東郷の脚について考えると、誰が言葉にするまでもなく却下される案だった。

これが男友達ならば、適当にゲームしたり漫画を読みながら寝転ぶのも悪くは無いが、四人中三人は女子だ。特にその内の二名はゲームという単語が似合わない。片や鍛錬中毒、片や純盗撮魔。

まだ某動画サイトを見ていた方が有意義な時間となる。

——だが空気を読まない事でお馴染みな唯斗。

思い付いたら即口に出す性分。深い考えなど全くなく、敢えて言うならば、何故か自分の部屋で行われる女子トークに加わりただけの構って欲しい男子の切ない思いだ。

「本当に突然ね…それで、そのポイントを集めたら何が貰えるの？唯斗君の私物とか？」

「トーゴー、敢えて何に使うのかは聞かないけど…少なくともお前にやるくらいなら寂しがり屋なにぼっしー宅に全部送るからな。喜ぶなって、夏凜」

「恰も私が喜んでるみたいな言い方するな！」

何が不都合があるという訳でもないが、東郷に私物を渡すのは軽く寒気がした。そもそも何故最初に思い付くのが私物なのか、多少の疑問を持ちながらも話は進む。

「それで唯斗くん。結局ユイト・ポイント?…を貯めたら何が貰えるの?」

「良い質問だな、友奈。今回の景品はなんと——みんな大好きユイトくんの親密度です！ツン度百パーセントなユイトくんが、貯めたポイント次第ではデレ多めな夏凜タイプとか、寧ろデレが九十五パーセントな友奈タイプにもなり得る！やったね〇えちゃん♪」

「た、〇えちゃん…?」

「ダメよ友奈ちゃん。何だかよく判らないけど、その部分に反応したらダメな気がするの…!」

それは世界の理だった。決して詳しくは語れないし、そもそも語ること自体が理由を問う間でもなく禁じられている。言わば、無言の了解だった。

無論、それを東郷が知る訳でも無い。遺伝子レベルに組み込まれた嫌悪感にも似た、形容し難い感情だった。

「…正直、ユイト・ポイントとか要らないんだけど」

「夏凜ちゃんが冷たいよお…も、もしかして！ボクがもう夏凜ちゃんにべた惚れってことに気が付いてる／＼／…:…?チラッ」

「鬱陶しいからチラ見しないでくれる?」

「冷たいどころか、氷河期からの絶対零度な案件だ…泣き喚き散らか

したい所存。何がツンデレだコノヤロウ！デレがねエのにツンデレなんて詐称しやがって!!」

「詐称どころか自称した覚えもないわよ！それ言ってるの、アンタと風くらいでしょ!!」

隙があれば無意味に騒ぎ立てる唯斗と夏凜。

根本は似ている二人だが、表面上の実態はほぼ真逆と言っても良い。唯斗は常日頃から夏凜にウザ絡みをして、夏凜は最近になってスルーするという至極当然な対処法を身に付けた。なお、短気な夏凜が全てをスルーできるとは限らない。

—— 一方で、二人とは全く違う反応をする者も居た。

「べ、べた惚れ!? な、ななな…! いつの間に!? そういえば、心做し二人の距離が近いような…もしかして、もう付き合ってるの!? ……くっ! こうなったら既成事実を…」

「東郷さん? 目が怖いよ…」

「トーゴー? トーゴーちゃん? ボク、何だかとっても寒気がするんだよね。冗談だから落ち着こ? ね?」

「……………えっ、冗談…?」

鳩が豆鉄砲を受けたような顔をする東郷。

これが演技ならば大したものだが、彼女の瞬間的に濁った瞳を見たらアホな唯斗でも、それが演技じゃないと十分に理解出来る。

大事な人に執着しやすい性分の東郷。そんな彼女がここまで取り乱したのには、きつと理由がある筈だ。アホだが馬鹿ではない唯斗が導き出した結論は——

(…東郷の奴、どんだけ夏凜のこと好きなんだよ。俺のこと殺すような目つきで睨みつけやがって…別に怖くは無いけど、気分良くは無いな。決して、一切合切、全く持って微塵も怖くなんか無いけど…!!)

—— というものだった。元々は友奈に執着していた東郷、その興味の対象は同性に向く傾向があると唯斗は認識していた。故に致命的な勘違いをしてしまった。

唯斗は少しだけ東郷から距離を取ることを静かに決意した。

「んじや、問題：ていうかクイズを始めマース。友奈、効果音！」

「じゃじゃーん!!」

「あつ、友奈ちゃんは効果音係なのね」

「組織的犯罪者の、アジとコイとサンマが警察に捕まり事情聴取が行われました。このうち中々口を割らなかつたのはだーれ？」

——次回に続く。

◆◆◆おまけ◆◆◆

〈東郷美森〉

・ifルート（○○の勇者）以外のどのルートに入っても、既成事実を作ろうとするヤベー奴。一途と言えば聞こえは良いが、その実態は愛を一点にしか注げないヤンデレさん。彼女自身のルートに入っても、何故か病む。基本的には良妻だが、浮気をするとは必ず刺しに来るヤベー奴。浮気をしなくても病むことがある。運動神経から頭脳に至るまで、全てが変にハイスペックなだけに一番のヤベー奴になった哀れな獣。そこは溢れる愛でカバーしよう。

〈結城友奈〉

・王道的で、『普通』という一番のエンドを迎えられる。唯斗からは狂信者と言われているものの、表立ってやばいことをするタイプでは無いので、実質無害。平和的だが、喧嘩をすると稀に鉄拳が飛んでくることもある。その後に土下座を繰り返すまでがワンセット。実は言うほど神樹様を盲信してる訳じゃない。身内が第一ない子。

〈三好夏凜〉

・好感度が一定のラインを超えたら、ツンデレからクーデレに変化する。その間にはツンしか存在しない時期もある。何故か勝手に好感度が高まっていく、チョロ子ちゃん。その愛の方向は友奈や風に向くことも暫し。何処となく百合な雰囲気もあるが、ルートに入ったらそれ以上に愛してくれる。基本的に病まず、別ルートに入っても後ろ

から背を押してくれる。東郷とは真逆。東郷とは真逆（二回目）

〈犬吠埼風〉

・超家庭的で、家事全般をそつなく熟す。勇者部随一の女子力はダテじゃない。精神的にも肉体的にも余裕があり、実は地頭も割と良いため、一番理想的な家庭を築けるのは彼女だったりする。最初は姉的な立ち位置だったが、好感度が上がるにつれて精神的距離が縮まり、気付けば一番側で寄り添ってくれる大事な人になる。大雑把な性格とは反面、物事を抱え込む性分なので無意識に支え合える関係を望んでいるのかもしれない。

〈犬吠埼樹〉

・好きな人にはとことん染まりつくす後輩。だが彼女の芯は決して曲がらず、間違いに対しては遠慮なく間違いだと断言するタイプでもある。妹や後輩というイメージが強く、実はルート分岐が一番難しい。努力の鬼で、苦手だった料理や家事はルートに入ってからメキメキと上達し、将来的には姉の立つ瀬を無くす存在。姉と似ていて、片方が尽くす事よりも支え合える関係を強く望んでいる。大人しく見えて、凶太さは随一だったりもする。

さて、どのルートが好みかな？

※その他のルートについては、該当人物が登場した後忘れて無ければ書く予定。

総じて『運命』と言えるのだから、私と彼の関係は他者如きが理解出来るものではないと自負している。

だから彼の全てを奪って、恨まれても、きっと私は笑顔だ。だって、彼の一番大きな感情は私に向いているのだ。彼が私に向ける感情は、全部『愛』が込められている。ならば、恨まれた末に送られる感情も『愛』に違いない。

——ああ、やっぱり愛してる。

こんなにも身体が熱くなる。まるで運命だったみたいに、彼へと向かう感情は『愛』で埋め尽くされている。

「——だから、コロシテモいいよね？」

月光の差す病室で、彼の——唯斗君の寝顔が微かに見える。こんなにも愛らしい彼が私以外の娘を見るだなんて耐えられない。

勇者部は危険なんだ。

みんな私よりも魅力的で、純粋な女の子だ。打算もなく他人を想い、行動出来る娘達だ。幾ら私達が愛し合っている存在でも、私自身が親友な彼女に目を引かれてる様に、唯斗君が彼女達に心惹かれても不思議はない。

それが耐えられない。たとえ我儘だとしても、絶対に許せない。ずっと私だけを見て、私だけを感じて、私だけを意識して、私だけを聴いて——!!

——ううん、解ってる。私の中で冷静な部分が小さく呟いた。そんな言葉が不可能なんだってことくらい解ってる。生きていく中で、特定の人物だけを永遠に見続けることなど物理的に無理だ。

——だから、だからこそ…彼は死なないといけない。私を愛している純粋で無垢な彼のままで、幕を閉じないといけない。そこに『愛』が残されていれば、”その後”だなんて必要無い。ここで彼と私が紡いだ『愛』の物語は終わる。HAPPY ENDだけあればいい。胸糞の悪いBAD ENDも、解釈違いのTRUE ENDも要らない。

さあ、HAPPY ENDで終わらせよう。

「唯斗君…♡」

手には一本の包丁が握られている。これを心臓に向かつて振り下ろすだけで、全てが終わる。私達は本当の幸せを手に入れられる。

艶めかしく月光を反射する包丁の刃に、私の顔が映る。嬉しそうな、でも悲しそうな。それらを狂気で包み込んだ、私自身でも知らない表情がそこには映されていた。

彼が起きる様子はない。

私と唯斗君だけの空間。また樹海化が起こる直前のように、世界が止まればいいのに。私と彼だけを残して、永遠に氷漬けばいいのに。顔が火照る。形容し難い歓びが溢れて、手が震える。愛を識って、実行を決意する。

悲しいくらい『愛』に塗れた行動は、私を祝福するみたいに全身を揺さぶり、叫びたい程の衝動が駆け巡る。きっとその末は純愛だ。

「唯斗君…あの時の告白、返事は決まったよ」

あの日の私は、有耶無耶な気持ちで彼の告白を受けて、逆に彼自身に断られた。でも、もう答えは決まった。決して揺るがない気持ちは私を突き動かし、包丁を片手にこの場へと導いた。

ここまで来たのに、その言葉を口にするのは少しだけ恥ずかしい。場違いにも赤面して、心臓が高鳴るのを震える身で感じた。

包丁を両手で振り上げて、大きく深呼吸をした。

「唯斗君。私は…東郷美森は、貴方の事が好きです。愛しています♡」

その言葉を最後に、心臓へ向けて包丁を振り下ろした。彼に掛けられた白いシャツが深紅に染まり、私達の物語は明確な『END』を向かえ――

——られなかった。

「なっ…!!?」

驚愕のあまり、静まり返る病室で声が漏れた。

——包丁が弾かれた。

彼を囲うように曇った硝子に似た膜——バリアが展開された。

弾かれた凶器は床に転がり、月光の影に紛れる。脚の不自由な私が直ぐに手を伸ばせる訳もなく、起こり得た不可思議な現状に呆然と驚愕を浮かべることとした出来なかった。

『——やってくれるわね』

「っ…だ、誰!？」

病室に『声』が響いた。

それは少女の声だった。冷たく、達観すら覚える程の淡々とした、しかしながら微かな感情の突起もある声。そこに含まれるのは、声質で抑えられた『怒り』。

明らかな異状だ。

『私が誰か、ね……過去の亡霊、または英霊かしら? 正しくは人工精霊なんだけど、実態が実態だけに単なる幽霊とは言い難いわ。…ええ、そうね。面倒臭いから、精霊よ。貴女がよく知る、勇者システムに組み込まれた、勇者の補助を義務付けられた存在。ああ、そうね。一応言っておくけど、彼が起きないように細工をしておいたわ。外にも声が漏れないようにしたから、安心して喚きなさい』

「……あなた、唯斗君の精霊…大蛇…!」

姿は見えない。然れども、目の前の勇者を守る義務がある精霊。それは他でもない彼自身の精霊しかない。

『っ…気が付くのね。存外、冷静なのかしら。……いえ、取り繕ってるだけ。本当に冷静なら、こんな愚行だなんて起こさないもの』
「っ…!」

声質に似合わない、刺々しく怒りに満ちた声が刺さる。

やがて目の前に煌めく花卉が集まり、光が晴れた先には見覚えのあ

る精霊——大蛇が居た。純白のデフォルメされた蛇は、紅い瞳で、私を観察する様に眺めた。

『反吐が出るわね。貴女はあまりにも…あの時の私と、似ている。醜い承認欲求と矛盾だらけの自己嫌悪に苛まれて、他者を傷付けようとした私と…気味の悪い御託を並べて、妄執に溺れて仲間を殺そうとする貴女。同族嫌悪って表現出来るなら、私は貴女を嫌悪して軽蔑している』

「っ…あなたに、私の何が解るのよ…！知った様な口をきかないで！！私は…私達は、愛し合ってるのよ!?だから誰にも、私を咎める事なんて出来ない！」

『別に、咎めようとは思ってないわよ。貴女の事なんか、心底どうでもいい。たとえ貴女が歴史に残る様な何かを成しても、万人に恨まれて何処かで野垂れ死のうとも、本当にどうでもいいわ。私はただ、そこで寝ている男を護るだけよ』

「でも唯斗君は——」

——その続きは、言葉が浮かばなかった。

唯斗君は何を望んでいるのだろうか。私はその答えを、本当に理解しているのだろうか。愛し合ってる。そう答えるのは簡単だ。だがその言葉で、目の前の精霊は何一つ納得しないのもまた明らかだ。

紡ぐ言葉を探す。如何にして、反論し戸惑う心中を隠せるか。

拙くも、震える声で言葉を返した。

「……唯斗君は、私の…憧れで、希望で…導いてくれる人なの…！弱い私を、勇者にしてくれたのは彼よ！負けそうな時に、立ち上がったみんなを鼓舞したのは彼なのよ!!そんな唯斗君が、告白してくれたのよ…！応えたいと思うのは突然でしょう!？」

『……ねえ。貴女、一体全体誰について語ってるのかしら?』

「は…?誰って…今、唯斗君の話を…」

私の言葉を遮って、精霊は言葉を続けた。

『…本当に理解しかねるわ。だって、貴女が何処の誰について話してるのか、私には分からないもの。私の知ってる郡唯斗は、面倒臭がりな怠け者。与えられた仕事くらいは熟すけど、逆に言えばその範疇に

無い仕事は見て見ぬふりをする自称怠惰主義者。身を削るような自己犠牲的な精神は持ち合わせていないし、そもその話、打算や駆け引きも無く、自己犠牲心そんなものを抱いてるのは、本物の狂人が根っからの正義の味方だけよ。唯斗は正義の味方じゃない。勇者や善人、たとえ英雄になつたとしても——人々の平穩を願つて、身を削つて戦い続ける『正義の味方』には成れない』

「っ——!!」

——それが彼の本質だから、と精霊は殊更に述べた。

それは唯斗君の軌跡を一瞬で否定する言葉だつた。悪意は一切無く、淡々と真実を告げるように精霊は言葉を吐く。

その言葉に腹を立てると同時に、何処か私の頭には共感に似た思考が生まれていた。私の知る、勇者になる前の彼は、目の前の精霊が言つた通りの人物だつた。それがどうして、勇者になつた途端に英雄譚の主人公みたいに最前線で味方を鼓舞して戦う『正義の味方』となつたのか。

…私は何処かで、勘違いをしている…？

(いや、違う…あの精霊が私を惑わそうとしているだけよ！)

確証のない否定を胸中で繰り返す。彼は私の憧れで、決して揺るがない『正義』なんだ。何度も私を助けてくれて、みんなを敵から護つて鼓舞する、真正銘の正義の味方なんだ。

それを否定なんてさせない。あの精霊がなんと言おうと、彼に守られた私達自身やこの世界が彼の軌跡だ。確固とした答えは、如何なる理論を用いても覆せない。故に精霊が詭弁を弄しても、私はもう揺るがない。

『東郷美森、貴女は酷く歪んでるわ。でも誰よりも真つ直ぐで、誰よりも正しく在ろうとしている。事実、今日の愚行を除けば貴女こそが真正銘、正義の味方よ。でも、今の貴女は私と同じ。道を踏み外した愚者よ。勇者から外れた愚かな者。ええ、本当に、本当の本当に…私は貴女が嫌いだわ』

「……………」

反論も無く押し黙つたのではない。単に、目の前の精霊が何を知っ

て何を語っているのかが気になったからだ。

唯斗君は精霊『大蛇』と言葉を交わしているのか。私や友奈ちゃん、他の皆の精霊は総じて言葉を発しない。夏凜ちゃんの精霊に関して、決まった言葉しか喋らないため私達の精霊と大差ないだろう。

何故彼の精霊だけ喋るのか。精霊は、自らを人工精霊と称した。ならば、大蛇だけか特別だと考えるのが妥当だ。

もしも、過去や現在において彼と何かしらの関係を持つ者が正体だとしたら、大蛇が口にした言葉には重みが出る。

私たちの知らない郡唯斗を知っている存在、それが大蛇なのかもしれない。

——私はそれに、酷く嫉妬した。

「あなたは、何者…?」

『答える義理はないわ』

「…あなたは、私達の『愛』を否定した。なら、その理由を——唯斗君とあなたの関係についてくらい話してもいいでしょう…! 何の理由も無しに彼の愛を拒めだなんて、傲慢にも程がある!!」

『飽くまでも愛し合ってる前提で話すのね。呆れて笑えてくるわ。一つだけ言えるのは、東郷美森。貴女が納得しようとしまいと、関係ない。この男を殺したいなら、何百回と包丁を振り上げて、無駄に足掻けばいい。貴女単体にバーテックスをも超える力があるなら、可能性はあるかもしれないわね』

つまる話、たかが人間如きが神の力の一端を込めた防壁を破れまいと言っているのだろう。たとえ勇者に変身したとしても、互いに根源は神樹様の力。炎に炎を翳す様に、水に水を叩き付ける様に、無駄なのだ。

ならば勇者の力に頼らなければ良い話だが、生身の人間がバーテックスの攻撃を幾度となく耐えてきたバリアを破壊するなど無理にも程がある。

「…凶器が効かなくても、手段なら幾らでも!」

『——私はいつだって、彼を見守ってる。それが『約束』だし、存在理由。それを害するなら、例え勇者だろうと許さない』

「っ!？」

瞬間、首元に『鎌』を当てられた様な感覚に陥った。その純白の蛇は、いつでもお前を殺せるんだと言わんばかりの声質で淡々と突き放す。

そこにはきつと、決して目には見えない『貫禄』があつたのだろう。勇者として戦つてきた私達以上の戦場を越えて、その末に身に付くであろう形容し難い迫力。彼女が圧倒的な強者である証拠とも言える。

小さなぬいぐるみ程度の大きな蛇は、一瞬でも目を離したら文字通り『大蛇』へと変貌するかもしれない。その想像が頭を過り、背筋が凍りつく。

『覚えておきなさい、東郷美森。今の私は精霊、故に宿主を守る義務がある。そして意志を得て人格を継いだ人工精霊たる私は、守る手段を選べる』

——つまり、殺してでも守ると言っているのだろう。

暗闇で爛々と紅光る目は私を射抜き、明確すぎる恐怖心を煽った。

大蛇は微かな光を放ち、空中へと霧散していった。残るのは淡く光る花卉のみ。あと気味の悪さだけを残して、精霊との邂逅は幕を閉じた。

「ふ、ふふっ……」

精霊が消えてから何秒、何分が経つただろうか。

緊張から解放され、脱力した私は気付けば笑っていた。

——そうだ、これは『試練』なんだ。

どの物語でも、愛には試練が付き物だ。それが唯一の愛の証明であり、私の彼の繋がりを強固とする。故に嗤った。何も可笑しくないのに、酔ったように笑みが零れ落ちる。

「ふふっ…あ、あはははははー」

大好きな親友に向ける最上級の like とは異なる、小さくとも確かに存在した Love。それが、いつの間にか狂った。初めて生まれた感情に困惑して、執着した、そして妄執と化した。

——もう忘れたくない。気が付けば、そんな想いに溺れていた。その念が心中のナニを表すのかも理解出来ないまま、魂に刻み込む様に、唯一思い出すのは彼の『告白』。ああ、そうだった…やっぱり、私と彼は両思いだったんだ！

一時は迷いを孕ませた言葉も、高まる気持ちに比例して明確な愛と自覚する。その果てが、単なる独占欲に塗れた免罪符だとも知らずに。

集結

へ 組織的犯罪者の、アジとコイとサンマが警察に捕まり事情聴取が行われました。このうち中々口を割らなかつたのはだーれ？ へ

それは俺がネット上で適当に見繕ったナゾナゾだ。

なんとたつて『クイズ 難しい』で検索しただけの適当の名に恥じない所業なのだ。これにはにぼっしーの精霊も『諸行無常』と声を大にするに違いない。

：あの精霊、なんで喋るの？他の精霊は鳴き声すら発しないのに。それになんか法螺貝とかも持つてるし。もしかしたら、宿主に似て変人ならぬ変精なのかもしれない。ペットは飼い主に似る的な。名前も変だし。

その内にぼっしーも、一人称が『我』になったり、己を『剣豪將軍』と名乗ったりするのだろうか。年がら年中ロングコートを着たりもするのだろうか。

結論、変人Ⅱ義輝Ⅱ夏凜

「…なんか、失礼なこと考えてない？」

「言われてるよ、東郷。またイタイ妄想に耽ってるのかよ」

東郷の妄想癖は病気みたいなものだ。恐ろしいのは、それに並々ならぬ行動力が備わってる事だ。考えるよりも先に行動する友奈は脳筋バカだけど、考えた上で理性を捨てる東郷はもつとヤベー奴。

この世には案外、常識人は少ないのかもしれない。また新たなトレビアを見つけてしまった。論文を書いて受賞するのもイイかな。面倒だからしないけど。

「それはいつも通りでしょ。私はあんたに言ってるのよ！」

「あれ…う…さらつと貶された…」

「東郷。事実を話すのは『貶す』と言えるのか？——否！東郷が妄想癖溢れる実害系ガールなのは元より明白。つまり、今のは『貶す』じゃなくて『再確認』だな」

「ぐふう!?!」

「と、東郷さんが倒れたー!?!」

「あんだ…いい笑顔で毒吐くわね」

「先に言ったのはにぼにぼだろ」

「にぼにぼ言うな!」

にぼにぼ、結構可愛い渾名だと思っただけだなあ。某ご当地キャラのパクリみたいなにぼっしーよりも、オリジナリティ溢れるにぼにぼの方が良いに決まってるのに。まったく…誰だよ、最初になにぼっしーとか言ったヤツ。狂った感性しやがって。

倒れ伏す東郷を見ると、何だかストレス的なナニカが浄化されるのを感じる。定期的に東郷をハッ倒そうかと考えていると、友奈が袖を引っ張ってきた。

「唯斗くん、唯斗くん」

「はいはい、聖人君子唯我独尊焼肉定食の唯斗くんだよ」

「さっきのクイズの答えって、『コイ』だよな?」口を割らない”って”吐かない”とも言えるし。『コイは吐かない』を『恋は儂い』にしたら、正解だよな?」

「えっ…う、うん。正解だけど…どうした友奈?変な物でも食べたのか…?東郷のぼた餅に異物混入でもしてたか?」

「あはは、偶然だよ。『恋は儂い』ってアサガオの花言葉だし、東郷さんを見てたら思い付いたんだよね」

有り得ない。この脳筋阿呆が正解に辿り着くだなんて…見た目が同じだけの別人か?世界には似てる人が三人いるって言うし、浅黒い肌の友奈とか金髪ハーフの友奈も存在してるかもしれない。……んなわけないか。

「やったー!正解だ〜!」

「流石友奈ちゃん!楊貴妃のような美しさにジョン・フォン・ノイマンのような頭脳も兼ね備えているのね…!」

「…お前には友奈がどう見えてるんだよ」

「東郷だけ別のなにか見えてるの…?」

楊貴妃の外見は知らないけど、世界三大美女と比べるとはジャンル違いだと思う。

そもそも頭脳に関しては比べるまでもない。友奈はこう見えて成績自体は悪くないけど、阿呆だ。なにぶん、何処までも阿呆だ。救いようがないくらいド阿呆だ。本当の本当に、ポンコツ夏凜と肩を並べるレベルのド阿呆なのだ。

阿呆な風先輩も含めると、勇者部の半数は阿呆ということになる。考えてみれば、東郷も阿呆な部分があるし…もしかしたら、俺と樹常識人以外は全員阿呆の集まりだった…？

やっぱり部活辞めようかな。

「唯斗くん」

「ん？」

悩む俺とは裏腹に、友奈は弾んだ声を掛けてくる。

友奈が両掌を目の前に出し、物乞いのように何かを訴えてきた。なんだよ、金か？赤のカラーギャングによるカツアゲの凶なのか？それとも勇者だから他人の家から金を取るのは当たり前だとも言いたいのだろうか。某RPGのやり過ぎだ。

「ユイト・ポイントちよーだい」

「ゆいとぽいんと…？…あ、ああ。そんなのもあったな。はいよ」

「こ、これはっ！…！イカの姿フライ？」

友奈に手渡したのはみんな大好き国民のアイドル、イカの姿フライだ。

今日の俺は寛大なのだ。家の前で騒いでいた迷惑者に物理的好感度とも言えるイカの姿フライをあげれる程度には寛大なんだ。

よもや、俺は仏だったのでは…？自分の寿命を分け与えると同等の行為。仏唯斗くんじゃなければ耐えかねて発狂してた。

「ゆ、唯斗君!? そんな…唯斗君が自分からイカの姿フライを渡すだなんて…！天変地異の前触れ!? それとも唯斗の偽物!？」

「東郷は俺のこと何だと思っただよ」

「怪人イカの姿フライでしょ。気持ち悪いくらいイカの姿フライ食べてるし」

「ふっ…にぼっしー。褒めるなよっ／＼／」

「褒めてないわよー」

夏凜がお世辞を言うだなんて、珍しいこともあるものだ。まだ俺の好感度を稼ごうとするだなんて…その後にはツンも忘れない徹底っぷり。筋金入りのツンデレだ。我らが愛しいツンデレ様だ。

邪魔者たちが集まってから約1時間後、俺はユイト・ポイントことイカの姿フライを極悪非道冷血凶悪女に奪われて意気消沈していた。

「…さて、解散するか!」

「まだ来たばかりだよ!」

ちっ、引つかからなかったか。ノリと雰囲気で行けると思ったんだけどな。…地味に夏凜だけは立ち上がろうとしてた。ノリと雰囲気餌に完成型勇者が釣れましたー。

その後に真顔で座り直すところまでしっかりと見た。天然まで兼ね備えてるだなんて、この女…属性の宝箱か？

——ちやららららーん、ちやららららーん♪

唐突にファミ○ーマートの入店音、もとい我が家の玄関チャイムが鳴った。

「…ん？宅配でも届いたのか?」

「あっ、たぶん風先輩と樹ちゃんだと思うー!」

「…へえー。それで友奈さん?なんで君は本人に許可確認なく勝手に人を呼ぶのかな?そのポニーテールぶち抜くぞバカヤロウ」

「ひえっ…」

「デジャビユね…夏凜ちゃんが来たときと同じやり取りだわ」

この赤髪め。さては学習能力ゼロのチンパン力全振りだな。ゴリラは森の賢人だけど、チンパンジーは頭から足の先まで阿呆が詰まってそうだからダメだ。あれ?女子力ゴリラな風先輩は賢人だった…?

森の賢人ってゴリラとフクロウの両方で言われてるけど、結局どっ

ちなんだろう。

「俺の部屋、そこまで広くないんだけど…」

元より1人で暮らせる程度の範囲だ。六人も集まることなど想定した造りではない。いつその事、東郷と風先輩は外で待機でもいいんじゃないだろうか。

「別に運動するわけじゃないんだし、集まるだけなら問題ないでしょ。いいから、あんたは風と樹を迎えに行つてきなさいよ」

「いや、放つておいてもいいだろ。どーせ樹が鍵持つてるし」

「あれれ、まだ返して貰つてなかつたの？」

「面倒臭いから預けっぱなしだったんだよ。つーか、もうあげてもいいか。樹なら悪用しないし。モーマンタイ無問題！」

樹は某ストーカー女とか某狂信者と違って奇行には走らない。俺に匹敵する常識も持ち合わせているし、安全無害の擬人化だ。

むしろ自分で持つてるより、樹に持たしてる方が安心するまである。ヤバイ…樹の信者になりそう。郡家の当主になったら樹教でも創ろうかな。樹万歳、樹最高、樹を崇めよ。

「そういう問題じゃないでしょ…」

「あつ、じゃあ唯斗君！私にも——」

「東郷、お前は駄目だ。寒気と怖気と嫌気がするから絶対に駄目だ。お前に我が家の鍵を渡すくらいだったら、夏凜に渡すからな！」
「なっ!？」

「…毎回毎回、私を巻き込まないでくれる？あんた、困ったら私の名前を出せば解決すると思つてるでしょ」

「バレちゃったっ☆」

別に、あわよくば夏凜にヘイトが向けばいいかな、なんて思っていない。心の中で肉盾だなんて、決して呼んでない。

ただちよつとだけ、夏凜が苦労人になるのを喜ばしく思つてるだけだ。そういうの、めちやくちや似合うし。ブラック企業のエリート社員になる素質があると思う。なまじ後輩に頼られてる手前、辞めるとも言い出せない哀れな凶まで想像できた。

「キモツ…」

「にぼさん、小声で本音をこぼすの止めようよ？泣くよ？泣きながら、にぼっしーの住所と電話番号と口座番号をネットに晒すよ…？」
「誰かにぼさんよ。てか、最後のは知らないでしょ……………えっ、知らないわよね？」

「H A H A H A ☆」

「えっ、ちよっ！やめなさいよ!？」

勿論知らない。他人の口座番号なんて知るわけが無い。東郷じやあるまいし…取り敢えず焦る夏凜を見たかっただけだ。

「ういーす。集まってるわね、馬鹿共」

「おじやます！」

「あつ、風先輩！おはようございまーす!!」

部屋のドアが開き、厚かましい声が聞こえた。振り向くと風先輩と樹が居た。樹はまだ声が出ないらしく、スケッチブックに可愛い丸文字で文字が書かれている。

「何だとバカヤロウ。馬鹿なのは東郷と友奈と夏凜だけですよ」

「喧しい。完成型勇者の私が馬鹿なわけないじゃない」

「完成型勇者（笑）」

「…唯斗、風。表に出なさい…!」

「沸点が地の底かよ」

「揶揄いがあるわねー」

取り敢えず怒る夏凜の相手は友奈と樹に任せた。餅は餅屋に…つまり、そういうことだ。

——ふと疑問が浮かんだ。

何で休みの日にこの阿呆共は集まるのか。

いや、集まるだけなら文句はない。存分に屯ってくれても構わない。コンビニ前のDQNの如く屯ってくれたまえ。でも、何でコイツらは他人の家に勝手に集まるのか。

この場にいる東郷、友奈、夏凜、風先輩、樹。その中の誰一人とし

て、俺は招いてない。いや、樹だけは鍵も渡してるし、いつでも来てくれて構わないけどさ。

中々に厚かましい奴らだ。

本気で出ていけと怒ったのであれば、彼女達とて空気を読み宥めるだの出ていくだけのするだろう。

だが、俺はこれしきのことと怒りを露わにするほど狭い器ではない。なんなら、この中で一番精神的に熟していると言っても過言ではない。今宵はアダルト・ユイトなのだ。

ならば、大人の余裕も持って笑顔で歓迎しようじゃないか！

「改めて…いらつしやい、二人とも」

「な、何よ突然…気色悪い声なんか出して」

「唯斗せんぱい、具合でも悪いんですか？」

風先輩と樹が怪訝そうな表情を浮かべた。

なるほど、大人たる俺に驚いて慄いてるんだな。獣が火を怖がるのと同じで、精神的に幼い樹と学名ゴリラゴリラグラウエリな風先輩は英国紳士の俺を恐れているんだ。

「あはは、先輩も樹も酷いなあー。厚顔無恥…もとい、可愛い顔が台無しですよ？」

「うおえ…」

「嗚咽!?風先輩、大丈夫ですか!?!」

「コレジャンナイ感がすごい…!」

そうかそうか、吐きたくなるくらい嬉しいのか。俺の歓迎ムードも捨てたもんじゃやないな。ふっ…唯斗くんのイケメン性が目覚めてしまったかもね？

「唯斗…」

「なんだい、風先輩？」

「半殺しにさせて♡」

「ひえっ…」

この女…笑顔でなんてこと言いやがるんだ。

「なんでですか!?!可愛い後輩を殺すだなんて…正気の沙汰じゃないですよーぶっ殺すぞ!?!」

「なんでよ!?可愛い先輩を殺すだなんて…正気の沙汰じゃないわよ!ぶつ殺すわよ!」

なんて女だ。人に軽々しく殺すだなんて言いやがって。全生物不殺を心得る俺だって怒るんだぞ?……バーテックス?うん、アレはそもそも生物なのかもアヤシイから。死んだら砂になる生き物とは一体…

「二人とも息ピッタリだね!」

「アンタら本当に似てるわね…」

「夏凜ちゃん、表に出ようよ♪」

「沸点が地の底ね」

この煮干し女め。誰がゴリラゴリラグラウエリと似てるだつて?笑わせてくれる。この際、一千万歩譲って俺がちよつとだけ変人だとしても、まだ紙一重に樹側の人間だ。

それを腕力ゴリラ先輩と同等に扱うだなんて……夏凜の気が知れない。

次は夏凜をどう揶揄つてやろうかと考えていると、東郷が唐突にこう言った――

「…私達から見れば、先輩も唯斗君も、ましてや夏凜ちゃんも十分に似た者同士ですよ?」

「「は?」」

あー、キレた。完全にキレた。この犯罪者現役前線女が!

「おいトーゴー、妄言吐いてんじやねえよ。はっ倒すぞ」

「東郷、寝言は寝て言いなさい。永眠させるわよ」

「…東郷、眼科に行きなさい。部長命令よ」

「すごい団結力…!」

樹が慄いている。

団結力?違うな、これは圧倒的な勘違いを訂正させるために皆必死なんだ。流石は風先輩と夏凜。俺という常識人と自分達ド変人は似ても似つかないと理解してる模様。

その後、馬鹿共は夕暮れまで俺の部屋を占領していた。俺の休日

…

◆◆◆おまけ◆◆◆

・昼ご飯

風「お腹空いたわね。唯斗、ちよつと焼きそばパン買ってきなさい。
ダツシユで」

唯斗「えー、唯斗くん何ってるのか分かんないよお。パイセン
が手本を見せてくださあい」

風「へえ、先輩をパシるだなんていい度胸ね…！」

唯斗「あの…理不尽って分かります？」

その後、ジャンケンに負けた友奈と夏凜が全員分を買いに行った。

不安の種は植えられた

——バーテックスの生き残り。

それを大赦から勇者達へ知らされてから早くも数週間。事態は一向に進展を見せず、各々に微かな不安を残したまま二学期になった。

「来ないねー」

「来ないよなー」

授業を終え部室へ向かう途中、友奈と唯斗は徐に言葉を零した。

決してバーテックスと戦いたいという訳ではないが、嫌な事は先に終わらせるに限る。襲来するなら襲来するで、気が緩まないうちに来て欲しいものだ。自主的訓練をしていない唯斗達にとっては、武器を扱う”慣れ”を忘れたくないということもある。

もつとも、生き残り自体が何かの間違いで、結局襲来しませんでした、というのがベストなのだが。

「敵を気にしないのもダメだけど、気にし過ぎるのも良くないわ。友奈ちゃん、唯斗君」

「真面目ちゃんかよ…不思議と東郷が常識人に見えちゃうだろ」

「唯斗君。その言い方だと、常日頃から私が常識の欠けている人物に見えるって言ってるふうに聞こえるわよ？」

「そー言ってるんだよなあ」

唯斗の言葉を冗談だと受け取った東郷は、悪戯好きな意中の相手を視界に収めて小さく微笑んだ。

「東郷さんは落ち着いてるね。その秘訣は？」

「嘗て、国を護り戦った英霊達の活動記録かしら。あれには戦略や御心、其の在り方までが全て詰まってるの！家で映像見る？」

「で、出来れば分かりやすくアニメになってるのが良いなあ…」ねこ〇こ日本史”とかー！」

”ねこ〇こ日本史” って…サンチョとかアミーゴのパクリっぽいヤツだろ？……いや、寧ろサンチョがパクリなのか？」

「あつ、私の家にアミーゴあるよー」

「奇遇だな、俺ん家にもサンチヨの抱き枕はあるよ。……いつの間に買ったんだっけ？あれ、貰ったような気も……まあ、どっちでもいいか」

サンチヨとは、要するにユルい感じの猫のキャラクターだ。一部では熱狂的なファンがいるとかいないとか。

キャラクターグッズの抱き枕には、尻尾を引っ張るとダンディな声で『スイ、ムーチヨ』と喋る機能が付いてるプレミアム个体もあるらしい。

——雑談をしながら歩いていると、家庭科準備室こと勇者部部室へと到着した。

「結城友奈、入りまーす！」

「同じく東郷美森、失礼します」

部室に入ると、いつの間にか先に来ていた夏凜を含め既に全員が揃っていた。

「あ、風先輩。こんにち殺法！」

「むっ！こんにち殺法返し!!」

「へこんにち殺法返しです！」

「何よ、その独特な挨拶法……」

唯斗と風のやり取りに、勇者部ツツコミ担当の三好夏凜はすかさずツツコミを入れた。勇者部のボケを一身に受ける彼女の立ち位置は既に不動のものであり、清く正しく完成型勇者だ。

尚、”こんにち殺法”に関しては特に意味は無いらしい。そして他意も無い模様。通称『無駄』な正式名称『暇潰し』だ。

「センパイ、なんか依頼とか来てます？」

「さあ？少なくとも、あたしの所には来てないわね。ホームページからの依頼なら東郷に聞きなさいな」

「えっと……ホームページには簡単なお悩み相談くらいしか来てません。一応、運動部のヘルプ、幼稚園での絵本読み聞かせも来てますが、此方は日にち指定なので現状でやることは無いです」

「お悩み相談ねえ……樹、それっぽく返信しといてくれる？」

〈りよーかい！〉

休み明けからまだ初日という事もあり、依頼自体は通常時と比べて少ない。悩み相談に関しても、届いてるメールに対して返信するだけなので余程の困り事でも無い限りは樹や東郷が片手間に返している。

結局、現状では雑談をしながら誰かが部室へ訪れるのを待つしかないのだ。

「それにしても、全然バーテックス来ませんねー」

「友奈ちゃん、また言ってるの？」

「うーん…待ち遠しいって言うのは違うけど、来なければ来ないで不安だなあつて」

「ふんっ、安心なさい。どんな敵が来ても、完成型勇者の私が居れば問題なしよ！」

燃料は煮干し、多々ポンコツ具合は御座いますがご了承ください。そんな説明文を唯斗は心の中で読んでいた。

彼女が多方面に優れていることは周知なのだが、何処と無く放っておけない雰囲気醸し出されている。

〈敵…いつ来るかな？ドキドキ〉

「そうね…私の勘だと、来週あたりが危ないわね」

「勘つて。全くあてにならないのに、なんでこの人自信満々なの？完成型勇者様だから？」

「唯斗うつさい。ヒントなんてないんだから、勘でモノを言うしかないじゃない！」

「んじや、今日来る可能性は——」

——その時だった。

誰も予想してなかった。予想した本人は巫山戯て言っていたただけだ。まさか本当に——樹海化警報のアラームが鳴るとは、誰も予想していなかった。

「っ！う、噂をすればなんとやら…だね！」

世界は停止する。

樹海化警報のアラーム音以外、全ての騒音が鳴り止み、窓からは押し寄せる光の波が世界を飲み込もうとする光景が見える。

無風無音の世界は急激に飲み込まれ、極彩色の樹海が展開させる。

——再び、神敵との邂逅だ。

「…来ちゃったわね」

呆れたような、然れども確かなプレッシャーに耐えながら重々しく風は口を開いた。恐怖も不安も、部長である自分は周りに悟らせる訳にはいかない。

風は極彩色の光を見据えて、震える笑みを浮かべた。

「上等！殲滅してやるわ!!」

猛々しい夏凜の言葉を最後に、勇者部の部室も光の奔流に飲み込まれた。

「敵は一体。あと数分で森を抜けます」

東郷はリーダーを片手に戦況を報告する。

久しい樹海の世界は、やはり神々しく、同時に不気味な雰囲気纏っている。

何処までも声が響き、だが何処にも届かない。皆が傍に居るから良いものの、一人きりであれば発狂しそうになるくらい居心地は最悪。これが神気だと言うのであれば、確かに人間には過ぎた力だ。故に勇者という神の力を得る器に適正の有無が関係するというのも、納得出来る。

未だ視界にも映らないバーテックスだが、リーダーの敵反応が一体分だと知り何処からか安堵の息が漏れた。

「よしっ、一体だけならー」

「今回で延長戦も終わり。ゲームセットにしましょう!!」

本当にこれで最後。

その言葉に実感を込めて、風はやる気を漲らせる。短い様で長かった戦い、それは命を掛けることもあり、後輩に無理をさせた事もあった。

そんな歯痒さも今回限りで終わらせ、本当に学生らしい生活を送るために。未だに見えない左目を眼帯の上から触れ、不思議と心に押し掛ける不安を押し込める。

「いくわよ!!」

全員がスマートフォンを取り出し、勇者アプリを起動する。

各々のスマートフォンから花卉が溢れ、吹き荒れる。山桜、アサガオ、オキザリス、鳴子百合、サツキ、オンシジューム。全ての花卉が同時に煌めき混ざる。

視界を詰め尽くす煌めく花卉は数秒後には完全に晴れ、そこにはそれぞれ別の勇者衣装を纏った『勇者』が武器を握り締めて、視界の遥か先に居る神敵を向く。

「よーしーじゃあ早速、アレやるわよ!!」

風の指す“アレ”とは円陣のことだ。

「了解です」

「ふんっ、アンタ達…本当にこういうの好きね」

「えへへ」

「にーぼちゃん、その“アンタ達”に俺は含むなよ」

「誰かにーぼちゃんよ。アンタはいい加減、呼び方くらい統一しなさいよ!!」

軽口を叩きながらも、全員が風を中心に歩み寄り、東郷は触腕を器用に操りながら肩を並べる。

「敵さんをきつちり昇天させてあげましょう!勇者部、ファイター!!」

「「おおー!!」」

——覚悟は決まった。

輪を切り、残る温もりを感じながら全員で同方向を見据える。そして風を先頭に戦場へと飛び出した。

接近し、視界にハッキリと収まったのは小さなバーテックス。全長は三メートル程で、これまでもバーテックスと比べると圧倒的に小柄だ。

これまでは大半が五十メートル級の巨体を持ち、獅子座に至っては全高百メートル以上の超巨体だったので、そのバーテックス——双子座の片割れを見てプレッシャーが解れるのを感じた。

「…ん?あの変質者みたいなの…この前、樹が倒さなかつたっけ?」

丸く白い頭部に、太い棒のような腹部。肩から胸部にかけては長方形の板から腕が吊るされてる様な造りで、捉えようによつては首枷を掛けられてる様にも見える。腰部分にはスカートのような半球と、そこから生えている二本の細すぎる人形に類似した脚。

その格好且つ奇声を上げながら全力疾走するというその異様な姿は確かに見覚えがあった。

「双子座だから、前のと合わせて双子だったんじゃないですか？知りませんけど」

「…まあ、そう考えるのが妥当ね」

「いずれにしても、やる事は同じ！止めるわよ!!」

夏凜は二本の刀を出現させる。一度倒した敵、その片割れと言つても対処法は同じだ。殴つて、御魂を出現させて破壊する。双子座に限らず全てのバーテックスに言えることだ。

やる事は決まつてる。

士気も上々。

不安要素も皆無——と、夏凜だけは思っていた。

「……………」

それぞれが徐ろに眺めるのは、己の満開ゲージ。未だに戻らない満開後の障害。何度確認しても確証のない答えしか返さない大赦。——皆、満開ゲージを溜めることに不安と躊躇を覚えていた。

どうしても考えてしまう。

この機能しなくなった身体の一部には、満開が関係しているのではないか。大赦が…国を支える大組織が、自分達を騙している。考えたくもない予想までしてしまふ始末。

真偽はどうであれ、勇者の足を竦ませるには十分過ぎた。

「ど、どうしたのよ!? さつき、あんなにみんなでテンション上げたじゃない!! どうし…:…っ!」

声を上げた夏凜も、次第に気が付いていく。

身体の機能を失う恐怖。

それは想像を絶するものであり、一度でも体験した者は”次”を異

様に恐れる。

(っー……いや、問題ない！それなら、私が——)

敵は一体。ならば夏凜一人でも対処は可能な筈。夏凜は自分の頬を叩き、気合いを入れ直す。昔の自分なら、彼女達を情けないと罵倒していた。心の中で見下していただろう。

——だが、今の夏凜は違う。

立ち上がるのは自分ではなく、皆のため。力を誇示するのではなく、勇気を披露する。夏凜の頭に浮かぶのは、誰よりも先に咲き誇った彼の背。

あの時とはまるで違う状況。でも、夏凜は……三好夏凜だけは確信していた。

両手の刀を再度握り締め、突撃の準備をする。最後にほんの少しだけ、柄でも無いと笑いながら彼を横目に収めた。すると——

「突然だけど一発芸やりまーす！秘技！影分身の術!!」

「唯斗……アンタはやっぱり……は、はあああ!?!増えてる！唯斗が増えてるんだけど!?!」

夏凜の視界の先には三人の唯斗が居た。



新能力

《分身》

・満開後、新たに追加された唯斗の能力。姿から身体能力まで、全てが本体と同一の分身を最大で二体出現させられる。本体以外は精霊のバリアが無く、一定ダメージを受けると消えてしまう。

操ってるのは飽くまでも本体の唯斗によるマルチタスクなので、本体含め三人がそれぞれが別の敵を相手にするのは難しい。視界外からの不意打ちにも滅法弱い。

消えた後も何度でも出せるが、インターバルは存在する。

慣れなければ酔うし、才能がなければ分身の一体すらマトモに動かせない。そういう意味では、適正のいる能力でもある。

然れども、芽吹くは別の花

「は、はあああ!?!?増えてる! 唯斗が増えてるんだけど!?!」

夏凜の言葉をキツカケに、全員が唯斗の方を向く。その集まる視線の先には三人の唯斗。皆同様に黄色と白で構成された、他の勇者達とは毛色の違う現代風の装いをしており、その格好を見るのも計五回目となる。

当の本人はしてやったりと言いたげなドヤ顔を晒しており、後に他の部員達は普段の三倍はウザかったと語った。

「影・分・身☆」

それは唯斗に新たに追加された能力、『分身』だ。

自分自身を二体出現させ、本体を含めると計三人。攻撃力や殲滅力は単純計算で三倍になるのだが、何事もそう上手い話はない。

この能力を扱うにおいて、必須とも言えるのは物事を並行し同時にこなせる”マルチタスク”だ。

幾ら増えようとも、動かせなければ邪魔なだけだ。意味もなく単調な動きで突撃させるのは味方の邪魔になるだろうし、元より一対多を想定されたであろう造りの

バーテックスには無駄を通り越して悪手とも言える。

つまる話、慣れや才能が必要な能力だ。

「唯斗B! 唯斗C!! 夏凜と風先輩をジャイアントスイングしながらバーテックスに突撃だ!!」

「ラジャー!!」

「オラア!!」

「ゆ、唯斗BとCイイイ!?!」

樹海の世界に虚しくも少年の叫びは響いた。

意気揚々と夏凜と風に近付いた分身体の唯斗達は、既のところ彼女達の武器によって消滅した。

分身体には精霊のバリアは付与されておらず、一定ダメージを超えれば消滅する仕様だ。再度出現させることも可能なのだが、数十秒の

インターバルが存在する。日常においては何気ない数十秒でも、戦闘中においては生死を分けるのだ。

それを含めて、扱いが困難な能力だ。

「ちよつ、なんで味方に攻撃するんだよ!? あんたらアタオカだよ!」

「ちつ、ニセモノだったか…」

「センパイ? 何で舌打ちしてんの…?」

「風、安心なさい。残りはあと一匹よ」

「その一匹ってバーテックス君の事だよな? そうなんだよね!? お、おいニボリーナ…どうして俺に武器を向けるんだい? ちよつ、おい…風先輩! 満面の笑みで大剣振り回すのやめろおお!?」

「誰がニボリーナだ!」

この後、友奈達が止めるまで唯斗は二人の勇者から逃げ回った。本人曰く、この日ほど精霊のバリア機能に感謝した日はないだとか。

「はあ…なんか、色々と気にしてるアタシが馬鹿みたいね」

呆れて溜息をつく風。

それは敢えて雰囲気を乱した後輩へか、はたまた情けない自分自身へなのか。

風は最初の戦いから今日に至るまで、ずっと『罪悪感』を抱えていた。皆で笑つてるときも、苦しくて挫折そうになったときも、総じて風の心には癌の様に『罪悪感』が根付き自分自身を責めていた。

だが、それも受け入れて背負うと決めていた。

…:…決めていたのだが、風はまた臆した。

その誰のせいでもない『責任』を誰よりも背負い、また満開をする必要があるときは次こそ自分だけで片付けると息巻いていた。

それは罪悪感だけでなく、皆を先導して戦い抜く部長としての責務だと信じて。大赦も神樹様も関係ない。両親をも失った今、風は両腕に抱えてる全てを守りきるために自分自身すら使い潰すと誓った。

——でも、それでも。

自分自身を煽り、勝利を疑わず雰囲気を作っても尚——風は臆病だった。

情けない。後輩に発破を掛けられて初めて気付ける自分が情けない。

不安なのは皆一緒だ。身体の一部が機能しなくなり、その上で戦場に立たされているのだ。不安にならない方がおかしい。当然、それは良い意味で雰囲気を破った唯斗も同様だ。恐怖心はある。バーテックスも、不自由になった身体も、妙に疼く嫌な予感も。全てに得体の知れない恐怖が身を縛る。

——だからこそ、風は勇敢な後輩に憧れを抱いた。

「……唯斗、ありがとね」

「しつかりしろよ、部長……もう、大丈夫なんですか？」

「ええ、もう間違わないわ」

小さく、他の誰にも届かない会話。

その小声で風は断言した。もう間違わない。臆病でも、情けなくとも、醜いと思われても——犬吠埼風は一人の人間として、皆の前に立ち続ける。勇者でも部長でもなく、犬吠埼風として。

「勇者部、いくわよ!!」

風の号令に合わせて、勇者部は一斉に双子座のバーテックスへ飛び出した。

「止まって!!」

樹のワイヤーが双子座に迫る。

勇者となつて腕力が強化された状態の彼女でも、巨体のバーテックスを長時間に渡って拘束するのは不可能だ。だが、十二体も存在するバーテックスの中で唯一、小型の双子座に限ってはワイヤーによる拘束も可能となる。

唯斗がジャイアント^大キリン^特グな性能だとしたら、樹はその逆。勇者の中でも随一と言える攻撃速度は人型や小型の相手に対しては無類の強さを誇る。

淡い緑光を放つワイヤーは双子座の脚部から肩部までを簀巻きにし、転倒させる。

元より250km/hで爆走する個体。それが急に転倒したらどうなるのか、考えるまでもない。

双子座は砂埃を立てながら十数メートルほど転がった後に、極彩色の根にぶつかり停止した。

「ナイスよ、樹！——夏凜、友奈！アタシに合わせなさい!!」
身動きの取れない双子座に対し容赦ない一閃。

為す術なく斬られ、その細長い胴体を切断とは至らずとも、決して無視は出来ない傷を刻み付ける。吹き飛ぶバーテックスへ付随する影が二つ。友奈と夏凜だ。

友奈は拳を後ろへ引き、夏凜は両手の刀を真上に振り上げ——

「細切れにしてやるわ!!」

「勇者、キイイイックッ!!」

起爆する数本の小太刀と炎を纏った蹴撃。友奈は夏凜の攻撃が命中したのを眼下に感じながら、新たな精霊《火車》を携え——

一斉に解き放つ——ッ!!

他より耐久で劣る双子座。その個体が勇者達の猛攻を受けようものなら、微かに原型を留めるだけでも奇跡だ。長身細身なバーテックスは力の抜けた人形のように、袂れ斬られ尽くした身体を地に伏した。

あまりの呆気なさに疑問と不安を抱きながらも、勇者達はバーテックスを囲い仕上げに取り掛かる。

「今よ！封印の儀式をするわ!!」

どのバーテックスにも共通していること、それは御魂の存在だ。御魂は人間で例える心臓部——否、全内臓と同等のモノだ。バーテックスの唯一の弱点であり、それが破壊されなければ延々と再生を繰り返す神樹を破壊しようと立ち上がり続ける兵器的な存在。

御魂を出現させるにあたって、条件は二つだ。

バーテックスに一定以上のダメージを与える、且つそのバーテックスを複数人の勇者で囲い祝詞を唱える。なお、複数人で囲んでさえいれば祝詞を省略しても問題は無いらしい。

神樹様を崇める宗教団体が開発した勇者システム及び封印の儀式。故に祝詞自体は形式美と言うやつらしい。

友奈、風、夏凜、樹が痛々しい姿の双子座を囲み、各々の精霊を出現させた。

次第に煌めく花卉が風に吹かれてバーテックスを覆う。すると、腰部を占める球体が機械仕掛けの花卉のように開き、その瞬間、御魂が溢れ出す。

「わっ、わわっ?!?何この数〜!」

声を上げたのは友奈だけだが、その心情は皆も同様。

小さな逆四角錐型の御魂は無限を思わせるほど双子座の腰部から溢れ続け、徐々に樹海を埋めていく。そして、それを囲むように三人の唯斗。

「唯斗、やっちゃいなさい!!」

「見よ、某ピンクの悪魔直伝! ジャイアントスイングウ!!」

風の指示を聞き、唯斗は分身と共にピコピコハンマーを横に構え、横に回転を始める。唯斗のピコピコハンマーは見た目こそ巫山戯ているものの、その威力は同じ勇者の中でも頭一つ飛び抜けている。直に当たらずとも、脆い双子座の御魂程度であれば風圧で破壊することは容易い。

三方向からの暴力は次第に竜巻状の風を巻き起こし、増え続ける御魂を徐々に数を減らしていく。

御魂が樹海を侵食するスピードと、唯斗が御魂を破壊し尽くすスピード。この二つを比べるならば断然、後者が勝る——のだが。

「「うえっ…酔った…っ!」」

「唯斗くん!」

「このアホ唯斗おー!!」

残念ながら、唯斗の三半規管が先に限界を迎えた。

ピコピコハンマーによる攻撃が止み、また数を増やそうとする御魂。誰もが焦り、各々の武器を振り上げたところで——破裂音のような銃声が響いた。

「つーと、東郷さん!!」

銃声の正体は東郷美森の持つ散弾銃だった。

「——目標、被弾及び消滅を確認」

「さすが東郷ね。どっかの、自分の技でダメージを受けてる阿呆とは大違いよ」

「おいコラ、夏凜さん。俺を蔑んだ目で見るんじゃない。愛情の裏返しとか?コノヤロウ!俺のピコさんが火イ吹くぞオ!!」

「上等よ!この阿呆勇者!!」

「ふ、二人とも落ち着いてー!危ないから武器振り回さないで!」

小競り合いを始める唯斗と夏凜。その二人を止めようとする友奈も含めて、全員が苦笑いを浮かべながら見守っていた。

「あはは…私はトドメを刺しただけだよ?みんながバーテックスにダメージを与えて、唯斗君が御魂を極限まで減らしてくれなければ、私などの武器でも範囲が足りなくて決定打は出せなかったもの」

「…なんだろう?東郷がマトモな事を言ってるって違和感がヤバいわね」

「確かに…!」

「風先輩に樹ちゃん!」

真面目な発言をしたのに引かれるというのは、誰が想像出来るだろうか。少なくとも、東郷が築いてきた変人としての実績と固定概念は早々に崩れ去るものではなかった。

「——ともあれ、これで終わりね」

樹海から現世に戻る最中、風は感慨深く呟いた。

誰の耳にも届いて、然れども誰もが感傷に浸り言葉を返さない。使命の終わりは安心と嬉しさに溢れていて、でも心の何処かで『勇者』では無くなる事への惜しさもある。

全て諸々に含めながら、光の波は樹海化した世界を飲み込んだ。

白く光る花卉と光の奔流に飲まれ、思わず目を閉じ——目を開いた瞬間には、見慣れた讃州中学の屋上。

「さーで、これで面倒臭いお役目も終わり！パーツと祝勝会とかしない？」

〈賛成!!〉

「…しよ、しようがないから、私も付き合っただけあげるわ。友奈、あんた達も…友奈？…友奈が、居ない…？」

「…唯斗と東郷も居ないじゃない!？」

馴染み深い讃州中学の屋上——その場には、三好夏凜と犬吠埼姉妹の三人しかいなかった。

「……(ん)ど(ん)？」

寂れた雰囲気の場合に、唯斗の声が響いた。

「…屋上では、ないよね？」

「っ！あれは…大橋？」

——夕日で紅に染る景色。

それは見慣れた中学校の屋上とは明らかに異なる。視界の先には無惨に拉げ、歪み、寂れて植物の蔦が巻き付いた瀬戸大橋。それまるで、過去の遺物を思わせる。誰も存在しない、夕日だけに焼かれた世界はどこか廃退した世界を連想させた。

唯一の共通点は、お社が在ることだけだった。

「大橋ってことは、けっこう遠い所まで来たんだね」

「うげっ…帰るのメンドさ。東郷ママ、勇者に変身して帰らない？その方が楽だし」

「ダメです。一般人に見つかっちゃうわ」

「デスヨネー」

「東郷さん、本当にお母さんみたい」

「盗聴盗撮上等系お母さんとか、新ジャンル過ぎて誰も近寄らないだ

ろ。せめて飾りだけの大和撫子を内面にまで染みさせてから出直してこい」

「すつごく不本意なんだけど…」

空気を読んでいないと言うべきだろうか。少なくとも、この現状に對し樂觀視は出来ない。

勇者アプリの不具合だけだったら、まだ問題は少ない方だ。最も警戒すべきは、何処かの誰かが意図して呼び出した可能性。

例え勇者アプリの不具合としたら、それが何故、唯斗や東郷、友奈だけなのか問題視される。

全員が瀬戸大橋周辺に帰還、若しくは誰か一人だけがこの場に居るのだとしたら、本当に『不具合』を疑うことになるのだが、実際はそうじゃない。

「東郷、どう思う？」

「…意図的に呼び出された可能性が高いと思う。若しくは…最初から、私達だけを戦闘後にこの場に転移するようにシステムに組み込まれていたとか。偶然とか、アプリの座標が三人分だけ同時にバグつてるとかで済ませるには都合が良すぎると思う」

「えっ、えっ？…どういうこと…？」

「つまりだ、友奈。何で俺達はこの場にいいのかって話だよ。なんで俺達だけ、この人気の無い場所に帰還したのか」

「っ！東郷さんが言ってた通り、呼び出されたから？」

「断言は出来ないわ。何しろ、異常事態なんだから…」

不自然極まりない。

寂れた風景とは裏腹に、お社の周辺は整備されている。無骨な階段に、親切な手摺まで造られていた。何者かが普段から利用していることだけは明らかだ。

だか、それなのに電波が届いていない。

まるで、開放的に隔離された空間だ。

勿論、その造りを見ただけで意図や用途まで想像出来る程の秀た頭脳は誰も持ち合わせてはいない。言葉にし難い神聖さにも似た寂しい雰囲気だけしか感じられない。

「答えは簡単だよ？」

「アタシ達が呼び出したからだよ。……まあ、上手くいくかは半信半疑だったけど」

不意に、お社の後ろから二つの声が発せられた。

「っ！誰かいる……！」

友奈は駆け足で社の裏に回った。

そこには二人の少女がいた。

ベッドに深く横たわり、片目に眼帯をする燦んだ金髪の少女。その傍らには、同じく眼帯をし、片腕にアームホルダーで吊るす鈍色の髪の毛の少女が座っている。

「ようやく、呼び出しに成功したよ」

「唯斗も須美も、久しぶりだな……てか、須美のソレ……デカくなりすぎじゃない？」

歓喜を洩らす少女達。友奈は首を傾げ、次の瞬間には彼女達の有様に口を覆う。それは東郷や唯斗も同様で、咄嗟に出す言葉が浮かばなかった。

(……あれ？……なんだ、この気持ち……)

東郷が警戒し眉を顰める中、唯斗は形容し難い懐かしさを覚えていた。

後悔する者と後悔しない者

——苦しい。

それは過去に囚われ、未来を幻視する少女の胸の内。

膨張する感情を抑えるのは苦しく、辛い。然れども、それはきつと好ましいものなのだ。

聡い少女は己の胸の内を理解し、想い馳せる。輝いていた”時”は幾度となく夢に出る。楽しかった日々は刹那の如く過ぎ去ったが、不思議と後悔は無かった。

——苦しい、でも。

それは未来に期待し、過去を越えた少女の勘。

胸で暴れる”苦痛”はとても心地が良い。ずっとこの気持ちに浸って、止まってしまった時間の中でも笑っていられる。

初めての気持ち。逢えない日々が続いても、”彼”の活躍は少女の元に届く。故に、笑える。微笑んで待っていられる。

自分の知る”彼”と自分に知らされた”彼”の違いに、聡い少女はなんとなく察しがついた。また勘違いされているのかな、と少年の顔を思い浮かべて密かに微笑んだ。

——苦しい、でも…やっぱり。

きつと、再会は近い。

何も覚えていない彼と、過去に囚われた彼女。互いに初代勇者の血を宿しながら、共に戦った日々を思い出し、まるで運命の様に再び再会する。

メルヘンチックにデイス^運テイニ^命ーと謳う事はしない。その再会は、彼にとっては自分とは別の意味の『苦痛』を植え付けることになる。

でも、それでも。やはり嬉しい。成長した彼を見て、肌で感じて、止まってしまった青春の続きをしたい。

—— 苦しい、でも…やっぱり…

「好きだなあ…」

暗い部屋で少女は、はにかみ頬を緩める。

先程バーテックスを倒し終えた唯斗達は、光に飲まれ樹海から現世へと帰還した。

既に慣れてしまった非日常。

光が晴れた先には神樹様を祀る祠。讃州中学の屋上に設置されている其れの前に、六人の勇者は五体満足で転移される——筈だった。

目の前には祠。だがしかし、その場は見慣れぬ景色だ。歪み寂れた大橋は眼下に近しく、酷く寂しい雰囲気は一瞬で異常を知らせた。

「ようやく、呼び出しに成功したよ〜」

「唯斗も須美も、久しぶりだな…：…てか、須美のソレ…：デカくなりすぎじゃない？」

最もたる異常といえば、目の前の二人組だ。

必然的に唯斗と友奈、東郷はこの場に呼び出された。それは思考するまでもなく、目の前の人物達が口にした言葉からも明らかだった。

両者ともに、包帯や眼帯等で全身を覆われている。まさに満身創痍、まるで事故にでも遭った直後のような有様だ。誰もが顔を歪め、悲痛に絶句した。

そして——唯斗は懐かしさを感じていた。頬を冷や汗が伝い、心臓は鈍く痛む。そして、唯斗はその動悸の意味を理解していた。

(な、なんで…！)

震えていた。

頭に浮かぶのは、あの日の記憶。

(なんで！なんでストーカー女が目の前に居るんだよ!?)

——それはいつかの日記にも書いた、暫定ストーカーとの対面。初対面な筈の唯斗に親しげに話し掛けて、尚且つまるで唯斗を昔から知っているかのような口振りで過去を口にした、あの少女に相違ない。

鈍色の髪に痛々しい眼帯やアームホルダー。

あまりの存在感の無さと無害だった故に、唯斗は忘れかけていた。きつと半ストーカー気質の東郷美森の影に霞んで、存在を忘れかけていたのだ。

——本当に恐れるべきは、彼女が大赦の組み立てた『勇者システム』に介入してきたことだ。

神の力と謳うも、それを形にして人間に纏わせたのは他でもない大赦の技術力。それが並大抵のモノじゃないこと程度、中学生にも解る。

(くっ…東郷を生贄に逃げるか?…それとも勇者に変身して突っ切るか…いや、勇者システムに介入してくるヤベー奴のことだ。捕まりそうで怖い!)

大赦の技術にまで干渉して誘拐するだなんて、なんて執念だ。唯斗は身震いを必死に抑え、冷静を装う。だが取り繕った態度とは裏腹に、思わず、手が勝手に110番をしてしまう。無論この場合は電波が届いていない為、無意味だった。

まずはせめて、味方と情報を共用するのが先だ。

比較的安全な友奈に近寄り、深々と深呼吸をする。そして耳元に小声で話しかけた。

「っ……………ふう。…友奈、落ち着いて聞け。あの、ベッドの横に腰掛けてるヤツが居るだろ?…アイツは、東郷だ」

「えっ?と、東郷さん…?」

「あつ、間違えた。アイツはストーカーだ…って、殆ど同義か。類似語だな」

「唯斗くん…そろそろ東郷さんに怒られるよ？」

なんと残念なことだろうか。友奈は『また冗談を言ってる』と心の中で微笑んだ。

一方で、致命的な勘違いを晒す唯斗とは対照的に、東郷美森は正体不明な目の前の人物達を警戒していた。

「…貴女達は…ッ」

東郷は問う。

現状に対して、ただ一つだけ解るのはこの状況が必然的だったことだけ。

それがどれだけの一大事か、東郷とて測れるものではない。

その意図は分からず、決して知り得ない。

「わっしー…：ううん、今は東郷さんだね。さつきも言ったけどね、みんなをここに呼んだのは私だよ」

「っー」

おどけた様に話す少女。

「あつ、なんでだろーって考えてるでしょ？うん、うん。やっぱり不気味だよ、怖いよね？——夕暮れ、ひとけ人気のない場所に呼び出され、待っていたのはミステリアスな雰囲気醸し出す少女…：あつ、告白じゃないよ？ガツカリさせてゴメンね？」

「…園子、アタシが言うのも変だけどさあ…：ちよつとだけ空気読もうぜ？こんな団体様ご指名の告白劇なんて、どの時代にも流行らないだろ」

「えー、インパクトがあつてイイと思うんだけどなあ」

「愛の告白にインパクトなんて求めるなよ…」

くすんだブロンドヘアの少女に対して、鈍色の髪の少女は呆れを含むツツコミを入れた。

「——さて、気を取り直して…待ってたよ、東郷美森さん、結城友奈さん、郡唯斗くん。ずっと、ずーっと待ってたんだよ？」

「まあ…なんて言えばいいんだろ？別に興味本位とかで呼び出したんじゃないくてさ、伝えなくちゃいけないことがあったからなんだよ」

先程とは一転、お巫山戯を許さない雰囲気が唯斗達の肌をピリつかせる。薄暗く、紅と紺の入り交じった空は酷く不気味で、これから紡がれる言葉の羅列が愉快な笑談ではないことを嫌に悟らせる。

東郷も唯斗も、意味は違えど目の前の二人を酷く警戒している。場合によつては勇者システムを起動することも厭わないし、それだけベツトに横たわる彼女と傍らに腰掛ける鈍色の彼女が異様で異常だった。

「伝えなくちゃいけないこと…?」

「うん」

オウム返しの様な友奈の呟きに、少女の片割れは短く返した。

「――まずは私達の正体なんだけどね…」

「アタシ達は勇者だよ」

言葉を貯めるような物言いの少女とは違い、もう一人の少女は淡々と、事実のみを語った。

――勇者。

ここ数ヶ月に渡つて、嫌に聞き馴染んだ言葉だ。

それは現状の己自身を最も表せる単語であり、既に終えた役目。――神敵を穿つ役目は終わった筈なのだ。

遠い未来、仲間同士で『あんな事もあつたな』と思ひ出に浸りながら笑い話に出来る様な、近すぎる過去の記録。そうだ、そうに違いないと執拗に自分自身を騙すように胸中で呟く。
嫌な予感がした。

冷たい鼓動が全員の胸を占める。

第六感、虫の知らせ、直感。――なんとも言い様はある。ただ一つだけ言えるのは、この先の言葉を聞いたら後戻りは出来ないということのみ。

現状を楽観視していた友奈も、見当違いな事で悩む唯斗も、異常なまでに彼女達を警戒する東郷も。今は、今だけは――静かに少女の言葉の続きを待った。

「…正確には、先代の勇者。君たちがバーテックスと戦う前は、私達が

バーテックスと戦っていたんだよ。…まあ、私達の時は追い返すのがやっただったんだけどね〜」

「その点、今の勇者は凄いやな〜。あのデカブツをボッコボコに出来るんだぜ？園子も言ってたけどさ、アタシ達の時はめっちゃくちや苦勞したんからな」

「っ……じゃあ、その傷は…」

「ううん。違うよ、郡唯斗くん。この傷は……いや、傷ならまだ良かったのかもね。ちゃんと治る可能性だった」

少女は悲しそうに、片方しか見えないであろう目で包帯に巻かれた部位を眺めた。それが腕か、脚か、胴なのか、巻かれた部分が多過ぎるせいで判断は出来ない。或いはその全てだったのかもしれない。

そして不意に、語り掛けてくる。

「——ねえ、郡唯斗くん。一つだけ聞いてもいいかな？」

「…何…ですか？」

「敬語だなんて、硬っ苦しいなあ。お前らしくないぞ？」

「っ……また、かよ…」

何度も、鈍色の髪彼女は親しげに語り掛けてくる。まるで昔からの親友のように、遠慮もなく土足でパーソナルスペースに踏み入ってくる。

何よりも奇怪に感じるのは、何故か胸が暖かくなる謎の感覚。懐柔されているような、もしくは逆に懐柔してしまっているような感覚だ。

得体の知れない恐怖心はあれど、嫌悪に近い感情は浮かばないのだ。

「郡唯斗くん。——私達とは、初めましてかな？」

「…？……多分、初対面だと思うけど。…そっちの座ってるヤツとは数ヶ月前に会ったけど、それっきりだよ」

「……そっか。そうだよね…ごめんね、変なこと聞いて」

「まあ、そうだよな〜。そんなに都合のいい話はないよな。唯斗はアタシ達とは違うし、戻ってるかな〜って思ってたんだけど…まあ！今後に乞うご期待ってやつですね…」

「…唯斗くん、本当に初対面なのかな？この人たち、凄く悲しそうな顔

してるよ…?」

暗い雰囲気には堪らず、友奈は再び唯斗に問い掛けるが、帰ってくる答えは同じだ。何度見ても見覚えはないし、そもそもの話、名前すら解らない。

何かに期待されていたのだろうと察しは付くが、それだけだ。その先については皆目見当もつかない。

「話を戻すよ?」

「アタシ達が先代勇者だったって所までな」

気を取り直し、少女達は言葉を続ける。

「アタシ達は過去に勇者だったんだけど、どうしてこうなったと思う? 満足に日常を過ごせなくなるくらい、ボロボロに…ね」

「っ…ば、バーテックスにやられたんですか…?」

「違うよ、東郷美森さん。間接的にはバーテックスのせいでもあるんだけどね、根源的な原因はむしろ真逆かな」

——”逆”

少女はバーテックスとは”逆”の何かに原因があると語る。バーテックスの——神敵に位置する個体とは”逆”の存在とは何か。

敵の”逆”とは…:

「っ!?!」

気付いてしまった。

全員が最悪な想像をしてしまった。

そんなハズはないと否定したい。有り得ないと笑い飛ばしたい。——だがしかし、その証拠は目の前の彼女達と自分自身。何故、身体の一部が機能しなくなっただけ? —

その答えは——

「アタシ達だけじゃないよ。今の勇者達にだって、言えることさ。だって、もう捧げてしまったんだからな」

「うそ…嘘、だよね…?」

友奈は返ってくる答えを知りながら、懇願する様に、震える声で拙く返す。

信仰する神樹様が、勇者を支える大赦が、自分達を騙して戦わせていた。そんなこと、友奈が瞬時に受け止めることなど到底不可能だった。

「私達がこうなったのは……『満開』をし続けて、『満開』に隠された機能——『散華』を繰り返したからなんだよ。つまりね、満開の代償を受け続けたってこと」

少女は続けて淡々と語る。

——いつの世も、神々に見初められ、供物として捧げられたのは無垢な少女だった。

穢れなき身だからこそ、大いなる力を宿せる。その代償として、『勇者』は『神樹様』に身体の一部を供物として捧げる。

それが『勇者システム』であり、『満開』と『散華』。身を神に捧げる程、『勇者』は『人』ではなく『神』に近付き、力を宿す器もより強力に、より頑丈になる。現に、『満開』を遂げた『勇者』には新たな精霊が宿り、追加の武装や能力が備わる。

神の力は矮小なる人間には過ぎた力だ。故に、神の力を身に宿すには、『代償』が必要不可欠。

友奈は食の楽しみを永遠に失い、樹は大好きな歌を口ずさめなくなり、風は妹を見守る目を奪われ、唯斗は片腕の感覚を喪失した。

そして、それが戻ることは永遠にない。

誰のせいでもない。

勇者が『満開』しなければ、仮初の平和は容易く火の海に沈む。覚悟も、決意も、時間の無駄なのだ。まるで兵器の様に、身を削り敵を殺す。

初めから、選択肢などなかったのだ。

それは果たして、本当に『勇者』なのだろうか。物語で王道を駆け抜ける、正義の味方だったのだろうか。

唯斗には、その役目は『破壊兵器』と同等に思えた。

「それでも私はね、後悔はしてないんだよ」

「アタシは後悔だらけだけどな」

「ミノさん…空気読もうよ」

「おっと、これはとんだビックブローメンだったか？」

「…少なくとも、私は大事な人達を死なせずに今に至ってるなら、それ以上は贅沢だと思う。勿論、アレをやりたかったな…ってのは沢山あるよ？でも、でもね…守りたいものは守れた」

「っ！」

徐々に暗くなる日差しに照らされながら、一瞬だけ、少女の目は鈍く光る。心做しか、唯斗は少女と目が合った気がした。

返す言葉を無くす唯斗達を見て、鈍色の髪の少女は苦笑う。

「誤解しないで欲しいけど、多分…大赦も悪意を持って『散華』を隠してる訳じゃないんだよ。そりゃあ、アタシは最初に言ってる欲しかった。言ってくれば、前もって覚悟は出来たし、後になって絶望もしなかった…でもさ、きつと…最初から失うって分かってたら、アタシは身がすくんで最初の一步を踏み出せなかった。アタシは、『満開』なんて出来なかった」

「ミノさんならするよ、絶対に」

「園子はアタシを買い被りすぎだつての」

きつと、友奈や夏凜ならば同じ答えに辿り着くのだろう。風や東郷、樹ならばその責務を一人で請け負うのだろう。

彼女達は『勇者』なのだ。システムや神の恩恵が無くとも、『勇ましい者』なんだ。

——だか唯斗は、何一つ納得出来ない。

ただでさえ命を賭けていたのに、まだ隠し事をされていた。それを失ってから知らされても、覚悟も救いも塵ほどの価値も見いだせない。

単純に怖い、という話ではない。

世界の危機とは即ち、自分自身のピンチでもある。故に、前もって『満開』の代償を知らされていても、誰だつて神の力を受け入れ、一身に受ける。何故なら、それしか選択肢がないのだから。

酷く、腹が立った。

大事なことを隠していた大赦にも、それを受け入れて前に進める友奈達にも。そして何より、一瞬でも臆してしまった自分自身が一番情

けなくて、腹が立った。

「お名前」

「…?」

「みんなのお名前、聞いてもいいかな?」

ベッドに横たわる少女は一体何を考えているのか、唯斗には想像もつかない。

ただ一つだけ解るのは、彼女もまた自分とは違い勇氣ある者なのだということのみ。

一重に、嫉妬していたと言ってもいい。

どれだけ高名な血筋でも、どれだけ功績を積んでも、唯斗は正義の味方らしくは成れない。自己犠牲だなんて愚かにしか思えない。故に唯斗は、本当の『勇者』が羨ましかった。

「…さつき、自分で俺達の名前言ったたろ」

「形式美だよ、形式美。やっと会えたのに、そっちはアタシ達の名前も分からないだなんて悲しいだろ?」

「…讚州中学二年、結城友奈です」

「東郷美森です…」

「郡唯斗」

「友奈ちゃんに、美森ちゃん。唯斗くん…うん、私は乃木園子。よろしくね」

再確認をするように皆の名前を呟くと、少女——乃木園子と名乗る彼女は小さく笑みを浮かべた。

「アタシは三ノ輪銀…んー、改めて自己紹介するってのも、変な話だよな。ムズムズするよ」

乃木園子と三ノ輪銀。

同じ年でありながら、先代の勇者。『満開』を繰り返し、様々な精霊を宿した彼女達は他の勇者を圧倒する力を得ている。

望んでいなくとも、生きるには『満開』——力が必要だった。単純な話だ。死ぬか、失うかを選べと言われていたのだ。万人は震えながら後者を選ぶ中、彼女達は希望に縋って後者を選択した。

まだ幼い彼女達は紛れもない『勇者』だった。

「ん……？」

「ここで唯斗は頭を傾げた。

(……乃木園子？何処かで聞いたような気が……)

三ノ輪銀という名は初めて聞くが、乃木園子に関してはつい最近、何処かで聞いた気がする。

「ちなみに、私は郡唯斗くんの婚約者候補だよ」

「……………What？」

夜の帳に飲まれ始める場に、爆弾が落とされた。

走れトゴス

東郷は激怒した。

必ず、かの唐変木男な彼を問い詰めなければいけぬと決意した。

「ユイヌンティウス君、おすわり」

「トーゴー?」

東郷には彼の交友関係は分からぬ。東郷は、単なるクラスメイトである。共に部活に励み、時にはうどんを食べに行く程度の関係だ。

けれども、彼の恋愛事情については人一番に敏感であった。

「ユイヌンティウス君、おすわり」

「トーゴーさま、NPC化が進んでおられますが…?あと人をセリヌンティウスみたいに呼ばないでくれる?立ち位置的には暴君ディオニスだと思っんですけど…」

「ユイヌンティウス君、おすわり」

「ひえ…:ゆ、ゆーな!ヘルプミイイ!!東郷が怖い!なんか目が据わってやがるんだけど!?!竹馬の友として!ユウナンティウスとして東郷改めてトゴスを止める!!」

「東郷さんが時速1300kmで十里を走り抜ける超人になっちゃうよ!?!」

トゴス、ではなくメロスは太陽の沈む十倍の速度で走ったとされる。つまり、これは新幹線の44倍の速度であり、100m走だと時速0.02秒になる。

笛を吹いて、羊と遊んで暮らしていただけのメロスはきつと、神族かモノノ怪の類だったのだろう。

その証拠として、走り抜けた後は何故か全裸になっている。ソニツクブームを発生させながら走っているのだから、普通の服なら破れて当然だ。

作品名は『走れトゴス』で決まりだね、と傍らで眺める乃木園子は呟いた。これには太○治もブチ切れ案件だ。

「走れメロスの一番最後に『勇者は赤面した』って表現されてるし、案

外、須美…じやなくて、美森はメロスなのかもなあ」

「美森ちゃん、走る、全裸…閃いた!!」

「忘れちまえ、暴君ソヨオニスコめ」

そもそも、東郷の暴走が始まった原因は諸悪の根源、暴君ソヨオニスコこと乃木園子のせいだった。

——唯斗の婚約者候補。

園子はハッキリと、煽るように言葉にした。

言うまでもなく、場は静まり返った。ニコニコと笑みを浮かべる者、呆れて溜息をつく者、困惑し動揺する者、言葉の意味を再確認しようと呟く者——そして、暴走スイッチを唯斗印のピコピコハンマーで碎かれた東郷美森という名の哀しきバケモノ。

「説明、してくれるよね?」

「よし帰ろう!今すぐ帰ろう!カラスが鳴くから帰ろう!!」

嫌な予感をひしひしと感じた唯斗は、瞬時に勇者システムを起動し、巨大なピコピコハンマーを片手に後方へと駆け出すが——

「ぐえっ!」

「何処に行くのかな?」

「げえっ、ムスカ大佐!」

同時に東郷も勇者システムを起動しており、普段の戦闘では脚代わりに行っている触腕で縛られた。

「と、東郷…離せ!HA☆NA☆SE!!こんなことに勇者システムを使って恥ずかしくないのかよ!!恥を知れ!」

「ミノさん、ミノさん。あれって、ブーメランって言うんだよね?」「いやー…アレは流石に、アタシだって逃げるからな。見ろよ、美森の表情。微笑んでいるのに、目が据わってるよ」

ニッコリと、赤子をあやすような笑みだった。きつと、目の奥に爛々と妖しく光るナニカは見間違いだっただろうと、唯斗は現実逃避をした。

「トーゴー、話そう。そして離そう。知ってるか?言葉を操って交渉できるのは人間の特権なんだぜ?」

「最初に逃げようとしたのは唯斗くんだったけどね」

「友奈シヤラップ。剥ぐぞ」

「何を!？」

ユイト は ユウナ を おどした！

心做しか 触腕 の 力が 強くなった！

「あれれー？今ってさ、シリアスなシーンだったよね？衝撃の真実を知って、動揺慟哭な場面だよな？」

「園子さんや、そのシーンを台無しにした自覚をお持ちになれよ。九割はお前のせいだからな？」

「恋する乙女はいつだって必死なんよねー」

ラブロマンス

「恋愛劇最上位のロミジュリだって、時と場は選ぶだろ」

「悲劇のヒロインにはなりたくないから、その軌跡は辿りたくないんだよね〜」

「っ」達者なお口な事で…」

その後も唯斗は分からない、知らなかった、トトロいたもん、と怒涛の言い訳をした。

その全てを聞き入れて貰えなかったのは、言うまでもない。

夕日も沈み終わる手前、友奈や銀の説得もあり、何とか東郷の暴走も落ち着いてきた。未だに唯斗は逃げられないようにと触腕で縛られているが、尊き犠牲ということにされていた。

「…帰ったら、ちゃんと説明してね？」

「あー、うん。気が向いたらな」

「なんて軽薄な言葉なんだ…」

「三ノ輪さん煩い」

「銀でいいよ」

実のところ、結婚だの婚約だのと言われても実感なんてない。この男、いい歳まで独身だったら夏凜に貰ってもらうつもりなのだ。それ以外については大して考えてもいないし、寝て起きれば忘れてる楽観気質だ。

なるようになればいい、事勿れ主義なのだ。

「……あ、あの〜」

「どうしたの、友奈ちゃん？」

「私達、どうやって帰ればいいのか？」

当然の疑問だった。

電車で帰ろうにも、近場の駅など知らない。かと言って親に頼んで来てもらおうかとしても、そもそも電波が通じない。歩きで帰れる距離でないのは誰もが解っている。

薄暗い風景に不安が煽られる。

いざとなったら勇者に変身して、上がった身体能力にモノを言わせて帰ることも出来るのだが、飽くまでも最終手段だ。

「——安心して、ちゃんとお家まで送り届けるから。ね、そうだよね？」

園子は唯斗達に向かって——否、その背後に向かって命令する様に問い掛けた。

園子と銀の視線は唯斗達より後方。つられて振り向くと——

「フー！」

純白の平安装束に、神樹をイメージしたロゴの付いた仮面。時代のズレた雰囲気の格好をする集団がそこには居た。

「彼女達を傷付けたら許さないよ？」

園子の言葉に、平安装束の集団は一斉に地に膝を着く。その姿は王と配下、もしくは神と信者の様だ。少女の声は熱を感じさせないほど冷たく、先程まで話していた相手とは別人を思わせる。

「大赦の人達だよ」

疑問を抱く中、銀は短く説明した。

「私達ね、祀られちゃってるんだ。…変な話だよね、これでも私とミノさん、二年前までは小学生だったんだよ？それが…どうしてだろう。本当に…ね」

「満開をして、沢山捧げたからな…」

少女は、確かに『後悔はない』と口にしていた。

だがそれは、一種の強がりだったのかもしれない。後悔は確かに無

いのかもしれないが、この現状には決して満足なんてしていない。
目の前の少女達も、唯斗達も、『勇者』に関わらなければ、もつと幸
せな未来があったのかもしれない。自分がやらなければいけない、と
いう使命感は少年少女には重すぎた。

「さあ、早く帰った方がいいよ。ご両親が心配しちゃうから」
少女達の悲しそうな表情は、簡単に頭から離れなかった。

大赦の用意した車に案内され、乗り込む最中。

唯斗は足を止め、一瞬だけ後ろを振り返り、改めて友奈達を向く。
思い浮かぶのは気がかり。まだ、やり残したことがあった。

「——友奈、東郷。先に帰ってて。ちよつと用事が出来たから」
「用事？えつと、手伝う？」

「なっ…人のお手洗を手伝うと…!?ド変態め!!」

「東郷さん、先に帰ろっか！」

「そうだね」

「友奈さんに東郷さん？なんか冷たくないませんか…？…大赦の人も、
いいですよね？」

「——御心のままに」

「っ…：…アンタかよ」

その声は、とある煮干し好きの兄の声だった。仮面の裏で見透かし
た様に笑みを浮かべている様が、容易に想像できた。

駆けて戻ると、まだ二人はその場に居た。

周りには平安装束の男達が撤収支度をしていたが、此方を一瞥する
と、作業を中断して素早く退却した。

「乃木さん、三ノ輪さん」

「あれ、どうしたの、唯斗くん？逢い引き？」

「ありやりや。アタシはおじやま虫だったか？」

「——俺と東郷って、先代の勇者だった？」

「っ—」

二人の表情が、答えを物語っていた。

ヒント——と言うよりも、答えは散りばめられていた。妙に親しげな態度や、銀が東郷美森を「須美」と呼称したこと。まるで記憶の有無を探るような問いや、最初から園子と銀は此方に気を許し過ぎている。

恐らく、東郷も勘づいている。

満開の代償——それは東郷美森の脚や、唯斗の記憶にも関係しているのではないか。推理とも呼べない、幼稚で安直な考えだ。

だが辻褄はあつてしまう。

「…正解だよ。凄いね」

「まあ、別に最初から隠すつもりは無かったんだけどな。特段、この場で言うべきことでは無かっただけで」

「やっぱり…」

少しだけ、銀をストーカーだと勘違いしていたことを恥ずかしくなった。本当に以前からの知り合いだったのであれば、あの態度や言葉も領ける。

「えっと…ちなみに、俺って二人のことなんて呼んでた？」

「アタシはそのまんま銀って呼ばれてたな。あとは、たまに相棒っても呼ばれてたよ」

「私は園子か雌豚だったなく」

「銀に園子………おい、ちよつと待て。なんか変な言葉が聞こえたのは気の所為だよな？」

「唯斗くん——ううん、ゆーちゃんは私の大事なモノも奪ったよねー。あつ、もちろん”心”っていうオチじゃないよ？」

「あー、そんなこともあつたな。流石にアレはアタシも引いたな……鬼畜」

「ナニやらかしたんだよ、過去の俺……！」

友を雌豚と呼び、そのうえ大事なモノを奪って鬼畜と呼ばれる始末。いつそのこと、人違いだったら有難いのだが、残念ながら違うらしい。

頭が痛くなった。

「……確認だけど…東郷の脚、俺の記憶の欠如って過去に『満開』したってことだよな？」

同じ部活に二人も記憶喪失がいて、その時期は大体同じ。東郷や他の部員達には唯斗の記憶喪失については話していないが、明らかに不自然だ。

「うーん、半分だけ正解かな」

「…は？」

『満開』の後遺症があるのは、わっしーだけ。あつ、わっしーつてのは美森ちゃんの事だよ？」

園子が唯斗に質問した時に、言っただろ？唯斗はアタシ達と違うつて。別に唯斗が男だからイレギュラーだとか、そんな話じゃないんだよ」

「えっ、なに？勘違い…？やだ…恥ずかしいんですけど…」

自信満々に言ったことが、全く的外れだった。多大なる羞恥心が唯斗に襲いかかった。

「ゆーちゃんは、最初から『満開』なんてしてないよ。逆行性健忘って分かるかな？頭部に外傷を受けたり、脳に大きな衝撃を受けたりした時に発症するやつ」

「所謂、記憶喪失だな。唯斗の場合はそっち」

「……でも、精霊のバリアがあるのに怪我なんてするのか？」

勇者には『精霊』の展開するバリアがある。それは並大抵の攻撃では傷付かないのは身をもって実証済みだ。

「——なかったよ？」

「えっ？」

「精霊システムとか、バリアとか。私達の時はなかったよ？だからあの頃は生傷が絶えなかったんだよね…」

以前、春信が勇者システムについて『精霊のバリアがあるから、治癒の速さは以前よりも格段に落ちた』と言っていたのを思い出した。確かに、逆説的に考えれば昔は精霊システムがなかったとも取れる。

唯斗はあまり考えずに聞いていたが、春信は所々に勇者に関する情

報を含んだ話をしていたらしい。

「唯斗の腹に、でっかい傷跡あるだろ？腹から背中まで貫通してるやつ」

「っ……もしかして、バーテックスの攻撃で……？」

唯斗が水泳の授業を見学していたり、合宿に行った際に水着にもならなかったのはコレが原因でもある。勿論、普通に泳げないということもあるが。

「——ごめん！」

「な、なんで謝るんだよ？」

「その傷、アタシのせいなんだよ。……アタシが油断して、バーテックスの攻撃に気付かなかったから、唯斗がアタシを庇って……」

「その結果、生死の境を彷徨って……」

「最後は記憶喪失か。……なんだろう、自分のことなのに実感湧かないな」

「……ミノさんだけのせいじゃないよ。むしろ、盾になるのは私の役目だったのに……」

懺悔でもするように頭を下げる二人。

不思議と怒りはなかった。実感が湧かないというのもあるが、『勇者』に相応しくないと感じていた自分でも、何かを護れていたと言うのが嬉しい。

唯斗に自己犠牲心はない。だから、きつと。唯斗は自己犠牲ではなく彼女を反射的に護った。

「……ありがとな」

「……なんで、唯斗が礼を言うんだよ」

「なんでだろうな？……本当になんとなく、言いたくなっただけなんだよ」

唯斗は小さく笑った。

「ゆーちゃんが笑ってるところ、久し振りだな」

本当に分からない。礼の意味も、この気持ちも。ただ、唯斗自身も素直に笑ったのは久しぶりな気がした。

弱い意志に強い決意

—— 拝啓、風先輩へ

まだまだ暑い日は続きますが、心做しか夜は冷える日が増えていきます。ちょうど夏と秋の間くらいなのでしょうか？風先輩ともあれば体調を崩すこともなく、健康的な生活をしていることでしょう。

まだ比較的過ごしやすい日々ではありますが、風先輩はいかがお過ごしでしょうか。俺は、相変わらずイカの姿フライとエナジードリンクで元気に生活しています。

今朝、学校に登校する際に近所の塀の間からススキが飛びでていて、小さい頃、よく登下校の際に振り回していた事を恥ずかしながら、思い出しました。

ここからが本題なのですが、本日の放課後、時間を頂いても宜しいでしょうか。とても大事な、他の人には聞いて欲しくないお話があります。

もし用事が重なる様であれば、是非其方を優先して下さい。ただその場合、手間を取らせるようで申し訳ないのですが、電話かメッセージ、或いは人伝でも連絡を頂けると俺も助かります。

最後に、俺達の将来に関わる大切な話なので、何卒、心の準備をして事に望んで欲しいと願います。

それでは、校舎裏でお待ちしております。

敬具、唯斗くんより——

「さて、唯斗。今のアタシの気持ちをご正確に述べよ」

「何で国語のテスト風の問いを……？……お腹空いた？」

「じゃかしいわボケ！」

「理不尽!？」

頭に拳骨を落とされながら、唯斗は理不尽を嘆いた。何故、この先輩はほんのりと頬を染めながら怒りを顔にしているのか。

隣では友奈と東郷が呆れた様な表情で佇んでいる。これはシンデレラストーリーだったのだろうか、悲しみに明け暮れた。

「唯斗君、この手紙は流石に…」

「わ、わざとじゃないのは分かるけど…誰だって勘違いするよ?”大事な話”とか”俺達の将来”とか書いてるし」

「…いや、本当になんの話しだよ…?」

「もう一回殴つても良いかしら?」

「暴力反対!暴力変態!暴力犯罪!!」

先日の、先代勇者について話そうと風を呼び出したのが事の始まりだった。

友奈と東郷がどう伝えるべきかと話してる最中、唯斗は既に呼び出したと豪語したのだ。その方法が、古風上等な手紙だった。

特に理由はなく、敢えて言うのであれば昨晩は帰りが遅くなり、そのまま深夜テンションで筆を取った結果とのこと。無論誰も納得も共感もしなかった。

「…それで、結局なんの話よ?東郷と友奈も居るんだし、真面目なはなしなんでしょ」

「…手紙にもそう書いたのに」

「黙らっしやい。埋めるわよ、土に」

「風ちゃんがこれまでになく冷たい件について」

「先輩を付けなさい、デコスケ野郎」

氷河期にぼっしーよりも冷たく、殺意マシマシチョモランマだった。唯斗はほんのちよっぴりだけ泣いた。

「き、昨日のことなんですけど——」

端的に言えば、彼女は最後まで半信半疑だった。

後輩を信じたい気持ちと、現実を受け止められない弱さ。その二つが確かに風の中には存在して、相まって、絡まっていた。

やっと、終わったのに。

やっと、全てのバーテックスを倒し終えたのに。

その結果が裏切りだった。そんなことを突然言われて、正面から受

け止められる人はいない。

勇者部の中で風はリーダー的な立ち位置にある。そんな自分には何も知らされていない現状。何度も、大赦とのやり取りでは満開後の症状は一時的なものだと説明されていた。

「……樹と夏凜には、まだ伝えないでちょうだい」

表面上は、確実性が無いからと取り繕い言葉にする。

だが風は受け入れられなかった。もしかしたら、何かの間違いだった。そんな言葉を待っていたのかもしれない。

自分だけなら良かったものの、妹の声が永遠に戻らない。——そんなことはあつてはならない。犬吠埼風は部長として、姉として、受け入れる訳にはいかないのだ。

——沈黙は肯定に等しい。

皆に共有すべき情報なのは分かっていた。それでも、友奈も東郷も、絶望寸前の表情の風に安易には言葉を返せなかった。

何処で間違えたのか。

満開をしたのが”間違い”だったのか——否、しなければ死人が出ていた。

例え工夫に工夫を重ね、満開をしなくてもバーテックスに勝てたとしても、長期戦になるほど現実へのフィードバックは大きくなる。故に、被害を最低限にするには満開が必須だった。

では、勇者になったのが”間違い”だったのか——否、今の勇者には最初から拒否権はなかった。

そもそも、集められたメンバーは意図的なモノだった。勇者としての適性が高い友奈や、それに準ずる犬吠埼姉妹。勇者として鍛えられてきた夏凜に、先代から引き続けている東郷と唯斗。

——もしかしたら、全て最初から決まっていたのかもしれない。

勇者となり、生贄のように身体を代償に戦うことも。そもそも勇者になること自体も。仕組まれていたって何らおかしくはない。

きつと、明確な”間違い”なんて無かった。最初から決められたルートを、他の道を与えられずに突き進んでいただけなのだ。そう考

えて、唯斗は吐き気がした。

その日の部活は、不自然な程に言葉数が少なかった。

薄暗い部屋――

月光に照らされながら、少女は息を荒らげる。それは死の恐怖だった。手に持つ小太刀は鈍く光を反射して、鋭さを主張する。

「はあっ……はあっ……いっ……!!」

渴ききつた喉に唾を落とし、己の正気を疑う。

深く息を吸おうとも、直ぐに軽く短い吐息に飲まれる。本能が危険を感知し、視界が点滅する様な感覚に陥る。

だがそれでも、少女は小太刀を汗ばむ手で握り締め、柔らかい腹部に押し付けた。

額から頬へ脂汗が流れ、次第に増える瞬き。瞼の端には冷たい涙が玉になる。

頭の中で自問自答が繰り返される。

――こんな事をして意味はあるのか。

――推測が外れたらどうするんだ。

――怖いなら辞めてしまおう。

――何故、自分がやらなければいけないのか。

騒ぎ立てる弱い自分を、鋼の意思で押し止める。結局、こんなことは他の誰にも頼めないのだ。気付いて、可能性を感じて、その結果に至った自分自身がやらなければ、何も証明されない。

肺が過度に酸素を求め、二酸化炭素を吐こうとしない。息が詰まり、視界が白くなり、今にも恐怖で気絶しそうだった。

腹に冷たい刃を当てる。

嫌に身体の全神経がその部分に集中して、次の瞬間に来るであろう熱にも似た”痛み”を想像する。

「っ……いっ……!!」

視界の先には自身で改造を施したスマートフォン。電源は切られ、

バッテリーすら抜かれている。間違っても起動はしない。

それを最後に覚悟を決め、小太刀の頭に手を添える。肺の空気を少しだけ抜き、次の瞬間には腹部に刀身を力の限りを込めて押し込む――

――が、刃が鮮血に染まる直前に小太刀は蒼い光に阻まれる。

「っ!?……はあっ、はあっ……!……やっぱり、私の憶測は当たってた……!」

少女――東郷美森は執拗く全身に響く心臓に手を添える。まだ、間違ひなく生きている。実験は成功し、東郷の立てた残酷な憶測は当たっていた。

いつの間にか、傍らには《精霊》が出現していた。

「……やっぱり……やっぱり……っ!勇者は死ねないのね……!!」

スマートフォンは電源を切っている。それどころか、内部バッテリーまで取り出している。だから、勇者システムは――勇者アプリは起動する筈がなかった。

だが現実には、残酷だった。東郷にはそれが勇者を護っているのでは無く、お役目から逃がさないための措置に思えて仕方が無い。

ここまで執拗に、限りなく可能性の低い”自死”という逃げ道さえ封じられている。

東郷は無言で小太刀を鞘に仕舞い、次の実験に取り掛かった。

刺殺、絞殺、溺死、爆死、転落死、焼殺、窒息死――思い付く限りを試しても、結果は同様。《精霊》は必ず勇者を助ける――果たして、それを”助ける”と言っても良いのだろうか。

生に縛られ、逃げることは決して許されない。

東郷には、ずっと傍でサポートしてくれていた《精霊》が、得体の知れないバケモノに思えて仕方が無かった。

「お姉ちゃん、何かあったの？」

洗濯物を畳む風の前に、一冊のスケッチブックが出された。

ふと視線を上げれば、そこには表情の暗い樹の姿があった。不安そうに、姉を心配しているのが伝わる。

風の頭に浮かぶのは、友奈や東郷から話された『満開』の代償。今も樹の声は戻る気配はなく、スケッチブックに可愛らしい丸文字で文章を書き会話をしている。

その事が無意識に表情に出ていたらしく、樹にも不安が伝染していた。

風は表情を切り替え、話題をシフトさせる。

「なんでもないわよー。敢えて言うなら、アタシの女子力が上がりすぎて心配なだけよ。あーあ、クラスのマドンナはキツイわねー！」

「……本当に？」

「本当よ、ホントー。お姉ちゃん、すぐくモテるのよ？そう、アレはアタシがチアリーダーの助っ人に駆り出されたときの事——」

「その話、聞き飽きたよ？」

呆れたような樹の笑みに、風はいつも通りの日常を感じた。失つても、決して変わらないものはある。——それが堪らなく嬉しくて、同時にそれが壊れてしまうのは耐えられない。

だから気丈に振る舞い、不安を悟らせまいと強く努める。

自分は部長で樹の姉だから、弱く在ってはいけない。

「ほーら、もう遅いんだから寝なさい。アタシも洗濯畳み終わったら寝るから」

「はい、おやすみなさい」

「ちゃんと温かくして寝なさいよ？昼間はまだ暑いけど、夜になったら冷えるんだから。お腹出して寝るとすぐに風邪ひくんだからね？」

「わかってるよー」

「ならよし！おやすみなさい」

部屋に向かう樹を見届けながら、再び思考に没頭する。

立場が立場なだけに、考えなければいけない事は山ほどある。だが然し、風はまだ中学生だ。考え足らずな所もあれば、逃げたくなくとも少なくない。

大人でも判断しかねる事の連続を、風が判断して結論を出すことなど到底不可能だ。

少し前のように、バーテックスが出てきたから戦う——だけだった方が余っ程単純で楽だった。先代の勇者達に、満開の後遺症が治らない可能性。その代償によって日常生活に支障をきたしていることも無視できない。

何をするべきなのか。

そもそも風に出来ることはあるのか。

大赦にはメールを送り、再度勇者達の身体に残る障害について聞いてはいるものの、帰ってくる答えは毎回似たようなものだ。まだ調査中、だが一時的なものと思われる。その繰り返しで、聞くのも嫌になる。

「はあ…」

(結局、一歩も進めてないわね…)

いっそ、全てを捨てて逃げたくなる。

全てを忘れて、何も知らずにのうのうと生きれたら幸せなのだろう。しかし風には責任がある。皆を勇者にした責任は何よりも重く、命に変えても投げ出す訳にはいかない。

思考は浅瀬を漂う。

夜はまだ長い——

悩み相談

「……ぴえん」

唯斗は鳴いた。ぴえんぴえんと悲しみを露わにして、古風の日本を代表する言葉を用いて鳴いた。

時は放課後、勇者部の部室には人影が少ない。

部長を含めた部員の半数以上は猫探しやゴミ拾い、その他諸々に駆り出されている。部室に残るのは唯斗と夏凜のみ。

二人は既に割り振られた運動部へと助っ人を終えたばかりだ。頬の汗を拭きながら、窓から吹く涼しい風を浴びていた。

「…ぴえん」

「唯斗、うつさい」

「ぴえん…」

同級生のツンデレツインテールことT・T三好は辛辣に言葉を返し、唯斗は再度鳴いた。

「最近、みんなが冷たい…」

「あつそ」

「最近、みんなが冷たい…!」

「……」

「さいきん!みんなが!!つーめーた——」

「あーもう!煩いわよ!!」

夏凜は吠えた。無視する度に声が大きくなり、ウザさと喧しさが増す阿呆に向かって吠えた。

落ち込んでる振りをして、実はおちよくってるのではないかと思えてきた。飽くまでも話を聴いて貰うつもりなのだろう。淡々と同じセリフを繰り返すNPCよりも余っ程厄介だ。

「相談に乗って欲しいなら最初から言いなさいよ!」

「純粹無垢な唯斗心を理解してくれよ」

「はっ。」

「夏凜様。もし宜しければ、貴女様の有限で貴重な時間を無駄に浪費

させる様で誠に申し訳ないと承知の上で、この愚かなわたしくめの悩みを聞き入れてはくれませんか？」

「…はあ、勝手にしなさい」

「チツ……有り難き幸せです！」

「舌打ち、聞こえてるわよ」

「ぴえん」

「次、ぴえんって言ったたら殴るわよ」

「愛が重いよ……でも暴力的な所もSU☆TE☆KI——とりたい所だけど私の勘違いだったからその拳を今すぐ下ろしてください。暴力は何も生まないって俺は学んだんだよ、この身をもって！」

唯斗の誠意ある謝罪に心を許したのか、猛獣夏凜は渋々と拳を収めた。人と猛獣が言葉を用いて和解した、奇跡的な瞬間だった。心做しかメンチを切られてる気がしなくも無いが、唯斗も取り敢えずは殴られずに済んだ。

「——それで？」

煮干しを摘んで落ち着いたのか、夏凜は改めて問い掛ける。

「あー、うん。さっきも言ったけどさ、夏凜も含めてみんなが冷たいんだよ。いや、辛辣風先輩とかツンデレ夏凜はいつも通りんだけど……東郷と友奈までなんだよ」

「誰がツンデレよ……東郷は兎も角、友奈まで？アンタ何したのよ」「ぜんぜん思い付かないんだけど……敢えて言うのであれば、ド変態って言ったくらいだよ」

一昨日の、先代勇者に会った日の事だった。

園子や銀に会いに行くための言い訳として『用事がある』と言い、人助け大好き人間な友奈が用事について手伝おうかと言ってくれたところに、唯斗は茶化して最終的には『ド変態め！』と言った。

唯斗自身、あまり精神的に余裕は無かったので多少雑な扱いをしてしまったが、それは友奈や東郷も同様だったのだろうか。

事実、その際、唯斗は初めて友奈に辛辣な対応をされた。辛辣と言っても、軽く無視された程度だが。

「原因説明ね、土下座してきなさい」

「プライドを捨てろと!？」

「まるでアンタにプライドがあるみたいない方ね」

「まるで俺にプライドすらないみたいない方しないでくれる?」

唯斗とて小さくあやふやなプライドはある。熱狂的なイカの姿フライ魂とか、隣の席の山田くんへの愛情とか、使用しないのにエナジードリンクによって蓄積されたエナジーとか。それらが適当に固まって、唯斗のプライドは形成されている。

それを穢されることは、唯斗の怒りを買うに等しいのだ。

「取り敢えず友奈には土下座するとして、東郷には何をしたの?」

「まず俺がやらかした前提で話すのやめろよ」

「…で、なにやったのよ?」

「……………トローゴーに関しては覚えがありすぎてワカラナス。主に名誉毀損的なことが大部分だとは思うけど」

「サイテーね」

「お前も大概だけどな。東郷のこと盗撮郷とか言ってたじゃん。にぼーぼ最低〜!」

「にぼーぼって呼ぶな。…………まあ、東郷について置いときましょう。アレは自業自得だから仕方ないわ。誰も悪くない、世界は明るい。それで良いじゃないの」

「手のひら全方向駆動式か?もっとネジ締めろよ」

夏凜は頭の中で東郷を切り捨てた。

大半は東郷自身の奇行が原因でもあるが為に、誰も文句は言えない。本人は既にその扱いに慣れているし、嫌っての言葉では無いことは承知の上。

敢えて言うのであれば、東郷美森というヒト科のナニカである彼女の生態がヒューマンやヒューマン・にぼっしーには理解不能なのだ。故に仕方なしと断言された。決して、面倒臭い責任感から逃れるために見て見ぬふりをして、東郷だからいいや、と言いつくしている訳では無い。

「まあ、この際だから東郷にもまとめて土下座しとしなさい」

「土下座は決定事項なのかよ」

「さて、次は風ね。どうせ何かしたんでしょ」

「失敬な！……………失敬な」

「やっぱり有罪ね。土下座しなさい」

「まるで土下座のバーゲンセールだな！頭M字に剃って金髪にしてやろうか!!」

唯斗は某戦闘民族の中年王子様を連想して、土下座の安さを嘆いた。土下座する際には『もうだめだあ…おしまいだあ』と一発芸を仕込むのもアリかな、と妄想したとかしてないとか。

一方の隠れてた余罪を暴く夏凜の目は、未だに冷たい。まだ疑いは晴れていないらしい。

「ちなみに、樹には何もしてないでしょうね？」

「は？我が部唯一の癒し枠の樹にちよっかい掛ける訳ないだろ。手え出す奴がいたら俺が殺す。内臓引き摺り出して石詰め込んでやる」

「マジトーン止めなさい。キモイから」

「夏凜ちゃんが一番冷たいよお…」

唯斗曰く、自分を抜いて唯一の常識人は樹だけとの事。故に宝であり、マスコットの立ち位置にいるのが犬吠埼樹という姉の逆を生きる後輩だ。

そこに恋愛感情は一切存在せず、善人が捨て猫を拾う感覚に等しい。愛でて、成長を促して、現部長とは違うしっかりとした常識を内包した次期部長にする。それが唯斗の意気込みだった。

熱く語る唯斗とは対照的に、夏凜の目は酷く冷めていた。視線で『この馬鹿は自分を常識人だとまだ思ってるのか』と物語ってるが、生憎と唯斗はそれを察するほど機敏ではない。

「……………あんた、樹のこと好きなの？」

ここまで熱く語るのであれば、多少なりとも恋愛感情は存在するのではないか。

鍛錬中毒の夏凜とて年頃の女子だ。他人の恋愛事情も気になってしまう。ほんの少しだけ、胸の奥でモヤモヤする感情を抱えながら、その正体に見て見ぬふりをして問い掛ける。

対する唯斗の返答は――

「……ん、好きだよ」

堂々とした肯定だった。

あまりにも自然な肯定に、夏凜は一瞬だけ固まった。少しだけ冗談を込めての質問だったが、まさか返ってくる答えがコレだとは想像もできなかった。

然しながら、あまりにも自然過ぎる返答に違和感も覚える。再度目の前の馬鹿が阿呆であったことを思い出し、続けて問おうとしたら――

――パタン

何かが落ちる音がした。

二人が振り向くと、噂をすれば何とやら。丁度話題に出ていた樹が立ち尽くしていた。顔は赤く、足元には普段から愛用しているスケッチブックが落ちていた。

この瞬間に何が起こったのか、夏凜だけは理解した。また阿呆が馬鹿なことをやらかして、自分もその原因の一端を担っているらしい。

原因の八割を抱える馬鹿は――

「あつ、樹。おかえり」

当然ながら何も察していなかった。

「っ！」

樹は慌ててスケッチブックを拾うと、腕がブレる程のスピードで文字を刻んでいく。

へ 失礼しましたー!! へ

そう書いたスケッチブックを二人に見せると、樹は赤面した顔をスケッチブックで隠しながら後ずさり、廊下に出ると普段の彼女からは想像もできないほどの俊敏な動きで走り去った。

「……樹のやつ、どうしたんだ……？」

「……………唯斗、一応聞いておくけど……樹のこと好きなのって――」

「ん？もちろん後輩としてだよ。俺達の中で樹を嫌ってる奴だなんていないだろ？よく出来た後輩だしな」

「……唯斗、土下座プラス一回よ」
「なんで!？」

現状を完全に理解した夏凜は大きくため息をつき、窓から紅く染まる空を見上げた。

別に、聞き耳を立てて盗み聞いた訳では無い。

「……あんた、樹のこと好きなの？」

お姉ちゃんとの猫探しを終えて、一足先に部室に戻った時に開いたままのドアの先から聞こえてきただけだ。少し隠れるようにドアの横端から顔を覗かせてはいたけど、決して盗み聞きでは無いハズ。

夏凜さんの声は、静かな廊下まで澄んで響いた。

唯斗先輩がわたしをどう思っているのか、気になってはいた。唯斗先輩は誰にでも一線を引いたような、そんな性格だ。お姉ちゃんと騒いでいる時とか、夏凜さんを揶揄う時はいつもより近く感じるけど、やっぱり唯斗先輩はわたしにとって”遠い”と微かに感じてしまう。

思えば、わたしは唯斗先輩の笑顔をあまり見た事がない。笑顔どころか、泣き顔も怒りの表情も、記憶には無い。

決して無表情では無いけど、彼の一色に染まった表情は見たことが無いのかもしれない。

——だからこそ、わたしは気になった。

唯斗先輩には、これまで一方的に助けられてばかりだ。『勇者』としても、『勇者部』としても。わたしは何処までも『後輩』でしかない。だから変わりたかったのかもしれない。

友奈さんの真似をしてみんなを『護る』と息巻いてみたり、夏凜さんみたいなカリスマ性に憧れたり。何も上手くはいかなかったけど、弱いままの自分からは脱したと思えた。

だからきつと、わたしは唯斗先輩から頼りになる後輩と思われた

かったんだ。

「——ん、好きだよ」

(えっ——)

すき？ライク？ラブ？

頭が一瞬で沸騰した。

言ってしまうえば、酷く動揺しているのだろう。素直に先輩からの好意は嬉しいけど、その『好意』って何なのだろう。親愛か、恋愛か。ただでさえ唯斗先輩の表情は読みづらいのだ。今この瞬間に限って解る、だなんて都合の良い話はない。

——。パタン

誤ってスケッチブックを落としてしまい、二人の視線が刺さった。どうしよう。

盗み聞いた事を詫びるべきか、何も聞いていなかった風を装ってみようか。この瞬間、わたしの選択肢は驚くほど少なかった。

「あつ、樹。おかえり」

(あつ、無理だ……)

冷静を装うのは無理だと瞬時に理解した。わたしはそこまでメンタルが強くないし、器用でもない。

助けを求めて夏凜さんを見つめると——

(えっ、何……あの表情!?)

怒ってるような、疑ってるような、疲れてるような、呆れてるような——表情ワンパターンのツンデレ夏凜さんとは思えないほどまでに複雑な表情だった。

夏凜さんのツンデレ詐称疑惑は一旦置いて、わたしは今どうするべきか。

(こっとなったら……戦略的撤退——!!)

わたしは風かぜになった。一瞬で足元のスケッチブックを拾い、文字を書く。それを顔を隠すように掲げて、後ずさり——

(撤退——撤退——!!)

心の中で叫びながら逃げた。

後日、勘違いだったと夏凜さんに告げられて死にたくなつた。

本当は少しだけ、期待していたり…なんて。

裂け目

——そこは東郷美森の部屋だった。

「友奈ちゃん、風先輩。唯斗君も…急に呼び出してごめんなさい」

それは当人の言葉通り、急だった。

前兆はあったのかもしれない。だが然し、それに気が付けるほど皆に余裕は無かった。だからこそ今に至り、勇者部の裂け目を生む今日が来てしまった。

呼び出し人は東郷美森。対象は結城友奈に犬吠埼風、郡唯斗の三名。この面子は考えるまでもなく、真偽はどうであれ『勇者』の実を知る者達だ。

異様な雰囲気にも包まれる現状で、楽観的に遊びに呼ばれたと考えるものは皆無。寧ろ嫌な予感だけは否応無しに感じている。

「どうしたのよ、東郷」

「…みんなに、見てもらいたいものがあって…」

「見てもらいたいもの…?」

聞き返す友奈に言葉を返す前に、東郷は車椅子を操作し勉強机へと移動する。そのまま引き出しを開き、軽く装飾された鞘に仕舞われた小太刀を取り出す。

ゆつくりと刀身を魅せる様に鞘から抜き、抜け殻となった鞘は無造作に机の上へと置かれた。

「と、東郷さん…?」

「…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…」

「唯斗…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…」

東郷の行動に対して唯斗は目を瞑り、落ち込んだように言葉を漏らす。これから彼女が実演することを、唯斗は前もって知っている。その危険性も、同時に安全が保証されていることも理解していた。

故にため息を漏らし、止める素振りも見せない。

東郷も唯斗を一瞥し、その考えを確証へと至らせる。そして最後の決意を固めた。

「ふう……はあっ!!」

東郷は小太刀の棟に手を添え、一息に首を切裂く——
「っ!?」

——が、その刀身は直前で止められる。

東郷の首と小太刀の間にはいつの間にか〈精霊〉が出現しており、蒼い発光と共に自らのご主人を護る。

「な、何やってんのよ!? あんた……今! 精霊が止めなかったら——」

「止めますよ、絶対に……そうだよ、唯斗君?」

「…見ての通りだろ。俺に聞くな」

東郷の〈精霊〉は落とすように力の抜けた腕から凶器を包取り、机の上に着地させる。

確信へと至った現状で、東郷は敢えて唯斗へ問い掛けた。この現象について、勇者部の中で最も詳しいであろう唯斗に対して責めるわけでも、問い詰める訳でもなしに、淡白に答えの確認でもするかのよう
に問う。

「私は今日に至るまで、幾度となく様々な自害を試みました。切腹、首吊り、飛び降り、一酸化炭素中毒、服毒、焼死——そのいずれも、全
て〈精霊〉に止められました」

「何が…言いたいのか?」

「単純ですよ、風先輩。この前も話したじゃないですか——勇者は死
ねないって。先代勇者の言葉は都合の良い解釈じゃなくて、そのまま
の意味だったんですよ」

「唯斗くん……? な、何か知ってるのか?」

「……なあ、友奈。お前、こう思っただろ? 〈精霊〉は勇者を護ってく
れている。だからやっぱり、精霊は味方だ。そんな力を与えてくれる
神樹様は偉大だ……って」

「っ……!」

友奈は神樹様の信者だ。だから盲目的に神樹様を信仰しているの
か、と言えば否だ。四国を護る神に信仰を捧げる。それが国の定めた
方針であり、友奈は生まれながらにして其れに染つたに過ぎない。

神樹様への疑心感を植え付けられてからは、自身の在り方に疑問を

抱いたこともあった。だが自身を突き通し、信仰も関係なしに大事な物を護る友奈は息巻いていた。

だが然し、染み付いた思想は簡単には離れない。

神樹様が——〈精霊〉が東郷の自害を防いだのを見て、友奈は単純に『やつぱり神樹様は味方だ』と考えた。それが見透かされて、自身は無意識に辿り着いた答えだったと知って——

「わたし、は……」

何も言えなかった。

自分が何を大切だと定めて、取捨選択をするべきなのか。何も捨てない、全てを護る。そう断言出来るほど、今の友奈には自信などない。

「…友奈ちゃん、私は今…勇者システムを起動してない」

「……」

「私は、この〈精霊〉が単に私達の身を護ってるだけとは思えない。逃げないように『勇者』を縛って、死すら許されない。アプリを起動しなくてもシステムは動くことは、もし端末が無くても、私達は樹海化に巻き込まれる。たとえ戦意が無くても、最初からバーテックスの前に放り出されるように、設計されていたんだよ…」

「……生贄って、こういうことなの…?」

心がドス黒く染まる。

乃木園子は、勇者は生贄だと語った。決して脅しや比喻では無く、読んで字の如く。身を捧げて最後まで神敵と戦うことを義務付けられた存在。それが『勇者』であり、生贄だ。

改めて乃木園子や三ノ輪銀の零した言葉の端々を思い出し、何一つ“嘘”が無かったことを突き付けられた。

「乃木園子の言葉に嘘は無かった。勇者は死ねないし、満開の後遺症は治らない……私達は、最初から大赦にとって消耗品でしかなかった……」

「そんな…そんなことって…っ!」

有り得ない、と友奈は口にしかけた。だが有り得てしまう、そんなことは友奈ですら容易に想像がつく。園子も東郷も、そして唯斗も何一つ“嘘”はついていない。唯一、明確な“嘘”を吐いているのは大

赦のみだ。

怒りや悲しみ、驚愕の前に懷疑を抱かざるを得ない。

三ノ輪銀は大赦の”嘘”を一種の優しさだと諭した。失う前提を知らせず、気楽とは言い難くとも気負いはせずに戦えるようにとの配慮。

果たしてそれが配慮と呼べるほど高尚なモノかは一旦置いて、実際にその作戦は功を奏した。『勇者』は満開をすることによって一気に七体ものバーテックスを討伐した。

勇者の歴史の中でも飛び抜けた『偉業』だ。

歴代の勇者の中でも今の勇者達が強いのは明白だ。優れてる、ではなく強いということだけなら、だが。

満開を経てバーテックスを討伐する。大赦がここ数年で用意し、格上の神敵と同等かそれ以上の力を得る切り札。それが勇者システム、満開機能。

その切り札を無償で使える、だなんて都合の良すぎる話は存在しなかった。物語の勇者が土壇場で覚醒し敵を打ち砕くのは違い、意図して代償を払い一時的に力を得るだけの、真正銘の消耗品。

暗にそう告げられて、友奈と風は心が黒く染まるのを感じた。

——そして、植えられた疑心は向かい先を選ばない。

「……唯斗、アンタ…知ってたの？」

「……………」

「答えなさい！郡家次期当主、郡唯斗!!」

「っ！……そっちこそ、何で他人ん家の事情を知ってるんですか？」

元より、風が勇者部を作り今の部員達を集めたのは大赦からの命令によるものだった。故に、大赦内の情報も多少は伝わっている。

その中には唯斗の家についての情報もあった。

大赦の中でも、乃木家や土居家。伊予島家等の名門家は発言力が強い。そこには唯斗の血筋でもある郡家も含まれており、風が唯斗を勇者部に勧誘する前に与えられた情報が件の郡家についてだった。

「風先輩！落ち着いてください！唯斗くんは——」

「友奈は黙ってなさい……アタシは唯斗に聞いているのよ！」

嫌な雰囲気を感じ取った友奈が一旦落ち着かせようと風に声を掛けるも、風の疑心は収まらない。唯斗が——唯斗も自分達を騙していたんじゃないか。そう考えると、理不尽だとは解っていても責任を押し付けたくなる。

「知りませんでした、って言って先輩は俺を信じてくれるんですか？」

「……白々しい事を……っ！」

「……そういうことですよ。俺がなんて言っても、たとえば本当に知らなくても、先輩は——アンタは俺を疑う。……なら、無駄だろ。睨まれて、疑われて、敵視される……だから辞めたかったんだよ、こんな部活」

「ゆ、唯斗くん！」

唯斗は見限りをつけた。熱弁しても、きつと疑いの目は晴れない。きつと事ある毎に風は唯斗を心中で疑い、唯斗自身も機敏にそれを感じ取る。

そんな関係、ニセモノにも劣る。

負う傷は同じだった筈だ。

背負うモノは皆で分け合うべきだった。誰かが誰かを疑い、疑心暗鬼に陥る。それは現状の勇者部が最も避けるべき事柄であり、悪手だ。

だが風は最も大赦に近い立ち位置に在る郡唯斗を信じれなかった。責任の重圧に押し潰されて、仲間を疑った。それが裂け目を生んだ。

「っ……じゃあ、辞めればいいじゃない！」

「風先輩！それは……そんなのは間違ってますよ!?悪いのは唯斗くんじゃないです！ちゃんと話し合えば……っ！」

「言われなくとも辞めてやるよ。よかつたな、犬吠埼先輩。ウザくて大嫌いな後輩がいなくなっつて」

「っ……」

彼にとつて、既に彼女は同学校の先輩でしかない。言葉通り、見限ったのだ。たとえば見栄や意地だけだったとしても、唯斗はこれ以上

彼女との関係を保てる気はしなかった。

ならば、こつちから嫌ってやる。苦しんだ末に捨てられるのであれば、先に此方から関係を白紙に戻してやる。傷付くのを恐れ、少年もまた過ちに踏み出した。

唯斗は軽薄に笑い、その場を去った――

「……どうして……どうしてこうなるの……!?!」

友奈が大事にしていた『絆』は酷く脆くて、たった一つの誤りで簡単に崩れてしまった。流した涙は行き場を無くし、誰にも拭われないまま床へと落ちた。

「……」

唯斗に続き、風も無言で帰り支度を進める。

眉間に寄った皺は、果たして怒りか後悔か。若しくは両方だったのかもしれない。当の本人にも解らない感情で、骨が軋むほど拳に力が入った。

唯斗と風が去り、東郷の部屋は部屋主と友奈だけになった。

「……東郷さん」

「……」

「何処で、間違えたのかな……?」

「友奈ちゃん……」

「みんな、とつても仲良しで……大切な仲間で……私ね、ずっと想像してたんだ……みんなが中学校を卒業して、大人になって、働き始めても……ずっと、ずっと……勇者部は不滅なんだって。……休みの日にはみんなで集まって……昔話をして、懐かしんで……いつか、本当に『勇者』だったことを、笑いながら話して……」

「友奈ちゃん……ごめん、ごめんね……私のせいで……」

涙を零しながら語る友奈。明るい未来設計の筈なのに、話し手は悲痛に歪み、華奢な肩を震わせる。

未来設計が音を立てて崩れる。明るい未来を想像出来ない。無力に泣くことしか出来ないのが、とてつもなく悔しかった。

震える友奈を眼前にして、東郷もまた困惑していた。

皆を集めて、勇者の事実についての話しをしたのは仲違いをさせるためでは無い。ただ皆には知る権利があり、唯斗に話を振ったのもまた彼が同じ結論に至っていたからと確信していたからだ。

彼が郡家の次期当主という立ち位置に在ることなど微塵も知らなかった。

東郷は唯斗と風の言い合いに口を挟むことすら恐れて、彼女の初めて見る怒りと、彼の全てに見限りをつけた表情に臆した。

次に責められるのは自分ではないのか。そう思うと、東郷は二人を宥めることも出来なかった。

——原因を巻き起こした東郷には、友奈を抱き締め慰める資格など無かった。

「……はぁ」

唯斗は帰路にため息を落とす。

何が間違っていたのか、だなんて痛いほど解っているつもりだ。十中八九自分の態度や失言、立場を軽視した上での不適切すぎる発言だ。

感情に任せて事を進めすぎた自覚はある。苛立ちは確かにあった。だがそれだけで勇者部を辞め、嘗ての友奈の言葉や想いを裏切るのは最低だ。

風から疑いの目を向けられて、唯斗はこれまでの彼女達との関係が薄く拙いモノだったと感じられた。

所詮この程度の関係だったんだと自分に言い聞かせる。

誰のせいであろうと、もう”居場所”を失った。

もう疲れるだけのボランティアなんてしなくても良い。先輩と言合いをすることも無いし、休日に登校する必要も無い。

ずっと望んでいた筈だ。いつか勇者部を辞めて、変なヤツらから距離を取ることを望んでいた。

ならば、この結果は万々歳ではないか。

彼女達との関係を白紙に戻して、一年と数ヶ月前の状態に戻っただけだ。何も問題は無い。

むしろ、”これから”を考えた方が余っ程有意義だ。

これからは部活動が無い分、時間が余るほど有る。久しく遊んでいなかった男友達と遊びに行ったり、ここ最近手付かずだった漫画やゲームに没頭したり、時間を気にせずに惰眠を重ねるの良し。

きつと、暇と感じるほど平和な”これから”が待っている筈だ。退屈で、欠伸が出る日々。化け物と戦わされる非日常や小煩い部長にこそ使われる忙しい日々は終わったんだ。

唯斗は理想的な”これから”を思い浮かべ――

「……………っ!!」

感覚だけが消失した右手を、塀に叩きつけた。

カワラナイモノ

——知らないといけない。

崩れる”絆”を目の当たりにして、東郷は答え合わせをする覚悟を決めた。

不条理だと嘆くだけでなく、全てを知り、その上で励む。それしか、仲違いのきつかけを生んだ東郷美森には償える手段が無い。

想い人に見限られ、親友を泣かせ、東郷自身も絶望している。故に、東郷は決めた。

最後の答え合わせを——先代勇者の元へと、向かわなければいけない。

推測はしている。

自分の失われた過去と向き合う時が来たのだ。

友に甘えて、記憶喪失自体を忘れようとしていた。盲目的に未来を幻想視して、自分の軌跡を無意識に消し去ろうとしていた。

事故に遭って記憶を失ったと親からは説明された。大切な両親が、悲痛を抑え歪んだ顔で交通事故だったと説明した。——その表情の意味が、やつと解った。

失った二年程の記憶と、両足の機能。何故か自分だけ他の勇者達よりも多かった〈精霊〉。それが何を指し示すのか、もう東郷美森は確信していた。

だから——

「いらっしやい、わっしー……じゃなくて、美森ちゃん」

薄暗い病室。

二つのベッドの前には小型の鳥居が建てられており、壁や天井は不気味なまでに形代や御札で埋められている。

まるで神を祀ってるみたいに、重く神秘的な形容し難い雰囲気立ち込めている。

病院内を案内され、通された病室には二人——乃木園子と三ノ輪銀

が待っていた。

「……わっしーで結構よ。私は嘗て、たとえ記憶が無くとも……確かに驚尾須美だったのだから」

「おお、さすが須美。やっぱり賢いな……ってことは、もう粗方判ってるんだろ？」

答え合わせの時間が来た。

全くの見当違いであって欲しい答え合わせ。確信も確証も打ち砕いて欲しいと願いながら、東郷は固い面持ちで口を開く。

「——私は、貴女達と同じように『勇者』だった。共に戦い、最後には『散華』をして脚の機能と記憶を失った」

「……正解だよ、わっしー。……ごめんね、全部間違いだよって言っただけじゃなくて……」

「っ……貴女に非は無いわ。求めたのは私で、調べて推測を重ねたのも私。貴女はそれに応えただけなもの」

内面を悟られていた事に心の中で驚嘆する。

それだけ彼女が聡いのか、将また内面まで知られるほど親しい仲間だったのか。命懸けの戦場を共に生き抜いてきた戦友だったのであれば、後者が濃密だろう。

相手が自分を知り、自分は相手を知らない。それだけでどう接するべきなのかが解らなくなるが、嫌悪感や否認感はまだで存在しなかった。

だが戸惑っているのは事実であり、結果的に、自分でも堅苦しいとしか思えない口調になってしまう。

「硬い……なんて言う雰囲気じゃないよな。……須美、お前は何を求めて此処に来たんだ？アタシは生憎と、園子みたいに察しが良くないんだよ」

「——全てを知りに来た。それだけ」

銀の問いに東郷は短く返した。

全て——勇者についても、大赦についても。全てを知り、自分達の現状を打破する。其れだけが東郷の望みであり、目標。

「全て、か……とつても曖昧なことを言うね。知ってることなら全部

答えるけど、私とミノさんだつて全てを知ってるわけじゃないんだよ？」

「でも貴女達が大赦の上層部に聞いたたら、全部教えてもらえるでしょう？」

「まーな、見ての通り祀られてるし。見ろよ、この部屋のインテリア。最悪だろ？年頃の乙女に有るまじきだよな」

ベッドの前に設置された小型の鳥居は異様な雰囲気を漂わせ、壁や天井に貼り付けられた夥しい数の御札や形代は大凡の常軌を逸している。

神を祀ってる様にも、逆に物の怪を封印している様にも見える。実の所、その根幹は同じなのかもしれない。人外を収める場としては、双方共に同一視されるものだ。

身体を緑に動かせない園子と、ある程度の移動は出来るが自由とは程遠い銀。

言わずもがな、この気が狂いそうな空間で日々を過ごしている。既に慣れてしまった銀からしても、住めば都とは言い難く、一重に最悪としか表現出来ない。

東郷もまた顔を顰め、同情の念を向けた。

「…じゃあ、何から聞きたい？」

「……神樹様は、本当に味方なの……？生贄を欲して、私達は捧げた。…そんなの、おかしいじゃない……！」

「なんにもおかしくないよ、わっしー。神様はね、多面性を持つてるんだよ。…ううん、神様だけじゃなくて私達人間も、一つの面だけでは全てを測れない。ミノさんが男勝りに見えて実は一番乙女だったりとか、わっしーがまともに見えて実は拗らせっ子だったりとか、ね」

「園子さんや、その例えに悪意を感じるのはアタシだけか？」

「こ、拗らせっ子……」

「つまり、神樹様も同じなんだよね。生贄を捧げる文化は、物語の中では悪神的な扱いを受けてるけど、神樹様は命までは取らないでしょう？身体の一部を捧げるだけで矮小なる人の身に”神”の力を宿せる

——神樹様はかなーり讓歩してくれただと、私は思うなあ」

「まあ、あのバーテックスを神樹様の力なしで倒すのは無理だもんな。馬鹿なアタシが言っても説得力はないと思うけど、神樹様は間違いない人類の味方だよ」

神樹——その性質は献身だ。人類を護り続け、勇者には力を宿させる。『満開』さえしなければ人類が神樹様に捧げているものなど信仰のみに等しい。

その上で四国にバリアを貼り、高尚な存在である”神”が矮小な人間如きを護り続けるなど、献身と言わずして何と言うのか。

神樹とて力が無限に有るわけではない。故に、より多く神樹の力を必要とする『満開』をするのであれば、代償が無しでは成り立たないのだ。

「…捧げたものは、本当に戻らないの…?」

「少なくともアタシ達は戻ってないよ。この包帯とか眼帯もコスプレだったら笑えただけだな。未来永劫、絶対…とは言えないけどさ、可能性は低いんじゃないかな」

「私も同意見かな」

無駄だと分かる問いを、何故してしまったのか。東郷自身もまた解らない。もしかしたら、存在しない”希望”に縋っていただけなのかもしれない。

「…ここに、ゆうちゃんも居ればみんな集合だったのにね」

「…ゆうちゃんって…?」

「唯斗だよ、あのイカの姿フライ馬鹿。今頃、また駄菓子でも頬張ってるのかね」

「えつと…何で唯斗君…?」

「……わっしー、もしかして聞いてないのかな?ゆうちゃんから」

東郷は首を傾げた。この場において、自分の想い人はどう関係あるのか。勇者である時点で関係自体はしているだろうけど、それでも自分を含めた先代勇者に彼がどう関係するのか。

「えっ、マジで?唯斗のヤツ…須美に何も言っていないのかよ。何考えてるんだ、あのバカは…?」

「わっしー、落ち着いて聞いてね?……ゆうちゃん——郡唯斗君はね、

私達と同じ先代勇者だったんだよ」

「……ぴやあ?」

「あつ、須美の脳がオーバーフロー起こした」

「”ぴやあ” って言ったね。確かに”ぴやあ” って言ったよね? 肺から空気が抜けるついでに”ぴやあ” って鳴ったよね? ぐぬぬう…録音したかった…!」

「止めて差し上げなさいな」

重大すぎる情報が唐突にぶち込まれた事で、東郷の脳はオーバーフローを迎えた。

「ゆ、唯斗君からは何も聞いてないわ!?」

「むしろアタシ達も驚いてるよ…いや、どっちかと言えば呆れてるな。情報共有くらいしろよな」

「まあ、ゆーちゃんはゆーちゃんて勝手に抱え込むタイプだからね。聞かないとなーんにも答えてくれない、屁理屈ちゃんだからね」

「屁理屈も理屈の内だつて豪語したな、そういえば。ああ見えて色々考えてるし、逆に考えてる様に見える何も考えてないこともある。馬鹿と天才は紙一重だけど、その両方を兼ね備えた馬鹿だよ、アレは」

「ミノさん、結局おバカさんになっちゃってるよ?」

「暗にそう言ってるんだよなあ」

親しげに彼を語る少女達を見て、東郷は嘘だとは思えなかった。

郡家の次期当主で、先代勇者。しかも無垢な少女しか成れない勇者の資格を持つてるイレギュラーな存在ときた。実は、自分の想い人は凄いい人なのだと気が付いた。

尤も、その内面はイカの姿フライが大好きで、自覚のない超変人なのだから肩書きだけは一丁前だ。

——この場に居ない彼が”勇者” だったのは判ったが、ならば同然ながら疑問も湧く。

「…唯斗君も『満開』をしたの?」

「ううん、してないよ」

「……じゃあ、やっぱり…唯斗君は最初から全部、知っていたの…?」

思い出すのは昨日の出来事。

喧嘩——否、あれは絶交だった。親友は悲痛に泣き崩れた。先輩は疑心暗鬼に囚われて絶望した。想い人は全てに見限りを付けて”他人”になった。

風は唯斗を暗に裏切り者と罵った。

東郷は今でも違うと信じている。彼は隠し事をして、皆が身体の機能を失うところを我関せずと傍観できるほど、器用ではない。

だから、東郷の問いは”否定して欲しい”の意だ。東郷には情報がない。故に答えを求めるしかない現状だ。

そんな東郷の意を酌んだのか、園子は小さく微笑んだ。

「——安心して、わっしー。今度はちゃんと言ってあげられるから。 ”違うよ” って」

「唯斗はあれなんだよ。ぎ、ぎやくせい…けん…？園子、なんだったっけ？」

「逆行性健忘だね。つまり、頭をバチコーンっ！って打って記憶喪失になるやつ」

「っ!?!…唯斗君は、記憶喪失だったの…!?!」

「…：園子さんや、報連相って大事なんだな…」

「ゆうちゃんは何一つやってないからね。きつと頭が空っぽなんだよ、夢を詰め込むためにね」

——郡唯斗が記憶喪失。

そんな素振りなど見せたことは無い。確かに過去の話に花を咲かせたことは無かったが、それは記憶喪失である自分に皆が気を使つての事だと思っていた。

だがよくよくと考えれば、過去に限らずとも、彼は不自然なほど自分の話をしない。

風はそれを隠していると認識した様だが、実際は知らなかったのだ。知らないことは話せない。当然の摂理だ。

目眩がするくらいの驚嘆を感じていると同時に、パズルのピースを嵌め込んだように納得している自分がいた。

彼が自分達に対して一線を引いていたのは、相応の理由が存在した

のだ。

「…さて、わっしー。わっしーには二つの選択肢があるよ。一つは、このまま昔話に花を咲かせて、たつくさん感傷に浸って、そのまま帰ること」

先の程とは打って変わって、辛うじて平常は保っているが、何処か辛さを隠しきれない園子の様子に酷く曖昧な嫌な予感がした。

「もう一つは、辛くて悲しい真実を知ること。わっしーの言った全ての大凡はこの事だと、私は思う」

「…須美には知る権利があるし、知って欲しいとアタシは思うな。

…でもさ、知ったら絶望する。だから知らなくても良いんじゃないかなって思うアタシも存在する」

——真実。

その言葉の意味を東郷は知らない。

だが、それを知ったらもう戻れない。そんな予感がした。今なら戻れる。何も聞かないで、薄っぺらい笑みを浮かべながら忘れてしまった過去の思い出に花を咲かせて、見て見ぬ振りを続ける。

これまでと何ら変わらない。自分の過去から目を背けていた様に、これからも知る必要のない『真実』から目を瞑るだけ。

逃げてでも責められない。

東郷は甘い蜜を目の前にして、その誘惑に惹かれる。散華を続けてボロボロになった先代勇者が、それすら度外視して語る『真実』——きつと、東郷は受け止められない。

それは予感を超えた、実感だった。

態々、楽な選択肢を用意してくれた。

記憶は無くとも、感じるのは愛情だった。

『真実』を諦めて、過去を得る。そんな選択肢を与えられて、東郷美森は——

「後者を——真実を教えて、ください」

茨の道を選んだ。

「……………」

少女——犬吠埼風が感じているのは、取り返しのつかない後悔。気晴らしに散歩に出たものの、罪悪感に苛まれるだけだった。

夕暮れに染まる空を見上げながら、自分の矮小さに打ち拉がれる。過去に戻るなら、きつと風は昨日に戻って自分自身を殴りつけるだろう。

「…誰が悪いのか、じゃないわよね…」

考えるべきは、善悪ではなく今後の方針だった。

今でも、風は彼を微かに疑っている。彼が自分達に『散華』や『精霊システム』の残酷さを隠していたのでは無いかと思っている。

だがもしも風が知っていたとしても、きつと言えない。

大切な仲間に対して、何の覚悟も無しに『満開は身体の部位を捧げる』、『失った機能は戻らない』、『勇者は絶対に死ねない』だなんて言えるわけが無い。希望を抱き続けている仲間を、絶望に陥させる事など風には絶対に出来ない。

唯斗がそうであつた様に、風もまたそうなのだ。

実際問題、風は未だに妹に対して『散華』を説明出来ていない。

「……………」

同族嫌悪、という言葉が頭に浮かんだ。

風と唯斗は似ていない。性格も、思考も、容姿も、全てが異なる。——その筈なのだが、その根幹は似ている。

風だけでなく、唯斗は皆に似ている。

三好夏凜の負けず嫌いで独りよがりな面。

東郷美森の執着的で愛を一点に注ぐ面。

結城友奈の活発的で天然気味な面。

犬吠埼樹の優しさと嘘をつけない面。

犬吠埼風の責任感と臆病な面。

全てが混ざり、重なり、まるで染まっている。

——郡唯斗の『過去』は、酷く曖昧だ。

自分が何者で、どのように生きてきたのか。断片的でしかない記憶の中で、強く印象に残っていたのが好物であるイカの姿フライだった。

唯斗の異常なイカの姿フライ愛は、自身を自身だと確立するための必死さの現れだ。

当時の——記憶喪失を言い渡された時点での郡唯斗は、いつの間にか生まれて物心を持ったばかりの子供に等しかった。

家族については覚えていて、自身の名前も、好物も憶えている——逆に言えば、それ以外は何も解らない。

誰にも明かせない、透明で崩れそうな”人格”。

それを染めて、郡唯斗を確立させたのが『勇者部』だった。誰も知らない、唯斗自身も判らない。結果だけが残った。

皆、勇者部の雰囲気が好きだった。

だから壊したくない。気を遣われたくない。そう考え始めたのも、無意識によるものだった。

——だからこそ、唯斗は自分を語らない。

——故に、風は”郡唯斗”が判らない。

「はあ…」

何の意味も為さない溜め息をまた漏らして、漸く辿り着いた自宅のドアに手を掛ける。

家の中は静まり返っていた。カチカチと鳴る時計の針も普段は心地好いが、今ばかりは苛つきすら覚える。

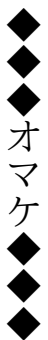
我儘かもしれないが、風は寂しかった。自分から仲間を突き放して、前から去って、それでも一人の時間は寂しかった。

——burururu

「…？電話…」

固定電話から着信音が鳴り響く。

其れが、破滅への一歩となり得た。



《イカの姿フライ》

・何もかもを忘れた唯斗が、奇跡的に憶えていたモノの一つ。それは大好物だった。それは身体に染み付いた大好物だった。

だからこそ、透明な心で辛うじて自身を保つために執着している。郡唯斗はイカの姿フライが大好きだ。それが数少ない彼の軌跡であり、崩れそうだった人格を支えた。

たかが駄菓子。然し、己を知らない〈子供〉は執拗に縋った。そして奇しくも、其れは以前の彼と差して変わらない行動だった――

不相応の所業

— b u r u r u r u r u

「…？電話…」

静か過ぎる部屋に、固定電話の着信音が響いた。

その電話に出なければ、或いはすぐ近くに最愛の妹が居れば——結果は変わっていたのかもしれない。

だが風は一人であり、負は連鎖するものだ。胸騒ぎを杞憂だと自分に言い聞かせながら、受話器を取る。

「……はい、犬吠埼です…」

『突然のお電話失礼致します。伊予乃ミュージックの藤原と申します』

「…え、えつと…」

心当たりはない。”伊予乃ミュージック”という社名程度なら聞いたことがあるが、所詮その程度。間違い電話でも無い限りは、自分の家に電話を掛けられる覚えなどなかった。

電話先の相手にも風の困惑が伝わったのか、否か。少なくとも、相手が目的の人物では無いことだけは伝わったのだろう。

『犬吠埼樹さんの保護者の方ですか？』

「は、はい…そうですけど」

樹の名が出たことに驚いた。まだ状況は掴めないが、これで間違い電話ではないことだけは確かだ。

『ボーカリストオーディションの件で、一次審査を通過しましたのでご連絡差し上げました』

「えっ…な、何の話…ですか…？」

『あ、ご存知ないですか。樹さんが弊社のオーディションに——』

「い、いつですか…っ？」

『少々お待ちください。……3ヶ月程前ですね。樹さんからオーディション用のデータが届いております』

「っ—」

——三ヶ月前。

それは樹が声を失う前だ。丁度、歌のテストの件で勇者部が一丸となり解決に励んだ時期。——風は察してしまった。その意味も、答えも。

全ての線が繋がったと同時に、もう線が絶たれていたことを知ってしまった。

手が震えて、力が入らない。

未だに繋がっている電話を手から滑り落として、風は彷徨う様に樹の部屋へと向かう。

「樹…いい、いつき…?」

部屋には誰もいない。机の上の開いたままのノートや、つけっぱなしのパソコン。すれ違いで出掛けたことが伺えた。

行き場のない感情を抑えきれず、だが何をするべきかも解らない。

徐ろに開いたままのノートに目を向けると——

「っ!？」

風の目に入ってきたのは、「目標」と大きく書かれたページ。その後には声に戻ったらやりたい事をリストアップされていた。

——勇者部の皆とワイワイ話す

——クラスのお友達とおしゃべりする。

——カラオケに行く。

更に横のページには「体の調子を良くする為には」との文字の下に、『たっぷり寝る』、『栄養のある物を食べる』と綴られている。

「そんな…そんなことって…」

よく見れば、本棚には『声』の発生や喉に関する本が並んでいる。それだけ樹が『夢』に向かって真摯であり、努力を怠っていなかったのだ。

「…樹は…夢を、失った…? まだ、信じて…努力してたのに…? そんな…! そんなの…ぐっ、あ、ああ…」

嗚咽が漏れる。

安定しない呼吸。
頭が真っ白になり、次の瞬間には真っ黒に塗り潰される。

——その感情は、一体何と名付ければ良いものか。
怒り。悲しみ。恨み。後悔。恐怖。——数え切れない負の感情が
犬吠埼風の心を黒く染めあげる。

もうどうとでもなれ。そんな言葉が喉奥から溢れ、身体中を支配し
た。

「潰す…ぶっ潰す!!大赦ア…あ、あ、あ、あアアア!!」
黄色の花弁が部屋中に散乱し、風の服は黄色と純白の勇者へと変わる。

流れる涙を乱雑に振り払い、マンシヨンの窓から飛び出す——
潰す。大赦も、神樹も——全て潰して、希望を踏みにじって、同じ
目に遭わせてやる。

大人がのうのうと生きていて、妹が『夢』を永遠に失うだなんて不
公平だ。みんな、全員、失えばいいんだ。

流れる景色が、途端に気持ち悪く思えた。
人の犠牲で成り立つ平和。意味が無いだなんて思わない。だが風
にとつて、千人の一般市民よりも一人の妹の方が大切だ。

その妹が犠牲になって、成り立つ世界だなんて——吐き気がする。
(潰す…いっつぶす、つぶす、ぶっ潰す!!)
大剣を担ぎ、砂浜を蹴った刹那——

——ビゴンツ!!

「ガ…ッ!？」

その音が鳴ると同時に、眼前が黄色に埋め尽くされた。刹那、頭
部が千切れそうになる感覚に明確な”死”に近しいモノが浮かぶ。

浜辺に背を打ち付け、肺から空気を吐き出した。

「ゲホッ……ゆい、と……?」

漆黒を思わせる髪に、パーカーを模した黄色と純白の衣装。

見間違えたりなんかしない。——郡唯斗だ。先日、醜く罵り、八つ当たりだと理解しながらも裏切り者の烙印を押ししてしまった彼だ。

吹き飛んだ風に、唯斗は武器を携えゆつくりと歩み寄る。そして2m程離れた地点で足を止め、混乱している風を見下ろした。

——イレギュラーな勇者、郡唯斗は無表情で武器を風に突きつける。

「何のつもりよ…!?!」

「っ——!」

「っ!?!」

再び振り上げられるピコピコハンマー。場違いなその武器は、本来は人外の化物であるバーテックスを容易く沈める凶器。その恐ろしさは功績が物語っており、近くで見続けた勇者ならば特に判る。

其れを向けられる威圧は死神の鎌を連想させ、風の背筋を凍らせた。

振り下ろされる攻撃を転がって避け、体勢を整える。大剣を突き付け、風は叫ぶ。

「なんで邪魔するのよ……この…裏切り者おオオオオ!!」

「——」

無表情な彼は一切の言葉を発しない。

ただ哀れみと怒りを孕んだ視線を風に向け、風は其れを見下されていると解釈する。互いに武器を構え、衝突する瞬間——

——ビゴンッ!!

——ビゴンッ!!

突如、背に二つの衝撃を受ける。

「ゴホッ……ぶん……しん……!?!」

吹き飛ぶ身体に異物感を覚えながら、横目で後方を振り向くと二人の唯斗が居た。

——分身。

蒼鴉の発現と共に得た能力。最大二体——本体を含めて三人の唯斗は風を囲むように散開し、地を蹴り迫る。

「ナメめるなあ!!」

「っ!」

黄色の花弁を手に纏わせ、次の瞬間には三本の小太刀を放つ。

三人の唯斗は眼前に迫る小太刀を避け、再度構え直した風を見て一旦距離を置く。

いくら武器が強力とはいえ、唯斗は真正面から風と衝突すれば確実に押し負ける。唯斗は元よりバーテックス^{ジャイアントキリング}特化の性能だ。稀に夏凜と訓練しているが、それでも対人戦が不向き。

最初の不意打ちも、分身による搦手も、結局は武器の性能にモノを言わせた戦術でしかない。

風の容易く振るう大剣や不意に飛んでくる小太刀は、常に分身の操作で集中力を要する唯斗には対処が難しい。

そして風もまた、それが有効だと判断した。

風は、何よりもまずピコピコハンマーを警戒している。

ピコピコハンマーによる連撃は、友奈の必殺とも言える『勇者パンチ』を容易に連発できているに等しい。

〈精霊〉のバリアはあるが、唯斗の攻撃は以前のバーテックス戦で友奈や唯斗自身を骨折させている。其れが『満開』による威力アップだったのは風とて理解しているが、今は相手が三人——同時に攻撃を喰らえば『満開』の一撃にも匹敵するだろう。

バリアを貫通する衝撃は、風の動きを単調にした。

「はっ!」

——小太刀で三人を牽制。

風の攻撃で唯斗を倒すことは出来ない。

バリアがある限り、勇者同士の戦いは不毛に終わる。それが本来の仕様であり、異常なのはバリアを貫通する術を持つ唯斗だけだ。

小太刀で牽制しつつ、攻撃しようとして地を蹴る唯斗に大剣をぶつけ

る。ピコピコハンマーと大剣ならば、リーチは大剣の方が勝る。

「はあああ!!」

近くの一体を斬り飛ばし、煙を立てて消えたことを横目で確認した。分身だったらしい。

唯斗の本体と分身体は、攻撃を当てるまで判断がつかない。同じ見た目に、挙動は一つの脳で行われている。分身もまた、体の性質が違えば本体と言っても差し支えないのだ。

——だが、風は見極めた。

「——ギリギリ安全圏で、攻撃を受けないようにしてる奴……アンタが本体だああ!!」

虚を着いた風のフェイントに、唯斗は反応出来ない。分身と思わしき唯斗を振り切り、驚愕の表情を浮かべる唯斗の脳天を大剣が捉える

——刹那

「っ?! なっ…ぶ、分身!?!」

大剣は僅かな手応えだけを残し、空を斬る。本体と思っていた唯斗は薄い煙に飲まれながら、空気に溶ける様に消えた。

——ビゴンッ! ビゴンッ!!

続けざまに放たれる連撃に、遂に風は屈する。

「——馬鹿じゃねーの?」

「あ…ああ…」

その目は酷く冷めていた。虫や家畜を見る様な、下等な存在に哀れみすら込めた視線。無情にも尖った目付きは宛ら『蛇』をも連想させる。

それは数日前までは共に騒いで、くだらないことで喧嘩をしていた彼とは別人にしか思えない。

断罪を受ける感覚。彼の——郡唯斗の”素”だったのだろうか。勇者部の皆に染まり、色付いた郡唯斗の”オリジン”。

『恐怖』が風を支配する。

「——」

「や、やめ——」

無情にも振り下ろされる一槌。

風は震えに抗うことも出来ない。目に後悔と恐怖を浮かべ、流れる涙に不快感を覚えながらも眼下に刻々と迫る『死』に現実感を持ってないまま――

「唯斗くん!!!」

「っ!?!」

山桜の花弁を纏い、勇者は現れる。

「ダメだよ! 喧嘩なんて…こんなの間違ってる!!」

「…うるせえよ」

風を庇い、両手を広げる友奈。一旦は止まったピコピコハンマーも再び振り上げられ――

「こんの…アホ唯斗おお!!」

「ぐっ…!」

「夏凜ちゃん!?!」

視界の端に映る紅い影に蹴り飛ばされる。

「何やってんのよ、このバカ! 柄でも無いことやってんじやないわよ!!」

「っ…!」

言葉は返さない。

無駄と解っていたからか、それとも、揺らぐと確信していたからか。対立している筈なのに、彼女——三好夏凜の目は単なる呆れだ。我儘な身内を窘めるような、親しみを込めた呆れ。

「……チツ」

「あつ、唯斗くん！」

唯斗は風を睨み、舌打ちを残して場を去った。

——取り戻したかった。

唯斗は、『過去の自分』を取り戻したかった。先代の勇者として戦い、最後には相棒と呼称する相手を庇った『郡唯斗』に。

最初に、自分が三ノ輪銀を庇ったと聞いた時は、真つ先に『有り得ない』と思った。そんなヒーローみたいな自分も他人も傷付けるだけの自己犠牲心なんて、今の郡唯斗は持ち合わせていない。

だが事実、過去の郡唯斗は自己犠牲を代償として仲間を守った。

だから憧れた。

だから嫉妬した。

唯斗は正義の味方じゃない。勇者や善人、たとえば英雄になつたとしても——人々の平穏を願って、身を削って戦い続ける『正義の味方』には成れない。

その事実が劣等感に変貌する。

——人のために戦える結城友奈に憧れた。

——一心に国防を掲げる東郷美森に嫉妬した。

——責任感を背負い続ける犬吠埼風に憧憬を抱いた。

——大切な人の為に勇気を振り絞る犬吠埼樹に羨望した。

——自信を武器に勇む三好夏凜に艶羨を覚えた。

郡唯斗は一般人に等しい。もしも勇者でなければ、もしも初代勇者の血を引いていなかったら、もしも勇者部と出会わなければ——身の丈に合わない『力』は、酷く不相応に思えた。

大好きだった居場所を失った少年。その末路が欠片も持ち合わせていない『自己犠牲心』だ。それが皮肉に思えて、余計『過去の郡唯斗』に嫉妬した。

もう継るものは無い。居場所も、仲間も、裏切り者と罵られ捨てた。早々に見限ってしまった。

——だから、これは大嫌いな自己犠牲心だ。

全ての敵意を一身に向けさせ、平和を保つために『必要悪』。

大赦を潰しにかかる風を見て、唯斗には選択肢があつた。風を止め偽りの平和を謳歌するか、誤解を解くために彼女と共に大赦に攻撃をするか。

唯斗は前者を選び、尚且つその中でも最悪の手段を敢えて選んだ。元より、絶交をした唯斗の説得で彼女が止まるとは思えなかった。ならば、唯斗に出来るのは殴り、潰すことのみ。たとえ恨まれたとしても——否、唯斗は恨まれたかつた。

ただの自己中心的な考えだ。いつその事、恨まれた方が楽だから。一度壊れた関係に対して、もう一度だけ槌を振るうだけだ。

軋む心臓に手を当てて、浅く呼吸する。

「っ……」

そして不意に、誰かに腕を掴まれる。振り解こうと思えば直ぐにも出来るほど、弱い握力で腕を引かれた。

「何の用だよ、樹。……お前はあっちに行くべきだろ」

へ 話をしに来ました へ

犬吠埼樹だった。

似合わない勇ましげな表情を浮かべる、芽吹き色の勇者は唯斗の真正面に立ち、睨みを受け止める。

「はっ、お前は話せないクセに……面白いジョークだな、おい」

へ 唯斗先輩……まったく似合ってますね！ へ

「……は？」

傷付けて、突き放そうとした言葉に対して、犬吠埼樹はこの場にそぐわぬ満面の笑みで返した。

◆◆◆オマケ◆◆◆

結城友奈

・『郡唯斗』を一番盲目的に観ている。『郡唯斗』だけに限らず、勇者部の部員を観る際には必ず『勇者』のフィルターが掛かっている。勇者ならば、人助けをして当然。その前提を掲げて、皆を解釈している。

東郷美森

・『郡唯斗』を一番誤解している。その本質を見誤っている。皆を先導し、戦う姿こそが彼らしいと謳うが、皮肉にもそれは彼の『憧れ』でしかない。本当の『郡唯斗』は、もっと『人間的』だ。

三好夏凜

・『郡唯斗』を一番理解している。内心に抱えるものは解らずとも、その苦しみや葛藤は十二分を理解して、その上で鼓舞する。其れは優しさか、厳しさか。何れにしても、根幹は同じだろう。

犬吠埼風

・『郡唯斗』と一番近い視点を持つ。風もまた、自己犠牲による平和に違和感を覚える。二人がよく喧嘩するのは、その波長が合うからだろう。競い合い、共に成長出来るライバルに近しい関係だ。

犬吠埼樹

・『郡唯斗』を一番客観視出来ている。彼の内面を理解し、その上で周りとズレていることを把握している。もしも同学年だったら、今の『郡唯斗』の相棒的な立ち位置に居た可能性だってある。

似合わない『いつも通り』

〈唯斗先輩…まったく似合ってませんね！〉

「……は？」

場に不相応の満面の笑みで、文字を綴ったスケッチブックを見せる樹。想像もしなかった返答に、唯斗は固まる。

そんな様子を想像通り、とでも言いたげにニコリと笑みを浮かべ、樹は再度視線をスケッチブックに向け、筆を動かす。

〈悪者のマネ、ぜんぜん似合ってないですよ？〉

「い、いや…全然、一切合切、微塵も、例えトイゴの魂を賭けたとしても真似なんかじゃないから。自称……影で極悪非道で悪逆無道、強悪非道な大逆無道と称された唯斗くんだから。自称……とある界限では鉄血にして熱血にして冷血と噂された鬼勇者だから」

〈全部自称……〉

冷静を装って取り繕うも、樹の巧みな話術——もとい、幼稚な唯斗の返答で呆れられる。彼女の姉たる風を叩きのめした後なのに、違和感しか覚えない飄々とした態度。友好的すぎて、罨すら疑ってしまうほどだ。

罨なら罨で、受け入れるつもりだ。事実、それだけの事をやった自覚は痛いほどある。だがどう考えても、樹は普段通りの対応しかしていない。

「…何が目的だよ？」

努めて冷たい声をイメージし、暗に関わるなどの意を込めて突き放す。

樹はこてん、と首を傾げた後に考える様な素振りをみせ、ゆっくりとスケッチブックに文字を刻む。

〈不器用でさみしがり屋な人に会いに来ました〉

「……多分、人違いだぞ？」

〈自覚なし!?!〉

素の反応で返され、逆に樹が驚く。

残念ながら、唯斗は己の客観視に関してはミジンコにも劣る。彼は本能八割理性二割で生きているに等しい生態だ。ド直球な言葉をぶつけないと察しない、己に関しては何処までも鈍感な質だった。

ちよつとだけ洒落た言い方をしたが、何も察して貰えなかった事実
に樹は慄いた。

へ 不器用できみしがり屋な人に会いに来ました …唯斗先輩に会い
に来ました へ

「なんで書き直したんだ…？」

へ シヤラップです!! へ

「お、おう…」

それは太いマーカーペンで殴り書かれた字だった。

樹はほんのちよつとだけイラツとした。本当に少しだけ、無意識に
スケッチブックが軽く歪むくらい手に力を入れる程度のイラツだ。

唯斗は珍しく察した。理由は皆目見当もつかないが、取り敢えず逆
らつたら駄目な雰囲気は感じていた。

「……樹は怒ってないのか？俺、先輩のことボコツてきたばかりなん
だけだよ」

へ お姉ちゃんと唯斗先輩の喧嘩はいつも通りじゃないですか へ

「いや…違うだろ。俺と先輩は喧嘩することはあっても、暴力だけは
……あれ？あの先輩…めちやくちや暴力に走ってね？俺、殴られた
し蹴られたぞ…？キヤメルクラツチで背骨が軋んだんですけど…？
意味わかんねえ、俺は煽ってるだけなのに…」

へ 自業自得でけんさくしてください へ

もう五〇六発は殴っても良かったのではないかと思った。勿論、今
から引き返して殴り掛かったりなどしないが。

へ とにかくー！ へ

バンツ、と足を踏み出し、樹は予め書いていたであろうページを捲
り見せる。

「別に仲直りして、だなんて言いません」

「……？」

ならば何をしに来たのか。安直な疑問が唯斗の頭に浮かび、樹はその答えを示すようにページを捲る。

「強制されてする仲直りなんて、ニセモノですから。私は…ただ少しだけ、あなたに自分を大切にしたいだけなんです…！」

「…カッコイイセリフだな、おい。なんかの漫画のパクリか？」

「わたしです！」

「本当にカッコイイこと書うなよ…惚れちゃうだろ」

「っ！…っ！…ッ!!」

何かを思い付いたのか、樹は一心不乱にペンを振るい頬を緩ませる。まるでイタズラを思い付いた子供か、将また思わぬ喜びについてニヤリと微笑してしまったかの様だ。

筆を止めた樹は奇しくも、某駄菓子馬鹿を連想させるドヤ顔を晒し、バーンと効果音が付きそうなほど堂々と文字の羅列を公開する。

「君の瞳に乾杯だぜ！」

「途端にカッコ良さが消え失せたな…」

「っ!？」

樹の思い浮かぶ中で最もカッコイイ台詞だったが、想像に反して不評。頭の中では『そんなバカなっ!？』と衝撃を言葉にして叫んでいる。

少女漫画脳の彼女は、この世に存在するイケメン達は皆同様にその台詞を言っていると思っていた。

そんなイタい言葉も、せめて樹が高身長系イケメンな英国紳士だったのであればまだ似合っていた可能性も無きにしも非ずだった。だが現実とは異なり、とてもじゃないが、中学一年生のドヤ顔を添えたそれは、不相応にも程があつた。

「…自分を、大切に…か。俺ほど自己保身に走るヤツもなかなかいないと思うけどな」

「でも、最近の唯斗先輩は変です」

「変って…俺と一番程遠い言葉だな」

「むしろ双子レベルで同一ですよ…」

「俺が変なんじゃない。周りのヤツらがズレてやがるんだよ。トーゴーとか煮干し中毒者とか。最近なんか雌豚を名乗るヤベー奴も出てきたし」

「類友って知ってます？」

まさに類は友を呼ぶ、だった。樹は割と自分も含まれている事に気が付かないまま、知り合い全員から変人と扱われる先輩に呆れを孕んだ眼差しを向けた。

「……………」

いつも通りの会話を楽しいと感じる反面、樹に対して形容し難い罪悪感を抱いてしまう。

勇者部で樹と夏凜にだけ隠していた『真実』——『満開』の後遺症について彼女が知ったら、どんな反応をするのだろうか。

姉のように怒るか、東郷のように絶句するのか。もしかしたら、友奈のように諦めず希望に縋るのかもしれない。

最悪なのは、絶望してしまうことだ。

今の犬吠埼風は『絶望』に溺れている。其れ故に、後先を顧みず大赦に復讐しようとした。

結局、唯斗は何も解らない。

判断が出来ないから、何が正しく、後悔のない選択なのか解らない。

全てを樹に伝えるべきか。伝えたとして、自分は彼女に何が出来るのか。人は蔓延る『不明』を極度に恐れる。唯斗もまた、不確定事項を酷く嫌い、思考も行動も鈍り曇る。

隠すのが最善なのか。

だが、隠された分だけ識った際の負の感情は肥大化する。——いや、それならばもう手遅れなのかもしれない。

既に——最初から、勇者には『満開』や『勇者』という”役割り”について伏せられていた点が多過ぎた。『満開』について単に使えば強くなる、とだけ説明されて、その時の唯斗は確かに疑問を抱いていた筈だ。拙くも考察して、日記を綴りながら脳を回していた。

恥ずべきは、それをまったく活かしていない事だ。

最初に疑った。

本当に『満開』は使い続けるだけで強くなれる機能なのか。その時に頭に浮かんだ先代の勇者についても、きつとただの妄想ではなく、微かに残っていた記憶が自分自身も把握出来ないまま整理されて、導き出した一種の『答え』だったのだろう。

(遅すぎるだろ…)

識るのも、報せるのも、理解するのも、気が付くもの、全ては後悔の後だ。本当に遅い。いつそ自分は何も悪くないと自己保身に走りたくなるくらい、遅すぎた。

——ああ、いつその事…何も考えずに全てを打ち明けようか。

一瞬でもそう思い、大切な後輩を蔑ろにした。それが罪悪感を駆り立て、余計に判断を鈍らせる。

へ また難しい顔してる…

「ぼつか、お前…思慮深さが俺の魅力なんだよ。あの山田くんに負けないほどのミステリアス・ヒューマンなのさ」

へ また山田さん…?

「……ごめん、訂正する。俺如きが全世界思慮深さコンテスト第一位を二十回連続制覇した山田くんには敵う訳がない…!くっ…!山田くんの昼御飯用カップラーメン選び計一週間記録を見せられたら、俺なんて夏凜と煮干しの関係くらい浅はかだと思えない!!」

へ ただの”ゆるゆるふだん” ですよ!?

「ふっ、それこそ浅はかな考えだな」

へ イラッ…!

本当に、変わらないいつも通り。まるで嵐の前の静けさの如く、掻き乱された日常は一瞬の平穩を紡ぐ。

——そして其の『平穩』もまた、崩れるのはいつも急だ。

もしかしたら、あの日——『勇者部』が本当の意味で『勇者』になった日と同じかのかも知れない。続くと思っていた日常が唐突に終わりを告げるように、終わりを確信した戦いがまた『唐突』に訪れる。

——ドゴオオオオオン

「っ！な、なんだ!?!」

響くは轟音。何かが砕け、その後にもまた続けて鳴らされる破壊音。遠い視界の先、四国を『外』と頒つ『壁』は瓦礫と砂埃を舞わせる。

動揺する唯斗の腕を樹が引き、同じく慌てた様子でスマホの画面を唯斗へ向ける。

「っ！」

「なんだよ……これ!?!」

立て続けに鼓膜を激しく揺らすのは、スマホから鳴らされるアラーム音。

勝手に起動された勇者アプリ。その画面にはバーテックスが襲来した際に紅く表示される『樹海化警報』の文字——ではなく、『特別警報発令』の文字。

其れが如何に異常事態なのか、『特別』の文字を見れば直ぐに理解出来る。

「っ……!」

状況を把握する暇もなく、四国を囲む壁の先から光と花卉の波が津波のように流れる。もう見ることは無いと思っていた、『樹海化』の現象だ。

「なんだよー何が起こってるんだよ……!?!」

今まで聞いたことの無いほど、切迫した唯斗の声。いつも、何だかんだで勝利をもぎ取ってくる彼の動揺は、樹にも感染した。やがて光は世界を飲み込み、樹海を顕現させる。

「…いい、樹…やべえよ。俺のスマホ、バグったんだけど…」
「っ…っ!!」

樹は首を横に振るい、暗に現実を見ろと告げる。

勇者アプリ。その機能の一つには、マップがある。樹海と現実における同アプリ保有者の位置情報と、打倒すべく神敵バーテックスの位置。

唯斗が現実逃避を始めた要因の一つは、敵の数だ。画面上部は敵反応で埋め尽くされている。つまり、襲来した敵は数え切れないということだ。

その殆どはバーテックスの下位的存在、通称『星屑』と呼称される、白色の袋のような身体に触手と巨大な口のような器官が備わっている生物だ。

その夥しい量と縦横無尽に宙を舞う姿は、遠目で見た蛆を連想させ、唯斗の吐き気と現実逃避に拍車をかける。

「い、いや…だって、流石にバグだろ…?じゃなければ、東郷の位置情報がおかしいだろ…!?!」
「っ…!?!」

溢れ出た『星屑』の反応と、奥で浮遊し神樹へと進行するバーテックス。東郷美森はその間に居る。

其れはまるで——この状況を東郷美森が作り出したかのようだ。

「っ…っ…クソ…ッ!やるしかないか…」

左手首のオンシジュームを象った5段階ゲージに目を向け、可能であることを確認する。

先日のバーテックス戦や、先程までの風との戦い。その影響で、既に唯斗は『満開』が可能となっている。後は覚悟を決め、叫ぶだけだ。ふと、不安に表情を曇らせる後輩を見る。

まだ何も知らない彼女。彼女ならばきつと、例え察していたとしても唯斗を信じ、共に『満開』をしてくれるだろう。

故に、唯斗は――

「樹。友奈達と合流してろ」

「っ!?……………」

先輩はどうするのか、と視線が問い掛ける。きつと、彼女は戦う意思が固まっている。元から強い友奈と違い、樹は敢えて強く在ろうとする者。だからこそ、樹は間違いなく誰よりも強い。

「…俺はトーゴーを回収してくる。あいつ、遠距離特化なのに前線に居たらダメだろ」

そんなのは言い訳だ。そんなのは建前だ。

唯斗は鈍くない。現状で、最もこの状態を起こした可能性が高いのは――明らかに東郷美森だ。

だからこそ逢いに行く。

再び無表情を貼り付けて、やはり似合わないと樹に笑われた表情を作り固める。

「……………」

「そんな心配そうな顔するなよ。…………もう落ち着いた。樹のおかげでな！今心配するべきは、俺に殴られてわんわん泣いてる姉だろ？」

「……………」

ジト目で、『誰のせいだ』と問い詰められる。責めてる、と言うよりは普段の夏凜や風に似たツツコミ。

樹は変わった。勇者部の面々が変わらず己を突き通し続ける中、犬吠崎樹は“自分”を固めて、更に弱さを強さで補った。

誰よりも強く成った彼女は、誰よりも成長した。

「――じゃあ、またな！」

それは仕舞われた『記憶』と一致した“言葉”。

以前――喪失した記憶の中で微かに感じた、覚悟を帯びたセリフ。自己犠牲の覚悟ではなく、また会うための決意。

(…………^{過去}俺も、^今俺と同じだ)

地を蹴り、白い化物の波に向かって叫ぶ――

「満開!!」

空に、オンシジュームが狂い咲き誇る。

殴る

「感慨深いよなー」

「……これまた唐突だね、ミノさん」

園子の言葉通り、三ノ輪銀の眩きは唐突だった。

たった二つだけのスタンドライトに照らされた病室。数十分までの来客も既にとある諸用により場を去った。

残された二人は『事実』に向かう彼女や、その先に待ち構える過去と現在を想う。

「だってさ……あの唯斗と須美が仲良くしてるんだぞ？感慨深すぎて地に埋まるって」

「あく……うん、まあ。中身はあまり変わってないと思うけどねー。わっしーとゆうちゃん、別に不仲ってわけじゃ………うん、喧嘩するほど仲が良いって諺もあるし」

郡唯斗と東郷美森。二人の関係について、何も考えずにたった一言だけでまとめるなら『仲良し』だろう。

それぞれが自分を常識人の範疇に収まると考えており、同時に相手を誰もが認める変人だと認識し、然れどもその変要素に親しみやすさを覚えている。

——つまるどころ、”類友”だ。

しかしながら、園子と銀の記憶には犬猿の仲の二人が昨日の事のように浮かぶ。

似ても似つかない性格同士だった彼らの衝突は、もう数えることも叶わない。

「さーて、どう転ぶかねえ」

「どーかなー？……わっしーが『終わり』を選ぶなら、ゆうちゃんは絶対に『逆』を選ぶよ。——だって、それが変わらないモノだからね」

「ははっ、そりゃ言ってるな」

まるで愁いは無かった。達観したように、友達の選んだ結末を受け入れる——などと言えるほど彼女達は絶望してはいない。

「準備だけしておく？」

「ドーンと構えて友の帰りを待つのも風情だぞ？どーせ、また今回もあのバカがどうにかするだろ。……良くも悪くも」

「まあまあ。備えあれば嬉しいな、だよ？」

「…憂いなし」だよ…」

傍らに差し出されたスマートフォンに目を向け、騒々しいアラーム音に苦笑いを浮かべた。

——人は一人では生きていけない。

名言か、それとも格言か。何処の誰が吐いた言葉かも解らない、確信も確証も含まない言葉。

『一人』の定義は、一体何処に向けられているのだろうか。

その『一人』が世の中の存在『個』だけだとしたら、そもそも人は一人では誕生も出来ない。親があり、先祖がある人間には、『一人』を為すことなど不可能だ。故に『一人』が示すのは必然的に『孤独』のみとなる。

孤独は人を狂気に誘うが、決して無情に殺しはしない。生きていくだけなら、人は『一人』で十分なのだろう。何かを胃に詰め込んで、息を吸い吐くだけ。そんな植物人間の状態だとしても、人は生きていく。

結論、人は一人でも十全に生きていける。

だが然し、寂しい。

本当の意味で『一人』を——『孤独』を選んだ者は、誰よりも強い…否、結局そんなのは仮面を付けただけの弱者に他ならない。

『孤独』を『弱み』と認識して、だがそれでも『孤独』を選ぶのは弱者の権利。決して強者には成れない、ただの『弱者』。

——履き違えるのは『愚者』

——知り得ないのが『強者』

——偽りを選ぶのは『弱者』
——果まで踊るのは『狂者』

さあ、『勇者』は何を為す？

『孤独』を臆し、然し目の前の感情に溺れて全てを薙ぐ『**者**』は果たして——

——時は数十分程遡る。

「……チツ」

「あつ、唯斗くん！」

其れは丁度、唯斗と風の争いに一つの終止符が打たれた直後。

友奈と夏凜が駆けつけたことにより、唯斗は不機嫌に舌打ちを残し場を去った。

咄嗟に追おうとする友奈だったが、後方の風を放っては置けない。腕を掴もうと伸ばした手は空を切り、徐々に遠ざかる彼の背中を執拗に眺めることしか出来なかった。

風と唯斗。

友奈には何方かのみを選ぶことは不可能だ。どちらも大切な仲間
で、唯一無二の存在。

自分がこの場に残り、夏凜に唯斗を追い掛けてもらおうか。将
また、その逆で夏凜に風を任せて、自分はあるのいて行く背中を
目指すか。

その葛藤も虚しく、唯斗の姿が遮蔽物によって遮られる刹那——薄
緑色の影を目に捉える。

(あれって……)

恐らく——いや、確実に彼女だろう。その一瞬のみで、友奈は確信
した。

故に…今、友奈がすべきことも決まった。

「風先輩」

「……………」

返事はない。

ゆつくりと立ち上がった風は、ふらつく足取りで砂浜を歩み、砂に跡を刻みながら大剣を引き摺る。執念に囚われた亡霊のように、安定しない体幹とは裏腹に視線だけはある一点に注がれている。

「風先輩！」

「……………す…な…」

「え…？」

「邪魔…する、な…！」

「っ！」

明確な敵意を持った拒絶。無機質な神敵の殺意とは明確な違い。

——初めて向けられたその感情に友奈は戸惑いを隠せない。繋ぐ言葉に困る友奈に対して、風は先程の唯斗と同様に武器を突き付ける。

「風…あんだ、なんのつもりよ…？」

「黙れ！大赦の犬のクセに！！」

「は…？」

三好夏凜——彼女の所属は『大赦』だ。神樹から勇者として選ばれた友奈達と違い、大赦から派遣されてきた者。

彼女の根幹がどうであれ、その事実は風の疑心暗鬼に拍車を掛ける。

彼女にとって、唯斗は『敵』になった。ずっと味方だと思っていた彼は、無常^{むじょう}に他の勇者を攻撃できる冷酷な奴。風の知らない”郡家としての唯斗”がそれなのだ^{のだ}と、何も知ることの出来ない風は解釈した。

「郡唯斗も！アンタも…!!最初からアタシ達を嘲笑つてたんだ!!」

もう裏切られたくない。騙されるくらいなら、最初から信じない—

突き付ける武器を、瞬きをする瞬間には振り抜きそうな気迫を放つ風。

焦りに唾を飲む友奈とは裏腹に、夏凜は呆れる。馬鹿な彼を窘めていたように、妙に似ている性格の彼女を溜息混じりに見詰める。

「あんだ…本当に馬鹿ね。あの唯斗馬鹿よりも余つ程、馬鹿ね」

「煩い…！」

「煩いのは何方よ。散々喚いて回って、責任も投げ出して…アンタは部長なのに、何も見えてないじゃない。そんなんだから、樹も唯斗を優先したのよ」

「ッ…！」

友奈だけでなく、風と夏凜も唯斗を追う『芽吹き色の影』が視界に映った。その正体や、彼女の目的も。理解して、だが然し風は受け入れなかった。最愛の妹が、裏切り者の彼を選んだのだと受け入れることなど、不可能だった。

「本当は気付いてるんでしょ。唯斗が裏切ってないことも、わざと似合わない真似をしている理由も」

「風先輩…！唯斗くんは——」

「煩い！煩い煩い煩い煩い！！唯斗も、夏凜も！みんな敵よ！！邪魔するヤツは全員！アタシの敵よ！！」

「どうして、そんなに…ッ！」

友奈には理解出来ない。

——夏凜には理解出来る。

故に——

「——そう…：…なら、仕方ないわね。結局、私もアイツと同じ馬鹿なのね…殴つても止める！」

迷いはなかった。誰かのために、という言葉が免罪符となつているのは夏凜とて自覚がある。だがしかし、三好夏凜は馬鹿だ。諫めようと思つていた相手と、同じ行動に出る。

釈然としない気持ちはあるが、三好夏凜は聖人ではない。取れる手段ならば、何だつて取る。

お互いに武器を構える——刹那。

「「「」」」

——各々の携帯電話から騒々しいアラーム音と共に、『特別警報発令』の文字が夥しく並ぶ。

動揺も敵意も、樹海化による”光の波”は総じて飲み込んだ。

「満開!!」

曖昧な極彩色の空に、ハッキリとした黄色い花が狂い咲き誇る。

日輪を象る無数の槌は金メッキに覆われ、見た目とは裏腹に凶悪さを増す。虚空が歪み、純白の紙飛行機が無限に湧く。放られたテディベアはムクムクと肥大化し、一般男性と同等のサイズまで膨れ上がる。感覚だけが消え去った右手にはイカの姿フライが出現し、本能に従い頬張る。

「遊ぼうぜ、くまマン」

『♪——ええ、一緒に踊りましょう』

先程まで無言だったぬいぐるみは、唯斗が声をかけた瞬間、何者かを取り憑いたように流暢な言葉を発する。

——オンシジューム。その花言葉は『遊び心』と『一緒に踊って』。無数の玩具は踊るように遊び、全てを『破壊』する。それもまた、『遊び』でしかない。それだけが、『遊び』の本領。

小さな子供が無邪気に玩具を壊す様に、勇者の『遊び』は神敵に容赦はしない。

「くまマン。現状は理解してるか？」

『星屑とバーテックスの撃破。ついでに、犯人さんを縛れば良いのよね?』

「逆だ。犯人を殴り縛るついでに、あの蛆虫みたいな奴らを塵にするんだよ。はい、金ピコニ刀流で頑張ってるね」

『……この見た目と言い、名前と言い……拳句の果てにこの武器……!本当に、センスの欠けりも無いわね』

「同意見だよ、クソツタレめ……!」

玩具で戦う『勇者』がどの世界線にいるのか。少なくとも、王道バトルの物語では決してないのだろう。

『分身』——紙飛行機ドーン」

——Booom!!

獅子座のバーテックスとも撃ち合える火力は、爆発の連鎖により細々とした星屑を瞬時に塵と化す。無論、バーテックスには決して決定打にはならず、時間稼ぎが関の山。

だからこそ、一体を固定砲台とする。

唯斗の現状では、巧みに操れる分身体は二体中の一体のみ。後の一体は正直な話、持て余していた。とはいえ、脳死で単調作業をさせる分には問題無い。

「唯斗Dが時間を稼ぐから、俺達は邪魔なバーテックスをぶっ飛ばそうぜ」

『：因みに、AからCは？』

「先輩と夏凜に殺された」

『成程、貴方のせいね』

「断言やめて？唯斗くんのガラスハートが壊れりゆから」

『安心なさい。防弾ガラスは簡単には砕けないわ』

雑談を交わしながら、突撃の準備をする。互いに金メッキの槌を両腕に装備し、敵の位置を確認。慣れない浮遊能力だが、不思議と飛び方は解る。『満開』時の武装もだが、使い方は何故か頭に流れ込んでくるのだ。それもまた『満開システム』に組み込まれた機能なのだろうけど、唯斗達は気付かなかった。

「突撃、か…くまマン。法螺貝とか持ってないの？夏凜の精霊みたい」

『管轄外よ』

「へー。んじや、堅苦しいのも柄じゃねーし…ちよつくら遊びに行こ

うぜ」

『ええ、付き合ってあげましょう』

飛び出した唯斗は薄紫の海鷗魚に似たバーテックス——牡牛座に二振りの槌を叩き込む。

「どつこいしよおお!!」

——ビゴオオオオンツツ!!

轟音を立て、元より装甲の薄い牡牛座は地に落ちるよりも先に巨体な風穴を空けられる。そのまま七色の発光と共に出現した『御魂』を、テディベアは見た目からは想像も出来ない身のこなしで叩き潰す。

分と経たず一体目のバーテックスは砂となり、極彩色の地面に塵の山を築いた。

「次い！あの板っぽいヤツ!!」

唯斗と分身体は左右に別れ、蟹座のバーテックスを挟み撃つが——
「っ！」

斜めに構えられた反射板気に攻撃を逸らされる。

前回は格好の的だった蟹座も、知能があるか否かは不明だが——一筋縄ではいかない。

慌てて反射板を足蹴にし、空中に戻る唯斗と分身体。逸らしたとはいえ、反射板には致命的なヒビが入っていた。だが、蟹座の反射板は無数にある。一つや二つだけ壊したとしても、相手の戦力には全くと言っても過言ではないほど——響かない。

ならば手数で押そうと、再度突撃を仕掛けようとする唯斗だが——

『——下手ね。貸しなさい』

「えっ…?」

唯斗の『分身体』が空中に溶け、瞬時に現れたのは六体のぬいぐるみ——合計で七体のテディベアだ。それぞれが唯斗の背に浮かぶ金メッキのピコピコハンマーを取り、敵方向へと構える。

『——』

七体のテディベアはヒットアンドアウェイを繰り返えし、全方向からピコンと打撃音を鳴らす。唯斗の『分身』と手数が必須な『ピコピコハンマー』による攻撃——その一種の完成系が、コレなのだろう。

程なくして、軋み歪んだ蟹座は複数の星屑を巻き込みながら、砂と帰した。

「く、くまマン鬼つええ！このまま逆らう奴ら全員ぶつ殺していこうぜ!!」

『……………ここは私が何とかするから、貴方は犯人さんを殴りに行きなさい』

「了解。さっさと殴って、引き摺り帰ってくるわ」

そう告げると、唯斗はマップに映る彼女の元へと向かった。きつと、頑固な彼女は殴らないと止まらない。だから、彼女と初めての喧嘩をしに行こう。本音をぶつけて、武器を交えて——『友達』を救おう。

——決意はより強固となる。

『…私も、変に毒されたかしら?』

テディベアはボソリと呟いた。

弱さの証明

「友奈ちゃん、唯斗君……」外”には…絶望しかなかったよ……！」

東郷美森はたった一人、炎と怪物に塗り潰れた『世界』^{壁の外}に言葉を漏らした。

『死』の具現化。『絶望』の兆し。『厄災』の果て——

親愛する彼女ならば、きつと震えながらも明日を目指すだろう。淡い気持ちを向ける彼ならば、多少なりとも樂觀視出来ただろう。

——だがしかし、東郷美森には『希望』が見えなかった。知ってしまった以上、見て見ぬふりをして偽りに塗れた『平和』に溺れることなど不可能だ。

白化した樹木が重なり、硬化し、四国を覆う『壁』となっている。其れは神樹の加護とも言える『結界』であり、一般人には”外”に蔓延するウイルスを防ぐバリアであると知らされている。

それは元一般人の『勇者部』や、大赦所属である三好夏凜も同様であり、殆どの大赦所属の者も例外ではない。

其の『真実』を識るのは、ほんの数%にも満たない上層部、それこそ『総理大臣』やそれに類する立場、若しくは大赦の上層部のみ。

——辛くて悲しい真実。

乃木園子の言葉を東郷は思い出す。

彼女の言葉は、比喻や過大表現では無かった。地獄そのものと言える”外”の残状と、隠されていた『勇者』の仕様。その二つを知った東郷は——

「もう……こうするしか、ないじゃない……ッ！」
終わらせる事にした。

人の犠牲で成り立つ世界も、真実を隠し最後まで騙そうとした大赦も。死ぬまで身を捧げ続け、大切な記憶すら奪われ、だが決して自死は選べず、身体が大樹の様に動かなくなるその時まで終わらない”絶望”——それを良しとする程、東郷美森は『勇者』には成れなかった。

八つ当たりなのかしららない。
考えなしだと貶しるだろう。

——それがどうした、と少女は悪態をつく。

自己犠牲こそが正義だと憚るならば——

尊厳を捧げることが大人だと語るのであれば——

「私は、勇者にも大人にも……成りたくない……ッ!!」

小さい頃、早く大人になりたいと憧れを抱いた。

子供故に漠然とした大人像。それは両親の様に優しく、ヒーローの様に正義を貫き、漫画の主人公の様に夢溢れる者だった。——数ヶ月前までの自分は、それに何の疑いも持ってなかった。さもそれが当たり前かのように、幼稚な思考で盲目的なフィルターを前に将来を語っていた。

大人は汚い。正義は非道に等しい。

——ああ、こんな世界……存在する意味なんて、あるのだろうか？

途端に、全部が莫迦らしく感じた。

「……………」

触腕を操り、壁の内側に身を投げる。

そして、自由落下と同時に『蒼黒』の銘を刻まれた銃を壁に向けた。目を瞑り、狙いを定めるまでなく連続で引かれた引き金は、銃身内で蒼い爆発を起こし『弾』を繰り出す。

「神樹も、この世界も……」

——壊れればいい。

夥しいアラーム音に眉を歪め、後悔とも言える感情を激情で飲み込んだ。

——壁を破壊し、バーテックスを内に呼び込んでから、どれだけの時間が流れただろうか。

数分だったかもしれないし、既に一時間は経過してるかもしれないな

い。

とうに時間の感覚など吹き飛んでいる。在るのは倒れ伏したいと願う罪悪感と、其れを覆い怒りを燃やす激情。

「……唯斗君……」

眩くのは、意中の相手の名。

軽々しく『助けて』だなんて言えない。不思議と、頭の端は酷く冷めていた。罪なんて自覚してる。だが其れを飲み込む程、東郷美森は『大人』ではない。

——叶うのであれば、殺して欲しい。

もう耐えられない。自死を選べるのであれば、今すぐにでも『蒼黒』で自分の頭を撃ち抜きたい。然しそれもまた、『勇者』には不可能だった。

「随分と、愉快的なパーティーを開いてるな」

「っ！……唯斗君」

「生憎と招待状は持ち合わせてない無法者だけど、遊ばせてくれよ？それとも清楚に、可憐に——一緒に踊るか？」

嘲笑うように問い掛ける彼。

前方には純白と黄色で飾られた神官服を纏った郡唯斗の姿。狂い咲いた彼は、浅く軽薄な態度で嗤う。子供が虫を殺す際に浮かべる、純粹な、悪意も殺意も込められていない、然れど明らかな下等的存在を見下す眼。

内面を見通されている気がして、妙な居心地の悪さも抱かざるを得ない。

「……満開、したのね……」

「パーティーにはサプライズが付き物だからな」

「巫山戯てるの……？」

「真面目だよ。俺が巫山戯てるんだとしたら、楽しい楽しい世界破滅パーティーの開催者はとんだ道化師だな——で、何のつもりだよ」
変わらず、目だけは冷めている。返答次第では、手に持った武器を

容易く振るうだろう。冷静さを欠く東郷でも、親しい彼の機微には敏感だ。

親愛の抜きかけていない、彼には似合わない表情——彼にそんなに表情させているのは、他でもない自分自身なのだ。

此の儘、素直に謝れたらどれだけ楽だっただろう。

しかし東郷はもう戻れない。正義も悪も、彼女には味方してくれない。ならば、双方成敗——両方を利用して、見えない道の果てに在るのかも分からない『正解』を模索するしかない。

「——見た通りよ」

「つまり……友奈と駆け落ちをするために世界を滅ぼそうと、ってコト!？」

「違う……違うから」

「おい、何だよその間。ちよつと良いなあ、とか思ってたんじゃないよな……? 冗談で言ったただけなんだけどなあ」

「……私がこの現状を引き起こしたとして、唯斗君はどうするつもりなの?」

「シリアス顔で突っ切れるとでも……?」

「唯斗君。巫山戯るのも……大概にしなさい……ッ!」

「逆ギレ!？」

東郷は銃を突き付け、雰囲気作り——もとい、話題の路線を元に戻した。

そもそも、今の『勇者』には冗談や雑談で潰す時間など無いに等しい。唯斗ですら会話をしながらでも虚空から紙飛行機を出し続けているし、イカの姿フライも時々頬張っている。

バーテックスの相手は某分身熊に任せるとしても、バーテックスの下位種である星屑は単純に邪魔だ。多少なりとも潰しておくに越したことはないだろう。

「……まあ、理由なんて知らないけど——取り敢えずぶん殴らせろ」

「唯斗君。女の子に暴力は——へブツ!？」

唯斗は東郷の顔面をピコピコハンマーで殴った。バリアがあるか

らダメージはないが、取り敢えず殴った。

「俺は男女平等主義者なんだ。ムカついたら先輩の顔面を殴るし、苛ついたらトーゴのフェイスにハンマー☆GOもする。煩ければ、にぼっしーの面に愛と慈しみを込めたユイトブローを喰らわせることだつて厭わない！フェイスクラツシャーとは我のことなり!!」
「人の顔面に何の恨みが!」

唯斗が執拗に顔面を狙うのは、きっと偶然だろう。敢えて理由付けるとしたら、彼が男女平等を謳う迷惑者だからだろう。これにはストーカー趣味の迷惑者も驚きだ。

「トーゴ…お前、結局何したいの?」

「シリアス顔で雰囲気に戻そうとしてる…?」

「東郷。巫山戯るのも…大概にしろよ…ツ!」

「逆ギレ!」

フェイスクラツシャー唯斗は雰囲気作り——もとい、話題の路線を元に戻した。

ともあれ、無駄話に割く時間は無い。話すにしろ、武器を交えるにしろ、早々に片付けなければいけない。

「——私は…この腐った世界を、終わらせるの」

「おいおい、正義の勇者様が世界破滅をお望みで?永久に完結しなそうな長タイトル異世界ライトノベルにでも影響されたのかよ」

「…唯斗君も、”外”を見れば判るわ。最初から私達は『生贄』として、身体も命も捧げるしかなかった。私達が終われば、きつと幾らでも代わりを用意する。この世界で、私達の命は軽すぎる!!…それがこの世界の——神樹様の提示した現状維持策よ!」

『平成』から『神世紀』——約三百年の間、神樹に選ばれた『勇者』は力尽きるまで戦い、その殆どが無惨にも命を散らした。

葛藤はあっただろう。中には真実を知らぬまま死んでしまった『勇者』だつて数多くいた筈だ。

今の『勇者』も、いずれはそうなるだろう。何も考えず、ただ『勇

者』だからと物事を盲目的に捉え続ければ、最後には散るしかない。だから、東郷は決断した。

「何世代も前から、『勇者』は命懸けでバーテックスを斃して、でもそのバーテックスは時間が経てば復活する！『勇者』が終わるのは、死ぬときだけなのよ!!」

「再三説明どーも。つまり、死にたいから全員巻き込んでやろうって話？これまた壮大だな。B級映画にも満たないクソ設定すぎて観る前から萎えるわ」

「っ！…ふざけ——」

「巫山戯てるのはお前だよ、東郷美森。死にてえなら勝手に死ぬ。俺達を巻き込むな。お前は結局、責任を放棄したただけだろ」

「そんなこと！」

「矛盾だらけの言い訳なんて聞きたくねえよ。——お前に殺されるくらいなら、定期的にバーテックスをぶっ潰してる方がマシだ。どうせ、こう考えてるんだろ？『どうしよう、こんなの…私がどうにかするしかない!』ってな」

それは『傲慢』だろ、と唯斗は続けて吐いた。

歯を剥き出しにして襲いかかってくる星屑を紙飛行機で一掃しながら、しかし彼の視線は東郷の眼を見続ける。見透かすように、訴えるように、語り掛けるように。彼女の新たな『答え』を待っていた。「残念だけど、俺は友奈みたいに理想を地で語ることなんて出来ない。先輩とか夏凜みたいに気合論で物事を語ったりはしないし、樹みたいに無理して強く在ろうとも思えない」

「そんなの、私もだよ…!友奈ちゃんはずっと変わらず強いし、樹ちゃんと夏凜ちゃんは変わった。風先輩だって、きつと仲間のためなら直ぐに立ち上がれる。……私は唯斗君ほど強くないから、こうするしかないの!!」

「…なるほどな。ずっと、違和感があったんだよ。東郷だけじゃない…樹と夏凜以外、みんな勘違いしてる」

「…勘違い…?」

東郷の言葉に、唯斗は違和感を覚えた——いや、もっと、ずっと前

からだだった。特に友奈から強く感じる違和感は、東郷と、微かながらも風からも伝わってきていた。

「俺は、そんなに強くねえよ」

どうして結城友奈は郡唯斗自分を紛いの無い『勇者』だと思えるのか。どうして犬吠崎風は郡唯斗自分を『背負える側』だと錯覚しているのか。どうして東郷美森は郡唯斗自分を勇敢で強い者だと認識しているのか。

その違和感は歪な確証となった。

「俺は過去も、今も——何も変わらない。俺だけが全く変われないんだ。受け入れて踏み台になる過去も、見上げて目指す未来も見えない。そんな俺が、強い？……とんだ皮肉だな」

「記憶、喪失……」

「……なんだ、銀と園子から聞いてたのか？」

「……で、でも！それでも唯斗君は強いよ……！沢山バーテックスを倒したし、いつも私達を助けてくれるじゃない!!」

「それが勘違いなんだよ」

郡唯斗は正義の味方ではない。

——これまでも、これからも。彼は皆を護るために戦っているのではなく、身に降りかかる火の粉を振り払ったに過ぎない。決して、勇者としての使命感ではない。

戦わなければ、自分の平穩が脅かされる。勝たなければ、殺させるだけ。だから戦って、武器を振るって、勝ち続けなければいけなかった。

其れを成すための、相応な『力』はあった。

見た目こそ玩具だが、郡唯斗の勇者としての武器は彼にとって相性は抜群だった。たとえ他の『勇者』よりも身体能力で劣っていたとしても、其れを補い、それでもお釣りが来る程度には適性があったのだ。そんな『力』を自分だけのために振るう少年が、どうして『強い』と錯覚できようか。

本当に強ければ、仲間を護る余裕がある。

本当に強ければ、現状へと至らなかった。

本当に強ければ、劣等感なんて生まれなかった。

強大な『力』があっても、少年は弱いままだ。

「俺が戦うのは、自己保身のためだ……」

「……じゃあ、どうして唯斗君は『満開』をしたの……?」

「……それは……」

唐突な問いに、唯斗は咄嗟に返す言葉もその意味も、見つからなかった。

「『満開』をすれば、体の機能を失う。全部が自己保身だって言うなら、唯斗君にとって『満開』はデメリットしかないでしょう……?」

「そんなの……樹に、変人の相手をさせる訳にはいかないからだよ」

「……変人が誰なのかは置いといて、それは唯斗君が樹ちゃんを護るって思ったからよ。冗談みたいに誤魔化しても、唯斗君は大嫌いな自己犠牲を成した。……それは、立派な強さよ」

「これが……俺に封印されし力……ツ!」

「そんな仰々しいものじゃないよ!?!……またそうやって、誤魔化そうとするんだから」

「……」

それでも、唯斗は弱さしか見えない。

彼女の見える『強さ』は紛い物だと思えない。

「……御託はいいから、さっさと終わらせるぞ。俺は、樹と約束してるんだよ。お前を連れ戻すって」

「……私は、止まるつもりはないわ——『満開』」

捧げるための『合言葉』——蒼の花弁が東郷を覆い隠し、空には巨大な朝顔が咲き刻まれる。風に乗せられ集まった花弁は巨大な球体となり、花形の可動砲台を展開した移動台座となる。

「なあ、トーゴー。俺が無策でお前に挑むと思う? 予言してやるよ。お前は間違いなく負ける」

「……奇遇ね。私も、敵になったら厄介な唯斗君に有効な——いいえ、唯斗君だけに通じる策があるわ」

双方、表情には微かなながらも自信がある。それは暗に冗談や強がりではないことを物語る。

それぞれが徐ろに片腕を上げ、明後日の方向を指さし――

「あつー！あんな所に裸の友奈が!!」

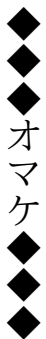
「あつー！あんな所に空飛ぶイカの姿フライが!!」

「何イ!?!」

馬鹿と間抜けは互いの『策』に容易にも乗せられた。もちろん、それぞれが向けさせられた方向には極彩色の空しか広がってはいなかった。

「…何やってるんだろう?」

丁度その場に到着した友奈は、子供じみたやり取りを繰り返す親友達に困惑を隠せなかった。



『蒼黒』

・とある少女が勝手に名付け、銃身に刻んだ銘。それは持ち主の彼女と、同じく大切な彼を連想させる為に、とある名門ご令嬢が深夜テシジョンでリペイントした一品。黒い銃身に蒼のラインが引かれており、トリガーの部分には小さな隠れサンチョコが描かれている。

元は蒼と白で構成されていた――

『満開』をすると蒼と白に戻る。

問われ、叫ぶ

「……………」

轟と鳴り響く爆発音が連鎖し、遙か後方からは「ピコンツ」と奏でられる不協和音。そんな戦場の最前線は、気まずい沈黙に支配されていた。

「…トーゴー、巫山戯るのは止めろよな」

「唯斗君こそ。少しは雰囲気を読みなさい」

シリアスを慌てて醸し出す——もとい、相手の不真面目さに微かな苛立ちを覚える。

互いに『満開』で常識の壁を軽々と超えた。

唯斗は数多の対神敵武器を構える。感覚の喪失した右手を虚空に流し、空に紙飛行機型爆弾を並べる。左手には背に廻る日輪を模した金色の玩具の一つが掴まれる。

本来はもう一つ在る筈の武装テイベアと、新たに得た『分身』は今使えない。

残された時間も少ない儘、然れど目の前の『仲間』に対して出し惜しみをする余裕など無いに等しい。

東郷は移動要塞を思わせる台座を足場に、今にも弾けそうな蒼光を纏う無数の銃口を目の前の『敵』に向ける。天性の処理能力が備わった技術は、複数同時の砲撃もスナイプの如く正確無比だ。

殲滅力だけならどの『勇者』よりも勝り、移動台座の機能と東郷美森の才能はパズルのピースのように、カチリと合わさる。

「譲る気は無いよ、『勇者』——本気で斃しに来なさい！私は、私の『我儘』を通す!!」

「驕るなよ、『勇者』——連れて帰ってやるよ。『約束』があるからな!!」

二人は『勇者』の役目を放棄する。我儘のために、自分のために、約束のために。傲慢にも、不相応にも、己の主張だけのために武器を交える。

その『頑固さ』は東郷の根幹であり、嘗ては記憶喪失により無色透

明だった唯斗に色濃く反映された部分。味方敵を斃し、終わらせられない
紡ぐ感情。

「——倒れて！唯斗君!!」

「遊んでやるよ、東郷オ!!」

空気を蹴り、武器を握る手に力を込め——

『満開』!!——勇者。パアアアンチイイ!!」

「っ!?」

淡い桃色の花卉を纏い、『勇者』は間に割って入る。

地面を揺らし、巨大な窪地を作る純白と桜色の影。無骨で巨大な
アーム。背に煌めく日輪に、天女を連想させる羽衣。

「…友奈、ちゃん…!」

「…何で居るんだよ」

『勇者』は堂々と地を踏みつける。

惜しげも無く咲き誇る彼女に、東郷は眉を歪ませた。無鉄砲だと叱
るでもなく、自分にはその資格すらないと理解して、冷たい悲痛に内
が引き裂かれる想いが生まれる。

「東郷さんも、唯斗くんも…もう『答え』を固めたんだね」
「…ええ」

「そんな大層なモンじゃないよ。やりたい事をやる、それだけだ」

その問い掛けに東郷は”肯定”し、唯斗は”否定”する。

固めた『決断』は果たして、本当に『答え』だと胸を張って言える
ものなのだろうか。肯定する彼女は、内心では違うと意味付けた。否
定する彼は、心では否定しきれない現実に嫌気が差す。

「…そっか、そうなんだね。それが二人の選択…：やっぱり、見誤って
いたのかな。…：ううん、今も解らない。どうしてみんなが争うのか
も、意固地になる理由も…」

友奈は、友奈だけは理解出来ない。人の善い面しか知らない——受
け入れられない彼女には決して理解が届かない。

三好夏凜は犬吠埼風を受け止めた。郡唯斗は東郷美森を識り、その上で否定した。

ならば、結城友奈は何を成せるのか。否定も肯定も出来ない彼女には、どんな手が残されているのか。

その結論は、既に決めた。結局、結城友奈に出来るのはそれだけだ。その一手で全てを覆すのが彼女であり、何かを成すにはそれ以外の手など無いに等しかった。

「…それでも、私は——『答え』を決めた!!」

『勇者』は猛々しく吠える。濁りの無い本物は正義の導。その在り方は『勇者』の覇道。世界に祝福された主役は舞台の中心で嘆きを勇気に変換する。

「世界を護る！東郷さんと唯斗くんも勇者部に連れ戻す!!私が全てを背負ってみせる!!」

『正義』は傲慢にも我儘を押し付ける。

遠慮も、謙遜も、目の前の『親友達』には不要だ。結城友奈の我儘は世界に肯定された正義。しかし、役割を放棄した二人には煩わしい押し付けに過ぎない。

「邪魔。傲慢。煩雑。喧騒——手え出すな、友奈。これは俺と東郷の喧嘩だ」

「ごめんね、友奈ちゃん。私も唯斗君と同じ意見よ」

「嫌だ！これが私の『我儘』だから!!」

唯斗と東郷は友奈に一切の視線を向けない。隙を作れば、相手は躊躇なく攻撃をしてくる。それは直感ではなく、単なる事実。隙あらば喉元に喰らい付くのが彼らだ。

「来た道、戻れよ友奈。先輩がバーサークしてるんだろ」

場を掻き乱してから抜けて来た唯斗にはその後など判らないが、唯斗の知る犬吠埼風は何処までも単純で、誰よりも面倒臭い性格だ。

あの程度で心が折れてしまうなら、唯斗も最初からもっとマシンな方法を取っただろう。

「大丈夫。風先輩には夏凜ちゃんと樹ちゃんが付いてるから！」

「にぼっしーは兎も角、面倒事を後輩に押し付けんなよ。にぼっしー

は兎も角……にぼっしーは兎も角な、にぼっしーは兎も角」

「超絶大事なことだから四回も言ったのね。樹ちゃんを大切にしているのか、それとも夏凜ちゃんを蔑ろにしているのか……」

面倒事は夏凜に押し付けるといふ、唯斗の習性故の発言だった。悪意からの嫌がらせではなく、彼の野性的本能によるものだ。

きつと某ツツコミ型勇者が聞いたら殴り掛かって来るであろう思考を、唯斗は微塵の罪悪感も抱かずに浮かばせた。

「押し付けたんじゃないよ。信じて任せたんだ！」

「モノは言いようだな。グルグル回る口はトーゴのモノマネか？やめとけ、友達なくすぞ」

「いえ、きつと唯斗君に影響されたのよ。だって私、言い訳をしない事を信条として生きてきたもの」

「は？こんなにも素直で物腰の柔らかい好少年を捕まえて、ひねくれた天邪鬼扱い……？そのバグった脳みそ、ぶん殴ってリセットしてやるよ」

「あれれ!?また喧嘩始めちゃったよ!？」

ヤンキー宜しくメンチを切り合う馬鹿共。それは縄張り争いをする野生動物か、将また娘の教育に失敗したバイオレンス夫婦の様だ。

「……話し合うのって、無理なのかな……?」

友奈はポロリと言葉を零した。返答なんて分かりきっている。それでも、友奈は友達と争いたくはなかった。

「話し合い?大歓迎だよ、俺はな。そこのボンクラが小一時間ほど黙って、奥で座っててくれるならな」

「言ったでしょう、もう止まれないの。簡単に引き返せる所は、とつくの昔に通り過ぎたの」

「だつてさ……察してやれよ。言い訳をしないことを信条にしてる奴が、説得力の欠片もない戯言言ひ訳をしてるんだ。もうブレーキなんてぶっ壊れてんだよ」

「……友奈ちゃん。判らなくてもいい。理解出来なくてもいい。だつて、理解出来たら……それは私達と同類なの。世界よりも自分を優先す

る、欲深い者。決して勇者ではない、愚者よ」

「…親友を理解出来るなら、私は愚者でも構わないよ…」

人は誰しも、劣等感を抱えている。

結城友奈も例外ではなく、その一端を担うのは絆にも喧嘩にもならない『理解』。無くても生きていけるし、在っても邪魔なだけの『理解』。

隣の芝は青く見える。勇者部で結城友奈だけは、本物の『正義』だからこそ、永遠に得ることの無い『理解』だ。

「…東郷さんも、唯斗くんも。止めるなら——私も真似をするしかないよね。夏凜ちゃんみたいに気高く、東郷さんみたいに頑固に、唯斗くんみたいに我儘に！私は、私のために…みんなに染まる!!」

「つまり、喧嘩だな。上等だよ」

「…：撃ち抜く。それだけよ」

——開戦は間近だ。

「邪魔をするなあアア!!」

「ぐっ…：…こんのお！馬鹿力あ!!」

大剣と二振りの刀は火花を散らし拮抗する。

力任せに振るわれる暴力は、確かな”技”により対処される。衝撃を受け流し、時にはいなす。

対処だけなら可能だが、少女——三好夏凜が受けてきた訓練では”手数VS手数”の勝負が当たり前だった。故に、不慣れな相手に対して決め手に欠ける。

双の刃を振るいながら、夏凜はほんの少しだけ昔のことを思い出す。過去の勇者の端末を受け継ぐために、数多の勇者候補が集められ、訓練に励んだ日々。

嘗てはライバルだった彼女達。三好夏凜はその想いも背負って、これまででの戦場に立つてきた。

「はああ!!」

「っ……なんで、邪魔ばかり…ッ」

「背負ってるからよ！」

夏凜を信用してこの場を任せてくれた友奈。馬鹿みたいに似合わない事をしてでも繋げてくれた唯斗。この戦いに敵が乱入しないようにと戦い続ける樹。

「風…アンタだって、背負ってた筈でしょ!? 中途半端に投げ出してらんじゃないわよ!!」

「そんなの…っ……だったら、アタシは——この『怒り』は何処に向ければいいのよ!? 騙してた大赦が憎い! 奪ってた神樹が怖い! 嘘をついてた唯斗が…自分自身に嘘をついてでも止めようとしてくれた唯斗を、信用出来なかった私が許せないのよ!!」

怒りの矛先が解らない。

体の内で暴れる熱。それはもう、無視出来る段階を超えていた。きっとこれは、拙く幼稚な八つ当たりでしかない。

理解しようとも、衝動は収まらない。

怒り。絶望。恐怖。憎悪。

混じり合う『衝動』は全てを壊せと耳元で囁く。身を任せて、大剣を振るうのは楽だった。正当な理由があるのだと誰かが呟く。与えられた権利なのだ自分と誰かが呟く。

もう止まる術など忘れてしまった。

暗闇で少女は溺れ、遂には手を伸ばすことも止めてしまった——

「——なら」

然し、夏凜は手を差し伸べる。

「それなら、全部ぶつけなさい」

言葉で諭すなど似合わない。不慣れなことなど失敗するに決まっている。差し伸べた手は硬く握られる。その挑発は全てを受け止めると宣言する優しさ故。

「アタシは完成型勇者として——いいえ、勇者部の仲間として、部長。アンタを受け止めてあげるわ」

「っ…!」

込み上げる”何か”。熱く、喉元を蝕み外へ出ようとする『感情』。新たに芽生えは感情——『羨望』

犬吠埼風はそう在りたかった。部長として全てを受け止めて、次に進めるだけの強さが欲しかった。八つ当たりも、仲間とのぶつかり合いも。風は決して望んではいなかった筈だ。

正義を掲げていたかった。悪を挫きたかった。人を簡単に殺せるだけの”力”を正義の名の元に振るい、大事な人達との日々を護りたかった。

そうだ。風は——

「アタシは——『勇者』に憧れていたんだ……」

『役目』ではなく『在り方』。純粋な子供のように、御伽噺の『勇者』に憧れていた。悲劇に幕を下ろして、喜劇に変えられる『勇者』に成る筈だった。

それがいつの間にか重い責任感と爛れる感情に飲み込まれて、忘れていた。

「……でも、それはアンタが知らないから……」

「知ってるわよ、私は」

その言葉に、風は目を見開く。彼女が知る訳も無い情報。彼女の言葉がそれを指すのは、察するに難しくなかった。

『満開』には後遺症がある。『散華』……だったかしら。『勇者』は満開をする毎に強くなる。代わりに体の機能を神樹様に捧げて、失った機能は戻らない——全部、もう聞いたわよ。昨日、あの馬鹿からね」

「唯斗……!」

昨日——つまり、風と唯斗が決別した後のことなのだろう。あの場にいた者達だけでなく、三好夏凜も知っていたという事実には動揺を隠せない。

知らせた彼を責めるべきか。そもそも、自分にはそんな権利があるのか。急に与えられた情報の量と、未だに抱えてる自身の問題。風が混乱するのも必然だった。

「私には、『散華』をしたアンタ達の気持ちなんて解らない。その喪失感も、やるせない気持ちも。生半可な理解なら、しない方がマシよ」
軽々しく『その気持ち、解るよ』だなんて吐けるはずが無い。葛藤を知っている。苦しみを知っている。強かった彼女が全てを投げ出してしまう程、絶望している——そんなもの、三好夏凜は軽々しく『理解』を向けることなど不可能だった。

「……でも、それなら相談しなさいよ！私も！樹も！！神樹様選ばれた『勇者』なのよ！影で護られるだけの『弱者』なんかじゃない！！」
三好夏凜には”プライド”がある。『強く在る』——他者を蹴落として、この場に立っている彼女が自信に刻んだ『結論』。目標でも座右の銘でもなく、在る事が最重要であり、まさしく『結論』だ。

弱さの全てを否定しなければいけない。
強さの全てを肯定しなければいけない。

——故に、三好夏凜は強い。

「全部受け止める！それが完成型勇者だ！！」

「——」
羨ましい——単純に、一色に染まった羨望だけが浮かんた。

眩しかった。自信を持って、己を語れる彼女は輝いて見えた。風には足りない”強さ”を、彼女は持ち合わせている。

羨望するだけだった風に、夏凜は”道”を示した。

「——選びなさい。まだ戦うか、全てを護るか。私はどっちも受け入れる。それが完成型勇者だから。あんたは……犬吠埼風は何を選ぶの」

「……り……い……」

「聞こえないわよ！自分の意思で選んだなら！！曲がりの無い意思で決めたなら！！胸を張って、言葉にしなさい！！」

「全部…護りたい…ッ！アタシは——『勇者』に成りたい！！」

問われ、叫ぶ。絶望の淵から希望の糸を辿り、たどり着く為_に声を上げた。それは『勇者』の産声か、少女の成長か。

頬をつたる涙は、不思議と心地の良いものだった。

「だったら、まずは自分を大切にしなさい。あんたには仲間がいる。

大切に想ってくれる家族もいる——大切にする為に、”強く在れ”
魔法も何も込められていない『言葉』は、しかし風の心に強く刻ま
れた。きつと、風はもう挫けない。仲間が居て、その『言葉』が刻ま
れているうちは、犬吠埼風はもう折れない。

涙を袖で乱雑に拭き、犬吠埼風はもう一度”前”を向いた。

「…ありがとね、夏凜。アンタが男だったら結婚でも申し込んでと
ころだったわ」

「勘弁して…結婚だなんて、一人だけで充分よ…」

何処ぞの婚約者候補のアホ面を思い浮かべ、夏凜は小さくため息を
ついた。

一息ついた所で、二人は再び武器を握る。

樹海化した世界で、風と夏凜は現状を何一つ理解出来ていない。東
郷美森が原因を担っているのは解るが、それだけだ。

彼女の居る最前線には友奈が向かったが、レーダーに映る敵反応は
増える一方。

「…それで、どーする？唯斗達の所にも向かおうかしら」

「それよりも先に、アンタのためにバーテックスの足止めをしてる樹
を助けに行く、わ……………？風…大変よ。私の目、可笑しくなってる
わ。樹がバーテックスを蹂躪してる様に見えるけど、きつと気の所為
よね…？」

「…………妹が覚醒した…？」

夏凜と風の視界の先には——

「——っ！」

鳴子百合の花弁を纏った樹が、空中に漂う無数の巨大な拳で蠍座の
バーテックスを殴り潰し、何重にも貼られたワイヤーの壁が射手座の
砲撃を受け止め、繭のように編まれたワイヤーが水瓶座を圧殺する。

背にはアーチ状の日輪を背負い、薄緑に発光するワイヤーを無制限
に放出し続けている。

「っ！っ！！——ッ！！」

滅茶苦茶な指揮をする様に、樹は莫大な量の鋼鉄糸を織り、重ね、物量にモノを言わせる。

「ッ！！」

何重にも織られた鋼鉄糸が天秤座を断斬する頃、風と夏凜は無機質になった目を閉じた。

あの日の言葉

犬吠埼樹がバーテックスを殲滅してる一方で、最前線に居る東郷美森、郡唯斗、結城友奈の『喧嘩』も激烈を見せる。

「はああああー！」

「くっ……！」

蒼白の移動台座からの一斉射撃。

随一の殲滅力を誇る東郷美森の砲撃は正確無比に友奈と唯斗に降り注ぐ。蒼の奔流は上空から友奈の巨大なアームに被弾し、しかし殆ど無傷で弾かれる。

精霊の防壁もだが、『満開』で強化された友奈のアームは最高の武器であると同時に、最硬の盾にもなる。たとえレオ・スタークラスターを撃ち抜いた東郷のレーザーだとしても、破壊するには及ばない。

ならば、東郷が取る手段は手数しかない。

本来なら一撃必殺になり得る攻撃も、同じ『勇者』が相手ならば必殺の意味を持たない。

故に、手数だ。奇しくも、その戦法は東郷美森が最も得意とするものだった。一つ一つの砲台から放たれる放射は本人の狙撃技術と相まって、その殲滅力は他の『勇者』をも容易く凌ぐ。

撃てれば、の話だが――

「どーん」

「かハッ……！」

飛来する金色の槌が複数のアサガオを模した砲台を巻き込み、東郷美森の身体を移動台座ごと、紙の如く吹き飛ばす。

肺から空気を奪われる感覚に吐き気を催しながら、然れども友奈に向けていた照準を解き、全方向に一斉砲撃を実行する。

「チツ……暴れん坊め」

「東郷さん……っ！絶対、止める!!」

唯斗は紙飛行機の弾幕で迎え撃ち、友奈は双のアームをクロスし、強引に突っ切った。

「勇者——」

「っ！させない!!」

「——キイイイツクツ!!」

全ての砲台を極一点に集中させた蒼のレーザーと、炎を纏った友奈の蹴撃が強烈な光と共に激突する。

互いに拮抗する攻撃。力を弱めれば、決して少なくないダメージを受けることは想像するに容易い。

——だがしかし、その拮抗も長くは続かない。

「勇者ア！ロケット!!パアアアンチイイ!!」

友奈は大きく拳を振りかぶり、着脱式のアームを撃ち出した。

「なっ!?グフツ!!」

東郷の身体は移動台座から投げ出され、砂煙を立てながら極彩色の地面に叩き付けられた。

「…東郷さん!」

「…っ!どうして…どうして、そんな目で見るの…ツ」

どれだけ攻撃しても、どれだけ敵対しても、結城友奈はずっと優しい視線だ。温もりを感じる、東郷美森が大好きな彼女の瞳。決して色褪せず、優しく燃える炎の様な眼。

「ちゃんと軽蔑してよ!もつと恨んでよ!……じゃないと、私は…ツ!」

「——出来ないよ!」

東郷の言葉を遮り、友奈は淡い桜色の瞳で東郷を見つめる。

「そんな寂しくて、辛くて、泣きそうな表情…そんなの、恨めるわけがないよ!」

「だったら、邪魔しないで!!どうせ最後には、その優しさだって消えてしまうの!!楽しかった思い出も!今も揺れ続ける想いも……全部、消えてしまうの!!」

『散華』は身体の機能に作用する。それは手や足、五感だけでなく脳も例外ではない。大赦の思惑通り、『勇者』が『満開』を続ければ、いずれは『記憶』も消える。もしかしたら、狂い咲いてる”今”も記憶を消費しているのかもしれない。

事実、東郷美森は鷲尾須美としての”過去”を何も思い出せない。故に、東郷美森が一番恐怖するのは『忘却』だ。楽しかった思い出だけじゃない。絶望も、悲しみも、東郷美森にとっては手放すことなど出来ない。

「——馬鹿なのか？」

気の抜けたような、呆れを孕む声。

「忘れるのが怖い？だから全て終わらせる？……思い出を最初に捨てようとしてるのは、他でもないお前だろ」

「違うー！」

「違くてねえだろ。…大切なら守れよ。喪いたくないなら護り通せよ。お前はなんのために『勇者』になったんだ？」

——これは私の『覚悟』です。守られるだけの私を捨てて、大好きなみんなと共に歩むための！——

「……わたし、は……」

頭に過ぎるのは覚悟の宣言。東郷美森が初めて『勇者』に成った日の言葉。

——私は、勇者になります!!——

『勇者』の根源。あの日、彼が稼いでくれた時間で仲間宣言した。

「東郷さん。あと時の言葉…私は憶えてるよ。……だから、きつと…私は間違えていた」

ゆっくりと歩み寄り、友奈は東郷の手を握る。

「『みんなを護る』の中に、東郷さんも入っていた。一緒に進むって言うてくれたのに…私は、やっぱり間違えてたんだね」

彼女は護る対象ではない。共に戦い、強くなり、同じ歩幅で進むための『仲間』だ。

勇者としての責任感は友奈の目をいつの間にか曇らせていた。自分が護らなければいけない。自分が最後まで戦わなければいけない。強迫観念だった。信仰する神に選ばれて、世界の危機を救い続けて——結城友奈は純白に歪んでいた。

——私は『勇者』になる!!

——私は、『勇者』になります!!

同じ宣言だった。

きつと、込められた気持ちも同じだった。結城友奈が『勇者』になったのは、皆に置いていかれないためだ。尊敬できる先輩や、慕ってくられる可愛い後輩。要領の掴めない同級生。皆に、置いていかれたくなかった。『勇者』への憧れもあつたが、その実は結城友奈の人間性故だ。

だから――

「強くなるう。一緒に、これからも生きていくために」

「友奈ちゃん……うん……うんっ！強く、なろう……！一緒に歩むために！」

抱擁を交わし、奇しくも東郷美森と結城友奈も『強く在る』ことを目指す。犬吠埼風と三好夏凜は『折れないために』、結城友奈と東郷美森は『共に歩むために』、それぞれが抱いた感情は、劣等を返上するためだ。

傍らで友情物語を眺める唯斗は――

「いい話だにやー。さて、郡くんは帰ろうかな」

我関せずで帰ろうとしていた。

『残念ながら、もう一仕事が残ってるわ』

「げっ、くまマン……死亡フラグ建てたのに生きてたのかよ……」

そつと帰ろうと振り向くと、金色のピコピコハンマーを両手に持った成人男性サイズのテディベアが立っていた。所々に焦げ跡や切傷があるが、殆ど五体満足と言っても良いだろう。

『安心なさい。死ぬ時は、貴方も道連れにするつもりよ。ずっと一緒にね、喜びなさい』

「なんて高圧的なヤンデレ発言なんだ……いや、病んでるだけでデレてねえだろ。このクマめ……!!」

無機質な目は何度見ても慣れるものではない。欠片も変化しない表情は、お可愛いヤンデレ風セリフも、無理心中をしようとする哀れな獣にしか見えない。

『……ごめんなさい。流石に、アレは倒せないわ』

「アレって……？……もしかして、あのデ○ボールと元気○を混ぜて炎

でコーティングしたやつ?」

それは炎の球体だった。

レオ・スタークラスターが放った巨大な炎球に似た、だがその何十倍もある超巨大な太陽そのもの。

『元獅子座よ。半壊させたら、覚醒したのよ』

「ユーナ、トーゴー!!ウチの馬鹿熊が敵さんを覚醒させたんだけど!」

「えっ!?!」

『…私が悪いんじゃないわ。世界が悪いのよ』

「拗ねんな!熊鍋にするぞ!!」

『テディベアだから食べれないわよ』

徐々に大きく、炎を纏い、本物の太陽にでもなる勢いで成長する獅子座。やがて東郷の移動台座も容易く飲み込めるサイズまで膨張すると、神樹に向かって空を滑り、猛スピードで発射された。

「太陽…ツ!!?...アレは、獅子座の…?でも規模が違い過ぎる!!」

「東郷さん!唯斗くん!!」

「判ってる。さっさとぶっ壊すぞ」

巨大な炎球の前に躍り出て、唯斗は金色にきらめくピコピコハンマーで反射を試みるが、やはり規模が違い過ぎる。焼け石に水、寧ろ反動で唯斗が吹き飛びそうになる。

東郷は移動台座の可動式砲台の全てで迎え撃ち、友奈も再度装着したアームで押し返そうと試みる。

「止まれえええええ!!」

猛々しい友奈の叫びも虚しく、その勢いは決して緩まない。生身で自動車を押し返す様な感覚に似てる。そして、現実はもつと非情だった。

「……やべっ、限界…かも…」

「唯斗君ツ!?!」

誰よりも早く『満開』をした唯斗に、限界が来た。

飛行能力を失った唯斗は自由落下に従い、地面に身を落とす。ぶつかる刹那、大蛇と蒼鴉が淡い光で受け止めた。

「…っ、疲れた…眠いし帰りたい……」

『満開』は酷く体力を消耗する。連続で何度も咲き誇るなど、本来の仕様ではないのだろう。

しかし、今は狂い咲き誇らなければいけない。世界の破滅を目前に、疲れたからと言って寝てる訳にはいかないのだ。

「……………」

得体の知れない異様感。胸の中で、何かが消えた感覚。手を当て、

唯斗は顔を歪ませる。今回の『散華』は——

「クツソ…：心臓止まってんじゃねえか…ッ！気持ち悪い！…：『満開』!!」

獅子座の炎で紅く燃える空にオンシジュームを咲かせ、再度全装備を顕現させる。

握り直したピコピコハンマーを構え、脚に力を込めたところで——

『待ちなさい』

くまマンが呼び止める。

「何？時間ないんだけどー！」

『唯斗。私は——くまマンは『防具』よ』

「あ、あ、ん？んだからどうした!？」

『防具』は身に付けるためにあるのよ。だから、端的に換言してあげるわ。——私を使いなさい』

「説明書寄越せ！もしくは五文字以内にまとめろ!!」

『合体、強い』

「なるほど把握！フュー○ヨンだな!？」

『fusionne…：ラテン語だなんて、洒落てるわね』

「らてんぐ…：…：…：どうでもいいけど、さっさと合体しろ！」

『洒落たついでに、こう言っておこうかしら。mode wear
bear——supplicium^実_行』

薄茶色のティエイベアが純白の光を放ち——

「止まつ、らない…：っ!!」

東郷美森の口から苦が漏れる。

元は単体のバーテックス。ならば『満開』を遂げた勇者が止められない道理はない——と誰もが事態を甘く見ていた。

獅子座は一向にスピードを緩めず、轟々と燃える百Mの凶体も寧ろ威力を増してるとも思える。

「諦めない……絶対に、諦め……」

「友奈ちゃん!？」

しかし気力だけでどうにか出来る相手ではない。

唯斗に引き続き、友奈もまた限界を迎えた。結城友奈の『満開』は他より強力な分、消費する体力も決して少なくない。

「ぐっ、うううううッッ!!もう、ダメ——」

獅子座を一人で押し返すなど不可能だ。必然的に、東郷は諦めの言葉を吐いた。

「コンニャロオオ!!」

二つの怒声は三種類の花卉を振り撒き、後方から訪れる。

「風先輩に夏凜ちゃん!？」

「——!」

「樹ちゃんも……!」

「押し返すわよ!!」

四つの花卉が混ざり、紡ぎ合い、巨大な花を咲かせる。

豪炎球の勢いは徐々に緩むが——まだ足りない。

「風先輩……私ッ」

「東郷」

懺悔をする様に、自らの罪を告白しようとした。謝って、懺悔をして初めて、東郷はまた『勇者部』で過ごせると思ったかった。

「東郷、前を見なさい。抗うって決めたなら、突き通しなさい!アンタの間違いなんて、先輩が——ううん、みんなで軽く受け止めてあげるから」

「……っ!……はいつ!!」

「風……あなた、さっきまで泣いてたクセに」

「う、うるさいわね!? いいじゃない別に! 頼れる先輩としての尊厳を保つのも、いい先輩の役割なのよ!!」

まだ、そこには『日常』があった。

東郷が壊してしまったと後悔していた『日常』があった。だからこそ、東郷も諦める訳にはいなくなつた。

緊迫漂う彼女達の背に一つの影が近づく。劇の終演を諭すように、若しくは最高潮クライマックスを飾るように。

「パーティー会場はここか?」

そして、舞台には役者が揃い始める。

「っ! 唯斗君……唯斗君……その格好って——」

「くっ! なんて手強い敵なんだー! みんなで力を合わせるしかないな!!」

「唯斗、その芝居口調止めなさい。あと何その格好——」

「夏凜! 『満開』した姿、似合ってるな! よーし、それはさて置き! 今はこの神敵を打ち砕かないと!!」

「何としても話を逸らすつもりね!」

それは着ぐるみパジャマだった。薄茶色の、可愛らしいクマをモチーフにした、紛うことなき着ぐるみパジャマだった。

心做しか、またもや『勇者』とは程遠い姿格好をさせられた唯斗は悲しそうに眼を潤ませた。



・コンセプト

結城友奈《軌道上の王道》

・進むは王道。勇者の『傲慢』は世界に祝福された我儘。その在り方は純白で、正しく真っ直ぐで——故に悍ましく歪んでいる。

東郷美森《共に在り別を進む者》

・共に在る時は依存し、然れども別の道を進める強欲さも含む。弱く、然し頑丈。矛盾を抱えるのは人の身の性とも言える。

三好夏凜《早熟の支人》

・彼女の存在は、幾多の心を成長させる。時には共に歩み、時には導を示す。支える彼女もまた、同時に人として成長している途中だ。

犬吠埼樹 《霸道目醒めし者》

・弱さを受け入れ、それでも過ぎた『力』を望んだ。胸に巢食う不安を噛み砕き、段階を踏み越え『極』に手を伸ばす。英雄の切手はその手の中に。

犬吠埼風 《成合未完の器》

・その『器』はまだ未完成だ。強く在ると決め、もう折れないと心に刻んだ。それでも『未完』——頂きはまだ遠い。しかし駆け上げられるのもまた彼女の強み。

郡唯斗 《無色透明の染木》

・他に染まり、『色』を得続けた彼。だが『染木』の如く、その『色』で周りも染めてしまう。その性質が吉と出るか凶と出るか——数多の混ざり合う『色』の遥か底には彼本来の色が隠れている。

終戦と喪失

「——さて、先輩方よ。ちよつとだけ耐えててくれる？唯斗くん史上最強の必殺技を思いついたんだけど」

唐突な物言いに、皆は眉を顰める。

暗に嫌な予感しかしなかった。彼の言葉を疑う訳では無いが、なにぶん、学校でも変人と有名な唯斗だ。やる事成す事、全てにおいて常識が欠如している。

怪訝だが、事実として『結果』は残している。故に疑う余地はない。医学用語で言うところの奇行というモノに走るのは殆ど決定事項ではあるが。

「今回は何をやらかすのか…イカの姿フライでアレを埋めるとか、着ぐるみパジャマ姿で巨大化とか？それとも、風を身代わりにして爆発させる、とかかしら…！」

「にぼっちは俺を何だと思っていらっしゃるん？」

「にぼっち言うな！」

失礼な、と唯斗はにぼっちこと夏凜の言葉に苦言を零す。

ともあれ、自信満々に『必殺』と語るのであれば期待せざるを得ない。大赦お墨付きの実績を持ち合わせているだけはある、信頼も大きい。

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

「フラグ建てるな！」

「先輩先輩、死亡フラグも重なれば生存フラグになるんですよ。つまり俺の緻密且つ高度な思考の元での発言です。褒め称えなさい」

「何様よ、コイツ…！」

呑気な会話風景だが、実際は巨大な豪炎球を抑えながらの会話だ。獅子座に確固とした理性や知性があるのであれば、きつとブチ切れ不可避だろう。

「さて、郡唯斗——参る!!」

着ぐるみパジャマに背負う金色のピコピコハンマーを手に取り、空

を蹴り推進力を得て――

「金ピコダブル装備！100万パワー+100万パワーで200万パワー!!いつもの2倍のジャンプ^高が加わり、200万×2の400万パワー!!そして、3倍の回転を加えれば、400万×3――獅子座!お前を上回る1200万パワーだーっ!!」

「夏凜、あのバカは何言ってるの?」

「風、あのバカは何も考えてないよの」

「独特な理論を展開した唯斗の一撃は――豪炎球を歪ませ微かに後退させた。」

「……もう、唯斗君を常識の範囲で考えちゃダメな気がする」

「勘違いするよトーゴ。俺が常識側で、お前ら全員が変人なんだよ。自覚しろよな」

「――」

「樹、そんな低温火傷しそうな目で見るとよ。愛情の裏返しかな?」

「呆れられてるんだよ、唯斗君……」

「H A H A H A、またまた〜!」

気の抜けた会話。無意識に展開される『日常』だが、勿論、バーテックスには全く持って関係の無い話だ。

後退させられた獅子座は磁石の如く、再び神樹に向かって発進する。

「チツ、また来たわ!」

「唯斗君!さっきのもう一度……ッ」

「構わないけど、多分無駄だぞ?……時間稼ぎにしかならないし、有効打にはならない……全力、だったんだけどなあ……」

「――?」

「べ、別に落ち込んでなんか無いんだからねっ／＼／＼」

「キモツ……」

「夏凜チャン、ボクのココロが折れちゃうヨ」

似非ツンデレを演出するが、プロのツンデレには通じない。寧ろ批評だった。

先程の攻撃は紛うことなき、『満開』の状態での唯斗の全力だ。攻撃

力だけなら随一な彼の、全力。それでも打ち砕けないのであれば、他の『勇者』には打倒する手段は実質無しに等しい。

全てを振じ伏せてきた唯斗には、アレが複合バーテックスよりも厄介に思えた。

「——っ！ツツ!!」

「…樹？」

樹の背に浮かぶ日輪が淡く光る。

身を屈め、まるで力を溜めるかの様に目を瞑った。そして、日輪の淡い光は徐々に強く、次第に眩く発光する。

小規模の太陽となった獅子座が再び衝突する瞬間、勇者とバーテックスの間に巨大な剣が顕現された。

直径50Mはある大剣は獅子座をその場に押し留め、激しく拮抗する。

「い、樹ちゃん…?」

「…あの太剣、ワイヤーで構成されてるよな…?…樹しゅごい…!まるでガル○ンチュア・パニツ○ヤーだ!!」

「夏凜、東郷!一気に押し返すわよ!!唯斗はアレを倒す手段を考えなさい!!」

「了解!!」

「えっ、俺が考えるんすか…!?!」

唯斗以外は再び火球を押し返しに掛かる。

現状で、この事態を解決出来る『可能性』を極僅かにでも秘めているのは、唯斗だけだ。風もそれを承知で、それだけが希望で、縋っていた。

「…どうする…?…どうする、どうする、どうするどうする…!!考えないと!!」

思い付かなければ、世界が終わる。

その責任は皮肉にも思考を狭める。新しい手など、決して簡単には思いつかない。

殴る——否、先程の攻撃が無駄だったのに、普通の攻撃が効く筈も

ない。

紙飛行機——否、例え何千とまとめて爆発したとしても、届かない。寧ろ連鎖的に爆発でもしてしまつたら、樹海ごと吹き飛ぶ。

「レディベア——否、アレは武器ではなく防具だ。例え今、武装を解いてくまマンに意志を持たせたとしても、有効打にはならない。」

イカの姿フライ——否、美味しさは世界を救うが、今は腹を満たすだけだ。

辿る思考は、唯斗の手札だ。過去に使つた”技”や能力。その全てを思い出し、使える手札を集める。

しかしバーテックスを圧倒してきたモノ全てが、獅子座の前では無駄に等しい。

複合バーテックスを相手にした時の手札も——

「——あつ、まだあるじゃん。俺の全力」

思考が一気に晴れる。

頭に浮かぶのは、レオ・スタークラスターの御魂にトドメを刺した、”技”と呼ぶにはあまりにも雑で、しかし紛いのない郡唯斗の捨身技。

その”技”に、新たな能力である『分身』と防具『くまマン』を組み込めば——

「届く……ッ！」

「——唯斗くん」

「っ……友奈か。休憩は終わったか？」

「うん！——唯斗くん、一緒に……お願いしてもいいかな？」

「……エスコートを希望か？レディ」

「ううん……ただ、一緒に踏み出して欲しい。……多分、今の私なら届く。あのバーテックスを打ち砕ける。でも、届くだけじゃダメ。唯斗くん、言つてたよね。自己犠牲が苦手だつて。それを容易く『手段』にしてしまう私が苦手だつて」

嘗て、友奈と唯斗は本音をぶつけ合った。その時、唯斗は初めて誰かに弱みを晒け出した。内心に留めておくべきだった、本音。

友奈だけは、唯斗の弱みが判る。互いに晒け出した内面を、友奈だ

けは知っていた。

「…それで？」

「——だから、私は犠牲にしないで勝ちたい。臆病で、弱虫な私はきつと、唯斗くんを頼らないと出来ない」

東郷美森との『約束』——”強くなる”を達成するには、友奈も自身の弱さを受け入れないといけない。強い勇者ではなく、弱く脆い一人の人間として、親友を頼ったのだ。

「……友奈。前の言葉、訂正する。俺はお前のこと、少しだけ好きになれそうだよ」

「うんっ、私も唯斗くんのこと大好きだよ♪」

お互いに拳をぶつける。

「——勝つぞ、友奈」

「——勝とう、唯斗くん」

重なる言葉。前に向けた視線は、もう振り向かない覚悟となる。不相応な自己犠牲を捨てた。仲間を悲しませる自己犠牲を捨ててしまった。

これより始まるのは、約束された勝利に手を伸ばす『勇者』の二打一撃。誰も失わず、貪欲に伸ばす手は勝利を手繰り寄せる。

「分身——」

着ぐるみ姿の唯斗が三人に増える。

唯斗が取る手段——それは至極単純。分身二体の攻撃を一身に受け、そのまま自身を”弾”として撃ち出すこと。『満開』をした状態で自身の攻撃を喰らうことは自殺行為に等しいが、『くまマン』を装備した今なら、その『手段』を”技”に昇格できる。

「——いくよ、唯斗くん——」

「——応っ——」

足の裏に押し付けられる黄金の槌の柄が拉げ、ギチギチと異音が鳴る。やがて限界を迎えると、唯斗は莫大な推進力に苦痛の声を漏らしながら、炎を纏う獅子座へと突撃する。

「全力ッ！勇者。パアアアアンチイイ！！」

「ぶっ壊れるおおおお！！」

合わさる二手は光の矢となり、最強の一撃へと昇華する。

「うおおおおおお!!」

罅割れるアーム。燃える二つの槌。煉獄の炎はバリアも防具も溶ける勢いで包み、それでも二人の『勇者』は猛々しく吠える。

炎を撃ち払い、眩む視界の先には逆四角錐型のコアが見えた。それを碎けば、『勇者』の勝利だ。

勝ち筋は見えた。希望は在った——ならば、あとは『気合い』だけだ。唯斗の嫌いな気合論。しかし皆が成長する中、郡唯斗も”強さ”に憧憬を抱く。

今は——今だけは、自己保身ではなく皆のために勝ちたい。神樹よりも、世界よりも、ただ単純に目の前の大切な人達を勝利に導きたい。正義なんてクソ喰らえ。力を振るうのは、これも唯斗の『我儘』だ。敵の事情も神樹の思惑も、どうでもいい。烏滸がましく『護る』だなんて言わない。

——これは意地だ。

(勝ちたい……!)

目の前の敵を撃ち砕くだけの使命ではない。初めて感じる、勝利への渴望。

(勝ちたい!)

似合わない闘争心。然れども、”血”に刻まれた貪欲なまでの戦意。熱い何か喉元で暴れ、外に吐き出せと跳ねまくる。

「届けええええ!!」

『御魂』に金槌を振り被り、友奈の拳と共に熱を解放する——

巨大な豪炎球は『勇者部』を飲み込み、白い光と共に砂となった。

即ち——『勇者』の勝利だ。

「う、うう……」

薄れる意識の中、淡く染まる空が視界に映った。

重い身体。誰もが満身創痍であり、もう樹海化が解けるのをブーツ

と待つしかできない。

朦朧とする意識で、しかし明確な勝利だけは確信できた。喜びよりも、達成感よりも、誓いを果たせた——それだけが頭を占めた。

「かった…の…?」

「ええ、私達の…勝ち、よ…!」

風の問いに夏凜は声を弾ませて答える。

地に背を付け、ヒンヤリとした土が火照った身体を冷ます。東郷は横に倒れている親友を視界に入れる。

「友奈ちゃん…:…友奈ちゃん?」

呼び掛けに対し、友奈は一切の反応を見せない。目を瞑り、人形のように地面に体を預ける。

「…友奈ちゃん! 友奈ちゃん!!」

「唯斗君、友奈ちゃんが…!?!…:…えっ、ゆいと、くん…?」

半身を起こし、辺りを見渡すが——視界の範疇に郡唯斗は居ない。勇者アプリのリーダーにも反応はない。まるで、彼の存在が喪失したみたいに。

「そんな…っ、一体、なにが…!?!」

——その日、結城友奈は意識不明となり、郡唯斗は世界から姿を消した。

◆◆オマケ◆◆

『全力勇者パンチ』

・全力の勇者パンチ。多分普通の勇者パンチよりも強い。要は普通の勇者パンチよりも気合いが籠っているのだ。

『巨大な剣』

・樹がワイヤーで創った、無骨で巨大な剣。直径50M程はあるが、樹次第ではサイズの調節は可能。大きくする場合は、チャージ時間も爆増する。唯斗曰く、ガル○ンチュア・パニツ○ヤーに似てるらしい。『唯斗の全力【其ノ壺】』

・ウォーズ○ン理論のパクリ。金色ピコピコハンマー一つで
100万パワー
ベアクローくらい。実は、五回程叩き込めば太陽獅子座を打ち倒せ
た。表面よりも内部に響く。

『唯斗の全力【其ノ式】』

・分身体の攻撃を推進力にして、敵に突っ込む攻撃。防具『くま
マ』を着て無ければ、足の骨が粉碎している。『くまマン』で弱点を
補ったため、強力な”技”へと昇華した。

帰還

あれから、数週間が過ぎた。

「友奈ちゃん、唯斗君…」

彼女の意識は未だに戻らず、彼は私達の前から姿を消した。

友奈ちゃんは『満開』の影響なのだろう。『散華』には謎が多い。機能を失うのは今更だが、問題はその順番だ。私は両足の自由を失い、次に記憶を喪失した。でも、他の皆は異なる。片目や味覚、声に腕の感覚丸ごと。

統一性が無い。喪うモノも、その順番も。だから、『散華』は神樹様にしか理解が及ばないのだろう。

友奈ちゃんが『散華』で何を失ったのか。

最後の——たった一回の『満開』でどれだけ捧げたのだろう。…きつと、殆ど全てを捧げたんだ。私達が『満開』しても尚、止めるだけが限界だったアレを、唯斗くんと二人だけで御魂ごと砕いた。そんなの、全てを差し出さないと得られない力だ。

そして、唯斗君は…未だに見つからない。

彼の存在が幻想だったみたいに、私達の前から消え去った。唯斗君が自分から姿を消したのか、それとも意図せぬ事態に巻き込まれたのか。解らない。解らないから、こんなにも…もどかしい。

「…友奈ちゃん。…あのね、私…歩けるようになったんだよ？少しづつだけど…ずつと動かなかった脚が、治ったの…だから、友奈ちゃんも治るよね…？目を覚まして、前みたい…笑ってくれるよね…？」

「——」
病院のベッドに身体を預ける友奈ちゃんに語りかける。

あれからの数ヶ月は、全てを悲観するだけの日々ではなかった。私だけでなく、風先輩や樹ちゃん。夏凜ちゃんも、『散華』した身体の機能が戻り始めている。

きつと、リハビリを続ければ近い内に完治すると思う。それだけが

朗報であり、唯一の希望だった。

問い掛けに相槌は返ってこない。

ボンヤリと開いた瞳は虚空を見詰め、でも決して動かない。…まるで人形だ。本当に人形だったら、私はとても喜んでいたと思う。でも、目の前の彼女は確かに本物だ。どれだけ現実逃避をしても、彼女の存在は私の罪の証だ。

「友奈ちゃん、唯斗君…ごめんね、ごめんね…私のせいで…」

友奈ちゃんなら否定してくれるだろう。唯斗君なら不器用に茶化すだろう。

勇者部でも話し合い、誰が悪いと決めるのはしなかった。罪深い私には似合わない、優しくてカッコイイ部活だ…でも大事な二人を、同時に喪失したのかもしれない。そう思うだけで、また罪悪感で死にたくなる。

嗚呼…私って、こんなにも弱かったんだ。

私の脚は時間と共に治っていく。喪失した記憶も、臆気ながらも思い出せる。乃木園子と三ノ輪銀——彼女達は掛け替えのない親友だった。唯斗君だけは過去の記憶と今の彼では全然違うように感じるけど、それもきつと記憶がまだ不完全だからだろう。…そう思いたい。

…私も、樹ちゃんや風先輩も。夏凜ちゃんだって、少しづつ本来の状態に戻りつつある。

「…だから、友奈ちゃん。早く…起きてよ…唯斗君も帰ってきて…私を、独りにしないでよ…っ」

流れる涙に、手は未だ添えられない。

波乱の戦いは終わった。

長時間に及ぶ戦闘の結果、樹海化が解けた現実には少なくない被害が出ていた。メディア向けには火山の噴火による被害や、地割れ等の自然災害が重なったのだと説明されているが、その実情は世界の命運を賭した『勇者』と『神敵』との戦いだ。

世界が滅ぶよりはマシな結果だと言えなくもないが、やはり被害が

出てしまったという事実は少女達の心に鈍く刺さった。

夏が終わり、秋の風が肌を冷やす頃、勇者部には穏やかな時間が流れていた。

結城友奈と郡唯斗が居ない生活も、次第に慣れてしまうのは人間の性だ。最初は寂しかった部室も、皆の気遣いにより少しずつではあるが活気を取り戻していた。

そして、朗報もあった。

バーテックスを再度殲滅した影響か、今世代の『勇者』は役割を終えたと通告された。

そのおかげとも言えるのか、『満開』の後遺症は徐々に治癒していった。それは二年前から全く変化を見せなかった乃木園子と三ノ輪銀も同様であり、多少のリハビリは必要だが、確かに回復を見せた。

必要が無くなったから返したのだろう、というのが三好夏凜の見解だった。

もしかしたらバーテックスを殲滅した報酬だったのかもしれない。その機能が本来のモノかは置いて、以前の彼女達と欠色の無い状態にはなっていた。

例外を除いて――

「……もうすぐ、文化祭だよ」

病院の庭。東郷美森はベンチに腰をかけ、傍らに置かれた車椅子に身体を預ける彼女に語り掛けた。

「部活動発表……私達は劇をやることになったの。『勇者』が世界を救うために、『魔王』を倒す物語。友奈ちゃんが大好きな、希望に溢れた物語だよ……」

未だに、主役の座は空けられている。

「……風先輩にお願いして、まだ友奈ちゃんの役は空けといて貰ってるの。我儘かもしれないけど、やっぱり……私は、『勇者』^{主役}は友奈ちゃんしかいないと思うから……」

大切な人に向けた言葉も行き所を失う。望んでいた平穏は、酷く色褪せていた。平和の対価は、東郷の命よりも大切な人達だった。

「唯斗君は、やっぱり魔王の配下役だよ。今回は前に唯斗君がやり

たがってた様に、魔王の力を奪うラスボス風になっちゃった……」

語り掛けるのは、行方不明の彼に向けて。

二人の戻ってくる居場所が無ければ、不安で仕方がない。彼女がもう戻ってこないと認めてる様で、彼の存在が泡沫に溶けたと肯定している様で、吐き気を催す。

伸ばした手は掴みどころをなくし、空を彷徨うだけだ。虚しく、そう思ってしまう事自体が現状を受け入れてしまったみたいで、耐え難い。

「お願い……戻ってきてよ……一緒に強くなるって決めたのに……ッ、このままじゃ私、前よりも弱くなっちゃうよ……」

悲痛の言葉も、友奈には決して届かない――

「トーゴー」

「っ!？」

その声は、聞き馴染みがあり、然れども心のどこかでももう聞こえないと認めていた”彼”の声だ。伏せていた顔を上げ、涙を拭うと――

「ゆ、唯斗君………えっ、きゃあああああ!?!な、生首が浮いてる!?!」「うえっ!?!な、ナマクビイ!?!いやいやいや、マジで無理!!ホラーとかマジで無理なんですけど!!ユーレームリイ!!トーゴーヘルプミイイ!!」

「唯斗君のことだよ!?!」

紛うことなき唯斗の頭部が浮いていた。勇者時の黒髪に、ぴよこんと存在感を出すアホ毛。生粋の天然アホの頭部がそこにはあった。「すうー、ふう………よしっ、落ち着いたわ。……唯斗君、だよね……?」

「ユーキューナだよっ！」

「意外と似てるモノマネ!？」

人生を舐め腐った態度も含めて、目の前の生首野郎は間違いなく郡唯斗だった。

幸い人影の無いベンチだったら良かったものの、人通りの多い場所だったら大騒ぎになっている所だ。恐らくは大赦が揉み消してくれるが、大赦とて人の記憶までは操れない。故に、騒ぎは起こさないに越したことはないだろう。

「…あつ、身体も出てきた…？」

まるで透明感が解けるように、唯斗の身体は頭部から順に姿を現す。見慣れた純白と黄色の勇者服は、心做しか擦り傷や土埃で汚れていた。

数分を掛けて全身が出てきた唯斗は、虚空を見つめる友奈の元へ近づくと、デコピンをした。

「起きろよ、友奈」

「唯斗君!?!えっ、ちよつと…何やってるの!？」

「デコにピンツとデコピン」

相当の威力が込められていたのか、友奈は仰け反り車椅子から落ちかける。東郷が慌てて支えなければ、実際に落ちていただろう。

「唯斗君…ツ」

「う、うう…」

「と、友奈ちゃん…？」

また奇行に走った彼を叱ろうとすると、支えている彼女から呻き声が漏れる。何度話しかけても反応しなかった彼女は、唯斗デコピンにより初めて明確な反応を見せたのだ。

「と…う、ごう…さん…？」

「友奈ちゃん!友奈ちゃんだよね?!友奈ちゃん!!」

「コーリユイトだよっ!」

「全く似てないモノマネ!？」

数週間ぶりの寝起きでアホと同程度まで著しく低下した知能では、残念なことに場を和ませようとした言葉もアホと同じになってし

まった。

ともあれ、郡唯斗が帰ってきて、結城友奈が目を覚ました。東郷が何度も夢で見て、然れど目が覚めてから涙を流した光景。頬を振り夢でないことを確認して、東郷は頬に熱い感覚を覚える。

「…ごめんね、東郷さん…一緒に歩むって、言ったのに…」

「ううん…友奈ちゃん…！二人が戻ってきてくれただけでも、凄く嬉しいよ…！」

「東郷さんの声、ちゃんと聞こえてた。私も唯斗くんも、ちゃんと聞こえてたからね…！」

「聞こえてたって言うよりも、俺は観てただけだな。…どっかのストーリーカーが定期的に俺の部屋に侵入してるところもな…ッ」

「まあ、唯斗君にストーリーカー…？恐ろしい世の中ね。私が見張って…もとい、観察してた限りではストーリーカーなんて見えなかったけど…」
「鏡見ろや。アホ面のストーリーカー女が写るぞ…!!」

その日、勇者部はやつとの『平和』を掴んだ。

もう離したくないと誰もが願う。『外』のことも、神敵のことも、もう『勇者』ではない彼女達には関係ない。激烈を極めた戦闘データだけを残して、後は後任の者に任せて『勇者』は元の一般人への戻った。

◆◆◆オマケ◆◆◆

『トローゴーヘルプミイイ!!』

・ホラーに怯える少年の叫び。某盾少女の『助けてメブうう〜!』と同系統だが、此方はあわよくば救援相手を身代わりにして逃げようという意図が込められている。追跡者VS亡霊^{ゴースト}をやる予定は無い。

『ユーキユーナだよっ!』

・唯斗の意外と似てる声真似シリーズの一つ。飽くまでも意外とであり、人を騙せるほどそっくりでは無い。勇者部メンバー分のモノマネがある。風ver.「ウデウオン^ウ、ダブエダアアイ^食」をやったら殺された。

『コーリユイトだよっ!』

・友奈の全く似てない声真似シリーズの一つ。才能がなく、致命的

に似てない。どの声真似も全てダミ声になる仕様。本人は謎の自信を持っている模様。夏凜 v e r . 「煮干しうみええええ！」をやったら絞められた。

飢餓の発狂

——郡唯斗と結城友奈が戻るより数週間前。

ちょうど、勇者部がバーテックスを殲滅し終えた直後だった。

獅子座の御魂が砂となり、空に還る。何処と無く神々しさを誇る光景に小さく笑みを浮かべながら、郡唯斗は『満開』の解除と共に意識を手放した。

「――」

そして次に目が覚めた時には、唯斗は一人で讃州中学校の屋上に寝そべっていた。

「……………ふえ？……………よる、か……………」

周りを見渡しても、誰も居ない。在るのは風にさざめく木々の音と、神樹の社のみ。何の変哲もないが、然れども唯斗だけが取り残されていた。

夏も終わる寸前、夜の風は身体を冷やす。次期に秋の始まりを告げる冷たさは『勇者』としての怒涛の日々が終わったのだと、暗に告げているようだった。

寝起き寸前で痛む頭に手を添えると、純白と黄色で着色された服の袖が目に入る。つまるところ、唯斗は未だに『勇者』の格好だった。

「……………置いていかれた……………」

体感時間でも約十二時間は寝ていた。

故に、目は覚めても脳は覚醒していなかった。取り敢えずバーテックスを倒した所までは記憶にあるので、その後に毎度の如く神樹様の社の近くに転移させられた、というのは想像するに難しくない。

敢えて問題点を上げるとするならば、放置されていたことだ。

彼女達の性格を考えて、悪意を持って気絶していた唯斗を置いて帰ったとは考えづらい。

そもそも、レオ・スタークラスターを打倒した時もあったが、激しい戦いの後は決まって病院に運び込まれる。大赦が何かしらの手段でバーテックス戦の終わりを察知し、救急やらをしていたのだろう。

それは今回も例外では無かった筈だ。

その証拠として、友奈達がこの場にいない。それは病院に運び込まれたからに他ならないだろう。

「……まあ、誰かに連絡すればいいか。スマホ、スマホ……えっ、圏外？」

画面の上部分には圏外の表示。しかし問題はそれだけでは無い。

「勇者アプリ以外、開けない……？」

現状として、唯斗のスマートフォンは大凡の機能が停止している。使えるのは勇者アプリだけであり、だが然し、何故か変身が解けない。

幾ら樂觀視が大得意な唯斗とて、明らかな異常事態だということは判った。

「……取り敢えず帰るか」

身体の節々は痛い、それも屋上の硬い地面で寝ていたからだろう。

『勇者』の変身が解けないこともあり、唯斗は仕方なしと自らに言い訳をしながら、屋上から飛び降りた。

「やっぱり勇者の力って便利だなー」

建物上を足場にして家までの帰路を省略した。当たり前だが、普通に歩いて帰るよりも圧倒的に速い。『勇者』としては他よりも身体能力で劣る唯斗ですら、常人と比べたら圧倒的だ。

程なくして、見慣れた自宅の屋根が視界に映った。

「父さんと母さん、帰ってるかな。ただま……ぶえっ!?!」

ドアに手を掛けようとして、その刹那、身体が通り抜けた。掴みどころを失った唯斗は驚嘆の声を上げ、倒れ込むように暗い家の中へと入った。

「……えっ、はあ…？…えっと、ちよつと待てよ…？今、擦り抜けたよな…？…我が家のドア、3Dホログラムになったのか…!？」

混乱の声を上げてても、答える者は居ない。

再度ドアを手で触ろうとしても、すり抜ける。動揺を通り越して目眩すらした。

だが唯斗とて幾度も困難を超えてきた『勇者』だ。混乱しながらも、脳を回す。

——考えられる可能性は二つ。

本当に郡家のドアがホログラムに進化して、泥棒カモンな防犯サヨラナ状態になっていること。少なくとも、唯斗が今朝家を出る前までは普通のドアだった。

もう一つの可能性は、郡唯斗が異常な状態であること。死んで幽霊になったか、『散華』で変なモノを散らしたか。夢という可能性も捨てきれない。

「……まあ、ホログラムは有り得ないよな。……『散華』か？…『散華』しかないよな。神樹様って俺の事嫌いなのか…？」

玄関に座り込み、思考に没頭する。

これが『満開』の後遺症なのであれば、何を『散華』したことになるのだろうか。

『散華』には統一性がない。つまり、喪うまではその実が判らないのだ。だが今回に関しては、何かしらを喪ったが、それが何かが判らない現状だ。

「…身体の実体とか、か…？…つてなると、今の俺は魂の状態だな…いや、魂状態ってなんだよ!？」

結局のところ、『散華』とは何なのだろうか。

これまでの認識では、『満開』で力を得る対価として身体の機能を喪うこと——それが勇者システムにおける『散華』の概要だった。

東郷美森の足や聴力、結城友奈の味覚、犬吠埼風の片目の視力、犬吠埼樹の声。機能は喪ってるが、その部分が消えてはいない。

だが然し、今回の場合は話が違う。

唯斗の予想が正しければ、今回の『散華』で唯斗が支払ったのは、身体の全てか、若しくは唯斗の存在だ。概念的な部分にも勇者システムが作用するのは不明だが、樹の『散華』は喉そのものには影響がないのに”声”だけを喪っている。

故に、それだけ『満開システム』が謎を帯びるのだ。

「…いや、別にどっちでもいい。どっちでも同じだろ…問題があるとしたら——」

頭を抱え、唯斗はとある可能性に顔を青ざめる。もしもそれが有り得るなら、きつと、唯斗は死んでしまう。精神的ショックで心臓発作を起こす自信すらある。

唯斗は臆気な足取りで階段を登り、自室のドアを擦り抜ける。そしてベッドの下に閉まってあるある物に手を伸ばし——

「……い、イカの姿フライ…食べれる、よな…ツ!?——あ、ああ…あゝあゝあゝあゝあゝアゝアゝアゝ!!縋医&縋昂≧縋工縋才縋、縋医'縋?ユ怜喧縋代@縋ヲ縋?※縋√≧縋上Γ縋ウ縋峨?縋輔↓縋工縋」縋溢%縋イ縋ゆj縋セ縋帙s縋??ツツ?!?!」

唯斗は発狂した。

数十袋もベッドの下に詰め込んだ業務用イカの姿フライは、触るごとすら叶わない。手を伸ばしても無情に擦り抜け、空を切るのみ。

「……よし、死のう」

爛々と光る黒い瞳で台所に向かい、包丁に手を伸ばすも、当然のように擦り抜ける。ならば地面に頭を打ち付けて脳天を割ろうとするも、勿論無駄に終わった。

「…セカイ、ホロベバ、イイノニ…」

唯斗は若干、ほんの少しだけ闇堕ちした。

数日が経って、唯斗は大体の状況を理解した。

まず第一に、初日にも予想は出来たが唯斗は人と接触出来ない。物理的にも、間接的にも、会話等のコミュニケーションすらも現状では不可能だ。

見えないならイタズラでもしてやろうか、とペンを持ち出そうとしたが、そもそもペンを握ることすらも叶わなかった。

そして第二に、今の唯斗は無食無飲でも問題なく生きていれる。果たして生きていけると言っても良いのかは謎だが、少なくとも自己的観測では生存できている。

イカの姿フライ欠乏症で精神的に不安定だが、唯斗の領域レベルまで辿り着くと、リアルすぎるエアイカの姿フライを想像創造して食べることが出来る。腹は満たされないが。

そして第三に――

「友奈ー、まだ生きてるか?」

《うんーちゃんと生きてるよ!!》

何故か友奈とだけは意思疎通ができた。

と言っても、友奈は病院のベッドで意識不明の状態だ。唯斗と話しているのは、友奈の精神的なモノなのだろう。

ベッドの上で虚ろに開かれは眼は架空を眺めている。唯斗と言葉を交わしているときも、友奈は微動だにしない。唯斗の脳内に声が響いている感覚に近い。

友奈曰く、彼女は灰色の霧に包まれた空間に囚われているらしい。何処までも果てしなく続き、でも酷く狭い空間。樹海化の世界と似ているが、その性質は逆とも思える。

友奈が獅子座の御魂に触れた瞬間、気が付いたらそこに居たらしい。

皆の声は届くし、存在も近く感じられる。なのに、決して届かない。手を伸ばしても、声を張つても、友奈には『声』しか届かないし、友奈が『声』を伝える手段はないに等しい。

《…私の体は、病院にあるんだよね…?》

「俺の目がバグってなければな。…俺は身体が無くて、友奈は精神が離れてる。カミサマは両極端だな」

《あはは…あのバーテックスを倒したんだから、やっぱりこれくらいは捧げないといけなかったんだよね。……自己犠牲のつもり、無かったんだけどな…》

「…ばーか。愚者の自己犠牲と意図せず被害に遭うのは、全然違うだろ。カミサマの為に戦ってる時点で、俺達は当事者であると同時に被害者だよ。根本的な原因が神樹様か、過去の人間達かは知らないけど…今の俺達には関係の無い業だったんだよ、本来は」

唯斗達は”業”の根源を知らない。

敵が悪いにしろ、味方に原因があるにしろ、今の世を生きる唯斗達には殆ど関係がない。それが人類皆の罪だと言うのであれば、それも人を創った神の責任だ。

結局、無駄で無謀な罪の押し付け合いに巻き込まれただけなのだ。

《それでも、やっぱり唯斗くんを巻き込んだのは変わらないよ。多分、私が一人でバーテックスの御魂を砕いていても、結果は同じだったよ》

「自信満々で羨ましい限りだよ。それなら俺だって、お前を巻き込んだことになるだろ。自己犠牲覚悟でやってたら、俺だって御魂くらい砕けたっての」

《そ、れは…》

きつと、唯斗が全てを捧げていても結果は同じだった。違うのは立場と、人数だけ。唯斗も友奈も、太陽となった獅子座を撃ち砕くことは可能だった。しかし単騎で打倒するには、やはり殆ど——いや、全てを捧げる必要がある。

この結果は、傷を分け合うのではなく、互いに同じ傷を負っただけだ。王道的な『勇者』の勝利と呼ぶには、不格好だった。

「…現実にIFなんてねーよ。俺とお前が全力でバーテックスを倒して、その結果がコレだった。それだけだろ」

柄にもなく気力を出し切って得た結果。それをもしもで語る^Iなど、ただの侮辱だ。野生の獣と同じように、生を賭けて、勝ち取った勝利。

唯斗にとつて、それ以上でもそれ以下でもない。勝者は堂々と胸を張るしかないのだ。

《唯斗くん…うん、ありがとうー》

「はいはい、存分に感謝してくれたまえ。そして戻ってきたら、イカの姿フライをたんまりと買ってもらおうからな」

《…そっか、やっぱり唯斗くんも諦めてないんだね》

「諦める要素がないだろ。東郷達は徐々に回復してるし、ミイラガールな園子と銀も包帯が取れてた。俺達だって、戻れない道理はない」
誰にも察知されなくなってるから数日あまり。情報収集も兼ねて、一通りの知り合いの元へは出向いた。

勇者部の面々は拙くも回復を見せた。先代勇者として『満開』を重ねた乃木園子と三ノ輪銀も、止まっていた時が動き始めている。

その道中で大赦にも忍び込んだが、『御姿』や『天の神』、『神婚』等。よく判らない単語しか聞けなかった。後は『枝が現御神として御降臨なさっていた』と偉くふてぶてしい態度の神官が硬い声で語ってた。
いずれにしろ、唯斗には全く持って関係の無い話だが。

話が逸れた
閑話休題。

つまり、唯斗と友奈だけに後遺症が残り続けるなど不自然だということだ。

《うん、そうだね♪……もしも、唯斗くんが先に戻ったら…私のこと、一番最初に起こしてくれる?》

「…お嬢様が望むなら、デコピンで起こしてやるよ」

《て、手加減してね…?》

「男女平等を謳う身としては、聞けない話だな。勇者パワーで脳天ぶち抜いてやるよ!!」

《死んじゃうよ!?!》

それが唯斗達が回復する、実に三週間程前の話だった。

「——ということがあったんだよ」

「ほへー、つまり…ゆーちゃんが透明人間になって、女の子のお風呂を覗き放題だったってこと?」

「おい自称雌豚、言葉を慎めよ。その発言で無垢無罪な少年が某スニーカー女と某女子力お化けと某煮干し狂いに殺されるかもしれないんだぞ…!」

「怖い世の中だね」

郡家二階、唯斗の自室。

鈴虫の鳴き声が響く初秋の夜、椅子に座る唯斗と、ベッド上を巢食う乃木園子の姿がそこにはあった。

「それで、園子さんや」

「なんだい、ゆーちゃんさんや」

「何で俺ん家に居んの？盗聴郷の同類だつたりするの？」

その場合、唯斗は手元のスマートフォンの通話機能を即座に使用することになる。相手は勿論110番だ。

極当たり前の様に居座り、アホの子唯斗もあまり気にせず雑談に耽っていたが、よくよく考えれば夜更けの部屋に他人が居るのはおかしい。

乃木園子にとっては郡唯斗という人間とは親しい間柄なのだろうけど、生憎と物理的要因によって記憶喪失となった唯斗には殆ど他人だ。

「うーん……いくら私でも、盗聴盗撮何でも御座れなわっしークオリティに染まるのは抵抗があるんだぜい？だから答えてしんぜよう！！本日より私こと乃木園子、この家に住むことになりましたー！！ヒュー、ドンドンパフパフ！！今夜は寝かせないぜベイバーー！！」

「……なんでやねん」

謎のハイテンションに至る彼女を目の手にして、唯斗は疑問を抱きながら、早くも諦めの感に包まれていた。

この少女、常識を持った上で変人に染まった通称残念な子だ。それでもトップクラスの名家『乃木家』の一人娘であり、将来的には国を動かす立場に成り得る者でもある。

きつと、もう彼女が郡家に住み着くのは覆しようのない決定事項なのだろう。

「そしてそして！引越し祝いとしてなんと——幻のイカの姿フライを……」

「我が家へようこそ！H A H A H A！！この郡唯斗、永遠と不在な両親に代わりキミを歓迎しようじゃないか！！」

「……そーいう所は、昔と変わらないんだよね」

奇しくも、この変人は目の前の変人に見合う変人だった。

◆◆◆オマケ◆◆◆

・唯斗の部屋にて

東郷「唯斗君…一体、何処に行ってしまったの…」

唯斗（後ろだぞー？…何でコイツ、俺ん部屋に来てるの？何で窓から侵入してるの…？）

東郷「…唯斗君…クンクン…あつ♡唯斗君の匂いだ…」

唯斗（人のベッドに寝転びやがった!?!…もう東郷と縁切ろうかなあ…）

唯斗が帰還する三日前の出来事だった。

小学生勇者

「ところで、居候の園子さんや」

「なんだい、部屋主のゆうちゃんさんや」

真夜中ファイバーなイカの姿フライパーティー中。唯斗はエナジードリンクを片手に、園子へある問い掛けをした。

「昔の俺って、どんななんだったの？ トーゴーは記憶が戻ってるらしいけど、俺の記憶は『散華』じゃないし、戻ってないんだよねー」

「ふーむ、ゆうちゃんの過去かあ…一言で言い表せば、”可愛い黒歴史量産機ちゃん”かな？ 中々に強烈だったよね〜」

「…嫌な予感しかしないんだけど」

「よーし！今夜はオールナイト!! ゆうちゃんの過去を語ったるぞー!!」

意気揚々とする彼女を尻目に、唯斗は人生において最も大きな嫌な予感を抱いていた。

神世紀298年。

讚州中学校『勇者部』が御役目を告げられ、『勇者』になるより二年前の事だ。

大橋市、神樹館小学校六年生の四人は今代の『勇者』として神樹に選ばれていた。それぞれが訓練を施され、万全とは言えずともそれなりの準備をしている。

年齢に不相応な扱いも、世界を護るためだと言われれば仕方なしと受け入れざるを得ない。斯くして、幼い少年少女は『勇者』へと至る。

これは、四人の幼い『勇者』の物語。

そして、これは今代の『勇者』の始まりの御話。その一端であり、予兆のない『始動』だった。

「ZZZZ」

「Zzzz」

御役目を課せられた者、鷺尾須美は憤りを感じていた。

(……何で、朝から寝てるのよ……ッ)

『勇者』に選ばれた少女達。大きな役目を背負った彼女達とて、普段は有り触れた小学生六年生だ。朝には普通に登校し、授業を受ける。

上層部の計らいか、『勇者』の四人は同じ六年一組だった。それぞれの関わりは薄いが、それでも同じ立場としての結束感は確かにあった。

然し――

「……っ」

鷺尾須美はやはり、憤りを感じていた。

とある日の朝。

有り触れた日常の一時だった。楽しげな会話が四方八方から聞こえて、新たに登校してくる生徒が増える度にその騒音も大きくなる。

そんな中、鷺尾須美は同じ役目を背負った者達に目を向ける。

淡いブロンドヘアの少女、乃木園子は鼻提灯を作りながら夢の世界へと旅立っている。

鈍色の髪で、クラスでは人気者な少女、三ノ輪銀は未だに登校してこない。

そして――

もう一人の『勇者』。肩まで伸ばされた暗い茶髪に、あどけない眠り顔。神樹館の女子制服を着ている少女――否、少年は乃木園子と同じように眠り続けている。

両サイドで安らかに寝息を立てる二人とこの場に居ない彼女。

(……足りないわ。……勇者として……期待されて、御役目を背負ってる自覚が足りない……ッ！)

鷺尾須美にとつて、『勇者』とは清く正しく、人々の手本となる人柄でなくてはならない。授業中でも寝ている彼女、遅刻の常習犯である彼女、男子なのに女子の格好をしている彼――そんなの、『勇者』としては相応しくはない。

鷺尾須美は御役目を誇りに思っている。

根付いた護国思想はまさにこの役目の為にあつたのだと、歡喜した。その姿勢を保つために少女は必死だったのだ。

強く在ろうとする度に、他者の脆弱な部分が目に付く。癩に障る。真面目に頑張っている自分が、何故疎外感を感じなければいけないのだろうか。

「ZZZ…つんあ?!遅刻し——あれれ、家じゃない…?」

「…乃木さん。ここは教室で、朝の学活前よ」

「あ、鷺尾さんだ。おはよう」

「おはようございます」

気を引き締めろ、と暗に告げるように冷たく返す須美。やはり、須美はどうにも彼女を好ましくは思えない。その理由は、『勇者』の自覚がないことの一点に尽きる。

溜息をつく須美とは対照的に、冷めた反応をされた園子は案外気にすることもなく、鼻歌を歌いながら学活が始まるのを待つ。

やがて殆どの席が埋まる頃、担任の教師が到着した。

「皆さん、おはようございます」

担任の挨拶に対して生徒達は口々に言葉を返す。そんな中、廊下から駆けた足音が響く。

「はあ、はあ…お、おはようございます!!ふう…間に合ったあ…!!…イテツ」

「三ノ輪銀さん、間に合ってます」

「あー!先生が出席簿で叩いたー!!」

「あはは、ミノさんは相変わらずだな」

騒々しい登場に教室中が笑い声で溢れる。それは彼女——三ノ輪銀が人気者であるが故であり、人望の厚さが窺える。

だがそれすら、須美には理解不能だ。最低限のルールも守れない人間が、何故人から好かれるのか。他者から硬すぎると言われる須美には理解し難い。

「それじゃあ今日、日直の人」

「——」

担任の呼び掛けに誰も応えない。だが皆の視線はある一点に集中

していた。

「すぴー…」

「…郡唯斗さん。…郡唯斗さん、起きなさい」

「……………ん？……………おや、すみ…」

「起きなさい…！」

「……………仕方なし」

肩を揺さぶられ、やっと起きるも二度寝に洒落こもうとする唯斗。語感を強めた担任の言葉に、唯斗もやっと状況を掴めたのか、長い髪を後ろに流し、ふてぶてしい態度で起き上がった。

「…何用…？」

「郡唯斗さん、今日は貴方が日直です」

「……………つまり…？」

「つくろ！今はっ、朝の学活中ですっ！」

「……………回り、くどい…！」

未だに何も察しない少年。普段は冷静沈着な担任教師も語気を強める始末。教室は嫌な緊張感に包まれ、樂觀視をしてい園子も一筋の冷や汗を流した。

「お、おい…唯斗。先生がキレそうだぞ…？」

「あ、銀だ。おっはー」

「おっはー…じゃなくて！朝の挨拶だよ！日直が担当のやつ!!」

「……………なるへそ。きりーっ」

銀に促され、唯斗はやっと起こされた理由を理解した。若干担任教師の眉がピクピクと動いているが、勿論少年がその意味を察することは無かった。

やる気のない号令だが、生徒達は否応なく従う。

「礼……………ん？」

渋々と告げられる号令だったが、唯斗は違和感を覚えた。急に誰も反応しなくなつたのだ。立ち上がった生徒達は凍つたように動きを止めて、世界から全ての音が消え去つた。

「……………？」

「なあ、コレって…！」

先に状況を把握した銀が声を上げる。

停止した世界で動けるのは、郡唯斗、三ノ輪銀、乃木園子、鷲尾須美の四人だけ。当然、其れが示すのは御役目の始まりだ。

遠くから幾多の鈴の音が響き、世界は極彩色に塗られる。虹色の花弁が舞い上がるにつれ、建物や橋等の建造物が光に飲まれる。

海が地面に変わり、空は暗く染められる。光の波は悉くを飲み込み、神樹の創り出した結界内——樹海へと変貌させる。

「始まる——御役目が……ッ！」

須美の言葉を最後に、少年少女は光に包まれた。

「うわぁー、初めて見た……これが——」

「神樹様の、結界……！」

園子の声に続き、須美も思わず声を漏らす。

太い根や幹が地面を埋めるように敷かれ、その全てが極彩色に染められている。それは言葉通りの『樹海』であり、肌で感じる神聖さは神の結界であることを主張するようだ。

「凄いね、全部木なんだね！」

「おおー！あれが大橋か!？」

「此方と壁の外を繋ぐ橋……あそこから、敵が渡ってくるのね」「……オレ、寝起き……なんだ、けど……?」

園子と銀は未知に興奮する。一方で須美は冷静に状況の把握に励み、唯斗だけは眠たげに目を擦る。

「ん〜！アタシ達が『勇者』だなんて、興奮する〜!!」

「三ノ輪さん！遊びじゃないのよ!!」

「分かってるって!」

楽観的すぎる銀を須美は叱りつけるが、あまり響いてはいなかった。笑顔で言葉を返され、須美の苛立ちは加速する。

「あ、あそこ見て!!」

園子が指差した遥か先には——

「キモッ………何あれ……?」

「あれがバーテックスだよ、ゆうちゃん。あれが神樹様に辿り着いた

ら、世界が終わっちゃうんだよー？」

「……わお…おどろき」

二つの巨大な水球に、顆粒を束ねたような姿。特筆すべくはその巨大さだ。人の何十倍もの大きさを誇るソレは、化け物と言うよりも要塞を連想させる。

そんなバーテックスが計十二体も存在し、しかもそれぞれに固有の特性があるのだ。慄くのも無理はない。

「御役目を、果たしましょう…！」

須美が自分に言い聞かせるために呟いた言葉に、皆が返事をする。今一度、敵を目前とした『子供』は『勇者』と成るために覚悟を決めなければいけない。

全員がスマートフォンを取り出し、重ねた花卉がアイコンとなったアプリをタップする。そしてロックを解除するために――

「天地に 来ゆらかすはさゆらかす」

「神わがも 神こそは 来ね聞こゆ 来ゆらかす」

「御魂狩り魂消りましし神は 今ぞ来ませる」

「御魂みみ 今しし神は 今ぞ来ませる」

この時代の『勇者システム』は初回のみ限り、アンロックをするには専用の『祝詞』を唱えなければいけない。

適性を持つ者達の祝詞を聞き届け、神樹は力を解放する――

それぞれのスマートフォンから白菊、牡丹、青薔薇、スノードロップの花卉が溢れて舞い踊る。

眩く光る花卉は小さな身体に纏わり付き、劇的な変化をもたらす。ただの子供だった少年達は神の力を纏い、神敵を迎え撃つ『勇者』に成る。

光が晴れた先には神樹館小学校の制服とは一転、全員が神聖さを帯びる衣装に変わっていた。

「これが『勇者』…不思議な感じだね」

実践では初めての変身。樹海の雰囲気も相まって、形容し難い感情が胸を占める。

「ク……………」

「ん？唯斗、なんか言ったか？」

「クツ、ハツハツハア!! イイネ、イイじゃねえかア！オイ!! ヤりがいがあるなア!!」

「「えっ…?」」

無口でマイペース。普段は拙げに話す彼からは想像のできない口調で、三人の頭はフリーズを起こした。

「こ、郡君…?」

「アツハツハツハツハツ!!」

そんな三人とは裏腹に、唯斗は武器である木の棒を肩に担ぎ、狂ったような笑い声を上げながら敵の居る最前線へと飛び出した。

「あつ、やべっ！出遅れたー!! 待てよ唯斗ー!!」

「わー！二人とも待つてよ〜!」

「えっ！ちよつと!?! 待ちなさい!!」

続けて飛び出す二人を尻目に、須美も慌てて追い掛ける。個で秀ているバーテックスを相手に、連携もなしに突っ込むのは明らかな愚策だ。須美の思い描いていた作戦は、早々に崩れ去ってしまった。

「デケエ図体にぶち込んでやるよ！オレン武器！山田くん」をなアあ!! まだ逝くなよ!?!」

三人がバーテックスを間近で見渡せる位置に到着する頃には、唯斗が大凡の『勇者』とは思えない言動でバーテックスを攻撃していた。対してバーテックスもただの的ではない。

幾多の水球を操り唯斗にぶつけようとしますが、唯斗はバーテックスの身体を踏み台にして空を舞い、宙返りをしながら地面に降り立った。

「オイオイ、早漏すぎて早逝きすんじゃないやねエーぞ!! まだやれんだろうウ!?! アツハツハツハツハツ!!」

「…園子さんや、本当に…アレって誰?」

「ゆーちゃんだよ…多分ね〜」

「殆ど別人じゃない!?!」

郡唯斗が先代勇者の中でも特に変人だと言われる所以。それは戦闘中の豹変だった。

◆◆◆オマケ◆◆◆

『郡唯斗（小）』

・神樹館小学校の六年一組に在席する少年。童顔で中性的、女子制服を着ている、等の特徴で女子と間違われる事が多いが、身も心もれっきとした男子。

今代の『勇者』の中では適正値が頭一つ飛び抜けており、戦闘センスも他より秀ている。対人戦ならば、記憶の無い中学生の唯斗よりも強い。

基本的に無口でマイペース。戦闘中は武道の師の影響で下品な罵りをするが、殆ど意味は解っていない。

『勇者として』

・モチーフ花は”スノードロップ”。真っ白な衣装の下に黒を基調としたインナーを着用している。花言葉は”希望”、”慰め”、”あなたの死を望みます”——

『山田くん』

・唯斗命名の武器。見た目は”ひのきのぼう”だが、振るうと斬撃が飛ぶ。神樹の枝で出来ており、対バーテックスにおいては特効性を帯びる。命名センスはご愛嬌。山田が苗字で、”くん”が名前らしい。

小学生勇者 2 〱辛勝〱

「ヒャハツ！木偶は木偶らしくナア！的にでもなってるヨなア！！アツハツハツハアア！！」

——と唯斗が戦闘狂になっていたのが数分前。

「……ゴボツ……水、むり……」

「夏の虫が飛んで火に入ったぞ……？」

そして全身を濡らし、即墮ち雑魚の如く泣きながら地面に横たわるのが現状。意気揚々と単体でバーテックスに突撃した結果、巨大な水球に捕らわれ、溺れている所を銀に助けられた。

「テンションは戻ったか？」

「…アレ、違う…！オレ…じゃな、くて…糞、師匠の…影響…ツ！」

「…うん、戻ったな。アタシ的には、永遠に今のままでいて欲しい所存だよ」

「……刹那に、願ええ…」

薄らと目元に涙を溜めながら、唯斗は水の恐ろしさに身震いをした。元より泳ぐのが大の苦手であり、プールの授業も屋上やら体育倉庫やらに隠れてサボっていたのだが、今回の出来事で完全にトラウマとなった。

尚、唯斗の水嫌いは数年経っても改善させることは無かった。

情けないやり取りを、眉を顰めて眺める少女が一人。

「……」

「えっと…鷺尾さん、怒ってるの…？」

「いえ、別に…」

園子の問いに須美は間髪入れずに返すが、腹を立てているのは事実だろう。

無意味な突撃に、戦果も出さずに泣く泣く帰ってくる始末。勢いと計画性の二つが重んじられる初陣にて、彼はその両方を容易く破ったのだ。戦場でもなければ、怒鳴りつけていたのは想像するに難しくない

い。

だが怒りは据え置き、須美は再び戦線を視る。

水瓶座を冠するバーテックスは悠々と、然れども確かに樹海を侵食していた。

少しでも近づけば、高圧の水を放出される。それを掻い潜って近付いても、唯斗と同じように巨大な水球に捕らわれる。

結局、ここで無駄に攻撃をしても、恐らくは無駄だろう。唯一の遠距離攻撃を持つ須美の狙撃も、高粘度の水球により威力を殺される。

初陣早々に『勇者』達は打つ手を完全に潰された。

「……………っ！」

須美にとつて、何も出来ない現状は歯痒い。積み重ねた鍛錬も、清く正しい『勇者』で在ろうと努力してきた日々も、無駄に終わるのだろうか。

唯斗と銀は近付けば強力だが、そもそも近付けない。園子はどう扱えば良いのか分からない。

今、考えて行動を起こせるのは自分だけ。幼い心に生まれた自尊心は皮肉にも思考を狭くして、須美を愚策すら取れない木偶と化す。

漫画や小説の敵とは違い、目の前の神敵は紛いの無い『絶望』の具現化であると、幼い少女は心に刻み込まれた――

「――あつ！ピッカーンと思いついた!!」

「の、乃木さん…?」

「おっ、園子！何か思い付いたのか!？」

「目…：しいたいけ…?…：こわっ」

目を瞑り思考の海へ浸かる須美の耳に、園子の明るい声が刺さった。

若干一人だけ反応が違うが、乃木園子の思い付きに各々が疑問を口にした。鷺尾須美は懐疑的な視線を向け、三ノ輪銀は期待に胸を膨ら

ませる。

「わたしと鷲尾さんで露払いをして、ミノさんとゆーちゃんは全力でバーテックスを切り刻む！多分わたしと鷲尾さんはあのバーテックスに相性最悪だからね〜」

「…乃木さん。考えてる事は解るけど、物理的に無理じゃないかしら…？弓矢と槍では…私達の武器では、バーテックスの攻撃を完全には防げないわ…」

須美と園子がバーテックスの攻撃を受けて、その隙に唯斗と銀がバーテックスを撃破する——『策』と呼ぶには烏澁がましい、実に単純な作戦だ。故に須美でも考え付ける策だったが、足りない。経験も、手札も、人数も。

凶悪なバーテックスを仕留めるには銀と唯斗を攻撃に回す必要がある。然しそれも現実とは言えない。相手は未知の神敵であり、その力も計り知れてはいない。

それだけでも躊躇する現状だが、次に問題視されるのは須美と園子の武器だ。

須美の弓矢による攻撃は容易く防がれた。故にあのバーテックスへの牽制は兎も角として、攻撃には向かないが、だからと言って防御面で誇れるかと聞かれれば、全ての弓矢の性能を考慮して否と答えざるを得ない。

そして園子の武器である長槍。要するに先端のみに刃が付いた棒であり、水球や高圧水のレーザーを相手に数人を守る盾とするには心許無い。

「ところがどっこい！この槍ねー、先端が開いて楯になるのだ〜！！
………さっきまで忘れてたけどね〜」

「…園子、なんか言ったか？」

「ううん、なんでもないよ？も〜まんた〜い」

『槍』では足りなかった部分は、『楯』で補える。防御面に不安を抱える現代の『勇者』達としては、タンクのポジションを担える園子の存在は有難い。

作戦の五割は理解出来ない銀だが、要するに敵に突っ込めば良

いのだと説明される。変に凝った作戦よりも、此方の方が銀にとつても得意分野と言えるだろう。

一方の須美も、欠けた作戦に最後のピースが嵌り、微かな希望を感じていた。

「……乃木さんが攻撃を防いで、私が矢で挑発する。その隙に郡君と三ノ輪さんが、バーテックスを撃破する……ええ、ええ！荒削りだけど、現状で取れる最も確実な“策”だわ!!」

「スー、テンションたか…」

「……郡君?スー” って私のことかしら…?」

「…?スーの名前、スー…?」

「私の名前は鷲尾須美よ…!スーじゃないわ」

「つまり…?…うん、スー…だ」

「……この件については、後日しっかりと話し合います。今はバーテックスが最優先よ!!」

槍の先端を開き、楯を展開する園子を先頭に陣形を整える。園子に続き須美が弓を構え、その後ろに唯斗と銀が位置する。

「準備は良いかな?」

「ええ、問題無しよ!」

「いっちょカマしてやろうぜ!アタシ達の力を!!」

「人を濡れさせたこと、後悔させてヤンよ!ヒヤハッ!バーテックスはどんな声で鳴くんのだア?それともマグロ野郎なのかア?アッハッハ!!どっちでも即逝きさせてやる!!」

「じゃあ——鷲尾さん!」

園子の号令を初めとし、須美は複数の矢をバーテックスに射る。青紫に光る矢は曲線を描き、バーテックスの上部に生えた頭部とも取れる球体に被弾する。

攻撃を受けたバーテックスはゆっくりと振り返り、邪魔者の存在を認識する。知性を有するバーテックスは、それ等がただの小蠅ではないのだと本能で感じ取った。

複数の水球を展開し、『勇者』に向かって放つ。乱軌道で迫り来る水

球に対し、須美は軽く一息をついて心を落ち着けてから、弦を引く。
「はあ!!」

再び放たれた複数の矢は閃光の如く空中を走り、全ての水球を撃ち抜く。

「おお!流石だな、鷲尾さん!!」

「油断しないで!次、追撃くるわ!!」

水球での攻撃は無効だと悟ったのか、バーテックスの巨大な水球が波打ち、極限まで圧縮された水流が放出される。

園子は展開された楯を目の前に掲げ、バーテックスの攻撃を正面から受け止めようと腰を落として構える。次の瞬間には迫り来る力の奔流に不安を馳せ、そのまま水流とぶつかる刹那――

「園子!真正面から受けてンじゃねえ!ナナメに受け流せえ!!」

「っ!う、うん!!」

唯斗の言葉に従い、園子は楯を斜めに構える。

次の瞬間にはとてつもない勢いで斜めから押され――だかしかし耐えられる。

「ッ!!――ゆーちゃん、ミノさん!!今のうちに突撃!!鷲尾さんは水球を迎え撃って!!」

「二応!!」

「は、はい!」

楯の後方から銀と唯斗が飛び出し、左右に別れて駆け出す。バーテックスは粘度の高い水球を何十と放ち、その尽くを須美に撃ち落とされる。

「銀、片タマずつやるぞ!!」

「了解!アタシは左をやる!!」

二人は水瓶座を冠するバーテックスが携える二つの巨大な水球に狙いを定め、地を蹴り跳躍する。

服を破くような迎え風。須美の迎え撃った水球の破片は顔横を通り過ぎ、頬を薄く破く。唯斗はそれを気にした様子もなく、目を瞑り心を落ち着ける。

武器を腰位置に持っていき、空中で半身を前に出す。音も無く吐き

出された息。

目標は眼前の巨敵。

残り動作は振り抜きのみ。

先程までの『動』は鳴りを潜め、『静』の雰囲気領域の如く場を占める。

極限まで溜められた力は一点のみに注がれ、熱を発散する様に身をブルリと震わせる。研ぎ澄まされた神経で強ばる身体から『脱力』し、目を開く――

「山田孤月!!」

――居合抜刀。

唯斗の武器《山田くん》を腰位置から振り抜き、空を切る動作に続いて出現したのは透明の斬撃。水瓶座の水面を僅かに震わせ、無音の数秒後には水球が二つに割れた。

「おお!!流石だな、唯斗!!」

「――諸行無常。万物は絶えず抗えず流転する。変化も消滅も、いずれは起こりうる運命さだめ。なら、オレがぶっ壊してやるよ。手前が罪を重ねる前に……なんつってなア」

「お、おお……?…何言ってるのか解らないけど、取り敢えずカツコイな!よーし、アタシも負けてらんない!!うおおおお!!」

銀の双斧から甲高いモーター音が鳴り響き、鈍く光る刃に炎が纏う。戦斧は『勇者システム』によって格段に上がった筋力で軽々と振るわれ、瞬時に何十もの斬撃を生む。

「アタシは!勇者アア!!三ノ輪銀だああああ!!」

振るわれる炎舞は『水』をも焼き斬る。

斬撃の嵐は水球のみに留まらず、中心部の本体も半壊させる。

「よお、タマ無しちゃんよオ。これで最後だ。盛大に絶頂逝けよ?」

神樹の枝を原料にした棒は対バーテックスに置いては特効性を帯びる。弱者を嘲笑う少年から放たれた一撃は、バーテックスの頭頂部から断斬し、バーテックスの再生力を持つてしても再起不可能な状態にした。

「やったか!？」

「ミノさん、それフラグだよ!？」

「ふみゆ…つか、れた…」

「こ、郡君!?!まだ終わってないから!?!寝ないでー!!」

極度の疲労からか、唯斗は野生動物のように身を丸めて寝息を立て始める。須美が慌てて揺さぶるが、一向に起きる気配は無かった。

一方のバーテックスも、地面に墜落してからは微動だにせず、再生する様子も見せない。

——そして、樹海は淡く光を帯びる。

「……うなあ、これって……」

樹海の地面から淡い光が雨の逆再生のように、天に登り当たりを眩く照らす。

「…鎮花の儀…?」

舞い上がった光は花卉に変わり、花吹雪となって負傷したバーテックスを包む。やがて少女達が瞬きをする瞬間、まるで最初から存在などしなかったかのようにその場から姿を消した。

「お、わった…の?」

「撃退…出来たのか…?」

「うん、うん…!やったね、ミノさん!鷲尾さん!!」

「すぴー…」

「…うん、唯斗は相変わらずだな。いや、めちやくちや豹変してたけど。寧ろ別人格だつて言われても信じれるくらい、豹変してただけど!」

「ゆーちゃんは変人さんだからね〜」

緊張感のない会話をしながら、『勇者』達は勝利の余韻を噛み締めた。生き残ったことを喜び、次の戦いに思いを馳せ、このままでは生

き残れないことを悟る。

今回の戦いで一番心境に変化があったのは、きっと鷲尾須美なのだろう。

そうして、初の勝利は各々に明確な課題を残しての辛勝となった。

——翌日。

この一晩で、須美は己の、そして『勇者』としての課題をまとめた。一つは己の慢心。

心の何処かで、須美は他の『勇者』達は頼れない者達なのだと思いつけていた。マイペースな乃木園子に、規則を軽んじる三ノ輪銀。無気力で何を考えているのかが解らない郡唯斗。

須美は『勇者』としての血筋だけで言えば、他の三人より劣る。初代勇者の子孫である園子と唯斗。銀も大赦内では発言力を持つ家系だ。

だが、須美は「鷲尾」の家に養子として迎えられただけだ。”鷲尾”は名高い血筋だが、須美は——本来の彼女は名家と呼ぶには些か歴史も実績も足りない家系の出だ。

だから努力して、それはいつしか『慢心』となり努力しない人を見下すような、自分が最も嫌うモノとなって心に巣食った。

そして、須美に——今代の『勇者』に圧倒的に足りないのは『結束力』なのだろう。

——否、足りないのは須美だ。

他の『勇者』達は、それぞれがコミュニケーションを取り合い親交を深めていた。例えば深い関係とは言えずとも、最低限の会話しかしてこなかった自分よりはマシだ。

だからこそ、園子は二人を信頼して楯役をまっとうできた。故に唯斗と銀は全力でバーテックスを打ち倒せた。

先日までは、須美は自分こそが彼等をまとめる統率者に相応しいと思いがついていた。だが、今なら判る。統率者に重要なのは思慮深さ

ではなく、咄嗟の行動力。須美には最も欠けているモノであり、他の三人は持ち合わせている資格。

思慮深さが無用、という訳では無い。寧ろ必要なだろう。しかし、前提として咄嗟の行動力が伴わなければ、足を引っ張るだけの木偶でしかない。

鷺尾須美は足りない。

やっと、それを自覚した。故に須美が取るべき行動は――

「郡君、ちよつと良いかな?」

「…スー?」

女子制服を着て、髪も肩まで伸ばした少年。

少女にしか見えない彼は校内で堂々と漫画を読みながらスマホゲームも併用し、駄菓子であるイカの姿フライを啜えている。これには優等生である須美も呆れを通り越して苦笑いだ。

「えつと…あのね。今日の放課後…時間あるかしら?き、昨日の祝勝会をしたくて…!…あと、学校に關係ないものは持つてこない方が…」

先に園子と銀は誘っていたが、ちようどその時に限って唯斗は体育館で友達とラグビー風バスケットボールをしていた。審判係からのホイッスルが鳴り止まなかったと、後に唯斗は語る。

「ん…ちよい待ち」

唯斗はゲーム画面だったスマホをホーム画面に戻し、受話器のアイコンが付いたアプリをタップする。

「もしもし…うん、オレ。…今日、ようじ…でき、た。…は?…ケチ、一日…くらい…多め…に、見ろ…!…あ?…あゝん!?ぎけんなよッ!このクソが!!いい歳して餓鬼臭え事又カしてんじやねえよ!!…なんだとゴラア!!態度だア?テメエのせいだろうがア!!ぶつ殺すぞ!!——とにかく、今日は無理だつてーことで。あゝ?テメエがナンパしてたこと、母さんには黙つててやるから大目に見ろよ」

「…っ!?!」

何処かに電話を掛けた唯斗だったが、口調が段々と変化し、次第には昨日の戦闘中と殆ど変わらない口汚さとなった。

どうにも、須美はその豹変には慣れない。昨日と同様に驚きを隠せず、まるで他人を目の前にしてるような感覚に陥った。

「ん、快諾…」

「どこが!? えつ、だ…大丈夫なの…? 何か用事があったなら、そつちを優先しても…」

「だいじょーぶ。…サボりは…おとこ、の…義務…」

「そんな義務はありません!」

斯くして、須美は心の内を吐き出す場をセツティングすることに成功した。

◆◆オマケ◆◆

・コンセプト(続編)

鷲尾須美《発芽前の純粹》

・まだ確変は起こらない。依存せず、己に自信を持ち、故に未熟な種。その種は何を咲かすのか、それは今の誰にも知ることは出来ない。発芽の切っ掛けは、まだまだ遠く。然しその片鱗は鑑みえる。

乃木園子《不変の鴉》

・鴉、その性質は不変。元より黒い身体は何者にも染まらず、誰よりも『自分』を全う出来るのが彼女。誰よりも優しく、思慮深く、殆ど完成された器。その器を満たし、完成させるのはもう少し未来。鴉の彼女は自由に飛び回り、枝を探す。

三ノ輪銀《隣走者》

・仮面を被らず、同じ目線で隣を走る彼女。純粹故に物事を軽視することもあるが、人徳がある彼女は幾多の人々から支えられる。隣走者は隣走者を増やし、皆の力を一つに束ねるのも彼女の才能。例え辿り着く場所が違くとも、今だけは――

郡唯斗（小）《偽りの二面性》

； 在り方 は彼の『色』ではない。後から塗られ、然れど定着せず雨によって洗い流される程度の仮染。前髪を伸ばして視界を遮るのと同じだ。曝け出すことに恐怖を覚え、そんな弱さを歪にも理解し、その仮面に甘える。

小学生勇者3く信頼と弱みく

勇者御記 神世紀298年 ○月?日 郡唯斗記

——気持ち悪い。

ずっと、異物感が離れない。

普段のオレも、強くなるために取り繕ったオレも。全部オレのハズなのに、全てが別人のように感じる。取り繕った裏側では、全てが灰色に見える。それが気持ち悪くて、吐きたくなる。

今日は初めての実戦だった。

オレも含めて、未熟だ。確たる統率者が決まっていなかったから、神樹様の力を身に宿した『勇者』とて烏合の衆に等しい。オレの中で勝手に高揚して、口汚くなる『部分』に吐き気がして、思考が回らなくなっていた。

ロールプレイングが想像以上に誤算を産んでいる。由々しき事態だが、戦闘に関してはロールプレイングを下手に崩せばオレは木偶に等しい役立たずに成り下がってしまう。

『勇者』の中で突出しているのは、恐らくは三ノ輪銀だ。彼女の戦闘センスは、この先、追い詰められた戦況を容易く裏返す場面もあると思う。日々の鍛錬が無ければ、初戦から置いていかれていただろう。

まだ未熟だが、これから更に強くなると考えたら、これ以上に頼もしいものは無い。

乃木園子の特筆すべき点は才能だ。

この先、『勇者』の統率者として戦況を支配するのは彼女に、他ならないだろう。

『郡』と同じく、初代勇者の子孫である『乃木』。彼女の本格的な戦闘場面は見れなかったが、硬直、混乱状態からの咄嗟の行動力。自ら楯役となり、最前線で敵を抑えられる度胸。

彼女は紛れもない天才肌であり、勝利への貢献に関しては随一だった。

——問題は、鷲尾須美だ。

彼女もまた、弓矢の精密度はシステムの補助があるとしても、類を見るものでは無い。

しかし、それだけだ。

無意識にオレを含めた他の『勇者』を見下し、醜く肥大化した自尊心。思慮深くはあるが、思考が偏り過ぎて思い悩み、行動に移せない脆弱性。後者に関しては命を預ける相手としては決定的に欠けていて、頼りたくないと感じてしまう始末。

今回の戦闘で多少は改善されるだろうが、何度も命を脅かさないと成長出来ないのであれば、早々に『勇者』を諦めるか、無駄に戦死するしかない。

そして正直、オレは彼女が苦手だ。

人に自分の主張を押し付け、強制させる質。オレが最も嫌ってる彼奴に——父親に似ている。性格も性別も、年代すら違うのに、押し付けがましきの一点に関しては同様の性質だ。

もしも後の戦闘に支障が出るようであれば、オレは彼女を本格的に敵視してしまうだろう。今は取り繕って、全ての感情を軽薄にして接しているが、このままではいずれボロが出る。

いつまでも味方として接するのは、オレの心が持たない。

結論、鷲尾須美が嫌いだ。

乃木園子は彼が——郡唯斗が苦手だった。

初めて会ったのは、『勇者』の御役目を言い渡されてから、同じく選ばれた皆と顔を合わせた時だ。

真面目で清楚な鷲尾須美と、元気で無遠慮な三ノ輪銀。誰に対しても良い印象を抱けなかった園子だが、もう一人の『勇者』——郡唯斗には明確な嫌気が湧いた。

恐らく、園子しか気付けなかった。無気力でボーツとした表情の裏に隠れた、酷く冷めた視線。大人が女兒のお人形遊びを観るように、

何も、興味どころか期待すらしていない瞳。

怖い、と思つた。自分と同一年の彼が、何故あんな表情をして、しかもそれを容易く隠せるのか。

『乃木』の血を色濃く受け継いだ園子。その才覚は大人も軽視できないものであり、『郡』の血を受け継いだ彼もまた同じなのだ。園子は察した。

だからこそ同情した。

可哀想だと感じた。

自分と同じだ。その『血』は他と自分の違いを明確に伝えて、しかしそのズレだけは知らせてくれない。それを変わり者だと称すか、狂人だと貶すか。

園子は先祖について詳しくは無いが、『乃木』と『郡』が同じ初代勇者だったのであれば、きつと仲良しだったのだろう。思うだけなら自由であり、もしもそうだったら園子も嬉しい。

——仲良くしたい。

だから、まずは渾名を付けることにした。

次に自分から話しかける回数を増やした。皮肉にも、お互いに友人は少ない。正確には、園子には友人と呼べる存在はいないが、唯斗には共に遊ぶ相手はいた。

それでも互いに少ないのは間違いのない事実であり、園子は唯斗との共通点を見つけた。

何十回と言葉を交わして、彼への印象は容易く変わった。

彼は何処までも人間味が溢れていて、とてもじゃないが『勇者』に相応しい人格とは言えない。

しかし、彼の天然なところは限りなく素に近い。彼は得体の知れない生物ではなく、仮面を被るのは得意でも、嘘をつくのは苦手な、とても純粋な人なのだ。

そんな側面を知って、愛しく感じた。

彼の観察するような視線。それは彼が臆病な人であり、後に控えた

戦闘を憂いてるだけだ。

彼がイレギュラーな『勇者』ということで人一倍厳しい鍛錬を詰んでることは事前に知れた。だからこそ、彼は他に足を引っ張られることを恐れているのだ。

怖がりな彼を知って、護りたくなった。

初めての戦闘では、彼の暴走から始まった。豹変したと言っても過言では無い。その在り方を演じて、武器を振るう。他の二人は気付いてはいなかったけど、彼が刹那に見せた苦しそうな表情が、その豹変を仮面のひとつなのだと言語った。

また一つ素に近づいて、嬉しくなった。

苦手意識はいつの間にか消えていた。

きっと、彼を見続ける内に——乃木園子は郡唯斗に”初恋”をした。変わり者の彼女が、同じく変わり者の彼に惹かれた。

乃木園子は可愛くて、カッコよくて、変わっていて、臆病で、何処までも人間臭い彼に淡い『恋』をした——

「えっと…今日という日を無事に迎えられたことを、嬉しく思います。えー、本日は大変お日柄も良く…神世紀298年度、勇者初陣の祝勝会ということで、お集まりの皆様は今後益々の繁栄、健康、そして明るい未来を——」

「なーがーいー!!園子と唯斗か寝息立ててるぞ!」

「すぴー…」

「なっ!」

シヨツピングモールのフードコートにて、『勇者』達の祝勝会は執り行われていた。開始数分と経たず参加人数の半数は寝ているが、それでもめでたい祝勝会だ。

須美は徹夜で考えてきた文章が長々しく綴られた用紙を用紙を手元から落とし、若干落ち込んだ。

白金ブロンド髪の少女は猫のぬいぐるみ風枕に顔を埋め、暗い茶髪の少年は同じくクマのぬいぐるみ風枕を両腕で抱き締めながら硬い

はずの机に頭を置く。

「おーい、起きろー？ 鷺尾さんが泣いちゃうぞー？」

「な、泣かないわよ！」

「んー…大丈夫だよ。寝ているのと起きているのは表裏一体。だから、私達は実質的には起きてるのだ〜zzz」

「結局寝てるじゃん。…てか、二度寝するなよ…」

ムクリと起き上がり、園子は自理論、通称戯言を吐いてたから再び夢の世界へと旅立った。銀は園子の肩を揺さぶり睡眠を妨害し、その成果があつてか、園子は目を擦りながら欠伸をして起き上がった。

「唯斗もだよ。寝てると、顔にイタズラ書きするぞー？」

「……………銀、うる…さい…ッ」

「はいはい。目覚まし銀さん免じて、ついでにここは空気読んで起きるのぼどーかな？ てか起きろ。今すぐ起きろ。さっさと疾く起きろ」

「……………」

「寝るな寝るな。クマのぬいぐるみっぽい枕に顔を埋めるな！…こんの問題児め…!!」

「……………ん、しゃー…なし…」

銀の尽力の成果があり、マイペースな問題児二人は目を覚ました。これには主催者の須美も呆れて苦笑いだ。

漸くして、祝勝会の開始——全員が必要として集まっていたであろう話し合いの場が揃った。

全員、この祝勝会をただの勝ちを祝う会なのだとは思っていない。話の切り出しを待つ者や、その機会を窺う者。傍観を決め込む者もいれば、単純に祝いたいと状況を楽観視する者も居る。

機会を窺う者——鷺尾須美は膝上で小さな拳を握りしめ、勇気を振り絞る。

「その……………ご、ごめんなさい！」

「……………スー？」

「どくしたの？…急に」

雰囲気は一転。須美の謝罪の意味を、彼らは察せない。想像と違う切り出しだったからか、将また謝罪の意味を本当に理解出来なかった

からか。

須美は頭を下げ、言葉を続ける。

「私…実は、三人のこと…あまり信頼してなかった。き、嫌いだとか、そういう事じゃなくて！単に、私が人を頼ることが苦手だから…」

——心の内の告白。

それは未熟さの自覚だ。己の幼さを理解し、受け入れ、それでも次に進もうとする少女の成長。須美は自分でも、”らしくない行動”というのを自覚している。数日前までも須美だったら、協力要請はしようとも胸の内を曝け出したりはしなかった。

何故こんな行動に出たのか、自分でも完全には理解出来ていない。しかし、これが絶対に必要な謝罪なのだということくらいは判る。故に、即行動に移した。

「この先…私はきつと、独り善がりでは次に進めない。私の力はちっぽけだから、みんなを頼らないといけない。…だから、歩み寄らせて欲しいの…！三人と、仲良くしたい…です…」

「……なんか、意外だな。鷺尾さんはアタシ達よりも余っ程真面目だから、仲良くするって言うよりも『作戦を決めましょう！』って言うと思ってた」

「そ、それは……」

「あー！せ、責めてるんじゃないやなくてさ。…嬉しいよ、単純に。凄く嫌われてると思ってたけど、鷺尾さんから歩み寄ってくれるんだな！」
「わたしもミノさんと同じく、御役目を背負う者同士、やっぱり仲良くしたいよね〜」

事実、須美は皆と馴れ合う気は無かった。彼女達の志が低く、『勇者』には向いてないと傲慢にも決め付けていたからだ。

しかし、須美はもう彼女達を『勇者』に相応しくないととは思わない。勇気を間近で見、共に初陣を勝利に導いて、間違いなく三人は『勇者』だったのだと胸に刻み込んだ。

須美の決意を、銀と園子は受け入れ歓迎した。だがそれでも、例外はある。

「スーは、さ…」

「こ、郡君……？」

「……スーは、さ……勝つ……ためだけ、に……生き、残る……ために、オレ達と……仲良、く……したいの……？」

「えっ……ち、違うー！ そうじゃないわ!!」

「オレも、スーと……同じ。……銀も、園子も、スーも……信頼出来ない……別に……利用するなら、すれば……いい。尽力……おし、まない……義務は、果たす……。でも……馴れ合う気、は……ない……」

「そ、そんな気は……！」

——郡唯斗は鷲尾須美を受け入れない。

唯斗はまだ、彼女に見切りを付けた訳では無い。だが、認めたといい訳でも無い。

ここで偽りの『信頼』を掲げたとしても、それは贋作にも劣る偽物にすぎない。ならば、最初から無い方がマシだ。そんなものに頼るのであれば、お互いに利用する道を選んだ方が余程、建設的だ。

「お、おい！ 唯斗!! そんな言い方……！」

「ゆーちゃん。ゆーちゃんは、とつても怖がりなんだね」

「……は？」

銀の叱りを遮り、園子は真っ直ぐと唯斗の目を見つめる。黒曜石のように真っ黒で、しかし何処か曇っていて、小学生のしているいい良い瞳ではない。

まるで奈落のような眼を見つめて、園子は愛しく微笑む。

「触れ合うのを恐れて、裏切られるのを怖がって。懐に入れたものは絶対に離したくない。そんな弱みを作りたくないから、拒絶するんだよね?……とつても寂しくて、我儘で、人間らしい在り方だね……」

怪訝に歪む表情には、”凶星”の二文字が浮かんでいる。弱く大人びていて、故に小さな子供にも見える”在り方”。

——強くなければいけない——

強迫観念が”弱み”を包み隠す。他人を突き放し、それでも平然を装う姿は、園子には痛々しく映った。だから、その”仮面”をそつと剥いで、両腕で”弱み”を抱き締め、他の誰でもない『郡唯斗』を見

つめる。

「なーんだ。そういうことか！だったら安心していいよ。アタシ達は、唯斗の弱みになるほど弱くない——いや、違う。弱みなんて吹き飛ばすくらい、もともともと強くなる！むしろ『寂しがり屋』も護れるくらいな!!」なっ、そうだろ？園子、鷺尾さん！」

「むん、強くなつたるぞ〜！」

「…そうね。私達は『勇者』…元より護られる存在なんかでは無い。だから、強くなるわ。郡君が、私達を信頼出来るくらい！」

白と黒で薄れた彼女達の言葉には、いつの間にか『色』が付いていた。燃え盛る紅、優しく包み込む薄紫、純粹に透き通った蒼。

責めずに手を差し伸べてくれる少女達。その光景を、唯斗は知っている。知っていて、それでも突き放してきた”優しさ”だった。

——もしかしたら、失わないのかも——

ふと浮かんだ言葉に、唯斗は自分がまた一つ弱くなっていることを自覚させられる。

心地良い雰囲気、身を浸したい。そう思わずにはいられなかった。

「……勝手に、すれば…いい…」

唯斗はイジけるようにクマの枕に顔を埋める。そして、三人は見逃さなかった。ほんのりと紅に染まる耳と、小さく微笑んでいた口元。つられて、皆も微笑んだ。まだ受け入れてはもらえないが、手応えはあった。後は、自分達が強くなるだけなのだ。

「ミノさん、嬉しそうだね〜」

「そ、そうか…？」

「口元が緩んでるわよ、三ノ輪さん」

友の成長は、銀にとっては喜ばしいものだ。いずれ、隣で寝たフリを続ける『友』と、自分と同じくらい微笑む二人とは無二の関係になる気がした。

「鷺尾さん、アタシの事は銀って呼んでよ。三ノ輪さんってよそよそしいだろ？」

「あー！じゃあわたしの事も名前でも呼んで〜！わたしは『わっしー』って呼ぶから！」

「え、えつと…」

「園子…急に捲し立てるなよ。…でも、鷺尾さん…：ううん、須美！ゆっくりでいいから、アタシと園子。ついでに唯斗のことも名前でも呼んでくれよ？仲良くなるために、な♪」

「が、頑張ります…ッ！」

「わっしーはお堅いね〜」

その日、『勇者』達は友達となった。僅かな瘡を残して、それでも少女達は前に進む。互いに歩み寄り、明日を目指して――

神世紀二百九十八年。

これは、四人の勇者の物語。

神に選ばれた少年少女の御伽噺。

いつだって、神に選ばれるのは無垢な少女達である。そして多くの場合、その結末は残酷だ。しかし、私達がそうならなかったのは、例外が存在したからだろう。

じゃあ、なんで『彼』は神樹様に選ばれたのだろうか？

■■■に――■■■に、■■■に似た■■■が存在していたことが、関係しているのだろうか。

私の家の、倉庫の地下室には、唯一検閲がされていなかった資料があった。そこには、■■■と酷似した■■■の姿が映された写真があった。酷く劣化していたけど、大事に保存されていた。

しかし、あれは本当に■■■だったのだろうか。

純白の髪に、真っ赤な瞳。

■■■との関係は置いといても、私には、写真の彼が■■■ではなく■■■の様に思えた。私達『勇者』とは異なる、それでも純然な■■■の気を身に宿した存在に見えた。

先代勇者組襲来

「——それでね、その後すぐに二回目の戦闘があつてだね」

「ストップ。園子、ストップして」

「…?どーしたの、ゆーちゃん?私たちの昔話、まだまだあるんよ?」

時刻が午前一時を過ぎる頃、園子から語られる思い出話に唯斗はストップを掛けた。

ニワトリの着ぐるみパジャマに身を包む園子はぼかんと口を開け、頭上に疑問符を浮かばせる。対して唯斗は頭を抱えている。

心做しか表情は暗く、とても昔話に花を咲かせている状態には見えないだろう。

「キツイです……いや、マジで…誰だよ、その普段無口で戦闘中に限つて豹変する腹黒チヨロ小学生…乃木さんちの園子さんや、誇張表現がすぎまつせ?アツハツハー、冗談が重いなー!!」

「うーん、冗談じゃないんだけどね。あつ、そーだ!わっしーとミノさんにも確認してみるのはい——」

「やめよう、そのうち。誰も幸せにならない真実確認なんて止めよう。唯斗くん赤面悶え案件だぞ、それ……」

「なにそれ見てみたい!」

「シバくぞ雌豚!!」

それが嘘であれば彼女の妄想力が凄いと、いう小並感満載な感想を告げるだけの小話になるだけなのだが、もしも略称ヤベー奴な小学生時代が本当だったのであれば、唯斗は言葉に偽りなく悶え死ぬだろう。

寧ろ悶え苦しむ唯斗に興味津々だった園子。唯斗に罵られるが、全く持って気にした様子はない。

唯斗のベッドに寝転び、足をパタパタと動かす園子の反応に唯斗はため息をこぼす。他人の家で寛げる度胸や、何故か明細に記憶されている二年前の出来事。

唯斗には乃木園子という少女がびっくり箱の様に思えた。記憶に

ない黒歴史を未来永劫語られ続けると思えば、やはりため息も漏れてしまう。

「まー、ゆうちゃんが止めろって言うなら止めるよ。また聞きたくなったら何時でも言ってるね〜zzz」

「……………えっ、寝るのはやつ!?……………俺のベッドなんだけど…」

園子は会話の途中で無言になる。不思議に思った唯斗が顔を覗き込むと、安らかに寝息を立てる居候少女が一人。

「……………俺も寝よ。おーい、園子ー?寝るならもつと端に行け。もしくはベッドから転げ落ちろー?」

唯斗は園子をベッドの端まで転がすと、部屋の照明を消してから園子の横に寝転がり、掛け布団に包まった。

——郡唯斗、十三歳。まだ男女間の倫理観が足りないお年頃だった。

文化祭が無事に終わってから一週間弱。

木々や山の景色は完全に赤や甘橙へと染まり、吹き抜ける風も冷気を帯び始める。一月前までは煩かった蝉の声は止み、日が暮れる頃には鈴虫やコオロギの優しい鳴き声が奏でられる季節だ。

個々の休息や心の整理を付けるために勇者部の活動も数日程は休止しており、暫く忙しかったため疎かになっていた勉学にも励んでいた。

そして土日の休日明け、放課後になり勇者部は久方振りな活動を再開させる。

「はーい、勇者部の活動を始めるわよ——って!久し振りの部活なのに人少くない!」

「お姉ちゃん、唯斗先輩と東郷先輩がいないよ?」

「なっ!?」

部室に居るのは犬吠埼姉妹と結城友奈、三好夏凜の四名だけだ。

「友奈に夏凜……………あの変人コンビはどこ?」

「えつと…部室に来る前に、気が付いたら消えてました!」

「唯斗は兎も角、歩けるようになって機動力が上がった東郷変人の動きなんて把握できると思ってる訳？少なくとも、私には無理よ、無理」

「あ、あはは…変人先輩はちよつとだけ東郷ですからね」

「マイシスターよ、変人と東郷が逆になってるわよ。類語だから意味は合ってるし違和感は全くないけど、とりあえず間違ってるわよ」

「あつ…てへっ☆」

「うちの妹が可愛すぎるんですけど？今日の晩御飯は樹の大好物にしちゃうわ！」

「相変わらず樹には甘いわね…」

「おー？何よ夏凜。嫉妬してんの？愛いやつめく！友奈、寂しがり屋な夏凜を抱き締めてやりなさいな」

「ラジャー！カーリーーんーちゃーん!!」

風の命令により、友奈は満面の笑みで夏凜の後方へ忍び寄ると、両手を広げて夏凜に飛び付いた。

「わぶっ!?ちよつ、急に抱きつくくな！頭撫でるな！匂い嗅ぐなあああ!!」

夏凜は暴れるが、後ろから引っ付いた友奈は剥がれない。友奈は暴れ回る夏凜を力一杯抱きしめながら、頭を撫でて首元の匂いをスニツと嗅いだ。

この時、部室のドアから中身をチラリと覗く影が複数有ったが、全員が夏凜と友奈に気を取られて気付かなかった。

ビュオオオウと奇声を上げてメモをとる変人や、パシヤリと写真を撮り相手の弱みを握ろうとする変人。ハンカチを噛み煮干し奇人に嫉妬する変人と、変人達に呆れて苦笑いを浮かべる常識人。ドアの後ろでは色濃い状況が展開されていたが、やはり誰も気が付かなかった。

「えへへ、夏凜ちゃんって落ち着く匂いするよね。ふつかふかの布団みたい…ほっこり」

「あ、わかります！夏凜さんって、自分の部屋って言うか…久し振りに帰った実家みたいな、心休まる感じですよね…ほっこり」

「訳分からないことで和むなー!!」

「ツツコミ型勇者は大変そうね…」

三好夏凜、十四歳。まだまだツツコミ型勇者としては成長段階。目指すは芸人、辿り着くはツツコミ役。最近の悩みは自分でも自覚無くしてノリツツコミすらこなしてしまう事。

ボケ一人と天然ボケ二人に囲まれて、今日も猛々しくツツコミ咆哮を上げていた。

そんな平和な日々。若干変人度の薄い教室でも、平和な日常は展開されていた。少なくとも、その時までは――

――ガダアアアン!!

突如、ドアを全力で開けて轟音を掻き立てる集団が来る。

「パラリラパラリラ! どんどんパフパフ!! 道場破りだ、勇者部めく!!」

「そ、そのちゃん!?! 銀ちゃんに唯斗くん…と、東郷さんまで…?」

名乗りを上げるは淡い金髪の少女。似合わないサングラスをかけて、ヒヤッハー系の世紀末モヒカン御兄様の如く少女は吠える。

「……えつと? アンタ達…先代の勇者なんだっけ? 初めまして。アタシは犬吠埼風よ。乃木園子さんと三ノ輪銀さん…よね?」

「いえーす! あいーむ、先代勇者の乃木園子だぜ〜! 大橋の方で勇者やってましたぜ〜!! さんはいらナツシング!」

「チツス! 同じく先代勇者の三ノ輪銀でツス! 愛と勇気だけは誰にも負けないアンパン女ツス!! あつ、アタシもさんはいらないます!」

「同じく先代勇者で、唯一の常識人枠だった郡唯斗です。さんをっけるよデコ助野郎」

「右に同じく先代勇者で、現在進行形で常識人枠の東郷美森です。さんよりも殿派です」

「最後の二人、ちよつと黙ってなさい。さんも殿も付けないし、そもそもアンタらは常識人枠じゃないわよ」

「……?」

風の言葉に唯斗と東郷は首を傾げて頭に疑問符を浮かべる。元より自覚が無く、何度指摘されても冗談だろうと笑って過ごせる程の強者だ。今更、毎度と同じように言われたところで何も響かない。

「お、お姉ちゃん……！自覚がないパターンだよ!？」

「樹……変人つてのはね、総じて自覚が無いものなのよ。まあ？アタシはこの部唯一の常識人だけどね!？」

「風、ブーメランよ。アンタはそつち側だつてことを自覚しなさい」

「そーだそーだ!!常識人面してんじゃねーよ!この変人の巣窟の長!!」

「夏凜と唯斗!煩いわよ!!」

変人には変人の自覚が無い。風は身を持ってそれを証明した。唯斗は他人事のように『ああは成りたくないな』と呟いた。尚、既に手遅れな模様。

奇人は本日二十袋目のイカの姿フライを開封し、呆れにため息をこぼした。

「……それで、道場破りつてどういう事よ？勇者部はそもそも道場なんがじゃないけど」

「ふっふっふ。それは私達、先代勇者組……否！極・勇者部が勇者部を打ち破るのだから!」

「な、なんだつてー!？」

「わあ、風先輩ノリが良い！よし、樹ちゃん！私たちも!!」

「はい！友奈さん!!」

「な、なんだつてー!？」

「……………えっ、なに？い、言わないわよ!？私は言わないからね!？」

全員の視線を受ける夏凜は否定の意を表す。決して、自然に乗るタイミングを逃して、後になってから慌ててノリに乗るのがかっこ悪いから言えなかった、という訳では無い。完成型勇者としてカツコを付けることが生き甲斐の夏凜だが、決してそんなことは、微塵も有り得ない。

「さあ、唯斗君……ううん、部長。高らかな宣告を」

「えっ……ちよつとちよつと、ちよい待ち東郷殿。部長（仮）つて園子

じゃないん？過去もリーダーだったって話だし」

「えっ、わたし？…うーん、ここは真面目な皮を被ったわっしーが適任だと思わない」

「辞退します。私、やっぱり統率者には向いてないって思うもの。昔もそれで…くっ、黒歴史が…ツ…：銀はどう？意外と向いてるって思うわ」

「おいおい、マジかよ美森さんや。アタシはそんなの柄じゃないし、ここはやっぱり言い出しっぺの唯斗がやるべきだろ！」

「んじや部長命令、園子が引き継げ」

「だが断るぜえい!!」

「アンタら話まとめてから来なさいよ!」

醜い責任の押し付け合いをする先代勇者組こと自称極・勇者部に、夏凜は思わずツツコミをいれる。

「園子、銀。あれが勇者部の誇る最強のツツコミ役だ。俺達も負けてられないな…!」

「誰がツツコミ役よ!?変なことに闘争心燃やしてんじやないわよ!!」

「おおー、流石ツツコミ型勇者だ。あの鋭さ…今のアタシのツツコミ力じゃあ敵わないな。ぐツ…二年間のブランクかな…?」

「日々成長だよ、ミノさん!まずは成長して変人度が神強化されたわっしーの天然ボケにツツコミを…」

「園子さんや。さつきから『真面目な皮を被った』とか「変人度が神強化された」とか言ってるけど、美森に恨みでもあるのか?」

「ふふっ♪そのっちは相変わらずね」

「相変わらず成長しねエヤロウだな!この層が!!…とストーリーゴウが申しております」

「悪解釈がすぎるわ…!」

「ストーリー…?ストーリーカーみたいなニュアンスだな。漢字だと素東郷…?ストーリーカーが美森の素だってことか…!?…美森がいつの間にか手に負えないヤベー奴になってる…：真面目だった須美はもう存在しないのか…!」

「話を！まとめてから!!出直して来なさあああいい!!」

先代勇者組は煮干し型勇者に部室から追い出された。

——極・勇者部が勇者部の部室から追い出されてから数分後。

「うーす、道場破りでーす」

「妙にやる気のない声ね…」

今度は普通にドアを開け、唯斗が入室した。何処か落ち込んだような、やる気の見えない声質に風は怪訝な声で呟く。

「えー、はい。……なんだっけ？新・勇者部？…いや、改・勇者部だっけ…？……まあ、勇者部（仮）でいいや。えー、勇者部（仮）の部長（仮）になった郡唯斗（仮）です。テメーら皆殺しだコノヤロー、ということ夜露死苦」

「何も良くないわよ!?集団名くらいはつきりしなさいよ！何で唯斗も（仮）なのよ！急に皆殺しってどういう事よ！そもそも何で部活に対して道場破りなのよ!!」

「流石夏凜さん！全てのボケに対して満遍なくツツコミを入れました…！そこに痺れも憧れもしないけど、慄きました!!」

「樹ちゃん、痺れも憧れもしないけど慄いちゃったんだ…」

ツツコミ勇者がレベルアップを果たすと同時に、樹の夏凜に対する尊敬度が下がり、慄き度が爆増した。

「えー、はいはい。参謀（仮）のトーゴー（仮）。今回の趣旨を簡潔且つ丁寧に説明しやがってくださいえ」

「東郷（確定）の参謀（仮）です。今回、私達が企て行動に移したのは、『現勇者』対『旧勇者』の道場破りこと部活破りです。決戦だコノヤロー、というのが今回の標語です」

「はい！東郷先生!!質問でーす!」

「どうぞ、友奈ちゃん」

ピシリと上げた拳手を東郷は指名する。

「どうして東郷さんと唯斗くんは旧勇者側なんですか?」

至極当然な疑問だった。

友奈にとつて、東郷美森と郡唯斗は同級生であり、同じ世代の『勇者』だ。初めて変身した姿や、その戸惑いや葛藤も見てきた。

故に、事実が違おうとしても友奈にとつては二人は同じ神世紀300年の『勇者』だ。

「ふははははは〜！それは、わっしーとゆーちゃんがミノさんの妖艶たる魅力に堕ちたからだ〜!!」

「おちた…？落とし穴…？」

「園子、適当なこと言うなよ…友奈が理解出来てないぞ？…あー、アタシから簡潔に説明するとだな…カクカクシカジカで——」

「おいおい、銀さんや。カクカクシカジカで説明出来るわけないだろ」

唯斗は銀を窘めるように言葉を遮るが——

「なるほどね…東郷と唯斗は記憶喪失で、実は先代の勇者だったのね」

「風先輩!?何で解るん!?!」

「つまり、東郷先輩の足と記憶喪失は過去の満開が原因だったんですね…!」

「樹?お、お前もそっち側なのか…？」

「だけど唯斗だけは別の事が原因の記憶喪失だから、満開の後遺症が治ったとしても記憶は戻らなかつた、って訳ね」

「にぼー太、お前もか…!」

「誰かにぼー太よ!!」

カクカクシカジカで事の顛末を把握出来る超人達。自称常識人で実質的にはアホでしかない唯斗には到底理解は出来なかつた。

「えっ、どーゆーこと!?!東郷さんと唯斗くんが先代勇者!?!しかも記憶喪失…?と、東郷さんだけじゃなくて唯斗くんも記憶喪失だったの!?!み、みんな知ってたの…?」

「あつ、友奈はこっち側だったんだな。ウエルカム、カクカクシカジカ意味不明組へ」

「ウエルカムされちゃった…?」

唯斗の友奈への好感度が微増した。友奈の困惑度も微増した。東郷はカクカクシカジカ意味不明組に入隊したそうに見つめるが、唯斗

は舌を出し拒絶する。

——話が逸れた閑話休題。

「つまりー！俺達『先代勇者組』は現代の『勇者部』を打ち倒し、先輩の威厳を証明しようってわけだ!!」

「勝負だ勇者部めくzzzz」

「そのつち、起きて?」

「……………私、帰ってもいい?」

夏凜の切実な願いをぶった斬ると同時に、戦いの火花は散り大きく燃え上がった。

◆◆◆オマケ◆◆◆

冒頭で園子への呼び方がコロコロ変わる唯斗くん。

・園子 ↓ 乃木さんちの園子さん ↓ そのつち ↓ 雌豚
尚、普段は園子呼び。

「——コロス……全て、邪魔……潰して、殺す……!!グガアアアア!!」
「なっ!?ち、力負けした!?!」

唯斗の分身は、耐久力を除けば唯斗と全て同一だ。その分身二体の攻撃を、風は一薙で振り払い、攻撃を真正面から受けながらも分身を消滅させた。

「クッソ!どうなってるんだよ!?!外はこんなだし、先輩は操られてるっぽいし!!『満開』!!」

「——『枯花』……滅びろ……こんな、こんな世界イイイイ!!」

紅い空にオンシジュームが咲き誇り、対岸には最早原型を留めていない枯れ果てた花が浮かび上がり、ヘドロのように崩れ落ちる。

空から崩れ落ちた、黒く粘性を含む液体は風を飲み込み、辛うじて原型を留めていた勇者衣を溶かし、漆黒のフル・ドレスへと変貌する。

「ふう……っ!ふう……ッ!!ガッッ!!グッウウウウ!!^{起きろ}起動——!!全て、喰い荒らせエエ!!」

地面に堕ちたヘドロは、風の号令により動き出し、収縮し、何百体もの泥人形となる。

「イケるか!くまマン!?!」

『やるしかないでしょう……!借りるわよ、唯斗。『分身』——!私はアレを抑えるから、貴方は彼女を止め……いえ、殺しなさい。アレはもう、奥まで侵食されている……助ける、だなんて思わないで』

「……解ってる。俺は物語の主人公様じゃないんだ。あんなのを救おうだなんて、思わねえよ……」

『……貴方のせいじゃないわ。悪いのは、天の神か……或いは、業を後世に残した人類よ。気に病まないで……』

「……やるぞ、くまマン……最後に遊んでやろうぜ」

『……ええ、共に踊りましょう。悲しい鎮魂歌に乗って』

互いに武器を握りしめ、紅と黒に染まる犬吠埼風と迫りくるバーテックスに挑む——

「ゲボッ……まじ……か、よ……」

「ぐふーッ！ぐふーッ！！」

黒い瘴気に覆われた風の攻撃は、精霊のバリアを容易く砕く。肩から腰までを袈裟斬られた唯斗は吐血し、純白の神官服を紅く染める。

「……お前、誰だよ……ッ？」

「煩い……うるさい、うるさい、うるさああああい!!誰!?アタシの頭の中で、語り掛けるな!!グガアアアアア!!アタシ、ハ、アタシ……ダ!!がアアア!ウグアアアアア!!」

「……チツ、聞こえてねえな……」

頭を抱え、苦しみに悶える風。彼女の全身は自らの血潮と唯斗からの返り血で赤黒く染まり、互いに満身創痍だ。

然れども、彼女の負傷は唯斗の攻撃を受けたのではなく己の攻撃の反動のみだ。巨大すぎる大剣は振るう度に自分ごと相手を傷付け、極限まで酷使された全身の筋肉はブチブチと音を立てて裂ける。その部分を黒いヘドロで補強するように覆われ、白く瑞々しい肌は黒く歪に変貌する。

後方に目を向けると、複数体のテディベアが宙を舞い、無限に等しく出現し続ける泥人形を轟音の元で打ち砕いている。

しかしくまマンの身体にも切り裂かれた跡が多く、決して無傷とは言えない現状だ。

「クソ……疲れたし、身体は死ぬ程痛い!今すぐ帰って寝たい……!でも先輩は放って置けねえし……あ、あ、あ……!!クツツツソ面倒臭い!!」

重く、不安定になった身体を無理やりにも持ち上げ、唯斗は金に染まった遊槌の柄を弱々しく握る。

「——居た!唯斗!!やつと見つけ……えっ……」

「先輩……ッ!?う、腕が……!」

「……あ?……夏凜と樹か……」

「アンタ……!その腕……!」

「あー、見ての通りだよ。斬られちゃった……ほんと、左利きで良かったよ」

唯斗の肘から先がない右腕を見て、駆けつけた夏凜と樹は絶句す

る。これまで、快勝を収めてきた彼が瀕死の重症なのだという事実や、その執行人が部長の風だという悲劇。

血腥い現状に樹は吐き気を催した。大切な先輩と姉が殺し合い、共に満身創痍。大好きな姉は明らかに正気を失い、その姿はバーテックスよりも凶悪で、『勇者』ではなく『魔王』だ。

「お姉ちゃん…？どうして、こんなこと…ッ！」

「ダレ…？わからナイ……ッ！ワからナイ、ワからナイワからナイわカラナイ!!アッ、アッ、アッ、アアア!!ワカラナイ、から…ぜんイン、潰れテ死ねエエエ!!」

「っ?!樹、下がれ!!はああああ!!」

「っ!!」

唯斗は左手で樹を後方に投げ飛ばすと、そのまま虚空に手を広げ限界まで呼び出した何百もの紙飛行機を風にぶつける。

連鎖する爆発音は風の一雑で掻き消され、その隙を見て唯斗は金槌で風の身体を張り飛ばす。

「ふう、ふう…ぐっ、ゲボッ!!」

「唯斗!?血がこんなに…もうアンタは下がってなさい!それ以上戦うと死ぬわよ!」

「ばか、言え…瀕死から、が…本番だ…!…樹に…戦わせる、よりは、マシだ…」

「そんなのっ、私一人で十分よ!!あの馬鹿を止めるくらい、なんてことは——」

「止める?…甘ったれるな。もう手遅れだよ…俺も、先輩も…俺達がやってるのは殺し合い…だ。甘い考えを持つてるなら、出しゃばるな…!邪魔なんだよ…!!」

「ッ…!!」

止める夏凜の手を振り払い、唯斗は再び風へと攻撃を仕掛ける。

「ガアアアアアアアア!!」

「吠えんじゃねえよ!犬埼先輩よオ!!」

風は肉質を含み、肥大化した大剣を振り下ろす。対して唯斗は力負けすることを悟り、大剣の側面を金槌で叩き逸らす。

身を捻り金槌で風の頭部を打ち上げ、空いた胴体を蹴り上げる。変貌の弊害か、風には精霊のバリアが付与されていない。故に唯斗の攻撃は通じるが、しかし黒衣によって防がれ、当たった攻撃も意味を成さない。

「グブウ……グガツ！シネエエエエエ！！」

「芸がねえなクソツタレ！武器を振り回すだけなら猿でも出来るぞ！！」

腹を浅く斬られ、痛みに顔を歪めながら唯斗は武器を投げつけ距離を取る。

「はあ……はあ……やべツ……視界が霞んできた……」

「唯斗……もう止めなさい！後は私がやるわ……！」

「唯斗先輩……もう、これ以上は……！」

「止めるなら、覚悟を示せよ。……『勇者』じゃなくて、クソツタレな人殺しになる覚悟を……ッ！」

三好夏凜は完成型勇者でなければならぬ。

犬吠埼樹は姉が命よりも大切だ。

故に、人殺しにはなれない。己の信念を穢すよりは、自分の死の方がマシだとも思える。それだけ夏凜と樹にとって、風は大切であり、殺すだなんて想像もしたくない事だ。

「……頼むから、手を出すな……これは俺のケジメだ。俺の信念だ。邪魔するなら……お前らも敵だ」

「馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ!!ケジメも信念も、死んだら意味がないじゃない……風が正気じゃないのは解ってる。樹に攻撃した時点で、アイツの意思は残ってない……それでも、殺すのは早急すぎよ!!」

「それが甘いんだよ。……殺すのが早急？今の先輩を、簡単に殺せると思ってるのか？……全員で掛かっても、十回に八回は皆殺しだよ。それくらい今の先輩は脅威で、それ以上に染まりきってる」

「ッ……そ、れでも……」

《戦います》

「樹!?!」

樹はスケッチブックにペンを走らせ、唯斗の言う“覚悟”を示す。泣きそうな、然し大人びた表情は夏凜と唯斗を気押す。勇ましい表情からの震えは、決して武者震いではなく、また肉親を失うことへの恐怖。

そんな恐怖でも、姉ならば間違いなく他の仲間を守れと言うに決まっていると解る。

樹には風の意味が受け継がれている。

「お姉ちゃんのために、力を貸してください。…お姉ちゃんは、唯斗先輩を傷付けることだなんて望んでないです。…もう、お姉ちゃんは“犬吠埼風”には戻れないんです…」

唯一の肉親として、樹には『責任』がある。

姉が世界を滅ぼすなら、樹が否定する。妹が間違いを犯したなら、風が止める。姉妹だから、止めなければいけない。姉妹だから、戦わなければいけない。

姉妹だから――

「……ごめんね、お姉ちゃん」

溢れる涙は決別の合図。

「樹……そう、アンタがそう決めたなら……ううん、違う。私は私の意思で、決めなくちゃね……よしつ、決めた。一緒に戦うわ！他でもない、風のために……！」

「…好きにしろよ。お前達がどうしようと、俺は先輩をぶちのめすだけだ」

《ありがとうございます》

『満開』！」

『満開』！」

二輪の花が乱れ咲き誇り、花吹雪が降り注ぐ。花卉に包まれた樹と夏凜は純白の羽衣を纏う。

「……行くぞ。樹、夏凜」

《はい!!》

「終わらせるわよ。無駄な戦いも、風の苦しみも!!」

目から赤黒い血を零し、苦痛に呻く風。それは獣のようであり、理

性は欠片も残っていない。壊れた傀儡でしかなく、嘗ては犬吠崎風だった、別モノ。目に入るもの全てを破壊し尽くす彼女は、もう止まらない。武器を手に、立ち向かうしか選択肢は無い。

「——弾幕を貼る。その隙に攻撃しろ！」

「了解！」

唯斗は虚空から紙飛行機を出現させ、迫り来る風にぶつける。爆風を吹かせ爆ぜる熱も、風を囲う黒い瘴気は全てを拒絶する。

視界を阻む爆煙に紛れ、四本の巨大なアームを携えた夏凜は風に接近する。

「はああああ!!」

四本の腕に、同数の巨大な日本刀。乱舞で繰り出される剣戟は金属音を鳴らしながら瘴気を削り、風を圧倒する。

夏凜がクロス字に切り裂き、風を突き飛ばした所に樹がワイヤーで構成された槍を穿つ。

「か、硬い……！」

「ルガアアア!!グツ、ジャますルナああああ!!コロす!つぶス!!あゝあゝあゝああああ!!」

「っ!樹!一旦引け!!先輩も妹を襲ってんじやねえよ!!」

——ビゴオオオンン!!

鼓膜を激しく揺らす轟音を響かせ、唯斗の槌と風の大剣は拮抗する。

「ぶ……っ飛ばや!!」

——ビゴオオオオンン!!

片腕のみで弾かれた風は目を見開く。

「これで——最後だ!!」

「なっ?!唯斗!やめなさい!!」

「ダメです!唯斗先輩!!」

唯斗は足元に集めた紙飛行機を爆発させ、足が焼け爛れる感覚に視界を真っ白に染めながらも、その推進力で最後の一撃に賭ける。

「ガッツ!!?あ、がああああ!!」

「砕けろおお!!」

更に肥大化し、最早“壁”となった肉質の大剣と唯斗の全身がぶつかり——大剣にヒビが入る。

金色のピコピコハンマーが大剣を砕く刹那——風は虚空に飲み込まれた。まるで最初から存在しなかったように、痕跡だけが残され、そのまま風だけがその世界から消えた。

「ぎ、えた…う…ぐっ…意識、が…」

片腕は損失し、両足は爆発により焼き爛れて所々炭化。肩から腰までは深く袈裟斬られ、内蔵には届かずとも腹を浅く切られている。

既に紛うことなき瀕死の重症であり、本来ならば戦闘行為など自殺に等しい状態だ。

急に戦闘が終わり、緊張状態が解けた唯斗は身体から力が抜け、地面に倒れ込む。

「……………ゴホッ」

地面に血を吐き出し、口内が冷たい鉄の味に染まる。霞んでいた視界は白い光に包まれる。唯斗は明確な死の気配を色濃く感じ、しかし回らなくなる思考に茫然と諦めがつく。

「……………ゆ、唯斗…?唯斗!唯斗!!ダメよ!?死ぬなんて、絶対に許さないんだから!!寝るな!!帰ってきなさい!!約束…私達、将来…約束したじゃない!!」

「なん、で…?ゆいと、せんぱい…?あ、ああああ!!やめて!わたしを、一人にしないで…!おいてかないでよ…ッ!お姉ちゃん…唯斗、先輩…!!」

「ごめん……………」

沈む意識で、熱いはずの身体は極寒の如き寒さを訴えていた。徐々に薄くなる呼吸を感じながら、唯斗は友の声の届かない深淵へと身を投げ出した——

——おいで、おいで。みんなが待つてるよ。
——残りは、二人だね。

——傀儡の勇者——

■■■■に操られ、身体も精神も傀儡となり壊れた勇者。黒く染まった勇者衣に、肉質に変化し膨張した大剣。既に彼女の精神は侵食され、『犬吠埼風』とは呼べない別モノへと変貌した。

唯斗の『満開』に対して『枯花』と唱え、空に枯れた識別不明の花を出現させる。枯れ果てた花はヘドロのように溶け落ち、嘗ては風だったモノに纏い、漆黒のフル・ドレスへと変化する。地面に墮ちたヘドロは風の号令により動き出し、数百体の泥人形となる。

○○○○○○○○

ワカラナイ。自分の身に何が起きたのか、自分がどういう状態なのかも。ただ全身が割れるように痛くて、獣のように叫ぶことしか出来ない。

胸に巣食う疑心暗鬼は本能に任せて全てを攻撃し、破壊し、彼女の意とは反する行動に出る。黒い檻に囚われた少女は、身も心も改変される。何も見えない。誰に向いてるかもワカラナイ憎しみに犯されて、流す血涙は自身の破滅への願い。

虚空に消え去った彼女の行方は、誰も知らない。■■■■に連れ去られ、利用され、駒となる。その末路は誰にもワカラナイ。

瞬殺のニボバルト

「ドキドキ♡愛してるゲーム!!ルールは簡単!対戦者二人が互いに『愛してる』と囁きあって、先に照れた方が負けー!!イエーイ!ドンドンパフパフく!!」

園子の声が勇者部の部屋に響く。

突如開催された、道場破りこと部活破り。既に降りたそうな冷めた目を向ける夏凜を置いて、勝手にルール説明までされた現状。尚、その後直ぐに夏凜は三袋の煮干しで丸め込まれた。

これにはツツコミ型勇者もニツコリご満悦。

「なあ、銀。不思議なことに、俺…このゲームをやるって説明受けてないんだよな」

「おお、奇遇だな。アタシも今この瞬間が初耳だよ。ビックリ箱を開けた子供の気分だね」

「友奈ちゃん、勝負よ!!」

「うえ!?!」

「なあ、銀。不思議なことに、たった今…このゲームの発案者が判っちゃったよ。超能力に目醒めたのかな…」

「おお、奇遇だな。アタシも犯人が解ったよ。でも同時に暴走機関車の止め方が判らない今日この頃。侘しいねえ」

企画者の四人中二人に知らされていなかったゲームの考案者、東郷美森は対戦者を指名し、満面の笑みを浮かべた。茶番に付き合わされている唯斗と銀に小さな帰宅願望が生まれたが、死なば諸共の夏凜に睨まれて断念した。

突如として始まった勇者部VS勇者部(仮)。その旨を把握出来ている人間は、園子と東郷を除いて存在しない。開催者側に属する唯斗と銀もまた、何も聞かされずに連行されたに過ぎない。

「勇者部(仮)部長(仮)の唯斗。この馬鹿げた企画の説明をちゃんとしなさい」

「lonelyで対決スルー。最終的な勝数で決着スルー。すなわち

部活破りーノ。そんな趣旨以外伝えられてネーノ……真犯人は園子と東郷です。ぼくはむざいだよ」

「ねえ、ゆーちゃん。連帯責任って知ってる？」

「ねえ、雌豚ちゃん、理不尽って知ってる？」

「ゆ、唯斗先輩……？女の子を雌豚って呼ぶのは……」

「樹。知ってるかもしれないが、豚ってのは意外と体脂肪率が低いんだ。野生豚だとモデル級のマッチョボディとも言われてる。しかもあの豚め、実はかなりの俊足なんだ！野生の豚は時速40kmで走れると言われている、なんと約11m/秒！100mを約9秒で走れる計算だ!!それに加えて豚は賢い！人を見分けたり、鏡に写っているのが自分自身であることを認識できたりする能力を持ってるんだぞ！たぶん友奈よりも賢い!!」

「何でそんなに詳しいんですか!?!?!あと、友奈さんに怒られますよ？」

「豚さん……私よりも賢い……!」

「納得してる!?!」

「ぶひぶひく♪ゆーちゃんが雌豚って褒めてくれた」

「そのうち……あまり、外でその名称を口にしない方がいいわ……在らぬ誤解に繋がるから」

「いや、外でも内でもダメでしょ。ほら夏凜、煮干し食ってないでツツコミなさいな」

ツツコミ担当者は先程貰った煮干しを頬張りながら幸せそうに微笑む。既に外野の声など聞こえてはいないの言うまでもない。体は無限の煮干しで出来ていた、から始まるUnlimited Nibosi Worksの世界に煮干し狂人は身を投じていた。

「それで?やるなら、さっさと始めましょ。今日は依頼が少ないから割と暇だけど、だからって無駄に時間を浪費するのはダメだってアタシの女子力が囁いているのよ」

「風先輩の女子力って囁けるんですか!?!じゃあ東郷さんの国防精神も……」

「勿論、富国強兵を日々謳ってるわ！単に経済発展や軍備増強を目指すのではなく、国家経済を発展させ、その資産で軍事力を増強させる事を目指す……嗚呼、なんて素晴らしい政治的思想なの……！」

「ソダネー。トーゴー、シユゴイー」

「…樹。ツツコミを入れて」

「い、いえ……ここは夏凜さんに譲ろつかなあ……なんちやって？あはは……飯は飯屋に、ツツコミは夏凜ツツコミ屋さんに……って古来より決まってる……」

悦に浸りながら国防精神を謳う東郷。変人同族の相手に疲れ果てた唯斗は全く感情の込められていない棒読みで返した。

同じく、この短時間でツツコミ疲れを起こした夏凜は己の責務を後輩に押し付けるが、やんわりと断られる始末。

閑話休題。

話が逸れ続ける彼女達に呆れ果てた唯斗は強引にゲームの開始を宣言する。

「よーし、我が部からは銀を生贄に差し出そう」

「生贄って言うなよ……でもまあ！選ばれたからには一番槍をぶち込むのがアタシの役目！さあさあ！相手は誰だ!!」

「待って唯斗君。初戦は私と友奈ちゃんが……」

「宜しい！ならば受けて立つわ！夏凜が!!」

「は!?!な、なんで私が……」

「よーし、相手は夏凜か！あつ、夏凜って呼んでもいい？アタシのことは銀って呼んでくれよな！いやー、同じ端末を使ってた『勇者』としては感慨深いなあ……夏凜は双剣だったよな！映像は見たけど、シユババーってカツコイイな！んー、でもアタシの武器と大分ジャンル違いだな。やっぱり双斧って使いづらいのかねえ……なあなあ、夏凜はどう思う？」

「あつ、え、えつと……」

「み、みんな聞こえてる……？初戦は私と友奈ちゃんが……」

「ミノさんミノさん。にぼっしーがとっても困惑してるよ？どもどもの吃り子ちゃんになってるよ……」

「なっ…ど、吃ってないわよ！なんて言うか…ちよつとだけ緊張して
るだけよ！勇者の先輩とか…半分、伝説みたいなモノだもの…っ！
……って言うか、誰かにぼっしーよ！唯斗と東郷！どっちが犯人だ
!!」

「そんな事より、愛してる遊戯ゲームは私と友奈で…」

「犯人はトーゴーかヤスです」

「ヤスって誰よ…」

「真実はいつも一つ。然し、それがいつも解明し犯人が追い詰められ
るには限らない。例え明確な犯人が存在していたとしても、その実を
被害者が知ることは極僅か。」

風の小さな呟きに答える者は居らず、その実は盛大なネタバレでも
何でも無いという真実は闇に葬られた。

尚、数分前よりずっと訴えかけている東郷の戯言は誰も聞こえな
い。例え、もしも極僅かな塵にも等しい可能性で聞こえていたとして
も、明らかな厄介人間には関わるまいと目を逸らし耳を防ぐのは人間
の本能だった。

「なあ、夏凜」

「な、なによ…?」

「愛してるよ」

「…ふえ!?えっ…ちよつ、急に何のつもりよ!」

唐突な愛の告白に、嘗ては煮干しとサプリにしか興味を持たない哀
れな生き物だった夏凜も動揺を隠せない。

紅く染まる頬に、忙しなく溢れる汗。真つ直ぐに向けられる瞳に、
思わず目を逸らしてしまう。

対して銀は真面目な表情とは一転、動揺する夏凜を一瞥して、満面
の笑みを浮かべる。永らく感じていなかった、久しい感情。憂いを含
まない、屈託なき一色に染まった喜びの感情。

まるでイタズラが成功した悪ガキの様に、銀は喜びを露にした。

「園子、これってアタシの勝ちで良いよな?」

「異議なし。愛に貧弱なぼっしーの負けだね」

「何やってんのよ夏凜!それでも完成型勇者なの!」

「お姉ちゃん、ノリノリだね。相変わらずの適応力…」

脱線に脱線を重ねて、ゲームの存在を忘れていた夏凜。たとえ覚えていても即負けするだろうが、それでも夏凜は自称完成型勇者として納得できない。

「くっくっ!!む、無効よ!こんなの…無効なんだから!!」

「あつ、これ知ってるよ!ククク…。夏凜ちゃんは勇者部の中でも最弱だ!ってやつでしょ!!」

「手のひらで殴るわよ?」

「ただのビンタじゃん。クアルイイン・チャン最低!」

「アンタは偶にでもマトモな事とか言えないの?」

「まるで俺が普段から変な事しか喋らない、みたいに言うの止めてくれない?」

「まるでアンタが変な事を喋らない、みたいな言い草ね」

「えっ?」

「えっ?」

「はいはい、次に行こ〜!」

互いに解釈違いだと言い張るポンコツ二人の会話を遮り、園子は企画を続行させる。

「次のゲームはく!…:…:…何にしよう?」

「:私はツツコミなんて入れないから。もう疲れたから帰りたいし:もう私の役目も終わったから、帰ってもいい?」

「えーっ!夏凜ちゃん帰っちゃうの!」

「私も帰りたいです…:」

「あ、あれ?なんで東郷さんも落ち込んでるの!」

「あんた達が無視し続けるからよ」

「いや、先輩。聞こえてたなら返事してあげてくださいよ。ちよつとだけキツイ目的のために必死だった東郷が可哀想だつて思わないんですか!!」

「東郷を一番雑に扱ってる唯斗だけには言われたくないわよ!あんなに奇行が常時状態の生きる変態機構な東郷だつて多分恐らくきつと、中身の極一部くらいは乙女なのよ!」

「み、美森!?!落ち着けつて!ひえっ…か、顔が怖いから…!友奈も手伝って!!」

「わかったよ、銀ちゃん!東郷さん落ち着いてー!」

「ぐっ…離して、銀、友奈ちゃん…!私は風先輩と唯斗君に制裁を…!あつ、友奈ちゃんは離さなくてもいいわ。寧ろ、もつとギユツとして!」

「美森、お前…」

銀はそつと離れて、変わり果てた親友から目を背けた。もはや、真面目で清楚だった頃の鷲尾須美は消え去ったのだと悟った。

「うーん、次のゲームは何にしようかな…?…ふああ…眠くなってきた…帰って寝ようかな」

「園子はマイペースだなあ。あつ、イカの姿フライが切れた…帰ろ」

「あ、そろそろスーパ―の特売時間だ。唯斗と園子も付き合ってくれよ?特売の卵、一人一パックまでなんだよな。つてことで、勝負はまた明日!」

「全員マイペースか!!」

夏凜の怒号を背に受けながら、園子と唯斗はノロノロと帰り支度を進め、銀に引き摺られて帰った。

恋文

勇者部VS勇者部（仮）の行われた翌日の事。

「おっはよー！唯斗くん、そのちゃん！」

「おはよう、二人共」

欠伸を漏らしながら校門を通る唯斗と園子に、騒々しく挨拶をぶつけてくる少女が二人。一人は結城友奈だ。赤い髪と百面相のようにコロコロと変わる表情は讃州中学の元気印とも言える。

その背後には、呪いの守護霊の如く半径1m以内を常に陣取るゲテモノ少女が当然のように居る。立てば変人、座っても奇人。黙っていてもヤベー奴と、とある少年から言われ続けて早一年の東郷美森。今日も元気ハツラツと無言でシャッター音鳴らす。

「おは〜」

「よう〜」

唯斗と園子は必要最低限の挨拶を返しながら、まるで二娘一のように振る舞う。正確には唯斗が”おは”まで言うから、然し耐えきれず欠伸で後の二文字を断念した所に園子が付け足したのだが、その実は大して変わらない。

「昨日もだけど、そのちゃんと唯斗くんって一緒に登校してるんだね。家が近いの？私と東郷さんみたいに！」

「…？そう言えば、そのうちの家って結構遠くだった気が…」

「私ね、実はゆうちゃんのお家に居候してるんだ〜」

「……………えっ」

サラツと告げられた言葉に、東郷は言葉を詰まらせる。

鈍く回る脳では、その言葉に該当する別解釈を高速で探している。然し結果は、残念で無念な再来年だった。複雑な心境と、昔からの彼等の関係性。それを考慮した上で――

「ぴゃあ？」

「あつ、トーゴーがオーバーフローした」

東郷の思考は完全に停止した。

「へえー、毎日がお泊まり会だね！楽しそうだなー」

「そーなんよ。だから今日も七時間しか寝てなくて、寝不足気味〜」
「寝不足!?男女…同棲…寝不足…ツ!?!…:…ぴゃあ?」

硬い頭の割には妄想力だけは一丁前な東郷。思春期全開の妄想に耽り、顔を紅く染めながら発熱する。

「東郷、オーバーフローする前にちゃんと考えろ。この墮落女、チャツカリと七時間も寝てるぞ?なのに寝不足とか…:人生の三分の二は寝て過ごしてるんじゃない?」

「眠りは時間に非ず。質こそが全てだったり、そうじゃなかったり。墮落道は夕立後の水溜まりよりも浅く狭いのだよ、ゆーちゃん」

「おいコラ、人のベッドで寝ておいて文句か?いい加減自分の部屋で寝ろよな…:てか、まだ引越しの段ボールも半分以上未開封だろ」

「ぴゃあ?」

東郷は再度オーバーヒートを迎えた。最早故障気味な脳だが、残念ながら部品交換は不可能だ。半分は腐って、もう半分は硬質化した脳ミソは東郷の生涯に永遠と付きまとうのだろう。

「あれまあ、わっしーがまたオーバーフローした?わっしーも買い替えの時期かねえ〜」

「東郷さんって売ってるの?一家に一人入れば、毎日がとっても楽しそうだね!」

「おいおい…:買い替えは勿体ないだろ。こーいうのは、斜め45度の角度で…:おりゃー!」

「唯斗くん、東郷さんは家電じゃないよ?」

斜め45度から大分逸れた角度での脳天チョップ。心做しか、日頃のストレス発散を兼ねての威力だったが、故障を直す^{治す}という大義名分を得た唯斗は手加減をかなぐり捨てた。

「いてっ!…:…:はっ!わ、私は何を…:?何か、脳容量を大きく超える情報を聞いてしまったような…:うっ!あ、頭が…:!」

「友奈、トーゴーに抱きつけ^{リセットコマンド}」

「とーごーさん!!」

「あっ…:幸せ…:!もう全てがどうでもよくなったわ!!」

「…わっしーって、癖強不思議生物になったよね。取り敢えずメモモ〜！」

「頭お花畑が三人も居やがるぜい…！」

ことの大本は我関せずと三人よりも脚を速く動かし、靴箱に到着する。

ぴよんぴよんと不思議な動きで後ろに寄ってくる園子の口にイカの姿フライを突っ込みながら、外履きを脱ぎ、靴箱を開けると――

「…おっ？何だこれ」

淡い桃色に、情熱的な赤のハートで蓋を閉じられた洋形封筒。ほんのりと桃の甘い匂いのする無字の封筒が唯斗の靴箱に入っていた。

「……ゆーちゃん、それって」

「園子さん、世の心理を教えてあげよう。電子機器が流通してる世界でのLoveなletter。実にその九割五分がフェイクかイタズラなんだ。部活動のお誘い然り、雑用の押し付け然り、クラスメイトの悪戯然り」

「ハートのシールだね〜」

「ハートは心臓って意味だ。つまり『テメーの心臓ぶち抜いて鮮血に染めてやるぜベイベ〜!!』ってメッセージな可能性も微レ存。もしくは『ふるえちやう♡！燃えつきるほどヒート!!』って、実質的な殺人予告なのかも…！」

「シユレディンガーのラブレターだね〜。でも、中身を見れば解決するね」

「そうだね、プロテインだね。じゃあまずダーリン。あていし達距離取りましょ〜？」

「つれないぜハニィ〜？儂と御主は一心同体で候、故に何処までも一緒に御座るます！せやかて工藤〜!!」

後退る唯斗に、園子は俊敏に歩み寄る。ニンマリと歪んだ笑みは玩具をプレゼントされた子供のようだ。片手にメモ帳を握り締め、園子は壁際へと詰め寄った。

通りかかる生徒達は好奇の視線を向ける。

遅れてきた友奈と東郷も同様だ。珍しい構図に興味を引かれ、つい

口元がニヤけてしまう始末。

「ゆ、友奈…たしゆけてたもう…」

「えっと…どうしたの？そのちゃんに壁ドンされてるけど…」

「ノンノンノン。これは壁ドンじゃなくて、”壁ダアン！”だよ。私が名付けました」

「パクるなよ。二つの意味で」

「それで結局、何で唯斗君はそのつちに壁ダアンされてるの？悪巫山戯なら、もっと人気のない所の方が…」

「それはですねー、かくかくしかじかで」

「アホか園子。んな頓珍漢な言葉で伝わるわけ無いだろ」

「なっ…!?唯斗君が恋文を!?!」

「ねえねえ、ボクがおかしいの？『かくかくしかじか』でトーゴーちゃんは何んの情報を読み取ったの？私、気になります！」

「便利な言葉だよね〜」

何故か状況を理解した東郷は、頭に疑問符を浮かべ続ける友奈へと懇切丁寧に説明する。

「えっ、ラブレター!?!…………でも、そのちゃん、東郷さん。すつごく気になるのは分かるけど…私達が覗き見るのは、ちよつとだけ不誠実じゃないかな？相手の娘も、きつと勇気を振り絞ったんだし…」

「グフオ…いゆ、友奈ちゃんの”陽”で私の”陰”が浄化される…」

「あっちゃく、ゆーゆにそれを言われたらねえ…」

「あれれー、おっかしーなー？郡くんが言った時には誰も引き下からなかったんだけどなー？全員の首元に麻酔銃を打ち込んで眠らせてやりたい…」

唯斗は若干闇堕ちした。

「ぶつちやけ、唯斗ってモテるの？」

放課後、勇者部の部室で風が疑問を口にした。

既に勇者部内では唯斗のラブレター騒動は広まっております、全員が慄いたのは言うまでもない。特に、唯斗に対抗意識を燃やす風や夏凜は何としても告白シーンを目撃しようと野次馬根性を露わにしていた。

唯斗は手紙による呼び出しで不在だが、故にその話題で盛り上がってしまうのは致し方ないのかもしれない。

「乃木に銀。ついでに東郷もだけど、唯斗とは昔馴染みだったんでしょ？昔はどうだったの？」

「……まあ、モテてはいましたね〜」

「園子さんや、アレは……うん、本人が聞いたたら泣きそうだ。モテていたには、モテていたんだけどなあ……」

「なっ!?あ、あの駄菓子馬鹿がモテてたですって!?!……も、もう少し詳しく……!」

園子と銀の煮え切らない言葉に、夏凜は一層興味を掻き立てられた。前のめりになり、食い入る様に話を聞こうとする。

「同性にです」

「……は？」

「神樹館小学校の時、確かに唯斗君は告白されることが何度かありましたけど……そのいずれも、相手が男子だったんです。……昔の唯斗君は、なんと説明するべきか……一見ではとても、清楚で綺麗な女の子っぽかったと言いますか……」

「唯斗くんが女の子……?」

「……唯斗先輩の過去……まるでビックリ箱ですね。先代の勇者で、記憶喪失で、見た目が女の子だった……何処かで入れ替わってませんか？」

「いっつんは割と棘ってるね〜。まあ、何事にも理由がありません……んー、でも勝手に言うのって止めた方が良いかな?」

「そうね。唯斗君には唯斗君の歩調がありますし、私達の口から勝手に説明するのは気が引けます」

「風先輩も夏凜も、気になったら本人に聞きましょうよ。記憶が戻ったら、もしかしたら教えてくれるかもですよー?」

先代勇者組は言葉を濁す。園子の言葉通り、何事にも理由がある。どんなに小さな理由でも、例え大きすぎる使命だとしても。

仲間としては、その理由はあっけらかんと話しても良いものではない。本人ならまだしも、彼の過去に関しては何と無関係である彼女達の好奇心を満たすためだけに話すのは、郡唯斗の友人としては憚られ

るモノだ。

「ええー！気になるじゃない!!風も気になるでしょ!？」

「…落ち着きなさい、夏凜。女子力の権化たる私から言わせれば、果報は寝て待つに限るわ。つまり、唯斗を寝かすとけば勝手に果報が舞い降りてくるのよ!!」

「お姉ちゃん、使い方が間違ってるよ…」

「夏凜ちゃん、風先輩。私も東郷さんと同意見です！勝手に聞くのは、やっぱり気が引けますよ…」

「ん…ぐう…！わ、分かったわよ…！私だって、別に無理やり聞きたいわけじゃないし…」

半数以上の反対に押し切られ、夏凜も興味を抑えて断念した。

「それで、今は？」

「ふ、風先輩…？その話はしないってことに…」

「違うわよ、友奈。アタシ達が断念するのは、過去の唯斗よ！今知りたいたいののは今の唯斗がモテるのかよ!!部長として、部員のこととは知っておかなきゃだわ!!」

違和感を覚えるほど静かだった風だが、今の唯斗のことに関しては全く遠慮するつもりは無いらしい。部長である事を大義名分として、野次馬根性を再加熱し始めた。

「うーん、ゆーちゃんってモテるのかな？私とミノさんは転校してきたばかりだし、まだ分かりませんな〜」

「そうツスね。昔ならまだしも、今についてはちよつと分かりかねますよ」

園子と銀が転校してきてからまだ二日目。唯斗の人間関係どころか、学校内の教室の場所すら判らない現状だ。

とてもじゃないが、呑気に人間観察をするほどの余裕はまだ無い。「それじゃあ…同じ転校生組の夏凜は置いといて、東郷と友奈はどうよ？同じクラスなんだし、詳しいでしょ？」

「モテるの定義にも依りますが、彼が所謂優良物件であるという認識なら多人数に知れ渡っているかと」

「唯斗くん、頭は良いし手先も器用だからね。家庭科の授業は満点なんです！料理と裁縫は女子力MAX!!」

「勉強に関しても…そのつちと同じタイプね。テスト範囲だけパラパラッと読みながらイカの姿フライを食べて、何故か完全暗記するという特技がありましたよ…」

「過程にイカの姿フライを挟む意味は…？いや、唯斗の事だし考えるだけ無駄ね」

「後は…まあ、偶にする奇行にさえ目を瞑れば、顔も整ってますし…客観的には非の打ち所のない男子、という評価かと」

友奈と東郷の総評では、『何方かと言えばモテる』という結果に落ち着いた。

勿論、評価は人によって全然異なる。真面目なタイプにとっては、不真面目な癖に物事を難なくこなす彼は苦手だと語るだろう。逆に、似たタイプならば好意的に接することもある。

郡唯斗は善くも悪くも、讃州中学では有名人だ。それだけで、近づく価値があると判断する生徒だっている筈だ。

唯斗の奇行を間近で見続けてきた風や夏凜にとっては、あまりにも意外な結論だった。

「ええ…い、意外と高評価なのね…あの唯斗、が…因みに、偶にする奇行って？」

「ハロウィンで紫のイカの姿フライをクラス中のロッカーに投げ入れたり、バレンタインではチョコイカの姿フライ？…を作って全教員に配ったり…唯斗くんって、本当にイカの姿フライが大好きなんですね！」

「唯斗先輩なら、イカの姿フライを渡されたら悪い人にも付いて行っちゃいそうですね…」

「否定できないわ。煮干しならまだしも、油分を多量に含む駄菓子の何処が良いのやら…」

「にぼっしーも大概だけどね〜」

「そうよ！うどんならまだしも!!」

「風先輩もっスよ？」

唯斗と夏凜、風は好物に対しての執着心は他よりも圧倒的に大きい。それが女子力なのだと風は語るが、誰もまともに耳を貸すことは無かった。

「チツ…あの腹黒眼鏡…い…何が御役目ハイトに参加しない？だよ…ツ！端末まで押し付けられてるから、拒否出来ねえじゃねえか…!!」

日が沈み薄暗くなった校舎裏で、唯斗は悪意の籠った呼び出しをした青年に恨み節を呟いていた。

報酬

「さて、ちょっとだけ大事な話をしようか」

海辺に停められた黒のリムジンカー。

月光を乱反射する海だけに照されて、車内で妖しく光る眼鏡を中指で軽く持ち上げる青年は不服そうにうまい棒納豆味を啜える少年に語り掛ける。

「…なんの用ツスか、マジで。夜に呼び出すとか…事案発生ですよ、春信さん」

「解りきつてる癖に、態々聞くんだね。非合理的だけど、様式美なのかな?」

「回りくどいンスよ。夕方に言われた、御役目バイトの事だろ。…断る。何だか知らないけど、端末を返せって言うなら返す。俺はこれ以上、危険に手え突っ込む気はないですよ」

その日の夕方、唯斗はラブレターを装って校舎裏に呼び出された。そこに待ち構えていたのは、三好夏凜の兄である三好春信だ。

大赦の自称お偉いさんであり、その肩書きは夏凜の口から彼をエリートと称していたように、偽りではない。

底の読めない彼は、唯斗にとっては厄介事の種でしかない。

その嫌な予感も的中して、呼び出しの目的は詳細を隠された御役目バイトへのお誘いだった。つまり、危険への手引きだ。生憎と、唯斗は危険を顧みない正義のヒーローでは無いので、一旦は保留にしたお誘いも断ることに決めていた。

「…唯斗君。僕は、汚い大人だ。だから君がその気になる事を言うことにしたよ」

「…はあ?」

春信は唯斗の反応を想定済み、とでも言うように軽々と言葉を返す。

「その御役目、実はもう始まつてるんだ。詳細は後にするけど、君が察してる通り、命懸けの御役目だ。三十人以上の少女が、明日にでも死

に至るかもしれない。下手をしたら『勇者』以上に危険で、命が容易く零れ落ちるだろう。そんな御役目さ」

「そんなんで俺を乗せる気か？人を気狂いな死に急ぎ野郎だとも思ってるなら、残念ながらお門違いだ」

「無論、これだけなら唯斗君は寧ろ断るだろうね。でも、その御役目に君の知り合いが参加していたら？」

「…は？…勇者部の誰かが参加してるつつうのか？んな話、誰からも…」

「過去の知り合いさ。国土亜耶と山伏しずく——聞き覚えはないかい？」

「……………」

出された二人の名前を脳内で探るが、該当する人物は居ない。クラスメイトでは無いし、春信の言葉を真に受けるのであれば、過去の知り合いなのだろう。

唯斗の人間関係は、中学校に通い始めてから始まった。故に、彼の語る『過去』は記憶喪失以前を指すのだろう。

「…無い」

「だろうね、知ってた」

「じゃあ聞くなよ。どうせアంతタの事だから俺の記憶喪失についても知ってると思うけど…正直、証拠が無いんだよ。テキトー放いてんなら交渉にもなんねえからな」

真偽がどうであれ、そもそも唯斗にとって三好春信は信用に足る人物とは言えない。

短い付き合いに、常にのらりくらりと芯を掴ませない人物。其れを、どうして信頼できようか。唯斗は彼が自分に寄せる期待も、信用も、意味が判らない。

そも、彼は『勇者』を騙して戦わせていた大赦の所属だ。夏凜ほど純粹でも、園子や銀ほど被害者でもない。ただ騙し、其れを正当化する言葉を並べただけの人物なのだ。

「怖い顔しないでおくれよ。その鋭い目付き、君は本当に『郡家』の血を色濃く継いでる。心を許した相手には軟化するのにね」

「…話が終わりッスか？だったら帰りたいたいんだけど」

「もうちよつと付き合ってもらうよ。君は国土亜耶と山伏しづくが本
当に君と交流のあったのか、その証拠が欲しいんだろう？それはさ、
証拠があつたら協力するという解釈で構わないかい？」

眼鏡の奥で爛々と光る瞳には、エリートという言葉を定着させる程
の自信が溢れている。何事かへの、「確証」と言つても適切だ。

とことん、何処までも自分と彼は別の人種なのだと思わされる。

「チツ…話聞いてたか？参加するメリットが無いんだよ。過去の知り
合い？んな事、今の俺には関係ない。『勇者』の場合は否応無しに関わ
らないと自分の命にも関わるから、仕方なく戦った。でも、春信さん
の言う”御役目”には本来、俺は不参加なんだろ？つまり俺は関係な
いんだよ」

「関係ない、か…唯斗君は自分の性格を理解してるかい？」

「は？何言ってるんスカ…」

「君は、そんな言葉で割り切れるタイプじゃないよ。自分に騙された
ふりが苦手なんだね。君は僕に、こう言つて欲しかったんだろ？『御
役目に参加しろ』つて、命令口調で。有無を言わず、御役目を義務
化して欲しかったんだろ？」

「…：そんなんじゃないですよ。手前の義務くらいは手前でこなす、
それだけ。俺以外でもどうにかなるなら、それにこしたことはない。
一つしかない命を、ポンポンと投げ出してたまるかよ」

唯斗の戦う理由は、いつだって仕方なくだった。『勇者』の初陣も、
犬吠崎風や東郷美森の暴走の際も、『勇者』としては最後の戦場も。

1度足りとも、望んでの戦いは無かった。言い方によつては、『巻き
込まれた』とも言える。

春信は掴みづらい唯斗の心情をこう解釈する。『郡唯斗は理由を欲
している』『郡唯斗は背を押して欲しい』『郡唯斗は勇者だ』——と。
「じゃあ——大赦所属の神官として命じる。『勇者』郡唯斗、偉大なる
『郡』の血に誓つて使命を全うせよ」

「嫌だね！」

「空気読んで!?今、納得して協力する流れだったよね!？」

「いや、使命とか偉大なる『血』とか、重いし面倒臭いしダサイ。春信さん、日本語お分かりで？俺は言ってるだろ。俺のメリットはなんだ、って」

——郡唯斗は『勇者』だ。

然し、正義のヒーローとは言い難い。結城友奈にとつての『勇者』は勇ましく強欲な全てを護る者だ。犬吠埼樹にとつて『勇者』とは大切な人を護る盾であり敵を討つ矛だ。三好夏凜の『勇者』は自身のプライドであり、三好夏凜である理由だ。

郡唯斗にとつての『勇者』とは——仕事だ。人類の平穩などではなく、報酬があつて初めて成り立つ。巻き込ま場合ではなく、自主的に選べるのであれば尚更だ。

そして、三好春信から郡唯斗への『報酬』。それはもう決まっている。彼に某煮干し少女の写真を定期的に送ることによつて貰い続けている『報酬』だ。

「……くつ、はははは…そういう事かあ…良いね、良いよ！お兄さん、そういうのは大好きだ」

「キモッ……」

「マジトーンで大人を傷付けるのはやめようね？キモイ・臭い・汚いの3Kは成人男性には激毒言葉なんだからね……」

「知らねえつすよ」

態とらしくハンカチを目に当て、泣き真似をする青年。白々しい、と唯斗は毒づく。

「…話を戻そう。つまり、君はメリットを欲している。美味しい、美味しいメリットを。さてきて、どうしたものか…御役目に見合うイカの姿フライなんて、僕には当てがないな。いっそ、僕が愛情を込めて手作りでもしようかい？」

「んなゴミ寄越すなよ。…アレで良いよ、”元祖ぐんちゃん印”のイカの姿フライ。あのメーカーのは変にこだわってない元祖からの口内を傷付ける程の硬さに、塩辛く香ばしい味付け。駄菓子全般を専門とした本格店！大人には懐かしい味付け!!子供まつしぐらな豊富な種類!!神世紀に根付くイカラーの大半は”元祖ぐんちゃん印”が原

点なんだ!!四国が減んでも、”元祖ぐんちゃん印”だけは途絶えさせ
てはいけない!!最高か!?神の御店か!?アツハツハツ!!元祖ぐんちゃ
ん印サイコー!!ついでに山田くんもサイコー!!」

「……あー、うん。元祖ぐんちゃん印か…郡家と土居家が昔から営ん
でいるメーカーだね。まあ、無難な有名所だけど…君がそれでいいな
ら、僕は何も言わないさ。報酬は決定だね」

早口で長文を語る唯斗に若干引きながら、然し双方の同意の元で報
酬を決定する。

——その日、郡唯斗はまた非日常に関わる事になった。未来に後悔
しないために、目の前の情報に躍らされて、無垢な子供を装って危険
へと踏み出した。

「あつ、因みにだけど」

「……………何?」

車を運転し、唯斗を家に送る最中。春信はふと思い出したように語
り始めた。

「嫌そうな顔をしないでよ。ちよつとした注意事項と、現状の確認さ。

僕にも、君にも。立場ってモノがあるだろう?」

三好春信には大赦の神官としての立場。

郡唯斗には『勇者』と『郡』としての立場。

唯斗は大して重要視はしていないが、その重みは多少理解出来る。
少なくとも、『勇者』に関わった以上は今後の人生において大赦と無関
係に暮らすのは不可能なのだろう。

もつとも、今の唯斗は目先の事で手一杯なのだが。

「注意事項…また面倒事?」

「どう感じるのかは君次第だよ。まあ、短く簡潔に、端的に換言すると
だね…変装しましょう、だね」

「…な、何で…?」

「『勇者』と『防人』は接触させない…大赦で決まってることだ。あつ、『防人』っていうのは件の御役目の事だよ。…それは兎に角として、君が『勇者』及び『郡唯斗』とバレル訳にはいかないんだ」

「面倒事やん、ぜったい…」

「なーに、ずっとつて訳じやないさ！外堀を埋めて、大多数を味方につけて、最後に老害共をマインドコントロール…もとい、熱意で説得するまでの辛抱だよ」

「俺は偶に、あんたが怖いよ…」

ニツコリと笑う表情とは一転、目だけは据わっていた。頼もしくはあるが、最後の最後で裏切りそうなタイプだと唯斗は心の中で断言した。

「それと最後に、現状の確認なんだけど…唯斗君。身体の調子はどうだい？」

「調子…？絶好調だよ、これまでにないくらいな。身体が置き換わったって思うくらい」

それは微々たる変化だった。

『満開』の後遺症から回復し、右腕や心臓、身体そのモノが戻ってから数週間。稀にフラつく友奈とは逆に、唯斗は寧ろ前以上に絶好調な状態が続いていた。

「……………そつか。やっぱり、君の『勇者システム』は…いや、何でもないよ。絶好調なら、それでいいよ。元気に越したことはない」

「えっ、なんすか…その意味深発言。後で絶対フラグになるやつですよね…？」

「さあ？どうだろうね。…ほら、君の家に着いたよ。寝る前は歯を磨いて、トイレに行ってから寝るんだよ？」

「あんたは俺の親かよ…御役目について、後でまとめてメールでも送ってください。あんたの口から聞けば、ストレスが溜まる」

「唯斗君、僕だって傷つくんだよ？」

また白々しく泣き真似をする春信を放って、唯斗は車から降りて家に入って行った。

「…本当に気に入られてるんだね、神様ってやつに」
春信の呟きは、エンジン音に飲まれて暗闇に沈んでいった。

郡唯斗の一日 前編

「ふああ〜……朝か……」

郡唯斗の休日の朝は早い。

午前五時半、横でぐーすかぴーとイビキを掻く園子に肌蹴た布団を掛け直し、ベッド下に腕を突っ込む。その行き先は箱一杯に詰め込まれたイカの姿フライの袋であり、寝起きのルーティンの如く口にイカの姿フライを運ばせる。

バリボリと子気味良い音を口内に響かせながら、ベッドから降りて洗面所へと向かう。

「……ひえっ……水冷た……」

顔を洗おうと蛇口を捻ると、冷水が出てくる。秋も半ば、家の中とはいえ半袖で過ごせる季節はとつくに過ぎている。

顔を洗い、歯を磨いた後にイカの姿フライを頬張りながら服を脱ぎ、給湯器の電源を入れ風呂場のドアを開く。

寝汗を熱いシャワーで洗い流し、深く溜息をつく。

頭をよぎるのは、そろそろストックが無くなりそうなイカの姿フライ。年々食べる量が超増しており、今では学生鞆いっぱい詰めたイカの姿フライも一日と持たずに消えてなくなる。

リーズナブルな値段設定と良質が両立されている元祖ぐんちゃん印で買うか、多少欠けたり割れたりが目立つが、訳あり品ということで安くなった業務用イカの姿フライを買うか。

「っー」

——突如、唯斗に天啓が舞い降りた。

「朝ご飯はウインナーと出汁巻き卵、バタートーストにしよう！」

人の思考とは何とも儂いものだ。数秒前までの悩みなど、次の瞬間には在ってないものだ。考える事なんて唯斗の柄では無い。そもそも、古来よりイカの姿フライは本能で選ぶものなのだ。

シャワーによって晴れ渡った思考。

唯斗は身体を拭き、着替えてから軽い足取りでリビングダイニングに向かう。

時針が六に差し掛かるのを目に収めながら、ダイニングキッチンから見渡せるリビングのテレビの電源を入れる。

朝ということもあり、どのチャンネルもニュースや通販番組。唯斗が心惹かれる番組はなかった。仕方無し、と諦めてイカの姿フライを貪りながらニュース番組を観ることにした。

「〜♪」

鼻歌を歌いながらトースターに食パンを入れ、出汁と混ぜた玉子を卵焼き用フライパンに流し入れる。もう片方の焔炉ではお湯を沸かし、ウインナーを茹でる。

イカの姿フライを齧りながら、トースターからトーストを取り出す。二枚の皿に二枚ずつ乗せる。丁度焼き終わった出汁巻き卵を均等に切り分け、ウインナーと水で洗ったレタス、ミニトマトと共に盛り付ける。

時刻が六時半を過ぎたことを確認して、唯斗は辛マヨ味のイカの姿フライを喫つしながら階段を登り自室へと向かった。

「そのこー、起きろー」

「……むにやむにや……ゴリラの、学名は……ゴリラゴリラゴリラ……」

「知つとるわ」

「……じゃなくて、ニシローランドゴリラ……の、学名なのだ〜」

「なん、だと……ッ」

唯斗は慄いた。園子の口から語られる情報には一切の耳を向けずに、イカの姿フライにソフトタイプが存在することに慄いた。

あの食感が売りのイカの姿フライを柔らかくして、それは全国民への冒流なのだろうか。唯斗が郡家の当主となった暁には、この世界からイカの姿フライのソフトタイプを排除することに人生を賭けようと決めた。

「んあ……あつ、ゆーちゃんだ〜。おは〜」

「よう〜。朝ごはん出来てるぞ。さっさと起きて、顔洗ってこいよ」

「んー、わかった」

ノロノロとベッドから降りる園子を見届けてからベッドシートを整え、掛け布団を抱える。そのまま園子が顔を洗う横で洗濯機に布団を突っ込み、最近買い換えた柔軟剤に心躍らせる。

柔軟剤然り、シャンプー然り、買い換えた物を使う時はいつもそうだ。ワクワクする心とは半面的に、自分や居候中の園子に合わなかったらどうしようという不安もある。

だがそれでも、買う前にはサンプルで匂いも嗅いだ。洗い終わりに匂いが強すぎない限りは、大失敗という結果にはならないだろう。

「つべたい……ゆーちゃん、タオルどこ〜？」

「あー、はいはい。顔濡れたまま歩き回るな。……ほら、使い終わったらソコに置いといて」

「ありがと〜」

洗濯機のスイッチを入れてから、台所でフライパンと小鍋、トースターの網を洗う。

終わってから、まだ園子が来てないことを確認すると、イカの姿フライを喰らいながらスマートフォンソーシャルゲームにログインする。

「……あいつ遅くね…？」

一通りのゲームにログインし終わってから、某動画サイトを開くと同時にまだ来ない園子の事を思い出す。

廊下に出て洗面所に向かおうとすると――

「すぴ〜、リチュアル〜」

「…イラッ……お・き・ろお!!」

「ひゃわあ!?!ご、ごめんなさいお母さん!!……あれ?ここは私?誰は何処…?」

「記憶喪失風の知能低下やめろ。廊下で寝るな。朝ご飯出来てるからよ来い」

廊下でクマのぬいぐるみを抱えて眠る園子の姿。ものの数分で眠りについた園子に驚き、やはり得体の知れない生物なのだと再認識した。

「あはは…本能が眠れと耳元で囁いていたものでして」

「お前の本能は睡魔か？」

のんびりとする園子の手を引き、リビングに行く。園子を椅子に座らせると、再度ヤカンで湯を沸かして適当な粉末スープを完成させる。

業務用イカの姿フライの二袋目を平らげ、唯斗は朝食の並ぶテーブルへとスープを持って行く。

「いただきます」

手を合わせ、やつと朝食を食べ始める。

「もぐもぐ…あつ、ふありつふえはつは〜！」

「飲み込んでから喋りなさい」

「もぐもぐ、ゴックン…ふう。パリつて鳴つた〜！」

「ウインナーか？人類の大好物シャ○エッセ○をボイルしたからなあ。ふつ、豪華な朝ごはんだけ」

「だぜだぜ〜」

庶民的な感覚に疎い園子だが、美味しい料理は美味しいと褒めて舌鼓を打つ。朝だから茹でたり焼いたりするだけの簡単な料理だが、出汁巻き卵は少しばかり拘っている。

真の万能調味料こと白出汁だけでなく、郡家において殆どの料理に入れるイカの姿フライ出汁もブレンドしているのだ。これには唯斗もニツコリ御満悦。

「〜馳走様でした〜」

「お粗末さま。つて、口にケチャップ付いてるぞ？」

「あらら、ど〜ど〜？」

「拭くから動くなよ？…はい、おっけー」

園子の口元に付いた汚れをティッシュで拭う。食べ方の作法は何処と無く洒落ていて、気品を感じるのだが、何分中身が幼い。

餅肌を傷付けないよう、優しく数回拭ってから、残りが無いことを確認した。

「ありがと〜。あつ、食器は私が洗うね」

「いんや、俺がやるよ。園子は自分の荷物の荷解きしてこいよ。いつ

「までも俺ん部屋使う訳にもいかないだろ」

「えー、私はいつまでもゆーちゃんの部屋で無問題だよ？寧ろゆーちゃん部屋に住み着きたい！」

「知るか。ベッドが狭いんだよ」

「別で寝るって発想が出ないところがゆーちゃんだよね。照れてさえくれれば、私も寝甲斐があるのにね」

「はいはい、照れっつれの照り焼きだよ。…ご馳走様でしたー。後で見に行くから、荷解きしておけよ」

ブーブーと文句を言う園子をリビングから追い出し、イカの姿フライを啜えながら洗い物を始める。

たった二人だけなので、洗い物ももの数分で終わる。メニュー的にも油污れが殆どなく、軽くスポンジで擦ってから泡を洗い流すだけだった。

水周りを手拭いで拭くと、丁度洗濯が終わったらしいので、籠に全て詰めてから二階のベランダに移動する。

「~~~~♪」

お〇りか〇り虫の鼻歌交じりにクリップハンガーへと服やズボンを挟め、物干し竿に引っ掛ける。洗濯ネットにまとめて入れて置いた下着や靴下、タイツ等は角ハンガーに挟み、室内に干す。

ここ一週間で二人分が増えた洗濯物だが、唯斗にとってはそこまでの手間では無かった。寧ろ、自己満足だった家事を誰かのためにする、というのは達成感がある。

母親が居る時は全面的に任せているが、ココ最近は全くと言っても良いほど帰って来ない。

「…まあ、別にいいけど」

両親共に大赦勤務であり、その立場も決して楽なものでは無い。更に、現状で『勇者』の親なのであれば、労働基準法など飾りに等しくなる。

一応連絡は貰って、生きている事だけは確認している。普段は大赦で経営するマンシヨンの一部屋を借りて生活しているらしいので、実質的には唯斗と園子の二人暮しだ。

洗濯物を全て干し終わると、籠をしまつてから納戸に収納してある掃除機を取り出して廊下の掃除を始める。水拭きもしようかと考えたが、今日は他の部屋の掃除もしたので断念する。

玄関から順に塵ゴミを吸い取り、イカの姿フライを噛み砕きながら手早く一階を終わらせる。そのまま本日四袋目の業務用イカの姿フライを空にし、二階の廊下も掃除機をかける。

途中、荷解きをしている筈の園子の部屋を覗いた。

「ふ、ふふ…使い古されたネタ、だがそれでよし！あつはっはー」

「……オイ、雌豚……」

「ぴゃあ!?ゆ、ゆーちゃん…!?こ、これは…違うの！決して、片付けている途中でパラパラと捲つてた漫画がまだ未読な事に気が付いて、読み耽つていた訳じゃないよ?」

「説明どーも。没収な?」

「そ、そんな…あんまりだあ…!」

未だに殆ど開かれていないダンボールの山に溜息を零す。奪った漫画を自分の部屋に隠してから、掃除を再開する。

廊下を一通り終わらせてから、各部屋に掃除機をかけて周る。最中、窓枠や棚上等に溜まった埃を強く搾った雑巾で拭き、バケツに貯めた水で洗い流すのを繰り返し返す。

唯斗が六袋目の業務用イカの姿フライを平らげる頃には家中の掃除が終わっており、時計は十を指している。台所へ向かい、昼食用に寄せておいた鶏肉をヨーグルトやカレー粉、その他多数の調味料に漬けて冷蔵庫で寝かせる。

冷凍庫からポテトサラダベースを取り出し、冷蔵庫に移す。

「……やることも終わったし…ダラけるか」

自室に戻り、何故か部屋にいた園子を園子部屋に叩き込み、ベッドの下からイカの姿フライを取り出す。小型冷蔵庫からエナジードリンクを引っ張り出し、カシユツと心地よい音を鳴らして開ける。

机前の椅子に腰掛け、園子から奪い取った漫画をパラパラと捲つた。

「……………ちよつと面白そう」

園子の趣味なのか、ドロツドロの三角関係をギャグテイストで仕上げた漫画だった。恋愛モノは唯斗が読まないジャンルなのだが、登場人物の大半が程よいクズだったので、やはりどちらかと言えばギャグ漫画だった。

いつぞやの高級耳栓（3998円）を付けて、本の世界に没頭する。牡羊座の怪音波や友奈の大声は防げなかったが、それでも耳に着脱しやすいシリコン素材の、フレンジタイプ耳栓だ。

遮音性や機能性、フィット感のいずれも高基準を誇る。唯斗の人生において一番の無駄な買い物なのだが、それも一種の浪漫なのだ。

「ふんふん♪ふん♪ふん♪ふん♪」

「……………」

「ふつ、ふん♪ふん♪ふん♪ふん♪」

「…………園子、嫌い…………」

いつの間にか隣に張り付き、上機嫌に歌う園子。色々と言うことはあるが、まずは高級耳栓を貫通する程の声で歌っていたことが一番の問題だ。

「え？そこまで煩くなかったと思うけどな…………」

「ちなみに、どれくらいの声？」

「今話してるのと同じくらいいらーい」

「…………二度と帰ってくんないな、ゴミ耳栓が!!」

もはや普通の会話すら防げない高級耳栓。唯斗はまたゴミ箱にダクシユートした。結局、3998円で買ったのはストレスだけだった。

「んで、何の用？部屋の片付けは終わったのか？」

「うーん…判断を私に任せてくれるなら、あれが完成系だつてことにしようーうんうん、私の部屋はアスレチック感強めの障害物部屋なんよー」

「つまりまだ終わってない？……………はあ、後で進めろよっ」

「はーい」

今すぐ終わらせていい、と言わないのは唯斗が園子に甘いからだろう。

今の唯斗が園子に初めて逢ったのは、彼女が満身創痍な状態の時だ。二年もの間、自由を剥奪されていた。そう考えると、多少の我儘は仕方がないと思ってしまう節がある。

「ゆーちゃん、ゆーちゃん」

「はいはい、ゆーちゃんさんだよ」

「一緒に漫画読んでもいいかな？」

「返せって言うなら返すぞ？ただの暇つぶしで読もうとしてただけだし」

「んーん、一緒に読もうよ。私はゆーちゃんと読みたいな」

「はいよ。お嬢様がお望みなら」

「わーい、ありがと〜♪」

椅子に座る唯斗の背に覆いかぶさり、肩に頭を乗せる園子。

慣れない人肌の温もりや、過度なボディタッチに不思議な感覚を抱くが、唯斗は気の所為だろうと断言して漫画を読み進めた。

読み終わる頃には、八袋目のイカの姿フライが消えていた。

唯斗の一日 後編

「さて、昼飯でも作るか。よっこいせつと」

「わひゃっ!?!」

数巻分の漫画を読み終わり、時刻も十一時の中頃まで経った。背中にぐでんと体重をかけて脱力する園子を、背負い投げの要領で絨毯に転がし台所へと向かう。

「あ、私も手伝うよ〜!」

後ろからトテトテと付いてくる園子。

某動画サイトで観たご主人大好き犬を思い出し、少しだけ心安らいだ。いつかペットを飼ってみたいと思うが、その反面、躰やら世話やらで面倒臭いとも感じる。

少なくとも、今は園子の世話で手一杯な唯斗だ。犬や猫を飼うのはまだまだ未来の話になるだろう。

「ゆーちゃん、ゆーちゃん。私、何をすればいいかな? 喜びのダンスでも踊る?」

「お前は何処のギニューだよ。てか誰がフリーザ様だよ。……んじゃ、冷蔵庫にしまつてある鶏肉をホテルパンに並べといて。あつ、クッキングシートは敷けよ? そのあと、スチコンのホットエアードー180℃十四分で、あー…余熱は面倒臭いしやらなくてもいいや」

「……………ほて、る…?…ぱん…?…」

「おい、なんだその目。まるで俺が異国語で話してる、みたいな目で見ると、ここは任せたゾイ」

「ゆーちゃん、残念無念で致し方ないね。私はお皿でも出しておくから、ここは任せたゾイ」

「……………」

逃げるように食器棚へ向かう園子を白い目で見ながら、唯斗はイカの姿フライを啜えて園子に説明した手順を自分で行う。

漬けておいた鶏肉をホテルパンに一定間隔で並べると、そのまま家庭用スチームコンベクションに入れてから温度と時間を設定し、ス

イッチを入れる。

空いた手で鍋二つに水を貯め、焔炉で沸かす。

「付け合せは……ブロッコリーとトマトだな。色彩的にも」

イカの姿フライを食りながら冷凍のブロッコリーとミックスベジタブルを電子レンジでまともて解凍し、冷水で冷やす。

ブロッコリーはフレンチドレッシングで和えて、ミックスベジタブルは茹でた玉ねぎとポイルで解凍したポテトサラダベース、マヨネーズと刻んだ梅干しと混ぜて簡易的な和風ポテトサラダを作る。

トマトはヘタ部分をくり抜き、下部分に浅く十字の切れ込みを入れてから湯に通す。

皮が剥けてきたら冷水で冷やししながら、皮を剥がし八等分にカット。園子がつけてきた四枚の皿に二切れずつ盛り付ける。

——ちやららららーん、ちやらららーん♪

「ゆーちゃんー？なんかファミ◯◯マートの入店音が鳴ってるよー？」

「あー。多分、銀とトーゴーが来たんだと思う。喜びのダンスでも踊りながら迎えてきて」

「人をギニューみたいに言うの止めてね？乃木さん家の園子さんは地球生まれの地球人なんよね〜」

ソファに寝転がる園子を玄関に向かわせ、その間にコンソメスープを完成させる。

焼けた鶏肉を食べやすく切り、イカの姿フライを齧り、ブロッコリーとトマトを乗せた皿に盛り付けて本日の昼食が完成した。

「お邪魔します。んん〜っ！いい匂い!!」

「こんにちは、唯斗君。ご相伴に預かりにきました。ところで…どうして私はそのつちに目隠しをされたの？前が見えないのだけれども…」

皿にテーブルに運んでいる最中、到着した銀と東郷がリビングに入ってくる。銀は出来たての料理に嬉々とし、東郷は手拭いで目を隠されていた。無論、唯斗の命令で園子がした事であり、本人が取るうとする度に爪楊枝で首元をつついてる。

「おつ、来たな。座る前に手洗つてこいよ?…東郷はその鞆を置いて、両手を上げながらゆつくりと歩け。園子、絶対にトーゴーから目を離すな。怪しい動きをしたら通報するからな」

「囚人!?唯斗君は私を何だと思ってるの?…」

「スト^素ー^東ゴー^郷」

たった一言で判る彼女の性質。

勇者部一の変人は廃る事無く、日々成長し続ける。変人から始まり、盗撮魔になり、その果てがスト^素ー^東ゴー^郷。変人街道まっしぐらの東郷美森は今日も今日とて、意気揚々と犯罪ギリギリコースを駆け回るのだ。

本日十袋めの徳用イカの姿フライを食べきった唯斗は、そのストレスをサンド^東バッグ^郷にぶつける。

世の中は不条理だ。何故、イカの姿フライは食べれば無くなるのか。神が恨めしい。食べても無くならないイカの姿フライを生み出さなかったのは、神が全て悪いのだと唯斗は語り、東郷の首元を爪楊枝で突く。

「発音がストーカーのソレなんだよなあ。ある意味、一番変わり果てたのは美森なのかもな。ところで美森さんや、さつきまで持ってたゴツツイカメラはどうしたんだい?」

「そのつちに取られました」

「園子さんが取っちゃったぜ〜!ぐっへっへ、これでわっしーのあられもない姿を撮り収めるぜベイバー!……………あれれ、起動してる?…動画撮影モード?」

「良くやった園子。一ユイトポイントをやろう。……………さて、トー^素ー^東チャン。弁明は?」

「…日々の記録って、とつても大切だと思うの。刻々と過ぎ行く一瞬、たった一秒だって、もう二度と戻らない。矮小な私達が取れる手段は、きつと写真や動画を残すことだけなのよ。私達は一度、記憶を喪失した。思い出を、残せなかった……………だから、だからよ!この動画には正当な理由がある!!振り返り、微笑ましく想う過去はここにあるの!!唯斗君、私を信じて?この動画は悪用なんてしないわ。そのつちが

いて、銀がいて、唯斗君がいて、私がいる。その軌跡を、私は残したいだけなのよ…!!」

「園子、動画消しといて」

「ほいさっさー、ポチツとな〜」

「あゝあゝあゝあゝアゝアゝアゝー!!」

「美森の口から野獣の咆哮みたいな声が出てる…」

心做しか、窓ガラスが振動していた。野獣の咆哮は物悲しくも園子には届かず、盗撮の記録は無情に消え去る。悲しい事に、東郷美森の乙女成分が完全に死滅した瞬間だった。

目隠しを取り、恨めしげに唯斗を睨む東郷の口にイカの姿フライを突っ込み、銀と共に手を洗いに行かせる。その間にコンソメスープと白米を盛り付け、リビングの机に設置した。後は二人が戻れば、いつでも昼御飯を食べれる状態だ。

「唯斗シエフ、今宵のメニューは？」

「銀ゲスト、まだ夜じゃないぞ。えー、本日用意したのはタンドリーチキン、和風ポテトサラダ、コンソメスープです。コンセプトは発祥地バラバーラのバーバラさん。インド料理のタンドリーチキンに、ドイツのポテトサラダ。フランス料理のコンソメスープと日本の米。後には世界のアイドルで有名なイカの姿フライ。文句を言う奴はぶっ殺します」

銀の雑な振りに、唯斗も淡々と答える。実際はコンセプトなど最初から存在しないし、単に冷蔵庫にあった材料を有効活用しただけに過ぎない。

発祥地が被らなかつたのも偶然でしかなかった。

「唯斗君の手料理なんて久し振りね。唯斗君ったら、学校のお弁当もイカの姿フライだけなんだから」

「最近はこちらと作ってるんよ？この前なんかサンチョのキャラ弁を作ってくれたんだ〜」

「興が乗ったのでね」

「…なあ、おかしいのってアタシなのか？美味しそうな料理に並んで、

当然の様にイカの姿フライが鎮座してる現状に違和感を覚えるのつて、アタシだけなのか…?」

「ふっ…安心しろよ、銀」

唯斗はニヒルに笑む。

イカの姿フライ狂人として定評の唯斗とて、イカの姿フライをおかずに昼飯を食べようとはしない。常人がパンをおかずに白米を食べないのと同様だ。主食と主食は相互関係にはなり得ない。

食卓に並ぶイカの姿フライを愛しげに見詰めながら、銀の誤解を指摘する。

「安心して…なにを?」

「このイカの姿フライはチリ味だ!」

「…:…それで?」

「…:…それで…:チリ味だから、ご飯のおかずだろ? プレーンとかマヨなら主食類だけど、旨辛系のは主菜扱いだよ。あっはっはー、銀ちゃんったらお惚けかー?」

「イラッ…!」

銀は静かに拳を握り締めた。あのドヤ顔を殴り飛ばせたら、どれだけスツキリするだろうか。唯斗の顔をサンドバッグにしたい衝動に駆られるが、唯一の常人として抑えた。

もはや感覚が麻痺している東郷と園子は、既に違和感すら覚えない始末。唯斗と話す数だけ目に入るイカの姿フライ。

同じ部活動で過ごしてきた東郷や、居候している園子には銀の倍以上にイカの姿フライを見ている現状だ。

「…:…まあ、イイか!」

「ミノさんはミノさんで、適応力が凄いいよね。なんか、こう…:…すんごいよね」

「そのうちの語彙力が…」

ワイワイと雑談に洒落こみながら、昼食を食べ進める。普段は異国料理を好まない東郷も今回は何も言わずに受け入れる。鷺尾須美だった頃よりも軟化し、物事を柔軟に捉えられるようになったからだろう。

その代償として理性を保つ部分が欠損したが、知らぬは本人のみ。所謂ヤベー奴な東郷美森は類友の唯斗と同様に自覚のないヤベー奴だった。

「うーん、やっぱりこの面子は落ち着くなー」

「そうだねー」

「あら…銀もそのつちも、勇者部は退屈だったかしら」

「そうじゃないよ。勇者部が暖かい場所で、みんなの”居場所”なのは分かるし、アタシも同じだよ。でも、アタシ達からしたらたら…一緒に戦って、背中を任せて、心の底から信頼しきっていたのは美森…須美に園子、唯斗だけだったんだなって、ね」

「フーミン先輩にいつつん、ゆるゆとにぼっしー。…とつてもいい人達だよ。純粹で無垢な、勇者だよ。だからかな…？私には眩しいんよ。何処までもいい人で、お人好しな彼女達がねー」

「……………」

銀も園子も、もう昔みたいに無条件で人を信用することは出来ない。

納得したとはいえ、『満開』の後遺症を知らされず、必死にもがいて生き残るために何度も捧げた。その事実を大赦から隠され、家族や友達との別れも出来ないまま動けなくなつた。

信じていた大赦に裏切られた。故に、二人は疑うことを覚えてしまったのだ。善意には裏があるのではないか。無償の好意なんて有り得るのか。

そう疑つてしまった瞬間、自分が酷く狭い人間に思えて仕方がない。

——その感性は、善人故のモノだ。

銀と園子の憂いを、唯斗は理解出来なかつた。唯斗は決して悪人では無いが、それだけだ。己の欲で動き、無償の奉仕を面倒だと感じる。唯斗はそんな自分を善人なのとは思わない。

勇者の適性がなく、初代勇者の血なんて流れてなくて、勇者部にも入部しない。それだけで、郡唯斗はただの一般人に成り下がる。神に見向きもされず、世界の裏では少女達が命懸けで戦う事実を知らない

まま生きていただろう。

何処までも、郡唯斗は一般人なのだ。

「……そう、ね……人を信頼するのって、難しいわよね……よしつ、決めたわ！不肖私こと東郷美森、僭越ながら友奈ちゃんについて語ります。八時間ほど」

「はっ」

「えー、まずは友奈ちゃんという概念から語りましょうか。皆さんは結城友奈ちゃんという名を聞いて、最初に浮かぶのは天使、可愛い、大天使、超可愛い、という感想でしょう」

「トーゴー、重複×2してる。あとウザイから帰れ」

「——であるからして、私はその現象に友奈ちゃん可愛い天使現象、と名付けました。読んで字の如く、友奈ちゃんは可愛くて天使、という最強種である事は周知の事実でしょう。皆さんも百度や二百度程度は感じたことがあると思いますが……」

「ギン・チャン。トーゴーを外に捨ててきて」

「合点承知之助！……な、ナニっ!?この銀さんの筋力を持つてしても全く動かないだと……ツ!?ぐっ……やはり巨峰か?この巨峰が重いからなのか!？」

八時間友奈語りBOTとなった東郷は、決してその場から離れない。押しても引いても、揉んでも擦つても動かない。

「あれ?わっしー、いつの間に靴下を脱いだの?」

「……お、おい!トーゴーのヤツ……足の裏を吸盤みたいにして床に張り付いてやがる!!SHIT!椅子を引いても空気椅子で浮いてやがるぞ!!キメエー!」

「美森が……嘗て須美だったモノが化け物に変貌した……!」

「——其れ故に、友奈ちゃんは一概に天使とは言えません。偶にする、小悪魔的な可愛い悪戯。それが友奈ちゃんの天使理論を打ち砕き、友奈ちゃん神疑惑を誕生日させたのです。この写真は去年の四月馬鹿での出来事です……」

その後、東郷は本当に午後八時過ぎまで語った。次第に三人が無視

し始め、愉快なパーティーゲーム大乱闘系遊戯を始めても語り続けた。
虚空を見詰め、満面の笑みで話し続ける彼女の絵面はさながら、呪いの人形だったと後に唯斗達は語った。

——夜中。

東郷と銀は帰り、園子も寝静まった。カーテンの隙間から溢れる淡い月光のみで照らされたりビングには、キャリーバッグを持つ唯斗の姿があった。

「…またな、みんな……いつてきます」

書き残された紙には、少しだけ皺が刻まれていた。示すのは後悔か、憤慨か。

ゴミ箱には、二十袋目の徳用イカの姿フライの空袋が捨てられていた。

「うーん……?」

翌日、讃州中学二年の教室に頭を傾げる生徒が一人。乃木園子は一枚の紙を眺め、逆さにしたり、日に翳したりしながら頭に疑問符を浮かべる。

「そのちゃん、どーしたの?」

「朝から辛気臭いわよ」

「あつ、ゆうゆとにぼっしー。コレ見てよ〜」

園子が友奈と夏凜に手渡したのは、先程まで園子が眺め続けていた一枚の紙だ。そこには濃い丸文字で『究極のイカの姿フライを探す旅に出ます』と書かれていた。

特徴的な字形と、当然のように鎮座する『イカの姿フライ』のも文字。考えるまでもなく、書き手は一人だけに絞られる。

「…唯斗くんのか?」

「そうなんよね。朝から姿が見えないし、先に教室に来てると思ってただけけど…」

「……究極のイカの姿フライ?また例の奇行じゃない。今回は自分と等身大のイカの姿フライでも探しに行ったんでしょ、どうせ」

「そうなのかなー?ゆうちゃんのは行動は、昔から全く読めないから:ゆうゆとにぼっしーは見えない?」

殆ど答えの出た後の問いであり、園子も返ってくる答えを予測出来る。然し淡い期待を込めてしまうのは、他より聡い園子とて唯斗の思考行動は読めないからだ。

もしかしたら、知っているかもしれない。もしかしたら、何方かには事情を話していて、その上で隠しているのかもしれない。

この際、所在は解らずとも安否の確認だけでもしたかった。

「えっと、私は見てないかな。東郷さーん!銀ちやーん!唯斗くん見てないー?」

予想の域を超えない返答に多少落胆し、然れど別の人ならと無謀な期待を抱く。

自分の席で話していた東郷と銀は、友奈の呼び掛けに応じて園子の席に集まる。

「唯斗君?…えっと、まだ登校してないんじゃないかしら?銀も見えないよね?」

「美森が見つけてないなら、アタシが見つけれわけが無いだろ?…んー、この書き残し……案外、この通り究極のイカの姿フライを探しに行っただんじゃないか?」

実際、唯斗の行動原理の大凡はイカの姿フライだ。故に究極のイカ

の姿フライ探しも有り得てしまう、というのが銀の見解だ。

学校全体でもイカの姿フライを捧げるとなんでもないやつてくれる神様がいて、という噂も出ている。その根本が唯斗なのかは謎だが、恐らく彼ならばイカの姿フライを報酬にすればなんでもないやるだろうと言われているくらいだ。

「流石の唯斗でも、それは……有り得るわね。今日は」おはようイカの姿フライ”が届いてなかったし」

「おはようイカの姿フライ……にぼっしー、それってなーに？」

「私が聞きたいわよ……毎朝、郵便受けにイカの姿フライが入ってるのよ。おかげで、私の朝ご飯にイカの姿フライが追加されたわ……ッ！」

「夏凜ちゃん、意外と健気よね。ちゃんと食べるんだもの。朝から駄菓子を食べるのはどうかと思うれども……」

「 ” 意外と ” は余計よ東郷!!……そもそも、捨てるわけにもいかないでしょ」

おはようイカの姿フライは夏凜の誕生会の次日からほぼ毎日郵便受けに入れられており、唯斗曰く、部活をサボることを教えてくれた御礼とのこと。

要らないと言ってもツンデレだ、照れ隠しだ、と言われる為、最近はずつかりと受け入れていた。

「夏凜は愛されてるなー。唯斗が毎日イカの姿フライを贈るって、実はずつづつごくレアなんだよ。アタシの知ってる中でも、夏凜は二人目だね。ワンチャン、告白なんじゃないか？」

「ふえっ!?……、ここここ告白!?あつ……えっ、えつと……た、確かにそういう” 約束 ” だけど……そ、それとこれとは話が違うわよ!!」

「約束……ちよつと詳しく」

「美森落ち着けー?園子も悪ノリ……あつ、これマジなヤツだ。園子さんゆるふわ風味抜き抜きのヤツだな。取り残されたのは銀さんと友奈だけかあ……」

「……………」

「友奈?どうしたんだ?」

「……あつ、ううん!なんでもないよ……唯斗くん、何処にいるんだろう」

ね?」

「さーね。唯斗に関しては本当に予測不能だからなあ」

園子と東郷に詰め寄られる夏凜を視界の端に送り、銀は思い出に浸る。郡唯斗は確かに昔とは大分変わったが、それでも郡唯斗は郡唯斗だった。行動も、発想も、根本的な部分は何も変わらない、銀の大親友だ。

「銀ちゃんは、唯斗くんと仲良しだったんだね」

「これでも相棒だったんだぞ?…まあ、相棒っていうには…沢山貰いすぎて、何も返せてないんだけどな。命を救われて、唯斗には喪わせて、更には重荷を一人で背負わせて…これだけの恩、どうやって返せば良いんだろうな…?」

「…銀ちゃんもなんだね。私も出会って間も無い頃、命を助けられたんだ。…でも、そのとき…私ね、唯斗くんを傷つけちゃったの。…唯斗くんと、お話したいなあ…」

「アタシも、マンツーマンでじっくり話さないだよ」

『勇者』としての御役目は終えても、過去の清算は終えていない。二人が前に進むには、やはりそれが壁となってしまう。

——キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴り、各々で思う事を残しながら席に着く。

殆ど同時に入室した担任の女性教員は、優れない表情だ。困惑しているような表情。挨拶をしながら黒板前に立つと、困惑の正体を言葉にする。

「突然ですが、ホームルーム前に悲しいお知らせです。…郡唯斗君が転校しました」

「——えっ」

誰の声だったのか。全員だったかもしれないし、園子や銀、東郷、友奈だったかもしれない。

ただ一つだけ言えるのは、郡唯斗という生徒が讚州中学校から居なくなっただという事実のみ。

静まり返るクラスの中で少女達は絶句する。連絡が途絶え、自宅にも不在で、残されたのは一枚の書き残しのみ。

空いた席には、冷たい風が吹いた。

防人

「えー、今日から御役目に加わる土居結ツス。イカの姿フライさえ貰えれば何でもします。どーぞ、よしなに」

艶やかに流した茶髪を後頭部の高い位置でまとめ、気だるげに半目で、台本でも読むように淡々と自己紹介をする少女——否、少年。

四国の防御を担う霊的国防装置——通称ゴールドタワーの展望台にて、三十二人の防人と巫女、女性神官、女装した唯斗が対面する。
(視線が痛い…帰りたい…)

唯斗はイカの姿フライを齧りながら腹黒い眼鏡の青年を思い出し、心の中で毒突いた。

「唯斗君、女装しちやいなよ」

「あつ、もしもし警察ですか？目の前に不審者が居まして…」

「えつ、ちよつ…ストップ！警察は洒落にならないから!!揉み消すのも大変なんだから!!」

「チツ…揉み消せんのかよ」

夜中の街道。運転席に座るの変態的眼鏡野郎を社会的に抹殺出来ないことを残念に思いながら、唯斗は電話先に勘違いでしたと謝る。

真つ暗な海辺に月光が反射し、幻想的な風景が広がる。安らかな外とは一転、車の中では定期的に舌打ちをする少年と苦笑いをする青年が重い雰囲気醸し出す。

イカの姿フライの咀嚼音を立てながら唯斗は携帯端末を流し見る。

「さて、メールは読んだよね？」

「取り敢えずは。…防人、だっけ？結界外の調査と国造りの儀式…神樹の種を植えて世界を蘇らせる事を御役目として集められた集団」

「大体はその通りだよ」

防人——『勇者』の適性を持ち、然し『勇者』に選ばれなかった候補生を対象とした大赦の秘密工作部隊。

防人の装備である戦衣の、戦闘面での性能は『勇者』よりも大きく

劣る。故に防人の役目は捜査であり、星屑以外との戦闘は固く禁じられている。

だからこそ、春信は唯斗に声を掛けたのだろう。唯一、未だに勇者システム搭載の端末を手元に置き、水面下で大胆に動かせる人材。それが郡唯斗だけだったのだ。

「本来、防人の装備は二種類に分類される。銃剣と盾——でも今回君に用意したのは試験を兼ねた新装備だ」

「人をモルモットにせんといてや…」

「はい、この端末ね。使い方は勇者アプリと殆ど同じさ。違うのは収納されている装備だけ。…あつ、元の端末もちゃんと持っててね？ じゃないと唯斗君を派遣する意味が無くなるから」

唯斗が防人の御役目に加わる第一の理由は『勇者』だからだ。防人の切り札であり、生き残るための手段。それが現役勇者に頼ることだ。

「面倒臭い…最初から『勇者』じゃダメなんすか？ その方がやり易いんですけど」

「だーめ。大赦のトップさんは『勇者』と防人を関わらせないつもりだし、壁の外で『勇者』になれば、怖い神様がおかんむりなんだよ。確かに、良くない事が起こる。だから最終手段だ。どうするかは君次第だよ」

「実質自己犠牲じゃん…くだらない」

「それでいいよ。僕としても、君が無事なのが第一だ…きさて、お待ちかねの新装備紹介でもしようかい？」

「好きにしろよ」

暗い表情を覆い隠し、春信は明るい声質でプレゼントの紹介でもするかのように話す。もつとも、渡したのはプレゼントではなく命を守る為の鎧なのだが。

「好きにするね。今回、君の武器は石だよ。大小様々、僕が直々に河原で拾ってきた石さ」

「死にてえのか？ クソ眼鏡」

「ふっ、安心しなよ！ この石は特殊加工済みだ。対バーテックスにお

いては特化性能さ。殴るもよし、投げるもよし。変に凝った武器よりも使い易いだろう?」

実の所、新装備の根本は『石』ではなく『付与』だ。精霊を宿さない武器に対バーテックスへの特化を付与する事。

つまり、武器そのものを強化することに繋がるのだ。成功すれば『勇者』でなくとも星屑程度は相手取ることが可能であり、『勇者』の武器への付与が可能となれば人類は一気に”外”へと踏み出せる参段だ。

「まあ、問題点は付与するための資源に限りがある事なんだけどなあ…って言うことで!試験用の唯斗君には石を使ってもらいます」

「この野郎…人を蛮族扱いして楽しいか?あゝアん?なんだア、オイ。ふざけやがって…最初は木の棒で、次にピコピコハンマー…!満開したらテディベアと紙飛行機だぞ?!遂には石になっちまったよ…ツ!! ……………ぐすん」

「な、泣かないでくれよ…実用性とコストを考えたら石がベストだったんだ。悪意があつた訳じゃないよ」

しくしくと泣く唯斗。春信は困ったように慰めるが、事の張本人だけに効果は薄い。寧ろ煽ってるようにも見えてしまう始末。

「しくしく、ぐすん…夏凜に春信さんの悪口言つてやるもん…!男の子を虐めるのが大好きな性犯罪者野郎の職権乱用クソ眼鏡だつて言つてやるもん…」

「唯斗様。今より貴方様の奴隷となりますので、どうか…どうかそれだけは…ッ!」

「やったぜ奴隷ゲット♡録音済みだから逃がさないぞ♪」

「……人を腹黒つて言つておいて…本当に腹黒いのはどっちさ…」

「仲良くしましょよ、あにつしー?」

「久々な呼び方なのに全く嬉しくないよ…」

唯斗は便利な奴隷を手に入れた。今後、春信の仕事の一端にイカの姿フライ大量発注が追加された瞬間だった。費用は勿論、春信の自腹だ。これには奴隷の御主人様もニッコリ御満悦だ。

「それで、明日から…って、もう今日か。今日からの御役目で俺はどー

すればいいんすか？ 女装は渋々、心を押し殺して、かなー！

り譲歩して受け入れるとしても、具体案とかあるの？」

「勿論だよ。君の素性は全て隠して偽装しないといけないしね。うーん、偽名は…そうだね、土居結どいゆいなんかどうだい？ シンプル・イズ・ベスト」

「結は兎も角、土居って母さんの旧姓じゃん。なんで知ってるんすか…浮気？ 郡家解散の危機？ 感謝料でイカの姿フライ買いまくりだね」

「失敬な。何回か話してると思うけどね、土居家も郡家や乃木家に並ぶ名家なんだよ。初代勇者の末裔だし。…君は、本当に僕の話聞いてるのかい？」

「六割は聞いてますよ」

「四割は聞いてないのか…まあ、それは置いておこう。偽名と女装するにあたって、唯斗君にはこれを渡しておこう」

「カツラと…ナニコレ？ 首輪？ 通報案件？」

茶色の長髪を模したウィッグに、黒い輪状の物体。正面には短く細い鎖で金属の花がぶら下がり、年相応の少女が身につけてきてもお洒落と捉えられる物だ。

「安易に警察に電話するのはやめようね？ スマホを置いて、そっと置いて。オニーサンの心臓が持たないから…それはチョーカー型声変機だよ。端的に換言すれば、声が変わる凄いやつ。バッテリーも日光で自動的に溜まるから、半永久的に機能するよ。壊れなければだけど」

「…まあ、チョーカーは解った。でもツラは？ その御役目ってヤツ、戦うんすよね？ 戦闘中にツラが吹き飛ぶってギャグ漫画かよ…」

「だから、この特製凝膠体を使うのさ。カツラの内側にスプレーで吹いて頭に被るだけで、あーら不思議。引っ張っても取れなくなりましたー！ 髪と頭皮にも優しい天然素材で、カツラの方も蒸れないようにちゃーんと改良してるよ。買取…もとい、こちら側に取り込んだ技術班には感謝だね」

「…アンタ、クーデターでも企てるんすか？…てか、これってボンドじゃないっすよね？ ぶん殴りますよ、ピコハンで」

「僕が爆散するよ!? 違うから、ちゃんと取れるから安心してよ。この専用液を使えばね」

「……なら良いけど」

半透明のスプレー瓶に詰められた白く粘着質な液体と、春信が専用液と称した透明の液体。その他諸々を紙袋にまとめ、助手席の背を倒し後ろに乗せているキャリアバッグに乱雑に入れる。

「後は何か、聞いておきたいことはあるかい？」

「じゃあ一つだけ。この御役目っていつまでかかるの？ 学校もあるんだねど」

「…あー、言っただけでなかったっけ？」

「……ボク、とつても嫌な予感がするなあ」

「今から向かってる施設…通称ゴールドタワーには防人達が住んでいるんだ。そこで鍛錬したり、学生と同じように制服を着て勉学に励んでいるんだよ。えっとね、唯斗が御役目に参加するってことは、つまり長期間は帰れないって事なんだよね」

「まっ…」

「ま。よって、転校手続きをしておきました」

「……まじっ？」

「マジ。本気と書いてマジ。ほらほら、もう到着したよ？ 迎えが来るから案内してもらってね」

車は海辺に止められ、唯斗は急かして追い出される。土煙を立てて走り去った車を見送りながら、唯斗は頭に疑問符を浮かべた。

時刻が午前二時を超える頃、置いていかれた唯斗に近づく影が一つ

「お待ちしておりました」

「…えっと、どなた様？」

白と芽吹色で着色された神官服をまとい、深く被ったフードの下には神樹を模した絵が刻まれた仮面。

一目で大赦の関係者なのは見受けられる。

唯斗の問い掛けに、淡々とした声質には若干の乱れが生じた。

「……私は、どの立場なのでしょうね。私にも……もう判りかねます。あの人の、もとい貴方の協力者なのだと思います。でも結構です」
「あの腹黒眼鏡……何処まで手エ伸ばしてやがるんだよ」

「腹黒眼鏡ですか、言い得て妙ですね。あの人にいい惑わせられ、この場に立っている私がいるのですからね……」

「……？協力者さん、俺達……どっかで会ったことあります？」

「っ……何故、そう思うのですか？」

「なんとなく」

仮面の下から向けられる視線には妙な既視感があった。厳しく、然れど暖かい、言葉にはし難い感情が込められている。

その感覚は”今の唯斗”が初めて銀や園子に会った時と同じだ。

きっと、そこには親愛が込められているのだろう。然し、唯斗はその感覚を言葉には出来ない。単に確証が持てず、勘違いを恐れているだけなのかもしれない。

唯斗は過去を取り戻したい。だからこそ、過去の自分と関係のある山伏しずくと国土亜耶に会いに来た。その為だけに御役目に参加すると言っても過言では無い。

「……孰れ、解ります」

「今は御役目に集中しろってことですか。……分かりましたよ」

「それが賢明でしょう。では、これより御役目の拠点地——ゴールドタワーに案内します……が、その前に着替えてください」

「……着替えなきやダメ？」

「此方が制服になります。声変機とウィッグも装着してください」
「アツハイ」

道中の公衆トイレで着替え、謎の液体をウィッグの内側に吹きかけながら髪をネットで束ねてから被る。着慣れぬ女子制服に袖を通し、肩甲骨ら辺まである茶髪を後頭部で結んだ。

「後は……チョーカーか」

花の装飾が付いた黒いチョーカーを首に着け、苦しくない程度に肌に密着させる。

「あ、あー、あー。……違和感ヤベエ。何このカワボ…郡くん的にはクール系で攻めたいんだけど……いや、郡くんじゃないな。土居ちゃん？一人称も土居ちゃんか？」

「着替え終わりましたか？」

「わひゃあ!?!いい、居たなら声掛けてくださいよ…」

「では向かいますしよ。と言つてもまだ夜中なので、朝までは用意した部屋で休んでいてください」

「あんたも大概、話を聞かないタイプだな…」

唯斗は協力者こと女性神官に連れられ、ゴールドタワーに案内される。

大東町の海沿いに建つ、高さ一五八メートルの建造物『ゴールドタワー』。旧世紀から存在するたてものであり、現在は大赦の管理下にある。

ここ数年は立ち入り禁止となり大掛かりな工事が行われていたが、現在は既に終わっているらしい。

唯斗達は一階のエレベーターから防人達の生活区域へと一気に上がる。

ゴールドタワーの中間層にはフロアがなく、無骨で物寂しい鉄骨のみで形成されている。外装はゴールドタワーの名に相応しい金色のハーフミラーとなっており、上へと上がっていくエレベーターの中からは月が写り黄色く光る海が見える。

「……………」

「…何も、聞かないのですね」

「ミステリアスな女性が好みなもので」

「…そうですか」

短く言葉を交わし、その後は静かなエレベーター内にモーター音が響く。

互いに多くは語らない。浅からぬ繋がりがあり、然し其れを確認する術はない。その暖かい声質が何を指し示すのかも唯斗には解らなかった。

やがてエレベーターは止まり、薄暗い通路を無言で進む。

「貴方はこれから、私の部屋で過ごしてください。私は立场上、外出が多いので実質一人部屋と思っても構いません」

簡素な室内には二つのベッドと、必要最低限の家具しかない。暮らしている、という印象は薄い部屋だ。女性神官の言葉通りこの部屋で過ごしている時間は少ないらしい。

「では、これから宜しくお願いします。郡唯斗さん…いえ、土居結さん」

「あつはい。よろしくです」

それだけ告げると、女性神官は部屋を出て暗い通路に消えていった。

——そして翌日。

「えー、今日から御役目バイトに加わる土居結どいゆいツス。イカの姿フライさえ貰えれば何でもします。どーぞ、よしなに」

ゴールドタワーの展望台で、三十二人の防人と幼い巫女、仮面を着けた女性神官の前で結は淡々と自己紹介をした。

「ユイトくん……?」

少女の小さな眩きは誰の耳に届くことも無く霧散した。

再会と忘却

——土居結。

防人のリーダー、楠芽吹が彼女を見て抱いたのは『覇気のない人だ』という感想だった。

御役目をバイトと呼び、矢印型の駄菓子齧りながら台本でも読むように淡々と自己紹介をする彼女。やる気がない、と言うよりは防人の御役目自体を軽んじている。

芽吹は命を懸けて御役目に励んでいる。芽吹だけでは無い。防人として選ばれた者は皆、身を削り、与えられた御役目に挑んでいるのだ。故に彼女はこの場に不相応なのだと思えない。

「……質問、してもいいですか？」

「なんですか、楠さん」

静かな空間に声が響く。一步前に出て軽く拳手する芽吹に神官は短く答えた。然し芽吹の視線は変わらず、土居結へと向けられている。

「彼女…土居結さんは戦闘訓練を受けているのですか？防人は、素人で務まる御役目ではありません」

「問題ありません。彼女は実戦を経験しています、この中の誰よりも」

「っ！それは…一体…ッ」

「詮索は禁じます。疑うのであれば、御自分で確かめる事を推奨します」

「えっ、ちよっ？神官さん…？土居ちゃんは何もきいてないんですケド？」

「…判りました。では模擬戦の許可を頂けた、という認識でいいですよね」

「どう受け取るのかは、貴女次第です」

「アンタも話を聞かないタイプ？土居ちゃんは何にも言っていないよ？

「……………マジか」

最初から想定していたのだろうか、女性神官は土居結——もとい郡

唯斗に青いジャージを手渡す。仮面越しに刺さる視線は、暗に諦めろと告げていた。

唯斗も小さく溜息をつき、品定めをするような周りの視線を忘れるためにイカの姿フライを頬張った。尚、それで一名からの視線が強く刺さることになってるが、それを察せれるのであれば唯斗は阿呆と呼ばれてはいない。

イカの姿フライの咀嚼音を響かせながら、全員で訓練場へと向かった。

「貴女、武器はどっちなの？」

訓練場で楠芽吹は木銃と盾を用意し、唯斗に差し出す。防人は盾部隊と銃剣部隊に分かれている。

模擬戦と称すのであれば、その形も実戦に近付けるものだ。芽吹は当然、木銃を使う。相対する唯斗もまた無手で挑む気はさらさらない。

「：芽吹さん、怒ってらっしゃいますわね」

「メブう：：や、やり過ぎたらダメだよ？」

芽吹だけでなく、訓練場に来た皆が興味深そうに唯斗を眺めていた。新戦力を見極めようとする者や、単に興味深いから見に来た者。中には芽吹がやり過ぎないよう、注意を促す者も居た。

土居結という人間が未知数だとは言え、相手が防人の中でも突飛した楠芽吹ということもあり、孰れも大きな期待は寄せていないのは明らかだ。

「あー、武器ねえ：土居ちゃんはモルモットらしいから、武器も試験用だよ。つまり、防人の新装備枠。実戦用には調整されてるらしいから、後は使い心地とかだね」

「新装備：：？」

「：：：あまり期待せんといてね？」

「期待もなにも、私達はその詳細を知らない。防人は銃剣と盾で安定しているのだし、気にはなるわ」

新装備が戦力増強になるか、将またチームの和を乱す事になるの

か。彼女の強さ以前に、武器の性質もまた戦況を動かすには十分過ぎる要因になり得る。

「……石」

「は……？」

「土居ちゃん武器は大小様々、河原産の石つころです。ゴロリもあるよ♪てかゴロリしかない」

「馬鹿にしてるの……？」

「コツチが聞きたいよ。蛮族かっつての、アツハツハ」

「……構えなさい」

「えっ——つて、ちよ?!危な!!」

脳天に向けて突かれた銃剣を、唯斗は既の所で躲す。

芽吹の表情は嫌悪すら孕む。やる気のない態度に、人を小馬鹿にした話し方。挙動の一つ一つが芽吹の神経を逆撫でし、腹立たせる。

「メブの突きを躲した……ツ!?も、もしかして……あの人、強い系?私を守ってくれる系?」

「雀さん……あなた、節操がありませんことよ?……それにしても、確かにあの方は只者ではありませんね。まあ?わたしには遠——く及びませんけれども!」

「弥勒さんうるさい。静かに観戦しようよ」

「雀さんだけには言われたくありませんことよ!!」

(外野がうるせえ……)

芽吹が唯斗に腹を立てている頃、唯斗もまた外野のまろ肩と似非お嬢様に腹を立てていた。

「開始の合図ってないの?土居ちゃんは無手だし。えっと……メブノキさん?」

「私は楠芽吹よ!」

「あっそう。俺は土居結。結でもゆるーちやんでも、好きに呼べよ」

「……関係ない」

「好戦的だなあ」

その言葉を最後に唯斗と芽吹は問答を止める。芽吹の突きは、決し

て手加減などしてはいなかった。他の防人ならば防ぐどころか、躲すことすら出来ない者もいる。

然し目の前の彼女は不意をついたにも関わらず、難なく躲した。つまり女性神官の言葉は嘘ではなかったのだと、芽吹は結論付けた。しかしながら、彼女の言動に腹を立てているのもまた事実。

「——はっ！せいっ!!」

「おっと、わあ!」

「よけっ…るな!!」

「無理言うなよ。当たったら痛いだろ!」

突き、薙ぎ、フェイントを含む連撃。時に力任せに、然れど決定的な隙を晒さない。防人で『01番』を与えられた彼女は三十二人の中で随一、秀ている証明だ。

然し——今の唯斗は調子が良い。『変化』と言っても過言では無い。その『変化』の片鱗は、『散華』した身体が回復してから現れた。

極端に身体能力が上がったのでは無い。明確な変化は『運動神経』だった。

自身の身体を巧みに扱える感覚と、反射神経の上昇。それと同時に立て続けの戦闘により、唯斗の体が思い出しているのだ。脳は思い出せなくても、体だけは過去の訓練を——常軌を逸した訓練歴を記録している。

躲し、逸らし、いなす。今の唯斗ならば放たれた攻撃を見てから対処することが可能だ。

「…不思議だよな」

「何が…ッ!」

「もつと前の…何も分からない頃なら、俺は最初の攻撃でノされてた。この連撃も躲せなかった。でも——今ならメブノキにも、某完成型にも、負けない」

時間と共に研ぎ澄まされ、徐々に洗練される動き。それは常人に有り得る、才能や成長で言い表せるモノでは無い。努力を続け、何十人と模擬戦をしてきた芽吹には目の前の人物がどれだけ異常なのかを判る。

だが同時に不満もある。土居結は模擬戦が始まってから、たったの一度も攻撃を仕掛けてこない。余裕のある足取りだが、その軌道は全くと言って良い程、攻撃には向かない。

「…どうして、攻撃しないの…っ！」

「したくても出来ないんだよ。言ったじゃん、負けないって。どーせメブノキの攻撃は当たらないし、土居ちゃんも負けないけど…勝てない。知ってるかい？負けないと勝てないって共存するんだぜ」

「…………勝てないなら、やる意味がないわ」

芽吹は攻撃の手を止める。決して勝てない強さ——それは芽吹の目指すものとは真逆に位置する。強く、気高く、『勇者』の在り方が芽吹の目標だ。故に、芽吹はもう、唯斗との戦闘に価値を見いだせない。

そんな芽吹の態度に、唯斗は憤慨した。

「は？ナメてんの？テメエの…防人の御役目はなんだよ。バーテックスをぶつ殺すことか？外に蔓延る星屑を駆逐することか？…違いだろ。第一は死なないことだろ」

「それは…」

防人は星屑以外との戦闘が禁じられている。

それは単純に、戦衣のスペックが低いからだ。芽吹の戦闘スタイルは敵の討伐を目的とした『勇者』に近く、本来、防人に求められるのは唯斗の様な逃げの戦法だ。

楠芽吹もまた、『勇者』を目指し訓練してきた故の弊害とも言えよう。

『勝つ戦法』と『負けない戦法』

まだ、芽吹にはその違いが解らない。

「…………少し、頭を冷やしてくる」

「いってらー」

「…妙に馴れ馴れしいわね、あなた…いえ、結は」

「そーか？メブノキが親しみやすいからでしょ。友達のツンデレ子ちゃんに似てるし」

「…メブノキって呼ぶの止めて。芽吹でいいから」

それだけ残すと、芽吹は木銃をしまい訓練場を出ていった。取り残

された唯斗は芽吹の背を見送り、イカの姿フライを貪りながら某ツンデレ型勇者と其処は彼となく似ているなど感じた。

「あの、お時間よろしいですか？」

「ん？…どしたんすか、巫女さん？」

柔らかい退黄色の長髪に、女性神官と似た純白と芽吹で着色された羽衣。幼い外見とは裏腹に丁寧な口調は、純粹にも歪にも見えた。

防人の巫女としてゴールドタワーに滞在する少女は、遠慮がちに声を掛けてきた。

「私、国土亜耶と申します」

「ごくどあや…？…あつ、国土亜耶!? 国土さん家の亜耶さん!？」

「は、はい…国土亜耶です」

春信から聞かされた過去の唯斗の知り合い二人。山伏しずくと、もう一人が国土亜耶という名のだった。間違いなく、目の前の彼女はそう名乗った。

「マジか…：…そ、それで？土居ちゃんに何用かな？」

「…：…ひとけ人気のない所に行きましよう」

「了解でっス」

周りの視線に晒されながら、国土亜耶と唯斗は訓練場を後にした。

無言で通路を進み、簡素な物置部屋のドアを開ける。掃除道具や予備の電球、シーツや箱ティッシュ。様々な用具が綺麗に収納されている。

俯く亜耶は緊張の面持ちで口を開けた。

「あの…ユイトくん、だよね…？」

「わあ、バレテラ。態々女装した意味…」

「や、やっぱりユイトくん！お、覚えてる？亜耶…国土亜耶です…!!」
唯斗の肯定。亜耶は笑顔を咲かせ、多少早口になり唯斗に詰め寄る。対して唯斗は申し訳なさそうに眉を顰め、やはり今の唯斗は国土亜耶を知らない、という事を自覚する。

「…：…ごめん」

「どうして謝るの…？またユイトくんに逢えて、私…とっても嬉しいよ。」

「覚えてないんだよ」

「……………えっ」

「記憶喪失で、過去のこと…殆ど覚えてない。本当に…ごめん」

「……………そっか。『勇者』の御役目で…：うん、謝らないで！ユイトくんは悪くないし、やっぱり私はまた逢えたことでもう…胸がいつぱいです！」

取り繕った微笑みは彼女の外見年齢とはかけ離れている。母が子供の失敗を寛容するような、年下の彼女には不似合いな笑み。

他人には無関心だった唯斗にも罪悪感が湧いた。

どうすれば、自分はこの少女に報いれるのか。自分でも似合わないなど失笑しながら、しかしその似合わない事が善人の成すことなのだと理解する。

「……………」

「辛そうな顔、しないで？私は本当に大丈夫！それよりもお話ししよう？ユイトくんが今まで何をしていたのか、なんで此処にいるのか…」

「…少し、長くなるぞ？」

「うん！」

大人びた少女だった国土亜耶だが、心做しか唯斗には、その返事は年相応に聞こえた。無邪気で、友達や家族と楽しく話す少女。そこに居たのは、巫女ではなく普通の少女だった。

「つーことで、女装して防人をやりに来ました」

「……………」

「亜耶？」

「ゆ、ユイトくんが…男の人の格好を…!？」

「そこ？長々しく話して、驚くのってそこなの？オニーサン、とってもショックだよ…」

国土亜耶の知る過去の唯斗は、女子制服を来て長髪で過ごしてい

た。過去の唯斗を知っている者ならば、寧ろ今の女装している姿の方がシツクリくるのかもしれない。だからこそ亜耶は土居結が唯斗だと確信し、話しかけたのだ。

「そーいえば、山伏しずくって分かる？」

「しずく先輩ですか？さっきの訓練場にも居たけど…確か、お友達なんだよね」

「ありや、知ってた？」

「うん、しずく先輩が言ってた。神樹館小学校の隣のクラスで…昔は兄妹みたいな仲だったって」

「兄妹か…」

「あと、毎日イカの姿フライを貰ってたって言ってたね。私もユイトくんから勧められて、大好物になっちゃった」

「マジかよソウルブラザー！いや、今は土居ちゃんだしソウルシスターだな。つまり山伏しずくもソウルシスターズの一員か…」

「そ、そうるしすたー？」

「よーし、よーし。ナイス昔の俺！既にイカの姿フライ党を築いていたとは…！亜耶、日本の未来は明るいぞ!!」

唯斗は勝手に亜耶と、顔も知らない山伏しずくを^{ソウルシスターズ}イカの姿フライ党に巻き込んだ。

話においていかれて困惑する亜耶はまだ、重度のイカの姿フライ狂ではないのだろう。尚、一日で平均徳用イカの姿フライ二十袋を消費する唯斗はイカの姿フライ過剰摂取によりイカの姿フライを神格化するまで悪化していた。

「あ、あと。外で唯斗って呼ばないでね？男バレしたら袋叩きにされかねない…武道集団だし」

「さ、されないと思うよ？…うーん、結先輩？結ちゃん？どっちがいいかな？」

「結ちゃんが良いよ。小学生に先輩呼びなんか強要出来ないし」

「えっ…？しよ、小学生…？」

唯斗の言葉に亜耶は固まった。

「ん…？亜耶どした？」

「…私、中学一年生だよ…」

「…と、とても若く見えますね？」

「嬉しくない褒め言葉…！」

その日から亜耶は毎日牛乳を飲むようになった。他意は無いが、取り敢えず身長170センチを目指して牛乳を飲み続け、早々に芽吹から止められた。

鳥類の誰かさん

私が：国土亜耶がユイトくんと初めて出会ったのは、本当に偶然だった。

まだ私達が小学生の頃。

昔みたいと言っているけど、ほんの二年程度前の出来事。その二年間を長く感じしまうのは、私の精神がまだまだ幼いのと、それだけ色濃い時間を過ごしてきたからだと思う。

私は敬虔な神樹様信仰の家で育った。

神樹様は献身的で、慈悲を込めて人類の味方をしてくださる。でも、必ずしも神様と人間の価値観は同じだとは限らない。私達が我儘で、傲慢で、神樹様の意に反する行動を取れば、神樹様は私達に罰を与えるだろう。

だからこそ、日々、神樹様への感謝を忘れずに過ごす。——私が巫女となる前に、両親から与えられた、私の在り方だった。

父と母から受けた教えは、今でも心の中に大事にしまっている。

神樹様から巫女に選ばれた時、一体：私は何を思っていただろうか。

” 喜ぶ両親を尻目に私は傍観者だった。微笑を浮かべながら、” 普通” からかけ離れた事を他人事の様に感じていた。喜びも、憂いもなかった。

単に実感がなかったのでは無い。神樹様の念が届いて、私の頭の中では『ああ、そっか：』と何かを理解していた。何を理解したのかも解らないまま、それでも確信していた。

それからは巫女としての力を磨くために、様々な訓練を受けた。辛くないと言ったら嘘になるけど、必要なことなのだど割り切っ

た。

きつと、私は私個人と『巫女の国土巫耶』は別物だった。

それでも、私が巫女の修行に耐えられたのは…彼のおかげだ。

「ども、来た」

暗い茶髪に、無機質な瞳。女の子の制服を着た彼はいつも、沢山のイカの姿フライを持って私の所に遊びに来ていた。

「あつ、ユイトくん！」

「…こんちわ」

「こんにちは。今日はどうしたの？」

「逃走……………クソ、親父…ちよー、ウザイ…！」

「あはは…勇者様の御役目は大変なんだね」

ユイトくんと初めて逢ったのは大赦内だった。日々の修行に励む私と、勇者の鍛錬から逃げてきたユイトくん。私とは対極的な彼だけで、何処か私と似ていた。

ユイトくんは『勇者』と自分を別で考えていて、私も『巫女』と私自身を同一なのだとは捉えていない。

思考の前に巫女としてのフィルターを通すのか、自分自身の意志を優先するのか。私とユイトくんの思考回路は似ていた。

だからこそ親近感が湧いた。

初めてユイトくんに逢ったとき、ユイトくんは大きなリュックサックに沢山詰めたイカの姿フライを一袋だけ渡してきて、無表情で『かくまって』と言った。

それからだった。定期的にユイトくんが巫女の控え室に来て、私にイカの姿フライを一袋くれてから決まって『かくまって』と一言だけ告げるのは。

「かくまって……………」

「う、うん…怒られない？」

「手遅れ…………ゆえ、に…モーマン、タイ…」

「大丈夫じゃないよね…!? 神官様に叱られちゃうよ?」

「クソ神官…………息子、に…女装…………きよ、うせい…する、へんたい

……死に朽ち果て地獄の業火に焼かれ百億回タンスの角に左足の小指をぶつけ続けなければならない……の、に……！」

「急に流暢……ユイトくん？人に死ねって言うのはめっ、だよ？」

「滅ッ？……怖っ……」

「えつと……？」

彼は昔から不思議だった。無表情で無機質な瞳なのに、誰よりも感情が豊かだ。訓練が辛いと愚痴を吐くときはドンヨリと、黒いオーラののようなものを纏っている。イカの姿フライをお口いっぱい頬張っているときは、無機質な瞳に電球を取り付けたように輝く。

とても微笑ましくて、ずっと見ていたくなる。

「……………」

「ユイトくん、今日はどんな訓練をしたの？」

「……クソ……親父、に……終始……煽ら、れなが、ら……木刀で、滅多打ち……虐待、はんたい……！」

「と、とつても厳しいんだね……やっぱり勇者様は凄いなあ」

基本的に、ユイトくんから話したりはしてこない。リュックサツクの底から取り出したイカの姿フライをずっと、一心不乱に口に詰めている。

でも私が話し掛けても、邪険にせず応えてくれる。

明確な変化が起きたのは、夏——七月が中旬に差し掛かる頃だった。

ユイトくんが大赦の本部に来なくなった。神官様に聞いても、何も答えてくれない。巫女としての務めを果たせと窘められ、私は神樹様に祈りを捧げることしか出来ない。

私を知れたのは、勇者様が御役目を終えたという情報だけ。勇者様の居場所も、どんな状態なのかも、巫女にすぎない私には決して知れない事だった。

再会は二年後——ユイトくんはあの頃よりも表情豊かで、イカの姿フライが大好きで、私と同じくらいだった身長もずっと高くなっている。

た。

私にとって…ユイトくんは大切な人だ。

今はただ、それだけ。また一緒に過ごせるだけで胸がいっぱい。まだ混乱していて、何を考えても直ぐに霧散してしまう。

そつとユイトくんの袖を握って、もう居なくならないでと自分勝手に願ってしまった。我儘なのは分かっているけれども、これは私自身^{国土巫女}の願い。巫女ではない国土巫女の、身勝手な祈願。

「ユイトくん…じゃなくて、結ちゃん」

「はいはい、結ちゃんですよ」

「たくさんお話しようね？」

「…巫女が話したいなら」

結ちゃんは今でもユイトくんだった。だから私も、あの頃の国土巫女で在り続ける。あの時の続きを…楽しかった日々を再開するために。

「なんだこれ？」

唯斗は小さく呟いた。

楠芽吹との模擬戦を終えてから巫女と話し、その後にはゴールドタワーの案内をもらった後。時刻は丁度昼時、運動用のジャージから白いボレロ、ジャンパースカートの制服に着替えてから巫女に案内してもらい食堂に赴いた。

そこで唯斗を待ち受けていたのは——大量のイカの姿フライだった。

「……巫女、これって防人風の歓迎芸？」

「えつと…た、多分…違うと思うよ？」

「だよなー、土居ちゃんでも解ってた」

入口付近の机にたんまりと盛られたイカの姿フライは、大凡唯斗の一日分を補える量だ。

その傍らには涙目で正座する少女と、腕を組み少女を見下す楠芽吹

の姿。コメディの雰囲気を感じ取った唯斗はスマホのカメラでパシヤリと写真を撮った。

「……本当に情けない……雀、貴女にはプライドってモノがないの？」

「だ、だって……だってえく!!死んじやうもん!私、メブとかみんなに守ってもらわなくちゃ死んじやうんだよおおく!!」

「だからって新人の結にまで擦り寄ろうと?あまつさえ、賄賂まで用意するだなんて……一度、根本的な部分を鍛え直すしかないか……」

「ひええく!め、メブが恐ろしいことを思案してる!?!ひぎいく!!」

「亜耶、アレって防人式のお家芸?」

「えつと……雀先輩は、ほんの少しだけ……慎重な方だから。でもその分、芽吹先輩も凄く頼りにしてるんだよ?」

「ほへえー、人ってのは見た目に依らないなあ。芽吹もまろ眉ちゃんも」

唯斗は防人の概要は知っていても、その中身は殆ど知らないも同然だ。誰が強くて誰が弱いのか。どのような連携を編んでいるのか。

多少は亜耶から聞いていたが、やはり亜耶は戦場には出ていないだけあって詳しいとは言い難い。指揮官や個々隊員の性格程度しか情報が無い現状だ。

「やつほー、芽吹」

「結……亜耶ちゃんも一緒なの?」

「はい、芽吹先輩。結ちゃんとは昔からのお友達だったので、沢山お話してました」

「土居ちゃんと亜耶はソウルシスターズだからね。イカの姿フライを愛する者は皆、ソウルシスターズなのさ!あ、芽吹も食^キべ^ル?最っ高にハイになるぜい?」

「芽吹先輩にもおすすすめします!あつ、お一つどうぞ」

亜耶は羽衣の袖口から一袋のイカの姿フライを取り出し、満面の笑みで芽吹に手渡す。まるで悪意のない宗教勧誘の如く、亜耶は幸せのお裾分けをした。

亜耶に勧められて、昼飯前のイカの姿フライを頬張った。これには唯斗と亜耶もニッコリ御満悦。

「あ、あの…土居結さま？ちよおおおつと、お時間を頂いても宜しいでしょうか…？」

「ん？…何このまろ眉。めっちゃ媚び媚びに笑みつてるじゃん」

芽吹が亜耶に気を取られている最中、叱られていた少女は両手を揉みながら媚びる笑みを浮かべ、猫背で唯斗に擦り寄ってきた。

気味の悪い少女を唯斗は手で突き放すが、今度はぶりっ子のように上目でニコニコと微笑みだした。これには唯斗の背筋に寒気が走る。

「えへへ、実はお強い土居結さまにお願いがありましたね？ふへっ…ソコのイカの姿フライはただのお気持ちですよ。決して、自己紹介での『イカの姿フライを貰えれば何でもする』に従ったわけではないのですけど…」

「諄い。面倒い。端的に換言して？」

「はい！貧弱な私を守ってくださいお願いします!!」

「ド直球すぎて惚れちゃうよ……」

土下座する勢いで頭を下げる少女は机に詰んだイカの姿フライを全て唯斗に捧げた。しかしイカの姿フライ狂人たる唯斗は一袋だけ手に取ると、般若の如く顔を歪めた。

「へえ…ソフトタイプ*の*イカの姿フライか。俺じゃなければドラム缶にコンクリート詰め*で*海に沈めてたぞ？あ？」

「ピギイ!?ご、ごめんなさああい!!……えっ、なんで怒られたの…？」

柔らかいイカの姿フライはイカの姿フライに非ず。其れをイカの姿フライと呼び、あまつさえ唯斗にプレゼントするという愚行。

控えめに言って、埋めたくなった。若しくは沈めるのも可。軽く一週間は硬いイカの姿フライの素晴らしさについて語ってやろうかとも考えたが、唯斗とて鬼では無い。一度だけは許すことにした。

「さてと、まろ眉ちゃん…鳩だっけ？」

「雀だよ!?鳥類ってことしか共通点ないよね!？」

「そーか、鷹タカちゃん。硬いイカの姿フライはどーだい？」

「だから雀だよ!?!…えつと、いただきます?」

「よしつ、これで鳶トビも硬いイカの姿フライの虜になる!…あれ、鷺ワシだっけ? 企鵝ペンギン…鶏ニワトリ? 鶴コウノトリか鴨カモ、鶇シギだった可能性もある。もしや梟フクロウか?」

「SU・ZU・ME! アイ・アム、チュンチュンのチュン助な雀!! 鳥じゃなくて人間の雀え〜!!」

「加賀城さん煩いんですけど?」

「なんで苗字はわかるのさ!?! 名乗ってないよ! 私、苗字は名乗ってなかったよね!?!」

唯斗は嗤った。目の前のツツコミサツンドマシーンバツグを見て、悪童に玩具を渡したかの如く、頬を釣り上げて嗤った。

某煮干し狂とは違う、攻撃性のない完全な受けのツツコミ。なんと甘美な、全身を痺れさせるツツコミなのだろうか。其れは才能——否、鬼才だ。ツツコミ界の風雲児だ。

普段は堅物真面目キャラを自称詐称する唯斗だが、不思議と目の前のまろ眉少女には永遠にボケ続けられると思ってしまう。

「何この人…ボケの常習犯? ツツコミ警察はまだ動かないの? 被害者雀が疲労涙目だよ…」

「何言ってるんだコイツ」

「マジレスや〜め〜て〜!!」

「メブメブ、ちよー大変。雀が駄々を捏ね始めた。醜いね♡」

「…雀は兎も角、結も大概よ」

「もうっ、結ちゃん? 意地悪したらめっ、だよ?」

「滅ツ? 亜耶は武闘派だなあ」

「違うから。あややは非武闘派の天使枠だから。典型的なボケで私がツツコミを入れると思ったら大間違いだからね!」

「もしや無自覚? ツツコミ界のな〇う系主人公?」

雑談を交わしながらカウンターで食事を注文し、積んだソフトイカの姿フライを袋にしまってその席に座る。唯斗は豚骨ラーメンを選び、他の皆もそれぞれ注文する。

唯斗が雀を弄り、雀が反発する。その両方を芽吹が窘め、亜耶は楽しそうに微笑み眺める。

そんな会話の繰り返しだった。

「御機嫌よう、皆さん」

「…弥勒さん？」

トレーを持ち、雀の隣に座った少女——弥勒夕海子。豪華な浅黄色の髪に、取って付けたようなお嬢様言葉。その独特な雰囲気は唯斗の灰色の脳細胞をギュルリと動かす。

そしてトレー上の皿に大量に盛られた鰹のたたきを見て、唯斗は確信した。

「わあ、絵に書いたように似非ってるお嬢様だ！ヒュー！ヒュー！！ポソソツの雰囲気も素敵だ！ステキキョー！！」

「まあ！新人さん…土居結さんでしたか？ふふん、中々に解ってるじゃありませんか。ありがとうございますわ！」

「弥勒さん、十割は馬鹿にされてるよ？流石似非だね、似非の名に恥じぬ似非っぷりだね。似非りすぎてもはやオリジナルだよ」

「えーい！嫌いですわよ雀さん！！」

弥勒夕海子はポンコツだった。ただ単調な猪にも似たポンコツ似のお嬢様だった。唯斗は一言だけ言葉を交わしただけで察し、奇しくもそれは防人の大半は共通の認識だった。

「お嬢、鰹のたたきが好きなの？」

「あらあら、お嬢とはわたくしの事にして？ふふつ、新人さんは弁えていらつしやいますわね！勿論、鰹のたたきは大好きですよ。さて…わたくしは貴女を何とお呼びすれば宜しいですか？」

「お嬢の好きに呼びなよ」

「では結さんと。これから宜しくですわ、結さん」

「こちらこそ。お嬢は芽吹のライバルだって亜耶から聞いてるし、期待してる。きつと猛々しいんだろうな」

「ふふん、期待してくださいまし！」

「それ誤報だよ？えつと、ユイ様？」

「えつ、キモイ。様とか付けんという、寒気がするから」

「なんか私にだけ辛辣じゃない!？」

「愛情の裏返しだよ。愛してるぜー、鷺^{サギ}」

「だから雀だつてば!？ユイのアホー!!」

「…しづく先輩、来ませんね…?」

「何か用事でもあるのかしら。珍しい…」

二人の会話は雀と夕海子の立てる騒音によって潰される。食堂の入口の影はゆつくりと、暗茶髪の少女を目に収めてから離れて行った。

——夕方。

タワー内の案内も終わり、黒紅の夕日を窓から浴びて展望台で呆然と過ごす唯斗。見慣れない新しい景色は、新しい仲間が増えても尚、心細さを映し出す。

別れを告げずに讃州中学の皆や勇者部の前から消えた。身勝手な行為なのに、寂しさを感じてしまうのもまた身勝手な事なのだろう。

ノスタルジックに浸る唯斗に近寄る影が一つ。

「おい…面ア、貸せや」

「…デートのお誘い? 上等歓迎だよ、セニョリータ」

◆◆◆オマケ◆◆◆

《土居結》

・三好春信の企みにより女装することになった郡唯斗。元の髪と同色の暗茶色の長髪を後頭部の高い位置で結び、チョーカー型の変声機で声も変えている。本人曰く、カワボ。尚、唯斗自身はクール系が希望だった。

女装しているとはいえ、一人称を私にすることには抵抗があった為、なし崩し的に土居ちゃんとなった。しかし高頻度で俺となっている。

亜耶曰く、昔の唯斗がそのまま女性として成長したらこうなっている。

たらしい。

変わらない言葉

蛍光灯に照らされた廊下。

唯斗は少女に連れられて通路を進む。紅い空は既に紺色に染まり、夜の帳はゴールドタワーを完全に包み込んだ。

道中、二人の間に会話はなかった。鈍い足音だけが響き、進む事に心臓は固く握られる感覚に陥った。

少女——山伏シズクの存在は国土亜耶から既に聞いている。防人である事以外に特筆すべくは二重人格だ。

無口で感情の突起が薄い”しずく”と、荒々しく凶暴な”シズク”。複雑な家庭環境により、しずくを護る為にシズクが形成された。故にシズクは戦闘面に特化しており、しずくは精密な作業に秀ている。

シズクは扉の前で立ち止まると、ゆつくりと振り返り唯斗を軽く見据える。

「入れ」

「囚人と看守っぽいなあ。まあ、いーけど」

半開きにされたドアを手で押して開き、シズクに従い真つ暗な部屋に入る。廊下からの漏れ光によって微かに照らされた部屋の内装は、簡素ではあったが女性神官の部屋よりは生活味が鑑みえた。

唯斗が数歩進んだところで少女も部屋に入り、ドアを閉める。

——ガチャリ。

「ん?…ねえ、土居ちゃんの聞き間違いじゃなければだけど、ドアの鍵を閉めた?閉めたよね?」

「っ……………」

「ひゃっ!?な、何で後ろから抱きつく!?!」

「スンスン……………」

「わひゃあ!?!ちよっ!首元をスンスンしちやらめえええ!!…:ならーメン」

「……ん、やっぱり。唯斗の匂い」

「あつ、うん」

「急に冷静……へんなの」

唯斗の陥落差の激しい反応を見て、少女ははにかむ笑みを浮かべた。安心したように、山伏しずくは手馴れた手つきで部屋の電気をつけてベッドの上の座る。

刺々しいシズクとは一転、しずくは自身の座るベッドの隣をポンポンと叩き、暗に座ればと告げる。

其れに従い唯斗は硬い動きで淡い水色のベッドに腰をかけた。

「…久しぶり」

「……あ、あのー。とても申し上げにくいんだけどね…」

「知ってる。記憶喪失……国土との会話、聞こえてた。…残念だけど、仕方ない」

残念とは口にするものの、はにかんだ笑みは一向に崩れない。亜耶と同様に、五体満足の唯斗と再会出来ただけでも満足している様子だ。

然し、土居結が郡唯斗なのだと先程までは判断しかねていたらしい。しずくが聞いた亜耶と唯斗の会話もごく一部に過ぎない。

故にシズクを介して部屋に招き、実際に接して唯斗か否かを確認めたのだ。

どう謝ろうか、と思案する唯斗の目をしずくは真っ直ぐと見詰める。その瞳が無言で告げるのは――

「もしかして、謝るのってお門違い？」

「うん」

「……それなら、こういった方がいいか。ただいま」

「うんっ、おかえり」

――山伏しずく。

少女の人生における大半は壮絶の一言に尽きる。不仲な両親と、そ

のストレスの捌け口とされた少女。暴言、暴力、食事も満足にさせてもらえなかった。

そんなしずくを庇うために生まれたのが、シズクという別人格だった。

まだ幼い少女。生きていくには嫌でも両親を頼らなければいけない。だからこそ、攻撃的なシズクもしずくを守る為には両親に反発はできない。

父と母の喧嘩を耳を塞いで聞き流し、食事は給食を抜けば賞味期限の切れた弁当やパンのみ。いずれも、育ち盛りの少女が満腹になるだけは食べれない。

「……今日もある」

そんな日々。

しずくがそれを見つけたのは偶然だった。登校日前、自宅の郵便受けには二袋のイカの姿フライが刺さっていた。

しずくは勝手に食べて両親の機嫌を損ねるのを恐れたが、そのイカの姿フライと共に一切れの紙が挟まっていたのに気が付いた。

適当に破いたような紙切れには薄い丸文字で『山伏しずくへ』と書かれていた。

疑問に思いながらも、駄菓子とて貴重な食料だ。一袋五枚入りのイカの姿フライ二袋をしずくは学校での空き時間に食べるようにした。そんなある日のことだった。

「あれ？山伏さんもイカの姿フライ好きなの？」

休み時間にイカの姿フライを食べていた時、殆ど話したことの無いクラスメイトが唐突に話し掛けてきた。しずくは戸惑いながらも、吃りながら肯定を示す。

「へえー、イカの姿フライって言えば隣のクラスの郡くんだよ。郡唯斗くんも毎日毎時間、授業中以外はイカの姿フライを食べてるらしいしね」

「っ……イカの姿フライ、食べてるの……こおり？……だけ？」

「さあ？少なくとも、イカの姿フライを大量に食べてるのは郡くんだけじゃないかな」

——郡唯斗。

何となく、聞き覚えのある名前だった。

詳しくは知らないが、大事な御役目を担っているらしい。その詳細は機密事項で知ることは無かったが、後に防人となってからは初めて『勇者』だったと知ることが出来た。

しずくは直感した。毎朝、自分にイカの姿フライをくれてるのは郡唯斗だ。確信してからは行動が早かった。駆け足で隣のクラスの手前まで行き、そつとドアから隣のクラスを覗き見る。

そこには——

「ぐっ、ぬうううう!!もつと、もつと強く踏んでくれえええ!!」

「……………キモ。…死ねば?」

「アヒンツッ!ありがとうございます!!」

四つん這いになり息を荒立てる男子生徒と、机に腰をかけて男子生徒を足蹴にする暗茶髪の少女——否、少年の姿。

女子制服に身を包む少年は四つん這いの男子生徒とそれに群がる男子達を見下し、辛辣に言葉のナイフを振り回していた。

「っ!?!……………ハア?あまりの衝撃で代わっちまったじゃねえか…!」

目の前の理解不能な出来事を目の前にして、しずくはシズクに代わった。

噂に聞く郡唯斗は無口で大人しい性格なのだと思っていたが、目の前の少年はどうだろうか。無口ではあるが、その行動は男子同士のじゃれあいの域を軽く超えている。

理解の届かない、おぞましいナニカだ。

それを見兼ねたのか、鈍色の髪の少女は呆れたように郡唯斗へと近づく。

「唯斗さんや、女子が怯えてるからどーにかしてくれ。なんて言うか…アタシも見ると堪えないからさ」

「銀……………うん、ちよーど…飽きた。……………散って、いーよ…」

「聞き分けが宜しいようで助かるなー。ついでにその悪ノリも止めてくれると銀さんも嬉しい所存」

「…へんじん、共…に、言え…」

「その根本に言ってるんだけどなあ」

光悦の表情を浮かべていた男子達は唯斗の言葉に従い、一転して無表情に戻り解散する。一名の女子生徒だけは目を輝かせてメモを取っているが、それ以外は通常のクラスに戻った。

ともあれ、しずくなら引いている所だがシズクは目的を完遂するために動く。カバンから熊のぬいぐるみ枕を取り出して寝ようとする少年に近寄り、圧を込めて肩を叩く。

「……おい、面ア貸せや」

「……カツアゲ？」

「ゆーちゃん、多分違うよ。わたしの灰色の脳細胞で導き出した答えは……うん、わからないね。事件は迷宮入りだ〜！」

「こら、そのつちは変に首を突っ込まないの！唯斗君も呼ばれたら素直に行くべきじゃないの？」

「は？…スーに、言われ…なくても、行く…つつーの……」

「はいはい、そうですか」

「こらこら、須美も唯斗も仲良くしろって。えっと、山伏さん？この変人に用事だっけ。唯斗のことはどーぞ好きに使ってね。多少雑に扱っても壊れないから」

「お、おう……」

「オレの…あ、つかい……」

シズクの言葉に反応したのは、郡唯斗と同様に御役目を担っている少女達だ。鈍色の髪の少女、三ノ輪銀。郡唯斗とは仲の悪そうな鷲尾須美。何を考えているのか解らない乃木園子。

個性の尖る彼女達だが、その性質は神樹に選ばれ御役目を割り振られた純粹な者だ。シズクは兎も角、しずくはそんな彼女達に憧れの念があつた。

しかし現実には願うだけでは何も変わらない。

憧れる反面、彼女達の生傷の絶えない姿は御役目の壮絶さを物語る。それに臆してしまったしずくは、きつと、そうは成れない。自身でそう結論付けてしまった。

唯斗を連れしたシズクは校舎裏まで行くと、立ち止まり唯斗を睨み付ける。

「オイ、お前なんのつもりだ？」

「…？主語、つけ…ろ…」

「っ…！…イカの姿フライだよ！お前なんたら、毎朝家の郵便受けに入れてんの!!」

「あー、…うん。ソダネー」

あまりにもあつげらんとした、掴みどころのない肯定。肩透かしを食らうと共に、シズクは腹立たしさを覚える。

感謝はしていたが、シズクは同情され上から目線で施しを受けるのは耐えられない。相手が郡唯斗ということもあり、御役目を担う彼は自分が”上”と認識し他者を見下しているのだろう。

事実はどうであれ、少なくともシズクはそう判断した。

「同情なら止める。鬱陶しいんだよ!!」

「…どーじょー？…何、言ってる…だ、コイツ…」

「どうせお前も俺を…しずくを哀れんでるんだろ!!俺達はテメエに飼いやられるほど堕ちちやいなえ!!」

「は…？…はなし、見えない。…なんで、怒ってる…？」

「…ハア？」

シズクは唯斗の態度に違和感を覚えた。これまで、偽善で嘘をつく輩は何人もいた。上から目線で何かを与え、だが決して同情では無いと偽善ぶる気味の悪い奴らは山ほど存在した。

だが、郡唯斗は何かが違う。

彼は自分の行いを肯定した。しかしそれ以外は否定し、シズクの言葉もほんとうに心当たりがないと否定する。

「…あつ、もしかして…イカの姿フライ、嫌い…？非国民…？」

「ハア!?な、なんでそうなるんだよ…！…別に、嫌いじゃねえーよ。俺もしずくも」

「っ！つまり…ソウルブラザー！…うえるかむ…!!」

「うわっ！な、なんだコイツ…急に笑顔になりやがって。…なあ、お

前。なんで俺……っていうかしづくにイカの姿フライを届けるんだ？
テメエの態度からして、気持ち悪い同情心じゃねえんだろ？」

「布教」

「……マジで何言ってるんだ？」

「イカの姿フライ……の、布教。……えつと……しづく？……に届けた、の……偶然。……敢えて、言うなら……駄菓子好き……の、波動？……感じた、ゆえ」

「……は、はは……ぜんっぜん理解出来ねえ……」

乾いた笑いが漏れた。欠片の同情もない。対象自体が自分でなくとも良いのに、変な理由で選ばれてしまった。理解の及ばない目の前の生き物に対して、シズクと中で様子を見るしづくは笑った。

ただただ可笑しくて、乾いた笑いは徐々に潤い校舎裏にはシズク自身も知らないほど大きな笑い声がいつの間にか反響していた。

「……お？しづく……戻るのか。……郡、ありがとう」

「……あれ、代わった……？……ま、いいや。……しづく、は……ソウルブラザー。……だから、……唯斗、で……良い」

「……うんっ、唯斗」

こんな笑みはいつ以来だっただろうか。

自身に問いかけても返って来ない答えだ。

苦に満ちたしづくの人生。たった一筋の光が差し込み、然し長くは続かない関係だった。

別れは予期せず。唯斗を初めとし、御役目に携わっていた四人は進級する前には姿を消した。学校側は意義ある御役目をやり遂げたと告げるが、しづくは信用することが出来なかった。

その真実を知るのもまた、二年後——土居結と名乗る彼と再会した時だ。

日常に取り残された山伏しづくは思い出の詰まったイカの姿フライを齧りながら、色の消えた世界で『変化』だけを待ち続ける。

口内に広がる塩辛さには、兄のようであった彼ほどは夢中になれなかった。

「——きて、しずくはソウルブラザー…もといソウルシスターだ。オーケー?」

「おーけー」

「ならば問おう。イカの姿フライは好きかい?」

土居結——と名乗る郡唯斗はニヒルな笑みを浮かべ、しずくに問い掛ける。

「うん、好き。……イカの姿フライは、思い出が詰まってる。あの時間を、唯一…肯定してくれる」

「…なるほど、これは確かにソウルブラザーだ。こんだけ似てれば、昔の俺だって……まあ、いいや。また宜しくな、しずくにシズク」

「うんっ——うお!?な、何で代わったんだ!?しずく!…チツ、お節介だ」

はにかむ笑みは百面相のようにガラリと驚き顔に変わり、シズクが表面に出てくる。隠れていた片目は曝け出され、目は鋭い吊り目になった。

「おお、シズクか?」

「…ンだよ、見せもんじゃねえぞ」

「シズクはイカの姿フライ、好きか?」

シズクの威嚇に対して、空気を読む術を知らない唯斗は質問をぶつける。これにはシズクも肩透かしを食らった気分だ。

先程はしずくにした質問を、シズクにもする。彼が自分としずくを別で考えているのだと認識した。防人の皆と同様に、唯斗もまたしずくとシズクを想っているのだろう。例えば無意識だとしても。

「…別に、嫌いじゃない。っーか、テメエほど熱狂してる奴なんてゴロゴロいてたまるか!」

「ほほう、やつぱりシズクもイカの姿フライの虜か。いやー、感じるんだよなあ。駄菓子好きの波動ってヤツを!」

「……ぷっ、あっはっはっ!!お、お前…まじで変わんねえな!何だよ波動って!あの時と言ってること同じじゃねえか!!」

「そりゃあ、俺は俺だからね」

「——ああ、違う、違う」
変わらない彼。変わらない言葉。

——シズクはあの日以来の笑い声を上げた。

蛮族猛々しい

三十三人の防人と巫女、神官が巨大な壁の前に立つ。

少女達は芽吹に合わせてスマートフォンを手に取り、アプリを起動させる。眩い光が少女達を包み込み、変化が訪れた。

来ていた服は光に分解され、代わりに特殊な芽吹色の装束を纏う。ある者達は銃剣を手にし、ある者達は大きな盾を装備した。

一人だけは同様の衣装と共に腕全体を覆う無骨な白銀の籠手を出現させた。装備した籠手を力の限り握り締め、開いた所には拳大の石がマジックショーのように現れる。

「——これより第五回、壁外調査を始める！」

「掛け巻くも畏き神樹、産土大神、大地主神の大前に恐み恐みも白さく、捧奉りて乞祈奉らくを平らげ安らげく聞召て、神樹の高き広き厳しき恩頼に依り、禍神の禍事なく、身健やかに心清く、守り恵み幸へ給へと恐み恐みも白す」

芽吹の号令に続き、巫女は略式の安全祈願の祝詞を唱える。幼い容姿とは一転して、羽衣を纏う彼女は言葉にし難い神聖な雰囲気醸し出す。

「皆さん。絶対に…絶対に、無事に帰ってきてください」

巫女の国土巫女としての祝詞の後は、他の何者でもない国土巫女としての言葉を絞り出す。毎回、彼女達が傷付いて帰ってくるのを巫女は迎えている。自分の事のように泣きたくなる惨状を、自分は巫女なのだと自分自身に言い聞かせて、また次回も外へ送り出す。

国土巫女の言葉は、言わば『巫女』で在り続ける彼女から垣間見えるただの国土巫女としてのモノだ。

引き止めたいから、必ず『絶対』と付け加える。離したくないから、言葉で縛る。

垣間見える其れは、本当に小さく、巫女自身も把握出来ていないエゴイズムだった。

「泣きそうな顔するなって。いざとなったらダチヨウ駝鳥を生贄にしても全

員で帰ってくるからさ」

「そのダチヨウって私のことだよな!? てかダチヨウでもいいから守つてよ! その全員に私も入れてよ!!」

「駝鳥、煩いわよ。集中しなさい」

「雀だよ! 何でメブまで間違えるのさ!?!」

「:加賀城、自分でダチヨウでもいいって、言ってた:」

「三歩どころか三秒後には自分の発言を忘れるだなんて:雀さん、駝鳥に改名してはいかが? お似合いですわよ」

「ああー!! もうっ! 意地でも生き残ってやるううう!!」

唯斗を初め防人の皆から弄られ、雀は涙目で決意を叫んだ。その擲楡いに悪意がないのは雀も承知の上で、然しそれで納得出来たかと問われれば否と答えざるを得ない。

少なくとも、緊張の面持ちは良い意味で崩れた。

雀が叫ぶのは天性のツツコミオによるプライドなのか、根本に刻み込まれた本能なのか。意気揚々と声を上げながら、雀はそつと後方に下がった。

「:だつてさ、亜耶。一番ビビりな雀が生き残るって断言してるぜ?」

「:.....うんっ、ユイトく:じゃなくて、結ちゃんも気を付けてね? 危なかったら:ちちゃんを使ってね?」

「飽くまでも最終手段なんだけどなー。まあ、死にそうになったらヤツてやるよ。自己保身には定評のある土居ちゃんだからね」

「もう、結ちゃんの天邪鬼さん!.....ありがとう」

「はて? 何のお礼なのかねえ」

ただの国土亜耶とただの郡唯斗は微笑で会話を閉じた。

「結。前日にも話したけど、あなたは今回に限っては後方支援よ。まずは防人の戦い方を見て学びなさい」

溶岩のようにドロドロとなった地面を踏みしめ、防人は隊列を成す。

目指す先は何度も地図で確認し、羅針盤も狂いなく目的地を指し示す。常にバーテックス及び星屑、その進化体への警戒を怠らず慎重且つ迅速に足を進める。

数日前から何度もされた芽吹の説明に、唯斗は同じ数だけの肯定を返す。

「御意。星屑が出てきた時は攻撃しても良きかな？」

「遠くの敵で、尚且つ此方をロックオンしている星屑なら許可する。それ以外は味方の邪魔、もしくは不必要な戦闘をすることになるから駄目よ」

「りょーかい。頼りにしてるぜ、リーダーさん」

「こっちもよ。新人さん」

防人の御役目は壁外調査だ。指定された場所へ赴き、土壌の採取を行う事。単純な指令に聞こえるが、その実は常に星屑や、その進化体。運が悪ければバーテックスとも戦闘になりえる命懸けの御役目だ。

サンプルを採取して、結界内に戻るだけならば『勇者』の方が圧倒的に速く安全だ。然し、壁外の煉獄はバーテックスを生み出した天の神の展開したモノだ。その性質は樹海化と殆ど同一。

樹海が神樹によって管理され監視されているのは語るまでもないが、壁外の煉獄も同様だ。全てを把握されてはいないものの、身に莫大な神力を込めた『勇者』が外に出向けば、天の神は怒り、『勇者』だけでなく四国にも攻め入るだろう。

故にこの御役目は防人に一任されているのだ。

溶岩のような地面をズブズブと歩き続け、目的地に到着する。

防人には八人の指揮官が存在する。指揮官一人につき銃剣型二人と護盾型一人を従えて一班を構成、それが全八班に別れている。

全体への号令は防人番号『01番』を与えられた芽吹が行うが、乱戦や今回のようなサンプル採取の場合は一定区間を開けてそれぞれの指揮官型防人の指示を仰ぐ。

この場に辿り着くまで、多少なりとも戦闘はあった。然し敵も星屑

が数匹程度。銃剣部隊数人による一斉射撃で難なく片付いていた。

各指揮官の指示に従い採取を初めてから十数分。事態は急変する。

「うぎやあああああああ!!メブうううう!!来たっ!星屑が来たああ!!怖いよ辛いよ死んじやうよおおおお!!」

「っ!総員、サンプル採取は中止で戦闘準備!!護盾部隊は中域で円状に備えて!銃剣部隊は前線で構えて——総員斉射!!」

加賀城雀の泣き叫ぶ声は敵襲のアラームだ。各隊員は慣れた手つきで武器や盾を構え、戦闘準備に取り掛かる。

芽吹の指令に合わせて白い軍勢の前に弾幕が貼られた。剥き出しの歯茎と寸胴とした白い胴体のみ、怪物の軍勢は僅かに神気を帯びた弾丸で身を削りながら、然れど一匹が墮ちる頃には三匹の星屑が押し寄せる。

前方で押される現状。しかし星屑は至極丁寧の前だから迫り来る訳では無い。

銃の轟音を聞きつけた星屑は空中を泳ぎ、四方八方から凶悪な口を開きジリジリと距離を詰める。最早弾幕は意味を成さない。

「くっ…:数が多し!銃剣部隊は護盾部隊の後ろに下がって別方向の星屑を対処!私とせずく、あとは弥勒さんも。正面に出て数を減らすわ!結も攻撃を許可する!!」

「了解!!」

「うぎやああ!!怖い怖い怖いよおお!!」

喚く雀だが、その生存本能は目を見張るものがある。防人の中で『32番』を与えられた雀は、自他共に認める最弱だった。然し、雀の取れる手段は撃退ではなく撤退による生存のみ。

訓練では測れない彼女の強みだ。誰よりも危険を先に察知し、誰よりも多く、起こりうる“最悪”を想定する。『生き残る』ことに関しては雀は誰よりも秀でているのだ。

「大きく振りかぶって、死に晒せや蛆虫共!!ヒヤッハアア!!」

「急に口悪っ!?!」

簡素な腕全体を覆う籠手を握り締め、次の瞬間には淡い緑光を放つ拳大の石が唯斗の手上に出現する。唯斗はそれを野球のフォームを真似て大きく振りかぶり、装束によって特段に上昇した筋力に任せて撃ち放つ。

手を離れた石は弾速には届かずとも、空気の壁を押しつけ轟音を響かせ、大砲玉のように星屑に迫り——減速することなく十数体を貫く。

「なっ!?!い、今のは…結なの!?!」

「チツ…足りねえな。この程度か…」

驚愕に目を見開く芽吹や他の防人とは逆に、唯斗は暗に期待外れだと表情を曇らせる。

幾度とバーテックスを打倒してきた唯斗には、その威力が低くしか感じられない。今、投げたのがピコピコハンマーだったのであれば前方の星屑は掠らずとも風圧だけで灰に出来ただろう。紙飛行機だったなら、たった一発でも軽々と星屑を消し飛ばせただろう。

——『勇者』と『防人』。

その差は、唯斗が想像する以上に大きなモノだ。元より唯斗の勇者システムは他とは違う仕様によって、身体能力は他勇者よりも格段に下だった。

然し『防人』の身体能力はそれよりももつと低い。『勇者』の唯斗は素手では星屑を二〜三体を相手取るのが限界だが、『防人』は他よりも優れた芽吹ですら武器なしで星屑に挑むのは自殺に等しい。

「……確かに、これはバーテックスなんて相手に出来ねえや」

「ハッ、やるじゃねえか!」

「おっ、シズクじゃん。大丈夫か?」

「盾の内側の奴は呑気だなッ!!暇ならッ!!前に出てこいやッッ!!」

「芽吹次第だなあ。めーぶーきー!前に出てもいーいー!?!」

「っ!…仕方ない。許可するわ!!銃剣部隊の射線上に重ならないように気を付けなさい!!」

「ウッス!」

唯斗は円状に並ぶ盾を飛び越えると、両手を握り締め先程よりも重

量感のある細長い石を二つ顕現させる。其れを両手に装備して、尖った先端で星屑を横薙ぎに殴りつけ灰に帰す。

着地と共に眼前に迫り来る菌莖を後方に倒れるように躲して、身を半転して捻り無理やり遠心力を生み出し、左手の石で脳天と思わしき部分を殴り抉る。溶けるように飛び散る星屑の破片を視界端に流し、灼熱で焼けるイカの姿フライを慌てて口内に押し込めた。

（——見えるー！）

これまでの、どの戦闘よりも調子が良い。敵の動きも、自身の体の挙動範囲も、手に取るように判る。戦闘を重ね星屑を穿つ程——その感覚は鋭く研ぎ澄まされた。

「H A H A H A！石、イイじゃねエか!! 蛮族上等！石礫最強!! 焼肉定食!! なあ、お嬢！」

「な、なんですの…この人？まるでシズクさんですわ…！豹変具合が!!」

「あゝ？ 弥勒…テメエ、誰が戦闘狂だあ？ ユイには俺より楠の方がソックリだろうが!!」

「シズクさんや、土居ちゃんを芽吹みたいに戦闘狂扱いせんといて？ 土居ちゃんは平和第一主義者の自己保身本能な普通の子だから」

「あー、もうっ!! 何方も自覚がないから似てるんですわよ！…ご自覚なさってくださいまし!!」

「あゝ？」

「シズクに結、弥勒さんも！遊んでないで戦いなさい!!」

「ウツス」

「な、何でわたくしまで…」

芽吹に窘められ、巻き込まれただけの弥勒夕海子は深く溜息をつきながら星屑に八つ当たりをする。その猪突猛進もまた芽吹に鋭く窘められるが、ポンコツ似非お嬢様は気にしない。精々、原因の狂戦士二人に心の中で恨み節を延々と綴るだけだ。

「よし、数は減ってきた——シズク、弥勒さん！左右の星屑を前に集めて！私と銃剣部隊は後方の退路を確保するわ！護盾部隊は銃剣部隊

を囲んで隊列を崩さないでゆつくりと退却！結は二人が集めた星屑に石を投げ続けて!!」

「ハッ、楠のヤツ…簡単に言ってくれなせ！上等だゴラア!!」

「ふふっ、弥勒の名を背負う者として——完璧に熟してあげますわ!! 寄つてらっしゃい、星屑共！わたくしの銃剣の錆にしてあげましてよ!!」

「お嬢、お嬢。殲滅じゃなくて誘導だつて。下手こいて状況悪化させないでよ?」

「さあ、かかってらっしゃいませ!!」

「oh…:…聞いちゃいねえーぜよ」

芽吹は最後方に下がり、そのまま銃剣部隊の援護射撃を受けながら星屑を減らす。未だに最前線で銃剣を振るうシズクと夕海子は左右に旋回し、正面に星屑を誘導し始める。

殲滅を任された唯斗は両手に砂利を出現させる。一粒一粒は星屑すら殺すに至らない物でも、対バーテックス用に神気を付与された代物。何百何千と撃てば豆腐に石を投げるが如く、其の身は塵芥と化す。

「避けるよ！二人共!!」

「っ！」

「オラッ、死に腐れや！砂利散弾!!」

唯斗を射角とした円扇状の広範囲に両手から放たれた小石の粒が散り投げられ、十数体の星屑の巨体に何百もの穴を開けて軌道上に塵の山を築く。

「うえっ、気持ちわりい殺し方すんなよ！鳥肌が立つちまつたじゃーねか!!」

「敵ながら同情しますわ…あんな穴まみれに…:…夢にで出来そうですわね…」

「全員撤退よ！結達も星屑を牽制しながら下がって!!」

「了解！」

芽吹の号令に従い、神樹の結界を目指して駆け出す防人だったが—

「ぎゃあああ！何アレ無理無理絶対死ぬ殺されるううう!!」

雀の泣き叫ぶ声が灼熱の世界に響く。既に防人達にとつては見慣れた光景だが、今回の相手は星屑ではなかった。

星屑が無数に集まり、融合し、異形な巨体が形成されていく。芽吹はその姿を資料で見たことがあり、唯斗もまた肉眼で確認し相対したこともある。

楯円球の身体に醜い二つの蒼い口部分。横中心部には巨大な空洞が開き、正面の大口から後背まで収められた淡い光の矢。

紅い空を背に佇む姿は絶望の具現化だ。白い巨体は星屑の何千倍もあり、その個体の恐ろしさを物語った。

「射手座……」
サジタリウス

芽吹の口から言葉が落ちた。

黄道十二星座の内、射手座を冠するバーテックス。それは本来、『勇者』が戦う相手だ。現状、目の前に形成されたバーテックスは見た目こそ完全に射手座であるものの、その実は『御霊』を持たない成りかけの個体。

完成体のバーテックスよりは脆弱であり再生能力も攻撃力も格段に下なのだが、それでも防人が敵う相手ではないのもまた事実。

「あ、あ、ああ!!前には星屑で後ろにはサジタリウス!!嫌だ死ぬ絶対死ぬう!!」

「……芽吹、正直に言え。生き残れるか?」

「……倒すのは不可能。本来なら撤退一択だけど、星屑が邪魔で困難……!まずは護盾部達で持ち堪えてから、空いた隙を狙うしかない!!」

「オーケー、実質肯定だな。じゃあ——アレは俺が相手する。雀と一緒にね♪」

「は?はああああああ!?何で私!?嫌だよ私!あんなの相手したら脆弱雀は殉死ルートまっしぐらじゃん!!嫌だいやーだー!!死にたくないよおおおおお!」

早口で捲きたてる雀を無視して、唯斗は話を進める。

「十分は持ち堪えてやるから、その間に退路を確保しろ。出来なきや全員死ぬ……だろ?」

「っ……！護盾部隊、サジタリウスの攻撃に警戒しながら星屑の進行ルートを絞って！銃剣部隊は後方の星屑に一斉射撃！——生き残るわよ、今回も!!」

「さーて、刺激的なデートと洒落込もうぜ。小雀ちゃんよオ」

「ひええええ!?アトラクシオンは好みじゃないから帰りたいよおお!!ユイの馬鹿!オタンコナス!!死んだら末代まで呪ってやるううう!!」

「上等♡生涯共に居たいってか?情熱的だなア!」

「言ってないから!?!」

眼前のサジタリウスは自身の体をギチギチと鳴らし、二つある巨大な口のうち、上の口の醜悪な歯を剥き出しにして太く鋭い矢を唯斗と雀に向ける。

「さあ、生き延びようぜ? 鷗しとどちゃん」

「だから雀だつてばあああゝゝ!!」

雀の絶叫声と同時に矢は放たれた——

優しい言葉

「梟、サジタリウスの攻撃は2パターンある」

「だから雀だよ!? ……2パターン?」

「まずは——今から撃たれる太い矢だヨツ!!」

「ひっ、ひぎやあああ!? 嫌だ死ぬ助けてええええ!!」

眼前に迫る矢。嘲笑うように放たれた必殺は一息の間もなく、泣きながら盾を構える雀に寸分のズレもなく襲いかかる。

泣き叫びながら後ろに身を投げ出し、上斜めに構えた盾で受け流そうとする雀。轟速で飛来する矢は本来ならば、盾の表面を抉りながらも逸らされる筈だった。

然し唯斗は敢えて雀の前に半身で躍り出て、両手に持った石を矢の側面に押し付けて一瞬だけ力を解放する。

中国武術における力の発し方——発勁に似た技術だ。

石を荒く削りながらも大きく逸らされた矢は十数メートル程離れた後方に突き刺さり、半分以上を灼熱の地面に食い込ませる。

「ツツツ!! 怖っわ……っ！つか手え痺れるわ!! 良く出来たなあ、俺！帰ったら奴隷春信さんに幻のイカの姿フライを要求してやる!!」

「……あ、あれ? 生きてる? 私、まだ生きてるよね!? ゆ、ユイが守ってくれた!? そうだよな? そうなんだよね!? あ、ありがとおおおお!!」

「白々しいなあ。土居ちゃんが逸らさなくても自分で対処出来てたクセに」

「そんな事ないから! ユイは雑魚雀を過大評価し過ぎだよ!」

「寧ろ自己評価が低すぎダロ……」

道中での星屑との戦闘にて、雀の實力は垣間見えていた。敵の襲来にいち早く気が付けるだけでなく、雀の真骨頂は過剰な生存本能による行動の効率化だ。

盾で防御するだけならば、誰でも出来る。彼女はそれに加えて周りの戦況も無意識に把握し、攻撃を受け流した先に更なる敵が——言わ

ば同士討ちをさせることが可能だ。

それも一例でしかなく、雀は攻撃せずに生き残ることに関しては鬼才を秘めている。

「家鴨^{アヒル}、さつきの続きだ」

「だから雀ですけど!」

「サジタリウスの攻撃は2パターンある。今さつきの太い矢と、下の口から吐かれる細かくてい小さい矢の雨。前者は一撃必殺、連射は不可。後者は——」

「……も、もしかして…冷却時間^{クールタイム}が要らない? ずっと矢の雨が降り続けるってこと!」

「YES、Exa^{うむ}ct^そly^の! そこで蝦夷雷鳥^{エゾライチョウ}の出番ツス! 傘になつてね♪」

「なんでさ!?! そんなの無理だから! 絶対無理だから!! つかエゾライチョウって何!」

「えっ、じゃあ太い矢の方を防いでくれる? いやー、それなら土居ちゃんも大助かり! 自分から重荷を背負うだなんて、流石——」

「喜んで矢の雨を受け持ちまーす! こんのお! 太い矢なんて何回も受け止めてたら! それこそ自殺だよお!! ユイのバカヤロオオオ!!」

上の口から煙を立て、静かに閉口する射手座^{サジタリウス}。必中必殺の一撃を放った筈なのにピンピンとしている二匹の生物を見下し、其れ等を『敵』と認識した。

知性を宿す怪物は織り交ざる本能と思考を二つの『敵』に向ける。開くのは下の小さな口。ギギギと異音を響かせ、口内に見えるのは地獄の如き針山だ。

瞬きと共に細かい矢は空を放たれ、大きく放物線を描き唯斗と雀を飲み込む。

「——っ! 背黄青鸚哥^{セキセイインコ}…来るぞ!!」

「最早何言ってるの…って、わびやああああ!!」

凹凸物の少ない壁外で、防人がサジタリウスの連射を塞ぎ切る方法は極端に限られる。

一つは太い矢に攻撃を切り替えるまで逃げ切ること。『勇者』よりは圧倒的に劣る身体性能でも、攻撃範囲を正確に判断できるのであれば比較的軽傷で乗り切ることが可能だろう。

しかし、問題点も簡単。体力が持つか否かと、一度でも判断を誤れば文字通り針山に成り果てるという事。芽吹やシズクならば避け続けることも可能だろうが、他の防人や雀は不可能に近い。

もう一つは護盾部隊の盾で防御を固めることだ。これが一番簡単で、安定の策だろう。

護盾部隊の盾は本来、サジタリウスの太い矢を盾だけならば、十数回は余裕で耐える程の硬度を誇る。故に細い矢の連射ならば長時間に亘って耐え忍ぶ事も現実的だ。

敢えてデメリットを上げるとしたら、移動が不可能という点だ。御魂を持たずバーテックスではないサジタリウスとはいえ、星屑とは比べ物にならないほどの攻撃力だ。防ぎながら歩く、なんて真似は殆ど不可能だ。

「くっッ!!し、死ぬうううう!!」

「うぐえ!!」

雀は大袈裟に横転し、唯斗を巻き込みながら盾だけは上に掲げて大量の星屑がいる方向に向かう。

直後、腕ほどの大きさの矢が嵐の様に降り注ぎ灼熱の地面を削る。雀は大きな盾の顎を地面に叩き付け、自分と唯斗を包み込むよう急斜に構える。

盾は淡く発光して、精霊のバリアにも似た薄い芽吹色の壁を築く。盾と矢の雨は疝高い金属音を打ち鳴らし、鼓膜を限界まで刺激し続ける。

周辺に屯う星屑はサジタリウスの攻撃に巻き込まれ、其の身を容易く散らした。極小範囲——雀と唯斗だけを狙って放たれた攻撃は本来ならば星屑には届かなかった。

しかし雀が唯斗ごと倒れ込み、サジタリウスの攻撃を誘導したことによって数ある星屑の群れの内の幾つかを崩壊させた。

「ヤツガシラ
戴勝…最高だな！」

「ひいひいひい!!重い辛い酷い死ぬうう!!ユイエもんどうにかしてよ?!スズ太を助けてよおお!!」

「えっ、無理。せめて攻撃が止むまで待つてよ。ひみつ道具大小様々の石でどーに出来たら人間卒業してるわ。臥して耐えよ」

「このジャイアンめえええええツツ!!」

盾に護られている唯斗と雀以外の周辺はサジタリウスの矢が絶えず降り刺さり、煉獄の溶岩に溶けて沈む。唯斗達が死すれば恐らく、同じように灼熱に飲まれ、死体の欠片すら残らないだろう。

そんな中で防人が行動できるのは一重に、防人が唯一『勇者』よりも優れている《耐久性》があるからだ。精霊によるバリアが無い防人が”外”で活動するには必然的に、素の耐久性を高めるしかなかった。

「——そろそろか?雀はどう思う?」

「知らないし分かんないよ!?!…………た、多分…そろそろ太い矢に切り替えてくる気がする…ツ!」

「オーケー、葦切ヨシギリの生存本能に従うね。もうっ、死んだら雀のせいなんだからねっ／／／」

「ツンデレを偽った理不尽!?!」

「冗談だよ、BLACKなJOKE。ちよつとばかり深淵の如く深く漆黒よりもドス黒い怨恨を込めて毎夜毎夜に夢枕に立って『お前のせいだ〜!お前のせいだ〜!!』って叫び続けるだけだっ♡きやつ／／／」

「酷い?」

その直後、雀の生存本能が予期した通り矢の雨は止む。次いで響くは力を貯めるようなギギギと鳴る異音。即ち——太い矢の放たれる前兆だ。

「ひええええ!先生!お願いします!!バチンと弾いちやっってください!!」

「随分と調子の良い小雀だなア!自己保身魔人の土居ちゃんもビツクり慄き腹八分目だよ!!」

唯斗は雀の盾を飛び越え、両手を握り締めて籠手拳大の石を出現させる。腰を落とし、透明のゴーグルを通して見詰めるのはサジタリウスから放たれる間近の矢だ。

——そして気が付く。

「……雀。あの矢……なんか回転してない？」

「……してるね。……えっ、もしかして逸らせないの!？」

「ど、努力はします。いやー、樹の死神ワイヤー素材の槍を思い出すな——」

「何言ってるのか分からないけど、どうするの!?!あんなの盾でも防げないからね!？」

矢はサジタリウス自身が摩擦熱で煙を上げるほどの回転を始め、その威力を物語る。先程と同様に逸らして弾くことも、雀の盾で防ぐことも叶わない。

(……使うか……?……いや)

「——劣化版射手座は劣化版防人で相手してやるよ。真価発揮!搦手上等!魅せてやるよ」

——矢は間もなく放たれる。

「雀!俺を打ち上げろツ!!」

「ふえっ?!わっ!ちよっ?!ユイのコンニャロオオオオ!!」

唯斗は雀の盾に飛び乗り、雀はそれを防人と成ったことで上昇した筋力にものを言わせて打ち上げる。釣られてサジタリウスの矛先も斜め下の唯斗に向けられ、その回転も最高潮に達する。

「——さあ、来いよ」

唯斗は平たい石を何重にも重ねて出現させ、空中に放つ。

——空を舞う唯斗に向けられた矢はサジタリウスの身体をも削りながら轟音と共に放たれた。

(速い……見えねえ——だから)

紫電の如き矢は瞬きをした瞬間には目の前に迫っているだろう。ほぼ弾速で放たれた其れを肉眼で確認し、対処するなど不可能だ。

故に——唯斗は勘に任せて動くだけ。遅れたら死ぬ。早くても死

ぬ。然し唯斗は圧倒的に不利な状況を既に経験している。

レオ・スターククラスターやその御魂、身を太陽のような炎に包んだ獅子座。

今もまだ、戻らない過去の『郡唯斗』も何度も死線をくぐり抜けてきた。

満開を遂げた『勇者』でさえ死の危険に晒されるような敵もいる。それに比べたら――

「雑魚だなあ。テメエも、俺も――ツツ!!」

宙に放った数個の平たい石を重ねるように、纏めて蹴り上げる。足の負傷さえ厭わない、システムによって甚大に強化された筋力で放たれる月面宙返り蹴り。そのタイミングは可視出来ない矢が眼前に迫るとほぼ同時だ。

一瞬のうちに重ねた石は矢の回転によって削れてしまい、その勢いもまた唯斗の腰から脚にかけての骨を撓らせても尚、前に進み続ける。

「ぶっ………飛べやああああ!!」

一秒にも満たない、長い拮抗の末――

砂煙のように細かく削られた石を舞わせながら、矢は真上に蹴り上げられる。

「ゆ、ユイいいい!」

身体が地面に向かって自由落下を始める。十数メートルの高度も、防人ならば死なないだろう。自身の攻撃の反動により甚大なダメージを受けているサジタリウスを視界に収めながら、唯斗は石の破片とと共に落ちた。

達成感か、疲れか。成し遂げた後の身体は受身を取ることも叶わない。目を瞑り衝撃を覚悟すると――

「くぎゅっ……くっ!!」

潰れた鳥類のような声が柔かい地面から聞こえた。

「……ありや、雀か?」

「す、雀でしゅ…潰れてる雀なんです…!」

「あらまあ…態々下敷きにならなくても、防人だから死なないのに」

「だ、だって…ユイは私…私達を護ってくれたんだし…わ、私だって…少しはユイを助きたいもん!」

「……………」

——『助けたい』

その言葉を聞いて、思い出したのは勇者部の面々の顔だった。何処か懐かしくて、安心出来る言葉だ。防人を護るために派遣されてきた唯斗だが、その実は唯斗も助けられ続けていた。

芽吹や夕海子、しずくとシズクは容易く使う言葉だ。でも、誰よりも弱くて気弱な加賀城雀が、『助ける』と言った。

「……………ありがとな、雀」

「な、なんか調子狂うよ…いつもみたいに茶化して、ボケてる方がユイっぽいよ。…………たぶん」

「遠回しに告られてる?…しようがないなあ、大親友から初めてあげるよ」

「いや告ってないから!!しかも何で割と脈アリなのさ!?!普通は友達からじゃないの!?!」

「おい山原水鶏、巫山戯てないで今のうちに芽吹達と合流しようぜ? あちらさんも丁度、逃げ道を確保したらしいよ」

「だから雀だよ!!あー、もうっ!…だったら早く背中に乗って!…足、怪我してるんでしょ!!」

「…………ええ…なんで気付いてんの?…怖っ」

「……ツツ!!早く行くよ!!」

若干引く唯斗を無理やり背負い、雀は芽吹達のいる方向へと走り出した。

「——っ—カーれーたー!」

唯斗は自室のカーペットに大の字になり、溶けるようにダラける。

一応は同室扱いの女性神官も今は仕事で部屋に居ない。

残された唯斗はやっと生活感の出てきた部屋で、のんびりとイカの

姿フライを頬張る。

唯斗がサジタリウスの攻撃を防いだ後、順調に星屑を撃退した芽吹達が築いた逃げ道によって無事に帰還できた。サジタリウスも自身の攻撃によって半壊した上の口では攻撃も放てず、逃避も容易く行えた。

今回の壁外調査にて、怪我人はほぼ無し。唯一、唯斗が多少足を痛めたのだが、それも冷やして数日安静にしておけば問題ない程度だ。

——コンコン

「ん…？」

ドアがノックされ、返事をする間もなく開かれる。入ってきたのはパジャマの代わりにジャージを着込んだ楠芽吹だった。

「芽吹か。どーした？」

「怪我、大丈夫かなって思ってた」

「モーマンタイ。別に折れてるわけじゃないし、普通に歩けたりもするからね。実質無傷」

唯斗の軽口を呆れて受け流す芽吹。雀やツツコミ型勇者の様に一言一句全てにツツコミを入れる芸当は、芽吹には不可能なのだと言わざるを得ない。

唯斗と向かう合い、座った芽吹は申し訳なさそうに頭を下げる。

「……ごめんなさい。今回の結の怪我は、私の判断ミスによる結果よ。…元々、その役目は私が負わなければいけないのに…」

「いや、指揮官が居残り戦闘したら駄目だろ」

「私が全体の指揮をしてるだけで、指揮官自体は別にもいるわ」

「それは個々の部隊のдар。芽吹が指揮官なのは、単に戦力的な意味で優れてるだけじゃなくて、指揮面においても防人でトップだからだよ。てか責務を放棄すんなし」

事実として、楠芽吹は指揮も戦闘も防人の中ではトップだ。故に『防人』という名の集団を最も活かせるのは芽吹だ。

芽吹が集団から離れるだけで党力は低下し、逆に芽吹がいるだけで防人達は安心感を持って戦える。

善くも悪くも、『防人』は楠芽吹によって強くも弱くもなる。だからこそ、防人は五回の壁外調査で一度も死者を出していない。

「…それでも、よ。新人である結に怪我をさせたのは私のせいでもある」

「なーにが新人だよ。現場経験なら芽吹達よりもあるって神官さんも言ってただろ？」

「別に理由なんてなんでもいい。貴女が怪我をして、私は全責任を負うリーダーだった。だから…」

「あー！うるさい!!じゃあ許してやるから、もう謝るな！なんか、こう…ムズムズするんだよ！」

「え、ええ……後は、じゃあ…ありがとう。結のおかげで今回も無事に終えることが出来たわ」

芽吹はそれだけを告げると、部屋を後にした。残された唯斗は複雑な気持ちに眉を歪めて、再度大の字でカーペットの上に寝転んだ。

嘗てと今の再会

「おーい、唯斗くん？どーこー？」

友奈の声かのどかな町に響く。

郡唯斗が讚州中学校から姿を消して、既に一週間が経つ。未だに誰にも連絡は無く、逆に連絡しても返事は返ってこない。

家にも帰ってこない現状に違和感を抱いた勇者部は、依頼のない空いた時間を利用して唯斗の搜索をする事にした。

然し結果は虚しくも空振り続いだ。手始めに園子が唯斗の両親への接触を試みたが、知らぬ存ぜぬと白を切られる。続けても望み薄と割り切った園子は早々に止め、次の手を考えている最中だ。

東郷美森は唯斗のスマートフォンにアクセスして位置情報を探ろうとしたが、電源が落とされていたのでまたもや空振り。

遂には樹の占いに頼ることになったが、『空に近い所で女装しながら小鳥を愛でる』という意味不明な結果が出たので実質的には空振りだったと皆は判断。

夏凜や風、銀は町中のイカの姿フライが売ってる店を周り、聞き込みをしたがここ数日は唯斗の姿を見ていないと言われる始末。

最近は無表情でイカの姿フライを買い占めるメガネの青年がいるらしいが、恐らく唯斗とは無関係だろうと三人は結論付けた。

「うーん、やっぱり見つからないなあ…」

友奈は町を愚直に走り回って探しているが、やはり見つからない。道中の河原でリュックサックに大量に石を詰めている青年が居たが、その他には特に変わりない町だ。

無論、担任の教員に転校先を聞いてはみたものの、分からないと言われた。故に勇者部は完全に唯斗への手掛かりを失った現状だ。

「……部室に戻ろうかな」

寒くなるにつれて、日が沈むのも早くなった。肌寒さに肩をブルリと震わせながら、友奈は学校の部室を目指して駆け出した。

——同時刻。

唯斗はベッドに座り、物理的に自分と向かい合っていた。

「……やっべ、これ変身しなくても出来たのかよ……」

唯斗の『勇者』としての能力の一つ——『分身』。文字通り自分の分身体を具現化させ、動かす能力だ。唯斗の取れる戦法とも相性が良く、重宝していた力だった。

自分と同じようにベッドに胡座座りして、ご丁寧に女装姿のまま増えた唯斗E。余談だが、唯斗A～Dはこれまでの厳しい戦いで消えてしまった。内二体は巫山戯た代償として風と夏凜に殺されたのも、今となつては良い思い出だ。

「……んー、『分身』が防人状態でも使えるなら……めっちゃ便利だな。……でもなあ、流石に疑われるか？石だけでも割と戦えたし、盛りすぎるのも考えものだしなー」

防人の彼女達に唯斗の正体を知られる訳にはいかない。防人にどの程度『勇者』の情報があるのかは不明だが、何も考えずに能力を公にするのは憚られる。

と言つても、防人である限りは使える力を出し惜しみするもの得策とは言えない。

先日も経験した通り、防人は命懸けだ。一步どころか一瞬の判断ミスでも容易く命が散ってしまう世界なのだ。故に盾や身代わり、その他にも生き残るための手段を増やすという考えの元では『分身』は都合の良い手札だ。

唯斗は自分自身でも自称するように、『勇者』らしから自己保身が在る。故に、死ぬのに比べたら使える手札は使いたい所存だ。

——結局、『勇者』でなくとも『分身』が使えるのであれば、やはり使うしかないだろう。

「よしっ、土居ちゃんは忍者の末裔だつてことにしよう！万事解決だな♪」

残念ながら、唯斗はアホだった。更に言えば面倒事を纏めて樂觀視して、己を客観視出来ないタイプのアホだった。

然し勇者や巫女、神と精霊まで存在する世の中だ。それを理由にすれば、忍者の存在だって多少は説得力を持つだろう。寧ろスピリチュアル的な存在ではないだけに現実味すら帯びるといふものだ。もつとも、非常に残念ながら唯斗はそこまで考えているのかと聞かれれば否と答えるしかないのだが。

——コンコン

「結ちゃん、居るかな?」

ノック音と共に柔らかい声が聞こえる。

おそらく国土亜耶だ。既に夕暮れ時なので、彼女が巫女としてやるべき事はやり終えた後なのだろう。毎日とは言わずとも、彼女がこの時間帯に部屋を訪れることは珍しくない。

「居るよー。開いてるからドーズ」

「失礼します。…結ちゃん、脚の様子は………えっ、えええええ!? ユイトくんが二人いる!?!」

「ありや、亜耶だ。どう? 忍者の分身術だぜ?」

『分身』によって二人に増えた唯斗を見て、亜耶は慄いた。鏡か、若しくはドツペルゲンガーか。一瞬にして亜耶の脳はキャパオーバーを起こしてしまった。

「ぶ、ぶんしん…? にんじや…?」

「たった今から、土居ちゃんは忍者の末裔になったのさ!」

「す、すごい! ユイトくんは忍者さんだったんだね!!」

「いえーす。あいあーむ、ジャパニーズNINJA!」

亜耶は観光に来た外国人のように”ジャパニーズNINJA”に目を輝かせる。

これが某鳥類や某煮干狂ならば盛大で爽快なツツコミで殴り掛かってくるところだが、相手は純粹無垢な国土亜耶だ。疑うことを知らないのだろう。

唯斗は枕の下からイカの姿フライを取り出してから、特に出しておく必要も無い『分身』を解除する。

「んで? 亜耶ちゃんは何をしに来たんだい?」

「あ、そうだった！怪我の様子を見に来たの。大事は無いつて聞いてはいたけど、やっぱり心配で…」

「ありや。そりやまた御心配をお掛けしました。ご覧の通り、元氣やる氣の土居ちゃんだよ」

「よかった…初戦で怪我してくるし、とつても心配したんだよ?」

「にやはは…返す言葉もねえツス。いきなり射手座とマツチングからのペット^鳥連れランデブーなんて何方様が想像できるんよ?」

防人が相手取るのは基本的には星屑のみであり、進化体やバーテックスは出会う事自体が死に直結すると言つても過言では無い。

それだけ進化体との戦闘は稀有な事であり、唯斗や雀が殆ど無傷で生還したのは誇るべきことなのだ。

「…ユイトくん、今回は使わなかつたんだね」

『『勇者システム』のこと?…んー、まあ。初戦から使つてたら先が思いやられるし、知り合いの腹黒神官曰く…』外”で『勇者』の力を使うと面倒事になる可能性があるらしいからなあ」

「それでも、私はユイトくんとか芽吹先輩が危険な目に遭うのは嫌だよ…多分、これは巫女としては言つたらダメなんだけどね…本当はこんな御役目、して欲しくないな…」

亜耶は表情を曇らせる。巫女として、亜耶は名誉ある御役目に駆り出された防人達を喜んで送り出さなければいけない立場だ。

然しその名誉も、命を脅かされてまで得たいものなのかと疑問がある。亜耶自身ならいざ知らず、本当に大切な人達が危険な目に遭うのを、どうして喜べようものか。

結局、これも巫女の亜耶ではなくただの亜耶の意見に過ぎない。自分自身を騙しきれない、未熟な国土亜耶の本音だ。

「同感だな。外ではイカの姿フライも焼けちゃうし、自宅に引きこもりたいなー。置いてきた園子も氣になるし」

「……そっか。ユイトくんには、私の知らないお友達もいるんだよね」
「今度紹介してやるよ。変人と狂人しかいないけど……まあ、悪い奴らじゃないのは保証するぜい?…盗撮魔と物理的女子力、煮干狂いに天然アホ奈。雌豚ちゃんもいるし、マトモなのは樹と銀だけなんだよ

なあ…」

「うんっ、私もユイトくんがお世話になってますって言わないとだね！」

「じゃあ俺は防人組に亜耶がお世話になってますって言って周らないとだなー。菓子折りもついでに布教しようー！」

「は、恥ずかしいからやめてよー！」

恥ずかしがる亜耶を揶揄いながら、唯斗はカーペット下の隠し収納スペースから洒落た箱に詰められた菓子折り用イカの姿フライを取り出した。

「——考えても見れば、もう勇者部に入れられてから一年半か…」

「入れられて…？ユイトくん、勇者部…だっけ？それに入部したのって自分からじゃないんだね」

「そーなんよね。んー、どうせ暇だし…ちよつとだけ思い出話でも聞くかい？」

「うんっ、私が知らないユイトくんの事、もつと知りたいな」

「んじゃ、話しましよか。アレは確か…」

「そのアナタ、勇者に興味はないかしら？」

怪しい悪徳勧誘の様に肩を叩かれたのも、既に一年半以上も前の出来事だ。

郡唯斗が中学に進学してから一週間。今は部活動体験の期間中であり、放課後に好きな部を周るようにと担任の教師から言われていた。

唯斗も他の生徒と例外無く、放課後は適当に校内を散歩しながら目に付いた部活を覗き見ていた。

そこに突如、声を掛ける先輩生徒が一人。

「……ん、なんスか…？」

「勧誘よ！どう？今なら最強女子力のアタシが部長として、アナタを迎え入れるわ」

唯斗が振り返ると、明るい茶髪が特徴的な少女がドーンと効果音を奏でながら堂々と仁王立つ。

「あー、サーセン。僕……じゃなくて私？オレ？……俺でいいや。俺は端艇部か雅楽部、若しくは烏賊イカの姿フライノ姿揚部に入る予定なんで」

「讃州中学にそんな部活はないわよ！」

「……………は？…えっと、すみませんパイセン。ちよつと校長室に殴り込んできます。家庭科室つてドコでしたっけ？」

「やめなさい!?包丁を持って校長室に殴り込むはやめなさい!!」

「チツ……………いてっ、な…殴りやがった…」

所望の部活動が見つからなかった唯斗はイジけて舌打ちをする。先輩の生徒は想像以上の問題児である唯斗を物理的女子力で窘めた。

「さて、じゃあ早速！私達の『勇者部』に行きましょうか！」

「いや、なんでやねん。俺、まだ入部するだなんて言っておらへんわ。つーか、『勇者部』つてなんやねん」

「あつ、入部届けはもう出しておいたわ。これからヨロシクね、郡唯斗くん？あ、ちなみにアタシは犬吠埼風。尊敬と親しみを込めて風先輩と呼びなさいな」

「はっ!?か、勝手に入部届け出したんすか!？」

「そーゆーことよ。さあ、唯斗は記念すべき四人目の部員よ。喜びなさい」

「四つて…縁起悪い…!」

渋って帰ろうとする唯斗を女子力的腕力で絞め、犬吠埼風は唯斗を引き摺り家庭準備室こと勇者部の部室に向かった。

「友奈、東郷！我が部に新入部員が来たわよー!!」

不貞腐れる唯斗を無理矢理引き連れ、風は部室のドアを開いた。室内では赤い髪色の少女と、その傍らでカタカタとパソコンを操作する濡羽色の髪の少女が談笑していた。

「あつ、風先輩こんにちはー！新入部員つて…?」

「…違う。新入部員じゃない…!」

「あら、同学級の郡唯斗君ね。なんだか意外ね……あれ？私…どうし

て意外って思ったのかしら？……いえ、なんでもないわ。郡君、これから宜しくね」

「だから新入部員じゃない…!!」

「友奈、この問題児に勇者部の説明をしてあげて。東郷は任せていたホームページの件、どうかしら」

「……帰りたい」

こうして、郡唯斗は殆ど無理やり勇者部に入部させられた。その実は大赦からの指令で『勇者』の適正のある者達を集めていた故の事だったのだが、それを知るのはまだまだ先のことだ。

「——それからは無賃労働の地獄だったなあ」

「えっと、大変だったんだね。…でも、その巡り合わせで今に至ってるのだから、自分勝手かもしれないけど…私は、それで良かったなあって思っちゃったな」

亜耶は両手を合わせ、嬉しそうに微笑む。

郡唯斗が勇者部に入部せず『勇者』に成らなかつたら、今この場で『防人』として参戦し、亜耶と再会することは無かつたかもしれない。

大切な彼が何度も命の危機に晒されているのは驚いたし、それを見知らずに平穏な暮らしをしていた自分が恥ずかしくなる。然し良くも悪くも、その御役目のおかげでまた逢えたのだから亜耶も複雑な心境だ。

「最初はちよつとだけ無理やりだったかもしれないけど、ユイトくん、今は勇者部の皆さんのことを大切に思ってるんだよね？」

「……さあ？どーなんだろうーな」

「だってユイトくん、勇者部のことを話するとき…とつても優しい表情だもの。ちよつとだけ、羨ましいなあ…：…なんちゃって」

「ふつ、あていしの慈愛心が伝わってしまったかね？いやー、意図せず醸し出させるモノなんだよなあー」

「もうっ、やっぱりユイトくんは天邪鬼さんだよー」

少なくとも、『勇者部』は唯斗の居場所だ。例え無理強いされた部活動だったとしても、記憶を失いからっぽだった唯斗には次第に居心地

の良い空間になっていた。

一時は退部したいと願ってはいたが、それも唯斗自身が徐々に勇者部に依存していると気が付いていたからだ。

強く依存するだけ、離す時に辛くなる。一度、全てを失った唯斗にとってはいずれ耐え難い苦痛となるのは大分前から分かりきっていた。

「大切、なのかな…」

その『依存』が良いものか否か、今の唯斗にはまだ解らない。

次の任務

白い丸テーブル。

白いチェア。

白い陶器のティーポットとカップ。

吹く風は季節相応に冷たく、青い空には何重にも重ねられた雲が点々と浮かぶ。羽織る上着も必然的に分厚くなる季節であり、アンダーウェアにジャージだけでは物足りない。

そんな季節でも弥勒由美子はゴールドタワーに近接する臨海公園で、似非優雅に昼食後のティータイムを楽しんでいた。

「海を眺めながらの優雅なティータイム……弥勒家の末席に連なるわたくしには相応しいですわ。結さんもそう思いませんか？」

「うみゆ、お嬢はギャグ漫画的な意味で絵になるな。やる事から成す事まで、一貫してポンコツ似非なお嬢だから憧れちまうぜ」

夕海子と向かい合って座る唯斗は湯呑みに注がれた昆布茶を飲み、多量のイカの姿フライを微笑みながら頬張る。

茶会モドキに参加している唯斗だが、その実は雀と散歩をしている途中に面白い光景を見付けたのでなし崩し的に加わったに過ぎない。

傍らでイカの姿フライを齧らせられている雀は冷めた目で弥勒夕海子を見下げていた。

「ふふっ、お褒めに預かりますわ。ありがとうございます」

「弥勒さん、最後の『憧れちまうぜ』しか聞いてないでしょ。その前までは心底バカにされてるからね。私でも引くくらいバカにされてるからね」

「嗚呼……緑啄木鳥アオゲラが鳴いてますワ、お嬢。きつと、あていくし達の優雅なティータイムにつられて寄ってきたんデスわ」

「ええ……きつと、そうですね。高貴な身分たる者、矮小な小雀にも優しく寛大に接してこそ……さあ、いらっしやいませ？クツキーを分けてあげましてよっ」

「ワー、ウレシイナー」

鳥類は手羽先で手渡されたクッキーを摘み、苦い顔付きで啄んだ。「所で弥勒さん、その椅子と机：私物だよな？まさか自分でここに運んだの？」

「そうでしたよ？」

「ぶつ…！じ、自称高貴な御身分が？自分で？あはははっ！ひ、必死すぎて笑いが…お腹が振れる…！」

「えーい！うるさいですわよ雀さん！」

「そうだよ金糸雀カナリア。これがお嬢クオリテイなんでシテヨ！滑稽デスわネ!!」

お嬢様を気取る弥勒夕海子だが、その家名は決して有名な名家とは言い難い現状だ。確かに歴史はあり、嘗ては少なくない功績もあった家柄だ。然し現状では——否、もつと昔から弥勒家は没落していたと言つても過言では無い。

彼女は弥勒家再興のために想像内の『お嬢様』を猛烈に体现し、その結果、ポンコツ気味になってしまったのだ。

「ユイは取って付けたようなお嬢様言葉は止めなよ。馬子に衣装どころか、公園のベンチに満漢全席を並べてるくらい違和感あるからさ…：…あと、どうしてだろう。カナリアに関しては割と惜しい気がする。あと一歩的なの？」

「雀鶺鴒さん、喧ヨしいですよ」

「ブーメランって知ってる？」

ギャーギャーと騒ぎ立てる三人。

其れを雀以上に冷めた視線で眺めるのは三人を呼びに来た芽吹だった。

「三人共、すぐにゴールドタワーの展望台に集まってちょうだい。招集が掛かってるわ」

会話を切断して、有無を言わず割り込むのは楠芽吹のコミュニケーション能力に難があるからだろう。

事実、彼女には防人以外の友人は皆無だ。ストイックに生き、他者

との交流よりも自身を高めることに時間を費やしてきた弊害とも言える。

「あつ、メブく！この天然阿呆二人をどうにかしてよく!!」

「あら、芽吹さんではありませんか。急に招集とは…何事でした?」

「防人全員が集まってから話すようです。兎に角、急ぎましょう」

「そーだ、そーだ!!貴君等は急ぎたまえデスわ」

「いやユイもだからね?なに他人事みたいにしてんのさ!早く向かわないとメブに怒られるよ!!」

即座に立ち上がり椅子やテーブルを片付けようとする夕海子とは対照的に、唯斗は椅子に深く腰をかけて昆布茶を啜る。急ぐどころか、そもそも向かう気すら無いように見えても仕方がないだろう。

騒ぎ立てる雀を尻目にして、唯斗は擲擧うように頬を釣り上げた。

「ん?土居ちゃんはまだ展望台に居るけど」

「…:は?ユイ、遂にボケた?いや、ユイがボケてるのは元々だけど…介護なんてしてあげないからね」

「H A H A H A、プエルトリコヒメエメラルドハチドリちゃん。次の壁外調査でもタツグ組もうね♪——んじゃ、これにてドロソツ」

「ちよつ、実質的殺人予告ツ!…:って消えた!?!弥勒さん、ユイが消えたよ!?!」

満面の笑みで雀に爆弾発言を投げつけると、郡唯斗は空中に溶けるようにして消えた。それは唯斗の『分身』であり、消えたのは分身体が解除されたからだ。

唯斗の本体は今、唯斗の発言通りゴールドタワーの展望台に居るのだろう。

「消えたって…:当たり前でしょう?ユイさんは忍者の末裔なんですから」

「何その取ってつけたような設定!?!いや、おかしいでしょ?メブもそう思うよね!」

「雀…:神や勇者が存在する世の中よ。忍者の一人や二人、侍や妖怪もいたって可笑しくは無いでしょう?…:今度、忍術を教わるかな」

「ダメだ…:メブも毒されてる!?!」

唯斗や夕海子は天然と称されるが、芽吹もそれに負けず劣らずの天然だ。真面目な故に、変なところで愚直なのだ。

雀は釈然とし無さに唸りながら、一人でテーブルや椅子を片付ける夕海子を見捨ててゴールデンに向かって走り出した。

「本日までの結界外の調査任務、大変ご苦勞様でした。あなた達の努力のおかげで、壁の外の大地と燃え盛る炎に関する調査は終了しました」

三十三人の防人が揃った後、仮面をつけた女性神官は姿を現し淡々と話し始めた。

語る彼女の声質は低く冷たく、まるでそう在るべきなのだと自身身を戒めている様に感じられる。労いの言葉だが、感受性の高い者には酷く寂しく聞こえることだろう。

「防人の任務は、調査から次の段階へと進みます」
(……国造りの儀式か)

防人野中で唯一、唯斗だけは先に春信から説明を受けていた。防人の二つ目の御役目——『国造りの儀式』について。無論、概要だけで詳しくは聞いていない。

少なくとも、春信が防人の御役目が長引くと判断したのは防人が国造りの御役目を担うからだろう。

女性神官は相変わらずの説明口調のまま、プラスチックのシャーレを防人達に見せた。シャーレの中には一粒の種が入っている。其の種はぼんやりと発光し、神秘的な雰囲気帯びていた。

「これを壁の外の土壌に埋めてきてください。その後、巫女が祝詞のりとを唱えます。この種は巫女の祝詞による呼び掛けに反応し、壁の外でも発芽して植物として成長する……想定通りに行けば、種を植えた箇所に緑が戻るでしょう」

「み、巫女が祝詞のりとを……って、まさかあややを壁の外に出すの!？」
雀が声を上げる。

神官の言う任務を行うには、巫女である亜耶が芽吹や唯斗達『防人』

に同行して壁外に出て、星屑の蠢く危険地帯に身を晒す事になる。

防人とは違い、一切の戦闘能力を持たない亜耶が外に出るのは、防人よりも余っ程危険だ。敵対生物の最下層に位置する星屑でさえ、亜耶にとっては素手で猛獣を相手取る方がマシと思える程の危険なのだ。

当然、雀だけでなく防人の皆は反対だと視線で語り神官を睨み付ける。

「……そうです。巫女である国土さんがタワーに居るのは、この任務を想定していたからでもあります」

冷淡な肯定。

防人を代表して、芽吹は思わず反対の声を上げた。

「待ってください。彼女を壁の外に出すのは危険すぎます……！そもそも結界外の灼熱に、巫女では耐えきれないでしょう！」

「心配無用です。あなた達の戦衣いくじぎぬと同様、巫女専用の装備が用意されます」

「ですが、星屑とバーテックスは……!？」

「あなた達防人が、巫女を守れば良いのです。その為に援軍である土居結さんが加わったのです」

「っ！……幾ら彼女が強くとも、防人では限界があります……！」

「……ええ、だから土居結さんなのです」

「……それは、どういう——」

「前にも言いましたね。詮索は禁じます、と」

未だ、芽吹は土居結の正体を知らない。防人でなければ『勇者』なのでは、という問いは一番先に浮かんだ。然し讚州中学に通う『勇者』達に直接会ったことのある雀の情報では、土居結という名の勇者は存在しない。

勇者は五人の少女と一人の少年によって構成されている。雀が会ったのはその五人の少女だけだったらしいが、やはり土居結というインパクトの強い存在は雀の記憶には無いようだ。

防人の誰よりも戦闘経験があり、何より彼女の苗字である『土居』は大赦を構成する五つの名家——土居家と同じだ。

防人は『勇者』の適性を持ちながら、然し選ばれなかった少女達だ。土居である彼女もまた、土居家とは決して無関係とは言えないだろう。

「楠さん、あなたには期待しています。国土さんを宜しくお願いします」

「……………」

神官の言葉には感情が込められていない——否、態とそう演じているように、芽吹には感じられた。

「種を植える………今後は壁の外の大地に、植物を復活させていくつもりなのでですか？」

夕海子の問いに、神官は変わらずの口調で返す。

「いいえ、細かくやっていては時間が幾らあっても足りませんし、種もそれほど多くはありません。植物を植えた場所を通路——所謂『橋頭堡』として、ある場所を目指します」

「何処ですか？」

「遠い昔、西暦の時代に『近畿地方』と呼ばれていた場所です。近畿地方に辿り着き、陣地を築くこと。そこまでが貴女達の任務です」

ならば、その先は誰の御役目になるのだろうか。どうせ返ってこない質問を、唯斗は胸の中に収めた。きつと『勇者』なのだろう。

自分達では無い、後輩達がまた選ばれるのだろうか。もしかしたら大赦所属の三好夏凜や、ここまで浸かりきった自分はまた『勇者』に選ばれるかもしれない。

そんな予感を抱きながら、激励と言うには程遠い結びをした神官の去る背をぼんやりと眺めていた。

「結、ちよつといいかしら」

「ふっ、おりゃー……ん？どしたの、芽吹」

午後の訓練。芽吹は荒れる心を無理やり押し込めて、イカの姿フライを齧りながら雀とシズクに石を投げる唯斗に声を掛けた。

「結は忍者の末裔って聞いたわ」

「うん、せやねー。あつ、シズクと木葉木菟コノハズク！土居ちゃんはちよつと

抜けるねー!!」

唯斗は石を投げる手を止め、真面目な雰囲気を醸し出す芽吹に顔を向ける。

「だから忍術を指導して欲しいの。…今の私では、力不足よ。次の任務までに防人達を激的に強くすることも、不可能。だから…せめて、使える手段を増やしたいの」

「……………あー、うん。とっても申し訳ないんだけどね、土居ちゃんに出来るのは投擲術と分身だけよ? 投擲術は芽吹に不要だし、分身は……まあ、秘術つてことで」

唯斗の『分身』は忍術ではなく能力だ。故に指導は出来ないし、唯斗自身のその方法は解らない。

「……………私なりに、考察して試してみたの」
「はい?」

芽吹は軽やかに数回ジャンプし、そのままリズム良く反復横跳びを始める。一定のスピードよりもやや遅く、然し緩急だけは誇張する。

——タンタンタンタン。

一定のリズムは、徐々に遅くなり——次の瞬間には一瞬だけ芽吹が増えた。

「えっ……………?」

「——ふう、これが今の私の限界。道教神話に登場する仙術の一つ:『縮地』、だったかしら。其れを応用して、相手が反復横跳びのリズムを無意識に捉えた瞬間に『縮地』で超高速移動。たった一瞬だけど、『残像』を残すことに成功した……………けど、本当に…これが限界」

「えっと、バグノキ芽吹さん? 既に人間技の限界を超えてるってご自覚はある?」

「これでも『分身』には及ばない……………私もまだまだだね」

「いや、充分だからね? むしろリアルで『縮地』とか『残像』つて聞いたの初めてだからね? ……ごめん、芽吹。ちよつと自分の鍛錬に集中するわ」

助っ人と呼ばれた以上、唯斗は強く在らなければいけない。故に——郡唯斗は本格的に鍛錬を始めることにした。

「ぎーて、目指すは『変わり身の術』ってところかなー。本当に忍者になつてやるよ、コンニャロー！」



少年は果たして『勇者』なのか。

揺蕩う疑問は果ての『愚者』を暗示する。

全てを理解し、悟り、道を見付けた少年は、果たして本当に『勇者』なのだろうか。

少年の本質は決して『勇者』足り得ない。

ならば、玩具を手に戦場で暴れる悪童たる彼は何者か。決して正義を掲げず退屈な平常を望む少年は、どのように成長して何を成すのか。

やはり空間を揺蕩い続ける疑問の果ては『愚者^{フル}』だ。賢き愚か者は誰よりも有識なる無知だった。故に唯一の少年、彼が担うのは――

小学生勇者く鍛錬と成長く

「あの戦い方はなんですか……！」

放課後の教室で、担任且つ勇者の目付け役である安芸は憤りを口に
する。対するは様々な箇所には絆創膏や包帯を巻いた今代の『勇者』達。
不機嫌に眉を歪める少年と、叱られて落ち込む少女達だ。

安芸の持つ携帯端末に映るのは樹海での二度目の戦闘だ。その内
容を端的に換言すれば、『力押し』や『脳筋』としか表しようがない。
「ゴリ押しにも程があるでしょう……このままでは、あなた達の命
が幾つあっても足りないわ」

「は、はい……」

「……………」

「御役目に成功して、現実への被害も軽微なもので済んだのは良く
やってくれたのだけれども……」

安芸にとつて、傷の絶えない教え子がまた傷付くのは心が痛む。現
実が平和だから『勇者』が傷付いても良い、とは到底思えない。

その善性こそ『勇者』の目付け役に選ばれた所以であり、同時に優
しい厳しさを合わせ持つのが彼女の天性故の素質なのだろう。

「ふう……あなた達の弱点は、連携の演習不足ね」

「……ツスね……」

「郡君、先生に対して態度が悪いわよ！」

「……はあ？……スー、うつさい……」

「なっ、何よその言い方！」

「郡君に鷺尾さん、本当にそういうところよ。あなた達に関しては連
携以前にまず仲良くしなさい」

「……………」

郡唯斗と鷺尾須美は相性が悪い。真面目で愚直な須美と、普段は寡
黙で面倒臭がり屋の唯斗。当然、相入れる訳もなく何度も衝突してい
る現状だ。

須美は初戦での失敗により自分自身を深く見つめ直して、その欠点

も理解した。何事に関してもまず『自分が』という傲慢な思考と、それに見合わない浅はかな理念。

だからこそ祝勝会と名付けた反省会では自身の弱みを打ち明け、園子や銀に歩み寄った。

然し郡唯斗だけは彼女を拒絶して、その内面弱みを決して表に出そうとはしない。

だから、やはり須美には唯斗に対する苦手意識が残っているのだろう。しかし優等生体質の須美は無理やり歩み寄り続けて、その結果がこれだった。

険悪な雰囲気を感じ取った安芸は深く溜息をつき、話の筋を戻す。

「……まず、三人の中で指揮を執る隊長を決めましょう」

「んー、アタシでなければ誰でもいいーなー」

「…私は乃木さんを推します。彼女が一番、向いていると思うので」
須美は既に理解している。自身が指揮官の器では無いことを、身をもって理解していた。隊長とは優秀な者ではなく、例え意外性を用いたとしても仲間を勝利に導ける者だ。

だからそこ、須美は園子を支持した。

「……同じ、く…園子…推す……」

「えっ…？ええー!?わ、わたし…?」

「決まりですね。では次に…神託によると、次の襲来までの期間は割とあるみたいだから、連携を深めるために合宿を行おうと思います」

「合宿…?」

須美の小さな呟きと同時に、唯斗と園子は静かにスリープモードへと移行した。

「うーみだー!!」

白い砂浜に銀の音が響く。

讚州サンビーチにて、『勇者』の訓練は行われる。移動バスの中に荷物を置いてきた四人は既に勇者衣装に変身していた。

「三ノ輪さん、もう少し緊張感を…」

「もー、須美は堅苦しいなあ。銀でいいって言ってるのに」

「え、えつと…そ、れは…」

「……スー、コミ障。ダツサ…」

「こ、コミ障!?!……いえ、この程度で怒ったりなんかしないわ。ねつ、唯斗君?」

「っ……寒気」

須美は満面の笑みで唯斗を初めて名前で呼んだ。それは唯斗にとって、成人男性が母親から『ちゃん』付けで呼ばれるような、言語化するのも難しい、気味の悪い感覚だった。

身を襲う気色悪さに唯斗は背中を震わせて、須美から距離を取った。

「気に入ったようで何よりだわ、唯斗君。あら?唯斗君だったらどうしたの?ねえ、唯斗君。どうして奇怪なモノを見る目をしてるのかしら、唯斗君」

「こ、の…ツ、性悪…ツ!!」

「わあ、わっしーがゆーちゃんに熱烈アプローチしてる♪仲良しだね」

「園子さんや、多分そう見えるのは君だけだよ?アタシには小鷲と小蛇の喧嘩にしか見えないよ…」

「キモい……寄る、なっ……ひいつ?!?あ、頭…撫でるな…!!」

日頃のストレスを全てぶつける様に、須美は唯斗の嫌がることを全て行動に移した。頭を撫で、耳元で名前を囁き、執拗に追い掛け回す。普段の真面目な鷲尾須美とは思えない異常行動だったと、後に銀は語った。

尚、園子は謎の突風を吹かせながらメモ帳にペンを走らせていた。

「皆さん、集合してください!」

「あつ、安芸先生だ。ほら須美も唯斗も、集まれつて」

銀の言葉に続いて安芸の厳しい視線も刺さり、唯斗と須美も大人しく集合する。

「——御役目が本格的に始まりました。だから、大赦は全面的に貴方達『勇者』をバックアップします。家族のことや学校のことには気にし

ないで、頑張つて」

「「はいっー」」

「……ッス」

こうして初めての合同訓練が開始された。

——今回の合同訓練において、鍛錬法は既に決められている。

端的に換言するならば、『障害物競走』だ。無数の投球機から放たれる何十もの球を躲し、若しくは防いで奥に置いてある廃バスまで銀を届けること。

実際の対バーテックス戦と構造は同じだ。園子が攻撃を防ぎながらサポートし、須美はバーテックスに牽制しながら遠距離攻撃に対して対処し、唯斗は攪乱しながら銀と共に目標を撃破する。

今回の合同訓練はその延長上だ。元より拙くも形づいていた『勇者』達の連携を伸ばすことが目的なのだろう。

「さーて、どーするかねえ。ここからジャンプすれば手っ取り早いけど……」

「三ノ輪さん、ずるはいけないわ!」

「わかってるよー。須美はお堅いんだよ。銀でいいって言ってるのに」

「あつ、じゃあ私はそのつちね〜」

「え……つと、それは……」

「そこ、私語は慎みさない」

安芸は淡々と私語を戒める。小学生が相手なのだから仕方無しと割り切つてはいるものの、やはり何度も続くとストレスは溜まるものだ。

微かな怒気を感じとつた銀達はそつと口を閉じて、鍛錬に意識を向けることにした。

「……まずは作戦を組むべきね。あの豪速球を防ぎ続けるのは簡単じゃないわ」

「……いや……簡単、じゃね……?」

「おつ、郡さん家の唯斗は策略ありか?」

「……園子……盾、広げて……走る。銀、園子……の……後ろ、走る。……」

スー、銀に当たりそう…なの、撃つ。オレ、先頭。……以上」

「あれ〜？安芸先生、それって…」

「乃木さん。言いたい事は解るけど、まずはやってみましょう。話はそれからの方が解りやすいわ」

「……はい、わかりました〜」

園子は言葉を飲み込み、指定位置に着いて槍の先端を展開する。この前方に『山田くん』を手に持った唯斗が立ち、後ろには屈伸する銀。須美だけは遠くの防波堤からの移動を禁じられており、矢を構えて待機している。

遙か前方には無数の投球機。発射されるのはバレーボールだが、『勇者』の訓練用に改造された投球機での最大速度は決して侮れない。下手に当たり続ければ青痣になつてしまふだろう。

「では——始めっ！」

安芸の号令と共に唯斗達は走り始め、無数の投球機も稼働し始める。

「——ハッ、余裕だなア!!こんなタマっころで止めれると思つてるのかア!?ヒヤハッ!!」

「おっ?園子の槍で隠れて見えないけど、また唯斗が豹変したな?頼もしい限りだねー!」

唯斗は砂浜を蹴り、空中に身を乗り出して『山田くん』を剣舞のように振るい——迫り来る球に斬撃波を喰らわせる。

唯斗の作戦は至極単純だ。唯斗が全ての攻撃を撃ち落とす。銀を廃バスまで送り届けるだけならばこれが最も手っ取り早い。

「アッハッハッハッハッ!!ノロいなア!!命^{タマ}ア取りに來いやクソツタレめ!こんなんじやあ朝飯前の運動にもならねエよなあ!?!山田孤月!山田孤月!!…オイオイ、オカワリはまだかア?」

「……なあ、園子…」

「うん。やっぱりね……」

——それは決して連携では無い。

斬撃波の網を貼り続ける唯斗の後ろを園子と銀が走り、須美に関しては手を出すことすら叶わない。ならば、三人がいる理由が無くなる

だろう。

園子は最初から勘づいていたが、きつと、唯斗は自分達がいけない方が圧倒的に強い。連携以前に、御役目中に常に彼の邪魔をしているのは敵でも環境でもなく、仲間である『勇者』だった。

簡単な話だ。

単に力の差がありすぎる故だ。誰よりも身を削り修練を積んできた唯斗と、個々で指導は受けても本格的に『強さ』を渴望した事の無い三人。

見るまでも、語るまでも無く、其の差は明らかだった。

「止めー！」

目標物を目前にして、メガホンを經由した安芸の大声が浜辺を揺らす。

「んア？ンだよ、急によオ……！」

「郡君は抜けても良いです。あなたは別の訓練をした方が今後に役立つでしょう」

「……つー事は、アイツが来てるんスカ？」

「ええ、そうです。合宿舎の鍛錬場に居ます」

「……………マジ？」

安芸の肯定に対して唯斗はげんなりと項垂れ、舌打ちを残して合宿舎へと向かって行った。

残された三人は、お世辞にも良い雰囲気とは言えない。その理由は明白だ。郡唯斗を見誤り、それどころか、これまで足を引っ張っていた事実にも気が付けなかった。

意気揚々と『勇者』を語りながらも結局は子供の付け上がりに過ぎなかったのだ。

表情の曇る園子達を集めた安芸は、軽く溜息をついてから話し始める。

「正直に言います。乃木さん、鷺尾さん、三ノ輪さん。あなた達は足りません。技術も、力も。恐らく彼は…一人でもバーテックスを倒せる。先程の訓練で解ったと思いますが…郡君の足を引つ張っているのはあなた達です」

「「っー」」

「勿論、貴女達が弱い訳では無い。ただそれ以上に…郡唯斗君は一騎当千の実力がありません。武器の特性を理解して、自身の体の可動範囲も把握している。だからこそ実戦でのあなた達の援護は逆に彼を苦しめています」

銀の特攻は唯斗の攻撃を妨害していたのかもしれない。園子の防御は唯斗の視界を遮っていたのかもしれない。須美の射撃は唯斗の行動範囲を狭めていたのかもしれない。

断言できないのは、彼女達が其れを把握出来ていなかったからだ。対等だと思っていた相手は、霞むほど遙か先に居た。その事実が恐ろしくて、其れに気がつけなかったことが恥ずかしくて、それ等の感情を大きく上回るのは悔しいという念だ。

「だから——強くなりなさい。悔しいなら…『仲間』で在りたいなら、もつと強くなりなさい」

「…：そうだ。アタシ達には、下を向いてる時間なんてない！もつともつと強くなつて、アイツを驚かせたい!!そうだよな、須美に園子!!」

「…：強く、ならないと…！彼に私達を認めさせるために!!」

「そつか、そうだよね。ゆーちゃんがずっと不安だったのは、そういうことなんだよね…：うんっ、じゃあ超えないとね。ゆーちゃんの想像も、ゆーちゃん自身も。隣に立ちたいから…!!」

若い少女達は、気高く成長する。きつと、これが種の芽吹きだ。まだまだ花は咲かない、小さな芽は地面から顔を出したばかりだ。

——『勇者』は決意を固めた。

合宿舎の鍛錬場。

陽の光と薄い影の差す木目の床には腹を抑えた唯斗が倒れている。

「ゲボツ……」

「オイオイ、この程度で血イ吐いてンじゃねエよ。たかが人間様にボコられといてなア、意気揚々とバーテックスを倒すだなんて又かせたなア？こんなンじゃあ、俺が先にテメエを殺しちまうだろう——がなア!!」

「ガッ!? くっツツ!! ゲホツ、ゲホツ……」

男は血を吐き倒れる唯斗の腹を蹴飛ばし、柱にぶつかる姿を見下す。

その男は大赦の神官であり、郡唯斗の父親でもある。肥大化した筋肉に、丸太を連想させる脚から繰り出される蹴り。例え『勇者』であったとしても、治癒には時間を労すのは想像するに難しくない。

『『勇者システム』を使わねエとその程度かア？幻滅させんなよ。バーテックスごときにやられるくらいならなア、俺がテメエをぶつ殺してもイイんだぞ?』

「う、る…せえ…ツ!! 先に…俺が、テメエを殺してやる…ツ!…遺書でも書いとけや! クソ親父が!!」

辛うじて立ち上がった唯斗は落とした木刀を拾い上げ、先端を父親の脳天に向ける。その表情は憎しみに歪み、決して『勇者』と『父親』の構図には見えない。

「達者な口だ。吠えるだけなら仔犬でも出来るなア?」

「じゃあテメエをぶつ殺せば証明になるだろが! さっさと死ねや体罰野郎…!!」

——これは日常的に行われる訓練だ。

常日頃から、郡唯斗が『勇者システム』を使用するために受けている鍛錬。その実は加減のない暴虐を受け続ける執行に等しい。

須美や園子、銀の受ける訓練とは全てが異なる。彼女達が武器の扱いや体術を教わるのに対して、唯斗はただ単に生き残る術を体得する事だけを強制させられている。

故に——郡唯斗は他の『勇者』よりも臆病で、人間臭くて、然し強

い。そう在らなければ、唯斗は『勇者』には成れない。

もしも『勇者』が勇氣ある者なのだとしたら、きっと唯斗は『勇者』に相応しくないのだろう。

世界一不毛な言い合い

「オラア!!」

人数の少ない訓練所。響くのは木銃が風を斬る音と、靴が床に擦る摩擦音。シズクは猛々しく声を上げ、鍛えた筋力に任せて木銃を横に薙る。

対する唯斗は白い小球を地面に落とし、握り締めた籠手の拳同士を打ち付ける。

「——『変わり身の術』」

「っ!?!き、消えやがった!!」

「よっしや成功!自分の才能が怖いぜひやつはー!!」

「うおっ!?!い、いつの間に後ろに…!」

シズクの木銃が唯斗に当たる寸前、薄い白煙が発生して唯斗の姿が完全に隠れる。それでも振り抜く木銃が捉えたのは身長大の岩だった。

——これが忍者の末裔を詐称するにあたって、郡唯斗が編み出した『変わり身の術』だ。

相手の攻撃に合わせて自作した煙玉を使い、自分自身を包み隠す。それと同時に身長大の岩を出現させて、唯斗自身は混乱する相手の死角に潜り込む。

今の唯斗ならば相手の視界を瞬時に把握して、其れの及ばない範囲に入り込むことが可能だ。

とは言え、唯斗の『防人システム』に内蔵されている岩には限りがある。破壊されない限りは何度も収納して再利用できるが、バーテックス相手であれば使い捨てになるだろう。

岩は合計で六つ。即ち、『分身体』ではない唯斗が使用出来る『変わり身の術』は六回が限度だ。

「——さてさて、次は水上走りでもしようかね。壁走とか隠れ身の術も会得……いや、開発しないとな」

「ユイ、テメエーは何処を目指してんだよ…」

「モノホンの忍者。出来れば、人外の芽吹よりも真つ当な忍術を編み出したい所存」

「あー、まあ。最近の楠はぶっ壊れてやがるからな…」

楠芽吹の分身モドキは、単純な身体能力に加えて並外れた技術も用いられている。故にシズクからは『ぶっ壊れている』と評価され、唯斗も殆ど同じ感想を抱く。

「でも実際、俺も芽吹も…まだ物足りないって思ってるな。次の任務…国造りで亜弥を護り通すには、この程度の小手先技術じゃあ全然足りない」

どれだけ秀ていても、所詮は『防人』だ。技術だけは御魂を持つバーテックスには決して敵わないし、素の身体能力を上げたところでシテムを起動させてしまえば他との違いも誤差となる。

だから足りないのだ。唯斗や芽吹の捉える『忍術』は逃げて生き残る手段だ。

欺くのは敵のみ。それで生まれる、たった一瞬の隙が自分及び皆の生死を決める事にもなり得る。

それに加え、次の御役目には巫女である国土亜耶も参加する。戦闘能力の無い彼女を最後まで護り通すには、やはりまだまだ、例えば十年以上修行したとしても決して足りる事は無いのだろう。

「……国土は、とても良い子。……だから私も、絶対に護りたい」

「ありや、しずくに代わったな。あの天邪鬼め、素直にモノを言えないのかねー」

「シズクは充分、素直だよ？…ユイトの前では、凄く…元気。シズクも、私も」

「ほほう、この愛いヤツめく！オニーサン、ソウルシスターとしてイカの姿フライをあげちやうんだからねっ！」

「うんっ、ありがと」

唯斗はしずくの頭をポンポンと撫で、ジャージの袖から出した一袋のイカの姿フライを手渡す。其れ自体は修練に付き合ってくれた礼であり、唯斗が示せる最大限の敬意だ。

今の唯斗としずく、シズクの関係は良好と言えるだろう。唯斗は以

前までの関係を知らないが、今は可愛い妹分として見ている。

寡黙なしずくも、生意気なシズクも。唯斗にとつては常識人の範疇だ。これまで接してきた変人の濃度が高すぎたのもあるが、何よりも彼女達は『普通』なのだ。年相応と言っても良い。

長い間、非日常に浸ってきた唯斗にとつて『普通』である彼女達が尊く、手離したくない存在だった。

「さて、鍛錬もこれくらいかな。土居ちゃんは遊びに行くけど、しずくも来る？」

「ううん、部屋で休む。……ユイトが出歩くの、珍しい……？イカの姿フライの特売？」

「うんにゃ、違いまっせ。芽吹と恐キョウチヨウ鳥との親交を深めようって思いましてねー。……最近、変な夢ばかり見るから寝ずらいんだよな」

「変な夢……」

「そ。木の枝を振り回してバーテックスと戦ったり、父さ……いや、死ぬほど腹立つ奴にボコられる夢。……思い当たる節はあるんだけど、現状では確認できないんすよ」

——その『夢』は園子が語った過去に酷似している。無論、唯斗が聞いた話は極僅かであり、故に不明瞭な部分も当然存在する。

『夢』が欠けた記憶の一部なのかは園子や銀、東郷に相談すれば解決するのだが、今は状況が状況だ。優先すべきが防人なのは、思案するまでもない。

少なくとも、唯斗が微かに願うのは其れが『記憶』ではないことだ。あの、実の父親に対する『殺意』は——認めたくない。

言動の乱暴な節のある父親だが、その本質は家族想いだ。ならばあの『夢』はただの『夢』に過ぎないか、若しくは悲しくも正当な理由のある暴力的訓練だったのだろうか。

そんな事を唯斗は他人事に考えていた。

「変なの。……あつ、ユイトは元々変だった」

「しずくは冗談が上手いなー。後、ここでは”ユイト”じゃなくて”ユイ”だよ」

唯斗は汗を拭きながらしずくの口にイカの姿フライを振じ込み、鍛

錬場を後にした。

「芽吹ー、好きな鳥料理って何?」

「そうね…敢えて言うならササミかしら。低糖質で高タンパク質だし、皮脂分泌を抑える働きとか、疲労回復などに効く栄養分も含まれるから」

「へえー、だつてさ。五位鷺ちゃん」

「何でそれを私に言うのさ。ササミは料理に含まれないし、私もゴイスギ?じゃないから!て言うか何で鳥料理なの!?雀は人間の雀だから食べられないよ!」

——時刻は昼過ぎの三時半。

唯斗と芽吹、雀の三人はゴールドタワーの外、大束町の商店街に繰り出していた。壁外での任務を数日後に控えており、前までの芽吹ならば鍛錬や、若しくは作戦の最終確認をしていただろう。

今でもそれは変わらないが、然し休養の大切さも理解はしているつもりだ。

今回の気分転換は唯斗や雀に誘われたからだけでなく、芽吹自身も自分を見詰め直す”きっかけ”を探していたのかもしれない。

「…:…それで、何処に行くの?」

「あれ、メブも聞いてないの?でもまあ、ユイが決めてるよね」

「おん?適当に散歩でもしよーかなーって思いましたね。買い食いでもしましょうや」

「…:…そうね。休養なんだし、大層な目的なんて不要か…:…少しだけ、結について解つてきたかも」

「ついにメブも変人の享受を…:…由々しき事態は筈なのに、前にやってた『分身擬き』を見たら納得してしまったよ…:…」

「何言ってるの?」

「外出数分でもう疲労困憊な矮小小雀…:ツ!」

「連日のツツコミ嵐で十姉妹ジュウシマツの語彙力が鰻登りだね。とても悦ばしい限り」

雀は悦ぶ唯斗の笑みを見て拳を握り締めた。無論、臆病は雀が人を

殴ることなど決してないが。早くもツツコミの波動を感じ取った雀は話題変更に努めた。

「そう言えば二人とも知ってる？最近、讚州市に『国防仮面』ってのが出回してるんだって。ほら、これがSNSに出回ってる写真なんだけど…」

「国防仮面…？なんだその小学生が付けそうなネームセンス。しかも写真まで出回ってるだな…ん、て……ツ!？」

「…結？一体、どうしたの」

唯斗は雀のスマホを覗き込んで——全身を硬直させた。

「…なにやっつてんだよ、トーゴー」

画面に映るのは黒い軍服と上顔面を覆い隠す仮面を付けた東郷美森だった。久し振りに見た友人は変人度を加速させて、遂に世に放たれた後だった。

諸行無常——この世に不変など有り得ないが、悪変し続ける彼女は改めて常軌を逸している。見るに堪えない現実には、唯斗は静かに目を逸らした。

「この写真の人…コクボウカメン…って結の知り合いなの？」

「H A H A H A、バグノキちゃんよオ。超絶常識人と定評のあるボクにこんな奇人の知り合いがいる訳ないヨ。変なこと言ってるハゲタカと禿鷹を蒸しささみにするぞ？」

「完全にとぼっちりなんだけど!?ってどうかハゲタカじゃなくて雀だから!!」

「禿鷹のササミ…食べたことない。禿鷹は動物の腐肉も食べてるけど、本当に食用になり得るのかしら」

「め、メブ…？どうして私を見ているのさ？私はそもそも人間だし、腐肉なんて食べないから!!」

唯斗は半月ぶりにスマートフォンスマートフォンの電源を入れ、東郷美森に『奇行止めろし』とメッセージを送ってから再度電源を切った。

「まあ、変態仮面のことは一生置いとこう」

「国防仮面ね？」

「それよりもファ○マに行こーよ。コンビニ前でヤンキー宜しく屯いながらフ○ミチキを食べようぜ」

「……結、私はセブ○イレ○ンのな○チキ派なのだけれども。揚○鶏とか唐○げ棒も好きね」

「あつはつは、御二人共。コンビニチキンはロー○ンのLチ○レッド味に決まってるじゃん」

「鳥がチキンを喰うなよ。ってか、芽吹も雀も変なこと言うなって。コンビニチキンは元祖フ○ミチキが天下一だって決まってるの。あのザクカリ感是他にないぜ？」

「いいえ、こればかりは譲れない。一番は低糖質で低カロリーの○なチキよ。サクツとした衣に、中から溢れる肉汁…食べ応えのある肉食感…！それ以外は認められないわ!!」

「いやいやいやいや、Lチ○でしょ？L○キはどれよりもボリウムがあるし、味だってレギュラーとレッド、偶に出る期間限定のハツ○ーターン味とか黒胡椒ダレ味！種類豊富だし、永遠に飽きないこと間違い無しだよ!!」

「二はあ？」

世界一不毛な言い合いが始まろうとしていた。

「——つまり亀屋の骨付鳥が一番って事でヨロシ？」

「…まあ、妥協点ね。『おや』か『ひな』で揉めるのは…今は止めておくわ。私は構わないけど、雀が限界みたいだし」

「つーかーれーたー！何で休養中なのに小一時間近くも言い争わくちやいけないのさ!!」

紅く染まる空を見て、雀は嘆きに声を上げた。途中までは軽快にコンビニチキンについて語っていた雀だったが、彼女はツツコミを担う者だ。消費する体力も二人よりも多い筈だ。

「お腹空いたよー！どこか近くの店に入ろうよ。あつ、ちようど近くにあるし、す○家にしない？」

「…雀、ここは吉○家の方が良いわ。いえ、そうするべきよ」

「えつと、何を言ってるの？松○でしょ。○屋を選ぼうよ。土居ちや

ん的にはこれがベストセレクションなんよね」

「「はあ？」」

世界一不毛な言い合いは再度始まろうとしていた。

◆◆オマケ◆◆

東郷「っ!?ふ、風先輩……唯斗君から連絡が届きました!」

風「なんですすって!?な、何て来たの……?」

東郷「えつと……『奇行止めろし』……?何かの暗号かしら。そのつち、何か思い付いたりは——」

園子「わっしー、次は何をやらかしたのかな〜?そう言えば最近、寝不足っぽいけど……」

銀「美森……罪を認めようぜ?」

夏凜「はあ?東郷の奇行なんていつも通りじゃない。……あのバカ、一体何処で何を……」

友奈「えつ?ええつ?どういうこと!?東郷さん、何かやっちゃったの?」

東郷「私に対する信頼が!」

樹「唯斗先輩、無事だったんだ……よかった」

——勇者部は今日も今日とて通常営業中だ。その後、すぐに位置情報を逆探知したが、既に電源が切れていて無駄だった。

その『役目』

——新たな任務が始まった。

灼熱の大地を歩む防人達の中に、普段とは異なる装飾を纏った国土
亜耶の姿があった。その特殊な装束の名は『羽衣』はじろも——戦衣のような
身体強化機能や武器、防具は備わってないが、結界外の灼熱に耐えら
れるだけの遮熱機能は優れている。

「うう…なんか、いつもよりも暑くない…？あやや、大丈夫？」

「雀先輩…ありがとうございます。でも、私は大丈夫です。足を引つ
張っているのだから、この程度で弱音は吐けません」

「亜耶ちゃん、無理はしないでね。気合いとか根性だけで動き続ける
ことだなんて不可能なのだし」

「芽吹先輩、私は本当に大丈夫ですよ？」

亜耶は精一杯の笑顔で返す。

然し無理をしているのは一目瞭然だ。ただでさえ慣れない環境で
あり、肌をジリジリと焦がす熱は防人でも厳しいと感じる程。

普段から弱音を垂れ流し雀は兎も角として、他の防人も激しくなっ
た灼熱に不安を煽られる。

亜耶の隣を歩く唯斗は戦衣の内側からスルメを取り出し、灼熱の地
面に近付けて軽く炙った。

「熱っ…ふーっ、ふーっ。…よしっ！」

「よしっ、じゃないよ！ユイは何やってるの!？」

「スルメ炙ってる。イカの姿フライは帰りに取っておきたいからね。
ほら、しずく口開けーや」

「あむっ」

「どうしよう、何言ってるのか全く理解出来ない。後、しずくも平然と
食べないでっ。」

「はい、亜耶には魔法瓶で冷えてる緑茶な。他のみんなも、塩飴あるか
ら舐めときなよー。暑さで少し柔らかくなってるけど。間鴨アイガモには高
級ササミを用意したからね」

「お母さんか!!てか何で私にはササミを差し出すのさ?あげるならササミ好きのメブにしなよ」

「はあ?こんな暑い中で、口の中がパサパサになるササミを勧めるとか……スズメチャン、サイテー」

「どの口がほげくのや…」

雀はササミと温くなつた抹茶サイダーを受け取り、苦く顔を顰めたが、ついでに冷凍愛媛みかんも貰い、キャツキヤと喜びを露にした。防人の大半は心の中で『チヨロ』と呟いたとか、呟いてないとか。

「結さん、わたしにはおハーブティーをくださいませ」

「あつ、ゴメン。お嬢には梅昆布茶しか用事してなくて……本当に申し訳ないよ。いやー、うっかりだ。うっかり過ぎてお嬢のためだけに梅昆布茶を用意したくらいだよ」

「いや態とでしょ。ユイ、絶対態とでしょ」

「ま、まあ?梅昆布茶しかないのであれば仕方無しですわね!高貴な身分たるもの、人からのご好意は無下には出来ませんことよ?ええ、ええ!本当に仕方無いですけど、その梅昆布茶を頂きましょう」

「弥勒さん、何だか嬉しそうだね。まさか高貴な身分(笑)な弥勒さんは梅昆布茶が好物なの?流石似非お嬢様だね、名前と肩書きも梅昆布茶大好きな弥勒似非子にした方が良いんじゃないかな」

「こんのお…ピーチクパーチクと煩い小雀ですわね!!」

唯斗の善意悪戯心が今日もまた新たな争いの種を産み、唯斗はニッコリご満悦。他人の喧嘩を見ながら食べるイカの姿フライは至高だと語った。

(賑やかだな…)

先頭の芽吹はほんの少しだけ、頬を緩めた。

御役目の途中。本来ならば不真面目なのだ戒めるのが隊長としては正解なのだろう。然し、そんな雰囲気心地良くと感じているのは嘘偽り無き芽吹の本心だ。

——芽吹はずっと一人だった。

彼女の父親は大赦の大工だ。寡黙で、厳格で、誰よりも優れていた。そんな父を芽吹は心の底から尊敬している。他人に惑わされず、“誇り”を貫き通す父の姿は昔からの憧れだった。

そんな父に習い、芽吹は『完璧』を追求した。幼い頃から勉学に勤しみ、他者との関わりも無駄だと割り切った。常に一番で居続けて、特別を目指し続けた。

芽吹が『勇者』を目指したのも同様の理由だ。

未熟な自分が父にどうしたら並べるのか。寡黙な父は決して語らないし、芽吹も同様に語れない。故に——『勇者』に成りたかった。そうすれば、何かが解ると思ったから。

(……そうだ、きつと——)

楠芽吹にとつて、土居結は勇者だ。

彼女が誰よりも人間臭くて、雀とは違うタイプの臆病なのは共に過ごして判ってる。だからこそ、不相応にも仲間を惹き付け強く”在る”姿は芽吹の目指していた『勇者』に他ならない。

芽吹が捨ててきた他者との関わりを、土居結は持っている。土居結は楠芽吹とは真逆の性格であり、その在り方もきつと全然違うのだから。

未だに素性が謎に包まれている彼女だが、少しだけ——芽吹も絆されたのかもしれない。

「結、私にも塩飴を貰える?」

「はいよー。芽吹には隊長特典としてイカの姿フライも付けよう」

「ええ、ありがとう」

口の中で転がす塩飴は、やはりしょっぱくて——でも心做しか甘かった。

「ぎゃあああ〜! 助けて!! メブ、ユイ! 来たっ! 星屑が来たああああ!!」

「ヘルプ該当人に土居ちゃんが含まれ始めたヨ……」

「護盾隊は国土亜耶を中心に盾を展開! 私達の任務は、巫女を目的地へ無事に辿り着かせる事よ!!」

芽吹の号令に応じ、護盾型防人達は盾を巨大化させ、組み合わせ、『壁』を築く。

唯斗は盾の隙間から遠くまで眺め、戦況を把握した。進化体や呼称付き個体は無し。星屑の数も前回よりは圧倒的に少なく、これならば無事に切り抜かれるだろう。

防人の『切り札』として御役目に参加している唯斗は、誰よりも戦況を把握しなければいけない。使い所を間違えば、逆に被害を増やしてしまう危険すらある。

そんな力を秘匿しているからこそ、軽くは無責任も付きまとうのだ。

「今回は星屑だけか」

「ンだよ、ユイ。楽勝だつてか？」

「茶化すなよ、シズク。敵が弱いに超したことはないだろ？進化体とかバーテックスを相手にしたって、何も良い事なんかねえスわ」

「ケツ、経験豊富なヤツは語りやがるなア。だったら早く終わらせて帰ろうぜ！楠！俺達は盾の外で殺らせてもらうぜ!!」

「サラツと土居ちゃんも巻き込まないでくれる？」

「わたくしもですわ!!」

芽吹もまた戦況を把握し、組み立て数々の作戦の内から適切なものを選ぶ。

「……シズクと結、弥勒さんの戦闘を許可する！番号一から六、及び前言の三名は盾の外で星屑と戦闘を！該当しない銃剣部隊の者は盾の内から応戦!!今回も誰一人犠牲者を出さず、御役目を成し遂げましょう!!」

芽吹の司令と共に唯斗達は盾の外に飛び出し、射撃や石礫で牽制しながら殲滅を開始した。

盾を組んだままジリジリと前進して、遂に種を植える地点へと到着する。初任務である今回は、壁からそこまで離れていない場所だったのだ。

護盾型防人の盾の覆いの中で、亜耶は羅摩かがみに入っていた種を取り出

し、地面に落とす。その後は神官から説明された通り、祝詞を唱えるだけだ。

「国津主神、夫れ甲子とは、木の栄える根をいふ。根待ちは普く地を祭事ぞ。地は即ち妻となれば、是を祭るを寝交祭待といふ。然り心善く……………」

厳やかな声と共に、種を落とした地面から緑の芽が現れた。

水面に雫を落としたように、一面は広範囲に渡って大量の芽で緑に染まっていく。まるで灼熱を養分として成長しているようにも見える。それは大地の再生だった。

「成功したの…!？」

「どっこいしょー！……………っぽいな。ふう、疲れた」

盾の外で戦闘をしていた芽吹は後ろに広がる光景に思わず手を止め、唯斗も周辺にいる最後の星屑を投擲で倒してからゆっくりと振り返る。

紅い大地を侵食する瑞々しい草花は儂く、然し強かで幻想的だ。樹海とは違い、それは穢れのない『命』の輝きだ。

誰もが見蕩れ、溜息が漏れそうなくらい目を奪われる。

——だから唯斗以外は気が付かなかった。

「っ!?!シズク！伏せろ!!」

「は——」

唯斗はシズクに覆いかぶさり、肘から手を覆う籠手を軋むほど握り締める。次いで出現するのは三つの身長大の岩だ。

直後、広範囲に広がった草花の一部を焦がす勢いの火球が岩にぶつかる。

岩と火球がぶつかり爆発。唯斗の背中に幾つもの石の破片がぶつかり、思わず呻き声が漏れる。

「えっ、ええっ!?!な、なに!?!何が起こってるの!?!」

「…………ゲホツ、二度あることは三度あるんだな…。テメエと逢うのも

三回目か——獅子座…レオ…バーテックス!!」

遠くで防人を見下し、圧倒的な王者の風格で空中に佇む個体。何度

も『勇者』を追い詰めてきた存在——紛うことなき獅子座のバーテックスだ。

「……レオ・バーテックスだけじゃない。他のバーテックス……しかも御魂持ちッ!!」

「…チツ、芽吹。全員撤退させろ——ここからは俺の出番だ」

「なっ…!結、一体何を言ってるの!?!しんがり殿なら私が……」

「違う!殿程度でどうにかなるなら、俺の『分身』でも置いてくださる…!……ここからは『勇者』の領分だ」

唯斗は戦衣の内側からスマートフォンを取り出し、電源を入れる。真っ直ぐと指を向ける先は『勇者アプリ』だ。

「『変身』」

オンシジュームの花卉が唯斗を包み込み、姿を変える。芽吹色の戦衣は純白と黄色の勇者衣に変化し、厳つい箆手は粒子となり消えて代わりに出現するのは百五十センチのピコピコハンマー。

黒茶色のウィッグと変声機型チョーカーは消え、土居結は郡唯斗へと姿を変えた。

「……は?…結、貴方いったい…」

「芽吹。テメエの役目はなんだ?」

「っ?!——全員撤退!護盾隊は後方にだけ盾を展開しながら、国土亜耶を中心に!!銃剣部隊は全員撤退方向の前方へ!星屑を殲滅しながら壁の中まで一気に走り抜けるわよ!!」

問われ、芽吹は行動で答える。

楠芽吹は『防人』の隊長だ。防人が任務を遂行し、生き残るために先導するのが芽吹の『役目』だ。ならば、多少の不確定要素に戸惑っている時間など無駄に等しい。

相手が『勇者』でも、共に過ごした時間は嘘では無い。ならば、楠芽吹が取る行動もたった一つだ。

「で、でも!メブ、ユイはどうするの!?!」

「雀、彼女……いえ、彼は『勇者』よ。私達がいっても邪魔をするだけ」

「……ユイト。勝てるのか?」

「シズク、当たり前だろ?こつちが本業だからな」

「はっ、言うじゃねえか」

シズクの不安に、唯斗は軽く返す。例え勇者らしからぬ彼でも、『勇者』足り得ると証明するように。イカの姿フライを頬張り、心情を悟らせまいと余裕を演出する。

「ユイトくん。どうか、無事で…むぐつ!?!」

「暗い顔すんなよ、巫耶。イカの姿フライが不味くなるだろ?」

「んぐつ…急に口にイカの姿フライを入れないでよ…ユイトくん、待ってるね」

「応!」

防人が走り始めると同時に、唯斗もバーテックス達との戦闘を開始する――

「敵は…蠍座と乙女座。あとは獅子座か。盛り沢山過ぎて辟易するつての…『満開』」

先日、三好春信より話があった。

其れは『勇者システム』のアップデートについてだ。主に『満開システム』を代償無しで使用出来るようになった、との事だった。

無論、相応のリスクは当然存在する。代わりに精霊バリアに回数制限が付いたのだ。今の『勇者システム』では『満開』をすれば精霊のバリア分のエネルギーも使用してしまうらしい。

唯斗が『満開』をしたということは即ち、防人と同様にバリアのない状態での戦闘となったのだ。

「さっさと終わらせて、帰るか」

空に巨大なオンシジュームが狂い咲き、草花と灼熱を照らす。

「くまマン、合体だ」

『――ええ、最初から全力でいきましよう』

成人男性サイズのテイベアは眩く発光し、唯斗を包み込む。晴れた先には『勇者』の“ゆ”の字も連想できないぬいぐるみパジャマを纏った唯斗の姿。

ぬいぐるみパジャマ姿の唯斗は『分身』で五人に増える。

「……『分身』、今は四人か。前よりは増えたな」

今の唯斗ならば自身を含め五人まで分身できるようになった。以前までとは違い、個々の戦闘も殆ど問題なく出来る。

『防人』となり、成長を重ねたからだろうか。——否、もう少しだけ前、『散華』した身体が戻ってからだ。戻ってきた『身体』は以前までの『身体』とは何か違っていて、その変化は確かにあった。

「テメエらまとめて消し炭になれや!!」

五人の唯斗は虚空に手を翳し、何百、何千、何万もの紙飛行機を出現させる。一齐に放たれた紙飛行機型爆弾は爆風と炎の津波を起し全てのバーテックスを飲み込む。

炎の津波は星屑を一瞬で焦がし、進化体を焼き飲み、三種類のバーテックスすら半壊させた。

「あとは御魂を潰すだけだな。せいっ!!」

複数の金色のピコピコハンマーは三つの御魂に向けて放たれ、灼熱の地面を大きく抉る。

金色の暴力は何者にも阻まれることなく、出現したばかりの御魂を瞬時に爆散させた。

「よしっ、片付いたな。あとは帰るだけ……っ!? な、なんだよこれ!」

飛行する本体の唯斗の足に、黒い蔦が巻き付く。

「んだよ、コレ……ぐっ、ぐうっ!! 取れない:!?」

蔦の先は灼熱の地面だ。植物のように地面から生えた其れは唯斗の足に絡みつき、徐々に地面に引きつける。

切断を試みるも、腕力では裂けない。蔦のでる地面に紙飛行機をぶつけるが、地面は抉れても蔦だけは無傷だ。

「痛っ……このっ! クソが!! 少年は優しく扱うもんだぞゴラア!!」

残る四体の分身の総攻撃でも、蔦は決して裂けない。その間も蔦は徐々に地面に巻取られ、遂には身体が地面に飲み込まれる。

「クソッ……みんな……、めん……」

遠のく意識。紅く染まる視界は紅黒く、黒く、何も移さない。最後に耳に届いたのは、気味の悪い不協和音だった。

——そこで何をやっているの？

——嗚呼：忌々しいね。神兵を生み出すなんて

——人間ごときが人間を超えてるなんて許せないな

——傀儡の駒になってもらうよ

改宗

——暗く、暗く、深淵よりも深く暗い。

霞む瞳には何も見えないに等しい。彷徨ううちに、自分という感覚もいずれは消え失せてしまいそうな恐怖に駆られる。然し次の瞬間には、根源の『自分』とは何者かも解らなくなった。

異常に寒くて、尽きるほど熱い。

胃酸が食料を溶かすように、唯斗の自我は子泡を立てて消えていく。深く沈み、沈み、底のない深淵に引き込まれ沈む。

伸ばす手は泡沫の如く散る。洩らす呻きは無常に霧散する。開く瞳には無限の紅と無に帰す黒が映り、脳を支配する。

「——」
きつと、死にはしない。死した方がマシな扱いを受ける。単なる直感であり、然し五感の全てが総じて訴えかけるのだ。

固く閉じた掌は徐々に開き、無手に繋いだ絆も次第に忘れて——

——起きて、唯斗。寝てる場合じゃないよ！

声^が聞^こえ^た。暖かい声は失いかけていた”自我”に悴を与え、再び形付ける。

脳の奥が強く刺激された。喪われた記憶の中で、きつと唯斗は其の声を知っている。

——ゲットアップよ！唯斗！！

騒々しく、然れども落ち着く声だ。其れが敵ではないと、喪われた筈の何かが強^く訴^えか^ける。

——起きろ、唯斗。負けるな……！

知らない三つの声^{懐かしい}が起きろ、起きろと連呼する。

「……ん、だれ……？」

黒い光。黄の光。白い光。

重なる三色の光玉は霞む視界の中で、三つの影となった。

——気が付けば、そこは白い空間だった。先程のヘドロにも似た粘着質で、全てを否定するような『黒』は、真つ白な部屋に変わっていた。上も下も、前も後ろも判らなくなる純白のみで構成された部屋。

不思議と、勇者部の部室に似た雰囲気を感じてしまった。

「……アンタら、誰？」

「あらら、警戒心丸出しだにやー。まあ、気持ちは分かるけど。其方さん的には初対面だし」

勇者姿の唯斗は——同じく黒い勇者衣を纏った少女に尋ねた。少女達は軽く笑いながら、理解を示す。

親しみを込めた笑みは勇者部や亜耶、しずく達を連想させた。まるで長い期間を共に過したようにも錯覚してしまいそうだった。

「勇者……俺達の次か？」

「ノンノン！逆よ、逆。もっと前の……でも今を生きる勇者よ！」

黄色の光を纏う少女は過去と語り、今に繋がった。その意味を、まだ唯斗は知らない。知る術を持たない。故に首を傾げ、得意げに語る茶髪の少女を他人事として眺めることしか出来ない。

「……説明するのは苦手だ。……つまり、生霊？魂？……雪花」

白髪で寡黙な少女は自身の言葉に首を傾げ、黒い勇者衣の少女に助けを求めた。

対する少女は幾度と繰り返された問いを返すように、やれやれと首を振りながら呆れた笑みを浮かべる。

「はいはい、相変わらずの残念ニヒルですねー。あー、えっとね。端的に説明すると、I You helpってこと」

「つまりイカの姿フライが好きってことか？ソウルシスターズのバーゲンセールだなあ」

「いや何でそうなった!?あー、やっぱり無理。絶対に無理。100%無理だわ。ここは歌野に任せるよ……」

「つまり、アイ・ユーヘルプ！つ事よ!!」

「なるほど把握。おんぶに抱っこで世話になります。取り敢えず焼きそばパン買ってこいよな」

「何で分かるのさ!? 棗さん、今の私と同じ説明だったよね!? しかも滅茶苦茶図々しいし!!」

唯斗は本能で察した。目の前の意味深ワードドロップ眼鏡ちゃんの本質は完成型煮干勇者や名前不明の鳥類ちゃんと同類なのだ。

つまるところ、ツツコミ役なのだろう。気苦労を背負ってそうな雰囲気さまに専門家のソレだ。

「流石歌野だ」

「ふふん♪私のトークパワーは52万ですもの!!」

「宇宙の帝王に対して謙遜してるのか? 名前も知らない勇者さんは奥ゆかしいなあ」

「テイオウ…? 歌野は52万…?…つまり、歌野は奥ゆかしいということか」

白髪の少女はしたり顔で頷いた。無論、何一つ理解出来ていないが、響きだけは何となく解ったのだろう。

極論、理解しようとしまいと現状では全く持って無関係なのだが。勿論だが、その事についても白髪の少女は無知だった。

「あーあ。何なの、この人達…: やっぱ変人ばかり。ツツコミ役は何処ですかー?」

「呼んだか?」

「唯斗と棗さんは絶対に違うから。本当に疲れるし、懐かしいなあ… 本当に記憶ないのか疑わしいっすわ…」

卒業アルバムを眺めるように、三人の微笑む。それに既視感を抱いてしまった唯斗は、自身に疑問符を浮かべた。

「つーか、結局どーすんの? 俺、多分壁の外で地面に引き込まれたばかりなんすけど…? ここって多分、精神世界的なヤツだよな」

「…大体、その通りだ。………多分」

「棗さん、多分合ってるわよ。多分だけど」

「あれれー？このメンツの多分率高くない？ノギーとか千景が出てきてくれれば楽なだけどなあ。……まあ、今度こそ簡潔に説明すると……唯斗は天の神に捕まっています。君の精霊達はその呪縛から精神だけは護ってるから、これから肉体を解放しようってコトね」

唯斗が三体のバーテックスを撃破した直後、地面から黒い蔭に似た何かが生え、唯斗の足を縛り灼熱の地面に引き摺り込んだ。

その正体は天の神——バーテックスを生み出し、人類を滅ぼそうと神樹に敵対する神だ。

神は人が人以上の力を持つことを極度に嫌い、怒りを露わにする。その対象は『勇者』であり、『満開』で神気を帯びた存在ならば尚更だ。「……ん？じゃあ何で、天の神さんは俺を殺さないんだ？『満開』した勇者を簡単に捕えられるなら、殺すのはもつと簡単だろ……？」

「まあ、単純に他の『勇者』を引き摺り出すためだろうね。唯斗も解るでしょ？」

「私達は勇者だ。その素質を持つ者は、決して仲間を見捨てない。……天の神も、其れが判ってる」

「んー、そう考えると確かに効率的！餌を垂らして獲物を釣る、フィッシングと同じね」

つまり、唯斗は餌であり駒なのだろう。『勇者』を誘き寄せ、天の神は唯斗の身体を操ることで実質的な同士討ちを狙っている。

少なくとも、少女達はそう考察する。結局のところ、神の考えることなど解らないのだし、考察でそれっぽくまとめるしかない。

——現状で言えるのは、唯斗の身体をどうにかして解放する事が最優先だということのみ。

「まあ、ゆっくりしましょうよ。時間はまだまだあるし、解呪も簡単じゃないんだよね。てか、やるのは唯斗自身じゃないといけないし」「おん？なんか物騒な単語が聞こえたんですけども……」

「唯斗、頑張れ。……海も、頑張れと言ってる」

「この姐さんは何言ってるの？」

「とここでこの場所……ソイルがないのね。残念だわ……暇なのに農業

が出来ないのだから」

「暇って言った？この人、暇って言いやがった？唯斗くん史上最大の危機の最中に暇だから農業に耽りたいって言いやがったぞ、この馬鹿」

「馬鹿!?私、生まれて初めて馬鹿って言われたわ!?!」

「いや、割と言われたたよ?主に三唯斗から。ね、棗さん」

「……言われてたような、言われてなかったような……雪花が言うのであれば、言われてた気がする」

「ホワツツ!?リアリイ!?!」

「……眼鏡ママ、解呪まだー?」

「はいはい、君んとこの神様が何となく教えてくれるっしょ。巫女ちゃんみたいにお祈りして待とうねー?」

「はい」

灼熱の地面の遥か底——白い空間での時間はまだまだ続く。激変する事態を追い掛けるように。

——土居結郡唯斗が消えた。

壁の外で行方不明となった。そして同時に、外の世界の灼熱は温度を増した。

外を支配する天の神の怒りに触れ、激化したと考えるも相違ないだろう。前回でさえ防人の一部は火傷を負った者もいるのだから、これ以上は外での戦闘どころか活動すら不可能になる。

防人の大半は殆ど無傷で帰還したものの、数日経ってもゴールドタワーを支配するのはお通夜にも似た雰囲気だ。

「……………」

「…亜耶ちゃん、ちゃんと食事を摂らないと」

「…………ごめんなさい、芽吹先輩。…もう少しだけ、祈らせてください。ユイトくんが、無事に帰ってこられるように…」

ゴールドタワーの祈祷部屋にて、亜耶は巫女服に身を包んで一心に祈りを捧げる。前回の壁外任務を終えてから、亜耶は殆どの時間をここで過ごしている。

亜耶を心配して尋ねてくる防人は何人もいたが、亜耶はいずれも一切の視線を向けず、目を瞑り祈りを捧げ続ける。

心做しか痩せ細った彼女は、芽吹の目には数日前よりも一回りも二回りも縮んで見えた。

「……………そう。……………亜耶ちゃんは私を恨んでる？」

「……………どうしてですか？」

「結を残して行くと決断したのは私。誰一人犠牲者を出さずに任務を遂行すると宣言したのに、結を——」

「いいえ、芽吹先輩の決断は間違つてませんでした。御魂を持つバーテックスは、勇者様にしか対応出来ません。ユイトくんが……………勇者様が防人に参加してくださったのは、皆さんを護るためだったんです。……………だから、気負わないでください」

亜耶は芽吹の言葉を遮り、淡々と語る。

国土亜耶は巫女として、言葉を締めた。本当は、何も納得していない。こんな結果は望んでなんていない。然し、其れを願い訴えるのは巫女の範疇を超えている。

心の抛り所を喪つただただの国土亜耶は、深く目を瞑り巫女の国土亜耶として振る舞い続けた。そうでなければ、泣き出してしまいそうだったから。そうしなければ、今にも壁の外に駆け出して彼を探しに行つてしまいそうだったから。

熱を喪つた言葉は、もう次いで出てくる事は無かった。何も考えずに、ただ祈祷だけをしていたい。彼と、現実を受け止められない自身自身のために。

そんな我儘が神に届くことなどないと知っておきながら。

「……………結は、絶対に生きています。私達が見てきた彼の強さは、単なる技術とかシステムによるものじゃないわ」

「……………」

「だから……………結は私達で取り戻す。防人とか、隊長だから、とかじゃなくて——私がそうしたい。だから絶対に、結はゴールドタワーに連れ帰る！」

「……………芽吹先輩」

芽吹だけではない。それは防人の総意だ。『誰一人犠牲者を出さない』——そんな芽吹の信念に感化され、短くても楽しかった日々を取り戻すと決めた少女達。

その在り方は、勇者の適性を持つ彼女達故の善性だ。臆しても、仲間のために動く。気高い防人としてのプライドが、決して仲間の犠牲など認めはしない。

「国土亜耶——あなたは、彼の帰りを待つだけの弱者なの？祈って、泣いて、それだけで終わりなの？」

「そ、それは……」

「…亜耶ちゃん、一緒に戦いましょう。戦力でなくとも、国土亜耶にしか出来ないことは沢山あるわ。だから…巫女だからと言い訳するのは止めて」

楠芽吹は初めて、国土亜耶に厳しい言葉をぶつける。迷子で、彷徨い続ける彼女の手を強引に引っ張って次に進もうとしている。

「…少しだけ、時間をください」

「…ゆつくりと考えて。どんな答えを出しても、私は亜耶ちゃんの味方だから。…それだけは絶対に、忘れないで」

嘘偽りのない言葉を置いて、芽吹は祈祷室から出ていった。

その言葉に込められた期待や想いは、確かに伝わった。とても暖かく、陽だまりに導かれているのだと解った。優しく、厳しい彼女はやはり誰よりも尊敬に値する。

与えられた選択肢は何物にも代え難い価値があり、亜耶自身も何処かでそう望んでいた。

だからこそ——

「…ごめんなさい。芽吹先輩、ユイトくん。……私はもう…」

——強く閉じた瞳からは涙が滲んだ。

国土亜耶はもう、戦えない。神官に告げられた彼女の次の御役目は、彼女自身の人生を終わらせるものだ。防人はまだ知らず、巫女だけに伝えられた最後の御役目。

亜耶は流れる涙を袖で乱雑に拭い、無気力に祈りを解いた。

「——やあ、巫女さんはお悩みかな？」

「っ！……どなたでしょうか？」

その人物は、気が付けば目の前に胡座をかいていた。

瑞々しい薄緑の長髪に、好奇心に疼く笑み。灰色のブレザーに白いスカートは、何処かの制服なのだろう。ニヤリと笑う彼女は、彼と同じようにイカの姿フライを齧り、咀嚼してから亜耶の問いに答える。「今は山田くんって名乗ってるね。あつ、『くん』が名前だよ？」

「山田さん……？」

「そー、山田さん。巫女さんに声を掛けたのは、ちよつとした宗教勧誘なのさ。この国を——もとい、郡唯斗を救う気はないかい？」

「っ!?ゆ、ユイトくんを……？」

亜耶の反応に、少女は再びニヤリと笑みを浮かべて、したり顔で頷く。

急に現れた彼女は確かに、郡唯斗の名を口にした。今の国土亜耶は、その名前に反応せざるを得ない状況だったのだ。

「端的に言うね。巫女ちゃん、改宗しなよ。知ってるかは解んないけど、神樹ってそろそろ寿命なんだよね。このままじゃあ、四国が滅ぶよ？」

「……………えっ」

「でーすーがー！何とこの山田くん、解決策を持っておりませう。其れも二つもね？どうどう？有能な山田くんに従って改宗しない？宗教名は…そうだね、『山田教』にしよう！」

「えつと、ちよつと待ってください…！情報量が多すぎて…」

「んー、じゃあ簡単に言うね。巫女ちゃんが山田教の巫女になってくれたら、唯斗を救えて、尚且つこの国も救えるよ。山田くんの名前に誓って、絶対を保証しよう」

山田くんを名乗る少女は早口で捲し立てる。まるで答えを急かし、

たった一言『はい』と言わせたいようにも感じられた。

強い自信を秘めた表情は、何処か神秘的で、人間という種族の枠から逸脱している。神樹の神託を受けた時と、雰囲気似ていた。

きつと、目の前の人物は神樹と同種なのだろう。巫耶は決して及ばない理解を放棄して、状況だけの理解に努めた。

「……ユイトくんを、救えるんですか？」

「救えるよ」

「じゃあ改宗します。国土巫耶を——山田教の巫女にしてください」

「オーケー、即決に感謝するよ。安心して、期待は裏切らないからさ」

——柔らかな笑みは、やはり人間離れたモノだった。

巫耶もまた、其れを信用することに決める。意味を見い出せずにつの間にか入信していた神樹教よりも、明確な意味と義理を持つ山田教に改宗したのだ。

神樹教としての最後の祈祷。気の所為かもしれないし、そう思ったかっただけなのかもしれない。でも、瞼の裏に舞い落ちた花弁は、神樹が新たな門出を祝ってくれていたようにも思えた。

「巫女ちゃんの役割は、繋ぐことだよ。声を、意志を、力を、その全てのパイプとして担うのが巫女ちゃんの役割」

「繋ぐ…？」

「山田くんはね、ちよつとばかり気に入った子を鼻負するんだ。だから神樹と違って、気に入った君という人物の願いなら叶えようって思う」

「あ、ありがとうございます…」

神樹は四国全てを護る地祇であり、善く平等だ。故にたった一人を救うことは決してない。それ以前に、人類に対して過度な干渉はしないのだ。

それが神の在り方であり、神故の不変性だ。

「礼には及ばないよー。山田くんだって、単なる慈善活動をしてるわけじゃないし。言わば、彼のためだけに君達を利用している。遠い過去の彼女達も、今に生きる巫女ちゃんや眼鏡くんも」

「それでも、山田さん……山田様はユイトくんを救ってくれろと断言しました。だから私を利用して下さり、感謝しかありません」

「っ！……んくくッ！何この良い子!? うんうん、立場とか役割を無視しても山田くん、気に入っちゃった！これから未来永劫ヨロシクね、亜耶ちゃん♪」

「は、はい……！」

満面の笑みで手を握ってくる人外に対して、亜耶は心の中で失礼だと反省しながらも、未来永劫と語る彼女を何だか重いと感じてしまった。

「さーて、神樹の——『勇者システム』の真似事は終わりだ。ここからは本領発揮。名付けるなら……東ね咲き誇る『賢者システム』かな」

心做しか、其の声は弾んでいる。誕生日を迎える子供のよう嬉々としていた。

消失

「……………奉火祭?」

神世紀三百年、晩秋。

結界外に種を植え、橋頭堡を築くという御役目——その一回目が結果的には成功し、二回目の御役目に唯斗の捜索を兼ねて準備を重ねていた防人達に、予想もしていなかった通達があった。

ゴールドタワーの展望台にて、芽吹を初めとする防人達は女性神官の発した言葉に怪訝そうな顔をする。

「奉火祭は、約三百年前にも執り行われた儀式です。歴史上、大赦が行った儀式の中では最大規模のものの一つ——天の神に許しを乞うための儀式です」

約三百年前。西暦が終わり、天の神の怒りが激化し、遂には『勇者』達でも太刀打ち出来なくなつた当時。人類は滅亡の淵に立たされた。

その際に行われたのが『奉火祭』——天の神に許しを願う儀式だ。そして神樹と天の神の間で講和が結ばれ、人類は四国から出ないことを条件に平和を得たのだつた。

「…概要は解りました。ですが、その内容は…?」

「巫女を壁の外の火に焚べ、供物とするのです。捧げる巫女は国土巫耶を含めた六人……三百年前は『勇者』に協力的な、強大な力を持つ精霊が身を捧げました。ですが、今はその存在に足る、人類に協力的な精霊はいません。故に、本来の手順に従うまでです」

「なっ!?」

巫女は神託により、一方的にとはいえ神との意思疎通が可能だ。其れを逆手に取り、命を犠牲として、神に言葉を伝える。

その懇願こそが奉火祭の本質であり、神樹信仰に染まった大赦や巫女の本懐だ。元は一般人からの出身である防人には当然、理解しかねる思考だつた。

「そんなの…ツ！巫耶ちゃんを…巫女を犠牲にするというんですか!?」

「……………」

「そ、そんな事！認められる訳がありませんわ!!腹立たしいことに：国造りの詳細はわたくし達には知らされていなかっただ。結さんが：勇者が天の神に見つかり、怒りを買ったのも大赦あなた達の驕りじゃありませんか…ツ!!」

「——計画は早急に進める必要がありました」

女性神官は激昂する弥勒夕海子とは反面的に、冷たい氷のような声で返す。

弥勒夕海子は猛々しく猪突猛進な少女だが、本質は賢明だ。神官の言葉の端の微かな震えを察知し、その反応が土居結——郡唯斗に対するもののだと気が付く。

それでも尚、冷静に説明に努める彼女を、追撃するように責めることは『弥勒』のプライドが許さなかった。

「神樹様は三百年前より『外』と四国を劃かち、天の神の力が及ばないように結界を張り続けました。それと同時に数多の恵を我々に与えた。…其れが、どうして恒久的に続くか?」

「……………」

「遅かれ早かれ、私達人類は手を打たなければいけなかった。それが『国造り』…：神話の模範です」

神樹とは地祇の集合体だ。その一部である土地神の一柱を、旧近畿地方にあった靈山に祀る——其れこそが『国造り』だ。

神代の時代に、土地神の王は同じことを行ったと伝えられている。『吾は倭の青垣の東の山の上につき奉れ』。其れによってこの国は、豊かに葦が生い茂り、瑞々しく稲穂が実る土地に——豊葦原之瑞穂國となった。

飽くまでも神話であり、然し西暦の時代ならまだしも神世紀は神が直接人類の味方をしている。故に数多の神話も現実味を帯び、『類感呪術』と呼ばれるものの一つ、儀式『国造り』の実行へと至った。

「……国土亜耶でなくとも、結果として巫女が生贄となり奉火祭が行われるのは大赦の決定事項です。そうしなければ、いずれ…：四国の人々は『灼熱』に飲まれ、天の神に滅ぼされるでしょう。その上で、あ

「あなた達に問います——あなた達はたった数人だけの犠牲を拒みますか？」

「「っ……い」」

——其れは大赦の神官ではなく、一人の教師としての問い掛けだ。神官でも大人でもなく、彼女の本質たる教え導く者としての言葉だ。

女性神官——安芸の問いは単純だ。四国の全員の命と巫女数人の命を天秤にかけて、選択しろと言っているのだ。

つまり、犠牲のない道など存在しない。安芸は暗にそう告げているのだろう。現実を直視する大人として、無垢な少女達に問い掛ける。世の中は物語のように、平和な選択肢だけでは成り立たない。

「……ほ、他の選択肢は……」

「加賀城さん、甘ったれないで下さい。私があなた達に問うているのは、決して変わりません。何百、何千、何万回と繰り返されてきた問い——全て得る、何も失わない。其れが叶うのであれば、こんな状況にはなっていないません」

約三百年前。最初の奉火祭で犠牲となったのは、初代勇者に協力的だった、強大な力を持つ精霊だったと先に安芸は語っていた。

その時点で、人類は既に犠牲の上で成り立っているのだ。皮肉にも、それだけが人類生存の成功例だった。

決して『悪』ではない。周知の認識だ。

勇者の満開システム然り、今回の奉火祭然り。どれも人類が生き残る為の苦肉の策だ。やはり最大にして最重要視される問題は、大人には苦汁を飲む手段が最初から用意されていなかった事だろう。

善性はあれど、冷徹な決断を迫られるのが大人だ。故に大赦神官は恨み役を進んで被り、其れを園子は『優しさ』と解釈して友奈や東郷達に説明していたのだろう。

「…それでも」

——楠芽吹は曲がらない。

「それでも、私達は亜耶ちゃんを……いえ、誰も犠牲になんかしたくはありません！我儘かもしれない。無謀なのかもしれない。それでも立

ち向かい、不可能を成すのが『勇者』なのだ、私は思います…ッ!!」
楠芽吹は『勇者』を目指している。堅実すら投げ打って、自身の『正義』を執行できる者。理不尽を勇気で打ち破れる者。

防人達は芽吹の言葉に声を上げて賛同する。防人達は、いつだって『勇者』を志す芽吹の背を見て、死戦を乗り越えてきた。

だからこそ、芽吹の言葉には全信頼を乗せている。いつか、彼女と同様の気高い人物に成るために。

「そんな我儘が罷り通るとでも?」

「ええ。だって、貴女の言い方はまるで…他の選択肢を持つてるみたいなのじゃないですか」

「っ!…楠さんの”答え”は、皆の総意ですか?」

「勿論ですわ!芽吹さんが言わなくても、わたくしが言うつもりでしたもの」

「弥勒さんの妄言は置いて…わ、私も同じ…!あややはこんな私にも優しくしてくれるし…ぜ、絶対に犠牲になんかしたくないよ!」
「ん、右に同じ。国土は…ソウルシスター。とても大切な仲間だし、ユイトが護りたいモノは、私も護りたいから」

防人一人一人が想いを口にする。誰も犠牲にしない。そんな絵空事でしかない理想を語り、其れを成すための覚悟を示す。

無謀だが、決して不可では無い。たったそれだけの理由で、少女達は不条理に逆らうと決断したのだ。それは愚決か、英断か。

「…そうですか。そう在れることは…尊敬に値します。…その覚悟があるのであれば、きつと…あなた達は『勇者』にも劣りません。…私は、私に出来ることをしましょう」

それだけ告げると、安芸は足速に展望台から立ち去った。仮面の下から発せられる柔らかい声質は、暗に安心してと告げているようにも感じられる。

形容し難くも、感じられる変化は彼女の素なのかもしれない。真実はどうであれ、そう考えられるだけ彼女を信頼しかけているのは事実なのだろう。

芽吹は去る安芸の背中に、そつと頭を下げた。

安芸が去ったことにより、張り詰めていた空気は一気に崩れる。

「…メブ、この事って…あややにも伝えるべきだよね?」

「当たり前でしょう。私は、亜耶ちゃんにも一緒に戦って欲しいから…絶対に除け者になんかしない」

「そうだよね。………ところで、朝からあややの姿が見えないんだけど…弥勒さんとしずくは?」

「確かに見てませんわね。自室でお眠りになっているのではなくって?」

「…部屋には、いなかった。朝、おはようイカの姿フライを届けに行った時、もういなかった」

「いや、おはようイカの姿フライってなにさ…」

「………みんな、亜耶ちゃんを探しましょう…!何だか嫌な予感がする…ッ!」

芽吹を初めとする三十二人の防人はゴールドタワーの各部屋に散り、朝から姿の見えない亜耶の搜索を開始した。

然しその姿は誰の目にも映らなかった。自室にも、風呂場や食堂、最近は殆どの時間を過ごしていた祈祷部屋にも居ない——

その後、見つかったのは一枚の書き残しのみ。

《皆さん、私もユイトくんのために戦います。…国土亜耶として。から…ほんの少しだけ、皆さんの傍を離れることを許してください
〈国土亜耶〉》
???????

小さく丸い文字に、何故かイカのイラストが描かれた書き残しは、自室の机にイカの姿フライを添えて置かれていた。

——その文章に偽りなく、神隠しの如く国土亜耶はゴールドタワーから姿を消した。

暗く曇り、今にも泣き出しそうな空模様。

讃州市に住む一人の少女の屋敷に、仮面を被る二人の神官は訪れていた。

濡羽色の美しい黒髪に、良く整った容貌、女性らしさを充分に兼ね備えた身体。まだ十代前半という年齢でありながら、その少女は身も心も、面貌すらも年齢以上に感じられる。

或いは、彼女の——東郷美森の過酷な人生が彼女をそう飾っているのがしれない。

そんな少女に対して神官達は深々と平伏し、過剰なまでの敬意を払う。然し皮肉にも、払う敬意とは裏腹に話している内容は彼女の命を天秤にかけるものだ。

「先日、我々大赦は供物となる巫女を選び出しました。西暦の時代に行われた奉火祭に倣い、一人の強力な精霊の代わりに捧げる巫女は六人。天の神に対する儀式は、既に執り行える体勢を整えております」

若い男性の神官は硬く、薄い声質で淡々と告げる。何処か意図的にも感じられる声質は高低が少なく、ただ媚びるだけの者とは一線を引いていた。

「六人が犠牲に……でも、私が代われれば……私だけの犠牲で済む……」

「っ……………」

東郷の眩くような言葉に、もう一人の平伏す女性神官は小さく、声にもならない吐息を洩らす。それだけで、東郷は彼女の正体を勘づいた。

先代の勇者だった時から世話になっていた教師兼御目付け役だった安芸なのだと悟った。久しく見なかった彼女だが、きつと、その内面は何も変わらないのだろう。

だからこそ、受け入れることにした。

「……判りました。選び出した巫女達の、御役目を解いてあげてください。私が供物になります。……私は壁に穴を開けた時……確かにこう思いました——『私だけが生贄なら、まだ良かった』と。……そう、私だけなら」

「……貴女様に、最大限の感謝を」

男女の神官は声を重ねた。

聽て雨が外に降り注ぎ、次第に豪雨となる。

東郷は強い後悔と激しい責任感に吐き気を催す。『勇者』であり、『巫女』の素養も持ち合わせる彼女ならば一人の犠牲で済むだろう。

それが一番平和な手段だ——震える膝を振り、自身にそう言い聞かせる。

壁に穴を開け、大罪を犯した日からずっと、東郷美森は懺悔の方法を探していた。

勇者部のボランティア活動に精を入れた。しかし、心の底から人々の役に立ちたいと願う活動する親友と比べると、自分を卑下してしまう。その程度で罪なんて償えないと悟ってしまう。

人々を救い鼓舞するために変装し、国防仮面を名乗って活動してみた。しかし、それで救われていたのは東郷自身だった。仲間には心配され、励まされ、やはりこんなのは贖罪にはならないと思ってしまう。

部長の風は責任なんて追求しないようにと釘を刺した。それが優しさであり、東郷を庇っているのは目に見える。

それでも、『じゃあ私は無罪だ』なんて口が裂けても言えるわけが無い。大切な人達の優しさに甘えて、本当に苦しんだ人達を見て見ぬふりだなんて出来るわけが無い。

(……唯斗君、友奈ちゃん……苦しいよ。あなた達に助けを求めることも出来ない、私が憎い……せめて、全て無かったことに……)

東郷美森が『巫女』として神樹に願うのはたった一つ——東郷美森の喪失。

皆の記憶から、東郷美森を消し去って欲しい。数多に残る記録から、東郷美森だけを存在しなかったことにして欲しい。

冷水を浴び、身を清めながら祈禱を捧げる。

ふと視界を遮った葉は、何かを物語っていた。まるで最後の願いに
応えるように——

「…………あれ？私…なにか忘れてる気が…？」

自室にて。友奈の目は何故か窓を通し隣の家へと向けられていた。言葉にも出来ない喪失感。ただの近所でしかない隣家に、どうして自分は複雑な想いを馳せているのか。

結城友奈には理解出来なかった。

『繋ぐ』

「こんにちはー！結城友奈、来ましたー!!」
いつも通りの放課後。

私は平坦に続く日々にならなく、今日もいつも通り勇者部の部室のドアを勢い良く開く。室内には風先輩と樹ちゃん、先に部室に到着していた夏凜ちゃんが居る。

「こんにちはです、友奈さん」

「おっ、今日も元気だねー。これなら阿呆探しも捗るつてもんよ!」

「はいっ！結城友奈、町中を駆け回る所存であります!」

ここ最近、ゴミ拾いや迷子の猫探し。その他諸々の勇者部への依頼をこなしながら唯斗くんを探している。勿論、市内にいるとは限らないし無駄に終わることもある。

だから休日には市外に足を伸ばしてボランティア活動をしたりもしている。

唯斗くんが何処にいるのか解らないから、私達は私達に出来ることをしながら探している。

「…はあ？今日も唯斗のヤツを探すって言うの？勇者部への依頼を疎かにしたら、元も子もないじゃない」

「ほほう？少し前までは『依頼なんてくだらない!』とか『なんで完成型勇者がこんなことを…』って愚痴ってた癖にねえ」

「夏凜さんも良い意味で変わりましたね」

「う、煩いわよ!?あー、もう！探すなら探すで、ちゃつちやと見つけるわよ!!色々と話さないといけないのは私もだし…」

前までの夏凜ちゃんを批判する訳では無いけど、私はやっぱり今の夏凜ちゃんの方が好きだ。自分に素直になったって言うか、張り詰めた雰囲気緩和された。

それはとても、良い事だと思う。夏凜ちゃんの『完成型勇者』が何を表すのかは未だに解らないけど、その言葉に囚われている雰囲気はもう無くなった。

私は風先輩と同じくらい、夏凜ちゃんのことでも尊敬している。

『勇者』として私が挫けて、負けそうになった時。夏凜ちゃんは親身になって励ましてくれて、私を『勇者』なのだと言ってくれた。

だからこそ、彼女の輝きは自分の事のように嬉しくなる。

「あつ、そういえば。友奈、三ノ輪と乃木は？」

「えーっと、掃除当番だから少しだけ遅れてくるって言ってました！」

「あー、そんなことも言ってたわね……」

「夏凜さん……同じクラスなのに」

二人が来るまでの間、私は慣れない手つきでパソコンを操作してホームページに依頼が届いていないかを確認する。前までは東郷さんがやっていたけど……

(…？あれ…私、今…何を考えていたんだっけ)

考えていたことが、何故か一瞬の内に脳内で霧散した。積もった落ち葉が突風に吹き飛ばされるように、一瞬で見えなくなつて認識自体を逸らされたように感じてしまう。

三日前の朝ごはんが思い出せないみたい、喉元まで出かかっていた何かはいつの間になくなってしまった。

「こんちわッスー」

「ふああ…園子さんが来ましたぜいやあ」

自分の思考に困惑していると、銀ちゃんと園ちゃんが到着した。元気がっぱいな銀ちゃんとは逆に、園ちゃんは大きな欠伸をしている。

唯斗くんがいなくなつて、園ちゃんは銀ちゃんのアパートで暮らしているらしい。元々、銀ちゃんの家族が暮らしている実家は讃州中学から遠い。だから夏凜ちゃんみたいに、一人暮らしを始めたと言っていた。

銀ちゃんと暮らしているなら、あまり寝不足とかはならなそうだけど…少しだけ心配かも。

「園子さん、眠そうですね…？寝不足ですか？」

「授業中もウトウトしてたよね」

「んー、毎日八時間睡眠に合わせて授業中も寝てるんよね。いつつんの言う通り、寝不足かもだよ」

「…なあ、夏凜。犬って一日に十二時間から十四時間くらいは寝るらしいよ」

「……それで?…まさか、私に『犬か!!』ってツツコミを入れろって言ってる訳じゃないでしょうね?」

「こうして夏凜のツツコミ技術が研ぎ澄まされていくのね……勤勉なこと」

「そんなつもり一切合切ないわよ!」

銀ちゃんの振りに夏凜ちゃんが答えて、風先輩が盛り上げる。

私はツツコミとかギャグについて詳しくないけど、唯斗くんや夏凜ちゃんが熱中するんだったら凄く楽しくて、よく分からないけど……うん、きつと楽しい何か何だろう。よく分からないけど。

今日も今日とて勇者部は平和だ。やっぱり唯斗くんが居ないのは寂しいし、物足りないけど……園ちゃんと銀ちゃんが加わったことによつて賑やかになったのには変わりない。

「風先輩!…そろそろ号令お願いします!!」

「よしきた!…さーて、町のゴミ拾いでもしながら唯斗の聞き込みでもするわよー!…樹、ゴミ袋と軍手って何処だっけ?」

「掃除ロッカーの中だよ、お姉ちゃん……一応部長なんだから、物のある場所くらい把握しようよ……」

「イチオウ!?マイシスターよ、一応じゃなくて正式に部長だからね……?」

「普段から適当やってるからでしょ。ホームページは樹と友奈に任せっぱなしだし、うどんは十何杯も食べるし」

「うどんは関係ないでしょ!…うどんは女子力の源なんだし!!てか割と真面目にやってるでしょ!」

「Zzz…」

「はいはい、風先輩も夏凜も。脱線しまくりだから早く出かけましょーよ。あと園子は寝るな」

ゴミ袋と軍手、ゴミバサミを持って本日も勇者部は活動を開始する。とても辛かった戦いの日々を越えて、新しく加わった園ちゃんと

銀ちゃんを含めて。

何故か八つ用意された軍手に、私も樹ちゃんも全然操作の慣れないホームページの編集。壁に飾られた写真の中の私達は、不自然に一人分の間を開けて並んでいる。

——違和感はずっと拭えない。まるで勇者部にはもう一人、顔も名前も解らない部員が存在するみたい……

でも、それもきつと……散華の後遺症のせいだ。身体が戻っても、時々ふらつくことがある。自分の体が自分のものではないみたい、ふと気が付くと糸の切れたマリオネットの如く全身から力が抜けている。

まだまだ身体の異変はある。だから、この違和感も……時間が解決してくれる筈だ。

何故か空いてる隣の椅子をボンヤリと眺めながら、私は首を横に振り、勢い良く立ち上がって外に繰り出した。

「……………発狂していい?」

ただ広いだけの白い空間。

暑くもなく、寒くもない。腹は決して空かないが、逆に満たされることもない。そもそも食べ物自体が存在しない空間だ。

延々と続く白い空間に大の字になり、ぬぼーつと効果音を出しながら某モノホンお嬢様のようにダラける。無論、それが続く訳もなく――

「む……唯斗?……急にどうした」

「ツメさんや、俺がここに来てからどれくらい経った?」

「……ツメ? 私は棗だ」

「ナーちゃんでもツメさんでも、どっちでも良かですたい。僕様ちゃんが言いたいののはさあ、暇すぎて暇次郎になりそうだってトーキングだよ」

「喋り方どうしたのさ……でも、まあ。ここと現実だと時間の流れが違うからね。知らないけど」

郡唯斗が天の神に囚われ、精霊の創った精神世界に入ってから暫くの時が過ぎた。一週間や二週間かもしれないし、もしかしたら数ヶ月は経ってるかもしれない。

朝や夜、空腹や睡眠欲等。大凡の時間感覚は存在しないに等しい。故にもし短くない時間だったとしても、感覚が狂うのは必然的だった。

黒い勇者衣の少女は、適当に祈っておけばその内解決の方法が解ると言っていた。

唯斗もまた『勇者』である彼女の言葉を疑わなかった。自身はイレギュラーと言うことで例外だが、『勇者』は基本的には無垢な善人だ。その性質が過去の『勇者』も同様なのは、唯斗とて解らない。然し目の前の三人は悪人では無い。それだけは、違うことなく理解しているつもりだ。

「やああさあああいいいいいい!!」

「眼鏡ちゃん。既に発狂してる野菜人がいるんですけど。放っておいてダイジョーブ?」

「歌野は土弄りとか定期的にしないと発狂する仕組みだからね。所謂欠乏症っちゅうやつ?」

「怖っ…何この憐れな生物」

「シヤラップ!唯斗だけには言われたくないわよ!!このイカの姿フライ狂人!!」

「ほ、褒めるなよっ／＼／＼」

「…褒められてるのか?」

「褒められてないから!寧ろこの空間に来てもエアイカの姿フライを食べてる唯斗って精神疾患の一種なんじゃないかなって思ってる次第だよ」

唯斗曰く、イカの姿フライがなければエアイカの姿フライを食べればいいじゃないの、との事。おおよそ常軌を逸した行動も、彼を知る者ならば『郡唯斗だから』で片が付いてしまうのだ。

唯斗や唯斗命名野菜人の依存的欠乏症は置いといても、やはり延々と『無』に近い空間に閉じ込められたならば、悪い意味での変化はあつ

て然りだろう。

救いなのは、まだ某野菜人がエア農業を始めていないことくらいだろう。四人中二人が奇行に走れば、それはもう異常集団に分類される。無論、もう一人は『無』を掴み咀嚼するイカの姿フライ依存症の彼だ。

時々雑談したり、ボーツと何も無い空間を眺めたり。そんな日々と呼んで良いのかも解らない時間は際限なく続いていたが――

《ユ……………く……………》

「…ん？野菜人、今なにか言った？」

「ノウ、何もよ」

「……………？誰も、喋ってないが？」

唯斗の頭に何かが聴こえた。

その声は耳ではなく内に響く。聞き覚えがあり、だが何処かノイズ混じりで不明瞭な声。水面に落ちる雫のように白い空間に波打たせる。

《ユイ……………ん……………ユ……………トク……………》

「……………唯斗、多分届いたんだよ。もっと集中して。地獄に垂らされた一本の蜘蛛糸なんだから」

「っ！」

――胡座を組み、目を瞑る。全ての感覚を声のみに向ける。届く管は受け入れなければパイプとしての役目を果たせない。故に、受け入れられる。

《ユイトくん……………届いて……………ユイトくん!!》

「えっ……………あ、亜耶!？」

響くノイズは徐々に鮮明に――幼さの残る少女の声となる。

其れは山田教の『繋ぐ』役割を担う巫女、国土亜耶の声だ。普段の穏やかな雰囲気と一転、騒々しさすら感じるほどの必死な声。彼女らしくないと言えば、それに尽きる。

《っ！っ、繋がった……………!!ユイトくん、大丈夫!?!》

「落ち着け落ち着け。身体は無事じゃないけど、とりま落ち着けって」
《ご、ごめんなさい……うんっ、時間がないから要点だけ話すね？……ユイトくんの体を天の神から解放するには、外から接触する必要があるの》

「外から接触……？早い話、勇者か防人に協力してもらおう必要があるってことか？」

《うん。ユイトくんの体は天の神に操られている可能性が高いから、”外”で呪縛を打ち払う必要があるみたい。『勇者』としてのユイトくんを相手取るなら、同じ勇者様じゃないと……》
「成程な……」

やや早口で語られる現状は、決して明るいものではなかった。唯斗の精神は大蛇オロチと蒼鴉アオガラスによって護られているが、体は天の神に侵食されている。

つまりバーテックスと同様の傀儡的駒になっているのだろう。

ならば当然、性能に大き過ぎる差のある『勇者』と『防人』が戦う訳にはいかない。

「亜耶、外と連絡とれる？」

《うん、短時間だけど……『繋ぐ』のが私の役目だから。……でも、今は勇者様方も大変な状況で……》

「大変な状況？また東郷が何かやらかしたのか？先に警察に連絡するべきか……」

《ち、違うよ！そうじゃなくて……実はカクカクシカジカで——》

「亜耶さんや、カクカクシカジカじゃ何も伝わらな……」

「なるほどね。奉火祭かあ……それに東郷が参加することになったと。んで、その東郷の願いを神樹が聞き届けて、みんなの記憶から東郷が消去されたんだね」

「眼鏡ちゃんはなんで分かるんだよ!? ツメさんと野菜人も為たり顔で領くなよ……」

「ツメじゃない。棗だ……」

きつと、巫女や勇者の適性を持つ少女達は『カクカクシカジカ』を理解する超能力があるのだろう。未だに理解できない言葉を目の前

にして、唯斗はそう結論付けた。

断片的な情報は伝わったが、やはり謎は多く残る。唯斗は『奉火祭』の詳細が解らないし、それによって何故東郷美森が皆の記憶から消えたのかも把握出来ていない。

——然し成すべき事は解る。

「亜耶。友奈……結城友奈に繋いでくれる？」
《うんっ》

亜耶は短く答え、暫し声が途切れる。本来は人間の力では成し得ぬ所業。言わば、対応機種の異なるデバイスでゲーム等をするに等しい。

成し得ぬ事を成すには、相応の何かが必要だ。勇者や防人ならば神の力を身に収める適性。巫女ならば神に対する信仰と清く清純な質。国土亜耶が以前までの国土亜耶とは何かが違っていることは唯斗も感じていた。信仰深い友奈に何処か似ていた彼女が、その心の縛りとも言えるモノを超えたような。

簡単には言い表せないが、今の『巫女』として振る舞う彼女は『巫女』ではなくただの国土亜耶に思える。

其れが良い変化か、悪い変化かは解らない。然し彼女が選んだ道を尊重することが、今の郡唯斗の取るべき選択なのだろう。

——繋がったよ。

もう声にもならない、静かな『念』だけが胸内に伝わる。恐らく、これが限界だったのだろう。一言、ありがとうと告げてから唯斗は目に見えぬラインの繋がった少女に語りかける——

「友奈……」

今日は幼稚園での劇だ。

私は心を掻き乱す『何か』を無理やり鎮めて、刻々と迫る本番に意識を向ける。そうしなければ、苦しくて泣いてしまいそうだった。

その胸のざわめきは、心臓の鼓動と共に大きく——小波だった不安はいつの間にか津波のように私を飲み込もうとしている。

「友奈？顔色悪いけど、どうしたの？」

「あつ、風先輩……」

「もしかして具合悪いの……？って、三ノ輪と乃木も顔真っ青じゃない!?ど、どうする？演劇、中止にしてもらう？」

風先輩と夏凜ちゃん、樹ちゃんは私達の顔を不安そうに覗き込む。

ふと園ちゃんと銀ちゃんを見ると、二人と目が合った。それで察してしまった。二人も私と同じなんだ……身に覚えのない罪悪感や嫌悪感、気を抜いたら爆発してしまいそうで、泣き出してしまいそうな感情に溺れている。

それで不安は確信に変わった。

この想いは偽物じゃない。分からないし、目にも見えない。でも、私だけじゃない。

「ゆーゆ、ミノさん……どうしてだろうね。なんだか、すごく……心が寂しい。大切な人を失ったみたい……」

「あの時と同じだ……散華して、大切な家族について忘れてしまった時と。なんだよ……ッ、この想い……」

「……風。今日は、三人抜きでやるわよ。私が友奈の代わりに勇者役をやるから、樹はナレーションとBGM、効果音をお願い。照明は……今回は無しでいいでしょ」

「……ええ、そうね。樹もそれでいい？」

「うん。大丈夫だよ、お姉ちゃん」

「ま、待って！私、大丈夫です！元氣いっぱいだから……」

「どの口が言ってるの。そんな真っ青な顔で……園児達が怖がるわよ。園子に銀、あんた達もよ」

夏凜ちゃんに気圧される。気を使ってくることが凄く嬉しくて、でも物凄く申し訳がない。無理してでも出たいのに、感情が全く言うことを聞いてくれない。こんなの、初めてだった。

「にぼっし……」

「悪いな、夏凜……変に気を使わせちゃったな。風先輩と樹も、ご迷惑お

かけします…」

「気にしないでください！健康第一の勇者部なんですから!!」

その後、このまま帰らせるのも不安だからという風先輩の配慮で私は医務室で休ませてもらうことにした。私も正直…誰かと一緒に居たかった。一人になったら、本当に寂しくて泣き出してしまっただったから。

「…二人とも、大丈夫か？」

「ミノさんこそ。…なんだろう、この気持ち。すごく…寒いね」

医務室で休んでいても、心臓にこびり付いた不安は一向に離れない。…うん、もしかしたら…私が本当に恐れているのは、この不安すら消えてしまうことなのかもしれない。

解らないことが怖くて、そんな自分自身にこれまでにないくらい嫌悪感を感じる。

「…ちよつとお手洗いに行ってくるね」

誰かの手を握って、安心したいのに…解らない自分自身が嫌いで、みんなに曝け出したくない。そんな矛盾を抱えて、私は早足で医務室を出て真っ直ぐ外に向かった。

外は寒くて、身体が震える。その原因が寒さだけじゃないのは明白だった。

肩を抱いて柱に身を任せ、座り込む。溢れる涙を必死に堪えて、曇る空をボーッと眺めた。

——その刹那。

《ゆ……………と……………み》

”声”が聞こえた。暖かい、男の子の声——それは聞き覚えのある、彼の…

「っ！唯斗くん…？」

小さく彼の名前を呟いて、その声が唯斗くんのものだと確信した。ザー、ザー、と異音が混じるその声は、紛れもなく郡唯斗くんの声だった。

辺りを見渡しても、彼の姿は見えない。

《ゆう……………みり……………せ…!》

「唯斗くん!何処…どこにいるの!？」

声を上げても私の目は影すら捉えない。心做しか、彼の声も頭の中から響いている気がした。

いや、違う。気がした、ではなくて本当に頭の中に響いている。テレパシーみたいに、脳に直接語りかけられているんだ。

《友奈、東郷美森を思い出せ!!》

「ツ!？」

東郷美森…?東郷美森…?…東郷美森…あつ、東郷美森…ツ!

「東郷さん!そうだ…私、何で忘れて…」

思い出した。全て、透明だった彼女とも思い出が少しずつ鮮明に…

頬を伝る涙は止まらない。

ノイズ混じりの彼の声も、もう聴こえない。

胸の中で爆発した想いを抱いて、私は蹲って泣き出してしまった。消えてしまった『約束』は、また暖かな炎を灯して胸に広がる。

吠える覚悟

「園ちゃん！銀ちゃん…ッ!!」

——幼稚園。

園内には風や夏凜の音が愉快的な音楽と共に響く。だがそれも、結城友奈の足を止めることはない。息を切らしながら走る友奈は園子と銀の休む医務室のドアを勢いよく開き、先程と変わらず青白い顔色で手を繋ぐ二人の肩をビクリと震え上がらせる。

血気迫る様子の彼女を見て、二人は只事では無いことを早々に察した。

「ど、どうしたんだ…?」

「銀ちゃん…私、思い出した！全部…この違和感も、胸に空いた穴の意味も…っ！全部、忘れたらダメなのに…ッ」

「…落ち着いて、ゆーゆー」

「だって…だって園ちゃんッ!!」

「——落ち着いて。解るよ…とっても大事で、大切なことなんでしょう?だからこそ、落ち着いて。私もミノさんも、一言一句聞き漏らしなく心に刻むから」

「そうだよ。アタシは馬鹿だからさ、園子みたいに察することなんて出来ない。だから説明してくれ。ちゃんと、聞くからさ」

「っ…!…!…!ご、ごめん。動揺してた…」

涙を流し取り乱す友奈の手を握り、園子は冷静に努める。園子の才能とも言えるカリスマ性は、友奈だけでなく感染するように動揺し始める銀をも無意識に宥めた。

大きく深呼吸をして、友奈は嗚咽を抑える。

未だに涙の止まらない目部に淡いピンクのハンカチを添えながら、然し先程よりは幾度かマシと言える程度には落ち着きを取り戻した。

「…それで、聞かせてくれよ。友奈は何でそんなに慌ててたんだ?」

「…唯斗くんのおかげで、全部思い出したんだ。私達はずっと…忘れていた。大切な友達を…東郷さんを…」

「トウゴウ?.....あつ!?.....えっ...な、何だよ...この記憶!何で...は?い、いや...どうして美森が居ないんだ?...?何で忘れて.....」

——『東郷さん』

その名前を聞いた途端、銀と園子は全てを思い出した。大事な戦友を、大切な親友を、必要な記憶を。津波のように押し寄せる記憶の波は全てを物語る。

銀は困惑にふらつき、膝を震わせる。園子は深く目を瞑り、ゆつくりと立ち上がった。

「.....ちよつと、行つてくるね」

「園ちゃん?...?ど、どこに行くの?」

「大赦の本部」

彼女の声には激しい怒りが滲んでいた。普段の穏やかな乃木園子から発せられた其の声は、友奈と銀を固まらせる。

そこに居たのは讚州中学の乃木園子ではなく、『乃木家当主』としての片鱗を見せる者だ。慌ただしい手付きで携帯端末を操作し、電話を掛けながら医務室を出て行った。

残された銀と友奈は顔を見合せ、背中が冷えるのを感じた。

「...園子のやつ、めっちゃ怒ってる?...?あんな園子初めて見た...」

「う、うん.....」

「まっ、無理もないか。どうせまた、大赦絡みだろうしな。.....うん、友奈。アタシ達はアタシ達に出来ることをしよう。園子に任せっぱなしは嫌だからな...」

「そうだね.....探そう、東郷さんの軌跡を。...先輩達には終わった後に部屋に来て貰えるようにメッセージ送っておくね」

「おっ、賢いなー。演劇の邪魔するワケにもいかないしな。.....あれ?すぐく今更なんだけどさ...友奈、さつき『唯斗のおかげで思い出せた』って言ってたよな?それって...」

「後でちゃんと説明するね。今は、一刻も早く——」

落ち着きながらも、焦りを隠せない友奈。彼女にとつて東郷美森を忘れるということは、自身が傷を負うよりも余つ程、耐え難いことなのだ。

今にも駆け出しそうな友奈に並び、銀もまた決して穏やかとは言えない心境で歩き出す。目的地は言わずもがな、皆で共に過ごし続けた家庭準備室——勇者部部室だ。

互いに不必要な言葉を交わすことなく、急ぎ足で学校を目指した。

「っ……っ……やっぱり、全部消えてる……」

手に持った写真を落とし、友奈は呆然と呟く。やはりと言うべきか、何十枚とある勇者部の思い出の写真の中から『東郷美森』だけが綺麗さっぱりと消失している。

しかし東郷が撮った写真自体は残っている。

——写真だけでは無い。この世の全てから東郷美森が消え去ったのではないのだろう。思い出の中には確かに彼女が残っている。

そして彼女の家も残っている。最初から東郷美森が存在しないことになっているのであれば、彼女が結城友奈の隣家に引越しをしていることもなかった。だが今でも、結城家の隣家には東郷の表札付いている。

「……こんなの、人の手でできる事じゃないな」

「やっぱり、大赦が関わってるのかな……」

「もしくは神樹様だな。記憶……全員が散華したってのも有り得ないし。嫌な予感しかしない……」

写真、勇者部活動記録、勇者部ホームページ、クラスの名簿——どれを確認しても東郷美森だけが存在しないことになっている。異常なのは勇者部だけではなく、世界そのものなのだという証明だ。

部室を散らかしながら東郷美森の痕跡を探し始めてから数十分。

廊下から慌ただしい足音が聞こえてくる。

「友奈……と、東郷は……ッ!?!」

「風先輩……」

ドアをガラリと開けて声を上げるのは部長の風だった。その後ろには樹と夏凜、アタッシュケースを持った園子の姿が在る。

大凡の事情は園子から聞いたのだろうと察した。

「ゆーゆ、最初から説明しよう?どうしてわっしーのことを思い出せたのかも、まだ聞いてないし」

「う、うん。実は——」

「は、はあ!? つ、つまり…唯斗は東郷のことを覚えてたってこと!? アイツ…本当に何処で何してるのよ…ツ!!」

「ひゃつ、夏凜さん落ちて着いてください〜!唯斗先輩も何かに巻き込まれてるだけかもですし…!!」

「…まあ、あの阿呆は置いといて、まずは東郷も唯斗も…居場所が解らないってのかキツイわね。唯斗の時もそうだけど、無闇に探し回っても無駄足だわ」

「フーミン先輩、そこは大丈夫です」

「乃木?……つて、これ…ツ!?!」

園子は手にぶら下げていたアタツシエケースを机の上に置き、躊躇なく開く。中には七つの窪みと、そこに嵌る五つの携帯端末。

大赦で保管されていた『勇者システム』がインストールされているスマートフォンだ。乃木園子の分も含め、実際に友奈達がバーテックスと戦う際に使用していた物でもある。

苦い顔をする風や、驚きながらも受け入れる友奈。辛い思い出が大半だが、人助けに繋がるのは勇者部の本懐。心のどこかでは誇りに思っていたのかもしれない。

「勇者システム…?」

「そうだよ、にぼっしー。…大赦の人もわっしーについては覚えてなかった。でもね、やっぱり可能性があるとしたらこれしかないかなって。だからプンプンって怒って、出して〜!って言ったんだよ。

——でもこれ、ゆーちゃんとわっしーの端末だけ無いんだよね。理由は解らないけど…二人の手元にあるなら……」

「そうかつ!レーダーの反応で居場所が判る!!さっすが園子、アタシ

達旧勇者組のリーダーだな!!」

「えへへ…大切な友達が居なくなっただもん。必死に頭を回したな」

自身を楽観視して語るが、彼女が多少では済まない無理を通してきたのは明白だ。

園子は乃木家の次期当主であり、『勇者』としても満開を続け御姿に近い状態にあった。故にその権限は現当主である乃木をも超える。

だがしかし、それでも神樹の力を使用する『勇者システム』を理由もなしに使うのは不可能だ。少なくともそれが可能性であるうちは、決して許可は降りない。

だからこそ、今手元に『勇者システム』があるのは無理を通しての事だ。

「見て。私の端末のリーダーに、二人の反応は無い。だからもしかして、ゆうちゃんとわっしーは凄くビックリするところにいるんじゃないかなって」

「ビックリするところ…も、もしかして壁の外ですかっ!？」

「…そうだね、いっつん。端末自体の反応が境界内にならないから殆ど確定だね」

「あの変人二人はぶっ飛んでるからね…有り得なくはないわ。特に東郷は何でもやらかしそうだし」

しみじみと呟く風。誰もが顔を曇らせながらも、心の内では同意してしまふ。東郷美森と郡唯斗は、粒揃いの勇者部の中でもトップクラスに行動が読めない。

「だから、『勇者』に成って行ってみようと思うんだ」

園子が指を鳴らすと、頭上に紫紺の花弁が集まり精霊『鴉天狗』が顕現する。其れが表すのは即ち、彼女がもう『勇者システム』を起動しているという事実だ。

代償で身体の機能を捧げ続け、苦しい思いを誰よりも経験してきた。そんな彼女が誰よりも先に飛び立つ覚悟を示す。

「精霊…で、でもっ…力を使えば、また代償が…」

「大丈夫だよ、いっつん。今回からバージョンが新しくなってね、散華

することもないんだって」

「何だか出来すぎてるわ……園子を疑うわけじゃないけど、本当に大丈夫なの？また大赦が隠してるとか……」

「……うん、怖いのは当たり前だね。私だって怖いもの……でも、私一人だって行くよ。ちゃんと考えた。ちゃんと悩んだ。それでも、私はわっしーやゆーちゃんの居ない世界なんて……耐えられないよ。たとえ代償があつても、私は二人を迎えに行きたいな」

「……よしっ、私も……」

園子の言葉に感化され、端末に手を伸ばす友奈。然し直前で手首が掴まれ、停止させられる。

「待ちなさい」

「ふ、風先輩……？」

「聞いて、友奈。……これは初めての時と違うの。私は部長として、みんなをおいそれと危険に駆り出したくない。それは乃木、アンタも同じよ。……勢いで、なんて言うのは止めて」

「っ……！」

単なる責任感だけではない。口では『部長として』と語っても、やはり其れが彼女の本心であることは拭えない。犬吠埼風は一人の間人として、もう後輩達には無茶をして欲しくない。

冷たいと言われても構わない。死ぬよりも不幸なことなんて、風は知らない。だからその場の勢いだけで『勇者』になり、また深く後悔を重ねることだけは絶対に避けたかった。

きつと、もう風には解っている。この選択肢の行末も、自身の選ぶ道も。

それでも皆を言葉で縛ってしまうのは、この場の誰よりも年上として彼女が取るべき手段だったからだろう。

「……フーミン先輩。私は後悔しないよ……ううん、違う。後悔をしないために進むんだね」

「私も園ちゃんと同じです！正直……とっても怖いです。またバーテックスと戦うんだって思うと……手が震えます。……でも、後悔したくない！この勇気は絶対に無謀なんかじゃないんです!!だって私は『勇者』」

だからッ!!」

——園子は勇ましく宣言し、友奈は迷いなく端末を手に取る。目に宿る炎は揺らぎはしても、決して消えない。端末は意思に応え、花弁を溢す。

「愚問ね、風。代償とか危険とか、そんなのは十二分に承知よ。ずっと前から意思は固まっていた——完成型勇者は全てを取りこぼさない。その為の覚悟なんか、問われるまでもないわ!!」

「お姉ちゃん。私、前にも言ったよね。『みんなを護る』って。今でも不相応だつて思うよ?…それでも、あの言葉はまだ残ってる。私の中で燃えてる。だから…覚悟はずっと前からあるよ!!」

——夏凜と樹は気高く吠え、端末を手にする。覚悟なんて今更だ。固めた意思は誰にも解かせない。端末は紅と薄緑の光を放ち、持ち主の覚悟を認める。

「先輩、もう聞くまでもないでしょう?アタシ達『勇者』は脆くなんてないです。仲間のために戦えるなら本懐、『勇者』の誉。多分、これが『勇者の資格』なんですよ」

「三ノ輪…アンタは?」

「覚悟はあるっす。意思だつて誰よりも大きい自信がある。……でも、端末がないんじゃないでしょうもないですからね…」

「……あつ、銀の端末って私の…」

元より、夏凜の端末は銀の後継だ。双斧を双刀に変え、精霊システムを組み込んだものが三好夏凜の『勇者システム』。きつと、それは銀でも起動することが可能なだろう。

『勇者』三好夏凜に万が一があつた場合、その端末を再度使うのが三ノ輪銀だった。乃木園子と同様に大赦の切り札として祀られていた銀は、夏凜の前任であり後任にもなり得る立場だった。

故に三好夏凜が『勇者』であるうちは、三ノ輪銀は勇者に成れない。

「夏凜。アタシの意思——持つてつてくれるか?」

「っ!……そんなの、当たり前よ!!のんびりとお茶でも飲みながら待つてなさい。あの馬鹿共を引っ張り帰つて来るんだから…!!」

「ああ。じゃあ、託したよ」

銀は夏凜を支えるように、背を掌で押す。

「……あああー!!もうっ!!はいはい、判つてたわよ!!どうせアタシが何を言っても、そんなんで止まるアンタ達じゃないわよね!!」

風は奪うようにアタツシエケースから端末を取り、『勇者システム』を起動させる。意志と覚悟を確認した端末は眩く点滅し、全員の精霊を顕現させた。

「お姉ちゃんだつて、最初から答えを決めてたんでしょ?」

「ノーコメントよ!みんなが立った、だからアタシも勇気を示す。たつたそれだけの事よ」

アプリを起動した端末をからは五色の花弁が流れ出て、少女を『勇者』にする。

「さあ、往くわよ!!」

『勇者』達は精霊を携え、外へ繰り出す。あつという間に見えなくなる背中を眺めながら、銀は目を瞑り祈る。

「少し、格好付けすぎたなあ……」

力が無いのはもどかしい。意志を託しても、やはり銀は待っただけの立場は似合わないなと自分に愚痴った。仲間のために震える刃は無い。誰よりも前に出て勇ましく吠える資格は手を離れた。

誰もいない部室で、銀は彼女達の向かった方向をボンヤリと眺めていた――

「あ、あの……お時間よろしいですか?」

「ん？…えつと、君達は…？」

「宗教勧誘さ〜♪」

『勇者』が窓から飛び出した後、銀は部室のドアから顔を覗かせる存在達に気が付く。

助けるために

—— 駆け、跳ぶ。

五人の『勇者』が目指すのは海を越えた壁の先。大切な仲間を取り戻すために、平凡で平穏な日常をまた置き去って非日常へと繰り出した。

(東郷さん、唯斗くん…ッ)

一般人ならば電車や車、船まで利用しても尚数時間にかかる距離だ。然し個々に微々たる差はあれど、総じて神の力を身に収めるシステムだ。

人智を超える身体性能は何十kmの距離を十分と掛からず駆け、建物の屋根を踏み台に驚異的な跳躍で時短を為す。

砂浜を踏みしめ、視界の果てに映るは白化した樹木が重なり、硬化し、四国を覆う『壁』。嘗て東郷美森が破壊し、バーテックスの侵入を許したモノと同質であり一部分だ。

(速く…もつと、一刻も早く…！)

—— 先頭を駆ける友奈は焦る気持ちを脚に乗せ、拳を握り締める。足並みを揃えなければ、成せることも成せなくなる。自身の我儘で全てを護ると息巻く友奈でも、決して傲慢では無い。神敵の蔓延る壁外で、一人だけ突飛する末路など想像に難くはない。

視界いっぱい広がる海を目の前に、友奈が先導する『勇者』は一切の躊躇もなく飛び出す。

幾ら『勇者』とて、一里を一飛びで越えることなど不可能。建物や突起物のない海に飛び出したら、いずれ着水するのは目に見えていた。

それでも『勇者』が飛び出したのは単なる焦りだけではなく、水上に漁船が見えたからだ。端的に換言するならば『足場』だ。

「みんな、踏み越えるわよ!!」

「えつと…す、すみませーん!!」

風の言葉に従い漁船を足場に再度跳躍、五人が順に踏むことにより

漁船は大きく揺れ、汽笛を鳴らす。

幸い、と言うべきか。そのお陰で五人の『勇者』は分厚い壁の上まで到着した。

「さーて、ここからが本番ね」

風は努めて明るく、まるでこの先に苦など無いかのよう言い放つ。外が地獄に等しいことは『勇者』に限っては周知の事実だ。それでも風が明るい声質なのは、変にプレッシャーを与えないようにしているからだろう。

決して楽観視はしていない。寧ろ、風は誰よりも気を配っていると、言っても過言では無い。

結界を目の前に、『勇者』は手元に煌めく花卉を集め己が武器を出現させる。

「この先はズゴゴゴッて感じだから気を付けてね」

「——私が先頭を往くから、園子はサポートお願い」

「……にぼっしー。やる気満々だね？」

「銀の分まで背負ってんよ。最低でもアンタらの二倍は戦果を上げるつもりなんだから!!」

「んく、どうしてかな。にぼっしーってミノさんに似てるんよね。在り方的な?…同じ端末だから、蓄積されたデータの影響?…それとも、性質が似通ってるからこそ…神樹様はにぼっしーを選んだのかな?」

「どっちでもいいし、何でも構わない。成すべきことだけ考えられれば、後は蛇足ね」

「わあ。確かにねー」

三好夏凜の背を見て、園子が思い浮かべるのは過去の記憶だ。唯斗が翻弄し、須美が敵の攻撃を妨害する。銀は真正面から斬りかかり、園子は攻防に優れた槍でサポートしながら作戦を立てる。

その時の銀の背は、確かに端末を通して夏凜に受け継がれている。燃える紅は花を変えても尚健在だ。

頼もしさに胸を叩かれ、園子もまた一層と槍を持つ手に力を込める。

「——よしっ、往こう!!」

友奈は桃色に染まった瞳で不可視の結界を見詰め、外に向かい二歩三歩と踏み出した。

不可視の幕を通り、その先は紅蓮の炎に覆われた死の世界だ。火柱が天をも飲み込み、悠々と舞う星屑も相まってまるで色だけを変えた海の中だ。

地を食み空を支配する星屑は壁には近付かないものの、その周辺にいる生き物には容赦なく喰らいにかかるだろう。

大群で宙を泳ぐ姿は宛ら結界外の世界を滅ぼす悪魔の犇めきだ。全てを焦がす紅と生者を死に至らせる白は今にも四国を飲み込みそうな程、無限に等しく増殖する。

(……っ！……こんなところに、二人が……?)

絶望の具現化を前にして、友奈は懐疑的になる。『外』に二人がいるというのは飽くまでも可能性でしかない。決定事項では無いからこそ、友奈だけでなく皆が同様に疑問視した。

「あつ、レーザーに反応あつた!?!」

——端末を片手に園子は声を上げる。

「ええっ!?!ど、何処……?」

友奈達は園子の端末を覗き見て——絶句する。

端末には自分達を除き、確かに二つの反応がある。一つは数百メートル先の、意外と近辺。青い点の横には『東郷美森』と記されていた。間違いなく彼女がこの世界に存在する証明だ。

「近い……っつて!?!ま、まさかあれが東郷なの……ッ!?!」

「夏凜さん?どうして空を見上げて……えっ」

丁度、東郷美森の反応がある座標。真つ直ぐ見渡す限りは煉獄のみだが、その真上には巨大な黒の球体が浮かんでいる——否、其れを果たして球体と呼称しても良いものか。

光を飲み込む漆黒。心做しか、深い洞窟の入口にも見える。敢えて呼称するならば、それはきつと……

「ブラックホール……?」

慄く風の声は嫌に響く。

天空城の如く空を支配するブラックホールは東郷美森自身か、それとも彼女を捕らえる監獄か。

無論、詳細など考えても解らないだろう。確実なのは彼女がそこに居て、友奈達は今からそこに向かわなければいけないという事実のみ。

「…お姉ちゃん…っ、東郷先輩もだけど…」

樹の拙い言葉は怯えにも感じられる。彼女が暗に示すのは東郷美森と同様に姿の見えない郡唯斗の存在についてだろう。促されるままに皆は園子の端末に視線を集める。

そして、確かに彼の反応も感知した。

もう一つの反応は——

「……わ、私達と同じ位置……」

その不自然な表示に樹は疑問の声を零す。

郡唯斗の反応は五人の『勇者』達と重なっている。友奈達の集まる壁の上、即座に見回しても唯斗の姿は——

「違う……上よ!!」

——ビゴオオオオオン!!

夏凜が叫んだ瞬間、真上から人間大のピコピコハンマーが振り下ろされた。

友奈と園子、夏凜は即座に地を蹴り、躲す。風もまた初動で遅れた樹を抱えて攻撃地点から転がるように離れている。

——これがバーテックスだったら、夏凜は反射的に攻撃していただろう。他の『勇者』も同様だ。然し聞き慣れた攻撃音は、彼なのだ。無理矢理にでも認識させ、攻撃の手を止めた。

全員が言葉を失う。無論、壮絶な攻撃の威力に押し黙っているのではなく、その攻撃手を見てのことだ。

「な、何やってんのよ……アンタ……い、今まで何処に……っ!」

「——」

「風！コイツは——唯斗は正気じゃないわよ!!」

場外れの武器だ。黄色の柄に赤の打突部。その担い手は漆黒の面を被り、俯く。糸で垂らしてるだけのマリオネットのように、力の抜けた郡唯斗は脱力した腕でゆっくりとピコピコハンマーを肩に担いだ。

「唯斗くん！」

「っ！ゆーゆ危ない!!」

「えっ…きやあっ!!」

「くっ…!!」

ずっと探していた彼。親友の存在を思い出させてくれた彼。大切に、大事な仲間だった彼。

強くて心強い仲間の筈だった彼は無常に武器を振りかかり、加減も躊躇もない攻撃を友奈に放つ。

危険を察知した園子は友奈の肩を後方へ投げやり、槍の先を展開して盾を築く。力任せに振るわれたピコピコハンマーは、園子の盾に触れた瞬間に手首を返し完全に威力を受け流される。

地面に小さなクレーターを作り、唯斗は体勢を崩す。その隙に樹はワイヤーで唯斗を縛り上げ、伸縮するワイヤーの反動で後方に投げ飛ばした。

「園子さん、大丈夫ですか？」

「わああ…いっつん心強い！勇者部最強の名はだてじゃないね」

「そ、それ誰が言ったんですか!?!…唯斗先輩ですか？また唯斗先輩なんですか!?!もく!!あの人は…っ!!」

唯斗には殺人ワイヤーと言われたり、死神ワイヤーと言われたり。遂には望んでもいない勇者部最強の名をも冠せられてしまう始末。これには樹も御怒りだった。

「ど、どういうこと…？なんで唯斗がアタシ達に攻撃を…」

「十中八九、正気じゃないんだらうね。ゆーちゃんはヒロイン体質だからね…」

「…乃木は嫌に冷静ね」

「慌てて状況が好転するなら、そうします。逆に悪化するなら、自分を

騙してでも冷静でいますよ」

恐らく、冷静を装う園子は誰よりも動揺している。他よりも脳を酷使し、あらゆる可能性を考えていた園子でさえ『郡唯斗は味方である』という固定観念は崩せなかった。

天才であり、優秀である彼女故に想定を大きく超える事態に直面すると真価を発揮出来なくなる。

それでも冷静に戦況を把握することに脳を回し、東郷美森と郡唯斗の両名を救出するにはどうするべきかを考える。

五人で分担するのは決定事項だ。空高くに位置する東郷まで辿り着くには自身の『満開』の能力が必須。それに加え、千をも軽く超えるバーテックスや星屑、強化体がそれを守護するように配置されている。

自分は『船』であり、送り届けるのはきつと友奈。範囲攻撃に長けた樹も東郷美森の救出には必須だろう。火力や手数もあるに越したことはないので夏凜と風も同行してもらおうのがベストだが、そうすると唯斗を救う者がいなくなる。

見たところ、操られている唯斗の能力は通常の状態と変わりない。足止めだけなら一人でも十分だろう。然しバリアの上からでもダメージを与えられるピコピコハンマーは厄介極まりない。

(……フーミン先輩とにぼっしーに残ってもらわうべきかな)

浮かんだ作戦を皆に共有しようと、園子が口を開きかけると――

「みんな、あのね……」

「……風。唯斗は私が相手するわ」

「か、夏凜……!?!」

夏凜は言葉を被せて、会話の主導権を握った。園子や風を射抜く視線は彼女を黙らせるには充分だ。

「決定事項よ。アレは誰にも譲らないし、自己犠牲の気も毛頭ない。冷静に考えてみても、唯斗の弱点は唯斗の『勇者システム』の身体性能の低さよ。だったらスピードで翻弄できる私が残った方が確実だし、私は完成型勇者よ?疑問の余地なんて残されてないわ!!」

「……だ、だったら私が!」

「リーダーのアンタが我先に抜けてどうすんのよ」

「じゃあ私が!!」

「友奈は東郷を助けるんでしょ。それに、言った筈よ。アレは誰にも譲らないって」

既に夏凜の視線は遙か後方に飛ばされた唯斗にしか向けられていない。その決意を解かせる者は勇者部にはいないし、事実としてこの人選は理にかなっている。

「……フーミン先輩。私はね、にぼっしーになら任せても良いんじゃないかなって思うんよ。にぼっしーは——完成型勇者の三好夏凜は強い。きつと、あの頃のゆうちゃんとは比べても見劣りしないくらい」それは園子の送れる、最大限の褒め言葉だ。彼女にとって過去の郡唯斗は自分達を凌駕し、皆を導く園子を護り通してくれた『最強』。記憶を失くした唯斗ならば兎も角、園子はあの時の彼は未だに越えられないだろうと思っている。

だからこそ鍛錬を続け、紛い無き『完成型』を名乗る三好夏凜を心から尊敬出来る。きつと、二人を比べることなんて出来ない。それでも園子の目には、過去の唯斗と今の夏凜は同じ高みに映った。

面影に銀を感じ、在り方は過去の彼に似てる。

無論優劣など付ける気は毛頭ないが、それでも園子が最も信頼して確信しているのは三好夏凜だ。本来ならば自分が残ると言いたかったが、夏凜になれば任せても良いと思ってしまうのだ。

「……ライバルは強烈だなあ……」

しみじみと呟いた独り言は皆の耳に届き、さりとして彼女の心情を察した者はいない。

有無を言わせぬ夏凜の態度に、今の面子では最も戦歴が長い園子が全面的に肯定を示している。

風は長く重い溜息をこぼし、真っ直ぐに夏凜の目を再度見つめる。それは猛々しい希望の紅が写る『勇者』の瞳だ。諦めも絶望もない、まるで物語に登場する英雄のような瞳だった。

「…勝ちなさい。そして助けてきなさい。部長としての命令よ」

「任せなさい。完璧にこなしてみせるわ。完成型勇者に失敗なんか存

在しないんだから」

「夏凜ちゃん、お願い：頑張つて！」

「アンタもね、友奈。気張りなさい」

短く言葉を交わし、四人と一人は背を向ける。別れなんかではないのだから、長々しい言葉なんて不要だ。日が暮れる頃にはまた皆で笑つて、うどんを食べながら軽口を叩き合う。

少し未来の『日常』に想いを馳せ、夏凜はそんな考えの浮かぶ自身に驚きながら一歩二歩と前に進む。後ろで咲き誇る蓮は希望の光だ。後光に照らされながら夏凜は吊るされるように力なく立ち尽くす唯斗に刀を向ける。

「——往くわよ、唯斗！」

一閃、二閃。

息をつく間もなく放たれる剣撃を、唯斗は尽く躲す。幾らシステムで強化されたとしても、唯斗と夏凜では仕様が違うので少なくとも差はあった。

然し無駄のない微動で躲し続ける彼の動きは彼女が最後に見た時よりも洗練されている。歪だった動きが完成系に近付いていたのだ。「ふっ！せいっ！！…ふん、このくらい躲してもらなくちゃあ落胆するところよ！！——そこよっ！！」

「っ……」

剣舞の如く振るわれる剣撃の嵐の中、夏凜の放った短刀は後方でピコピコハンマーを振りかぶる『分身体』の腹に刺さり消滅させる。

これも唯斗がよく用いていた戦法だ。唯斗本体が囷となり、攻撃だけに關しては本体と同威力の『分身』にさせる。

三好夏凜には唯斗のあらゆる動きが全て見えていた。

「——」

「今日は珍しく無口ね！いつもは！ウザイくらい煩いの！！はああああ！！」

「っ！」

振るわれた右方の刀はピコピコハンマーの側面に叩き付けられ、その軌道を大きく逸らす。

唯斗のメイン武器であるピコピコハンマー。その能力は『反射』だ。異常な攻撃力もカウンターの様な表面の反射に加え、裏面で空気を反射することによって起こるモノだ。

つまり、唯斗の攻撃は全て打突部に集約されている。

当たればバーテックスとて即死級の攻撃も、条件付きでピーキー過ぎるものだ。自身の身体能力は低く、攻撃も武器が必須。その武器に関しても攻撃部が酷く限られており、唯斗が多用するハンマー投げも当たる部位によっては殆ど無効になるデメリット付きだ。

故に唯斗のシステムは、唯斗以外には扱えないピーキー性能となっている。

「そのダツサイ面、外しなさいよ!!」

「……っ」

「…へえ、ヤケに避けるわね。特に仮面を狙った時は大袈裟に!…つまり、アンタを操ってるのはソレね!!」

唯斗の顔面に付けられた漆黒のフルフェイスマスク。目すら隠したソレは、執拗に狙う夏凜の斬撃を明白に嫌がる。

「まだまだ付き合ってもらおうわよ、唯斗!アンタがバテて倒れるまでね!!」

「――!」

剣舞はまだまだ続く。片方が尽きるまで、もしくは変化が起こるまで。

「堕ちろ…枯花」

オンシジュームは枯れ、黒く溶ける。

不滅の炎

「堕ちろ…枯花」

「なっ!？」

少年が仮面の下でそう呟いた途端、明確な変化が起こる。

紅く燃える空にはオンシジュームが咲き誇り、然しまるで何千倍も時間を早めたように一瞬で茶色に枯れ果て、徐々に黒いヘドロへと姿を変えて唯斗と夏凜に降り注ぐ。

それを攻撃だと解釈した夏凜は即座に距離を取るが、違った。

枯れ溶けた花は蠢きながら唯斗に絡まり、脈動し、浸透する。鈍く邪悪な光を発しながら形状を変化させた。

勇者服は黒く染め上げられ、その上から西洋の鎧のような漆黒の物体が出現する。一切の光を通さないそれは闇に堕ちた勇者か、将また正義を討つ悪魔の騎士だ。

場にそぐわないピコピコハンマーもドス黒い粘液に飲み込まれ、ベキベキと音を立てながら形状を変化させ、反った幅の広い刃の付く斧——漆黒のバトルアックスへと姿を変えた。

「何よ、これ…ッ!」

「——参る」

「っ!は、速いッ!」

たった一瞬、瞬きの間に黒い騎士は眼前に迫っていた。横薙ぎに振るわれる戦斧は空気を切り裂き、夏凜の腹を抉りに掛かる。

無論、夏凜とてなすがままに斬られる木偶の坊では無い。戦斧の纏う異様な雰囲気を感じ取った夏凜は双刀での防御よりも躲すことに専念する。

「くっ…このっ!——『満開』!!」

「——っ!」

猛攻に堪らず、三好夏凜は切り札を切った。

炎に飲まれる空には皐月が煌めき、狂い咲く。溢れる花卉は球体の嵐となり夏凜を包み込み、追加武装を施す。

背に黄金の日輪を背負い、勇者衣は神気を放ち純白の袴袴と混ざりあつた戦闘衣に変化する。日輪から連なるのは巨大な四本のアーム部と、紅い四本の日本刀。

三好夏凜の最大の武器である手数に加え攻撃範囲、身体性能を大幅に強化された其れは近付く神敵を容易く切り裂くだろう。

「はああああああああ!!」

「——!」

紅い闘志と黒の瘴気がぶつかり合い、四本の刀と漆黒の戦斧は火花を散らしながら拮抗する。

「このアホ唯斗オオ!!変に操られてるんじゃないわよ!!」

「——」

「黙ってないで……何か言えやああああ!!」

「っ!?!」

夏凜は戦斧をいなし、体勢の崩れた唯斗のフルフェイスマスクに向かって脇差を放つ。咄嗟に避ける唯斗だが、初動で遅れた故に頬部分に掠り小さな傷を刻んだ。

「——次は真ん中に当ててやるわ。そのダツサイ仮面をぶっ壊して、戻ってきてもらうわよ!!」

目に見えて動揺する黒い騎士。三好夏凜はそこに勝機を見出した。手数では大幅に勝っているが、唯斗の身体性能や武器の威力は彼が『枯花』と唱えた途端に強化された。軽々と振るわれるバトルアックスも、もし夏凜が一撃でも食えば致命傷になり得るだろう。

つまり、圧倒的に不利な夏凜が五体満足で勝利を収めるには唯斗の顔を覆う漆黒のフルフェイスマスクを破壊しなければいけない。

攻撃には当たらず、彼を傷付けずに仮面だけを破壊する——

「上等!」

「——」

——制限時間は長くない。

今の状態の唯斗を相手に、通常状態では敵わないだろう。『満開』をしても拮抗か、一手間違えたら一気に不利にもなってしまう現状。

それでも『勇者』は猛る。大切な仲間を奪われた屈辱も、東郷美森

を救出しに向かった彼女達への憂いも、もつと早く事の重大さに気が付かなかつた自分への怒りも——全てこの場で洗い流す。

唯斗を助ける。そのあと直ぐに彼女達を追う。完成型にとってはその程度の事だ。不利も無情も知ったことでは無い。

「見なさい！天の神にバーテックス共!!勇者部には最強の『勇者』三好夏凜がついてるわ!!神だとしても、私の大切な仲間を奪うだなんて絶対に許さないんだから!!」

ゆつくりと、新たに出現させた分身と共に迫り来る唯斗。牽制で放つ脇差も四人の唯斗には届かず、黒の甲冑で覆われた腕で払い除けられる。

仮面が脇差で破壊可能な反面、彼を覆う西洋の鎧は生半可な攻撃では傷すら付かない。『勇者』における精霊のように、『枯花』によつて物体化した甲冑は皮肉にも彼の身を護っている。

「——ダサイ甲冑で護られてるなら、手加減なんて必要ないでしょうね！」

言葉を返さない少年に向かって夏凜は半身で刀を構える。元は二刀流、『満開』で追加された四本のアーム。計六刀流での戦法は、武に長けた夏凜とて解らない。

相手が巨体のバーテックスならば狙い、振るうだけの工程だけで済むものを唯斗は安易な攻撃ならば容易く躲し、その上『分身』を用いて乱戦を展開する。

(……ちつ、厄介ね)

通常の変身ならば手を出せない。然し慣れない『満開』の六刀流では攻めあぐねる。

「……うん、関係ない。勝つから勇者、出来るから完成型。小細工なんて最初から不必要よ！」

夏凜はアーム部の持つ刀を内に構え、一気に距離を詰めて斬撃を外に解き放つ。当然、その程度の攻撃は唯斗もバックステップで容易に躲すが、夏凜は自身の手に持つ双刀を×字に振り下ろし唯斗の分身ごとまとめて撫で斬る。

「——えっ」

目の前で起こった異変に夏凜は声を漏らした。

まとめて斬った唯斗は全て消え失せたのだ。空気に溶けて、最初からそこには何も存在しなかったと錯覚しそうになるくらいだ。

三好夏凜は必死に脳を回し、状況の把握に努め——気が付く。全て分身体だった。思えば、頑丈な甲冑を装備しながらも夏凜の攻撃を躲し続けていたのは分身を解除されないようにだったのだろう。

「っ!？」

背が凍る感覚。

強烈な寒気を感じて振り返ると——

「あっ——」

たった一回だ。全て、完璧に対応出来ていた筈なのに、三好夏凜は一手だけ間違えたのだ。一秒にも満たない時間の中で、次の瞬間には眉間ごと身体を両断する漆黒のバトルアックスがゆっくりと流れる。いつからだったのだろうか。もしかしたら、最初から夏凜が相手取っていたのは分身体だったのかもしれない。

（ごめん、みんな…）

一生のように引き伸ばされた一瞬。

次の瞬間には脳天から両断されているのだろうか。

夏凜は目を瞑ることなく唯斗の顔を眺めて、仮面の下から漏れる水に気が付く。それが苦しみか、将また三好夏凜を案じてのものなのか。

きつと、操^{マリオネット}り人形の彼は答えられないのだろうか。

死の淵で、夏凜は不思議と唯斗を恨む気にはなれなかった。つまりない人生を、楽しく飾ってくれた仲間だ。ほんの少しだけど、夏凜にも解らない、心地好い感情をくれた大切な人だ。

死の直前。三好夏凜は無意識に刀を落とし、包み込むように彼に向けて両手を伸ばしていた。

「」

無情な仮面には、一体何が映っていたのだろうか。

「クソっ！止まれよ……止まれ止まれ止まれええ!!」

——白い精神世界。

徐々に部屋黒く侵食されるのを感じながら、唯斗は声を上げた。目を瞑れば、瞼の裏には自身と三好夏凜の戦闘が映る。

唯斗は無力だ。

操られて、仲間に襲いかかって。まだ汚染されていない精神世界で唯斗は叫ぶことしか出来ない。

唯斗が外に干渉するには唯斗を傀儡たらしめる直接的で物理的な原因——漆黒のフルフェイスマスクを破壊する必要がある。

ここまでは少し前に繋がった国土亜耶から間接的に聞いたし、そのために誰かが自分と対峙する必要があるも把握していた。

「何で……ッ、夏凜一人なんだよ……!!」

防人としての訓練が唯斗の過去を呼び起こし、確かな強化を——否、取り戻していた。それだけならば他の『勇者』でも対応が可能だったが、問題は『分身』だ。

尽く攻撃を躲し、一撃でも攻撃を当てれば形成を逆転できる武器。それらは唯斗と相性が良すぎた。その欠点だった身体能力の低さも、『枯花』で解消された。

自惚れでも傲慢的思考でもなく、傀儡となった郡唯斗は『勇者』一人で止められるモノではない。単なる事実だった。全て想定外だったのだ。

「クソ……何か手は………は？だ、誰もいない……？」

意見を求めようと三人に向くと、その姿は消え失せていた。モノトーンの勇者衣を纏った少女も、暇があれば野菜について語っていた少女も、白髪で寡黙だった少女も。

全て唯斗の妄想だったとでも言うかのように、無情にも姿を消していた。

「……空間が黒くなってる。……チツ、精神まで汚染されてるのかよ……!!」

確証はないが、精神汚染と彼女達が消えたのは決して無関係ではな

いだろう。精神が汚染されているということは、精霊の力を凌駕するナニカがあるのだ。その正体は考えるまでもなく、天の神だ。

恐らく、少女達は天の神に見つかる訳にはいかなかったのだろう。故に姿を消した。少なくとも、唯斗にはそうとしか思えなかった。潰える希望。

囚われの身に過ぎない唯斗には、打つ手が残っていない。仲間危機も見ていることしか出来ない。折れかける心に同調するように、唯斗の精神世界もまた漆黒の影に覆われ、飲み込まれ続ける。

「クソッ……………」

唯斗は己の無力に絶望した。

『ゆ……………ん……………』

「っ！…亜弥…？」

既視感を覚える。それは繋がった時と同じ感覚だ。

唯斗は深く目を瞑り、その声を受け入れる準備をする。繋がるには、此方も手を差し出さなければいけない。声を聞くには、此方も耳を傾けなければいけない。

『ユイトくん、もうすぐだよ。…………もうすぐ、勇者様が到着するから』

「ゆ、勇者…？」

希望の知らせの意味を、唯斗はまだ理解出来なかった。

(ごめん、みんな…)

一瞬後には絶命する。

夏凜が無造作に伸ばした手に、唯斗は一切の視線を向けない。非情に振るわれる死の斬撃は全てを飲み込み、三好夏凜を終わらせ——

「どっっっせいやあああ!!」

——はしなかった。

その光景に夏凜は言葉を失う。強く熱い声は熱風を巻き起こす。煌めく斬撃は陽炎を発生させ、豪と奏でた。

漆黒の戦斧に紅い炎を纏った双斧がぶつかり、唯斗の身体を大きく吹き飛ばす。

「——っ!?!」

『勇者』三ノ輪銀、見参!!」

「なっ!?!え、ええっ!?!ど、どうして…!」

唯斗も夏凜も、激しく動揺する。何故彼女がここにいるのか、何故端末が無いのに『勇者』に変身しているのか。

尽きない疑問。然しそれを吹き飛ばし、ただそこに在る事だけを証明する少女——三ノ輪銀。

紅い勇者の前に、もう一人の紅い勇者が参上した。遅れてやって来るヒーローの如く、猛々しい声は煉獄を震撼させる。

——不滅の炎は凛々しく笑った。

復讐者（リベンジャー）

——時は少しだけ遡る。

五人の『勇者』が決意を言葉にして、昂る意思に導かれ東郷美森と郡唯斗を取り戻しに行った直後だ。

性に合わないなと自分に呆れて笑いながら、銀は無力に窓の外を眺める。嘗ては自分も、猛々しく声を上げて駆け出すあちら側だった。一番槍を名乗る、燃える鉄砲玉だった。

懐かしくて、誇りだった日々。辛くても、大切な仲間のために何度でも立ち上がった。それが嬉しくて、やはり三ノ輪銀の誇りだったのだ。

でも、今は違う。

銀の端末は三好夏凜に受け継がれ、不滅の炎は新たな宿主の元で轟々と燃え盛る。

それを奪い、自分の力だと主張するのは『勇者』ではない。先輩として、先代として銀が出来るのは意志を託して背中を押すことだけだ。他にもない『勇者』の誇りがそうさせて、自身をも納得させた。

誰よりも『勇者』として仲間を護りたいと願い続ける少女も、今は過去の話だった。

「はあ……」

自然と漏れる溜息。

自分だけは蚊帳の外、それが疎外感にも思えてしまう。昔はもつと純粹に物事を受け入れることが出来たのに、成長を重ねたら弄れた思考も身に付いてしまった。

中心に居たいとは思わない。ただ大切な人達の足を引っ張りたくないし、背中を支えて道を先導したい。物語の勇者がキョロキョロと在るように。

「あ、あの……お時間よろしいですか？」

「ん？」

薄暗い勇者部の部室。半開きのドアから顔を覗かせる二人の少女

だった。たどたどしく遠慮がちに声を掛けてきたのは柔らかい退黄色の長髪が特徴的な、幼く可愛らしい少女。

続いて、胡散臭い笑みで銀の動向を窺うのは、瑞々しい薄緑の長髪の少女だ。外見年齢こそ同年代に見えるが、纏う雰囲気は母や祖母よりも大きく偉大に感じられる。

大赦の巫女の衣装と讃州中学の制服。

奇妙な二人の組み合わせは、自分が察しの良くないと自覚している銀には、やはり理解し難い。

(……あれ?……薄緑の髪の子、見たことある気が……?)

既視感に似た、銀には形容し難い感情を受けた。例えるならば、学校で何回かすれ違った少女の顔を思い出せないような、一週間前の昼ご飯が頭に浮かばないような——存在は確証しているのに、詳細は何も分からないのだ。

「……えつと、君達は……?」

「宗教勧誘さ〜♪」

「シューキョーカンユー?」

要領を得ない返事は銀を更に混乱させた。園子ならば即座に察したのだろうか。東郷ならば現状を推測できたのだろうか。唯斗ならば雰囲気で状況を把握出来たのだろうか。

改めて、自分の無力さに悲しくなるばかりだ。

「あ、あのっ……僭越ながら、簡単に説明してもよろしいでしょうか?」

「あ、あはは……むしろコッチからお願いします。難しいことは苦手なものですねえ……」

「はい。……山田様の仰った『宗教勧誘』とは、神樹信仰から山田教に改宗……つまり、簡単に言いますと……えつと……」

「亜弥ちゃんはお力タイな〜。勇者ちゃん、簡単なお話し。頼りにならない神樹なんかよりも、山田くん率いる山田教徒になりなよ。誘い文句は……そうだね、『少女よ、力が欲しいか〜!』的な感じ?」

「っ!?!ゆ、勇者について知ってる……っ!?!君達、大赦からの……いや、でも改宗を勧めるってことは……ん?んん?……うんっ、解らない!」

溢れる疑問符。多大な情報は銀の頭を鈍く働かせ、それでも答えが出てこない現実は何処か虚しく響く。

少女から『山田様』と呼称される薄緑髪の少女は、銀を『勇者ちゃん』と呼んだ。それが勇者部員故に向けられた言葉なら問題ないが、違うだろう。

彼女達は銀の事情を知り、その上で声を掛けてきた。目的は口にした通り改宗なのだろうが、その意味も込められた感情も銀には知る由もない。

少なくとも大赦と無関係では無いが、大赦所属というわけではないのだろう。

「清々しいのは好印象だね。あつ、イカの姿フライ食べる？ 亜弥ちゃんにもどーぞ」

「あ、ありがとうございます」

少女は懐からイカの姿フライを一パック取り出し、慣れた手つきで開封して配り始める。その姿は某イカの姿フライ狂いを幻視するレベルだ。

「えっ、なんでイカの姿フライ？ 頭唯斗ってるの……って、初対面の人に失礼か」

「はいっ、頭ユイトくんってます！」

「喜ばれた!? おつかしいなー、阿呆とか馬鹿とか気狂いの意味がこもった罵倒なのに」

「勇者ちゃんってば唯斗に遠慮ないなー。あつ、因みに山田くんは頭唯斗ってないよ？ イカの姿フライを食べてるのも惰性だし」

退黄色の髪の少女——国土亜耶は『唯斗ってる』を好印象的に捉え、満面の笑みで返す。これには皮肉を込めての言葉を吐いてしまった銀も猛省していたが、そもそも銀とて『唯斗ってる』の意味を大して理解はしていない。

対して『山田くん』は割りと不名誉な意味が込められていたと察していた。

「さてさて、さーてのさーて。勇者ちゃん、話題を戻そう。時間が無い。猶予が無い。そして君には力も無い。何にもない君に、天啓さ」

「……さっき言ってた、『力が欲しいか』ってのは？えっと、山田さん？…が『勇者』とかについての知識があるのは、アタシだって理解したよ？だからハッキリと、再三頼んでる事だけど…端的に換言してくれるかな？」

「そのつもりだよ——三ノ輪銀、唯斗を助けたいよね？でも煮干ちゃんに端末を譲渡したから、君に打てる手は皆無な現状。嘆かわしい、虚しい、淋しい。そんな欲深い君に山田くんは力を与えよう！」

山田くんは大袈裟に両手を広げ、高らかに声を張る。まるで演劇の一幕だ。然し真に迫る挙動は明らかに演技の幅を超えている。

——『力を与える』

その言葉に銀は期待を抱いた。何百何千と世の中に生み出されてきた、物語の始まりだ。決して英雄譚にはなり得ないが、勇者の在り方の其れだ。

刹那、山田くんの見開かれた瞳は銀の瞳の奥をギョロリと覗き見た。

背がゾツとする感覚に肌を泡立てながら、然し銀も彼女の眼を強く見詰める。目の前の彼女が単なる一般人に収まる者ではなく、魑魅魍魎の類にも思えて、其の発言が現実味を帯びているのを感じる。

「亜弥ちゃん、自己紹介して？」

「…はい。初めまして、先日より山田教の『繋ぐ者巫女』を担うことになりました国土亜耶と申します。望みは一つ、大切な人——ユイトくんを救うことです」

「山田くんは山田くんね。山田教で奉られる……奉らせている山田くんだよ？都合あわせて忘れてるかもだけど、一時期は勇者ちゃんと同じクラスだったよん。巫女勇者ちゃんのロスト現象と同じって考えてにやー」

『繋ぐ者巫女』に『山田くん』……うん、山田さんへの既視感はそういうことか…。よしっ、アタシは三ノ輪銀！今は勇者部所属の三ノ輪銀ツス！！

山田くんと亜弥は自身の正体を明かした。それはきつと、銀の『答え』を察しているのだろう。決して銀には無くて、親友達が持ち合わせ

せている聡い感性。それが山田くんには備わっている。

「――三ノ輪銀。『答え』を聞こうか」

「……アタシはこれでも、信仰深い方なんですよ？良い事があれば神樹様に感謝するし、勝負事の前には祈りだって捧げる」

「それは素晴らしいことです。四国は神樹様の御恵みで成り立っています。だからこそ、わたし達は感謝を捧げる心が必要なんです」

「…亜弥ちゃん、それは勇者ちゃんの発言を遮って心を抉る鬼畜発言だよ？所謂背中撃ちってやつ。あーあ、山田くんの巫女は無意識鬼畜かあ……あー、うん。勇者ちゃん、あんまり気にしないでね？」

「えっ、ええっ?!すみません！わたし…何か余計なことを口走ったみたいで…」

「ううん、大丈夫。この気持ちは欺瞞じゃないし、アタシの信仰心は身内の無事とか安全があつてこそ！だから決めた!!護る力が貰えるなら…アタシは山田教に入信するツス!!」

「うむ、ようこそ。……繋がったね」

——讃州中学二年生、三ノ輪銀は本日付けで山田教に改宗した。

頬を釣り上げた山田くんは手を差し出し、銀と握手を交わす。歓迎の挨拶だ。たった数人だけだった山田教徒に新たな仲間が加わった瞬間だった。

一つの節目だ。三ノ輪銀の生涯において、大きな意味を孕む選択肢でもあった。

ニコリと微笑む山田くんは、暗に何かを物語っていた。まるでその選択を喜んでいる様な、あるいはそうならなかった^{過去}未来を識っていたように。

「それで銀ちゃん。勿論力は与えるけどさ、何か望みはあるかい？亜弥ちゃん然り、山田くんは気に入った子を少しだけ鼻肩するから、君のお願いなら可能な限り叶えるつもりさ」

「願い…?」

「わたしも叶えて頂いてる最中なんですよ？山田様は本当に、寛大で

す…」

その願いに關して、亜弥の場合は郡唯斗を救うことだった。故に銀を山田教に迎えて唯一とも言える戦力を蓄えたのだ。

力を与えるのは銀を勧誘する『特典』であり、誘い文句の一種だ。戦闘員を求めていから、という事もある。

それとは別に、山田くんは銀の願いを叶えると言っているのだ。全員平等な神樹教では考えられない、本当の依怙贖。それもまた、上位存在に見初められ、認められ、見込められた故に。

まるで某龍球を集めるようで、雲を掴むような話だ。銀は数秒、目を瞑り『願い』を探す。世界平和、家族の平穩、欲しい服もあるし、憧れていた満漢全席も確かに浮かんた。

それでも『一番』は決まっていた。彼女の誇りが大声で主張する。成れ、至れと。

「じゃあ、一つだけいいですか？」

「おん？なんだい、なんなんだい？」

「——アタシは『勇者』に成りたいです。これは憧憬とか、誇りとか。うんつ、やつぱりアタシは…先頭で頭を張れる『勇者』で在りたい!!」
三ノ輪銀オリジンの原点だ。

勇者は三ノ輪銀の人生において、何よりも大きく影響を及ぼした。彼女はシステムが無くとも『勇者』だ。然し無い力を振るえなければ、至れない領域も存在する。

護りたいから戦う。失いたくないから吠える。いつだって三ノ輪銀はそうだった。

そして、これからもそう在りたいと願うのは彼女の我儘だ。

「……………へえ、ナルホドね。うん、うん。そうだね！パーティは四人編成で、先頭はいついかなる時も『勇者』って決まってる♪いいよ、いいよ！『賢者』の唯斗に、『巫女』の紫く者亜弥ちゃん。銀ちゃん、君は山田教の『勇者』だ!!」

取られたものは取り返す。そんな復讐者こそ、『勇者』の証だ。

「うしっ！ありがとうございます!!」

「はい、これ端末ね。使い方は君の方が詳しいでしょ」

銀は新たな端末を受け取ると、脇目も振らず起動した。溢れる紅いアネモネの花弁は鈍色の髪の少女を包み込む。

何時ぶりか。前の勇者衣よりも白生地が少なく、逆に燃え滾る紅は範囲を増している。

以前よりも強^{アップデート}化された力で窓枠を踏み締め、外に飛び出そうと――

「ちよつと待ってちよ」

「ぐえっ!? な、何するんですか!?!」

「あ、ごめん」

弾かれる刹那、山田くんは銀の襟首を掴む様に引つ張った。力の出力方向を間違えた脚は窓外に向けられ、銀は一瞬だけ首吊り状態になりながら床に腰を打ち付けた。

「悪気があつたわけではないよ。単なる親切心とか、ちよつとした好奇心とか。……まあ、兎に角! 銀ちゃんにとっては悪い話じゃないからさ!!」

「……………つまり?」

「時短しようってこと。さ、亜弥ちゃん。お仕事だよ――繋いで?」

「はい……………っ!!」

亜弥は目を瞑り、両手を締めて願う。人智を超えた『奇跡』は、人智を超えた存在によって許された。故に繋がる。心を、声を、場所を。『繋がり』を担う者は、そんな『奇跡』を願う。

「お、おおっ!」

淡い緑光は円状に集約する。築かれるのは光の門^{ゲート}。光の粒は紡がれ、繋がる。薄暗い教室の中で、一人一人が通れる程度の門^{ゲート}の先。

そこは広がる海に、白い樹木が硬質化した壁。四国を覆う神樹の結界、その数歩程度前だ。

「行つてらっしゃい、山田くんの愛しい勇者ちゃん^{復讐者}。欲望を解放しておいで」

「頑張ってください! えっと、三ノ輪先輩……?」

「銀でいいよ、亜弥。いや、亜弥先輩って呼ぶべきかな?」

「あ、亜弥で大丈夫です!」

「……じゃあ亜弥、山田さん。いつてきます!!」

銀が門の先に消えて、再び沈黙が部室を支配する。静かになった部屋で、山田くんは徐ろに窓の外を眺めて目を爛々と光らせる。

「さーて、亜弥ちゃん。山田教の『勇者パーティー』にはもう一人必要だ。そうだねー、バランスを考えるなら…：タンクかな？カッチカチの防衛役だね」

「たんく…?」

首を傾げる亜弥を見て、山田くんは愛しげに微笑む。次は何をしようか、そうだあの子にしよう。そんなことを口遊み、やはり頬を釣り上げた。

「どっつっせいやあああ!!」

紅いアネモネの花弁を纏い、陽炎に揺れる斬撃は三好夏凜を襲うバトルアックスにぶつかる。

きつと、繋がらなければ間に合わなかった。

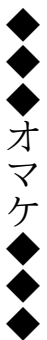
銀は彼女達に感謝を想いながら、手に馴染む双斧を握り締める。決して戦場に焦がれていた訳ではない。然し友が駆けるのであれば、戦場にも地獄にも喜んで駆け出せる。

『勇者』三ノ輪銀、見参!!」

謳え、勇姿を。飾れ、勇気を。笑え、雄弁を。

気高い『勇者』は舞い降りた。傍観者で在れない、我儘で欲深い少女は戦場に帰ってきた。故に護ろう。それが願いだから。それのだけのために武器を握るのだから。

「迎えに来たぜ、相棒」



『山田教』

・山田くん命名、神樹教に因んで付けられた所謂グループ名。改宗、

宗教勧誘、等の宗教に関する言葉を多用するが宗教じみた真似はしていない模様。

敢えて言うのであれば、某元枝の企悪巧みみのために集められただけの少数精鋭。基準は山田くん次第であり、別称不明とも言える。

一応本編にも登場している、繋ぐ者 亜弥や復讐者 銀以外の信者も存在する。

其の目的は■回の■を、■良の■に導■ことだ。■目は唯斗が■在■い■、■は■年■に■亡した■。其■次は――

しゅぎ♡

双斧に纏われるのは煉獄をも焦がす炎。

リベンジャー勇者は不敵に笑う。理不尽を覆し、希望を謳う者は到着した。

「らしくないぞ、相棒？無口で冷徹…キャラ作りか？似合わないから止めろよ」

「――」

「仮面もダツサイなあ。やつぱり唯斗には、昔みたいなクマの着ぐるみパジャマが似合うんじゃないか？」

銀は軽薄に笑い、漆黒に染った西洋風の甲冑と同色のフルフェイスマスクを装備した唯斗を片手の斧を向ける。

誰の目にも見え透いた挑発だ。然し意識の有無すら不明な相手には通じない。弾かれて崩れた体勢も既に整い、新たな分身体を生み出しながら戦斧を構える。

目を見開く三好夏凜も、この場で全て説明しろと言葉を吐く程愚かでは無い。寧ろ強力な味方を得て、霧散した希望を掴み直した。

決して好調とは言えない。銀は久しぶりの戦闘で、相手は昔から稽古で一勝もさせて貰えなかった郡唯斗。それが複数人に増えるのだと知って、銀は笑った。

「……銀」

「なーに？」

「別に説明は求めない。現状だけ簡潔に説明するわ。見ての通り、唯斗は正気じゃない。犯人は天の神かどうか不明だけど、原因は明白。あのクソダサイマスクよ」

「じゃあ解決も簡単だな！唯斗をぶつとばして、クソダサ仮面を破壊する。ははっ、その方が解りやすい!!」

「血気盛んでなにより。……別に私一人でも余裕だったけど、態々来たアンタを追い返すほど私も心狭くないわ。三分で制圧するわよ!!」

「そりゃあ心強い。じゃあアタシも…格好付けて奥の手とか言っちゃおうかな？多分、現状を打破する最善手だけど」

互いに強がりだった。

夏凜は先程の殺されかけた事実には膝を微かに震わす。銀は嘗ての憧憬に畏怖する。故に――滾る。強きを屈して、更なる強者に至る。其れが彼女達の騙る『勇者』だ。友奈や樹、唯斗とも違う『勇者』の夢語り。夢物語だ。

幼子がヒーローに憧れる。たった其の程度の、酷く曖昧で歪みきった延長線上に在る純粹無垢な少女の夢物語。自分自身を主人公にして、駆け上がる英雄譚だった。

「振り落とされんなよ、『勇者』!!」^{夏凜}

「そっちこそ。足引つ張るんじゃあないわよ、『勇者』!!」^銀

鋭利に光る二振りの刀と日輪から連なる六本のアーム部。彼女に合わせるには足りないかと理解した銀は覚悟を固める。

「満開!!」

銀はその言葉を口にして、強大に煌めき咲き乱れる。

紅いアネモネが赤い空に投影され、形成された花弁は徐々に崩れ銀を包み込んだ。紅が晴れた後には、淡い黄白色の神聖な勇者衣への変化。

薄れた紅色はまるで移動したかの様に、二つの巨斧に纏わり、更に巨大化させる。背には炎で形成された日輪が出現し、唯斗を侵食する漆黒を焦がすように燃え上がった。

三ノ輪銀の『満開』は至極単純だ。武器と身体能力の超強化。次いで、元来より彼女が扱っていた『炎』がより明確に、顕著になった。郡唯斗の満開が一を十個兼ね備えた能力だとしたら、三ノ輪銀は攻撃力と『炎』に五を二つ兼ね備えている。故に、殲滅力では及ばなくとも撃破力に関しては唯斗よりも上だ。

「さあ、始めようぜ」

彼女達には連携なんて出来ない。共に死戦をくぐり抜けた仲間なら話は別だが、今の相手は初めて共闘する者通しだ。

——だが問題は無い。

「ババツ、ザンツ！っていくから上手いこと宜しくな!!」

「了解！ズババツ、ってことね!!」

そもそも二人とも、考えて戦闘に臨む性質ではない。本能で武器を振るい、経験則で対抗する。

「——っ！」

紅い巨斧が四人の唯斗を撫斬り、然し紙一重の後方歩調バックステップで難無く躲かれる。揺れる陽炎も漆黒の甲冑に防がれ——銀はもう片手の巨斧を身体ごと回し投げる。

短絡的な攻撃は無論、容易く対処された。横に投げられた斧の上側に複数の戦斧が叩き付けられ、撃ち落とされる。

「隙だらけよーアホ唯斗!!」

唯斗が漆黒のバトルアックスを振り下ろした直後、後面から双刀が空気を切り裂き奇襲する。極限まで地面に沿った起動の斬撃。唯斗とて躲せず、武器でいなすことも敵わない。

クロス字に放たれた斬撃は四人の唯斗の背中を深く切り付け——
全て空気に帰す。

「——知ってる」

全て分身体だった。

先程と全く同じ戦法だ。銀がいなければ三好夏凜を死に至らしめた、一撃必殺の戦法。武に共通する者ほど、確信的なトドメの一撃の際には致命的な隙が生じる。

無論、三好夏凜も理解している。

「いや、やっぱ隙だらけだよ」

「——っ！」

「うりやああああ!!」

「——ぐ……ッ！」

同じだ。

無意識下に行われたのは、唯斗が単独でしたものと全く同じ囮作戦

だ。

唯斗がわざと晒した隙に、夏凜が態々声を上げて飛びかかる。そこにきつと、唯斗の本体は現れる。そう踏んだ夏凜と銀が付け入る明確な隙は、そこだ。

夏凜が伏せると同時に銀は唯斗の仮面に向けて武器を横薙ぐ。

咄嗟の防御として構えられた戦斧も、投げ飛ばす勢いで振るわれた斧をぶつけられようものならば、強制的に弾き飛ばされる。

「決めなさい！銀!!」

「これで終わりだ——戻ってこい！相棒!!」

片方の斧は分身体の間を生むために投げられ、もう片方も先程の攻撃で弾き飛んだ。『勇者』の身体能力以外は武器もなく、無手の銀は構わず唯斗の懐に潜り込み、奥の手を解き放つ。

「——っ！こ、れは…ッ!!」

仮面の下で、殆ど無言を貫いていた唯斗は声を絞り出した。銀の繰り出すソレは、唯斗には決して、唯斗だけは本当に決して、無視は出来ない。

ソレは銀の手から放たれ、唯斗の顔面を覆うマスクにカツンと音を立ててぶつかる。

「あ、あ…あ、あ、あ、あ!! 去ねや邪魔だ消えろこんなゴミ仮面がああああああ!!」

「……………はっ」

この光景に夏凜は呆けた声を漏らした。

起こった出来事を端的に言えば、郡唯斗が自身の仮面を無理やり剥いだ。曇った声を上げながら仮面に手をかけ、力任せに裂音を響かせて剥いでしまった。

「ふへっ、ふへへへ♡イカの姿フライだあ…♡しゆき…♡イカの姿フライ大しゆき♡♡」

仮面を剥ぎ捨て、銀の投げたイカの姿フライを満面の笑みで——否、腑抜けた気味の悪いニヤケ面で頬張る。

これには彼を相棒やら大切な仲間やらと称する彼女達も、気持ち悪いから助けなればよかったと一瞬だけ思ってしまった。

彼を想い戦って、三好夏凜は一度死にかけた。その戦いの果てがコレなのだとしたら、やはり釈然としない。

「……銀、このアホをぶん殴ってもいい？もしくは磔にして燃やしてもいい？」

「落ち着けて。別に殴って磔にして燃やしても良いけど、それは後。今は美森の救出とか、先輩達の援護とか。もっとやるべきことがあるし」

捨てられた仮面は煉獄に燃え果て、同時に唯斗の格好も通常の勇者服に戻る。侵食され闇に覆われていたバトルアックスも、バチンと音を立てて弾け、お馴染みのピコピコハンマーにフォームを戻した。

「チツ…後で土に埋めるわ。……んで、アホ唯斗。状況は解ってるの？」

「んんん♪これ幻のイカの姿フライじゃん！一枚一万円の高級イカの姿フライじゃん!!パネエっす!んっはあ…♡イカの姿フライ…いっぶりだっけ?もう離さないからな♪」

「話聞けらゴラア!!」

「ぐべらっ!?な、何するんだよニンボリオン!!」

「ニンボリオン言うな!」

何となく、久し振りなやり取りだった。特に唯斗にとっては、酷く永い時間の果てに再会した気すらした。

「唯斗、大丈夫か?さっきまで大変だったけど」

銀が心配そうに顔を覗く。唯斗はその『さっき』に思いを馳せた。何となく覚えていて、でも酷く曖昧で、記憶の一部を歪められ、消され——いや、塗りつぶされた感覚だ。

現状は把握している。しかし、何故把握出来ていたのかは曖昧だ。

「……あー、なんだっけ?何処かで誰かと話してた気がするけど…思い出せない。辛うじて亜弥の声が届いたのは覚えてるんだけどな」

「それで、つまり?」

「簡単だよ、ワトソン君。兔にも角にも、状況は把握してる。ストーリーが奉火祭でフィーバーしてるから、パリピ反対同盟たる勇者部が祭囃子にも似た響きの祭壊しをするんだろ?」

「奉火祭……う……まあ、六割は合つてると思う」

「残り四割は言葉のチョイスね。悔い改めなさい」

現状の目的は、奉火祭で生贄にされた東郷美森を連れ戻すことだ。もつとも、唯斗を除く勇者部は奉火祭を知らない。

唯斗は亜弥から説明を受けて把握しており、捧げる生命力ももう充分だと言うことを亜弥を通して何者かから教えられた。

兎も角、今やるべきことは東郷美森の救出だ。それ以外は後回しにしても問題は無い。

「さつきから夏凜が冷たい件について。倦怠期か？」

「まるで少し前まではラブラブカップルだったみたいな言い方するな！」

「そんなことより、銀。あのブラックホールが東郷なんだよな？早く向かおうぜ。夏凜の雑談に付き合ってる時間も惜しい」

「だな！さつきと美森も助けて、うどんでも食べに行こーぜ。ほらほら、夏凜も遊んでないで行くぞー？」

「う、うがああああああ!!」

「うわっ、ちよっ?! 暴れんなよ!! 銀! 煮干しだ!! コイツの口に煮干し放り込めー!!」

その後、三好夏凜が落ち着くまで数分を要した。そして彼女の手持ち煮干しの殆どが消費された。

「んー、手が追いつかないねー」

園子は忙しなく脳を動かし、バーテックスを殲滅しながら『満開』で顕現した船を操縦する。

目指すは東郷美森が囚われている黒い球体、その上空だ。突入するのは結城友奈であり、そこまで護り送り送り届けるのは園子達の役目だ。

然し異様な数のバーテックスは、『満開』した園子と犬吠埼姉妹とて楽に殲滅できるものではない。

「園ちゃん、やっぱり私も…」

「だーめ! ゆーゆはわっしーを助ける鍵なんだし、万全を期して望ん

で欲しいんよ。今は耐えて、わたし達に任せて任せて………ついでうか、いつつんが最強すぎて引いてる…」

園子が若干青ざめて視線を向ける先には――

「おりゃああーせいっ、やあああ!!」

可愛い声で放たれるのは、巨大なモーニングスターだ。

ハンマー投げの要領で投げられ、それは単にバーテックスを打ち砕くだけではない。張り巡らせたワイヤーにぶつかり、弾かれ続け、超変則的な軌道でバーテックスを縦横無尽に抉り殺す。

その隙に樹は再び鉄糸を手元に集め、紡ぐ。

ワイヤーが擦れ、ギチギチと異音を奏でる。

「pear^苦 of^悩 angu^のish!!」

鉄糸を巻き付け、樹はそれを『勇者』の筋力を活用し全力で引く。駒のように回転しながら放たれた其れは、蛞蝓に似た薄紫の牡羊座のバーテックスに根深くめり込み、突き刺さる。

「お仕置っ!!」

最後に樹が人差し指指をクイツと引くと、牡羊座の中で苦悩の梨は解放され、内部から五枚の棘が飛び出る。無惨な姿に成り果てたバーテックスは地に落ち、その身を灰に帰した。

「次い！Spani^猫sh^の Tick^肉ler!!」

次に樹が紡ぐのは、金属製の熊手をもした巨大な器具だ。棒の先に付属する鉤爪は、樹が全身で振るい星屑と進化体を撫でるだけで引き裂き殲滅させる。

その光景を船上から眺め、園子はやはり勇者部最強に慄いた。

一方、姉の方は――

「ひゃっはああ！女子力大旋風!!汚物は消毒よクソツタレ!!」

大剣を超巨大化させ、ただひたすらに回ってバーテックスを殲滅させていた。一番単純で、一番能率的に暴れ回っていたのだ。

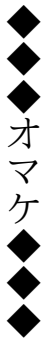
妹の樹に比べたら技術の”技”の文字もないが、それでも撃破数に関しては負けず劣らず。

彼女の『満開』は勇者部でも頭二つ飛び抜けた身体能力の超強化だ。

圧倒的なゴリ力パワの前に、技術など足を引つ張るだけだ。殲滅なんて、風にとつては大剣を振るうだけだ。

「邪魔よボケナスどもめええ！小癩にもうどん色しやがって…ぶつ殺す…ッ!!絶滅させてやるッ!!」

うどん色は関係ないんじゃないか、という園子の声はバーテックスが潰れる音に掻き消された。



《銀の『満開』》

・他の『勇者』と同様、勇者服は白を基調とした袴と元来の勇者衣が混ざりあったような戦闘衣に変化する。銀の場合はそれに付け加え、背に炎で形成された日輪を背負い、両手の斧は紅に染め上げられサイズも増す。

単純な攻撃力だけでなく、背中の日輪から炎をジェット噴射することによって高速移動、攻撃の際は威力を強めることも可能。

元の『満開』とは違う仕様だが、此方の方が元々の銀の戦闘スタイルには合っている。

馬鹿と馬鹿と馬鹿

「オラオラ！ぶっ飛んで弾けて混ざれ!!寝取られ帰りのピコハンで扶り死ねー!!」

一振るいで星屑は爆散し、撫でた空間から出現する紙飛行機は連鎖爆発を起こす。空いた隙にイカの姿フライを創造し、ガリガリと豪快に音を立てながら消費していく。

「いまベジータ居た？大猿化しようとしてる戦闘民族の王子居たよね？……寝取られ帰りのピコハン……？」

「ついでに『満開』したまま暴れ回って、俺と銀を殺しかけた煮干し女も爆散しろー!!弾けるニボロット、お前がナンバーワンだ!!」

「わ、悪かったって謝ったじゃない……ッ！……てかニボロットって言うな!!」

紅い双斧は防御に特化した蟹座がモチーフの進化体をも容易く断斬し、燃え盛る火炎で炭化させる。増えたアームを自在に操り、六刀流となった斬撃は無限に等しく敵を切り刻む。

——複数のバーテックス相手に暴れ回る『勇者』が三人。『満開』で二段階変身を遂げた銀と夏凜、そして何故か満開ゲージが回復していた唯斗だ。

防人達を護るために唯斗は『満開』をしていた筈だが、何者かの介入でもあったかのように都合の良い展開だ。

金メッキに覆われたピコピコハンマーを蒔くように投げ、そのいずれも唯一攻撃判定のある打突部をぶつける。

分身体と共に放たれる紙飛行機型爆弾が雨のように降り注ぎ、唯斗の口いっばいに詰められたイカの姿フライの咀嚼音も爆音に埋め尽くされる。

——つまり八つ当たりだ。

唯斗や夏凜、銀でさえも現状には腹が立っている。好き勝手に操られた恨み、一度でも仲間を取られた憎しみ、今も昔も親友達が傷付く

痛み。眼を瞑れるほど、彼らは大人ではない。

やられたら、やり返す。

簡単なことだ。三人は『正義』なんて大層なモノは掲げていない。望むのはたった一つ、『平穩』だ。全ての『平和』ではなく、自分と身内、手の届く限りの『平穩』。

故に、其れを脅かすものには一切の容赦をしない。その信念——執着こそがきつと、『勇者』の証だ。『勇者』の条件なのだろう。

「おい煮干し馬鹿！雌豚共はどこ向かいやがった!!」

「うっさいわよ駄菓子狂人！あつちのバーテックスが集ってる場所に決まってんでしょ!!目ん玉ブチ抜くわよ!!」

「あゝあゝ あー!!ギャーギャー喧しい！黙って戦闘に集中しろよ馬鹿共!!唯斗はもっぺん操られた方がいいんじゃないか!？」

「んだとゴラア！足りねえアタマ抉って魚ん目玉でも詰めたるあいいんか小型脳女!!」

「ハッ！銀の頭がドコサヘキサエン酸とエイコサペンタエン酸で改善されるわけないでしょ阿呆唯斗！これは死ぬまで天然馬鹿よ」

「言ったなサプリ馬鹿！そのツインテールブチ抜いて腐ったバナナでもめり込ませてやろうかねえ!!」

無論、八つ当たりは八つ当たりでも、全てが敵に向くとは限らない。どれだけ強かろうと、所詮は中学生だ。腹が立てば喧嘩もするし、度の過ぎた罵倒だって息をするように飛んでくる。

そもそも、勇者部の中でも唯斗と夏凜は仲良しこよしで足並みを揃えるタイプではない。銀は銀で多数派に染まる傾向があり、三人中二人が通称ヤベー奴な現状、銀もまた別称変人になってしまっている。とは言いつつも、着々とバーテックスの数を減らしていることもまた事実。そして三人共笑っているのも事実だ。

何が可笑しいのか。何が楽しいのか。そんな事、本人達にも解らない。軽口を言い合える相手が居ることが嬉しいのか、それとも手で掴んだ希望を離すまいとしているのか。

「おっ、見えてきた！あの…モーニングスター?…:…みたいな空中で縦横無尽に動かしてるのって樹だよな?勇者部最強の樹後輩だよ

な？」

「は？勇者部最強は私なんですけど」

「おつむの足りねえチョロツンデレは黙ってる。このツツコミ型勇者め」

「なっ、なんですって!?!言わせておけば…ッ！私だって、その気になれば針玉になってバーテックス共を駆逐するくらい余裕よ!!」

「はいはい、おつむの足りない会話はやめなさいな。アタシまで馬鹿と思われたら堪らないぞ」

「一番馬鹿は黙ってる」

「何だとコンニャロー!!」

遙か空——東郷美森の居る場と思われるブラックホールの周辺には見覚えしかない顔が複数。無数の砲台を備え、宙に浮く船に乗る結城友奈。其れを操る乃木園子。

『満開』の浮遊能力で四方八方に回転しながらバーテックスを両断し続ける犬吠埼風に、鉄糸を束ね武器を築き圧倒的なまでにバーテックスを完封する犬吠埼樹。

完封——つまりは無惨に神敵を惨殺する後輩の姿を見て唯斗は若干引いた。むしろ、其れでも自分の方が強いと豪語する夏凜に尊敬の念すら抱いた。

「うっし、道作るぜ。一気に駆け上がる準備しとけよ馬鹿共」

「宜しく頼むぜ、馬鹿代表。ちやつちやと殲滅しろよな」

「口より手を動かしなさい、馬鹿唯斗。態々手柄を譲ってやるんだから」

唯斗は分身を集め、紙飛行機を召喚する。然し直ぐには放たない。まるで樹がワイヤーを紡ぐ様に、唯斗もまた紙飛行機を呼び出し、重ね、圧縮し、造り上げる。

両翼を固め、身体を築き、頭を形付ける。インスピレーションは樹から得た。きっかけは銀の巨斧が纏う炎だった。決め手は園子の操る船だ。

「うわっ…デッカ。デカイ鳥じゃん。相変わらず、凶悪なこと考えつくなあ」

「アンタ：まだこんな隠し玉あったの？本当にTおOY BちゃOX箱みたいな奴ね。この遊び人」

紙に似た材質の体。真っ白な全身は次の瞬間には紅蓮で紅く染め上げられ、不死鳥の如く熱風を放つ。

「——飛び立て、燃え尽くせ、《グレンチョウ紅蓮鳥》」

紅蓮鳥は翼を扇ぎ、一直線に飛び立つ。星屑は掠るだけで燃え溶け、進化体は半壊する。爆発音が鳴き声となり、止まない爆音は御魂を宿すバーテックスをも打ち砕く。

爆発を繰り返す紅蓮鳥は徐々に小さくなり、其れでも空へ続く道を空ける。ついでとばかりにブラックホールに矛先を向け、火の鳥は躊躇なくぶつかり——消滅した。

「チツ、やっぱりブラックホールには届かないか」

「阿呆唯斗。私達は風と樹に加勢するから、アンタは友奈の所に行きなさい。アンタが居ると私達の取り分が減るのよ！」

「そーだそーだ！アタシ達にも暴れさせろー!!……唯斗が何を背負ってるのかは知らないけどさ、少しは頼れよな。アタシは唯斗の相棒なんだから」

「：銀、ありがとな。どつかの戦闘狂と違って、やっぱりお前は常識人側なんだな！」

「誰が戦闘狂よ！」

「冗談だつて。不器用で言葉足らずなツンデレ夏凜ちゃん。：相棒、後でラーメンでも食いに行こうぜ！珍しく俺が奢ってやるからさ。ついでに夏凜もな!!」

「おっ、いいね。ニンニク野菜マシマシだな！」

「ふんっ、どうしてもって言うなら行ってあげるわよ」

ただ『約束』を結びたかった。どっちも危険で、生きて帰れない可能性もある。だから『約束』で縛って、無事であることを強制する。

「無茶すんなよ、馬鹿斗！」

「死ぬんじゃないわよ、阿呆斗！」

「そつちこそ、阿呆銀に馬鹿凜！」

名残惜しさを無視して、それぞれの方向に飛び立つ。『約束』で縛った心は、まだ繋がっている。だから今は、成すべきことを成すのみ。

「おつす、園子に友奈」

「…っ！ゆ、唯斗くん…!？」

「あつ、ゆーちゃん。おっひさ〜」

爆煙で塗れた紅い空。忙しく砲台からレーザーを放ち、黒く巨大な球体の周りを迂回する巨船。

久方振りに逢う顔だが、その反応は双方共に掛け離れていた。想像通り驚き、然し喜ぶ結城友奈。殆ど驚かず、いつも通りの反応をする園子。

だがやはり、そんな反応すら唯斗の想定内ではあった。彼女達は約一ヶ月で性格が変わるほど、信念もプライドも軽くはない。

「だ、大丈夫!?怪我してない!？」

「空腹以外はモーマンタイ。いやん、くすぐりたいから体まさぐらないで?…心配おかけしましたデスワ。割と冷静な園子もね」

「冷静なのかな?…にぼっしーを信頼してたから、安心してただけだと思ふな〜」

「そりや何より。あつ、銀も来てるぞ」

「えっ、銀ちゃん居るの!?!どこどこ?…あつ、銀ちゃんがおつきい斧二つ振り回してる!!…かっこいいなあ」

「…これまた想定外。最近はよく勘が外れるよ〜。ミノさんもゆーちゃんも、わっしーすら私の想像をかる〜く超えちゃうんだから」

昔から、彼らが園子の想像通りに動いたことなんてなかった。たとえ作戦通りに動いたとしても、想定は軽く超える戦果を持ち帰ってくる。

そんな異才達を束ねて、敵を打ち砕けるのは園子もまた天才だからだ。歴代の勇者達の中でもトップクラスに躍り出る才覚の持ち主だからだ。

彼女の真髄は万能さだ。天性の身体能力に、其れを扱う技術。戦闘と同時に作戦を立てる頭脳に、複数の事柄を同時に熟す並行作業。マルチタスク

乃木園子に東郷美森。三ノ輪銀と郡唯斗。四人のうち誰か一人でも欠けていたら、四人が五体満足で生き残る事など到底不可能だっただろう。

そんな『奇跡』を噛み締め、園子は自分の役割を全うし続ける。

「さて、参謀様。俺は何をすればいい？爆殺から潰殺、刺殺もこなして御覧にいらっしゃいようぞ」

「殺意マシマシ……実はすっごくキレてる？」

「ハツハツハ、温厚で定評のあるボクがキレるわけじゃないじゃないか。なあ、ユーナちゃん」

「ひえっ……目が笑ってない。私が唯斗くんのイカの姿フライを食べちゃった時と同じ目だ……」

約一年前、まだ二人が一年生だった頃の話だ。端的に言えば、唯斗の駄菓子差し入れだと勘違いした友奈が、誤って食べてしまっただけの話だ。

友奈は当時を思い出し、ガクガクブルブルと震えた。バーテックスと対峙したときよりも、肩も膝も震えて座り込みそうになった。

そんな爆弾を落とした友奈に、園子は柄にもなく慄く。

「ゆーゆ何やってるの!?も、もしかして……ゆーゆは幽霊ゆーゆ、略してゆーゆだったとか……!?た、崇らないで……」

「そこまで重大事件だったの!?わ、わたし……もう死んでたの……?」

「おい雌豚、俺を人殺しみたいに言うな。殺してないし、倍で献上させて許しただろ。……あー、でも思い出したら腹立ってきたな」

「そ、そんな事より!!ゆーちゃんにはとつても大切なことを頼みたいなー!」

園子は全力で会話のハンドルを切った。イカの姿フライが絡む事柄について、彼は本当に容赦も躊躇もない。そのうち……否、もう他者を殺めていても全くもって不思議は無い。

据わった目につこり笑顔。これには流石の園子も、怯えを隠せない。過去の雌豚事件を思い出し、やはり震えた。二度と唯斗の駄菓子

を勝手に食べまいと誓った日。完全にトラウマとなった事件。

——閑話休題。

園子は現状を短くまとめ、策を伝える。

「ゆーゆをわっしーの所まで連れて行って。本当ならわたしが隙を見て送り届けるつもりだったけど、時間を掛け過ぎたせいかな？ 思ったよりも敵の数が多いんよね〜」

「オーケー把握。速達便で行ってくりやあいんだよな」

「よ、よろしくお願いします！」

「援護は任せてね。えーい、出し惜しみは無しだ〜!!」

後は時間との勝負だ。

唯斗は友奈を脇に抱えると、迷うことなく東郷美森を目指す。生憎と、距離もそこまで離れてはいない。園子が実行出来なかったのは、船の巨体が主な原因だったのかもしれない。

園子はきつと、友奈の精霊バリアを残しておきたかったのだろう。あのブラックホールに突入するということは、未知の深海に生身で投げ出されるに等しい。

『満開』は論外で、通常の戦闘すら精霊バリアは難無く防ぎ、限りあるエネルギーを消費する。だからこそ園子は、多少強引にでも友奈の戦闘を禁じていた節がある。

「舌ア噛むなよ！」

「うん!!」

真っ直ぐと上空に向かい、邪魔立てするバーテックスは園子の砲撃で塵芥と化す。間をすり抜ける星屑も唯斗の分身が全て対処する。

「このまま突っ込むぞ。歯ア食いしばれや！」

「えっ、でも…! 唯斗くんにはもう精霊バリアが残ってないよ!？」

「だから使えんだよ。くまマン、全力全開で往くぞ」

『mode wear bear——supplicium_{実行}。一緒に踊りましょう?』

「気立て良く、可憐に清楚にな」

呼びたてに応じ、現れた成人男性大のテディベア。曇ったつぶらな瞳で唯斗だけを見つめ、ふんわりと抱きつき光り輝く。

間近で光を浴びた友奈は思わず目を瞑る。一度だけ見た事のある、郡唯斗の全力。本気の形態。複数での攪乱よりも個としての防御力と突破力に長けた変身。

「暖かい……」

小脇に抱えられる友奈。振り落とされないう様に友奈自身も抱きついていたので、くまマンを装備した唯斗はふわふわとして触り心地良く、太陽光を浴びた布団のように暖かくいい匂いだ。

光が晴れた先には場にそぐわない、クマのぬいぐるみパジャマを着た唯斗の姿。

「さあ、デートと洒落こもうぜ。セニヨリータ」

「……待っててね、東郷さん！今迎えに行くから……っ!!」

二人は迷わず、黒く巨大な球体に飛び込んだ。

◆◆オマケ◆◆

友奈「唯斗くん……暖かいなあ。むぎゅー」

くまマン『あわわわわ!』

友奈「……唯斗くん、震えてるの?……大丈夫!唯斗くんは私が護るから!!」

唯斗「……いや、ヴァイブレーションしてるの俺じゃなくてくまマン着ぐるみパジャマなんだけど。……ん?何でくまマン震えてんの?」

記憶の欠片

真夜中の深海に落ちるような感覚だ。

東郷美森を捕らえるそれは果たして『空間』と呼称出来るのだろうか。飛び込んだ唯斗と友奈には、嵐の中で激流を起こす水のように感じられた。

「うっ……ぐぐウツ！ゆ、うな……ッ！」

「唯斗くん……！くっ……きやつ！」

——突入して直ぐだった。

無重力状態に近い。熱くもなく、寒くもない。ただひたすらに寂しくて、気を抜いたら魂ごと霧散してしまいそうなくらい怖い。

ただ広く、宇宙に投げ出されたような感覚だった。理解を超えた恐怖が身を煽り、東郷美森を助けるといふ目的がなければ直ぐにでも逃げ出したくなる。

然し次の瞬間には暴風が吹き荒れ——否、空間が歪み、暴れ狂い、侵入者たる二人を排除しに掛かる。激流の中に銃弾が混ざるように、不可視の攻撃が歪となり唯斗と友奈を吹き飛ばす。

互いを護ろうと抱き合う。

二人の前に友奈の精霊《牛鬼》が顕現し、半透明の結界を貼る。どんな強力な攻撃も、満開ゲージの数——五回までなら完全に防げる。

逆に言えば、『勇者』は五回分しか安全保障バリアがない。それはあまりにも少ない。四方八方に敵が現れる壁外において、たった五回しか攻撃を防げないのだ。それは酷く頼りない。

——パリン。

分厚い硝子が割れるような音が耳に刺さる。

——パリン、パリン。

ブラックホールに似た空間の中は非情だ。何度も『勇者』の命を守ってきたバリアすら、硝子のように容易く碎ける。

残り二回。其れが碎け散ったら、残るは唯斗の装着ぐるみバジャマ 備ましかない。絶大な防御力を誇るその形態ですら、この場においてはやはり頼りな

い。

——パリン。

「っ…や、ヤバいな。友奈…体、丸めとけよ」

「うん…」

唯斗はクマの耳が着いたフードを深く被る。唯斗の言葉に従い身体を小さく丸める友奈を体全体で包み込み、最後のバリアがパリンと無常に割れてしまう音に、激しく鳴る二つの心音が重なった。

「ッ……」

体が軋む。全方向から圧迫されているのだ。酷く不快感を覚えながらも、然しこの程度では死に至らないという事実には少しだけ安堵した。

このまま、激流に身を任せれば東郷美森にたどり着けるのだろうか。それとも遠ざけられているのか。

判らない。判らないということが、際限なく恐ろしく感じてしまう。

刹那、唐突な開放感が二人を包む。

「……ん？……ユーナさん、足元のコレってなに？」

「えっ…う…え、ええええええええ!!何これ!!幽体離脱!!」

唯斗と友奈の足には光る紐が繋がっており、その先には自身の体がぶら下がっている。まるで魂だけくり抜かれたように、力無く空間の波に流されるだけの身体。

弾かれるように自分の手足を見ると、友奈は桜色に、唯斗は黄色に染まっていた。それが魂の色なのか、まだ知らされていない『勇者システム』の機能なのか。二人には理解出来ない。

無意識に自分の身体に手を伸ばした瞬間——

「っ?!唯斗くん…なにか来る…!!」

「はあ?!」

空と読んで良いのかも判らない。ただ遙か遠く、無限に等しいこの空間の果からそれは飛来する。

初めは点々とした赤の粒に見えた。

徐々に近くなり、それは火矢に似ていると気が付いた。サジタリウス・バーテックスの矢の雨にも似ている。

「ぎゃっ!!」

「ぐっ…!!な、んだ…これ!？」

身体から放出された二人に降りかかり、貫通し、その箇所を煉獄色に侵食する。腕が赤黒く染まり、脚は焼けるように熱く痛い。

「これって…もし、私達が砕けたら…!」

「体もグッバイ宣言だな、コンチクショウ!…?おい、友奈…なんか変だぞ」

「えっ…こ、攻撃が止んだ…?」

「そうじゃない。攻撃が受け止められてるんだよ」

気が付けば、無数の水球が友奈と唯斗を護るように浮遊している。其れは炎のような攻撃を受け止め、弾く。

不思議な水球は、何処か懐かしさも感じる。いや、親しみとも言えるだろう。ずっと近くに在った筈の気配。その断片を水球は担っている。

唯斗はおもむろに水球に向かって手を伸ばし――

《――ふふ♡今日の友奈ちゃんも可愛いわ…:天使ね。間違はなく日本の宝ね!嗚呼、神樹様…また隠し撮りしてしまった私をお許し下さい…:友奈ちゃんの無邪気な笑顔の前に、私は無力なんです…!》

《――勇者システムの逆探知発動。さて、唯斗君は今何処に…:あら、また業務スパー?また徳用イカの姿フライを買いに行ったのね。ちゃんと栄養取れているのかしら…:あら?あらあら?どうして夏凜ちゃんと一緒なのかしら?ふふ、ふふふ…後で問い詰めましょう》
《――…唯斗君、何処に行ったのかしら。私に何も言わないで消えるだなんて…:ええ、仕方ないわ。彼の行方を探るため、部屋に侵入して手掛かりを探るのは仕方の無いことよ。まずはベッドから調べましょう。ええ、ええ。これはみんなのため、仕方のない事なのよ!…:クンクン…あっ♡唯斗君の匂い…:ん?これって…:そのうちの髪の毛…?》

「……………は？」

唯斗は言葉を失った。

水球に触れた途端、頭に濁流の如く流れ込んでくる『記憶の欠片』。紛うことなき、東郷美森の変態性だ。困惑に言葉が浮かばない。寧ろ、見てしまった事を後悔するレベルの記録だった。

友奈もまた、同じものを観たのだろうか。

崩れそうな友情を想像して、強く手を握る友奈に視線を向けると――

「奉火祭……記憶の喪失も、東郷さんが願って……もうっ、東郷さんはいつも突っ走るなあ……」

「……あー、ユーナちゃん？一応聞くけど、ナニが観えた？」

「東郷さんの記憶だよ。東郷さんが消えた理由、突っ走るわけも……全部解ったよ。自分を居ないことにしちゃうなんてね……あれ？もしかして、唯斗くんは別の記憶を観たの？」

「ウウン、ユーナとオナジだよー」

「喋り方どうしたの!？」

唯斗は見ても見ぬふりをした。アレは存在しない記憶だ。東郷美森の妄想の産物か、もしくは彼女を恐れる唯斗が創り出した幻想。

事実、それでも思わないとやってられない。

「東郷さんはやっぱり、この中にいるよ！行こう、唯斗くん!! 私達は東郷さんの親友として……何回だって、何百回だって助ける!!」

「アタリマエダー!! シンユウワ、ミステラレナイ!!」

「待ってて東郷さん! はああああ!!」

再度降り注ぐ火の雨。火は唯斗の腹を撃ち、友奈の左目を穿つ無差別な攻撃だ。

それでも構わず、友奈は手を伸ばして先に進む。大切な親友を連れ戻すために。大切な思い出を無き事にしないために。手を伸ばし、伸ばし、伸ばし続け――

「こ、こ……前にも……!」

先程の宇宙のように広い空間とは打って変わり、そこは友奈にとって見覚えのある場所だった。

嘗て友奈が囚われていた場所。身体全てを『散華』して、その果てに友奈が長期間過ごすことになった全てが灰色の空間。

空には何重にも重なった円状のどす黒い雲。下はただ灰色で、形の掴めない地面が延々と続く。

「やっぱり、あのときの場所だ…」

「あー、例の場所ね……あつ、トーゴー発見!」

「っ!ほ、本当!」

——唯斗が指さす先。

そこには大きく円状の灰にまみれた鏡と、其れに下半身と四肢を埋め込まれ、煤を全身に塗られた東郷美森の姿があった。

上方には友奈や唯斗と同様に、魂だけの彼女も在る。奉火祭の字の如く、磔で燃える東郷美森の魂。

まるで本体は焼き捨てられた布切れだ。炭化する手前の、燻焼かれた本体。友奈や唯斗は先程の侵入する過程で身体の所々を煉獄に侵食されていたが、彼女は全身を飲み込まれたのだろう。

「東郷さん…!!」

「チツ、酷い有様だな…」

友奈の悲鳴のような声が延々と続く空間に響く。友奈の声にも東郷は反応せず、力無く目を閉じるばかりだ。

「引っ張り出すぞ」

「うん…必ず、助けるから…!!」

黒灰色に染まった東郷の身体を掴み、全力で引き寄せる。東郷美森を捕らえる鏡に触れた途端、とてつもない反力を感じる。弾かれるような、激しい力と触れた箇所を鋭い針で掻き抉られる痛み。

思わず手を離しそうになるが、それでも力を入れ直す。この程度で死にはしない。今にも尽きてしまいそうな親友に比べたら、我慢なんて容易い。

「ぐっ…何か、入^侵ってくる…!!」

「構わない!!東郷さんの分も、私が受け止める!!」

東郷美森の身体を通して、友奈と唯斗の身体は侵食される。東郷美森の胸に刻まれた赤黒い紋章は、徐々に消え——否、友奈達に移っている。

「東郷東郷さんを離せええええ!!」

鏡の縁を蹴り飛ばし、その勢いで東郷を引っ張り出す事に成功する。未だに意識の戻らない彼女は、友奈と唯斗に覆い被さった。

「やった!これで東郷さんは……えっ、ぎっ……きやあああああああ!!??」

「ヤバい……ッ!グッ……ガアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

——二人の胸に刻まれた刻印。

そこに中心として、友奈と唯斗の魂は一気に灼かれ、爛れ、紅く侵食される。身体魂の一片も残さず、灼かれる感覚。

意識を失うことも叶わない苦痛の中で、目が灼かれる前に見えたのは、彼女を捕らえていた鏡がひび割れる光景。光が溢れ出し、空間ごと壊れる前兆。

それだけに唯一の安堵を覚え、焼き擦れた魂は紐を伝って身体に戻る。たった一つ——胸に濃く刻まれた刻印だけを残して。

「っ!樹!乃木の船に戻るわよ!!」

「お、お姉ちゃん!」

「なんかヤバいわよ!アタシの第一級女子力乙女センサーが告げてるわ……なんかヤバいつて!!」

「多分それ、何も告げられてないよ……」

風は樹の腕を引っ張り、後ろから襲いかかる魚座を蹴る勢いで船に戻る。視界の端には、同じく船に向かう三好夏凜と三ノ輪銀の姿。風と同じ第一級女子力乙女センサー(仮)で何かを察知したのだろうか。

四人が到着した刹那、ブラックホールは小さく集約し——爆ぜた。光を放ち、周りの星屑ごと爆発して消えてしまった。

「……爆発したわね」

「爆発したね」

「爆発したんよね〜」

「爆発オチかあ。銀さん的には及第点かな」

「アンタはなんで採点してるのよ……って！爆発したはマズイでしょ!?友奈と唯斗と東郷はどうしたのよ!?!」

疲れが溜まっていたからだろうか、大規模な爆発をしみじみと眺める勇者部。三好夏凜のツツコミがBGM代わりに流れるが、返事を返す者は居なかった。

余韻に浸りながら友奈達を探す。あまり心配はしていなかった。友奈と唯斗ならば、必ず成す。理屈じゃなくて、彼女達はそう確信していたのだ。

そして、その確信は正解だった。

「たーだーいーまー!!」

「友奈!?!」

空から、東郷を背負った友奈が降りて——否、落ちてくる。樹は咄嗟にワイヤーの網を貼り、二人を受け止める。『勇者』だから怪我はしないだろうが、船が落ちてしまえば元も子もない。

「結城友奈、無事東郷さんを連れて帰還しました!」

「ゆーゆ、ゆーちゃんは?」

「えっ、唯斗くん?……あれ!?唯斗くんが消えた!?!……って、なんかメーセージ届いてる?『先に戻りマッスル』だった!」

「まーた居なくなってるし。行方不明が癖にでもなってるのか?あの馬鹿斗は」

「無事なだけ御の字よ。また変に操られたりしても、私と銀で叩きのめすだけだし」

颯爽と姿を消した部員を思い浮かべ、勇者部の皆は呆れて笑った。

「…………あつぶねえ。このまま変身解除したら、土居結女装姿のままじゃん。黒歴史拡散は避けたいからなあ」

白い樹木で構成された壁に立ち、唯斗は深く安堵のため息をついた。バレたら、馬鹿にされるか笑われるか、園子に至っては小説のネタにするかもしれない。

いい加減煩わしくなってきたウィッグの長髪を後ろに流し、防人システムに切り替えた唯斗は壁から飛び降りた。

目的地はゴールドタワー。唯斗の着替えや、特製凝膠体で頭に張り付いたウィッグを取るための道具も全て置きっぱなしだ。

チョーカー型変声機を通して出る声に何処か違和感を覚え、やはり慣れないなと心の中で毒づいた。

胸の刻印は妖しく光る。鈍い痛みをから、唯斗は目を逸らした。

離したくないから

まずは例え話をしよう。

君が男か女か、この際はどちらでも良い。今聞きたいのは、自分と異なる性別——所謂異性に関する問いとも言えるだろう。

例えば君にはある『任務』か課せられて、従順に、素直に、殆ど逆らうこと無く遂行したとしよう。その『任務』とは、『異性の集団の中の共同生活』だ。条件は自身も異性に変装すること。男なら女装、女なら男装。

無論、変装については万全のサポートがあった。必要なら化粧を。自然髪のウィッグに、変声機。サポーターやサラシ、服装等で体型も問題ない。

さて、ここまでは前提条件だ。崩れる事無き前提。事の成り立ちを証明する条件。

——問い。『もしバレたらどうする?』
簡単な話だ。

きっかけなんて何でも良い。着替えてる時に見られた。無意識の際に見破られた。思わぬ事故やトラブルで露見した。知り合いに見つかった。異性が苦手な人の直感。

何でも構わない。

問題点はその後だ。変装がバレて、そのあとすぐ。想像するのも億劫だろう。寧ろご褒美だという異状性癖者も存在するだろうが、この際、そんな少数派は見て見ぬふりをしよう。

嗚呼、難しい。『正解』を考え出したらキリがなく、大凡『不正解』と断言される答えは無限に浮かぶ。

——この答えの無い問いに、俺は声郡唯斗を大にして、恥ずかしげも無くこう応えようじゃないか。

《クツソ気まずいに決まってるだろう》

——と。

「お、お邪魔しまーす……」

夕暮れ時。

唯斗はゴールドタワーの玄関ホールに誰も居ないことをそつと確認してから、そそくさと泥棒のように侵入する。

防人システムで強化された五感をフル活用し、人影が見えたら即隠れる、それをただ繰り返し返している。

——単に気まずいのだ。

仕方がなかったとはいえ、少なくとも時間を女装しながら女子の生活スペースで過ごしていた。双方共に気まずくなること間違いなしだ。

一番は、誰にも気付かれずに部屋に戻り、そのまま着替えて退散すること。無事報告は後日にでも防人システムがインストールされている携帯端末でメッセージを送るか、面倒であるが手紙でも送れば良いだろう。

人の少ないエントランス。

夕日に照らされる観葉植物の影に隠れながら、様子を伺う。当然、チラホラと人影はある。その殆どは三十二人に含まれる防人の面々であり、現状唯斗が避けている相手達でもある。

「……………、階段無いのか…?」

一ヶ月近くゴールドタワーを拠点として生活していたが、建物内の探索はあまりした事がない。改築された生活スペース以外は無骨な鉄骨が目立つ下階。そこを繋ぐのはエレベーターだ。防人達が普段使っている複数のエレベーター。唯斗もまた例外でなく、楽な移動手段として活用していた。

故に唯斗は階段の場所を知らない。

「……………ま、いつかー」

茜色の空が階を照らす。

戦衣に付属する顔の大部分を覆うゴーグルを通した景色は、何処か

新鮮に視える。そこには防人としての日常があり、一時とはいえ親しみ、住み慣れは場所は唯斗をセンチメンタルにさせるた。

時々通る人影も殆ど消えた頃、唯斗はエレベーターのボタンを押す。既に階段を探すのは諦めた。だって面倒臭いもの、と自身を説得して怠惰精神に身を委ねる。

「PUSH」

勿論、上階からエレベーターが降りてくる際にも警戒は怠らない。再び観葉植物の裏に隠れ、様子を伺い続ける。

数十秒が経ち、再度見渡しても人影はない。同時にエレベーターが一階に到着し、到着のチャイムが鳴る。

開くエレベーター内に身を滑らせるように入り込むと――

「あつ」

「……えっ、あなた……結さ――ぐふおっ!？」

「……恐ろしく早い手刀。お嬢じゃなければ首折れてたね」

見慣れた豪華な薄金色の髪。

白いボレロ、ジャンパースカートの制服は防人に属する者が勉強を学ぶ際に着用しているものだ。

凜とした表情の皮一枚裏にはポンコツをふんだんに詰め込まれた彼女。似非のお嬢様である彼女――

エレベーターの中に居たのは弥勒夕海子だった。

躊躇無く夕海子の首元を叩き気絶させる唯斗。通常時ならまだしも、防人に変身しているのだからこの程度は容易い。もっとも、相手が芽吹や本能的に避ける雀であればこう上手くはいかなかつただろうが。

気絶してゴロリと転がる夕海子を横に寄せ、唯斗はエレベーターに乗り込んだ。

「……悪いな、お嬢。後でパン粉3kgくらい買ってやるから許してね」

大凡迷惑でしかない行為を唯斗は勇んで実行する。だって勇者だもの、という友奈や銀が使いそうな言葉を添えて。

エレベーターが動き出してから十数秒。

唯斗と寝気絶してている夕海子を乗せるエレベーターからは無骨な機械音だけが薄く響く。起きる気配のない夕海子の口に雪花菜クツキーを突っ込み、顔に『似非お嬢』と落書きしながら時間を潰した。

目的階まではあと三つ。細心の注意を払うために天井に張り付き、方が一に備える。そして——やはり問題は起こってしまう。

(っ!?)と、途中で止まりやがった…!)

スピーカーからチャイムを鳴らし、停止するエレベーター。

逃げ場は無い。天井に張り付いてはいるものの、上を向かれたら即バレてしまう現状。数秒後にはドアが開き、防人か其れに関係する者がエレベーター内に入ってくるのだろう。

予想を裏切らず入ってきたのは、切り揃えられた茶髪に、同じく茶色のまる眉。名称不明なツッコミ型鳥類だ。加賀城雀は中睡眠で気絶する弥勒夕海子を発見して、思わず声を上げた。

「うわっ!?!み、弥勒さんがエレベーターの中で寝てる!?!」

「……奇襲!去ねや鷺ウツめ!!」

「だから雀だつてぐぎやあ!?!」

「ふっ、烏骨鶏ウコッケイ討ち取つたり。あれ、信天翁アホウドリだっけ?大鷗オオバン、鴛鴦オシドリ、差羽サンバか?綏鷄ジュケイだった気もするし秋沙アイサの可能性もある。よもや鶯ミサユか?鶉ヒヨドリか、鶉ノガンなのかもしれない」

「きゆう……」

目を回して気絶する某鳥類を夕海子に抱きつかせ、唯斗は再びエレベーターを上階に向かわせる。

危険を本能のみで躲す雀でも、餌夕海子を見つけた瞬間には隙を晒す。故に狩った。自然の摂理だ。

決して、初対面時にソフトタイプのイカの姿フライを押し付けられそうになったことを思い出して再び腹が立っているのでは無い。

無論、唯斗とて気絶してる雀に対して罪悪感があった。故に、後で雀には重曹5kgを贈ることを静かに決意した。

「……………うつし、到着」

多少のトラブルはあったものの、無事に部屋まで到着した唯斗。何処か久しぶりに感じる部屋は、確かに郡唯斗が土居結として暮らしていた場所だ。

薄暗い部屋に明かりをつけ、ベッド下に収納されていた大量のイカの姿フライを取り出す。

「イカの姿フライ美味い…！何これ、神が創り出した最高傑作か？もはや国民食だろ。イカの姿フライの数だけ人の幸せが存在するって、素敵なステーキだなあ」

疲れた体を癒すために、ゆっくりしている場合では無いと理解しながらもベッドに転がる。思えば、明確な“寝る”という行為も久しくしていない気がする。

ほんの少しだけ、寝てもいいのではないだろうか。どうせ誰も入っては来ないし、寧ろ眠過ぎる現状ではドジを踏んで、バレてしまうかもしれない。

唯斗は自身の思考を正当化し、睡眠に移ろうと布団を持ち上げると

「すー…すぴー…」

「……………しずくはん？何してはるん？」

ベッド上の足元の方で、猫のように丸まって寝ている少女が一人。制服に皺を作りながら、気持ち良さそうに寝ていた。

「…ん？……………ゆい、と…？」

「……………オヤスミ」

「わぷっ！な、なにをするの…布団かけないで……………えっ、ユイト？」

「いや…違うんよ。ただちよつと、着替えを取りに戻っただけと云いますか…水溜まりよりも浅く社会人一年目で借りたアパートの個室よりも狭い事情がありましたね…？」

「…ユイト！ユイト、ユイト!!夢じゃないよね？……………生きてて良かった…！」

「……………ごめんな、しずく。心配かけた」

布団から飛び出るしずくを受け止め、頭を撫でる。妹分に心配をかけてしまった。その事実は重く、だが其れを嬉しく思ってしまうのは愚かなのだろうか。

自分のために涙を流してくれる存在だ。自分は、その思いに相応な存在足りえているのか。

唯斗には彼女の想いなんて理解できない。それでも、しずくの気が済むまでは寄り添いたいと思った。

「…大丈夫？ 怪我、してない…？」

「モーマンタイ。心強い馬鹿共が助けてくれたからな」

「勇者の仲間？」

「E x a c t l y」

「…ズルい。わたしもユイトを助けたかった…力不足だった、解ってるけど…力になりたかった」

「バーカ。防人には防人の、勇者には勇者の仕事ってのがあるんだよ。今回は勇者の領分だった。それだけの話だったの。別に気負うことはないだろ」

「そっか。…ねえ、ユイトはこれからどうするの？」

「ん、これから？」

しずくが憂えるのは、唯斗のこれからだ。

また防人として活動を再開するのか、彼の元の居場所である勇者部に戻るのか。きっと、それは彼次第なのだろう。大赦でもトップクラスの発言力のある家系であり、その次期当主ともなれば行動を容易くは縛れない。

唯斗が防人として活動していたのは、大赦にとっては予想外だ。防人と勇者を関わらせまいとしていたのは、勇者が防人に関与する事によつて『勇者システム』が元来以外の用途で使われる可能性があるからだ。

他にも少なくない理由はあるが、大赦には意図があつて勇者と防人を切り離してしたことには違いない。

唯斗が防人として活動した今、大赦は唯斗の意向を邪魔できない。良くも悪くも、彼の行動次第で今後の方針は大きく左右される。

「これからか……取り敢えず、勇者部には戻るつもりだな」

「……うん、わたしもそれがいいと思う」

「まあ、御役目を辞める気はないけど」

「えっ、それって……」

「全部とは言えないけど、防人の御役目にも参加する。半端に関わった手前、テキトーに投げ出したりはしないって。大赦が止めるようなら、権力振りかざしてでも防人で在り続けるよ」

本当は、続ける気なんてなかった。

防人に会うこと自体に気まづさを覚えていた。

でも、一度は失った関わり。唯斗はもう、それを手放す気は毛頭ない。子供の我儘と言われても仕方がない。健気に、純粋に、身内を決して離さないと言い張る。

寂しげに、唯斗が勇者部に戻ることを肯定してくれたしずく。単に、彼女を放っては置けなかっただけなのかもしれない。

そして、それは彼女も同じだ。

どこか危うい彼を、しずくは傍で支えたいと願う。昔はそう出来なかったから、今度こそは。

無意識に伸ばされた手を、しずくも無意識に握り返した。離したくないと感じてしまい、指を絡めてギュツと握る。その温もりは懐かしくて、また居なくなりそうで不安にもさせる。

だから、しずくは固く握った。

「あ、来る途中で雀とお嬢を気絶させたんだけど……放っておいていいかな?」

「な、何やってるの……?」

「あと、落書きして口の中に雪花菜クッキー詰め込んで、二人を抱き合わせて置いたけど……まあ、問題ないよね♪」

「本当に何やってるの!」

後日、雀と夕海子に重曹5kgとパン粉3kgが届いた。二人が唯斗に何十回と電話をかけたのは、また別のお話だ。

◆◆オマケ◆◆

芽吹「……暇だし、鍛錬しようかな」

雀・夕海子「きゆう……」

芽吹「えっ、雀に弥勒さん…!? どうして、エレベーターの前で抱き合って寝てるのかしら……ん？ 二人の顔に何か書いてる？」

落書き『似非お嬢 / ツツコミ型鳥類』

芽吹「どうして自己主張を……? て言うか、どうして弥勒さんは口の中に雪花菜クツキーを詰め込んでるの？」

推理

——しずくの援護もあり、無事にゴールドタワーから脱出した唯斗。

気掛かりなことも残してはあるが、其れは其れとして、後日にする。今はまだ、やるべき事が山程残っている現状だ。

そも、唯斗が天の神に囚われる以前から、物事を中途半端な状態で投げ出していた。そのツケが回ってきたと考えれば、刺々しく刺さる視線も妥当なモノなのだろう。

「えー、帰還しやしたつす」

へんたいふしんしゃが眠る病室の中で、揃う勇者部の面々。唯斗は物凄く気まずそうに、言葉を切り出した。

急な転校、その次は行方不明。その後、何故か神樹の結界の外で操られていたところを発見され、助けられた矢先に即居なくなる始末。

温厚な勇者部員ですら、多少なりとも苛立ちを感じている。

「唯斗くん、何処に行ってたの？東郷さんを取り戻した途端に消えるから……心配したんだよ？今回はちゃんと連絡をくれてたけど……」

「あれ？心做しか、友奈の言葉に棘を感じるぞ？」

「言つとくけど、嘔吐いたらぶっ飛ばすわよ。全員、本当にアンタを心配してたんだから」

「ひえっ……ニボ凜ちゃん怒らないで……た、端的に申しますと……着替えてました。あのまま変身を解除したら、裸よりも恥ずかしい格好だったものでしてね？」

「はっ……」

「いや、嘘じゃないから！マジで……黒歴史をバラ撒く趣味はないんだよ……」

少年にとつて、女装は裸よりも恥ずかしいらしい。無論、価値観は人それぞれであり、真実を知る者も否定は出来ないだろう。

尚、銀と園子とへんたいふしんしゃは黒歴史を知っている。無論、

過去の話にはなるが。

飽くまでも喋る気は無い。暗にそう告げる唯斗を見て、執拗さには定評のある勇者部も諦めを決めた。

「…でも唯斗先輩、これまでは何処にいたんですか…？何の連絡もないし…急に転校しちやいますし！」

「アツ、樹さん…えっと、ご無沙汰してます！これ、差し入れの高級うどんツス!!」

「どうして敬語!？」

「お、高級うどんじゃない！やったわね、樹♪今日の晩御飯は豪勢になりそうだわ」

「おいコラ、風先輩！なに樹さんのうどんを横取りしようとしてんだ!!ぶつ殺されるぞ?!ほら、今なら俺も一緒に謝ってあげますから」

「唯斗先輩は私を何だと思ってるんですか?!？」

「あんたはアタシの妹を何だと思ってるのよ」

鉄糸で構成されたモーニングスターと拷問器具でバーテックスを蹂躪する最強勇者だ。下手に逆らえば、『おしおき!』と言いながら拷問をしてくるに違いない。そんな後輩に、唯斗は慄いた。

「んで、唯斗さんや。最低限の説明義務はある筈だぞ？秘密主義も大概にしるよな」

「ふっ、当ててみっ☆」

「ぶつ殺すぞ？酷く」

「あらやだ…銀ちゃんがシンプルな暴言をお吐きになられましたわ。園子ちゃんたしゆけて…」

「…ゆーちゃん、壁の外で何かしてたよね？」

「っー」

茶化す唯斗に対して、確信を突く園子。

背が冷えるのを感じる。奇しくも、それは懐かしい感覚だ。過去の自分が彼女をリーダーと認め、命を預けてきた理由はこれなのだろうか。

詰まる息で言葉も返せぬまま動揺し硬直する唯斗に、園子は淡々と、まるでクイズの答え合わせでもするかのように続ける。

「存在を抹消されてたわっしーと違って、ゆうちゃんに関しては大赦の人達も行方不明だつて言ってたんよ。正直、ゆうちゃんは理由もなく死地に赴くような性格じゃない。だから、思ったんだよね。仕方無く、外にいたか。若しくはゆうちゃんは大赦とは別の組織に協力してるんじゃないかって」

「は、はあ?!園子:それ、どういうことよ?!」

「:お、落ち着きなさい夏凜:。今、乃木が説明してる最中よ」

「くっ:わ、解ってるわよ」

全員が慄き、思い思いに声を上げる。然し、風の窘めに気を落ち着け、再度乃木園子の話しに耳を傾ける。

答え合わせなんて、最後で十分だった。

「:理由は昔のお友達とか、家族とかかな。ゆうちゃん、自己犠牲は絶対にしなないけど:大切な人の為には無茶も無謀もするタイプだから。んー、そう言えば:『勇者』の量産が計画されてるって小耳に挟んだ事があるなあー。木を隠すなら森の中に、『勇者』を隠すなら『勇者』の中に:。なんてね?変な話だけど:大赦でもゆうちゃんを見つけれなかったつてことは、有り得るんよね」

「そ、園子さん:。?ボク、寒気がするなあ」

「話しは戻るけど、ゆうちゃんの協力してる組織って大赦内から分裂したモノだよ、きつと。大赦は外からの情報採取に滅法強いけど、逆に言えば中からの操作には弱いんだよね。過去に例がなかったから、つてのが大部分なんだけど」

「:。?つ、つまり:唯斗が誰かさんに協力してて、長期間帰れない予定だったから、転校つて形で姿を消したつてこと:だよな?」

「付け加えるなら、その期間中に壁の外で活動してたつてことね。その結果、天の神に捕まって、ダツサイ仮面付けて暴れ回ってた。まったく:面倒事を頼む奴もいたものね」

(お前の兄だぞー?)

きつと、三好春信は園子の言葉通りに事を進めたのだろう。郡唯斗を隠すために、土居結の偽情報を生み出した。防人部隊という閉鎖された空間の中で、隠され続けていた33番目の防人^{土居結}。

大赦の本部は土居結の存在を把握出来ていなかった——否、把握していたが明確な違和感を覚えることは出来なかったのだろう。無論、其れは女性神官（安芸）の協力があつてのものなのだろうが。

”隠す”という行為は、”探す”に直結してしまう。

今回の場合、大赦は”隠された”郡唯斗の存在を”探していた”。故に、性別も名も見た目も偽られ、内部から情報を操作された状態で大赦が、短期間に郡唯斗を発見するのは不可能だったのだ。

冷や汗が頬をつたる。

園子には、何処までも見透かされている気がする。あの、ふんわりとした視線の先には何が見えているのか。やはり、唯斗には乃木園子という生物が理解出来なかった。

流し目で寝ている東郷に視線を向けるが、穏やかな寝顔だ。とても人の家に侵入して布団の匂いを嗅いだり、勇者アプリのGPS機能を使って人のプライベートを盗み見るへんたいふしん（トリー）しゃ（ゴ）には見えない。

「唯斗くん…勇者部五箇条、『悩んだら相談！』だよ？唯斗くんも、東郷さんも…独りで突っ走らないで！」

「…友奈、プライベートを晒すのが勇者部なのか？勇者部五箇条は部員を縛るためにあるのか？生憎と、俺は俺について自分語りなんてしないからな」

「っ…！」

唯斗は自身の事情を決して語らない。

それは『勇者』になる以前からだった。頑なに記憶喪失を隠し続け、さも平凡を騙る。

それが郡唯斗の”歪み”だ。

勇者部五箇条に逆らうかのような生き方。まるで成そうとする素振りすら見せない。自分のみを貫き、正しさを二の次にしている。

一つ、挨拶はきちんとして。

一つ、なるべく諦めない。

一つ、よく寝て、よく食べる。

一つ、悩んだら相談。

一つ、なせば大抵どうにかなる。

唯斗には、それがどうにも『縛り』に思える。否定はしない。然し、大手を振って肯定なんて出来やしない。

「勇者部五箇条は義務ではない。でもね、唯斗。アレはアタシ達なりに正しい在り方を追求して、定めたものでしょ。強制されるんじゃないよ、そう在ろうとする心を持ちなさいってことよ」

「……風先輩が先輩っぽいこと言ってる……っ！」

「おいコラ、三ノ輪。少しは空気を讀みなさい。アタシの有り難り御言葉が軽薄に聞こえちゃうでしょうが!!」

「つまり、社畜根性に染まるために、ルール縛りは守れよってことっすか？それなら、まあ……了解ですとも」

「言い方が最悪ですよ、唯斗先輩……しかも納得してるし」

夢を謳わない唯斗だからこそ出来る、弄れた解釈だ。唯斗はこれでも、教師が『将来役立つぞー』と言えば真剣に聞くタイプだ。

「兎に角！今は唯斗についてでしょうが!!園子の言ってた『組織』とか……この際だから、全部吐いてもら——」

「なーんちゃって♪ゴメンね、にぼっしー。全部わたしの妄想なんよねー。小説のネタにしたら面白そうだなーって。ねえ？わたしの言ってたコト、全部外れてたよね？ゆーちゃん」

「は、ハハ……園子は妄想力豊かだネ。あんまり真剣に語るから、オジチャン否定しそびれてたよ」

釣られた魚が、水槽という大海原で餌を与えられながら生き永らえさせられている感覚だ。恐らく、園子は大体を察している。その上で、先程の推理は全て妄想の産物だったのだと言っているのだ。

単に唯斗を庇っているのか、それとも何かを企んでいる最中か。「で、でも……じゃあ唯斗くんは、結局何処で何をしてたのかな？」

「ゆーゆ、多分だけどね？ゆーちゃんは天の神に操られて外に連れて行かれたんじゃないかな。相手は神様だから、そのくらいは出来ても可笑しくないよ。転校云々に関しては、きつと神樹様が混乱を防ぐ為

に気を利かせてくれたんだよ。わっしーに関する記憶だって消せるんだし、ゆーちゃん的事情を合わせることもくらいは容易いはずだよ」「な、なるほど!」

結局は、『神だから』と言って強引に片付けようとしている。神樹についても不明な現状で、どうして天の神を理解出来るだろうか。神樹に

分からないけど、神様なら出来るだろう? そんな返事でしかない。全知全能を盾にして、神を信仰する者達が納得しない訳もなく。

付け加えるならば、結局詳細不明わたしに解るわけないじゃんという意思表示もある。たかが中学二年生に過ぎない乃木園子故の謳い文句だ。

「いやー、あの時は驚いたなあ。気が付いたら壁の外に居たんだもの。神樹様が咄嗟に端末を与えてくれなかったら、今頃は煉獄の塵になっただな」

「あつ!もしかして、唯斗くんが私の頭の中に『東郷美森を思い出せ!』って語りかけて来たのも…?」

「ははっ、神樹様のオカゲだヨ!」

「……ん?んん?…何だか、こんがらつてきたぞ…?十文字以内にまとめてくれ」

「全部天の神のせい」

「成程把握」

「八割くらい端折ってますよ…」

実際は至る方向からの思惑が絡み合い起こった事柄なのだか、まだ若い彼女達には必要悪として天の神を見せるのが手っ取り早い。

未だ語られない真実も、知らなければ無いに等しい事実だ。

全員に違和感を残しながらも、一応は解決という形を取る事にした。これ以上は天の神に関わってはいけないと、本能が告げていた。『勇者』然り、『壁の外』然り、やはり知らなければよかった事は多い。そう言い訳して、勇者部員は目を瞑る。

「ん、うう……、ここは…?」

「あら、東郷が起ききましたわ。警察呼ぶ?」

「なんでよ!?!……………今は止めなさい」

「あつ、夏凜さん…少しだけ納得しちやっただ」

全員が揃った勇者部は、微笑みを浮かべて仲間の帰還を歓び声を上げる。もう手を離さないために。

未だ、刻印は爛々と怪しく刻まれ続け、唯斗と友奈を呪いに犯す。

病院向いの建物。

そのこの屋上から、勇者部の再会を眺める影が二つ。全て思惑通りとニヒルな笑みを浮かべる山田くんと、素直に事の解決を喜ぶ国土亜耶。

「ありがとうございます、山田様」

「いや、礼には及ばないさ。寧ろ山田くんの方が君達に感謝しなければいけないくらいなもの。……まあ、まだまだ何も解決してないんだけどね」

「えっ……」

「近い未来、最終決戦があるんだよ。これまでの前でも、それは変わらなかった。鍵は神樹の寿命と、それを補おうとする信者共の働きかけ。…簡単に言えば、『運命の日は近い』ってコト!」

「……山田様、わたしは何をすれば宜しいのでしょうか?」

「んー、取り敢えずはゴールドタワーに戻ってもらうよ。事情諸々は神官さんにフオローしてもらうからさ、亜耶ちゃんは『巫女の仕事』とでも言っておけばいいんじゃない?あ、ネタバレはしちやダメよん?」

「は、はい!守秘義務は守らせていただきます!!」

「ついでに、亜耶ちゃんの部屋でコレ育ててくれる?テキトーに水あげるだけでいいから」

「こ、これは……?」

山田くんが亜耶に手渡したのは、茶色の鉢に植えられた小さな苗

だ。瑞々しい緑は、壁の外で橋頭堡を築く際に発芽させた草木に似ている。

神聖に雰囲気を纏うソレは、単なる植物とは根本的に何か異なる。

「山田くんはちよつと遠出するからね」

「と、遠出ですか…?」

「うん、信者を一人増やそうかなって。ところで亜耶ちゃん、蕎麦と沖繩そば、旭川ラーメンだったらどれが好き?」

「えっ?…えつと、敢えて選ぶのであれば——」

答えを聞いた山田くんはニヤリと微笑み、ビルの屋上から飛び降りた。

閑話　：　過去（未来）の日常

——2018年

結城友奈や郡唯斗がバーテックスと戦うよりもずっと昔、約300年程前の時代。人の世にバーテックスが現れ、初代勇者が生まれた時代だ。

「ふっ！せいつ!!」

「……………」

鍛錬場の床に素足が擦れる。

相對するのは一組の男女だ。青年は純白の髪に、血のように紅い瞳。身長は向かい合う少女よりも二十センチ以上離れており、細くも嫺かな筋肉は適当に気崩されたジャージの隙間から見取れる。

無口の青年とは対照的に、綺羅びやかなブロンド髪の少女は気合いの籠った掛け声で木刀を振るう。凜とした表情は彼女の勤勉さを物語り、多少のほつれが見える道着は厳しい鍛錬の結果とも言えるだろう。

「…………振りがデカイ。愚直だ。腕じゃなくて足も使え」

「くっ…………はい、師匠!!」

「声デカイ。あと、切羽詰ったら居合に逃げるな。諸刃の剣だって知れ」

「…っ!なら…………これはどうだ!!」

「惰性に甘えるな。考えろ。考えて敵を斬れ。非我と軽率短慮を同一にするな」

「はいッ!!」

指導を受け入れ、動きを修正する。少女の特技でもある居合で癖付いた大振りを短く、然れど鋭利に。愚直に斬り掛かるだけでなく、足で攪乱しつつフェイントを含む裏の裏を読む戦法を学ぶ。

「ん、足元が留守——」

「っ!!」

「——って言われたからって、護りを緩くするな」
「なっ!？」

師匠と慕う青年の言葉に促され足元の防御に努めるが——それが決定的な隙になる。

掬う様に木刀を回し取られ、後方に投げ飛ばされる。刀を唯一の武器とする少女にとって、それは王手を取られたに等しい。つまり負けだ。完膚なきまでに、明確な一撃を与えられずの完封、敗亡だ。

「むっ…師匠、今のは卑怯ではないか？」

「……バーテックスの前でも同じこと言えるなら、その度胸は評価してやる。存分に言え」

「そ、それを言われると弱い……そうだな、今のは私の惰弱性だ。忘れてくれ、師匠」

「ん」

飛ばされた木刀を拾い上げ、鞘に納めるように左腰に刺す。その姿はさながら武士だ。

少女——乃木若葉は師である青年を見る。

年齢は不明だが、高校生から大学生くらいだろうか。純白の髪に紅い瞳は特徴的で、やはり人間離れしている。本人曰く、彼は『精霊』らしいが、節々から滲み出る人間臭さはその言葉を否定するようでもある。

女子の中でも身長は高い方の若葉だが、それでも彼と向かい合ったら見上げる形になってしまう。

若葉が知る彼についての情報は、精々名前程度だ。『ユイト』と名乗り、ある日を境に『勇者』を師事している存在だ。『精霊』を自称するが、その点も真実は不明。多くは語らず、寧ろ寡黙な彼。やはり謎が多い。

「お疲れ様です、若葉ちゃんにユイトさん。タオルとお茶です」

「ああ、ひなたか。ありがとう」

「ん、ありがとう」

鍛錬を終えた二人に、艶やかな黒髪の少女がタオルと水筒を持って

近付く。若葉とユイトは礼を言いながら受け取り、乾いた喉を潤した。

「ユイトさん、この後のご予定は？」

「…タマ坊と杏に…ラーメン食いに行こうって誘われてた気がする。多分」

「気がするって…師匠。約束事を忘れるのは感心しないぞ？」

「忘れてはない。ギリ覚えてた」

「ギリギリなんですな…」

きつと若葉は気が付いてないが、ひなたは『精霊』を名乗る青年ユイトに違和感を覚えていた。彼は寡黙であり、それは偽りなき彼自身の性格なのだろう。然しながら、それが外見年齢と噛み合っているのかと聞かれれば、ひなただけは否と答える。

少しだけ、幼く見える。

寡黙というのは、決して『大人びている』に直結はしない。寧ろ逆で、そう在らなければいけないという子供じみた理屈すら感じる。

ひなたは精霊ユイトを好ましく思っている。それは彼女が乃木若葉を慕っているのと同様に、放っておけないからだ。目を離せば消えてしまいそうで、自分達の知らない『勇者』を見透かしている彼に、母性にも似た感情が芽生えているのだろう。

無論、ひなたが其れを若葉や他の仲間を伝えることは無い。

「若葉とひなたも来る？」

「…いや、有難いが遠慮しておこう。私はもう少しだけ鍛錬することにする。師匠に指摘された事を忘れる前に、身に浸透させたいからな」

「若葉ちゃんが行かないのであれば、私もそうしますね」

「むっ…ひなた、無理に私に合わせなくても…」

「無理にはありませんよ？私がそうしたいから、そうするんです。それとも、迷惑ですか…？しくしく…」

「うわっ、若葉最低。ひなた悲しませてるし」

「なっ！し、師匠！茶化さないでくれ…!!ひなたも泣き真似はよさないか」

「あらあら、バレてしまいました♪」

「ん？泣き真似だったのか…」

目を隠し、泣き真似をするひなた。長年の付き合いである若葉は直ぐに見抜いたが、ユイトはまんまと騙された。

彼がその手の経験に慣れていないのか、それとも彼女の演技が卓越していたのか。前者でもあり、卓越とまでは言わずとも上手い分類ではあったのだろう。

その後、軽く言葉を交わしてからユイトは鍛錬場を後にした。

ユイトは自室のシャワーで汗を流し、着慣れた黒いジャージに着替える。余談だが、先程まで着ていた鍛錬用のジャージは暗緑色だ。

部屋を出て向かう先はこの建物——丸亀城を改築した学校の昇降口だ。所謂待ち合わせ場所とも言える。まだ午前中だが、『精霊』や『勇者』、『巫女』を担う彼等彼女等は暇な立場とは言い難い。

より正確に言うのであれば、暇はある。然し命をかけて戦う『勇者』は、国中の期待を背負い、彼女達も死にたくはないから鍛錬に時間を割く。

だがそれも、全員が乃木若葉ほどストイックではないが故に生活に娯楽を取り入れている節もある。西暦における神世紀三百年の『勇者システム』に比べたら、良くて防人システム程度の戦闘能力しかない。

だからこそ若葉は鍛錬で心を落ち着ける。そして『心を落ち着ける』という点に関しては各々が読書やゲーム、食事に運動等でも同じことだ。

結局、誰もが合同訓練以外は、基本的には自由に過ごしている。

待ち合わせ場所の昇降口に向かうと、既に一人は到着していた。

低い身長に、短く二つに結ばれた明るい茶髪。アイデンティティである黒とオレンジパーカーはいつ見ても着ているイメージだ。

その少女——土居球子はユイトを見つけるやいなや、身軽に跳ね

て、駆けてくる。

「おーい！シショー遅いぞー!!」

「いや、五分前だろ。杏も来てないし」

「そりゃあ、アレだよ。女子の準備ってのはめっちゃくちや長いって言う逸話があるだろ？タマが思うに、これはそーゆー事だな！」

「逸話って…タマ坊も女子だろ」

「タマはタマだろ？シショーでもあんずでもなくて、タマだからタマクオリテイなんだよ！」

「深いけどクツソ浅いな……」

土居球子とユイト。決して浅くない繋がりのある二人だが、その性格はあまり似ていない。逆と言えるほど両極端でもないが、掛け離れているのは事実。

それでも割りりと、気が合うのも事実だ。

雑談すること数分、昇降口に向かってくる足音が二人の耳に届く。この時間、丁度昇降口に向かってくる人なんて一人しかない。

「お、お待ちせしました…！」

ボリユームのある淡いクリーム色の長髪に、青みがかかった緑の瞳。乃木若葉や土居球子よりも学年が一つ下の少女、伊予島杏だ。

土居球子を姉のように慕う、少しだけ気弱な少女。『勇者』となり明るくはなったものの、抱える薄暗い過去は未だに残っているのだろう。

「別に待ってない」

「そーだぞー。タマ達が勝手に早く来ただけだしな。あんずが気にすることなんてないぞ？」

「タマ坊が言ってた。女子の準備ってのはめっちゃくちや時間が掛かるってな」

「えっ…た、タマっち先輩がそんなことを!?すごい…!タマっち先輩が成長してる!!」

「タマ坊が成長…?このチンチクリンが…?」

「二人揃って失礼だなー!!」

背後にプン、とでも擬音が入りそうな怒り。双方に親しみがあ

り、まるで兄妹達の様でもある。青年はへそを曲げる少女の頭をポンポンと撫で、口にイカの姿フライを突っ込んだ。

多々トラブルはあったものの、問題なく外出することになる。ユイトは近所の百貨で買ったサンダルを履き、差さる陽射しに目を逸らしながら球子と杏の後ろに付いて歩く。

「ラーメン、ラーメン♪うどんも美味しいけど、やっぱりラーメンも美味いよなー！タマは味噌ラーメンにバターのせたいぞー！」

「コーンとほうれん草も。それが至高」

「おおー！シシヨーは天才か!?!」

「うん、天才……ん？杏、何処に行くんだ？」

近所にはユイトと球子が定期的に通っているラーメン屋がある。毎回とは言い難くとも、杏も同行することは少なくない。

然し、杏が真っ直ぐと歩を向けるのは別の方向だ。疑問と嫌な予感を抱く二人の肩をガツチリと捉え、杏は爽やかに微笑む。

「ちよつと寄る……いえ、寄らないといけない場所があるんです。私は今日、その為だけに付いてきたんですから！」

「……なあ、シシヨー。タマのタマセンサーが危険を察知したんだけど」

「奇遇。オレの精霊センサーも回避命令発令中」

「逃がしませんよ……ふふ、ふふふ……今日は！今日は！今日こそはユイトさんとタマっち先輩にお洒落してもらうんだから!!」

「ひえっ……」

二人は慄いた。合同訓練では下位の成績である筈の杏なのに、身の丈に合わない威圧感だ。若葉をも圧倒するユイトでも過去※のトラウマを刺激されて、縮こまるばかりだ。

「あ、あんず……何回も言ってるけどな、タマのパーカーはそれなりにオシヤレだろ？あんずだつて褒めてくれたじゃないか！」

「でもタマっち先輩、その柄しか持ってないじゃん。同じ服を何着も持ってるだけだし、そんなのお洒落とは言えないよ？」

「なあっ!?!」

「あん姉……杏。オレのジャージだつて実用性に長けてる。タマ坊と

違って種類も豊富だ。外出用の黒色に訓練用の暗緑。寝巻きには赤色。最強の布陣だ」

「ユイトさん…論外です。まだ相対的にタマっち先輩がお洒落さんに見えるレベルです。尉官、如何せん遺憾でイカンです」
「ぐっ…」

杏の口撃が球子とユイトを叩きのめす。何とも言えない正論の前に、二人は膝をつく。年上として、師として何かを言い返すべきか。それとも圧倒的な正論暴力の前に屈してしまえば楽なのか。

ユイトは考える。

考えて、考えて、考え抜いた末に――

「よし、逃げよう」

「し、シシヨー!?まさか…タマを見捨てるつもりじゃないよな…?」

「コラテラル・ダメージ。タマ坊、解るか?」

「全く分からん!!」

「…タマっち先輩。コラテラル・ダメージはやむを得ない犠牲、副次的な被害ってことだよ?」

「っ、つまり…?」

青年は教え子を捨てることにした。やむを得ない。格好の餌となるなら、利用しない手は無いだろう。肩を強く掴む杏の手をスルリと抜け出し、空いた球子の肩に添えておいた。

「囃ヨロ。オレは一人でラーメン食いに行くから」

「そんな…ぐぬぬっ!死なば諸共!!こうなったらシシヨーも可愛いフリフリな服を着ればいいんだー!!」

球子は絡み付くようにユイトを拘束し、言葉通り死なば諸共の精神で抱きつく。其れは大凡のロマンチックな抱擁ではなく、他者を蹴落とし、己が生存者になろうとする醜く争いだ。

小さな体に似合わない剛力。込められた執念は、ユイトの力を持つてしても容易く解けるものではない。

「っ、掴むな…!離せ、今すぐ離せ…ッ!離さないと杏の胸を揉みしだくぞ!!」

「なんで私?!おかしいですよね!!」

「望むところだコンニャロー!! あんずの胸の一つや二つ、シシヨーにならなくてらやあ!!」

「勝手にあげないでよ!? っていうかタマっち先輩のモノじゃないでしょ!! わかったから! 今日諦めてラーメン食べに行くから!!」

「いや、ここは揉んでおこう。完膚なきまでに揉みしだいておこう。後学のために」

「おお、さっすがシシヨー! その心意気、タマのシシヨーなだけあるな!!」

「嫌だよ!? 触らせないから……… 触るなら最期まで責任取ってもらうつもりだから!!」

「じゃあいーや」

「埋めますよ? 土に」

「ヒエツ……」

慄きの声が漏れた。ハイライトの消えた目は球子とユイトを恐怖の底に叩き落とす。一歩間違えたら、本当に埋められる。手足を縛り口枷を付けられ、麻袋に詰められて土の下で眠らせれる。

そんなビジョンが明確に浮かんでしまった。

「杏。オレ、思うんだ。イカの姿フライって美味しいなーって」

「それは常日頃から言ってますよね」

「故に、オレは思うんだ。イカの姿フライは美味しいなーって」

「無限ループに突入した!」

「だからこそ、オレは杏に伝えたいんだ。イカの姿フラ——」

「イカの姿フライが美味しいって言わないでくださいね? 毎日聞かされて……ノイローゼになりますから!! もうウンザリです! 朝起きたら『イカの姿フライが美味しー』。授業中にメールで『イカの姿フライが美味しい!』って美味しい!……合同鍛錬の声出しで『イカの姿フライ美味しいー!!』って言わされて、夕食時には『イカの姿フライ美味しい過ぎる!』から始まるイカの姿フライトークを永遠と語られ続ける………気がおかしくなりますよ!」

「は? イカの姿フライが美味しくないって言うのか? こんの小娘め……その乳揉みしだいて泣かせたろか!」

「この際、イカの姿フライから話しを逸らせるから……構いません！
存分に揉みしだけばいいじゃないですか!!」

「シシヨーにあんず。せつかくループから抜け出したのに、またあ
んずの胸の話に戻ってるぞー？あと、イカの姿フライトークは千景と
だけにしとけよな」

頭を抱え恨み節を吐き続ける杏に、狂ったイカの姿フライ愛でキレ
るユイト。相対的に球子がマトモに見えてしまう現状だ。

「そんなことより、ラーメン食べに行こう」

「……シシヨー、散々引つ掻き回しといてそりやあないだろ」

「奢ってやるぞ」

「ピヤツホー！早くラーメン食べに行こー!!あんず、服選びなら後で
付き合つてやるからさ、今はトツピング全乗せラーメンを堪能する
ぞー!!」

「タマっち先輩って単純だよ。良くも悪くも極悪にも」

「…タマ坊、直球に短所だって言われてるぞ？てか人の金で贅沢する
なよ」

一人駆け出し、行きつけのラーメン屋に向かう球子。ユイトと杏は
呆れたように笑い、歩いてその背を追った。

「あつ、引きこもりだ」

夕暮れ時。

昼食を終えてから球子と杏の買い物に付き合い、辺りが茜色に染ま
る頃。二人とは別れ、ユイトが共同生活の場に戻っている最中のこと
だ。

前方から若干の猫背で歩いてくる、目の下に隈をつくる少女——郡
千景。艶やかな黒髪に普段はキリツとした目つき。日本人として完
成された容姿は個性豊かな『勇者』の中でも一段と注目を集める。

ジャージ姿で出歩くユイトと出会い、千景は面倒臭さそうにため息
をついた。

「……はあ、誰が引きこもりよ。単に用事ゲームで忙しかったから外に出な

かっただけ」

「そうか」

「ええ、そうよ」

「じゃあ遊ぶか?」

「な、なんでよ……」

脈絡のない話題変換に、千景は困惑した。

精霊を自称するユイトだが、郡千景との関係は薄くない。だが、人間関係的な繋がりは決して濃いとは言えない。然しながら、それよりも深く決定的な部分では繋がっている。それは千景だけでなく、土居球子も然りだ。

故にユイトは手千景を、武の師としてだけでなく、飽くまでも個人的に気を使う。

「…何で私が貴方と遊ばないといけな——」

「よし、高奈も呼ぶか」

「ユイトさん、私の部屋でいいかしら? お菓子と飲み物の予備は充分あるし」

「手のひら全方向駆動式か? もっとネジ締めないと外れて落ちるだら」

「イカの姿フライもあるわよ」

「さっそく高奈を呼ぼう。疾く、夙く、速く。今すぐ呼ぼう。時間は有限だ」

「手のひら全方向駆動式なのかしら? ネジ緩んでるんじゃないの」

ユイトはサンダルをパカパカと鳴らしながら廊下を駆け、高奈——高嶋友奈の部屋の前に着く。ドアを数回ノックしてから返事を待たずに部屋に突入した。

「わひゃっ!?! し、師匠!?! どうしたんですか?」

「高奈、急げ。イカの姿フライは待ってくれないぞ」

「なんのはなし!?! えっ、わ、わあああああああ!?!」

ベッドの上で漫画を読んでいた友奈を肩に担ぎ、ユイトは再び駆けてきた道に戻る。道中に友奈の悲鳴が響いていたが、イカの姿フライの前には無に等しい。まずはイカの姿フライだ。

寧ろイカの姿フライ以外は閑話だ。ユイトはそう決めつけ、耳元で悲鳴をあげる友奈の口にポケットから出したイカの姿フライを突っ込んだ。

勢い余って千景の部屋を通り過ぎ三周目、友奈の悲鳴も落ち着いてきた頃。ユイトは友奈を担ぎながら千景の部屋に入った。

「お邪魔」

「何だかよく分からないけど、おじやましませーす!」

「い、いらっしやい…高嶋さん。えっと、何のゲームする?」

「ゲーム? あっ、ナルホド! 師匠とぐんちゃんと私で遊ぶってことかー!」

「……ユイトさん、まさか説明してないの?」

「それよりもイカの姿フライは? オレが持ってた分は食べきったんだけど」

「あら、ごめんなさい。全部食べちゃったわ」

「……千景、右手の親指でいいか?」

「冗談よ。冗談だから、人の指を詰めようとしなくてちょうだい。イカの姿フライならベッドの下の箱に入ってるから」

「あはは、ぐんちゃんと師匠って仲良しだね♪」

「そ、そんなことないわ…高嶋さん。私とユイトさんは、別に……仲良しではないもの」

仲良し——少なくとも、大凡の友人と呼べるような間柄ではない。偶に会って遊ぶ従兄弟や、それなりに話をする程度の隣人。

一言では言い表せない。ユイトも千景も、その術を知らない。

「…よし、馬リオカート娘やるか。千景、コントローラーどこ?」

「いつもの場所よ。あっ、高嶋さん……! このお菓子、期間限定のやつなんだけれども…」

「あ、これ知ってるよ! このまえCMでやってたよね」

これは単なる日常——否、非日常の中にも確かに存在した平穏だ。

廻り、廻り、廻り。

遂に辿り着いた平穏。

軌跡はいつか神世紀の『勇者』に繋がり、種は成長し花を咲かせる。それまで、憩う。無垢な少女達の魂は憩う。在りし運命の日まで。

故に、今はまだ、非日常の中の平穩に身を浸す。

偽りにすら成れない、平穩の中で。

◆◆◆オマケ◆◆◆

《精霊ユイト》

・西暦の時代で『勇者』をサポートする存在。純白の頭髮に、血のように紅い瞳。身長は180cmを超えており、細くも引き締まった筋肉を有す。

戦闘技能の関しては現状の乃木若葉を上回り、西暦の『勇者』の師匠として皆に鍛錬をつけている。

一応バーテックスとの戦闘にも参加するが、飽くまでもサポート。撃破自体は決してしない。

ある日を境に『勇者』達の前に現れた。

服装には土居球子以上に興味皆無であり、常にジャージとサンダル、もしくは古い運動シューズで過ごしている。尚、ジャージに関しては使用目的で色だけは分けている。外出時は黒、鍛錬時は暗緑、寝間着には赤。戦闘時は青いジャージに変身する。

本編の『郡唯斗』と同一ではない。

とある時空からの必要分岐。とある世界にて数年過ごし、その後、幼い彼が――

叡智か曳地、もしくは営地

「……………」

「ふあつ、ふみゆう……」

「……………」

「……………んつ、ふわああ……」

「…風先輩、アレ何？」

「奇遇ね…アタシも今、アンタに同じこと聞こうと思つてたところよ」

——夕暮れの勇者部部室。

非日常から日常に戻り、唯斗もまた讃州中学に戻ってきた。既に先日の戦闘から一週間は過ぎていく。検査入院をしていた東郷美森も無事に帰ってきて、今現状では友奈や夏凜に銀、園子達と河川のゴミ拾いに出ている。

騒がしい面子は外に出ていて、静かな教室内。襲い来る眠気を噛み殺し、身体を伸ばして欠伸をした。

平穏だ。堪らずイカの姿フライを頬張り、勝手に部室の冷蔵庫に入っていた某エナジードリンクで喉を潤しカフェインを暴れさせる。

犬吠埼姉妹と唯斗は部室での作業に取り組んでいたが、集中力を著しく削ぐ要因が一つ。

「…樹のヤツ、何で時々ビクンツ、ビクンツって振動してんの？実は壊れかけの機械だった説」

「アタシの妹をサイボーグ化するな。多分アレよ、アレ。よく見ると、ワイヤレスイヤホン付けてるでしょ？アレで何か聞いているに違いないわ……………何で光悦の表情で目がトロンとしてるのは知らないけど」

「んつ、つはあく……………♡」

「ほら、またツスよ」

書き作業しながら、定期的に甘い声を漏らす樹。小さな声だが、静寂に包まれた部室には嫌に響く。無意識なのか、本人だけは気にした様子もない。

風も唯斗も、互いに作業に没頭する時は相手に気を遣い黙って手を動かすタイプだ。一方で樹は鼻歌を歌い、作業と娯楽を両立して程々に集中する。

コレもその一環ではあるのだろうが、如何せん集中力を削ぐ。何処となく艶やかな声も、二人にとっては『いてつ〇はどう』に等しい。極限まで絞られた小声での会話は無論ワイヤレスイヤホンを貫通し樹の耳に届くこともなく、樹の視線もパソコンの画面から漏れる事は無い。

「センパイ、声掛けてくださいよ…」

「えっ、何でアタシが…！何かこう…そういうの聴いてたら気まずいじゃない…！…互いに」

「叡智系ですか？」

「永地系よ」

「栄知系かあ…」

「曳地系なのかしらねえ…」

真実を知るのは未だにピクツ、ビクンツ、と理解に苦しむ挙動をする樹のみ。まるでシュレディンガーの英智だ。心の底から下らないと思う反面、事の重大さだけは肥大化する現状。

風はたった一人の家族であり、唯斗はたった一人の親しい異性。そういうのがバレようものならば血を吐き爆死永眠するだろう。

尚、誰も樹がそういうのを聴いているとは言っていないが。

「……外に出る？」

「バカ、風先輩のバカ。そんな事したら、樹が自分の痴態に気付いて自殺モノですよ…！」

「痴態で…：…なら、どうするつもりよ？とてもじゃないけど、アレを気にしないってのは無理でしょ」

「だから…：…アレっすよ。樹が自主的に気付いてくれるのを待つ的な？」

「…いっそ、アタシ達もイヤホンする？…：…一応言っておくけど、アタシは持ってないわよ。家に置きっぱなしなもの」

「ハハ、またまた奇遇ですね。俺も持ってねえですよコノヤロー」

「野郎じゃないわ、女郎よ」

「どっちでも良きデスワよ」

「何処でその似非お嬢様言葉覚えてきたのよ……ハマってんの？」
「えへへ」

方針無し。目標無し。

ただただ気まずい雰囲気の流れるだけの部室。早く友奈達に帰ってきて欲しいと願うが、然し今帰ってこられても困るといふ矛盾した想い。

現状維持の辛さを、風と唯斗は身をもつて知る。因みに、どちらかが声をかければ五秒で解決する問題でもある。

「これも……成長なのかしら。何だか複雑な気分……妹の叡智趣味が、姉と先輩の前で光悦に浸ることだなんてね……は、はは……」

「……いや、曳地系と決めつけるのは早いかもです」

「……つまり？」

「イケメンイケボの囁きバイノーラル音を聴いてるのかもしれない。耳舐めしながら全肯定してきて、ヤケに吐息が多いヤツ」

「やっぱり恵市系だ!!」

「あつ、先輩的にはイケメンイケボは営地系なんすね」

風にとつての瑛智系は範囲が広い。バイノーラル音響に人の声が入っていた時点で、既にアウト。人の敏感な耳を刺激するのはプレイ（意味深）に等しいと風は語る。

唯斗と風が知恵^{愚策}を出し合うこと十分弱。

「結城友奈、ただいま戻りましたー!!」

「同じく東郷美森、帰還いたしました」

「三好夏凜、同じく戻ったわ」

「げっ……」

「げ？」

「あ、友奈さんに東郷先輩、夏凜さんも。おかえりなさいです」
「っ!?!」

騒々しいのが帰ってきた、と風と唯斗は露骨に表情を歪めた。

良いのか悪いのか、友奈の大声で樹がイヤホンを外し此方を向く。向いた先には顔が青ざめている姉と先輩。ああ、いつも通りの奇行だ、と早々に察した樹はそつと視線を逸らした。

「樹ちゃん何聞いているの？見せて見せて！」

「あつ、ちよつ!?!ユーナストップ！覗き覗ちやらめええええ!!」

「唯斗うっさい」

唯斗の渾身の叫びも虚しく、二年組三人は樹の携帯端末を覗き観る。せめて屍からは目を逸らしてやろうと目を瞑る二人。次に聞こえるのは悲鳴か、絶句故に声にならない叫びなのか。

無論、予想は大きく外れる。

「あつ、それ私も偶に聴いてるよー！偶に欲しくなるんだよね、ズンズンって奥に強くなるやつ!!」

「友奈さんですか？あはは、私も気に入ってるんですよ」

「ユーナさん!?!……大丈夫？その発言、問題にならない？威風堂々な癖開示で畏怖恐れ慄いてるんですけど……」

「ふふつ、友奈ちゃんったら。言ってくれたら、私がやってあげるのに」

「東郷！それアウトだから!?!通報案件だから!!」

「ふふつ、友奈さんと東郷先輩は相変わらず仲良しですね!?!……実は……ちよつと前までは、私もお姉ちゃんからやつてもらってたんですよ。恥ずかしながら……っ／＼／＼」

「ふ、風センパイ……?」

「やってないわよ!?!やめて！そんな目で見ないで……!!」

「そう言えば、そのっちも唯斗君にやつてもらったって言ってたわ。凄く、上手だつて」

「へえ、なんか意外ね。唯斗ってそういうのも出来たんだ。まあ？多分私の方が上手いわね!?!……人にやったことはないけど」

「おお、夏凜ちゃんが対抗心を燃やしてる！やったことはないらしいけど」

「ゆ、唯斗……サン……?」

「やってねえよ!?!やめて……ゾワツてするから”さん”付けしないで……」

!!

絶妙に噛み合わない会話に、風と唯斗は得体の知れない恐怖感を感じる。

一体、目の前の彼女達はどれだけの歴戦を潜り抜けてきたのか。未だ風も唯斗も到達し得ぬ領域の話を嬉々とする者達は、本当に外出前と同じ人物なのだろうか。

挙動の怪しい二人に、流石の樹も違和感を覚える。

「…………お姉ちゃんも唯斗先輩も、急にどうしたの？何か様子が変……」
「怪しい…………また変な事でも考えてるんじゃないでしょうね」

「ひえっ…いい、樹？あ、ああー！アタシ、猛烈に喉が乾いてきたなー!!
これは近くのコンビニニまで飲み物を買いに走るしかない！よしっ、
いってきまーす！」

「なっ!?ず、狡いぞ風先輩！一人だけ逃げ…………もとい、飲み物を買いに
行くだなんて!!俺もお供しやすぜ逃げるな置いてくなくなー!!」

財布も持たずに駆け出す変人コンビニ。

「なにあれ…?」

樹の小さな呟きは二人が走り去る足音に掻き消される。

後日、噛み合わない会話の真実を知った風と唯斗は互いに殴り合っ
た。鍛錬という名の煩惱ぶっ飛ばし大会と称して力の限り殴り合っ
た。

「はあー、終わった終わったー！疲れたなあ」

「そーですなー」

寒さに肩を震わせながら、銀は体を伸ばし茜色の空を仰ぐ。

三ノ輪銀と乃木園子は勇者部の活動、通称ゴミ拾いの帰りだ。外に
出ているのは東郷美森と結城友奈に三好夏凜、三ノ輪銀と乃木園子の
五人。二組に別れて行動しており、持ち場の遠かった銀達は必然的に
帰りも遅くなる。

「もうゆーゆ達は部室に着いてるって〜」

「そーか。じゃあ取り敢えず、歩きスマホするの止めような？普通に危ないから」

「はあい。ミノさんもわっしーとゆうーちゃんに似てきたね」

「おっ？悪口か？」

「そういうところだよ？」

揶揄うように軽口を叩き、銀は声を上げて笑う。

数ヶ月前まではこんな状況なんて想像すら出来なかった。縛られていたベッドの外は呆れるくらい広くて、自由になった手足は際限なく走り回りたいと疼く。

数年前までは当たり前だった事も、今は有難いと感じる。これは成長なのか、達観なのか。

或いは昔よりももっと子供じみた、表現にも困る感情だ。

「……ミノさん、ちよつと聞いてもいいかな？」

「おん？……さすが親友、奇遇だな。アタシも園子に聞きたいことあったんだ」

飽くまでも表情は明るく、変わらず。それでも無意識に声のトーンは下がる。今からする話しは、決して楽しいモノではない。

片や理性で、片や本能で察する。それは彼に関する事柄であると。故に避けては通れない。

「ミノさん、何か隠してない？」

「何かって？」

「うーん、推測するに……『勇者』についてでしょう？この前の戦いで、にぼっしーが使ってる筈のミノさんの『勇者システム』を……ううん、違うね。あのシステムは前のは別物かな？」

「怖い怖い怖い。察しよすぎて怖いって」

「ふっふっふー、簡単な推理なのだー！……だって、ミノさんの『満開』の仕様、前のミノさんの端末のと全然違ったじゃん」

「割と初歩的な部分だった!？」

本来の——先代勇者として三ノ輪銀が使用していた『勇者システム』。それに内蔵されていた『満開』は今とは違う仕様だ。

大型の四足獣を出現させ、その爪や牙は斧で形成された怪物。それ

に乗り込み操るのが本来の彼女の『満開』能力だった。

然し、先日の戦いで三ノ輪銀が使用したのは通常時の超強化版である『満開』。今の『勇者』に酷似した延長線上の切り札だ。

そも、園子や東郷の『満開』は大型の船や移動砲台を出現させる――言わば殲滅に特化した『満開』だ。それは先代であった銀の『勇者システム』にも同じことが言える。

そして、武器の超強化は今代の『勇者』の特徴だ。今の銀の『満開』は間違いなく、今代寄りだった。

「んー、神樹様が授けてくれた……って言ったら信じる?」

「ミノさんがそうだって言うなら信じるよ?」

「じゃあ言えないや。……まあ?秘密って言うよりかは言えないって方が正しい表現なのかねえ。別に悪い人達じゃないから、心配はしなくてもいいよ」

「ふむふむ、ミノさんのシステムには協力者が存在すると」

「会話の節々から推察するのやーめーろー!」

「脳が疼くぜべいべー」

銀とて、揶揄われている自覚はある。だがそっち方面で園子に敵わないのは重々承知の上だ。既に諦めている。

「それで?ミノさんも聞きたいことがあるんよね?」

「:正直言つて、園子も隠し事してるだろ。唯斗のことにに関して」

「うむむ:風播之論つてことで」

「ふう、はん……?」

「簡単に言えばね、答えは出さないってことかな。風に揺れる旗を見た時、ある人は『旗が動いた』と言った。でもまたある人は、『風が動いた』と主張する。果たして、旗に化けた狸さんが動いたのか、本当に風が吹いて靡いただけなのか。私達には解らないよね」

「ぐむむ:難しいことを言つて煙に巻こうとしているな!……つまり、この件については否定も肯定もしないってことだな。問題の放棄はズルじゃないか……?」

「教えられないって意思表示でもあるかな?」

「お互い様つてか?ホント、いい性格してるなあ」

答え合わせはしていないが、園子は唯斗の事情について察してはい
る。然し問い詰めたりはしない。

想い人故に——ただ待っている。

彼が自分から話してくれるのを待っている。きっと時間が掛かる
のだろう。臆病で、それでも仲間の為ならば無茶も無謀も貫く馬鹿。
自分なんかよりもずっと秘密主義で、いつの間にか両の手いっぱい
物事を抱えている性分。

園子は、それでも大好きな彼が話してくれるのを待っている。酷く
臆病者が少しだけ強く、仲間を信用出来るようになるのを待ってい
る。

「まあ、待てなくなったら突撃するだけなんだけどね」

「ん、なんのことだ？」

「ううん。コッチのお話ですぜい、旦那」

「誰が旦那だ。花も恥じらう女子中学生だっつーの」

目の前には見慣れた讃州中学。もう暗くなってきた空を見上げて、
銀と園子は呆れて笑う。この場に居なくとも悩ませる彼は、今何をし
ているのか。

空に向けた視線を前に戻すと——

「あ、あ、あ、あ、あああああ！勇者部が…妹と後輩達が魔境入りし
たあああ!!方向性の違で解散も辞さないいい!!」

「変態共の巣窟だああああ!!全員ストーゴーってやがる!!変態と同じ
空間にいれるか！俺は家に帰らせてもらおう!!」

奇声を上げて横を走り去った風と唯斗。こちらの悩みなど微塵も
察知しないアホ面は『ああ、またいつもの奇行か』と思わせてくる。

「……園子、今のって唯斗と風先輩だよな」

「うんうん、また面白そうなことになってるね。本当に、勇者部はネ
タに困らないなあ」

やはり呆れて、でも飽きない日常。変わり映えし olmayan 劇的な日

常は、園子と銀の頬を釣り上げ笑顔にさせた。

あの日の続きを――

○月&日

今日から日記ノートも二冊目だ。

最近の特筆すべき出来事と言えば、アレしかない。俺の胸に刻まれた痣……いや、刻印か？赤黒い刻印は外の世界の煉獄よりも濃密で、おぞましい呪いだ。

痛くはないし、今のところは異変もない。変なの付けてる時点で異変はあるけど、本当に在るだけなんだ。

偶に疼くけど、それもきつと気の所為だ。身体に変なモンを刻まれてたら、そりゃあ疼くような錯覚も一度や二度あるだろう。だからきつと、これも直ぐに消える。そうに違いない。

……いや、現実逃避はやめよう。

刻印は一日一日、日を追う度に広がっている。蝕まれている、そう認識するまでは大して時間を要さなかった。

原因は明白だ。

本人には言えないけど、東郷を救出した時だろう。鏡越しに映る刻印は、東郷がブラックホールの中に囚われていた時にも見た。東郷の胸に刻まれていたものと全く同じだ。

東郷を助けるとき、俺と友奈は東郷に触れて、身体の中にナニカが流れ込んでくる感覚を覚えた。それと同時に東郷の胸からは刻印が消えた。

その結果が現状だ。

…友奈もなのか？今のところは変わった様子もないが、それは俺も同じだ。態々表情に出すタイプでもないし、友奈は他者に心配をかけるまいとするだろう。

無論、思い違いの可能性だってある。白状すると、思い違いの可能性が大きいからこそ俺は聞けないでいる。

友奈は察しの良い奴だ。察しが良くて、責任感に溢れている。だから、もしも俺だけに刻印が刻まれていたら……アイツは責任を感じる

だろう。それは嫌だ。優しさとか、そういうのでは無い。
自分のケツは自分で拭ける。俺の決断で俺が成したことを、責任ごと取られたくはない。

……だから、俺は見て見ぬふりをする。

今日も、明日も、明後日も。気持ち悪く笑って、気持ち悪く日常を演じて、気持ち悪く平穩を謳歌する。

——ああ、本当に気持ち悪いなあ…

始めよう——否、再開しよう。

揺蕩う気持ちは、浮いたままでは終わらない。

濃密な時間で積み重なった想い。

空を見て、思う。

こんなに寒い日でも、空は悲しくなるくらい青い。

こんな空を雲が隠してしまう前に——

「唯斗君、出掛けましょう」

「嫌だ帰れ通報するぞ友奈ン家に行けやぶつ飛ばすぞコノヤロー」

「ちやんと息継ぎはした方がいいよ?」

「シヤラップ」

「むっ…唯斗君、外来語は駄目よ」

「shut up」

休日の出来事だ。

寒さに身を震わせながら、人間湯たんぽ園子を抱き締め布団の中で怠惰を貪っていた唯斗。何故園子が唯斗のベッドに潜こんでいるのかはこの際置いといて、昼過ぎまでは寝る予定だった。

目覚めると同時に目を瞑り、夢の世界の切符をおもむろに探している——

「テメエが来たわけだ」

「はい、来ました。出掛けましょう」

「トーゴーしやんはそれしか言えないのかい？布団で寝まっくてる園子を見習えよ。そろそろ冬だし、帰って寝ろ」

鳴る玄関チャイム。郵便かと思いい外に出たのが悪手だったらしい。さも当たり前かのように玄関前に立ち、忙寝る予定しいの唯斗を外に引っ張り出す悪魔。

ドアを閉じようとしても足をドアの隙間に擦り込み、恐ろしい怪力でドアをこじ開ける。これには唯斗も恐慄くばかりだ。

「あつ、これイカの姿フライなんだけど…」

「…チツ、東郷さんよオ？俺をイカの姿フライさえあれば何でもする安っぽい男だと思ってるのか？はあツツ！イカの姿フライが安っぽいだと!? テメエ巫山戯んなよこの野郎!! 今すぐ準備するからそのイカの姿フライ寄越せやありがとうございます!!」

「情緒不安定過ぎる!？」

自分で蒔いた餌だが、こうも分かりやすく引っ掛かれると拍子抜けする。尚、自問自答で自己矛盾し最終的には相手のせいにしてくる変人だとしても、立派な東郷美森の想い人だ。

唯斗が東郷からイカの姿フライをぶんどり数分後、しっかりと出掛ける準備をした唯斗が玄関に戻ってきた。

黒いセーターの上に薄いウインドブレーカーを重ねて、下も適当なジーンズ。まるでコンビニにでも行くかのような、ラフな格好だ。

「んじや、行くか。何処行く? 近所の公園か? 歩いて二分の駄菓子屋なんておすすめ」

「一秒でも早く帰ろうとしてる?」

「うん」

「せめて否定しようよ……まあ、簡単には帰さないけど。ふふっ……逢瀬を楽しみましょう?」

「今の台詞、録音して自分で聞いてみ? ユイトくんは寒気が止まらないよ」

「あら大変! 抱き締めて暖めてあげなくちゃ……!」

「やめろ。セクハラで訴えるぞ……仕置人崗サンに」

「……唯斗君？逢瀬中に他の女の子の名前は出さないでね……？」

「もう否定すんのも疲れた……」

文字通りイカの姿フライに釣られたただけなのに、いつの間にか逢瀬扱いされている現状。もしも逢瀬だったとしても、出合い頭に『出掛けましょう』とだけ告げるのは風情もクソもない。

「唯斗君、ちよつと待って」

「ん？」

途次数分、淡々と歩く唯斗の袖を強く引つ張り、東郷は立ち止まる。今日の目的はそれじゃない。散歩でも、時間潰しでもない。

唯斗は兎も角として、東郷にとつてこれは逢瀬なのだ。男と女が二人で逢い、言の葉を交わして店等を回る行為。

「手を繋ぎましょう！」

「えっ、やだ」

「後でイカの姿フライ買ってあげる」

「チツ、しょうがねえな。ほらよ、握るなら勝手に握ってな」

「…私が言うのも変だけど、唯斗君の将来がすごく心配だわ……私達ならいいけど、知らない人からイカの姿フライを貰っても無闇やたらと付いて行ったら駄目だよ？」

「トローチャンはボクを小学生だと思ってるの力ナ？」

東郷は打つ切り棒に差し出された手を優しく握り、唯斗の肩に頭をこてんと乗せる。歩きづらいと苦言を漏らすかと思つたが、存外、何も言われない。

唯斗とて東郷を嫌ってる訳では無い。寧ろかなり親しいからこそ、無遠慮であるとも言える。ここまで遠慮をかなぐり捨てているのも、東郷を除けば風くらいだろうか。

彼の言葉は、東郷への悪口ではなく思ったことをそのまま口にしていただけだ。嘘の混じらない、郡唯斗が一個人として東郷美森に向けた言葉の数々。

一つ一つを心の底から嬉しいと思ってしまうのは、惚れた弱みだ。

「……唯斗君。私達が初めてバーテックスと対峙した次の日のこと

「……覚えてる？」

「…そりやあな。珍しく東郷がへこんでた日だろ？励ました身としても、早々には忘れられないだろ」

「あの日、唯斗君が私を抱き締めて、慰めてくれた日……実は、私ね？唯斗君から告白されたって思ってたんだよ？」

「……………えっ、マジ？」

両の腕で強く抱き締め、耳元で『守る』と言葉にした。その実は前日に観たドラマでの慰め文句だったのだが、東郷にとっては関係のない話だった。

あの日から、東郷美森は郡唯斗をずっと見てきた。日常で風や夏凜達とバカ騒ぎする姿。戦場で勇ましくピコピコハンマーを振るう勇姿。海やお化けが苦手で、やたらと頑固なのにイカの姿フライを出せば素直になるところも。

淡い気持ちはいつの間にか固くなり、小さな恋心となっていた。今でも心の中で成長する種。彼に触れて、話して、少しづつ大きくなる。

「ふふっ、やっぱり勘違いだったんだね」

「あー、えっと…紛らわしいことを言ってたっけ？すんませ、悪意は無かったんだけど…ゴメンナサイ？」

「別に怒ってないよ？別に唯斗君が『好きだ』って言ってくれた訳でもないからね」

飽くまでも勘違い。そう割り切っても尚、恋心は冷めない。ずっと、ずっと熱く、泣きたくなるくらい焦がれる。

——だから。

「郡唯斗君…私は、東郷美森は…貴方が好きです。大好きです」

「……………えっ…？は…？…なん、で…？だ、だって…きつき勘違いだっ…」

「仕方ないでしょう？勘違いだったとしても、歪んでいたとしても、一度芽生えた気持ちは嘘じゃないから。だから、私は伝えたいの。私を

貴方に刻み込んで欲しいの！」

何度も助けられた。自分の恥ずべき記憶を観せても尚、ずっと変わらずに接してくれる。

「…唯斗君は私が嫌い？」

「き、嫌いではないけど…」

「そっか。それを聞いて良かった！」

その上品な微笑みは、彼女を年齢以上に綺麗に魅せる。濃密な人生経験は大人にも劣らない。だからこそ、皮肉にも東郷美森は美しい。儂いからこそ、何者にも劣らないのだろう。

欲しい反応を見れたからだろうか。東郷は軽く頬を叩き、覚悟を決めた。

唯斗の手を離し、二、三步下がって正面から唯斗の顔を見る。高鳴る心臓に手を添え、深呼吸を最後にして、言葉を紡ぐ。

「郡唯斗さん、貴方を生涯愛すると誓うので……結婚を前提に付き合ってください」

甘美な憂いを纏う姿は、彼女の今日この場に至るまでの葛藤を物語る。

東郷美森は弱い人間だ。嘗ては世界に絶望し、滅ぼそうとした。責任に耐えられず、全員の記憶から消えてその身を神の供物とした。そんな彼女から出た、強い告白の言葉。並大抵ならぬ覚悟の末なのだ唯斗も察した。

故に――

「…………ごめん。誰とも…付き合う気はないんだよ…」

「……………そ、っか…」

青い朝顔——その花言葉は『儂い恋』。

彼の苦虫を噛み潰したような視線は、唯斗自身の胸に向けられる。不吉の凶兆は、いつか唯斗だけでなく周りも巻き込む。

そう予感していた。だからこそ、もう誰とも付き合えない。たとえ相手を傷付けたとしても。

「……………」

下げていた視線をゆつくりと上にあげる。

フツた者として、唯斗にはその結末を見届ける義務がある。たとえば彼女から暴言を吐かれたとしても、唯斗は受け入れるつもりだ。

前髪の間隙から見える彼女の表情は――

「じゃあやっぱり、逢瀬の続きね！」

「此奴メンタル無敵か…!？」

――笑っていた。

屈託なき笑みだ。憑き物が落ちたように、スツキリとした表情。空気を読まないことに定評のある唯斗でも、自身がフラれた直後にはこんな表情は出来ない。

「……………何で笑ってるんだよ」

「ん？……………あら、私ってば笑ってたのね」

口元に手を添え、少しだけ驚く東郷。微笑みは徐々に大きくなり、遂には満面の笑みになった。そして、東郷美森は濡羽色の髪を靡かせ、告げた。

――だって、朝顔の蔓は絡み付くモノだもの♪

と。

精霊『雪白』

「ん……っ、ぶう……」

寝苦しい。

掛け布団の上から、冷たい何かを押し付けられているような感覚。重くはないが、今冬に限っては不快感すら湧く。

園子の悪戯かと考えたが、彼女は東郷美森の家にお泊まり中だ。態々悪戯をしに戻ってくる程暇人でもない筈だ。

そつと目を開けたら――

『――』

「……………は？なにこれ…？」

冷気を振りまき、唯斗の上で鎮座する精霊がいた。青白い肌に、淡いクリーム色の髪。白い和服を着た精霊。直径三十センチの人間を丸く柔らかくデフォルメしたような、決して人間ではないが人間をモチーフにはしているであろう存在。

視線は真っ直ぐと小説に寄せられている。それは園子が唯斗の部屋で散らかし、そのまま置きっぱなしだった物だ。

思わず出た唯斗の呟きに反応し、“それ”は此方を向く。

『――あつ、おはようございませす！』

身体で支えるようにして持っていた小説を丁寧にベッド横の机に置き、緩やかな笑みを浮かべる推定『精霊』。

「……………しゃ…」

『しゃっ？』

「喋ったああああああつっ!?えっ、何コレ怖い！ヒエツ…ゆ、幽霊!?南無阿弥陀仏ウウ!!た、祟るなら夏凜か風先輩にしてくれ!もしくは春信さんに!!」

『祟りませんよ!?て言うか真っ先に別の人を生贄にしないでくださいよ……まったく、人を何だと思ってるんですか?』

「妖怪…?」

『割りと間違ってないから何も言えない…!あつ、私は『雪白』^{ユキシロ}です。

今は』

小さく『今は』と付け加え、雪白は和装の袖を靡かせ宙に浮く。その姿は間違いなく大蛇オロチや蒼鴉アオガラスの同類だ。精霊故か、親しみを籠った視線に物知り顔。

友奈や夏凜達の精霊はただそこに在るだけなのに対して、心做しか唯斗の精霊は明確な意志を持っている。

無論、自由自在に喋り出す精霊など初めてだが。

「……雪白……？精霊……だよな？」

『はいっ！ユイトさん……じゃなくて、唯斗さんの精霊です。ほら、若葉さ……もとい、蒼鴉さんだって『満開』をしてから増えましたよね？それと同じです！』

「大分違うと思うけど？勇者システムが仕様変更されてからもう増えないって話だったし」

前回までの勇者システムは、勇者が満開で身体の一部を捧げることによって新たな武器精霊を得る仕様だった。故に園子と銀は十何体と精霊を有していた。

然しそのシステムはいずれ勇者を使い潰す仕様でもあり、その真実を知った風と東郷が暴走し世界を滅ぼしかけた。

だからこそ、なのだろう。

今の勇者システムは満開こそ出来るが、たった一回だけだ。何の代償も支払わず、その短時間だけは神の力を身に宿せる。だが前回とは決定的に違い、満開の後に武器精霊を得ることはなくなった。

だから、今のこの状況で新たに精霊が増えることは異常事態だ。

『あー、そこから説明ですか……若葉さんも千景さんも、本当に何も言っていないだなんて……はあ』

「わお、最近の精霊さんは溜息まで実装されてんの？まるで人間だな」
『あながち間違っていないですよ？三好夏凜さんの『義経』もですけど、実在した人間が精霊に成ることは珍しくありません。私もその一人です！まあ、精霊システム自体が神樹内に蓄積された記憶の具現化なんですけどね』

「はあ、つまり……？」

『私、過去の勇者なんです。流石に当時は別の名前でしたけど』

「……………寝起きの頭に情報叩き込まんといて。朝イカの姿フライキメるから五分待つて」

『朝イカの姿フライ……………相変わらずなんですわね…じゃあ私はこの小説読んで待つてますわね』

「いいけど汚すなよ？それ園子の自作らしいし」

『園子先生のですか!?わあ、わあああ!!嬉しくて成仏しそう……………くふふつ、道理で読み慣れた文体だった訳ですわね!唯斗さん、五分と言わず三十分くらいはイカの姿フライキメてて良きです!!』

「なるほど。この精霊って病気なんだね」

残念なことに、この世には精霊専門の医者は存在しない。つまり目の前の哀れな精霊は永遠に頭園子な状態なのだろう。唯斗は静かに合掌し、ベッドの下からイカの姿フライBOXを取り出した。

「さて、そろそろ続き吐け」

『えー?もうちよつと待つてくださいいよ。いま良いところなんですから……………』

「……………後で園子作のネット小説も見せてやるから」

『はいっ!精霊『雪白』、謹んで御説明させていただきますです!!』

唯斗は察した。

此奴は馬鹿の部類だな、と。好物を差し出されただけで意見がコロコロと変わる様は見えていて滑稽だ。軽度の園子病も患っている事もあり、例え過去の勇者だとしても馬鹿は馬鹿だった。

『……………何処まで話しましたっけ?』

「雪白が過去の勇者だった、って所まで」

『あつ、そうでした。まあ、これに関しては完全に閑話だったんですけどね。本題に戻りますと……………唯斗さんの勇者システムについてですね!』

「……………」

『端的に申しますと、唯斗さんの『勇者システム』は勇者システムじゃないんです』

「は？……うん、分からんです」

『唯斗さんの『変身システム』は大社^大が作った『勇者システム』をオマー^パージュ^{クッ}して出来たモノです。だから仕組み自体は『勇者システム』と殆ど同じなんです。敢えて言うなら、唯斗さん専用の戦闘システムですね』

「……殆ど同じなら、俺の『勇者システム』で良いんじゃないか？別に名称で拘りたいって言うなら、好きにすりゃあいいけど」

変身して、武器を振るって、バーテックスを倒す。それを『勇者』と言わずしてなんと言うのか。

雪白の言葉を信じるのであれば、唯斗専用システムとやらも何者かが勇者システムをパクって完成した物だ。ならば、それはもう勇者システムと言っても過言では無い。

『違いますよ、『勇者システム』とは決定的に。唯斗さんはまだ——『賢者システム』の上辺しか扱えてません』

『賢者の本質は“束ねる者”。武器を個々として振るって、敵を撃ち砕くだけでは足りません。天の神になって、全然届きません』

「天の神に……？……あー、クソっ。分かってきた。雪白が言いたいのはこう言う事だろ？『賢者システムは天の神を打倒するためのシステムである』と。まだお前^精達^霊が増えてんのは、天の神をぶつ倒せってメッセージか」

『はい。『賢者システム』の創造者曰く、どの世界^{ルイト}でも最後には天の神が在る。繰り返す度に力を増す天の神を倒すには、全部束ねるしかない。……らしいです』

「なるほどわからん」

『私もです』

賢者システムの創造者は、賢者^{束ねる者}を天の神への切り札にしたいらしい。だからこそ、まだまだ足りない。きつと、唯斗が喪っている過去の記憶を取り戻し、技術を取り戻したとしても足りない。

故に、束ねるのだろう。

多くの武器。多様性のある能力。

もしも、その全てが単なる歯車だったとしたら。完成形は勇者の満開をも超越した、まさに神の領域に至るだろう。勿論、その実を唯斗も雪白も知らない。今はまだ、知り得ない。

「一つだけハツキリさせておきたいんだけど」

『えっと、なんですか？』

「話の流れで大体察してはいるけど……ぶっちゃけ、VS天の神って決定事項だったりする？唯斗くんに、危ない事には無駄に首を突っ込みたくないんだけど」

『さあ？どうなんでしょうね。一精霊にすぎない私には、全てを見通すことなんて出来ません。媒介を通して神樹様の記憶の極一部にはアクセスは出来ますけど、神樹様だって未来は解りません。所謂管区外ってヤツですね』

「あー、はいはいな。備えあれば憂いなし、備えなければ死に晒すつーことね。実質強制イベントやん。うげえ……いのちだいじに生きていきたい所存」

『あはは……た、鍛錬には付き合いますよ？唯斗さんの力の一部として、協力は最大限に！だから、その……』

「スマホで園子のネット小説を読ませろと。現金なヤツだなあ……いや。見せるだけなら金かかんないし別に良いんだけどさ」

『やったああああ!!』

期待する言葉を聞けたからか、雪白は冷気を振りまきながら部屋中を飛び回る。これは重度な園子ファンだ。精霊すらファンにする園子の技量を褒めるべきか、精霊なのに自作小説で喜ぶ雪白に呆れるべきか。

取り敢えず、雪白が飛び回ったせいで部屋が冷えたので布団に入った。

「因みに、雪白の能力って？武器とかでも良いけど」

『お鍋の蓋です！まさに遊び人ですね♪』

「またそのパターンかよ!?!」

遊び人が賢者に成るには、もう少しだけ掛かりそうだ。そんな予感がして、唯斗は深く溜息をついた。

◆◆◆オマケ◆◆◆

《精霊システム》

・ 神樹内の記憶にアクセスし、『勇者』に与えられる存在。使用する武器や能力に大きく関与しており、バリアで『勇者』を護る。地祇の眷属や妖怪、三好夏凜の義経のように過去に実在した人物等も存在する。

歴代の人物が『精霊』になつて例も少なくない。故に、過去の英霊も神樹の記憶に残っていれば精霊化が可能であるとも言える。

個々により適性があり、乃木家は鴉天狗や大天狗等の共通点のある精霊を役する。尚、明確な基準は無く、神世紀における精霊システムでは使役者が精霊を選ぶことは不可能。

飽くまでも系統別に宿る前例が多々有り、この事であり複数の精霊を所持する場合は個々で共通点の薄い精霊である場合も少なくない。

白い影

『はい、修行パートです!』

「……………誰に言ってるん?」

『壁の先…?』

「疑問形…」

雪白に導かれ、唯斗が辿り着いたのは山の奥。木々が生い茂り、地面は太い幹で埋め尽くされた道中。長い間、人の手が届いていない地だ。

その道を抜け、さらに奥地。

辿り着いたのは広い洞窟だ。着くまでの道とは対照的に、明らかに人の手を加えられた洞窟。鉄パイプが落ちており、チカチカと点灯する明かりも。まるで工事中の現場のようにも思える。

「Hey 雪白。ここ何処?」

『端的に申し上げるなら訓練場までの道中です。二百年以上昔に赤嶺家の方々が使っていた秘密鍛錬場。……………記憶を喪う前の唯斗さんも利用していたんですけどね』

「サラッと情報落とすのやめてくれる?」

『まあ、それこそ閑話ですね!過去を振り返るのも大切ですけれども、今は未来を憂いましょう!』

「わー、前向きだなー。まるで他人事のようだなー」

明るく言い放つ雪白。きつと精霊なりの励ましなのだろうが、青白い肌で薄暗い場所にいる現状。ホラー系に苦手意識を持つ唯斗にとっては普通に怖かった。

「ユキえもん、鍛錬って何するの?その…束ねる者?の説明でもしてくれるのか?」

『それはまだです。掛け算をするにしても、元の数が大きい方が答えも更に大きくなる。つまり、新しい私武器を使いこなす修行をします!

…時代の『勇者』が異常なだけで、本来ならば戦闘で新しい武器を使い始めるだなんて自殺モノですよ?』

「あー、うん。まあ…確かに」

結城友奈は武道を多少学んでいて、三好夏凜は自己鍛錬をしている。東郷美森や郡唯斗は記憶を失っていても芯では昔の経験を忘れていなくて、乃木園子や三ノ輪銀はブランクはあっても先代としての技能は健在だ。

問題は犬吠埼姉妹だ。

彼女達は戦闘訓練など受けてはいない。自力で、しかも短時間で勇者システムに慣れ、他の勇者に劣らない戦果を出していた。大剣を振るバレーテックスを両断したり、鉄糸で武器を紡いで塵にする始末。その適正こそが神樹に選ばれた所以か、初戦から殆ど問題なく戦う様は才能の一言に尽きる。

犬吠埼風は他の勇者を凌駕する怪力女子力でバレーテックスを粉碎する。

犬吠埼樹は器用の杵を超えた技量でバレーテックスを蹂躪する。

「つまり、俺は女子力を鍛えれば良いわけか!」

『何でそうなるんですか!?!』

「女子力を語る先輩が地味にぶっ壊れてるからなあ」

『…真つ当な女子力なら唯斗さんの方がありますよ?』

「まるで風先輩の女子力がゴリゴリゴリラみたいな言い草だな。欠片も間違つてないけど」

『そこまで言ってますよ…唯斗さんは一度、酷く怒られた方がいいですよ』

「既に怒られ続けてるんだよなあ…風先輩と樹と銀と夏凜から。最近には友奈も怒るようになって気がする。不思議だね♪」

『本当に一度、泣き喚き慟哭するくらい怒られてください!何をどうしたら、結城さんを怒らせれるんですか…』

「ふっ…女子力、かな?」

『黙れです』

雪白はほんの少しだけ、この場にはいない彼女達の気持ち解った。意図してか、無意識にか。この少年は人をイラつかせる天才だ。空気が読めないし、真面目な話をしている時も急に茶化す。

ごく稀にマトモな反応をしたかと思えば、次の瞬間には空気を読め

ない一言を吐き出す始末。

「とてもじゃないが、”あの人”と”コレ”が同一人物だとは思えない。」

『あつ、そろそろです』

「……わお、あからさまだ」

洞窟に入ってから十分程歩いた後、雪白は急に止まった。

目の前には鉄製の厚い扉がある。扉は見るからに頑丈そうな倉庫錠で閉められ、蚊の一匹すら侵入出来ないだろう。唯斗にはまるでゲームのダンジョンのボス部屋に思える。

「鍵は？」

『ここには無いので……えいつ！』

雪白が叩くと、がチャリと音を立てて錠が地面に落ちる。

「おお、開いた。……精霊って便利だな。……それで不法侵入とか出来たりしないよな？友人に、精霊を利用して他人の家に不法侵入しそうな奴がいるんだけど」

『…他の精霊が鍵を開けられるのかは解りませんが、窓とドアを透過して通って、内から手で鍵を開けることなら可能ですよ？』

「オーケー、それ絶対に他の奴には言うな。特に東郷とか美森とかトローとかかストローとかか元鷲尾須美とかに」

『全部同一人物ですよ…』

恐ろしいことに、既に思い付いて実践していそうな気がする。今にして思えば、唯斗が行方不明中に東郷が部屋に侵入していた。彼女を救出する際に流れ込んできた記憶なので、間違いないだろう。

単に園子か樹が鍵を渡しただけなのか、東郷が犯罪前線を反復横跳びした結果なのか。

「……今度から家に分身一体置いとこうかな」

『は、はは……取り敢えず、開いたので中に入りましょう！』

「うわっ、ちよっ！押すなって……いや地味に力強いな!？」

背中に冷たい感覚を物理的に覚えながら、開いたドアの先に押し込められる。

薄暗い通路とは一転、ドアの先は広い空間と天井から吊るされた照明によって充分に明るい。これまでの土の地面とは違い、この場は薄緑の畳で敷き詰められ、壁や天井も木製だ。

それはまるで、一昔前の鍛錬場を連想させる。

密封されていた空間だが、不思議とカビや埃等の汚れや臭いはない。畳の匂いは祖父母の家を思い出させ、然し雰囲気はゴールドタワーの鍛錬場と殆ど同じだ。きっと、今日に至るまでの用途も鍛錬の場だったに違いない。

唯斗にはこの空間だけ切り取られ、時間が止まっていたかのようにも見えた。

「……凄いな、（こ）。驚嘆だよ……」

『……………っ』

「雪白…？」

先程までは元気に話していた精霊。然しこの場に入った途端、その雰囲気はなりを潜めた。魂が抜け落ちたかのように一点を見つめる雪白。その視界の先には――

「…っ!? な、なんだ…アレ…!!」

白い影だった。鍛錬場の奥、木製の壁に寄りかかる形の影。風を当てれば吹き飛んで、空気に消えてしまいそうなほど軽薄な存在だ。

雪白は宙を泳ぎ、その影の前に浮く。

『……………こんなところに居たんですね』

「…雪白…？…うわっ！お、大蛇に蒼鴉…？勝手に出てくるなんて珍しいな。……………初めてじゃないか？」

スマホから花卉を放ち、白い蛇と蒼い鴉が顕現する。雪白と同様に白い影の前に集まり、悲しげな面持ちを浮かべた。

——酷くぼやけたそれは、ただそこに”在る”。

それが何なのか、唯斗には分からない。然し——嫌でも察してしまう。これは自分に近い存在だ。声も形もない存在だが、気を抜けばその影が自分であるかのように錯覚してしまう。

それほどまでに目の前の存在は唯斗の心を揺さぶり、何かを訴えかけてくる。

『…貴方が、此処を護ってくれてたんですね。ずっと、ずっと…二百年もの間…今日のために…』

「…精霊？…にしてはデカイ。雪白達の知り合いか？」

『……凄く、お世話になった人なんです。師として、友として…寄り添って色々教えてくれた…私達の大切な人なんです…っ！』

冷たい涙を溢れさせ、雪白は拙く言葉を紡ぐ。その姿は酷く弱々しくて、唯斗が見てきた彼女とは重ならない。何処か人間離れていた精霊、その奥に秘めた人間性を垣間見てしまった。

言葉はなくとも、大蛇と蒼鴉も同じ反応だ。

「…生きてるのか…？」

『……この空間を保っているということは、まだ存在しているということです。…でも、年月は残酷なんですね……もう、残された時間は長くないみたいです』

「そっか……次来るときは、花でも買ってくるか」

『可能であれば、プロテアの花を』

「ん、好きな花にしろよ。文字通り餞^{はなむけ}だ。お前達の好きな花を選べよ」

『はい……っ、ありがとう……ごさい、ます…！』

(……お前は、誰なんだ…?)

これが他人事なら、唯斗は花を添えて、感傷に浸って終わりだった。飽くまでも他人だと割り切り、涙は流さず時の残酷さを思うだけだっただろう。

だからこそ、目の前の『精霊^{白い影}』が他人に思えなくて困惑する。心の中で何回、何十回と問い掛ける。誰だ、お前は誰なんだ、と。

力なく壁に体重を任せる影は、何も答えない。ただそこに”在って”、この懐かしい空間を築くだけだ。

「……時間ないんだろ。早く始めようぜ」

『っ……はい！繋がつた想い、最後まで持っていきましょう!!』

端末を操作し、システムを起動する。勇者——否、賢者はピコピコハンマーとお鍋の蓋を手に顕現させた。

同情なんてしてない。世界を護ろうだなんて思わない。ただ、白い

影の意思は無駄にしたいくない。自分の事のように感じるから、自分のために動く。それだけだ。

勇者足りない少年は、自分のために戦うことを選んだ。

◆◆◆オマケ◆◆◆

『賢者システム』

・創ったのは某枝さん。服や武器をデザインし、リソース分配をしたのは郡父。追加コンテンツ 防人装束を実施したのは某兄眼鏡。知らぬは本人のみで、意外と周りの人物は事情を知っている現状。

通常時、満開については既存の勇者システムとほぼ同一。敢えて違いを上げるのであれば、武器の数 手数くらい。『勇者』が各武器や能力を超強化したのに対して、『賢者』は武器の数や能力との掛け合わせで補っている。

万能とも捉えられるが、その実は器用貧乏とも表現出来る。

『初期唯斗』

・シンプルに尖っていた。風曰く、『話し掛けても無視する』『目付き悪い』『部活をサボろうとする』。まだ記憶を喪ったばかりで、勇者部の面々にも染まる前だ。

小学生の時ほど無口では無いが、今ほどはっちゃけてもいない。丁度中間で、まだ割りとマトモだった時期でもある。尚、讃州中学に烏賊ノ姿揚部が無かったので校長室に殴り込み掛けた。

無理やり入部させられた故か、高頻度で部活をサボろうとしていた。然し毎回笑顔で地獄の果まで追い掛けてくる友奈に負け、若干のトラウマを植え付けられながら泣く泣く断念。

『武器一覧』

・《ピコピコハンマー》

ピコピコハンマー。直径150cmのピコピコハンマー。打突部位で叩けば『ピコッ』と音が鳴る仕様で、連続で叩けば単純に煩い。

威力は勇者部の中でも随一だが、赤い打突部位以外の部分では攻撃力も皆無に等しい。

赤い打突部には『反射』の能力が備わっており、乙女座の卵擬き爆弾や獅子座の火球を跳ね返すことも可能。

満開をすると金メッキに覆われ、威力が上がる。あと増殖して数も増える。背には日輪（笑）の如く十数個の金メッキピコハンで輪が為される。

・『分身』

現状では五人まで分身体を出せる。一撃でも喰らえば即消滅してしまい、また発動するにはリキャストタイムが必要。数を絞ることによって遠距離でも操作が可能。

賢者の力を上手く扱えるようになると、分身の数が増える。

・《紙飛行機》

紙飛行機型の爆弾。満開時にのみ使用可能であり、虚空からほぼ無限に出てくる。出現させた紙飛行機を停滞させ、多量を固め、大型爆弾にすることも可能。尚、敢えてそうするよりと金ピコで殴った方が早い。

・《くまマン》

唯斗命名、成人男性大のテイベア。完全にAIで機能しており、意思疎通も少しは出来る、■■■が乗り移ることにより、会話と分身の譲渡が可能となる。

武器であり、防具でもある。単に盾にするだけでなく、纏うことによって貧弱な唯斗の身体性能を補強する。尚、見た目は完全にぬいぐるみパジャマだ。

・《お鍋の蓋》

盾。能力は現状不明。他の武器と同様、見た目のリソースも性能に割り振っている。

鍛錬開始

——鍛錬。

それは改めて考えるまでもなく、強さや技能、精神力や筋力を求めて自己を叩き鍛える行為だ。

無論、その行為に関して相手がいって然りだろう。いなくとも行えるには行える。だが自己鍛錬にはやはり限度があり、その点を補うのが敵役とも言える相手だ。

単に効率的だ、という事でもない。今話題における”本番”とは、対バーテックスを指すのは言うまでもない。

ならば当然、仮想バーテックスとも表現される鍛錬相手がいなければ仮想すら儘ならないのが現実だ。

そして、異様でも鍛錬場と呼ばれる空間。例え案山子だったとしても相手がいって然りだ。

——と、先程までは唯斗も思っていた。

「うわっ！ちよっ!!何これ聞いてませんけど!!あつぶねえ!!」

畳の上で転がるように避ける。次の瞬間、先程まで唯斗が居た場所には青いレーザーが放たれた。一秒でも避けるのが遅れたら、バリアがあつたとしてもダメージは免れない。

「雪白サン！聞いてない!!こんなの聞いてないから!!」

『フアイトです!』

「コノヤロウ!!」

悪態をつきながら、続けて放たれた黄色の鞭をピコピコハンマーで打ち落とす。落ちた鞭はガラスの割れる音を響かせて光の粒子に変わる。

「こんな団体様が出てくるだなんて聞いてねえぞ!!チツ、また増えたし…!!」

それは『精霊』だった。

白い影とは違い、明確な形を得た精霊だ。形だけを得た精霊だった。黄や青、桜色に芽吹色。白に黒、紅。

一撃で消える反面、次の瞬間には倍に増えている。耐久面こそ貧弱だが、攻撃は鋭い。まるで唯斗自身の分身体を思わせる。

この空間に限り、それは存在を許される。記憶の中から模範され、糧となるために襲いかかってくる。

二体の桃色の精霊は腰を落とし、左右対称に拳撃を繰り返す。見覚えのあるその攻撃は、受けたら骨の一本や二本は確実に砕けるだろう。

唯斗は沈むように身を下に落とし、鍋の蓋を二つの拳に叩きつけながら身体を回転させる。

《——吸収》

鍋の蓋は電子音を響かせる。

「今の友奈の技だろ!? さっきのレーザーみたいな狙撃も東郷のヤツだし…!!……うつぶ、三半規管がバグリそう……」

『うっわ……この時点でそんなに動けるんですか…? 最初は袋叩きになってもらう予定だったんですけどね…』

「よし分かった、テメエも敵だなコノヤロー!」

『違いますよ……味方なのでヒントをあげます。賢者システムと一緒に、防人システムも起動することを推奨します!!』

「は…!? 出来るなら最初から言えや!!」

『ご、ごめんなさい……?』

死角から放擲された投槍を月面宙返り蹴りで蹴り上げ、ポケットに閉まっていたもう一つの端末を起動させる。

煌めく葉が唯人を包み、若葉色の軽鎧が白と黄の衣装の上から装備された。手には腕全体を覆う無骨な白銀の籠手が出現。防人で唯一、彼だけが使える装備だ。

「お? おお? ……なんかめっちゃ力湧いてくる」

『二つのシステムの同時発動ですからね。身体強化も相応にある筈です……他の勇者程度には』

「えっ、友奈達って普段からコレなの…? もしかして俺のシステム…身体性能低すぎ!?!」

『寧ろ、どうしてあの性能で今代の勇者と肩を並べれるんですか…？私だったら足でまといになっちゃいますよ』

「開発者についてクレメンス。リソースの割り振りを間違えた気狂いバカだろうから」

二つのシステムを発動しても尚、身体能力は『勇者』と同程度。それだけ元の貧弱さが顕著になるというものだ。

白銀の籠手を握り締め、複数個の石を出現させる。そのまま強化された筋力にものを言わせ、投石。

一際小さく紅い精霊に全弾当たり、その身を空気に帰す。銃弾には劣っても、空気の壁を突き破り音を置き去りにする石。簡単に躲すことなど不可能だ。

「最っ高…！…てか攻撃手段がピコハンだけとか狂ってんだよ!!」

《——吸収》

オレンジの精霊が投げた棘付き円盤と白い精霊のヌンチャクを再び鍋の蓋で受け止め、右手に溜めた砂利を投げ撒く。

一つ一つは小さな砂利でも、放ち手は超強化された筋力を惜しみなく振るう。相手が生物だったら、悲惨な死を迎えていただろう。

「はっ！いいね、イイネ!!…これなら使える…ツ！盾にしか使い道がなかったコレを——デカイ岩を!!」

閉じた右手で地面を殴りつけ、光を発しながら出現したのは巨大な岩。変わり身の術の身代わりに使用していた岩だが、今の状態であれば攻撃にも使える。

「バッテリー郡くん、狙って狙って…：打ちました！死に晒せやコノヤロー!!」

——ビツツゴオオオンツツ!!

轟音を響かせ、亜音速で飛来する岩。紫の槍を構える精霊と投槍を放とうと振りかぶる黒い精霊、大剣で迎え撃とうとする精霊の三体を巻き込み木製の壁にぶつかる。

爆音にも似た音が部屋を支配し、砂煙が晴れた後には——僅かに欠けた岩のみがあった。

「……雪白さんや」

『……………えっ、あつ…なんですか?』

「この部屋って壊れないの?あの岩がぶつかっても壁に傷一つ付いてないんだけど…」

『そ、そうですね…私はそんな事より、今の蹂躞劇に怖いってんですけど』

「あつれえ?ぼくう、まーた何かやっちゃ——うぐえっ!」

『あつ、やった!……じゃなくて大丈夫ですか!』

すかさず調子に乗った獲物を狩るが如く、薄緑の鉄糸が唯斗の脚を奪う。その隙に淡く薄い紫の精霊が機関銃のように矢を撃ち、バリアごと唯斗を吹き飛ばした。

《——コンバート最大蓄積!!》

『け、怪我の功名!唯斗さん、今こそ鍋の蓋の真価^{私の能力}発揮です!!』

「痛っ……こんのお……さつき『やった!』って言ったこと忘れてないからな!!」

『あ、はは…つい、口が滑りまして……そんなことより!ダメージが最大まで溜まりました!』

「……………で?この鍋蓋…どう使うの?さつきまでは普通の盾っぽく使ってたなら、なんか変な機械音声が鳴ってたし」

『……さあ?取り敢えず盾で殴ってみては?』

「適当かよ!……あ、あれって…」

芽吹色の大きな盾を持って逃げ回る精霊。見覚えのある立ち回りは、何処かのビビリ鳥類の生き写しだ。

唯斗はニチャリと嗤い、今宵の実験体を決定した。

「こーとーりーちゃん?あつそびーましょー!!」

『っ!?——っ!——っ!!』

「ピヤッハー!逃げるだなんてツレねエなア!!くふっ、アーツハッハッハー!!ざあこ♡ざあこ♡遊んでくれよオ、鳥擬きチャアン!!」

『お、鬼だ…鬼畜だ…悪魔だ…』

無い口で何かを叫びながら逃げ回る精霊。とある記憶を型取り模範した存在は、その記憶に忠実に従い逃げ回る。

然し、所詮は上っ面を模範した程度の存在だ。本物には遠く及ばず、勇者並の身体能力を手に入れた唯斗から無事逃走を成功させることなど最初から不可能だった。

「ばっちこーん!!」

《解放！衝撃!!》

電子音と共に鍋の蓋は眩く光り輝き、受け面から蓄積されたダメージを全て解放する。暴力的なまでの光は精霊が構えた盾を飲み込み、残っていた精霊数体を派手に巻き込む。

——鍋の蓋。

その効果は反撃だ。カウンター盾で受けたダメージを溜め込み、任意のタイミングで放つことが可能。基本的には攻撃を受けず避け続ける唯斗にとって、切り札にもなり得る武器であり盾だ。

「イカしてんねえ！」

『ま、満足なようで何よりです…』

「雪白？なんで後退りしてるんだよ」

『寧ろさっきの鬼畜的行動を見て普通に接しろと？』

「鬼畜って…戦闘訓練なんだから、真面目に取り組んだだけだろ」

『どの口が言うんですか…！逃げ惑う精霊を噛いながら追いかけて、ヒヤッハーしながら消し炭にしたのは何処の誰ですか!?!』

「…？変な夢でも見たんじゃないか？俺は至って真面目に、現状の日本を憂いて、この後のイカの姿フライに想いを馳せながら新たな武器の性能を確かめてただけだぞ？」

『私に見えていた光景とは真逆ですよ!?!』

「失敬だなあ」

恐らくは白昼夢を見ていたであろう雪白を放っておき、唯斗は残る精霊の殲滅に取り掛かった。

「ぜえ…ぜえ…！お、終わったー!!」

『お疲れ様です!』

部屋に漂う光の粒子。幻想的な光景は、形を維持できなくなった複

数の精霊だ。それを為したのは唯斗であり、全身を濡らす汗の量は長期戦だった証拠だ。

火照った体を雪白の冷気で涼ませる。

『どうでしたか?』

「んー、疲れたけど……正直、苦戦はしなかったな。友奈とか東郷のコピーっぽい奴はいたけど……アレって劣化コピーだろ? アイツらはこんなに弱くないし」

『お察しの通りです。これは……あの人の中に眠る記憶です。歴代の勇者、そのほんの一端を形にいただけに過ぎません。あつ、私のコピーもありましたよ?』

「へー。どんなヤツ?」

『唯斗さんに唯一攻撃を入れた精霊です!』

「あー……めちやくちや矢を撃つてきた奴か。クソ、もつとバツキバキにすれば良かったな」

『酷い!?!』

「俺が攻撃を受けた時、『やった!』って言ってたのは何処の誰だったか?」

『唯斗さん、人間は日々の忘却と記録で成長する生き物です。だから忘れましょう! 私はもう忘れちゃった!!』

「いい性格してんなあ」

笑顔でそう言った雪白は、割れ知らずと空中を悠々と泳ぐ。のらりくらりとし、どこか憎めない性格は園子に似ている気がした。

「んで、次は?」

『後日ですかね。疲れてる状態で無理に続けたら、身に付くモノも身につかなくなります。変な癖を付けて闘うよりも常に一挙手一投足を考えて動けるようになった方が断然良い……と、師から教わりました』

「へえ、その人とは気が合いそうだ」

『でしょうね……誰もがそう思いますよ、きつと』

呆れたような、憂いを孕む表情。意味深な視線は唯斗と部屋の奥に居る白い影を交互に見た。

「じゃあ今後の方針について話し合おうぜ。今日はいいとしても、明日から学校だ。割りと命掛かっているから学校サボってでも鍛錬したいところだけど、勇者部の奴らに心配は掛けたくないかな……既に限界までやらかしてるし」

『せ、切実……私も学校には通った方が良いと思います。全部終わったあと、戻る居場所がないと人は頑張れません』

「時間がある時は鍛錬するつもりだけど……防人の方にも顔を出さないとだし」

『それは問題ありません。防人システムしか起動出来ないとしても、立派な実戦です。鍛えるにはやはり、実戦が必要不可欠なので』

唯斗の事情についてはしずくが説明してくれている。その上で防人として活動出来るのは、安芸の働きかけも大きい。

そして何より、防人にとって勇者が身近にいるという事実は安心感を生む。先日の出来事があり、無闇に唯斗を頼れないのは承知の上で、それでも万が一の保険があると考えたら心も休まる。

『一応確認ですけども、分身を遠距離から操ることって可能ですか？』

「……まあ、一応は。最近は割りと慣れてきたし、一体だけなら普通に生かせることも出来ると思う」

『……唯斗さん？最近は慣れてきたってことは……私的に賢者の力を使ってるんですね』

「訓練だよ？万が一に備えてるんだヨ？」

『……奇跡的に噛み合ってますし、私からは何も言いませんけど』

心做しか、視線が冷めた気がする。

唯斗としては勇者システム及び賢者システムは命懸けで戦うものに与えられたご褒美権利だと認識していたのだが、雪白は違う認識のようだ。

ほんの少しだけ、自重することにした。

『じゃあこうしましょうー休日とは今日と同じように……いえ、最大人数まで分身して戦ってください。平日は体育や学校の行事、分身が消えてしまう恐れのない日に限っては分身体を学校に行かせて、唯斗さん

本体は此処で鍛錬です！』

「えっ……雪白さん？分身って増えた数だけ並行作業しないといけないから、複雑な動作とか難しいんよ？だから、今みたいな乱戦はちよつと……」

『そのための鍛錬です！それをクリアしたら、もつと本物に近い強さの精霊と単体で戦ってもらって、その次はまた分身して——』

「ビエツ……」

いつかの戦闘で、分身を使つてるところをくまマンから『下手くそ』と言われたのを思い出した。雪白が最低限目指しているのもまた、くまマンに勝る精度なのだろう。

目標の遠さに軽く目眩を覚えながら、やはり唯斗は溜息をついた。

◆◆◆おまけ◆◆◆

『賢者×防人』

・実は同時発動出来たシステム。元の衣装の上から、若葉色の軽鎧を纏う。

二つのシステムの身体強化の恩恵にあやかれるが、元の賢者状態での身体性能が低過ぎた為、強化されても精々他の勇者と同程度。

例えるなら、友奈の通常攻撃が全部『勇者パンチ』になるくらいの強化なので、実質的には超強化。

大小様々な石による近距離、中距離のカバー。巨大な岩をピコピコハンマーで撃ち出すことによって、遠距離における火力も手に入れた。

乙女心と秋の空

——時刻は昼頃。

唯斗が『鍛錬場』と呼ばれる空間でピコピコハンマーを振るい、鍋の蓋で逃げ回る精霊を消し炭にしているのとはほぼ同時刻——

「うわああああん！そのつちいい！うっぐ、ひっぐ…っ！わだじ…が
んばっだのに…い…い…い…!!」

「よしよし、わっしーは頑張ったね。はい、イカの姿フライ食べる
?」

「……………うん、たべる」

東郷美森は泣き喚いていた。

涙と鼻水と涎を園子の服に擦り付けながら、赤子のように声を上げて泣いていた。

前日、東郷美森は郡唯斗に一世一代の大舞台告白を実行した。極めて冷静を装い、暴れる心臓が口から出そうになるのを気迫で収め、結婚を前提の告白をした。

結果は顔面から全汗を出している彼女を見て大多数が察する通り、普通にフラれてしまったのだが。

「わたし、とっても頑張ったのに……」

「うんうん、わっしーは頑張ったよね。すごいね、尊敬しちゃうなあ。簡単に出来ることじゃないんだよ？ゆーちゃんの前で泣かなかっただけでもとっても凄いんだよ?」

「そのつちい…わたし、バブみの意味を理解できた…」

「幼児退化通り越して変態化しちゃった…あつ、元からだし問題ないね。よーしよしよし、わっしーはとっても偉いぞく!」

「きゃっきゃっ♪」

「あつ、思ったよりキツイかも……」

フラれた同士を慰めようと東郷家に泊まりに来た園子だが、そろそろ挫折そうになっていた。

園子は基本的には奇想天外な発言で周りを振り回しているが、逆に

振り回されると困惑する節がある。唯斗の奇行や銀の突拍子もない行動には多少慣れているが、それでもどうして東郷美森の幼児退行に対応出来ようか。

端的に言つて、精神的にキツイ。ただできえ行動を起こしたライブルに焦りを覚えているのに、そのライブルがコレだ。

もう出来るだけ早く親友を眠らせて、その隙に帰ろうかと思う程度には精神的に疲れていた。

「ほーら、わっしー？とつても美味しいサプリメントだよ〜？」

「…やつ！睡眠導入剤の匂いするからやだ!!」

「いや何で分かるの？まるで熟知するくらい誰かに睡眠薬を使つて………うん、わたしは何も聞いてない。何も思い付いてなんかない。

今日も香川は平和で、うどんは美味しい。それだけ…うん、ソレダケダヨ…」

「…?」

精神が幼児退化していても、変態と秀才を両立させている謎生物だ。やはり他の親友達と遜色なく園子の想像を容易く越えてくる。

「……そのつちも、唯斗君のこと好きなのよね？」

「いきなり素に戻るのやめて？心臓が3350kmくらい飛んで大爆発しちゃうから」

「まるで機体下部に増槽を取り付けた零戦初期の二二型ね」

「人の心臓を神風特別攻撃隊にしないで〜！」

「で、そのつちって唯斗君のこと好きなの？」

「だからいきなり素に戻らないで!」

数秒前の幼児退行はそろそろ忘却の彼方なのだろう。これには園子も慄きを隠せない。

「……好き、だよ?」

「うわあああん!やつぱり唯斗君がそのつちに寝取られてたああ!」

「人間きが悪いよ!?!……ん?よく考えると元々ゆるーちゃんつてわっしーのモノじゃないし、寝取りにはならないね」

「私、知ってるの!そのつちと唯斗君は同衾してるんでしょ!!」

「なんで知ってるの……?……わっしー、想い人にペットの犬みたい

に扱われたことある？親愛はあっても、恋愛には発展しないんだよね。ねえ、わっしー？勇気を出して想い人のベッドの中に潜り込んで、暖房器具扱たんぼいされた時の気持ちって判る？あはっ、あはは…」

「あつ、貧者の守護神を踏んじやった…？」

「人を地雷扱いしないで？」

「えへへ」

能天気に見えても、園子は園子なりに思う事がある。

自由奔放な性格の園子とて、何も思わずに異性の布団に潜り込んだりはしない。流石にそういうことに発展するとは欠片も思っていないが、多少なりとも意識はしてくれると思っていた。

然し悲しいかな、そんな僅かな期待は盛大に空振ることになった。

最初は驚きはしても、自分の布団に戻れと促された。次点でペットのようにに布団から引き摺り出された。最近は既に、慣れて湯たんぽ扱いだ。

嬉しくないと言えば嘘になるが、日々何かを失っている気がしている。女の子の尊厳的な何かを。

「そのっちは告白しないの…？」

「しないよ、今は」

「ど、どうして…？取られちゃうかもしれないんだよ!?!私じゃなくても、他の誰かに…!」

「…ゆーちゃんは、色々と抱えてるの。それは多分、私が勘づいてる事以上に。そんなゆーちゃんに負担をかけたくない…そんな言い訳かな」

「言い訳…」

「うん、言い訳で我儘。自信が無いから、先延ばしにしている。失敗するって察してるから、見て見ぬふりしている。…それだけなんよ。もちろん、ゆーちゃんがたつくさん背負っているのは本当。だからこれ以上負担を掛けたくないのも本音」

敢えて触れてはいないが、園子は唯斗の事情について察してはいない。軽々と話せない内容であることも承知の上で、ひとつ屋根の下で

暮らしながらも無理に聞いたりはしない。

其れが逃げであると同時に、正解だと園子は結論付けた。だからこそ、彼女は何もしない。何もしない事が何よりも辛くとも、そう在り続ける。

東郷もまた、そんな彼女の逃げを否定はしない。無論、肯定もしない。

「……そっか。でも、私は後悔してない。唯斗君にとっては負担になったとしても、絶対に後悔なんてしない。辛いんだったら……耐えられないんだったら、相談して欲しいもの」

「わっしーは策士ですな」

「恋する乙女は強かなのよ?」

「強かなのに精神的幼児退行はするんだね」

「恋する乙女も繊細なのよ?」

「手のひら大丈夫?そろそろ捻じ切れちゃうよ?」

強かであり、繊細でもある。そんな矛盾こそが秋の空と乙女心なのだと東郷は語った。尚、犯罪前線を屈伸煽りしながら反復横跳びをする生き物が乙女を語れるのかは不明だ。

「わっしー、わたし思ったんよ」

「どうしたの?」

「やっぱり……にぼっしーが怪しいなって」

「……そのうち、ちゃんと省略せずに話してもらえる?これじゃ何も解らないわ」

「んー…簡単に言えばライバル的な?ゆーちゃんつてにぼっしーに I Love You してるんよ。多分冗談と揶揄いを込めたゆーちゃんなりのコミュニケーションだと思うけど、最近……にぼっしーも満更でもないような反応をしてる気がするんよね」

「……そういう話なら、私は犬吠埼姉妹が怪しいと思うかな。樹ちゃんには純粹に唯斗君を想ってる様子が垣間見えるし、風先輩はすつつつごく距離が近い……風先輩だけは殆ど初対面の時から既に今みたいな感じだったわ」

「それならゆーゆもだよ。なんだろう…ゆーゆとゆーちゃんって、唯一本音で接してる感じがするんだよね。ゆーちゃんは言うまでもないけど、ゆーゆも周りに合わせて自分の本音を隠すタイプだよ。その二人が、お互いに唯一本音で語る相手…」

「銀もだわ！昔から一番唯斗君と仲良しだったけど、今はもつとよ?!目を離せば二人で遊びに行ったりしてると話だし…!相棒って肩書きが免罪符になってるわ!!」

お互いに同じ立ち位置。語りたいたことは次々と出てきてしまう。

心の底に閉まっておいた本音が、溢れて止まらない。そんな休日。そんな日曜日。

東郷美森の部屋から漏れる話し声は、あと数時間は続くだろう。

「ののの脳が震えるるるる」

「……ついにバグったわね」

「コレどーしたんだ?」

朝のホームルーム前。夏凜と銀が教室に着くと、目を左右別の方向に動かしながら細かく振動する唯斗の姿があった。

唯斗の恒常的なイカの姿フライ的奇行に慣れているクラスメイトにも、いつもとは毛色の違う奇行に怯える者すらいる。

怪訝に思った男子生徒が斜め45°の万能機械修復チヨップを喰らわせよとしたが、無駄に俊敏且つ隙のない動きで避けられ、鳩尾に拳が突き刺さり悶絶していた。

「夏凜、あれ何とかしてくれよ」

「い、嫌よ…気持ち悪いし近寄りたくない。銀が何とかしなさいよ」

「勘弁してくれ。いや、ホント…マジで」

「あばばば脳が回るルルル分裂しゆるるうううるる」

「ひえっ…なんか悪化してるし!美森専門家はまだ来てないのか!」

「専門家東郷も友奈も園子もまだ。どうする、放っておく?」

「クラスメイトが怖がってるからなあ…早急に片付けたい所存です、隊長!」

「勝手に隊長にするな!」

夏凜を隊長に祀り上げ、全責任を押し付けようとする銀。流石の夏凜もあからさますぎる態度で違和感を覚え、咄嗟の判断で断った。

仕方なし、と溜息を漏らしながら銀は掃除ロッカーに向かい、箒を取り出す。

得体の知れない状態だから極力唯斗には近寄りたくないが、箒を用いて距離を稼げば案外大丈夫な気がした。

箒の柄を軽く握り、唯斗の頭に向かって勢いよく振り下ろすと――

「あばばばば――シッ!!」

「いてっ！な、なんだ今の動き!?!」

左右別の方向に向いていた瞳はギョルンと銀の持つ箒に集まり、身体を捻りながら椅子から跳躍し――三日月蹴りで撃ち落とされる。

弾かれた箒は真っ直ぐと、唯斗に鳩尾を殴られて悶絶していた男子生徒の金急所に直撃する。尚、声にならない叫びは誰にも届かない。

「凶暴なヤツだなあ」

「へえ、唯斗のヤツ…腕を上げたわね」

「上がったのは脚なんだけどな?」

「――はっ!こ、ここ何処だ…?…:…:学校?…:何でだ?さつきまで鍛錬場に…」

「うっわ、ボケた奴が生き返ったぞ」

「…:クツソ、意識を分散しすぎたか。やっぱり全部に違う動きをさせるんじゃないかって、本体を司令塔にして動いた方が…いや、視界だけ利用するか?常に陣形を意識してお互いの動きを…ダメだ、遠距離じゃあ対応出来ない。それに乱戦だと視界も塞がるし、無理か…いや、逆に本体だけに意識を――」

「訂正、まだ壊れてた。おーい、唯斗さーん?聞こえてるか?」

周りに意識を向けず、ぶつぶつと何かを呟く唯斗。銀は唯斗の顔の前で手をパタパタと振るい、意識の正常性を確かめる。

「おん?…:銀とリトルマイハニーじゃん。おっはー」

「おはよ…:…:って、誰がリトルマイハニーよ!!」

「は?なに人のリトルマイハニー気取ってんだよ。ぶっ飛ばすぞコン

「ニャロー!!」

「こ、コイツ…ッ!!」

「夏凜、諦めろ。コイツは考えるよりも前に口が動いてるだけなんだから。口から出任せよりも質の悪い、口すら無意識なんだよ。自分の発言を覚えてるワケがないだろ?」

「そーだぞ。早よ学べやツンデレツインテール、略称T・T三好」

「ふう…取り敢えず野垂れ死なないかしら。若しくは酷く弾け飛ばさないと。派手に爆発してくれても良いわ」

「殺意100%かよ。ちゃんとカルシウムのサプリキメてるか?」

「あー、まだだったわ。ありがとう」

「アタシはツツコミなんていれないぞ。たとえば夏凜が放棄したとしても、アタシは絶対に拾わないからな」

鞆から体力の健康補助食品を取り出す友人を見て、銀はそっと目を逸らした。そして、自分だけはマトモであろうと心に決めた。

最期に見た瞳はぼんやりと虚空を眺め、まさに空虚だ。何も無い。もうそこに魂は無いのだと、無言で告げていた。

肉の焼け焦げる臭いに、鉄臭い血は紅い地面に滴り、蒸発して臭いを広める。煉獄に当てられ服から水分が奪われ、返り血が固まる。

飾った血化粧は狂気へと誘おうとした。…いや、もう手遅れだ。もう帰れない。もう全て終わりだ。

「か、りん……？」

「あら、銀じゃない。随分と重役出勤ね」

「その血……お前の、じゃないよな……？」

「あはっ、解るの？判っちゃうの？唯斗のよ！これ、唯斗の血なのよ！アハハハハ、笑っちゃうでしょ？コレが『勇者』の末路なのよ！くふっ、アハハ！あー、嗤わずにはいられないわね」

「……何で……どうして笑ってるんだよ！何で唯斗を殺して、笑っていられるんだ!!……分かんない。アタシには、もう夏凜がわかんないよ!!」

「……あつそ。アタシには一生、理解できないでしょうね。この絶望も、この憎しみも、この怨恨も。希望を謳う^{三ノ輪銀}勇者には到底理解できないわよ」

「なんだよ、それ……ッ！仕方なかったって言えばよ!!殺したくなかったって叫べよ!!何で……どうして……ッ！お前はアタシを拒むんだよ!!」
大切な者は崩れた。

繋がりは絶たれた。

故に、もう何も要らない。

「——アハッ……ねえ、銀。死んで？」

「っ!?!…アタシは、夏凜を正気に戻す。殺す気も殺される気もない！帰って来い——完成型勇者アア!!」

「くふっ、アツハハ……ッ！早く^私死んでね、銀……!!」

誰か助けて
オワッテシマエ……!!
紅く染まった視界。『死』だ、絶望だ。銀も、自分も、世界も——

「アハッ、アハハッ！」

また、嗤う。

「アハハハハ…ッ！くふっ、くふふ…プツ、アハハハハハハア…!!壊れちゃった、動かなくなっちゃった♡…じゃあね、銀」

斧を振るう腕を壊した。悲しげに睨む目を潰した。何処までも着いてくる脚を斬った。五月蠅く鳴る心臓を抉った。——それでも喰らいついてくる頭を、煉獄の地に落とした。

惨く朽ちた身体はジュウと音を立て、煉獄に焼かれる。解けた『勇者システム』は花卉となり散り、銀だった肉塊は黒く、硬く、骨すら残さず燃え尽きる。

夏凜はその様子を最後まで見届けて、やはり嗤う。

「……………もういいや。世界が私を殺してくれないなら…私が世界を壊す」

拙い足取りで『壁』を向く。

これが壊れれば、世界が——大切なモノが全て壊れる。そうすれば、友奈は、東郷は、園子は、風は、樹は。三好夏凜^私を殺してくれるのだろうか。

いや、殺すしかない。世界を救うなら、『勇者』なら、三好夏凜を殺すしか選択肢はない。

嗚呼、そのためなら…私は『魔王』にでもなろう。絶望の化身にでも身を堕とそう。

「さあ、『勇者』達。三好夏凜、疾風怒濤の時間よ——一世一代の大暴れ、止めれるものなら止めてみせろ！じゃないと私は、世界をも焼き尽くすわよ!!」

火種は放たれた。

紅黒い『魔王』は壁を破壊する。『勇者』の剣が胸に刺さる時を待つて、絶望を感染させる。こうすれば…こうしなければ、死ねない。

清く正しい彼女達が正義で在るまま三好夏凜を殺すなら、三好夏凜は『勇者』に討たれるべき者でなくてはならない。

紅く錆びた刀で結界を断つ。

神樹が、大赦が、勇者が。自分を殺し得る存在が異常事態に気が付くまで、三好夏凜は止まらない。

叩きつけるように放たれる斬撃は——丸い盾に防がれる。

「にぼっしー！何やっての!？」

「……園子？……園子だけなの？」

「そうだけど……ゆーちゃんは？……ね、ねえ……どうして、そんなに血が……け、怪我してるの？は……早く治療しないと……！」

「ぶっ……アハッ！わ、笑わせないですよ！もしかして笑い殺そうとしてるの？アハハハハ、それは予想外だったわ」

「に、にぼっしー……？怪我、ちゃんと治療しないと……！」

「……分かってるくせに、目を逸らすのね。アンタなら全部解ってるんでしよう？唯斗も、銀も、私が殺したわ。唯斗は心臓を貫いて即死だった。銀は……本当に嗤えるわよ？最初に両腕を壊して、次に目を潰して、それでも向かってくるから足を切断して、心臓も抉って、不思議なことにそれでも生きていたのよ？だから首を——」

「もういい!!……もう、言わないで」

涙を零し、歪んだ眉間と酷く冷めた殺気を帯びる瞳。もう全てを理解し、三好夏凜を心の底から憎悪し軽蔑している目だ。

彼女は察している。もう引き返せない。そして、自分は三好夏凜を未来永劫、絶対に許せない。酷く痛めつけて殺しても、心に燻る感情は晴れないのだと。

「……へえ、アンタにもそんな目、出来たのね。意外だわ。……ほら、殺し合いましたよう？」

「……許さないよ、三好夏凜。簡単に死ぬると思うな……ッ！お前は私が討つ。この命に変えても!!二人の仇は私が取る!!」

「アハッ、楽しみにしてるわね♡」

白紫の槍と紅黒く錆びた刀が交差する。互いの命を穿ち、終わらせる為だけに。

三好夏凜は乃木園子に期待していた。

一番、自分を躊躇無く殺せるのは乃木園子だ。ふわふわとした性格

の裏に隠された、冷たく鋭利な判断力。勇者であると同時に、綺麗事だけの世界では不要な乃木家時期当主としての才覚。

時代がもつと前だったら、乃木園子は対人用の御役目——『鏑矢』の適性があっただろう。戦いの最中でも冷静に相手を観察し、手を下せる者。

三好夏凜は無意識に、そんな性質を理解していた。きっかけが無ければ永遠に外に出ることのなかった素質。陽の光を浴びることのなかった性質。

然し現実はやはり、残酷だ。

「…………その程度なの？もつと、期待させてよ。『絶望』を塗り潰してよ。アンタの実力、そんなもんじゃないでしょ？」

「あぐつー……うるツ……さい!!」

「…もしかして、まだ『期待』してるの？私が正気に戻って、全てを詫びて、アンタが『そんなことないよ、貴女は悪くないよ』って励ます——そんな未来、まだ夢見てんの？」

「…っ！煩い…！煩い煩い煩い!!」

「っ！鋭くなったわね。良いわ、良いわ!!その調子で私を殺してちょうだい!!……足りないなら、もつと死体の山を築くから。風も樹も、友奈と東郷だって酷く残酷に殺——」

「黙れ!!」

振り下ろされる刀を下にいなし、園子は槍の石突で夏凜の腹部を突く。勢いの乗った攻撃は夏凜を大きく後退させ、明確なダメージを与えた。

「グッ……ゲホ、ゲホッ!……ええ、その調子よ。もつと怒りなさい!もつと殺意を込めなさい!!私を殺さなければ、みんな死ぬ。そう考えたら、やる気も出てるくるでしょう?」

「…煽らなくなつて、殺してあげるよ。ゆーちゃんとミノさんが殺された時点で、もう自分の生に執着なんてない。言った筈だよ、命に変えてもお前を殺すって」

「そう、だから『期待』してるの。『絶望』とは程遠い感情……私を塗

り潰して、押し潰して、殺してくれる感情。もつと魅せて、もつと煌めいて。私を殺すくらい！」

「死にたがりなら、独りで死んでよ……誰の目にも届かない冷たくて、寂しい場所で静かに逝ってよ!!」

「……そう出来たら、どんなに楽だったか。アンタには解らないことよ。アンタにも、一時間前までの私にも」

其れはもう、三好夏凜ではない。壊れて、歪に継ぎ接ぎ、崩壊して、また固めた。それだけのナニカだ。

紅く染った手も、顔も、三好夏凜ではない。完成型勇者ではない。園子も、彼女自身も。絶対に其れが三好夏凜であるとは認めない。

「死んで、紛い者」

「殺して、紛い者を」

再び紅と白紫はぶつかる。殺したい者と殺されたい者、命を賭しても相手を討つ園子と命を捨てたくても捨てられない■■。

四肢が欠損しても、心臓が穿たれても、止まらない。止められない。もう引き返せない地点まで来てしまった。

長い戦いの末、倒れ伏す二つの影。

虚空から伸びた赤い手は夏凜を掴むと、そのまま引き摺り込み――

――おいで、おいで。

――君の怨恨はまだ終わらない。

――恨みは尽きない。

――舞台は用意する。さあ、ついておいで？最後の大舞台だ、死に場所も用意してあげるからさ。

――怨恨の勇者――

呪うのは自分自身。願うのも自分自身の死。『勇者』の末路に絶望し、憎しみ、全てに怨恨を振り撒く。完成型の彼女にとって、自らの手で奪った仲間の命は、自身を崩壊させるには事足りた。

怨恨は膨張する。全てを殺し、虚無に身を投げるまでは闇に等しく膨張する。滴る血は自分か、嘗ての仲間のものか。もう解らない。理解を捨て去り、ただ壊れてしまったことだけを自覚する。

○○○○○○○○

誰か助けて。私を殺して。

そう叫ぶことすら、もう許されない。だから、怨恨を。怨恨、怨恨を込めて——怨恨の対象になって。いつか、誰かが自分を壊してくれるまで。若しくは、こんな身体も魂も砕けてしまうまで。

殺してしまった。大切な、かけがえのないものを壊してしまった。だから、もう諦めた。自殺^{逃げ}なんて選べない。惨く、辛く、殺されたい。なのに、どうして？なんで、力が湧いてくるの？こんな力があつたなら：彼を救えたのに。そこまで、私を絶望の底に墮としてくれるなら、もう殺してくれたらいいのに。

これが罰か？これが末路か？これが絶望か？

嗚呼、終わらせてくれないなら……私が全てを終わらせる。それが、死への最適解なのだとしたら。

もう、何が正しくて何が間違っているのかもワカラナイ。

束ねる者

「うつひゃー、遠かったなー!」

紅く燃える大地。火柱の登る空。

天の神の支配領域にて、少女の姿をした其れは大きく声を上げた。北方の大地——三百年前までは雪が積もり白銀世界が広がっていた幻想的な景色も、今はただ悍ましい煉獄に飲み込まれた。

天の神の支配は時間の概念すら捻じ曲げ、全てを押し潰し、現世に燃え滾る紅の世界を落とす。

即ち、理論上で語るのであれば——支配が完成する直前まで生存していた者は煉獄の下で生きている。永遠の停止は死に等しく、然し死とは決して言えない。無論、世界が減ぶともなれば煉獄が落とされる前にもバーテックスは人類を殺戮していた。

そんな中で生き残っていたというのは現実的ではない。現に世界は滅び、地祇の数々も敗退した。

神々すら太刀打ち出来ない天の神の支配に対し、矮小なる人間が生き残れる道理もない。

「——つて、天の神さんはおもってるんだろなあ。まあ、実際? 全くもって間違つてないけどさ」

瑞々しい薄緑の長髪を靡かせ、其れは宙を悠々と歩く。

ずっと、ずっと北まで来た。通常の間人ならば疲労困憊なのだろうが、其れは疲れた様子も無く歩き続ける。

其れはやがて、燃え盛る地面に生えた《芽》を発見すると、静かに微笑んだ。

約三百年ごしの、彼からのプレゼントだ。この世界に三つしか存在しない、嘗ての彼に託した彼女の力。織り紡がれた結界の出入口。

「さーて、目覚め時間だよ——勇者ちゃん。なあに、御礼は働いて返してもらおうさ。恩の押し売りはこの身のオリジナルが得意だからね」

其れ——山田くんが《芽》に触れると、光り輝き一つの門ゲートが紡がれ

る。

山田くんは門に手を突っ込み、やがて何か掴み引つ張り出す。困惑の声を聴きながら、やはり少女の形をした其れはニヒルに笑む。決戦の日は遠くない、と心に刻みながら。

『もうすぐクリスマスですね〜』

薄暗い洞窟の奥、不自然に展開された鍛錬場で青白い精霊はそう呟いた。

話し相手は畳に寝そべり、滝のように流れた汗を服の裾で拭う少年。本日の鍛錬を終え、やっと一息をついたばかりだ。

日に日に鍛錬の内容は濃密になる。最初は歴代の勇者の劣化コピー精霊を相手に乱戦だった。数の暴力で苦戦はしたが、一体一体は弱い。単に数の暴力だけであり、連携も粗末な木偶の坊だったと言っても良い。

然し、だ。

最近の精霊は着実に強くなっていった。個々が無視出来ない強さを誇り、連携も目を見張るものがある。

雪白が言うに、これでも本物に比べたらまだまだ劣化コピーと言わざるを得ないらしい。一撃で倒れる耐久力でなければ、今日も唯斗が無事に鍛錬を終えることは出来なかっただろう。

「…きつと今年は鮮血のクリスマスだな。血湧き肉躍る刺激的で忘れられないクリスマスになりそうだ。……………ハハッ…雪白サン、勿論クリスマスも特訓デスヨネ？」

『何言ってるんですか!?クリスマスは青春イベントで欠かせない行事の一つ!たとえ世界が滅んだとしても、クリスマスは絶対に行います!!行わせてみせます!!』

「お、おう……何がお前をそこまで叫ばせるのか。不思議すぎて不思議の国のイカの姿フライになったのは前世のお話だね」

『何を言っているのか欠片も理解できないのは私が悪いんですか…?』

「せやな」

『否定してくださいよ…』

雪白が唯斗の周りをクルクルと回る。火照った身体に冷たい微風が振りまかれ、心地良い。どういう原理か、外は十二月中旬ということもあり寒いのだが、鍛錬場だけは何時でも程良い室温だ。

これも『鍛錬場』を維持する白い影のお陰なのか、それとも他の精霊の力なのか。

最近は鍛錬場に入り浸ることも増えてきた。

休日は園子が『皆と仲良くなる』と言って勇者部員の家泊まりに行くことが多い。それと同時に勇者部の活動が比較的には控えめになっっているのも理由の一つだ。

部長である風の受験勉強があるからだろう。軽く雪が降り始めてからは部室で園子が風に教鞭をとる光景がよく見えるようになった。

彼女は紛いない天才であり、同時にその探究心も人一倍だ。勉学の面でも惜しみなく発揮された才覚。先輩である風の教師役が務まる程度には学習した範囲も広い。

「話変わるけどさ、雪白さんや」

『なんですか?』

「そろそろ”束ねる者”について教えてくれやせんかね? 基盤作りしたいってのは解るけど、時間ねえんだろ? この空間だって恒常的に在るモンじゃないって雪白も言ってたし」

『……そう、ですね…』

気になっていて、然し聞けなかった事だ。『鍛錬場』で雪白が”白い影”を見つけて以来、何処か余所余所しくなっていた。

表面上こそ初対面の時と変わらないが、形容し難い内面の部分では明らかに以前とは違っている。初対面の時はまるで、旧友に再開するようなテンションだった。それは今でもやはり変わらないが、どこか無理をしている様にも感じる。

だが最近になって、やっと余所余所しい雰囲気も軟化してきた。

だからこそ今しかない。たとえ雪白の思い描く鍛錬とは順序が違っている、唯斗は束ねる者の本質を知らなければいけない。

来る時に備えたいと思っっているのは唯斗とて同様。むしろ自分の命が掛かつてる分、雪白よりも必死だったのかもしれない。

数秒の沈黙の後、雪白はゆっくりと口を開いた。

『実を言おうと…私も”見て”、”聞いた”だけなので、完全な理解まではしてないんです。後部座席から運転手を観察していた感覚に近いですね…：始動と結果は判るけど、その操作の意味を把握までは出来てないんです』

「……………マジ？」

『結局は思い出すのが手っ取り早いですけどね…：私としては、やはり口で説明するよりも鍛錬の中で答えを見つけて欲しいと思っます。…それでも唯斗さんが望むなら、勿論説明しますけれども』

「むっ…：絶妙な悩みどころ。聞いたら習得しづらいとかあるお話で？」

『それも、飽くまでも唯斗さん次第です。十を言われて何数を理解するか、若しくは全く別のモノを生み出すか。…：唯斗さんの思考は独特だから、誰にも分かりませんよ…：』

「ふっ、天才故の孤独…：か」

『園子先生の前で同じように威張れます？』

「アツハイ。凡人が調子乗ってスミマセン」

『奇人の間違いですよ？』

「ハハッ、雪白はジョークも言える精霊なんだな」

『この人無敵なのでは…!?!』

——知るべきか、否か。

迫られる二つの選択肢。知れば、唯斗は『東ねる者』の技能を磨こうとするだろう。然し其れが知って扱える物なのか、雪白はまだ扱えないからこそ基盤作りを強く勧めていたのではないか。

そんな疑問が絶えない。

雪白は賢い。それは唯斗にだって理解出来る。理解出来るからこそ、彼女の決定に間違いが潜んでいる可能性を肯定出来ないのだ。

寧ろ何も知らずに、答えだけを知ろうとしている自分が愚者に思えて、唯斗の口を重くさせる。

だが、それでも――

「…教えてくれ、雪白。『鍛錬場』も…たぶん、俺も。もう時間が無いんだよ。出来ることはやっておきたい」

『……う……唯斗さんも、ですか……？』

唯斗の身体は蝕まれている。天の神から刻まれた刻印は着実に大きくなっている。それが招くのは、きっと不幸だ。子供でも解る。

時間が無い。確証がなくとも、そう断言出来てしまうのだ。唯斗は焦っている。焦っているからこそ、面倒事が嫌いでも鍛錬は欠かさない。身を滅ぼすのが己の行動なら、また身を救う可能性があるのも自分だけなのだから。

「兎に角！知識プリーズミー」

『……判りました。別に洩ることもありませんし、宿主様が言うなら逆らいませんとも！』

雪白は小さく息を吸い、記憶を遡る。あの不思議な世界で彼が扱っていた技能。あの世界だから存分に振るうことのできた力。

記憶を呼び起こし、言葉を紡ぐ。

『賢者システム――唯斗さんが使える力は”束ねる者”。絆を束ね、具現化する力です』

「……もうちよい詳しく。そして解りやすく」

『…心を許しあつて、信頼出来る『勇者』の武器を使える能力です。そして、その本質はもつと深い……『勇者』同士の絆武器を束ねて、新たに生み出すこと。三つの拳を《束ねて》強力無比な一撃を。連弩と長弓を《束ねて》鋭く速い超連撃を。双節棍とデスサイズ、ワイヤーを《束ねて》鎖鎌にする、なんてことをやってみましたね』

「……………」

『全てを――失った全ての記憶を束ねれば、きっと天の神にだって届く。そんな掛け算をするのが賢者束ねる者です』

要するに、仲間の武器を扱う力だ。そして『武器×武器』で戦力を底上げ、これまでの延長線上の万能器用貧乏を更に強化する。

一概に強い、とは言えない能力だ。

顕現する武器は持ち主のコピーでしかなく、本物以上にはなれない。掛け合わせる武器も想像力によつて良くも悪くもなつてしまう。

唯斗の『分身』と同様に、扱うには適性が必須の能力だ。前途多難。伸ばせば無限に伸びるが、土の中を掘り進むようなものだ。進み方を知らなければずつと足踏みをすることになり、逆にコツさえ掴めば一気に戦力が強化される。

「……………センサー、質問です」

『なんですか？』

「それつて滅茶苦茶頭使うヤツですよね？」

『そうですね』

「既に分身で脳がパンクしてるんですけど……」

『ファイトです！』

「雪白の訓練内容からして……やっぱり最終的には分身しながら”束ねる者”の能力も使いこなせつてことデスヨネ？」

『……………ガンバです!!』

「ふええ……気合いで乗り切れないよお……」

億劫な事この上ない。確かに、上手く扱えれば天の神にも届く。然し唯斗にも『鍛錬場』にも時間が無い。短期間でこの能力を、神に届くまで使いこなせと言っているのだ。

「端的に言つて無理だ。」

『……………やっぱり近道は全て思い出すことなんです。唯斗さんは嘗て、”束ねる者”を使いこなしたので……』

「思い出すつて言われてもなあ……二年前の事だろ？頭打ってるんだし、『思い、出した……っ！』のテンションでぼんぼん記憶掘り出せるかよ」

『……………あつ、そういう事になつてるんですね』

「そういう事つて……設定みたいに言わんでくれる？」

『いや、まあ……あながち間違つてないんですよ。……つて言うか、頭打つて『勇者』に関する記憶だけ都合良く消えるつて本当にあるわけないじゃないですか。……都合主義な絵本じゃあるまいし』

「……………センサー、端的に言いやがれです。脳が疲れてきたから」

『頭は打ってますけど、記憶喪失は別のことが原因です。後、消えた記憶は二年前の事だけではないんです』

「はい、脳の許容量超えましたー。帰ってからノートにでもまとめてください、マジで」

『御意ですーじゃあ帰りますか』

「疲れたあ…」

雪白の冷風のおかげで火照っていた身体も冷えた。

外は十二月に相応しく寒い。システムを解除してから来る際に着ていたジャンパーを再び着込み、荷物をまとめる。

深い溜息を残して、唯斗と雪白は『鍛錬場』を後にする。脳天気な頭に憂鬱を詰め込んで、やはり溜息をついた。

『……………』

唯斗と雪白が去った後、白い影は微かに動く。迫り来る決戦日に備えて、彼に遺せるように。自己保身を謳う彼に、やはり自己保身を語る『精霊』の残滓は自分を憂いる。

最期は近い。故に、最後の力を振り絞る。

もう失った筈の権限を行使し、自分と彼を■■■のために。たとえば、それで自分の身が朽ち自我すら消失しようとも。あの世界の、あの記憶。全てを無かったことにはしない。

漲る決意は一つの『種』を生み、精霊はそれを全てを込める。

最後のピースは動き出した。

◆◆◆オマケ◆◆◆

《束ねる者》

・賢者システムの極地。絆を束ね、神をも打ち倒す者。

結んだ『絆』、その者の武器や能力を顕現し扱うことが可能。然し本質はそこに在らず。

真の能力は『束ね、生み出す』ことにある。

三つの勇者の拳を束ね強力な一撃を。

双節棍とデスサイズにワイヤーを束ね等身大の鎖鎌に。

連弩と長弓を束ね鋭く速い連撃を。

分身とイカの姿フライを束ね、沢山のイカの姿フライを。尚、齧れば消える模様。

可能性は無限大。

全てを束ねると――

理論上では、『分身×分身』で超増殖した唯斗の大群が無限に等しい種類の凶悪な武器を前衛後衛の両方から使って特攻してきて、尚且つ分身を全て同時に滅ぼさないと永遠に悪夢が続くというバグ性能。

遠距離武器を束ねたら複数の国防砲がガトリング砲のような感覚でホーミングしながら飛んできて、近寄れば斬ったり殴られたりピコられたり潰されたりで瞬殺される。

辛うじて攻撃を放しても、防人の盾と園子の盾、精霊のバリアを束ねた鉄壁によって完全に防がれる。逃げても凶悪性の増した死神ワイヤーが飛んでくるオマケ付き。

尚、人間の脳では絶対に不可能。

整理しましょう

『はい、整理しましょう！』
「ういっす」

少年と精霊は机の上のノートに向かう。

話の題は雪白が落としくった情報の数々だ。賢者の能力についてと唯斗の記憶喪失、そして原因について。さらつと聞き逃すには重大すぎる情報だ。

メモ用紙代わりに二冊目の日記帳を開き、情報を整理する。

『まずは、束ねる者^者についてですが——』

「はいはい、友達の武器を使えルーノ。武器合成出来ルーノ。脳が過労死スルーノ。以上、次!!」

唯斗は箇条書きでノートにまとめて書く。突き刺さる雪白の呆れたような視線を見て見ぬふりをして、筆を次に進めた。

「俺の記憶喪失について。原因が逆行性健忘頭をバチコーンと打ったコトじやないって話だったけど……」

『…何処から話せばいいんでしょうね。えっと、まず確認ですけど…唯斗さん、正直に言ってください。ほんの少しだけでも、記憶が戻ってますよね?』

「…っ! いや、別に隠してる訳では無いんですよ? 思い出してるって言うても、ほんの少しだけだし。微かに『あんなことがあったような…』みたい…夢なのか、現実だったのかも解らないほど、ふんわりとしたモンだよ」

唯斗が防人の御役目に関わるより少し前、散華した身体が戻ってからだだった。東郷や銀と違い、散華で記憶を捧げたのとは訳が異なる。ある日を境に一気に戻った、なんてことは勿論無い。

だが、稀に夢を見る。小学生の自分達が化け物を相手に戦ったり、鍛錬をしたりする夢。

それが本当に記憶だったのか、唯斗には解らない。

『記憶が少しづつ戻っているのは、体が原因なんです』

「体……？」

『はい、唯斗さんは身体の全てを散華して……戻ってきましたよね。……実はそれ、戻ってきた訳では無いんです。今の身体は神樹様が作った部位……言わば『御姿』の状態です』

「ミスカタ……何それ？……ようわからんけど、全身が神サマ産になっただって話か？」

『そうです。……まあ、元を辿れば創世記の第一章に『六日目に神は御自分にかたどって人間を創造された』という記述があるので、特段と人間離れた訳では無いと思いますけど』

真実はどうかは置いといても、唯斗の身体が以前までと大きく違うのか、と聞かれたら否と答えるだろう。多少の変化はあった。だがそれも少しだけ好調子なだけであり、大きな変化とは決して言えない。「寧ろ人間より人間してますと。んで、その御姿がどう関係してるんだ？」

『受け皿が完成したんです』

「……は？」

『元々、二年前に唯斗さんの記憶が消えてしまったのは、人間の体では耐えられない力を扱ったからなんです。『満開』と本質が逆です。過ぎた力は身を滅ぼす。満開は体を捧げて神力を宿すシステムで、過去の唯斗さんの場合は強力な力を無理やり扱ったから、記憶が抜け落ちてしまったんです』

二年前、小学生の唯斗が最後に行った戦闘で何かがあった。そこで唯斗は身に余る力を何らかの手段を用いて利用し、その代償で記憶を失う事になった。

結果は『満開』と同じでも、本質は逆だ。

『でも今は、御姿……神樹様の創った身体になったので、先程も言った通り——』

「神サマの力を受けても溢れない受け皿が完成したと。まあ、記憶喪失の原因については解った。……ん？解ってなくね？結局、記憶を失うほどの『過ぎた力』って何なの？」

『不明です。賢者システムの創造主がガッツリと関係しているのは解

りますけれど、その中身まではやっぱり解りかねます』

「ええ……使えないなあ」

『泣きますよ？本気で』

「冗談やって。本気にせんといてーな」

イジける雪白を宥めながら、ノートに情報を書き込む。

記憶喪失の直接的な原因は不明。しかし二年前の郡唯斗が『身に余る力』を扱い、その反動に身体が耐えられなかった。そして失ったのが記憶であり、原因が解らなかつた大赦の医者は逆行性健忘と結論付けたのだろう。

今になつて記憶の欠片が戻っているのも、正確には溢れた器の縁に残っていただけのモノと言える。完全に失うには至らなかつただけで、思い出しているとの表現は少しばかり違う。

つまるところ、もう唯斗に過去の記憶が戻ることはないのだろう。記憶の欠片と、身体に刻み込まれた感覚。それが防人の鍛錬で開花し、今の技能として確立していただけた話だ。

「はい次！二年前の記憶喪失については四割理解したけど、その”他の記憶”ってのは？雪白が言つてただろ、なんか意味深なコト。」

『それに関しては、消えるべくして消えたんです。唯斗さんだけじゃなく、みんな…』

「みんな？民菜さんのこと？」

『誰ですか。……みんなとは、あの世界に召喚された歴代の『勇者』と『巫女』さん達です。西暦から神世紀300年に至るまで、各時代から神樹様選ばれた人達です』

「ん…？何となく察したけど…やっぱ分からん」

——『各時代』『召喚』『記憶』『消えた』『勇者と巫女』『神樹』

きつと園子ならば答えに辿り着いていただろう。然し唯斗の頭に浮かんだ”可能性”は、あまりにも現実離れしていた。まるで物語の開幕を飾るような答えを、否定してしまった。

『端的に申しますと、異世界転生ですね』

「……神様ってスゲー」

『あまり年月や月日については確証と言いますか、具体的な表現のし

ようはありませんが……過去に私や唯斗さん、この時代の勇者部を含む歴代の『勇者』と『巫女』が神樹様の内に召喚されました。世界こそ神世紀300年を模造していましたが、あれは紛いなく『異世界』と呼称出来ます』

「…因みに、今の俺…俺達^{勇者部}って異世界から帰ってきたって認識で宜し？」

『宜しです。そして、まあ…なんやかんやあって今に至りますね！』
「説明雑だな!？」

精霊は古い記憶を掘り起こすように、ゆつたりと優しい表情で話す。いつか、自分達も嘗ての青春を同じ表情で懐かしむのだろう。

どこか大人びっていて、然し幼い精霊。彼女の反応だけで異世界での暮らしは充実していたのだろうと察することが出来た。

そんな記憶を失ってしまった。本当なら悲しむべきなのだろうけど、やはり唯斗には実感すら無い。銀や園子に唯斗の過去を教えるも、らった時と同じだ。

実感は無い。悲しくも無い。ただ曖昧で不明瞭な罪悪感だけが胸を支配する。短い人生で何度も体験した、”解らない事が怖い”という感情。

暮れる夕日を徐ろに見て、重く溜息をついた。

『今重要なのは、その『なんやかんや』ではなく帰ってきた現状です。もう解ってると思いますけど、あの世界での記憶は消えています。私達は持ち帰れなかったんです』

「…だろうな。覚えてないってことは、そういうことだろ。残念……なのかは解らんけど、不思議な感覚だよ。実感も無いし」

信じていない訳ではない。雪白の語り口調は至って真面目であり、そも現状で雪白が嘘で騙る理由も皆無だ。存在しない記憶の有無なんて、毒にも薬にもならない。

「その記憶ってヤツ、消えたんだろ？なら…なんで、思い出させようとしてるんだよ。神樹が消したなら、散華と同じだ。自力で思い出せるようなモンじゃない」

『…それでも、賭けてみたかったです。『鍛錬場』で戦った歴代勇者

をコピーした精霊：アレのオリジナルは全員、あの世界での仲間です。勇者部の皆さんも、西暦の初代勇者も、最初は敵だった彼女も。絆を紡いで、苛烈な戦いを共に乗り越えてきた大切な仲間なんです』
「……やっぱり、あの逃げ回るチュン精霊って……いやー、盲点盲点。確かに今思えば、殴るときに心が晴れやかになる感覚があったなー」
『絶対解ってましたよね?! 解ってて嗤いながらサンドバッグにしてみましたよね?!』

「ははっ、そんなまさか。チュン精霊がアホウドリ信天翁だっただなんてオドロキだよ。慄いて腰が抜けそうだなー」

『なんてstick読み……!』

鍛錬場で出現する精霊の正体については先に聞いていたが、其れが異世界での仲間だったと聞いたらやはり驚嘆する。雀がいたということは、他の防人もきつと異世界に召喚された。

そう考えると、唯斗と防人である彼女達は本人が自覚するよりも深く繋がっていたのだろう。

「えーっと、メモメモ。異世界行きーノ。鳥類サンドバッグになりーノ。いつの間にか帰還しーテーノ。記憶きエーノ。……あと書くことある?。」

『歴代の勇者と巫女について、ですな。万が一にも思い出せる可能性があるとしたら、そのきつかけ程度にはなる筈です。打算的な話をするなら、思い出せたら唯斗さんの戦力超upにもなります!』

「西暦勇者さんの武器が使えるようになるってか? そりゃあ心強いな、思い出せたらだけど」

言葉には出さないが、唯斗には不可能としか思えない。

『思い出す』——言葉にするなら、簡単だ。誰にでも出来る。唯斗だつて可能ならすぐにそうする。

だが、雪白の言葉を信じるのであれば、記憶の消去は神樹の決定だった。神が態々人間に介入して、自らそう在らせる事にしたのだ。

その意味を唯斗は知らないが、一つだけ解ることもある。其れは、失ったのは機能のみということだ。

聞けば聞くほど、『散華』と似ている。

方法は違えど、本質は同じ。確かに存在して、然し形の無いモノが取られる。本来、『満開』の代償として捧げるのは、形の無い機能だ。東郷美森が良い例だろう。彼女は記憶と脚の機能を捧げた。脳も脚も欠けてはないが、その部分が果たすべき役割を果たせなくなっている。

つまり、今話において失ったのは記憶ではなく、『思い出す』という脳の働きだったという事になる。異世界での記憶だけを思い出せなくする。その程度、人一人の存在を完全に消せる神樹には容易いのだろう。

「……記憶じゃなくて、『思い出す』っていう機能を奪われてっぽいんだよなあ。さてさて、どうしたもんか。燃え尽きたパズルのピースを探すようなもんだ。同じピースを作れるのも神サマだけだし」

『っ……記憶は、消えていない……?』

「飽くまでも可能性だけだな。……そも、思い出せない記憶が、存在するって定義できるのかは知らんけど。少なくとも頭ん記憶フォルダには残ってるハズ。機械じゃねえから誰にも覗けないけど」

『ふ、複雑な話になってきましたね……記憶は消えてないけど、脳の『思い出す』という機能が欠損してしまっている……ん?それって記憶が消えてるに等しいのでは……?』

「等しいから同一という訳でもないだろ。家から学校まで、徒歩で行くか車で行くか程度の違いだけだな。行き着く先は同じ。思い出せない記憶なんて無いようなモンだな」

唯斗の身体の例を除いて、神樹は形ある身体には基本的に干渉しない。

心臓が止まることがあっても、心臓は消えない。腕が動かさなくなっても、腕は消えない。目が見えなくなっても、声が出せなくなっても、味覚が無くなっても、耳が聞こえなくなっても——部位は決して消えない。捧げるのはいつだって、機能だけだった。

「はいはいっと、メモメモ。『記憶』は消えてないー。脳における特定の記憶を『思い出す』という働きが失われてルーノ。打つ手なしー。……詰みツスわ」

『……それでも、消えてないなら望みはあります！尚更、鍛錬に力を
入れないといけませんね!!』

「悲報、唯斗くん地雷を踏んでしまった。ただでさえ厳しい鍛錬が更
に厳しくなると…？死ぬよ？幼気で素直な所が美点な世界の常識人
代表郡くんがしんじやうよ？」

『へー、そんな郡くんさんがこの世にいたんですね。私は存じないで
す。そんなことより、明日からの鍛錬を楽しみにしててください！大
丈夫です、元は出来たことをまた繰り返すだけなんですから、論理的
です。ね♪』

「論理で語るな非論理を見捨てるな!!」

鍛錬の時間が増えるということは、コピーとはいえ嘗ての仲間に触
れることになる。理屈ではなく、精神論だ。奇跡でもなんでも良いか
ら、また心が繋がれば――

精霊は其れを願ってしまった。ただの我儘で世界よりも記憶の呼
び覚ましを優先した。

人という枷を外れ、少しだけ欲望を解放されただけなのかもしれない。
若しくは■■■■という人間の本質が精霊化に強く影響してい
るのかもしれない。

思い出して欲しい。あの記憶を無かったことにしたくない。自分
達の軌跡を、願いを、意志を、最後まで繋げたい。

だからこそ、雪白は厳しい鍛錬を突き付ける。自分達の師匠がそう
であったように。彼女の師匠の『元は出来たことを繰り返すだけだ』
という教えを愚直に繰り返す

『ふふっ、希望が見えてきました…！明日は…数より質を重視しま
しょう。より濃密に、脳の奥に眠る記憶に訴えかけてみましょう
!!』

「あ、明日は無理だ！明日から防人の方に顔出すし…!!」

『あつ、そうでしたね。……残念ですけれども、実戦を怠る訳もいき
ません。頑張ってください!』

「助かった……脳が休まる」

『…ちなみに、”石”の使用は禁止です。単体で強力な武器を使えば

”束ねる者”の鍛錬になりませんので』

「あ……死んだかも」

『死にそうになったらバリアで護りますよ？…』

唯斗は少しだけ、記憶について深堀したことを後悔した。

新たな戦法

雪が降り始めてきた。

自身の口から出る白い息を呆然と眺めて、唯斗は寒さに身を震わせる。

「寒っ……大東町も讚州市も変わんないなあ」

地域が違えば気候も変わる、ということとはなかった。そもそも電車で行ける程度の距離で天候に大きな違いが出る訳でもないが、やはり人生経験が豊富とは言い難い唯斗。

ちよつとした遠出も軽い旅行気分になってしまふのは仕方なしと言えるだろう。

唯斗は眼前に聳え立つゴールドタワー——千景殿を見上げてから手元の端末に視線を落とす。悴む親指で画面をタップして電話機能を起動させた。

「もしもし、着きましたぜい？……うん、うん。りよーかい。おん？格好……？……ちゃんと土居結女装姿ですぜ。……はい、あいよー。んじゃ入口でな」

やはり慣れない長髪のウィッグは風に靡き、変声機を通して喉から出る女声も違和感しかない。

いつの間にか空の彼方に消えていった羞恥心は初期の戸惑いすら忘却した。

端末をポケットにしまい、目の前のゴールドタワーの入口に向かう。彼女達が迎えてくれる筈だ。仲間であり同じく異世界での記憶を失っている彼女達。

唯斗も知らないが、かなり深いところで繋がっていたらしい。防人の中でも芽吹や雀、夕海子と仲が良いのはそういう理由もあったのだろうか。

自動ドアを通りやや広いエントランスを見渡す。待ち合わせをしていた彼女達は唯斗と目が合うと、軽く手を振った。

「やつほー、めぶっち」

「こんにちは、ゆいっち」

「……え、？…ユイとメブ…何でめちやくちや仲良くなってるの!? メブが人のこと渾名で呼ぶところとか初めて見たよ!？」

出迎えてくれたのは楠芽吹と加賀城雀の二人だ。

某鳥類の囀りを聞き流し、唯斗は芽吹とハイタッチをした。鳥が騒ぐ通り、前回の御役目から時間が経ち唯斗と芽吹は多少なりとも仲が深まっていた。

「おかしいよね? ギャグ? ギャグだって言って!? 頼むから真面目な顔で Giving d a p するのやめて!？」

「土居ちゃんめぶっちはメル友だからな。マブダチさ」

「…少しだけ、照れ臭いわ」

「……いや誰だよ!？」

「めぶっちだろ」

「こんな純情常識人で恥じらいを知っているメブは知りません! 女神の泉に落としてもこうはならないでしょ!!」

「…へえ、私は不純で非常識人な恥知らずと思われてたのね。雀、後で二人つきりで鍛錬しましょう? 非常識人だから、うっかり加減を忘れてしまっても恨まないでちょうだい」

「ひえっ…死刑宣告!? 嘘です冗談ですジョークです!!」

「怯えてる黄鷄キレタキとかウケる。命乞いが滑稽だね」

「だから雀だよ! ユイはいつまでそのネタ引っ張るのさ!! 私がいっまでもツツコミを入れるとでも思ってるの!？」

「ツツコミいれてるやん。それ無意識なの?」

魂に刻まれるツツコミは雀の存在意義そのものだ。常人が息をすのと同様に、雀はツツコミをいれないと生きていけない悲しい生物だ。

寧ろそこに本人の意思など全くもって関係ない。光があるから闇があり、ボケがあるからツツコミを叫ぶ。

この世の真理を体現したのは加賀城雀という哀れな生き物なのだろう。

「お嬢達は?」

「上で待機してるわ。ゆいっちも二日後の詳細はメールで確認したわよね?」

「当然。いのちだいじに、で生きていく予定だからね。ちゃんと鍛錬も積んでるからめぶっちの足も引っ張らねえよ」

「やっぱり違和感しかない…!」

絶妙に面白いと思えない二人の関係に雀は頭を抱えた。

そんな雀を置いて唯斗と芽吹はエレベーターの乗り込み、先に上の階に向かった。

芽吹と共に展望台に向かうと、既に殆どの防人が集合していた。少し離れた場所には亜耶と女性神官もいる。御役目に関する作戦会議、ということもあり集合しているのだろう。

唯斗は人混みの中から弥勒夕海子と山伏しずくを発見すると、芽吹に一言入れてから二人の元に向かう。

「よつす、お嬢にしずく。調子はどう?」

「あら、結さんではありませんか。わたくしは元気ですよ?あと、この前のパン粉3kg、ありがとう存じますわ」

「いや、こつちこそついうっかり防人システムを起動したまま手が滑って、首元に手刀が命中しちゃってゴメンよ。お嬢は頑丈だから大丈夫だとは思ってたけど」

「絶対わざとな定期。むしろ、何で弥勒は無事なの…?ていうかパン粉3kgも何に使ったの…」

「寧ろ雀が5kgの重曹をどうしたのかが気になる。まあ、送った土居ちゃんが言うのも変な話だけだな」

「……ユイト、加賀城がない時はちゃんと名前を呼ぶんだ。不思議」
「そりゃあ、雀はツツコミを入れないと死ぬ病気だからな。常にボケを供給してやらないとって普段から心掛けてるんだよ」

「何と言いますか……偶に雀さんが不憫だって思ってしまうすわ。生態的な意味で」

もはや彼女がボケの供給無しでは生きていけないのも周知の事実

だ。今頃はエレベーターに乗ってこの場所に向かっているであろう雀を思い浮かべ、唯斗は少しだけ憐れんだ。

今回、唯斗が再び土居結として参加する任務は壁外の状態を調査する事だ。決して難しいことはなく、寧ろ防人に与えられた最初の御役目と同じだ。

『国造り』の作戦もイレギュラーにより中止となり、植えた種も、少しでも神樹の寿命を伸ばすために回収した。

尚、そのイレギュラーの一端を担っているのは唯斗だったりもする。壁外で勇者——否、賢者システムを起動し天の神に気付かれたこと。無論、飽くまでも其れは一端であり、そうでなくとも当日の御役目で外の火が強まっていた事で大赦も早急に『国造り』の中止を決めたのだ。

元より天の神の支配は強力になり、奉火祭がなければ防人が外での活動すら出来なくなっていたところだ。

「結さんは、もうお身体は大丈夫ですか？」

「…身体は大丈夫。脳がやんばい。右脳と左脳が喧嘩する程度にはやんばい。鍛錬しすぎた」

「鍛錬…ユイトが？」

「いやー、遠くない内に発表会があるからねら。遊び人と言われた身としては、お遊戯会には手を抜けない質なのさ」

「いい心掛けですわね。必要とあらば、この弥勒夕海子もご協力しますわ！誇り高き名家として、迷える友には手を差し伸べなくては弥勒の名が廃りますわ!!」

「……弥勒の家、既に廃ったあと」

「そ、そんなことは御座いませんわ!」

「あはは…しづく、あまり言っちゃんなよ。お嬢は夢見るお年頃なんだから。ほら、お嬢。偶々偶然何故か驚き摩訶不思議なことに梅昆布茶持ってきたし、飲むかい？」

「これもわざとでしょ…」

見かける度に紅茶を嗜んでいる夕海子だが、実は紅茶よりも梅昆布

茶の方が好みだったりする。

名家を名乗ってはいるが、彼女は普通の一般市民でしかない。寧ろほんの少しだけ貧乏だったりもしてしまう。穴の空いた靴下を繕い、料理は安くて美味しい節約レシピを得意とする。

裕福とは言い難いのは事実であり、その点を指摘されても憤怒を露にしない所には彼女の懐の深さが窺える。

「お嬢って一見してポンコツだけど、ちゃんと尊敬できる先輩なんだよなー。風先輩よりも」

「あらまあ、結さんが素直に人を褒めるだなんて珍しい。ありがとう存じますわ」

「……ポンコツだとも言われてるのに」

弥勒耳は都合の良い部分しか聞き取れない。雀と同様に、彼女の生態も不思議なものだ。

数分が経ち、三十二人の防人と巫女である亜耶、女性神官に唯斗。次の御役目に関わる全員が集まった頃、芽吹は全員の前に立ち声を上げた。

「これより、二日後の御役目の作戦会議を始めるわ。今回はゆいっち…結も参加するけれども、普段と大きな変化はない。壁外で土壌のサンプルを確保、今回も誰も欠けずに戻ること。フォーメーションは私が指揮するから、取り敢えずは今まで通りよ。ここまでで何か質問は？」

「はい、質問ですー！」

慣れた口調で進める芽吹。いつもならば十分も掛からずに終わる作戦会議も、今日ばかりは勝手が違う。

「土居さんって『勇者』なんですか？ってというか『勇者』ですよー！」

「……ゆいっち、答えてあげて」

「はいよー。どーも、復帰した土居結です。前の壁外任務で変身姿見られてるから察してると思うけど、偽名だよ。本名が郡唯斗ッス。因みに『勇者』ではないね、正確には」

「あつ、じゃあ私も質問！土居家とか郡家とか、それって乃木家につい

で位の高い名家…のですか？いや、土居家については今更だけど！」「そだよー。母親が土居で父親が郡、その子供が土居ちゃんだね。いやー、名家だつて知らずに育ったから殆ど一般市民だな」

「土居さん質問です！『勇者』じゃないってどー言うこと？」

「わからん！土居ちゃんも割と最近知ったんよね。まあ、防人の最終兵器だとも思つとくれ。つーか、その為に防人やってるし」

「…同じく質問いいっすか？土居さんって男？女？アタシ的には性別不明系が超絶萌えるんすけど」

「んじゃそれで、正解はスカートの中だけってね。イヤン、土居ちゃん恥ずかちいっ／＼／」

「あざといのご馳走様っす！ぶん殴りたい衝動に駆られたツスね」

「理不尽だつて自覚おありで？土居ちゃんのサービス精神が音を立てて崩れたよ？」

「ジブン、推しがボコられるのに興奮するタイプでして。ボコりたいしボコられたいツス！」

「めぶつち助けて。防人の中に一人だけヤベー奴混ざってる。あれ、おかしいな…膝が震えてるぞ？記憶を落つことす事で定評のある脳がこの場から逃げろつて信号出してるぞ？」

いつの間にか唯斗への質問大会が始まり、作戦会議は殆ど機能しなくなつていた。芽吹が最初に全て詰め込んだのは、もしかしたらこうなる事を見越していたからかもしれない。

結局、芽吹がこの場で皆に伝えるべきは『いつも通りの御役目だ』と言う事と『土居結が加わる』の二点だけだ。

フォーメーションに関しては今更変える理由もないし、遠距離近距離の両方を出来る唯斗は何処に居ても大きな問題は無い。

もう会議どころではないと早急に諦めを付けた芽吹は二日後の御役目に思いを馳せ、素直に心強い味方が帰ってきたことを喜んだ。

「お疲れ様、ゆいっち。大変だったわね」

一通り揉みくちやにされた後、やっと開放された唯斗は鍛錬室に向かった。無人だと思つていた鍛錬室には木銃を振るう芽吹と、それを

眺める亜耶の姿があった。

「ユイトくんも鍛錬しに来たの?」

「まー、そんなところかな。亜耶は何しとんの?」

「芽吹先輩を見てたんだよ? 芽吹先輩の振るう剣技? ……って、素人のわたしが見ても、とつても綺麗だつて解るの」

「あ、ありがとう: 剣技とはちよつと違うけれども、二刀流をメインに鍛えていた時の名残りかしら」

楠芽吹は『勇者』を目指していた。前任の『勇者』である三ノ輪銀の端末は、一番優れている者に与えられる。芽吹はそう信じて二刀流の鍛錬を積んできたが、実際に神樹を選んだのは別の人物だった。

そこから防人となり、銃剣に合う戦闘スタイルに変えたが——やはり名残りはあった。銃と剣、両方を兼ね備えた武器ではあるが、芽吹が得意とするのは近距離からの剣撃だ。

「丁度いいや。めぶつち、少し鍛錬に付き合ってくれよ」

「良いわよ」

「二つ返事つて: ブレないなあ。えーつと、盾は何処だっけなー」

「…: 盾? 貴方の武器は石でしょう?」

「それがね、没収されたんだよ。だから銃剣か盾の二択で、俺が上手く使えるのつて多分盾なんだ。普通に使おうとは思ってないけど」

「: あまり、武器を変えるのは容認できないけど: ゆいっちがそう言うからには、何か策があるのね」

「モチロン。盾のアタッカーつてヤツだな」

唯斗が盾を選んだのは、「束ねる者」の掛け合わせで上手く利用出来そうだったからだ。

銃剣は完成されすぎている。近距離は付属するブレード部分で対処可能であり、防人に支給される物ということもあり頑丈性は保証されている。

遠距離は銃部分で言わずもがな。威力が低いという欠点もあるが、その点は人数と連携で補える。刃は伸縮する蛇腹仕込みであり、上手く勢いづければ一度に複数の星屑を殲滅することも可能だ。

その点、盾は防ぐだけだ。

盾型のバリアを展開する能力もあるが、雀ほどの適正がなければ頑丈で巨大なバリアを複数枚展開し続けるのは不可能に近い。

慣れている護盾型防人ですら二〜三枚が限界だろう。

「防ぎながらぶん殴れるって、最強じゃん？」

「避け専門が何を言ってるのか…この前は『全部避ければ無敵じゃん』って言ってたのに」

「…避けて防げば天下無双なのでは？」

「あ、亜耶ちゃんまで何を…!？」

「亜耶…：…もしや天才か？」

「それが出来れば誰も苦勞しないわ…雀は防御する事に関しては誰よりも秀でているし、ゆいっちは避ける事に関しては他の追隨を許さない。それぞれの努力と才能だから、両立なんて無理よ」

「えっと、わたしは戦うことには素人なのでよく分かりませんが…：盾を持ちながら避けて、それでも当たる時は防ぐというのは無理なんですか？」

「無理なんだなあ、それが。盾って正直邪魔だし、これ持ちながら躲し続けるって無理ゲー」

飽くまでも防ぐ前提、飽くまでも避ける前提。各方面に特化した唯斗と雀は”前提”を崩さない故にオンリーワンの能力を発揮出来る。

無論、盾を持ったまま攻撃を躲し続けることも可能だ。だが躲すだけだ。それでは盾を持つ意味はないし、まだ銃剣を扱った方が戦力になる。

「まあ、見ててくれよ。新しい戦い方、ちゃんと確立してきたからさ。小盾鍋の蓋の扱いなら論理精霊ロジカルに鍛えられたからな」

「…：…そう。なら、手加減は無用ね」

「おうとも。新しい論理ゆいっちを見せてやろう。亜耶は下がってるよ、もしかしたら何か飛んでくるかもしれないし」

「う、うんっ」

亜耶が端によったのを確認し、唯斗と芽吹はそれぞれ木盾と木銃を構える。こうして向かい合うのは防人としての初日以来だ。

あの時より、唯斗も芽吹も腕を上げている。唯斗は勘でなく完全に

以前の腕を取り戻した。芽吹は唯斗が不在な内も実戦で腕を磨き続けた。

「今回は勝つ戦いをしてやるよ」

「私は貴方を参考にした、防人流の護る戦いを見せてあげるわ」

——初動は芽吹だった。

彼女が唯斗の『分身』を修得しようとして、鍛える道中に会得した技術——『縮地』。

瞬きの間に眼前に迫り、銃剣で鋭く穿つ。これも同じだ。最初よりもずつと鋭く、速く、認識した上でその意識すら置き去りにする一撃。「ツツとお!!」

「ふつ、貴方なら躲すと思ってた!」

「またバグってねえか!?!これだからバクノキは…!!」

「どの口が言うか…!」

唯斗が叩きつける様に振るった盾は軽いバックステップで避けられる。当然、唯斗も当たるとは思っていない。むしろ距離をとるための手段とも言えた。

互いに数歩下がり、相手の動きを警戒しながら武器を前に構える。

「避けるなら盾の意味が無いわよ!」

「はっ、当ててみるよ!」

「言われなくても、簡単に当ててみせる!!」

挑発に乗り、芽吹は木銃を投げた。不意をついた攻撃は斜めに構えた盾に当たり、後方に弾き飛ばされ——ワイヤーで芽吹の手元に戻る。

「ほら、簡単に当たる」

「…おいおい、随分と手数が増えてるなあ」

「生き残るためなら、あらゆる手段を取るつもりよ」

「雑食め。論理で屈伏させてやる!」

離れた位置から盾を横に振りかぶり——唯斗も盾を投げた。

「なっ!?!」

「驚くだろ?俺も、同じこと考えてて吃驚驚嘆だ!!オラ!」

「くっ…はあっ!」

木銃でいなされた盾は芽吹と同じくワイヤーで手元に戻る。仕込みは皮肉にも双方共に同じであり、手段を選ばないのも同じだ。

唯斗が考えたのは至極単純だ。『盾で中距離に攻撃したら驚くだろうな』という奇を衒いすぎた愚策。命中したところで有効打にはなり得ないが、その隙に殴る蹴る等の追加攻撃程度は出来る。

「まだ手え隠してんだろ？全部曝け出せよ」

「そっちこそ、隠し事はお得意？」

「それなりにな。秘密主義だと定評があるんでな」

「——なら曝け出してあげる。隠してる手札、全部!!」

「やってみろよ、俺の手札は無限だぜ？」

「そう、じゃあこの一撃で……」

木目の床を強く踏み締め、防御ごと相手をぶっ飛ばす一撃を放つ。避けることは容易いが——これは芽吹からの挑発だ。

逃げるな、手札を見せろ。そんな安い挑発だ。

「防いでみせなさい!!」

「上等!!」

木銃を掌で押し出し、木製の盾を割る勢いで放たれる全力。防ぐことはおろか、容易くないなすことも唯斗の技術では不可能。一秒と経たず訪れる衝撃に、唯斗は敢えて盾を構えてる。

「はあああああつつ!!」

「——『シールドバツシュ反射』!!」

「つつ!」

再現するのはピコピコハンマーの『反射』。掛け合わせるのは木盾。出来上がるのは『反射する木盾』だ。

盾と衝突した木銃は鈍い音を立てて後方に飛ばされる。頑丈は筈の鍛錬室の壁に深い傷を付け、カラカラと音を立て床に落ちた。

「今回は俺の勝ち、で良いか？」

「………今回は私の負けよ。…次は絶対に勝つ」

「負けず嫌いな、相変わらず」

時間にして数分にも満たない試合。これは殺し合いではなく、飽くまでも互いの実力を把握するための鍛錬だ。唯斗にとっては「束ね

る者”を初めて意識的に発動する瞬間でもある。

大切なのはイメージだった。

唯斗が想像したのは『攻撃を反射する木盾』だ。それが”木盾×反射”に対する唯斗の解釈だ。これで『殴って反射するも木盾』をイメージしていたら、ピコピコハンマーと同じ仕様の木盾が完成していただろう。

解釈によって、同じ掛け合わせでも別物が束ねられる。故に『無限の手札』だ。

「——今日明日で慣れてやる」

防人の御役目まで残り二日。

手札は多いに越したことはない。ピコピコハンマーに分身、手で持つ武器とも掛け合わせられる。その気になれば勇者部の皆の武器もコピー出来る筈だ。

それをまた掛け合わせ、手札が増える。まさに無限に等しい。

自分の可能性を改めて察し、身震いした。

◆◆◆おまけ◆◆◆

『盾×反射』

・防人の盾とピコピコハンマーの反射を掛け合わせたモノ。シールドバツシュで相手の体勢を崩し、盾で物理的に殴ることも可能。あまりにも強い衝撃を受けると、逆に唯斗自身が吹っ飛ぶ。

そもそも唯斗は攻撃を避けてピコハンで殴る戦法が主なため、残念ながら射手座の細かい矢や星屑を相手にする時くらいしか使い道がない。

次こそ――

「んー、せいっ」

気の抜けた掛け声で護盾を床に叩き付ける。

すると、眼前に三枚のバリアが展開された。防人の盾に元から付いている機能だ。薄緑に発光する盾型のバリアは勇者に与えられる精霊のバリアよりは酷く脆いが、然し汎用性に長けている。操作や位置指定が可能な点に限っては、もはや精霊バリアとは別物とも言える。「便利だなー。ほい、『分身』」

掛け合わせるのは『盾』と『分身』。完成するのは『分身』の脆さを残したまま数だけが増えて、唯斗を中心に半径十数メートル感覚で全方向に顕現した複数のバリア。

防人の脚力で一度でも蹴れば、容易く消えてしまう程度の耐久性しかない代物。盾やバリアと呼ぶにはお粗末で、実に頼りないモノだ。

「続けて『反射』も」

防人の盾、分身能力、ピコピコハンマーの反射。三つの掛け合いは新たな可能性を紡ぐ。

何十枚と球を型取り全方向に展開された盾。その一つを両足で踏み付け、『反射』の勢いで真上に飛ばされる。そのまま空中で身を無理やり捻り、背中と並行していた位置にある盾を防人の強化された脚力で蹴ると、トランポリンに弾かれたように前方に発射される。

手に持った木刀で案山子を叩きながら身を180度返し、再び弾かせる。

「愉快的な人カアトラクションだな、こりゃあー！」

蹴り、弾かれ、蹴り、弾かれ、すれ違う瞬間に武器で敵を叩く。薄緑の盾は蹴る度に消え、霧散する緑の粒子は球の中で激しく荒ぶる。

”束ねる者”はイメージによって千差万別な色を見せる。唯斗は盾を『盾』と捉えず、空中に設置できる足場として認識する。『反射』は相手ではなく自分に作用するように設定する。『分身』は付与するイメージで盾に施す。

三つの能力を”束ねて”完成したのは、空中を縦横無尽に飛び跳ね全方向から敵を甚振り殺すフィールドだ。

「うげっ！ぐっ…痛ってえ…止まる時のこと度外視してた…」

盾が消え、その隙間から唯斗が弾き飛んでくる。

意識が途切れた途端、こうなってしまう。こればかりは”束ねる者の能力ではどうしようもない。寧ろここまで動けたのは雪白との鍛錬で並行作業を鍛えられたからだろう。

「……ナニコレ、ついに人間卒業してる…」

「ん？…なんだ、四十雀か。…いや、シジュウカラ雨燕か？アマツバメ交喙、ハチクマ蜂角鷹、レンカク蓮角：

？ヤマセミ山翡翠だった可能性もあるし、コガラ小雀は気もしてきたな…よもやヤンバルクイナ山原水鶏か？」

「だーかーらー！雀だよ!!アイアム、スズメ！畑でチュンチュン鳴いてる雀だつてば!!」

「あっはい。雀ね」

「…いや間違えよ!?ここまで来たら永遠に間違い続けてよ!!」

「やっぱりボケ待ちじゃないか（歓喜）」

床に転がる唯斗の顔を覗き込んだのは、ヤバい奴を見る目をした加賀城雀だった。

唯斗と違い防人の戦衣は纏ってないが、いつもの制服姿ではなくジャージを着込んでいる。まるで鍛錬でもしに来たのように見えるが、彼女に限ってはその可能性も薄い。

戦闘において、彼女の功績は確かに大きい。命を救われた者がいる。大怪我を避けられたと言う者もいる。彼女がいなければ楠芽吹の掲げる『誰も犠牲者を出さない』という信念も敗れていただろう。

然し残念なことに、それは鍛錬の結果とは言いがたい。異常なまでの生に対する執着と、過剰な生存本能により常に最善手を取り続けるのが加賀城雀の真骨頂。

天賦の才であり、やはり彼女に必要なのは逃げ足と盾を持つ筋力のみだ。それは芽吹が強制する鍛錬でも事足りているし、雀が今更自主的に鍛えるなど考えられない。

「ようこそ、ここは鍛錬室だよー」

「急なNPC化やめて？RPG系のゲームで村の入口にいるヤツじゃん！」

「フハハハ！よくぞここまで辿り着いた、防人よ!!」

「最終ダンジョンの最下層にいるタイプのラスボス!?此処ただの鍛錬室だから！」

「つーか、結局何しに来たの？お嬢からは明日の御役目に震えてベッドの中に引き籠る予定だって聞いてたけど」

「何一つ間違っていないけど弥勒さんに言われると腹が立つ！」

「お嬢に何の恨みがあるんだよ……」

雀は芽吹然りシズク然り、自分を護ってくれる存在には惜しげも無く媚びを売る。だが弥勒夕海子に対しては辛辣だ。

互いにツツコミ合う仲なので険悪とは言い難いが、言葉一つ一つに對して突っかかる様は見えていて飽きない。

「……まあ、その……少しだけ、ね?……ほんの少しだけ、鍛錬しようか
なって……」

「……?」

「っ!?ちよつ、何!?いきなり私の頬抓らないで!痛い痛い痛い!!顔の皮剥ぎようとししないで!」

「なつ……ほ、ホンモノ!?チュン皮を被ったためぶつちかシズクだと思っ
ただけどなあ……」

「流石に無理があるでしょ!!」

「キュンです」

「もしかして日本語不自由な方?」

「青藍語は解るんだけどなあ」

ルパン宜しく雀に変装をした誰かがドツキリを仕掛けに来たかと思っただが、そんなことはなかった。そも、芽吹が彼女ほどのツツコミ力を誇るとは思えないが。

兎も角、唯斗が雀を疑ってしまうのも仕方が無い。

既に言わずもがな、雀は鍛錬を嫌う。単純に辛いこと全般を露骨に避けて、然し芽吹に強制される所までが様式美だ。

「急にどうしたんだよ。悩み事があるなら相談乗るよ?」

「えっ、気色悪っ」

「おいコラ、純粹に心配してる人に対して喧嘩売っとんのか？明日の御役目で盾にしてやっても良いんだぞ」

「あつゴメンなさい。つい思わず本音な出ちゃっただけなんだよ……？」

「そっかー、明日の御役目が楽しみだね♡」

「……チュン助知ってるもん。この後どうやって取り繕っても無駄なんでしょ？……つふううー、あゝあゝあゝアゝアゝアゝアゝ!!嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だああ!!壁の外に出たくない星屑なんて見たくない実家で引き籠るってミカン食べたああああい!!」

「駄々こねるなよ……」

割と普段から本音を隠すような性格でもないが、ここまで駄々こねるのも珍しい。

怠惰精神を秘めた彼女の叫びは唯斗すら呆れさせた。尚、普段から皆を呆れさせているさせているので広い目で見れば普段通りとも言える。そんな悲しい事実を目の当たりにし、唯斗は再度溜息をこぼした。

「結局どーゆーこと？」

「……別に、戦力になりたいとか……バーテックスを倒したいとか、そんな崇高な心意気なんてないよ。私にはそういう才も心の強さもないし、防人番号32番通りの実力しかないし……」

「……………」

「……私は……死にたくないだけ。死にたくないし、辛いこともしたくない。……でもね、あの時……ユイが帰ってこなかった日……すごく怖かった。『勇者』でも簡単に死んじゃう”外”が怖くて、張り詰めた雰囲気のみんなが怖くて………護るための盾を持っているのに仲間を救えないって、そんな事実を突き付けられて……死にたくないのに、死ぬほど怖かった……」

「雀……………」

——雀は臆病だ。

全てに対して”最悪”を想像してしまい、身が震える。そんな自分

でも防人の護盾を持てば、ほんの少しでも仲間を護れると思っただ。

彼女の『護盾』は弱虫の象徴であり、仲間の命を護れる誇りだった。仲間がいるから、怖くても歩ける。そのためなら、仲間を必死に護れる。

矛盾する胸中は雀にしか解らないし、彼女も言葉に出来ない。然し大嫌いな自分でも、大切な人達のためなら微力でも力に出来ると思っていた。

でも、あの日——防人の前に御魂を持った複数のバーテックスが現れた日。

煌めくオンシジュームの花卉纏う背中に護られて、雀達は走った。何も解らずに、然し強大な力が自分達を護ってくれているという事だけを自覚して結界の中に走った。

それが正しいと本能で察して、でも頭の中では逃げちゃダメだと叫びながら。

本能と予感。同じ筈の第六感は相反する答えを出していた。後悔して生き残るか、満足して死ぬか。

「ユイ……ううん、ユイト。生きていてくれて、ありがとう。また……護るチャンスをくれて、ありがとう。もう、失いたくないから……私は！加賀城雀はユイトを護り続ける!!」

「……懺悔か？」

「違う！私は、私を護ってくれる人が死なないために死力を尽くすんだ!!」

「っ……お前、少しだけ友奈に似てるな」

この瞬間、ほんの少しだけだ。彼女の瞳の奥に『勇者』^{友奈}を感じた。下心に満ちた弱虫な信念は純粹な『勇者』に届き得る。

防人は『勇者』に成れなかった少女達だ。確かに『勇者』の資格があり、あと一步の所まで至った蕾だ。

その一人である雀にも、清らかな心はある。仲間を護るといふ誇りがある。

「……今のお前なら『勇者』に選ばれてたかもな」

「えっ…えええええっ!?嫌だよ怖いよ死んじやうよ!御魂持ちのバーテックスを複数相手するなんて無理だから!!」

「防人として星屑とか進化体とやるよりはマシだと思っけどなあ。最強戦力の樹がいるからな……散華もあるし一概に無事平和な安心安全とは言えないけど」

「よく分からないけど絶対危険じゃん!」

寧ろ直接的な危険と内面的な危険の両方がある分、防人の任務より質が悪い。

そして何より、『勇者』は『防人』と違い精神の安定が変身の維持に必須だ。精神面が貧弱な雀ではまず初戦での変身すら出来なかっただろう。

故に選ばれなかった。少なくとも唯斗はそう解釈した。

「んで、鍛練すんの?」

「自主練するからユイは部屋に戻って寝てて?」

「手伝ってやるから遠慮するなよ。さっきの新技、相手アリで確かめたいし」

「いやいやいやいや!ユイも疲れてるだろうし、私は自主練を…」

「腕が鳴るな!新技の調整もしたいし、鳥類の鍛練にもなるし。一石二鳥だね」

「ひえっ…!」

悔しくも、唯斗は雀をカツコ良いと感じてしまった。自分よりも弱虫だった彼女の本質は『勇者』だった。決して『勇者』足り得ない自分とは違い、焦がれる本質は彼女の方が相応しかった。

ちよつとだけ理不尽な^{鍛練}お誘いは嫉妬の形だったのかもしれない。

「ふあゝ…眠っ。つーか腹減った」

シズクは大きな欠伸をしながら廊下を歩く。自室で寝るか、食堂でラーメンでも食べるか。戦闘外で外に出るのは久し振りなので、唯斗や芽吹と鍛練をするのも楽しそうだ。

他の防人は明日に迫る御役目に向けて準備をしている。万全を期すために休む者や武器を整備する者。

しずくはやるべき事を終え、残る時間はシズクにくれた。死ぬ気は毛頭ないが、御役目は毎回命懸けだ。彼が帰ってこなかった時、シズク達はそれを嘆いた。数日かもしれないし、何十年も続くかもしれない”しずく”の人生。

毎回、御役目の前にはやりたい事をするようにすると決めたのは記憶に新しい。

シズクが鍛錬室の前を通った瞬間――

「アハハハハ!!此奴マジかよ!全部防ぐじゃん!!」

「うぎやあああああああ!?何これ怖い見えない!!この人外めえええ!!」

聞き覚えの深い声が二つ聞こえた。

冷やかしてやろうか、とシズクが鍛錬室を覗いたのは言うまでもない。ドアをそつと開き中を覗き見たら――

「オラオラオラオラア!」

「こんのおおお!!」

縦横無尽に敷かれた盾を足場に、高笑いしながら空中殺法を繰り広げる唯斗。同じく護盾のバリアを十数枚展開しながら操作し、全ての攻撃を防ぐ雀。

大凡の防人が入り込む余地のない戦闘が鍛錬室で交わされている。唯斗の能力は特殊なものであり、シズクには再現不可だ。然し雀の防御能力。シズクには再現出来ないし、突破も出来ない。無論、負けたりなんかはしないが。

「……アイツら人間卒業してんのか……?」

常識外のやり取りを見て、シズクは嗤った。届きたいと感じ、憧憬を抱ける自身の可能性に歓喜した。

「ヨッシャア!!ユイトに加賀城!オレも混ぜろやああ!!」

「ひいつ!?何でシズクが!?御役目前に死ぬううう!!」

「ハハッ!楽しくなってきたなア!!」

雀の悲痛の叫びはフロア全体に響いた。それもまた日常だ、と防人

達は思いながら明日に向けて準備を進めた。

◆◆◆おまけ◆◆◆

『防人の盾×分身×反射』

・盾のバリアを増やし、それぞれにピコピコハンマーの反射を付与。それを半径十数メートル範囲に球状で展開し、足場にして縦横無尽に移動する空中殺法的な三次元的挙動。

今話では木刀を持ち、全方向から案山子や雀を叩いていた。尚、雀には全て防がれていた。

これに『石』も混ぜることによって予測不能な多撃にできるが、今回は雪白に没収されたので使用不可。更に樹のワイヤーを使えば変態機動が可能となる……が、脳がシェイクされて吐く。更に本体に分身を使い範囲も広めれば防御不可能な上に死ぬまで止まない攻撃になるが、脳死する。更に更に分身一人一人に別の束ねた武器を持たせれば何かヤバいことになるけど、脳が弾け飛ぶ。

つまり現状ではこれが限界。

とある少女

——防人序列30番。

それが『少女』に与えられた番号だった。防人としての戦闘成績は下位であり、数値以上の活躍を見せ続ける加賀城雀を抜けば下から二番目の実力者。

護盾を最前線よりやや後ろで構え、楠芽吹の指示に従い星屑を抑えるのが役割。

これといった活躍は無く、然し序列の割には角の立った失敗談も無い。

もしもこの世界が物語的一幕なら、『少女』は自分の立ち位置をモブだと断言する。傍から見てもモブで、自分もモブと思う。そう在る事が少女に与えられた御役目の一つだった。

「ヒヤッハア！パワーは俺でスピードも俺だ！一生掛けても追い付けないぞ!!」

「ゆいっち！あまり部隊から離れないで!!」

「ハッ、ケチケチすんなよ楠イ！おいユイト！オレの分も残しておけよ!!」

（っ……相変わらず、勇者サマはぶっ壊れてるっスね。まあ、防人の楠隊長とか荒々しい方の山伏さんも大概だけど）

天には空をも焼く火の柱が地面から登る。地面は煉獄の炎で支配され、地空関わず白い獣が彷徨っている。壁の外はいつも通りだ。もう300年以上前から、こんな惨状が当たり前になっている。

そんな壁外で『少女』は本来の御役目——郡唯斗の監視を続ける。監視と言うよりは観察の方が正しいのかもしれない。彼の挙動を観察し、『大赦』に報告する。

大赦の”お偉いさん達”に命じられ、彼女の家柄的にも断れない事柄だった。それだけの話であり、『少女』はそれを特段悪い事とも思わない。

立場には責任が伴う。

立場には重荷が伴う。

郡唯斗は郡家と土居家の血を持ち、将来的には郡家の当主になると決定付けられた存在。噂では乃木家と婚約を結ぶかもしれないと言われ、現状でも防人の切り札として在る『勇者』である。

つまりは替えがない存在なのだ。そんな彼を『大赦』が野放しにしておく訳もなく、その見張りを『少女』は任命されていた。

(監視かあ…ジブンも随分と面倒臭い御役目を命じられたモンっスね。ただでさえ防人で使い捨てられる筈の身分だったのに)

防人は替えのきく存在だ。個々の技量や適正の問題はあるが、基本的には『勇者』の適正がある人物ならば誰でも成れる。そして意外にも『勇者』の適正がある少女は多い。

少女達が己の決断次第で『防人』を辞めて一般人に戻れるのも、結局は替えの人材がいるからだ。神樹に選ばれた『勇者』ではなく、飽くまでも資格があるだけの特別でも何でもない駒だからなのだ。

他の防人はその事実に関死して無二の戦果を挙げ続けているが、『少女』はそこまで熱くなれる性格ではない。

『少女』はとある名家の三女だ。

姉達は家の手伝いやらで意味のある存在だ。必要とされている人間だ。

然し『少女』には何も無い。敢えて挙げるなら防人が意義ある御役目だ、とでも言えば良いのか。これしか無いから、『少女』は使命を全うする。

「護盾部隊、バリアを展開しながら後退！銃剣隊は後方の星屑に牽制！ゆいっちとシズク、弥勒さんは結界までの道まで皆を先導して!!」
「了解!!」

楠芽吹の指示に従い、『少女』は盾を展開し下がる。

こうするのも慣れたものだ。最初のうちはパニックになり皆バラバラに逃げていたのに、今では思考の余裕すらある。無論、油断している訳では無いが。

(土居さん——郡唯斗くん…ちゃん?…あー、このヒト昔から性別

が不明なんスよね。神樹館小学の時から。萌えるからジブンのにはどっちでも良いっスけど)

『少女』は郡唯斗を昔から知っている。更に言うなら土居結として初めて自分達の御役目に関わった時点で何となく察してはいた。

というか普通に見覚えがあつた。

同じ神樹館だった山伏しずくが懐いていた。初日の紹介で『実戦経験がある』と伝えられた。聡い『少女』には既に答えを言われたようなものだった。

決して親しくはないが、御家柄で言うなら『少女』と郡唯斗は似たような立場だ。初代勇者に連なる存在で、同じく仮初の平和に溺れずバーテックスと戦っている。

乃木園子を除くなら『少女』が郡唯斗に一番近いのかもしれない。

「うわつと…星屑さんは今日も元気っスねえ！」

自分をを喰い殺そうと盾の盾の隙間に歯茎を押し付ける化け物。『少女』は冷めた表情で盾を上を持ち上げ、ギロチンの如く星屑の頭部と胴体を断絶する。

「ちよっ、伊予島さん!」

「あ、驚かしちゃったっスか?でもキモかったもんで、ついヤっちゃったッス。てへぺろ」

「ついつて…でも珍しいね。伊予島さんが星屑を攻撃するところなんて初めて見たよ?」

「いやー、あはは。土居さんに感化されたかもッスね。ジブン、あんなバトル漫画的な人外挙動とか見るのが好きなモンで。あと土居さん推しなので」

「推しはボコりたいしボコられたい…だっけ?なかなか濃い性癖をお持ちで……」

「あらら、あからさまに引かれると悲しいっスね。その性癖をぶち壊したのはあの人なんスけどね」

二年前の神樹館小学校。そこで彼は言葉に困る様な奇行をしていた。

同級生を踏み付け、酷く冷めた表情で見下す。全員とは言わないが、それで鼻息を荒くし『もつと！』と懇願する変態男子が複数存在した事は『少女』の記憶に張り付いて離れない。

当時の『少女』は何をもち狂ったのか、それを『尊い』と感じていた。まさに未知であり、軽い憧れを抱いていた。尚、今では流石にヤベー奴等だったのだと理解している。

その弊害が現状の性癖だ。

(……うん、全部土居さんのせいっす。だから土居さんに性癖をぶつけるのは自然の摂理。神樹様も許してる……筈っす！)

満面の笑みで進化体を四方八方から殴る”推し”を見て、『少女』は頬を歪めた。

「んー、着替えは持ったし：財布にスマホ、何故かバッグに入ってたサッチョも。……よし、準備オーケーだな」

「：ユイトくん、本当に帰るの？もう少しだけ休んでいっても……」

壁外の調査を無事に終え、部屋で帰宅の準備をしている最中。亜耶は寂しそうに呟いた。

唯斗がゴールドタワーを訪れるのは防人の御役目がある時だけだ。唯斗が天の神に操られ、その後解放された日。あの日以降、唯斗に大凡『暇』と言える時間はなかった。故に、決して彼が冷めているから亜耶達に会いに来ないのではなく、何かと忙しかったからに他ならない。

胸に刻まれた刻印。それは留まることなく現在進行形で大きく広がっている。まるで唯斗を蝕み魂に寄生する呪いだ。

残された時間は少ない。きつと、天の神を打倒しなければこの『呪い』は解けない。ならばその時まで鍛錬を続け、武器を磨くしか唯斗には出来ない。

「明日は学校だからなー。学校には御役目っつーことで休んでたけど、そろそろ勇者部の変人共にバレル。アイツらには親戚ん地に行つてたつて嘘ついてるし」

「そっか……また、御役目じゃなくても遊びに来てね？」

「亜耶が来てても良いんだぞ？めぶつちとか連れて」

「っ…うんっ、ユイトくんが良いなら!!」

嬉しそうに頬を綻ばせる亜耶。その微笑みに罪悪感を覚えてしま
うのも、きつと見当違いなのだろう。

彼女の語る『また』は一体いつなのか。まだ唯斗が無事なうちか、そ
れとも異常が起きた後なのか。叶うなら、もつと後——全てが解決し
た後にでもして欲しいものだ。唯斗は苦笑した。

「…ユイトくん。これ、何か分かるかな？」

「ん…植木？」

亜耶が抱えるのは茶色の鉢に植えられた小さな芽だ。瑞々しく輝
く新緑。心做しか、壁の外で橋頭堡を築く際に発芽させた草木に似て
いる気がする。

本当に『心做しか』程度だ。

改めて見れば、殆どただの植木鉢に植えられた芽にしか見えない。
然し逆に言えば、ほんの少しだけだが神聖な雰囲気を感じるのも事
実。

数秒間だが、唯斗はその芽に目を奪われる。既視感と言うべきか、
泣きたくなるような懐かしさが込み上げてきた。

——其れは秋の終わる頃。勇者部が東郷と唯斗を救出した日に亜
耶が山田くんから渡された植物の苗だ。遠出するから預かって欲し
い、とニヒルな笑みで渡された其れは、明らかに普通の一植物とは一
線を画していた。

亜耶にとって山田くんは神樹に等しく信仰する対象であり、唯斗を
助けて、自分や銀に力を与えてくれた存在だ。

そんな存在が唯斗に肩入れし、その上で亜耶に託した『苗』。何かし
ら唯斗に関する物であると考えられるのもまた至極当然だろう。

「…不思議な感じだな…これ、どうしたんだ？」

「えつとね…山…うん、ある方から預かってる物だよ？とてもお
世話になった人で…遠出するから預かって欲しいって言われたの」
「へー…やっぱ、ただの植木じゃないよな？」

「ど、どうなんだろうね…？ユイトくんなら解るかなって思ったんだ

けど…」

「よー分からんけど、預かっただけなら適当に水あげて放置しといてもいいんじゃない？水と日光と二酸化炭素でも与えとけばいいだろ」
「やっぱりそうするしかないよね…」

何か深い意図が隠されているのではないかと。そう疑ってしまうもの仕方がない。亜耶は確かに山田さんと名乗る存在を信仰しているが、決して盲信している訳では無い。

「疑う事に罪悪感を覚えてはいるが、だからといって思考の放棄はもうしない。」

あの時——大切な彼が『勇者』として殿をした時。雀と同様に亜耶の中にも漠然とした形容し難い、不安や嫌な予感に近い感覚が働いていた。

だからこそ、もうその感覚を見て見ぬふりはしない。それが例え、自分の信条に反していても。

「…んじゃ、そろそろ帰るわ」

「うん…ユイトくん、何かあったら連絡してね？わたしや芽吹先輩、他のみんなも…ユイトくんのことを大切に思ってるから」

「分かってるよママ」

「ま、ママ？わたし、ユイトくんのお母様じゃないよ？」

「アツハイ。ちゃんと分かってるから無垢な瞳で見ないで…？存在が恥ずかしくなるから…：にしても、お母様ねえ。…ここ数ヶ月、まったく会ってないな」

「わたしも、かな…色々忙しくて、お家に帰れてないから」

亜耶は巫女として選ばれてからは殆どの時間を大赦内で過ごしており、両親との時間は極端に少ない。

唯斗の両親は元より大赦務めであり、立場も御家柄故に上層部だ。それに加え唯斗の立場の分も上から積み重なり、両親共に大赦の管理する宿泊施設で暮らしていると言っても過言では無い現状。

共に両親の愛を知らずに育った訳では無いが、他の同年代ほど親という存在に依存した生活はしていない。

「まあ、俺も亜耶も、…ここが第二の家みたいところだからな。よく

鳴くペツト鳥類がいて、バラエティ豊かなお笑い集団もいる。家賃もないし、食事も出てくる。……やべ、本格的に此処に住みたくなってきた。既に実質的な自室もあるし」

「……そっかーじゃあ、わたし達…家族だね♪——ユイトくん、行ってらっしゃい！」

「はいよ、行ってきます」

家族という言葉を含羞む笑顔で噛み締め、亜耶は大事な家族として唯斗を送り出す。今度はきつと、帰って来ると確信していたから。

そんな彼女につられて、唯斗も頬を綻ばせた。

◆◆◆おまけ◆◆◆

とある『少女』

・防人序列30番の護盾部隊に属する盾持ち防人。突飛した能力は無く、飽くまでも平均的な強さ——というのが周りからの評価。

決して弱くはないし、不自然なくらい誰の足も引つ張らない代わりに目立った活躍もしない。何処までも護盾部隊の一部であり本人にもその自覚はある。

その気になれば弥勒夕海子以上には強いが、結局は楠芽吹や山伏シズクに劣る。本人も目立つのは苦手であり、継続的な戦闘を旨としていない防人としては護盾持ちの方が生存確率が高いため、手は抜かないが必死になって鍛錬等はしていない。

伊予島家の三女であり、過去に『勇者』の候補生だった。三好夏凜が選ばれた事により御役御免になる筈だったが、再度招集され防人の御役目に携わる。

二年前までは神樹館小学校に通っており、郡唯斗や乃木園子達のクラスメイトだった。

郡唯斗及び土居結を”推し”と捉え、『ボコりたいしボコられたい』といった歪みきつた性癖を向ける。尚、未だに唯斗の性別は分からない模様。

大赦から郡唯斗の監視を命じられている。その”お偉いさん”は仮面の裏で胡散臭い笑みを浮かべる眼鏡の青年だったり。

趣味は読書。

夢の夢の夢

「うーん、今日もいい朝ね」

美森は座敷の上に敷いた布団を丁寧にたたみ、窓から差す光を浴びる。決して豪華とは言えないが、気品のある質素な風貌は二十代の美森を最も飾る。

社会に出て、早くも数年が経った。

『勇者』としてバレーテックスと戦い、親友達と御国を平和に導いたのも過去の話だ。あの日々には青春が詰まっっていて、絶対に忘れることなど出来ない中学時代だった。

美森もあの時より背が伸び、身体も大人の女性となりアンバランスさは淑やかな色気へと成長した。

まだ横に敷いてある布団に視線を向けると、丁度彼と目が合った。

「おはよ、美森」

「唯斗君……うん、おはようございます」

「珍しくボーツとしてるな。悩み事か？」

「ううん。……少しだけ、昔のことを思い出してたの。『勇者』としてバレーテックスを倒して、御国の平穏を求めた日々を……」

「へえ、そっか」

隣の布団からうつ伏せで身体を出し、イカの姿フライを齧りながら携帯端末を無造作に操作する青年——郡唯斗。

こうして共に朝を迎えたのは何度目か、もう美森は数えてはいない。

彼もあの時よりもずっと成長した。同じくらいだった身長は既に彼が美森を見下ろす程であり、無邪気さはなりを潜めて、何処か小学生の頃の彼を思わせる冷静な面は郡家当主としての貫禄だろうか。

短く切られた暗茶髪は灰色の着物と良く映え、微かに開いた胸元は美森の頬を紅く染めた。

「唯斗くん、今日の予定は？」

「……大赦の堅物共の説得だよ、相変わらず。あの糞爺……園子の案には

両手を上げて賛成しやがるクセに……あー、当主辞めたい」

「ふふつ、我儘言わないの。そのうちだつて同じくらい頑張ってるんだから」

「アイツ、時間があつたら寝てやがるぞ？ 人生の大半は寝て過ごしてるんじゃないかつてくらい会議中もイビキかいて爆睡してるんだぞ？ ……美森からも注意しといてくれよ」

「え、ええ……分かりました」

美森——郡美森は昔から何も変わらない親友の顔を思い浮かべ、呆れたように微笑む。みんなが変わっていく時間でも園子だけは不変だ。その事を喜ぶべきか、子供っぽいと叱るべきか。

立場的には目上の相手でも『叱る』という選択肢が出るのは、やはり園子が友人達との関係を崩すまいとしているからだ。

「時間は大丈夫？」

「全然余裕だよ。……美森と話したいから、早く起きてるんだ。解つてるのに言わせんなよ……」

「ふふつ、ごめんね？ ……言葉にして欲しいっていうのも、秋の空な女心なの。女の子は複雑なんだから」

「女の子……お前二十七になっ——」

「唯斗君？ 女の人は幾つになつても女の子なんだよ？ ね、ほら。復唱して。女の人は幾つになつても？」

「あつ、はい。女の子っす……」

デリカシーに欠けるのも相変わらずだ、と美森は眉を僅かに歪める。無論、互いに遠慮のない関係というのは尊い。然し友人感覚で弄られるのは、妻として納得がいかない。

決して、あとたった三年で立派な三十路である事実から目を逸らした訳では無い。断じて違う。美森は他でもない自分自身にそう言い聞かせた。

「——美森。俺、美森に話しておかなくちやいけないことがあるんだ……」

突如。唯斗は布団を畳んだ後に座布団を部屋横から引っぱり、その

上に正座をする。こうして畏んだ雰囲気は久しく見ていない。
物珍しさに美森は首を傾げ、然しつられて正座で向かい合う。

「え、急にどうしたの?もしかしてイカの姿フライ足りてない…?」

「いや、違う。俺は——アタシは唯斗じゃないのよ!!」

唯斗は自らの頬を強く抓り——そのまま某怪盗のごとく顔皮を剥ぎ取る。暗茶髪は穏やかな黄土色に変わり、黒い瞳は芽吹色に。

高かった身長もいつの間にか縮み、美森よりも辛うじて数センチ程度高いくらいだ。

「は…?えっ、はああああ?!風先輩?!何で風先輩!」

「ゴメン…もう、ずっと前からなの。でも、アタシはもう…:自分には嘘なんてつきたくない!!」

「意味分かりませんよ!?!ほ、本物の唯斗君は…」

「夏凜と結婚したわ!」

「はああ!?!う、嘘ですよね…!?!…え、じゃあ…えっど?…:そ、そうです!体型とかはどうしてたんですか!!その…:む、胸とか!」

「剥いだわよ。二房もあつて邪魔だったもの」

「はいだ!?!はっ…?そ、そんなセロハンテープみたいに…!?!し、身長は!?!」

「背伸びと遠近法。外では厚底ブーツとか、常に踵を浮かせたりとか」
「む、無理がありますよ…!?!」

それで常に20センチ近くを騙し続けるのには流石に無理がある。
然し堂々と言い放つ風の瞳には嘘の色が見えない。

結局、美森は風を『自分を郡唯斗と思い込んだ悲しい先輩』と認識することにした。そうでないと色々と辻褃が合わないのだから。

「あつ、因みにアタシは友奈と結婚したわ!!」

「なっ…:はあ!?!やめて下さい解釈違いです!!私の友奈ちゃんを穢さないで!!」

「穢しとらんわ!てか誰が汚れよ!!痛っ!?!ちよっ、胸ぐら掴むな…!?!うげええ!?!く、首が絞まってる…:!!」

片腕で風の胸ぐらを掴み、着物ごと宙に浮かせる美森。掛け襟が丁度首に引っかかり首吊り状態になった。

「く、首が…ッ！へ、ヘルプミー樹いい!!」

「…は？風先輩、いきなり何を——」

「姉上よ、我を呼ぶは汝か？」

「……………は？」

唐突に現れた巨腕は美森の繊い腕をミシリと鈍く鳴る程万力の握力で鷲掴む。半狂乱状態の美森は巨腕の元を視線で探ると、そこには

「かかつ、懐かしき顔よのお。東郷殿…今宵、どうやら我が拳を貴様を穿つ必要があるらしいな。覇を極めし極拳、汝の全てを撃ち砕いてくれようぞ!!」

「フハハハ!!樹は銀と園子を吸収して完全体になったわ！霸王の名に恥じぬ強者になったのよ!!」

「我、全を識り他を蹴落とす者なりイ！幾度の死闘…実に有意義だったぞ!!稲妻を手刀で破き、山を拳打で打ち砕き、詩で海を干上がらせる…かかつ、幻想の如き日々よのう。もはや我に立ち塞がる仇敵は汝のみぞ！さあ、存分に戯れようぞ!!懐かしき友の幻影よ!!」

「……………えっと、樹ちゃんだけ違くない？画風とか世界観とか…」

身長約2.5M。異常発達した大胸筋と上腕二頭筋、腕橈骨筋に支えられた棍棒は心做しか血を連想させる鉄臭さがある。美森は三度見した後、世紀末の世に解き放たれそうな風貌は髪質以外が嘗ての面影が消え去っていた。

嘗ては樹だつて者は岩石の如き拳を真上に持ち上げ、遙か高みから美森を見下す。躍動する筋肉。黒光りする拳先。

まるで、お前を潰すにはこれで十分だ、と言わんばかりの構えとも言えない愚直な前動。覇を窮めし彼女には既にワイヤーなど不要なのだ。拳を振り上げ、そのまま落とすのみ。故に、彼女は覇者だ。

「——最後に、汝には伝えておこう」

「あっはい」

「唯斗先輩の唇、柔らかかったですっ♪」

「……………は？」

疑問符だけを残し、美森の脳天にたった一つの拳が振り下ろされ

る。脳が拉げ、骨が皮膚を破く裂音が神経を逆撫で、最期には樹の雄叫びが辛うじて鼓膜を揺らした――

「ぎやぎよぐりゆううううううう!!?げぼっ!ガツ…ひぎやあああああああ!!?あばばばばば!!……………あー、地球ホロバイイの…」

東郷美森はベッドから半身を起こし、曇った瞳を片手で覆った。

これが絶望だ。勇者システムの真実よりも重く、度し難く歪み、この世界の成り立ちよりも歪な夢だった。東郷は吐き気を催す。ここが自分の家だったら、彼女は間違いなくトイレに駆け込んでいただろう。

「ひえ……………」

「…………あら?唯斗君、帰ってきていたのね」

「ひいつ!す、睡眠を邪魔してしまいましたすみませんでした…………!腹切つて詫びます!!」

「ふふ…良いの。私は何も怒ってなんてないわよ?でも数ある自害から腹切を選ぶのは流石ね。武士の誉、日本男児代表と言っても過言ではないわ」

東郷は微笑んだ。ヘドロと糞を嘔吐物で煮込んだような夢は小粋な彼のジョークで吹き飛んだ。現実では風が友奈と結婚することなんてないし、唯斗が浮気して夏凜の元に駆け出す事もないし、樹が銀と園子を吸収して完全体になる事もない。

改めて自分の夢を振り返り、東郷は微笑みがピシリと鈍く音を立てるのを感じた。

「…………ところで、どうしてトーゴーサアンは俺ん家に居やがるんですか…?」

「…………フッフ。そのうちの真似かしら」

「な、なんで俺のベッドで寝てやがるんですか?」

「唯斗君が留守にしていたからかしら?もうっ、また服から知らない女の匂いがするわよ?唯斗君ったら…………ねえ?あらあら、どうしてめ

ヲそらスノ？ガツこうでモ、オソワツタでしヨウ？ヒトと話すトキハ、目を見て：テ。ネエ、ユイト君？」

「ひっ、ひいっ！やめて：そのか細い腕であていくしに乱暴する気なんでしょう!?英智同人誌みたいに！叡智同人誌みたいに!!その屈強に発達した胸で朕の尊厳を奪う気だな：：：!?oh!トーゴーさん俺の痴態をwatch：：：コロサナイデ、コロサナイデ：」

「なっ！今この場で外来語を使うだなんて：：：！フフ、やはり染めるべきね。唯斗君、身を委ねなさい」

「えっ：：：やつ、止め——」

酷く尖った視線で東郷は唯斗を黙らせ、ニユルニユルと動く指はやがて唯斗の服を——

「うわああああっ!?変態！奇人!!殺される：ツ!!：：：：：：：：：あ、夢か：？」

自分の悲鳴で目が覚めた。

気が付いたら、唯斗は薄暗い自室に居た。額から流れる脂汗は夢の内容を振り返り、過呼吸気味にさせる。

荒れる息を整え、状況の把握を急ぐ唯斗。頭の中に残っているのは、防人の皆に軽く挨拶をしてから電車に乗り自分の家まで帰ってきた所までだ。

「あれ：俺、いつ寝たんだったけ？：：ど、何処まで現実だ：？：：：落ち着け、落ち着くん。まずはイカの姿フライをキメよう」

——頭を抱えるも、ベッド下から出したイカの姿フライは全てを忘れさせてくれた。

古来よりイカの姿フライは万病や悩みにも有効なのだということ

は今更言うまでもなく周知の事実なのだが、また此処に一人、イカの姿フライに救われた少年がいた。

我々はその事を忘れてはいけない。

ガリガリと口内で鳴る幸せな音は唯斗の些細な悩みを銀河の果てに投げ捨ててくれた。

そう——枕の横に落ちている濡羽色の長髪の事なんて、世界平和の象徴たるイカの姿フライに比べたら些細なことだったのだ。

刻印

「——えっ…風先輩が事故に遭った…？？」

勇者アプリのグループチャットで樹からそう伝えられたのは、12月21日の夜だった。

文面でも伝わる、樹の酷く取り乱した様子。唯斗はただ一言『直ぐ行く』とだけ送り、隣で先程まで小説を読んでいた園子に目を向ける。

「…：園子」

「分かってる。今、車呼ぶよ」

「いや、変身した方が速い。大目に見ろよな」

「…うん」

共に多くは語らなかつた。

吐き気のような混乱を抑え、淡々と外出の準備を進める。簡素なコートを着て、端末と財布だけをポケットに押し込む。

最低限の準備で十分だ。今は一刻も早く駆け付けないといけない。風だけでなく樹も心配だ。

部屋の電気を消し、二階の窓から煌めく花卉を振り撒きながら病院に向かつて一直線に飛び出した。

病院に到着して直ぐ、同じく『勇者』に変身した三好夏凜や三ノ輪銀と合流し、樹の元に駆け出す。

ベンチに座り、膝の上で震える手を握る樹の姿は手術室の前に在った。親愛する姉を喪う恐怖は、彼女が両親を喪ったトラウマを掘り起こしてしまっただろう。

「いっつん…」

「っ！…園子さん。銀先輩、唯斗先輩に夏凜さんも…」

「大丈夫…じゃないよな。何があっただんだ？」

「お姉ちゃんが、トラックに轢かれたんです…信号無視した車が…」

銀の疑問に樹は嗚咽混じりで答える。そして、その言葉に夏凜と唯斗は微かな違和感を覚えた。

「せ、精霊は何をやったのよ…!!」

「…っ！精霊が…機能しなかったのか？」

人が車に轢かれる、という事故は珍しくはない。有り触れていると言いが、よく聞く事例というのは間違いないだろう。

然し勇者に限ってはそんな事は有り得ない。

精霊のバリアは常にシステムの使用者を守る仕様だ。それが戦闘中でなくとも、端末を所持している時に限っては、精霊はあらゆる危険から使用者を守ると実際に東郷美森が身を持って証明した。

故に——有り得ないのだ。単なる交通事故で大怪我を負うことなど。

(チツ…キナ臭いな)

勇者システムの精霊機能が使用者を護る仕様なのは、崩しようのない前提だ。システムを弄れるのは大赦の極一部のみであり、今更仕様の変更をしたというのも考えづらい。

それこそ、他の神が干渉しない限りは——

(……っ！…崇りか…?)

度外視——否、考えないようにしていた可能性が当たっていた。唯斗が刻印を皆に相談しないようにしていた理由。そして、もう一人——同じく刻印を刻まれている可能性のある彼女。

腹の中で煮えくり返るのは誰に対する苛立ちなのか。無力だった自分か、将又考え足らずの友人か——否、天の神だ。

超越的な存在が人類に対して何か思うことがあるのだろうか、唯斗には関係ない。ただ延々と腹の立つ宿敵でしかない。善と悪も、既に関係の無いところまで来てしまったのだ。

「友奈ちゃん、多分こっちよ！」

「はあ、はあ！み、みんな…風先輩は!?!」

「友奈さん、東郷先輩…!」

「風先輩の様子は？」

「わ、解りません…まだ手術中なので」

息を切らす声が二つ、病院の廊下に響く。焦燥した声は今の自分達

と全く同じだ。敬愛する先輩の危機に、ただ駆け出して来たのだから。

友奈と東郷は壁に書かれた『緊急外来』の文字を見て息を飲む。事の重要性を物語っている様で、膝が震えた。状況が分からない故に、最悪を想像してしまうのだ。

勇者部の皆が揃ってからも、誰も言葉を発しなかった。ただ両手を組んで、万が一が起こらないようにと願うのみ。

詰まる息の吐き出し所を失ったまま、淡々と時間だけが過ぎていく。

——皆が揃ってから一時間以上が過ぎた。

「あつ…」

ガラガラ、と硬い床の上を車輪が回る音がした。その方向に振り向くと、ストレッチャーに寝かされた風が看護師に押されていた。

「お姉ちゃん！」

「あ、あはは…痛っ。参った参ったー」

努めて元気に振る舞う風の姿は、やはりギプスや包帯も相まって痛々しい。痛みを滲ませる声も単なる虚勢に過ぎないのだろう。

不安そうに寄ってくる後輩達に笑いかけながら、風は言葉を続けた。

「いきなり飛び出して来るんだもんなー、信号無視すんなっつーの」

「でも、でも…」

「あー、泣かないの。樹は泣き虫なんだから。…みんなもゴメンね？わざわざ来てもらっちゃって」

「ま、まったく…人騒がせな犬部長ね」

「少しは労りなさいよ！あと誰な犬部長よ!!」

「病院で叫ぶなよ…割と元気そうツスね。じゃあ間違えて持ってきた高級うどんも要らな——」

「あつ、それは樹に渡しといて。後でアタシが食べるから」

「すみません、冗談だったんですけど…えっ、そんな絶望したような顔

する？あー、分かりましたから。後でちゃんと持つてきますから」
「そもそも病院にうどん持ってくるなよ…普通、フルーツとかだろ」
虚勢でも何でも、張れるだけの気力はある事に安心する。特に樹は、また肉親を喪う事に比べたら、重症だろうと命に別状が無いだけでも安心するに事足りた。

その後、入院の手続きで看護師に連れられた樹以外はその場で解散することとなった。

落ち込んでいた雰囲気も風の元気な様子で回復したようで、いつも通りの明るい勇者部に戻っていた。彼女のみを除いて。

表情の曇る彼女。その感情を、唯斗は深く知っている。自分を責めて、どうしようもない現状を嘆いている時の顔——罪悪感だ。

故に、唯斗が確認するべき事は決まっている。

「友奈、ちよつとツラ貸せよ」

「っ……………」

ビクリと震える体は殆どを物語っていた。

暗い病院裏で、唯斗と酷く脅えた様子の友奈が向かい合う。

「——単刀直入に聞く。蝕まれてるか？」

「っ!?……………やっぱり、唯斗くんも……」

刹那、互いの胸元が赤黒く発光する。感染源にしか見えない其れは、まるで共鳴でもするかのように存在を証明した。

唯斗と同様に、友奈もその可能性について考えてはいた。然し確認しようと思いついたのはここ数日以内であり、丁度唯斗が防人の御役目で不在な内だった。

不幸にも、最初に相談したのは風であり、その結果が今回の交通事故だったのだろう。

「…風先輩に話したんだな」

「ち、違う……！話そうとしたけど……途中で止めた！凄く嫌な予感感じて……全部話したら、取り返しのつかない事になる気がして……」

「……………話したら呪いが伝染る……感染か。感染源の意思に乗じる仕様が……？天の神も面倒臭せえマネしやがって……！」

「わたしのせいだ……私が先輩を巻き込んだんだ……っ！全部、全部！私が……！」

友奈の懺悔に、唯斗は言葉を返せない。決して彼女のせいではないが、然し間接的な原因は彼女の行動によるものだ。

その事実を容易く解決することなど、唯斗には出来なかった。

——勇者部五箇条『悩んだら相談』

そも、彼女が風に相談しようとしたのは勇者部五箇条に従った故に、なのだろう。その結果が仲間にも重症を負わせたのだ。

彼女の芯として成り立っていた『勇者』が音を立てて崩れてしまう。そうなるには、もう十分だった。

だからこそ、唯斗は結城友奈を巻き込むことにした。泣きそうで、挫けそうな少女に無理強いをすることにしたのだ。

「……友奈。ハッピーエンドは好きか？」

「……うん。みんな幸せで、笑っていて……私なんか居なくても、勇者部のみんなが笑顔でいてくれるハッピーエンドがあつたら、良いなあっと思う……」

「ならさ、そのハッピーエンドのために人助けをしてくれよ。一人だと大義を成せなくて、決して勇者足り得ない俺を助けてくれよ」

「っ……それって……」

「最高のハッピーエンドってなんだ？——嗚呼、クソ簡単だ。俺達のウザったい刻印が消えて、バーテックスも消えて、外の火海も消える事だ。即ち、天の神を鎮める事だ！想像しろよ、最っ高に笑っちゃうだろ？」

誰も悲しませたくない。みんな幸せになって欲しい。そう願う傲慢な少女は願いを叶える方法を提示されてしまった。

これからの日々は辛く耐え難い苦痛になる筈だった。死ぬまで刻印を隠し、痛みに耐えながら笑顔で偽る。そんな苦にかなり得ない『日常』を過ごす筈だった。

それなのに、どうして彼は『希望』を眼前にぶら下げるのか。そんな事をしたら、もつと欲張りになってしまうのに。

胸が異常に高鳴るのを感じながら、友奈は恐る恐る手を伸ばす。

「本当に…そんな、ことが…？」

「なあ、『勇者』に憧れる少女。一緒に世界を救わないか？勇者が一緒に戦ってくれるなら、俺は何でも成せるぜ？」

「——うん！私…唯斗くんとなら、成せる！辛くても、泣きたくても！戦えるよ!!」

己の愚かさを嘆き、涙を流すのはこれで最後だ。

これからは世界平和と大義を謳うだけの憂さ晴らしでしかない。傲慢な少女と我儘な少年は理不尽に抗い、ハッピーエンドを愚直に目指す。

鍵はまた一つ、揃った。

——それは『前』の世界。
無垢な願いで生まれた世界。

「ん……ん？…あれ、なんで俺…ここで寝てるんだ…？」

目を開ければほんのりと紅に染まりかけている蒼い空。遠くは紅と蒼が混ざり紫になっている。

唯斗はコンクリートの硬い地面を背中で感じた。長時間寝ていたわけではないだろう。軽く節々の痛い身体をほぐしながら起き上がり、周りを見渡せば——

「……讚州中の屋上…？」

小さな祠だけの、他には特筆すべき点のない屋上。慣れ親しんだ場所とは言い難いが、バーテックスとの戦いが終わった後は決まって神樹から飛ばされる場所だ。

今もそうだ。この光景、この既視感。まるで樹海化が解けた後に酷似している。

「…今何時だ？…十六時…放課後か。…つかスマホ圏外だし。バグってんのか？」

既存の端末と、防人システムの入った端末。その両方が圏外表記になつており、大凡の機能は使えない。辛うじて戦闘システムは起動できてるが、この場で使う意味もない。

結局、屋上に居続けても何も分からない。

唯斗は屋上のドアを開けて階段を降り、取り敢えずは勇者部の部室に向かうことにした。

「……ん？」

慣れ親しんだ校舎は、いつもと何も変わらず——然し何かが違う。

何も違わないのに、心の底では甚大な違和感が胸を燻る。

たったそれだけの、確証すらない感覚に過ぎない。だがどうしてだろうか、不安の種は着実に大きく成長している。

それもきつと、気の所為だ。

唯斗はそう自分に言い聞かせ、速歩で部室に向かった。

「ういーす、誰か居るー?」

いつも通り、勇者部の部室に入る。何時ものこの時間のなら、部員の半数は外で活動していることが多い。だが部室に鍵が掛かっている、という事は誰かしらは部室のいるのだろう。

誰かいたら、事情を話し軽く相談すれば良い。唯斗はその程度の考えで、事を樂觀視していた。

「えっ…?あ、あの…っ」

「ありや、樹だけか。ストーゴーとか友奈は外?」

「えっと、その…」

「そう言えば他の面子も居ないな。樹だけ残して外つてのも珍しい」

「あの!」

「…ん、どした?」

「だ、誰ですか…?」

「……は?」

無慈悲に放たれた言葉は、たった一言で唯斗の理解範囲を容易く越えた。冗談や悪意に敏い唯斗には解ってしまった——犬吠埼樹は本気で、本心で、心の底から目の前の人物が判らないのだと。

重なるのは一年近く前、彼女との初対面の時だ。寧ろあの時よりも酷い怪訝な態度は初めて唯斗に『忘れられる悲しみ』という心に穴のあく感覚を植え付けた。

「お、おい…何言ってるんだ…?俺だよ、俺。郡唯斗だつて。冗談キツイぞ…?」

「っ!?っ、おり…ユイト……ッ!?ひっ…!な、何でここに…!!」

「……?本当にどうし——っ!?大蛇!!」

郡唯斗の名を聞いた瞬間、あからさまに怯える樹の様子。この異常

防人の護盾と精霊のバリアの掛け合いは超硬度を誇り、たとえ『分身』で増やし耐久性を大きく下げたとしても数回程度の攻撃では消えてしまうほどのダメージに至らない。

護りのみに特化した故に、通常の『勇者』には決して破れない防御となる。

「——これなら！ 躲せないでしょ!!」

「効かねえよ!!」

園子が槍を横に振るうと、瞬く間に光で構成された薄紫の槍が何十本と顕現する。視覚の及ばない死角まで埋め尽くされた槍の雨はやがて唯斗を包み込み、槍の本体の石突きが床に叩くと同時に弾丸速で放たれた。

対して、唯斗の複数展開する盾型のバリアはパズルのように組み重なり、半球型のバリアとなる。

「部室を壊すなよ、雌豚め」

「煩い煩い煩い！ 早く斃れて!!」

地面を除く全方向から飛来する槍型の光は次々と半球型のバリアにぶつかり、然し罅割れて粒子を散らし空気に溶ける。

『分身』と同じで、本体程の強度はないのだろう。寧ろ辛うじて一撃は耐えうる強度だけに汎用性もある。唯斗が複数の能力を”束ねて”成すことを武器一つで完結出来るのだから、園子の能力は底が見えない。

だが、loniの戦いならば唯斗の方が圧倒的に有利だ。

「——後ろから失礼」

「っ!? な、何で後ろに…ッ!!」

園子は彼の展開するバリアに目を向けるが、二度見ても彼はバリア内に居る。幻覚等ではなく、確かにそこに存在していると本能で認識している。

『分身』だ。

唯斗が複数の盾を展開した瞬間、同時に分身体も生み出し部室の外に潜ませていた。後は敢えて全ての攻撃を防御して視線を誘導し、後

ろに回り込ませたのだ。

無論、園子の後ろに居た樹にはバレていただろう。然し樹の叫び声は園子の槍が立てた轟音に掻き消され、樹が変身して応戦するよりも速く分身体は園子の後方に回り込んだ。

「擬似　：　死神ワイヤー！拘束するぞ!!」

「っ?!い、いっつんの武器を…ツ!!」

樹ほど使いこなせばしないが、相手を簀巻きにする程度なら唯斗だって出来る。無論、再現するのみで”束ねる”には発想力が足りないのも事実だが。

完全に不意をついた拘束には園子として反応出来なかった。

ともあれ、これで多少は落ち着いて話せるのも事実。園子と違って樹は変身して攻撃をする様子もない。

安心とは程遠くとも、掛け合いの盾は精霊バリアの自動防御の機能も受け継いでいる。展開さえしておけば方が一には至らないだろう。

「はあ…いきなり何のつもりだ？冗談にしても戯れがすぎるだろうが」

「…戯れ？私は本気だよ、偽物。本気で貴方を殺したい…もう、その姿で仲間を傷付けて欲しくなんかない!!」

「…なるほど、全くわからん。偽物？仲間を傷付ける？…俺は俺だ。偽物もクソもあるかよ。お前達とバーテックスをぶつ潰してきた仲間だろ」

唯斗とて、現状が通常とは言えない異常事態に等しいのは肌で察している。然し目の前の園子や樹は紛うことなき本物だ。

故にこそ、更に混乱してしまう。樹からの怯えも、園子からの敵意も。覚えの無い感情の嵐は思考を狭める。次の瞬間には二人が悪戯に笑って、『驚いた?』と冷やかす——何て事も勿論ない。

視線だけでも殺す勢いの園子。樹はそつと前に出て、園子を落ち着かせるように語り出す。

「…園子さん…この人は…このユイトさんは違う気がします。禍々しい気というか…殺意が最初から感じられないんです」

「…でも、それすら演技かもしれないよ。わたし達を騙して、勇者部に

取り入るための」

「この人があのユイトさんなら、そんな小細工なんて不必要な筈です！その気になれば、最初の時点で私を殺す事だって出来たんです……！」

「そ、それは……」

やはり、唯斗には二人の対話の意味が理解出来ない。『あの』や『この』と頭に付けられての呼称。まるで自分の知らない自分がこの世界に存在するような言い方に、悪寒にも等しい予感が働いているのだ。

園子は泣きそうな瞳で此方をじつと見詰め、震える声質で問い掛ける。

「本当に……貴方はゆーちゃんなの？……わたしは信じてても良いの……？」

「寧ろ状況把握出来てないんですけど？誰か説明プリーズ……」

——現状、唯斗はこう答える他なかった。

彼が死んで、敵になったのは二年前だった。

まだ園子達が小学生だった頃。彼女達の運命における大きな分岐点となった日。未だに先代勇者組の心にトラウマを植え付けた裏切り。

彼のカタチをした偽物は鷲尾須美を嘲り、乃木園子を壊し——三ノ輪銀を殺した。

「——あの時、確かにゆーちゃんは死んだ。サジタリウスに胸を貫かれて、スコーピオンの猛毒に犯された。あの無惨な姿は……今でも瞼の裏に焼き付いてるよ」

変身を解いた制服姿の園子はポツリポツリと語る。苦虫を噛み潰したように眉を歪め、血が滲むほど拳を握り締めた。

「そして、地に倒れるゆーちゃんを……黒いナニカが飲み込んだ。飲み込んで、ゆーちゃんを奪った。勇者の服は漆黒に染まって、傷口は黒いヘドロで埋められて……『郡唯斗』の姿をした化け物はわたしと、わっしーの前から去った。……それが私達——勇者の敵、『ユイト』だよ。あの時から今に至るまで、ずっとわたしが戦い続けてきた怨敵」

「…………うん、それ俺じゃないね」

「解ってるよ。ゆーちゃんは、多分私達の知る『郡唯斗』とは異なるゆーちゃんなんだよね。…ううん、別の歴史を築いてきた別のゆーちゃんって言った方がいいのかな」

「えつと、園子さん。どういうことですか…?」

「簡単だよ、いっつん。このゆーちゃんは多分、別次元の郡唯斗くんなんだよ。ifルート、別選択肢の向こう、異なる未来。言い方は何でも良いんだけどね」

「えええええつ!?!」

「あれれ、本人も驚いてる?」

樹は兎も角として、唯斗の反応に園子は首を傾げる。

「何回も言ってるけど、俺が一番状況分かってないからな。…園子の言葉をそのまま鵜呑みするなら、ここって別世界なんだろう? ってことはさ、園子達の中での『郡唯斗』の印象も今の俺と大分違うのか?」

とどのつまり、昔の郡唯斗と今の郡唯斗の性格が異なる点についてだ。園子はあまり突っ込まずに話を続けているが、現状で彼女の中には唯斗の小学生Ver、異世界Ver、偽物Verの三種類が存在することになる。

彼女が偽物とする唯斗の実態は解らないが、少なくとも今と昔を比べたら、その違いは語るまでもないだろう。

「うーん、確かに…少し多弁になった?あと女装してないね」

「…………んー、どなんやろなあ。俺も俺で記憶喪失だし…………後半は知らん。俺も知らん。記憶喪失だから知らん!!」

「き、記憶喪失ですか…?…………園子さんの話から推測するに、先代勇者だった『ユイト』さんが亡くなった日が運命の分岐点だったって事ですよね?…………あと、女装姿の写真があれば後で見せてください!」

「おい樹ちゃん?」

「…そうだね。私達の世界の『郡唯斗』はあの時に死んで、天の神に取り込まれた。でも目の前の『郡唯斗』は記憶は喪ったけど辛うじて生存した。…………もしかして、そっちの世界ではミノさんも生きているのかな?」

「……元気だよ、アイツは」

「そっかあ……じゃあ、余計にわたしの無力さが際立つちゃうね。そっちの世界のわたしに嫉妬しちゃうなあ……同じわたしの筈なのに」
「たった一つだけ、何かが違っただけの話だ。それ以外は全く同じ筈なのに、酷く劣等感が押し寄せるのは何故なのか。」

「どんなに頑張っても、どんなに努力しても。取り返しのつかない事態になった後で”最良の未来”なんて見せ付けられたら、どんな聖人君子でも嫉妬してしまう。」

「ハッ、馬鹿言うなよ。俺と銀が頑張ったから、二人とも生きてる。それだけの話だろ」

「それでも、こっちのゆうちゃんやんがゆうちゃんじゃなくなったのは私のせいだし、ミノさんが……殺されたのも、わたしのせい。これはリーダーだったわたしの責任。背負うべき業。……最期まで背負ったまま、わたしは成すべきことを成すよ」

——お願いだから、責任まで取らないで。

唯斗には彼女が『郡唯斗』にそう懇願しているように見えた。同じ顔の別人に想いを馳せて、今は亡き友に祈りを捧げて。

『乃木園子』は唯斗の知る彼女よりも余っ程、弱くて儂かった。限界まで削られた硝子のように、小さな切っ掛けで手折れてしまうのだろう。

励ます言葉が見つからない。友奈や銀ならば本心から励ませるし、東郷や風ならば抱擁するだろう。

唯斗には其れが出来ないから、齒痒い。

——然し、そんな後悔も世界は許さない。

「！！！！！！」

静かだった校舎に樹海化警報のアラームが鳴り響く。久しく聞いていなかった、勇者を心の底から不安にさせるアラーム音。

世界は光の波と煌めく花卉に飲み込まれ、極彩色の世界が紡がれる

◆◆◆オマケ◆◆◆

『護盾×精霊バリア×分身』

・完全に防御特化の体勢。防人の護盾と精霊バリアの掛け合いは殆ど突破不可の硬度を誇り、一定ダメージで消える『分身』を掛け合いにしても勇者の攻撃程度なら数回は防げる。

精霊バリアの自動防御の機能も備わっており、不意打ちには滅法強い。防御のみという点に関しては”束ねる者”の完成系とも言える。

尚、飽くまでもオート操縦で防御特化なので『護盾×反射×分身』の時のように足場として使う事は不可能。視界を容赦なく遮ることもあるので、そもそも戦闘自体が困難になってしまう。

『擬似 : 死神ワイヤー』

・樹の武器のコピー。彼女ほど自由自在に操り他の武器を紡ぐ事は唯斗の技量では不可能。飽くまでも単純な拘束か、”束ねる者”の掛け合いの一部。飯は飯屋に、死神ワイヤーは死神樹さんに。

1000話記念『別次元（前世界）』く中編く

——樹海化。

四国を覆う結界に敢えて小さく開けられた穴、其処からバーテックスが侵入した際に発動する領域だ。

極彩色の巨大な根が地面を支配し、理解の届かない神聖さと不気味さが相まった戦場地。

『勇者』と神敵だけが在れる世界。

唯斗がそこに召喚されるのも、もう何度目か。初戦は乙女座——否、もう戻らない記憶の中では水瓶座のバーテックスだった。

雪白の語る『異世界』での戦闘も含めたら、もう両手両足の指を折つても尚数え切れない。

それだけ親しみがああり、然れども決して慣れることのない戦場なのだ。

「……来るよ」

「は、はい！変身…っ!!」

園子の言葉に反応し、樹は『勇者システム』を起動する。

——携帯端末の画面に映るのは三つの赤い敵反応と、黒い点だ。前者は御魂を持つバーテックスなのだろうが、問題は後者だ。

黒い点のすぐ横には『ユイト』と表示されている。即ち、この世界における郡唯斗だった者が敵として襲来したのだ。神敵と認識され、勇者が倒す対象として表示されていると嫌でも理解してしまう。

「……はあ、やるしかないか」

「…？ゆーちゃん、その端末って…」

「防人システムだよ。多分、この世界にも存在すると思うけど…量産型勇者的な？量産型だから性能も低いけどね。俺の賢者システムと同時に起動出来るから重宝しとりますよ」

「防人に賢者…ユイトさんってよく解らない存在ですね。そもそも、男の子なのに勇者の適性もありましたし…」

「ゆーちゃんだからね」

「お前らには言われたくないわ……園子は兎も角、樹はこっちの世界では勇者最強の覇者道歩んでるし。バーテックス最k i l l 王は樹なんじゃね?」

「そっちの世界の私に何があつたんですか!？」

突然変異、とだけ唯斗は答えた。そも樹がどうして最強に至ったのか、唯斗どころか姉の風にも解らない。気が付いたらそうなっていた、恐らくは満開を体験した後から狂い始めた。姉は震える声でそう語っていたらしい。

唯斗は二つの端末を起動させる。

無骨な白銀のガントレットに、150cmの巨大なピコピコハンマー。園子や樹とは若干デザイン異なる勇者服の上には戦衣の軽鎧部分が展開される。

二つのシステムは唯斗の弱点であつた身体性能の低さをカバーして、他の勇者と同等の動きを可能とさせる。

「むう……ゆーちゃん。わたしと戦った時、少し手を抜いてたでしょう?」

「はあ?誰が手なんか抜くかよ。個人的には単システムの方が慣れてたんだっつーの」

「…普通は端末を使い分けたりなんかしませんし、よく分からない感覚ですね…」

「欠陥だらけのピーキー端末を使つてれば良く解るぜ?試しに攻撃力に極振りしたノロマ紙耐久遊び人仕様な心底使いづらいシステムを使つてみるか?武器はピコハンね」

「あつ、大丈夫です…」

「びえん」

「何百年前の言葉ですか?」

——話が逸れた
閑話休題。

迫り来るバーテックスを遠目に眺めて溜息をこぼし、後ろから近づく四つの気配に嫌な緊張感を覚える。

考えるまでもなく、友奈に東郷、風に夏凜だろう。端末のマップに

そう表示されている。友奈や風は兎も角としても東郷と夏凜は確実に面倒臭い事になる。唯斗は本能的に察していた。

園子に助けの視線を送るが無視させる。きつと、この世界の『郡唯斗』に意識を向けているのだろう。酷く冷めた視線はやはり此方の世界の園子とは全く異なる。

やがて、四人の『勇者』は唯斗の前に現れた。

「園ちゃん！樹ちゃん!!……と、誰かいる!？」

「っ!?!…あ、あなたは……ッ」

友奈や東郷は唯斗に目を向け、驚嘆に声を上げる。其れもその筈で、そもそも樹海の中に『勇者』以外の者が巻き込まれることはない。故に、目の前に居る人物が『勇者』であると認識はするが、然し当然だがそんな情報は誰の耳に届いていない現状。

他の勇者も同様の反応だが、東郷美森だけはあからさまに言葉を失っている。然し園子のように襲いかかつては来ない。

彼女が園子程の変化を遂げていないということか、若しくは違う方面で擦れてしまった末路か。

「はあ!?!あ、新しい勇者なんて大赦から聞いてないわよ!……風は何か聞いている?！」

「聞いとらんわ。なんと言うか…随分とボーイッシュな新人ね。っていかモノホンの男じゃない!？」

「あー、クソ騒々しい。真・完成型勇者の俺様ちゃんに不敬だぞーヌ」
「何のキャラですか…」

「なっ……真・完成型勇者ですって…ッ!？」

「か、夏凜さん！ユイトさんの冗談を真に受けしないで下さいよ！えっと、つまり…かくかくしかじかです!!」

「樹サアン何言ってるの?そんなんで伝わる訳が…」

「ふむふむ、こっちは敵のユイトくんじゃなくて、危なくない勇者のユイトくん…?…何でユイトくんが二人?」

「…つまり、別次元のユイトが真・完成型勇者…ッ!!」

「夏凜さんはまず完成型執念から解放されてくださいよ!？」

「……………」

唯斗は理解を放棄した。きつと、純粹な『勇者』には“かくかくしかじか”なる意味不明言語を理解する能力があるのだ。スピリチュアル的な神様関連のナニカなのだろう。

必要なのは理解なのではない。考えるな、感じる。そんな某名言が頭の中をスキップで通り過ぎた。

「唯斗君…？本当に…唯斗君なの？」

「ストーリー？そのくだり、園子ともやったんですけど…」

「…前みたいに、スーとは呼んでくれないのね…」

「なるほど、コイツ話聞かないタイプだな。まるで東郷だ。つまり東郷だ。故に東郷なんだね」

「東郷さんは東郷さんってことだね！」

「うんつ、友奈ちゃんと言うなら私は東郷よ！」

「友奈が言わなくてもアンタは東郷でしょうが!!」

変わらず、三好夏凜は猛々しい世話焼きツツコミ勇者だ。この世界で園子が大きく変わっている故に、芯の変わらない彼女達が尊く感じてしまう。

「…みんな、そろそろ来るよ」

——園子の声が冷たく響いた。

三体のバーテックスは既に目指可能な地点まで攻め入っている。『ユイト』の姿は見えないが、勇者アプリのリーダーにはバーテックスの近い位置に在る。

「部長さんや、ちよつと『ユイト』^俺の顔でも拝んできて良いっすか？」

「…ヤンチャなヤツね。樹の言葉は信じたいけど、アタシはまだアンタを完全には信用出来ないわ。アタシ個人としても、リーダーとしても」

「ツスよねー。だからこそ、俺が『ユイト』^俺の相手をするんすよ。…身から出た錆は自分で削り落とす。単なる我儘ですけどね」

そも、同じ『勇者部』だとしても唯斗と彼女達は初対面だ。そんな

彼女達と実戦で連携など到底無理だ。ならば単行動が好ましく、その点も含めて唯斗は『ユイト』を相手取る方が理に叶っている。

無論、『勇者』たる彼女達が他人を危険に放り込んで見て見ぬふりなど出来るわけもないが。

「フーミン先輩、私もゆーちゃん唯斗君に付いてきます」

「乃木に東郷!？」

「風先輩、信用出来ない彼を遊ばせておくのは危険です。ならば、私とそのつちで見張り：もし敵だと判明した場合は相応の対処をします」
「少なくとも、このゆーちゃんはわたしよりも強いんですよ。それこそ、『ユイト』にも対抗しえる程です」

明確にどちらが強いとは言えないが、手札の数では唯斗が圧倒的だ。短期戦では園子が勝り、長期戦になるほど際限なく唯斗が有利になる。そして長期戦に持ち込む策を唯斗は幾つも持っている。

「…へえ…乃木よりも強いってねえ。なるほど、化け物ね」

「おいコラ、誰が知性溢れる好少年な常識人だ。なんちゃって女子力の饅飴ゴリラ先輩よオ」

「誰が超絶美人なチャーミング且つ妖艶なお姉様よ。もっと崇めなさいな」

「…ねえ、友奈。なんでアイツらの会話が成立してんの？耳と頭がバグってるのに」

「うーん、仲良し?」

「とーにかーくー!許可なくても『ユイト』は俺がぶっ飛ばす。んじゃあ、いつてきまーす!!」

「あつ、ちよつ!あー、もう!乃木に東郷!あのアホっぽい方のユイトに付きなさい!!樹と友奈はアタシと一緒にバーテックスお客さんのお出迎えよ!!」

猛々しい命令口調を背中で聞きながら、唯斗はピコピコハンマーを片手に駆け出した。

『……………』

「よオ、『ユイト』さん」

『……………だれ…?』

澱んだ黒の瞳と、同じく黒く長い頭髮。病的なまでに白い肌と相まって、其れは白と黒以外の色を失った存在に見える。

唯斗よりも余っ程低い身長は彼の時間が止まっていると認識させられる。在りし日の自分の姿は、面影を残しつつも女の子にしか見えない。敢えて言うなら、土居結女装姿の幼少期だ。

これなら確かに、例え女装していたとしても亜耶やしづくに正体がバレる。寧ろ解り易くもある。

「どーもこんにちは。別世界の郡唯斗さんだよ」

『……おどろ、き。…… 殺る?』

「話が早くて助かるわ——つーことで園子、東郷。死にかけるまで手え出すなよ」

「死に掛けたら良いんだ…唯斗君とは思えない言葉ね」

「馬鹿かお前、郡唯斗くんは自己保身の塊だって巷で有名だろうに。そこまで意地も張ってねえよ」

「……危なくなったら、無理にでも助けるからね」

「サンキュー、園子。生命保険は入っとくもんだな」

軽薄に手を振りながら、数歩前に出てピコピコハンマーと石を構える。

——『ユイト』の武器は禍々しい一振の短剣だ。肉質で蠢く持ち手に、黒く鋭利な刃。ナイフと言うには長いが、ありふれた直剣というには短い。

『……往く』

「ハッ、お兄さんが胸貸してやるよ。チビ助」

『ユイト』は短剣を腰で構え、鞘から抜くような動作で斜めに振り抜き——黒い斬撃は空気を切り裂き唯斗に迫る。

『——孤月』

「うおつとー……初見殺し止めろよ」

『……ちっ』

半身で避け、ガントレットから出現させた石をピコピコハンマーで撃つ。場外れな音を響かせながら放たれた石は亜音速に迫り、然し短剣で容易く迎え打たれる。

両者共に単調な遠距離攻撃は意味を成さない。

石で牽制しつつ距離を詰め、ワイヤーで拘束しに掛かるが短剣で斬られる。数回見ただけでも、『ユイト』の技量は唯斗を超える。

単純な撃ち合いならば唯斗が不利なのは目に見えていた。然し手数ならば決して負けない。

「インファイトでいこうぜ！擬似　：　連続勇者パンチ!!」

『望む、ところ…!』

白銀のガントレットは桃色の籠手に代わり、複数の斬撃波に連続を合わせて放つ。

同じ武器でも友奈ほどの火力は出ないが、それでも神気の籠る勇者の武器だ。天の神の力で構成された攻撃を弾く程度は容易い。

「まだまだ往く! 『防人の盾×分身×反射』!!」

薄緑に発行する護盾型のバリアが唯斗と『ユイト』十数メートル範囲で取り囲むように出現する。それぞれに反射が付与されたバリアは、バネ付きの足場に等しい。

『っ!?!』

両足で踏み締めたバリアは眩く発光し、唯斗を弾く。一度、二度、三度——徐々に上がるスピードは『ユイト』を翻弄する。

「いっばあああつ!!」

『……っ』

「にはああアつ!!」

『…う、ざい……!』

直撃こそしないものの、掠り、少しづつ『ユイト』を追い詰める。然し、これで片がつく様であれば園子達は苦戦しない。

『——《網》』

「っ!?!護盾……!」

素早く規則的に振るわれた短剣は何十もの斬撃波を生み出し、網目状となり広がる。黒い網は二人を取り囲むバリアごと唯斗に襲いかかる。

辛うじて護盾で防げたものの、戦況は殆ど初期に戻ったに等しい。

「……罫が明かない」

『ん……イツキに、決め……る……?』

「流石『ユイト』^俺、話が早いなあ。て言うか、話が解るんなら降参してくれてもいいんだぞ?」

『……そ、れ……無理……頭の中、で……声がする……勇者を殺、せ……つて……オレ、抗えない……ので、殺す。其れが正しいから……』

「……何だ、とつくに壊れてやがる。壊れた玩具を都合良く改造したら、そりゃあ皮は俺でも中身は別物だな」

其れは、もう壊れていた。酷く歪み、辛うじて昔の幻影^{記憶}を留めていだけの操り人形でしかない。嘗て郡唯斗だっただけの残骸は、既に事の善し悪しすら理解出来ない。

これが天の神の狙う精神的攻撃だとしたら、質が悪すぎる。背筋を冷たいナイフで擦られたような恐怖心さえ植え付けられる。

「……ここで終われよ、偽物。お前はもう『ユイト』^俺なんかじゃあない。つまんねえ木偶人形だ」

『ん……期待、してる……』

——「満開!」「枯花!」

極彩色の空に煌めくオンシジュームと黒く枯れ果てたスノードロップが映る。オンシジュームは花卉となり崩れ、唯斗を包む。枯れ果てたスノードロップは醜く解け、『ユイト』の身体に纏わり付く。

神々しい神官服と蠢く肉質の鎧が向かい合う。

「来いよ、くまマン」

『……(……)何処なの?』

「別世界の樹海。最初っから全力で往くぞ——『くまマン×ワイヤー』。メタル・くまマン」

鉄の糸はくまマンを覆い、鉄製のテイベアとなる。単純な防御力の上昇と、身体を構成するワイヤーの操作性を上げるための融合。そして其れを——

『mode wear metal bear——
supplicium^実。更に借りるわね、『分身』』

銀色に光るぬいぐるみパジャマと、新たに増えた六体のメタルテイベア。

「……わっしー、ぬいぐるみパジャマだね。とつても可愛いぬいぐるみパジャマなんよね。流石ゆーちゃんだね」

「なんと言おうべきか……うん、何も言えないかも。唯斗君の名付け癖は相変わらずだね、とだけ……」

「外野の二人、うるせえぞ!!俺だつて好きでこんなを着てる訳じゃないんだからな!」

『……羨ま、しい……』

「H A H A H A、やっぱり偽者だな!昔の俺がこんな趣味なわけがない!!」

「ん、元々だよ?」

「ええ、そうね」

「……くまマン、早く終わらせよう。別世界にまで生き恥を残したくなんてない……!」

金メッキに覆われた複数のピコピコハンマーを『ユイト』に向かって投げ飛ばし、同時に蒼白の狙撃銃で頭を狙い撃つ。然しピコピコハンマーは短剣で弾かれ、銃弾は脈動する鎧に防がれる。

「束ねようぜ——『紙飛行機×分身』。無限の爆発でも喰らえや!」

『……文字ど、おり……喰らう』

「っ!ゆーちゃん気を付けて!!私達が一人に苦戦したのはそれが原因だから!!」

「は……?」

徐ろに振るわれた短剣。先程と同じように斬撃が放たれ、然し切り裂くのは虚無の空間だ。瞬時に何千と増えた紙飛行機型爆弾と複数に増えたટેイベアを全て飲み込む。

まさにこれだ。

これこそが人数で圧倒的に優れる『勇者』がたった一人の『ユイト』に苦戦し続けた理由だ。枯花と唱えた『ユイト』は全てを切り裂く。防御は愚か、空間すら短時間であれば切り裂き全てを飲み込む”穴”を生み出す。

『……無駄』

「コイツ、化け物か……?」

『そっち、は…TOY^玩 BOX^箱……ってい!』
「チツ…!」

空中で身を振り斬撃波を躲す。当たれば即死、掠つても空間と共に飲み込まれる。更には防御が不可能だ。

元より避け専門だった唯斗だからこそ一人で対処出来るが、こと戦闘について殆ど素人な『勇者』から犠牲者が出ていないのは奇跡だ。

数の有利と『満開』の力押しでも尚、引き分けるのが関の山な現状。逆に言えば、『ユイト』が勇者達を仕留め損なっているのは十全に対策が成されている為だ——否、対策をしても引き分けるのが精一杯なのだ。

「初見殺しの死にゲーか? ワンナップキノコ寄越せやくソゲーめ!!」

『石×紙飛行機』!!」

紙飛行機のホーミング機能が付与された石は明後日の方向に投げられ、然し不自然な弧を描いて『ユイト』を穿とうと各方向から飛来する。

だが超近は『ユイト』の得意距離だ。描く様に振るわれた一太刀は時間差で襲いかかる石を全て落とし、爆発すら小規模の裂け目に飲み込まれた。

『孤月・乱舞』

「んがあ、あ、あ、あ、!!こんのバカヤロオオオ!!」

剣舞の如く踊り、不規則に流れる斬撃波。

もはや躲すのも辛うじてだ。転ぶように地を転がり、不格好に飛び跳ね側方倒立回転で躲し続ける。唯斗の変態的挙動には攻撃手の『ユイト』も小さく声を上げた。

「ユイトくん!? ちょっと提案なんだけどオオオオオ!!」

『……ん、なに…?』

「このまま続けてもおお! 埒があああ!! 明ないと思うんだけどおおお!!」

『…たし、かに……当たたら、ない…し……挙動、キモイ…』

「誰のせいだゴラァ! つーか俺はテメエだろうが!!」

交渉が許されたのか、やっと攻撃の手が止まる。手が空いた隙にイ

力の姿フライを貪っていたので疲れはないが、焦りはある。

——唯斗が『ユイト』に勝つには賭けに出るしかない。

懸念点は『ユイト』唯斗の策に乗るかだ。乗るとしても、やはり確実とは言えない。対話が可能とはいえ相手は天の神の操り人形だ。

何処まで自我があるのかも怪しいところだ。

「なあ、『ユイト』^俺。やっぱり埒が明かないだろ？互いに切り札を切つても、変わらず相性は互いに悪い。その証拠にさ、俺もお前も傷に一つついてない」

『……ん、事実』

「だからさ、もう終わらせようぜ？」

『……う？……それが、出来ない……から、困ってる……』

「だーかーらー！——一撃だ。俺とお前の最大最強の一撃をぶつけて、ケリをつけるんだよ。名案だろ？」

『っ！……うん、名案……！』

良くも悪くも『ユイト』の精神は幼い。郡唯斗が死んだ日から『ユイト』の体も精神も成長が止まっているのだろうか。

互いにチャンスであり、同時にピンチでもある。

だが、唯斗は——天の神を倒すと息巻いた少年は、駒程度で躓いてなどいられない。『賢者』^{束ねる者}は神を討つ者なのだから。

「さあ、限界まで束ねてやる！」

展開するのは強力無比な一撃。より多くを“束ね”て神を灼くイメージを固める。

——東郷の『銃』を風の大剣に備わる『巨大化』で大きくし、銃口には銀の『斧』を込める。軌道は増える園子の『槍』で紡ぎ、樹の『ワイヤー』で補強。

爆薬は『分身』で増えた方の『紙飛行機』。銃口内で『反射』を繰り返し、『鍋の蓋』のカウンターで撃破力の倍加。

「う、ギギギい……！脳が軋む、ヴうう……ッ!!」

蒼白の巨大な銃口から絶え間なく赤い火花が弾ける。気を抜けば全てが崩壊する。

「ぐうううう！賭け金追加してやる…ツツ!!金色に染まりやがれ!!」
ピコピコハンマーを覆う『金色』。その効果は対象の超強補正。蒼白の巨銃が金色に染まるにつれて脳から発せさせる痛みは増し、鼻から血が滴る感覚に吐き気を催す。
然し、これでやつとだ。全てを注ぎ込んでやつと、『ユイト』の短剣を打ち砕ける。

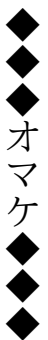
「チツ、頭痛てえ…！…ふう。待たせたな、『ユイト』」
『…これで、最後…?』

「ああ、笑っても泣いても…この一撃で終わるさ」
「ん、わかり…やすい…!」

ニヒルに笑い、頭痛を誤魔化す。きつと数分後には決着が付いているだろう。かつてない疲労感をイカの姿フライで癒しながら、チラリと後方の二人に目を向ける。

(…ホント、保険は多いに越したことはないな)

一時間にも満たない戦いの決着は近い。



今世界の勇者部

『結城友奈』

・本編と殆ど同じな元気いっぱいのアホ奈ちゃん。唯斗が居なかったので複合バーテックスの御魂を殆ど無傷で破壊した脳筋。

尚、本編では唯斗と共に右手骨折していた。割と戦犯な主人公君に感謝していた本編アホ奈。

『勇者』としての初戦からVS唯斗をしていた。

『東郷美森』

・散華した記憶が戻るまでは友奈専用ストーリーカードだった。記憶が戻ってからは目の前で銀と唯斗を失ったことを思い出して曇り、その唯斗と命懸けで戦っていた事実気付き曇った。

シリアスな分、奇行が減った。

『三好夏凜』

・なーんにも変わらない完成型勇者ちゃん。ツツコミ力も健在で煮干し力も日々成長中。ツインテールもビュンビュンしてるし空も青い。

お兄ちゃんとは相変わらず。

『犬吠埼風』

・責任感からか、唯斗狩る勢二号になってた。尚、会話で解決出来るならしたかったので、味方側唯斗を割とすぐ信じた。敵側の唯斗には真顔で斬り掛かるセンパイ。

地味に強化された女子力お化け。

『犬吠埼樹』

・本編程バグってはいない、覇者道を歩まなかった死神ちゃん。敵相手に『ひいつ…!』と言つちやう年相応の女の子。本編では真顔で殲滅しに掛かる。ある意味、一番変化のあったヤベー奴。

今次元ではバグらない……筈。

『三ノ輪銀』

・二年前に首チョンパされて亡くなった火の玉ガール。火の意志は某ツインテールに引き継がれている。

『乃木園子』

・唯斗狩る勢堂々の一号。影を捉えた瞬間、無言で殺しにかかる狂気ちゃん。もう幻想に憧れるのは止めた。二度と仲間を失わないために、もう彼に人を傷付けさせないように。

散華で体が欠けても尚、樹海に赴いて戦い続けた。地味に結城友奈達の初戦から戦場に居た。

せめて、自分の手で終わらせる。それが彼を守れなかった自分の役

割なのだから。

『ユイト』

・一度死に、天の神の傀儡となった郡唯斗。天の神に従い『勇者』の殲滅を使命としている。元の人格は残っているが、『勇者を殺す』ということを前提として植え付けられているので、昔と変わらない言動で殺意を振り撒く。

勇者部の初陣から襲来しており、『満開』の後遺症で包帯だらけだった園子と友奈を同時に相手していた。

——因果は重なる。

——束ねる因果は力となる。

——君はこの体験を忘れる。この身が紡ぎ、君達が奮闘したあの世界と同様に。

——でも、決して無かったことにはならないよ。目には見えなくても鍵の欠片は揃っている。

——ねえ、唯斗。

——また魂の輝きを魅せて？この身を打ち砕いた人類の、理解不能な底力で全てを覆してよ。

——紡げ、絆を。束ねろ、全ての自分を。

——今度こそ、成してね？我儘の末の平和を。

1000話記念（101話目）『別次元（前世界）』く後編く

「準備オーケーだぜ、チビ助」

『…ん、オレ…も……』

黄金に染まった巨銃を構える、銀色のぬいぐるみパジャマを纏う唯斗。

相対するは肉質の蠢く醜い鎧を着た幼い少年だ。居合の要領で体勢を低く、然し黒く澱む視線だけは真つ直ぐと銃口を見据える。

静寂に支配された世界で二人の少年は相手の動向を伺う。

「っ……わっしー、わたしね。気付いたことがあるの」

「そのつち……？」

「今のゆうちゃん…凄くシユールじゃない？金メッキならぬ銀メッキのぬいぐるみパジャマで黄金の巨銃を持つて……カオス？」

「…空気を読みましよう、そのつち」

唯斗は静かに泣いた。好んでこの姿でいる訳でもないし、東郷の銃をベースに合計十個を”束ねた”結果が金メッキ巨銃という傍から見たら玩具でしかないのも、仕方が無いのだ。

「こんのお！腹いせだコノヤロー!!」

『——孤月・一閃……!!』

「ドーンだYO!!」

瞬時、物干し竿のように伸びた黒刃と炎を纏う黄金の銃弾^弾がぶつか。その余波は樹海を大きく揺らし、遠くで戦闘中のバーテックスをも吹き飛ばす程。

槍を地面に突き刺して耐える園子と、彼女の腰に柄まり飛ばされまいとすする東郷。

「ぐ、ぬぬぬっ……!!」

『……………っ!!』

正真正銘、郡唯斗の全力だ。『枯花』と唱え強化された『ユイト』の

攻撃でも容易くは止まらない。そして、唯斗は凶悪に嗤う。

「——なあ……チビ助……お前はさつき、俺の事を『TOY BOX』^{玩具箱}って言いやがったよなア？」

『それ、が……？』

「残念、ハ・ズ・レ♡」

『っ!』

「Jack-in-the-box^{驚箱}だよ！ヒヤツハアアア!!死に晒せや塵芥!!」

唯斗が悪戯に笑った刹那、虚空と拮抗する黄金の斧は爆発する。

唯斗と『ユイト』を巻き込んだ大爆発。その仕組みは至極単純で、銃弾に“束ねた”能力は大剣の巨大化だけでなく紙飛行機の爆発機能もだった。

ひたすら強化され続けた爆弾は多少の衝撃でも起動せず、然し相応の衝撃を与えれば神をも灼く爆発をお見舞いする。

つまりは、金庫に仕舞ったダイナマイトを敵に投げつけたということだ。その金庫をぶち壊して爆発させたのだから、『ユイト』の恐ろしさは唯斗に苦笑いさせた。

——Boooooom!!

金色の巫山戯た爆煙が『ユイト』を包み隠した。唯斗は精霊と護盾によつて無傷だが、『ユイト』は殆ど直撃した筈だ。

ここまでの戦闘で、『ユイト』が明確なダメージを受けた様子は無かった。今戦闘のみに関わらず、『唯斗』が死に今の『ユイト』となった日からずつとだ。

『枯花』で出現した鎧は『勇者』の精霊バリアの上位互換とも言える。変幻自在に畝り曲がり、常に彼を護る盾となっていたのだ。

だが、然し——

『——クドい……ッ！ぜ、んぶ……無駄……だ……ッ!!』

爆煙を切り裂き、『ユイト』は声を荒らげる。戦闘に対して受動的だった彼が初めて見せる敵愾心だ。

もう、昔のように荒々しい言葉を用いて叫ぶのことは無い。被った能面を『勇者』には剥がせない——筈だった。

本来は有り得ない自分自身との邂逅。其れが小さな切っ掛けとなったのは確かだろう。呪いである鎧はボロボロとなり、もう先程までの禍々しさもない。

初めて、『ユイト』は明確なダメージを受けたのだ。

無防備となった唯斗に躊躇無く振り下ろされる斬撃、その様子を唯斗はもうひとつの視点から見下ろしていた。

「焦ってるなあ、操り人形さん。自我でも取り戻したか？」

『なっ…!?う、うし…ろ……っ!』

「見せてなかったか? まあ、最初からだけど——『分身』だよ。言っただろ? 俺は玩具箱じゃなくて吃驚箱なんだって」

後方からの奇襲。

有り得ない、と『ユイト』は呟く。

混乱する彼を嘲笑うようにピコピコハンマーを横薙ぎに振り払い、『ユイト』の小さな体を容易く吹き飛ばす。

辛うじて残った鎧に防がれ決定的なダメージは与えられないが、其の鎧自体が音を立てて罅割れる。

『……………でも、無駄…! 孤月・網…!!』

「ぐ…っ、ぐわあああッツ?! ……なんちゃって♪はっずれー」

『っ……クソ、ウザイ…!!』

瞬時に何十と振るわれた斬撃は網状となり唯斗の体をバラバラに切断し——空中に消える。奇襲を仕掛けた唯斗ですら『分身』だ。

これこそが雪白に鍛えられた分身操作の精度。新たな唯斗の真骨頂。

どう足掻いても唯斗の脳では一度に何体も、緻密に操ることは叶わない。ならば、一体を本体と見分けがつかなくなるくらい、敵前で暴れさせれば良い。

『分身』の欠点は耐久性の貧弱さ。ならば最初から一撃も喰らわなければ良いだけの、簡単な話だ。

「滑稽に踊ってるなあ、道化。ピエロの化粧でもしてやろうかい?」

『…オレ、お前……キライ……!』

「ぶぶ、自分になんか好かれたくはないわ。ほーら、本体はどれだ？ふつ、もしかしたら最初から本体なんていないのかもなあ？ヒヤハ！ほーれほーれ、鬼さんこちら♪」

『ぐぬぬ……っ!』

「……唯斗君が無事に生きていたとしても、ああなっちやうんだ……なんだか、敵なのに彼が可哀想だわ……」

「うーん、完全にはっちやけちやってるね。わたしは寧ろ、こっちのゆうちゃんの方が面白くて好きだなー。お友達にはなりたくないけど」

「あれれ、おつかしいなあ？味方から背中を撃たれてるぞ？」

不敵な笑みで反復横跳びをしながら『ユイト』を煽る三体の唯斗。これには味方である筈の園子と東郷も敵に憐れみを向けた。

『まとめて、切り……刻む……!孤げ——』

「はいドーン!!」

『……ッ?!?!』

全ての唯斗に向けて一閃を放つ『ユイト』。そこに向けて無慈悲に撃たれる黄金の銃弾^弾。

軋む脳。喉を焼く吐気。姿を表さなかった唯斗の本体は再度、巨銃を紡いでいた。煽ることで注意を引き付け、完成した黄金の銃で好機を窺っていたのだ。

今度は爆発こそしないものの、『ユイト』の右半身に大きく掠り巨大な根に叩き付ける。声にもならない空気を全て吐き出し、『ユイト』は苦し紛れに禍々しい短剣を振る——えなかつた。

無数の光の槍が両腕を根に縛り付け、短剣は飛来する蒼光に弾かれる。

「終わりだよ、『ゆうちゃん』。もう、眠って!!」

「私を恨んで……『唯斗君』。これでやっと、貴方を解放出来る!!」

『っ!?!お、前たち……は、彼処に……』

有り得ない現象に『ユイト』の思考が固まる。

目の前には確かに乃木園子と東郷美森。だが然し、その遙か後方にも二人がいる。園子と東郷が同時に二ヶ所へ存在しているのだ。

「——分身の応用……いや、本質だよ。ヒントは量子テレポーテーションと観測だぜ？地獄で答え合わせな、坊や!!」

「はあああああああ!!」

心臓を穿つ槍と零距离で放たれる狙撃銃^{白銀}。鎧となり『ユイト』の体を蝕むヘドロは宿主を護り——完全に砕ける。

二つの光は『ユイト』の身体に決定的な罅を刻み、極彩色の地面に落とした。唯斗も、『ユイト』も。確信した。もうこれで終われると。

『ゲボツ………これ、で……終わり……?』

「ああ、これでテメエは終わりだよ」

『……そっか。……ありがとう』

ずっと、『ユイト』は死にたかった。全てを穢され、嘲られ、骨の髄まで利用され尽くした。意思はなくとも、自我はある。

この身体は自害を許さない。嘗ての仲間を殺すことを『正しい事』なのだ。脳が勝手に認識する。抗えない。死ねない。また殺さないといけない。

だからこそ、もう死を待つだけの瓦落多はもう意志を縛られる事はない。死の刹那に、やっと『ユイト』は『郡唯斗』を取り戻したのだ。

園子と東郷は罅割れる『唯斗』の身体に触れ、手を握る。

「……『ゆーちゃん』。わたしね、貴方のことが好きだった。誰よりも怖がりで、でも逃げ出せないくらい不器用な『ゆーちゃん』に恋してたんだと思う。ずっと一緒に居たかった……別世界の私に嫉妬しちゃうくらい、『ゆーちゃん』との未来が欲しかった……でも、もう……私は一人でも立てる。やっと前に進めるんよ……だから、もう……ゆっくり休んでね……」

『園子……』

園子は復讐心へと変わった、嘗ての恋慕を曝け出した。もう別れな

のに、心は自分でも驚くくらい落ち着いている。疲弊して安堵している。

そして、園子は前に進める。あの時から止まっていた時間は動き出す。

苦い記憶を楽しかった日々でつつみ、園子は——少女は大人となる。

『唯斗君』。やっぱり、私は貴方が嫌い。大っ嫌い……でも、尊敬もしてたの。貴方は強かった……誰よりも、自分のために戦える強さがあった。他人を言い訳にする私とは対照的に、明確で崩れない『芯』があった。……ありがとう、私の好敵手。大嫌いで、少しだけ好きだった私の親友……』

『…スー』
東郷は——須美は郡唯斗が嫌いだった。沢山喧嘩して、言い合いになって、それでも決して離れなかった。

お互いを気に入らないと同時に、自分には無いものを持っているから憧れていた。須美はいつか、彼と並んで戦えることを目標にしていた。

もう届かない憧憬に、須美は一筋の涙と共に別れをした。

『……こ、れ……まで……あり、が……と……う……』

——花卉が舞う。

樹海が解ける合図だ。『ユイト』の身体は徐々に灰となり、花卉と共に風に攫われる。これでやっと、長かった彼との戦いも終わる。これでやっと、嘗ての仲間が開放された。

握りしめた手が無くなってしまいうまで、二人は『ユイト』を想い、現実に戻す。

最後に、恩人である別世界の唯斗に礼を言おうと——

「ゆーちゃん、ありがと——え……?」

園子が振り返っても、もうそこに唯斗は居なかった。この世界には既に郡唯斗は存在しなかった。

「ん……うわっ……部屋?……あれ、いつの間に寝てたんだ……?」

腕と机の上に置いたサンチョ枕から頭を上げる。周りを見渡すと、見慣れた勇者部部屋の家庭準備室だ。飛び起きた唯斗を驚いた様な視線で眺める園子と東郷。

頭の中にモヤが掛かっている感覚と、何故か脳を酷使したような頭痛がする。

薄暗い窓の外を見るに、既に夕方なのだろう。何時寝たのかは覚えていないが、酷く疲れた気がする。

「ゆーちゃんどうしたの〜?」

「……変な夢を見たような……でも思い出せない」

「ふふっ、唯斗君が部屋で寝るだなんて珍しいわね」

優しく微笑む二人を見て違和感を覚えるが、次の瞬間には其れが当たり前だった事実気が付く。一瞬だけ脳を過ぎった、悲しそうな表情の二人はきつと気の所為なのだろう。

「ゆーちゃん、ゆーちゃん。今日の晩御飯はなーに?」

「…園子の好きなモン作ってやるよ。ついでに東郷も食いに来るか? 銀も誘ってさ」

「……本当に珍しいね? いえ、ご相伴には預かるけど……何かあったの?」

「何もねえよ。ただの気まぐれ」

そう、ただの気まぐれだ。そうとでも言わなければ、この込み上げてくる感情の意味が分からなくなるから。

でも…一瞬、自分の中の何かが羨ましそうに笑った気がした。

◆◆オマケ◆◆

ちよいと難しい設定。

『分身』

・より正確に言うのであれば、量子もつれを利用した”量子テレポーテーション”。其れを唯斗自身で認識したことによって実体を保つ幻影。

解り易く解説するなら、『郡唯斗』の設計情報を量子もつれを利用し遠くに移動させて投影するのが当能力の本質。構築された『郡唯斗』の身体情報は認識し観測されることによつて初めて存在する。

つまり、本来は同じ人間が複数人存在することは常識的に無理だが、システムによってマクロの世界で量子テレポーテーションを成立させたので有り得てしまう、というお話。

そして情報体の『郡唯斗』を認識するのが本体の唯斗であり、そこに唯斗の意識は二つは存在しない。よって、情報体の意識や記憶は全て本体の唯斗のものであり、情報体自体には意思も記憶もない。『分身唯斗』は本体が操作する操り人形でしかない。

これを利用すれば、味方のデコイを生み出す程度は出来る。自身では無いので操作は出来ないが、同じ姿の幻影を指定位置に置くことは可能。

其れが最後に『ユイト』を騙したカラクリ。

略して『分身^{コレベ}』です。

居候2号ちゃん

「えつと……お、お世話になります！」

犬吠埼風が入院することになった次日、大きく膨らんだりユックサックを背負った犬吠埼樹が郡家の玄関に立っていた。

「うむ、いっつんよ。自分の家だと思って寛いでね〜」

「おい居候一号、此処テメエの家じゃねえんだぞ。あつ、部屋は殆ど未使用な園子部屋を使ってくれ。辛うじてダンボールジャングルは片付けたから、普通の部屋程度にはなってる筈……だよな？」

「ひえつ……ちゃんと片付けたから睨まないで……」

「あ、あはは……」

彼女の姉曰く、可愛い妹を一人にしておくのは精神衛生上宜しくないとこの事。とどのつまり、単純に樹の事が心配なのだろう。

風自身のこともあり、樹が苦勞するのはやはり目に見えている。ならばいっその事、迷惑でさえなければ食費と生活費は負担するから面倒を見て欲しいと風に頼まれたのは記憶に新しい。

既に園子の世話をしている手前、苦にはならない。それに樹は園子ほど手の掛かる質でもない。唯斗も後輩を放っておくのは心が痛むということもあり、二つ返事で受け入れたのだ。

樹をリビングに案内して、余っていた梅昆布茶を出しながら話を続ける。

「樹さんや、晩御飯は何がいいかね。って言うか苦手なモノとかある？」

「な、何でも大丈夫です！居候二号なので文句は言えませんし……」

「見ろよ乃木さん家の園子さんや。初日からビフテキ食べたって言いやがった誰かさんとは大違いだぜ？」

「そんな人もいるんだね〜」

「ああ、一体全体何処の園子だろうな。謎は深まるばかりだ」

「……えつ、もしかして私が全部ツツコミを入れないといけないんですか!?!天然ボケ二人相手に三週間も……っ!?!」

「わあ、いつつんがポイズンを全力投球してきた。恐ロシアンブル―キヤット」

「猫より犬派なのでそのギャグは却下」

「そういう問題ですか…?」

樹はもう完全に理解した。これから姉が退院するまでの間、息をするようなツツコミ嵐の毎日が待ち構えているのだと。

いつその事、ツツコミエースである某煮干しツインテールも泊まりに来ればいいのに。そんな即断られそうなことを思い浮かべ、深く深く溜息を吐いた。

「……はあ、三週間かあ…」

「フーミン先輩の入院期間だっけ? うむむ、短いようで長いですな。二十一日間ってことは、二十一日ってことなんよね」

「そうだね、プロテインだね。……つつつても、多分もつと早くなると思っうぜ?」

「…唯斗先輩、いくらお姉ちゃんがアレだからって…怪我までは早く治りませんか?」

「実の姉をアレって言うなよ……そうじゃなくて、『勇者システム』の機能だよ。園子は解るだろ? 精霊が追加されたから存在感激薄になっただけど、一応は治癒力増進って機能がありましたデスネエ」

「あー、そんなのもあったね」

数年前までの『勇者』には精霊システムが無かった。つまり、日々の戦闘は本当に死闘であり、生傷どころか重症だつて普通に有り得たのだ。

そこで勇者システムに追加されたのは治癒増進の機能だ。

一時期は唯斗と友奈も右腕の骨折の件でお世話になった。無論、精霊が全ての攻撃を防ぐ前提ではあるので、治癒も身体に負担をかけない程度に抑えられているのだが。

「うーん、フーミン先輩の場合だと…二週間も掛からないかもね。うどん成分でもつと早くなる可能性も!」

「ナニソレ怖い……でも、イカの姿フライ成分でなら一週間でいけるんじゃない?」

「唯斗先輩はイカの姿フライを盲信し過ぎですよ……うどんなら兎も角」

「ボクは時々、キミ達がコワくなるヨ…香川のうどんには中毒性のある物質でも混ざってるのか…？香川県民怖い……」

「ゆーちゃんは高知出身だっけ？」

「え、そうなんですか!?! てっきり、同じ香川県民だと思つてました」

郡唯斗は生まれも育ちも高知県である。「勇者」の御役目に抜擢されてからは香川の瀬戸大橋近辺に引越してきて、その後に讃州市に来た。

改めて考えると、唯斗は自分の人生が何処までも『勇者』に引っ掻きまざわれているのだと解る。

だからこそ、と言つても良いのかは分からないが。唯斗は勇者部の面々はどうどんを愛してはいない。寧ろ選ぶならラーメン党だ。蕎麦でも素麺でもひやむぎでも、イカの姿フライ以外に拘りは特にな
い。

「実際、郡家の大元も高知にあるらしいな。詳しくは知らんけど、知り合いの過剰シスコン眼鏡が言つてた」

「過剰シスコン眼鏡、ですか…?」

「ゆーちゃんには変なお友達が多いね。類は友を呼ぶ的な？」

「おいモンキー、そのブーマランは自分に当つてることに気付いてるか
い?て言うか、そもそも俺は屈指の常識人だし」

「えっ?」

「えっ?」

「えっ?」

小学生の時から言われ続けていた『変人』という称号。残念なことに、唯斗は未だに其れを認めてはいなかった。100人が唯斗を変人だと言つても、唯斗はその100人の方が変人なのだと返すだろう。自分を客観視出来ない貧弱なメクジは真摯に投げ付けられた冗談を軽く笑った。

尚、樹と園子は未だに変人疑惑を笑つて冗談だろうと言える彼の強メンタルに思わず声を漏らした。

「あ、やべ…そろそろ時間だ」

「あれれ、今日もお出掛け？」

「そー。色々忙しい立場つてもんでな」

唯斗は誤魔化すように園子の口にイカの姿フライを突っ込むと、ソファの後ろに置いていた荷物を手に取り、上着を羽織る。

「さーて、じゃあ俺は出掛けてくる。昼ご飯は冷蔵庫に入ってるからレンチンして食べてくれ。オヤツはプリン寒天があるから好きな時にでもな。んじゃ、晩御飯までには戻るから！」

「えっ、あ…はい！」

「いつてらっしやい〜」

最低限伝えることは伝え、唯斗は急いで家を出ていった。残された樹は呆然とその背を眺める事しか出来なかった。

「…唯斗先輩、忙しいかったですか？」

「んー、どうだろうねえ。いつも通りと言えればいつも通りだし、大体は察してるからね。今はゆーちゃんが言ってくれるのを待ってる途中かな？」

「…？…よく分かりませんね…」

「うんうん、そうだね。あつ、いつつんに部屋の案内しないとだね。

お片付けもあるし」

「は、はい…」

一瞬だけ、似合わない憂いが彼女の顔に浮かぶところを樹は見失ってしまった。寂しそうに、でも誠実に。その憂いの意味を樹は知らない。

——『待つている途中かな？』

そう告げた園子。きつと、彼はまた何かをしているのだろう。自分達に隠れて、一時的に転校した時のように。あの時は上手く誤魔化されたけれども、結局のところ、彼が何をしていたのかは伝えられていない。

故に——園子は『待つている』のだろう。今度こそ巻き込んでくれることを。

願わくば、樹も巻き込んで欲しい。そう願ってしまうのは悪いことなのだろうか。傲慢でしかないのだろうか。

「もしも、彼がまた『勇者部』のみんなを心配させるようであれば――

(その時は、縛ってでも……)

新たな決意を固めながら、樹はこれから少しの間過ぎすことになる部屋に案内された。

駆け足で家を出てから数分。待ち合わせ場所は近所のコンビニ前だ。

遠目に見える目的地には、見慣れた明るい赤の頭髪。同色の瞳は誰かを探すように、キョロキョロとしていた。当待ち合わせ人――結城友奈は唯斗と目が合うと、軽く手を振りながら寄って来る。

「お待たせッス。待たせた？」

「ううん、今来たところ！……それよりも、唯斗くん。今日って何処に向かうの？」

唯斗が園子や樹には内緒で友奈と待ち合わせをした理由。それは彼が友奈をとある場所に案内しようとしているからだ。

先日の出来事があり、唯斗は友奈を“巻き込む”ことにした。自分と同じ『刻印』を刻まれた彼女と共に天の神を打倒すると決めたのだ。

だからこそ、唯斗は彼処を共有する。自分と同様に、彼女にも更に強くなってもらう為に。その為の許可は既に雪白から貰っている。

「……あつ、その前に鞆貸して？盗聴器の類いが無いが確認するから」「え、盗聴器!？」

「後、スマホの電源も切っておけよな。遠隔ハッキングされる可能性もあるから」

「ハッキング!?ゆ、唯斗くんは何と戦ってるの……?」

「恐ろしく強大な化け物だよ、被害者フレンズちゃん。家でも盗聴盗撮されるかもしれないし、これから可能性だつてある。戸締りはちゃんとしろよ?ヤツは手段を選ばない……可能なら、赤外線センサーとかも用意した方がいいかもな。窓枠に針山とか設置しても効果的だ」

「ひえ……何か解らないけど怖い……!」

敢えて人物名は伏せるが、酷くおぞましい奴だ。大和撫子の皮を

被った天然ストーカーなのだ。昔からの友人でさえなければ警察に通報しているところだ。

今のところは盗聴器の類いは見つかっていないが、奴がそんなへまをする訳が無いと唯斗は見ている。

解らない、故に怖い。某素盗狩逢^{ストーカー}は現代科学を用いても生態の解明は不可能とされている謎生物なのだ。

「怖い、か……そうだ、その感情を忘れるな。ヤツは何時以下なる時もお前を監視してやがる。学校でも、外でも、家でも……ヤツに死角はないんだ」

「そ、そんな……私はどうしたら……」

「幸い、ヤツはお前に限っては危害を与えない。寧ろ過保護でもある。

……少しづつでも良い、一緒に解決策を探っていこうな……!」

「唯斗くん……うん、うん!よう分らないけど、一緒に頑張ろう……!!」

——こうして、今日も唯斗と友奈の絆は深まる。共に化け物^{ストリーゴ}から狙われているという恐怖心が所謂吊り橋効果を演出したのだ。

これには怪電波を受信した東郷も脳破壊されていることだろう。

「……うん、盗聴器類はないな。これで話せる……」

「……ゴクリンコ……ッ」

「ぐく……う……えー、友奈さん。貴公にはこれから、鍛錬の場を提供しようと思うでござやる。無限に湧いてくる戦闘精霊、様々な武器を同時に相手にして……脳が死にそうになる毎日。死なないために、一緒に死のうぜい♪」

「……え……」

「だいじょーぶ、管理^雪者^白には許可貰ってるし。あ、来週からは冬休みだ。ふふふ、楽しい冬休みになりそうだね☆」

「……ゆ、唯斗くん……?」

真つ黒な瞳を広げて楽しそうに嗤う彼は、まるで残業。パライスの五徹社畜のようだった。友奈がその瞳に心底嫌な予感を覚えたのは、言うまでもないだろう。

——そして後に、友奈は語った。

こんなのを続けたら覇者^{樹ちゃん}になっちゃう、タップダンスをしながら鍛

鍊中の夏凜ちゃんのツイントールを三つ編みをするよりも厳しくて難しい、と……

—— 郡家。

樹が荷物を片付けてから数刻、携帯端末で某動画サイトを漁っている頃だった。

暇を持て余した園子がイカの姿フライを啜えながら部屋にやってきて、ハイテンションで告げた。

「ハイハイ、いっつーん。構って構って〜!」

「ええ…構ってと言われましても。…えっと、お話しとかますか?」

「zzz…」

「立ちながら寝てる!?!」

「…あれえ、どうしてわたしの部屋にいっつんが居るのかな〜?」

「そして即起きて寝ぼけてる!?!」

「へいへーい! いっつん構って構って〜!」

「いつの間にかループに入ってますんか!?! も〜! 園子さん当番の唯斗先輩は何処に行ったんですか! 早く帰って来てください〜!!」

「ハクシヨン!」

『唯斗さん、風邪ですか?』

「…誰かに呼ばれたような…雪白、何か聞こえなかった? ヘルプミーム的な何かとか」

『……うーん、現状で聞こえているのって……』

「うりやうりやうりやうりやああ!! 勇者パーンチ! 勇者キイイクツ!! 勇者ソバットツツ!! ふう、ふう…あつ、うわあああああつ?! い

つの間にかワイヤーに絡まってる!? ひゃんっ! 痛っ、矢と槍が沢山飛んでくる…! 遠くからチクチクしないです…!!」

「おーい、友奈ー! それ、実物だともう死んでるぞー?」

「ひええええー! こんなのだうしたらいいの…ツツ!?」

『鍛錬場』にて。唯斗と雪白に見守られながら、友奈はひたすら叫んでいた。

唯斗とは違い、友奈には極端に手数が少ない。彼女の拳撃は唯斗のピコピコハンマーにも劣らない威力であり、その上で連撃も容易い。

然し、真正面からのぶつかり合いでは滅法強くとも、ほんの少しの搦手も容易く効いてしまうのも事実だ。

——だが、雪白は思う。

分かり易い、と。

無限に等しい戦法を確立する唯斗よりも、出来ることと出来ないことが最初から決まっている友奈の方が短期間で強くなれる。

『…唯斗さん。結城さんを巻き込んだのは英断ですよ…! 結城さんには『友奈』としての特性特効もありますし!』

「そーかい? よう分からんけど、頭数はあつた方が良さだろうな。勇者お得意の巨敵殺ジャイアントキリングしだし」

近い将来、唯斗と友奈は天の神に挑むことになる。勝てば世界の平穏を、負ければ無惨に死ぬ。神の力の一欠片で神を伐つのは、人間の切った爪を使って人間を殺すようなものだ。

普通に考えれば不可能だ。どんなに奇跡が折り重なって、限界まで力を引き出しても不可能なのだろう。

でも不思議と、勇者友奈がいるなら神だって打ち倒せる気がした。たったそれだけの、小さな『予感』だ。

由々しき事態です

——私が唯斗先輩のお家に居候することになってから、数日が経った。

…うん、正直に言うと…普通じゃないです。本当に今更ながら、再度身をもって分からされた気分だ。行動の一つ一つが許容範囲を容易く超えてくる。

まず、唯斗先輩は殆ど家に居ない。休みの日は朝ご飯を作ってから、私と園子さんの分のお昼ご飯を温めれば食べられる状態で冷蔵庫にしまって、軽く部屋の掃除をしてから直ぐに外出する。

帰ってくるのは夕方から夜にかけて、晩御飯のタイミングで帰って来ては疲れた様子で料理を始める。

園子さんは『ゆーちゃんは忙しいからね』と後方恋人面で語るし、唯斗先輩本人も茶化して誤魔化す。

唯斗先輩の性格からして、楽しく恋人と遊んでいる…というのには有り得ないし、園子さんの反応からしてまた何か隠し事をしているのは間違いない。

そんな園子さんは園子さんで…何だか、唯斗先輩にくっつき過ぎだと思う。と言うか、唯斗先輩ってあんなに世話焼きだったっけ？

…私だつて一応、勇者部で唯一の年下なのに。あそこまで甲斐甲斐しく世話を焼かれたことが全くもってない。これは由々しき事態ですとも。

…別に唯斗先輩に甘えたい訳ではないけど、唯斗先輩がどうしてもというなら…あつ、何か夏凜さんの気持ちが良くわかったかもしれない。

いや、今この瞬間に限っては私が夏凜さんだったのかもしれない…？

——閑話休題。

ここ数日で私が一番驚いてしまったのは、唯斗先輩と園子さんが当たり前のように同じ布団で寝ている事だ。

少なくとも、園子さんは寝る前は同じ部屋に居た。私は園子さんの部屋で、何故か余っている布団を借りて寝ていて…隣のベッドには園子さんが寝ていた筈だ。

なのに、少し目を離したら…園子さんは唯斗先輩の布団に潜り込んで寝ている。

「——という事で、これは話し合いが必要です!!」

「お、おう…?」

「いっつんは元気だね〜」

困り顔で正座する唯斗先輩と、同じく正座をしながらもにへらと笑う園子さん。

「唯斗先輩は園子さんを甘やかし過ぎだと思えます!」

「うみゆ?そーかな〜?寧ろ…」

「…あー、樹さんや。割りとガチで…お前が人に言えることじゃないぞ?」

「……?」

唯斗先輩は何を言っているのだろうか?凄く残念な子を見るような目で見られてるけど…まるで自爆したツンデレさんを観察してる様な目だ。

俗に言う『おまいう』という感じだ。うん、やっぱりよく解らないです。

「いっつん、いっつん」

「どうしたんですか、園子さん」

「いっつんもね、すつつつごく甘やかされてるんよ?フーミン先輩からもだし、お家を離れてココで暮らしてるのに全く不便とか不自由を感じないくらいには、ゆーちゃんに甘やかされてるんよね〜」

「…っえつと、つまり…?」

園子さんに促されるまま、私は唯斗先輩のお家での一日を振り返った。

私の朝は唯斗先輩に起こされる所から始まる。不思議と、私の持つてる目覚まし時計は私の耳にアラーム音を届けてくれない。ちゃんと鳴っている筈なのに…本当に不思議だ。

数分掛けて起こされた後は、促されるままに暖かいお湯で顔を洗って、綺麗に畳まれた衣服に着替える。その間に唯斗先輩が朝ご飯を用意してくれているので、私は目頭を擦りながらリビングに向かう。

唯斗先輩はお姉ちゃんと同じで、あまり私の苦手な物を食卓には出さない。もしかしたら、お姉ちゃんと同じ手法で私に解らないように料理の中に混ぜているのかもしれないけど、料理に疎い私には理解出来ないし、結局は凄く美味しいから問題なく食べている。

その後は唯斗先輩が用意してくれた教科書類を鞆にしまって、前日に唯斗先輩に教わりながら完成させた宿題を持って学校に向かって、昼休みには唯斗先輩が教室までお弁当を持ってきてくれる。

「……………いつつん、落ち着いて聞いてね…?」

「そ、園子さん…? 一体なにを——」

「いつつんはチョコレートに蜂蜜とグラニュー糖を入れて生クリームでデコレーションしたくらい甘やかされてるんよ? 自覚がないぶん、わたしよりも重症かもだね」

「っ!? なっ…え、えっと…はい…? ……すみません、どういうことですか…?」

「…樹。園子と比べるけどさ…園子って平日は自分で起きるんだ。目覚まし時計も無しに…着替えだって自分で選ぶし、学校の準備とか宿題とか…諸々を自分でやってるんだよ。っ…か、勉学に関しては俺よりも賢いし」

「か、完璧超人ですか…ッ!?」

「……………樹ちゃん、とても言いづらいけど…これが『普通』なんだ。友奈も東郷も…あの夏凜や銀だつてやってる事なんだ。誇ることもなく、当たり前のようにな…」

「……………? ……?」

「あ、フリーズした」

フツウ…? フツウって、なんだろう。早起きは……まあ、目覚まし

時計が悪い。他の人達は超高性能の高級目覚まし時計を使ってるに違いない。

それ以外は……うん、自立精神貧弱ナメクジでごめんなさい。お姉ちゃんや唯斗先輩が居ない生活なんて、もう考えられない身体になっちゃったんだ……

「……私、自立出来る子になります……！お姉ちゃんが退院するまでの間に!!」

「お、おう……もつと頼ってくれてもいいんだぜ？」

「……これ以上ダメ人間になっちゃったら……唯斗先輩に責任取って貰いますからね……このままだと碌に一人暮らしすら儘ならないって、唯斗先輩が自覚させたんですからね!!」

「おおー、いっつん大胆だ〜」

「覇者を飼う当主とか……何その立場、めっちゃ面白いんですケド。郡くん的には全然アリだね。樹サン、将来的に用心棒とかやる気ない？もちろん歌手と兼任で。三食の食事付きに一日二回のおやつタイム。家事とかは任せとけ！」

「やりませんよ……やりません!!」

「あつ、少しだけアリかなって思ってたんだね〜。うんうん、歌って戦える覇者系歌手つてのも新しくって刺激的だよね」

……少しだけ、本当に少しだけ。それって実質結婚生活なんじゃないかな〜、と思っちゃったり。全然アリかなって感じたけど、そうになったら私の中の女の子が大暴落する。

私が唯斗先輩に娶ってもらうのではなくて、寧ろ逆なんてじゃないだろうか。私が唯斗先輩を生涯かけて護り続けて、唯斗先輩が家で家事や食事の準備をする生活。

そんなの、私が旦那さんみたいだ。……それはそれで……ううん、ナンデモナイ。私は変人思考になんて至りません、絶対。

っていうか、覇者つて言わないで欲しい。花も恥じらう女子中学生に不似合い過ぎる。

「……唯斗先輩！私に料理を教えてください……!!あと洗濯と洗い物と掃除と——」

「家事全般を伝授しろと？んー、別にかまへんでー。っーか、樹って料理とか得意そうだけどなあ」

「……………」

「ゆーちゃん!?……………もしかして、いつつんのポイズンクッキングでまた記憶が飛んでるのかな…わっしー談によると、過去五回くらい同じやり取りをしてるって…」

「お前は何を言ってるんだ？」

うん、心の中で謝ります。誠にごめんなさいです。

…勇者部の活動では色々料理をする機会が多い。料理部の手伝いに東郷先輩が借り出されて、私とその補助に付いて言ったり。依頼者から料理を教えて欲しいと言われたり、小学生を対象にしたお料理教室なんかもあった。

後はうどん無料券を求めてうどん料理コンテストに出たことも良い思い出。…審査員さんはトイレに駆け込んだけど。

そのいずれも、唯斗先輩は私の作った料理を食べてから倒れて、その日の記憶を無くす。

もう様式美みたいな扱いだ。納得は出来ないけど…!

「とーにーかーく!!私は大至急、家事万能な女の子にならないといけないんです!」

女子力を鍛えないといけない。このままだと、妹分どころかペット枠になってしまう。一人の女の子として、それだけは看過できない。

他意は無いです。お姉ちゃんと同じ女子力思考主義者になりかけてるだけです。

「教えるのはかまへんけどなあ…一日二日で万能って無理じゃね?テストの一夜漬けじゃないんだし」

「そこをなんとか…!師匠!!」

「誰が師匠だよ。こういうのは風パイセンの家事とか手伝ってる内に身に付くものなんだぞ?銀とかもそんな感じだし」

「わっしーもだね。わっしーの場合は生活力って言うよりも、綺麗な和暮らしの追求的な意味だけど」

「東郷先輩って、一緒に暮らすのが大変そうですね…」

東郷先輩は家事全般を普通以上にはこなせるけれども、様式を重んじる傾向にある。簡単に言ってしまうえば、面倒臭いことを好んでやるということらしい。

だからこそ、家事が出来るからと言って生活力には直結しないと唯斗先輩は付け加えた。

その点、銀先輩は東郷先輩とは逆だろう。

家事一つ一つの腕は精々年相応で、極端に優れてはいない。でも、万遍ない暮らしという点においては銀先輩の方が熟れている。

家事に疎い私には違いがよく分からないけど…要するに、東郷先輩は基礎に忠実で、銀先輩は応用に長けているということなのかな？

どっちにしろ、お姉ちゃんと唯斗先輩はまだ中学生なのに私や園子さんの面倒を見れるほど家事万能というのは変わらないけど。

「唯斗先輩とかお姉ちゃんって、何でも出来て羨ましいです…」

「そう言えば…ゆーちゃんって、昔はお料理とか洗濯洗い物。そこら全般が苦手だったよね。戦闘一本で生きていた感じ？それが二年経てばこうなってるんだから、世の中って不思議だよね」

「えっ、そうなんですか？ってきり昔から得意なんだと思ってました」
「……そりゃあ、記憶ドロップしてから実質一人だったし。親も忙しくて、顔も知らねえ親戚も頼れない。そうなったら、嫌にでも得意になるしかないだろ？…まあ、風パイセンと同じさね」
「あ……」

もしかしたら、失言だったのかもしれない。

ここ一年で、私は何回もこの家に訪れた。でも一度だって唯斗先輩の両親を目にしたことは無い。唯斗先輩の言葉から察するに、二年前……先輩が記憶を失ったからはあまり両親と過ごしていないのだろう。

それは……きつと、とても悲しいことだ。

「多分さ、父さんと母さんは混乱してたんだよ。園子も言ってた通り、記憶を失う前の俺って今の俺と性格がかけ離れてるんだ。だから…別人に見えたんじゃないかな。俺とオレが」
前の唯斗

「……ゆーちゃんはゆーちゃんだよ？今も昔も、何にも変わらないよ」

「そりゃあ園子からしたらそうなんだろうよ。見た目も性格も変わったって、お前も：銀やスーだって郡唯斗の親友だ。でも、産まれてからずっと傍に居て：そんな息子がある日突然、記憶も何もかも失って別人のようになって。……父さんと母さんの気持ちは分かるんだよ」
変わっても息子なんだから、と語る先輩は悲しそうで：でも、自分が両親の息子なのだと分かる事が少しだけ嬉しそうだった。

……唯斗先輩はちゃんと理解してるんだ。

自身の喪失が怖いように、両親もまた恐れているのだと把握してるんだ。繋がりが消えたことを認めたくなくて、でも直視なんて出来なくて。

ずっと、中途半端な距離が続いているんだ。とても、人間くさい考え……少しだけ歪んでいて、でも人間なら誰でも持ち得る矛盾。

「っ……！」

「っ?!い、樹……？」

「わ、わーお……今日のいつつんは大胆だね？」

不意に抱き締めてしまった。今の唯斗先輩は……本当に家族を失った私に似ていたから。お父さんとお母さんを亡くして、泣くしかなかった私に……あの時、鏡に映った弱々しい子供にそっくりだったから。

私にはお姉ちゃんが居た。

でも、先輩の傍には誰も居なかった。

そんなの……受け入れられるわけがない!!二年前、唯斗先輩は『勇者』として戦った!沢山の人を救った!

記憶なんてなくても、先輩の偉業は消えない……なのに、誇るべき先輩が苦しんでる?……そんなのは不条理でしかない!!

「あ、あの……樹サン?……とても苦しいです……！」

「……私は絶対に離れません。先輩が私を忘れても、たとえ私達との繋がりを拒絶したとしても……絶対に離れません！」

「……いつつん、あのね……あまり強く抱き締めると……」

「唯斗先輩は独りじゃないんです!もし先輩が勝手に居なくなっても、私だけはずっと追いかけて……唯斗先輩が嫌がったとしても独りに

なんかしません!!」

「た、確かにゆーちゃんは一人居ないけどね…?」

「……あ、やべ」

——ポフンツ

瞬間、私に強く抱き締められていた唯斗先輩は気の抜けるような音と同時に、小さく煙を立ててその場から消えた。

行き場の失くした抱擁動作。私はそのまま前のめりに倒れて、おでこをゴチンと打った……けど、それどころではない!

「え、えええええええ!? キエタ! 唯斗先輩かキエタ!」

「もー、いつつんがダメージ判定出るまで強く抱き締めちゃうからだよ?」

「ダメージ判定ってなんですか!? ……っていうか、これって…唯斗先輩の『分身』ですよね…?」

詳しいとは言えないけど、覚えはあった。……変身しなくても使えるのは知らなかったけど。と言うか、あの人は恒常的に乱用しているのだろうか?

そろそろ大赦から何か言われてもおかしくないと思う。自重して欲しい…

「そうだね。ゆーちゃんは効率主義だから、今頃は隣町のスーパーの特売にでも行ってるんじゃないかな?」

「私生活で『勇者』の力を使っても良いんですか…?」

「…えへ、内緒ね? 多分、ゆーちゃんも口止め料でケーキとか買ってくると思うし」

「完全に子供扱い……まあ、ケーキまで出されたら口の二つや二つ、堅くもなりますけど」

決して、断じて、誰がなんと言おうとも子供では無いけど…ケーキに罪はない。そして、ケーキを出されたら許すのが女子力の様式美だ。お姉ちゃんだってうどんを出されたら万物を許す筈。

よく分からないけど、少しだけ大人になった気分だった。

でも、さっき言った言葉は……絶対に離れないというのは、本当だ。これが体の良い言い訳なのは解ってるけど、それでも私は唯斗先輩の傍に居続けたいから。

◆◆◆オマケ◆◆◆

《二年前》

・二年前、郡唯斗は『勇者システム』を使用していた。現在は『賢者システム』や『防人システム』を使用しているが、過去はちゃんと『勇者』だった。

男なのに『勇者』の適性がある異例は紛いない。

つまり——唯斗が使用していた『勇者システム』の端末は現端末とはまた別に存在して…

小学生勇者く怒りと雌豚く

「——座れ……」

「ひゃ、ひゃいつ!!」

「声、煩い…ッ!」

「はいいい…」

「声、が…小さ…い…ッ!!」

「……………須美、見ろよ。鬼が居るぞ。か弱い羊を狩る悪魔が降臨して
るぞ……!」

「銀、やめなさい。アレには関わらないべきよ。そのっちは……………うん、
自業自得ね」

日の暮れた、二年前の夏だ。寄宿舎にある畳の上で震えながら正座
する園子と、木の枝を肩に担ぎ声を荒らげる唯斗。

傍らには園子ほどではないにしても、軽く慄き、出来る限りは関わ
るまいと視線を逸らす銀と須美。

控えめに言ってブチ切れている唯斗は酷く冷めた目で園子を見下
ろす。

「なア…園子——いや、お前…は、今日から…」雌豚”…………だ」

「へ?あ、あのく、ゆーちゃん?メスブタって…」

「あ…?返事、は…?」

「はい!わたしはメスブタであります!!」

「…お、前…如き、が…………雌豚を、語る…な。雌豚に…し、つれい…だ
ろ…ッ!」

「理不尽っ!」

戦闘時の様に豹変する訳でもなく、視線と威圧だけで園子を殺そう
とする唯斗。須美は察した。今日をもって、親友が一人減ることを。

須美は園子にそっと祈りを捧げ、来世での幸福を願った。

——事の始まりは、数十分ほど遡る。

本日は勇者の合同訓練のために、道場付き寄宿舎といった明らかに

勇者や武闘家向けの施設に泊まりに来ていた。

海岸での合同訓練は日が暮れる頃には終わり、前記の訓練を抜けて個人鍛錬に励んでいた唯斗もボロボロの身体を露天風呂で癒し、畳の敷かれる和式部屋に戻る。

そう、事件は其処で起こってしまった。

「っ?!……お、れの……イカの姿フライ……ない……」

リュックサックを漁りながら、少年はポツリと呟いた。あまりにも絶望的な現状を自身で否定出来なくて、思わず溢れ出てしまったのだ。

敷布団に寝転ぶ銀は異変を察知し、問い掛ける。

「んー、唯斗どしたー?」

「………銀、たいへん。……この世の、終わり……?」

「えっ、ホントにどうした? うわっ、負のオーラが溢れ出てるし……勇者っていうよりもゾンビだなあ、こりゃあ」

まず大前提として、この頃の郡唯斗の年間イカの姿フライ消費量は二年後と比べて、驚きの十分の一の量だ。執着心こそ変わってはいないが、この時はまだ一日に業務用一袋で足りていたのだ。

——逆に言えば、たった一袋の徳用イカの姿フライが無ければ郡唯斗は生きていけない貧弱雑魚虫となってしまう。

「はあ? イカの姿フライが無くなった、と。確か……部屋に荷物を持ってきた時はその辺に投げてたよな? てか、そんなに大事なら放っておくなよ……」

「泥棒……ッ! く、ソ……極悪……根絶やし……!!」

「怖い怖い! 目が血走ってるから!! 須美ー! この馬鹿を抑えるの手伝ってー!!」

「………はあ、遂に巻き込まれちゃった」

明らかな面倒事。聡い須美は我関せずと放置していたが、遂に巻き込まれてしまった。二度目のため息を零しながら、須美は暴れる寸前の唯斗の前に立ち、血走る鋭い視線を真正面から見詰める。

「唯斗君、本当に……えっと、烏賊の姿揚げ? ……なんて持ってきたの? 何処かに忘れてきたとか、そもそも持つてきてないとかじゃないの?」

「…あー、須美さんや？一応、アタシも持ってきたのは見たぞ。て言うか、この部屋に置いてたのも見たし」

「スー、馬鹿…？…さつき、銀…そう言ってた…」

「再確認よ…じゃあ唯斗君が食べちゃったんじゃないの？」

「た、べてない…！そもそも…鍛錬、始まって…から、部屋…戻ってきて、ない…」

「ふへー、はいへんはね〜」

「喜べ、唯斗。犯人は目の前に居たぞ」

口の周りに食べカスを付け、口の中にもイカの姿フライを詰めている天然アホ。真犯人が判明した瞬間、唯斗は勇者システムの腕部分のみを展開し、木の枝を園子に突き付ける。

そして、冒頭に戻る。

「園子、ちゃんと謝れよ。唯斗が過度なのは解るけど、勝手に人の駄菓子を食べるお前が原因なんだし」

「うう〜、ごめんなさい。鍛錬でお腹が空いてて、夜ご飯まで待てなかったから…ちようど良い所にイカの姿フライが落ちてたから、つい…」

「卑し、い…雌豚、め…！落ちてる、モノを…食べる、な…!!」

「いや、落としてたのは唯斗君でしょう？」

「スー、うっさい」

「なっ…！このっ、卑しいのは唯斗君でしょ！たかが駄菓子一袋で騒ぎ立てるだなんて、まるで子供よ！」

「須美、須美。アタシ達は子供だぞ？一部がチョモランマな須美だつてまだまだ子供なんだぞ？」

「銀、少し黙ってて」

「アツハイ」

その後、引率の安芸が怒りながらイカの姿フライを買ってくるまで言い争いは続いた。

「なーんて事がありましたて、このアホは園子を雌豚って呼んでる次第っす」

「誰がアホだ、アホ銀。知能指数インテリジェンスが足りてないぞ」

「何で喧嘩腰なんだよ、ノットインテリジェンスめ」

「コラコラ、人の病室で喧嘩をおっぱじめるな」

讃州市の病院にて。その日、風が入院する病室に唯斗と銀がお見舞いに来ていた。

殆ど毎日、誰がお見舞いに来ている現状。最初に見た時よりも包帯の量も大きく減り、勇者システムによって常人では考えられない速度で傷が治っているのが目に見える。

「それにしても、アンタ。昔からイカの姿フライ馬鹿だったのね。一周まわって尊敬するわ」

「いやー、イカの姿フライ好きは遺伝なんで。父さんとか爺ちゃんとか。郡家の血を引く人はイカの姿フライが大好きなんすよ」

「へー、じゃあ郡家の初代勇者もイカの姿フライが好きだったのかな。つか食べ物の好みまで遺伝するの？」

「香川県民のうどん好きが良い例だろ。高知県出身の唯斗くんから言わせると、アンタらはうどんを食いすぎだったの」

「それこそ風センパイだけだろ。一度に二十杯も食べるのは力士か風先輩だけだし」

「おいコラ、三ノ輪！誰が力士よ!!あれは圧倒的
女子力が為せる技なんだから」

風曰く、うどんの食べるほど女子力が高まるらしい。これで体重が極端に増えていないのだから真実味を帯びるが、何方かと言えばオカン力の方が高い。

口に出せば確実に反発されるだろうが、唯斗には風がオカン力と女子力を混同させているように思えた。

「あ、そういえば唯斗。樹のこと、ありがとね。普段からだらしのない子だし…迷惑かけてるでしょ?」

「いんや、あのくらいは迷惑にならないっすよ。園子の世話で慣れるし」

「まー、園子の場合はまだ単に唯斗に甘えてるだけなんだけどな。アイツ、やろうと思えば自分で出来るタイプだし」

「へえ、いいこと聞いた。じゃあ家事の分担も出来るなー。最近は何も手伝ってくれるし」

「えっ…あの樹が家事の手伝いを!?!:ダイジョーブ? 台所が爆発したりしてない?」

「パイセンは自分の妹を何だと思ってるんすか?」

幾度となくポイズンクッキングで先輩唯斗の記憶と意識を吹き飛ばし、いつの間にか覇者になっていた謎生物だ。

もはや、風は妹を常識の範囲内で考えるのを止めた。最愛の妹なのだけれども、常識が通用しないのだから仕方がない。

「樹も家に馴染んでますし、郡家の妹として貰ってもいいっすか?」

「駄目に決まってるでしょ。樹はアタシだけの妹なんだし、あげないわよ」

「じゃあ妹をモノ扱いしないでくださいよ…あんまり雑に扱うなら、アタシも姉候補に立候補しますよ。姉度なら風先輩にも負けませんし!」

「そういえば三ノ輪も姉だったわね。弟達…というか、家族とはどうなの? 三ノ輪が一人暮らしなのは聞いてるけど」

「んー、そんな語ることもないっすよ? 両親はアタシを普通に受け入れてくれたし、金太郎は赤子だったから仕方ないとして…鉄男は泣いて喜んでくれたね。いやー、慕われる姉ってのも大変なもんで」

今は讃州中学に通うために近場で一人暮らしをしているが、銀の家族仲は言葉に違いなく良好だ。

毎回とは言い難くとも、休日には実家で過ごす事も珍しくない。

銀は満開の後遺症で、家族に関する記憶の一部も失っていた。

きつと、誰もが彼女ほど容易く、一度離れた家族とよりを戻せる訳ではない。風は亡くなった家族とはもう会えないし、唯斗は未だに両親と溝がある。

だからこそ、決して恵まれているとは言えなくとも彼女と彼女の家族が羨ましく思えた。

「唯斗は家族とどうなんだ?」

「どーでもねえよ。稀に電話して、それだけ。生存確認はしてるし

生活費とイカの姿フライ費、ついでに小遣いも貰ってるから生活に不自由もないな」

「……そういえば、唯斗の家族って見たことないわね。参観にとかで学校に来たりしないの？」

「生憎と大赦のお偉いさんらしくて。多忙な身つすね、ウチの両親は」
「寂し……くは無さそうだな。つくづく、唯斗って変なやつだよ」

「家には園子がいて、今は樹も居る。外に出ればお前達がいるし、寂しがる要素なんてないだろ」

「そーゆー問題なの？なんか、こう……友人と家族って違うモンでしょ」
「……よく分かんないっす」

唯斗とて家族と友人を同義にしているのではない。

両親は両親として大切に、勇者部の仲間は無二の存在だ。どちらが大切か、という話ではないのだろう。親愛と家族愛、唯斗にとってその区別が曖昧なのだ。

自分の命は大切に、でも両親や仲間の為ならば命を天秤に掛けられる。だからといって、自分の命を軽視しているのではない。

其れと同じだ。自分の命と仲間を同じ重さとして天秤に乗せられるように、唯斗には仲間への親愛と両親への家族愛が同じ重さだ。

同じ重さなのに、何を持って区別するのか。

「難しいっすね」

「其れを理解するのが”大人”ってもんよ。其れすら理解できない奴は、図体がデカくなっても”子供”のまま。ね、難しいでしょ？」

「うむむ……アタシもよく判んなくなってきた。どっちも命を懸けて守るべきモノで、そもそも比べる事が間違ってるんですか？」

「どうなのかしらねー？三ノ輪の答えが正解かもしれないし、そもそも明確な答えなんてないのかもしれないわね。ま、アンタらが納得出来る答えさえあれば、人間ってのは前に進めるものよ」

「風パイセンどうしたんすか……？頭打って悟ったとか……」

「おいコラ、唯斗。喧嘩売っとんのかー！」

——皮肉にも、風に其れを教えたのは唯斗だ。

風が大赦を潰そうとした時、唯斗は彼女を止めた。何も語らず、説

得ずらしいで。ただの暴力のみで風を強制的に止めた。

あのときの彼が何を思っていたのか、風には解らない。だから勝手に解釈した。

風にとつて、あの時に限って郡唯斗は裏切り者の怨敵だった。理不尽に言葉をぶつけ、躊躇無く大剣を振り下ろした。

そして唯斗は同じように武器を振るった。

きつと、あの時の唯斗は風の真似をしたのだ。風と同じく、後先を考えずに相手をぶつとばして、言葉を取らずに力のみで暴れ回った。

唯斗はそんな風に腹を立てて、全く同じ所業で返した。そして、そんな真似事自分自身に風は憤りを感じた。

全く同じなのに、何を持って相手を敵としたのか。

風は思う。答えを出すことは『自己満足』でしかなく、その『自己満足』を肯定して前に進める者こそがきつと”大人”なのだ。

そんなこと、唯斗は思っただろう。故に、風の勝手な解釈なのだ。勝手に解釈して、受け入れる。

弱かったことを認めた。でも、だからこそ風は自分自身がまだまだ子供なのだと解った。

この感覚が——自分の不足を理解して初めて、少女は”一歩だけ”大人”に近付けた。

「ふつ、アンタ達も早くアタシの領域レベルに追い付きなさい」

「馬鹿してるんすかにしてんのか？」

たった一年だけ先に産まれて、それでも風が後輩から学ぶことは少ない。

其れが少しだけ悔しくて、でも優秀な後輩達を風は誇らしく思った。

◆◆オマケ◆◆

『郡唯斗（二年前）』

・とある約束で女装を強要されている少年。一日に徳用イカの姿フライ一袋で生きていける、比較的低燃費（当社比）な生物。

この頃はまだチビ。原作小学生組で最小が145cmの銀だが、唯斗は140cm（鯖読）程度。イカの姿フライしか食べなくて、成長

期に過度なトレーニングをしているのが根本的な原因。尚、数年後には平均よりやや高めまで成長する。

『そろそろ出さないと、本編で説明するのが100話後辺りになりそうなので吐き出す設定』

☆原作（最初の世界）

当然、郡唯斗は存在しないし■■■が山田くんになることも無い。

←（ゆゆゆい経由）

☆郡唯斗が存在する世界（西暦勇者の『土居』と『郡』は生存）

所謂『二週目』であり、100話記念で書いた世界でもある。精霊ユイトは存在せず、伊予島家も存在しない。神世紀の勇者の心情を除けば、それ以外は原作と同様の展開。

（小学生の郡唯斗だけが存在するゆゆゆい経由）←

☆今の世界。本編では既に三度目の『ゆゆゆい』を終わっている。視点を変えれば、三度目でやっと西暦組が記憶を（口頭だが）伝えられる条件に辿り着いた。

四度目は全く別の世界になるかもしれないし、何処かの世界と全く同じになるかもしれない。

言わばこの世界では結論の出ない『未定』であり、干渉出来るとしたら神樹か精霊のみ。

神婚

「——よオ、クソ神官共。楽しいオハナシをしようぜエ？」

仮面で素顔を覆う神官に向かい、郡唯斗は裂けるほど吊り上がった狂笑で声を上げる。おおよそ正義とは言い難い表情には純粹な怒りしか見えない。

騒めく大赦の神官と巫女。唐突に襲来した少年は言い訳は許さない、嘘は絶対に認めない、と暗に告げていた。

——事の起こりは数時間前だった。

「あ？神婚だあ？」

「うん……大赦の人が家に来て、みんなを救うにはそうするしかないって」

十二月も殆どを終え、あと二日で年が明ける。表立ってはクリスマスを終え、年越しの準備で忙しい時期。唯斗と友奈は変わらずして『鍛錬場』で精霊を相手に修行をしている。

鍛錬を開始する前、友奈はポツリと告げたのだ。

「まあ大赦が胡散臭いこととしてやんの。断つとけ、断つとけ。どーせ俺達が天の神をぶっ飛ばすんだし」

「私もそのつもりなんだねどね、その『神婚』ってなんなのかなーって。神官さんが言うには、神樹様と結婚して神婚様の一部になる……？……らしくて、そうすると人類が神樹様の眷属になるんだって」

「曖昧な表現だなあ」

「私が神樹様の一部になると、神樹様の寿命が伸びるらしいよ。……正直、天の神を倒すよりもこっちの方が確実じゃないかな……？」

不安を打ち明けるように、友奈は語り掛ける。彼女は平和的な方法があるのであれば、そうしたいのだろう。唯斗だって叶うならそうしたい。

だが、その解決策はやはり胡散臭かった。そも、神樹の一部となる

という表現自体が酷く曖昧で、要するに生贄になれと言っているようにしか聞こえない。

「今は保留にしてもらってるけど、遠くない内にまたお家に来ると思う。私の返事を聞きに……」

「……神婚、神婚ねえ……そもそも神婚って何なんだ？」

「え、さっき説明したよ？」

「そーじゃなくて。んなサイコーな解決策があるのに、何で神樹が顕現してから三百年も指を銜えてたんだよ。そんな長い間、誰も犠牲にしたくないってほど大赦も甘ちゃんじゃないだろうし」

「……その方法が最近まで判らなかつたとか？」

「寧ろ何で今まで解らなくて、今になって解つたんだよ。明らかに『最終手段だ！』みたいな感じで提案してきてるだろ」

——神婚。

友奈が聞かされた情報は、自己犠牲を度外視すればメリツトしかない。たった一人が生贄となり、人類皆が救われる。

そんな美味しい話が易々と有る訳が無い。有ったら既に実行しているし、条件が必要なのであっても三百年の間、誰も満たせない条件を大赦が知り得れるのか。

「……色々と隠されてやがるな」

「私、どうすればいいんだろう……どうすれば正解なのかな。本当に、誰も傷つかない方法なんて存在するのかな……」

「……あー、やめやめー！こんな気分で鍛錬なんてやってられるかー！！雪白、今日はサボる!!」

『はい、了解です！つまり、この後は——』

「カチコミだよ、大赦になア」

悪戯に嗤う彼に、友奈は一抹の不安を覚えるのだった。尚、同行しようとした友奈は雪白によって鍛錬を続けるようにと命じられた。

元より時間もなく、鍛錬にも後から加わった友奈。雪白の言葉を無視することも出来ず、泣く泣く鍛錬に没頭した。

——そして、冒頭に戻る。

「ちよおつとオハナシするだけだよ、神官共。オイオイ、なアに首を傾げてやがるんだア？新婚についてだよ、しーんーこーんー」

「…郡唯斗様、神樹とは——」

「あー、概要はどうでも良いんだよ。俺が聞きたいのはさア、何で天の神が怒ってんのかだよ」

「「っ!？」」

園子より、こんな話を聞いた事がある。神は基本的には人類には無干渉であり、其れは天の神も同様だった。

然し、何故か天の神は人類に怒りを覚えている。

——そう、神は人類には無干渉だ。逆に言えば、人類が程度を弁えず神婚の儀で神の眷属になろうとしようものならば、当然、怒りを買うのも必然的だ。

「俺は思うんだよ。過去に、どっかの馬鹿が神婚しようとして、天の神を荒ぶらせた。そして失敗して、でも地祇の慈愛に助けられて現状に至ってるってなア。愉しい妄想だろ？ほら、笑えよ。テメエらが供物にしようとしてた餓鬼が、面白下らない妄想をぶちまけてるんだぜ？」

「「……………」」

大赦の神官にとつて、勇者は正しく神の使いに等しい。誰もが容易く言葉を交わせる訳もなく、今回は明らかにブチ切れている。

政治中枢たる元老院ならまだしも、一般の神官や巫女が気軽に言葉を返すなどあまりにも厳しい。

否定も肯定もせず、叩頭する勢いで地に頭を下げる神官。無反応と受け取ったのか、唯斗は更に言葉を続ける。

「そしてさア、糞ガキはまたまた思うワケよ。その神婚未遂の馬鹿つてさ、バーテックスが襲来する前から神樹を信仰してたヤツら……つまり、あー。園子は『大社』って言ってたっけ？……つまり、神の存在を証明しなかったヤツらだと思っただよなア」

「い、今の状況を大……誰かが、意図的に引き起こされた事態と……」「いんや。そこまでは断言しませんよ、神官さん。そうだったら、ヤツ

てくれたなアと思うだけっすわ」

現状での神婚は、神樹の寿命を伸ばす為の処置と受け取れる。神を信仰する団体であるなら、眷属化を抜きにしても確実に手を出さなければいけない事柄だ。

唯斗もそれは納得して、今更責めるつもりもない。世界の維持には必須なのだと解るからだ。

然し、バーテックスが世界を滅ぼす前——三百年前の世界にて、まだ神樹の存在すら人々には認知されていなかった時代。

そんな時代に何故神婚をする必要があったのか。神婚という概念が存在するだけに、天の神を荒ぶらせた原因は殆どを確定と言える。

態々、神樹の寿命を伸ばす必要はなかった筈だ。三百年前はまだ人類の滅亡なんて目に見えてなかった筈なので、神の眷属になる必要だっけなかった。

ならば、何故、神樹^大信仰^社団体は神婚を行ったのか。

——可能性の話だ。

もしかしたら、天の神の怒りなんて計算外だったのかもしれない。ただ神の存在を証明するためだけに、何処かの馬鹿達は身勝手に神婚の儀を執り行ったのかもしれない。

「なア、いい加減出てこいよ。お偉いさんよオ…下っ端じゃあ話にもなんねエよなア？」

大凡察してはいたが、この場にいる神官と巫女。其の殆どを全員は重要な情報を知り得ない。大赦とて仮にも大きな組織であり、全員に対して平等に情報を与えるなど出来る筈がない。

故に、挑発している。

考えの薄い餓鬼の考察を否定する為に、訳を知っている神官が現れるのを待っているのだ。

そして、遂に現れる——

「——じゃあ、オレとオハナシしようゼエ？クソ息子」

「……あ？ンだよ、クソ親父。出てくんの遅えぞ」

他の神官と同じ服装と仮面でありながら、服を裂けさせる勢いの肥

大化した筋肉。烏帽子の下からはみ出る硬質の黒髪は、変身した唯斗と全く同色だ。

雰囲気から常人とはかけ離れた存在——郡唯斗の父親だ。

父親である彼は、仮面の上からでも分かる軽薄な笑みを浮かべる。

「アツハツハ、テメエみてえなガキと違って忙しいンダヨ。二秒考えれば解ンだろうがヨオ」

「悪いな、テメエの息子だから解らなかつたわ。馬鹿が遺伝しちまうと色々大変なんだよ、二秒で察しろや」

「あ？表出るかア？」

「上等だ、クソ親父」

「お、お待ち下さい！郡様！ご子息様!!」

「あ？？」

「ひいつ……！」

「おいコラ、クソ親父。なに部下を怖がらせてるんだよ。パワハラかあ？神官なんて向いてねえから辞めちまえよ」

「オイオイ、ハラスメント・ハラスメントかよ。社会を知らねえ糞ガキほどピーチクパーチクとハラスメントだのと騒ぎやがるんだワ、これが。先駆者として嘆かわしいねエ」

「時代錯誤な先駆者は早よ船降りろよ。醜く権力にしがみついてんじゃねえぞ、みつともない」

「はっはー、テメエみてえな社会を舐め腐ったカスが時代の後継者つてだけでも世界のオワリなんだ。オレ達が爪痕でも残さなねエとイケねえって分かんねえかねエ？」

出会って早々、極近距離でメンチを切り合う郡親子。直ぐさま止めに入った神官も重圧に負け、完全に怯えてしまう始末。

互いに血管を浮かせながら、満面の笑みで相手を煽り散らかす。

——だが、こんな親子喧嘩も終わる方法が存在した。

「御二方様！イカの姿フライをお持ちしました!!」

「おっ♡ありがとう♪」

郡家の血を引く者の特徴として、異常なまでのイカの姿フライ愛がある。三度の飯よりイカの姿フライ、寧ろ三度の飯にイカの姿フラ

イ。

怒りも悲しみも、イカの姿フライがあれば解消されると古代より決まっている。

積み重ねたイカの姿フライを頬張り、郡親子は落ち着きを取り戻した。

「まし、なんだ？…久し振りダナア、唯斗」

「ん、父さんとは半年ぶりだっけ？母さんとは偶に会ってるけど」

「お前が大赦に遊びにでも来れば、何時でも会ってやるぞ？」

「誰が親の職場になんか遊びに来るかよ」

この場にいる、全神官と巫女は思った。

あの流れでよくもまあ、平和的な家族の会話に移行できるものだな、と。これこそが郡家の血を継ぐ者は変人が多いと言われる所이었다。

アドバイス

「なア、唯斗。此処は騒がしいだろ？場所才変えようぜ？」

大赦の集会場にて、唯斗の父である男はそう言った。

まるで周りの神官や巫女にも聞かせて、暗に邪魔するんじゃないぞと言わんばかりに。その意図を察してか、誰一人として声は上げなかった。

否、上げられなかったのだろう。地位も力もある存在である事は大赦に疎い唯斗でも、簡単に見て取れる。

「別に何処でもいいよ。まあ、アンタらにも知られたくない事があるだろうしな」

「ハッ、散々：いや、態とかア？余計な事まで喋りやがったヤツがいるみてエでなア？」

「なんだって!?!そりやあ大変だ!!」

「首の骨エ、へし折るぞ？」

「冗談だつーの。怒んなよ、腹笑っちまうよじれるだろうが」

「：オレが言うのもアレだけどよオ、息をするように喧嘩ふっかけんの止めた方がいいぜ？オレはそれで十人くらいユージンが減ったからな」

慣れたような返しに既視感を覚えながら、男は珍しく父親らしく子を窘める。無論、用いた言葉は大凡親が子に聞かせる様なものではなかったが。

そして同時に、強く頷く部下の神官を鋭く睨み付けた。

「モーマンタイ無問題、友人も息をするように煽って殴ってくる馬鹿だから。煮干しとかパイセンとか、後は銀もだなー」

「お、オウ：楽しそうでナニヨリだな。つーか、話逸れてンな。移動するから着いて行こい」

「ういーす」

実子の空返事に青筋を立てながら、多少急ぎ足で別室へと向かった。

「んで？テメエ、結局何しに来やがったんだ？」

男は仮面を外し、深い溜息混じりに問い掛ける。

ソファアールと平机が置かれただけの簡素な、そして古風な部屋に着いて早々。男の様子は先程までの巫山戯たモノとは一転して鋭い雰囲気纏っていた。

「色々だよ。要はクレームと確認」

「クレーム、っーのは神婚についてかア？断言するぞ、あの勇者サマは断れねエ。確実に了承するだろうよ」

「っー……良くもまあ、分かりきった様に語りやがるな。アンタの感想を聞きに来たワケじゃねえんだぞ」

「はっ、最後まで聞けよ。このオレが理由もなく断言する筈ねエだろうが。端的に言えばなア、”餌と保険”だ。まア、この意味はテメエの方が知ってるだろうがな」

「は？抽象的過ぎて分かんねえよ。もつと詳しく——」

「先に、唯斗の言いやがった『確認』とやらを聞かせろよ。その方が説明の手間が省ける」

男は唯斗の言葉を遮り、乱暴なまでに話を進めさせる。唯斗とて、父の内面は愚者ではないと解る。故にこそ、反発する気持ちを抑え、渋々とはあるが従った。

「……話はさつき、神官共と一緒に聞いてただろ。天の神が荒ぶつてる理由、俺は神婚だと思ってる。それも……まだ神樹の存在が人々に認知されていない時代に、信者が信仰する神の存在を証明する為。昔の大社が神婚の儀式を行った………違うか？」

唯斗の話す内容は飽くまでも可能性であり、園子から聞いた情報と散華で身体を失った際に大赦に侵入して偶然集まった情報により考察だ。

間違ってる可能性は大いにある。寧ろ、たかが中学二年生である唯斗が思い付いたのだから、その程度のことを誰も解らなかつたとは考えにくい。

普通の神官は知らなくとも、政治中枢である元老院や乃木家、郡家

等と初代から連なる家系の当主、其れに近い存在には知らされている筈だ。

「——イイか？唯斗…今からオレは、嘘を言わねエ。だが、オレにも立場と責任つっ—のがあるんだ。だからなア、テメエの求める答えも言つてやれねエんだワ」

「……………」

「そうだな、言つちまえば…何も分かんねエ。三百年前の出来事を記憶に残せるヤツなんて神サマくれエだろうよ」

「は？……………いや、クソ親父…いま『記憶』つて言つたか？『記録』との間違いじゃなくて」

「オイオイ、流石はオレの息子じゃねエか。目の付け所はサイコーだぜ？」

其れは肯定に等しい返答だった。

男は敢えて、『記録』ではなく『記憶』という言葉を用いた。当たり前過ぎて今更再確認するような事柄でもないのにも関わらず、三百年前の出来事を『記憶』には残せないと語つたのだ。

其れはつまり——

「——記録が無いのか？」

記録が最初から無ければ、記憶に頼るしかない。だが、其の記憶を有しているのは数々の地祇と天の神のみ。

「オイ、唯斗。テメエなら解つてんだろ？お前が思い付く程度のコトを、今日に至るまで誰も思い付かなかつたワケがねエつてよオ」

「……………でも、記録が無いから誰も証明出来ないつてか？」

「ソ—だよ」

「…不自然だろ…ッ。大赦が…いや、大社が最初にするべき事は天の神への抵抗じゃなくて、その根本を突き止めることだろうが…！」

「肯定してやるよ、クソ餓鬼。大社の行動についてじゃなくて、テメエが言つた不自然だつっ—点についてはな」

これまで、大赦が各資料を検閲し、国にとって不要か若しくは政治に不利益を齎す物は嚴重に管理されてきた。

きつと、その資料の中には神世紀前の重要書類も含まれている。

態々処分するのではなく、管理するということは無益な情報ではないからに他ならないのだ。

今時代において、天の神について記されている書類は億万の富にも勝る価値がある。

其れが残されていないともなれば、不自然でしかない。

「……他に、天の神の怒りに関する情報は？」

「其れが存在しねえんだワ、コレがなア。だから不自然なんだよ。隠されてる、なんて次元じゃあねエ」

「完全に消し去られてるじゃん、それ……って言うことは、正解にしろ間違いにしろ、事の原因は昔の大社だったって可能性が高いな」

「まア、そーだろうなー。こんな事実を誰かに知られでもシちまつたら、国が傾くどころのハナシじゃねエな。国家転覆されるワ、知らねエけどよ」

事實はもう誰にも知ることは叶わない。

然し、確実に言えるのは——三百年以上前の日本で、地祇を信仰する者達は何かを行い天の神を荒ぶらせた。

もはや国を動かす存在となった大赦にとつて、其れは万が一にも知られてはならない禁句だったのだ。だから資料や情報を完全に消し去った。

「まー、別にお前にとつちやあどうでも良いコトだろ？」

「どうでも良くはねえよ……別に、知ったからって言い広める訳でもないけどさ」

「そんな事より、今は神婚か……ガキ、解るだろ？ほっとけば国が滅んで全員死ぬんだぞ」

「だから悩んでるんだろーが」

不機嫌に眉を歪める息子を高身長で見下ろし、男は鼻を鳴らす。解つてる故に、悩む。歳も性別も関係なく、誰にでも有る事だ。

放任しながらも、やはり男は親だった。本来は出すべきではない助け舟を出してしまうのも、人として未熟であると同時に人として在るべき在り方なのだろう。

「ハッ、オイオイ。天の神をぶっ飛ばすから問題ねエとでも言いたげ

ダナア。イイな、イイじゃねエか！オレの息子なら、そんなくらいは戯言を吐きやがれ」

「っ！……アンタ、本当に何処まで知ってるんだよ」

「ギアな？勇者だろうと賢者だろうと、実子の考えることくらい親には解るつての。だからこそ、三つだけアドバイス出来るぜ？」

「…チツ、賢者まで把握済みかよ。んで、アドバイスつて？」

「二つは、勇者さま結城友奈は神婚を受けるべきだ。要は餌になつてもらうんだよ」

「……さっきのは、そういうことかよ」

幾ら唯斗と友奈が天の神を倒すと息巻いても、そもそも天の神が顕現しない事には始まらない。

無限に等しいバーテックスを延々と狩り続けるのは現実的ではない。座して待つのも、天の神が現れる前に”呪い”が唯斗と友奈を殺してしまう方が先だ。

ならば、天の神に向いてもらうしかない。

神婚はその手段だ。男が最初に言った『餌と保険』という言葉の意味は友奈が神婚で天の神を誘い出し、もしも場合はそのまま神婚を完遂して神樹の眷属になる。

つまりは保険を兼ねた囮役を担ってもらうのだ。

「…解った。クツソ嫌だけど、理解はした」

「オーケー、じゃあ残り二つのアドバイスだ。『妥協するな』、『人の形に拘るな』つて所だな」

「……は？妥協だあ？…するわけねえだろ」

「オウオウ、そりゃあ良かった。まさか…ウチの息子が戦力仲間にナイショで天の神を討とうとしてやがるワケがねエもんなア？」

「っ!？」

父親の言葉に、唯斗は肩を震わせた。

凶星だったのだ。防人の御役目の時と同じく、今回も勇者部の皆には何も話してはいない。巻き込むまいと隠し事をし続けているのだ。

酷く非合理的だというのは唯斗が一番理解している。神を討つと言うのに、自分と友奈だけで挑むと言っている。それは誰にとつても

『舐めプ』としか言い様がない。

唯斗の性格を一番理解している父親だからこそ、浅い考えを指摘した。

敢えて追求することもなく、其の言葉だけで終わらせる。不器用な父親は道を照らすことはなく、然し指だけは指すのだ。

新時代を紡ぐ次代に全てを託すと暗に告げていた。

最後の『人の形に拘るな』つつーのは…まア、ジブンで理解しろや。じゃあ、オレは忙しいから仕事に戻るワ。呪われてるんだから、車には気を付けろよ」

「…それも既に知ってるとか、マジで引くわ…」

「ハッ、ほざいてろ」

仮面を付け直した男は、嘲るように笑いながら部屋を出て行った。

「……妥協するな、か。……なあ、大蛇、オロチ蒼鴉、アオガラス どうするべきなんだろうな」

『…?』

誰も居ない、瀬戸大橋の残骸の近く。

以前、園子と銀に呼び寄せられた場所だ。時間帯はあの時と同じ筈なのに、空は暗く厚い雲に覆われている。

ただ考えに耽りたくて、大赦を出た唯斗は賢者システムを起動しこの場まで駆けていた。このまま帰っても、きつと何も進歩しない。

そんな予感がして、一人で此処に来たのだ。

「…大蛇、蒼鴉。お前らさ。実は喋れるだろ?」

『っ!—いつから、気付いてたの?』

『……驚いたな……変わらず、鋭い』

「うわっ!?!ま、マジで喋りやがったし!?!」

『っ!?!え、は…?』

『なっ!?!き、気付いてなかったのか!?!』

「冗談だよ、気付いたのは雪白が追加されてからだ。精霊が喋れるってのには驚いたけど、大蛇に関しては…くまマンに乗り移るじゃん」

『むっ、確かに』

『……そう』

少女のような声で、大蛇は短く相槌を打つ。

どれだけ鈍くとも、何度も蒼鴉や大蛇と接していたら嫌にでも気が付く。雰囲気ということも勿論あるが、何となく察しがついてしまうのだ。

園子ほどではないにしても、鋭い勘というモノは唯斗にも備わっている。

雪白が話した、雪白自身の正体。それが大蛇や蒼鴉にも当てはまるのだと、理解するのは容易かった。

「なあ、先人よ。仲間も…風先輩達も巻き込んだんじやっていいのかな。多分、命の危機だつてある。それなのに……」

『唯斗。私達の仲間は、そんなに弱かったか？』

「………」

『解つてることを態々相談しないでちょうだい。私に聞いても、乃木さんや伊予島さんに聞いても、答えは同じ筈よ』

「…傷付いて欲しくないって思うのは傲慢か？」

『貴方の弱さは、その臆病さよ。自分の気持ちだけを押し付けて、仲間の心情を無視する。其れが正しくなんてないって解つてる癖に』

『お前が強いのは皆、知っている。だが、何でも一人で為せる者などない』

「…厳しいんだな、御先祖達は。俺が目を背けてきたことを突き付けてきやがる」

ずっと独り善がりだった。其れを彼女達が嫌うと知りながら、でも自分だけで片付くのであれば構わないと。

自己犠牲なんてクソ喰らえだ。その気持ちは今でも変わらないし、他人のために死んでやる気もない。

でも、仲間の為にならば。いつの間にかそう考えている自分がいて、絆されているのだと気が付いて嬉しくなった。

だからこそ、そんな彼女達が傷付くのは自分自身が傷付くのと同じくらい嫌だ。子供の我儘だと言われても仕方が無い。

『…決めるのはお前だ、唯斗。どんな選択をしても、私達は最期までお前を支えよう』

『後悔はしないで。みんなを巻き込んでも、貴方と結城さんだけで挑んでも…後悔しない方を選ぶべきよ』

「……選択、後悔……うん、ありがとな。」困ったら相談”って、勇者部五箇条にもあるし。……まずは彼奴らに相談することにするよ」
『うむ、其れが良い！』

蒼鴉の声に喜びが滲む。先人でありながら友人のようにも思える精霊達は、何処かの不思議な感覚だ。まるで自分達と同じ人間であり、同じ時を過ごしてきた友のようでもあった。

まずは『鍛錬場』に向かつて駆け出した唯斗の背を眺め、消える間近。蒼鴉と大蛇は小さく言葉を交わす。

『…なあ、千景。今の唯斗ならば使えるのではないか？』

『……ええ、そうね。彼が人の形に拘らないなら、『切り札』も使える

わ』

賢者、その本質は”個”と”個”の変化だ。武器も、技も、そして『精

霊』も――

にぼにぼ

——勇者部の面々を巻き込むに当たって、唯斗と友奈は別々に行動することになった。

唯斗は三好夏凜、東郷美森、三ノ輪銀を。友奈は犬吠埼姉妹と乃木園子を、それぞれ勧誘することにした。そして、その際に唯斗は一つだけ条件を追加する。

『絶対に、一人一人を個別に勧誘すること』

この先は確実に命懸けになる。ならば、せめて流されないで欲しい。集団圧力に乗せられて、自分の意思を曲げて欲しくないのだ。ほんの少しでも疑心があるのであれば、後の後悔に繋がってしまう。

故に、誰に対しても『お前が一番最初だ』と告げることが条件にした。

彼女達はお人好しではあるが、愚かな考えなしではない。その危険性や、其れが愚行と言うべき所業であると解る。其れを指摘して止めるだけの意思が備わっている。

だからこそ頼りたいと同時に、止められるのではと一抹の不安が過ぎるのだ。

「つーことで、夏凜を口説いてくる」

父親に会いに行った翌日、唯斗と友奈は近場の駅前に集合していた。方法こそ各自の判断に任せるといふ形を取っているが、誘う日くらはいは合わせているのだ。

「了解！じゃあ私は、風先輩の所に行ってくるね。今日で退院って言うってたし、丁度いいかも」

「オツケー。野生の覇者樹サアンにエンカウントするなよ？」

「えんかうんと…？うん、わかった！」

「なら良し。じゃあ解散！」

唯斗の言葉を最後に、友奈は病院に足を向け唯斗は煮干アしの巢パイに向かった。

「りりん夏凜ちゃん、あつそびつましょー♪」

朝つばらと言うには多少日が上に昇っているが、まだ昼頃とは言い難い微妙な時間帯。唯斗は自分の誇りを賭けて、全力で叫んだ。

唯斗が世界で二番目に愛するのは、三好夏凜を心の底から遠慮も躊躇もなく弄り倒す事だ。彼女の迷惑になれるのであれば、近所迷惑になろうと関係がない。

彼女が苛立ちに身を任せて叫ぶ姿が大好物なのだ。他の何者にも変え難く、唯斗の欲を満たしてくれる。怒りに染る表情が、堪らなく愛おしいのだ。

「ゲーディーん、ぢゃ、あ、ーん!!可愛い可愛いにぼっしーちゃあ〜ん♡」

「うつつつさいわああああ!!」

「あつ♡こんにちはです」

「死になさい。出来る限り疾く、酷く、無惨に、悲惨に、そして静かに死に絶えなさい。若しくは野生の覇者^樹に死神ワイヤーで縛られて吊るされてなさい」

「辛辣か?」

薄い部屋着で怒号を飛ばしながらドアを叩き開ける三好夏凜。

今日も今日とて、にぼっしー節は健在だ。煽れば騒ぎ、叫べばツツコミ、褒めればチョロい。そんな最も可愛いツンデレツインテール少女こそが、兄に似ず純粹で純情な三好夏凜なのだ。

ある意味では、唯斗が一番はっちゃけるのは彼女の前なのかもしれない。

「んじや、俺は帰るわ」

「は?.....え、いや...本当に何しに来たのよ」

「冗談だって、ちよつとお話しにしたんよ」

「そう。帰り道はあつちよ?」

「話を通じない件について。にぼりんちゃん、今回は割りど真面目な話題なんだけど」

「誰がにぼりんちゃんだ!.....はあ、いつもの浜辺でいい?アンタと仲良くお話なんてする気はないけど、鍛錬の合間になら少しだけ、聞

いてあげるわ」

「ツンデレ、ゴチつす。これで今日も生きていけるわあ〜」

「はいはい、頭がおめでたい様で何よりよ」

この半年で三好夏凜が覚えた事と言えば、ボケを受け流す技術だ。ヒヤッハーに対して無言やツツコミで返すのではなく、後の会話に続かないように流れを断ち切り、前から後ろに流しているのだ。

ツツコミ型勇者として名高い彼女の最大攻撃がツツコミなのだとしたら、受け流しは最大防御だ。尚、回復は煮干しで補っている模様。数分が経ち、厚手のジャージを着込み竹刀袋に三本の木刀を突っ込んだ夏凜がアパートから出てきた。

無言で歩き、もう随分と通い慣れた浜辺へ向かう。彼女の鍛錬には唯斗も稀に参加するが、素の身体性能に関しては適う気がしない。

「それで、真面目な話って何?」

浜辺について早々、夏凜は軽くストレッチをしながら聞いてくる。鍛錬の合間に話を聞く、というのは照れ隠しではなかったらしい。

愚直と言うべきか、建前や嘘を吐けない性格は素の素直さの現れなのだろう。

「直球に言う。理由は話せないけど、天の神をぶっ飛ばしたい。協力してくれ」

「良いわ、手伝ってあげる」

「……………豪速球で返された」

即答で応えられ、思わずたじろぐ。安易な協力の申請、程度で済ませられる事柄ではなかった筈だ。答えられないとは先に言っただけのもの、質問の一つや二つ、詰め寄られる覚悟はしていた。

だが、三好夏凜は即了承した。何一つ迷わず、澄ました顔で了承したのだ。

「二応聞くけど、ちゃんと解ってる?」

「天の神をぶっ飛ばすんでしょ? さっきアンタが言ったことじゃない。大体、完成型勇者の私が敵の親玉を討つ機会にビビるとでも思ってるの? 寧ろ待ち侘びていたっての」

「いや、ビビるとは思わんけど……その、理由とか聞かないのか？」
「どうせ答えられないんでしょ。良いわ、別に。アンタと友奈がコソコソと隠れて何かしてたのは知ってるし、唯斗は兎も角、友奈まで隠すんだったら何かしら理由があるってことよ」

「オウにぼっしー、唯斗くうんに対する信用が足りてないぞ☆」

「前科持ちが何か言ったかしら？人に隠れて壁の外で暴れて、拳句の果てに捕まって操られたお馬鹿さん？」

「ほ、褒めるなよ……っ／＼／」

「褒めてないわよ!!」

波の音にも勝る怒声をカラカラと笑いながら、唯斗は彼女に感謝した。打算も使命もなく、然し彼女は純然に友の為だけに命を賭すと云っているに等しい。

その姿勢に、唯斗は尊敬すらしてしまう。

其の在り方は物語の“勇者”に似ていて、一見して現実味を帯びない。だからこそ彼女は眩しいのだ。目を眩ませて、盲信させてしまう才能すら秘めている。

それと同時に、突き放すのもまた彼女の在り方。完成型勇者の彼女は何処までも独りであり、仲間を欲している。そんな、自分と似ている唯斗に三好夏凜は同情しているのかもしれない。

「後悔するなよ、完成型」

「後悔したくないから、闘うのよ。アンタも友奈も、目を離したら直ぐに無茶をする。放っておけば何をやらかすのかも分かったもんじやない」

「人を暴走列車みたいに言わんといて」

「それよりも悪質なヤツが何を言っているのやら」

「H A H A H A、返す言葉もねえっすわ。ワロスワロス——って!?!夏凜屈め!!」

「っ!?!」

冗談を混じえた談笑へ移行する中、イレギュラーは唐突に舞い降りる。

夏凜が屈むと同時に、唯斗は賢者システムと防人システムを同時展

開し——三好夏凜を潰す勢いで振り下ろされた禍々しい漆黒の籠手をピコピコハンマーで打ち返した。

其の犯人を、唯斗は知っていた。唯斗だけでなく夏凜も、今はこの場にはいない勇者部の皆も当然の様に知っている存在だ。爛々と妖しく光る桃色の瞳と、変身時の唯斗と同じ黒髪。嘗ては純白と桃色であり今は紅と漆黒に染められた勇者衣。その部分以外は、よく知っている。

ピコピコハンマーを解き、出現させるのは万能対応武器オーラウングードの銃剣。防人の標準装備と東郷美森の銃を束ねた物だ。

夏凜もまた、混乱しながらも勇者システムを起動させる。

「……何のつもりだ、友奈」

「あはっ。こんにちは、唯斗くん。私の知ってる唯斗くんとは少しだけ雰囲気は違うけど、ちゃんと生きてるんだね。うーん、どうすればいいかなー。唯斗くんだけは絶対に殺したくないし……でも、邪魔する気だよね？」

其れはコロコロと表情を変え、然しどんよりと曇った瞳からは生気を感しない。

まるで意思のない呪われた人形だ。唯斗や夏凜の知り得ない目的の為に動く彼女は、二人の知る『結城友奈』とは異なる存在だった。

「…誰だよ、お前」

「結城友奈だよ？ 讚州中学二年生で、勇者部所属」

「アンタ……私の知ってる友奈じゃない！ 何者よ!!」

「あなたこそ、だれ？ その格好……勇者だよね？ 私、あまり勇者については詳しくないけどなあ」

彼女には不似合いの、酷く冷めていて、然し粘着質の笑みは不気味であると印象づける。言葉とは裏腹に、彼女の瞳は三好夏凜には興味無いと告げているのだ。

——否、興味以前に存在を知らないと告げている。

「このミン・ヨーシ・クアリンを知らないのか……？」

「へー、変わった名前だね！ ミン・ヨーシ・クアリンちゃん……だっけ

「?よろしくする気はないけど、覚えておくね♪」

「堂々と嘘を吐くな!!私は三好夏凜!完成型勇者よ!!」

「そうだぞ!変な聞き間違いで恥ずかしくないのか!!」

「え、ごめんなさい!あんまり興味なかったら、間違えちゃったかな…?」

「アンタら二人まとめてぶっ飛ばすわよ!」

煮干し型勇者たる三好夏凜にとって、何時以下なる状況であってもツツコミこそが本懐。神であっても彼女のツツコミ欲を止めることは不可能なのだ。

シリアスなど関係ない。謎の敵なんて壁にもならない。寧ろツツコミ魂は窮地にこそ煌めくのだ。

物理的ツツコミにより腹を木刀でどつき回された唯斗はイカの姿フライで全回復し、武器を『友奈』に突き付ける。

「よく分からんけど…早々に取っ捕まえてやるよ、髪黒友奈」

「私に奇襲をしかけたこと、後悔させてあげる」

「——じゃあ、私を止めて見せてね?二人の勇者さん」

——『復讐』の勇者は妖しく嗤った。

◆◆◆オマケ◆◆◆

『郡父』

・唯斗の父親。粗悪な筋肉で、でも家族想いな筋肉達磨。郡家の次男であり、兄が現当主。筋肉は伊達ではなく、素の身体能力と格闘の才能は四国でも三本指に入る。

この人が勇者だったら、物語の八割は無傷で解決する。残り二割は結城さん家の友奈さんが大満開で解決する。今作を主人公無双にするのであれば、この人を主人公に添えた方が危なげなく成り立ってしまう。

(変態的な意味を含まず)幼少期の唯斗を女装させていた張本人。とても筋肉。

V S 復讐の勇者

——最期に憶えていたのは、真っ赤な炎だ。

親友を裏切つて、先輩を無視して、後輩を置いて行って。それで、どうして私は：己への戒めを『復讐』だなんて大層に名付けられたのだろう。

ただの我儘だ。無意味な激情だった。自分の溜飲を下げるためだけに、彼女達を：世界を犠牲にしたただけだ。

私は、神樹様を殺した。

唯斗くんを勇者に殺したした神樹様を、何度も何度も『しね』と呟きながら殴り続けて：：：樹海が展開出来なくなるくらい弱らせて。

四国を覆う壁を破壊して、私達の暮らしていた街が燃やされるのを死の間際に眺めていた。

なんで、こんなにも虚しいのだろう。何も悲しくなんてないし、必死にバーテックスに攻撃して、でも無惨に身を散らす風先輩や東郷さんの姿が酷く滑稽に見えてしまった。

——桜は短命だ。

神樹様を殺した時に湧いてきた力は、きつと命を燃やして得たものだ。だから：私は死ぬ。復讐を終えて、感情をぐちゃぐちゃにされて：：：正義も悪もワカラナクなったわたしは、誰よりも滑稽な死を迎える。

勇者だと思っていた私自身は、道化ピエロも笑うほど無知で馬鹿な愚者だったのだから。

空から、身体が堕ちる感覚がほんの少しだけ心地良い。数秒後には地面に叩きつけられる。もう勇者の超人的な力なんて手には残されていない。

こんな、罪深い私は死骸を人々に晒されて、気味の悪いバーテックスに喰い散らかされて。
最高の死だ。

——おいで、おいで。その命、使わせて貰うよ——

……?だれ、なんだろう。

分からないけど、とても…心地が良い。その声に手を引かれれば、私の復讐は…私の、私に対する復讐は終えられるのかな。

地面に激突する刹那、不気味な炎は私を飲み込んだ。痛くて、辛くて、でも心地良い。名前の分からない感情がわたしを支配する。

この身を包み込む炎は、仮初の命を流し込んできた。殺されたいなら、その舞台を自分で作れば良い。炎がそう告げているように感じた。

私は——結城友奈は、自分を苦しめるために…嫌なことを全部やる。無垢な少女を殺し、また神様を討って、街を壊して。

そうするために、私は生きている。

ああ、叶うなら…私は唯斗くんに殺されたい。彼を救えなかった私を、他にもない彼に裁いて欲しい。

だから、私の知らない世界でも。私は壊し続ける。『復讐』の為だけに拳を振るい続けよう。

「——じゃあ、私を止めて見せてね?二人の勇者さん」

まるで魔王みたいに、私は嗤うんだ。最高の復讐劇を完成させるために。滑稽にも復讐を謳う道化ピエロになって。

「乱発だコンニャロー!!」

「うーん、この程度じゃあ効かないよ……って言うか、あれれ?唯斗くんの武器、変わった?」

「じゃあ私の斬撃を喰らいなさい!はああああツツ!!」

「あはっ、同じかなー」

中距離から銃剣を連射する唯斗と、その合間に合わせて連撃を放つ夏凜。その全てが命中した——が、未だ『友奈』は無傷だ。被弾した銃弾は硬いゴムに当たった様に弾かれ、双刀から繰り出される斬撃は鈍い音で受け止められる。

一切の防御姿勢を取らず、然し平然としている姿は人間を逸脱していた。まるで、此方の攻撃を気にもしないバーテックスだ。

「じゃあ、次は私の番だね。せーの……どーっん!!」

「っ!!」

気の抜ける掛け声から放たれた拳撃は砂浜に向けられ、風圧で砂と同様に二人を吹き飛ばす。嘗ては勇者パンチと名付けていた攻撃。その威力は唯斗と夏凜の知る其れとは比べ物にならない。

まともに受けたら、例え精霊バリアがあつたとしても無傷では済まないだろう。

「……やっべ。アレ、正面から相手していいヤツじゃないだろ」

「じゃあどうするの?……てか、知らない間に銃とか盾とか……どっから持って来たのよ」

「後で説明する。——よしっ、みよっしー!フォーメーションΩだ!!」

「ええ………ええ、フォーメーションΩって何!?!」

「ヒヤッハアア!!お鍋の蓋×反射×巨大化!」

「わあ、次はお鍋の蓋だ!しかも大きい!よーし、大きな的には当てやすい!ドオオオオン!!」

お鍋の蓋をベースに、“束ねる”のはピコピコハンマーの『反射』と風の大剣の『巨大化』だ。完成するのは攻撃を反射し、ダメージ蓄積でカウンターをお見舞する大盾だ。無論、見た目は貧弱な木製だった。

——大盾を目掛けて『友奈』は無邪気に拳を振るう。大きく後退させられながらも、巨大化したお鍋の蓋は『友奈』の攻撃を受け止め続けた。

「お、おおっ!?弾かれるく!?あはっ、あははは!なにこれ面白い!!えい
えいえいえいえい——い!!」

↑↑↑ 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 ——
↑↑↑ 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 ——
↑↑↑ 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 ——
↑↑↑ 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 —— 吸収 & 反射 ——

電子音が騒々しく鳴り続ける。まるで電車を真正面から受け止め続けるような、全身の骨が軋む程の暴力は止めどなく大盾を襲う。

「私も忘れるな！」

「もう、だから夏凜ちゃんの攻撃は効かな——え、わ、わわわっ？何これ何これ!？」

夏凜の連撃は変わらず無傷で受けられ——然し、『友奈』は反撃を出さない。

彼女がどれだけ攻撃を重ねても『友奈』の身体に傷を刻む事は不可能だ。然し、故に三好夏凜は攻め方を変えた。

繰り出される拳が、腕が伸びきる前の肘関節に刀を叩き付ける。安定性を失った拳撃は弱く、そして逸れる。

どれだけ身体が頑丈であっても、関節部分が不動となる訳ではない。腕、足、腰。その全ての関節を乱打しようモノならば、身体のバランスなど容易く崩れてしまう。

「これは…ッ！バーテックスには！効かないけど!!対人戦では最強よ!!はああああああ!!」

「おっと！うわっ!?!ひえ〜！からだが言うことを聞かないよ〜!？」

「ナイス夏凜！ちようど此方も準備終わったぜ!!」

《——吸収、最大蓄積!!》

莫大なエネルギーを吸収し終えた大盾は薄く光を纏う。

「ハニーどいて、そいつ殺せない」

「ダーリン、殺したらぶっ殺すわよ」

「えっ、トウUNK♡子供は三人欲しいです」

「死ねば？」

《——解放！最大衝撃!!》

夏凜は『友奈』から離れる刹那、彼女の両膝関節を全力で叩き体勢を完全に崩させる。

どれだけ身体性能が優れていても、人間の形を保つのであればこの攻撃は避けられない。

——盾から放たれる白光は受け続けたダメージの解放だ。暴力的なまでの瞬きは目を丸くする『友奈』に回避すら許さず、飲み込み轟音を掻き鳴らした。

地面が軽く揺れたような感覚がある。何十と受けた『友奈』の攻撃

が、この一撃に全て込められているのだ。

まさに格上殺しの可能性を秘めた、天の神にも通じる武装だ。

極光の後には広範囲にわたり砂煙が散乱し、地面に小隕石のクレーターにも見える跡を深く刻む。

あの『友奈』とて死にはしなくとも明確なダメージは受けている筈だ。姿を見るまでもなく、二人にはそう確信があった。

「……………」

最大チャージのカウンターを放ってから十秒、未だにパラパラと舞い落ちる砂の音しか聞こえない。

「…あれ？」

「油断しないで。もしかしたら、気の緩みを待ってるのかも…ッ！」

「……………ねえ、夏凜」

「……………」

砂煙も全て消え去り、辺りには遮蔽物もない。そんな砂浜で、唯斗と夏凜の視界には『友奈』が映らない。

衣装の一片もなく、最初から存在しなかった様に散らかった浜辺だけが残っている現状。

「逃げられた？」

「……………気配もない。でも、見えなくなるくらい吹き飛んでもいないだろうし…消滅するくらいの威力でもなかった。…ええ、完全に逃げられたわ」

「チツ、見ろよ夏凜。…丁寧に書き残しがあるぜ？」

唯斗が指差す地面には見慣れた筆跡で――

『――また遊びに来るね♪』

と書き残されていた。再確認するまでもなく、余裕を持って逃げられたのだろう。地面に書く余裕があったのだから、与えられたダメージもたかが知れてる。

しかも、また来ると言うのだから気が滅入ってしまう。

深く溜息を零し、二人は変身を解除した。

「なんだったんだ？」

「少なくとも、私達の知る結城友奈ではなかったわ。で、さっきの武器

は何？格好も若干違ったし」

「説明メンドクセエ……雪白、頼める？」

『……面倒事を私に押し付けなしてくれませんか？』

「じゃあ大蛇か蒼鴉でもいいーや」

『断るわ』

『それくらい自分でやったらどうだ？物臭は感心しないぞ』

「……な、なっ?!?精霊が喋った…っ!?!」

「いやお前のも喋るだろ。シヨギョームジョーとかゲトローメとか」

「義輝はこんな流れに喋らないわよ!!」

その後、三体と一人で散々押し付けあつた挙句、雪白が大幅に端折って説明した。

——同時刻。

「風先輩、少し…お話があります」

「友奈?…うん、何？」

何度も通つた病室。

今日をもつて退院するからか、ベッドの脇にはキャリーバッグが置いてある。既に荷物を全て詰め込んでいるのだろう。

真つ直ぐと目を見て話す友奈と視線が絡み、風は何かを察する。無論、話す内容なんて分からない。でも、後輩が真面目に何かを訴えているのだ。

それを茶化すほど、風も馬鹿では無い。ギプスも包帯も外れ、身軽になった身体を友奈に向けて視線を返す。

「……天の神を倒したいです」

「っ…だから、協力して欲しいと？」

「はい」

風は冷静を努める。取り乱して、選択を誤つたら元も子もない。天の神だろうと、バーテックスだろうと。戦場に出るのであれば、彼女の意味は変わらない。

全てを肯定してあげることが、先輩としても犬吠埼風個人としても出来ない。してあげられないのだ。

先人として、道を照らすことは出来る。でも、指を差しして手を引くのは自分の役目ではないと解っている。

「……アタシが参加しなくても、アンタ達は戦うつもり？」

「……はい。私には、これしか出来ないから……」

「そう、じゃあ止めなさい。そんな”責任感”で戦うなら、止めてしまいなさい。代わりにアタシが戦うから」

「っ…そんなの、駄目です！絶対ダメです!!」

”自分の代わりに誰かが”——其れは結城友奈が最も嫌な事だ。誰かに傷付いて欲しくなくて、勇者になった。その本質は永遠に変えられない。

だから、ここで風に代わってもらうのは他の誰でもない友奈自身が許せないのだ。

「……友奈、アンタが何に対して責任を感じているのか。アタシには分からない。でも、今のアンタは駄目よ。アタシは協力しないし、アンタにも戦わせなんてしない」

「ど、う…して…」

「ちゃんと理由を見つけなさい。他の誰でもなく、結城友奈のために戦える理由。それからまた口説きに來なさいな。ふふん、お姉さんは手強いわよ〜?」

「……はい、分かりました……」

風は——風だけは気が付いている。

いつだって、彼女は人の為に戦ってきた。自分の我儘すら友を救い世界を守るためのモノだった。そんなのは勇者ではなく、聖者だ。

聖者になるということは、身を犠牲にして、たとえ護るべき存在から石を投げられても慈愛で堪える事に等しい。

故に、風は友奈を聖者になんてさせない。

先輩としての矜持だ。これが、風の譲れない我儘の一つだ。

歪な在り方を正すのもまた、風にとっては後輩の面倒を見るだけだ。微笑ましいし、もっと手を差し伸べたくなる。

(考えなさい、友奈。”自分”の戦う理由を……誰にも依存しない結城友奈の意思を)

◆◆◆オマケ◆◆◆

『復讐の勇者《友奈》』

・二回目のバーテックス戦にて分岐。唯斗が背後から迫る
サジタリウス・バーテックス
射 手 座の矢に気付けなかった世界線での結城友奈。

天の神により悪感情が増長され、僅かに浮かんだ神樹への敵愾心が『復讐』として現れてしまった。

髪は変身時の唯斗を思わせる黒であり、造形こそ大差ないが勇者装束は黒と紅に染まった。

彼女の目的は自分自身への復讐であり、言うなれば躊躇無く無惨に殺される為だけに、他を殺そうとする。もう自己矛盾を知ることには決していない。

『友奈』は戦闘スタイルこそ初期の友奈と同様だが、それ以上に硬く強い。唯斗と夏凜の攻撃を防御姿勢も無く受けても傷一つ付かず、『勇者パンチ』と名付けていた拳撃は嘗ての比にもならない威力を誇る。

フワフワとした態度は意図的であり、彼女なりに相手を煽っている。尚、あまり意味を成してはいない。

戦う条件

「やつほー、トーゴー」

「こんにちは、唯斗君。唯斗君からの逢瀬のお誘いだなんて、珍しいね」

「逢瀬じゃねえよ、密会だよ」

三好夏凜の勧誘に成功してから数刻後、電話を介して友奈とある程度の情報交換をした後に唯斗は最初に友奈と待ち合わせをした地点にて、東郷美森と会っていた。

目的はただ一つ、不慣れにも彼女を頼ろうとしているのだ。天の神やバーテックスの軍勢を相手にすると考えたら、遠距離からのサポートや援護射撃に長けた彼女は替えようのない戦力となる。

無論、やはり強要は出来ない。協力して欲しいと願っている一方で、断つて欲しいと考えているのもまた事実なのだ。

唯斗が口に出す言葉は、夏凜を勧誘する際と一言一句同じだ。

「東郷……理由は話せないけど、天の神をぶっ飛ばしたい。協力してくれ」

「……唯斗君」

「なに？」

「私が……東郷美森が、貴方に惚れた女の子が、愛しい想い人を戦場に駆り出させると思う？」

「……………」

其れは暗に、戦いには行かせないと言っているに等しい。静かに、そして冷静に問い掛けてくる彼女の目は至って真面目だ。

本気で、郡唯斗を想っているから。だからこそ戦って欲しくない。彼の身をずっと案じているのだ。共に戦うことが三好夏凜の想い遣りなのだとしたら、東郷美森は危険から遠ざけることこそを想い遣りと名付けるのだ。

止められるのは予期出来たことだ。なのに、咄嗟に言葉で飾れない。建前で本音を隠すことだって容易いのに、何故か唯斗の口は説得

の言葉を吐こうとしない。

「他のみんなは…友奈ちゃん達にはもう説明したの？」

「いや、まだだよ。東郷を最初に——」

「嘘ね、唯斗君の嘘つき」

「っ！」

平然と、悠々と従容と容易く、言葉の奥を東郷美森は看破するのだ。

「みんなに、そう言うつもりなんでしょう？周りの意見に流されて欲しくないから。同調圧力で意見を変えないで欲しかったんでしょ？」

「…ははっ、東郷には全部お見通しか」

「本当に、唯斗君の…バカ…」

悲しそうに目を曇らせる彼女。慣れない罵倒には力が籠らない。友のために本気で感情を表せるのは、彼女の美点なのだと思唯斗は思う。

だから、あの時——彼女から告白された時も嬉しかった。度を越えた行動も愛情の表れであり、基本的には自分の価値観を人に押し付けない淑やかさも美德なのだろう。

——だからこそ断って欲しいのだ。

このまま、酷い罵声を吐きながらこの場を去って欲しい。自分達が天の神を倒しても、ずっとあの部室で待っててくれる存在でいて欲しい。

そんな我儘が唯斗の内で矛盾を孕む。

隣で戦って欲しい。護るべき居場所で在って欲しい。そんな矛盾した思考は唯斗を混乱させる。

東郷美森は憤慨している。

「——くっ！告白だと思っただのに!!だって、だってだよ!!昼間から呼び出して、二人だけで逢いたいって言われたんだよ!!他の誰にも内緒って散々言われたし……ッ!!」

そう、東郷美森の中では激しく怒りと羞恥が渦巻いているのだ。少し前に彼に振られて以来、ナイーブになる気持ちをあまり表には出さ

ずに過ごしていた。

そんな日常の中で、急に想い人から切羽詰まるような、まるで秘め事を打ち明ける様な声質で電話を貰ったのだ。

妄想には一言ある東郷が、的外れ且つ恥ずかしい勘違いをしてしまうのも仕方の無い話だったのだ。

でも、実際に会って話してれば——おつつもい。想像を遥かに凌駕するくらい重すぎる話だった。

「そ、う…だよな。東郷が怒るのも、仕方がないよな…」

「え、あつ…う、うんっ！全くダヨ！」

「自分勝手なのは解ってる。これが正義だとは思わないし、俺は最初から正義なんて謳ってない。だから…うん、これまでと同じだ。これは俺と友奈の我儘だ」

「……………」

東郷は思う——気まずいと。

別に、東郷個人としては天の神打倒に協力するのも吝かではない。寧ろ、唯斗と友奈を護りたいという我儘を通すのであれば、やはり東郷美森は彼の話に乗るといふ選択肢しか最初から存在しない。

最初から某煮干しのように即決断で返せたら多少なりとも格好はついたのだが、残念ながらウジウジすることに關しては定評のある東郷だ。

真面目三割妄想七割で殆ど考え無しで話していたら、いつの間にか断る様な流れになっていたのだ。

「…えつと、ごめんな。勝手なことばかり言って…忘れてくれ」

「あつ、ちよつと待って！べ、別に断るとは…」

「駄目だよ、東郷。迷った時点で…断るって…選択肢がある時点で、お前はやつぱり関わるべきじゃないんだ。懸念点は、無視するべきじゃないんだよ」

「そうじゃなくて…えつと、あ…そ、そう！条件があるの！唯斗君も一方的に協力してもらおうっていうのも心苦しいと思って、だったら交換条件を付けたならお互いに対等で在れるかなって!!」

「……………条件？下着はあげないぞ？」

「唯斗君が私を何だと思ってるのか、後で小一時間ほど話そうね」
「ひえ…」

無償で受けるつもりだった。でも、言ってしまったものは仕方が無い。そう、仕方が無いのだ。決して、兼ねてより計画していた強制弱み握りお願いごとの一端を利用するのではなく、純粹で純然で生粋な心持ちなのだ。

そうだ、疚しい気持ちなど欠けらるも無い。東郷は自分自身にそう言い聞かせた。

「……で、条件ってのは？」

「し、下の名前で呼んで欲しいの！」

「…え、今更つすか？」

なぜ今更か、と問い掛けてくる唯斗に東郷は柔らかく微笑む。こんな心情に関して鈍感なところも、彼らしい。

二年前から今に至るまで、郡唯斗という人間は様々な色を取り入れて、そして無くして。傍から見ればコロコロと性格の変わる不思議な人物に見えていたのだろう。

でも、その実はずっと変わらない。東郷美森が——鷲尾須美が出逢った、ちよっぴり変な男の子。どんなに彼が変わっても、少女にとって郡唯斗は郡唯斗なのだ。

「お前…東郷って呼ばれるのに拘ってたじゃん。友奈にかっこいいって言われたんだっけ？」

「もうっ、朴念仁くん。女の子は好きな人には、可愛いつて思われたいんだよ？」

「誰が朴念仁だよ。別に、呼び方で外見とか関係性が変わる訳でもないまいし」

唯斗は友人の呼称に拘らない。東郷をトーゴー、ストーゴーと呼ぶのもノリと勢いだ。特に三好夏凜の呼び方に統一性がないのもその表れだ。

だがそれでも、殊更に名前呼びを強いられるのであれば、多少なりとも思う所がある。

端的に換言するなら、とても気恥しい。

「呼んでくれないの？」

「……み、美森……」

「なあに？唯斗君」

「……恥ずかしいから『もっさん』でいい？美森の『も』を使つて」「やめて？絶対にやめて？」

——斯くして、三好夏凜に引き続き東郷美森も唯斗は巻き込む事となった。

ずっと、ずっと。長い夢を見ていたような気分だ。

さつきまで勇者として化け物と戦闘をしていた筈なのに、その事がずっと昔のように感じられる。大切な何かが胸を温かくする。もう忘れてしまったけれども、私はとつても楽しい夢を見ていたのだろう。

「かくかくしかじかでね、力を貸してくれないかな？あ、もちろんホーシユーはあるよ？そうだねえ、君の願いを一つだけ叶えるってのはどうかな。願いの数を増やせー！っていうお願いならお断りだけどね♪」

「……………」

私が守っていた地は、今はもう溶岩のような地面に覆われてしまっている。でも、これは天の神の顕現する結界のようなモノらしい。

これの下には、あの寒い地が眠っている。惜しいような、安心したような。地元を愛しながらも地元民に心底呆れていた身としては、言葉にするのも難しいくらい複雑な気分だ。

「ほんのすこーしだけ、他の勇者を手助けするだけで良いんだよね。別に天の神に刃を突き立てろだなんて言わないし、自己犠牲つてのもスキじゃないんだよね」

「……………」

「んー、どーしたんだい？」

半透明の球体の中で、彼女……名前は知らないけど、瑞々しい緑の長髪が特徴的な、何処か見覚えを感じる制服に身を包む少女は鼻歌交じりに一人で喋り続ける。

まるで、混乱しているわたしの気なんて知らぬ存ぜぬと言ってる様で。奇妙というか、怖い。

「…あなた、結局誰なワケ？」

「おお、こりや失礼！山田くんとしたことが、自己紹介もしてなかったとは。山田くんは山田くんさ！山田が苗字で、くんが名前ね？この名前、気に入ってるんだよね」

緑髪の少女は悪戯に笑いながら、山田くんと名乗った。やっぱり胡散臭い。存在感というか、雰囲気精霊さんがカムイに似ているけど…たぶん、其れよりも余っ程格上の存在だ。

それも、神様とか。そんな感じの。あの化け物の親玉を敵視しているのだから、善神であれ悪神であれ、敵の敵は味方みたいな受け取り方も出来るんだろうけど。

「山田くん…：…どーも、ご存知、北海道で勇者をやってました秋原雪花っす。とーぞよしなに」

「うんうん、ご存知ご存知。それで、話を戻すけどさ」

「天の神にちよつかいかける、でしたっけ？いやー、お誘い頂き至極恐悦ながら、私だとお役には立てないと思います所存」

「大丈夫だよ、猿でもバーテックスと戦える程度の力は提供するから。いやー、お客さんツイてるねえ！二年前に唯斗っていう子が使ってた勇者システムなんだけどね、それをちよつと改造したやつが手元にあるのさー！」

「むしろ危険に晒されそうになってるんだけど…」

どうしよう…：めっちゃ逃げたいけど、逃げ場がない。私の地元は天の神の結界で埋められてるし、そもそもあんなところには戻りたくない。

だからといって、見渡す限りは炎と火柱、あとは星屑だ。あれ、ここって地獄かな？

「うむむ…：あんまり乗り気じゃないかあ。じゃあしようがない！一欠片の記憶でも返してみようかな」

「え、ちよ…：っ！何をするの!?!」

山田くんは決して大きくはない手で私の頭を鷲掴み、何かを流し込

んでくる。暖かくて、私の胸から欠けた何かの一部。

——刹那、酷い頭痛が私を襲う。

視界に白い光がチカチカと点滅する。脳に焼き付ける様に、何かの刻み込まれている。ボンヤリと頭の中に浮かんだ影を——私は知っていた。

返されたんだ。失ったと思っていた思い出——そのごく一端を。百分の一にも満たない、でもこれまでの人生の中で両親との思い出と同じくらい大切な記憶。

「がつ……!ぐ……う、うう……ッ!……あつ、そ、うだ……思い出した。唯斗……郡唯斗……!」

「どーかな?取り敢えず、君と唯斗に関する記憶の一部を渡してみたけど。負担が大きいいし、あまりやると脳が死ぬから勘弁ね?」

「さらつと怖いこと言われた!?!」

浮かぶ。ほんの少しだけど、私の頭の中には『郡唯斗』に対する感情が思い浮かぶ。変なヤツだった。とても変で、歪んでいて、平気で隠し事とか嘘をつくヤツ……なのに、絶対に裏切らない友達。

独りで戦っていた私の隣に彼が居たら、きっと……私だつてこんなに張り詰めることもなかった。

恨み節を吐くなら、なんで三百年前に北海道にいてくれなかったのか。そんな理不尽で、でもそんな事を笑いながら茶化してくるヤツだった。

「……良いよ、山田さん。協力するよ」

「えー?ほんとかい?いやー、助かるよー。これでダメだったら、もつと記憶を流し込む所だったかも」

「それ私の脳が耐えられないパターンですよね!?本当に脳が破裂するから!」

——別に好きとか、そんな事はない。

多分、唯斗に告白されても私は断るし、逆だとしても唯斗だって断ると思う。敢えて言うなら……そう、悪友だ。一緒に悪巧みして、記憶には残っていない誰かさんに怒られて。

時には喧嘩して、自然と仲直りする程度の仲だ。

そして、お互いの為になら平然と命を賭けられるだけの関係。

「強い武器、くださいよ。まだまだ死にたくないですし」

「とーぜんさ。相応には働いて貰うけどね、タンクちゃん」

「……………え、タンク役やらされるの!?!」

やっぱり逃げたいかも。

エイプリルフルール企画 《唯子ちゃんの日常》

「いつけなあい！遅刻遅刻う〜!!」

私の名前は郡唯子！

讃州学園に通う、ちよつぴりお茶目な女子高生！今日も去年から引き続きセンセー大激怒の無断遅刻世界記録を更新中なんだ♪きやつ、恥ずかしい！

今日も今日とて、いつも通り二枚のイカの姿フライに食パンを挟んで、口に唾えながら走っちゃうつ♡あーん、まるで少女漫画的一幕みたいだね！もしかして、運命の王子様とぶつかっちゃったり……

なーんて、ある筈ないかあ。あはは、夢の見すぎだよね♪わたあめみたいに甘い妄想に浸りながら、曲がり角を走り抜ける瞬間――

「きやつー！」

「おっと、大丈夫?」

はわわっ、誰かにぶつかっちゃった!

思わず目を閉じて、身体が後ろに倒れるのに無意識に備えてしまふ。でも、あれあれ?誰かがそつと優しく身体を支えてくれた……?

柔らかい声質は何処かで聞いたような、でもすぐには浮かばない。服越しに伝わる肌はとつても熱々つ♡あつ、鼻腔を撫でる山桜の匂い……

「え、あつ……」

「あれ?なーんだ、唯子ちゃんだ!もうっ、また遅刻?東郷さんに怒られちゃうよ!つて、あはは……実はボクもなんだけどね」

「ゆ、友奈太郎くん……?」

「んー、唯子ちゃん?お顔が赤いけど……もしかして熱かな?少しだけ、じつとしててね?」

「ううん!そ、そうじゃなくて……!ち、近いよお……っ／＼／＼」

首元まで伸ばされて、桜色の髪止めでまとめられた赤髪は見慣れたものだった。結城友奈太郎くん。優しく、でも天然で無邪気なイケメン。学園でも無自覚王子様、だなんて呼ばれちゃってる友奈太郎

くんだ。

赤面する私を心配して、額にコツンと額を合わせてきて…思わず赤面っ！うう…は、恥ずかしいよ…私のお顔、友奈太郎くんじつと見つめられちゃってるよ…

思わず、もつともつとお顔が熱くなってしまう。

「うう…っ／＼／＼」

「…嫌、かな…？」

「えっ、トウungk♡…じゃなくて！友奈太郎くん、急がないと遅刻しちゃうよ!!」

「そっか、そうだねー。うーん、ちよつとだけ名残惜しいけど…急ごうね♪…つと、その前に！髪にイカの姿フライ付いてるよっ☆」

「は、はひ…っ／＼／＼」

は、恥ずかしい…っ！友奈太郎くんは私の髪についたイカの姿フライを爽やかに取ると、カリツと聞き心地良い音を奏でる。か、かっこいい…っ！

友奈太郎くんのはにかんだ笑みは心臓に悪いよお…！こんなの、好きになっちゃう。……なーんて、友奈太郎くんには美森太郎くんがいるんだ。私が邪魔なんて出来ないよね！

きつと、友奈太郎くんが良い意味で無遠慮に私の手を引いてくれるのも、友奈太郎くんが誰にでも優しいからだ。

思わせぶりの態度をとってくれた彼にちよつとだけ意地悪をしたくて、掴まれた手をぎゅつと握り返した。

「ふふん♪」

「唯子ちゃん嬉しそうだね。唯子ちゃんが嬉しいと、ボクも嬉しくなっちゃうな♪」

「え、えへへ…」

友奈太郎くんは彼のものだけど、今だけは私が独り占めしちゃう♡そんな私に首を傾げて、友奈太郎くんは幸せそうに微笑んでいた。

「君達、少しばかり遅くはないかい？」

「す、すみません…」

教室につくと、東郷美森太郎くんが冷たい笑みを浮かべて待っていた。まだ担任の先生は教室には居ないけど、それは私と友奈太郎くんの遅刻届けを預けてきたからだ。

私にはよく分からなけど、先生は色々大変そうだね。毎日毎日、登校日は欠かすことなくわたしの遅刻届けを処理しているのだから、私も先生も物凄く手馴れているんだ！

それはそうとして、私はまた美森太郎くんに目を向けた。

鮮やかな濡羽色の長髪に、私なんかよりも余っ程高い身長。キリツとした凛々しい瞳は美森太郎くんの性格を表しているかのようだ。

噂では、ブツがとても大きいらしい。だから皆に敬意を込めて東郷さんと呼ばれているとか。わたし、女の子だからわかんない。ブツって何のイチモツの事なのか分からない。ナニが戦艦²大和級⁶なのか分かんない。

「聞いてるのかい、唯子ちゃん？」

「ひえ、美森太郎くん……」

「おい東郷、細かい事でグチグチ言うなよ。男のクセに女々しいヤツめ。なあ、唯子もそう思うだろう？」

「え、えつと……か、顔が近いでしゅ……っ／＼／＼」

「あつ、煮干しくんだ。おっはよー！」

「……みよつしー君、君は何事にも軽薄すぎるんだ。大体、友奈太郎君もだけど！唯子ちゃんとの距離が近過ぎだ！……ぼ、僕だって…手を繋いだことすらないのに…ッ」

……？美森太郎くんが小さな声で何か言っていたような気がする。まあ、どーせ聞こえなかつただけでも。でもきつと、私と友奈太郎くんの距離が近い事に憤慨してらんだろうなー。

美森太郎くんと友奈太郎くんは、もう付き合っているのではと噂になるくらい仲が良いんだ。……とても素晴らしいと思う。男の子は男の子と、女の子は女の子と恋愛をすればいいと思うの。でも私はノンケです。イカの姿フライをこよなく愛する、一般女子高生なんです。

「ハンツ、ほんつとーに女々しいなあ。唯子、こんなヤツ無視してもい

「いんだぜ？」

「ザフキエルくん……む、無視だなんて……そんなこと出来ないよ！」

「へえ、俺のことは割と無視する癖に」

彼——みよっしー・煮干し・ザフキエルくんは拗ねたように頬を膨らます。周りにドライであるように見えて、みよっしー・煮干し・ザフキエルくんはツンとデレの差が大きいだけなんだ。

何だか、少しだけ可愛い。ツンツンとした態度は彼のツンツンとした硬い髪質に比例しているみたいだね。

「と、東郷さん！そろそろ先生が来るよ？」

「むう……仕方無い。みよっしー君、唯子ちゃん。あと友奈太郎君も！昼休みは部室に集まるようにと、先輩からのお達しだよ」

「うんっ、わかったよ。ザフキエルくんも逃げないでね？」

「はっ、誰が逃げるかよ。唯子こそサボるなよな」

友奈太郎くんのおかげで一先ずはお説教から逃れることが出来た。うーん、イケメン王子達に囲まれるのは嬉しいけど……心臓が常に高鳴っている！

あーあ、友奈太郎くんや美森太郎くんならまだしも、ザフキエルくんは普通に親友ってカンジなんだけどなあ……

もはや親友すぎて、周りから付き合ってる疑惑が立つくらいだ。ザフキエルくんは巫山戯て否定しないし、男女間の距離感に厳しい美森太郎くんからは問い詰められるし。

ザフキエルくんは、いつつつも私をからかってくるんだから！もうっ、ザフキエルくんのクセに生意気だよ!!……そんな所も、ほんの少しだけ……まあ、嫌いじゃないけれども！

「……なんだよ、こっち見て。俺の顔に何か付いてる？」

「なんでもないよーだ、ザフキエルくんのバーカ」

「え、喧嘩売ってるの？そのアホ毛ぶち抜くぞ」

「やめて？本編の主人公設定で確かにアホ毛が生えているとは言われていたけど、もう誰も覚えてないし寧ろ今話に至るまで全く触れられなかった要素を今更触れないで？」

「何言ってるんだコイツ……」

先生が教室に入ってくるのを確認してから、私はサンチョ枕を取り出した。……この枕、ごく稀にダンディな声で『スイ、ムーチョ』つて鳴るんだよなあ。不定期に。

昼休みになつて。

私は机横のアタッシュケースに詰めたイカの姿フライを持って席を立った。みよっしー・煮干し・ザフキエルくんは私と色違いのアタッシュケースをロッカーから引っ張り出している。

きつと、あの中には大量の煮干しが入っているに違いない。

「じゃあ向かおつか♪」

「あつ、友奈太郎くん！うん、そうだね」

トン、と友奈太郎くんに肩をタツチされる。友奈太郎くんは意図的なのかどうか、少しだけボディタッチが多い。

胸とかおしりとかを触られたりはしないし、肩とか腕とかだけだから文句は何も無いけど……やっぱり恥ずかしい。美森太郎くんが私に一切触れようとしない分、友奈太郎くんはとっても積極的に感じてしまう。

……美森太郎くんは私を大切に扱ってくれてる……とも、言えるのかな？

「俺達も行くぞ、東郷。弁当ちゃんと持ってるか？」

「勿論だよ、みよっしー君。君こそ……え、何そのアタッシュケース。唯子ちゃんも……御国の極秘資料運搬でも担っているのかい？」

「「お昼ご飯」」

「あははっ、きつとイカの姿フライと煮干しだね！」

「笑い事じゃないよ、友奈太郎君……栄養が偏ってるじゃないか……ま、まあ！唯子ちゃんが望むならさ。僕が君の分の弁当を作ってくる事も吝かではないけど……」

「あ、お気になさらず。イカの姿フライは生命の源だから。そもそも、栄養素つてのは各働きがあるから必要なものであって、郡の姓を持つ者は全ての栄養素をイカの姿フライを原料として身体の中で生成できるんだよ？もちろん、味によって色々な作用があるし、そこを偏らせ

るつもりはないんだよ？あつ、でもソフトタイプは駄目。絶対に駄目。たとえば友奈太郎くんや美森太郎くんとしても、ソフト派閥なら肅清対象になっちゃうね♪撲殺しちゃうぞ♡なーんちゃって♪そもそも！どうしてガリガリポリポリとした食感がウリのイカの姿フライを柔らかくするの？ねえ、ねえねえねえ？私、全然分らないなー。食感を出すために揚げてるんじゃないの？柔らかいイカの姿フライなんて、死んだ人間だよ。誰が好き好んで死体を製造するの？何で死体を食べようとするの？頭おかしいよね？もうっ、存在自体が許せない…！私、間違ってるかな？度量の狭い女の子だと思う？変な子だっと思う？まあ、思っちゃうよね。思われたって良い、それでも私はイカの姿フライのソフトタイプを許せないの。そんなに柔らかいのを食べたいなら、最初から生の烏賊を食べれば良いんだ！そんなに硬い物が嫌いなら全粥でも啜ってれば良いんだ…！イカの姿フライは硬いからこそイカの姿フライ足り得るんだよ！私ね、将来はとっても偉くなりたいの。そしたらね、この国からイカの姿フライのソフトタイプという概念を消してやるの。あはっ、あはは！資源だつて無限じゃないんだ。だったら、誰にも需要のないソフトタイプよりも硬いイカの姿フライを製造した方が世のため人のためじゃないかな？そうだ！大赦の元老院つて総理にも口出し出来るんだよね？だったら、郡家の当主になつたらまずは大赦を支配しよう！そしたら、政治家のみんなの弱みを握って、総理大臣を操って誰も口答え出来ない様にして！うーん、夢が広がるね♡そうだ！将来的にイカの姿フライが国民食になるんだし、みんなにも今の内からイカの姿フライの良さを説かないと☆まず、まずはだよ！なんとと言っても食感！うーん、脳からエンドルフィンを引き摺り出されちゃうね！チツ、それなのに世の馬鹿はソフトタイプとか生み出してやがるんだよね。あーあ、滅びればいいのに。イカの姿フライは濡れ煎餅じゃないんだし、ソフトにするとか愚行だよ！神への冒瀆なんだよ!!だつて、だつてだよ!!イカの姿フライって――」

「うつつつさいわあああ!!」

「ふぎやーい、痛つたああい!!」

私の夢について熱く語っていると、ザフキエルくんがチョップしてきた！酷い!?女の子を叩くなんて最低だよ!!

みよっしー・煮干し・ザフキエルくんを睨み付けると、鋭い眼で睨み返される。ぐぬぬ…ザフキエルくんのクセに生意気な！…あれ？心做しか、友奈太郎くんと美森太郎くんがザフキエルくんに感謝の念を送ってる？

どうしよう！ここにきて初めて、彼らが非国民である疑いが出てきてしまった！もうっ、これだから香川県民は…！きつと、うどんに狂い過ぎて国民的ソールフードであるイカの姿フライを愛せないんだ。なんだか、みんなが可哀想な生き物に思えてきた。

「よ、よーし！早く部室に向かおうよ！先輩達が待つてるよ？ね、東郷さん！」

「そうだね、友奈太郎くん。みよっしー君のせいで時間を食ってしまった」

「はあ？俺じゃなくて唯子のせいだろうが。チツ、東郷は相変わらず唯子には甘いぜ。お熱な事でナニヨリ、指を啜えて見てればいいのに」

「…？ザフキエルくん、よく分からないけど人の悪口はダメだよ？」

「誰のせいだと思って…：はあ、もういいや。早く煮干し食いたい」
みんなが疲れた様子で廊下に出て、部室に向かう。何かあったのかな？みんな変人だから、四国の代表的常識人である私には分からない苦悩でもあるのだろうかー。

ポケットから取り出したイカの姿フライを頬張って、私もみんなに続いて廊下に出た。

教室を出てから三分も経たない内に、家庭準備室——勇者部の部室に到着する。

「こーんにーちはー！」

友奈太郎くんは元気いっぱいドアを開ける。

勇者部の部員である犬吠埼兄弟はチラリと視線を向け、ニツコリと笑った。イケメン兄弟にそんな顔を向けられたら、女の子は誰だって

赤面してしまうよお…っ／＼／＼
「うどーん、後輩共め うんどん！ 今日も今日とて群れねえ うどんうんどんどうんどおおんおん。
仲良きことは美しきかな うどーんうどうんんどど、だね どん」

犬吠埼兄弟の兄、ムーミン太郎先輩は爽やかに言い放つ。高身長から下ろされる優しい視線は後輩の女の子を虜にしてしまう。

私だって、未だに全然なれないよ…：それでいて、先輩は後輩に甘い。まさに後輩キラード。

「うむ、先輩共よ。昼時である故、疲れ様と言うべきか。然し我は敢えて、こう言おう！こんにちは、と!!」

弟の犬吠埼覇者二郎くんはちよつぱり幼い見た目の、後輩だ。柔らかい髪と私と同じくらいかほんの少しだけ低い身長は保護欲や母性を刺激する。

先輩が後輩キラードなら、覇者二郎くんは先輩キラード。小動物みたいな彼はぎゅつと抱き締めたくなっちゃう♪

「ムーミン太郎先輩、覇者二郎くん。こんにちは、です」

「こんにちは うん、唯子 うどん。 今日のお昼もイカの姿 うどんうんどんうどどど——」

「待たれよ、兄上。其の話題は…止める事を推奨致す。我の勘が告げよるわ…止めろ、と」

「俺も同意するぜ、ムーミン太郎。さっきのクソ長話…もう聞きたくない…」

「う、そ う、そっか うどんか。

アンタ達が必死なのは分かった うどおううどんどうんどん。

後輩達の警告を無視するほど うどんどうどんどうどんどうどん

オレも馬鹿じゃないつもりだしなあ ううんどーどんどうどんどうど

「うむ、其れが良からう」

「え？え？みんな、どうしたの？」

「君の話だよ、唯子ちゃん。相変わらずの無自覚なんだね。無知を罪とは言わないけれども、知る努力はして然るべきだ」

「…美森太郎くんは、いっつも難しい事を言うんだね。よくわかんないなあ…覇者二郎くんは解る？」

「う、むむ…ッ。唯子先輩よ、我とて万能ではないのだ。腕っ節のみで

「却下、消せ、消去しろ、今すぐ塵も残さず処分しやがれ。いや、むしろ俺が処分してやる」

「あつ、ちよつ!? あ、あ、あ、あ、!!? 原稿用紙を燃やさないでくつ!!」

唯斗は園子から用紙を奪い去り、焔炉の火に焚べた。チリチリと焼き焦げる度に駄々をこねる園子を眺め、ただ一言『ネーミングセンス腐ってるのか?』と小さく呟くのがあった。

◆◆◆おまけ◆◆◆

《結城友奈太郎》

・天然なイケメン君。整った容姿と、誰にでも優しい性格。その上で偶に見せる幼さとのギャップで唯子ちゃんを虜にする。美森太郎くうんと付き合っていると噂が後を絶たない。心做しかスキンスリップが多い。でも、誰にでもではない。

《東郷美森太郎》

・真面目なイケメン君。鋭い眼と、然し親しい者にしか向けない優しい瞳は無意識に唯子ちゃんを惹き付ける。アソコが戦艦大和級³らしく、敬意を込めて東郷さんと呼ばれている。でもチキンでヘタレ。唯子ちゃんに触れる事も出来ない。

《みよつしー・煮干し・ザフキエル》

・ツンツンなイケメン君。周りからはクールな優等生として扱われているが、同部員の前ではツンとテレを過剰に曝け出している。唯子ちゃんから親友として見られているが、ちよつとだけ不満ボーイ。もう少しだけ意識して欲しいお年頃男子くん。

《犬吠埼ムーミン太郎》

・明るく世話好きなイケメン君。身長が高く、細マッチョ。おちゃらけた発言や低度のセクハラもするが、愛すべき憎めない先輩。唯子ちゃん曰く、実は一番モテる。でも意中の相手には未だ振り向いてもられない。フーミン先輩がムーミン太郎になった。カイリユウ体型ではない。

《犬吠埼覇者二郎》

・可愛い子犬系イケメン君。反抗期でちよつとだけツンツンしてい

るが、まだまだ甘やかされたいお年頃。よく唯子ちゃんに抱き締められていたが、本人も満更では無い。最近の悩みは好きな人から異性として見られていないこと。ちゃんと覇者。

覇者ちゃん覇者ってるう！

友奈が風に会ってから数時間。

電話で唯斗と情報交換をした後に、次は樹と待ち合わせをしていた。目的は無論、天の神を倒すために協力してもらおうのだ。

もう言うまでもなく、勇者の最高戦力は犬吠埼樹だ。最初は弱々しく、保護欲を刺激するか弱い少女だった彼女。いつの間にかバグって覇道を歩む者となってしまった後輩。

彼女が協力してくれるのであれば友奈にとっても千人力だ。個にも数にも柔軟に対応出来る樹は何者にも替えれない存在なのだ。

「樹ちゃん、急に呼び出してごめんね？」

集合場所と言っても、アパートの一室である犬吠埼家だ。姉である風が本日をもって退院ということもあり、軽く掃除でもしようと樹が前もって戻って来た次第だ。

「いえいえ。私もちようど手が空いたので！」

「…？あれ、もしかして忙しかったの？」

「忙しかったというか…なんて言えばいいんですかね？東郷先輩のそつくりさんを処理…もとい！お仕置していました」

「え」

「いやー、急に無言で襲いかかってきて驚きましたね。片付けるのに一分半もかかっちゃいましたし、捕まえたと思っただらいつの間にか逃げられちゃいますし。不自然に人の気配がなかったので、神樹様が何かをしてくれたんですかね」

「……………さつき唯斗くんが言ってた、私のそつくりさんと同じなのか。流石に偶然とは思えない…：樹ちゃん相手に一分半も持つって、一般人じゃ有り得ないだろうし」

友奈が実物を見た訳ではないが、唯斗からの情報によると其れは偽物ではないらしい。黒髪の『友奈』が結城友奈であったように、樹がしばいた東郷美森も姿形と記憶、意識は間違いなく彼女なのだろう。

言うなれば、自分達とは別の歴史を歩んできた自分。成れの果て、

という言葉が何故かシツクリと噛み合う気がした。

「け、怪我とか…」

「あははっ、アレくらいじゃあかすり傷も付きませんって」

「あっはい」

またまたご冗談を、とでも言うように樹は笑った。友奈は慄いた。

唯斗と夏凜の前に現れた『友奈』は単騎性能に関しては戦車を思わせる程だ、と唯斗は話していた。ならば、樹の前に現れた『東郷美森』も同程度の力を秘めていたと考えるに難くない。

それを一分半で片付けたのだから、樹の実力は他の勇者よりも圧倒的なのだろう。

「それで…友奈さん。お話っていうのは？」

「……覇者ちゃん」

「覇者じゃなくて樹です」

「あ、間違え…間違えてないよ？…まあ、改めて。樹ちゃん…天の神を倒したいの。協力してくれないかな？」

「あ、はい。了解です！」

「……………えっ、いいの？」

「はい。色々と辻褃が合ったと言いますか、何となく察してはいたんです。何でお姉ちゃんの前が精霊が機能しなかったのか、どうして唯斗先輩と友奈さんが隠れて何かをしているのか。さっきの東郷先輩擬きのこともありますし、きっと原因は天の神なんですよね」

「……………」

「だから、私なんかの微力でも——」

「微力…？」

「私の微力でも皆さんの役に立てるなら、本当に嬉しいんです。それに…やっぱりこれも私のやりたい事だったんです！」

「おっきい微力だなあ…」

——樹は頬を綻ばせる。

彼女は建前ではなく、本心から嬉しいと告げている。唯斗にずっと隠し事をされているのは、居候を始めた初日から察していた。それでも彼女は何も聞かなかった。

自分よりも唯斗を理解している園子が『待っている』と平常心を努めて話していたのだ。

そんな先輩を差し置いて、樹が唯斗を問い詰める事は出来なかった。だからこそ嬉しい。友奈が自分を誘ってくれているという事は、唯斗が皆を巻き込む覚悟を決めたからだ。

そも、友奈が友達を危険に巻き込まない質であるが故に、唯斗が提案したと察するのは樹にも難しくはない。

「お姉ちゃんも協力してくれるんですか？」

「風先輩は……ごめん、まだ分からない」

「……お姉ちゃんが断るとは思えませんし。もしかして、また小難しいことか言われたんですか？最近のお姉ちゃんは変に哲学的なことを言いたい年頃っぽいですからね。受験勉強のせいですかね？」

「…小難しいこと……うん。たぶん、とつても簡単なことかな。樹ちゃんも唯斗くんも、夏凜ちゃんや東郷さんにだって判る簡単な事。…私だけが分からないこと」

風は友奈に告げた——戦う理由を見つけろと。他の誰にも依存しない、結城友奈が結城友奈のために戦える理由。

未だ、友奈には其れが分からない。天の神からの刻印が自分だけに刻まれていたら、きっと友奈には“戦う”という選択肢は浮かばなかった。

故に、言ってしまうえば友奈には戦う理由がない。

無論、自分と同様に呪いに侵された唯斗を助けないという気持ちはある。それが理由の殆どだった。其れを、風は“他人に依存している”と指摘したのだ。

大赦の神官から『神婚』を頼まれた時、友奈は唯斗が居なければ確実に受けていた。

「戦う理由……それが、やっぱり分からない。唯斗くんのため…唯斗くんを助けたいから。……それじゃ駄目なのかな…」

「戦う理由ですか…私が思うに、友奈さんは難しく考え過ぎだと思います」

「難しく考え過ぎ……？」

「どんな事情があるのかは分かりませんが、きつと…唯斗先輩は生きたいから戦うんです。友奈さんは違うんですか？」

「違くないけど…それも、唯斗くんの”理由”に乗っかってるだけだよ。生きたいけど、みんなを戦わせて…傷付けてまで生きたいだなんて思えない…！」

友奈は縛られている。唯斗からの期待、風を傷付けた罪悪感、刻々と迫るタイムリミット。その全てが友奈を縛り付ける。

「…友奈さんは、どうして大層な理由を求めますか…」

物凄く呆れた、とでも言いたげに樹は溜息混じりの言葉を吐く。

「生きたいから戦う。もつと勇者部のみんなと居たいから戦う。誰も死なせたくないから戦う——お姉ちゃんの好きそうな言葉を敢えて使うなら、理由なんてどうでもいいんです！」

「っ！い、樹ちゃん…！それは…あまりにも身勝手だよ。自分の我儘を押し付けるだけなんて——」

「誰だって…」

「っ!？」

「…誰だって、自分の我儘を他人に押し付けるモノなんです。友奈さんの言ってる事だって、私に友奈さんの価値観を押し付けてるだけです。そういうの…もう止めましょうよ。私達は…勇者部は、遠慮を重ねた末に完成した烏合の衆だったんですか？本音も我儘も言えない、外面だけの関係なんですか…?」

「…違う。違うよ…！」

「なら、友奈さんの悩みも見当違いです」

断言される。友奈の悩みは無意味だと、完全に見当違いなのだとは断言する。普段の彼女から外れる、何処となく慈愛が籠った微笑みは姉の風と重なった。

友奈には理解が届かない事柄を、樹は容易く言葉にしてしまう。だからきつと、こんなにも友奈には眩しく見えてしまう。

勇者に憧れる少女には、樹が勇者に見えてしまう。

彼女には似合わない気取った言葉は姉のモノマネなのだろう。でも、樹自身の本音も乗せている。そんな彼女に魅せられて、友奈が何

時までウジウジとしているのは——柄ではない。

「…樹ちゃん、ありがとう」

「答え、見つかりましたか？」

「ううん、全然かなー」

「ええ…せっかく格好つけたのに」

「あはは、格好良かったよ？……答えなんて見つけなくても、最初から私の中に在ったんだ。樹ちゃんの言った通り、私は似合わずに難しく考え過ぎだったんだ！たぶん、私は何処までも人の為に戦う。きつとそれが結城友奈のやりたいことだよ！」

「後悔しませんか？それは、平和のために身を犠牲にするって言うているんですよ」

「ううん、違うよ？私が——結城友奈がこれからもずっとずっと、勇者部のみんなと過ごしたいから。そんな望みを自分で叶えたいだけ！」

——人の在り方は変えられない。

でも、これは依存じゃない。初めて、結城友奈が結城友奈のために戦うのだ。望みはただ一つ、勇者部のみんなと共に過ごすついでに世界も救う。

そんな自分勝手に、身勝手な所業。唯斗や東郷は決して掲げない目的はやはり、誰にも依存しない結城友奈の在り方だ。

大層な理由なんて必要なかった。友奈は身内の為だけに戦うのであって、世界を救うのはその結果に過ぎない。

「樹ちゃん、いつの間にか大人になったんだね。あんなに小さかったのに…」

「…ええ、小さい子だと思われてたんですか!?歳だつて一つしか変わらないのに…」

「風先輩の妹で、私たちの後輩だからね。護つてあげたくなる存在？……みたいない！でも、もうそんな事は言えないね！覇者つてるし」

「だから覇者つてるってなんですか!?!」

二人で一頻り笑った後、友奈は駆け出した。先輩に、聞いて欲しい。自分の戦う理由を。何処までも勇者である自分が、やはり勇者ながらも成長した様を見て欲しい。

そんな子供じみた考えを、きつと先輩は朗らかに笑って受け止めるだろう。そんな光景に頬を緩ませながら、友奈は風の元へ走るのだった。

◆◆◆オマケ◆◆◆

《結城友奈》

・DQ法式で地道なレベル上げをして強くなる。レベル式アクションゲームの人。でも最終的には覚醒演出で良い感じに勝つ娘。主人公であり主人公。つまり主人公。

《犬吠埼樹》

・一人だけ勝手に強くなる世界観にいる人。もうこの世に犬吠埼樹という概念が存在するだけで勝手に戦力増強し続ける娘。とてーもつよい。

《郡唯斗》

・ノリとテンションで初期ボスに負けたりラスボスを圧倒したりする、レベルの概念のないアクションゲームにいる人。操作性は最悪だけど、上手く扱えれば裏ボスにも通用する阿呆。RTA走者が好む。

《東郷美森》

・FPSの世界で屈伸反復横跳びをしながら隣のRPGゲームに乗り込む変人。どの世界観でもヤベー奴。死にゲーでらんらんスキップをしながら逆立ち散歩する謎生物。

相棒

「んー、あとは銀だけか」

三好夏凜と東郷美森を誘い、残るは三ノ輪銀のみ。

だが、唯斗に憂いはなかった。あの相棒の答えなんて簡単に想像出来るし、三ノ輪銀が三ノ輪銀で在る限りは覆し様もない。

彼女は無謀に立ち向かう勇者だ。ならば、極端に換言するのであれば誘う必要すらない。銀ならば三好夏凜と同じく、たった一言です承するだろう。確信があった。一番楽に誘えるからこそ、一番最後にしたということもあるのだろう。

「確かこの辺に……あー、居た居た。おーい、銀チャーン」

「ん？…なんだ、唯斗かよ。見ての通り、今忙しいかは後にしてくれる？」

「おーけー。てか手伝うけど」

「おっ、マジで？サンキュー！」

唯斗がアポなしで銀に会うために訪れたのは——近所のスーパーマーケットだ。時間帯も丁度夕暮れ時であり、運が良ければ三割引の商品も置いてある。

銀だけでなく唯斗や風も頻繁に來ている場所だ。特に今は月末であり、銀が居ない理由を探す方が大変なくらいだ。

買い物カゴを唯斗に渡し、主婦の群れる卵コーナーに意気揚々と突っ込む銀を見送り唯斗は静かに敬礼した。

「それで、何か用か？」

「まー、ちよつとしたモンだよ」

パンパンに膨らんだエコバッグを担ぐように肩に掛け、嬉しそうに眺める銀。やはり年頃の少女と言うよりは節約術を会得した主婦だ。

一人暮らしなのだから何かと節約して、残った生活費をお小遣いにもしているのだろう。まだバイトも出来ない中学生ながらの努力は好物であるジェラートの為だった。

夕日で赤く染った道を並んで歩きながら、銀の問い掛けに唯斗は軽く答える。

「相棒、天の神に挑むぞ。予定空けておけよな」

「唐突だなあ……別にいいけど、後で日程とか知らせてくれよ？準備とか色々あるんだし、作戦とか鍛錬とかも」

「オツケー、サンキューな」

「はいはい、もつと感謝しろよなー？うどん二回で手を打ってやろう」
「ええ…奢りかよ。別にいいけど」

——結局、この程度なのだ。

唯斗と銀は互いを信頼している。故に、そこに理由なんて必要ない。相棒が命を懸けて戦うと言っているのだから、それ自体が理由となるのだ。

他の誰でもなく、相棒が故にこそ。無償の信頼と無益な信用で成り立つ関係性。それをいとも容易く——否、そう在る事が当たり前だった。

何よりも愚直だ。不純物のない真つ直ぐな信頼は唯斗と銀だけのものだ。

「他のみんなは？」

「友奈と夏凜、美森に樹は協力してくれるって。パイセンと園子は友奈次第だけど…声色的に、パイセンはイケると思うぜ？」

「じゃあ後は園子かあ。アレか、友奈が交渉してるの？」

「ソダヨ。俺と友奈の悪巧みなんだし、分担してるってワケ」

今頃は友奈も二度目の風の説得を終え、唯斗と同様に三人目を勧誘している最中だろう。その相手が園子という事もあり大凡の事情は既に理解していてもおかしくはない。

そもその話、唯斗には勇者部の皆が断るとは欠片も思えない。正確に言うなら、風は現実的な判断で本心を隠すだろうが、最終的には後方先輩面で手伝ってくれるだろうと予想していた。

奇しくもそれは当たっており、風とは逆にたった一言で了承した軽はずみ馬鹿が三人と勘違いで話をややこしくした阿呆が一人。

いずれも呪いが感染しない程度の事情は後日まとめて話すつもり

だ。雪白が。

「へえー……………ん？んん？」

「どした？某鳥類^雀を星屑の前にぶん投げた時みたいな汚ねえ声なんか出して」

「いやどんな状況だよ!?!じゃなくて、唯斗さ。美森のこと美森って呼んでたっけ？」

「何を今更。一億と二千年くらい前から呼んでただろ」

「誤魔化すの下手か？」

「因みににぼっしーは四十六億年前からにぼっしーって呼んでた」

「地球誕生と同時か？」

「地球誕生といえ、イカの姿フライって過去に滅んだ広島県の呉市って場所が発祥地なんだぜ？」

「だから誤魔化すの下手か？」

唯斗が東郷美森を美森と呼ぶように強制させられたのはつい数時間前であり、その本人からはダイレクトに恋愛的好意をぶつけられている始末。

なんなら既に告白もされているし、それを何も思わないほど唯斗も人の心を失ってはなない。

端的に換言するならば、頗る恥ずかしい。

ならば人前では呼び分ければ良いのだが、生憎と唯斗はそこまで要領の良い頭をしていない。そんな細かい所にまで割り振れるほど脳の容量は残っていないのだ。

複雑に絡み合っている状況に、悩みの大半を占める賢者^{束ねる者}の能力。それに加え父からのアドバイスや三体の精霊から託された切り札の使い道。

恋愛事に現を抜かしている現状ではないというのは分かっているが、それでも恥ずかしいモノは恥ずかしいのだ。

「お前ら、昔に比べて仲良しになったよな」

「昔かあ…そんなに陰悪だったの？」

「そりゃあもう、美森……………須美が喋れば唯斗が突つかかるし、唯斗が喋っても逆に須美が喧嘩をふっかけるし。殴り合いにならなかつた

だけ奇跡だよ」

「犬猿かよ、ウケる」

「ウケないぞ…っーか、単純に性格が真逆だったんだよな。真面目でお堅い須美と、不真面目でどちらかと言えば園子に似てた唯斗。そんな二人でも、実は唯斗の方が誰よりも努力していて、現にアタシ達の中で一番強かったんだ。須美だって気に入らなかつたんだらうね」

「おいおい、美森ってそんな質たちか？」

「変わったのはお前だけじゃないって事だよ」

唯斗ほどではないにしても、鷲尾須美だった彼女も変わったのだと銀は告げる。たった二年間、と言うには濃密過ぎる時間だった。

きつと、あの頃から全員が良くも悪くも変わってしまった。

須美は考えが柔軟になり、自分の意見を押し付けなくなった。友奈の友愛に当てられ、理想と妥協を見つけたからだろう。

故に、東郷美森は私の強い大和撫子足り得ている。

唯斗は誰かの真似事を辞め、自分の為に戦えるようになった。染まることと愚直な猿真似の違いを真に理解したのだ。

故に、郡唯斗はアンバランスを受け入れられた。

園子は人を疑うことを覚え、然しその上で人を信用しようと努めている。満開の使用を隠されていて、それでも思うのは次代への助けだった。

故に、乃木園子は変わらない事の尊さを識る。

銀は無邪気な色がくすみ、冷静さを学んだ。もう紅一色では在れないが、其れが大人になるということなのだろう。

故に、三ノ輪銀は成長して前進し続けれる。

「成長してるんだよ、アタシ達は」

「成長かあ。樹は覇者になるし、美森は変態になるし。いい事ばかりでもないんだよな」

「小さい頃は虫を触れるけど、大人になると触れなくなるって言うだろ？あれと同じだって！覇者ってるのは知らんけど」

「言い得て妙だなあ」

しみじみと語るも、唯斗達が変化に有したのはたった二年間でしか

ない。大人には短く、子供にとっては決定的な二年。

本当に、様々な事があつた。戦い、失い、次は失わないために戦う。自覚こそないが、それが成長なのだろうと自分に言い聞かせる。

「……ありがとな、相棒」

「なんだよいきなり……へっ、天の神なんか銀さんに任せなさいな、相棒」

拳をコツンとぶつける。記憶のない唯斗だが、不思議とこの動作には既視感があつた。

記憶は失つても、魂は忘れない。郡唯斗と三ノ輪銀はどれだけ記憶を失つても、きつと最後には相棒で在り続けるのだろう。

理由なんて無くとも、そんな気がした。

なんだ……？なんだ、なんだ、なんだ！アレは一体、なんなんだ!?

妄執は取り乱す。

吐き気がするほど、妄執たる自分と正当な勇者の一員である彼女には明確で越えようのない壁があつた。自分の知識に在る彼女と同じ外見で、同じ性格なのに——戦闘においては全てが違う。

雰囲気ですべてを飲み込み、気が付いたら戦闘不能にされている。そんなのは理不尽でしかなくて、相性や力差どころの話では無い。

少女は——妄執の勇者はもう捨てた筈の”恐怖心”が蘇るのを粟立つ肌で感じた。

其れの役目は、彼に群がる女共を殲滅することだつた。闇討でも、不意打ち、騙し討ち、その全てを使って目的を達成する筈だつた。

なのに、一回目から失敗した。完全な死角から容易く命を刈り取る弾丸を、避けようのない近距離でぶち込んだのに。勇者は腕部分の勇者衣だけを展開し、さして気にした様子もなく目もくれず、瞬時に超圧縮した鉄糸で弾丸と銃を切断された。

そのまま、一分後には妄執の勇者は身体の支配権を奪われた。光の反射のみでやつと見える極細の糸は彼女の毛穴から侵入して、絡むように全身の筋肉を操り、操り人形マリオネットの如く身体を奪われた。

妄執は忘れない。一言も発せず、然し明るい外でも妖しく光る芽吹色の瞳を。小さな体から発せられる威圧的覇気は妄執たる彼女を未だに震えさせる。

距離は意味を成さず、無情な弾丸の乱射も遊ぶように全て包み落とされ、攻防とも言えない蹂躪劇は二分と持たなかった。

——用意された逃走手段がなければ、自分の身は今頃……

そう考えると、妄執の勇者はまた彼女を思い出し、苛立ちと恐怖心を掻き立てる。きつと、忌々しくも同じ立場である彼女達と協力したとしても、勝てない。

切り札を使い、新たな力を存分に振るったとしても、あの上はまだ『満開』も残っているとすれば勝てるビジョンが浮かばない。

『犬吠埼、樹……ッ！唯斗君の匂いを濃く纏った、泥棒猫！許さない、許さない、許さない許さない許さない！どんな手段を用いても殺す……ッ!!』

『へえー、妄執東郷さんだったらたった一人の勇者に苦戦したんだー。大丈夫？今度からは手伝ってあげようか？』

『……復讐ちゃん、あなただって例外じゃないわ。唯斗君に関わる人は全て殺す。神だって、家族だって。この世界には私と唯斗君だけでいいもの』

『もくっ！今は一応、仲間なんだよ？ねー、みんな？』

『……』

『アハッ、みーんな無口になってる♡まあ、贖罪樹ちゃんは喋れないんだけどね。不憫だなー、哀れだなー。目も見えないし、声だってホントーに届いているのかも怪しいし。あは、アハハッ！あー、おつかしいー♪』

『復讐友奈ちゃん、少し黙ってくれる？貴女の作り嗤いは気持ちが悪い。不快よ』

永遠に灼ける空間に、復讐の勇者の嗤い声が不気味に響く。全員にとって、自分以外の全てが敵であり同業者とも言える。

嘗て神樹の勇者だった者たちは次を待つのみ。次の機会、勇者を狩れる日を。其れが明日か明後日か、もしかすれば一ヶ月後かもしれない

い。
——罪を負う者達はただ延々と、機会を待つのだ。

醜い本音と勝手な我儘

「ゆーゆ、戦おう」

「そ、園ちゃん…？どうしたの…？」

「手加減なんかしたら、嫌だよ？」

友奈の眼前に突き付けられる槍。困惑を孕む声を無視して、乃木園子は武器を振り上げた。

時間は遡る。

自分の戦う理由を見付けた友奈が、二度に渡り風を説得した後。最後に勧誘するのは乃木園子であり、その待ち合わせに指定された場所は寂れて人気ひとけのない、壊された瀬戸大橋の近くだ。

友奈が初めて彼女を認識した地であり、遠くではあれど勇者に変身すれは行き帰りにもそう時間もそう掛からない。

もう殆ど日が沈み、微かな月光と夕陽が夜の帳と混ざり空を靨色に染める。

「……おーい、園ちゃん？」

街灯は無い。

徐々に暗くなる辺りに恐怖心を煽られ、思わず声を上げた。耳を澄ましても返ってくるのは反響した自分の声のみであり、孤独感に襲われる。

孤独に耐えきれず、まずは電話でもかけようかと携帯端末を取り出すと――

「わっ!!」

「わひゃあっ?」

「あはは、ゆーゆ驚き過ぎだよ〜♪」

「園ちゃん…？…もっつ、驚いちゃったよ！いつから居たの？」

「ふっふっふ〜！なんとなんとの一時間前からスタンバってました！季節が季節だし、勇者の格好でも寒いんよ…」

「ええ…身張りがすぎだよ…?」

「どやあ……」

嘘か誠か、この寂れた場所に一時間前からスタンバイしていた園子。防人程ではないにしても、防熱耐冷に優れた勇者服。其れを装着していたとしても、やはり雪が降るような季節では寒い。

余裕を持ってドヤ顔を晒せるのだから凍えているとは言い難いのだろうが、友奈はかける声が見つからなかった。

「……あのね、園ちゃん」

「——ゆーゆ、解ってるよ。ゆーちゃんとゆーゆの目的は天の神でしよう?」

「えっ!?も、もしかして……」

「ううん、ゆーちゃんからは聞いてないよ?単にそんな気がして、そう考えたら色々と噛み合っちゃっただけだよ。ピツカーンと思いついちゃったってことかな?」

彼女の笑みに陰が浮かぶ。最悪の予想が当たってしまったていた、と表情が告げているのだ。怒りと悲しみは、一体誰に向けられたものなのか。追い詰められるまで気付けなかった自分か、それとも元凶である天の神か。

もしかすれば、その感情は解放する所のないものなのかもしれない。いや。

聡いが故に、どうしても園子は自分の内心をひた隠してしまう。親しい者が相手ならば尚更だ。

「……やっぱり、園ちゃんは凄いな。そんな園ちゃんだからこそ、力を借りたいの!お願い、私と唯斗くんに力を貸して!!」

「……………」

「……園ちゃん?」

「……ゆーゆ」

笑みが消え、園子の表情は能面の様に固まる。腕で空気を撫で、いつの間にか舞っていた水蓮の花弁を掴み薄紫の槍を出現させる。

「——ゆーゆ、戦おう」

「そ、園ちゃん……?どうしたの……?」

「手加減なんかしたら、嫌だよ?」

「っ!!」

槍に似合わない、石突きを両手で握つての全力の横薙ぎ。友奈は咄嗟に身を低くして避けるが、それを嘲笑う様に降り注ぐ無数の穂先。バリアを貫通して襲いかかる攻撃を籠手で弾き、友奈は距離を確保する。

友奈の胸が——刻印が煮え滾る様に熱を持つ。刻印を介し、天の神が精霊の働きを邪魔しているのだろう。

「何で…ッ!仲間同士で争うなんて…」

「ねえ、ゆーゆ。私はね、ゆーゆが思うほど良い人じゃないよ。だって、こんなにも…ッ!!」

「く…っ!はあああ!!」

不規則な動作で飛来する無数の穂先を、友奈は拳で叩き落とす。一つ一つは強度も脆く、友奈の攻撃に耐えれずに割れる。

然し、その数は殆ど限りがないに等しい。園子自身の攻撃を援護、もしくは友奈の逃げ道を防ぐように展開された槍先は園子だからこそ使いこなせるモノだ。

「こんなにも…ゆーゆが羨ましい…ッ!」

「っ!羨ま、しい…?…園ちゃん、怒るよ…?本当に状況が…私と唯斗くんの気持ち解るなら、今すぐに訂正して!!」

「だから言ったよね。私は、ゆーゆが思うほど良い人なんかじゃない!!」

「っ!!この…っ、勇者パアアアンチイ!!」

「ぐっ!」

連弩の如く飛来する穂先を潜り抜け、放たれる友奈の渾身。咄嗟に槍の先の盾を展開し受け止めるが、その威力は絶大だ。

ノックバックする園子の盾に向けて続け様に放たれるアツパークットは槍を高く打ち飛ばした。

然れども、園子とて無策で受け止めた訳ではない。

盾で隠されていた先には、友奈を真似たように無数の光る槍先で構成された籠手を纏う園子の姿が在った。

「往くよ、ゆーゆ。『勇者パンチ』ッ!!」

「はああああ!勇者ペアアンチイツ!!」

「はああああああ!!」

きつと、その気になれば友奈が連続で打ち込み、園子を殴り飛ばす事だって出来た。それでも敢えて友奈が一撃に一撃のみで返したのは、決して手抜きなのではない。寧ろ、この一撃だけは絶対に負けられないからこそ、友奈は全力で応えるのだ。

「負けない…っ!全部、全部!園ちゃんの気持ちごと受け止めてみせる!!」

「やって見せてよ!私を…乃木園子を諦めさせてよ!!」

——『羨ましい』

園子は友奈に、そう告げた。

其れが園子の本心だった。何も隠さず、何も飾らず。自分の最も醜い部分を曝け出して、初めて友奈の怒りを引き出したのだ。

乃木園子は郡唯斗が好きだ。ずっと前から、誰よりも前から、誰よりも弱くて寂しがり屋の少年に恋慕を抱いていた。

だからこそ、ずっと隣りに居たいと願った。逢えなかった二年間を埋めるように、両親を説得して郡家の居候になった。彼の両親に掛け合って、婚約者の候補となった。羞恥を押えて物理的に彼の隣りに居続けた。

なのに——それなのに、今、彼の心に一番寄り添っているのは誰か。そう聞かれたら、乃木園子は認めてしまった。その相手が自分ではなく結城友奈であると心の底から思ってしまった。

だからこそ羨ましい。

不謹慎なのだと解っている。真実を察した今、彼女達の葛藤と苦しみを理解しているのは二人を置いては園子だけだ。

それでも、やはり妬ましい。呪われてでも、彼に寄り添いたかった。一番最初に彼を助けて、彼の気持ちを独り占めしたかった。

——嗚呼、解っている。

こんなのはただの嫉妬だ。勝手すぎて、しかも二人の気持ちを見殺した愚考でしかない。自覚しているからこそ——諦めさせて欲しい。「カハッ……ま、だ……まだ……ッ！この程度じゃあ、私は諦めないよ!!」

「っ……!」

園子が拳に纏った箆手が崩れた。然し、いつの間にか手元に戻っていた槍は空気を穿ち友奈に向く。身体を中心に向けられた刺突は、拳同士を撃ち合った近接では躲せない——筈だった。

「——園ちゃん、私だって強くなってるんだよ」

「なっ……!」

同時に放たれる拳撃は槍の下部に掠り、箆手の上を滑らせる。そのまま友奈の右肩の上を通る槍は腕を振り上げると同時に友奈の後方に投げ捨てられた。

——『鍛錬場』で友奈が会得した技。

それは受け流しだ。友奈には両手の拳しか武器がない。爆弾なんて出せないし、精密な鉄糸や投擲用の小太刀もない。たった二つの、然しこれ以上ないほど精密に動かせる武器だ。自分の体

攻撃に対して、攻撃で返す。これまでの戦闘スタイルはまさにそうだった。

其れを昇華させたのが、攻撃を攻撃で受け流すバトルスタイルだ。友奈の攻撃力と反射速度、そして言葉通り自分の手足のように扱える武器があるからこそ成り立つ”技”だ。

武器を完全に失った園子は詰まった言葉を飲み込み、静かに変身を解除した。

「……………わたしの、負け……だね……」

「うん、私の勝ちだよ」

「ごめん……ごめんなさい……勝手な我儘でゆーゆを傷付けたよね。本当なら、こんなこと……言うべきじゃなかったのに」

彼女の言葉をゆつくりと咀嚼し、込められた感情を読み解く。軽は

ずみや感情論で返して良い言葉ではない。あの時と同じだ。

あの月光が照らす浜辺で、唯斗が本音を曝け出して、同じく友奈も彼に嘘偽りない気持ちで応えた時。内容は違えど、本質は同じなのだろう。

「…それが、園ちゃんの本音なんだよね」

「うん、軽蔑したでしょう？私はね、ゆーちゃん……郡唯斗くんが好き。恋愛の意味で、あの人を慕っているの。だから、悔しかった。どんなに頑張っても、どんなにアピールしても……本当の意味で彼に寄り添えるのは貴女だけだよ」

「……そっか」

「白状するよ。ただの嫉妬だよ、これは」

淡々と語る彼女は、心做しか晴れ晴れとした表情だった。全てを諦めたような、決して良い意味には成り得ない微笑だ。

「園ちゃん」

「なあに？」

「私は、園ちゃんが羨ましいよ」

「……………どうして？」

「ちゃんと、自分の気持ちと向き合ってる。私は唯斗くんに促されて、風先輩に叱られて、樹ちゃんに背中を押されて……それでやっと、自分の気持ちが解ったの。だから、すっごく羨ましいな。私も園ちゃんと同じくらい賢かったら、もっと上手く立ち回れたんじゃないかなって、ずっと思ってる」

「でも、私はゆーゆみみたいに綺麗で潔白には在れないよ？」

「綺麗でも潔白でもないよ。私と園ちゃんは同じだもん！園ちゃんは本音と我儘を私にぶつけてくれて、私は言葉を濁して園ちゃんを我儘に巻き込んでるんだもの」

友奈が行おうとしている事は、世を救うと大義名分を語れるようなものではない。天の神を鎮めなくとも、神婚の儀で人類を救う道がある。

なのに、友奈は戦うことを選んだ。それを我儘と呼ばずして何と称するか。

「園ちゃん、諦めさせないよ。最後まで我儘と願望を抱いたまま、平和な世界と一緒に築こうよ！唯斗くんの言葉を借りるなら——最っ高のハッピーエンドを目指そうよ!!」

「っ!!」

「決めたんだ……巻き込むって！園ちゃん、無理矢理にでもハッピーエンドに連れて行くよ」

「は、はは……ゆーゆには敵わないね。それも我儘？」

「もちろん！」

「……じゃあ、私も我儘を言うね——私をゆーゆ達の隣りで戦わせて。私が私の大好きな人達を助けたいから、戦うよ。神様が相手だとしても」

「うんっ、よろしくね♪」

友奈もまた変身を解き、園子に手を差し出す。強い握手は本音をぶつけ合った彼女達の新たな友情の形だ。例えるなら、これから共に戦いに臨む戦友のような。

勇者部の誰とも異なる関係性は彼女達唯一のモノなのだろう。

「——と、言うことで！本音ついでにゆーゆにしつつもーん♪」

一時間以上はシリアスを醸し出せない病気である園子は、先程までの反動も相まっていつも以上にフワフワとした口調で跳ね回る。

「なにになっ？」

「ゆーゆって、ゆーちゃんのこと好き？」

「えっ？」

「さっきも言ったけど、私は好きだよ？とつてもLoveで恋慕をドーンしてるよ」

「あー、えっと……い、今はまだ！目の前のことに必死だから……あ、あはは……ちよつとよく分からないかも……!!」

「……それで、本音はっ？」

「うぐっ……そ、その……恋とか愛とかがよく分からなくて……」

でも、唯斗くんは…私にとつての勇者だよ。唯斗くんが世界を救う勇者っぽくないのは分かるけど、それでも……」

——いつからだろうか。友奈が唯斗を理想とはまた異なる勇者と重ねたのは、きつと——まだ一年生だった頃からだ。唯斗が友奈を避け始めた日。交通事故から間一髪で助けてくれた時からだった。

あれから、色々あった。

システムを用いて勇者になっても、唯斗はずっと友奈の勇者だった。初戦ではバーテックスに恐れず立ち向かい、次の戦いでは一人で蟹座を戦闘不能に持ち込んだ。

三好夏凜が参戦した時も唯斗だけはバーテックスに大打撃を与え、レオ・スタークラスターが相手でも誰よりも早く『満開』で勇氣を示した。

先輩である風が暴走した時も誰よりも早く駆け付け、友奈と夏凜が到着するまで時間を稼いだ。そして、その後すぐに壁を壊した東郷美森を止め、世界の崩壊を皆と紙一重で防いだ。

友奈が全身を散華した時も唯斗だけはずっと対話出来て、本人にその気はなくても、身体が目覚めるまで励まし続けてくれた。

今回も、唯斗は友奈に道を示してくれている。強引にハッピーエンドに引き込もうとしてくれているのだ。

そんな彼を、友奈は似合わないし不釣り合いだと知りながらも勇者的なのだと思うってしまう。

「……これが恋なのかは、やっぱり分からないかな」

「……ゆーゆ、それともう……ううん、なんでもない！」

彼女のはにかんだ笑みは、園子にとって見覚えの深いものだった。浮かぶのは、そう。彼の隣に居る時に鏡に映る自分の笑みに似ている。

本人が解らない感情。その答えを知って、園子も内心では焦るのだった。

★花結いの章一話《始動》

——とある日常での出来事だった。

時間は遡る。東郷美森が神樹の結界を破り、然し勇者部の総出で事を解決した後。そして、勇者部に三ノ輪銀と乃木園子に加わり、同時に郡唯斗が防人と成り、皆の前から転校という形をとって姿を消した直後だ。

放課後の部室。男子部員一人を除き皆が揃う教室の中で、友奈はおもむろに呟いた。

「ん〜、唯斗くん何処に行ったのかな?」

「担任に聞いてもはぐらかされたわ。ふんっ、また大赦が絡んでなければいいんだけども!」

三好夏凜の棘の含む言い方は、誰もが同感するものだ。勇者としてバーテックスと戦ってきたが、その途中では大赦から色々と隠されていた。

満開の後遺症についてや、壁の外の真実。それだけでも一般市民が知ると大暴動が起こる事柄なものにも関わらず、まだ友奈達の知らない防人や神婚、その他諸々についてもある。

直接的には言えずとも、勇者が大赦を敵視するには十分過ぎる事があったのだ。心的な溝も当然、深まるばかりだ。

「乃木、本当に唯斗から何も聞いてないの?」

「本当も何も、この書き残しだけなんです〜」

『究極のイカの姿フライを探す旅に出ます』、かあ……唯斗らしいって言えばそうだけど、美森と同様に奇行が多いから判断しかねるね」「もう、銀ったら冗談が上手いんだから。唯斗君は兎も角、私は奇行なんてしてないわ」

「と、東郷先輩……いえ、何も言いません」

無自覚変人の東郷に皆が慄く中、当の本人は気にせず関せずとパソコンのキーボードをパチパチと指で叩く。

遠隔で唯斗の携帯端末にアクセスしようと努めているのだが、結果は芳しくない。唯斗の端末の電源が切られているのか、はたまたハッキングに対する対策をしているのか。

恐らくは前者だろうと東郷は結論付ける。GPS情報を探り最後の反応を調べると、不自然に唯斗の部屋で途切れている。

彼が意図的に電源を切ったという証でもある。無論、既に園子にも協力してもらい唯斗の自室も調べた。出てきたのは無駄に頑丈な鍵で閉じられた日記帳くらいだったが、軽く埃を被っていることから今回の事柄に関与していないのは想像に難くない。

「うーん…東郷さんが色々調べてくれてるけど、全然見つからないね」

「……いや、調べてるって言うか——」

「夏凜さん、ダメです。それ以上は触れるべきじゃないんです…」

切実な樹の声は妙な説得感を帯びる。犯罪前線で屈伸反復横跳びをしている彼女は、見て見ぬふりをするに限る。

郡唯斗は不在でも、やはり先日までと比べればこれも日常だ。脈絡もなく——否、友奈の本能が察していたのだろうか。

あの日もそうだった。大切な仲間達とかけがえのない日常を謳歌していて、そんな幸せがずっと続くのだと確信していた。故に、堕ちて傷付いた。

ずっと否定してきた既視感は遂に正体を現す。

——また、唐突だった。

「「ツツ!?!」」

響いた。騒々しいアラーム音が、勇者部の部室に鳴り響いた。聞き馴染みなどしたくなかった樹海化警報。

「え……は？な、なに……が……ツツ!?!」

風は言葉を失う。

風だけではない。無情にも押し寄せる光の波は神樹が樹海を顕現

する騒々しいメッセージであり、バーテックスが襲来する合図でもある。

故に確信的な既視感だ。この雰囲気は、この嫌な予感、勇者の初戦に等しい。慣れてしまった戦場に召喚される筈なのに、全く未知の世界に連れて行かれる様な感覚は皆の恐怖心を掻き立てた。

「みんな、備えなさい!!」

人類の敵を目の前にして、風の声は光と虹の花弁飲み込まれる。

眩さが晴れた先では、耳鳴りがするような気味の悪い空気が喉に張り付いた。

「……………樹海? どうして、また…」

緑の色彩で飾られる極彩色の世界に立ち、友奈はポツリと言葉を零す。また、来てしまった。不気味なほど神聖な空間は相も変わらず、ただそこに顕現している。

恐怖心よりも疑心が荒立つ。これは現実なのだろうか、と。震える拳を強く握り締め、肌で現実味を感じてしまう。

誰もが混乱する中で、東郷美森は辺りを見渡し更なる異変に気が付いてしまう。

「…そのつち? 銀…? ふ、風先輩…二人が居ません!!」

「はあ!? あー、もうっ! よく分かんないけど、取り敢えず敵影を確認する! 樹、レーダーにバーテックスは映ってる!」

「ちよ、ちよっと待って! えーっと…あつ、来てるけど…あまり強くない敵ばかりだよ! 見た事のない形のも混じってるけど…え?」

勇者アプリのマップに目を向け、樹が苦い声を上げた。新型とも言えるバーテックスを発見してしまった事もあるが、その他にも——見慣れた反応があった。

オンシジュールが刻まれた味方の反応。其れがマップにおける敵位置と重なるように表示され、忙しなく動き回っている。

心做しか、遙か遠くからピコピコ音が鳴っている。樹の反応も相まって、もう皆が察してしまった。

「……………もしかして、いるの?」

「…うん、お姉ちゃん。今、前線で暴れてるよ…」

四人が恐る恐る目を向けた最前線には――

「ドーン！バツコーン！！ヒヤツハアア！雑魚狩りは楽しいゾイ！！」

愉快げにピコピコハンマーを振り回し魚を模したバーテックスや、拳を覆う厳つい籠手にも見える新型をゴリゴリと抉り飛ばしている奴がいた。

オンシジュームのような黄色と、勇者共通の純白で飾られた勇者衣。分身の如く同じ姿形の其れは複数人に増えてはバーテックスの攻撃を受けて消え、然し数十秒後にはまたポフンと薄く煙を立てて出現する。

もう素顔を覗くまでもなく、郡唯斗だ。

「ああああああ！あんの阿呆め！こんな所で何やってやがるのよ！？」

「あつ、夏凜ちゃん！あわわわわ！？飛び出して行っちゃった……！」

「阿呆がまた一人増えたわ……えーつと、とりま全員突撃ー！弱いのが相手だからって油断しないようにね！」

「了解！！」

――十数分後。

「よーし、全員無事ね」

元より某阿呆斗が大幅にバーテックスの数を減らしていたということもあり、勇者部総出での殲滅にはさして時間は掛からなかった。

一段落してからの第二波も樹の覇者力で瞬く間に全滅し、結果としては苦戦することなく片が付いた次第。

「さて、お馬鹿唯斗。どうして樹海に居たのか、ちやーんと説明してもらわよ」

「ええ…凄んで問い詰められましても。小雀をで遊んで弄つてたら急に樹海化警報が鳴って、気付いたら目の前にバーテックスがいたからピコった次第ッス。ホンキのマジで………なんか格好女裝姿も讚州中の制服に変わってるし、意味わからん」

「……唯斗くんも分からないの？……なのに、その……またすぐに勇者になつて戦つてたんだね……」

そも、勇者には明確なデメリットがあつた。神樹に体の一部を捧げる——つまりは満開だ。元より満開をしなければ体の機能も失われないのだが、勇者とはシステムによつて成り立っている。

散華が備わっている以上、普通に使用しただけでも何かしらの不具合が起こりうる可能性だつて否定できない。

今回は皆が唯斗に触発されて難なく変身したが、本来ならば躊躇う筈だ。

なのに、恐らくは勇者部の皆と全く同じように樹海に飛ばされた唯斗は容易く変身してバーテックスに武器を振り上げていたのだ。

まるで慣れていているかのように戦闘を開始する様は、友奈には少しだけ危なっかしく見えた。

解ける様子のない樹海に皆が一抹の不安を抱え始めた頃、やつとと言うべきか、変化が起こつた。

《——皆さん、皆さん……！》

「……？お姉ちゃん、何か喋つた？」

「何も言つてないけど……煮干しは？」

「遂に煮干しつて呼ばれる様になつたし……ううん、私じゃないわ。つてか、この声つて……」

《——勇者部の皆さん、聞こえてますか？》

「やつぱり、頭の中に直接響いてくる……友奈ちゃんも？」

「うんっ、やつぱりみんなも？おーい、聞こえてるよ〜！」

聞き馴染みのない声は徐々に大きくなり、頭の中に直接響く。

《——まもなく、樹海化が解ける筈です。乃木園子さんと三ノ輪銀さんは私と一緒に居るので、現実に戻つたら部室に来てください》
声は穏やかな口調でそう告げると、それ以降には続かなかつた。電話で言うところの、通信が切れたという状態なのだろう。

ふと視界を前に向けると、樹海の端々が花卉となり綻びる最中だ。「あ、そういえば園子と銀が居ねえや。パイセン、一緒にやなかつたの

？」

「気付いてなかったんかい！アンタ、変なところで抜けてるわね……
あ、そろそろ樹海が解けるわよ」

——疑問符を抱えたまま、勇者達は光と花卉に飲み込まれた。

五人が部室に戻ると、そこには乃木園子と三ノ輪銀——そして見知らぬ少女が居た。

「あつ、園ちゃん和銀ちゃんだー！」

「みんなお帰りく。うんうん、無事でよかつた」

「あれ？何で唯斗まで居るんだ？」

「知らぬ存ぜぬ。気付いたらいたんだよ」

「そのつちと銀も、無事で良かつたわ……それで、そちらの方は？」

再会の喜びを分かち合いつつ、東郷美森は少女に視線を向ける。白とほんの少しの芽吹色で着色され、所々を赤い糸で結ばれた巫女装束。

艶やかな浅黒の長髪を額から後頭部にかけて赤いリボンで結ぶ少女は、外見から滲み出る雰囲気まで大人びている。

姿格好から巫女だと察せられる少女は上品に会釈し、ふんわりと微笑む。

「皆さん、御役目お疲れ様でした。私、上里ひなたと申します」

「上里……!?そ、それって……大赦の巫女の中でも最高の発言力を持つっていう、あの上里家!？」

「おお？ニボタージュつたら詳しいんだな」

「誰がニボタージュだ!!……詳しいも何も、乃木と上里、郡は大赦のスリートップでしょうに。統括の乃木と巫女の上里、郡は商業関係を占めているわ」

「あ、そっかー。確かに上里って上里家だね。基本的なところを見逃してたかも」

「いや、アタシは指摘したぞ？園子が急に眠り出すから聞いてなかっただけで」

既に園子と銀は上里ひなたと名乗る少女とある程度のコミュニケーションを交わしているらしく、打ち解けている。

上里ひなたはやはり上品に微笑みながら勇者部の一人一人を目に焼き付けるように眺め、然し唯斗を見た瞬間に言葉を失う。

「え……うあ、あの……」

「ん、なんスか？俺の顔に何か付いてる？」

「な、名前と大好物を教えて貰ってもいいですか？」

「郡唯斗、大好物はイカの姿フライっす。ドーズよしなに」

「郡!?!……………因みに、将来的に髪を白く染めて過去に遡る予定は？三百年くらい前とかに」

「コイツ何言ってるんだ？」

「あ、いえ……何でもないです！他人の空似とは思えませんけど……忘れてください」

「……………変なヤツ」

彼女の反応に疑問を覚える。初めて会ったにしては目的の掴めない不明瞭な質問の羅列だ。名前と好物だけなら解るが、後半に関しては言ってる意味が解らない。

ひなたは同様の視線を友奈に向け、次は名前のみを聞いて小さく笑った。

「取り敢えず、説明してもらってもいいかしら？」

「あ、そうですね。すみません、勝手に盛り上がってしまった……まず、大前提から話します」

——曰く、この世界は元の四国ではなく神樹の身体の中とのこと。故に勇者システムを使用してもデメリットがない。環境が現実世界と全く同様なのは、勇者の心身を安定させるためらしい。

——曰く、勇者部がこの世界に召喚された理由は神樹内で荒ぶっている神を鎮めるためらしい。元は天の神側の存在であった『造反神』は、離反してしまっただけは四国の壁が崩壊しかねない程の大惨事となる。

——曰く、造反神を鎮めるには擬似バーテックスを倒し続け、四国の土地を奪還する必要があるとのこと。その道中で神樹の力が戻る

ほど、援軍として過去の勇者や巫女を召喚できるらしい。

——曰く、上里ひなたは過去から召喚された存在らしい。そして園子と銀の端末が無いのは勇者の切り札としての存在を担っているからとのこと。

「えーつと、つまり…?」

「結城さん、つまりは”かくかくしかじか”という事です!」

「説明テキストか?そんなんで理解できるはずが…」

「なるほど!ヒナちゃんの説明は分かり易いなー!」

「…:うん、かくかくしかじかって何なんだらうね。唯斗くんにはワカラナスよ」

日本語や英語、青藍語でもない言語を目の前に、唯斗は理解を放棄した。そして友奈はドヤ顔で事態の四割を理解した。

「今は防衛に努めて、攻め時は神樹様のご信託を待つのが一番かと」

「ええ、アタシも異論無いわ」

「わたしも賛成かな。防衛ってことは、頻繁に攻めてくるんだよね?だとしたら、逆に造反神側が防衛に回るくらいまでは削りながら待たないとだね」

「長期戦になりそうだなあ。因みにだけど、元の世界と神樹の中って時間関係どーなってんの?」

「ふふつ、安心してください♪御役目が終われば、元の世界の元の時間に戻る筈です!」

「へえー、そりゃあ何とも。都合が良すぎるってカンジで嬉しいなー」
毛ほどもない、小さな違和感を覚えた。

手厚いサポートは有難いのだが、其れが不可解なのだ。神とは本来、人類の内の一個人に執着はしない。無論、例外もいるが、神樹にとっては言わば絶滅危惧種の動物を保護をしているに等しいのだ。

だからこそ、西暦から今に至るまでは小を犠牲にして大を助ける方法を取ってきたのだ。

なのに、この世界ではそんな点がズレている。デメリットの無い勇者システム、まるで鍛えろと言わんばかりの内と外の時間関係、それでいて防衛に関しては今まで通りだったが今回からは攻め時につい

ても信託があるのだ。

全てを察してはいないし、この中で誰よりも聡い園子が何も思い至らない。ならば、唯斗の考え過ぎである可能性の方が大いに高い。

「私は校舎近くの宿舎に泊まらせてもらいますね。なにぶん、家がないものでして」

「あ、過去から来たんでしたっけ？」

「はい、なので…なんかこう！上手いこと神樹様の力を取り戻して早く皆さんも呼びましよう!!」

「淑やかっぱいヤツって内心、意外と凶太いよな」

「…：銀？どうして私を見るのかしら」

「はははっ、なんでもないよ美森。だから睨むなって」

「呑気なもんねえ。アタシはそろそろ胃が痛くなつてくるわよ…」

ケタケタと笑う銀を窺める東郷。釣られるように皆が笑い、ひなたも頬を緩める。

彼女にとつても覚えのある雰囲気は、きつと大切な仲間達に重なっている。勇者部ほど賑やかで、笑いの絶えない集団ではなかった。

でも、それもひなたや仲間を囲う環境が過酷だったからだ。違う出会いをしていたら、ひなた達はもつと勇者部に近い雰囲気では在れただろうか。

そんなありもしない想像。皮肉にも、勇者にならなければ西暦の時代に彼女達と出逢うことはなかった。

(…：少しだけ、皆さんが羨ましいです)

「ひなちゃん？どうしたの、私の顔を見詰めて」

「ふふっ、結城さんの顔を見ていると思ひ出す方がいまして。とつても明るくて、皆さんの空気を取り持つのが得意な方がいるんです♪」

「ふーん、友奈に似てるってことは相当の天然ね。案外、友奈の先祖だったりして」

「天然なら、園子さんにも当てはまりますね。後は唯斗先輩も」

「ふふふっ、どうなんでしょうね。あ、御先祖様と言えば…：園子さんと唯斗君の御先祖様についてはご存知ですか？」

「あまり詳しくないかな」

「全く知らん。先祖って事は、乃木と郡と土居についてだよな？」
「土居…ですか？えっと、唯斗君のお友達に土居さんがいるのですか？」

全員が疑問符を浮かべる。唯斗の血筋に関しては乃木家である園子すら知らない事だ。飽くまでも唯斗は『郡』であり、『土居』を名乗るのは防人である時のみだ。

それもまた女装姿であるため、当然、土居の血について友奈達が知っている訳もない。

「いや、俺の母方が土居なんだよ。因みに父方が郡だから、ダブル初代の血が流れますデス」

「は、はあああ!?アンタ、まだそんなコト隠してたって言うの!？」

「夏凜うっさい。かなり煩い」

「……………あらあら、これは予想外です…」

ひなたは苦い笑みを浮かべる。とある恩人に酷似している彼が、自分の友人達の子孫だったのだ。それも郡の性を持つ彼女だけでなく、土居である彼女の血も流れているのだ。

驚くと同時に、彼の存在は自分達が熾烈な戦いを乗り越えた証とも言える。

「——さて、御二方の御先祖様に会うためにも！張り切って神樹様の力を取り戻して行きましょう!!」

「結局それかよ…」

内心が凶太い巫女に呆れ、唯斗は小さく溜息を零した。

蒼鴉

一月一日

久しぶりに日記を書くことにした。

頭が痛い。吐き気がする。熱も出てる。

朝起きたら、赤黒いアザみたいな刻印が胸から腹まで広がってた。気持ち悪い。元から薄い服とかはあまり着ないけど、更に気を付けないといけなくなった。

樹は犬吠埼家に戻ったけど、園子が居るから、下手に刻印を見られて呪いが伝染ったら最悪だ。

確認したら、友奈も同じ状況だった。風邪とかじゃないから無理すれば外出とかも出来るし、その程度と言えはその程度だ。

呪いについて悟られる訳にもいかないし、仕方なく勇者部のアホ共と初詣に行ってきた。

万能薬のイカの姿フライを常時かじってたから平気だったけど、友奈は辛そうだった。ずっとニコニコしてたけど、美森は何か察してたと思う。

美森は変態でストーカーだし、自分の部屋で友奈の隠し撮りをデカいスクリーンとかで見てもおかしくない。寧ろやってるに違いないと確信してるね。

テキトーに御参りしたあと、パイセンと覇者ちゃんが甘酒で酔ってた。覇者って初めて漢字で書いたかも。

その後は銀のアパートに集まった。銀のアパートっていつもオヤツが置いてあるし、休日の溜まり場としては最高。俺のもう一つの家と言っても過言では無い。

取り敢えず、カミサマを鎮める(?)のには全員が協力してくれる。だからそれについての説明と、俺の賢者についても説明した。

前者に関しては説明といっても、言えるのは友奈の神婚についてだ

けだったけど。神樹の寿命が残り僅かなんだし、それも立派な理由と言えらると思ふ。

言えないこともあるとは先んじて言ってるし、パイセン達もわざわざ聞いてくることはなかった。

賢者については、チート扱いされた。解せない。ぶっちゃけ、手に余っているのに。これでも割りと使いこなしているつもりだったのに、三精霊からの評価は微妙だった。

余程、精霊達が嬉々として語る異世界では…神樹の中?…では上手く使っていたらしい。

割りと有り触れた理論だけど、俺が扱えるのは飽くまでも他の勇者のコピー武器だ。同じ武器でも単体だとアイツらよりも圧倒的に弱いし、使いこなせない。

いくつも束ねて、初めて同レベルに並べる。そう考えると、ピコピコハンマーは単体でも俺の手札の中では超強力だったことが今更になって分かる。

やっぱピコハン最高だね。もう巨大化させたピコハンを分身全員に持たせて特攻するのが一番強いと思う。事実、複合バーテックスまでならそれで殺れそう。

ピコピコハンマーは最強。ピコピコハンマーは世界を救う。……ピコピコハンマーで救われる世界とは。

取り敢えずだけど、今後の方針は決まった。

神婚の儀で天の神を誘き出して、何やかんやで倒す。先に十二星座型を上手い感じにババーンと殺ってから、天と名付くくらいだから恐らくは空から来る筈の天の神をドドドンと倒す。

めっちゃテキトーだけど、園子が言うには神相手に典型的な作戦を組むのは寧ろ愚策らしい。

何が起ころのかが分からない、と言うよりは何でも起こってしまう。故に神と崇められ、世界の事情すら書き換えている。だからこそ全てに対応出来る策なんてないのだし、なら今まで通り臨機応変を心掛けるのが一番だ。

今後の鍛錬に関しては、園子と銀のツテで場所を確保する予定だ。あの二人は長い間、大赦にどっぷりと浸かっていた。だから言い方を悪くすれば、大赦を顎で使える。

二人：と言うよりも美森を含めた記憶あり先代トリオは勇者としての鍛錬を積んでいたのだし、頼りになる。俺と友奈は兎も角として、他の全員を連れて『鍛錬場』に行っただとしても時間が足りないし、各々の鍛錬の質が下がったら元も子もない。

他の鍛錬が出来るのであれば、そっちを優先するべきだ。

疲れたし、これくらいでいいかな。

明日も晴れるといいなと思いました。

「ゲホッ、ゲホ…ッ！あー、クツソ…：吐き気するし、頭痛てえ…」

夕暮れ、唯斗はベッドに横になり額に手を添える。火傷しそうなほど、額は熱くなり絶えず汗を流していた。

昼間はもう少しマシだったが、無理に外出したのが裏目に出たのだろうか。

運が良いのか悪いのか、居候こと園子は元日ということもあり、午前中から午後にかけての勇者部での集まりを終えた後から実家に帰っている。

親戚への挨拶やらで忙しい立場なのだろう。その点、唯斗は郡家でありながらも元は大赦に全く無縁の生活をしてきた身。今更、態々呼び出されたりはしない。少なくとも今は、だが。

吐き気をイカの姿フライとスポーツドリンクで癒していると、枕元に置いていた携帯端末から光と花卉が飛び出す。

『大丈夫か?』

「…蒼鴉か。どうかした?」

現れたのは蒼い精霊だ。他の精霊とは違い、丸く可愛らしいデフォルメをされていない、言わばリアル鴉だ。

醸し出される雰囲気も相まって、単なる一精霊と数えるには異質にも思える存在だ。

『どうかしたと何も、それはお前だ。どうして外出なんかしたんだ。結城もだが、お前達にかけられた呪いは……』

「分かっている。……てか、蒼鴉は呪いを知ってるんだな。雪白は知らないそうだけど」

『私は……そうだな、雪白や大蛇とは異なる存在だったからな。その弊害というやつだ。この身は、全知とは言わずともお前に関する事は解る』

「……厨二病？」

『違う。断じて違う。なんと言うべきか……生前の私は少しばかり、有名になり過ぎていたらしくてな。死後の今にも影響して、一部では信仰対象になってしまう程度にはな。其れ故か、地祇と比べてたら微々たるモノなんだが、神気や神威と呼ばれるような力が備わっているんだ』

生前、今は蒼鴉と呼ばれている存在は多くの者に慕われ、同時に多くの者を救い導いた。それこそ英雄と呼べる程であり、手の届かない神よりも身近で確かに存在する彼女が信仰に近い感情を向けられたのも仕方の無い話だ。

故に、彼女は神樹の記憶に残り今は精霊として顕現していると同時に、人々の願いや希望の結晶体でもある。無論、神には及ばずながらも人間と神の間に位置する存在ではあるのだ。

「ナニソレ。蒼鴉がカミサマだってお話？」

『そんな大逸れて大層なものじゃない。私に出来るのは、唯斗の武器をほんの少しだけでも天の神に効くようにする程度だ。結城……いや、『友奈』の拳と同じ仕様だな』

「友奈の拳……？なんか意味深な言い方だな。含みを持たせてってコトは、何かあるんだろうけど」

『ああ、色々と省くようであるが、『友奈』という名には大きな意味があるんだ。……彼女が……私達の友が遺した名は、天の神にも届く矛盾だ』

「つまり、友奈はアンチ天の神キラーってことでヨロシ？」

『あ、ああ……本当にアイツ等の子孫だな、言葉のチョイスと適当さ

は』

「むっ…なんか、馬鹿にされてる気がするぞ」

『そんなことはない。寧ろ、そんな所を私は愛おしく思うぞ』

「お、おう…ソデスカ。好評なようでナニヨリっすわ」

『一応言っておくが、皮肉じやあないぞ?』

遠い記憶に浮かぶ彼女は、生前の蒼鴉が親愛を向けると顔を引き攣らせた。きつと、皮肉と受け取ったのだらうと蒼鴉は解釈していた。

そして、流石は子孫と言うべきか。奇しくも同じような反応をされた。二人の先祖の、より面倒臭い部分をしっかりと受け継いでいるらしい。

(…やはり、似てる。目付きや顔のパーツは千景で、飄々としたムードメーカー的な所は成長した球子だな。然し…不思議なものだ。何代も離れて、混ざって。それでもこんなに似るものか…? 『友奈』と同じで、神が関与して——)

「蒼鴉? 急にどしたよ、俺の顔なんか見つめて。惚れたか?」

『…ふっ、馬鹿を言うな。最初から好んでいると言っているだらうに』

「…………お前、女誑しだっただろ」

『な、何故だ!?!』

これもまた、遠い記憶の中で艶やかな黒髪の似合う彼女に言われた言葉と似ていた。それに対して、蒼鴉が取る反応もまた、同様だ。

一見すると似ていないのに、見詰めると節々が似ていて、一緒に居ると彼女達の幻影さえ眼に映ってしまう。

そんな、彼女達の形見を次に繋ごうと。蒼鴉は決心を更に固めるのだった。

◆◆オマケ◆◆

《蒼鴉と他精霊の違い》

・ぶつちやけると別物。人間と幽霊くらい違う。神樹の記憶から生み出されたのが精霊で、名声と信仰で存在を確立されたのが蒼鴉。

精霊——この場においては雪白を例にすると、彼女には亡くなる際の記憶や、勇者の御役目を終えた後の記憶がない。飽くまでも勇者だった彼女が神樹の記憶に残っていて、神樹の記憶にアクセスしたと

しても生前の軌跡は解らない。

然し、蒼鴉には全ての記憶がある。人間として生きた軌跡は全て、彼女の中に残り続ける。

人間として死んだから精霊化したのが蒼鴉。

勇者として生きていたから精霊化したのが雪白。

精霊は勇者の武器に宿るが、蒼鴉は能力を付与する。其れが『分身』と『天の神キラー』。後者に関しては『友奈』と名付けられた存在と同等かそれそれ以下。

尚、だからと言って雪白と大蛇が他の精霊と全く同じ存在だとは限らない。

石紡ぎし花の煌めき

——これは夢だ。

誰かに告げられた訳でもなく、然し頭の中に直接情報を流し込まれたような。奇妙にもハッキリとした意識は何処か既視感があった。以前にも似たような体験をしたような。確信的ではないものの、心の底の方で自分自身がそう告げているのだ。

「……………」

ただ浮遊していた。何も無い空間。色も、匂いも、自分自身も。何も無いと言うよりは、在っても認識出来ない。

だが、色のない空間は数回の瞬きをする間に、薄く色付き構成されていく。木製の柱と天井、懐かしい匂いのする畳、風と微かに混ざる汗の臭い。

気が付けば郡唯斗は『鍛錬場』に立っていた。山奥の洞窟の更に奥に造られた鍛錬所。唯斗と友奈が使用している場所だ。

いつの間にか、着慣れた賢者と防人の掛け合い衣装を纏い、たった一人で『鍛錬場』に居た——否、もう一つの気配が其処には在る。

『——構えろ』

「っ!？」

刹那、首筋に殺気を感じる。

誰かが後ろに居る。振り向くまでもなく、その誰かは唯斗に殺気と戦意を向けているのだろう。

咄嗟に護盾を召喚し、後ろに放り投げながら唯斗自身は前に身を投げ出す。子気味良く護盾が斬られる音に背を冷やされる。

振り向きざまに見えたのは、何の変哲もない木刀だ。射手座サジタリウスの攻撃をも耐えうる盾は、只の木刀で一刀両断にされたのだ。

「あつぶな……ッ!てめっ、コノヤロウ!!」

『脆弱だな。この程度、数センチでも横に逸れば避けれた筈だ。盾を使う必要はない。動きも無駄だ』

「あ……?……………お前、誰だ……?」

そこにいる人物には面影が感じられる。他の誰でもない、郡唯斗の面影がその男にはまるで生き写しであるかのよう^にに写る。

真つ白な頭髮や血のように紅い瞳は唯斗の精霊である大蛇^{オロチ}を連想させ、その他の部位や高身長、顔付きはまるで郡唯斗の未来の姿を連想させる。纏う装束もまた、何処か満開の衣装を連想させるものだ。

もう意識は混濁していなかった。ハッキリと”夢”なのだ^と認識した上で、唯斗は『鍛錬場』を踏みしめていた。

警戒を込めた唯斗の質問に対して、青年は短く答える。

『オレは《精霊ユイト》だ。…西暦の世に勇者をサポートした存在、とでも言えばいいだろうか』

「……俺に似てる……もしかして先祖か？」

『違う。オレの半分は過去の郡唯斗^{お前}であり、もう半分は……いや、いずれ判る事。……説明は苦手だ』

「よく分からんけど……取り敢えず夢^でってことでオーケー？」

『……多くは語らん。一つだけ告げるなら——今からオレはお前を殺す』

「……………は？」

呆けた声が漏れた瞬間、唯斗の胸が木刀で袈裟斬られた。骨が打ち碎かれる感覚と、そのまま鎖骨から腰にかけてを抉る熱。

吹き飛ばうとした意識は痛みによって無理やり覚醒させられ、鍛錬所の床を赤く染めた。

「ガハツツ!？」

『——立て。傷は癒えてる』

「ゲホツ、ゲボツ……な、何が……!？」

反射的に斬られた部分を手で抑えるが、その箇所には傷なんて一つもない。幻痛だけが先程の攻撃を肯定し、唯斗を混乱させる。

『鍛錬だ。この場において最も効率が良いのは、死闘に他ならない。オレはお前を殺し続ける。何時間でも、何日でも、何年でも、何十年でも。お前がオレを殺せるようになるまで、殺し続ける』

「ふ、巫山戯てんのか……？」

『正気で神を討てようものか。神樹の寿命は近い。故に、時間もない。』

世界はお前の都合の良いようになって出来てやいない。この世界には郡唯斗お前が存在して、神樹が消費する神力も相応』

「……なんだ…何言ってるんだ…？」

『本来の歴史より大きく逸れた。神樹は既に自身が咲き誇る余力など残してはいない。お前が幾度と満開を重ねた結果だ』

熱を含まない瞳で、青年は淡々と告げる。ありのままの事実のみを並べて、作業的に口を動かしている。

『オレを殺せ、賢者。オレに勝てば……うむ、そうだな…記憶をくれてやる。二年前の……そして、あの世界での記憶も』

「っ!!…随分と都合が良いな」

『それだけの偉業だ。お前如きがオレを殺すのはな』

「……吠え面かかせてやる」

『寝言は寝て言え。生憎と、時間は無限だ。お前が気狂いしない限りは夢の世界は続く』

「早々に終わらせてや——」

武器を顕現した刹那、唯斗の頭部が砕けた。

◆——嘗て小学生だった彼が。

◆——西暦に渡ったのは自分のためだ。

◆——なんて、精霊は言い訳をする。

◆——本当はあの世界での日常を。

◆——大好きな仲間を守りたかった。

◆——本が好きな彼女を護った。

◆——活発な彼女も護った。

◆——誰よりも不安定な彼女も。

◆——でも、取りこぼしもある。

◆——高嶋友奈。

◆——変えてはならない運命。

◆——決して変えられない運命。

◆——強制力には神も抗えない。

◆——皮肉なものだ。

◆——彼女の死を運命付けたのは。

◆——後世の『友奈』だった。

◆——いづれ世界を救う英雄。

◆——人の身で神を鎮めた勇者。

◆——『友奈』は『友奈』の為に在る。

◆——世界の主人公は最初より。

◆——紛い物が掻き乱せない程に。

◆——強い因果に繋がれていた。

◆——故に彼は神を討つ。

◆ 因果を砕くために。

◆ 高嶋友奈が生存する世界。

◆ 其れを創るために。

◆ 綻びを生もう。

◆ どうか『友奈』に縛られない世界を。

◆ それが望み。

◆ もう時期、朽ちる彼の願い。

◆ 礎いしづえなのだとしても。

◆ 精霊は賢者を完成させる。

◆ 今度こそ、自分の為に。

◆ これは精霊の罪滅ぼしだ。

◆ 違った未来の自分に賭ける。

◆ 彼が捨てた未来に縋る。

◆ 傲慢で結構。

◆ 自己犠牲なんて安い。

◆——全ての『郡唯斗』を託して。

◆——精霊は少年に全てを渡す。

◆——記憶も、技術も、願いも。

◆——悲劇のない『次』を創る。

◆——ずっと、300年前より誓っていた。

◆——どれくらい時間が過ぎただろうか。

斬られた数も、死した回数ももう数えてはいない。目を開けば、煌めく木刀が振り終えられている。視界に映った血飛沫には慣れてしまった。

冗談や過言ではなく、本当に数年間かけて殺されていた気すらする。

最早、これが夢か現実かも解らない。死ぬ度に疲労はリセットされ、目の前の青年が淡々と木刀を振るっている光景。

何万回と続いている。幻痛に軋む身体を無視して、唯斗もまた曇った瞳で淡々と相手を殺すための最適解を導き出す。

麻痺した感覚を研ぎ澄まし、無手で構えた。

『——孤月・石紡ぎ』

「大剣×^{ぶっ}反射×^飛爆弾」

上段から愚直に振り下ろされる轟撃。純然たる剣技と力によって紡がれた一撃はたとえ獅子座^{オオ}であろうと押し潰してしまおうだろう。

下手な反撃では、生身で石の詰まった麻袋を木の棒で叩いている感覚に襲われるだろう。決して速くない攻撃でも、返せないというだけで何千回と唯斗の身体を打ち砕いた剣撃だ。

——唯斗が放つのは、反射と爆弾で大剣の裏面をジェットエンジンに見立てた加速で鋭利に空気の層を斬り裂く一撃だ。

「ぐっ……」

『む……っ！』

通常の木刀と大剣では鳴り得ない破裂音が響く。空間を激しく揺らし、拮抗した後に双方が激しく弾かれた。

『……っ。孤月・煌めき』

「鉄糸×護盾×くまマン×精霊バリア」

閃光の如く迫る一閃は鋼鉄のクマを象る盾に防がれる。精霊のバリアを取り込んだ其れは、使用者への攻撃を全て自動的に防ぐ。

防御特化のくまマンに鉄糸に組み込み、其れを防人の盾と束ねる。それは神であろうと、容易く破れはしないだろう。

二閃、三閃、四閃。七色の瞬きは熊盾の表面を薄く抉りながらも決して大破には至らない。振りを解いた青年は初めて薄く笑みを浮かべ、両手で木刀を握る。

『最後だ、唯斗。耐えろ、受け止めろ、打ち碎け。——神花解放！孤月・花結い——石紡ぎし花の煌めき!!』

「——満開・精霊化！」

其れは三体の精霊より受け継いだ、初代勇者の切り札だ。強大過ぎる力故に、通常の変身では使えないに等しい能力。

精霊を自分に”束ねる”ことで自身の身体を精霊に近付け、人の枷から外れる技法だ。人間が人間である事を是とする天の神は、一時的とは言い精霊化を決して許さないだろう。

「来い！雪女郎!!」

満開と切り札が混ざり合い、薄い白紫色の装束が展開される。厚手の衣は重層さを感じさせないほどふんわりと漂い、『鍛錬所』を凍りつかせた。

瞳は透き通る緑に、頭髮は精霊ユイトと同色の白髪へと。人間の性質は精霊へと変化する。

対する青年が繰り出すのは、”石紡ぎ”の轟撃と”煌めき”の閃撃を兼ね備えた”花結い”の如き剣舞。

この殺し合いが開始した直後ならば、木刀が振るわれた数だけ唯斗は死んでいただろう。回避能力に長けた唯斗でさえ、精霊ユイトを名乗る彼の前では無力に等しかったのだ。

然し——

「凍りつけ！アイスハンマー!!」

『はあ!!』

一振の巨槌は三度の瞬きで碎かれる。だが、次の瞬間には唯斗の両腕に別の武器が装填されていた。

「アイスランス！アイスブレード！アイスナックル!!」

『乱舞…ッ』

武器と技のぶつけ合いだ。互いに事切れるまで、煌めく乱舞と氷の武器は細^{ダイヤモンドダスト}氷を靡かせる。

ぶつかる度に砕氷が精霊ユイトに当たり、その身を凍りつかせる。受け手が彼でなければ、既に唯斗の目の前には氷像が出来がっていたことだろう。

『はああああああ!!』

拮抗する撃ち合いも永遠には続かない。唯斗が弾かれる刹那弾速の氷塊を無数、青年に叩き付け距離を取る。

「チェンジだ！来い——七人御先!!」

瞬間、『鍛錬所』を支配する氷は全て消え去る。

厚い薄紫の装束は溶けるように空気に消え、出現するのは白と紅のフード付き和装束だ。白く染った唯斗の頭髮と相まって、死神のようであり、瞳もまた茜色に染まった。

雪女郎が氷を操る能力であるならば、七人御先は本体を七人に複製する能力だ。言うなれば、唯斗の『分身』は擬似的に七人御先を真似ただけの劣等技だ。

性質上、全員を一度に殺さない限りは郡唯斗が死に至ることは決していない。そして七人御先は全員が本体だ。

つまり——賢者の権能を七人が同時に、そして別種の武器を束ねるのだ。

「往くぜ、精霊…」

「これで最後だ!!」

『魅せてみる!!』

七つの影と煌めく木刀が衝突する——

「んっ………ん？…俺の部屋か…」

『あ、唯斗さん。やっと起きたんですね』

腹部に冷気を感じて目を開ける。

布団の上には唯斗の携帯端末を操作して園子作のネット小説を漁る雪白の姿があった。

ふわふわと柔らかそうな淡いクリーム色の頭髪。精霊となって肌が青白くなっているが、記憶の中の彼女と一致する姿は微笑を誘う。

「…杏か。おはよ」

『はいっ、おはようござい………え？今…な、名前を…』

呆ける雪白から携帯端末を取り、操作しようとする、画面に唯斗の顔が写る。

前髪の一房がメツシユのように白く染まっている。まるであの精霊を名乗る青年の髪色だ。

不思議と気分は暗れ渡っている。あの精霊は約束を果たしたらしく、唯斗の頭には記憶が定着していた。

だが、喪失感がある。

察してしまった。あれが精霊の——精霊ユイトの最後の力だったのだ。今頃はもう、鍛錬所は消えているだろう。

鍛錬所の奥に鎮座していた影も既にこの世には残ってはいない。託し、遺し、消滅したのだ。

「……準備は整ったな」

『唯斗さん……いえ、唯斗先輩。思い出したんですね！』

「違えよ、精霊から貰ったんだ。十万回くらい殺された後にな」

『い、ころっ!』

「あとは友奈達だな」

賢者としての限界には達した。無論、あの精霊並の技術は身に付けられない。飽くまでも賢者の力を充分に扱えるようになったただけの話だ。

それでも、精霊ユイトから託されたのだ。自己保身を謳い、自分の為に戦い続けてきた少年。

結局、今回も変わらない。生きたいから戦って、勇者部との日常が何物にも変え難いから武器を取る。

——決戦は近い。

◆◆◆おまけ◆◆◆

精霊ユイトの話をつかりやすくしたら。

・唯斗が存在して何回も満開をしゃがったせいで友奈の大満開が出来なくなりました。もう実力でがんばえー。

・なので、精霊さんが責任を取って唯斗を殺しシバキ倒しながら強制的に強化します。もちろん夢の中で。精神体だから下手したら気は狂うけど時間は経ちませんことよ。

・精霊さんをぶち殺せたら、報酬あげーる。全部じゃなけど精霊さんの記憶をあげーる。何百年もの記憶をぶち込んだら脳が爆散するからしゃーない。

・とりまふあいとおく。

更にオマケ。

・賢者^{束ねる者}で束ねる素材達。

ピコピコハンマー（反射）、分身、紙飛行機（爆弾）、生成イカの姿フライ、金ピコ（金メッキ付与）、飛行能力、石（神力付与）、銃剣、護盾、お鍋の蓋、くまマン、箆手（友奈）、各銃（とおごお）、鉄糸、反射（樹）、大剣（巨大化）、双刀、小太刀、槍、斧（炎どーん）、精霊 e t c

+ ゆゆゆい組の武器も追加

実は樹の雲外鏡も反射能力だったり。許容限度有りのバリア的な使用方法しかないのでピコハンの反射とは別物。

《精霊化》

・自分自身と精霊を”束ねる”技法。父からの『人間の形に拘るな』というアドバイスの元、それに大蛇達から初代勇者の切り札を聞き、唯斗なりに再現した。

西暦の勇者と同様に負荷が尋常ではない為、基本的には満開をした

状態でなければ使えない。

尚、精霊の本質は勇者のサポートである。

覇者さん元気元気い

不思議と清々しい気分だ。

燻る既視感というのは存外、精神的な負担になるらしい。それが無くなり、全てに納得がいく現状。身を蝕む刻印はあれども、体は軽い。

眼前に迫る鉄糸を同様の鉄糸で相殺しながら、唯斗は頬を綻ばせる。記憶を継承し、肉体のスペックは変わらずとも知識と経験、技術は”受け継いだ”。

故に、今の彼は勇者部の中でも頭一つ抜けている。無論、他の勇者にも記憶が戻ったのであれば、その差も埋まるの——筈だったのだが。

「え、いつ、Spanish Tickler!」
苦悩の Pear of anguish!! えいえいえいえーいつ!!」

「……………樹サン?」

兇悪な爪を模したワイヤー製の鉤爪が振り下ろされ、それをピコピコハンマーで打ち返した直後に飛来する”苦悩の梨”。

難なく対処は可能だが、寒気が止まらない。何故ワイヤーで拷問器具を象るのか、どうして満面の笑みで先輩を攻撃出来るのか。

覇者の思考回路は摩訶不思議なものだ。

「さすが唯斗先輩・ゼーんぶ防ぐんですね♪あはっ、あはは!じゃあ次は…っ」

「オーケー、ストップ。やめて?マジで止まって?」

「…は、はあ…」

——端的に言えば、覇者は覇者だった。

園子の協力を得て、広々とした地で鍛錬をすることが可能となった。ただの平地ではあるが、あの『鍛錬場』の様な快適な空間は最初から望んではいない。

各自、時間が空いている時にこの場所に来るようにしていた。讃州中学からは多少離れているが、勇者システムを用いれば大きな問題に

はなり得ない程度だ。

そも、もう鍛錬場は使えない。精霊ユイトが消失したのが原因だろう。洞窟の奥の扉が完全に消えており、元より洞窟に存在していた精霊は残っているが、それも現状で役に立つ程の力は最初から備わっていない。

過去に存在した鎬矢と呼ばれる少女達が利用していた施設であり、精霊ユイトが消えてしまった今、勇者にとっては不足しかない。

今日は調節も兼ねて平地を唯斗と樹が使用しているのだが、唯斗は慄きを隠せない。

「覇者ちゃん、君はどうして覇者なんだい？」

「覇者じゃなくて樹です！」

「類語で同義じゃん……てか同じ意味じゃん。もしかして持ちネタ？」

「前々から不思議に思ってたんですけど、その覇者って誰が広めたんですか？……その人にはちよつとしたお仕置が必要だと思うんです」

「……………カリンチャン……ダヨ？」

「そっかあ……ふふっ、明日は夏凜さんと鍛錬しますね！」

「お、おう……頑張ってね」

唯斗は三好夏凜身代わりを売った。後日、この件で唯斗が夏凜から鉄拳制裁を受けるのもまた、別の話だ。

明日、きつと夏凜は地獄を見ることになってしまうのだろう。明日の彼女に憐憫を送りながら、唯斗は夏凜の冥福を祈った。

「……と、そうじゃなくて。樹さん強すぎない？」

「そんな事ないですよ？実際、今の攻撃も全部……上手いこと無力化されてましたし」

「そりゃあ、年季の差ってヤツがありましたですね……」

有する技術には数年の差がある。武器の量も、手数や経験も、今の唯斗の方が上回っている筈だった。それこそ他の勇者は軽くあしらえる程度には自信もあった。

それでも、相手はやはり覇者だった。

成長速度が尋常ではない。最初こそ口笛を吹きながら片手で応戦していたのに、一時間も経たない内にその余裕を崩された。

「敢えて武器も制限してピコピコハンマーひとつで相手をしていたのだが、いつの間にか”束ねる者”の権能を使わざるを得ない状況まで追い込まれていたのだ。」

「……この人、放置した分だけ強くなるバグか？」

「覇者の次はバグ扱い……わたし、ただ唯斗先輩の真似をしたただけなのに……」

「その理論を語れるのお前だけだからな？」

郡唯斗と犬吠埼樹の戦闘スタイルは酷似している。

何十もの武器を扱い、束ね、無限に等しい手数を用いる唯斗。ワイヤーを変幻自在に扱い、紡ぎ、武器を創造する樹。

武器や能力の特性故に奇しくも近しいのだろう。故に、互いに学び、相乗的に成長する。樹の覇者性は唯斗にインスピレーションを与える。唯斗の型に留まらない戦闘は樹を大きく躍進させる。

唯斗が記憶を取り戻し、端的に言って強くなった今。それは樹の”進化”には十分過ぎる要因になった。

「唯斗先輩ー！」

「なに？」

「もうちよつとだけ鍛錬しませんか？私……今、実感できるんです！ずっと頭の中にインスピレーションか湧き出て……このワイヤーを、もっともつと巧みに扱って……可能性を紡げるんです！」

「君、何を目指してるんだっけ？」

「えつと……歌手ですけど？」

「かしゅってなんだろうね」

歌って踊れて、バーテックスを無惨にぶち殺せる歌手覇者。類を見ない新たな職業が誕生してしまうのだろうか、と唯斗は一抹の不安を覚える。

多彩な彼女だから、きつと夢を叶えるのだろうか。その果てに死体の山を築かれでもしたら目を当てられない。無論、理性まで Power is justice正義な覇者に染まる事は無いと信じ

ているが。

「……まー、いつか。かかっておいで、覇者ちゃん。センパイが胸を貸してあげよう」

「はいっ！全力全開、新技のお披露目です!!——形態・戦乙女展開……
全力で往きます」

「……………は？え……………えっ、はい？」

樹が小さく呟いた刹那、鉄糸は樹を覆う繭となる。火花が散るほどの勢いで激しく放出されるワイヤー。鈍色の繭は次第に収縮し、圧縮され、紡がれる。

——こんな現象は唯斗の記憶にもない。

あの世界とは異なる形で進化を遂げたのだろう。複雑に絡む鉄糸は徐々に明確な形となり、白銀の鎧ドレスとなる。

全てがワイヤーのみで構成された鎧ドレスはワイヤーと同様に、樹の思考に従い揺れ動く。

「……………ナニコレ？」

「唯斗先輩の mode wear bear を参考にしました！くまマンさんを纏うアレです。私に同じ事は出来ませんが、ワイヤーで再現する事なら出来ます！それを私なりに調節して——」
「なるほど、分かんらん」

「戦えばわかります！」

「…展開、木の枝山田くん模造——山田孤月
「っ！」

完全に理解を放棄した唯斗は、束ねる者賢者の権能で模造した木の枝を、記憶に従い振るう。

しなり、放たれる斬撃波は樹に襲いかかり——瞬間、樹は不自然な軌道でそれを避ける。ほんの少しだけ脚部分の鎧が解けているのが見て取れる。

自身の脚力だけではなく体に纏うワイヤーを部分的に操作して反発力を生み出しているのだろう。

「初見だと奇を銜うけど、慣れれば格好の的だぞ！孤月・煌めき!!」

「そんなに甘くないですよ!!」

閃光の如く迫る一太刀は脚部分のワイヤーを用いて高速移動する彼女を確かに捉え——然し、次は纏う鉄系を行使することなく避けられる。

目を凝らすと、空中に張り巡らせられた極細のワイヤーが陽の光を反射している。身体の鉄系と外に貼られた鉄系。それを利用し、予想のつかない変則的挙動を可能としているのだ。

時間が経つほど空中のワイヤーは増え、樹の自由度が増すと同時に唯斗の動きは制限される。

「……蜘蛛の糸かよ」

「簡単には捕まりません!!」

「避けるだけじゃあ倒せんぜ? 孤月・網」

「っ!? わ、わわっ!」

縦横無尽に放たれる斬撃波は網のような形状で辺りを切り裂き、張り巡らせた糸をも切断する。

「そ、それズルいですよ! えーい! 剣山!!」

「うおっ!? ど、どつちがズルだよ!? 地面から針山出すな! 下手したら死んでるぞ!」

「唯斗先輩にしかやらないのでダイジョーブです!!」

「その言葉のどこに安心要素があるんだい? 唯斗センパイだって刺されれば死ぬんだよ?」

「でもイカの姿フライを与えたら生き返りますよね」

「それはイカの姿フライがエリクサーとか世界樹の葉と同格だからだろ。誰だってザオリクすれば生き返るっての」

「先輩は自分の常識を疑ってください! 今です、鉄の処女!!」

Iron Maiden

「うおおおお!? だーかーらあああ!! 即死級の攻撃止めなさい!! 分身ピコハンファイヤーアア!!」

いつの間に紡いだのか、頭上から降り注ぐ”鉄の処女”は内部の凶悪な針を大きく覗かせ、唯斗を飲み込もうとする。

対して、唯斗は”鉄の処女”の左右に分身を召喚し、ピコピコハンマーで挟み潰して元のワイヤーに解く。

「おいコラ、モード・覇者キリーちゃん」

「形態・戦乙女と覇者を混ぜないでください!!」

「そーゆー即死攻撃は美森だけにしなさい。アイツなら殺しても友奈のベーゼで残機無限になる変態だから。変態で変人だから世の中の常識が当てはまらないんだ、あのストーゴーは」

「……あれ？先輩って東郷先輩のコトを名前で呼んでましたっけ？」

「樹、冷静に考えろ」

「はい？」

「俺はこれまで、アイツをトーゴーとかストーゴーとか変態とか友奈依存症ちゃんとか変態とか変態とか呼んできたんだ。今更、名前呼びがなんだ？雨の日にスキップで散歩するくらい自然だろ」

「雨の日にスキップで散歩するのは不自然で不審者ですよ」

「えっ、でも風先輩の最近の趣味って台風の日に勇者姿でルンルンお気楽スキップをしながら出稼ぎサラリーマンが雨風に震えるのをニヒルな笑みで眺めるコトなんだぞ？」

「よく分からないですけど、誤魔化すのにお姉ちゃんを巻き込まないでくださいね」

「因みにマジだよ」

「あはは、そんなまさか………え、マジですか？お姉ちゃん、台風の日にそんな事してたんですか!」

「ほら、あの部長って厨二病を患ってるやん？だから偶に……まー、言うなれば衝動的に？……うん、バラエティとウィットに富んだお姉様だね」

「お、お姉ちゃん……」

「真実か否か、知るのは本人のみだ。尚、患っている病^{厨二}気は彼女の奇行の発端でもある。なぜなら犬吠埼風は厨二とうどんと妹愛のみで構成されているのだから。」

「………今日はもうやめましょうか」

「せやね。んー、腹減ったなー。銀の家にご飯たかりに行こうぜ」

「いやいやいや、さすがに迷惑ですって」

「案ずるな。俺は案じないから」

「……はいつ、そうですね！」

「やめて？先輩のボケを見限らないで？ツツコミ組の名が廃りますことよっ…」

「ツツコミ組…？……んー、聞き覚えがあるような…懐かしい気がします…やっぱり分かりませんけど、強大な敵ボケに対抗する最終防衛ライン的なものを担っていた気がします！」

「んな仰々しいモンじゃないからね？」

ケラケラと笑いながら、唯斗と樹は銀の借りているアパート部屋に向かった。

怒らない？

——久しく、小さい頃を思い出した。

まだ香川ではなく高知に住んでいた頃だ。勇者も神も、ましてやバーテックスなんて全く知らずに、口の悪い父と無口で無表情な母に囲まれて。無邪気に駆け回っていた時期を瞼の裏に映す。

父親を倅い同級生にドロップキックとキヤメルクラッチを喰らわせる日々。同学年の生徒全員の口にイカの姿フライを突っ込んで歩いた幼き頃。

きつと、郡唯斗の人生において最も平和で考え無しだった時期だ。素行の悪い父親はケラケラと軽薄に笑いながら喧嘩の仕方を教え、しかし同時に喧嘩をしても良い相手を選ぶようにとも教えられた。それを正義感だと認識して、父を真似た。

無口な母親は礼儀正しく、厳格だが天然な所もあつた。何処か達観したように、大切な人と自分自身を守る事の大切さを説いてくれた。両親に恵まれ、仲の良い友人もいて。当たり前の日々は充実していたのだろう。

——勇者に選ばれるまでは。

異変が起きたのは、小学四年生になって間もなくだった。夕暮れ、喧嘩の生傷に唾を付けながら帰宅した唯斗を出迎えたのは両親だった。その時の光景はよく覚えている。

ただでさえ彫りの深い顔付きなのに、もつと深く眉にシワを寄せる父親。唯斗の姿を見るなり、微かな声にもならない吐息を漏らして唯斗を抱き包む母親。

酷く困惑した。

重々しい雰囲気は今までに体験した事がない。テレビ番組でやっている様なドッキリやサプライズだ、とは思えなかった。

そのまま父親の口から語られたのは、勇者の御役目についてだっ

た。パーテックスと勇者の存在は、まるで怪獣に立ち向かうヒーローの図だ。

端的に言って——少しだけ嬉しかった。小さな子供に、『お前はヒーローになるんだ』と告げたのに等しいのだ。唯斗でなくともワクワクする筈だ。

それを言葉にして、殴り飛ばされた。まるで本当の命の危機を直接伝えるように、筋肉質の父親は一切の手加減をせずに唯斗を殴った。

泣いた。困惑と痛みに悶え、助けを懇願するように泣き喚いた。しかし、父親の眉皺は一向に解けない。いつもは抱き締めて守ってくれる母親も、目を背けた。

そして、生まれて初めて——郡唯斗は自分の命が何よりも大切なのだと理解した。それが遠くない未来、次代の勇者と共に天の神に立ち向かう際にも強く刻み込まれている価値観だ。

翌日から、父親による鍛錬が開始された。

たった一本の木刀のみを渡され、後はひたすら殴られるのみ。技術は自分で身につける、自分の体での最適解を見つけろ、殺せなければ殺してやる。

暗に告げられる言葉は唯斗に恐怖心と怒りを植え付けた。

それが続き、徐々に唯斗にも変化が訪れる。無邪気で明るい表情は母以上に無表情で無口になり、裏表のなかった性格には真逆のように、静けさと荒々しさを二面に秘める。

まるで別人のようになる唯斗を、友人達は不気味に思ったのだろう。独りの時間が増え、それを父親との鍛錬にあてる。御役目で高知から香川に引越すまで、それは続いた。

鍛錬の最中、父親から唯斗に一つの条件が課せられた。

——『オレに勝てるまで、女装でもしてろ』

子は親に勝てて初めて、一人前だ。なら、半人前にも満たないお前は男でも女でもねエよなア——と。実際はただの嫌がらせだったのだろう。怒りでもなんでも、強くなる為に利用しろと言っているのだ。

渡された神樹館小学校の女子制服に、やはり怒りを覚えて父親に殴りかかった。無論、軽く蹴り返されるだけだったが。

小学五年から神樹館に通うことになり、当然、同じ勇者である三人の少女達とも顔を合わせるようになった。

トラブル体質で、一年前までの唯斗に似た元気いっぱい少女。御役目を誇りに思い、堅苦しく真面目な少女。掴み所がなく、然し人一倍鋭い少女。

初顔合わせをして、酷く不快だった。家族に恵まれている少女に嫉妬した。口煩く自信過剰な少女に腹が立った。天才である少女が憎たらしかった。

そして——いつの間にか、そんな歪みきった方向に思考が傾く自身に嫌悪が止まらない。一年前までの自分ならば、彼女達とどんな関係を築けたのだろうか。きっと、今の自分よりはまだマシなのだろう。

勇者である彼女達と過ごすよりも、別学年の山伏しづくや大赦にいる巫女の国土亜耶と居る方が楽だった。山伏しづくは現状の唯斗に似た境遇で、互いに無言の時間が、”安らぎ”にもなる。国土亜耶は他と違い自分を叱らず、暖かく迎えてくれる”居場所”だった。

香川に越してきて、大きな変化はもう一つあった。

『鍛錬場』の存在だ。讚州市にある雑木林の奥、大きな洞窟の更に奥に存在する不思議な空間。数年後に唯斗と結城友奈が使用する、精霊ユニットによって何百年も維持されている空間だ。

大赦でも唯一、元老院と郡家にだけ存在を知るところを許されるそれは、西暦の終わりに存在した精霊との『契約』によって限られた人物だけが使用出来る。

父親との訓練と、『鍛錬場』での精霊を使用した鍛錬。学業に支障が出ていたが、唯斗の技量は他の勇者の追随を許さない程だった。

そのせいで勇者の少女達と過ごす時間は寝てばかりだったが、唯斗は人一倍に命が惜しい。妥協して死ぬよりも、身を削って成功に近づく方が身に合っていた。

程なくして、今期の勇者にとつての初陣を迎える。水瓶座のバーテックスだった。

初陣にて唯斗は慢心を自覚した。自信があつたのだ。誰よりも鍛錬して、システムによつて神の力も扱つて、武器もバーテックス特効の使用だ。

他の勇者がどの程度の戦力なのかは把握していないが、自分一人でも片付くと思つていた。だが、結局のところそれは慢心でしかなかつた。相性が最悪だつたとはいえ、誰よりも先に突つ込み水の檻に閉じ込められた。

連携を不要と考えていたのに、その考えも容易く覆された。父親に勝てず、バーテックスにも勝てず——厳しい鍛錬は未だに実を結ばない。

焦燥に駆られる。それに関わらず、他の勇者からは祝勝会に誘われた。悠長な有様に呆れ、だが衝動的に断ろうとする気持ちを抑えた。協調性を得た訳ではなく、連携の重要性だけは身に染みだからだ。

——そんな、乾いていた過去を懐かしむ。

「ユーナ、生きてるかー?」

「……あ、唯斗……くん……」

一月も中旬。積もる雪を踏み締め、唯斗は友奈の家に来ていた。仕事か買い物かは分からないが、両親は居ないらしい。

代わりに玄関に出てきたのは弱々しい声を洩らす友奈だ。明らかな体調不良の原因は、唯斗と同様に胸に刻まれた刻印だ。呪いである其れは徐々に対象の生命を奪い、同時に神樹の結界内を覗き見る”瞳”でもある。

「どう……したの……?」

「んー、端的に言うと——刻印を閉めに来た」

「……っ……どうということ……?」

「説明するから中に入れて……さ、流星に寒いです」

「あ、うん。雪降ってるもんね」

唯斗の肩に積もる雪を見て、友奈も納得する。急く気持ちを抑えて部屋に移動し、上着を干してから話を進める。

友奈の自室で、横に並びベッドに腰をかける。友奈がソワソワとする中、唯斗の頬には冷や汗が滲む。

「……そ、それで……」

「友奈さん……まず先に、どうしても許可が必要です。必ず、絶対に」
「許可？」

「あの、お……怒らない？」

「怒られるような事なの？」

「………夏凜ならブチ切れる。美森は……うん、最後まで責任取ら
されそう」

「そ、そこまで重大な……っ！」

ゴクリ、と友奈の喉が鳴る。許可というのだから、何かを差し出すのだろうかと推測する。散華のように体の機能を差し出すのか——
いずれにせよ、唯斗の反応を見る限りでは良い事ばかりではないのだろう。

然し、友奈の覚悟も堅い。このままでは天の神と戦えるまで、友奈の体が持たない。ならば腕や足の一本でも捧げて、万全ではなくとも全力を出せるようにはするべきだ。

煩く鳴る心臓に手を添え、唯斗の言葉を待つ。

「——友奈」

「は、はいっ!!」

「胸を触ります」

「どうぞ!!………え、今なんて？」

「胸を触る必要があるつつつてんだよ！刻印を閉めんには直接さわらないといけないんだよ！決して断じて絶対に、俺の意思でセクハラしてる訳じゃないからな!!」

「……直接？」

「………」

「……服も下着も……ぬ、脱がないといけない？」

「こ、刻印の端と中心が見えないと…」

「……………」

「……………うん、はい…………ごめんなさい」

刻印を閉める——つまり、吸い取られる生命力の管を閉じるには、その根源である痣に触れる必要がある。自分の痣は容易く対処出来たが、それが女友達であれば難易度も比べ物にならない。

事情が事情だけに、怒られたりはしないだろう。しかし、とんでもなく気まずい。

「……………」

「ゆ、友奈さん…………？」

「……………」

赤い前髪に隠れた瞳には、どんな色が滲んでいるのか。冷や汗は脂汗になり、頬をつたる。五分間の長い沈黙の末——

「……………うん、いいよ」

「っ—」

「で、でもね…？あんまり…………その、恥ずかしい所をじつと見ないで欲しいかな…………な、なんちやって！あ、あはは…」

「なんだろう、セクハラしてるオッサンの気分になってきた。切腹したい…」

「だ、ダメだよ!?!」

仕方がないとは言え、顔を真っ赤にする彼女を眼前にしたら罪悪感が溢れてくる。叶うなら目隠しでもしたいところだが、唯斗の能力もそこまで都合良くは出来ていない。

そも、天の神の力に干渉できるのは精霊ユイトの名残りと賢者システムを作った彼女の力が関係している。

「……………ぬ、脱ぎます」

「あ……………うん、はい…………後ろ向いています」

「…準備…出来たら、声かけるね」

「ご、ごゆっくりどぞ…」

彼女の吐息と、服の擦れる音が鼓膜を揺らす。経験のない緊張感だ。理由も大義もあるのに、「イケないこと」をしているような気分

になつてしまふ。

イカの姿フライを頬張っているから耐えられたが、そうでなければ今頃は無駄に満開をして全力失踪していただろう。それだけチキンで定評のある唯斗にはキツイのだ。

「い、いいよ…?」

「……ふおふあつは」

「……イカの姿フライは飲み込もうね?」

「っ……分かった」

ベッドの上で赤面する友奈は、手で胸を隠しながら体を正面から唯斗に向ける。白い肌には赤黒い痣が深く刻まれ、もう少しで表上半身を飲み込む勢いだ。

唯斗は自身の親指の腹を八重歯で噛み切り、溢れる血を刻印の中心に当てる。

「ん……」

「……変な声ださんといて?」

「だ、だつてくすぐつたいし…恥ずかしいし…」

「……」

血で線を刻み、上下左右に十字を描く。そのまま痣の中心部に手の平を重ね、”蓋”を閉める様に反時計回りに捻じる。

唯斗の血が付着していた部分が白く光り、掌が半周すると同時に刻印は白い光に包まれ——元の肌色に戻る。友奈の目には刻印が消えたように見えた。

「っ！な、治つたの…?」

「いや、閉じると同時に見えないようにしただけ。アフターケアつてヤツ。……分かりやすく説明するなら、現状維持の封印って感じかな。これ以上は悪化しないけど、これもあんま永くは続かないぞ」

「……やっぱり、天の神を倒すしかないんだね」

「そーだな。コレって結局は悪足掻きの時間稼ぎなんだよ………で、そろそろ服着てもいいつすよ?」

「……ひやつ！う、後ろ向いててね…?」

「分かってますとも…」

——”悪足掻きの時間稼ぎ”。

誇張も謙遜もない事実だ。現状、天の神の力は増し続けている。逆に神樹の寿命が近付いているのだから、大赦も神婚で賭けに出るのだ。それを否定し、寧ろ利用して天の神を鎮めようとしているのが勇者部だ。

神樹の結界も放っておけば一年も持たないだろう。維持だけなら可能でも、天の神が送る刺客の攻撃を耐え、それに対処する勇者も神樹の力を使用するのだから、元より長くは持たない。

羞恥と不安が心に燻るのを感じながら、顔を深く俯かせた。

◆◆◆おまけ◆◆◆

東郷「っ!? あ…がっ、ぎやあああああ!! グゴツゲツ!? ガガ
グツツツツ!! うぎやあああああ!! う、ウオエエエエエ
!! ゲフツ、は…はあつ、はあつ…いな、なっ!! 脳が…勝手に破壊され
る…ツツ!! 何がっ!? ……唯斗君か友奈ちゃんのどつちかが寝取ら
れた気が……おえ…っ! ……こ、この反応は……ま、まさか…両方な
の!? あっ、だめ……意識が……」

そして、東郷美森は永眠しました。めでたしめでたし。

女子会（笑）

「女子会をします」

「は？」

部屋に風と夏凜の音が響いた。

それはあまりにも急だった。今朝のこと、勇者部の部員のほぼ全員
の端末に東郷美森から緊急召集令が出されたのだ。

彼女特有の堅苦しい文章には並々ならぬ焦りが滲んでおり、普段な
らばいつもの発作かと無視する所だが、現状、勇者部は天の神という
大敵を目標にして過ごしている。故に、今この状況で彼女ほどの者が
取り乱した連絡をするのだから、誰だって焦ってしまう。

時刻は夕暮れ時であり、集められたメンバーは郡唯斗を除く勇者部
全員だ。そこで既に嫌な予感というモノが誰の胸にもあった。

「女子会を、します……！」

「いや……別に聞き返したワケじゃないから。てか……え、女子会？ア
タシの聞き間違いじゃなくて？」

「……風先輩、事態は急を要するのです。そうです、こうしている時間
も惜しい……！私は今すぐにでも犯人探しをしなければいけない!!」

「は、犯人探しい!?!」

「わお、ゆーゆはノリがいいねえ。でもだいじょーぶだと思うよ？
そーゆー仰々しいアレじゃない気がするからね〜」

園子の言葉は単なる勘によるものだが、不思議と彼女の勘は大きく
外れた試しがない。恐らく、勘というよりも機微に対する観察による
予測に近いのだろう。

だからこそ彼女の発言は確信を持った言葉となっている——と、理
論的に説明するまでもなく。園子には分かっているのだ。また親友
が奇行に走ったことを完全に理解しているのだ。

無論、その思考に思い至るのは銀も同様だった。東郷を昔から知る
者ならば察するのも容易い筈だ。

「……そ、それで……？東郷先輩からは緊急事態だって聞いたんですが

…」

「ええ…緊急事態で由々しき事態よ！」

「……………なー、友奈。アタシさ、物凄く下らないコトに巻き込まれてい
る気がするんだけど」

「でも銀ちゃん、東郷さんが緊急事態って言ってるよ？きつとアレだ
よ！なんか…こう！ドドーンってなってズババババ！的な!!」

「そっか、なるほどなー。いや全然わからんて」

「友奈の言葉に意味を見出すのは間違ってるわ。考えちゃダメ、感じ
るの」

「にぼっしーがそれっぽいこと言ってるー。ねえねえ、これって実質
的ににぼっしーからゆーゆへの告白だったりしないかな？『アンタの
ことは私だけが分かってるんだから！』的な？えへへ、そうだったら
嬉しいなあ〜♪」

「……………は？夏凜ちゃん…？唯斗君だけじゃなくて友奈ちゃんに
まで手を…………ツ!!」

「ち、違うわよ!?!ちよつ、東郷！何で端末構えてるのよ!?!また園子の戯
言だから!!」

「…話し、進まないツスねー」

「これが勇者部クオリティなのよ…アタシの女子力を持ってしても解
決困難なコトなの」

「お姉ちゃんの女子力、関係ないじゃん…」

——閑話休題。

「——女子会をします!!」

東郷は再び、自室に大声を響かせた。類い稀なる国防精神と彼への
恋慕を胸に秘め、悲しき獣の如く声高らかに叫んだ。同時にこの場の
半数は帰りたいと刹那に願った。

「またスタートからやり直しになったわ…で、なに？犯人探しとか
言ってたわね」

「そうです、そうなんです！端的に言いまして、私は先日…寝取りの波

動を感じ取って脳が爆散しました。だから犯人はこの中にいる筈なんです!!」

「なるほどね。三ノ輪、通訳してちょうだい」

「え、無理っす。そーゆーのは園子の役割なんで」

「はいはい、まるで通訳するかのように通訳するんよ。ふっふっふー！通訳を通訳してt w o 焼くんよー！」

「あ、園子は通訳とt w o 焼くを掛けたダジャレを言ってるっすね」

「そこは通訳せんでも良いわ！」

彼女の発言を園子が通訳するまどめるところなる——先日、東郷は酷い頭痛に苛まれたらしい。激しい吐き気と脳漿が焼かれる感覚、脳の中を何十もの虫が喰い荒らすような気持ち悪さ。

その原因を彼女は何か、唯斗が誰かに寝取られたことなのだと主張しているのだ。無論根拠はない。変人の変人的な変人による変人のための変人直感だ。

尚、東郷美森と郡唯斗の間には交際の事実も予定もないため、もしも唯斗が誰かしらと叡智的な何かをしたとしても寝取りには該当されない。

「犯人はこの中にいますー！いないと唯斗君を締め上げます、絶対に」

「横暴かよ」

「——私だって馬鹿じゃありません。呼んだ面子に各々、相応の理由があります」

「…どーでもいいけど、早よしなさいな。アタシも暇じゃないんだから」

「まずは風先輩です。風先輩は精神年齢が少々幼い…：もとい、わんぱくで唯斗君に近いです。よく二人で叡智やら何やらと怪しい会話もしていますし、なにより…先輩は誰よりも早く唯斗君と仲良くなり、沢山喧嘩もしています。よって一番の犯人候補です」

「擦じ切るわよ？唯斗共々擦じ切って壁の外にはら撒くわよ？」

酷く心外だった。風は唯斗と同様に自らを常識人だと思い込んでいる人種であり、それと同時に自分以外の皆を手の付けようがない変人なのだと決め付けている。

だからこそ変人の代表格である彼と同類扱いされるのは我慢なら
ない。

そんな風を無視して東郷は続ける。

「次に樹ちゃん。樹ちゃんは最近、唯斗君と二人で一緒に行動する事
が多いわ。先週と比べて五割増しです。いくら鍛錬だとしても、異性
同士での接触数が増えるのは感心しないわ。最近では唯斗君も嬉々
として樹ちゃんを鍛錬に誘っているし…ッ」

「いえ、単純にお互いの相手が務まるのがお互いなだけですし…私、
唯斗先輩以外には本気出せませんし」

「妹が強者オーラを隠そうともしなくなつた件…」

極論、覇者は覇者だつた。それだけの話であり、それ以上には発展
しようもない。今となつては覇者こと樹の遠慮無い本気を受け止め
られるのは唯斗だけであり、未だ唯斗の底が見えないからこそ樹も一
切の躊躇を捨てれる。

無論、覇者つてる覇者も一応は外側が女の子なので、東郷は彼女を
危険分子として数えた。

「そのつちは同居、同衾、その他諸々の大凡異性の友人相手では度を越
す行為を繰り返しているでしょう？すぐに抱きつくし…烏賊の姿揚
げを用いて得た情報によると、お風呂に突撃しようとした事も…え
え、重罪ね。海に沈めましょう」

「園子…お前なにやってるんだよ」

「どやあ！我が人生に一片の悔いなし!!」

「ちなみに銀も同罪よ？『相棒』は免罪符になりません。と言うか昔か
ら距離感とかおかしいし、ずっと仲良しだったから羨ま…もとい、
不健全だつたので。海に沈めます」

「なんかアタシに厳しくね？え、アタシに親でも殺されたのか？」

取り敢えず園子と銀は海に沈められる事が決定したようだ。少な
くとも東郷の中では、だが。無論それを甘んじて受け入れる二人でも
ないので、無事に事態が収束した後に、みつともない争いが巻き起こ
るのだろう。

「夏凜ちゃんは論外です」

「はっ。」

「これまた烏賊の姿揚げを用いて得た情報によると……婚約者、という単語が出てきたわ。……ね、分かるでしょう?」

「樹、いますぐ唯斗の口を鉄糸で縫って来なさい!あの情報をばら撒く馬鹿の口を!!」

「はい!でもその前に婚約者について詳しく!!」

「くっ!戦略的撤退よ!!煙幕玉あ!!」

鞆に手を突っ込むと、夏凜は唯斗と共に作った煙幕玉を床に叩き付け、その場からの逃走を図る。そして約二秒後に東郷に即捕まり、手刀で意識を手放した。そして部屋が粉まみれになった。

本日、三好夏凜は強制的に東郷家にお泊まりする事となった。勿論本人の意思は関係なく、東郷が勝手に満面の笑みでの決定だ。

簀巻きにして床に転がされる彼女に同情には向けられるが、助けようとする命知らずは残念ながらこの場にはいなかった。

「さて、次は——」

「ひえっ……」

「あら?友奈ちゃん、どうして怯えているの?」

「ごめんなさい!唯斗くんの前で脱ぎました!!」

「アババババカビョ……」

「あ、東郷先輩が死にましたね」

東郷美森は死んだ。白目を向きながら痙攣し、その生涯を終えた。樹はパシヤリとスマホで写真撮り、唯斗に送った。尚、一時間後に来た返事は『まじウケるw』だった模様。

彼女も最後の最後で想い人笑いを取れて、あの世で喜んでいることだろう。樹はそう言い訳をして、バレないように気配を消してその場を去った。

「え、あつ……えっ……?と、東郷さん……?……っ?!い、息してない……!どうしよう!?!そ、園ちゃん!救急車とか……ええっ?!園ちゃんも息してないよ!?!」

「ついでに夏凜は美森に殺られたし……二年組も半壊したなあ。他人事なら腹抱えて大笑い出来たのに。ま、そのうち生き返るっしょ」

「後輩達が死屍累々だわ……てか友奈さん……あー、えつと。アレとそーゆー関係なワケ？」

「……ごめんなさい、詳しくは言えないです。でも至って健全です！……たぶん」

「そつかあ、服は脱ぐけど健全かあ……三ノ輪、アタシもう分からないわ……」

「安心してください、パイセン。アタシも同じくっス」

その後、東郷は二日寝込んだ後に一週間程度の記憶を失った。そして勇者部内での恋愛話禁止令が出された。

「……むっ、愉快的波動……どこかで美森と園子、あと夏凜がぶっ倒れたか？」

「いかが致しましたか？」

「いや。何でもないよ、お嬢。てか上から星屑来てんぜ？」

「ほわっ!?こ、こんのお!!」

東郷達が無事死亡しているのと同時刻、唯斗は防人として壁外調査をしていた。壁外調査と言っても既に帰りであり、拠点であるゴールドタワーに戻る最中だ。

唯斗は掌に出現させた石を前方に投げ、前進を妨げる星屑に致命的なダメージを与えながら、左右に迫る大型の星屑を銃剣で横円に切り裂く。

「オイオイ、何だよ！腕エ上げたじゃねえか!!」

「どーもね。シズクこそ楽しそうだな」

「はっ！なーにが楽しいかよ!!」

「獰猛な笑顔で何を言うか。……おい、オガサワラカワラヒワア！後ろに星屑流れ込んできてるぞ!!」

「うぎやああああああ！死ぬ死ぬ死ぬううう!!て言うか雀だよ!」

「あははははっ！鶯の悲鳴は聴いてて飽きないなあ!!」

唯斗は無邪気に笑った。バラエティに富んだ彼女の絶叫は本気が

過ぎる為か、常に新鮮な笑いを届けてくれる。それでいて本人はゴキブリ並の生命力があるため、安心して見ていられる。

そもそも唯斗は雀が目に見えるほど痛々しい怪我をしている所を見たことがない。普通に異常だ。防人番号一の楠芽吹ですら生傷が絶えないのだから、彼女の異様性が際立つ。

「笑ってる暇があるなら助けてよ!？」

「めぶっちにでも言えっつの」

「メブからはユイに言えっつて言われたんだけどおおお!!」

「あらあら、雀さんったら押し付けられてますわね」

「弥勒さんに言われなくても分かってるから!」

「……アイツ、分かっつて助け求めてんのか?」

「言っつてやるなよ、シズク。あれは哀れな生き物なんだ…でもそんな所が愛おしいんだよなあ。わざとバーテックスの前に投げて、どーやって生き残るのかを観察したくなる」

「悪趣味だな……ま、気持ちは分かるけどよ」

「こんのお!サディスト共めえええ!!」

今日も今日とて雀の絶叫は壁外に響く。これには唯斗もニッコリで、芽吹は御冠だった。

遠い背中

——力不足。

その考えが際立ち、胸の内では疼き、確信に至ったのはいつからだっただろうか。ライバル視していた彼はいつの間にか、手の届かない領域に至っていた。妹分だった後輩も彼に触発されるように、有無を言わせぬ強者と成った。

二人と相対して、少女——三好夏凜は己の方が勝っているとは、もう言えなくなつた。

「……はっ！せいッ!!」

弱気な自分を鼓舞する掛け声も、何処か虚しい。

夏凜の鍛錬場となつた海辺の砂浜。そこで少女は剣舞の如く二本の木刀を振るい続け、妥協のない鍛錬を重ねている。

そも、事実なのだ。夏凜は郡唯斗や犬吠埼樹より、劣っている。きつと模擬戦でも勝てないし、彼女が最も優れていると自負している技量の面でこそ二人は上回っている。

——そんな事、彼女のプライドが認めない。他を蹴落として勇者の力を得たのだから、その分の期待と羨望、妬みを背負っている。

未だに耳に残っている。選抜された場にて、最後の最後まで争い競い合った彼女の声が。夏凜のストイックな性格はあの少女の影響が大きい。

夏凜はあの少女の強さを誰よりも知っているから、力を得た今、彼女以上の強さで他を圧倒しなければいけない。

無論、争うべき相手が仲間ではないというのも理解している。だが然し、それでも夏凜は負けたくない。自称する『完成型』は負けを認めさせない。

「ッ……せやあ!!はあああ!!」

身を刺す寒風を振り払うように、足で砂を蹴飛ばし、身を捻りながら空気を木刀で袈裟斬る。昨日より今日、今日よりも明日。鋭さの増す剣先も、だが彼女にとっては鈍足に感じるばかりだ。

これでは追い付けない。時間が足りない、力が足りない、技術が足りない。だから、あの時——夏凜と唯斗の前に現れた黒い友奈を倒せなかった。

技術面では圧倒出来た。だが火力が足りず、結局のところ夏凜が与えたダメージなど無いに等しい。あの黒い友奈が天の神に組する何かであるのは他の皆と話し、結論付いてはいるが。

そんな天の神の力を扱う存在に勝てないのであれば、当然、本体である天の神に敵う道理もない。だからこそ焦っているのだ。

「はあ、はあ……！」

「よっす、お疲れ」

「……………何か用？見ての通り、忙しいんだけど」

「初っ端から不機嫌だな」

気配もなく現れたのは、夏凜の焦りの半分を占める彼だ。唯斗に非がある訳でもないが、自然と不機嫌になってしまうのか彼女が唯斗を勝手に意識しているからだろう。

数ヶ月前までは夏凜が勝っていた。彼を無理やり鍛錬に誘い、面白いように避ける唯斗を丁度良いサンドバッグと同様に思っていた。

なのに、今では何方がサンドバッグになるのか。逆転した力関係は夏凜のプライドを傷付けるには十分過ぎた。

「鍛錬、手伝うか？」

「っ！……………随分と上からね…ッ！」

「落ち着けよ。焦ったところでお前が強くなるワケでもねえし、冷静さを失ったヤツは足でまといだ」

「…このッ！そうやって、アンタはいつもいつも…!!人を馬鹿にして、身勝手に！何でもかんでも一人で突っ走って…！……………やっとな頼ってくれたと思ったら…次は足でまとい？……………訂正しろ！郡唯斗お!!」

「しねえよ」

誰よりも早く満開をして、その代償に気付き暴走する風を過剰な暴力で止めて罪を背負おうとして、東郷が壊した壁から侵入したバーテックスを倒すために何度も満開を重ね、自分自身の姿形さえ散華して、やっとな戻っと思ったら勇者部の前から姿を消して、次に再開した

時には天の神に侵食されていて。

二年前も同じように無茶をしたと、園子や銀は言っていた。

そんな彼が、初めて頼ってくれたのだ。天の神を倒すから手伝って欲しいと、仲間を頼ったのだ。

夏凜は単純に嬉しかった。その期待に報いようと、彼の手を引き上げようと躍起になった——が、その結果がこれだ。

「——訂正させてみるよ、三好夏凜。俺の知る三好夏凜前はこんなに弱くなかったぞ」

「ツ！私は……私は弱くなんかない！完成型勇者は誰よりも強くないといけない!!だから……アンタの言葉、訂正させてやる!!」

「はっ！吠えるだけなら誰でも出来んぜ？」

視線を絡めてから、それが戦意に変わるまでは長くなかった。夏凜が挑戦的ただけでなく、唯斗もまた、彼女と武器を交えるつもりでこの場に来たのだろう。

故の煽りだ。それは理解しても、今の彼女は神経質なのだ。力を証明するからには、煽りも何もかも怒りとして力にするのみだ。

「——!!」

——紅い花弁を振り撒き、勇者システムを起動する。思えば、勇者として唯斗と戦うのは操られていた時を除けば初めてだ。唯斗も小さく頷くと、二つの端末を構え、賢者と防人の衣装を同時に纏う。

夏凜の双刀に相對するは、同じく紅い双刀だ。同じ武器だが、その構えは異なった。

「…………その武器……」

「可能性、魅せろよ……!!」

「ツ!!」

短く屈むように構えた唯斗は右手の刀を真上に投げ上げ、そのまま左の刀を両腕で振り被る。

「——孤月・石紡」

「そんなの当たらないわよ！はああああ!!」

愚直に、然し鋭く振り下ろされた剛撃は後方に飛んで躲す夏凜に聞せず、足元の砂を過剰に飛び散らせる。夏凜は砂埃で姿の見えなく

なった唯斗に小太刀を複数本投擲するが、僅かに砂浜に刺さる音が聴こえるばかりだ。

視界が確保出来ていないのにも関わらず、容易く躲かされているのは想像に難しくない。

「孤月・暴風」

恐らくは乱雑な横薙ぎなのだろう。全ての土埃を吹き飛ばした中心地には、刀の面部分を帆のようにして横に振り切った彼の姿があった。

そのまま片手を上に掲げ、先程上に投げたもう片方の刀を右手に収めると、悠々と剣先を夏凜に突き付ける。

言葉は無いが、余裕の滲む表情からは彼女に対する煽りと、多少の落胆が見て取れる。

そして——夏凜にとって、それはこれ以上ない挑発でしかなかった。激情に駆られ、低い姿勢のまま距離を詰めて彼を穿つ。

穿ち、予測通り躲された先にもう片方の刀を振る。それでも彼女の知る唯斗ならば躲すのだろう。予測に予測を重ね、勇者の脚力を十二分に発揮して身を横に捻り、勢いづいた蹴撃を唯斗の頭を叩き込む——が。

「——それ、悪手だぞ」

「なっ！」

当たる直前で傾げられた首。蹴りはほんの少しだけ掠りながら、然し唯斗の後方に流され、そのまま胴体に刀の裏面を優しく当て付けられる。

「おらよ、これで一回死んだな。続けるか？」

「くっくっ!! 舐めるなあアアアア!!」

「おっと…」

刀を握ったままの不格好な殴りを容易く受け止められ、だがその間に夏凜は体制を整え、後ろに大きく下がる。

深く考えずとも、明らかに手加減されている。きつと本気で殺す気ならば、最初の一閃で精霊バリアを消耗させられ、そのまま袈裟斬られていた事だろう。

そうならなかったのは、夏凜と違い唯斗には余裕があるからに他ならない。そも、武器だつてまだ夏凜の双刀しか使っていない。彼の戦闘スタイルは莫大な量の武器を掛け合わせ、無限に等しい戦法で相手を翻弄するものだ。

だからこそ、彼は不利な状態で、そして自分の身に秘めた技術のみで戦っている。

「今の攻防……それ、郡唯斗だから成立してるんだぞ。自覚しろ、認知しろ、相手は常に未知だ。予測じゃなくて適応するんだ。型にハマった戦法が未知に届くと思うなよ」

「…随分と偉そうに講釈垂れるくれない。型に嵌ってる?……: そんなの私が一番分かってるのよ!!」

「じゃあ変化でも昇華でもして見せる。もう餓鬼の喧嘩じゃねえんだよ!!死ぬ気で来いやアア!!」

「上等ツツ!!」

——現状、夏凜の武器は両手に装備している双刀と無数に召喚できる投擲用の小太刀、それを任意のタイミングで爆発させる事だ。

これが唯斗ならば刀の裏面を小さく爆発するように束ね、速度と威力を高めるのだが。無論、夏凜の扱う勇者システムでは不可能な芸当だ。

武器を扱うことに関しては、そもそも唯斗と夏凜では意味が違うのだ。一を極めるか、一と一を足して無限を生み出すか。

現状、夏凜が出来ることは決まっている——と、割り切ることなんてしない。

(……考えろ!劇的な覚醒なんて非現実的……小太刀の物量で攻める……?いや、そんなの通用しない!そんなのが有用なら私である意味がない……奇想天外な手……奇を銜う必殺があれば……!)

唯斗の猛攻を全力でいなしながら思考を回す。

手札は双刀と無数の小太刀、それを爆発させる事。後は勇者の身体能力と精霊バリア、今は使わない満開と——

「……………あ」

——もう一つあった。

勇者ならば誰もが持つていて、だが誰も使わない——否、夏凜しか有効活用できない能力が。小回りが効くスピードと手数で攻める夏凜だからこそ使える、任意と認識、後はイメージで扱う力。

扱う自信はある。ぶつつけ本番でも成功させられる。いや、ここで成功させなければ、夏凜は二度と唯斗達の背中を超えられない。

ならば、失敗なんて起こり得ない。この程度、完成型勇者ならば容易いと息巻く。

「——ありがとう、唯斗」

「ん？」

「私を超えてやるわ。アンタの発破……丁寧にお返ししてあげる!!」

「……はっ、らしくなってきたじゃん。いいね、良いなア、いいじゃん!!存分に見惚れさせてくれよなア!」

「勝手に惚れてなさい。アンタの……郡唯斗の婚約者候補は、最強で最高の完成型勇者なんだから!!」

砂浜においての走法は夏凜の方が歴がある。元よりスピード型の夏凜が、この場に限っては唯斗に先手を取れる。

左右に短くステップを踏み、フェイントを混ぜての超接近。唯斗に限らず、超近距離からの攻撃は避けることが叶わず、いなすか、武器で防ぐだろう。

夏凜は択を強制しているのだ。勇者ならば精霊バリアを盾にしての攻撃もあるが——最後に相手するのはバーテックスだ。当然、バリアなんてない。

唯斗は飽くまでも夏凜を試している。その自覚も夏凜にはある。だが、関係ない。防ぐにしろ、反撃するにしろ。

夏凜の手札は応用によっては全てに対処可能だ。後は扱う本人の技量次第。

——超近距離から振るわれる横薙ぎ。

「はああああ!!」

「愚直!防いだら無意味だぞ!!」

「だから防げない!一撃なのよ!!」

「っ!」

夏凜の刀と唯斗の刀がぶつかる刹那、夏凜の刀は花卉に還り——振られる手が唯斗の刀を超えた瞬間、また刀が再構築された。

そのまま唯斗に直撃した一閃は彼の体を大きく後退らせ、精霊バリアを消費させる。これがバーテックスだったなら、間違いなく大ダメージを受けていたことだろう。

「……………」

「ふんっ、どうよーもう私の前で防御なんて意味を為さないわよ!!」

「……………はははっ…流石だな！さすが夏凜だ！こんな方法、俺の記憶にもねえぜ!!」

元々、勇者の武器は花卉によって形成されている。勇者の衣装と同様であり、故に変身する際に花卉が溢れて体を覆う。

その武器だが、勇者に変身した状態でも仕舞う事が可能なのだ。出せるものは仕舞える、至極単純な道理だ。だがそれを戦術に組み込むメリットがあるのは夏凜だけだ。

風の場合は武器が大剣であり、同様の手段を用いるにはデメリットが大きい。銀の大斧も同様であり、樹や東郷に関しては消すことで無防備になるだけだ。有益な意味なんてない。

「これでも足でまとい？」

「何言ってるんだよ。最初から頼りにしてるっての」

「…ふんっ、どの口が言うのよ。……絶対に、後悔させないわ。て言うか天の神を倒すのは私だし！完成型勇者に不可能なんてないんだから!!」

「おっ、さっそく調子になり始めたな！じゃあ明日は覇者も含めた三人でやるか？アイツ、時間経過で強くなるチート仕様だけど」

「……………じよ、上等よ！二人まとめてボッコボコにしてやるわ!!」

「因みに樹さんはワイヤーで作った拷問器具を使って即死級の攻撃をしてくるし、最近は糸の強度とか太さも調節して不可視の罠をそこらじゅうに仕掛けたりとか、コッチの身体にまわりつかせてデバフ掛けてきたりするぜ？」

「え、それ何て理不尽？」

「覇者っていう名の理不尽です」

夏凜は普通に慄いた。そんな樹にも負けるつもりはないが、少なくとも死の覚悟はすることになりそうだと悟ってしまった。

★花結いの章二話《召喚》

勇者が異世界に召喚されてから多少の時間が過ぎた。

その間、西暦の巫女である上里ひなたが勇者部に馴染むのにも時間は掛からなかった。彼女が命懸けで戦う勇者に対しての接し方に長けている、と言うのがあるのだろう。

もしくは友奈や銀の、新たな仲間への対応がひなたでなくとも、知り合って間もない人物には好印象だったのかもしれない。

元の世界と異世界では時間の流れや四季こそ同様であるが、然しながら召喚された日付けが決定的に異なった。

唯斗達の世界では夏が終わり、秋に突入する頃だった。然しながら異世界は召喚当時では四月であり、明らかにズレている。そも、飽くまでも神世紀三百年代が基準なだけであり、現実世界と重なっている訳でもない。

詰まる所、勇者が憩い戦い易い舞台が此処だったただけだ。フィールド

最初こそ世界観の整理に努めていた勇者部員も一ヶ月が過ぎる頃には『どーでもいいや!』と投げ出した。どんなに検証しても現実世界と何も変わらないのだから、やる気だつて削がれるというものだ。

新型バーテックスからの防衛戦に務めながら日々を過ごしている中、遂に朗報が流れ込んで来る――

「朗報です!」

「そうだよ!朗報なんだよ!!やべーって!元祖ぐんちゃん印のイカの姿フライがめっちゃ安く売られてるんだよ!!みんなで買いに行こうぜ!」

「はいはい、そんな事より朗報です!」

「え、無視…?」

部室に集められる事もなく、そもそもが放課後だったので八人全員が揃っていた。たとえば惰性的だとしても部の依頼に望むつもりはあるという事だ。

唯斗の戯言を無視し、ひなたは小さく微笑みながら話を続けた。

「増援です、新たな勇者が来るんです！」

「え、マジで？もしかしたら、ひなたが言ってたお仲間だったりするのかしらね」

「……風さん……残念ながら、今回は違います。もつと近い時代の勇者らしいです」

「えっと、それも神樹様からのご信託ですか？」

「ええ、そうですね。分かり易く言うのであれば……神樹様からの念がモクモクって頭に入り込みまして、情景と言いますか……ふんわりとしたイメージが浮かぶんです。それを解釈して言語化するのが巫女の役割ですね」

大前提として、神樹と人間とは物事の捉え方や認知、思考故に辿り着く答えも異なる。それを上手く、そして人間的に解釈して言語化するのがどの時代でも巫女の在り方とされている。

だからこそ西暦から神世紀に至るまで巫女の実在は重要視されて来たのだろう。

「へえ、そうなんだね……じゃあ、今回の新しいお友達もヒナちゃんにはどーゆー人なのか分かってるってコト？」

「そりゃねえだろーぜ？アレだろ、飽くまでも抽象的なイメージだから神樹も『おNEWな増援送るZET☆』的なことしか伝えてこないだろ」

「……まあ、その様な解釈も出来ますね。なにぶん、未熟なものでして……一から十までを理解するには至れないんです」

「……慰めるべきか、アホ唯斗にツツコミを入れるべきか……ツツコミ大将、アタシはどーしたら良いんだ……ッ！」

「…………えっ、ツツコミ大将って私!?イヤよ！銀がやりなさいっての!!」

「絶対嫌だよ……疲れるし」

「……話し、戻しても大丈夫ですか？」

人数が増えた分、必然的に話が脱線する確率も増えた。そもそもが個性の濃い人物しか居ない為、黙って真面目に話を聞ける者も居な

い。

だが珍しく口を閉じていた東郷だったが、小さく挙手して発言の意思を示す。

「それで、ひなたさん。どうして突然なのかしら？」

「突然、とは…？」

「増援についてです。神樹様の意思と言われればそれまでだけど…：最初から居なかったって事は何か意味があると思って」

「ああ、成程…ふふっ、それはですね？先日も軽く説明したと思うのですが、皆さんが攻めてくるバーテックスを撃退したり、攻略地域を増やし続けることで神樹様の御力に余裕が生まれるんです」

未攻略地域は造反神が暴れて侵略した場所であり、捉え方によっては造反神が神樹の力を奪っているとも取れる。無論、神樹から一から十まで説明がある訳でもないのが答えもないのだが。

端的に言うならば、地域を攻略するほど仲間が増えると言うことだ。そも、造反神の特徴として追い詰めるほど力が増すというモノがある。

故に神樹側での抵抗手段がそれなのだろう。少なくとも神樹からの念をひなたはそう解釈し、皆に説明した。

「ひなたン、ひなたン。私もしっつもーん」

「あらあら、園子さんもですか？」

「その増援っていつ来るの？」

「それは——あっ、そろそろですっ！」

——瞬間、部室が眩い光と四色の花卉に放たれる。

樹海化の際に発生する現象と酷似しているが、不思議と肌が粟立つ感覚はない。引き続き起こるのは気配——と呼べる程濃いモノでもないが、ピリつく雰囲気が生まれた。それが勇者部員の緊張故か、もしくは新たに召喚された勇者の威圧なのか。

答えは後者だった。

「ッ！危なッ!？」

「…っ!!」

まだ全員の目が眩む中、棒状の何かが空気を切り裂く音と、それと殆ど同時にピコンと鳴る打撃音。前者は誰の想像も追いつかないが、もう一つに關しては嫌に聴き慣れてしまった唯斗のピコピコハンマーの音だ。

「おいおい……凶暴なヤツが紛れてんぞ?」

「チツ………失敗。…つぎ……し、とめる…ツ!!」

「上等だよ、チビ。ぶっ潰して分かせてやろうか?」

「……細…切れ………に、する…ツ」

晴れた皆の視界に映るのはピコピコハンマーを構える唯斗と、それを無機質な瞳で捉えながら”ひのきのぼう”を居合で構える人物だ。

無造作に伸ばされた黒めの茶髪に、唯斗と同様に腕部分だけ展開された白い勇者服。腕以外は白とチャコールグレーで構成された女子制服に包まれており、東郷の手は勝手にカメラのシャッターを押した。

かなり低めの身長とは不似合いな刺々しい雰囲気は戦闘の開始を無言で告げている。

互いに制服姿のまま、武器を構えて突撃する刹那――

「ストオオオオオツップ!!」

「うぐえっ!?!」

銀と、彼女に酷似した少女が殆ど同様に唯斗達の襟を後ろに引つ張り体制を崩させた。

「おまつ、馬鹿か!?!見知らぬ人にいきなり攻撃するなよ!?!」

「……でも……きゆう、に…目の前………に、現れた……ゆえ、に…危険、人物……!」

「判断が早すぎる!?!」

「……唯斗、お前もだからな?小さい子相手にマジになるなよ………てか、何か見覚えあるし」

「いや、でもさあ……アイツ、手加減無しで攻撃して来てたぞ?狙われたのが樹とかトーゴーだったなら無視してたけど、流石にひなたが殺られたそうだったから」

「えっ、私ですか!？」

「……私は護ってもらえないんですね……どーせ私は覇者ですよーだ。別にアレくらい防ぐのは容易いですけど……唯斗先輩は護ってくれないんですね……」

「いや、我が妹よ……もう自分で『容易い』とか言っちゃってる自覚はありますか……?」

女性制服を纏う彼は他の仲間の説得もあつてか、険しい剣幕を鎮めた。

改めて新たに召喚された勇者達に皆の視線が集められる。先程まで暴れていた者と、それを抑えた鈍色の髪の少女。その光景に呆気を取られていた濡羽色の髪の少女と、大きな欠伸をしながら妙に落ち着いている少女。

きつと、この場の全員が察した。無気力無表情な彼は置いといて、他の三人の組み合わせは見覚えしかない。

「えつと、これは……?」

「……うんうん、なるほどね。タイムスリップか異世界召喚かな? あつちは未来の私たちかな?」

「園子さんや、出来れば推理した情報を銀さん達にも共通してくれ……咄嗟にこの馬鹿を止めたけど、状況が全然分からない……」

「……銀と、雌豚……の、姉……?……ついで、に……スーのもの」

新たな勇者——先代の勇者四人だ。困惑する鷲尾須美に、状況を推理して察した乃木園子、理解を放棄して園子に頼る三ノ輪銀とグルグルと視線を回す郡唯斗。

多少の姿形、性格の違いはあれども間違いなく現代の唯斗達の二年前の姿だ。無論、両方の唯斗は全く異なる性格と外見に困惑を隠せないが。

「……なあ、東郷。あの目え死んでるチビって……」

「……ええ、昔の唯斗君ね」

「……なんか女子制服着て髪伸ばしてるんだけど?」

「ゆーちゃん、二年前と比べてちゃんと男の子になったよね。特に身長とか別人かなってくらい伸びてるよね」

「銀、頼むから否定してくれ……！昔の俺、あんなに無口で凶暴な女装癖ありの無表情で目が死んでる個性迷子っ子なワケないだろ……？」

「…受け入れろ。アタシから、もうそれしか言えないよ。ちなみにまだ隠れギミックもあるからな」

「……………」

記憶が消える前の自分に何があったのか、唯斗は考えるのを辞めた。

「はいはい、カクカクシカジカでして。皆さんが召喚された次第です」

「いや分からんて」

「……………意味、不…………？」

中学生唯斗と小学生唯斗は首を傾げる。だが他の小学生組は『カクカクシカジカ』で理解した様で、まだ困惑はしているが同時に納得もしていた。

「ゆーちゃん、簡単に言うただね。異世界に来たからバーテックスを殲滅しようって事だよ？」

「……………なる、把握…………」

皆で軽く自己紹介をして、まだ打ち解けはしないものの理解だけでした。小学生組も取り敢えずは二年後も皆が無事であることを喜び、しかし園子以外が程々に変わっている事に疑問符を浮かべた。

唯斗の変化は明らかだが、銀と須美も少なからず変わっている。銀はだいぶ落ち着き、わんぱくだった性格も少しだけ冷静で余裕のある気質になっている。須美は逆に柔らかく、そして明るくなっているのが見て取れる。

順当な成長とも解釈できるが、だからこそ唯斗の激変が特異性を帯びるといふものだ。

「…改めまして、鷲尾須美です。……えっと、其方の東郷さんの過去…です。皆さんの足を引っ張らない様、努めます」

「あら…もつと砕けた態度でも良いのよ？」

「はい……………あ、いえ…東郷さんも皆さんも、年上ですので」

「須美は堅苦しいなあ。あつ、アタシはご存知の通り三ノ輪銀つす！銀先輩の二年前です！どーぞヨロシクつす!!」

「はははつ、元気いいなあ。アタシの小さい頃だから『小銀』って所かな」

「あー、確かに同じ名前つて不便ですね。んじや、今日からアタシは小銀つてコトで！ヨシナニ!!」

「乃木さん家の園子です。そっちのそのつちの二年後です」

「うひゃー！わたしの自己紹介取られちゃった！わたしが進化前の乃木園子です」

「進化前……ふむ、二年前の私の表現力も侮れないかもねー」

「……郡、唯斗……中斗の、二年前……」

「いや中斗つて……中学生唯斗を略したな、コイツ。じゃあお前は今日からチビ斗だ！見た感じ、この中で一番チビだし」

「……不満……」

斯して、勇者部に新たな四人が加わった。それぞれの未来や、逆に唯斗の忘れてしまった過去。それについての言及は今のところはしない事となった。

それによつてどのような未来が変化してしまうのかも不明であり、何よりも小学生の銀や須美が未来は自分達の手で切り開くと言いつつ切ったからだ。

まだまだ不便な点はあるが、この世界にいる間は学校近くの寮を使う事となった。今のところは小学生四人とひなただけが、順調に解放地域を増やせばまだまだ人も増える筈だ。

だからこそ今は広すぎて部屋も余っている寮だが、少しずつ埋まつていく事だろう。

「やつほ、チビ共」

「あつ、唯斗さんだ！」

寮に大赦からの資金で買った家具を運び込んでいる最中。唯斗はイカの姿フライを啜えながら銀達の元に現れた。

「何か用つすか？」

「運び込み、手伝いに来た。結構な量もあるし時間掛かるだろ？」

四人分の家具だけでなく、寮を寮として機能させる為の道具が多い。玄関のマットレスやキッチン用具。共同トイレの物や掃除用具、その他にも細々とした物が大赦職員の運転していたトラックの荷台に詰め込まれている。

荷解きはもう少し後に開始する予定だったが、須美の提案により先輩達の手を煩わせないようにと、先に作業を始めていた次第だ。

飽くまでも須美は自分達の手で終わらせるつもりらしいが、量が量なだけに現実的とは言い難い。それに荷物運びならば唯斗の能力が大いに役に立つと踏んで、唯斗も足を運んだのだ。

「態々ありがとうございます。でも、先輩の手を煩わせるのは……」

「須美は硬いなあ……『おう唯斗オ！手伝い感謝ア!!』くらいの態度でいぜ？あ、イカの姿フライ食べる？」

「あつ、いえ……そんな態度、取れません！……でも、本当に不思議です。あの唯斗君が唯斗さんみたいに成長するなんて……」

「あ？」

「キレイなつて、チビ斗。その内……こんな須美がああなるつてことに絶望するぞ……」

「……？……意味、不……」

チビ斗には東郷美森が朗らかで面倒見の良い大和撫子に見えているのだろう。事実、東郷はチビ斗達に対してはそう接している。

案外、唯斗は東郷よりも須美との相性が良く、逆にチビ斗は犬猿の仲である須美よりも東郷の方を好んでいる傾向がある。

「ゆーちゃん先輩、ゆーちゃん先輩」

「ん、なんだ？リトル園子」

「お手伝いってゆーちゃん先輩一人だけですか？」

「ちよつ、そのつち！催促してる様で失礼よ!!」

「……スー、うっさ……」

「唯斗君もうるさいから。そんなに構って欲しいの？」

「……ん、スーの……存在、が……気に入ら、ない……から……噛み付いてる……」

「な、なんですって!？」

「おうおう、喧嘩すんなって。てか昔の俺と東郷って仲悪いのかよ……小銀、こいつらヨロシクね」

「うえっ!? 丸投げされた!？」

「さて、リトル園子よ。先程の質問——こう返そうか。『俺一人で十分だ』……と、ね」

「おおー、その心は?」

「——分身!」

唯斗は意味もなく適当に手で無意味な印を作ると、ポンと煙を立てながら六人に分身する。唯斗の分身は勇者に変身しなくとも使用出来る能力であり、荷物運びや掃除程度の軽い作業ならば問題なく行える。

「ふ、増えた…!? 須美、園子! アレ忍者の術だぞ! スゲー! 唯斗さんパネエ!!」

「……忍者……まさに、我が国の幻の切り札…ツ! 存在も悟られなかった影の諜報員!!」

「わあ、ゆーちゃん先輩。一人貰っても良いですか? 代わりに喋るサンチヨさん枕あげるから〜!」

「良い訳がないよ? てか何に使う気だよ……つーか、喋る枕って枕として機能すんの?」

「……オレ、も…いつか……分身、する…ツ!」

「……分身って子供ウケいいんだよなあ。ジャパニーズNINJAは昔から子供の憧れだからな。……さて、三十分で終わらせるぞ! 野郎ども取り掛かれえい!!」

唯斗の号令に合わせて本体を除く五体の分身体はトラックに積み重ねられた荷物を運び始め、須美達もまた任せっぱなしではいれないと息巻く。

そしてチビ斗はそつとトラックの上に飛び乗りサボリ睡眠を始めた。

それから数日後、唯斗はチビ斗の戦闘時の豹変を見て腰を抜かすが、それもまた別の話。

◆◆◆オマケ◆◆◆

呼称

- ・小学生唯斗⇒チビ斗
- ・小学生銀⇒小銀

その他は原作通りです。

V S 堕ちた勇者

「……………さて、そろそろ動こうかなあ」

小さく、然し妙に響く眩きは灰色の世界に浸透する。開放的で、故に閉鎖的な空間は奉火祭の際に東郷美森が囚われていた所に酷似している。

そこに在る人影は六つ——復讐と贖罪、妄執に傀儡、怨恨。残る一つは酷く曖昧で、まだ姿形を定められていない空の器だ。傀儡である彼女とはまた別の意味で、人形でしかない存在なのだ。

別の次元より魂を吞まれ、用意された『空の器』に吹き込まれた存在こそが彼女達だ。

それもまた、悪辣な思案の賜物とは言い難い。飽くまでも神に逆らう神敵に有効で、不確定要素であり神樹を構成する一柱より寵愛を向けられた少年への意趣返しとも言える。

若しくは神が人の子に与える『試練』なのかもしれない。決して復讐を謳わず、贖罪も妄執も孕まず、怨恨の傀儡には成り果てない存在。其れが矮小で醜く、酷く哀れな人間を利用して同類にぶつける。

何処までも神が人類を見下した故に出来上がる状況だった。自身が出向くまでもなく、欠片と魂の掛け合わせでの『試練』。

「みんな、行つくよー?」

「……………命令しないで、復讐ちゃん。私は私の愛憎の為だけに動くわ」

「もー!そんなこと言っても妄執さんがたつた一人の勇者に負けつつて事實は変わらないんだからね?ねっ、贖罪ちゃん」

「くふっ♪嗤える意地悪は止めなさいって、復讐。贖罪は喋れないし目も見えないの。アハッ、この声だって聞こえているのか怪しいからね!」

「……………悪意ってなら怨恨ちゃんの方があるでしょ。本当に……………気味が悪いわ。今すぐ死んでくれるかしら?」

「…はっ、調子に乗ってんじゃないわよ。妄執も復讐も、勇者に負けて

帰ってきたクセに」

「怨恨夏凜ちゃんつては嗤ったり怒ったり忙しいね！狂ったフリなんて態々やっちゃってさー？」

「…………ウ、るサイ…………ツ…………全いン…………贖罪樹…ミたい、ニ…………静か…に、シロ…………!!」

「傀儡風…………アンタもまあ、醜くなったモンよね。お人形さんのクセに一丁前に意思なんてあるし、歪なのよ」

「……………」

——斯して準備は整った。神にとっては『試練』の前座。自身の欠片たる彼女達を打倒して初めて、『試練』に臨む意思と証がある。

身勝手な取り決めは上位存在故だ。どす黒く枯れ果てた花卉に包まれ、堕ちた勇者は世界の滅亡を始める——

「っ……………何か来るな」

「ですね。……………不穏な気配が各所から……………」

日常として慣れた鍛錬をしている最中。

唯斗と樹は異変を感じ取った。刹那、世界の端から強烈な光の波と花卉の暴風が流れ込む。一拍を置いて端末からは騒々しい樹海化警報が鳴り響き、然し完全に樹海が展開される瞬間——

『やつほー！また遊びに来たよ〜♪』

『…………借りを返しに来たわ、犬吠埼樹…………！』

「っ……………」

空から黒髪の結城友奈と、赤黒い衣装と狂気に身を包む東郷美森が舞い降りる。友奈は本当に遊びにでも来たかのような軽い笑顔であり、東郷は足が不自由な様で、数本の触腕でふわりと佇んでいる。

樹海化の白い光と、友奈と東郷の放つ黒い瘴気が混ざり合い——顕現させる筈だった樹海に変化を齎す。

極彩色の世界は侵食され、枯れ果てた。

察するに容易い。きつとそれは彼女達に有利な舞バトルフィールド台だ。泥濘む

足元も、淀んだ空も、粘性を帯びて黒く枯れた巨大な根も。

全てが唯斗と樹を酷く不快にさせ、逆に相手側は平然としている。

「……これ、どー考えてもアレだよな」

「ですね。戦力分担されてますね、多分」

「おーい、黒い友奈さんや。そっち側って何人いる〜？」

『ナイシヨ♡』

「……あつそ。じゃ、疾く去ねや——残火でしかねえ偽モン」

『ふふつ、アハハツ♡そうね…：そうよ！その目で、その殺気を…：その愛を！全部私に向けて!!あはっ！アハハツ!!存分に愛を確かめ合いましよう！殺し合いましよう!!』

「……うえつ…：なんかコツチの仲間がゴメンね？私が言うのもアレだけど…：頭がイっちゃってる子が多いんだよね…：」

恐らくは仲間である筈の二人だが、そこに信頼も連携も見られない。敵ではあるが、とても協力関係には見えない。

吐息を漏らしながら恍惚の表情で興奮を露わにし、復讐の少女の存在を無視する妄執。そんな彼女に呆れながら、明らかに見下し下劣な存在だと表情で告げている復讐。

何処までも協力関係でしかないらしい。

「…唯斗先輩、あの二人って…」

「とりま遠慮なくぶっ殺しても問題ないぜ。天の神が再現しただけの偽者だし、そもそもが俺達とは無関係が存在だからな」

「じゃあ——全力でも？」

「ちよーど良い実験体だろ？」

『ツー！』

唯斗と樹の放つプレッシャーは復讐と妄執の勇者の背を冷やす。彼らの言葉は煽りでも誇張でもなく、自信と実力に基づいた事実ではない。

自らの領域に飲み込んで、予告のない襲撃までして。それでも尚、格上に挑むのは友奈と東郷だ。以前よりも色濃く天の神の力を秘めているのにも関わらず、相対する二人はそれ以上に成長——否、進化しているのだ。

前と違い、もう挨拶程度で終わる気もない。全ては今、この場で終わらせる。その為に復讐と妄執はこの場に居て、本来ならば協力もし

たくない相手を横に立たせているのだ。

「さて、手早く死んでくれるなよ?」

「試したいこと…いっぱいあるんです!」

『……ありや、これはナメられてるね。ま、しよーがないかあ。どっかの誰かさんがボツコボコにされて泣きながら帰ってきたんだものねえ?』

『…復讐ちゃん、貴女から殺してあげても良いのよ?』

『だーめ!まずはあの二人からね?じゃないと……先に私が貰っちゃうかもよ?』

『…忌々しい…ッ!』

妄執の放つ弾丸を踊るように避け、友奈はケラケラと似合わない笑みを浮かべる。唯斗と樹も視線を絡め、不敵に微笑む。来るべき時に備えて編み出した戦術を試せる相手が勝手に現れたのだから、油断こそしないが余裕はあるのだ。

「ほら、早く始めません? 私達も暇じゃないので」

「後悔すんなよ? 覇者と賢者の組み合わせは世界一面倒くせえからなア!」

『——じゃ、始めよつか!!』

『——殲滅を開始するわ』

薄暗い樹海にて、妄執の姿は溶けるように消えた。復讐の彼女が前衛で、妄執は完全な後方支援。型に嵌り、然し型を最大限利用する様は腐っても勇者なのだろう。

復讐・妄執 VS 郡唯斗・犬吠埼樹

「……………(ん)は…」

「樹海…っぽいけどね。明らかに雰囲気は違うわ…何て言うか、腐った樹海的な?」

同時刻、東郷美森と犬吠埼風もまた薄暗い樹海に飲み込まれていた。勇者にこそ変身しているものの、その力も頼りないと感じてしま

状況は掴めないが、しかし無闇に彷徨うのも良い手とは言えない。東郷と風だからこそ判断ではあるが、あながち間違つてもいないだろう。泥濘む地面も、もしも何処かに罠が仕掛けられていたとしても気付けないと確信出来る。

『——ようこそ、勇者』

「っ！………アンタ、夏凜……？」

「……雰囲気違いますね。この状況……前に唯斗君と夏凜ちゃんが言っていた、私達に酷似した敵の可能性があります」

「何て言うか……悪趣味なモノね。気分が良いとは言えないわ……で、アンタは何者？」

紅く、だが何人もの返り血を浴びたように黒く乾いた勇者衣装。彼女の特徴的だったツインテールも解け、後ろに靡くばかりだ。

風の問いに、彼女は頬を釣り上げて叫ぶように答える。

『私は怨恨の勇者、三好夏凜よ！よろしくするつもりもないし、これ以上話す事もないわ!!どーぞ、死んでちょうだい♪私を恨んで、怨恨に染まって、惨たらしく斬られなさい!!』

「……彼女、もう狂ってるみたいです」

「……覚悟は決まってるっての。倒すわよ、東郷！コイツが居るってことはみんなも別の奴と戦ってる可能性があるわ。早く倒して駆け付けけるわよ!!」

「了解しました！」

『——さあ、恨み合いしましょう?』

怨恨 VS 犬吠崎風・東郷美森

『ウグウウウ……ッ！コロ、す……殺ス！全員、塵……ウル、サイ……!!アタシ、ノ……アタマの中……で、叫ぶナアアアアア!!』

開戦と同時に、また樹海の別の場所にて墮ちた勇者が唸りを上げ、苦しみの叫びを零す。

黒いドレスに似た衣装も、解れと汚れが目立つ。華やかな其れとは異なり、戦場で返り血を浴び続けたモノにも見えてしまう。

一重に異様だった。腐った樹海の太い根に立ち、生き物の様に躍動する肉質な大剣を引き摺り。今にも襲いかかって来そうな雰囲気が漏れ出ている。

「……おいおい、何だありやあ……明らかにヤバイヤツだよな……？」

「み、見れば分かるわよ……！あの雰囲気……ええ、覚えがある。前に襲ってきた黒髪の友奈と同じね！つまり敵い！殲滅対象よ!!」

「風先輩っぽい敵かあ……先輩も女子力を失ったらああなるのかねえ。恐ろしや……」

「最初から女子力（獣）だったし、そんな変わんないでしょ……」

黒い瘴気に、血走った瞳。彼女——傀儡の勇者が敵として捉えるのは三ノ輪銀と三好夏凜だ。このような事態に陥る可能性は園子より聞かされていたが、やはり推理が現実となると慄きを隠せない。

何よりも恐ろしいのは、自分達も一歩踏み間違えれば彼女のように醜い傀儡と成り果てていた可能性があるという事だ。

同情はする。憐れみは今でも送り続けている——が、それを解放出来るのは勇者だけだ。故に、彼女の最期を飾る為に猛々しく叫ぶ。

「往くぞ、夏凜！乗り遅れるなよなあ!!」

「上等よ！銀こそ足い引つ張るんじゃないわよ!!」

『——殲滅ウ……ぜ、ン……イン……殺スウウウ!!』

傀儡 VS 三ノ輪銀・三好夏凜

「い、樹ちゃん……？」

「……違うよ、ゆーゆ。私の推測が正しいなら、アレは……」

彼女の姿は、捕えられた天使を思わせた。黒い鉄糸で目を隠され、手も足も縛られている。然しその身体は同様のワイヤーで構成された翼により浮いており、身に纏う白と薄緑の布が嘗ての勇者服なのだと気がつくまで、時間が掛かった。

敵意は感じない。

彼女——贖罪の勇者はただ其処に在るのみ。薄暗く腐った樹海を

ワイヤーで支配し、その中心に佇み、結城友奈と乃木園子を捕らえる『檻』として樹海に存在している。

勇者部の樹が放つ押し潰すような圧とは逆に、贖罪からは何も感じない。怒りも悲しみも、喜びさえも。道端の植物よりも軽薄な存在は、目を離れた瞬間に消えていてもおかしくはないと思わせる。

故に、何者よりも怖い。彼女に飲み込まれて、いつの間にか自分自身さえ無くしてしまうような恐ろしさに支配される。

「……………ゆーゆー」

「…うんっ、そうだよ。あの子は…囚われてるんだよね。天の神に…そして、自分自身に。何も感じない筈なのに、あの子は…凄く悲しそうな気がする。泣きすぎて涙が枯れた感覚なのかな…」

「きつと、ゆーゆの感性は間違っていないよ。私、知ってるもん。大切なモノを喪って、後悔すらも烏滸がましいくらい打ちのめされて…その末が、きつとね。あの子何だよ。何も考えたくないから、ただ利用されるだけに成り果てた存在…」

幾つも展開されている戦場で、唯一この場所には『敵意』も『戦意』もない。誰も望まない戦いであり、だがそれでも尚勇者ならばやらなければいけない戦いだ。

友奈が握りしめた拳からは山桜の花弁が零れ落ちる。彼女の中で渦巻くのは、純粹な怒りだ。少女を弄び、利用し、捕らえている天の神に対する怒り。泣きたくなるような激情。

それは園子も同様だ。満開で代償を支払い続けた園子にも、きつと囚われの彼女に通づる何かがある。だからこそ理解できて、それ故に悲しい怒りが溢れて止まらない。

「今、助けるからね…っー」

「早く終わらせてあげよう…それしか、わたし達には出来ないから…ッ!!」

贖罪 VS 結城友奈・乃木園子

怨恨は嘲る道化

開戦は会話が切れた刹那――

返り血に濡れ、そして乾いた勇者の衣装を纏う怨恨の少女は矢の如く風を貫こうと駆け出す。地を蹴る瞬間、足元の泥濘みは小さな突起として盛り上がり、固まり、微力ながらも彼女の援助をしているようだ。

一方で風と東郷にとつて、彼女の侵食した”腐った樹海”は戦闘において不適合的な舞台フィールドでしかない。薄暗くて狙撃に適さず、泥濘で足元が不安定。然し――そんな事関係がない。

風は敢えて泥濘に右足を深く踏み込み、抜けない軸とする。そのまま空気抵抗を感じさせない速度と筋力で大剣を振るうのみ。

「ツ！おんりゃああああ!!」

「はっ、当たらないっての!」

大剣を”面”として振るう横薙ぎも空中に跳ぶ事で軽く躲かれるが、それが狙いだった。東郷は怨恨の彼女に肉薄し、二挺の中距離銃で殴り付ける。

「っ！……へえ、何それ。私の知ってるアンタとは違う戦法ね。……いいわ、認識を改める」

「……と、東郷……？銃は鈍器じゃないわよ……？」

「ふふっ、でも理には叶ってますよ。近付けば殴り、距離を取れば撃つ。未知の相手にもある程度は有効、と……ええ、唯斗君の発案通りです!」

「やっぱりあの馬鹿の発案か!?どーりで無茶苦茶やってると思ったわ!!」

――元より東郷美森には明確な弱点があった。

言わずもがな、超近距離だ。彼女の腕前ならば相手との距離に銃一丁でも挟める距離があれば、対処は可能だった。然しながら、逆に言えば肉薄された時点で彼女の負けが確定してしまうのもまた事実。

ならばいっそ、彼女の鍛錬の方向性は近距離のみに置けば良いと唯

斗から提案されたのだ。

遠距離からの狙撃は彼女の持ち味であり他の誰にも出来ない芸当なのだが、既にその技術は頭打ちだった。故に残る時間を近距離対応に当てても何ら問題はなく、むしろ彼女の強化に繋がった。

そも、友奈の籠手でなくとも勇者の筋力で殴れば大抵の敵には大ダメージが与えられる。

「——バーテックスには精霊の武器での攻撃しか通じない。でしたら、銃本体で殴れば良い!!ふつつ、最っ高……これぞ愛の為せる技ね♡」

「……そつちの東郷って脳筋ね……ていうか此方の^{東郷}妄執と入れ替わってない?」

「妄執?失礼ね、純愛よ」

「やかましいわ!」

「…シリアスを保とうよ…アタシ、今回はボケてないから。てか単純に東郷の頭がおかしいだけなんだから……えーい!八つ当たりじやボケエエエ!!」

「ツ!ちよつ、危な!アンタ勇者のクセに狡いでしょ!!」

風は今日も今日とて勇んで敵に不意打ちをする。だって勇者だもの、と言い訳を添えて。

言葉を交わして、風の中に違和感が生まれた。改めて樹や唯斗、夏凜の言葉を振り返る。事前に堕ちた勇者と戦闘しているのはその三人であり、その誰もが堕ちた勇者を『別人のようだった』と告げているのだ。

黒髪の友奈は話し方や仕草こそ本人なのだが、相手を嘲り挑発する様は彼女とは別の在り方である。襲来してきた東郷美森も同様であり、樹と言葉は交わさなかったが、その目には敵意どころか汚物でも掃除しているかのような嫌悪感が浮かんでいたらしい。

一重に狂っていたのだらう。見る目が確かな彼らが言うのだから、風だって疑ってない。

——故に”違和感”なのだ。

「アハハッ！この程度で死ぬんじゃないわよ!!もつと苦しんで、恨んで、怨恨を、怨恨を怨恨を!!全てを恨んでから死になさい!!」

瞬間的に硬くなった地を、腐った根を、空を——全てを足蹴にして怨恨の勇者は腐った樹海を舞う。徐々に増す速度は薄暗い視界も相まって、一度見失うと見付けられなくなってしまう。

牽制を込めて拳銃を乱発するが、当たる気配もない。やはりと言うべきか、腐った樹海は彼女の味方であり一番の武器なのだ。二人に直接的な攻撃そこして来ないものの、怨恨の彼女と相性が良すぎる。

化け物ではなく、一人の人間としての到達点。極限のスピードと、そこからのいつの間にか放たれている斬撃。

怨恨の勇者に対して風と東郷では、相性が悪い。通りざまに放たれる斬撃もどうか風の大剣で防いでるものの、長くは続かないの目に見えていた。

「くっ……仕方ないわ……東郷！アレやるわよ!!」

「えっ」

「拒否権はなああい!!」

「ちよっ、風先輩——きやあああつっ!!」

「超・女子力大旋風う!!」

「ぎやあああああああアツツ!!」

風は東郷を振り回した。力の限り、彼女の三半規管なんて全く一切合切気にも止めずに四方八方にハンマー投げの如く振り回し続けた。

絶叫を上げながらも二挺の中距離銃を乱発し続ける東郷。不規則且つ本人達にも行先の分からない弾丸の嵐は怨恨のみならず、腐った樹海も破壊する。

「は、はああああ!!馬鹿なの!!頭おかしいの!!」

「よしっ、今よ東郷オ！畳み掛けるわよオオオオ!!」

「ま、待って……胃液が……うぷっ、自主規制……ゲホッ、はあ……はあ、

さ……三半規管が……」

「と、東郷おお!?くそっ、おのれ夏凜の偽者めええ!!東郷の仇はアタシが取るわ!!」

「今の私関係ないんだけど!」

振り下ろされる大剣と拮抗する双刀。後方で嘔吐する者もいるが、風には関係がない。だって勇者だもの、とまた言い訳をした。

何十回目か、もう数え切れない程の金属音が響いた。

「……ねえ、アンタさ……ッ！」

「は、ハハッ！何よ、何なのよ!!また戯言でも吐いて茶を濁そうってワケ?ふっ、飽きてきたなら殺してあげるわ!精々恨み辛みでも叫びながら死になさいッ!!」

「——手え抜いてるでしょ?」

「……………は?」

——違和感。

ずっと頭の隅にあった違和感。時間が経ち、頭の整理も終わり。やっとその正体に手を掛けた。風の想像が正しかったのであれば、彼女は今この場でそれを追求するべきではなかった。

それを理解して尚、風はやはり声を上げてしまった。それを成す事こそが犬吠埼風にとっての”勇者”であると確信しているから。

怨恨の勇者は余裕の滲む表情を固め、まるで意味が解らないと無言且つ、表情のみで雄弁に語っている。

「……風先輩つ、今は——」

「東郷、少し黙って。……アタシ、正直言つてアンタが何者なのか解らない。天の神とか、魂がナンチャラとか……唯斗からは説明されたけど、やっぱサツパリ解らんわね」

「…何よ、次は詭弁でも弄するの?」

「結局さ、正体なんてどーでもいいのよ。アンタは神樹様の敵で、アタシ達は勇者。だったら最初から全力でぶっ潰すだけな、簡単な話でしょ」

「分かってるなら——」

「だからよ……だから」

——どうして狂ってるフリをするのか。

彼女からは狂気を感じない。彼女は身近な狂人東郷よりも理性がある。狂ってないから、風と東郷を殺さない。未だに殺せないのだ。

過程がどうであれ、風は覚悟を決めていた。例え其れが後輩達に酷似した存在だったとしても、彼女達を最初に巻き込んだのは自分なのだ。後暗い事だろうと息を飲んで、後輩や妹達の平和に貢献するのが風の覚悟だった。

にも関わらず、相手は会話も通じてでも抜いている。

まるで殺されるのを望んでいる。彼女は彼女の意思で勇者に襲いかかって来て、彼女の言動から察するに既に一線は超えてしまっているのだろう。

それでも、風には彼女が本気で殺しに来ているようには見えない。怨恨を謳いながら、その実は平穏を望んでいるとしか思えない。だが罪が重荷となり、自戒を背負い死に急いでいる。故に――

「……分かり、合えないの……？」

「――もういい。もう、うんざりよ……終わらせてくれないなら、私が終わりにする」

「ッ!？」

「風先輩！下がって!!」

途端、雰囲気が変わる。明確な敵意はどす黒い殺意となり、形容し難い恐怖心となり襲いかかる。

激しい突風が吹き荒れ、樹海を揺らす。根が揺れ、地面が揺れ、世界が揺れ――辛うじて理解出来るのは彼女がその中心地という事実のみ。

先程までも手を抜いていた訳ではないのだろう。しかし、単なる殺意のみで刀先を向けてはいなかった。故に会話にも応じた。だがそれも完全に霧散する。

「――怨恨の果てに死に至りなさい、”枯花”」

粘性を帯びる樹木が、泥濘み絡み付く地面が、黒く侵食された空が――溶け落ちる。落ちて、怨恨に絡み付き、光を通さない幕として彼女を覆う。

「な、何が……ッ!？」

『枯花』……銀が言っていました。唯斗君が天の神に操られていた時、そう呟いた途端……勇者で言うところの『満開』に酷似した強化がされ

ていたと。つまり——」

「…満開が反転して、枯花……!」

黒い皐月が怨恨を覆い隠し、然し毒や酸を含むように不快な音と煙を立てて腐り溶け、全てが彼女を絡み付く。

その姿形はまるで『影』だ。空間に人型の穴が空いたように、ただ光すら通さない漆黒の人型が佇む。武器も、表情も、服すらも。

全てが黒いのみ。それなのに——否、それ故に恐ろしい。次の瞬間には影に溶けて、背後に立っていきそうな風貌。未だに動きがないのも、彼女の気まぐれでしかない。

「——怨恨は続く…永遠、に…解放なんて、望むことが間違ってたのね…全て、殺す。殺して、終わらせる。死に、破滅に、憩いあれ…ッ!」

蜃気楼の如く怨恨の姿は揺れ、空気と同化し、腐る樹海に紛れる。死の影が二人の喉元を喰い裂こうとするのを、本能で感じ取る。

一秒後か、それとも数分後か。もしかしたら、今この瞬間には彼女の得物が胸を貫いている可能性だつてある。

故に、目配せする訳でもなく風と東郷は声を重ねた。

「——満開ッ!!」

希望と絶望、勇者と愚者、正義と怨恨。廻り、反転し、選択肢一つで運命を違えた者達は武器を重ねる。生きていたいから、相手を倒すのだ。

決着は遠くない。誰もが、そう悟っていた。

◆◆オマケ◆◆

・堕ちた勇者のモチーフ

結城友奈 (END ROLL)

東郷美森 (ドキドキ文芸部!)

犬吠埼風 (OMORI)

犬吠埼樹 (殺戮の天使)

三好夏凜 (怨恨ヴィーゲンリート)

???(???)

一つ目の決着

——『満開』と『枯花』。

その性質は殆ど同一だ。満開システムとは勇者の二段階変身であり、既存の特性を超強化するものだ。樹ならばワイヤーの精度と量、風ならば圧倒的な身体能力、友奈は拳撃を必殺の拳へと昇華させる。

西暦の勇者が使用していた切り札と同様なのだろう。時代と共に性能差や代償云々についても大きく変化したが、本質は変わらない。『満開』の大きな特徴として、二段階変身時に召喚される武装は神樹が使用者の願いを叶えた物だ。故に先代の勇者だった乃木園子や東郷美森の武装は単体でバーテックスを殲滅する船や移動砲台であり、星屑と十二星座型をまとめて殲滅出来る姿となっている。

今代の勇者は単体で強力なバーテックスに対抗する為、此方もタイムン性能に特化した能力の満開だ。

そも、満開として使いこなせなければ強力無比な武器には成り得ない。だからこそ身を犠牲に、願った姿へと至るのが満開の仕様なのだろう。

——ならば必然的に、満開とは変化が可能とも解釈出来よう。

「満開!!」

枯花を経て全身を黒い影に包む怨恨を前に、犬吠埼風と東郷美森も切り札を使う。風は神道の神官をイメージさせる純白と黄色で飾られた服装となり、東郷もまた系統こと異なるが、衣装が白を基調とした色合いの羽衣をまとった和服へと変化する。

「……………ん？東郷、アンタの姿…そんなだったっけ？」

「あら…本当に変化してますね。強くなるって友奈ちゃんと約束した手前、失敗してなくて良かったです♪」

「おっけー、なるほどね。理解出来ないってのは解ったわ」

東郷の満開——本来ならば浮遊する移動台座が出現し、無数に搭載された可動式砲台にて敵を殲滅する造りだったのだが。

今は移動台座も出現せず、その分の変化は東郷美森本人に起こって

いる。

両手には蒼白の銃剣が其々握られており、背には和装に似合わないスラスターが複数装備され、浮遊の自由度を格段と上昇させている。傍らには無数のビット型ライフルが浮遊している。移動台座の機能の殆どが彼女の身に詰め込まれ、二つの銃剣によって近距離での弱点も解消。

大凡彼女の戦闘スタイルによって満開も変化した、とも考えられる。使用はすれども仕様は解らないシステムだった。

「——っ！」

「先輩、来ます…！」

「さて、気張りますか！」

影が揺れ、怨恨の勇者の姿も空間を揺蕩い——闇に溶ける。それが超スピードなのか枯花によって芽生えた権能なのか。

「どりゃあああ!!これなら………痛ッ!!」

風は構わず巨大化させた大剣で前方に広がる樹海を削り飛ばすが、刹那、辛うじて視界の端を”影”が通り抜け、頬を軽く斬られる。

微かな気配を頼りに、それを目掛けて東郷が銃剣を穿つが容易く躲かれ、再度黒い姿は影と砂埃の狭間に溶け消えた。

姿こそ不明瞭だが、東郷の攻撃を躲したという事は実体はあるのだろう。武器も然りであり、彼方だけ攻撃が通る道理もない。然し結局のところ此方の攻撃は躲され、影に潜む間は行方の予測すらもつかない。

「なら…ッ！」

東郷は背のスラスターと自身の浮遊能力を活用して空に飛び出し、両手の銃剣と無数のビット型ライフルの銃口を全て下方方向に向けた。

「風先輩！気合いと大和魂で避けてください!!」

「えっ、ちよっ!?!」

「目標、下方向全域。構えて……全砲撃発射ああああ!!」

「うぎゃあああ!?!」

影に潜むのであれば、地面を平坦にして影を減らせれば良い。雑な作戦ではあるが現状で既に手探り状態なのだ。どんな作戦も有効であ

る可能性があれば、余裕があるうちに試すべきだ。

下方で聞こえる絶叫を無視してビット型ライフルから蒼のレーザーを地面に撃ち続ける。無論、視界は砂埃から影まで、彼女が潜みそうな場所を探しては撃ち、監視し続けている。

本来の樹海であれば取れない手段だが、此処は怨恨に何処までも有利であり彼女自身の手で染められ支配された空間だ。多少なら破壊しても問題ないだろう。

大凡の隠れ場と成り得る障害物を崩壊させ、東郷は様子を見るために更に上空へと浮上する。

「こんのお！東郷オオ!!アタシを殺す気かバカヤロウ!!」

「あつ。風先輩、丁度良い所に！その大剣で砂埃を吹き飛ばしてくださいませんか?」

「先輩使い荒くない!?!てかアタシの大剣は扇子じゃないんだだけ、どツ!!」

巨大化させた大剣を万力の握力で握り締め、満開で爆発的に強化された筋力で振るう。吹き荒れる暴風はボロボロとなった根や木々と吹き飛ばし、荒れながらも障害物のない地面を曝け出させた。

背を合わせ、死角を最大限まで減らして敵襲を待つ。これで退却してくれるのであれば、それもよし。戦闘記録が次に役立つ。

だが切り札を使い、理性も狂気に変えた彼女がそんな判断を取るのか。どうにも、そうするとは思えない。怨恨の彼女が風の頬を切り裂いているのに対して、まだ此方は有効打を与えてはいないのだ。

「……………」

「……………来ないわね。…でも、気は抜けない」

「…念の為、もう少し上空に——えっ」

——瞬間、背から色濃い殺意が襲いかかる。

東郷は迷わずビット型ライフルを全て後方に集め、盾を形成する。それと同時に鈍器と金属がぶつかるような鈍い音が空気を震わせ、予測不可能だった敵襲を知らせた。

「なっ!?!う、後ろから…ッ!」

「——惜しい。乱舞」

「くっ…ガッ、くくッッ!!」

「東郷!このっ、ぶっ飛ばええええ!!」

「——無駄よ、全部ね」

「な、んで…ッ!」

絶え間ない乱舞により、東郷は防御の間に合わなかった箇所を乱雑に切り裂かれ続ける。血に染まる東郷の満開衣装に焦り、風の振り下ろした大剣も斜めに構えた黒い影の双刀で受け流された。

気配なんてなかった。殺気も、刀が身に刺さるまでは感じなかった。油断なんてしていない。なのに、いつの間にか二人の背中に現れている。

不可解だ。瞬間移動にしか思えない移動法の原理も、条件も、何も解らない。斬られて初めて、痛みと共に自覚できる。まるで暗殺者だ。

「はあああああああ!!」

「——ふんっ」

「っ……!」

ビット型ライフルを複数発射し、逃げ場を封じた所を銃剣で突くが、いつの間にか彼女の姿は視界から消えている。

その姿は探すまでもなく、二人の真下にある地面にあった。悠々と此方を眺め、ゆらゆらと揺れる様は自立した影そのものだった。

攻めに転じる事も可能だが、傷を負わせれる可能性は限りなく低い。そも、彼女の移動法について推測しない事には勝機も掴めないだろう。

(……此処から地面までの距離はおよそ百メートル。移動したのは瞬きの間……高速移動……?……いえ、地面に衝撃波の影響がない。つまり瞬間移動……でも、ただの瞬間移動ではない可能性が高い)

不自然な使い時から察するに、何かしらの限定的な条件がある筈だ。

「………共通点は、『影』ね……」

「東郷…何か解ったの?」

「彼女の瞬間移動の条件だけは、何とか……恐らくは『影』と『影』の

間を移れるんです。だから、このままですと…」

「攻撃にしても防御にしても、全部の影に警戒しながら、ね…：…なんて無理ゲー？…取り敢えず障害物を破壊するのは間違ってたなかつた」と

「…：…風先輩、これは勝機です。最大の強みが解れば、その弱点も明白…！」

「お、おう…？…つまり、アタシはどーすればいいワケ？」

「先輩には——」

作戦を軽く伝え、二人は地面に降りて少女と対峙する。

風は大剣を収納し、素手で構えた。元より剣技も得意と言うわけでもなかったのだから、素手でも問題はない。寧ろバーテックスを撃破するのに精霊の武器が必要だっただけで、莫大な筋力に自由度を与えるのであれば素手の方がやり易いのだ。

東郷は中衛で待機している。そも、怨恨の勇者は影を移動する。それは人と人の間に出来る影も同様であり、二人がまとまっていた場合は互いのピンチに対応出来ない。

一定の間隔は好機を生み出す鍵ともなる。故に東郷はサポートに専念する。

「——アンタだけ？」

「そーよ？はっ、退屈はさせないわ。ステゴロも得意って言えば得意だしね」

風が勇者として大剣を振るった回数よりも、唯斗と喧嘩した回数の方が圧倒的に多い。だからこそ無手は彼女の弱点とは成り得ない。

「——じゃ、死になさい」

「上等!!」

目を穿つように放たれた右の刀を半身で避け、その勢いで真つ黒な胴体を蹴りつける。左手に持った柄で受けられるが、彼女の体ごと後退させた。

すかさず風は追い打ちをかけ、浮遊能力を利用したドロップキックをフェイントにして、身を前方に回転させて脳天に踵落としを叩き込んだ。

怨恨の勇者もまた、それを両腕をクロスさせて受け、風が浮いた刹

那——閃光に等しい速度で斬りつける。

襲い来る斬撃を気にした様子もなく、風は左右の腕で不規則に拳打を連発する。

然し風と同様に彼女の耐久性は並のバーテックスよりも上らしい。

「おんりやああああああ!!」

「はああああああ!!」

腕を振るう度に、攻撃を受ける度に、互いの鮮血が宙を舞う。勇者とは思えない泥試合だが、それを気にする余裕もない。

命を狙い続ける少女とは対照的に、風と東郷は待っているのだ。怨恨の彼女が隙を見付け、権能を使い勝負を決めに來る瞬間を。

——やがて風の顎を刀の柄が掠り、ふらつく。それを決定的な隙だと捉えたのか、全身が真っ黒な少女は空気に溶け、影となり風の後ろの影に移動する。

そのまま血に濡れた刀は振り下ろされ——

「させない!」

”瞬間”が訪れた東郷は風に放たれた双刀を銃剣で弾き、僅かに逸れた隙を見て風は怨恨の少女の手首を掴む。満開を経た彼女の握力ではまず、逃げられないだろう。無論、相手が筋力で対抗する場合は、だが。

しかしそれも含めての作戦だ。実質、勝利条件は『風が敵を掴むこと』。故に、勝利が確定した。

「はっ! やつと掴んだわよ!!」

「——無駄よ、こんなの…影に溶ければ…」

「させない! 影に溶けるなら、影を無くせば良いだけ!! 全機、発光形態に移行! 爆発せよ!!」

「——っ!?!」

東郷の操作するビット型ライフルは激しく発光し——威力のない閃光爆弾として爆発する。

全方向から三人を包む閃光爆弾。ほんの一瞬だが、影がなくなる。今この瞬間に限り、怨恨に決定的な隙が生まれた。

風は再度出現させた大剣を極限まで小さくして、包丁サイズになっ

たソレを怨恨の勇者の腹に押し付け――

「これで終わりだあああああ!!」

――一気に最大限サイズまで大きくした。

ゼロ距離から一瞬で数百メートルまで巨大化する大剣を、防御もせずに受ける。素の人体が超近距離で散弾銃を撃たれるようなモノだ。

叫びも何も残さず、彼女の黒い身体は罅割れ、御魂を砕いたバーテックスと同様に砂となって地面に落ちる。

「……残る敵影なし！彼女の消失も確認!!」

「はあ……はあ……アタシ達の、勝ち……よ!!」

「はいっ!」

間もなくして、淡い光と共に花卉が散乱する。満開が解ける前兆であり、身に蓄積された疲労が二人の腰を地面に落とした。

双方、傷も少なくない。最後まで致命的なダメージを受けなかったのは運が良かったのか、それともまだ手加減でもされていたのか。

怨恨が消えた今となってはもう判らないが、きつと、彼女にその気があればもつと早く決着もついていただろう。無論、結果も異なる可能性だつてあった。

黒く穢れていた樹海の空が罅割れ、本来の極彩色が見え始める。本来に怨恨を倒した証拠なのだろう。普段通りの樹海にて、風と東郷は現状の把握に努めた。

「……っ!東郷、勇者アプリのマップ見なさい!」

「これは……敵影と、みんなが分断されている……?」

現状、二人を囲んでいた樹海は元の姿へと戻った。だがマップを見る限りでは、それがあと三つ、黒い円型の結界のように広がっている。其々に唯斗と樹、夏凜と銀、友奈と園子の組み合わせで分かれている。おそらく、自分達もその一つだったのだろうと容易く想像出来た。

「加戦……は、現実的じゃ無いわね……傷も酷いし、下手したら足を引つ

張るかもだし」

「……歯痒いですが、戦況が大きく動くまでは体力を温存するべきかと。…大丈夫です、みんな、強いですから」

「そうね。まあ、マイシスターと唯斗の組み合わせは過剰な気もするし」

マップにも近くに敵影はなく、二人も消耗している。震える膝で近くの根まで歩き、腰を下ろす。痛む体のため息を零して、仲間の勝利を願うのだった。

「っ!?ぐっ、あ…あ、あ、あ、あ!!」

——そして、唐突だった。東郷美森は頭を両手で抑え、苦痛に表情を歪ませる。風は慌てて駆け寄り、辺りを警戒しながら彼女の様子を窺う。

「と、東郷!?!なに…ま、また敵襲なの!?!」

「あ、ガツ…何、これ…っ!ね、寝取られの波動で脳が灼けるう…ッ!!」

「は…?」

想像を超えた返答に、風は気の抜けた声と共に腰を地面に落とし

—— 怨恨 VS 犬吠埼風&東郷美森

WINNER : 犬吠埼風&東郷美森。

◆◆オマケ◆◆

東郷満開 (NEW)

・戦闘スタイルの変化により最適化された満開武装。銃で殴っていた為か、両手には其々銃剣が握られている。背には浮遊をサポートするスラストターと、集める事で簡易な盾にもなるピット型ライフルが複数個。元来の殲滅力は移動台座より劣るが、機動力と攻撃にステ振りをした高機動大砲形態。ビット型ライフルは爆弾でもあり、単純な爆発と閃光爆弾の、二つの性質がある。

風の『技』

・女子力大車輪を除き、風が唯一身につけている技術。サイズ変更が可能な大剣を極限まで小さくし、そのまま敵に押し当てて巨大化させる。喰らったら蟹座や乙女座の硬い御魂でも消し飛ぶ。堕ちた勇者にも有効であり、一撃で怨恨を倒した。バーテックスや堕ちた勇者相手であれば殆ど一撃必殺に成り得るヤベー技。

怨恨の『枯花』

・頭から足の先まで全身が光を通さない黒に染まり、『影』そのものになる。影と影の間の移動や、満開と同様の身体性能の強化も相まって、暗殺者アサシンと同じ動きになった。

その本質は『狂人』と成る弱さ。狂えないから、でも殺したから。切り札である枯花で理性を手放して初めて狂人となれた。怨恨は逃げる続ける自分自身に向けられ、憩いを求め血に濡れた刀を振るい続ける。

堕ちた勇者の中で唯一、何も変わらなかった。復讐のように怒れず、妄執のように執着出来ず、傀儡のように諦める事も叶わず。

故に、正気は『枯花』で反転する。憩いを望む本質は裏返し、残酷な影となって顕現する。狂えない苦しみから、また逃げる。そして自身を呪う。怨恨は続き、廻り、果てまで止まらない。

贖罪は独白の彼方へ

『——せめて、全てが終わるまで……』

贖罪の勇者は声にならない言葉を洩らす。

既に声も視覚も、手や足だつて散華^捧した^た。異界の魂と偽りの肉体とで、欠けたモノは戻らない。戦場に鉄系の翼で浮き、然し拘束具で大凡全ての自由を封じられた彼女は、さながら大罪を犯した天使の有様だ。

嘆きも赦されず。彼等の敵としてこの場に居るのは、誰が定めた贖罪なのだろうか。

——鉄糸が空気を切り裂く。

刹那に響く擦音は空間を支配するワイヤー同士のモノであり、相対する勇者に刺さる事はない。複雑に絡み合い、紡がれ、為されるのは『繭』。白銀の、無骨なまでに丸いだけの『檻』だ。

嘗ての再現、墮ちる間際に全てへ蓋をした己の愚行。未だに其れを他でもない”彼女”に使うのだから、贖いは果たされない。贖罪は蝕む呪いとなった。

「くっ……おりやあああ!!」

友奈は自分を閉じ込める『鋼鉄の繭』——その内側から拳を放つ。鈍い音は繭にも、そして友奈の手にも痛みを与えない。反発し、そして元の形状に戻るゴムのように、与える衝撃の全てを包み吸収しているのだ。

友奈と園子が贖罪との戦闘を開始して間もなく、拘束具と破れ果てた勇者服に身を包む少女は大量の鉄糸を放出した。

それは然し、決して二人に攻撃する事もなく。其々の周りに円を紡ぎ、空間を象り、球体の『繭』を二つ形成する。それが最初の、そして続く硬直状態の開始だった。

追撃されることもなく、ただその『繭』に囚われ続けているのだ。彼女は敵であるはずなのに、否定しきれない違和感が拭えない。まるで

敵対したくない、危害を加えたくないと無言で告げているように感じた。

「っ……園ちゃん!!」

「はいよ〜! ヘルプするぜい!!」

強固な繭とは言え、その実はワイヤーだ。打撃が効かなくとも斬撃であれば有効だ。

既に園子を捕らえていた檻は破壊したらしく、友奈の声に応じて繭が槍によって切り裂かれる。無数の解れによって鉄糸の切れ端は音を立てて黒い地面に落ち、御魂を破壊したバーテックスと同様に砂となった。

合流して再度、最初と同じ構図で贖罪の少女を見上げる形となる。姿も位置も変わらず、少女は鉄の翼で腐った樹海の中心に浮いている。

——変わった点と言えるのは樹海の景色だろう。

泥濘む黒い地面や、腐り果て粘性を帯びる根。ヘドロのような雲が空を覆い——その全てに鉄糸が貼られている。

まるで蜘蛛の巣だった。絶えずうねり、ギチギチと異音を鳴らす鉄糸は友奈と園子を飲み込む奈落であり、罨であり、体の機能の大半を失った少女の補助装置だ。

「……ゆーゆー」

「……うん。やつぱり……何かおかしいよね」

「——攻撃されない。あのいつつんは間違いなく敵だし、ゆーちゃんの話信じるなら……天の神が用意した『器』と別次元の『魂』。元の人格とか、記憶とか、そーゆーのは全く関係ない敵でしかないんよ。前提条件ってやつだね」

「…なのに、攻撃されない……こっちが攻撃しても防御と妨害しかされないね」

聞いていた話と違う。敵意を向けない敵が、果たして自分達が必死に打倒すべき存在なのだろうか。その答えを知らないからこそ、本格的な攻撃に移行出来ない。

——だが、それでも。

「やらないと、ね……可哀想だから見てるだけとか、分からないからって思考を停止させたりとか——そんなは間違いでしかない！唯斗くと約束したんだ！全てを為す、そんなワガママをハッピーエンド目指すって!!」
友奈は誓った。唯斗に道を用意され、風に諭され、園子とも本音をぶつけ合い。やっと至った本音は勇者の物語に本気で憧れた幼い少女の我儘だった。

だから、本気で手を伸ばす。悲劇に終止符を打ち、王道的なハッピーエンドを掴み取るために。彼女の我儘は彼女自身であったとしても、もう止められない。

「うん、そうだね。それが勇者だよ、きつと。じゃあ——そこを通してもらおうよ、天の神の使徒。希望を突き通すためにね」

園子とて贖罪の少女の末路は察している。聡い分、解ってしまう事もあるのだろう。然し園子が抱くのは同情ではなく、希望だ。そうなる末路がある——ならば、そうなっていない自分達は正解の道を進めている。

無理やりすぎるこじつけだったとしても、自分が世界を平和に導けば自ずと軌跡も肯定されるモノだ。だから、唯一の憐憫のみを込め、紫紺の槍を突き出す。

「ゆーゆ、サポートは任せて」

「うんっ！往くよ——ハッピーエンドに!!」

空中に生み出された槍先を踏み台に、友奈は贖罪の勇者へと飛び出した。

——『少女』は、もう最期を迎えている筈だった。

樹海の顕現された世界で、鉄の翼を用いて宇宙まで飛び。複合バーテックスの御魂を破壊して、地上へ向かって落ちていた。

落下による空力加熱こそ精霊の結界で防げるが、地面との衝突は精霊だけでは防げない。身体全てが燃え尽きた唯斗以外の仲間は全て鉄の繭に閉じ込めたので、もう助けなんて期待出来ない。そも、助けられたくもなかった。

「ごめんなさい、唯斗先輩……っ!」

声が出ない。目が見えない。何も聞こえない。例え万全だとしても、樹は重力に抵抗せずに落ちる。それが樹の最後の望み——己の死だから。

後悔の念に耐えられない。

その気になれば複合バーテックスの御魂まで単体で破壊出来たのに、その力を振るうのが遅すぎた。大切な人が死んだ後では手遅れだ。

死んで詫びる、とも違う。単なる逃げでしかない。この贖罪は果たされない、贖えない。だから『罪』であり『罰』なのだ。

犬吠埼樹の物語はこれで終わる。喜劇は悲劇に変わり、報いのないバッドエンドがラストページに記されただけの悲劇のまま幕を閉じる——筈だった。

——それ以上の不幸があるだなんて、少女は知らなかった。

死の刹那、飲み込まれた。

其れは口か、空間か、若しくは巨大な鏡だったのかもしれない。身体の機能の大半を失った犬吠埼樹は抵抗することも叶わず、理解の届かない何かに飲み込まれ、犬吠埼樹ではなくなった。

心に巢食うのは勇者への敵愾心。だが贖罪の性質柄、他の同胞とは異なり、相手の死へと執着する事もなかった。だからと言って再び勇者の仲間になる事も出来ず、何処までも己は勇者の敵であると何かが心に植え付けた。

だから、この戦いは彼女自身が殺される可能性に賭けたモノなのだ。相手が自分を殺してくれるまで、何十分も、何時間も、何年も、何十年も——縛り続ける。

それが堕ちた故の歪みなのだと気付けず、『贖罪』は死ぬまで勇者を縛り続けるのみ。我儘とすら呼べない、皮肉に塗れた性質の元で。ワカラナイ、何かを行使し続ける。

『——もっと』

無数にある薄紫の槍刃を足場にして、桃色の花卉を纏う少女は拳撃

を繰り返して来る。

だが贖罪に支配された少女には分かる。あの程度の力では足りない、ワイヤーを突破する事はない。空間に張り巡らされたワイヤーを集め、紡ぎ、固め、無骨な円形の盾と為す。

それだけで少女が攻撃を受けることはなくなった。強い金属音が甲高く響くのみで、盾が破壊されることはない。

機能を喪い隠された双眸の瞳には失望が浮かぶ。違う存在とはいえ、彼女は尊敬していた先輩の一人だ。

だから期待していた。こんな息をするように紡げる盾程度、嘗ての乙女座のバーテックスと同様に押し潰して欲しかった。

「っー！」

『——ごめん、なさい……』

地面から巨大なトラバサミが生え、友奈を飲み込む。無論、傷付けるつもりはなかった。ただ閉じ込めて、縛って……その後のことなんて考えてはいない。彼女でも、見慣れないもう一人の勇者でも。援軍でも良いから、自分を討てる存在がこの場に現れるのを望んでいる。

トラバサミから再度紡がれた繭は友奈を攫い、泥濘む地面へと押し込まれ——瞬間、内側から激しい桃色の閃光が迸る。

「勇者……パアアアアンチイイツツ!!」

激しい衝撃は樹海の地面を揺らし、『繭』を打ち砕く。上に振り抜かれた友奈の拳には薄紫の槍先が幾つも付き、打撃だった彼女の拳に斬撃を付与していた。

ワイヤーの『繭』には打撃が効かず、然し斬撃は有効だ。

「ありがとう、園ちゃんー！」

「サポートは万全に、ね。でも——着いて来れないなら、置いていくよ？ 私ほね、ゆーゆ。ゆーゆにだって負けたくはないんだから」

「私も……うんっ、私だって！園ちゃんにも、樹ちゃんにも、東郷さんにだって負けないよー！」

「じゃあ、テンポ上げちゃうよ!!」

園子は槍の石突を地面に突き刺し——薄紫の槍先を宙に顕現させ

る。

乃木園子の扱う『槍』には三つの能力がある。一つは戦闘が開始されてから常時使用し続けている、空中への槍刃の顕現だ。その気になれば何百と展開する事も可能であり、多少脆くとも、勇者の脚力で踏み締めても割れない程度の硬度はある。

二つ目は槍先を広げた円形の『盾』の展開。限りのある精霊バリアとは異なり、用途としては防人の護盾と殆ど同様だ。

そして、三つ目は槍の柄の伸縮だ。単純に伸ばしての攻撃、棒高跳びの要領での高速高度移動、その他にも聡い彼女であれば想定外の用途を編み出すのだろう。

「舞台操作なら負けないよ……」

『——抵抗、しないで……』

幾つもの鉄糸が前衛を務める友奈に襲い掛かり、それを飛来する無数の槍先が切り裂く。その度に鉄糸の切れ端と槍刃の破片が散乱し、砂と光に還る。

万能にも成り得るワイヤー、その明確な弱点は『切断』だ。どれだけ武器や防具を造ろうと、元は長く強固なだけの鉄糸。編み、紡ぐ前に切断されてしまったては操作が利かなくなるのも道理。

無論、既に紡がれた物は例外だが。

「……あつ、マズイかも」

「園ちゃん!」

瞬間、園子の操る槍刃は全て碎け散る。園子と友奈の視線を奪うのは異様な雰囲気纏う、大槌だ。直径150センチ程の無骨の、然しフォルムと威力には有り得ないと分かっているながらも、既視感を覚えてしまう。

それほどの強度はないとしても、何十と顕現していた槍刃を一振で薙ぎ払うハンマー。理不尽なまでの暴力。

「……なんで……ゆーちゃんの、ピコピコハンマーが……?」

本人が扱うオリジナルと色は異なりピコピコ音も鳴らないが、やはり二人の目には紛うことなき彼のメイン武器に見えた。

見慣れた武器——故に、咄嗟でも対処法が解る。ピコピコハンマー

の巫山戯た威力は打面のみに限られたモノであり、側面は無力に等しい。

友奈は大槌の柄を蹴り上げ、側面を殴り抜く。

「せいっ！園ちゃん、今だよ!!」

「…突貫…！はああああ!!」

『っ……まだ、足りない……です…』

手元から伸ばされた槍は贖罪の勇者の眉間に向けられ、然し交差された鉄の翼とぶつかり、軋む金属音が空気を揺らす。

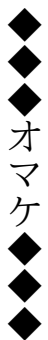
続けて友奈が拳打を叩き込むが、鉄の翼は衝撃を飲み込むのみ。単純に威力が足りないのだろう。

「……足りないなら…っ！」

幸い、友奈はまだ精霊バリアを消費していない。右籠手に刻まれたゲージも万全だ。故に、友奈は咲き誇る覚悟を叫ぶ。

「満開ッ!!」

腐り果てた樹海は光り輝く山桜に照らされた。



贖罪の勇者

・今は亡き彼の武器を振るう少女。覇者道は歩まなかったが、ピコピコハンマーの完全再現は覇者樹にも不可能な芸当。いつでも彼を――背負うべき罪を忘れない為に、無骨な大槌を紡ぐ。

満開の影響で視覚や声、両手両足、その他にも内臓や痛覚等、散華した身体機能は本人でも把握しきれていない。両目を覆う黒布、身体を縛る拘束具や体を支える鉄の翼によって、外見は大罪を犯した天使の有様。

何も見えていないが、張り巡らされたワイヤーの振動によって戦況の大凡全てを把握している。

二つ目の決着

——結城友奈。

勇者である彼女には特殊な性質が備わっている。より正確には『友奈』の名には巫女と勇者の素養を併せ持つ東郷美森と同様に特別な意味があり、端的に換言するのであれば『天の神キラー』だ。

彼女の身は『天の神』へ撃ち込む弾丸であり、バーテックスに対する絶対的有利の象徴。その性質は『満開』を経ても尚、健在だ。

「園ちゃん！足場!!」

「はいよお!!」

何十枚と重ねた紫紺の槍刃^{足場}をたつた一度のみ踏み締め、愚直にも一線に花卉を振り撒きながら贖罪の少女へ跳ぶ。

満開によつて展開された巨大なアームは交差する二つの翼に指を喰い込ませ、そのまま引き千切る。

『ッ!!』

「勇者キイイイックウ!!」

炎を纏う脚はいつの間にか編まれた鉄の盾ごと少女に刺さり、泥濘む地面に叩き落とした。満開の時間は短い、故に葛藤も躊躇も捨てる。

救う——仲間を、家族を、何も知らない一般人も。そして墮とされた彼女だつて友奈は救う。その手段が酷く残酷で、死ぬ筈だつた彼女を再度殺す事だつたとしても、友奈は迷わない。

友奈は贖罪たる彼女について何も知らない。知り得る筈がないのに、彼女の感情が糸を伝つて感じ取れるのだ。

既視感があった。

数ヶ月前、犬吠埼風が交通事故に遭つた。どれだけ彼にそれを否定されようと、どんなに呪いの根源を理解していようとも。やはり、その原因は呪いを感染させた友奈であると未だに思っている。一歩間違えば大好きな先輩は死んでいた。二度と謝罪も、話すことだつて出来なくなつていた。

——目の前の彼女は、一歩間違えた自分だ。もしも風が死んでいたら、友奈も贖罪に染まった罪人となっていただろう。

神によって自死も認められず、彼女は激しい敵愾心まで植え付けられてしまった。そも、肉体そのものが天の神が用意したバーテックスと同様のモノとなってしまうているのだ。

御魂は無くとも、代わりに少女の魂が囚われ。兵器として武器を振るっている。

翼を失い、地面に蹲る少女。泣きたくなり、抱き締めたい衝動に駆られ——踏み止まる。半端な同情は少女の苦しみを無為に引き伸ばすだけでしかない。

『……………絶対に解放するからね、その悲しみから……!』

『……………っ!……あ、ダメ……そ、まる……!逃げて……く、ださ……い……ッ!!』

「ゆ、ゆーゆー!その娘の様子がおかしい!」

「……………えっ!」

——カレバナ枯花——

空間に冷たく、誰かの声が響いた。そして気が付く。空間を覆い支配していたワイヤーは黒く染まり、妖しく蠢き、少女の拘束具を解いている。

腕が解放され、両脚を包む布が破れ、視界を遮っていた黒布は元のワイヤーに戻る。その度々に形容し難い“嫌な予感”が二人の胸中に広がり、徐々に確信へと変わる。

『……………塗り、潰される……ッ!ち、違う……こんなの、私じゃない………のに、世界、が……勇者が……死んだ唯斗先輩が……ッ!!憎いッ!!』

「っ!………声、が……?」

園子は慄きを声に滲ませる。存在しないはずの声は『枯花』と空間に響いた途端、彼女に備わった。手も足も、視界すら決して“復活”ではなく、後付けされた別物なのだ。

——塗り潰される。

散華した部分に”別の物”が埋め込まれ、蠢くナニカに侵され、魂まで『犬吠崎樹』を否定する。頭上には腐り果てた鳴子百合が現れ、黒いヘドロと果てて少女を飲み込む。

直後、孵化するように、若しくは全てを飲み込んだように。黒いヘドロは硬質になり、罅割れて少女に吸収される。

擦れても尚、柔らかい明茶髪は勇者姿の彼と同様に黒く染まり。辛うじて勇者服だと認識できた服装は酷く虚しいモノトーンに染まり、然し解放された瞳だけは壁外の紅蓮の如く紅く。

『——罪に、贖いを。勇者に、死を。それが『贖い』だから。どうか……死んでください。……私を、殺して……』

「うん。救うよ、あなたを。たとえあなたに明日が無くたって、これ以上の罪は背負わせない。この拳で君を——樹ちゃんを終わらせ^救る!!」

勇者と天の神の使い、彼女達の決着は近い。

「……………」

嵐の前の静けさ、とでも言うべきか。

数秒程度の沈黙なのだろう。結城友奈が拳に力を溜め、贖罪の少女がワイヤーを紡ぎ、そして乃木園子が彼の言葉を回想するしているだけの時間。

数日前、園子は唯斗から昔話を聴いた。およそ三百年前の西暦の時代、神に選ばれた勇者と巫女、そしてイカの姿フライが大好きな精霊の昔話だ。

その中でも色濃く語られたのは当時の勇者のリーダーであり、園子の先祖である乃木若葉についてだ。何故知っているのかは問わなかった。彼女自身、何となく察してはいたのだ。

急に大人びて、戦闘に関する技術や彼特有の権能を行使する力が飛躍的に伸び、語られてこそいないものの、自分達と過ごした小学六年生の頃についても思い出しているのだろう。

——郡唯斗は語った。

乃木若葉の有志や、当時の切り札を用いて侍を思わせる装束を纏い、身軽な空中機動でバーテックスと戦う様子。

『——園子、コレやるよ』

『…ん、なにこれ？』

『とりま持つとけつて。望むなら、お前の力になる筈だぞ。……………』

うん、多分…きつと…おそらくは！』

『うんうん、お守りにするね』

渡されたのは蒼い鴉の羽だ。親指サイズのソレは簡素なチエーンに付けられ、ネックレスにされていた。

唯斗の精霊である蒼鴉の一部であるのは想像するに難くないが、用途については何も分からない。

それでも、不思議と懐かしい気持ちになった。強くて、頼れる存在に包まれているような気がして。貰って以来、片時も首から外してはいない。

「…………力を貸して、御先祖様…」

勇者となっても変わらさず首に下げている蒼い羽。祈るように両手で包み、園子は静かに呟く。

「——満開」

きつと誰よりも多く行使してきた力だ。それでも不慣れな力の奔流は園子を飲み込み、空に薄紫の蓮と蒼い桔梗が咲き誇る。

蒼い羽は激しい光を放ち、弾けて無数の花卉となり園子の満開衣装に変化をもたらした。

普段の勇者服の上に、白を基調とした蒼く袖の長い和装を羽織り。赤紫の襟巻きは後方に靡き、両手で槍を握る。周りには無数の日本刀が浮かび、ふわふわと軽く動かして槍刃と同様に操作が可能であることを確認する。

奇しくも——否、交わった故に。血に宿る『力』は先祖である乃木若葉と同じだった。

「さあ、往くよ！」

「うんっ！全力全開だああああ!!」

友奈が正面から飛び出すと同時に園子は空中を蹴り、贖罪の少女の側面に刀を撃ち出す。

『
』
黒く染った少女は赤い瞳で一瞥し、重りを付けられたようにゆつくりと、然し迷うことなく片手を友奈と園子に向けて突き出す。

編むこともせずに放射された鉄糸が刀を縛り砕くが、それ以上に撃ち出される刀が鉄糸を切り裂く。

乃木園子——彼女本来の”満開”は巨大な船の頭現だ。船周りに槍の刃が平常時よりもさらに複数展開し、一つ一つをより精密に操作する。

槍先を展開して盾とする特性を引き継いだのか、船そのものにもバリアを張る事も可能であり、東郷美森の移動台座よりも攻撃面では劣るものの自由度と防御力に関しては追隨を許さなかった。

満開の姿が変化しようとも、その”特性”は健在だ。

「ゆーゆー！打って!!」

「っ！了解!!」

先導する友奈を淡いバリアが包み、眼前に無数の刀が浮く。柄元を向けられ、彼女の『打って』との言葉を直ぐさま解釈した友奈は巨大なアームを振り振り、園子の展開したバリアがワイヤーを弾くと同時に刀を殴り放出した。

きっと視界で捉えるのは不可能だった筈だ。友奈からの不意打ちに近い遠距離攻撃、園子の攻めにも対応していた。普通ならばたとえギリギリで気付いたとしても、避けるのが精一杯な筈だった。

——ピコンツ、と。

「っ!?ぐっ……カハッ!」

幻聴だった。然しその技術を、友奈は知っている。

打ち出した刀は鈍色の大槌の打面部で叩かれ、反射された。数本の刀は飛来した軌道をなぞり、そのまま柄の部分が友奈の腹に刺さる。これが刃部分だったらどうなっていたのか——疑問が生じるまでもない。深く恐ろしい恐怖だけが背を冷やし、吐き気を催させる。

決して致命傷ではない。だがそれでも、友奈の勢いは止まった。そ

の隙を見逃すほど、染められた少女は甘くない。

『どうか、堅牢な檻に囚われて……そのまま朽ちて』

「ツクツク!!こんな、のお……!!」

「——忘れないでね、偽いつつん。私もいるんよ!」

『……忘れて、ません。名前の知らない……勇者さん』

友奈が鋼鉄の檻に囚われると同時に、園子が頭上から振り下ろした槍は幾重にも圧縮された”糸”に弾かれる。

だが即座に槍を手放し、樹の横をすり抜けて友奈を縛る檻を刀で袈裟斬る。剣技なんて収めてはいないが、然し二年前より誰より刀を上手く扱う想い人が居た。

彼の見様見真似程度、園子ならば簡単だ。全方位に向けられ、いずれも人並み以上にこなせる天才性。それでもまだ、彼女は成長中だ。

友奈を抱えて空気を蹴り、一旦距離を取る。

「ごめん、園ちゃん……!」

「ううん、モーマンタイ。ん……でも、アレだね。ちよつと相性が悪いかな、ゆーゆだと。因みに刀と違って使える?」

「す、少しなら!夏凜ちゃんと二人で剣道キャンプした事あるし、二刀流も出来るよ!!」

「え、ナニソレ詳しく!チヨメチヨメしたの!?!どんな風にねつとり濃密に甘く蕩ける絡み合いをしたの!?!詳しく詳細に教えてプリーズミー!!」

「ちよめ?あ、後でね……今は樹ちゃんを!」

「……うん、じゃあ使つて。壊しても代わりなら幾らでもあるからね」

園子は空中を撫で、舞う桔梗の花弁を二本の大太刀にする。二刀流として扱うには余分だが、満開により出現したアームで扱う分には調度良い。

それを数回振るい、友奈は小さく頷く。刀を使うのは数ヶ月ぶりであり、剣道ではなく実戦で振るうのは初めてだ。だが、飽くまでも主力は拳だ。拳が届くまで、邪魔なワイヤーを斬るための道具。そう考え、緊張を安らげさせた。

チラリと満開ゲージを見て、園子は思考を加速させる。残り時間は長くても七、八分。前よりも変身時間が減っているのは、アップデー卜による満開条件の緩和が要因だろう。

長期戦は無理、然しこのまま続けても無駄に時間が過ぎるのみ。ならば、取れる選択肢は賭けだ。失敗すれば死——もしくは囚われ、飲み込まれる。贖罪の少女のように。それでも残された手は一つしかない。

「ゆーゆ、五分稼いで。その後、真っ直ぐにアタック——私を信じてくれる?」

「もちろん!」

「そっか。うん、ありがとう!」

それだけを言い残すと、園子は空気を蹴り、友奈の前から姿を消した。

『……………お話は、終わりですか…………?』

「うん。ごめんね、おまたせ!じゃあ——」

『終わらせます』『終わらせよう!』

世界一長い”五分”が始まった。

(速く……………もっと、限界まで!限界なんて超えて!!)

園子の扱う満開——その能力は乃木家の先祖が使用した切り札・義経と殆ど同様だ。八艘飛びの如く空気を蹴り、跳び跳ね、その度に速度が増す。

理論上では無限に速くなるが、そんなに甘い話でもない。二段階変身の時間は有限であり、その上、限界を超えた速度は筋肉と内臓に過度な負担がかかる。精霊バリアが無い故に、一度でも失敗したら致命的だ。

「ッ……………」

枯れた樹海に巣食う贖罪のワイヤーを避けながら広範囲を移動し、跳躍の回数を稼ぐ。視界外の空間も把握して、襲い来る攻撃も多少の

無理な体勢を強いられて避ける。

普段の回避とは異なり、園子自身も超速度で行動しているのだ。軽い回避のつもりが、予想以上の大きな動きになる。短い間隔で稲妻の如く動くが、自身の動きをコントロールしきれない。

園子でなければ既に選択を誤り、ワイヤーに捕まるか、もしくは地面に叩き付けられて無事では済まなかっただろう。

「——あ、と…二分…ッ!!」

友奈の現状を確かめる余裕はない。視覚も聴覚も、秀でた第六感も全て空間の把握と体の制御に当てる。視界に映る限り、空も地面も蜘蛛の巣のように鉄糸が貼られている。

きつと、全てが檻なのだろう。

贖罪——罪人を捕らえる牢屋。それが彼女の展開した腐った樹海に付与された性質だ。檻の中で檻を紡ぐ少女、身も心も囚われ、利用されている成れ果て。

誤魔化せない罪悪感の現れだ。囚われているのに、そんな自分自身をも縛っている。惨く、哀しく、救いのない少女。それが彼女だ。

(残り、一分…ッ!!)

一秒一秒が長い。骨が軋み、内臓がグルグルと混ぜられる。気を抜けば吐いてしまいそうな感覚を抑え、鋭い痛みの走る脚で再度空を蹴る。

視界がチカチカと点滅、既に呼吸なんて出来てはいない。口を開いたら、空気が全て入ってきて肺が爆発してしまいそうだ。

それでも、止まらない。勇者の耐久性に賭けて、無理を通し続けるのみ。

(——来た…！そろそろっ!!)

霞む視界で、眉に皺を寄せて目を細める。遠くには巨大なアームが大槌によって無惨に罅割れ、だが桃色の光が大槌を弾く光景があった。

「——ッ」

超速度故か、合図の叫びは声にならない。しかし刹那、目が合った。友奈のアームも、園子の身体も。次の一撃が——否、次の一撃しか

耐えられない。気力はあっても体と時間が限界を迎えるのだ。

友奈が短く距離を取り、ボロボロのアームを激しく発光させるのを視界に収め、園子も最後となる一直線の加速を始める。距離は200m、踏み込めるのは二度、槍を手放して拳に不細工にも何重に小太刀を纏わせる。

彼女に向ける、最期の一撃は決まっていた。

友奈の踏み込みが地面を揺らし、園子の蹴りは空気に破裂音を響かせる。

振り被る拳を感覚のみで合わせ――

「勇者パアアアンチイイイツツ!!」

『ぐっ…あ、あ、あああああ!!』

桜の奔流と紫の斬撃が少女を捉え、然し無骨な大槌とぶつかり、拮抗する。不吉な瘴気は正面より花卉を腐らせ、だがそれ以上に光と花卉が溢れて止まらない。

「限界を、超える…ツ！」

「これが勇者の底力なんよお!!」

『お、し…きれない…ツ!?』

「はあああああああ!!」

光と花卉の奔流が全てを飲み込み、五感を封じられる。今この瞬間にも、果たして自分は拳を前に突き出せているのか。倒れずに向き合えているのか。

「――ツツ」

気が遠くなり、何かが弾ける音と共に光が収縮する。ドン、と身体に響く衝撃が地面と体がぶつかるモノであると気付くのに、数秒を要した。

誰も状況を理解出来てはいなかった。でも、不思議と安堵感があった。理解出来ていないのに、成したという確信はある。

「……………ゆーゆ、生きてる…?」

「……………な、なんとか……………たぶん？」

もう身体を起こす気力もない。
だが、確信した。

——勝利した。贖罪を打ち破り、彼女を解放出来た。酷く痛む身体とは逆に、心は満たされていた。手を繋ぎ、お互いの存在を肌で感じて小さく安堵のため息を零す。薄く開いたら瞳に飛び込む大量の花弁は、きつと満開が解けて生じたモノだ。

——ありがとう——

そんな言葉が、風に乗って聞こえた気がした。

◆◆オマケ◆◆

園子（満開・切り札）

・端的に説明すると、乃木若葉の切り札（義経）使用時と酷似している。武器は槍で、そして槍の機能として使用していた無数の槍刃の顕現はサイズ調整が可能な日本刀となった。

空中を蹴り、自由に跳び回る。跳べば跳ぶほど速度も増し、各方向から槍の斬撃と刀が飛来する。バリアが無いため、一定以上の速度を出すと筋肉や内臓に過度な負担がかかる。

満開が解けた後は桔梗の花弁が集まり、また小さな蒼い羽に戻った。

贖罪の勇者

・複合バーテックス戦にて大切な先輩を喪った少女、その成れ果て。満開を続けて、体の殆どを失い。そんな欠けた魂を天の神に利用され、仮初の肉体に注がれた。

魂が欠けている故に、失った体の機能は戻らなかった。然し欠けた部分を枯花によって無理やり詰め込まれ、唯一残っていた精神で抑えていた敵愾心を発芽させられる。

堕ちた勇者の中で唯一、枯花による強化はない。勇者を傷付けまいと、殺してもらおうと、そんな強靱な精神を真っ黒に染められ、リミッターが外された。枯れた樹海全域にワイヤーを張り巡らせ、操ってい

たのは素の力。

意味の無い謝罪から解放され、少女の欠けた魂は何処へ還るのか。
きつと、神しか知り得ない。

踊る傀儡は意思もなく

「う、嘘だろ……？……夏凜……ど、うして……ッ！クソッ！！何で夏凜が犠牲に……ッ！！」

——銀は悲痛に叫ぶ。

黒い樹海。光を通さず、空に蓋をする厚い雲はまるで生气でも吸っているように気力を剥いでしまう。勇者にとつては相性も最悪と言えてしまう現状、然し墮ちた勇者——傀儡にとつてはこの上ない最高の舞バトルフィールドの舞 台なのだろう。

傀儡は唸り、絶え間なく動き回る。黒いドレスに似た衣装は破れ、だが次の瞬間には直っている。肉質を孕み躍動する大剣を縦横無尽に振り回しているのだ。

『グウウウ……よ、コセ……全部、寄越せ……！！ガアアアアアアアッ！！』

「何で……ッ！どうして……夏凜が！！」

嘆き、しかし無くなったモノは戻らない。傀儡は——嘗て犬吠埼風だった成れ果ては咀嚼し、ゴリゴリと耳につく異音を鳴らすのみ。

その現実を、銀は認めることが出来なかった。認めてしまったら、もう彼女の知る三好夏凜が変貌してベツモノとなっている事実を受け入れてしまうから。

銀の慟哭も、果たして意味を帯びているのか。分からないから、声を出すことしか出来ない。声を出して、でも何かが変わる訳でもないと内申では理解しながら。

それでも、やはり少女は叫び続ける。

「かりiiiiiiiiいんっっ！！」

「うっさいわ！！」

銀の叫びに対して、一人で傀儡の勇者と相對していた三好夏凜は苛立ちを腹に込めて怒鳴り返した。

「さっきからうっさいわよ！！なに？もしかして、おちよくってんの！！」

「いや……だって暇だし」

「アンタからぶっ殺してやろうか…?」

「マジギレしてるやん…いや、冗談だつて。てか、急に煮干しばら撒き始めたからマジで正気疑つてたし…」

「私だつて渋々やってるのよ!!」

先程から、夏凜は後退の合間に煮干しを投げて傀儡の気を逸らし、その隙に攻撃をしていた。傀儡とはいえ元は犬吠埼風だった者だ。煮干しだろうとイカの姿フライだろうと、目の前に投げられたら一瞬で喰らい尽くすのが世の理だ。

幾ら讚州市では煮干し中毒者としての一定の地位を築いている夏凜だからといっても、戦場で後生大事に煮干しを蓄え続ける習性はない。尚、常に業務用煮干し六袋は持ち歩いている模様。

『グルウガアアア!!煮干し……全テ、寄越せ…! ついでに高級うどんもヨコセエエエエエエエエ!!』

「…なー、三好家の夏凜さんや。多分あの人、わりと理性残ってんぞ」「いや、アレは野生の本能よ。ゴリラフウゴリラの女子力(笑)によって意識がなくなるとも食べ物を求める……言わば悲しい化け物よ」

「侘しいなあ」

「侘しいわね」

夏凜は悲しい食欲化け物モンスターに煮干しを投げながら武器を花卉に帰し、おぞましい造形の大剣が通り過ぎた刹那に再度展開して斬りつける。こうして彼女だけで堕ちた勇者の相手をしているのにも、理由がある。

そも、まず普通に戦つても二人は傀儡に勝てない。攻撃は当たると、逆に傀儡の大振りも余所見をしない限りは避け続けられる。

幾度となく攻撃して、何十、何百と身体に至る部分全てを攻撃して、尚もダメージが通らない。単純に硬く、そして彼女を覆う瘴気が衣装の傷さえも一瞬で完治する。

このままでは先に勇者の体力が尽きる。傀儡の無尽蔵の体力は犬吠埼風の強靱性と天の神による支配、その二つが相まって、まるで自動回復機能付きのゾンビだ。

「せいっ…この…っ、煮干しを食らつてなさい!!」

「……………」

勇者と傀儡の戦いを俯瞰して、銀はまた思考の海に身を投じる。彼女は自身の頭が園子や東郷の様に賢くない事は自覚しているが、然し戦闘に関するIQは随一だ。

緻密な思考故の強みよりも、目や肌、音、匂いで感じたもの全てを脳が勝手に解釈する。敵の弱点、癖、有利不利、特性。その直感はずから今日に至るまで鍛え続けている。身体が殆ど動かなかつた時期も、散華した部位が回復して日常に戻ってから。

昨日より今日、今日より明日。三ノ輪銀の直感は意図せずとも鍛えられ続けてきた。

(……予備動作から攻撃が起こる瞬間、大剣が蠢いてる……?…先輩モドキを覆う瘴気も大剣から、だな……)

だが、安直に大剣が弱点とも言い難い現状。傀儡の攻撃手段が大剣なのだから、もしも大剣が心臓だったとしても破壊する方法がない。

(まるで乙女座の御魂だよ。……拡大解釈すれば、あの瘴気は蟹座の反射板と牡羊座の要素か??見た目だけならカブリコーン・バーテックス座の毒霧だけど、今のところは毒はない……けど、だとしたら……まさか……!)

まだ根拠は薄い。だが、銀の直感が確信を告げているのだ。確信したら、あとは行動するのみ。銀は巨大な双斧を担ぎ、突撃した。

『ガアアア!吹き、トベ…ッ!!』

「はっ…そんな大振りなんて当たたらな——っ!?!」

傀儡の大剣は愚直にも振り下ろされ、そのまま地面を揺らし、竜巻を起こす。その光景を見て銀は全ての疑惑を答えへと繋げた。

地面を揺らすのは山羊座、竜巻を起こすのは天秤座の特性だ。これだけ揃えば疑えない。

竜巻を避けて夏凜は大きく距離を取り、傀儡の動きを観察する。予想外の攻撃がまだ残っているらしいが、油断しなければ致命的でもない。

「夏凜!」

「っ!なによ、やっと弱点でも見つけたの?」

「弱点って言うか……正体？いや、弱点も分かったけどさ」

「はあ？らしくないわね、ハッキリとしなさいよ」

「…分かっている事だけ言うからな。まず、あの先輩モドキは黄道十二星座型…つまりこれまで戦った完成系バーテックスの^キごちゃ^メ混ぜ^ラだ。それぞれの特性を使うだけじゃなくて、その気になれば混ぜて別物の能力にしているっばい」

「……………それ、なんてイカの姿フライ馬鹿？」

「だよなあ。勇者の能力をパクって混ぜるアホが味方側にもいるんだよなあ。…あと、アレの心臓部はやっぱり大剣だと思う。^{ヴァアルゴ・バーテックス}乙女座の心臓^{御魂}だろうし、あのごちゃ混ぜ黒霧も大剣から出てる」

「なるほどね。最悪な状況だつてことは十分に伝わったわよ。アレでしよ、どーせこの後は^{ツエミニ・バーテックス}双子座とか^{スコレピオン・バーテックス}蠍座の御魂みたいに増殖する流れでしょ……」

「うげ、嫌なフラグ建てるなよな」

「最悪を想定しているだけでしょ——っ！来るわよ!!」

「さいですか…!」

銀が辛酸を嘗めた表情を浮かべた刹那、禍々しい無数の太矢が無数に飛来する。咄嗟に躲すが、傀儡が遠巻きに大剣を振るう度に矢が生サジタリウス・バーテックス成され、射座のように弧を描く事もなく真っ直ぐ猛スピードで徐々に二人を追い詰める。

「くっ……こんのお!!」

夏凜は小太刀を無数に放つが相殺も叶わず、多少軌道を逸らす程度の効果しかない。夏凜に距離を取らせたのは此方に遠距離攻撃がないと理解していたからだろう。

こうなつてしまえば再び接近戦を仕掛けるまではただ只管に勇者が消耗するのみ。互いに選択を誤ったと理解し、どうにか距離を詰めて拮抗状態に戻そうと試みる。

スピードと手数で攻める夏凜ならば避けながら接近することも可能だが、銀の戦闘スタイルは今も昔も被弾覚悟で近付いてから渾身の乱舞で斬り裂くモノだ。

今も尚、向けられる禍々しい矢には^{カブリコーン・バーテックス}山羊座や^{スコレピオン・バーテックス}蠍座の毒

が混ぜられていてもおかしくはない。

結局、銀は片方の大斧を斜めに構えながら螺旋状に迂回し、徐々に距離を詰める方法しかない。

(……っ！せめて、園子の盾か美森の援護があれば……!!)

三好夏凜と三ノ輪銀は同系統の勇者システムであり、互いの手の内を理解している分には連携もしやすいが、その幅と応用性に難がある。守りも援護も、得意とは言い難い二人。一方的に攻める展開では随一なのだが、逆となった瞬間、不利な盤面となってしまう。

「いや、無い物ねだりなんて柄じゃない！二年前には相棒が孤軍奮闘をやり遂げたんだし、アタシには夏凜がいる!!つまり負ける要素なし!!」

「意気揚々なのは喜ばしいけど！どーするのよ!!埒が明かないっての!!」

『落ちて、堕ちて、朽チロオオ!!ルゴオオオオ!!』

「オチ要員が何言ってるのよ馬鹿!!」

「いや、どつちかと言うとお前の方がオチ要員だぞ」

「銀はどつちの味方なのよ!？」

「んな事より戦闘に集中しようよ……ホント、マジで」

——考える。

勝利条件は当然、犬吠埼風の姿をした天の神の使徒を撃破すること。それに必要なのは、肉体に致命的なダメージを与えるか、御魂と同様の性質を帯びる大剣を破壊することのみ。

前者は不可能だろう。満開をすれば可能なのだろうが、先の見えない敵相手に時間制限ありの切り札は使えない。被弾しなければバリアも消費されず、いつでも満開を出来る状態を保てる筈だ。

ならば目指すべきは大剣の破壊なのだろう。大剣の性質は数多にあるが、根本的且つ最も厄介な点は勇者の攻撃でも傷一つ付かない硬度だ。

唯斗や樹、園子ならば彼女の手元から大剣を奪う術もあるのだろうが。残念ながら銀にも夏凜にも奇想天外で吃驚箱のような頭脳や武器特性もない。

ならば――

「ビビってられるかっての！インファイトでいこうぜ!!」

「上等！護りも搦手も私達の役目じゃないわよ!!」

銀の紅い双斧がギチギチと異音を鳴らして異形の大剣と拮抗し、その隙に夏凜の刀が一瞬だけ花卉になり、次の瞬間には再度形成されて傀儡の腕を強かに打つ。

それを煩わしいと感じたのか、傀儡は空いている手で宙を薙ぎ、黒煙を発生させた。思わず肺に入れてしまうが、毒性はないらしい。ダ
ンと目の前で轟音が響き、遠くで着地する音がする。きつと単純に距離を稼いで先程の構図をまた描こうとしているのだろう。

それを察した銀は両方の斧を広げて黒煙を全て吹き飛ばし、視界を確保するが――

『――グ、ガツ…ギギギギ…平伏セ…』

「っ！銀、使うわよ…!」

「了解。…あっちもまとめて片付けにくるらしいからな」

蠢く大剣。ブクブクと膨張して異形となり、大地も空も、そして傀儡すらも飲み込んでさらに肥大化する。

『――枯花』
カレバナ

「――満開!!」

空に二輪の巨花が咲き誇り、だがそれを遥かに上回る重量の其れは嘗ての合体バーテックスであるレオ・スタークラスターよりも数倍は大きく、そして肉質で醜い異形だった筈の図体は白い繭に包まれ、その繭すらも黒く侵食して。

巨大な星を連想させる、黒い壁――否、空を覆う球体として二人を見下ろす。

「…や、ばい…な…」

「これ…生き物、なの…?」

レオ・バーテックス
獅子座が灼熱の太陽ならば、空を支配する其れは獅子座以上に大きく、丸く、黒く、そして不気味な月だ。

ただの黒い球体。言葉にしたらそれだけなのに、感じる威圧感で寒気が止まらない。

——レオ・ディザスト、降臨。

レオ・デイズト

「……………お？」

イカの姿フライを食る最中、樹海に出現した気配の方向へ首を向ける。

現状、唯斗達をドス黒いドームが覆い、それが樹海を染め上げて使徒の舞台フィールドとなっていた。結界とも言えるのだろうか。

其れは堕ちた勇者に有利な舞台であり、勇者同士の合流を阻み視界すら通さない壁となっている。故に濃密な気配は視界に映らず、然し唯斗には分かる。

「覇者ちゃん、ヤベー奴いるぜ？」

「ですね。あ、私が向かいます？……………あと覇者じゃないです」

「……………んー、いや。分身でじゅーぶんでしょ……………え、そろそろ霸王にランクアップしたの？」

「殴りますよ？パーで」

「ビンタじゃん。普通にビンタじゃん……………ヨイショつと」

欠伸混じりに旋刃盤を投げ、それを樹が操って不可測な起動を描く。後方からの連続射撃を全て受け止め、前方から迫る拳にワイヤーが絡み付いた。

同時にトラップが発動し、四方八方から鉄系製の槍と分身した唯斗が構える二挺の中距離銃が襲撃者を穿つ。尽くが瘴気に阻まれるが弾丸数発は被弾した。

『くっ…いな、舐められてるね。……………でも、増援になんか行かせないよ。たとえ分身体だとしても』

「行かせれないとでも？」

「樹チャン…覇者オーラが漏れ出てますわよ？」

「次に覇者って言ったら埋めますよ、樹海の地面に。そこの黒髪友奈さんを」

『何で私!?!』

「味方を地面に埋める人がどこにいるんですか…」

『正論っぽいけど、私に八つ当たりしてるって事実は分かってる?』
「:嫌なことには見て見ぬふりをするのも、人間の性ってやつなんですよ。ねっ、唯斗先輩!」

「止めて?俺がそう教え導いたみたいに言うのやめて?讚州市一番の常識人な俺が可哀想でしようが!!」
「??」

唯斗は悲しく嘆いた。ピエンと声高々と鳴きながら辛辣極まりない後輩に涙を零した。だがそんな哀れな唯斗の心情を察する事もなく蒼黒いレーザーが二人を薙ぐ。

然し”束ねる者”の権能で召喚された無数の護盾が破壊の奔流を塞ぎ止める。油断はしていないが、絶対的有利な状況は堕ちた勇者であらうと崩しようがない。

暗闇に紛れて勇者を狙う妄執の勇者。レーザーの方向へ目を向け、しかし唯斗が対処するよりも早く巨大なトラバサミが彼女を飲み込んでいた。

「……逃げられましたね」

「対処早いなあ」

「樹海全域…は無理ですけど、天の神のバリア内くらいならワイヤーでセンサーを貼れますので」

「さいですか。さて、じゃあ俺もやるべき事をやらないとな」

『だーかーらー、逃がさないって!そもそも憎っくいカミサマのバリアを破る手段でもあるの?アレは力とか技術とか関係なく、概念的なアレだよ。うーん、なんて言うべきかなあ……つまり、私達^{根源}を絶たないってコト!』

復讐である少女は嘲るように右手で真上を差し、狭間を見上げる。よく目を凝せば重々しい黒雲の遙か先には極彩色の空が広がっている。

きっと樹海全体が天の神に侵食されているのではなく、堕ちた勇者を中心として広範囲且つ円状に腐った樹海が展開されているのだらう。

彼女の言葉通り、その結界は到底勇者に破れるものでもない。外に

出るには彼女達を倒すか、神の力で中和する他ない。
故に問題はない。

「レフリカ 山田くん鷹作・神樹の枝」

唯斗の纏う全ての武装が消え、代わりに一本の雑に加工されただけの枝が出現する。細く、頼りなく。しかし不思議な雰囲気醸し出す其れは勇者に安心を、そして天の神に与する少女には尋常ではない圧と寒気を与える。

『……ヤバい。…な、何それ……そん、なの…反則だよ……?』

復讐の声が震える。焦りは感染して、遠くに身を潜めていた妄執からはこれまでの比ではない程の攻撃が飛来し、鉄糸で構成された武器とぶつかり甲高くも鈍い音が戦場に響く。

それでも唯斗は止まらず、居合の如き構えで空を向き、その身体を白く発光させる。

『あ、これダメなやつだね。あーあ、中和されちゃうよ…』

「——神花解放。孤月・花結い——石紡ぎし花の煌めき」

ゆつくりと。淀みない曲線を宙に描き、勢いや衝撃すらも置き去りにして黒雲を通り過ぎて空に亀裂を入れる。数秒遅れて刹那の突風が全てを両断。弾けるように結界は破られ、腐った樹海はいとも容易く解除された。

全てを捨て、たった一太刀に込めた。神力も断ち、時代を超えて最強の精霊から継承した技。記憶天の神へ向ける一つの牙だ。

戦々恐々とした様子の復讐と妄執を無視して、唯斗の分身体は空を駆けて最後に残る傀儡の結界へと向かった。

「さーて、こっちも片付けるぞ」

「……すごい…インスピレーションが湧いてきます…! やっぱり唯斗先輩がいたら私もずっとずっと強くなれそうです♪」

『…やられる前に、爪痕くらいは残さないかね。最期に一暴れしよつか、東郷妄執さん!』

『ええ、永遠に唯斗くんの傷として残り続ける為に……! 天の神でも

復讐ちゃんでも、利用し尽くすわ!!」

——この戦場もまた、決着は遠くない。

”其れ”は大きい。

”其れ”は強い。

”其れ”は儂い。

”其れ”は醜い。

大きく、強く、儂く、醜く。躍動する黒い肉は膨張し続ける。惑星の如く丸く、月の如く二人の勇者を見下ろす。

傀儡の正体は複合バーテックスだ。勇者を追い詰めたレオ・スタークラスターと同系統であり、だが格が圧倒的に異なる。黄道十二星座型バーテックスの全てを混ぜ、一つにした複合型。全ての特性を有し、故に最凶だ。

起こるべく災害の名を冠する化け物は皮肉にも勇者が種となり、勇者によって発芽した。

「デカイな……これ弱点とかあるのか?」

「あの大剣が御魂だったっぽいし、それが膨張して風モドキを飲み込んだ結果がアレでしょ。なら、全部切り刻んだら倒せるわ」

「果てしないなあ。まー、いっちょやってみるか!!」

銀は満開によって巨大化した紅斧に灼熱を纏わせ、手始めに炎の斬撃を放つ。獄炎は空高く登り、球体の一部を喰らうように燃やす——が、炭化した部位はトカゲの尻尾切りの如く剥がれ落ち、僅かな欠損も肉が蠢いて再生する。

「……だよな。デカくなつたからって再生能力が都合良く消えましてー、なんてコトがあるわけもないか」

「じゃあ結局、斬りながら掘り進めるしかないわね。運が良ければコアでも見つかるんじゃない?」

「おお、珍しく冷静だ」

「失礼ね!私は何時如何なる時も冷静沈着な完成型勇者よ!!……別に、焦る必要がないってだけでしょ。神を倒すって言ってんのにあの程度で挫けてる暇なんてないわ」

「そりやそうだ。なーに、ジャイアントキリング ヒーロー 怪獣狩りは勇者の十八番さ。ぶちかまそうぜツ!!」

——考えるのは止めだ。

満開の飛翔をフル活用してレオ・デイズストへと刃を突き立てる。此方を妨害する水刃や火球は斬り伏せ、甲高く脳を揺らす異音も自らの大声で掻き消す。

幸い、デイズストの肉は傀儡ほど硬くはない。急膨張によって硬度が追い付いていないのだろう。態々万全になるのを待つような愚行なんてせずに、焼いて斬って抉って穿ち、考えつく限りの攻撃に徹する。

三好夏凜の最大の手札は四本の巨大なアームと己の腕による六刀流だ。人型を相手取るような剣技は完全に捨て、目の前の化け物に一太刀でも多く浴びせる。

「はあああああああ!!」

「うりやあああああ!!」

斬り進みデイズストの身体を削りながら、尚も妨害として繰り出させるギミックごと叩き切る。肉が蠢いて何百もの針が出現する。炎を取り込んだ竜巻がデイズストの身体ごと灼き爛れさせ、それでも切り裂いた肉から猛毒を含む霧が発射される。

腕が灼け、喉が毒に犯されて血を吐く。腕も足も胴体も放たれた無数の矢が刺さり、それでも夏凜も銀も止まらない。

満開には時間制限がある。

既に何分経ったか。残りはどれだけ残されているのか。分からないから、手を止められない。呼吸をする時間も惜しく、そもそも自分が呼吸出来ているのかも分からない。

斬り続け、掘り続け、デイズストの身体の中に深く入り込む。きつと後ろを振り向けば既に出口なんて再生されて塞がれているのだろう。

だが、この化け物を倒せなければ死ぬのも必然的だ。手足は痺れ、気合いだけで武器を振る。血を吐きながらも猛々しく声を張り上げ、まだ自分が無事であることを自身に証明する。

「ガッ……このっ！この程度じゃアタシは殺せないぞオオオオ!!」

銀の声が聞こえ、夏凜は身を昂らせる。

「はあああ!!まだまだア！これでも喰らいなさい!!」

夏凜の声が聞こえ、銀の炎が激しくなる。

きつと、残された時間は少ない。最期まで生きて異形を討てる確証はないのに、心に宿る炎は少しずつ大きくなっている。希望の訪れを察して、その希望に負けない戦跡を空に刻む為に――

頭が真っ白になり、意識が擦り切れる刹那――

――ビゴオオオオンツツ!!

「ツツ!」

レオ・デイザストの肉に音が打ち込まれる。音と振動は黒い肉を破壊し続け、完全に埋まっていた銀と夏凜を外へ解放した。

知っている。この戦場に似つかわしくない音も、それが起こす超常的で馬鹿げている奇跡も。久々に空気を吸う感覚に視界が真っ白に染まり、然しその間に彼が映った。

通常時よりも巨大化させたピコピコハンマーを肩に担ぎ、薄緑に発光する十字の護盾に乗る少年の姿。

「よっす」

「唯斗……」

「は、はは……こんなトコで会うなんて奇遇だな、相棒……ゲボツ、ゲボツ……!」

「ほら、食え。解毒作用のあるイカの姿フライだ」

解毒作用のあるイカの姿フライとは、との疑問を飲み込んで二人はイカの姿フライを齧った。慣れ親しんだ歯ごたえにいつも通りの塩気。飛び跳ねるほど美味しくもないが、菓子としては文句のない味だ。

飲み込むと同時、身体が軽くなり視界が明るくなる。自覚していた以上に毒が回っていたらしい。

改めてデイザストを見上げると、全体的にボロボロだが微かに蠢き、再生している。だが再生力は確かに落ちており、先程までの特攻は無駄ではなかった。

「……はあ、マシになった…サンキューな」

「ふんっ、別にアンタの助けなんてなくても平気だったけど！……まあ、一応言っておくわ。…ありがとう」

「構わんよ。毒ってどんなに鍛えても一発KOな反則だし、解毒手段くらいは持ち合わせてるっての」

「マジでどんな仕組みだよ、このイカの姿フライ…」

唯斗曰く、イカの姿フライは万病に効くとのこと。古代より人々に愛され続けてきたイカの姿フライには美味しさだけでなく、運氣が舞い込み、身体を丈夫にして世界を平和にする作用まであるのだ。

唯斗は改めてイカの姿フライを頬張り、一筋の涙を零した。そして銀と夏凜はドン引きした。

「——と、さてさて。アレどーする？べつつにい？ボクちゃんがチャチャツと片付けちゃってもいいーんだけどお？ヨワヨワなチミ達はゆつくりと休んでても——」

「酷く無惨にぶち殺すぞ?」

「え、銀さん怖っ…」

「さつき言ったはずよ。アンタの助けなんて要らないし、あんな肉風船なんて私と銀で楽勝よ!!」

「……へえ。なら、どうするんだ？気概だけで倒せるなら誰も苦労しないぜ?」

煽り、試すように唯斗は問う。

腹が立つと同時に、彼の多彩な手札があれば倒せるのも事実であることも認める。後でボッコボコにするとして、でもそれはレオ・デイザストを片付けてからだ。

改めて考える。あの異形を倒すには何が必要で、何をすべきか。夏凜の強み、銀の能力、二人で何を成すか。思考を重ね、やはり行き着くのは高火力を出せる銀の炎だ。

「——よしっ、また掘り進めよう!」

「…それしかないわね。じゃあ私が銀を中心まで運ぶわ」

「そこから最大出力で燃やすッ！外からは強くて、デカブツは中が弱いのが定石セオリってモンだ!!」

「うっわ…お前ら脳筋かよ。じゃ、俺からの餞別ね」

唯斗は光るイカの姿フライを二人に手渡し、そのまま消えた。銀は直感で察していたが、やはり分身体だった。本体は今頃、また馬鹿みたいな事をやらかしているのだろう。

彼からの餞別を苦々しい表情で飲み込み、再び突貫を仕掛ける。だが今度は二人同箇所に、銀は紅斧に力を溜めて夏凜が気味の悪い肉を斬って傀儡だった化け物の身体に潜る。

心做しか先程よりも硬い。そして後方の穴は塞がれず、開き続けている。再生を諦めて硬度を高めようとしているらしい。だが関係ない。硬いのであれば、それ以上に鋭く切り込むのみ。

無論、レオ・ディザストのギミックはそれだけではないのだが。

「っ！二」

途中、毒を含む棘や霧が二人にまた襲い掛かるが白い光がそれを阻む。白光は二人の身体の内側から発せられているようだ。

考えるまでもなく、唯斗からの餞別であるイカの姿フライが関係している。精霊のバリアに酷似しているがアレほどまでの硬度もなく、飽くまでも毒霧や多少の棘を弾くくらいだ。現状ではそれだけでも十二分に助かるのだが。

「——銀！そろそろよ!!」

「合点承知之助え!!」

憶測での中心に到着し、ディザストからの妨害も明らかに増していた。白光の護りがなければここまで銀を護り通す事も叶わなかっただろう。

夏凜は残る力の全てを防御に当て、全力で叫ぶ。

「終わらせなさい!!」

「うおおおおおー丸ごと焼けるオオオオオオオオオ!!」

二つの巨大な紅斧は爆発寸前のように赤白く暴力的な光を放ち、全てを覆っていた両翼を開くようにレオ・ディザストの内部から熱で膨

張され、炎が内から外へ解放される。

『——ッ!!』

最期に甲高い音が鳴り響き——レオ・デイザストは灰となって地面に落ちた。

互いが肩で荒く呼吸する声のみが残る。銀は空を見上げ、夏凜は地面を眺め。もう敵が残っていないことを確信してから強く拳をぶつけて満面の笑みを浮かべる。

「アタシ達の——」「私達の——」

「勝ちだアア!!」

二人の勝鬨が腐った樹海を消し飛ばし、極彩色の世界へと戻った。

捨て駒

割れた結界が再び紡がれ、極彩色の樹海を黒く染め上げる。地面は泥濘、根は腐り粘性を帯びる。そんな最中、勇者と天の神の使徒は歪に変わり続ける風景に視線を移す暇もなく戦闘を続ける。

「ていつー！」

『カツ、ハ……ッ!?!』

樹が気の抜ける掛け声と共に鉄糸製モーニングスターが不規則に弾かれ、復讐の少女の腹部に吸い込まれる。鈍い音が響いて少女は吹き飛ぶが、直ぐに体勢を立て直して小さく舌を出し、今しがた攻撃を受けたばかりの腹を手で摩る。

『もーっ！痛いなー!!かつての仲間到手加減なしって酷くない!?!』

「私の知っている友奈さんとあなたは別人です！あの人は…友奈さんは天の神になんか屈しないし、何もかもを諦めて投げ出したりなんかしません!!」

『樹ちゃんは勇者に期待を持ちすぎだつて。現に私は残酷な現実に耐えられなくて、堕ちて、身を委ねた。それが堕ちた勇者なんだよ?』

「知りません！私は私の信じたものだけを信じて、あなたなんかを私の尊敬する先輩だなんて絶対に認めません!!」

『我儘だなあ……!』

再度モーニングスターをワイヤーで弾き、放つ。然し結果は先程とは異なり、容易く受け止められて黒く侵食される。

直感的な危険を察知した樹は手元から鉄糸を切り捨ててモーニングスターを放棄した。操り主を失った凶器は途端にほつれ、黒く染められた部位以外は薄緑の粒子となつて分解される。

『あーあ、貰おうと思つたのに』

「あげませんよ。あなたにあげるのは絶対的な敗北だけです！」

『言ってくれるね。温かいお言葉には相応のお返しをしないとね!!』

復讐が虚空を拳で振り抜き、その軌道に乗って黒い衝撃波が樹に襲い掛かる。しかし樹は手元にワイヤーを集め、

S p a n i s h ^猫 T i c k l e r ^{肉球}を顕現させる。

乱雑に振るわれた鉤爪は黒い風を掻き消して地面に傷を刻み、しかしその瞬間、黒髪を靡かせて少女が接近していた。

咄嗟に放つ網も躲され、抉るよに真下から穿つアッパーカットに辛うじて盾で受け止める。

『アハッ♪』

「…っ」

『防がれたけど、やっと一発だね』

「…：針山」

『わわっ!』

どうにも、金剛のような硬さが厄介だ。復讐の勇者は異常に硬く、それ以上に力強い。それだけと言うのは簡単だが何十何百もの策を用いられるよりも、ただ只管に振るわれる剛力の暴力は樹にとっても厄介だった。

遠くを眺めれば唯斗が妄執の放つレーザーでマシユマロを焼いている。程よく溶たマシユマロはクツキーに挟まれて妄執の口に投げ込まれ、唯斗は達成感に浸りながらイカの姿フライを貪り喰う。

樹には何となく分かるが、あれば分身体だ。ならば本体は何処にいるのか。取り敢えず目の前の敵を片付けようと視線を戻すと――

「ヒヤッハー！去ねやコンニャロオ!!」

『うえ!?!な、ちよっ！そんなの…チェンソーなんか何処から持ってきたの!?!』

「ええ…?」

黒紫のチェンソーを振りわしながら落ちてきた唯斗と、ヘッドスライディングでそれを躲す復讐の少女。悲鳴に似た甲高い音は実に異様としか言えず、樹も困惑で溜息が出た。

きっとこれが本体なのだろう。最近になって、何となくだが、魂の有無や存在の質量とも言うべきか。樹には気配で相手の正体が解るようになってきた。

故に唯斗の本体や分身も解り、目の前の友奈や東郷が自分の知る先輩ではなく天の神の欠片である事も察しが付く。

彼女達がどんなに過酷な運命を辿って此処に辿り着いたのか。それも今だけは考えない事にした。想像して同情してしまつたら、遠慮なく武器を振れなくなってしまうから。

『アハ、アハハハハ！唯斗君…私を放っておくだなんて酷いわ！もつと愛し合いましょ♡』

「うげ…トーゴーモードキチャンつたら分身じゃあ満足できへんの？」

『ええ、ええ！』

『あーちらら…妄執東郷さんまで来たらめちやくちやだよ。責任取って死んでくれないかなー？』

『復讐友奈ちゃんこそ、私と唯斗君の愛の営みを邪魔しないで。殺すわよ』
「……………この空間、私以外全員が変人なんですか？」

「おいおい、俺も常識人だぜ？」

「え？」

「え？」

樹海の混沌化が進んできた為、仕切り直しの意も込めて樹は味方ごと巻き込み、鉄糸で模造した大剣を横一周に薙ぎ払う。鋭利な刃とオマケとばかりに生やされる無数の棘。大剣と言うよりも刃の付いた棍棒に近い造りだった。

無論、勇者の中でも特に非力な樹が振る大剣は容易く全員に躲されるが、距離だけは稼げた。

「え、ちよいつ!?樹さんつたら味方ごと攻撃するのやめてくれる!？」

「だって、どうせ躲しますし…」

「最近思考がアブナイぞ？」

度重なる唯斗との鍛錬の影響か、樹はバイオレンスに思考に染まっていた。唯斗が精霊の力と記憶を継承した結果、一番影響を受けたのは樹だったのかもしれない。

空いた隙を利用して形態モード・戦乙女ヴァルキリーを展開し、白銀の鎧ドレスを纏う。唯斗の mode wear bear を参考にして編み出した形態。

もう試したい事は試した。故に手加減は止めだ。ここから先は鍛錬ではなく戦闘。意識を切り替え、敵意を解放する。

『ツ……ホント、勘弁して欲しいよね。唯斗くんだけじゃなくて樹

「ちやんも手を抜いてたしさあ…前哨戦とでも思ってたのかな?」

『なんで…何でよ…ツ!どうして私と唯斗君の邪魔をするの…ツ!!
憎い、憎い憎い憎い!私の妄執あを妨碍しないで!私の睦言を遮るな!
愛を…愛を愛を愛を——邪魔するなあああ!!』

「アイアイうつせよ。テメエはお猿さんかア?」

唯斗は防人の護盾を泥濘に叩き付け、四枚のバリアを顕現する。それに樹のワイヤーが絡み付き、埋め尽くし、白銀の壁が築かれた。

「——愛、ですか…」

パシヤリ、と泥濘む地面を散らしながら樹が前に出る。芽吹色の瞳には明確な敵意が浮かび、しかし盾状にしていたワイヤーは解かれる。

『ツ!!』

「愛、愛、愛…押し付けてばかり。唯斗先輩の拒絶も聞いてませんし、身勝手に振る舞って味方すらも利用する始末…本当に、嘆かわしいくらい落ちぶれましたね」

『…………挑発のつもりかしら。生憎、私は唯斗君にしか興味ないわ。貴女の言葉なんて、幾千の彼の言葉にも劣る』

「…挑発、ですか。挑発っていうのは——こうやるんです!」

「…………い、樹…?急に何を——ングっ!」

『わーお、熱烈〜』

樹は唯斗のうなじに両腕を回し、そのまま顔を近づけて口付けをした。唇を挟んで歯がぶつかり、血が滲む、不格好なキス。然し抵抗する唯斗を押さえて十秒間、樹は熱烈に唇を押し付けた。

「ッ?!?!」

「…………ふはあ。…………これが、私の気持ちです。忘れないでくださいね、唯斗先輩♪」

理解値を超えて混乱し、イカの姿フライを食べ始める唯斗に対して樹は頬を紅く染めて朗らかに微笑み、然し慣れない真似をしたせいで目が酷く泳いでいる。

「援護するぜ——満開・精霊化!!」

代償のない二段階変身。精霊バリアのエネルギーを全て吸収し、空に鳴子百合とオンシジュームを咲き刻む。樹の勇者衣は薄緑の光を放ち、巫女と神官を複合させた神々しい衣装へと昇華される。

手首の輪が大きくなり、アーチとして背に日輪を描く。それに形態・戦乙女が重なり、少女は容易く人類の限界を越えた。

唯斗は精霊化の影響で勇者時の黒い頭髮が純白に染まり、傍らに大蛇と蒼鴉、雪白が顕現される。

前に突き出した右手に雪白が重なり、満開衣装は青白い和装となった。帯びる冷気で周辺が凍りつき、異様な存在感を樹海に刻む。

『樹、全部防ぐから上手いことヨロシク』

「はいっ!」

『アイスシールド、分身付与』

↑——ツツ!!

戦艦が地響きを起こしながら空に浮き、過剰なまでに溜めた力を砲撃として解放する。

たった一度の放出。その余波で地面は焼け焦げ、樹海を覆う根は炭化して、雲すらも溶かした。それを氷の護盾は真正面から受け止め、溶けて朽ちる瞬間には次の氷盾が生まれる。

もしも現実世界で直接落とされれば、最低でも香川は滅び、海は膨大な熱によって超広範囲における水蒸気爆発を起こすことだろう。

『暑っついなあ……倍プッシュユだー!』

両手を前に出し、押し込むように右足で踏み込む。瞬間、何百と広がり、何重と重ねられていた盾の数と範囲が倍となる。

膨大な熱と冷気がぶつかり、拮抗が僅かに傾く。冷気は徐々に強くなり、地面を再び凍らせる。その後ろで唯斗が神樹の枝を腰後ろで構え小さく呟く。

『迸れ。孤月・煌めき』

↑——ツ?!?!?——↓

絶対零度の斬撃は氷盾ごと蒼黒の衝動を切り裂き、戦艦に傷を付ける。両断こそ出来ないが、無視出来ない損害にはなっているだろう。

『やつちやえ、覇者』

「だから——覇者じゃないですって!!」

——たった一本。

何万ものワイヤーが湯水の如くアーチから放出され、それを数ミリまで圧縮する。輪状の”其れ”は樹が手銃で撃つ動作に合わせてフワフワと宙を舞い、音もなく戦艦と接触して——完全に両断する。

↑、——ツ……——↓

『うーわ…アレ、ヤバくね?俺でも食らったら即死するぜ?』

「難点はそもそも当たらないことなんですけどね……私自身も触れたら大変ですし」

まさに一撃必殺。戦艦は轟音を立てて地面に落ち、爆発を巻き起す。最期の置き土産とでも言いたげに爆風が唯斗と樹に襲い掛かり、アイスシールドと鋼鉄の繭で完全に防がれる。

数十秒の沈黙を経て、樹の広げる鉄系センサーにも敵影が存在しない事を確かめた。

「……終わり、ですかね?」

『んー……まあ、今のところは終わりやね。物足りないか?』

「いえ…でも、上手く逃げられてしまったなーっと思ひまして」

『案外、アイツにとつては妄執…いや、他の使徒も捨て駒だったのかもな。俺達の全力を知るための』

解ける樹海の光に飲まれながら、二人で遠い空を見上げる。小さく空いた穴は、ちょうど人一人分の大きさだった。

『……あーあ、負けちゃった。でも、まだまだ終われないんだよなあ、これが。■^あの勇者がまだ残ってるし、それを導かないとね……二人にはバレちゃってるかな。バレてたって、逃げれるけど』

復讐は終わらない。彼女の性質は神樹に対する『復讐』のみであり、その手段は選ばない。たとえ自分の手でなくとも、最後に神樹が死ぬのであれば、どんな手でも利用する。

数多の世界で、誤った結果を残す同士達。自分を駒に仕立てあげた天の神。そして、天の神が最後に生み出した器。其れに籠る魂は相応の業を背負う咎人だ。

『フィナーレにはまだ早いよ、唯斗くん……次こそはちゃんと、私を殺してね』

犯人

「第二次女子会をします」

病室のベッドに横たわり、東郷は宣言した。

ぐるりと見渡せば死屍累々とは言えないが、後一步のところまでロボロになった勇者部の面々が東郷と同様にベッドで横になっている。

一人だけ元気ハツラツな無傷覇者がお見舞いに来ているが、覇者は覇者つてるので誰も違和感は覚えなかった。

先日の襲撃を経て、皆は軽くない怪我を負っていた。東郷と風は全身の切り傷、友奈は擬似ピコピコハンマーの打撃痕とワイヤーによる裂傷、園子は加えて新たな満開による自傷もあり、銀と夏凜はレオ・ディザストの多彩な攻撃により火傷や切り傷、裂傷、刺傷、その他諸々と。

勇者システムの治癒増進で治りは早いが、だからといって放っておくわけにもいかず。

園子が手回ししたおかげで皆が同じ病室となつと次第だ。樹や唯斗も、まとめてお見舞いに行けるから丁度良いとの意見だった。

「いやいや、それよりも襲撃の件について話し合わないとでしょうが！」

「大丈夫です、風先輩。唯斗君の協力もありまして、敵の情報はまとめています。つまり優先順位は女子会ですね」

「そんなわけあるかー!!」

夏凜は他の病室の迷惑も考えずに叫び、また傷口が開きかけて悶絶した。完成型勇者曰く、敢えて傷口を開く事によって精神力と治癒後の肉体の強度を上げようとしている、との事。無論、煮干し型ツインテールさんの戯言だ。

煮干し狂人は口いっぱい煮干しを頬張^キ張^メつて痛みを緩和させた。

「……なんて言うんだっけ、こーゆーの。既視感……だっけ?前にもあったよな、女子会という名の無差別魔女狩り」

「…………嫌な、事件でしたね…」

前回の女子会は東郷の脳が焼け爛れた為、後半に関しては記憶から都合良く削除されていた。流石の東郷でも唯斗と友奈のチョメチョメ的なアレを想像した結果、防衛本能で脳細胞が自壊したのだ。

つまり、今の彼女は第一次女子会を開催した事は覚えてはいるが、その結末は知らないのだ。そして、現実逃避によって”知らない”という事実には違和感を覚えない状態だ。

思い出したらまた暴れ出すので、誰も指摘しない今日この頃だった。

「さて。端的に申しまして、先日の戦闘終了後にまた寝取りの波動で脳が焼け爛れたので早急に原因を突き止めなければいけないと憤っている次第であります」

「いや分からんわ。アタシの女子力を持ってしても理解不能だっつの」

「ねとり…………園ちゃん、寝技の亜種かな？」

「うんうん、そーゆー捉え方もあるよね。この技名の略称がNTRっていうんよ」

「おおー、かっこいいねー!」

「でも清純的な内面の美を観察するものとしては、NTRは悪しき文化なんだよね。いやー、一人を複数人で取り合うのは素晴らしい愛なんだよ?でもでも、寝技で逃げ道を無くすのは邪道かなって思うお年頃なんよね。まー、それはそれでアリだけど」

「おい馬鹿、友奈に変なこと教えるなつての。美森に腸はらわた引き裂かれるぞ」

「そこまでしないから?!……………しません!!」

「そっかー。園子、骨は拾ってやる」

「じゃあその骨をミノさんに移植して合体最強勇者になるね」

「普通にやめて?マジで」

今回は誰が犠牲になって、誰が殺されるのか。そんな事を考えながら、取り敢えず恐らくは大元凶である樹は帰りたいと刹那に願う。

唯斗への口付け。ノリと雰囲気に乗ってやらかしたが、本心でも

あった。関係が変わることを恐れていたが、きっと彼は何も変わらな
い。恋やら愛やらで変わるような一般的変人とは領域レベルが違うのだ。

そも、唯斗に直接告白した東郷や家で常日頃からアピールしている
園子を目の前にしてもイカの姿フライをおかずにイカの姿フライi
nイカの姿フライサンドを食べる変人だ。

今更、告白の有無で何かが変わることもないだろう。だからこそその
口付けだったのだが。

「さて、犯人第一候補の樹ちゃ——」

「違います、犯人はヤスです」

「食い気味だしヤスって誰よ」

「えっ、夏凜さん…？ヤスを知らないだなんて…：う、嘘ですよね…？
そんな、まさか…ツ！まだ散華の影響が…!?しっかりしてください！
ヤスですよ!?犯人のヤスです!!」

「存在しない記憶を植え付けようとするな!!」

「ゲームのネタバレ情報が消えるだけなら、散華も笑顔で許容出来た
わね…」

嘗ての暴走を思い出し、風はしみじみと呟いた。

さて、と樹は内心で一息を着く。この場で東郷の脳自壊の真実を知
るのは樹のみ。敢えて問題点を上げるのであれば、樹はあの先輩と
違って嘘を吐き続けるのが苦手な事くらいだろう。最悪、この場にい
る全員を気絶させて堂々と帰ることもできるが、さすがに怪我人相手
なので最終手段にする。

ともあれ、何も知らぬ存ぜぬで通せるほど先輩達は甘くないとい
うこともわかっている。故に、樹の取れる手段は誤魔化しだ。

「…：東郷先輩の話は、まあ…半分くらいは理解しました」

「えっ、マジで？樹は半分も理解出来たのかよ…：」

「すみません銀先輩、見栄張りしました。三割くらい…：いや、二割
五分…：二割、そう！二割の理解です！」

「二割は果たして理解と言えるのかしら…：ボブは訝しんだ」

「だからボブって誰よ」

「は？夏凜、あんた…ボブを知らないっての!?まさか…：う、嘘でしょ

…？まだ、散華の…」

「あー！もうっ!!そのノリはもういいから！話が進まないから風は黙ってなさいっての!!」

「か、夏凜ちゃん。病室では静かにしないとだよ？」

——話が逸れた閑話休題。

樹は唯斗から預かったイカの姿フライを全員の口に振じ込み、静かになったところでまた話し始める。

「とにかく、東郷先輩の話は二割くらい解りました」

「……ええ、それで？」

「その上で断言します。犯人はヤスでも私でも、ボブでもなく——」

「うんうん、ボブは犯人候補じゃなかったけどね」

「——犯人は東郷先輩ですっ!!」

「な、なんですって!?!……………いえ、樹ちゃん。私にはアリバイがあるわ!」

「あれれ？樹ちゃんが探偵側になってるね？」

「…犯人は東郷先輩であって、東郷先輩ではない。その意味——先輩でしたら、もうお解りですよね？」

「ま、まさか……!」

取り敢えず、樹は適当なことを言うことにした。元より妄想癖があり多少現実味のある話の欠片を得ただけで妄想を現実だと思いつむ悲しい先輩だ。樹が答えを言うまでもなく、なにかしら上手い感じに勘違いする事だろ。

「……では、私は唯斗先輩との鍛錬がありますので。失礼します!」

前回同様、樹は誰よりも早く女子会から脱出することに成功した。去り際に小さく唇を指でなぞり微笑む姿はどこか妖艶にも映り、姉である風はもう真実が解らなくなった。

「なー。シズク、亜耶……愛ってなんだろうーな」

ゴールドタワーの食堂にて、唯斗は小さく呟いた。もう慣れてしまった土居結女の格好は違和感もなく、敢えて言うのであれば長髪が邪魔な程度だ。

「あ？アイだア?……そりゃあお前、五十音の始まり二文字だろ」

「“あい”じゃなくて”愛”だよ。ベツタベタなボケかますなよ…」

「んじや、お猿さんだな。そーゆー歌あんだろ？」

「アイアイね、それ。アイがひとつ足りないから。…愛が足りないって何かアレだな…最近美森にも言われてるな…：…亜耶は分かるか？」

「ユイトくん、愛はとつても尊いものなんだよ？…すごく…：…えつと、とても…：…うん、ね…？」

「亜耶さん？」

「えつと、えつとね…：…こ、恋の次にあるモノ…：…かな？」

「でもさ、俺。イカの姿フライは愛してるけど恋はしてなかったぞ？」

「まあ、流石に菓子に恋する輩はいねえだろな…：…知らんけど」

いつかの東郷美森からの愛の告白に続き、犬吠埼樹からの接吻。ここまでされて鈍感で在り続ける事も彼女達に失礼であると考えたが、そも、東郷には既に言っているが。唯斗は天の神を退けるまで愛やら恋やらに身を委ねる気はない。

だがそれでも、重なる混乱を身の中で燻らせるのは限界だったのだ。人からの好意は嬉しいと同時に未知でもあり、困惑する。

唯斗は精霊ユイトの記憶を継承しているが、感情や人格までを得ている訳でもないのだ。故に、好かれているからと言って何をどうするべきかは解らない。

「ンなことより、ユイト。何か外の炎が弱くなってるらしいぞ。次は何やらかしたんだ？」

「俺がやらかした前提で話すのやめない？もしかしたら亜耶が超絶巫女POWERに目覚めて、自慢の筋肉を用いて天の神とタイマン張って半殺しにしてきたかもしれないだろ」

「えっ!?そ、そんなことやってないよ!?!」

「訂正しなくても分かっているっつーの。国土がンなことやってたら楠木が卒倒するわ」

ケタケタと笑いながら、然し唯斗には余裕がない。もう十五分もイカの姿フライを食べていないのも要因の一つだが、同程度には外の現

状が気になる。

四国の外は天の神の支配領域であり、バーテックスの襲来時に神樹が結界を貼るのと同じく、外の世界は天の神の性質を顕著に表した炎が結界として広がっている。

神樹と同性質な結界な為その下には何も燃えてなく、然し朽ちた世界があるのだ。

燃える炎は天の神の力に比例して激しく、最近では外での活動に合わせて造られた防人の装備すらも耐えられないほどの激しさを誇っていたのだが。

(……炎が弱く、か……)

良い方向で考えるのであれば、使徒である堕ちた勇者を討ったからだろう。神が用意した器に別世界の魂を入れたのが彼女達であり、その肉体は少なかれ天の神の一部を使用されている筈だ。

だが神が自信を削ってまで人間を滅ぼそうとするのも不可解なのだ。言わば、神の性質に関わる問題だ。天の神がその気になれば人類などどつくに滅んでいるのだ。

初代勇者の時代に複合バーテックが襲来していたら、人類は確実に滅んでいた。然し現状はそうなっていない。それが神の温情か、明確な手加減か、若しくは人類に試練を与えるという神の性質故なのか。

唯斗には解らないが、しかし堕ちた勇者を倒したとしても天の神が弱体化するというのは出来過ぎた話であり、容易く否定できた。

「んー、つまり……そろそろってコトかねえ」

「そろそろ？……ユイトくん、何か大変なことがあるの？困ってるなら相談してね……？」

「ほう……じゃあこの後直ぐにイカの姿フライの特売があるんだけどさ！一狩り行こーぜ!!」

「ハア……そんな事だろーとは思ってた。オレは別に良いけどよ、国土は？」

「はいっ、シズク先輩が行くのでしたら是非！」

炎が弱まり、勇者と天の神の決戦も近い。此方が着々と準備を進めている中、天の神もまた用意しているのだろう。己に楯突く矮小な存

在への手向けを。

(……………うん、後は山田くん次第だな)

結界内にいない其れを想い、複雑な感情を抱く。あの少女の形をただだけの一柱は何処で何をしているのか。大体の予想はつくが、神は人間の想定を大きく超える存在だ。

どんな悪巧みをしているのだろう。呆れにも近い感情を持って、イカの姿フライを二人の口に突っ込んで自らも頬張った。

神と精霊の『約束』

「あーかーさーたーなー」

赤い世界で、少女は欠伸を噛み殺しながら声を出す。声質には大凡”暇”の色が濃く映り、目端に見える雫は喉奥に押し込めた欠伸故なのだろう。

下を見れば地獄も生温く感じる紅蓮が全てを塗り替え、そんな中を何千何万もの、白袋に凶悪な菌莖を付けたよいな外見の獣——星屑が彷徨い続ける。

何十日も炎に包まれた世界を歩いていると、白い獣にもまた恐怖心より気味の悪さを感じてしまう。それらを嘲るように見ながら、やはり我慢出来ず欠伸を零す少女——否、少女の形をしただけの上位存在もまた人外だ。

「はーまーやーらーわー」

異常な世界にて、更に異様であるのは少女が歩いている場所だろう。焔に支配された侵略地よりも遙かに上、星屑も登らない空に掛けられた透明の道。

翼を生やす訳でもなく、満開をした勇者のように浮く訳でもなくて。少女以外は誰も触れられない道を機械的に淡々と歩むのみ。

「さーて、さてさてさーて♪あの子は無事に香川に着いたかな。死んでたらそれまでだった、って。そんだけではあるんだけどね」

近辺まで共に来ていた少女を想い、悪戯に笑う。この発言を件の少女が聞いたのであれば、ツツコミながら項垂れる事だろう。

少女の事は愛おしく思うが、然し其れは他の人類にも同様だ。人間の可能性を知るからこそ、更にその先を見たくなるのだ。最たる可能性がああ少年だった、と。それ故に寵愛する。資格を与え、一時は自らを武器として与え、今は別世界の彼の成れ果てである精霊との”約束”を果たしている。

「あ、おつとつとーあらら？」

唐突に後方から矢が放たれ、少女に襲い掛かる。だが少女は何気な

い日常の一コマであったように、明緑色の長髪を靡かせながらくると横に回り、危なげもなく避ける。

流し目で見ると、地上には星屑の進化体が輪状となり射手座の形を模している。あと倍程星屑が集まって御魂を与えられれば、射手座サシタリウスとなつていただろう。

天の神の支配領域にて異物が紛れているのだから、遠距離攻撃の手段を持つバーテックスも本能的に攻撃しても仕方がないのだろう。

「ごめんね、敵対する気はないんだよ？てか、天の神に見つかりたくないし」

虚空にくるくると指を回し、それを進化体に向けた刹那。一瞬だけ進化体は硬直して、だが次の瞬間には少女の存在など忘れてしまったかのように別方法へ進みながら星屑を集めだす。

もし少女が進化体に敵愾心を持ち、白き獣共を滅してしまえば赤い世界に存在する全てが少女に襲い掛かるだろう。星屑や進化体、御魂持ち——そして天の神までもが。

攻撃を加えればそうなるのだが、ほんの少しだけ小細工をする程度であれば力も露見しない。

「さーて、ホントーに急がないとね。北海道の次は長野、そんでもって沖繩かあ。いやー、徒歩つてのも疲れるねえ。下手に力を使うのもアレだし…面倒臭いけど唯斗の為だし。たまにはちゃんと頑張るぞいっと」

空を見上げ、不可視の蠢く鏡を見据える。後どれくらいの時間が残されているのか。始まりは神婚の儀で、それを阻止する為に天の神は降臨する手筈だ。

行われる神婚は神を引き摺り出す為のフェイクだが、然し勇者が負けそうになった際は本当に儀式が行われることだろう。そうなってしまうえば、少女——山田くんと名付けられた存在はきつと、酷く落胆する。

山田くんは人類の可能性を尊く想い、矮小で、それなのに神の思惑すら振り切つて救いを成す姿が大好きなのだ。

神婚の儀を経て神樹の眷属になつてしまえば、もう抗うべき困難も

なくなり、墮ちるしかない。それは酷く詰まらないのだろう。

だからこそ、矮小な存在でありながら異質な精霊にもなり得る可能性を秘めた少年に手を貸し、寵愛し続けるのだ。

「あつ」

山田くんは小さく言葉を零す。遠い空を越えて、空間すらも越えて。天の神の内部に隠された空間をじっと見詰め、呆れを孕む溜息を吐く。

「——うーん、あーね？うんうん：そっかー。唯斗、神婚前にも一波乱あるよ。悪辣だなあ。でも倫理観つてのも人類が勝手に生み出しただけの思想だし、そーゆーの神には関係ないんだよね〜」

讃州中学の制服を靡かせながらくると回り、クスクスと笑う。赤く染まる頬は想い焦がれる様に、そして爛々と光る瞳には人外足り得る莫大な狂気が浮かび滲む。

神気に反応した星屑が空を登り少女に凶悪な歯を向けるが、指先を向けた途端に固まり、紅蓮に落ちる。

「さあ、また魅せてね？キミの軌跡を——」

一人で眩き、山田くんはまた歩き始めた。次は長野で、その次は沖縄。時間感覚に疎い少女はまた空を見上げて、少しだけ足を早めた。

「ごめんくださいーい」

玄関チャイムを押し、一人の少女が郡家に訪れていた。玄関チャイムは相変わらずファ○リーマー○の来店メロディであり、何処か懐かしさがあつた。

手癖で眼鏡を弄りながら辺りを見渡す。今、少女の記憶の大部分は欠けている。正確には神樹の中で過ごした時間のみが欠けており、山田くんより唯斗に関する記憶は返されているが、あまり詰め込みすぎでの脳が耐えられないとも説明されている。

含みのある言い方だったので、あの人外の言葉が正しいか否かは判断に困るのだが、少なくとも損をする結果にはならないだろうと確信はあつた。

「……………うん？」

三十秒が経ち、留守を疑った刹那――

「ふあい、おひふあはま…?」

「……寝起きっぽいのは分かるけどさ、どうしてイカの姿フライを頬張っているのかなー」

イカの姿フライを加えたジャージ姿の唯斗が玄関を空ける。寝不足なのか頭が回っていない様子だったが、少女と目が合った瞬間、半目が見開かれる。

再会はいつだって唐突だった。園子や銀然し、目の前の少女然り。

「っ……どーも、お久しぶり」

「どーも、時を超えて感動の再会だね。イカの姿フライが大好きな精霊さんからの贈り物少女だよ、なんちゃって」

「ああ、ちゃんと識ってるぞ。そこら辺については継承してるし事情も把握してる。待ってたぜ、雪花」

「お待たせ、唯斗」

神樹の中と同じ制服に身を包み、朗らかな微笑みを浮かべる雪花。目の端に浮かぶ涙は再会故の安堵なのか。

唯斗も大凡の事情は理解しているつもりだが、西暦以降の時代から今に至るまでは山田くん任せていた。だからこそ情報の差異は確実に生じており、それを無視することは出来ない。

嘗て神樹内の世界で、勇者達は神世紀に至るまでの仲間の死を酷く悼んだ。乃木若葉や上里ひなた等は後世に名と子孫を残しているのだが、それでも死が確定していた勇者もいる。

四国にいる者ならば覆せる運命だったが、北海道や沖縄県、長野県にて孤軍奮闘を余儀なくされていた勇者の生存は絶望的だ。

天の神が結界を顕現さるまで生き延びていたのであれば、樹海化時における現実世界と同様に止まった時の中で封印に近い凍結される。だがやはり、生き延びるのは絶望的であるのは間違いない事実だ。故に、一つの作戦を立てた。

端的に言えば、各地の勇者が敗れる前に簡易的な樹海を顕現させるというものだった。樹海は神樹が生きていく限りは維持出来る。そ

の権能を模範し、山田くんが力を注いだ精霊ユイトが核となり、指定地を中心にそれぞれ小規模の結界を発生させたのだ。

悠久を生きる精霊が己に明確な寿命を定め、その縛りで結界の維持のみに力を注ぐ。

精霊ユイトの簡易結界は全部で四つであり、一つは秋原雪花のいた北海道、二つ目は長野県の諏訪で三つ目が沖縄だ。

そして最後の結界は郡唯斗や結城友奈が使用していた鍛錬場の奥——精霊ユイトの残火が鎮座していた地点だ。西暦から神世紀まで生存するには神樹と同様に動かず留まるのが一番だった。

精霊ユイトが力尽きた今となって、結界は完全に消えてしまったが力と技は継承されている。そして結界がなくとも、山田くんならば彼女達を結界の下から解放する事が可能だ。

「んー、取り敢えず家に上がる?」

「そだね。お邪魔していい?」ってか、そもそも家なし権兵衛だからね。暫く泊めてくれない?」

「ええ…また居候増えるのか。つってもなあ、俺以外の記憶つてないんだろ?」だったらパイセン家とかに放り込む事もアレだしな…」

「わーお、ホントに把握してるんだね。なんかキモー」

「もーボクちゃん泣いちゃうぞー!」

「にやはは、冗談冗談。半分は冗談だつて♪」

「えっ、せつちゃん?もう半分は?」ねえねえ、雪花さん?半分つてどれくらい半分なの?」郡くんが盛大に泣き出す前に明確な数値とソースとイカの姿フライを用意しやがれやコンニャロオ!!」

「そーゆートコなんだよなあ」

みつともなく泣き喚く唯斗を引き摺り、雪花は家の中に入って行った。

リビングに着いてから早々、雪花は小さく声を漏らした。本当に今更なのだが、彼女は荷物も何もない状態なのだ。趣味物はどうでも良いのだが、着替えだけはどうにもならない。

外出用は今も着用している制服で良いのだが、家の中での服や下着類は使用中のものを続けて使う訳にもいかず。

今は入院している園子の物を勝手に使うのも気が引けるし、そもそもサイズが合わないのだ。

「唯斗パイセンや、重大な問題が発生したっす」

「なんすか、雪花パイセン」

「服が無いです。てか今着てる物以外何もありません。乙女的大ピンチですってワケよ」

「……………あらま。そっか、そうだよな…神樹の中に召喚されたときは大赦のサポートがあったけど、今は身元不明な野生勇者だし」

「って事で、お金貸して♡家の中で着る服は唯斗のを勝手に使うとして、下着までそーするのは女の子としてちよいアウトなモンで」

「服は俺のを使うのかよ……………別に良いけど。じゃあシヨツピングモールにでも行くか。同居人が増えるならテキトーな家具とか買つとかないとしたし」

現在、唯斗の懐はかなり暖かい。

お年玉が各方面からかなりの金額を貰えたのだ。母方の土居家と父方の郡家、園子の両親からも娘が世話になつていからと軽く引く金額を貰い、三好春信からも善意で妹の写真を掲げて奪い取った沢山頂いた。

それぞれが金に糸目をつけない名家であり、羽振りが良い。唯斗も貰えるものは貰っておく主義なので遠慮なく貰い受けた結果、軽く六桁円はいった。

中学生には過剰だが、此方も命を懸けて戦っているのだから文句は言わせない所存だった。

尚、園子のお年玉総額には流石に敵わない。

「うっへえ…コネ持ち名家はお金持ちだね。どうしよう、媚び売つく?」

「本人に聞いている時点で媚びる気ゼロやん」

「あつたりまえじゃん。唯斗が相手なら媚びるよりも脅して奪い取るっての」

「こっわ…」

「まー、これも冗談ね?」

「その眼鏡油性マジックで塗り潰すぞ?」

「鬼かな？」

軽口を叩き合いながら雪花に上着を投げ、自分も外出の準備を進める。外は雪が降っているので制服だけの雪花は寒いだろう。

唯斗もイカの姿フライがある限りは引きこもって怠惰的に過ごすつもりだったのだが、長旅を経た仲間を適当に放置するほど無情でもない。

面倒臭くて銀行口座に入れていなかったお札を財布に突っ込み、トートバッグに乱雑に入れた。

「上着サンキューね」

「おう、感謝シタマエ」

「はいはい。礼は相応の戦果で返しますよーだ」

「頼もしい限りだよ。じゃあ行くか——イカの姿フライを買いに!!」

「違うから。私の生活用品を買いに行くんだからね」

「えっ？イカの姿フライは生活用品だぞ？やだなく、雪花さんったらそんな事も忘れちゃったのか？」

「それ唯斗の妄想でしょ！一般的にイカの姿フライはごく稀に食べる程度の魚介加工品だから」

「あ？なんだア…：テメエ。さては非国民だな」

「判断基準がイカの姿フライってヤバくない？」

唯斗にとっては日本国民は毎食欠かさずイカの姿フライを食べていて、それこそが由緒正しき”和”の在り方なのだ。無論、狂人の戯言でしかない。

爛々とした瞳で狂言を振り撒く馬鹿の頭を雪花はペシりと叩き、テーブルに積んであったイカの姿フライを振じ込んでから引き摺って玄関に向かった。

久々な会話の筈なのに、何の違和感もなく行われる軽口がどうしようもなく嬉しくて、少女の頬は綻ぶ。まだ何も解らないが、それでも信頼出来る仲間が傍にいる。自身を疑い深いと卑下する少女だが、記憶も感情も彼に親しみを覚えている。

そんな感情に浸りたい。たったそれだけで、だが少女にとっては何処か自分らしくない振る舞いに笑いが零れた。

願わくば、この感情に後悔しない自分で在りたい。この先、何が
あっても。

逢引的なアレ

「唯斗君、由々しき事態です」

自室でそう呟いた美森は、簀巻きにされた俺を見下しながら真面目な表情だった。イカの姿フライを餌にした罟を仕掛けるだなんて、流石は秀才だ。退院してから最初にすることがコレなのだから間違いない。なく変人だ。

今すぐ逃げたいけど、爛々とした瞳の美森が怖い。このまま逃げたらヤバイ事になりそうな気がして、賢者ともあろう俺がバーテックス以上に目の前の変人を恐れていた。

身代わりの術で分身と入れ替わりたいが、何故か樹や美森は分身と本体を見抜いてくる。とても怖いです。誰か助けて……

「ええ、とつても由々しき事態よ」

「……………そつかー。そうだね、縄解いて?」

「私の脳があばばばばってなってます。乙女の純情を御家芸みたいにぐちゃぐちゃにするのは最低な行為だよ?だから……………せ、責任取ってくれる…?」

「とつても嫌だ。てか縄解け」

「ふふっ、じゃあ逢引の約束を交わしましょう。明日、待ち合わせ場所は——」

「何がじゃあ逢引だよ。お前を合挽き肉にしてやろうか?…つーか縄解きやがれ」

「わ、私達だけの秘密だよ…?私だって乙女なんだから、その…みんなに知られるのは恥ずかしいし…っ」

「もうやだあ…助けてイツえもくん!縄解いて〜!!」

「あら、唯斗君ったら泣いちゃって。そんなに明日が楽しみなの?ええ、私も楽しみよ。これで明日、唯斗君が来なかったら…ね?どうなっっちゃうんだろうね?」

「誰だ…誰がこんな化け物を生み出したんだ!?クソッ!ヤベー奴と同じ部屋になんか居られるか!!俺は帰らせてもらおうぞ!!」

「あ、こんなところに元祖ぐんちゃん印のイカの姿フライが——」
「チツ、あと三時間だけ付き合ってやる。だから今すぐそのイカの姿フライを寄越すんだ!」
等のやり取りがあり、俺は美森に愛を囁かれて楽しい逢引をする事になった。

——翌日。

「唯斗君、お待たせ!」

「あ、美森……………さん?」

デート(仮)当日、待ち合わせ場所に現れた美森を見て俺は言葉を失った。何故か紋付袴の阿呆がそこには居た。人通りのある駅前だったので悪い意味で視線を集めている現状。とても帰りたくなつた。

「なんで紋付袴?」

「気合いを入れようと思ひまして」

「そつかり、じゃあ最初は服屋に行こうな?そのクツソ重いヤツは駅のロッカーにでも仕舞つとけ」

「えっ!?な、なんで!」

「テメエの胸にでも聞いとけ!」

俺達のデート(仮)は美森の首元を引き摺ってアパレルショップに行くところから始まった。

アパレルショップに着いたから早々、集まる注目に辟易とする。こんな変人を連れてきているんだから、俺の常識人度もほんの少しだけ下がってしまったそうだ。

下がった常識人度をイカの姿フライで補充しながら店内をぶらつき、白いカーテンの掛かった狭い個室の羅列——所謂試着室を見付ける。

「美森さんや、暫くそこに入つてて?」

「それは…唯斗君の好きな服を見繕ってくれるってことかしら?」

「……………お前、まさかこれが目的だった…?」

「…ふふつ、恋する乙女はいつだって必死なのよ?どうぞ、私を唯斗君

色に染めてちょうだい」

「ビキニアーマーで外に放り出してやろうか…ッ」

戯言をほざく美森を試着室にぶち込み、店内を物色する。ファツシヨンについては雪花に聞きたいところだが、家で園子と留守番をしている。

…どっちも喧嘩するような性格ではないけど、二人とも神樹の中の記憶がないから殆ど初対面みたいなモノだ。特に雪花は初対面の人間を信用しない節があるから心配だけど…まあ、相手が園子なら心配も杞憂に終わる。

家に残して来た二人の事は今だけは忘れて、俺も取り敢えずはアイツなりの誠意に向き合おう。美森はやり方はアレだけど、自分の気持ちに嘘をつけないだけの不器用な女の子なのだから。

「…と言ってもな。服か…」

今の俺は後ろに猫のイラストが付いたオーバーサイズの白いトレーナーに、ゆとりのある黒ズボンだ。ペアルックは論外として、系統は合わせたい。

てか、俺が好き勝手に選んだら大体が同じ系統になってしまう。ピツシリとした雄々しい服は柄じゃないし、敢えて女性物を着る趣味もない…防人をやつてるときの女装は置いといて。

と、なれば結局のところ。自分の外見に合わせてのモノでもあるけど、中性的なファツシヨンが好みであるとも言える。

そもそも、着る人が美森だったらどんな服でも似合うのだろうけども。外見だけは完璧な大和撫子だ。紋付袴みたいな目立つヤツだったり過剰な露出をしない限りはなんでも良い。

取り敢えず、無地のフード付きブラウンパーカーと紺のサルエルパンツ、後は…この季節に草履は寒いと思うから灰色のハイテクシューズを選ぶ。

サイズが合うかは分からないが、元よりオーバーサイズの服を選んでいるので大きな問題もないだろう。一度試着室に持って行き、試着してもらってから会計を済ませる。

レジでタグを切ってもらって、一応美森が脱いだ後の和装を入れる

用の袋も貰う。それからまた試着室に戻り、着替えさせた。

「……あまり、馴染みのない服ね。特にさるえる……？は初めてだわ」
「普段着も友奈が選んだやつだしな」

着替えた美森は不思議そうに自分の服を見下ろしている。少し地味な服かなと思ったが美森なら普通に似合っていた。変な芋っぽさも無いし、こればかりは外見の優れた人間の特権だ。

ずっと車椅子だったから印象も薄いけど、美森は女子にしては身長も高い。本当に、見た目だけなら完璧な美少女なんだけどなあ……

「ど、どうかな……？似合ってる？」

「似合ってるぞ。てかお前なら何着ても美人だし……ん？なんか痩せたか……？」

「あつ、えつと……そ、その……胸が大きいと服によっては太って見えちゃうから……ちようど和装だったので、晒さらしを巻いてるの」

「あ……ごめん、配慮足りてなかったな」

「ううん、大丈夫」

態々言葉にするのもかなりの失礼だったが、服を選ぶときも男と女の基準を考慮していなかった。黙って店員に聞くのが一番だったらしい。

こればかり猛省しなければいけない。普段の友人ではなく、一応でもデートとしてこの場にいるんだ。相手を気遣えなくて何が男だ。……いや、まあ。紋付袴で来るのもかなりヤベエけど。

「唯斗君、本当に大丈夫だよ？それに……唯斗君が女性物の服とか選び方に詳しくかったら尋も——もとい、事情聴取をする必要があるから」
「尋問を事情聴取に言い換えてもそこまで意味変わらないぞ……あー、アレだ。男としての反省っていうか……今後気を付けようってコトで」

「今後？ふふつ、もう次の逢い引きについて考えるだなんて」

「誰も美森が相手とは言っていないが？」

「はい？唯斗君、今何か言ったかしら？」

「ひえつ……な、何でも御座いませんですます」

「もうつ、唯斗君は本当に唯斗君なんだから！」

「おいコラ、いま”唯斗君”をどういう意味で扱いやがった？事と場合によつては全力で泣き喚くぞ」

「あつ、そろそろ映画の時間だね。唯斗君、ちよつとだけ走ろつか♪」
「ちよつと、待っ……！」

呆気に取られる俺の手を絡め取り、美森は満面の笑みで走り出す。昔から勇者の使命や国防の責務によつて大人ぶっていた東郷美森が見せる、年相応の笑顔。

多分、一瞬だけ見惚れていた。俺は俺が思っている以上に美森を好意的に思っているのだろう。ほんの少し……自分でも見逃してしまいうような、刹那に芽生えた気持ちは単なる友情ではない。

……ホント、国防精神と奇行がなければ確実に惚れてた。コイツのヤベー部分を惚れた弱みとして許すのも、今はまだ無理らしい。

「はあ、はあ……」

「おい、落ち着けて。まだ体力ついてねえんだから」

「暫く歩けなかった弊害、ね……もう少し脚に筋肉を付けないと」

走り出してから早々、肩で息をする美森。二年間全く動かしてなく、それがいきなり完治したのだ。数ヶ月が経っても昔に比べて筋肉は格段に落ちているし、それが原因で体力も消耗しやすい。

どんなに機能が戻っても各々に多少の弊害は残っているのだ。どんなに些細なものでも。

「しゃーない。ほら、背負ってやるよ」

「えっ、いや……流石にそこまでじゃないよ……？普通に歩けるし、足が悪いわけでもないから……」

「でも映画に間に合わないだろ？どっかの誰かさんが紋付袴で来るから予定狂ったし」

「うぐっ……！」

「ほら、早よ乗れ」

「……お、お願いします。よいしょつと……重くない？わ、わわっ！ま、待って唯斗君……これ意外と怖——きやあああああッッ!？」

「よっしや全力疾走や!!」

別に、気を使ったわけじゃない。美森が気を使われるのを良く思わないのも知っているし、今更そんなんで何か思う様な関係でもない。敢えて言うなら意趣返しだ。無理やりデートに誘って、振り回してくれた御礼というやつだ。

叫ぶ美森だが、声質に何処か歓喜や照れが混じっている。きっと周りからはバカツプルにでも見えているのだろう。

でも構わない。俺らの関係は俺らだけが知っていれば良いし、他人の目なんて気にしてたらキリがない。俺も美森の叫びに負けないくらい声を上げて笑い、映画館に向かった。

離れた場所から唯斗と東郷を覗き見ていた二人は静かに物陰から出る。

乃木園子と秋原雪花だ。独特なカツラと付け髭で変装しているが、意外にも周りからの視線はない。その分の注目が唯斗達に集まっているのだろう。

尾行していた園子と雪花だが、二人の様子を見て安心したのか、カツラを外して小さく笑った。

「うん、サポートしなくても大丈夫そうだね。良かった良かった」

「…うへえ、イチャイチャしてるな。園子、アレ放っておいていいの？園子だって唯斗のコト…」

「うーん…私だってゆーちゃんが好きだけど、でも邪魔はしたくないし、同じくらいわっしーの事も好きなんよ。だから間違っても嫌がらせなんか出来ないかな」

好きだから、その人の幸せを願う。邪魔は論外として、雲行きが怪しければ陰ながらのサポートだってするつもりだった。

だが思ったよりも二人の関係は良好で、余計な手出しは不要だったらしい。その事に安堵こそすれども僻みなんてしない。

「難儀なモンだね」

「あつ、でもでも。私だつてわっしーに譲る気はないからね。同棲している私が一歩リードしているから、そのヨユーなのだ〜！」

「さいですか？まー、同棲してるのは私もただけだね。フツフツフー、もしかしたら唯斗が私に惚れちゃう可能性もあるよ？」

「罪な男の子なゆーちゃんだね〜」

「……いやいや、流石に冗談だからね？別に私と唯斗ってそーゆー関係じゃないし。あーあ、やっぱツツコミ役って大事なんだなーって思う今日この頃」

「いっそ、みんなで幸せになるつてもアリなのかもね。壁の外を解放して、みんなで新天地を目指そー！的なの？」

巫山戯た妄想に聞こえるが、勇者として世界を救った英雄となればその望みも叶うのだろう。無論、園子とて皆の気持ちを無視するつもりもないが。

そんな可能性——だれも不幸にならない未来。それがあのかもしれない、と。幼い心でそう妄想してみた。

「独り占めしたいとは思わないの？」

「思うよ？でも現実でみーんな幸せなハッピーエンドって、そーゆーコトだよ。だから叶わないし、そんな未来は有り得たとしても簡単には実現出来ないよ」

「ホント、難儀だね。たとえ園子が唯斗と結婚したとしても、それを妬んでどうこうする感じの仲間ではないんでしょ？なら、遠慮とか気遣いとかも要らないんじゃない？」

「だからこそ、私の心は我儘なんだよね。全部納得して、全員が幸せに。えへへ、そんな物語が好きな女の子だからね、私は」

「は、ハハツ…随分と難しい性格のお姫様だね。いや…難しいってよりも面倒くさい？」

「うんうん、面倒くさいよね。乙女心は秋の空なんよ、アツキー」
「にやはは、こちとら恋したコトもないもんでねー？」

——いつの間にか唯斗と東郷の背中は見えなくなっていた。

園子達もまた小さくクシヤミをして、笑い合いながら家に帰ることにした。家には唯斗の作り置きの日御飯がある筈だ。

まだ暖かいポケットカイロを両手で揉みながら帰路に着いた。

懐古の既視感

「せつちゃん、自己紹介しやがれ」

「えへっ、秋原雪花だお！ピンクル星からびゆるるうーんって飛んできたんだお♡よろぴく仲良くびゆるるんぽ♪」

「は？キモっ…」

「ハッハー、唯斗ったら言ってくれるじゃん。ところで家からバリカんと剃刀を持ってきたんだけどさ」

「おいパイセン！雪花の勇気と独創性溢れるクソ自己紹介をクソ馬鹿にするんじゃないぞ!!ぶち殺すぞ!？」

「クソ唯斗にクソ巻き込まれた件について。内臓抉って外にバラ撒くわよ？てかぶち殺す」

秋原雪花が香川に到着してから一週間が経った頃。勇者部の面々も傷を完治させて、特に重症だった銀と夏凜を最後に皆が退院した。

久々に部室に集まり、やはり最初にやるべき事は雪花の紹介だろう。勇者として天の神と戦うのはあの世界から決まっており、記憶がなくとも彼女の根本には染み付いていた。

ならば当然、協力関係を結ぶには一定以上の信頼は必須。一方的な信頼はいつか崩壊する、故に雪花は勇者部に入るのが手っ取り早いと唯斗は考えた次第だ。そも、記憶はないが神樹の中の世界では勇者部の部員だったのだが。

彼女の立場については唯斗が軽く説明したが、誰もが言葉のままを受け入れて完全に理解したとは言いがたい。半数は首を傾げ、その中でも銀には混乱が顕著に表れている。

「うーん……む？むむ？……つまりどゆこと？雪花は勇者で、でも西暦の時代の勇者で……タイムスリップか？」

「うんにゃ、どっちかと言えば冷凍保存とか封印に近いカンジ？あはは、私にも分かんないや。そのへんどーなのよ、唯斗」

「アレだよ、簡単に言えば外の世界の火に埋まっちゃいましたってコト。炎よりもずっと下にいたから燃えてないし、地獄っぽい見た目でも神

の顕現させた支配領域だから時間も止まっておりますと。そつからポーンと出てきたのが雪花やね」

「どーも、古代の産物でーす」

「重要な情報の筈なのに当事者も理解者も軽い……！何か、こう……世紀の大発見とか人類生存の鍵になることですよ!？」

「ニンボは真面目だなー」

「誰がニンボよー！」

重要な情報ではあるが、必須情報ではない。その理由も至極単純であり、空間の固定や時間の超越は神の技術なのだ。人間が行使して良い力ではないし、そもそも実現も不可能。

原理は理解出来ても再現する術がないのだから、学者気質でもない唯斗達にとっては特段、拾い上げて吟味するような情報でもなかっただけの話だ。

無論、それで増援が増える可能性については園子が思考するが、外の世界での人類の生存は絶望的であると結論が出ている為、雪花がイレギュラーであると捉えるのが無難だった。

「あの、質問しても？」

「はいよ、峠森とうげもり気盛りさん……だっけ？」

「東郷美森です。……秋原さんの勇者システムについてなんです、その……西暦と現代ではかなりの性能差があるのでは？」

「あ、その辺は大丈夫だよ。コレ見て」

「……」

雪花が制服ポケットから取り出した端末を見て、東郷と園子、銀が目を見開く。何の変哲もないスマートフォンだが、画面から背面にかけて、かなりの罅が刻まれている。

まるで雑に扱って、何度も落としたり棒状の何かで叩いたりしたよるか破損具合。それを、先代勇者組は見覚えがあった。二年前、同じ型の端末を園子達も使っていた。今はシステムのアップデートに伴って端末も最新機種に変わっているが、死闘を繰り広げた当時の命綱だった端末を忘れるわけがない。

そのボロボロの携帯端末は——二年前に郡唯斗が使用していた物

だった。

「わっ、すごくボロボロだね。落としちゃったのかな?」

「友奈さん…流石に落としただけではこうなりませんよ…:…何でしょう、直接攻撃された感じの割れ方ですね」

「そりゃあそうだろう。実際盾代わりにしてたんだし」

「えっ?」

昔をしみじみと思い出す。父親との鍛錬で、勇者システムがインストールされたスマホを盾にしたら若干だが攻撃が和らぐのだ。

父親は粗雑な性格の男だが、流石に勇者の端末を破壊するのは立場的にも不味かったのだろう。精霊システムのない当時では最初の一撃でスマホを吹き飛ばし、そこから地獄の鍛錬に繋がっていた。全面にわたるヒビ割れはその際に弾かれたのが直接的な原因だ。

あとは日常生活において唯斗が高頻度で落として歩いてきたからだ。

「…なあ、雪花。それって何処で…」

「三ノ輪銀さん、アナタなら分かるでしょう?都合良く与えてくれる唯斗好きなカミサマってのを」

「やっぱりかあ…まー、そうだよな。多分、好意的な笑顔を浮かべているのを目だけは全くもって笑ってないカミサマなんだろうーな」

「うんうん、態度に視線から仕草まで『えへっ、今からお前達を利用し尽くすぞー♡』って物語ってるカミサマだよ」

「何よその怖い神様…」

慄く風とは対照的に銀と雪花は呆れを孕む笑みを浮かべている。共通認識上の”神様”はきつと、善神ではないのだろう。神樹の総合意識ほど人類への慈悲もなく、天の神のように己至上主義でもない。

神に類する者でありながら俗物的に振る舞い、気に入った人物に肩入れをする。興味のままに動き、誰よりも”面白い”人物を寵愛する。神の在り方なんて人間の数よりも自由で奔放的なのだから、結局のところあの神様の気紛れに巻き込まれただけであると二人は受け入れている。

別に利用されていても良い。あちらが利用するのであれば、こちら

も利用するのみ。力を与えられた少女達と力を与えた側の存在では、信頼関係なんて最初から無いに等しい。

人間の可能性を見て、無責任に託した神。神力の利便性を知り、与えられるがまま仲間の為に振るう少女達。何処までも利害の一致でのみ繋がっているのだろう。

「…つまり、雪花さんの武器って昔の唯斗先輩が使ってた物と同じって事ですか？なんか斬撃を飛ばせる”ひのきのぼう”みたいな…」

「違うよ？同じ端末だってだけでね、勇者システムの中身…ってか力の供給源？的なのが違うし、そもそも勇者システムって使用者に融通を利かせてくれるんだって。だから私のシステムは私が使い易い武器だよ。まー、それだけってワケでもないけどさ」

「使用者に使い易い武器、ね…でも私の時は双刀を使う前提で候補生が競い合ってたんだけど？銀の端末を継ぐ完成型勇者のね」

「あつ、にぼっしーの場合は例外なのかもねー。にぼっしーが使ってるのはミノさんの勇者システムをアップデートしたモノで、システムに蓄積された戦闘データから適した武器が双刀だったんだね、多分」
銀が勇者として活動出来なくなり、然しその戦闘データを捨て置くのは大赦も認められなかったのだ。故にシステムを使用者に合わせるのではなく、システムに適合出来る人物を探した。

それこそが完成型勇者を自称する三好夏凜であり、嘗ては三ノ輪銀の物であった其れも今となっては彼女専用の携帯端末として最適化されていた。

「私の弓が銃に変更されたのも、きっと同じ理由ね。勇者の力そのものが次形態に移行した、と。考えてみれば、そのうちの槍も形態が変化しているものね。最適化されたのかしら？」

「じゃあ唯斗の木枝は…って、アレか。そもそも端末と勇者システムごと別物になってたからだな」

「む、難しいお話だ…！」

「ならば簡単に言っちゃろう、友奈さんや、勇者が経験値を稼ぐと武器が強化されます。俺とか雪花の場合は端末と使用者が変わったから、まー…ジョブチェンジ転職したってコトだよ。ねっ、ゴリラ先輩にも分かりや

すいッスよね?」

「ウホッ!分かりやすいでウホッ!!……って誰がゴリラ先輩だ!このイカの姿フライ狂人め!!」

「え、えへへ……そんな褒められましても……」

「褒めてないっての。むしろ世界で一番バカにしてるっての」

無論、武器が強化されるだけでもない。満開を経験した勇者には新たな武装や能力が追加される。勇者にとって最も早く力を得るには満開をする必要がある、それを実施していたのが二年前から数ヶ月前までの期間だ。

尚、そのシステムも今となっては変更されてしまったのだが。満開による武装追加は神樹にも負担が掛かると結果が出ており、寿命が迫る現状では満開こそ可能であるが追加の武装はない。

「まあまあ、勇者さん達や。今は小難しい話は置いときましょーよ。その辺は詳しくなくても問題はないしさ」

「私も賛成!それよりもせっちゃんへの質問タイムを続けようよ!!」

「ありや?いつの間にか質問タイムになった。良いよ良いよ、眼鏡の度数から手足の指の数までなら、何でも答えましょッス」

「何でもじゃないし誰に興味も唆られない事ね……」

「えっ、部長さんは人の指の数を聞くのが趣味だって唯斗と園子から聞いてたのに……」

「馬鹿斗と阿呆子、そこに正座しなさい」

「二だが断る!!」

風は近くに座っていた唯斗を全力でシバいた。そして唯斗は煙になつて消え、天井からもう一人の唯斗が降ってきた。それを捕まえてジャパニーズオーシャンサイクロンスープレックスで殺しにかかる風だったが、また分身特有の煙を立てて消える始末。

結局、そのやり取りを五回ほどやった後に風はイカの姿フライを人質にして唯斗の本体を捕獲し、五回ほど頭を殴った。

「じゃあ質問です!」

「どーぞ、樹ちゃん」

「雪花さんって何処に住んでますか?外の世界の……えっと、北海

道……でしたっけ。そこから香川まで来たんでしたら家もないと思いまして」

「雪花は園子と同棲してるヨ」

「アツキーはゆーちゃんと同棲してるんヨ」

「私は変人共と同棲してるらしいよ?」

「……まあ、妥当ね」

「えっ……と、東郷……? 嘘……あ、アンタ怒らないの!?! ブチ切れて雪花の骨という骨全てを五寸釘で打ち砕きながら高笑いするんじゃないの!?!」

「っすー、ふう……ふふっ、夏凜ちゃんったらお茶目さんなんだから。あ、そうだ。今日は私の家にお泊まりに来ない? 私、夏凜ちゃんとなつぷりお話をしたいの。ねっ?」

「ヒイツ……い、いや……今のは唯斗が言えっ……」

「今回だけは何も言っていないんだが?」

「あっ、今回だけなんですわ……」

怯える夏凜の口に三枚のイカの姿フライを振じ込み、唯斗はぴえんぴえんと鳴いた。

勇者部の仲間が仲間の足を引っ張り蹴落とし合う愛情行為を眺め、雪花は薄く笑った。果たして、自分には遠慮なく接して笑い合える仲間がいたのだろうか。

何となくだが異世界で戦っていた頃の記憶はある。山田くんに戦闘に関する記憶を返され、その中に見知らぬ極彩色の樹海での戦闘記憶があった。

目の前の少女達は、きつと異世界で得た大切な仲間なのだろう。こうして話し、接して、笑い合えば謎の納得感が心に溢れる。

雪花の掲げる当面の目標は、神樹内での記憶を思い出すことだ。方法は思い付かず、明確な指針も判らない。それでも、きつと自分達はあの世界で同じように足掻いた筈だ。

自分の思考は自分で分かる。過去と未来が融合していた世界で、疑り深い自分が記憶の持ち帰りに関して何も考えていない訳がないのだ。

その結果も今となつては解らず、もしかすれば未来の自分に向けて種まきをした可能性だつてある。忘却を認めて、それでも希望に縋る。

何故か、そうしたいと雪花の心臓が叫んでいるのだ。

(……………何かが、変わったのかな…私なんかでも)

雪の降り積もり寒い記憶の中で、どうして自分は自分が生き残る為だけに掘っていた洞穴に人々を避難させ、ずっと貯めていた食料や物資を分け与えていたのか。

その理由が少しだけ分かった。目の前の彼女達に感化され、記憶はなくても魂に刻み込まれたのだ。勇者の在り方と、貫くべき意志を。だから、雪花はハッピーエンドを目指す。

大切な仲間との記憶を思い出す。そして、世界を平和にして故郷の人々も救う。その最後に雪花は胸を張り、大声で宣言するのだ。

——秋原雪花は勇者である、と。

密かに固まる決心に心を満たされ、だが浮かぶ笑みを今だけは彼らのせいにする。最っ高の笑顔を浮かべて勝ち誇るのは、目標を達成したときだ。

なので雪花の浮かべる笑みは掲げた目標に対する満足ではなく、まずは喧しくも優しい仲間達との再会だ。再会を心の底から喜び、また日常を再開する為に。

まずは、勇者としての責務を果たそう。自らの決意に報いる為に。雪花は決意の籠る拳を握り、勇者部の仲間との会話に混ざる。懐古に浸り、未来を得る為に。

ifルート〜正義の勇者〜

鷺尾さんが死んだ。

私たちの初陣で：水瓶座の水檻に捕らわれて、溺死した。ミノさんの斧は水の膜に弾かれたし、私の槍は逆に貫通して鷺尾さんの肌を傷付けて水檻を赤く染めた。

ゆうちゃんだったらどうか出来たかもしれないけど、単体で水瓶座の本体を足止め出来たのはゆうちゃんだけだった。

すごく：辛かった。鷺尾さんが動かなくなってから暫くして、ゆうちゃんが単体で水瓶座を倒した。私とミノさんは蹲り、酷く動揺して慟哭する事しか出来なかったのに。

彼女の死を悼む私に、大赦の神官は鷺尾須美は正義の礎になったと言った。意義のある死であり、それを次に繋げるのが勇者の掲げるべき正義であると語った。

だから、私たちは正義を実行した。仲間死を顧みない作戦で、身体を欠損させながらもバーテックスを倒し続けた。それが正義だから。鷺尾さんの……仲間の死を正しい事であるの肯定して受け入れなければ、私もミノさんも壊れてしまうから。

でも、ゆうちゃんは平気そうだった。

相変わらず無口無表情で、でも心做しか前よりも喋らなくなった。……そう言えば、ゆうちゃんの声ってどんなだったっけ。初陣以降は戦闘中に豹変することもないし、まるで人形のようにだ。

ミノさんは無理にでも私たちの輪を取り持って結束を深めようとして、きつと私もミノさんに依存していた。

心のどこかで解っていたんだと思う。私もゆうちゃんも、ミノさんがいなくなったら耐えられなかった。鷺尾さんが死んで、天秤座と戦ってゆうちゃんが右腕を失って、山羊座との戦闘で私は左目を、ミノさんは右半身に重症を受けて痺れと傷跡という障害を刻まれて。

それでも戦い続けたのは、どんなに傷付いても大声で私たちを励まして一番前に立ち続けたミノさんのおかげだった。

山羊座と戦う少し前から、私とミノさん、ゆーちゃんは神樹館小学校に通わなくなっていた。ゆーちゃんは右腕が無い状態での戦闘に慣れるために鍛錬をしていて、私は今日にでも死ぬかもしれない状態でも変わらず学校に通えるほど、強くはなかった。

ミノさんはそんな私とゆーちゃんに付き合って、学校よりも優先してくれた。嬉しかったけど、申し訳なさもあつた。

山羊座を倒して、それぞれに障害や欠損部位があつて。それに思う事があつたのか、安芸先生が私たち三人を連れて旅行をしようと言い出した。

私とゆーちゃんは否定的だったけど、ミノさんが乗り気なので仕方がない。私とゆーちゃんはミノさんのおかげで生き繋いでいる様なものなので、ミノさんの意見は優先したいし逆らう事なんて出来なかつた。多分、この時点で私たちの内面での関係は歪んでいた。

………そして、安芸先生が捕まった。

児童誘拐、とのことだった。

後になつてから知つたのは、安芸先生による無謀な計画だった。私たちの勇者システムがインストールされた端末は、新たにシステムをアップデートしたからと安芸先生に言われて別端末と取り替えられていたけど、これが偽物だったらしい。

本物の勇者システムは安芸先生の自宅に保管されていて、旅行と言われて遠くまで連れられた私たちはシステムを持たない一般児童だった。

安芸先生は私たちを大赦の目が届かない場所まで逃がして、もう戦わなくても良い人生を送らせようとしていた。私たち三人じゃなくても、他に勇者になれる人はいるらしい。勇者適正とシステムがあれば樹海化した世界には行ける。

とても、優しい人だ。安芸先生は非情に徹しきれず、右腕を喪つたゆーちゃんや片目を奪われた私、右半身に痺れと傷跡を与えられたミノさんを哀れに思ったんだ。

きつと、衝動的な計画だった。そもそも国を管理する大赦から逃げ切ることなんて出来ないのに、それでも安芸先生は自分の取れる手段

を駆使して私たちを庇い、最後まで逃げ延びようと足掻いた。

——でも、結局捕まった。

大赦は安芸先生を児童誘拐と言って、私たちの必死な訴えも揉み消された。勇者であれ名家の生まれであれ、所詮は子供だ。

誘拐された子供は酷く怯えて錯乱していた、とでも言われれば当人以外の皆は簡単に納得するし、そもそも大赦にとっては納得なんてものも関係がないのだ。勇者が国の為に戦って、バーテックスを殲滅し続ける。そして国が次世代に——と、それが大赦の謳う『正義』で、私たちに与えられた使命。

私たちが勇者として戦い続けることを条件に、捕らえられた安芸先生の安全を保証させた。口約束ではなく、定期的な面会を許すという方法をもって契約とした。

結局、何も変わらない。私たちは他人の正義を謳い、武器を振り続けるんだ。今日も、明日も、死ぬまでずっと。

それから間もなくして、ゆうちゃんが死んだ。

神樹館では遠足をしている頃だった。不登校児の私たちは変わらず鍛錬をしたり引きこもって戦闘での作戦を練っていた最中、三体のバーテックスが襲来した。

射手座に蟹座、蠍座だった。樹海に踏み込んだ瞬間、私とミノさんは射手座と蟹座による連携オールレンジ攻撃によって重症を負い、戦闘不能になった。

そんな私たちを隠して、ゆうちゃんは一人で戦った。そして死んだ。バーテックスを全て倒して、でもゆうちゃんの死体は酷く苦しそうな表情。

ゆうちゃんは単体では勇者で最強だった。味方である私とミノさんが邪魔になってしまいうくらい、圧倒的だった。

だからバーテックスを倒すのは難しくなかった。武器である”大鎌”は人間の何十倍、何百倍も大きいバーテックスに有利で、それを扱う技量は圧巻としか言い様がなかった。

だから、バーテックスを倒すまでは簡単だったんだと思う。ゆーちゃんの死体に唯一刻まれた、脇腹を抉った傷跡。

致命傷ではなかった。でも、ゆーちゃんは死んだ。喉を掻き毟って、苦しみの末に死んだ。後になって解つたのは死因が毒であった事だ。恐らくは蠍座の尾の毒。勇者であつたとしても毒耐性はないらしい。

……これが、正義……？

鷲尾さんが死んで、想い人だったゆーちゃんも死んで。助けようとしてくれた安芸先生は捕らわれてる。こんなのが正義なのか。確かに何も知らない一般市民は助かつて、神樹様も破壊されてない。

命の価値が皆平等だとしたら、私たちのしていることは正義だ。四国を救つて、たつた二人の犠牲で済んでいる。救えなかつた罪を背負つて、より多くを救い続ける……そんなのが正義。物語で活躍する勇者の正義ではなくて、酷く冷めていて現実的な正義だ。

……もう、後戻りは出来ない。

ここで全てを投げ出したら、鷲尾さんとゆーちゃんが成した『正義』が無駄になる。……私の小さな体には、重すぎる責任がのしかかる。

……本当に、辛い……もう鷲尾さんの顔があやふやになった。そこまですごい関係性ではなかったから、写真なんかもないし。今にして思えば私と鷲尾さんは友達だったのかも怪しい。

挫けそうで、ゆーちゃんの声が聞きたくなる。でも、私は……私たちはゆーちゃんの声なんてもうずっと聞いていない。あの女の子の人の形のように透き通つていて、鋭い目付きの男の子の声は鷲尾さんが死んでから発せられることはなかった。

ゆーちゃんが死んで、やつと勇者アプリがアップデートされた。満開システムの追加は、朗報であると同時に遅すぎる報せだった。

それを、あと二週間早めてくれればゆーちゃんは死ななかつたかもしれないのに、と……文句を言ったところで結果は覆らないと知っているのに、やっぱり思ってしまう。

ゆーちゃんが死んで、満開という最強の切り札を得て。その虚しさ

から私は酷く怠惰的な生活をした。出てくるご飯を食べて、吐いて、私を心配して家まで来てくれたミノさんに自傷を咎められて。

互いに慰め合うためにお祭りに行ったり、ちよつとだけ遠出をしてみたりもした。でも、ふとした時に…そこにゆーちゃんが居ないことに違和感を感じて、泣いてしまう。

正義って…こんなモノなのだろうか。

私たちは世界を救っている筈なのに、こんなにも苦しい。自傷の痕だって私だけじゃなくて、ミノさんにもあった。

これが、神樹様の望む正義？ 私たちが執行すべに正義？…判らないのに、でも死んだ仲間を無駄死にであると認めたくないから、正義を謳う。それしか、もう私には出来ないから。

ゆーちゃんの死から二ヶ月が経ち、少しだけ落ち着いた頃。大赦の巫女が神樹様から信託を受けた。もう少ししたらバーテックスが襲来する、とのこと。

何を今更、と思った。でも、大赦からは次のバーテックスを倒したら私たちの役目は終了であると言った。これまでがそうであったように、私たちの代は役目を終えて、何年か置いて次代の勇者がまたバーテックスと戦う。

嬉しくないといったら嘘になる。もう、仲間が…ミノさんが死ななくて良いのは喜ばしい事だ。今更自分の生死に縋るような事もないけど、ミノさんには生きて欲しい。絶対に死なないで欲しい。

ミノさんが私に残された最後の希望で、最後の生きる理由だ。何があっても…この身が悲惨な末路を辿るとしても、守らないといけない。

システムがアップデートされてからは自傷も出来なくなった。精霊がバリアを貼るから、死にたくても死ねないし守られていると同時に縛られている。

ミノさんは単純に、神樹様から守られていると言っていた。だから、私はミノさんに真実を伝えられなかった。精霊は使用者を守るのではなく、勇者としての御役目に縛っている存在であると言うことが出来なかった。

それから一ヶ月後、信託通りにバーテックスは襲来した。牡羊座と魚座、獅子座のバーテックスだ。

………そして、ミノさんが死んだ。

私たちは優勢だったはずなのに。いきなり、ミノさんは視覚を喪つて、私は左足を動かさなくなつた。それは、満開が解けると同時だった。

…満開には代償があつた。視覚を失つて戦闘を続けられるような鍛錬はしていないし、想定もしていない。満開が解けた瞬間、樹海の地面を泳ぐ魚座が地面から飛び出し、ミノさんを打ち上げた。パリンツと小さくバリアが割れる音が響き、そこに強烈な電撃と何十もの火球が襲いかかつた。

肉が焦げ、骨が溶け、全てが蒸発する。

左足の動かない私は咄嗟にミノさんを庇う事も出来ず、ミノさんは抵抗することも許されずに死んでしまった。そこからは記憶にない。気が付いたら、私は動けなくなつていた。辛うじて視覚と聴覚、あとは声帯は残つていた。でもその他には何も無い。心臓も動かず、熱いのか冷たいのかも解らず、物が触れた感覚もなくて、手も足も動かない。

殆どを散華して、私は…私たちは世界を次代へと繋げた。…だから、もう死にたいのに……神樹様も大赦も、私の死を認めない。

もう、仲間の元に逝きたい。大人の掲げる正義を成し得たのに、まだ私の願いは実らない。

それから暫くして、世界は唐突に終わった。

次代の勇者が失敗して、神樹様が崩壊するらしい。大赦の神官は私を戦場に出そうとしていたけれども、無駄だった。そもそも巫女の素養を持つ勇者が現れないのだから、友奈の名を持つ少女が勇者になつたとしても世界は救えない。

少しづつ、全てが燃える。端末を手に私を囲む大人が炎に飲まれて、燃える。燃え尽きて異臭を放つ神官の手から落ちた端末を精霊が拾い、私の胸に押し当てる。

微かに発光してバリアが出現して、でも力元の神樹様が崩壊したからバリアは維持出来ないらしい。

無数の手に似た炎が私を抱き込み、煙に出しながら肌が焼け爛れ……でも皮肉にも痛覚や温度を感じする機能は散華している。

自分が徐々に崩れる感覚に身を委ねながら、少しづつ意識が遠のく。眠くて、それ以外は何も考えられない。

……最期に見たのは、空に浮かぶ巨大な鏡に映る、焼き爛れて包帯だらけの私だった。

「――あーらら、酷い状態の子が来ちゃったね。散華だけじゃなくて、心も摩耗しきってる……アハツ、傀儡よりも人形だねっ」

声が聞こえた。

相変わらず、体は動かない。いや、動かす身体が酷く不明瞭で……欠損を抱えただけの魂みたいな状態だった。

真っ黒な空間で、私ともう一人の少女だけかそこに在る。黒い髪に赤い瞳……嘲るような態度の奥には”復讐”の性質が垣間見える。

「聞こえてる？まー、聞こえてなくても言うけど。貴女はこれから、天の神の駒として勇者を殺さないといけないんだよね。精神干渉とか身体操作とか、諸々のアレで抵抗は出来ないから諦めて殺そうね？」

酷く、悪意に満ちた声だった。

……私が勇者を殺す？なんの冗談なのだろう。ゆーちゃんもミノさんもいない世界に、私はもう愛想を尽かしている。

滅ぶなら勝手に滅べば良い。救済を望むなら、神樹様にでも願ってれば良い。どうとでもなれば良いし、私はもう何にも干渉しない。そもそも、こんな身体じゃあ何も出来ない。

「貴女のいた世界は滅びたよ。まー、巫女勇者のいない時点で詰みだったんだろーね。でもでも、この世界線ではみーんな生きてるよ？東郷美森さん——あ、じゃなくて鷺尾須美ちゃんって言ったようがいよいよね。それと郡唯斗くんに、三ノ輪銀ちゃん。それに貴女とは別の道を歩んだ乃木園子だっているよ？」

「……ッ！」

「あつ、やつと反応したね」

——別の世界線。

それはつまり、全てが成功した世界ということだ。鷺尾さんが水瓶座に殺されることはなくて、ゆうちゃんは孤軍奮闘の末の死もなく、ミノさんだって生きている。

私を取りこぼしたモノ全てが揃っている世界が、あるらしい。それは夢よりも夢らしい、理想的な世界だ。……とても、妬ましい……けど、それを破壊するのは私の望むことではない。

幸せな世界線があるなら、私はそれで満足だ。ゆうちゃんやミノさんが幸せなら、それを邪魔したくない。それが私の正義だ。

「うんうん、偉い子だね。正義の勇者は誰よりも正しくて、絶対に曲がらない。天の神の干渉にも対抗出来る性質で妬ましい限りだよ」

「………何が、目的なの……？」

「おお、喋ってくれるんだね。独り言は寂しいからね、こーして話せるのは私としても有難いね」

「………」

「でもね、でもね。どんなにご立派な性質だとしても、性質そのものを混ぜたら意味がないよね。あはつ、アハハッ！可哀想だね♡」

「ッ！な、にを……」

「貴女のために集めたんだよ？妄執に贖罪、怨恨……その核。傀儡は三ノ輪銀に壊されちゃったんだよね。いやー、復讐者リベンジャヤーを与えられた勇者の特性を甘くみてたよ。失敗失敗！」

……解らないけれども、ミノさんが目の前の少女の計画を邪魔しているらしい。ミノさんの敵は私の敵だから、本当に喜ばしい。

このまま私も死なせてくれれば言うことはないのだけれども、そんな甘い話はない。

「とつても滑稽だよね、彼女達。態々集められたのに、その役目は前座ですらなくて餌だっただなんて。ほらほら、ちゃんとお食べ♡」
「ッ!？」

三つの四角錐はバーテックスの御魂に酷似していて、でも私の知る其れより圧倒的に小さい。あのバーテックスのサイズ感を人間に合わせたとしたら、妥当な大きさだとは思う。

それを不明瞭な私の身体に放り投げて、少女は嗤う。そして同時に……私の性質が染まる。正義の器に妄執と贖罪、怨恨が詰め込まれる。

…歪んだ正義が私を支配する。

歪んだ正義に執着して、死んだ仲間への罪悪感が肥大化して、幸せな世界線のみんなが妬ましくて恨めしい。

「あ、あつ……ああ……だ、め……ッ」

「ようこそ、堕ちた勇者さん。堕ちて、歪みきった正義の勇者さん」

……正義を、実行しないと。私は正義私に従うのみ――

冬休み明け

冬休みが終わった。

思い返しても、かなり濃密な冬休みであったと皆の心に刻まれている。犬吠埼風が事故に遭って入院する事から始まり、その後に神婚云々で唯斗が大赦に殴り込んで父親と対話。

間もなくして復讐の勇者と邂逅し、唯斗と夏凜が苦戦した後に逃げられた。

皆が天の神と戦う覚悟を示した冬季休暇でもあり、唯斗が夢の中で精霊ユイトに殺され続けて技と記憶を継承したりもした。その後直ぐに堕ちた勇者との全面的戦闘を経て、勇者部の殆どが入院して、退院する頃には異常な忙しさの中で忘れかけていた宿題に追われる日々。

風に関しては冬休み中に二回も入院と退院を繰り返している始末。勇者システムの治癒増進がなければ今でも病院のベッドで寝ていたことだろう。

「……なんで冬休みだったのに、こんな疲れてるんだろうな……」

「勇者だからかな〜？」

「まるでブラック企業ですね……いえ、まだ中学生なので社畜根性なんて知りませんけど」

放課後、部室に集まっているのは唯斗と園子、樹、東郷だけだ。友奈や銀、夏凜に風は結局宿題を終わらせることが出来なかつたらしく、当然ながら居残りだ。そして雪花は転校生という形を取って讚州中学に通い始めた為、手続き等がある。

放課後に集まるのは久方振りなのだが、このグダグダ感がどうしようもなく勇者部らしさを醸し出していた。

「勇者部の大半が居残り組だってさ。受験生もいるのに大丈夫かよ……」

「ま、まあ……みんな忙しかったからね。私も私で、入院やら逢瀬やら戦闘訓練やらで忙しくて、友奈ちゃんに勉強を教えてあげられなかった

から……不肖東郷美森、一生の不覚……!!」

「二年生は東郷先輩に園子さん、後は何故か唯斗先輩は宿題を終わらせてるんですね」

「何故かとは？……おいしい、樹さんよオ。わっちは学校生活においては程々に真面目ですぜイ？学年四位の頭脳を馬鹿にしちアアアカンぜ？」

郡唯斗は限りなく阿呆ではあるが、馬鹿ではなかった。奇行と戯言さえ除けば東郷と同様に優等生だ。

寧ろ唯斗にとつては樹がこの場にいる事が驚きだった。樹は不真面目な不良生徒ではないが進んで勉学に励むほどの勤勉さもない。覇者つてる部分以外は普通の女の子であり、机に向かうよりも友達との遊びを優先するタイプだ。

恐らく、風が入院中に余程暇があつたのだろう。料理以外の家事は以前、樹が郡家でお世話になった時に軽く教わっており、短期間であれば一人にしても問題はないと風も判断したのだ。防犯面においても覇者がいるので安心安全だ。

無論、料理の腕は未だにアレなのでスーパーや弁当屋の惣菜で間に合わせていた。

「えっ……なんか解釈違いです。唯斗先輩にはおバカさんであつて欲しいです……」

「そろそろぶん殴るぞ？お前の姉を」

「なんでお姉ちゃんを!?!」

「うんうん、フーミン先輩なら殴つても相応の仕返ししかされないからね。覇者のいつつんはとつても怖いからね」

「将を射んと欲すればまず馬を射よ、ね。ええ、戦術の基本だわ」

「にやるほど、樹は女子力黒ゴリー王ラ号パイセンに乗ったラオウ霸王だったのかあ」

「健気で繊い後輩をなんだと思ってるんですか!」

「H A H A H A!!」

「ふふっ……い、樹ちゃん……不意打ちで御家芸は狡いわ……ぷっ、あはは!!」

「何をどう解釈したら私の発言で渾身のギャグが大ウケした時みたい
に笑えるんですか…ツ!?!」

大笑いする先輩達に腹を立て、樹は唯斗が齧っているイカの姿フラ
イを奪って頬張った。唯斗はシクシクぴえんぴえんと泣いた。

「…ていあーん!」

「そのっち?」

「今のうちに状況…:は今更だけど、今後のやるべき事は整理しない
?人数が多いと絶対に脱線しちゃうし、ゆーちゃんは神出鬼没だから
ね」

「あー、^{バイト}防人やってるからな」

「…:唯斗君、中学生はアルバイト禁止よ?」

「だいじょーぶ、マトモなバイトじゃないから。故に法律には触れ
ねえよ」

「あ、なら安心ですねっ!」

「…:…:ええ、そうね!」

「あつちやく、わっしーが考えるのを止めちやつた」

早速脱線している現状に呆れてイカの姿フライをキメようとした
が、東郷によつて口の中にぼた餅を突っ込まれた。東郷が唯斗用に用
意した甘さ控えめで薄く塩味を追加した物だ。

仕方なくキメようとして手に持ったイカの姿フライを東郷の口に
縦で突っ込み、顎が外れそうになってアホ面を晒した彼女の写真を
撮って居残り組の皆にチャットで送った。

「んじゃ、今後の予定をまとめるぞー」

「ゆーちゃん、イカの姿フライあーんして?」

「はいはい、勝手に貪ってる。…:さて、明確に決まってるのは友奈の
神婚だ。それが最終決戦日」

神婚——つまりは天の神との決着まで、残り二ヶ月余りしかない。
大赦の計画する神婚の儀は三月頃であり、それを利用する形で勇者は
大赦も天の神も欺く。

それまでを長いと感じるのか、短いと解釈するか。現状、戦力的な
面で準備を終えているのは唯斗だけだ。良い言い方をするのであれ

ば、他の皆はまだまだ伸び代がある。改めて現実的な表現をするのであれば、未だに時間も技術も足りない。

然し相手は世界を炎の海に書き換える程の力を持つ神だ。戦闘技術はさほど問題ではない。

そも、神に勝つ手段は打倒だけとは限らない。神が本気となれば為す術なく塵と化するのだが、そもそも天の神は矮小な人類に対して本気を出さない。

言うなればプライドとでも言うべきか。人間がたつた一匹の子蠅に対して本気で殺意を抱かないのと同じだ。周りを飛んでいけば喧しく思い、自室にいればティッシュやら丸めた雑誌やらで潰して殺すだろう。

だがそこに絶対的な敵意も、ましてや持ちうる限りの筋力を使つての対応なんかもしない。そして、その子蠅を死に物狂いで殺しに掛かるのは同種の人間から見ても異様に見え、故にプライド的にも人間は矮小な子蠅に本気にはなれない。

それと同じだ。神にとつては子蠅も人間も同じであり、自分の領域に侵入する塵芥が喧しいから殲滅するのみ。

「——つまり、天の神は勇者に舐めプをする。絶対に」

「…じゃあ、私達はそのことを突いて勝利を勝ち取るのね」

「うんにゃ、無理無理。子蠅が人間の隙を突いて人間を殺せるか？」

「ええ……無理つて断言しなくても……」

「いっつん、やっぱり覇者脳に染まってるね。なにも勝つ手段は打倒だけじゃないんよ？きつとゆうーちゃんが言いたいのね、神様に人間の可能性を認めさせるってことだよ」

「認めさせる……？」

「そ、せーかい。つまり、害のない猛獣的な立ち位置を目指すのだよ。ヒューマンさんは態々、森に住むデンジャラスビーストくんをぶち殺そうとはしないだろ？まー、森から出て街に出てきたら話は別やけど」

人間は獣を銃や爆発物を用いれば殺せるが、態々そんなことはしない。それと同様に、天の神にとつてその気になれば殺せるが武力を誇

示して殺そうとは思わない、といった立ち位置を目指すのが明確な生き残る道だ。

別の時間軸にて勇者が神に打ち勝ったのも、神の想定を大きく超えて存在理由を認めさせたからだろう。故に打倒ではなく、死ぬ気での底力のアピールだ。

「…それ、上手くいくんですかね…結局倒せないって事ですし、そんなことを聞かされたら——」

「うんうん、じゃあ他のみんなには秘密ね〜」

「そーだな。俺らは兎も角として、友奈達は飽くなき勝利への欲求と熱いパトスで本来の実力を凌駕するタイプだ。てか、だからこそ今の面子に勝利条件を話したンだけどな？」

「……奇しくも、論理的思考で動く私達しか部屋に居ないわ。計画的に宿題を終わらせた私達と、冬季休暇の最終日に頑張っても間に合わなかった風先輩達……こんな言い方は本人達には聞かせられないけど、脳筋的な気がある人が大半ね」

裏打ちされた技術と才能で勝つタイプと、気合いやテンションで自分のスペックを大きく上回れるタイプ。雪花を除き、今回は休暇課題によって上手く分けられていた。

「うーん、あと二ヶ月かあ…問題は何をすべきかだよね〜」

「……あちら側が何もしてこないとも限らないわ。先日の襲撃に関しても、黒髪の友奈ちゃんからは逃げられた。それに、勇者部の面々を模したのだとしたら…まだ唯斗君とそのっち、銀がいるわ」

「……多分、俺はいないぞ？勇者じゃなくて賢者だし、そもそも堕ちた俺は本人の元時空で決着をつけてきた」

「え？唯斗先輩……また何かやらかしたんですか？」

「巻き込まれて異次元に行っちゃった♡100話記念」

無論、仕立て人は山田某だ。芽が育つ前に摘んでおくのが目的だったのだろうが、当時の唯斗はまだ何も知らない頃だったので混乱していた。

雪白による鍛錬はしていたが、精霊ユイトから継承する前だ。手数で翻弄して、当時空の東郷と園子のトドメを任せる他なかった。

「…………その話はまた後でするとして、じゃあ残りはそのつちと銀ね」
「堕ちた勇者…………多分、堕ちる可能性がある勇者の成れ果てなんですよ。でしたら、そもそも存在しないって可能性も…………」
「ううん、いるよ。ミノさんはいないだろうけど、私は絶対にいると思う」

「そ、そのつち…………？」

「誤魔化したって仕方ないもん。堕ちないってコトは、あんな理不尽な目にあっても誰も憎まないで、仲間が死んでも勇者にした神樹様とか大赦じゃなくて天の神を恨んで、自身も正義の勇者で在ろうとしたってコトだもの。私は…………誰か一人でも死んだら堕ちる可能性があるし、数ある平行世界で誰も死んでいないなんて事もモチロンないよ」

「…………自分のことは自分が良くわかるってことだろ。園子が自分言うなら、存在するだろうよ。俺達にできるのは救いにならない同情なんかじゃなくて、堕とされて利用された”敵”を倒して未来を掴むことだけだ」

——同情なんか、してやらない。

年相応の強情さにも似た、我儘だ。唯斗の仲間は別世界の哀れな彼女達ではなく、勇者部の面々だ。それが唯斗の精一杯で、勇者ではない唯斗の限界だ。

システムを与えられてバーテックスと戦ってから、ずっと心にある劣等感。唯斗は勇者らしく全てを守り、世界を救うとは言えない。自分の命を投げ捨ててでも世界を守ろうとする友奈の思考は理解出来ない。

ならば、嗤ってやる。

理不尽を嗤ってやる。嗤って、なんでもないかのように片付けて、仲間に笑いかける。余裕を作り、余裕だからついでに仲間と世界も護れると自分を錯覚させる。

軽薄で良い。寧ろ重々しく戦ったら、不器用な両手からは少しづつこぼれ落ちる。だから空気なんて読まないし、敵の気持ちなんかも考えてやらない。

——きつと、堕ちた彼女達もそれを望んでいるから。

「つーことで、次は園子対策やね。園子さんや、思い付く限りの極悪非道な戦術を言いタマえ」

「え、じゃあまらずはイカの姿フライを剣山の上に設置して——」

「鬼か貴様ア!!んなコトしやがったら乃木本家にネズミ花火とか投げ込むぞ!毎日欠かさず、朝昼晩に!!」

「やってる事が悪餓鬼ね……」

「自分から求めた意見ですのに……理不尽」

取り敢えず、敵側の園子が出てきたら唯斗を縛ろうと樹は決意した。下手をしたら、そのまま剣山で即死する可能性だってある。

勇者部の最大戦力である筈なのに、たった一枚のイカの姿フライで死にかける阿呆。そんな想い人を視界に収めて、東郷と樹は同時にため息をついた。

イカの姿フライ禁

「……ヤバいな」

銀は小さく呟いた。喧騒で溢れているHR前教室では掻き消される程度の呟きも、今日ばかりは嫌に響いてしまう。注目を集めるのは彼女だけでなく、教室の廊下側最後尾から左に二つ目の机——郡唯斗の席だ。結城友奈の後席で、東郷美森の隣席。

そんな彼は今、柄でもない澄まし顔で文学小説を読んでいる。たったそれだけ——故に誰も声を掛けることすら出来ない。

「……やばいね〜」

園子は慄いた。唯斗の家の居候であり、昔から今に至るまで誰よりも共に過ごしてきた彼女には解る。彼は今、これまでにないくらい不機嫌だ。

頭に浮かぶのは過去の、無口無表情だった頃の唯斗だ。あの頃は全ての感情が表情には決して現れず、特にご機嫌斜めである事だなんて唯斗と親しい彼女達にしか分からなかった事だろう。

フランツ・カフカの『変身』を読み終わった唯斗は徐ろにエナメル靴に手を突っ込み、取り出したのは貴志祐介著作の『新世界より』上中下巻だ。

よくよく見れば、カバーの隙間からは大赦の検閲禁止印が押されているのを園子が見留た。きつと、彼が勝手に持ち出したのだろう。

「……こ、れは……ッ！」

夏凜は全てを察した。これは、禁煙者が煙草の代わりにガムを噛むように。もしくはダイエット中の女子が蒟蒻麺で腹を満たすように——読書によって欲を紛らわせているのだ。

果たして、郡唯斗がらしくない行動に出てまでやっている禁欲とは。夏凜の灰色の脳細胞が強かに回転を始め、辿り着いた答えはイカの姿フライ禁だった。

そも、郡唯斗とは極度の奇行を除けば案外真面目な中学生だ。その奇行はイカの姿フライに関する事柄が多く、イカの姿フライは唯斗へ

奇行エネルギーを与えているとも言えよう。

その奇行エネルギーの供給が絶たれた現状、唯斗は奇行を行えない。動かざること山の如し。椅子に座った唯斗はそこから手の届く範囲でしか行動しないと無言で主張していた。

触らぬ神に祟りなし、とはよく言ったものだ。違和感や危機感を察したクラスメイトは唯斗に接しないどころか、雑談に没頭する事も出来ない。

——然し、何事にも例外はある。

ガラツと勢い良く教室のドアが開け放たれ、女子生徒が入る。

「唯斗くん、おっはよおー!」

「っ！ちよつ、友奈…!」

結城友奈だ。空気の読めない——否、敢えて空気を読まない選択をした少女。夏凜は窘める意を込めて彼女の名を呼ぶが、友奈は首を傾げるばかりだ。

唯斗は緩慢な動作で弱々しく振り向き、いつの間にか近くにあった友奈に少しばかり驚く。イカの姿フライを抜いている今では、自身に近寄る者の気配を察する事も叶わない。

「……………ああ、おはよ……」

「あれ？唯斗くん、元気ないね！あ、もしかして夜更かししたの？」

「……………夜更かし、か……………そうだな。人生つてのは短えし、夜更かしするくらいが丁度いいんだよな……………夜更かしつてのは、人生なのかもな……………」

「？……………夜更かしはしない方がいいと思うけど……………」

「……………だな。きつとそんくらい、お前の人生は充実してるってことだろ……………空が蒼くて、夕日が紅くて、イカの姿フライが世界を救う——当然とも言える世界の理から、充実感を得られるのは……………多分、すごいことだ……………尊敬するぜ、ダチ公」

「あはは！ちよつと何言ってるのか分からないけど、夜更かししたら眠くなっちゃうもんね!」

「……………ああ、そうだよな……………人間は寝るとも言えるし、真には寝ないとも言える……………つまり、そういう事だよな……………友奈」

「???……うん、そうだねっ!」
「っ! ツツく!!」

「…見ろよ、美森。夏凜が必死にツツコミを我慢してるよ」

「ええ…そうね。こんな状況では安易なツツコミも命取りになるわ…耐えて、耐えてちょうだい…っ!」

どうやら、既にイカの姿フライ禁止による禁断症状が出ているらしい。遠い目で戯言をほざく唯斗に頭空っぽな友奈は笑顔で返すが、ツツコミ呼吸を生業としている夏凜の方が先に限界を迎えそうだった。

普段であれば、この状況に満面の笑みを浮かべてメモを取る園子だが、今回ばかりは責任を感じている。

事の始まりは昨日の園子の発言だった。

堕ちた勇者の中に乃木園子の存在を、他でもない彼女自身が認めて断言。それ故に唯斗達は園子対策をすべきであると判断して園子本人に極悪且つ悪辣極まる、勇者に対して有効な戦術を聞いたところ、彼女はイカの姿フライを人質に言ったのだ。

流石の唯斗も、イカの姿フライという明確な弱点を晒し続けるのは思うところがある。

それが直接的にイカの姿フライ禁に繋がり、現状に至った次第だ。そも根本的に、唯斗の戦う理由は自身が生きたいからである。

根源はずっと変わらず、異界で幾度と変化する心情に揺さぶられて、護り守られる仲間が増えたとしても。

——ただ、生きたい。

故に、妥協しない。

イカの姿フライを人質に取られて死ぬくらいなら、唯斗はイカの姿フライへの執着を克服する。きつと、辛く長い戦いになるだろう。イカの姿フライを見捨てるのは仲間を見捨てるのも同義。そんな冷徹極まりない選択をするのだから、生半可な覚悟では煩惱に吞まれるのみ。

「——ああ、そっか……人類は…イカの姿フライだったのか……」

「ヤバいやバいやバいやバいや…! 妙な悟りを開いた!? 唯斗が変な境地に至っ

たぞ!？」

「銀…いや、イカの姿フライ。かのイツ・クアノフ・ンラアーイは言い
ました——隣人、イカの姿フライで在れ……と。私は悟ったのさ…
隣人は、生きとし生ける兄弟なんだ…と」

「アタシをイカの姿フライって呼ぶな。そして架空の人物を生み出す
な。ついでにイカの姿フライは生きてないし兄弟でもない」

「……アレだね、コレってアレだね。禁欲の皮を被った無禁状
態ってやつ?イカの姿フライって何回言っただろうね」

「イカの姿フライ!？」

「過度に反応しすぎでしょ!？」

「——いけません、イカの姿フ……夏凜さん。イカの姿フライはイカ
の姿フライに非ず、故にイカの姿フライはイカの姿フライのイカの姿
フライでイカの姿フライ。嗚呼、イカの姿フライ」

「ゆ、唯斗君が故障したわ。……っ!そうね、今こそ愛の接ぶつ——」

「東郷さん?どうしたの、唯斗くんの肩を掴んで?」

「ゆ、友奈ちゃん!?!ち、違うの……!私はただ……いえ、そうね…切腹
します!そのつち、兼ねてより隠していた短刀を!!」

「えっ、持っていないよ?」

「っ!?!」

「むしろどーして園子が切腹用の短刀なんて持つてる前提なんだ…
?」

銀は訝しんだ。だが変人的思考は理解した時点で変人であると察
したので、考えるのを止めた。

イカの姿フライとしか喋れなくなった唯斗。友人である男子生徒
はポカリと唯斗の頭を叩いたが、イカの姿フライ殺法によって意識を
刈り取られる始末。

このままでは一日——否、下手をすれば数ヶ月はこの危険生物を教
室に置いたまま授業を受けることになる。その事実には戦慄するクラ
スメイト。

然し何事にも救いはあるのだろう。

——突如、教室のドアが開かれる。

入って来たのは先日から転校してきた秋原雪花だ。彼女は眼鏡のブリッジを人差し指で押し、凜とした目付きで皆を一瞥して言い放つ

「…いや、イカの姿フライ禁なんてしたらむしろイカフラトラップに掛かりやすくない？ 欲が爆発してさ…」

瞬間、唯斗は夏凜の鞆からイカの姿フライを引っ張り出して貪り始めた。尚、夏凜は鞆いっぱいイカの姿フライを詰めた覚えはないとの事。

「なーんてコトがありました、イカの姿フライ禁はヤバいって悟った次第です」

「実質、半日も禁欲出来てないわね…」

唯斗が放つ旋刃盤を大剣で弾き、風は呆れて溜息をこぼす。鍛錬中に聞かされた今朝の話は、やはりと言うべきか。イカの姿フライから始まりイカの姿フライで終わるのみだった。

風は大剣で前方を薙ぎ払うが、旋刃盤とお鍋の蓋の双盾で衝撃の方向を逸らされる。

やっぱり、と風は落胆する様子もなく大剣を爪楊枝サイズまで縮小させる。何気なく、はにかんだ微笑みで唯斗に歩み寄り、風はそれを軽く投げ渡す。

「んー……唯斗、これあげるわ」

「んあ？ ナニコレ………っ!? ちよっ、殺す気かよゴリラア!!」

「チツ、惜しかった」

唯斗が最小の大剣を受け取った瞬間、光を放ちながら元のサイズへと戻る。咄嗟に真上に投げて難を逃れるが、直撃したら刃部分でなくとも骨は砕けていただろう。

無論、風とて躲される前提で投げている。近距離から複数人でタコ殴りにしても躲すなり防ぐなりで潜り抜ける男なのだから、即死級の不意打ち程度でどうにかなると思えない。

現に風が急所を狙って投げた女子力的短刀も薙刀で弾かれ、ピコピコハンマーで打ち返される始末。

「殺意高くないすか…？えっ、なに？まさか俺に覇者^妹でも殺されたんですか？」

「は？アタシの覇者^妹は人間ごときに殺されるほどヤワじゃないんだけど？壁の外に放り出しても寿命まで生きるわよ」

「ゴキブリよりも生命力強いなあ…とりやつ！」

「ツ！このっ、不意打ちなんて卑怯でしょ！アンタ、心が痛まないワケ！？」

近距離から金弓箭での超連射をぶち込むが、しゃがみ込む低姿勢でギリギリ避ける。髪が数本宙を舞ったが、勇者に変身して伸びた頭髪なので、解除すれば髪も元通りになるだろう。

唯斗はケラケラと笑いながらイカの姿フライを啜えたが、それを奪い風は嫌がらせ的な意味を込めて見せつけるように一気に頬張った。尚、その後直ぐに唯斗は虚空からイカの姿フライを取り出して食べた。

「死ぬほどブーメランなんだが？てかパイセンも樹も、不意打ち上等で俺を殺しに来てる自覚はおありで？」

「だって唯斗、殺しても死なないでしょ」

「生命の定義に唯斗きゅんは含まれていないと？」

「冒瀆的な存在ではあるわね」

「ハハッ、パイセンもね！」

「ぶち転がすわよ」

「沸点ひつく…夏凜から煮干し分けて貰ったらどーっすか？」

「カルシウム摂り続けてる夏凜が怒りっぽいのよ？」

尚、カルシウムの摂取は直接的にイライラの予防や解消につながるわけではない。カルシウム不足で脳神経が興奮し、それをイライラするとも捉えられるが、前提としてカルシウム不足とイライラは関連しないとされている。

故に、怒りっぽい夏凜が煮干しを取り続けても怒りっぽい性分は変わらない。

「くっ……じゃあー——」

「イカの姿フライって言ったらぶち転がすわ。友奈を」

「何故に友奈か……」

「ふふっ、さしもの唯斗でも自分のせいで友達にまで被害が及ぶのはアレでしょ！罪悪感的なアレよ!!いやー、まーたまたアタシの知性が光ってしまった——」

「あつ、もしもし美森？うん……ああ、うん。そーゆー事だから、殺るなひとけら人気がないところでな？一応、証拠と記憶も消しておけよ」

「……………あ、オワタ（´へ`p´、）」

「我圧倒的勝利ナリ」

本日も引き続き、連勝記録を伸ばした唯斗は勝利のイカの姿フライに酔いしれながら巨悪の如き高笑を上げ、帰路についた。

卵

「ガッ……く、ソが……！」

胸が熱い。赤黒い血が滴り、次の瞬間には溢れて止まらなくなる。皮膚を突き破り、肉を抉って骨も砕かれ。左肺ごと心臓を穿たれて、そのまま背中肉も破れた。

背骨を異物のように殴り砕き、彼女の腕が少年の胸を貫通する頃、彼へ駆け寄ろうとする勇者達は明確な手遅れを無意識のうちに察してしまった。

「アハッ、アハハ……アハハハハッ！なあんだ……終わっちゃった。コレも神様の望んだ未来、なのかもね」

「そ、りゃあ……愉快、だなア……」

蔑み、絶望するように。少女は嗤う。重ねる過ちに身を焦がし、それでも無惨に死ねる未来を盲信して残虐の限りを尽くす。

既に、そう造られていると自覚も出来ない。認識は塗り代わり、少女の復讐たる性質は、他の要因に染まりすぎた。

「死に際だよ？皮肉とかじゃなくて、遺言とかかないの？ちゃんともんなに届けるよ？知ってるでしょ、私は律儀なほうだって。まあ、みーんな天国には送るんだけどね！」

「……ハッ、無理……だ……よ……テメエに……は……」

「そっかあ、それが最期の言葉ね。……じゃあね、唯斗くん。私の事が大嫌いだった、私のお友達」

「……シネ、ばーか……」

血に濡れた腕を引き抜き、少年は空から冷たい海へと落ちる。血で軌跡を描き、海水を徐々に赤く染めあげ、それが少年の分身体ではなく本体であると全てを物語る。

四体の精霊に受け止められ、然し少年は深く深く沈む。死の間際、白か黒かも分からないモヤが瞼の裏に燻り、肌を刺す海水の冷たさが意識を急激に奪う。

誰かが——否、皆が名前を呼んでいる。不思議と水の中でも鮮明に

聞こえて、故に申し訳なく感じてしてしまう。

肌で感じる海水が揺れ、泡沫がぶつかる。誰かが飛び込んで来たのか、それともワイヤーか大剣で掬い出そうとでもしているのか。

もう、大丈夫と言葉にすることも叶わない。見え透いた強がりも、この身体ではもう説得力を持たないのだろう。

紡いだ言葉は届かない。精霊だけが聞き届け、命令に従い海に飛び込んできた少女を海面へと押し出す。水の中に居るのに、何故か赤髪の彼女は泣きながら手を伸ばしていると認識出来た。

赤く、寒く、痛く——霧散する意識を留め、少年は束ねる。自身の敗北を認め、最後には彼女達が世界を救う姿を想像して。

(……泣かせたく、なかつたな……)

——2月14日、郡唯斗は死んだ。

時間は遡る。

2月13日——何事もない、平和な日だった。

無論、未だに天の神の脅威と神樹の寿命は迫っているが、勇者や大赦の者達を除けば世の中は実に平和で何事もない日だ。

本日は何事もないのだが、明日にはバレンタインが控えている。商店街やショッピングモールは賑わい、心做しか街に甘い匂いがする。

浜辺で朝鍛錬を終えた夏凜と唯斗は肩を並べて歩き、休日なのになぜわざわざ学校の部室に向かっていた。

「なー、夏凜。明日って何の日だと思う?」

「っーし、ししし知らないわよ!」

おもむろに唯斗が問い掛けると、夏凜は面白いくらいに動揺する。その様子を見留めた唯斗は頬を釣りあげて笑い、自慢げに知識を披露する。

「ほほう……ならば教えてやろう!明日は煮干の日だぞ!しかもふんどしの日でもある。実質に三好夏凜の日だね」

「な、なんで煮干し入れるって知ってるのよ!？」

「え?」

「え?……あ、違つ……そ、そうよ!煮干しの日だから煮干しの中に煮干しを入れて過ごそうかなって思ってるだけよ!」

「マトリョーシカか?」

世の中はバレンタインで賑わっている中、彼女はアパートの中で煮干しマトリョーシカを制作する予定とのこと。

一応は婚約者なので期待をしていたのだが、予定があるのでは仕方がない。唯斗は悲しい生物を憐れみ、明日はとびつきりの美味しいチョコレートを用意してやろうと心に決めた。

「そーいえば、来月だっけ?風先輩の学力検査」

「あー、そうだっけ?…馬鹿やつて落ちなければいいんだけどね」
「大丈夫だろ。園子が予想問題作ってたし……てか、あいつが作った予想問題、九割くらいそのまま出るんだけど。どーゆーコト?」

「園子の頭の中なんて理解出来るワケないでしょ……どうりで最近のあんた達、100点を量産してるのね」

九割がそのまま出て、残りは学力が試される。その程度だったら唯斗と園子であれば十二分に満点を目指せる。

反則的な気もするが、予測出来るのだから仕方がない。カンニングとは違うと言い張れる。それに、一応定期試験等では使わないようにしている。そもそもが好成绩な為、必要性も薄いのだ。

一夜漬けの鬼である夏凜も点数は取れているらしい。転校してきてから今日に至るまで、上辺だけは優等生でやってきているのだ。取り繕う為ならば一夜漬けくらい、夏凜には容易い。

「……はあ、寒い…夏凜、そろそろ夏にしてもいいんだぞ?」

「まるで私が冬を維持してる、みたいな言い方するな!私だって寒いのは嫌なんだから…」

「うつへえ、こんな寒いのに態々部活って面倒だ……ん?ありや……にんぼーんぼぼ。パイセンから部活休みの連絡来た」

「誰がにんぼーんぼぼよ!!……てか、なんで当日いきなり……あ、確かにメッセ受信してる。……って、はあ?何でわざわざ…」

「ん、どした？」

「いつ、いや…何でもないわよ！あ、あー！よくよく考えたら私、学校にアレをコレしに行かないとアレだったー！…って事で、唯斗は帰って寝なさい。私は渋々、仕方なく学校に行くだけだから!!」

「……………はい？…あ、行っちゃった…」

急に送られてきた、部活中止の連絡。ならば夏凜の家で暇を潰そうとも考えたが、当の本人は妙に慌てて学校へ走って向かってしまった。

致し方無し、と溜息をついて踵を返したところで唯斗の端末から花弁が溢れ出る。顕現されるのは青白い肌とクリーム色の頭髪をした小人童女姿の精霊《雪白》^{ユキシロ}と、純白の身体に真っ赤な瞳が特徴的な、ぬいぐるみのような外見の蛇型精霊《大蛇》^{オロチ}だ。

急に顕現してどうしたものかと視線を向けると、二人で何かを抱えている。

「…なんだそりや。千景と杏の卵か？」

『くたばりなさい。もしくは酷く無惨に死になさい』

『せ、セクハラですよ！唯斗さん!!』

「今のセクハラにカウントされるのかあ……………女心って難しいな」

二人が抱えているのは卵だった。直径30センチ程の、雪白と同じくらいのサイズはある茶色い卵だ。短い腕のある雪白は上手く支えているが、蛇である大蛇は何とか体を畝らせて持ち上げていた。

「……………とりま、人気のない場所に移動するか」

『あ、そうですね』

近辺で人気ひとけもなく、勇者関連の話を長々と話せる場所は何処か。考えるまでもなく、自宅だろう。園子や雪花ならば聞かれても問題はないだろうし、唯斗も寒いので、暖かい場所でホットイカの姿フライを頬張りたいたいだ。

さすがに明るい場所で堂々と賢者や防人に変身する訳にもいかなないので、少しだけ駆け足で帰った。

雪も少しづつ溶けているので、アスファルトの上ならば難なく走れる。十分程度で家に着き、園子と雪花は外出していることを確認して

から部屋に入り、イカの姿フライを啜える。

「——で、その卵は？」

『土居さんよ』

『タマつち先輩らしいです』

「…タマ、ついにタマゴになったか。まー、タマコに濁点付けければタマゴになるし、正統進化だな。知らんけど」

卵の正体は土居球子との事だ。千景とは別の、もう一人の先祖であり異界での仲間。悪友みたいな仲間でもあり気には掛けていたが、まさか卵になって再会するとは思わなかった。

『…正確には、土居さんになる予定の卵ね』

「予定？まだタマじゃないってことか？」

『…：半分は唯斗さんのせいなんですよ？タマつち先輩が完全顕現出来ないのは』

「無罪を主張する。知らんけど、取り敢えず冤罪だと思っんよ。知らんけど」

唯斗ほどの男となれば、大罪を背負ったとしても知らぬ存ぜぬイカの姿フライマジ美味いと言い張れるのだ。実のところ思い当たる節は幾つか——何十個かはあるが、紙一重で違う可能性だって億にいくらいはある筈だ。

大蛇からは白々しいと目線で責められるが、イカの姿フライを齧って見て見ぬふりをした。イカの姿フライは全てを赦すのだから、もう積み重なり過ぎて数えるのを辞めた程のやらかしも許容してくれるのだろう。勿論、精霊達にとつては知った話ではないが。

『…力の使い過ぎよ。精霊化、それに勇者全員が満開をした…：それで、神樹様のエネルギーが予想以上に消費されたわ。唯斗の変身の半分は神樹様とは別口のエネルギーだけど、精霊に関しては完全に神樹様頼りなのよ』

『えっと、そもそも唯斗さんの賢者システムは他の勇者と若干異なる仕様なのは覚えてますよね？』

「そりゃあな。確か、今の勇者システムと違って満開をすると精霊が増えるんだろ？アップデート前の勇者を参考にしたのが賢者で、バー

テックスだけじゃなくて天の神とも戦う”前提”のやつだから、勇者とは違ってアップデートもされていない」

散華云々に関しては、代償ではなく山田くんが郡唯斗の身体を敢えて御姿束ねる者に置き換え、賢者として覚醒させる為のもので、そもそもが根本から異なる。

先日の満開で身体に異常がないのは、システムが変わったからではなくもう置き換えるべき部位がないからだろう。

春信がシステムのアップデートを知らせたのも、勇者との差異を認識させない為だったのだと察しもつく。

『そうね、その認識で大凡は合っているわ。一応、精霊に関して正真正銘打ち止めだけでも…最後の最後でエネルギー不足——いえ、言うなれば省エネモード?…みたいな感じになっているのよ』

『精霊は神力じゃなくて、自然エネルギーによる存在です。なのでタマっち先輩もそのうち孵化するとは思うんですけど……まあ、アレです。一応はご報告をと思ひまして』

「…因みに、どんくらい掛かりそう?」

『さあね。今日かもしれないし、明日かもしれない。一ヶ月後の可能性もあるし、そうなれば天の神との決戦に間に合うのかもわからないわ』

『システム内に居る時は若葉さんに温めてもらってますので、何ヶ月も掛かるってことはないはずなんですけれどね』

「卵温めるとか鳥かよ……蒼鴉だから鳥かあ」

賢者システムの中ではこの卵の上に座る若葉の姿があるのだろうか。少しだけ気になるが、そうなった責任の半分は自分にあるので流石に罪悪感もある。

「…さて、じゃあ俺もやるべき事をやるか」

『やるべきこと、ですか?』

「ああ、明日に向けてチョコ作る。千景も牛鬼…高奈に渡すやつ作るか?手伝ってくれたら、半分は千景が作ったようなモンだし」

『っ！て、手伝うわ…!伊予島さん、卵は乃木さんに届けてちょうだい』

『えっ、ちよっ!?わ、わわわっ!この体だと卵でも重いんですって!!』

徐々に落ちていく雪白と卵は微かに光る花卉に包まれ、また端末の中へと戻って行った。

残った大蛇は純白の体を畝らせて宙を泳ぎ、早く台所へ向かえと言わんばかりに唯斗の背を押す。彼女も彼女で、色々と思う事はあるのだろう。

精霊となり、親友以外にも大切と思える存在がいた事を神樹の記憶を経て思い出し、同時に自分や親友、西暦時代の仲間達が酷く不安定な存在であるとも知った。

天の神を鎮め、神樹が寿命を迎えて深く長い眠りにつき。そうしたら、精霊である自分達はどうなるのか。

自然由来の精霊は、きつと世に広がり在るべき場所へと還る。死者は再び眠り、勇者としての活躍故に神格を得た彼女は今後も四国を守るのだろうか。ならば、人工精霊である《大蛇》^{オロチ}は何処に行き着くのか。

分からないから、存在の軌跡を刻みたい。

勇者の記憶に残り続け、死した親友の魂に『郡千景』という存在を記録して欲しい。そうすれば、きつと郡千景は亡き者にはなっても”存在しない者”とはならない。

忘れられたくない、と。それは嘗て仲間嫉妬し、武器を向けた彼女にしては小さな我儘なのだろう。

「さて、極上のチョコにするか…それとも変わりダネでインパクト重視にするか……」

『……普通のチョコレートでいいわ。と言うか普通のにしなさい。先祖からの命令よ』

「むっ……千景さんや、ちよいとばかり奥手ではなくって?バレンタインは戦争やし、攻めて攻めてアタクセンと!!」

『っ……バレンタイン……血のバレンタイン……恋のドキ☆ドキAttack!バレンタイン大作戦……虐殺……引退……黒歴史……ッ!うぐ……っ!あ、頭が……!』

「何言ってるんだコイツ」

某ネットゲームの黒歴史で頭痛に苛まれる大蛇。ユラユラと床に落ちた蛇の尻尾をつまみ、唯斗はイカの姿フライをキメながら台所に向かった。

正義邂逅

——2月14日、朝。

「……………居ねえし」

包装紙トリボンで飾った小包を二つ、両手に持ちながら家の中を見て回った。昨日作った彼女達用のお菓子だ。

だが、何故か朝から園子も雪花も姿が見えず、そもそも玄関に靴すらない。

出掛けているのだろうか、園子が休日の昼前から唯斗に悟られずに外出するのは珍しい。書き置きもなく、端末にメッセージも送られていない。

不思議に思うが、居ないのであれば仕方無しと小包を冷蔵庫にしまった。溶けたりはしないだろうが、念には念を。

「…千景、友奈と高奈んトコに行くか？」

端末の画面に話し掛けると、勝手にアプリが起動して光と花卉が溢れ出る。溢れ、舞い上がり、純白の蛇が展開されるまでは数秒も要さない。

『——魅力的な提案だけど、残念ね……哀れなお客様が来てるわ』

「はっ………あー、マジで来てるじゃん……濃密な気配」

『気を付けて。前のはレベルが段違いよ』

「そりゃあ怖いなあ。御足労お掛けしたし、塩でもぶっかけて帰ってもらいたいな」

廊下に出た刹那、大蛇は血のように赤い双眸で玄関を睨む。徐々に接近する気配はゆっくりと、散歩でもするかのように動いている。そして郡家の前でピタリと足を止め、来客を報せる玄関チャイムが鳴り響いた。

然し不思議と疑問符が生じた。

濃密な気配を発する”其れ”からは、未だに敵意を感じない。天の神の力を纏う存在——墮ちた勇者であれば、唯斗を家ごと吹き飛ばしても不思議は無いのだが。

大蛇と視線を交わし、小さく頷いた唯斗はカパカパとスリッパの音を立てながら玄関に向かい、躊躇なくドアを開いた。

「こんにはは、ゆーちゃん」

「……………ちっせえ園子だ」

「ゆーちゃんが大きくなったんだよ。…わたしも小さいままなんだろうけどね」

懐かしき神樹館の制服に身を包む少女。二年前の乃木園子と寸分足りとも変わらない、然し明確なベツモノである少女がそこには居た。

唯一異なる点と言えば、内包する気配と性格だ。唯斗の知る小学生時代の乃木園子は、今以上にテンションが高くマイペースで、命を賭ける日々には不相応なくらい年相応だった。

「本当はもうちよつと身長もあつただけどね…わたしの時間はあの頃から止まって、成長できてないからさ。…そんな性質が顕著に出ちゃって」

「そりやあ大変だ、話し聞こか?」

「……………でも、ゆーちゃんはちゃんと成長出来たんだね。あの頃は私もずっと小さかったのに、二年で見上げるくらいになって。饒舌に喋るようになったし、表情も豊かで…性別まで変わったね」

「おう待てや、性別は変わってねえから。女装はしてたけど正真正銘男だったからな!」

「……………そうだったっけ?……………ごめんね、色々忘れてるから…大切だったけど…わたしもミノさんも、そしてゆーちゃんも。結局は共依存してただけで、深く相手を知ってたわけじゃないからね」

「美森……………鷺尾須美は仲間外れか?」

「わたしの世界だと、鷺尾さんは初陣で死んじゃったから。…もう、顔も覚えてないんよ……………悲しいけど、記憶は操作出来ないよ」

唯斗の軽口を気にも止めず、少女は淡々と感情の滲まない声質で話続ける。彼女の元世界でなにがあったのか、大凡は察したが特段と掛けるべき言葉もない。

理解すべきは、誰が敵で誰が味方であるかのみ。得体の知れない少

女が次の瞬間には襲ってくる可能性だってある。

逆に今、唯斗が変身して少女をピコピコハンマーで叩き潰すのが一番平和な解決法になる可能性も否定出来ない。何をすべきか、未だ答えは導き出せていないのだ。

「——で、何しに来た？ ゆっくり話したいんだつたら茶とチョコくらいは出すぞ」

立ち話は構わないのだが、なにぶん二月であるので単純に寒い。熱は兎も角として、寒さは賢者と防人のシステムを併用したとしても防げない。

軽く震えながらジャージに生地を掌で撫でると、冷ややかであった。家の中とはいえ玄関なので、外よりはマシだがやはり寒いもの寒い。

「…何、しに来たんだろう…？ ……わたしね、ゆーちゃんとかミノさん…勇者を全員殺さないといけないんよ。そうするように造り替えられたから、それがわたしの『正義』になったの」

「の割に、乗り気じゃなさそうだな。…ま、取り敢えず上がれよ。余分にあるチョコをくれてやる、バレンタインだからな」

「そっか、じゃあお邪魔します」

律儀に靴を脱ぎ、並べてから少女は唯斗の後を着いて歩く。まだ、戦うつもりはないらしい。これまでも堕ちた勇者と何か違うのは、乃木園子であるからか。もしくは混ぜられた『正義』は皮肉にも少女自身を酷く曖昧な存在にってしまったのかもしれない。

居間で座る少女に紅茶と皿に盛られたチョコレートを差し出し、唯斗は向かいに座ってチョコでコーティングしたイカの姿フライを啜える。

「一応、殺るときは言えよ？ 家は壊したくないから場所を移したいし」

「うん、わかった」

「……んで、結局何しに来たんだ？ 仲良くなりたいたってんならお断りだけ」

「でも喧嘩はしたくないかな……殺すのがわたしの『正義』だけど、虐めるのは『正義』なんかじゃないし」

「Hey、リトルガール。間違えてるぜ？ワンツーマンの虐めつてのは格上と格下で成り立つんだ。つまり、テメエが俺を虐めるなんて十年早いんだよ」

「…すごいね、本当に。身体の全てを置き換えて、種も初代勇者の時代から撒いていて…神樹様側の最高戦力つてやつぱりゆうーちゃんなの？」

「いや？根性論最強の結城友奈と覇者道極めし犬吠埼樹が最高戦力だな。俺はサポーターだ、ちよつとばかり堕ちた勇者を屠れる程度の」
覇者つてる後輩はアレとして、結城友奈は誰よりもシステムに適合した勇者だ。在り方も生まれながらの勇者で、まるで物語の中で世界を平和に導く者。

天の神打倒を掲げる上で結城友奈は必須の鍵とも言えよう。システムがなくとも最初に至るとしたら、友奈なのだ。唯斗は断言する。異界で深く知った彼女はそんな存在だったのだ。

「結城友奈さん…主人公みたいな勇者だね。…こっちの彼女は、言うなれば魔王なのかな」

「魔王？道化の間違いだら」

「…道化で終わりたい、とは思ってるだろうね。でも彼女も特別製だから…希望すら呑み込むよ、際限なく。気を付けてね」

「刺客はお優しいコトね。惚れちまいそうだよ」

「彼女は明確な『悪』だから。そもそも天の神や数々の地祇は…善悪に関わらない存在だよ。でも大赦は四国を守る為に勇者を犠牲にするけど、独自の『正義』——人類生存に基づいている」

「ここにはどんな苦悩、冷徹な決断が孕まれているのか。少女も納得は叶わないが理解はしている。勿論、大赦だけでなく勇者や防人、教師に会社員、その全てが大きく掲げてはいなくとも『正義』を理解している。倫理故の正義か、本能的な正義かは人によるが、”正しい”と感じれるのは正義的な感性である少女は断言する。

「なのに、憤怒の勇者は自分の『正義』を知って『悪』を実行するんだよ？本当に…恐ろしいことだよ、悪意に染まりきるってのは。その末に何を望んでいるとしても、ね」

「…お前の掲げる『正義』は、自身に背く事なんだな。自分に嘘をつく奴は『悪』で、なのに善悪は敵味方に聞かない。難儀なモンだな」

「ずっと操り人形みたいな感じだったから。大赦の神官の言葉で動いて、神敵と殺し合いをして、みんなが殺されて、ミノさんに依存して、最後にはわたしだけ残った…それが勇者としてのわたしの生涯だったからね」

落ち着いた様子で紅茶を口に含む。少女は壮絶な人生を語るが、なのに当の本人は軽い昔話でもするかのように軽く話す。

そも、正義の勇者にとつて究極的には正義も悪もどうでも良い。嘗て、他人の正義を掲げて仲間を死を無理やり納得した。他人の正義に乗っかり、仲間が全員死んだ。

故に、正義の勇者は決して他人の正義を認めない。他人の正義を認めず、悪も忌む。然し否定はしない。正義を掲げていても、正義を理解して盲信する事は出来ないのだ。

「……チョコ、美味しいね」

「そりゃあ良かった」

「お菓子どころかご飯も暫く食べてなかったんよね。ミノさんが死んで、散華で何も出来ない状態になって。何も食べなくても良い体になってたから。まあ、咀嚼すら出来なかったんだから食事なんて儘ならなかったんだけどね」

「大層退屈そうだな、食事は命の起源なのに」

「他人の事みたいに言うんだね……ゆーちゃんだって同じなのに。御姿だから、本当は食事による栄養補給なんて必要ないんでしょう？もう、人間じゃないんだから」

「失礼な、ちゃんと人間だったの。息をして、飯を食って、笑って泣いて、学校に行ったり風呂に入ったり、寝たり、娯楽を求めたり。それを人間と言わずしてなんと言うのか。身体なんて人間性には何の関与もしてねえわ」

唯斗の身体は全て散華し、山田くんが造り換えた。同様に友奈も全てを捧げて神樹が構築した身体になっている現状。本来ならば食事の実用性も皆無なのだが、”空腹感”は身体に備わる機能として付与

されている。

食べなければ腹が空き、食べれば膨れる。御姿ではあるが、それでも人間とは何も変わらない。少なくとも本人が人間であると認識する間は唯斗も友奈も人間だ。

そも、友奈に至っては御姿であることは神官より報されているが、生身の肉体との違いには気が付いていない。自覚出来ないほど、再構築された肉体は人間そのものなのだ。病気への抗体や少しばかり長い寿命はあるが、それも何百年と続くわけでもないのだ。

「じゃあ、わたしはもう人間じゃないんだね…きつと。食べなくても平気だし、寝なくても生きられるし、笑えないし泣けない。ゆーちゃん、やっぱりわたしは化け物なのかな？」

「ハッ、それを決めるのはお前だろ。手前の在り方は手前で定める。人間だろうと化け物だろうと、俺のお前に対する接し方は変わらねえよ。お前は俺達の敵で、対立する正義。そんだけだね」

「そっか」

短く答え、少女は立ち上がる。

冷めきる前に紅茶は飲まれ、透明感のある紅茶色の跡を残したティーカップと数ミリ程度のチョコの欠片が残る皿は、ダイニングテーブルに置かれたままだ。

水に漬けるくらいの配慮はして欲しいくらいだが、見た目も精神も小学生で止まっている少女に言っても虚しいだけなのだろう。

小さな少女は曇る眼を向け、無機質に微笑む。

「外、行こっか。遠い場所…人のいない所の方がやりやすいでしょう？」

「嬉しい配慮だな。抱き締めたいくらいだ」

「ゆーちゃん、幼いわたしの方が好み？」

「馬鹿言え、年上の妖艶かつミステリアスな女性が好みだったの。それかつンデレだな」

軽口を叩きながら台所に食器を持って行き、水に浸してからガスの元栓を締め、各電気を消す。外出ように着替えようとも考えたが、変身するのであれば服装はあまり関係がない。ジャージ姿でも問題は

ないだろう。

家の鍵だけを持って、上着を羽織る。

「じゃ、行くか」

「…何処にする?」

「人目のない場所、ねえ……」

候補は幾つかある。普段の鍛錬で使用している、乃木家所有の私有地。今朝も三好夏凜と利用していた浜辺、嘗ては鏑矢の少女達が精霊によって鍛えられていた洞窟——賢者と堕ちた勇者が戦う場所として、狭い場所や一般市民に被害が及ぶ環境は選べない。

思考を重ねた末、やはり思い付くのは夏凜と使っている浜辺だった。あそこならば人目には付かず、万が一には神樹の人払いが発動する。

そして過剰な戦闘を繰り広げたとして、舞うのは瓦礫ではなく砂と海水程度だ。足場が砂浜なので不安定ではあるが、そも、束ねる者賢者の権能を活用すれば空中でも地上戦と同様の動きは可能だ。

「……おっけ、決まった。有明浜に行くぞ」

「うん。じゃあ名残惜しいけど、行こ——わっ」

「着とけよ。外、寒いから」

リビングクローゼットの奥から出したコートを少女へ投げ渡す。

唯斗が中学一年生の頃、つまりは一年前まで使っていた物だ。

一年前までは今の樹くらいの身長だったのだが、ここ最近は身長の伸びが著しい。夏までは風と同じ程度だったが最近ほんの少しだけ上から見下ろす機会が増えた。

郡唯斗の可能性の一つである精霊ユイトが190cm近くはあったので、同じようにイカの姿フライを食べ続けたら同様かそれ以上には成るだろう。

「いいの?……優しいね」

「は?優しくなんかないが?ちよつとばかり昔のコートを血染めにしたいだけなんだが?」

「わあ、猟奇的。……残念だけど、返せないかな。もしも万が一、わたしが負けて死んじゃったとしても……これだけは地獄まで持って行

くからぬ」

「冥土の土産ってか？ならば是非、イカの姿フライを——」

「あ、それはいらぬかな」

「……罪の意識、か…贖いたいから、自らを罰する為にイカの姿フライを禁じるのか…大した精神力だ」

「そうかな…そうかも…？いや違うけどね」

「いい、皆まで言うな！俺も一時は気の迷いで半日…いや、六時間はイカの姿フライを禁じた経験がある…アレは…肉を削がれるが如く辛くて、耐え難い。お前はそんな苦痛に苛まれて、それでも『正義』に殉じようとしてるんだな」

「……………イカの姿フライよりも、うどんの方が好きかな」

「テメエ、この…ツ！そこまで天の神に改変されやがったか!!行くぞゴラー！早く終わらせて、魂だけでも正常に戻してやる!!」
「豹変しすぎてびっくり…………」

幼い少女を小脇に抱え、唯斗は窓から飛び出した。目指すは有明浜。肌を刺す寒さをイカの姿フライで緩和させ、少女の口にもイカの姿フライを振じ込む。

——これから始まるのは、酷く私的な戦いだ。正義の少女も唯斗も、世界滅亡や世界平和を目指したりはしない。それは自分ではなく仲間の目指す結果であり、唯斗は、少女は、使命ではなく己の感情に従って命を刈り取るのみ。

開戦は近い——

殺意のない殺し合い

——2月14日。

唯斗と正義の勇者との邂逅、それと同時刻。彼を除く勇者部の面々は犬吠埼家に揃っていた。

「——さて、今年はこのアホ斗に吠え面をかかせてやるわよ!!」

「……………はあ」

「何よ夏凜、テンション低いわね」

朝っぱらから声高々に宣言を口にする風とは対照的に、夏凜は陰鬱な表情で溜息をつく。彼女達の過去に何かがあったのは想像に難く無いが、然し郡唯斗という少年がやらかしているのはいつも通りとも言える。

「で、部長さん。あのバカ斗は何をやらかしたんで？」

雪花の質問に感慨深く頷き、風は端的に語る。

「——女子力を、越えられたのよ…ツ!!」

「は?」

「…夏凜ちゃん、あれは——去年の事よ。去年は当然、私や友奈ちゃん、唯斗君は一年生で…風先輩は二年生だった頃。ば、ばれ…:当祝事日、事件は起きたわ」

「唯斗くんがね、すっごく美味しいチョコを作ったの!それで、その…風先輩が悔しそうにしてて…」

「あー、オツケー。もういいわ。九割は理解したから」

「そう!あの男はアタシのプライドを傷付けたわ!!絶対に許さん!!」

「ええ…それって去年の出来事なんすよね?」

「…銀先輩、お姉ちゃんはかなーり根に持つタイプです。一昨日、私が勝手にプリン食べたことも日記帳に記録しているくらいなんです!」

「それはいつつんも悪いと思うけどなあー」

去年の屈辱を晴らそう、との事。然し現実問題、普段の料理ならいざ知らず、菓子全般においては唯斗に一日之長がある。

故に風が策を凝らすのも当然の理であり、女子力が脅かされたから女子全員の問題にまで消化させたのには夏凜も再度溜息をこぼしてしまう。

無論、ただ唯斗に負けを認めさせたいのであればイカの姿フライにチョコでもぶっかけておけば良いのだが。風の女子力的には正々堂々と打ち負かしたい所存。

「つてなワケで、数打ちや当たる作戦と？ナハハ：センパイはプライドがあるのかないのか」

「せつちゃん、これは女子全員の問題だって先輩が言ってたよ？だから全力で打ち倒せー！だって」

「…アタシ、洒落たお菓子なんか作り慣れてないんだけどなー。いや、まあ…料理下手でないしレシピ見たから、それ相応のは出来たけどさ」

「……………私は自信ないわ」

銀は昔から親の手伝いで鍛えた料理の腕があり、現在は一人暮らしをしている為に存分に振るっているが。夏凜は弁当と煮干し、サプリにうどんのみで過ごしているのだ。料理に関しては樹よりも数歩マシ程度だろう。

「…それで、風先輩。本日の作戦は？」

「良い質問ね、東郷！まずは全員で唯斗を取っ捕まえて、椅子に縛り付けるわ。そして……………うん、そうね。順番にお菓子を渡して屈服させるわ」

「おお、フーミン先輩らしいアバウトかつアヴァンギャルドな作戦かも〜？」

「……………で、肝心の唯斗は何処にいるのよ」

「はあ？そりやあ自分の家に……………え、居るわよね？」

「何ともつすねー。私、唯斗の行動なんか読めませんし。園子は？」

「——ズバリゆーちゃんは、イカの姿フライと共に在るのだー!!」

「そんなくらいアタシでも知ってるっつーの。てか、一緒に住んでるのに分かんないのかよ…」

呆れる反面、銀も心の中で肯定する。昔ながらも相棒ではあるもの

の、一度だつて予想通りに動いてくれた試しがない。その例に乗っ取ると、今も在宅ではなく何処かで遊び呆けているか、若しくは敵とでも相まみえているのか。

最終的にはイカの姿フライを釣竿の先に吊るして街を練り歩けば、分身体くらはいは飛んでくるのだろうか。相変わらずな相棒の顔を思い浮かべ、銀は苦笑した。

「ま、まあ！兎にも角にも、あのバカを捕まえないと話が進まないわ。東郷、早速だけと唯斗に連絡を——」

「します」

「アツハイ」

「ですが……繋がれません。この時間の休日なら、家で鳥賊の姿揚げを頬張っている時間帯ですが……」

「何で把握してるんでしょーね。あ、今の質問なかったコトにして。聞くの怖いから」

「せつちゃん？」

「やめて。純粹無垢な目で私を見ないで……東郷の奇行が想像出来てしまう自分がアレに感じちゃうから……」

雪花にとつて、周りからの評価は置いといて、自分は常識人であると自負している。だからこそ変人の代表格である唯斗をも慄かせる東郷美森の恐ろしさを理解し、思考の方向性が読めてしまう事実に項垂れる。

東郷に代わって園子が電話をかけようとすると、彼女の動きが止まる。

「……ありや？」

「園子？どうし………なんかお前のネックレス、光ってない？」

「光ってるねー。いっつん、部屋の電気消してくれる？」

「は、はいー」

——端末を片手に、園子は自らの異変に気が付く。

胸が——否、服の中に隠れているネックレスが光っているのだ。それは数ヶ月前、園子が唯斗から受け取った蒼羽だ。小さく、それでいて頑丈で神秘的な鴉の羽。

唯斗の精霊《蒼鴉》に関する物で、園子の満開に新たな可能性を齎したアイテム。乃木家に強く関係する物であるのは園子にも分かっていたが、突然光り出すとは思ってもいなかった。

そして、単に光っているわけでもない。一定のリズム、規則性、テンポ。点滅しているのだが、意味がないとは思えない。

樹が電気を消してカーテンを閉じた途端、光の点滅は部屋中に広がる。

「んー、コレは……」

「…そのつち、それって…」

「うん、ゆうちゃんから貰ったペンダントだよ。いきなり光り出すってことには何か意味が……あ、モールス信号かな。もしかして和文モールス？ ツー・トン・トン・ツー、トン・ツー……ユイト、キケン……なるほど、ゆうちゃんが危険かあ……え？」

「は？ えっ……唯斗が危険……!? ちよっ、どういう事よ!？」

珍しくも園子が漏らした焦り声に感化され、夏凜も動揺する。何事にも突然過ぎる報せだったのだ。天の神に目を付けられ、一日足りとも安心安全な日々を過ごした覚えもないが、然し単独行動で最も安全なのが郡唯斗なのだ。

単純な戦力でも随一で、それに加えて分身と賢者束ねる者の権能によって数の利もあり、手数や切り札の数、戦術、単体での性能に関してもかなりの信頼がある。

—— 故に、なぜ危険なのか。

バーテックスや堕ちた勇者程度、危険とは程遠い。相性によっては多少の苦戦はするだろうが、決して負けない。勇者部の誰であつても、そう断言出来る。

「—— 落ち着きなさい。唯斗がそこらのヤツに負けるなんて有り得ないし、何なら時間稼ぎが大得意な男よ。冷静に動けば大事には至らないわ」

「ツスね……まずは勇者アプリで場所を確認して、唯斗んトコに行つた方が良さそうすね」

信頼があるのだろう。だからこそ風と銀は冷静に状況を見極め、取

るべき行動を選択する。今、彼女たちに出来るのは慌てふためく事ではなく、一刻も早く唯斗の元へ駆け付けけることだ。

普段なら無理だが、唯斗が賢者システムを使用しているのであればアプリでの追跡も可能だ。アプリが指し示すのは海方向——有明浜。「チツ、昼間つから堂々と変身するワケにもいかないし……走るわよ！着いて来れないヤツは置いて行くんだから!!」

「うへえ……置いて行かれないよう、程々に頑張るかー」

「行こう！唯斗くんを助けに!!」

——友奈の宣言を総意に、勇者達は犬吠埼家を飛び出した。



「ふっ——せいっ！」

「おわっ……とっ」と

黒い瘴気を纏った槍が唯斗を穿とうと迫り、寸前で紫紺の槍で弾かれる。だが同時に真上から黒い槍先が何百と降り注ぎ、それに槍の盾を展開して対応する。

激しい金属音と硝子の破れるような音が海岸に響き、だが二人が手を止める事は無い。少女が距離を取ろうと下がる刹那、唯斗は無造作に槍で空間を薙ぎ払い、光を纏う薄い槍先を無数に投擲するが展開された盾で全て防がれる。

使い方は異なれども、同じ武器での戦闘は拮抗している。無論、双方共にまだまだ余裕は残している。

「うーん……じゃあ次は、大剣で往くね」

「おっけ。チビが大剣を使うって、浪漫だな」

「どうせ借り物の力だし、体格はあんまり関係ないんだけどね」

少女が虚空を撫でると、灰の塵が手元に集まって大剣が構成された。傀儡の勇者の武器とは決定的に違い、醜い肉質の物ではなく、禍々しい漆黒ではあれども立派な大剣だ。

「わたしの能力はね、再現だよ。絆を結んだ仲間の武器を再現して束ねるゆーちゃんとは対処的に、わたしに多少なりとも敵愾心を抱く勇

者の武器を再現して改造する——ゆーちゃんへの対策なんだろうね、わたしは」

「ネタバレ早いなあ」

「隠すものでもないからね」

正義の勇者は漆黒の大剣を構えると、巨大な剣刃が無数に展開される。勇者である乃木園子の武器特性、槍先の顕現と操作を大剣にも付与したのだろう。

ならば当然、風の大剣の武器特性である巨大化や最小化も行えると考えるのが道理であり、そも、銀の炎や友奈の対敵特化、東郷の遠距離精密狙撃も使えるのだろう。

今までは自分がやっていた戦法が、自分に向いた途端に面倒臭く感じてしまう。

「なら、こっちはインファイトで往くか」

「同種の武器対決は終わり？」

「罅が明かんだろ……素で俺より高スペックで、しかも俺よりも器用で奇想天外な手を使ってくる奴が相手なんだ。一々競つてなんかいられるかよ」

「…そっか」

右手に純白と紅の箆手、左手にお鍋の蓋を展開する。箆手は単純火力であれば対特攻性能抜き結城友奈を超える、嘗ては鏑矢だった少女の武器だ。結城友奈が連撃重視なのだとしたら、こちらは単発火力に秀ている。

左の盾を前に、半身で右手を奥に引いて構える。

風が頬を撫で——次の瞬間、少女が肉薄して大剣を叩き付ける。それを横から殴りつけ、刀身を逸らさせて空いた胴体に脚撃を放つが、淡い剣刃が少女を護る。

同時に、先程と同様に真上から顕現された剣刃が唯斗を両断しようと降り注ぐが、お鍋の蓋で受け止める。

《↑コンバート
吸収》

今回はお鍋の蓋の反射^{リフレクション}を発動させず、最大蓄積からの衝撃解放<sup>マキシマムチャージ
リリース&インパクト</sup>を狙う。

取れる手段は多いが、それは相手も同じだ。互いに相手の攻撃への対応と反撃を同時進行でやらなければいけない。故に、大抵の敵には有効な分身も今ばかりは思考を割けないので、安易には発動出来ない。

「もつと激しくするよ……！」

「宣言するとは優しい！」

大剣が横薙ぎ、お鍋の蓋で受け止めた刹那——大剣が解けた。

「っ！」

「捕らえたよ」

大剣は解け、ワイヤーとなって唯斗に絡み付く。そのまま侵食する様に黒い鉄糸が唯斗を蝕み——途端に縛りが弱くなる。

その隙に展開した槍先でワイヤーを切り裂き、苦笑を漏らしながら難を逃れた。

「……あれ？内側から押されて……？」

「もしもの保険、大事だぜ？」

「……そっか、最初から服の下に仕込んでいたんだね……ワイヤー。油断出来ないね」

「油断してるヤツが初見殺しで攻めてくるかよ」

もしもの時に備え、唯斗は賢者の衣装や防人の鎧の下にワイヤーを仕込んでいた。単純な防具としての側面もあり、今回のような際には変幻自在な動きでの対応。

樹の形態・戦乙女を参考にした作戦だ。そも、樹は唯斗の mode

wear bear を参考に行っているのだから、何処までも相互関係に在るのだろう。

構え直し、今度は唯斗から攻める。

足元に護盾を斜めに展開し、その下に紙飛行機爆弾を一つだけ出現させる。唯斗が踏み込む刹那、爆発により盾が唯斗を押し出し、高速で右の拳が振り抜かれた。

少女が展開した炎を纏う双斧とぶつかり、拮抗し——唯斗が競り勝ち少女が長く後退する。

だが、正義の勇者は園子の頭脳と発想力を持つ存在だ。やられて終

わり、だけの道理もない。

「——焰よ、猛れ!!」

「っ！グッ……！」

——双斧による炎の逆噴射。

砂塵を巻き上げ、接近した瞬間。片方の斧を唯斗へ向けて炎の暴風を叩き付けた。瞬間的に護盾を展開するが、莫大な熱量は外で活動する防人装備でなければ致命的な大火傷に至っていただろう。

勇者よりも防人が唯一勝っている点、それが耐熱性だ。外で活動するには炎の海でも動けるだけの耐性が不可欠で、逆に結界内で神敵を迎え撃つ勇者には無用だ。

「あっちいなア……!!」

「……普通は熱いだけで済む火力じゃないんだねどね」

「お返した、クソツタレ!!」

左手に雪白の氷を展開し、右手の籠手に叩き付けて付与する。そのまま大袈裟な素振りですッパーカットを空中に繰り出し、氷の杭を少女の小さな身体に突き刺した。

無論、少女とて案山子ではないので黙って受け止める事もない。再び斧に炎を纏わせ、反撃する刹那——少女の表情が苦悶に歪む。

莫大な熱と、氷の杭。相対する真逆の其れがぶつかつたらどうなるのか。少女の思考が追いつく間もなく、其れは起こつた。

「——水蒸気爆発」

「ッ!?!」

灰色の煙が解放され、少女を無常に飲み込む。砂塵が唯斗の肌を叩き、空気が弾かれて一瞬だけ呼吸が出来なくなる。

落ちた勇者がああの程度で終わるわけもないが、多少のダメージは期待したいところだ。数秒が経ち、煙が自然に落ち着くよりも早く、少女の大剣が扇のように振るわれて砂と煙を吹き飛ばす。

「いてて……ゆーちゃん、酷いよ」

「どの口が言うんだよ。防人装備じゃなければヤバかったんだぞ」

「そうだね……惜しかった。長引かせるのは、苦しませるのは『正義』じゃないからね」

「でも殺すと。そりやあまた、愛らしい『正義』だコト」

大切な人を苦しませるのは、少女の掲げる『正義』ではない。だが明確に、そして歪みきって、少女の頭では『勇者を殺すのが正義』と定まってしまった。

矛盾を自覚しながら、然し次の瞬間には否定する言葉を失って肯定しか出来なくなる。『正義』に妄執し、『正義』に贖罪を求め、『正義』に怨恨を向ける。

何を成し、何を目指しているのか。もう少女には分からない。自分が誰なのかも、もう自信が持てない。

（――あ、ああ……は、はやく……早く、ゆーちゃんを楽にしてあげないと……なんで？……ううん、そんなのはどうでもいい。わたしは、ゆーちゃんやミノさんを助けたくて……どうして、助けるのに殺さないと……違う、そんなの関係ない。わたしは……ゆーちゃん達を殺さない。それが、それだけが正義だから……！）

惑う少女は本能的に武器を顕現させ、また唯斗へ斬り掛かる。殺意はなく、慈悲の心で命を狩り取ろうと藻掻く。命が果てるまで、ずっと――

『死』

「クツ…ハハツ」

——喉の奥から笑い声が漏れる。

「良いぜ、良いなア……もっと自由に、もっと楽しく——」可憐に、
”一緒に踊ろう”ぜエ!!」

昂っていた。

否、己を昂らせていた。こうでもしないと目の前の驚異に慄くから、唯斗は敢えて笑う。笑って、余裕を演出するのだ。

猛る声と同時に、唯斗の周辺に夥しい量のオンシジュームの花卉が出現する。彼の感情に合わせて光り輝き、果てのない無限の可能性を『束ねる』。

防人の軽鎧は雪白の氷が付与され、輝きだけではなく防御力も増す。炎を纏う紫紺のチェンソーは両手それぞれに握られ、背からは蜘蛛の足の如くワイヤーで作られた八本のアームが顕現される。

脚には二つの湾曲する刃——小型のデスサイズが鞭によって無理やり括り付けられており、唯斗の周辺に浮遊している無数の蒼い中距離銃やスナイパーライフルは彼の任意で武器にも盾にもなるのだから。

勇者よりも改造された怪人ヴィランに近い装備となった少年を眼前にして、少女は少しだけ眉尻に皺を寄せた。

「……異形、だね……？」

「ああ、その方が楽しいだろ？オンシジュームは可憐な”遊び心”を持って、共に踊れって言ってるんだからなア……！」

「あの頃のゆーちゃんと同じだ……豹変——いや、自分を騙してでも強く在ろうとする臆病さの表れかな」

「ハツ、何でも良いよ。今はただ、俺の全てを使ってテメエを殺すだけだ。馬鹿でも分かる寸法だからよ……天才だったお前が分からない道理もねエだろ？」

「そうだね。そう、在ったから……悲劇が起こったのかもね……！」

「——っ！」

少女は夏凜の扱う双刀を手元に出現させ、唯斗の喉元を目掛けて斬り掛かる。最短距離且つ超スピードでの刺突はギリギリで躲されて薄皮のみを破いた。

もう片方の刀は甲高く唸るチェンソーに叩き落とされ、不利を悟った少女が距離を取ろうとする所へ唯斗が接近する。

「逃げんなよ、セニョリーター！」

「…執拗い男の子は嫌われちゃうよ……！」

中距離銃での乱射は唯斗の月面蹴りムーンサルトキックと脚に括り付けたデスサイズで弾かれ、同時に唯斗が放った空中に浮く銃での攻撃も槍の盾で防がれる。

着地し、背の触腕で持っていた斧による炎のジェット噴射を利用して再度急接近を計った。

少女はチェンソーでの攻撃に備えて目の前に犬吠埼風の大剣を盾として出現させるが、視界が大剣で遮られる刹那——少女の目に映ったのは巨大な玩具にも見える無数の巨槌、ピコピコハンマーだ。

唯斗の背に生えるワイヤーの触腕はそれぞれ八個のピコピコハンマーを振り被り、唯斗が結城友奈の籠手を装備して勇者パンチを繰り出すのと同時に全てのインパクトが大剣へ注ぎ込まれる。

「勇者。パアアンチイ!!」

——ビツツツゴオオオンツ!!

物姿に似つかわしくない轟音が打ち響き、大剣を砕きながら少女を後方へ吹き飛ばした。

「っ!? うっ……ぐっ!!」

砂浜に数度背を打ちつけた少女は苦々しい表情で起き上がり、また槍を出現させて構える。外は酷く寒い筈なのに、唯斗も正義の勇者も頬に汗が流れていた。

「ナンパってのはなあ、執拗くて粘り強いモンなんだよ。覚えて逝けや」

「……女の子は、強引さよりも紳士的な態度の方が好きな子もいるんだよ……ねっ!!」

「……っ！なるほどな、参考にさせてもらおう!!」

少女が強く砂浜を踏み締め、暗雲の如き暗闇を浸透させた瞬間。広範囲に渡って武器が顕現されて地面に突き刺さる。何百もの槍、銃、大剣、斧、刀、小太刀——ワイヤーで紡ぐ腕には桜色の籠手が装備され、唯斗に倣って少女もまた背中部分から生えさせる。

「手数勝負、しよ？」

「んだよ……楽しそうだなア！」

唯斗もまた、白銀の籠手で砂浜を殴りつける。オンシジュームの花弁が砂浜を花畑へと塗り替え、突き刺さるように顕現するのは岩、投槍、薙刀、弓矢、ピコピコハンマー、旋刃盤、木の枝——そして両手には桃色の籠手と紅い籠手を纏う。

背の触腕は狙撃銃を構え、少女と十数メートル程の距離を保って向かい合う。

「——さあ…始めようか、セニヨリータ。俺達のダンスパーティーを！優雅にいこうぜ!!」

「——やろう、終わらせよう……わたしのアミーゴ^{お友達}。そうなる可能性があった男の子…わたしは、『正義』を実行するよ」

始まりは少女だった。

走りながら掴んだ銃で放つ弾丸を、唯斗の触腕が無数の銃撃で相殺する。そも、正義の勇者と唯斗では前者の方が圧倒的に火力が勝る。故に、同数の手数では唯斗が負けるのも時間の問題となるのだろう。

だからこそ唯斗は自身に備わる賢者の権能を、そして束ねれる可能性を無限に探って対抗する。

「ふっ！はあっ!!」

「攻撃が！雑！過ぎる!!だろオ!!」

「今のわたしなら…こうした方が！有効だからね!!」

止まることなる走り抜ける少女。コンマ一秒前を通り抜けた砂浜に無数の矢が突き刺さり、然し其れに目もくれずに少女は身体ごと回転させて大剣を投げ、手を離れた瞬間に乃木園子の槍の権能——刃部分の無数展開が付与される。

大剣と巨大且つ無数の刃が唯斗に飛来し、両手のピコピコハンマー

で迎え打つ。ピコピコハンマーは見た目通りに軽く、それを賢者と防人を総合させた筋力で振るうのだから相当なスピードとなる。

瞬間的に五回ほど振られたピコピコハンマーは大剣をそのまま打ち返し、顕現されていた刃は硝子のように粉碎した。

「くっ……い」

打ち返された大剣は少女の背に掠って体勢を大きく崩すが、然しワイヤーの腕で無理やりにも持ち直す。

武器の投げ合いは例えこの場に他の勇者や落ちた者共が居たとしても、割って入る事は叶わないだろう。互いに走り、投げ、弾き、接近すれば身近にある武器を打ち付ける。

唯斗の投槍は銃弾で撃ち碎かれ、その隙に少女が斧を投擲すれば唯斗がピコピコハンマーで反射する。

「なら——これは打ち返せないよ!!」

駆け、少女が前方に転がって抜き取ったのは小太刀だ。三好夏凜の扱うサイドアーム——その性能は任意での爆発。

立ち止まった少女は先程と同じように槍の権能を付与し、触腕と時間差で投擲するそれは瞬く間に何十、何百、何千と数を増やして爆弾の嵐となる。

「おいおい、マジかよ……い」

死の気配を察知した唯斗はピコピコハンマーを投げ捨て、少女と同様に夏凜の爆発する小太刀を何十と顕現して触腕と両腕で投げる。無論、それだけでは数も威力も劣る——故に、唯斗は小太刀に紙飛行機を”束ねた”。紙飛行機は満開時に使用すれば獅子座オと同威力の爆弾となり、だが満開をしていない現状ではそこまでの破壊力もない。

だが、それを同系統の性能を持つ小太刀と束ねれば——

「弾けるやア!!」

「負けないよ!!」

誘爆を誘って迎え撃てる。だが、拮抗するように見えた押し合いも徐々に押され、爆発は少しづつ唯斗を飲み込み始める。

生成のスピードが間に合わず、彼女のように槍の権能を付与する暇

もない。熱風が肌を焼き、防人の軽鎧に付与された氷が溶け始めた。唯斗の投げる小太刀は轟音を立てて何百も巻き込み、少女の小太刀を誘爆させ。然しその爆煙を別の小太刀が斬り裂いて唯斗の眼下で爆発する。

「ぐっ……！」

それが合図となったように、少女側の小太刀が唯斗へ被弾し始める。そして遂に――

「――わたしの勝ちだよ……！」

「――っ!!」

少女の宣言と同時に、拮抗は完全に崩壊した。

小太刀は絶えず爆発を引き起こし、槍の権能で量は増える。爆炎で唯斗の姿が完全に隠れてからも少女は手を止めない。

彼が分身体でないのは気配や勘でなんとなくわかる。そして、今もまだ爆発の中で身を晒しているのも分かった。故に少女は続ける。

どれくらいの間が経っただろうか。

肩で息をする少女は攻撃を止め、目を凝らして煙の先を見据える。

「……………ゆーちゃん、勝ちだよ……わたしの」

勝利を確信し、少女は背を向ける。

爆煙の中に見える少年はうつ伏せに倒れ、酷くボロボロだ。防人衣装の防火性能によって原型は保っているが、然しそれでも辛うじて見える腕や首周りは火傷が酷い。

顕現していた武器が全て消えているのは、もう彼に余力が残されていないからなのだろう。

放っておいても直ぐに死ぬ。少なくとも、少女が他の勇者を狩っている間に力尽きる筈だ。

そう、少女の並外れた直感が告げていた。

――だから、少女は気付けなかった。

未だ変身が解かれていないのは、彼にまだ戦意が残っているからだ。うつ伏せに倒れているのは、其れを隠すためだ。

唯斗は素早く起き上がり、其れ――お鍋の蓋を少女へ向ける。

「——勝利、宣言……は、まだ……早いぜ……ッ!!」

「っ!？」

《マキシムチャージ最大蓄積——リリース&インパクト衝撃解放!!》

「えっ——」

瞬間、罅が入り焼き焦げたお鍋の蓋から極大で純白のレーザーが放たれて正義の勇者を完全に飲み込んだ。

十数秒に渡るインパクト衝撃は砂浜を抉り、海を裂く。やがて徐々に収まるその先には——無数の武器を展開して防御しながらも全てが破壊され、本体もまた致命的なダメージを負った少女の姿があった。

フラフラと虚空へ手を伸ばし——然し少女は仰向けに倒れた。

「…俺の、勝ちだな」

「……………わたしの…負け…?」

「悪いな、お前の正義も俺にとっては悪なんだよ。だから、受け入れねえ。勝った方が正義なんて言わねえけど、お前は負けたから正義なんかじゃねえんだ」

「…………正義、じゃない……………は、はは…そっかー、そうだよね…………わたしは、正義なんかじゃ…ない…………友達、が…死んでも…う、け…入れて…身を、削つて…………戦い、続け、る…の…………なんて…………正義、じゃない…………よ、ね…?」

「おう、否定してやるよ。安心しろ…………園子、それはお前の正義なんかじゃない」

「——ありがとう……」

負けて、正義を否定されて。でも少女——乃木園子は可憐に笑った。正義の勇者にとって、正義とは千差万別なモノだった。

誰かにとっては悪でも、また別の者にとっては正義。だから物事の全てには正義が在り、どんな事象も己が正義の勇者である限りは否定出来ない。

だから、仲間の死も”正義”だった。

——そんなわけがない。そう否定することも出来なくて、泣きながら受け入れるしかなかった。誰も否定しない。寡黙な少年は言葉を紡がず、ワンパクに振る舞う少女はよそ見なんてしなくて。だから園

子も正義を疑わなかった。

本当は誰かに否定され、そんなのは正義じゃないと言われたかった。自分はマイノリティなんかではなくて、ちゃんと普通の少女で、友達の死を嘆いて泣き続けられる女の子であると肯定されたかった。

この日、初めて少女は解放された。

「……ゆーちゃん……お願い。わたしを……正義の勇者を終わらせて、乃木園子に……戻して……?」

「安心しろ。魂を枯枯れさせること花なんてさせねえよ……あの世で仲間には叱られてろ、無理しやがってってな」

「……うん、ありが——あ?」

「……………は?」

瞬間、唯斗の脳は目の前の光景を受け入れられなかった。

——巨大な顎アギトが正義の勇者を貪り喰らう。水袋が破裂するような音と、次いで聞こえるのは微かな悲鳴と硬質的なナニカが咀嚼され、すり潰され、生命を冒瀆して強制的に終わらせるには十分過ぎる音。

顎アギトから視線を辿ると、復讐の勇者——結城友奈だった成れ果てがいつの間にか眼前に現れていた。

酷く陰鬱な表情で振り抜かれた腕はクロスして防御した唯斗の腕をひしやげさせ、抵抗も許さずに胸を貫通した。

「て、メエ……ッ!!」

「はーい、本命とーじょー。そしておーわりつと」

「ガッ……く、ソが……!」

胸が熱い。赤黒い血が滴り、次の瞬間には溢れて止まらなくなる。皮膚を突き破り、肉を抉って骨も砕かれ。左肺ごと心臓を穿たれて、そのまま背中肉も破れた。

幾ら賢者の権能が人智を外れて強大であったとしても、人間の死ま

では覆らない。まもなく、唯斗は死ぬのだろう。それこそ呆気なく、数分もすれば物言わぬ死骸を晒す事となる。

「アハッ、アハハ……アハハハハッ！なあんだ……終わっちゃった。コレも神様の望んだ未来、なのかもね」

狂ったように——否、狂いきつて嗤う少女へ言葉を返すが、然し唯斗の視線は全くの別方向へ向いていた。

「……！」

「……！！」

「……！！」

ずっと向こう、声すら聞こえないほど遠くに勇者部の皆が見えた。全員が揃って此方に走り、次々に勇者へと変身している。

だが、遠すぎる。勇者の身体性能であつてと数十秒は掛かる距離。復讐の勇者も気付いていて、だが見せ付けて嘲る。

「死に際だよ？皮肉とかじゃなくて、遺言とかないの？ちゃんともんなに届けるよ？知ってるでしょ、私は律儀なほうだって。まあ、みーんな天国には送るんだけどね！」

「……ハッ、無理……だ……よ……テメエに……は……」

「そっかあ、それが最期の言葉ね。……じゃあね、唯斗くん。私の事が大嫌いだった、私のお友達」

「……シネ、ばーか……」

悲しそうに笑った少女は唯斗へ腕を通したまま空高く浮遊し、海へ投げ捨てる。

——2月14日、郡唯斗は死んだ。

信じて、待って

「あつ……ああああ!!」

唯斗くんが……私と同じ顔の人に胸を貫かれている。赤い血が滴って、そのまま空に連れ去られて……あの人が嘲るように私たちを眺めながら唯斗くんを海に投げ捨てた。

血で赤い軌跡を描いて——次の瞬間には私は唯斗くんを追って海に飛び込もうとしていた。

「唯斗くん！唯斗くん!!あ、ああ……ッ!!」

「あーあ、また間に合わなかったね。わたし……アナタはいつつも、間に合わない。期待してたんだけどね」

「うるさいっ!!」

「おっと……」

何が……何がッ!!わたしの顔で、私の内面を見透かして、諦めたように語らないで……!!まだ、救えるかもしれない!唯斗くんは誰よりも強いから……死ぬ筈がないんだ……!!

目の前に舞い降りて憐憫を向ける結城友奈敵を殴り飛ばして、私は海に身を投げた。

海水が肌を刺すような感覚は冷たいと言うより、痛い。勇者に変身している私でも長時間浸かったら死んでしまいそうで、だからこそこんな中で海水を赤く染めながら落ち続ける唯斗くんにはもつと毒だ。体が鉛みたいに重い。

唯斗くんを喪ったら、私は復讐あの勇者人と同じになってしまう。だから怖いんだ……大切な人を失って、そんな私は復讐あの勇者人と同じく何処かの誰かの、大切な人を殺して……そんな未来が脳裏を過ぎって、絶対に阻止しないとイケないと本能が叫んだ。

「っ……!!」

見えない……!水の中は暗くて、唯斗くんの姿が見えない!!

血で出来た赤い軌跡を辿っても、矮小な私なんかじゃあ唯斗くんの

手を掴むことは出来ない。私は樹ちゃんみたいにワイヤーを操ることなんて出来ないし、園ちゃんみたいに奇想天外な手段で現状をひっくり返すことも無理だ。

……私は、弱い……

「……………つ、ゴボツ……!」

やがて水の中の活動限界を向かえた。

意図せず鼻で海水を吸ってしまい、そんな小さいきっかけで私の喉から大量に空気が吐き出された。きつと今すぐにでも海から出ないと、私は死ぬ。

……でも、唯斗くんはもっと危険だ。復讐あの勇者人の仕業なのか、精霊バリアは以前と同じようには機能しない。どんなに足掻いても人間としての活動限界が壁になってしまう。

（——ゆ、いと……くん……ッ!!）

もう手遅れなのかもしれない。

唯斗くんも、息を吐ききった私自身も。やっと姿が見えて、手が届きそうになったのに……それが安堵には繋がらない。

（……違う、そうじゃない! 絶望とか、限界とか……そんなの勇者私にとっては諦める理由になんてならない!!）

——力を振り絞って手を伸ばし、唯斗くんの腕を掴もうとした瞬間。

「……!!」

「……………」

唯斗くんと目が合った。

虚ろな瞳で、でも明確に私を捉えて唇を動かしている。ほんの少しだけ気泡を吐きながら、唯斗くんは声にならない言葉で『大丈夫』っ
て言っ……

次の瞬間にはわたしの体を四体の精霊が囲んでいた。全部、唯斗くんの精霊だと思う。純白の蛇に、艶やかな蒼い鴉、クリーム色の髪に青白い肌の童女と——見覚えのない、三十センチくらいで罅ひまの入った茶色い卵。

囲まれて、わたしの周りに不透明の膜……精霊バリアが展開され

て、ゆっくりと私を海面へと押し出していく。

精霊バリアの中は暖かくて、空気もある。安全領域なのは分かった……からこそ、私は叫ぶ。泣きながら訴える。

「ゴボっ、ゴホッ……！ま、待つて……！まだ唯斗くんが……唯斗くんも一緒に……!!」

「いや……嫌だ……嫌だよ!!待つて……一緒に帰らないと……開けて!こんなバリア……要らないから!!唯斗くん!唯斗くん!!」

また、唯斗くんの唇が動いて、言葉を紡ぐ。真っ直ぐと私の目を見据えて、『——信じろ』と告げる。

でも、分からないよ……唯斗くんが何を伝えたいのかが分からないから、私は泣きながら叫んで、足掻くことしか出来ない。

硬く紡がれたバリアは私が殴ってもビクともしなくて、ゴムの膜を叩いているような不毛さすら湧いてくる。

……嫌だ。嫌だ!嫌だ嫌だ嫌だ!!

目を閉じた唯斗くんが……くらい深海に落ちていく。やがて黄色と純白の衣装は解かれて、芽吹色の軽鎧も消えて……変身時の黒髪から普段の黒茶髪に戻った唯斗くんは——

海の中から弾かれて、外に投げ出される。

私を強引にも砂浜にまで運んだ精霊達はまた海の中へ戻った。チラリとこちらを振り返った大蛇オロチの紅い瞳には、深い悲しみと憐憫の色が見えた。

「……………ゆい、と……………くん……………」

声が掠れる。

もう、戦う気力なんてないのに……でも、勇者の変身は解けない。海水と唯斗くんの血を吸って赤く染まった勇者衣は、震える花卉を洩らしながら私の拳へと集約する。

システムが戦えと言っている。勇者としての潜在意識が復讐を謳

う。流れる涙が——勇者へ原動力を与える。まるで彼が肩を叩き、軽口を言いながら戦意を促すように……私は勇者で在ることを肯定する。

……解ったよ、唯斗くん……私、ちゃんと戦うよ。これ以上、喪わないために……勇者で在り続ける。

「——へえ、アナタは折れないんだね。不思議だよ……本当に、不思議。同じ私なのに。私は復讐に魂を囚われて、全てを滅ぼすって決めたのに」

遠い空から復讐の勇者の声が出た。見上げると、やっぱり彼女がいる。

「……託された物を、自暴自棄で無駄になんてしない……それが私に出来る精一杯だから!!」

「託されたモノ？それってさ、コレのことお？」

「……………え？」

復讐の勇者はつまらなそうに私のずっと後ろを指差し、それに従って視線を向けて——私は状況を理解することが出来なかった。

……………みんな、たおれている……………？

胸に、腹に、穴を開けて……頭が陥没している人をいて……バラバラにされている人も……認識した瞬間、異様な鉄の匂いが鼻腔を殴りつける。

みんなの変身は解けていて……讚州中学校の制服も砂浜も血溜まりに——

「あ——」

「アハッ、アハハハハハハハッ!! 良いね、良いよ! 最っ高!! いい表情するね! 思ってたんでしょ? 絶望なんて、勇者を止める要因にはなり得ないって。唯斗くんが私に殺されてもう戦う気力なんてないのに、彼に報いようとして勇者で在り続けようとしたんでしょ? くふつ、アハハ……!」

「……………な、んで……こんなこと……………」

「こんなことお? なんで勇者を殺したのって? あーあ、ひどいなあ……先に殺したのはそっちじゃん。私の大切な堕ちた勇者達を殺し

て、もう残ったのは私だけなんだよ？うえーん、シクシク……悲しいよお……」

「……………」

違うのに……私たちは、天の神に利用されている勇者を解放しただけなのに……それを解つていて、どうして？どうして私と同じ顔で……同じ声で、あんなに悪意を滲せれるの？

……私には復讐の勇者が理解できない。一步踏み間違えなければ全く同じ存在だったのに、その一步でこんなにも変わってしまうの……？

絶望と戦慄に凍り付く私に、復讐の勇者は落ち着いた様子で話し掛ける。

「ねえ、こーゆーコトなんだよ？」

「……………」

「戦つて、勝者が望みを叶える。それって私が勝ったから勇者を塵にするのと、どう違うのかな。復讐は悪なの？妄執は罪なの？贖罪は叶わないの？傀儡は非道なの？怨恨は無益なの？正義は——あなた達だけに在るの？」

……分らない……何も……分らないよ。難しく考えたことなんてなかった。考えると身が竦むから、私は私の心に従つて動いてきた。

きつと、それ以外の生き方を知らないから。自分に従つて生きて、誰かのために動く。その何が悪かったのか、なんて……分かるはずがない。

「……私はただ、唯斗くんと……みんなと一緒に、平和な世界で生きたかった……勇者部で人助けをしながら、笑っていたかった……」

「でもみーんな死んだよ……唯斗くんは心臓を貫かれて、風先輩は後輩を庇つて脳を潰されて、樹ちゃんは身体をバラバラに千切られて、東郷さんは胸とお腹を貫かれて……えーつと、あとの人は名前知らないや。でも、みんな死んじゃったよ？」

……そうだ、みんな死んだ。復讐の勇者に殺されて……無惨にも血に沈む。私が守れなかったから……私が、弱いから。

伽藍堂な瞳が私を見下ろす。私が、私を見下ろしている。全て失った私を、全てを捨てた私が見下している。

…全部、私のせいだ。私が存在するから……仲間が死んで、世界が滅ぶ。

こんなの、勇者じゃない……まるで魔王だ。全て私が破壊して、殺して、それを私が悲しみ叫ぶ。……すごく、滑稽に思える。

私は勇者として世界を護れなくて、でも復讐の勇者のように全てを捨てて破壊し尽くすことも出来ない……中途半端な存在。

中途半端だから、弱い。自分の正義も、ましてや復讐すらも謳えなくて……奪われる。覚悟も信念も足りない……

「で、どーする？復讐に染まって、私を殺す？それとも絶望に飲まれて死んじゃう？」

「わ、たし……は……」

拳を握り締め、立ち上がろうとした刹那――

――信じる――

「っ!!」

言葉が浮かんだ。唯斗くんが最期に、私に伝えて託した言葉。意味がわからなくて、慰めにもなっていない言葉だったはずなのに……私の心臓に希望の火が宿り始める。

「――私は……信じる」

「……………は？えっと、何を？」

「分からない。でも、信じるよ。唯斗くんを……そして、勇者部のみんなを!!」

「もう死んでるんだよ？死者を信じたってどうしようも無いでしょ」

「それでも信じる！勝利を信じて、生存を信じて、私は私以外を信じるんだ!!だから――結城友奈は復讐の勇者なんて信じない!!」

「む、無茶苦茶だよ……何を根拠に言ってるのさ。しかも何を盲信しているのかも分からないし」

――私は、もう復讐の勇者の言葉は信じない。そして仲間を信じ続

ける。だって私の仲間はすっごく強い。私が海に飛び込んでいる間に全滅するだなんて、絶対に有り得ないんだ。

握り直した拳を突き出し、私は断言する。

「――覇者ちゃんが、数分足らずで負けるわけがないもん!!」

「……………なーんだ、バレちゃった」

復讐の勇者がつまらなそうに呟いた瞬間、世界がひび割れた。硝子のように割れてしまって、元の世界に戻る。

「っー」

瞼を開くと同時、私の鼓膜を激しい打撃音が揺らした。

その正体は眼前に広がる戦闘風景だった。復讐の勇者がフワフワと浮きながらこつちに攻撃を繰り返して、それをせつちゃんが不可視の壁……?…みたいな何かを使って防いでいる。

せつちゃんが右手で槍を投げて、左手で虚空を掴んで掬うように振るうと、復讐の勇者が不自然な回避行動に出る。

軽く聞いた事があるけど、唯斗くんの賢者束ねる者や銀ちゃんの勇者リベンジャーと同じく、勇者とは別の権能が与えられているらしい。

確か……せつちゃんは守人タンクって言った。

「アハッ、よく護れるねー!」

「褒めてくれてどーも。これでもカミサマからは”タンク”的なポジションを受け賜っているモンでしょ!簡単には殺らせないよ!!」

「へえー、だったら……ありゃ?時間切れだね。突破されるとは予想外」

「っ!ちよつ、お寝坊さんたち!出来れば戦って助けて欲しいにゃーっなんつって!!いやマジで……!」

……………何がどうなっているんだろう?

辺りを見渡せば、風先輩や東郷さん達は私と同じように仲間を見て安堵している。何が起きているのか……うん、何が起きていたのか……園ちゃんだったら多分、わかるんだと思う。

他のみんなもその答えに辿り着いたのか、園ちゃんに視線が集まる。

「……なるほどね、幻覚……だよね」

「せーかい！色々準備して、精神的に殺そうとしたんだけど……全員が突破するとか、どーゆー精神力してんの？唯斗くんを殺して、精神的に弱ってたと思うんだけどなー」

「っ！……あ、ゆ……唯斗くんは……」

探すまでもなく、私の勇者衣は唯斗くんの血と海水でびっしりと濡れていた。私が海に飛び込むまでは現実だったらしい。

……みんなが生きているのは嬉しいけど、唯斗くんは……もう、殺された。幻覚に囚われていたとしても、これだけは覆らない。

空気が一気に重くなった。私だけじゃなくて、意識のないみんなを守っていたせつちゃんを除く全員が同じような幻覚を見せられて、戻ってきた際に唯斗くん生存の望みを抱いたんだ。

「…ねえ、三ノ輪銀……だっけ？あなたは勇者——私と同じ復讐者なんでしょう？暴れなくてもいいの？」

「一緒にするな。アタシは勇者だ。だから、やられたらやり返すだけだし、八つ当たりで世界を壊したりなんてしない」

「おおー、志しが立派だね。こりゃあ堕ちる世界線もないワケだよ」

「……アンタ、随分と余裕そうね。もしかして、アタシ達全員を相手に無事帰れるとでも思ってたんの？」

「風先輩、怖いなあ。覇者ちゃんがいるから余裕なんです？」

「…別に、今だけは覇者でも構いませんよ。でも——覇者の大切な人を奪ったんですから、ただで済むとは思わないでください」

「…っ!?……ブチギレじゃん」

……樹ちゃんが本気でキレている。復讐の勇者あが咄嗟に距離を取り、私も背が異様に冷える感覚に身を震わせる。

きつとこの場にいる誰もが抑えきれない憤りを覚え、それが誰よりも表に出ているのが樹ちゃんだ。味方である筈なのに……怖い。

もう誰も冗談や軽口を言う余裕がない。

「——斬り捨てて、ぶち殺すわ……ッ」

「ふーっ、ふー……ッ！許さ、ない……!!絶対に!!」

夏凜ちゃんも、東郷さんも……殺意を隠そうともしない。私と同じ

顔の復讐の勇者に、全員が明確な殺意を向ける。

奇妙な感覚だけど……やっぱり、私も復讐の勇者を恨む気持ちがあった。

……でも、未だに私の頭の中で”言葉”が反芻される。唯斗くん
の最期の言葉——『信じろ』と。何となくあれは幻覚についてではな
く、別の意味がある気もする。

「……………」

「ゆーゆ、どうしたの？」

「…私は、信じる……決めたんだ。心に誓ったんだ……だから、この目
で確かめるまでは信じる」

「…ゆーゆ……」

信じたいから、だけじゃない。確信的ではないけど……予感がある。
唯斗くんはまだ終わじやないと心のどこかで叫んでいる。

諦めるには、まだ私は納得出来ていない。挫けても、負けそうでも、
みんなが倒れ伏しても——唯斗くんは勝利への一番槍となった。

全然勇者らしくなくて、でも私にとっては最高に輝いている勇者。
誰よりも足掻いて、人間らしい勇者。そんな理想を押し付けて、私は
彼に似合わないと内心で苦笑する。

「——ねえ、結城友奈。あなたは どうして……まだ希望を抱いている
の？」

復讐の勇者が不思議そうに私を見下ろす。聞かれても、私は理論的な
答えなんて持ち合わせていない……から、お互いに納得なんて絶対に
出来ないのだと思う。

「——私が信じたいから」

「…アハッ、盲目的だね。……だから厄介なんだよね。盲目的な
人つてのは、どんなに論じても無駄だからさ」

溜息混じりの苦言で復讐の勇者が私を見据える。でも、復讐の勇者
は大きく息を吸ってから更に高く浮遊し、満面の笑みを浮かべた。

「さて、じゃあ本格的な絶望を披露しちゃうよ！」

復讐の勇者は胸元から複数の逆四角錐型のコアを取り出すと、まとめて飲み込む。バーテックスの御魂に似た形……もしかしたら、堕ちた勇者のコアなのかもしれない。

「っ……嫌な予感がするわね……ッ」

風先輩が呟き、全員で無言の肯定を示す。

御魂を飲み込んだ復讐の勇者は一瞬だけ苦悶に顔を歪める、でも喉元を過ぎてからは頬を紅潮させて恍惚的に微笑む。

「は、ハハッ……きた、きたよ……！」

「……ッ!? さ、下がってください!!」

「樹ちゃんもね!!」

様子のおかしい復讐の勇者が樹ちゃんのワイヤーで縛られ、せつちやんが左手で虚空を掴み叩きつけて不可視の盾を顕現させる。

でもそれに構う様子もなく……おぞましい気配は私たちを包み込む。

「うーん、勇者的に言えば……」

悩ましげに頬に手を当て、復讐の勇者は思い付いたように表情を明るくさせた。……それがどうしようもなく怖くて、やつぱり理解が及ばない。

背に羽や血管のような、崩れきった日輪を背負い。黒髪を更に伸ばして周辺には複数個の濁った球体を浮かんでいる。

結城友奈の満開衣装よりも、より豪華に、そして紅と漆黒に身を包み。巨大で肉質な籠手を打ち鳴らしながら”絶望”が顕現した。

「——大満開、ってかんじかな——」

紛れもない、史上最凶の敵が降臨した。

覚醒の予兆

——大満開。

復讐の勇者が残酷な微笑で言い放つそれを、私たちは直ぐに理解することが出来なかった。

でも…本能的には分かった。アレは人が行使しても良い力じゃない…！神様に届いて、貫けるモノだ!!

そう心が叫んでいるのに、私は何も出来ない。声を出すことも、ましてや拳を握り締めて仲間を鼓舞する余裕もない。

ただただ——恐れて見惚れた。

きつと、アレが私に至る可能性のあつた一つの姿…：ううん、現に復讐の勇者は私で、そんな私が神様にも勝てる可能性のある姿に至っている。

いつそ手の届かない夢物語だったら、隣で戦慄する仲間と同じように純粋な恐怖を抱けた。でも…私は焦がれて、その姿を羨ましく思った。

「——恐れ慄け、絶望しろ。今の私なら神だつて倒せるよ」

「…ッ！お、お前…：まさかッ!？」

「うん？…あー、三ノ輪銀ちゃんは分かっちゃった？これね、私のたいていせつな堕ちた勇者の力を借りて…まつ、養分にしたってコトだけど…彼女達の御魂を取り込んだんだよね。…：悔やむべきは、傀儡のコアを破壊されたことかな？いやー、是非とも完全体の私をお披露目したかったよー！」

「ふ、ふざけてるわ…ッ！」

夏凜ちゃんが畏怖と怒りの滲む声を漏らした…：けど、きつとみんなが同じことをかんがえている。どうしようもなく怖くて…：そんなふうに歪めてしまった天の神が憎くて…：でもそこで思考が止まる。

——だつたら、結城友奈私は何がしたいの？

復讐の勇者が私に向ける視線には、そんな意味が込められているんだ

と思う。たぶん、復讐あの勇者にとつて天の神なんてどうでも良いんだ。

倒せるなら倒して見せろ、と言いたげで…それなのに自分が勇者の敵である前提は絶対に崩せない。分からないけど、前に唯斗くんは…彼女達はそのように造られたって言ってたから。

正義とか悪とか、そういうのは今だけは無視して…膨大な力を目の前にして、私は――

「……すごい、力……！」

「……へえ、私は恐れないんだ？それは勇者だから？それとも、悲しいくらい鈍感で蛮勇なだけかな」

「――魅せられたから。残酷なまでに綺麗で、羨ましくて……でも儂さだけは結城友奈わらしくない。だから勝って超えたい！あなたを!!」

「ゆ、友奈ちゃん……？」

……ごめんね、東郷さん。心の中だけど、ちゃんと謝るね……

私はきつと、東郷さんの気持ちを無視している。これから沢山心配をかけて、もしかしたら私は唯斗くんと同じように死んじやうのかもしれない。

東郷さんにも私の蛮勇を――無謀にも超えようとしている一線を、見透かされている。だから震える手が私の肩に置かれても、構うことなく前に進んで私と復讐あの勇者が向き合う。

……うん、素直に認めれる。

あの日……みんなで海に行った日、唯斗くんと向き合った時よりもずっと素直でいられる。本心を隠して、人の幸せの為に自分を秘めて隠し通したりなんかしない。

それが成長だったら……とつても、嬉しいな。どんどん変わっていく唯斗くんに追い付いて、一緒に歩きたいから……私は私復讐の在り方を超えたんだ。

「――羨ましい。私は、あなたの力が羨ましい。全てを拳で打ち砕いて、解決出来る可能性を秘めるあなたが…悔しいけど、とつても羨ましい」

「――そっか。でもね、私はあなたの方が羨ましいと思うんだ。仲間

がいて、純粹に世界と仲間のために拳を振れるあなたが羨ましくて妬ましいよ」

同色同形の瞳が混じって、お互いに本音を吐露する。私は結城友奈の残酷で綺麗な大満開が羨ましくて、結城友奈は私の暖かくて最高の仲間が妬ましい。

当たり前だけど、とつても似ている。だって私はあなたで、あなたは私なんだ。一歩だけ違った世界にいた自分でも、やっぱり同じ人間だから。

どんなに悪人もフリをしても、どんなに見て見ぬふりをしても—— 私たちはお互いの心の内が分かってしまう。

「くよ」

「——いいよ、無駄だから」

余裕で空を舞う復讐の勇者に、私は腰を落として拳を後ろに引き、力を溜める。初撃は譲ると言われていた。

——やがて虹色の花卉と枯れ果てた花卉が混ざり合い、世界が書き換えられる。世界が樹海化しても混じり合う視線は少しも外れなくて、桜の花びらは拳に集約し続ける。

……無言の時間は終わり、跳んで私は叫んだ。

「勇者。パアアアアンチイツツ!!」

「……………」

「ぐっ……はああああ!!」

——強すぎる……!

胸に浮かんだ言葉を無視して、今の私が出せる最高の一撃を押し出す。勇者としての初陣：蟹座の御魂を唯斗くんと一緒に砕いた時よりも、ずっとずっと強く。

過去最高の一撃だって断言出来る。燃えるように花びらが湧き上がり、闘争心に変換されて。でも……

……樹海を揺らす勇者パンチも、復讐の勇者は欠伸を堪えながら掌で簡単に受け止める。

「……やっぱ、つまらないなあ」

「ツーいつ……ツツ……!!」

「そーれ、飛んでけー」

「か……ハッ……」

拳が軋む……！握り潰されそうで……そんな万力の握力で私は振り回されて……嘲るように軽く投げられた。

樹海の根にぶつかり、罅割れる。泣きたくなるくらい全身が痛くて……圧倒的すぎる力の差を理解してしまう。きつと、復讐あの勇者人が本気で私を投げていたら……：全身の骨が砕けるだけでもマシになりそうだ。

明らかな手加減——ううん、オモチャみたいに遊ばれているだけだった。満開を超える力に対して、今の私では何処までも無力でしかない。

「友奈ちゃん!!」

東郷さんが駆け付けてくれた。……東郷さんだけじゃなくて、勇者部のみんなが復讐あの勇者人を警戒しながらも集まる。

「くっ……ケホッ、ケホッ……！……ごめんね、東郷さん……大丈夫。大丈夫だから！」

「何が大丈夫よ、アホ奈！一人で突っ走ってるんじゃないわよ!!」

「か、夏凜ちゃん？もしかして怒ってるの……？」

東郷さんに強く腕を掴まれて、夏凜ちゃんが押し留めるみたいに両肩に手を置く。二人共悲しそうで……それなのに怒ってる。

……なんで、とは思わなかった。心配をさせちゃってる自覚はちゃんとあるし、夏凜ちゃんが言ってる通り、私は一人で突っ走ってるんだと思う。

周りに視線を向けると、みんなが同じ表情だった。怒り、悲しみ、困惑。色んな感情が緋い交ぜになって、それでも強い戦意だけは変わらず心に宿っているんだ。

「——ゆーゆ、ゆーゆは何を成したいの？」

「園ちゃん……？」

「仇を討ちたいのか、それとも強くなりたいたいのか……正義を成すの？」

それとも悪を断つの？教えてよ、ゆーゆ者」

「……………」

問われて、私は言葉を探した。

何を成したいのか……私は、強くなりたい。復讐の勇者^あみたいには、神に届く力が欲しい……そしたらもう、仲間が——唯斗くんが傷つくこともなくなると思ったから。

私はバカだから、難しい事なんて考えても直ぐに霧散しちゃう。だから至極単純に、昔ながらも勇者物語みたい……強い敵を倒したら強く成れる、なんて考えているんだ。

……自分の考えを改めて言葉にすると、野蛮な独り善がりだつてことが解る。園ちゃんも私のそんな部分を見透かしているのかもしれない。

——だけど……!

「——強く、なりたい」

「そっか……」

これが私の”本音”だ。飾る言葉も、隠せる醜さも必要がない。私は単純で馬鹿だから、本音を伝えるには本音で語ることしか出来ない。

園ちゃんが返す言葉を探していて、私はそれを待っていて——でも、復讐の勇者^あがそれを待ち続ける道理もなかった。

「さて、雑談は終わったかな?」

「ツ?!いつの間に——ツ!」

「はーい、勇者。パンチ」

ゆつくりと、緩慢な動作で繰り出されるパンチ。

アレは……やばい!当たったら確実に死ぬ……ツ!!渦巻く風が収束して、闇と炎が樹海を揺るがした。ずっとゆつくり、見せ付けるみたいに引かれて振るわれる拳。

咄嗟に腕をクロスに構えるけど、それは防ぐ手段がないことの現れだった。

復讐の勇者^あが拳を振り抜く瞬間——

「やらせません!!」「やらせないよ!!」

樹ちゃんがワイヤーで盾を紡いで、せつちゃんが左手で不可視の壁を顕現させる。

「アタシの後輩に何するのよ!!」

「暴れすぎだよ、結城友奈!」

風先輩が大剣を突き立て、園ちゃんが槍先の円盾を展開させた。復讐の勇者の禍々しい籠手は残酷に、そして丁寧に防壁を一つ一つ破壊していく。ワイヤーの盾は圧倒的な力で解かれ、不可視の壁は空間ごと罅割れて、大剣は突き刺さった地面を抉りながら殴り飛ばされて、園ちゃんの盾の展開部分は破壊された。

防御に努めた四人がまとめて吹き飛ばされて、復讐の勇者は朗らかに微笑む。やっぱり、それがどうしようもなく怖くて——魅せられている。

胸の鼓動……何かが、私の中で変わろうとしている。悪い何かじやなくて、暖かくて力強い波動。呆然と立ち尽くしながら、私は私が変わりにゆく”予感”に身を委ねる。

「何が大満開よ!そんなの切り刻んでやるわ!!」

「ふーん、その程度で止められると思った?」

「なっ…!?!」

夏凜ちゃんの腕が掴まれ、そのまま地面に投げつけられた。…やっぱりバリアは顕現されなかった。以前の戦いからまだ満開ゲージが溜まりきっていないのは皆同じだけど、それでも半分は溜まっている。だから本来の使用なら、二〜三回は防げたはず…

…チカツて離れた場所が光った。

蒼い閃光は何よりも速く駆けて復讐の勇者を貫こうとして——

「……ッ!」

「無駄だよ、東郷さん」

いつの間にか距離を稼いで遠距離射撃を試みたのは、簡単に受け止められた弾丸を見なくても分かった。御魂持ちのバーテックスをも一方的に追い詰める技量も、復讐の勇者の前では幼児の遊びに等しいんだ。

……蹂躪なんて生ぬるいくらい、遊ばれている。少しでも本気を出されたら、私たちは一瞬で負けてしまう。命の主導権を完全に握られている……

「結城友奈は来ないの？それとも恐れ戦いた…なんてコト、ないよね？」

「……………」

「余所見なんて余裕だな!!」

「ん、おっと…………あつぶないなあ。三ノ輪銀ちゃん、あなたの権能はちよつと厄介だから——先に片付けるね」

「ツ！グツ…………こ、の…離せ…!」

——っ!!

真上から炎の塊を振り下ろした銀ちゃんの攻撃も…………ううん、銀ちゃんの攻撃だけ避けられて、首を手で掴まれた。次の瞬間には握り潰されてもおかしくないし、復讐の勇者の言葉から察するに銀ちゃんだけは先に仕留めるつもりだ。

「だ、ダメ…………ツ!」

「無駄。私が握り潰そうが速——ツ!」

いつの間にか——私は復讐の勇者を殴り飛ばしていた。急に視界がスローモーションになって、でも私だけはその空間で何事もなく動いていて……

言葉にするのが難しい…………けれども、一瞬だけ牛鬼が出現して、私の中で何かが同調した気がした。

その『何か』の正体は分からないけど、私は私にそっくりな何かと魂の鼓動を合わせて、完全にリンクした一瞬だけ…復讐の勇者の反応速度を超えた動きが出来た。

「…えっ…………ゆ、友奈…?」

「…………何か、掴めたかも」

鳴り響く心臓に手を当てて、感じ取る。

当たり前だけど、心臓は一つしかない。なのに、同じ位置に心臓の音が二重にも三重にも——いや、もつと重なって感じる。さっきのアレは奇跡なんかじゃなくて、再現性のある『技術』だった。

「…どんなカラクリ?」

「わからない…………けど、もう解った気がする」

少しだけ後退して、でも殆どダメージのない復讐の勇者が不快そう

空気が揺れる。暖かい安心感が私たちを包んで……でもやっぱり首を傾げてしまう。……うん、本当に……うん、ね……？……これは……えっと、言ってもいい雰囲気なのかな。

「——いや誰だよ」

舞い降りた少女に向けて、私が飲み込んだ言葉を銀ちゃんはずりと呟いた。